千葉市鷲谷津遺跡

―― 都市基盤整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ――

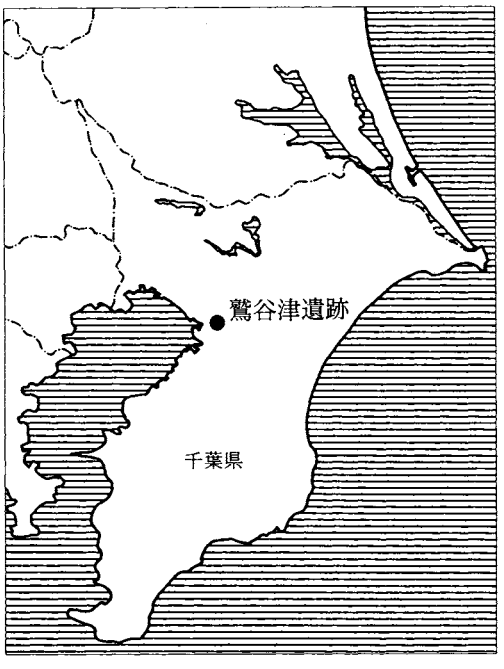
平成14年３月

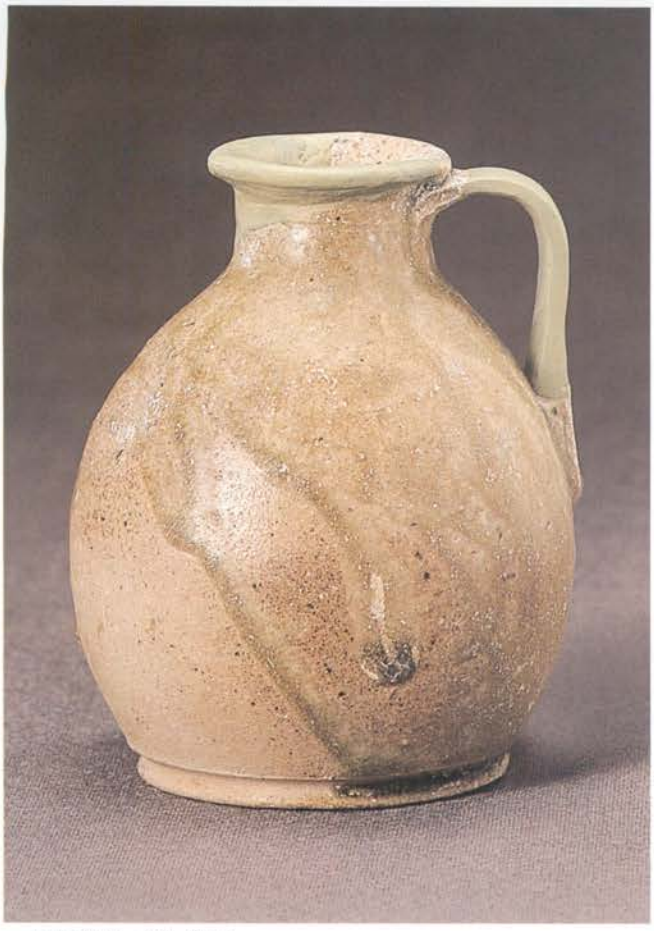
都　市　基　盤　整　備　公　団

財団法人　千葉県文化財センター

千葉市鷲谷津遺跡

―― 都市基盤整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ――





灰釉陶器（SI-131）

和同開珎（SI-127）とX線写真（右）

青銅製蛇尾（SI-127）

青銅製巡方（SI-066）

緑釉陶器（SI-087）

朱書「山家」（SI-096）

緑釉陶器：Ⅲ（SI-072・SD-9）

奈良時代土器

平安時代土器

旧石器時代主要石器 1

旧石器時代主要石器2

序　文

財団法人千葉県文化財センターは，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県文化財センター調査報告第422集として，都市基盤整備公団（旧住宅・都市整備公団）の千葉寺地区土地区画整理事業に伴って実施した千葉市鷲谷津遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，和同開珎や緑釉陶器が出土するなど，この地域の古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。刊行にあたり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成14年3月25日

財団法人千葉県文化財センター
理　事　長　　清　水　新　次

凡　例

1　本書は，都市基盤整備公団（旧住宅・都市整備公団）による千葉寺地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県千葉市中央区千葉寺町771ほかに所在する鷺谷津遺跡（遺跡コード201-058）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，都市基盤整備公団（旧住宅・都市整備公団）の委託を受け，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者，実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は，第２章を上席研究員　島立桂，第３章を研究員　四柳隆，第４章～第７章を副所長　白井久美子，上席研究員　倉内郁子，研究員　田中裕，第８章を上席研究員　西野雅人，第９章を白井（第２節－１，第３節），島立（第１節），田中（前記以外）が担当し，編集は田中が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁生涯学習部文化課，都市基盤整備公団（旧住宅・都市整備公団），千葉市教育委員会の御指導，御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

第１図：国土地理院発行1/25,000地形図『千葉東部』　平成10年４月

同上　『蘇我』　平成12年９月

第２図：明治15年参謀本部陸軍部測量局作成1/20,000『千葉町』

上記以外：住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部作成現況図

8　周辺地形航空写真は，京葉測量株式会社による昭和55年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。

10　挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は次のとおりである。

遺構	カマド（山砂）	：	焼土	：	
	貝層	：			
遺物	土器・土師器	： 断面白抜き	須恵器	：	断面塗りつぶし
	陶器	： 断面網掛け	施釉範囲	：	緑色網掛け
	赤彩範囲	： 赤色網掛け	黒色処理範囲	：	網掛け
	石器・鉄器	： 断面斜線	繊維混和胎土	：	断面に ●
	磨面範囲	：			

目　次

序　文
凡　例
目　次

第１章　序説 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　遺跡の位置と環境 …… 3
　第３節　遺跡の概要と調査方法 …… 7
第２章　旧石器時代 …… 11
　第１節　概要 …… 11
　第２節　基本層序 …… 13
　第３節　石器群の分布と出土遺物 …… 13
第３章　縄文時代 …… 111
　第１節　炉穴と遺物 …… 111
　第２節　陥穴と遺物 …… 124
　第３節　土坑と遺物 …… 124
　第４節　遺構外出土遺物 …… 125
第４章　弥生時代 …… 131
　第１節　住居跡と遺物 …… 131
　第２節　土坑（壙）と遺物 …… 135
　第３節　遺構外出土遺物 …… 137
第５章　古墳時代 …… 139
　第１節　住居跡と遺物 …… 139
　　１．中期 …… 140
　　２．後期前半 …… 144
　　３．後期後半 …… 152
　第２節　掘立柱建物跡と土坑 …… 185
　第３節　遺構外出土遺物 …… 185
第６章　奈良時代・平安時代 …… 187
　第１節　住居跡と遺物 …… 187
　　１．奈良時代 …… 188
　　２．平安時代 …… 248
　第２節　掘立柱建物跡と遺物 …… 313
　第３節　土坑（壙）と遺物 …… 333
　　１．大型の土坑 …… 333

２．中型の円形土坑 334
３．中型の方形土坑 339
４．小型の土坑 341
第４節　遺構外出土遺物 344
第７章　その他の遺構と遺物 347
第１節　溝・柵列 347
１．溝 348
２．柵列 363
第２節　土坑群と建物跡 365
１．土坑群 365
２．中世の土坑 367
３．中世の建物跡 368
第３節　出土銭貨 370
第４節　遺構外出土遺物 373
第８章　貝・骨等の遺存体 377
第１節　貝サンプルの分析結果 377
１．出土状況 377
２．貝種組成 378
３．貝殻のサイズ 381
第２節　出土人骨 381
第９章　考察 383
第１節　旧石器時代 383
第２節　古墳時代から平安時代の土器 387
１．土器分類 387
２．土器編年 407
３．時期区分 417
第３節　出土金属製品 419
１．鉄製品 419
２．銅製品 433
第４節　出土文字資料 436
第５節　集落の展開 438
第10章　結語 445

附表
写真図版

挿図目次

第１章
第 1 図　遺跡の範囲と名称（1）
第 2 図　遺跡の範囲と名称（2）
第 3 図　遺跡の位置と周辺遺跡
第 4 図　遺跡の周辺地形
第 5 図　遺跡の地区区分と名称
第 6 図　遺跡全体図

第２章
第 7 図　旧石器時代調査概要図
第 8 図　基本土層図
第 9 図　028-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 10 図　028-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 11 図　028-a ブロック出土遺物実測図（1）
第 12 図　028-a ブロック出土遺物実測図（2）
第 13 図　P27-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 14 図　P27-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 15 図　P27-a ブロック出土遺物実測図（1）
第 16 図　P27-a ブロック出土遺物実測図（2）
第 17 図　N28-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 18 図　N28-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 19 図　N28-a ブロック出土遺物実測図
第 20 図　N26-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 21 図　N26-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 22 図　N26-a ブロック出土遺物実測図（1）
第 23 図　N26-a ブロック出土遺物実測図（2）
第 24 図　N26-a ブロック出土遺物実測図（3）
第 25 図　L26-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 26 図　L26-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 27 図　L26-a ブロック出土遺物実測図
第 28 図　L26-b ブロック出土遺物分布図（1）
第 29 図　L26-b ブロック出土遺物分布図（2）
第 30 図　L26-b ブロック出土遺物実測図（1）
第 31 図　L26-b ブロック出土遺物実測図（2）
第 32 図　L26-c ブロック出土遺物分布図（1）
第 33 図　L26-c ブロック出土遺物分布図（2）
第 34 図　L26-c ブロック出土遺物実測図
第 35 図　L26-d ブロック出土遺物分布図（1）
第 36 図　L26-d ブロック出土遺物分布図（2）
第 37 図　L26-d ブロック出土遺物実測図
第 38 図　L26-e ブロック出土遺物分布図（1）
第 39 図　L26-e ブロック出土遺物分布図（2）
第 40 図　L26-e ブロック出土遺物実測図
第 41 図　M26-a ブロック出土遺物実測図
第 42 図　M26-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 43 図　M26-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 44 図　M26-b ブロック出土遺物分布図（1）
第 45 図　M26-b ブロック出土遺物分布図（2）
第 46 図　M26-b ブロック出土遺物実測図
第 47 図　M26-c ブロック出土遺物分布図（1）
第 48 図　M26-c ブロック出土遺物分布図（2）
第 49 図　M26-c ブロック出土遺物実測図（1）
第 50 図　M26-c ブロック出土遺物実測図（2）
第 51 図　M26-d ブロック出土遺物分布図（1）
第 52 図　M26-d ブロック出土遺物分布図（2）
第 53 図　M26-d ブロック出土遺物実測図（1）
第 54 図　M26-d ブロック出土遺物実測図（2）
第 55 図　M26-e ブロック出土遺物分布図（1）
第 56 図　M26-e ブロック出土遺物分布図（2）
第 57 図　M26-f ブロック出土遺物分布図（1）
第 58 図　M26-f ブロック出土遺物分布図（2）
第 59 図　M26-f ブロック出土遺物実測図（1）
第 60 図　M26-f ブロック出土遺物実測図（2）
第 61 図　L26-a～e・M26-a～f ブロック周辺部出土遺物分布図
第 62 図　L26-a～e・M26-a～f ブロック周辺部出土遺物実測図
第 63 図　M27-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 64 図　M27-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 65 図　M27-a ブロック出土遺物実測図
第 66 図　M27-b ブロック出土遺物分布図（1）
第 67 図　M27-b ブロック出土遺物分布図（2）
第 68 図　M27-b ブロック出土遺物実測図
第 69 図　M29-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 70 図　M29-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 71 図　M29-a ブロック出土遺物実測図
第 72 図　N27-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 73 図　N27-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 74 図　N27-a ブロック出土遺物分布図（3）
第 75 図　N27-a ブロック出土遺物分布図（4）
第 76 図　N27-a ブロック出土遺物分布図（5）
第 77 図　N27-a ブロック出土遺物分布図（6）
第 78 図　N27-a ブロック出土遺物分布図（7）
第 79 図　N27-a ブロック出土遺物分布図（8）

第 80 図　N27-a ブロック出土遺物実測図（1）
第 81 図　N27-a ブロック出土遺物実測図（2）
第 82 図　N27-a ブロック出土遺物実測図（3）
第 83 図　N27-a ブロック出土遺物実測図（4）
第 84 図　N27-a ブロック出土遺物実測図（5）
第 85 図　N27-a ブロック出土遺物実測図（6）
第 86 図　N27-a ブロック出土遺物実測図（7）
第 87 図　N27-a ブロック出土遺物実測図（8）
第 88 図　N27-a ブロック出土遺物実測図（9）
第 89 図　N27-a ブロック出土遺物実測図 (10)
第 90 図　N27-a ブロック出土遺物実測図 (11)
第 91 図　026-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 92 図　026-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 93 図　026-a ブロック出土遺物実測図
第 94 図　026-b ブロック出土遺物分布図（1）
第 95 図　026-b ブロック出土遺物分布図（2）
第 96 図　026-b ブロック出土遺物実測図（1）
第 97 図　026-b ブロック出土遺物実測図（2）
第 98 図　026-b ブロック出土遺物実測図（3）
第 99 図　027-a ブロック出土遺物分布図（1）
第 100 図　027-a ブロック出土遺物分布図（2）
第 101 図　027-a ブロック出土遺物実測図
第 102 図　単独出土遺物実測図
第 103 図　上層遺構出土遺物実測図（1）
第 104 図　上層遺構出土遺物実測図（2）

第 3 章
第 105 図　縄文時代炉穴配置図
第 106 図　SK-21・22 と出土遺物
第 107 図　SK-38・39・40・41
第 108 図　SK-52 と出土遺物
第 109 図　SK-97・98 と出土遺物
第 110 図　SK-113・115・116
第 111 図　SK-115・116 出土遺物
第 112 図　SK-117・118 と出土遺物
第 113 図　SK-119・120・121 と出土遺物
第 114 図　SK-1・112 と出土遺物
第 115 図　遺構外出土縄文土器（1）
第 116 図　遺構外出土縄文土器（2）
第 117 図　出土石器等実測図（1）
第 118 図　出土石器等実測図（2）

第 4 章
第 119 図　弥生時代遺構配置図
第 120 図　SI-038 と出土遺物
第 121 図　SI-068 と出土遺物
第 122 図　SI-083 と出土遺物
第 123 図　SK-51 と出土遺物
第 124 図　SK-61 と出土遺物
第 125 図　遺構外出土弥生土器

第 5 章
第 126 図　古墳時代中期竪穴住居跡配置図
第 127 図　SI-032 と出土遺物
第 128 図　SI-136 と出土遺物
第 129 図　SI-137 と出土遺物
第 130 図　SI-129 と出土遺物
第 131 図　古墳時代後期前半竪穴住居跡配置図
第 132 図　SI-014 と出土遺物
第 133 図　SI-018 と出土遺物（1）
第 134 図　SI-018 出土遺物（2）
第 135 図　SI-028 と出土遺物
第 136 図　SI-034 と出土遺物
第 137 図　SI-035 と出土遺物
第 138 図　SI-062
第 139 図　古墳時代後期後半竪穴住居跡配置図
第 140 図　SI-001 と出土遺物
第 141 図　SI-002B と出土遺物
第 142 図　SI-004 と出土遺物
第 143 図　SI-006 と出土遺物
第 144 図　SI-009 と出土遺物
第 145 図　SI-013・019 と出土遺物
第 146 図　SI-023 と出土遺物（1）
第 147 図　SI-023 出土遺物（2）
第 148 図　SI-026 と出土遺物
第 149 図　SI-027 と出土遺物
第 150 図　SI-039 と出土遺物
第 151 図　SI-045 と出土遺物
第 152 図　SI-047 と出土遺物
第 153 図　SI-050B と出土遺物
第 154 図　SI-052 と出土遺物
第 155 図　SI-056 と出土遺物
第 156 図　SI-057 と出土遺物
第 157 図　SI-059 と出土遺物
第 158 図　SI-086 と出土遺物（1）
第 159 図　SI-086 出土遺物（2）
第 160 図　SI-088 と出土遺物（1）
第 161 図　SI-088 出土遺物（2）
第 162 図　SI-090 と出土遺物
第 163 図　SI-091 と出土遺物

第164図　SI-106・107と出土遺物
第165図　SI-115と出土遺物
第166図　SI-140と出土遺物
第167図　SI-141と出土遺物
第168図　古墳時代後期後半遺構外出土遺物

第6章
第169図　奈良時代竪穴住居跡配置図
第170図　SI-002Cと出土遺物
第171図　SI-003と出土遺物
第172図　SI-005と出土遺物
第173図　SI-007と出土遺物
第174図　SI-010と出土遺物（1）
第175図　SI-010出土遺物（2）
第176図　SI-012と出土遺物
第177図　SI-015と出土遺物
第178図　SI-017と出土遺物
第179図　SI-022・029・033と出土遺物
第180図　SI-024と出土遺物
第181図　SI-025と出土遺物
第182図　SI-042と出土遺物
第183図　SI-044と出土遺物
第184図　SI-050A
第185図　SI-053と出土遺物
第186図　SI-054と出土遺物
第187図　SI-055と出土遺物
第188図　SI-058と出土遺物
第189図　SI-061と出土遺物
第190図　SI-063と出土遺物
第191図　SI-067と出土遺物
第192図　SI-069と出土遺物
第193図　SI-070と出土遺物
第194図　SI-078と出土遺物
第195図　SI-079と出土遺物
第196図　SI-080と出土遺物
第197図　SI-081と出土遺物（1）
第198図　SI-081出土遺物（2）
第199図　SI-084と出土遺物（1）
第200図　SI-084出土遺物（2）
第201図　SI-084出土遺物（3）
第202図　SI-098と出土遺物（1）
第203図　SI-098出土遺物（2）
第204図　SI-100と出土遺物
第205図　SI-102と出土遺物
第206図　SI-108と出土遺物
第207図　SI-109と出土遺物
第208図　SI-110と出土遺物
第209図　SI-111と出土遺物
第210図　SI-113
第211図　SI-116と出土遺物
第212図　SI-118と出土遺物
第213図　SI-120Bと出土遺物
第214図　SI-122と出土遺物
第215図　SI-124と出土遺物
第216図　SI-126と出土遺物
第217図　SI-127と出土遺物（1）
第218図　SI-127出土遺物（2）
第219図　SI-127出土遺物（3）
第220図　SI-130と出土遺物
第221図　SI-142と出土遺物
第222図　SI-143と出土遺物（1）
第223図　SI-143出土遺物（2）
第224図　平安時代竪穴住居跡配置図
第225図　SI-002Aと出土遺物（1）
第226図　SI-002A出土遺物（2）
第227図　SI-008と出土遺物
第228図　SI-011と出土遺物
第229図　SI-016と出土遺物
第230図　SI-030と出土遺物
第231図　SI-031と出土遺物
第232図　SI-036・037と出土遺物
第233図　SI-040・041と出土遺物
第234図　SI-046と出土遺物
第235図　SI-049と出土遺物
第236図　SI-051A・Bと出土遺物（1）
第237図　SI-051A・B出土遺物（2）
第238図　SI-060と出土遺物
第239図　SI-064・065・066とSI-064出土遺物（1）
第240図　SI-065・066出土遺物（2）
第241図　SI-066出土遺物（3）
第242図　SI-071と出土遺物
第243図　SI-072と出土遺物
第244図　SI-073と出土遺物
第245図　SI-075・076と出土遺物
第246図　SI-077と出土遺物
第247図　SI-082と出土遺物
第248図　SI-085と出土遺物（1）
第249図　SI-085出土遺物（2）
第250図　SI-087と出土遺物（1）

第251図　SI-087出土遺物（2）
第252図　SI-087出土遺物（3）
第253図　SI-089と出土遺物
第254図　SI-092・093と出土遺物
第255図　SI-094・095と出土遺物
第256図　SI-096と出土遺物（1）
第257図　SI-096と出土遺物（2）
第258図　SI-097と出土遺物
第259図　SI-099Aと出土遺物
第260図　SI-099Bと出土遺物
第261図　SI-101と出土遺物
第262図　SI-103と出土遺物
第263図　SI-104と出土遺物
第264図　SI-105と出土遺物
第265図　SI-112・117と出土遺物
第266図　SI-114と出土遺物
第267図　SI-119と出土遺物
第268図　SI-120Aと出土遺物（1）
第269図　SI-120A出土遺物（2）
第270図　SI-120A出土遺物（3）
第271図　SI-121と出土遺物
第272図　SI-123と出土遺物
第273図　SI-125と出土遺物
第274図　SI-128と出土遺物
第275図　SI-131と出土遺物
第276図　SI-132・133
第277図　SI-132・133出土遺物（1）
第278図　SI-132・133出土遺物（2）
第279図　SI-134と出土遺物
第280図　SI-135と出土遺物
第281図　SI-138と出土遺物
第282図　SI-144と出土遺物
第283図　掘立柱建物跡配置図
第284図　SX-1・2・3・6
第285図　SX-4・5
第286図　SX-8・9
第287図　SX-10・11
第288図　SX-7・12・30・32
第289図　SX-13～18
第290図　SX-19・22・26・33・34
第291図　SX-21・23
第292図　SX-24・25・31
第293図　SX-27・28
第294図　掘立柱建物跡（SX）出土遺物
第295図　SK-3・4・13・14・16・17・18
第296図　SK-19・20・24・28・36・55・60
第297図　SK-15・50・56・122
第298図　SK-64・67・68・77・101・103・123・124
第299図　土坑出土遺物（1）
第300図　土坑出土遺物（2）
第301図　奈良・平安時代遺構外出土遺物（1）
第302図　奈良・平安時代遺構外出土遺物（2）

第7章
第303図　溝・柵列・土坑群配置図
第304図　溝・柵列・土坑群実測図（1）
第305図　溝・柵列・土坑群実測図（2）
第306図　溝・柵列・土坑群実測図（3）
第307図　溝・柵列・土坑群実測図（4）
第308図　溝・柵列・土坑群実測図（5）
第309図　溝出土遺物（1）
第310図　溝出土遺物（2）
第311図　SK-5～12・SX-20と出土遺物
第312図　SK-102と出土遺物
第313図　SK-23・100・114と出土遺物
第314図　SZ-1・8
第315図　出土古銭（1）
第316図　出土古銭（2）
第317図　中近世遺構外出土遺物
第318図　管状土錘

第8章
第319図　SI-030貝層分布図
第320図　貝種組成
第321図　貝類計測値分布
第322図　SK-102人骨遺存部位

第9章
第323図　出土石器群編年図
第324図　掻器の刃部再生過程
第325図　土器編年Ⅰ
第326図　土器編年Ⅱ
第327図　鉄鏃の部分名称
第328図　鉄鏃
第329図　刀子（1）
第330図　刀子（2）
第331図　鎌・穂摘み具
第332図　工具（1）
第333図　工具（2）

第334図　鉄斧・紡錘車・漁具等
第335図　釘・鎹等
第336図　馬具・刀装具・鑷子・留金具等
第337図　その他の鉄製品（1）
第338図　その他の鉄製品（2）
第339図　銅製帯金具
第340図　銅製品（1）
第341図　銅製品（2）
第342図　集落変遷図（古墳時代後期後半）
第343図　集落変遷図（奈良時代）
第344図　集落変遷図（平安時代）
第345図　集落変遷図（中近世）

表目次

第1章
第1表　鷲谷津遺跡発掘調査・整理概要

第2章
第2表　028-aブロック母岩別石器組成表
第3表　028-aブロック石材別石器組成表
第4表　P27-aブロック母岩別石器組成表
第5表　P27-aブロック石材別石器組成表
第6表　M28-aブロック母岩別石器組成表
第7表　M28-aブロック石材別石器組成表
第8表　N26-aブロック母岩別石器組成表
第9表　N26-aブロック石材別石器組成表
第10表　L26-aブロック母岩別石器組成表
第11表　L26-aブロック石材別石器組成表
第12表　L26-bブロック母岩別石器組成表
第13表　L26-bブロック石材別石器組成表
第14表　L26-cブロック母岩別石器組成表
第15表　L26-cブロック石材別石器組成表
第16表　L26-dブロック母岩別石器組成表
第17表　L26-dブロック石材別石器組成表
第18表　L26-eブロック母岩別石器組成表
第19表　L26-eブロック石材別石器組成表
第20表　M26-aブロック母岩別石器組成表
第21表　M26-aブロック石材別石器組成表
第22表　M26-bブロック母岩別石器組成表
第23表　M26-bブロック石材別石器組成表
第24表　M26-cブロック母岩別石器組成表
第25表　M26-cブロック石材別石器組成表
第26表　M26-dブロック母岩別石器組成表
第27表　M26-dブロック石材別石器組成表
第28表　M26-eブロック母岩別石器組成表
第29表　M26-eブロック石材別石器組成表
第30表　M26-fブロック母岩別石器組成表
第31表　M26-fブロック石材別石器組成表
第32表　L26-a～e・M26-a～fブロック周辺部母岩別石器組成表
第33表　L26-a～e・M26-a～fブロック周辺部石材別石器組成表
第34表　M27-aブロック母岩別石器組成表
第35表　M27-aブロック石材別石器組成表
第36表　M27-bブロック母岩別石器組成表
第37表　M27-bブロック石材別石器組成表
第38表　M29-aブロック母岩別石器組成表
第39表　M29-aブロック石材別石器組成表
第40表　N27-aブロック母岩別石器組成表
第41表　N27-aブロック石材別石器組成表
第42表　O26-aブロック母岩別石器組成表
第43表　O26-aブロック石材別石器組成表
第44表　O26-bブロック母岩別石器組成表
第45表　O26-bブロック石材別石器組成表
第46表　O27-aブロック母岩別石器組成表
第47表　O27-aブロック石材別石器組成表
第48表　単独出土遺物母岩別石器組成表
第49表　単独出土遺物石材別石器組成表

第3章
第50表　鷲谷津遺跡縄文時代遺構一覧

第7章
第51表　鷲谷津遺跡出土銭貨計測表

第8章
第52表　貝サンプル一覧
第53表　貝類種名一覧
第54表　貝種同定結果
第55表　貝種組成
第56表　貝類計測値分布
第57表　歯牙データ

附表
附表1　竪穴住居跡一覧
附表2　掘立柱建物跡一覧

附表３　土坑一覧
附表４　竪穴住居跡出土土器観察表
附表５　掘立柱建物跡出土土器観察表
附表６　土坑出土土器観察表
附表７　溝出土土器観察表
附表８　遺構外出土土器観察表（縄文時代）
附表９　遺構外出土土器観察表（弥生時代）
附表10　遺構外出土土器観察表（古墳時代）
附表11　遺構外出土土器観察表（奈良・平安時代）
附表12　遺構外出土土器等観察表（中近世）
附表13　出土瓦観察表
附表14　土玉・土錘観察表（遺構出土）
附表15　土玉・土錘観察表（地点別採集）
附表16　その他の土製品観察表
附表17　羽口・支脚観察表
附表18　紡錘車観察表
附表19　古代石製品観察表
附表20　軽石観察表
附表21　砥石観察表
附表22　鉄鏃計測表
附表23　刀子等計測表
附表24　鎌・穂摘み具計測表
附表25　工具計測表（１）
附表26　工具計測表（２）
附表27　鉄斧計測表
附表28　紡錘具等計測表
附表29　漁具等計測表
附表30　釘等計測表
附表31　馬具計測表
附表32　刀装具・鐔子・留金具等計測表
附表33　扁平棒状鉄製品計測表
附表34　その他の鉄製品計測表（１）
附表35　その他の鉄製品計測表（２）
附表36　銅製帯金具計測表
附表37　銅製品計測表（奈良・平安時代）
附表38　銅製品計測表（中世以降）

図版目次

巻頭図版１（カラー）（灰釉陶器他）
巻頭図版２（カラー）（土器集合）
巻頭図版３（カラー）旧石器時代主要石器１
巻頭図版４（カラー）旧石器時代主要石器２
図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　千葉寺地区全景
図版３　遺跡全景
図版４　台地中央部・南部付近
台地西部・北部付近
図版５　N27-14 旧石器時代遺物出土状況
L26・M26 旧石器時代遺物出土状況
図版６　SI-001
SI-001 カマド
SI-002A・002B・003
図版７　SI-002C
SI-004
SI-004 カマド
図版８　SI-004・005
SI-005 カマド
SI-006
図版９　SI-007
SI-007 カマド
SI-009
図版10　SI-009 カマド
SI-010・011
SI-012
SI-012 甕（５）出土状況
図版11　SI-012 カマド
SI-013
SI-013 カマド
図版12　SI-014
SI-014 カマド
SI-014 遺物出土状況
図版13　SI-015
SI-015 カマド・坏（５）出土状況
SI-016
図版14　SI-017
SI-017 カマド
SI-017 完掘状況
図版15　SI-018
SI-018 カマド
SI-019
図版16　SI-023
SI-023 カマド
SI-024
図版17　SI-024 カマド
SI-025 遺物出土状況
SI-025 カマド煙道
SI-025 坏（左から５・８・３）
図版18　SI-026

SI-026 カマド
SI-027
図版 19 SI-027 遺物出土状況
SI-027 カマド
SI-028
SI-028 カマド遺物出土状況
図版 20 SI-028 カマド
SI-029
SI-029 カマド
SI-029 甕（1）出土状況
図版 21 SI-030
SI-030 カマド
SI-031
図版 22 SI-032
SI-034
SI-036
図版 23 SI-039
SI-039 カマド
SI-040
図版 24 SI-040 カマド
SI-044
SI-044 カマド
図版 25 SI-045
SI-045 甕出土状況（前から５・６）
SI-045 カマド
SI-046
図版 26 SI-047・048・049・050AB
SI-049
SI-049 甕（4）出土状況
SI-049 カマド
図版 27 SI-050A
SI-050A カマド
SI-050B
図版 28 SI-051 遺物出土状況
SI-051A・B
SI-051A ピット内甕（9）出土状況
SI-051B カマド
SI-051B カマド遺物出土状況
図版 29 SI-052 遺物出土状況
SI-052
SI-052 カマド
図版 30 SI-053
SI-053 カマド
SI-053 床下完掘状況
図版 31 SI-054
SI-054 カマド
SI-055 遺物出土状況
図版 32 SI-055
SI-055 カマド
SI-056
図版 33 SI-056 カマド
SI-057
SI-057 ピット内甕（17）出土状況
SI-057 カマド
図版 34 SI-058
SI-058 カマド
SI-059
図版 35 SI-059 カマド
SI-060 遺物出土状況
SI-060
図版 36 SI-060 カマド
SI-061・062
SI-062 カマド
図版 37 SI-063
SI-063 カマド
SI-066 カマド
SI-066 カマド遺物出土状況
図版 38 SI-067
SI-067 カマド
SI-068 ピット内弥生土器甕（2）出土状況
図版 39 SI-070
SI-070 カマド
SI-071
図版 40 SI-073 カマド遺物出土状況
SI-075 上から坏（1）と皿（3）出土状況
SI-076
図版 41 SI-078
SI-079
SI-079 フラスコ形長頸壺（19）出土状況
SI-079 カマド
図版 42 SI-080
SI-081
SI-082
図版 43 SI-082 カマド
SI-083
SI-084
図版 44 SI-085
SI-085 カマド

SI-086
図版45 SI-087
SI-087カマド
SI-088
図版46 SI-088カマド
SI-089
SI-090
図版47 SI-090カマド
SI-091
SI-092・093
図版48 SI-094
SI-094カマド
SI-095
図版49 SI-096
SI-096カマド
SI-096カマド内甕（20）出土状況
SI-097
図版50 SI-098
SI-098東側の壁柱列
SI-099A
図版51 SI-099B
SI-099Bカマド遺物出土状況
SI-100
SI-101
図版52 SI-101カマド
SI-102
SI-102カマド
図版53 SI-103
SI-104
SI-105
図版54 SI-107
SI-108
SI-109
図版55 SI-110
SI-110カマド
SI-111
図版56 SI-111カマド
SI-113
SI-114
図版57 SI-115
SI-115カマド
SI-116
図版58 SI-116カマド
SI-117
SI-119遺物出土状況
図版59 SI-119
SI-120AB遺物出土状況
SI-120A
図版60 SI-120B
SI-121
SI-121カマド
図版61 SI-122
SI-123
SI-124
SI-124カマド遺物出土状況
図版62 SI-126
SI-126カマド
SI-127遺物出土状況
図版63 SI-127紡錘車（中央）と和同開珎（右下）
SI-127
SI-127カマド
図版64 SI-128
SI-129
SI-129遺物出土状況
図版65 SI-130
SI-131
SI-131遺物出土状況
図版66 SI-131カマド
SI-132（奥）・133（手前）
SI-132（右）・133（左）遺物出土状況
図版67 SI-132カマド
SI-134
SI-134カマド
図版68 SI-135
SI-135カマド
SI-136
図版69 SI-136遺物出土状況
SI-137
SI-137遺物出土状況
図版70 SI-138
SI-138カマド
SI-140
図版71 SI-140カマド
SI-141
SI-141カマド
図版72 SI-142
SI-142カマド
SI-143
図版73 SI-143遺物出土状況

SI-143 カマド
SI-144
図版 74 SK-1
SK-4
SK-13
SK-14
SK-15
SK-20 遺物出土状況
SK-20
図版 75 SK-21
SK-22
SK-28
SK-36
SK-38
SK-51 遺物出土状況
図版 76 SK-52
SK-52 遺物出土状況
SK-60
SK-61 遺物出土状況
SK-61
SK-97
図版 77 SK-98
SK-100
SK-101
SK-103
SK-102
SK-112
SK-113
図版 78 SK-115
SK-116
SK-117
SK-118
SK-118 遺物出土状況
SK-119
図版 79 SK-120
SK-121
SK-122
SK-124
SZ-1
図版 80 SD-1
SD-6
SD-9
図版 81 SD-10 遺物出土状況
SD-12
SD-13・14・15・16
図版 82 SD-17
SD-18
SD-19
図版 83 SD-21・22
SD-24
SD-26
図版 84 SD-27
SD-28
SD-29
図版 85 SD-30・31
SD-32
SD-33
図版 86 SD-34・35・36・37
SD-36 硬化面検出状況
SD-1D・4D
図版 87 SD-1D・2D・4D
SD-3D
SD-5D
図版 88 SX-1
SX-2
SX-4
図版 89 SX-5
SX-6
SX-7
図版 90 SX-8
SX-9
SX-10
図版 91 SX-11
SX-12
SX-19
図版 92 SX-13・14・15・16・17・18
SX-21
SX-23
図版 93 SX-3・11・21
SX-26・27・28・30・31・32
SX-24・25・29・33
図版 94 旧石器時代（1）
図版 95 旧石器時代（2）
図版 96 旧石器時代（3）
図版 97 旧石器時代（4）
図版 98 旧石器時代（5）
図版 99 旧石器時代（6）
図版 100 旧石器時代（7）
図版 101 旧石器時代（8）
図版 102 旧石器時代（9）

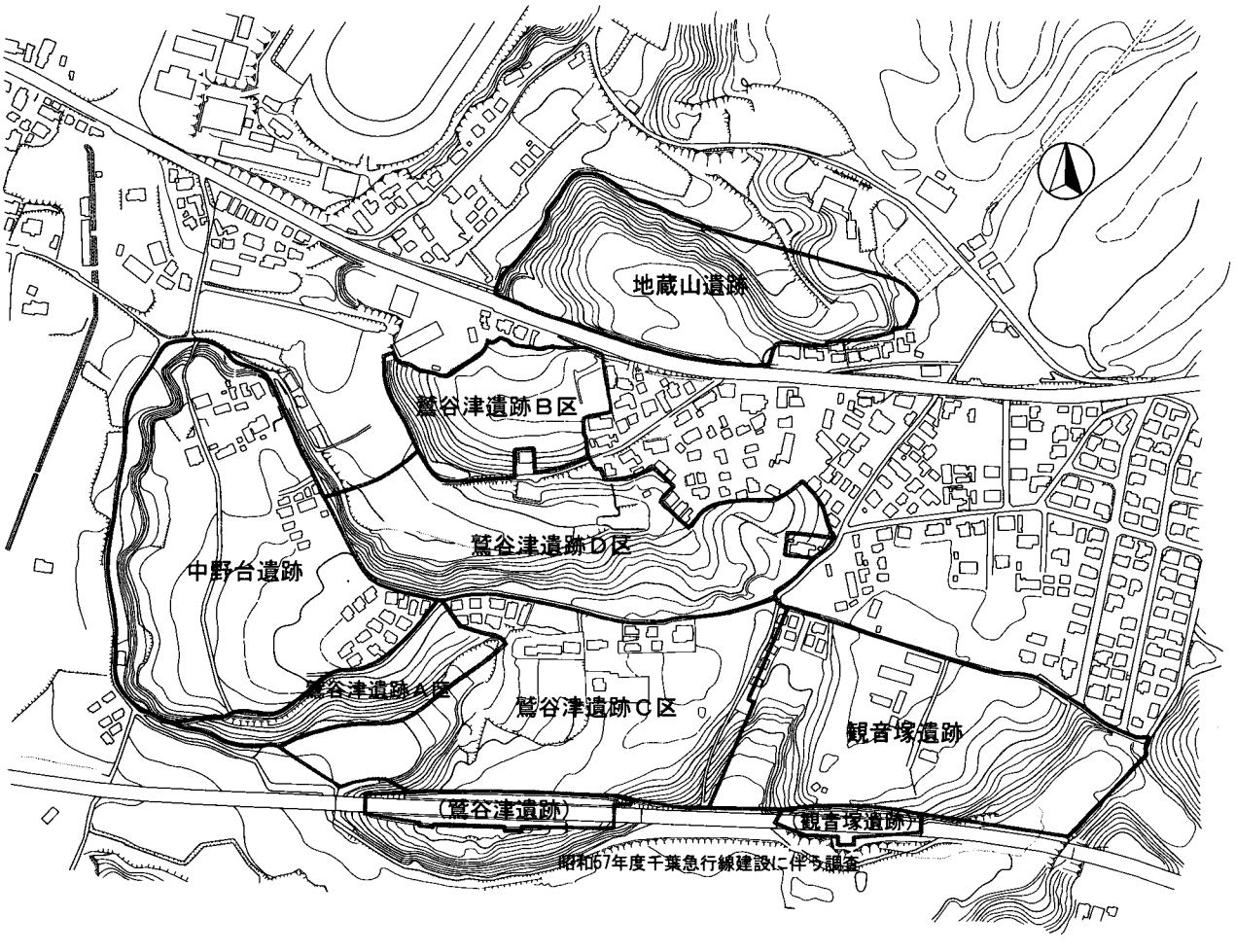
図版103　旧石器時代（10）
図版104　旧石器時代（11）
図版105　旧石器時代（12）
図版106　炉穴等の縄文土器（1）
図版107　炉穴等の縄文土器（2）
図版108　遺構外の縄文時代石器
図版109　遺構外の縄文土器（1）・（2）
図版110　遺構外の縄文土器（3）・弥生土器（1）
図版111　弥生土器（2）
図版112　土師器・須恵器（1）
SI-001～010
図版113　土師器・須恵器（2）
SI-011～018
図版114　土師器・須恵器（3）
SI-018～024
図版115　土師器・須恵器（4）
SI-024～028
図版116　土師器・須恵器（5）
SI-028～035
図版117　土師器・須恵器（6）
SI-036～051
図版118　土師器・須恵器（7）
SI-051～058
図版119　土師器・須恵器（8）
SI-058～066
図版120　土師器・須恵器（9）
SI-066～079
図版121　土師器・須恵器（10）
SI-079～081
図版122　土師器・須恵器（11）
SI-081～084
図版123　土師器・須恵器（12）
SI-084～086
図版124　土師器・須恵器（13）
SI-086～087
図版125　土師器・須恵器（14）
SI-087～098
図版126　土師器・須恵器（15）
SI-098～102
図版127　土師器・須恵器（16）
SI-102～121
図版128　土師器・須恵器（17）
SI-122～127
図版129　土師器・須恵器（18）
SI-127～132
図版130　土師器・須恵器（19）
SI-132～135
図版131　土師器・須恵器（20）
SI-135～143
図版132　土師器・須恵器（21）
SI-143・掘立柱建物跡・土坑・遺構外
図版133　暗文土器
図版134　瓦（1）
図版135　瓦（2）
図版136　中近世遺構外等出土遺物（1）
図版137　出土古銭
図版138　土錘（1）
図版139　土錘（2）
図版140　転用硯
図版141　石皿・鋳型・羽口
図版142　土板・中近世遺構外等出土遺物（2）
図版143　ガラス製品・石槌・砥石・軽石
図版144　砥石
図版145　紡錘車
図版146　SK-102埋葬遺体
遺物出土状況・掘りかた
図版147　鉄製品（1）
刀子
図版148　鉄製品（2）
刀子・鉄鏃
図版149　鉄製品（3）
鉄鏃・工具
図版150　鉄製品（4）
小刀・鎌・穂摘み具
図版151　鉄製品（5）
鉄斧・銅製針金付棒状鉄製品
釘・鋲・鉄製紡錘具
図版152　鉄製品（6）
工具・漁具等
図版153　鉄製品（7）
馬具・刀装具・鑷子・その他
図版154　鉄製品（8）
釘
図版155　鉄製品（9）・銅製品
花形飾り金具・分銅・キセル
図版156　墨書（1）
図版157　墨書（2）
図版158　墨書（3）

第1章　序説

第1節　調査の経緯

都市基盤整備公団による土地区画整理事業が計画された千葉寺地区は，行政区画では千葉県千葉市中央区千葉寺町に所在する。また，平成4年4月には京成電鉄千葉中央駅から千葉寺駅を経て大森台駅までの区間について千葉急行電鉄(現，京成電鉄千原線)が部分開業している。かつて北側の青葉町には農林水産省畜産試験場があったが，移転に伴う県立青葉の森公園の整備，そして県営千葉寺球場及び陸上競技場の青葉の森公園への移転などの周囲の環境の変化に対応し，千葉寺球場跡地から千葉急行電鉄に沿った地区に至る千葉寺町一帯に，土地区画整理事業が計画された。

土地区画整理事業の施工にあたり，区域内に所在する埋蔵文化財の取扱いについては，千葉県教育庁文化課と都市基盤整備公団との間で度重なる協議が行われ，事業地内に，緑地として現状保存する部分と記録保存する部分を定め，記録保存を行う部分については事業計画との整合を図りつつ，発掘調査を実施することとなった。発掘調査は，財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり，昭和60年から調査が開始された。

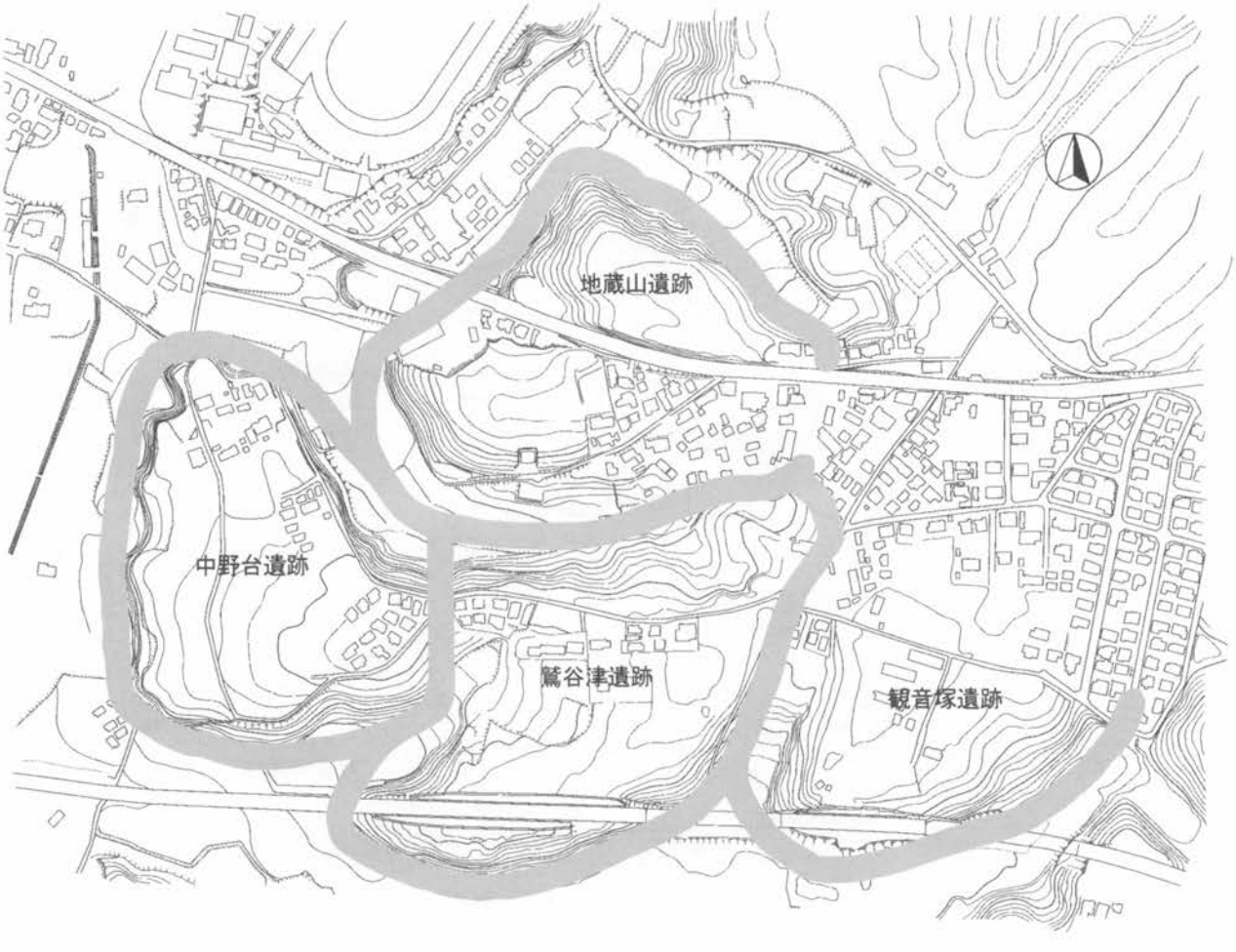


第1図　遺跡の範囲と名称（1）

対象となった遺跡は，中野台遺跡(201-057)，鷲谷津遺跡(201-058)，観音塚遺跡(201-059)，地蔵山遺跡(201-060)の４遺跡である。各遺跡の範囲は字名を参照のうえ，当初第１図のように決定された。鷲谷津遺跡については，Ａ区からＤ区の４区に分割された。Ａ区は昭和61年度と昭和62年度に，確認調査・本調査が実施された。Ｂ区はすでに『千葉市地蔵山遺跡（２）』として報告済みである。鷲谷津遺跡の中心をしめるＣ区については，昭和62年度に確認調査及び本調査が開始された。その後昭和63年度，平成２年度，８年度，９年度と断続的に調査が行われ，平成10年度をもって終了した。Ｄ区については昭和63年度と平成元年度の２か年で確認調査・本調査が終了している。

なお，千葉寺地区遺跡群の各遺跡については，調査の進展に伴い台地の形状や遺構の分布状態に合わせ，『千葉市地蔵山遺跡（１）』 刊行時点で各遺跡の範囲と名称の見直しが行われている。今回，鷲谷津遺跡の報告書を刊行するにあたり，これを基準とし，その後の調査により判明した上層・下層の遺構・遺物の分布状態を勘案して，中野台遺跡・観音塚遺跡との境界を第２図のように設定した。鷲谷津遺跡として調査された残りの部分については，中野台遺跡・観音塚遺跡としてそれぞれ今後報告する予定である。

鷲谷津遺跡の発掘調査開始から報告書刊行に至るまでの，発掘調査・整理概要，及び各年度の担当者は第１表のとおりである。



第２図　遺跡の範囲と名称（２）

第１表　鷲谷津遺跡発掘調査・整理概要

調査年度	発掘調査・整理内容	期間	調査部長	所長(*班長)	調査担当者
昭和62年度	確認調査　C区上層 935／17,900 ㎡	11/1～3/31	堀部昭夫	大原正義*	伊藤智樹・福田誠
	本調査　C区上層 3,500 ㎡				
昭和63年度	確認調査　C区下層 694／15,100 ㎡	4/1～10/15	堀部昭夫	西山太郎*	伊藤智樹・福田誠・田形孝一・福田依子
	本調査　C区上層 5,700 ㎡				
	確認調査　D区上層 550／5,500 ㎡				福田誠・上守秀明
平成元年度	確認調査　D区上層 1,096／14,100 ㎡,下層 128／14,100 ㎡	1/6～3/30	堀部昭夫	谷旬*	伊藤智樹・井上哲朗・四柳隆
	本調査　D区上層 800 ㎡				
平成２年度	確認調査　C区下層 105／2,280 ㎡	6/1～12/7	堀部昭夫	谷旬*	藤岡孝司
	本調査　C区上層 2,280 ㎡				
平成３年度	整理作業　水洗・注記の一部	4/1～3/31	天野努	谷旬*	渡辺修一
平成４年度	整理作業　図面・写真整理から実測の一部まで	4/1～3/31	天野努	谷旬*	小林清隆・小林信一・大石理子
平成５年度	整理作業　実測の一部まで	4/1～3/31	高木博彦	深澤克友	伊藤智樹・土屋潤一郎
平成６年度	整理作業　トレースの一部まで	4/1～3/31	西山太郎	田坂浩	伊藤智樹
平成８年度	確認調査　D区上層 148／1,100 ㎡，下層 534／8,600 ㎡	5/1～3/26	西山太郎	藤崎芳樹	山田貴久
	本調査　C区上層 8,600 ㎡，下層 970 ㎡				
平成９年度	確認調査　C区下層 52／660 ㎡	7/1～7/31	西山太郎	藤崎芳樹	岩谷久美子
	本調査　C区上層 660 ㎡，下層 188 ㎡				
平成10年度	確認調査　C区下層 32／750 ㎡	6/1～6/30	沼澤豊	石田廣美	土屋潤一郎
	本調査　C区上層 750 ㎡				
	整理作業　記録整理・水洗・注記・分類・選別から実測まで	4/1～3/31			土屋潤一郎・島立桂・鈴木良征
平成11年度	整理作業　水洗・注記から挿図・図版作成の一部まで	4/1～3/31	沼澤豊	石田廣美	白井久美子・倉内郁子・森本和男・四柳隆・田中裕・渡邊高弘・西野雅人
平成12年度	整理作業　挿図・図版作成の一部から原稿執筆の一部まで	4/1～3/31	沼澤豊	三浦和信	白井久美子・倉内郁子・四柳隆・猪股昭喜・島立桂・稲生一夫・山口典子・鈴木弘幸
平成13年度	整理作業　原稿執筆の一部から刊行まで	4/1～3/31	佐久間豊	三浦和信	倉内郁子・田中裕

第２節　遺跡の位置と環境

千葉寺地区の遺跡群は，千葉市中心街のある都川沖積地の南側に広がる台地上にある。台地のすぐ西側には，狭隘な海岸平野を挟んで東京湾が控えており，本来台地と東京湾との距離はわずか１kmにも満たない。この台地には都川側と東京湾側に向かって開く開析谷が樹枝状に入り組んでいる。千葉寺地区遺跡群は開析谷によって分断された台地の先端付近に位置し，北東の奥には県立青葉の森公園の整備に伴って調査された荒久遺跡があり，遺跡群の北西側の，通称「千葉寺谷」及び「引越し谷」を隔てて８世紀初頭の創建といわれる千葉寺がある。付近に広がる台地上には，はやくから市街化されたところを除いて，多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺跡は，県立中央博物館・青葉の森公園（荒久遺跡）の調査でややまとまった石器群が得られているほか，千葉寺地区でも随所で小規模なブロックの調査例がある。

縄文時代の遺跡には早期の炉穴群を伴う遺跡が多い。千葉寺地区内では地蔵山遺跡，中野台遺跡があり，千葉寺地区から谷を隔てた山ノ神遺跡などでも同様の炉穴群の調査がなされている。縄文時代の著名な遺跡としては，当遺跡群の北方，都川に面する矢作貝塚があり，後期から晩期を中心に形成されている。しかし縄文時代については，さほど周辺遺跡の実態は明らかになっていないと言えよう。

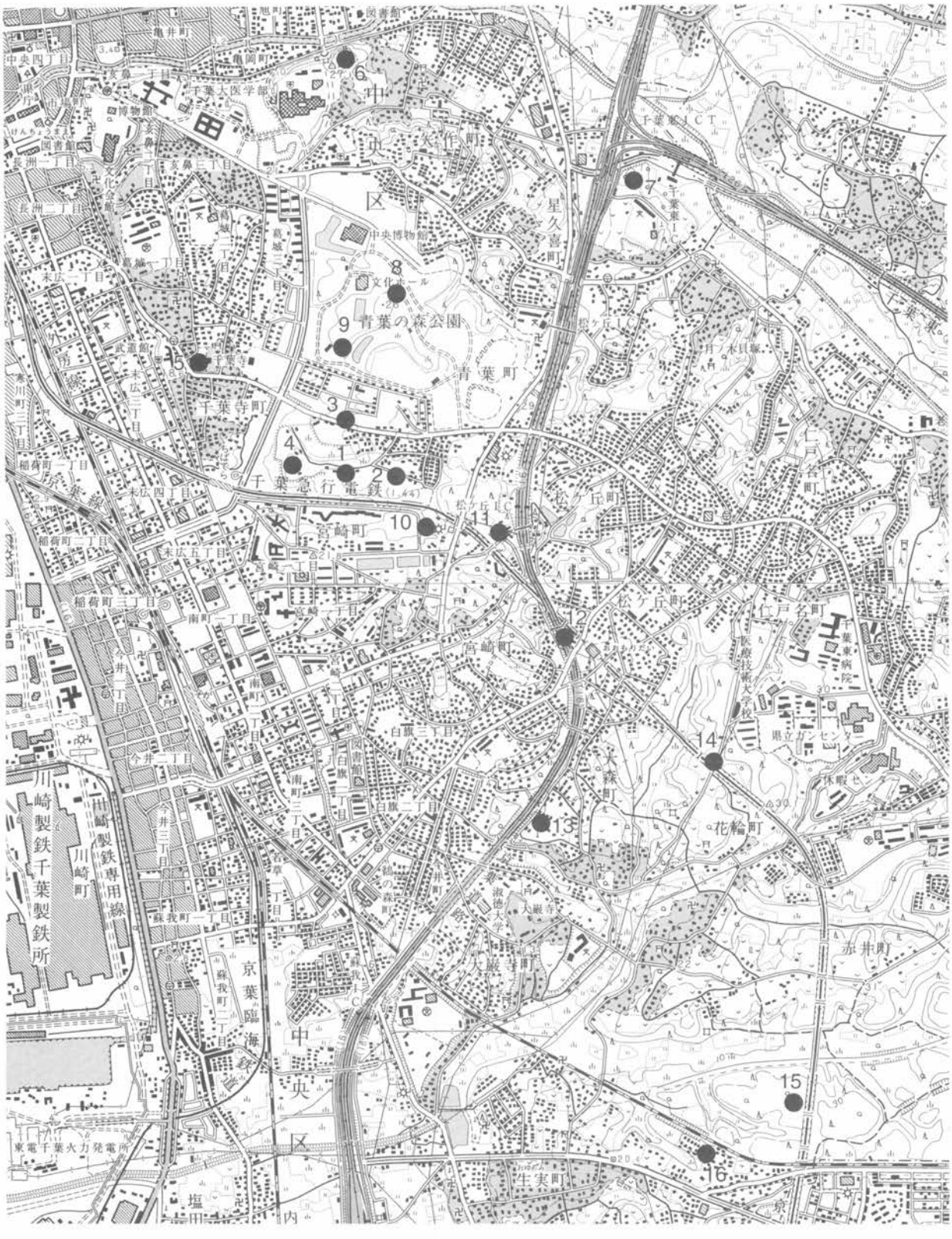
弥生時代の遺跡としては，京葉道路の建設に伴って調査された星久喜遺跡や大森第２遺跡がよく知られている。ともに弥生時代中期後半の代表的な集落跡である。千葉寺地区では中野台遺跡で同時期の方形周溝墓群が調査されたほか，地蔵山遺跡では集落跡が検出されている。弥生時代後期には中野台遺跡と荒久遺跡で集落跡が調査されている。

古墳時代の遺構・遺物が検出された遺跡は多い。先述の荒久遺跡では古墳時代各期の遺構が検出され，矢作貝塚は古墳時代後期の集落跡でもある。京葉道路建設によって調査された星久喜遺跡，宮崎第１遺跡，大森第１遺跡，大森第２遺跡などの各遺跡では，古墳時代前期から後期の集落跡の調査がなされている。千葉寺地区の各遺跡でも古墳時代の遺物・遺構は多く，今回報告する鷲谷津遺跡の場合は，古墳時代の竪穴住居跡群が中核的な存在となっている。

奈良・平安時代についても，古墳時代に続いて多くの遺跡で遺構・遺物が検出されている。千葉寺地区ではとくに鷲谷津遺跡・観音塚遺跡に該期のまとまった集落跡があるが，谷を挟んだ対岸の山ノ神遺跡や宮崎第１遺跡でも同様に多くの遺構が調査されている。とりわけ宮崎第１遺跡（大北遺跡）の掘立柱建物群及び多量の畿内産土師器，緑釉陶器の存在は，一般的な集落を超えたものを想起させる。この時期は千葉寺がすでに創建され，また荒久古墳や荒久遺跡，地蔵山遺跡の墳墓群と各集落の関係についても興味深いものがある。

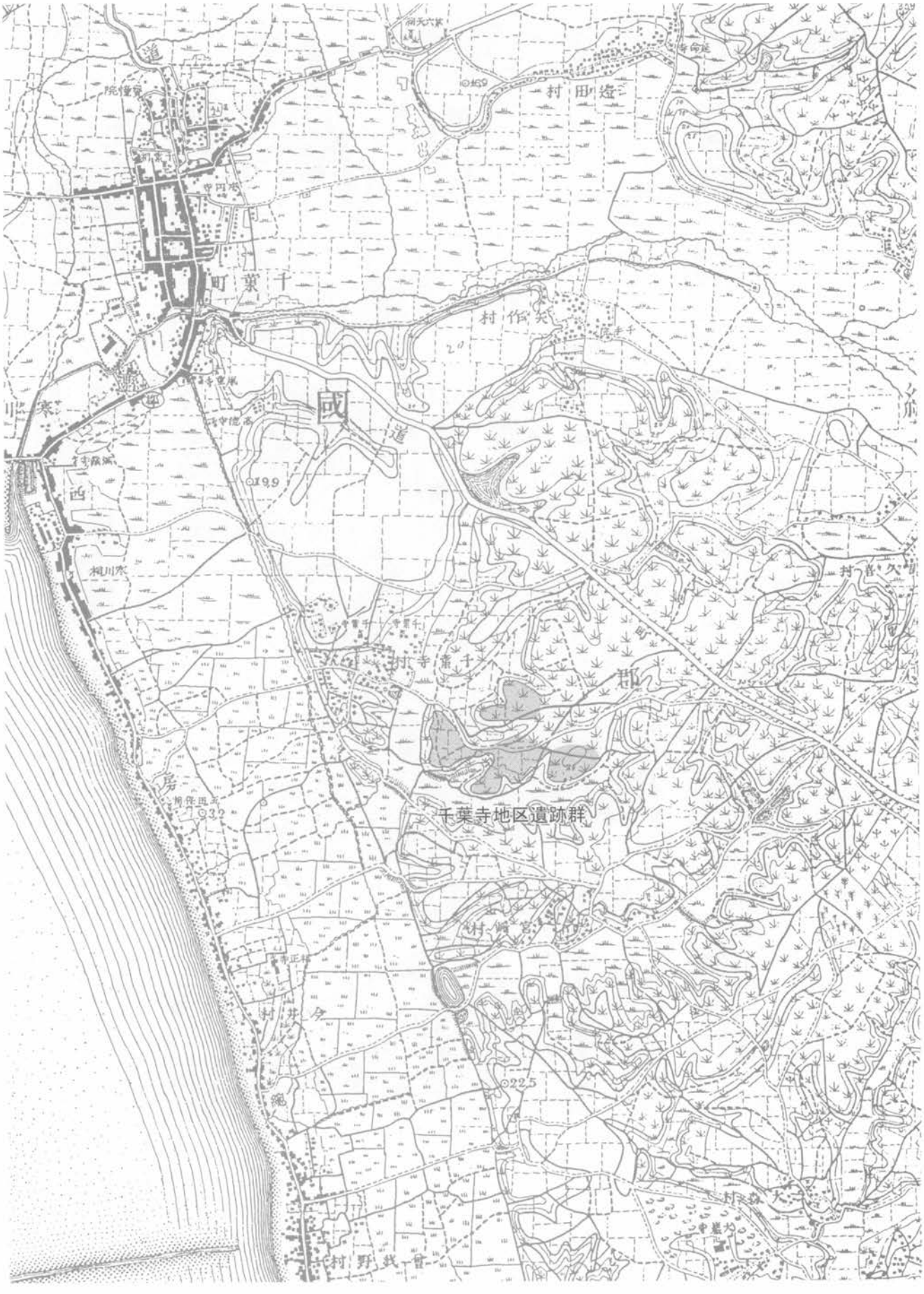
周辺遺跡の参考文献

柿沼修平ほか『京葉』財団法人千葉県都市公社　1973
相京邦彦『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』財団法人千葉県文化財センター　1983
池田大助ほか『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』財団法人千葉県文化財センター　1986
清藤一順ほか『千葉市矢作貝塚』財団法人千葉県文化財センター　1981
菊池健一ほか『千葉市山ノ神遺跡』財団法人千葉市文化財調査協会　1989
山口典子ほか『千葉市荒久遺跡（１）』財団法人千葉県文化財センター　1986
小林信一ほか『千葉市荒久遺跡（２）』財団法人千葉県文化財センター　1986
渡辺修一『千葉市地蔵山遺跡（１）』財団法人千葉県文化財センター　1992
小林清隆ほか『千葉市地蔵山遺跡（２）』財団法人千葉県文化財センター　1993



1．鷺谷津遺跡
2．観音塚遺跡
3．地蔵山遺跡
4．中野台遺跡
5．千葉寺
6．矢作貝塚
7．星久喜遺跡
8．荒久遺跡
9．荒久古墳
10．山ノ神遺跡
11．大北遺跡
12．大森第１遺跡
13．大森第２遺跡
14．谷津遺跡
15．種ケ谷津遺跡
16．大道遺跡

第３図　遺跡の位置と周辺遺跡

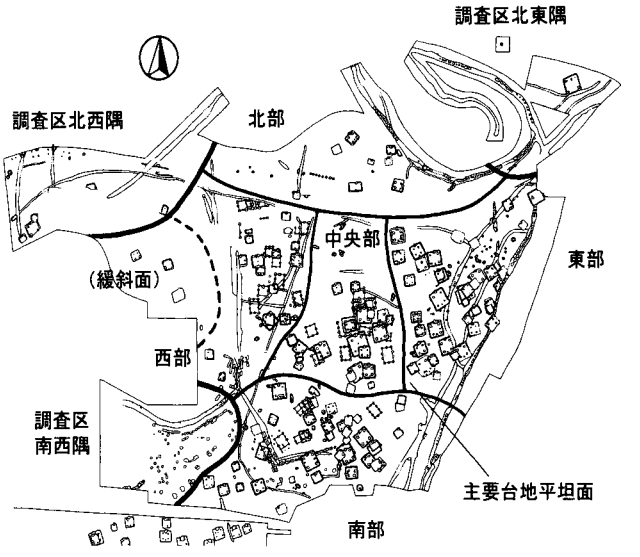


第４図　遺跡の周辺地形（1：20,000）

第３節　遺跡の概要と調査方法

遺跡内の地区区分

遺構は全体図（第６図）に示すように比較的広範囲で密集して検出された。遺構が重複する部分も多くみられる。遺構所在地点の特定を容易にするため，遺構の分布状況と地形から，本文では遺跡内を次のように区分して記述する（第５図）。遺構が主として集中する台地平坦面は，台地中央部・東部・南部・西部・北部の５か所に区分する。その周辺についてはそれぞれ調査区南西隅・北西隅・北東隅に３区分する。



第５図　遺跡の地区区分と名称

方眼網の設定

全調査対象範囲内に公共座標に合わせて50ｍ×50ｍの方眼網を設定し，大グリッドとした。呼称は北西に起点を置き，西から東へＡ，Ｂ，Ｃ…とし，北から南へ１，２，３…としてこれを組み合わせて使用する。大グリッド内は10ｍ×10ｍの小グリッドに25分割し，北西隅を起点に01，02，03…として南東隅を25とする。小グリッドをさらに分割する必要があるときは，５ｍ×５ｍに４分割し，北西，北東，南西，南東の順にａ～ｄを付す。このため最小グリッドの表示方法はたとえばＡ15-24bのようになる。なお，鷲谷津遺跡中央付近にある基準点Ｎ27-01の公共座標はX=-45,700，Y=27,900（平成８年11月現在）である。

確認調査

上層確認調査については，調査区内の地形も考慮して，全域に２ｍ×２ｍから２ｍ×５ｍのグリッドを10％の割合で設定して遺構・遺物の分布を確認し，本調査に移行している。下層については，調査区全域に２ｍ×２ｍのグリッドを４％の割合で設定し，遺物が出土したグリッドは周囲に拡張し本調査を実施した。

遺構番号

基本的に，遺構種別毎にSI-001，SI-002…，SK-1，SK-2…等の番号を付している。しかし前述のように，遺跡範囲の見直しにより，番号の重複や，混在が生じたため，別掲のとおり遺構番号の振り替えを行った。また，遺構調査段階では番号を付したが，その後耕作に伴う根切り溝や風倒木など明らかに遺構でないことが判明したものについては欠番とした。

第６図 遺跡全体図

第２章　旧石器時代

第１節　概要（第７図）

鷲谷津遺跡では，昭和63年度から平成２年度までと，平成８年度から平成10年度までの６か年にわたり下層調査を実施した。各年度の調査概要は以下のとおりである。

昭和63年度は，遺跡南半の15,100㎡を対象として確認調査を実施し，ブロック４か所（M28-a, M29-a, P27-a, O28-aブロック）と単独出土１か所（O27-09グリッド）を検出した。ブロックの調査は，確認調査の範囲で対応し，終了した。

平成元年度は，遺跡北端の14,100㎡を対象として確認調査を実施し，単独出土１か所（P26-04グリッド）を検出した。調査対象範囲は遺跡北側の傾斜地が中心であり，遺物の分布はわずかである。調査は確認調査をもって終了した。

平成２年度は，遺跡中央の2,280㎡を対象として確認調査を実施し，ブロック１か所（O27-aブロック）を検出した。ブロックの調査は，確認調査の範囲で対応し，終了した。

平成８年度は，遺跡北半の8,600㎡を対象として確認調査を実施し，ブロック17か所（L26-a～e, M26-a～f, M27-a・b, N26-a, N27-a, O26-a・bブロック）と単独出土４か所（M26-20, M27-25, N26-17, N27-06グリッド）を検出した。ブロックの調査は，970㎡の本調査によって行なった。

平成９年度は，遺跡北側の660㎡を対象として確認調査を実施し，平成８年度に調査したM26-a～c・fブロックの一部と単独出土２か所（L26-13・15グリッド）を検出した。ブロックの調査は，188㎡の本調査によって行なった。

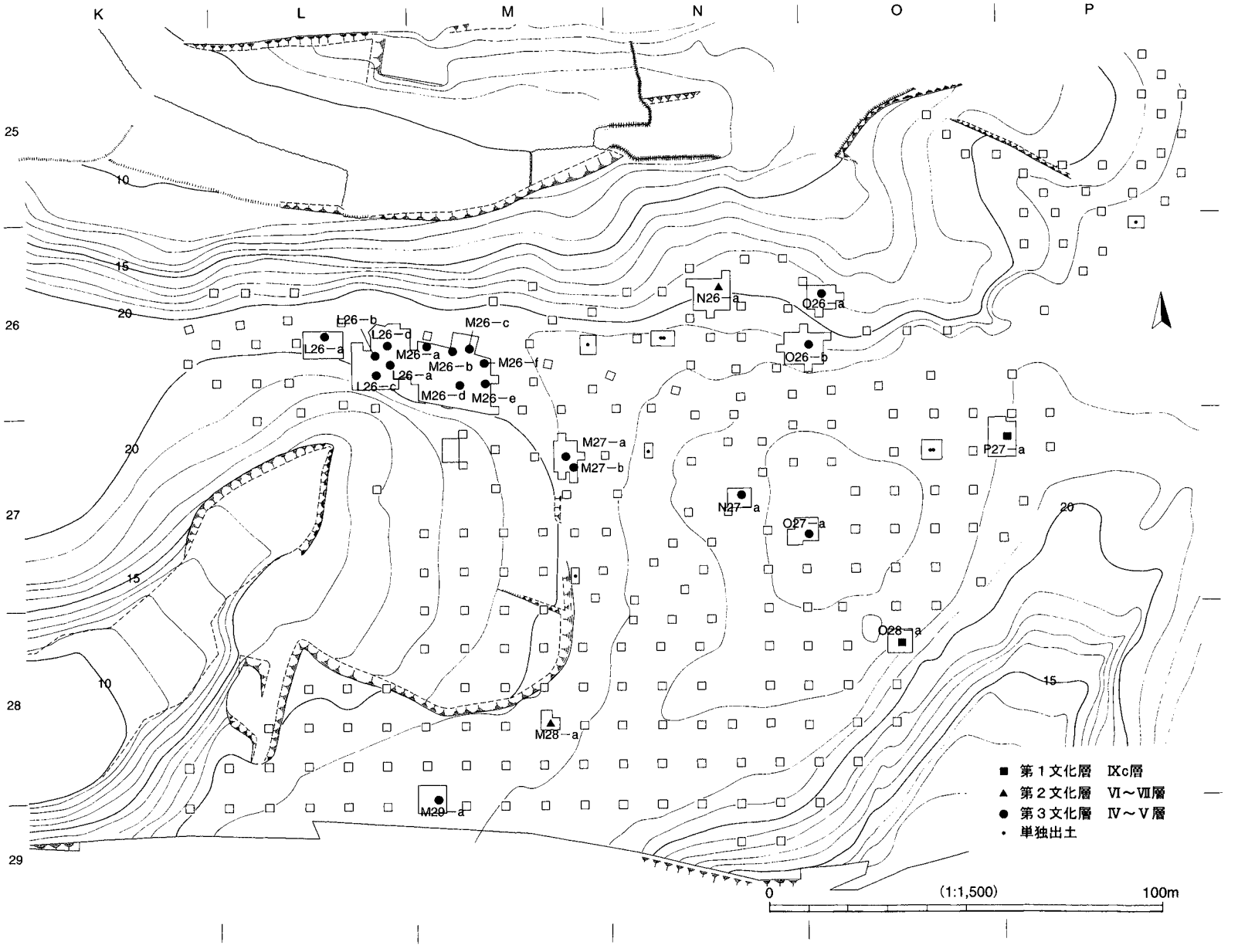
平成10年度は，遺跡中央部の750㎡を対象として確認調査を実施したが，遺物の分布はみられなかった。

以上のように，本遺跡では旧石器時代のブロック22か所と単独出土８か所が検出され，ブロック周辺部の資料を含めて677点の遺物が出土した。また，上層遺構中にも28点の旧石器時代資料が混入していた。

22か所のブロックとその周辺から出土した石器群は，立川ローム層Ⅸｃ層，Ⅵ層下部からⅦ層，Ⅳ層からⅤ層の３枚の文化層に帰属させることができた。Ⅸｃ層を中心に包含され，本遺跡で最も下位の石器群を第１文化層，Ⅵ層下部からⅦ層の中位の石器群を第２文化層，Ⅳ層からⅤ層にかけて包含され，最も上位の石器群を第３文化層とする。石器群の内容をみると，第１文化層は台形石器を指標とする石器群で，石器ブロックが２か所，石器総数は41点である。第２文化層は定型的な石器が乏しい。石器ブロックは２か所で，石器総数は32点である。第３文化層は切出形のナイフ形石器と掻器に特徴があり，石器ブロックは18か所，石器総数は594点である。石器石材は，栃木県高原山産と考えられる黒曜石が中心である。また，掻器がまとまって出土し，刃部再生のあり方に特徴がみられた。石器ブロックの立地は，遺跡北西の，中野台遺跡に連なる台地のくびれ部に第３文化層のブロック11か所が集中的に分布し，それ以外は台地中央から縁辺部にかけて散漫に分布する。

なお，石器の分布図，実測図，組成表で用いた略号は，以下のとおりである。

石器：Kn(★) ナイフ形石器，Tr(△) 台形石器，Ka(▲) 角錐状石器，Po(▲) 槍先形尖頭器，Es(◎) 掻器，Ss(○) 削器，Gr(○) 彫器，Pi(○) 楔形石器，Rf(○) 加工痕ある剥片，Uf(○) 使用痕ある剥片，Bl(▲) 石刃，Bs(▲) 小石刃，Mb(▲) 細石刃，Mc(□) 細石刃核，Sp(●) 削片，Ha(■) 敲石類，Ab(■) 台石，Pe(■) 礫器，Ax(◆) 石斧，B(●) 剥片，C(･) 砕片，D(□) 石核，(＊)礫
石材：Ob(●) 黒曜石，An(○) 安山岩，An(t)(○) 安山岩（トロトロ石），Rh(□) 流紋岩，Sh(▲) 頁岩，Csh(▲) 珪質頁岩，Ch(△) チャート，Tu(▲) 凝灰岩，Sl(◎) 粘板岩，Sa(▲) 砂岩，Ho(★) ホルンフェルス，Qu(①) 石英，Ag(■) 瑪瑙・玉髄



第７図　旧石器時代調査概要図（1:1,500）

第２節　基本層序（第８図）

本遺跡における立川ローム層の堆積状況は，下総台地で広く観察される基本層序と共通する。ただし，調査期間が10年にも及び，また，多くの職員が関わったため，数種類の層序区分が行われてきた。

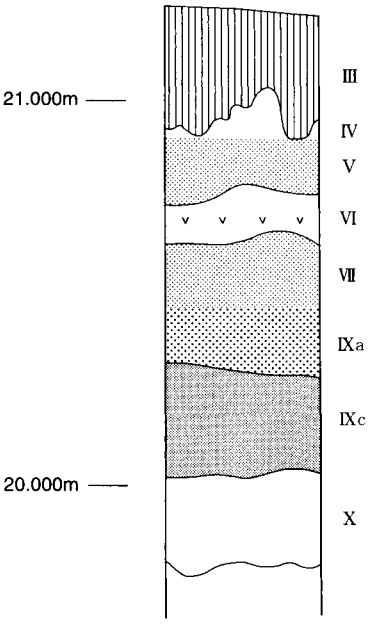
ここでは，現在当センターで最も広く採用されている層序区分に統一し，各層の概略について記す。

Ⅲ　層：黄褐色軟質ローム層で，厚さは30 ㎝～40 ㎝である。

Ⅳ　層：赤みを帯びた黄褐色硬質ローム層である。武蔵野台地のⅣ層上半部に相当する層は軟質化してⅢ層に取り込まれており，本層は，武蔵野台地Ⅳ層下部に相当する土層と考えられる。赤色スコリアを多く含み，厚さは10 ㎝程度と薄い。

Ⅴ　層：にぶい黄褐色の硬質ローム層で，下総台地の立川ローム層第１黒色帯に相当する。厚さは10 ㎝～20 ㎝である。

Ⅵ　層：明黄褐色硬質ローム層で，黒色粒と火山ガラスで構成されるＡＴ（姶良丹沢火山灰）ブロックが，まとまって包含されている。厚さは10 ㎝～15 ㎝である。



第８図　基本土層図

Ⅶ　層：黄褐色硬質ローム層で，第２黒色帯上半部に相当する。ＡＴが細かく拡散する。厚さは10 ㎝～20 ㎝である。

Ⅸａ層：褐色硬質ローム層で，第２黒色帯下半部の上層である。赤色，暗緑色のスコリアを含む。厚さは10 ㎝～20 ㎝である。

Ⅸｂ層：黄褐色硬質ローム層で，第２黒色帯下半部の間層である。図示した基本土層図では，表示していない。本遺跡内でも安定して確認できる地点は少なく，ブロック状かもしくは確認できない場合が大半である。

Ⅸｃ層：暗褐色硬質ローム層で，第２黒色帯下半部の下層である。赤色・暗緑色のスコリアを多く含む。Ⅸａ層よりもスコリアが多く，また大型のものを含んでいる。厚さは20 ㎝～30 ㎝である。

Ⅹ　層：黄褐色硬質ローム層で，Ⅸ層に比べて軟質になる。スコリアは激減するが，部分的に赤橙色で小型のスコリアを含む。本層下底は波状を呈する。厚さは20 ㎝～30 ㎝である。

第３節　石器群の分布と出土遺物

第１文化層

第１文化層は，立川ローム層第２黒色帯下部のⅨｃ層を中心に包含されている石器群である。定型的な石器としては，台形石器，掻器，楔形石器がみられるが，同時期に特徴的な石斧は出土していない。剥片類は安山岩や黒曜石，チャートを用いた不定型の剥片が主体を占めるが，東北産の頁岩を用いた石刃も含まれている。

石器群の出土地点は，O28-aブロックとP27-aブロックの２か所である。両ブロックとも石器総数は20点ほどで，石器製作作業の形跡が乏しい小規模なものである。両ブロック間に石器の接合や母岩の共有関係はみられない。

1　028-aブロック（第9～12図，第2・3表）

1）ブロックの概要

028-aブロックは，調査範囲東端の028-03・08グリッドに位置する。ブロックの立地は，鷲谷津遺跡の東端を画する，北東－南西方向の谷に面した台地縁辺の緩斜面である。

ブロックの規模と形状は，長軸6m，短軸4mの楕円形の範囲に19点の石器群が散漫に分布する。出土層位はⅨc層を中心に，40cm程の高低差をもって包含されている（第9・10図）。

ブロックを構成する石器群は，台形石器1点，楔形石器1点，加工痕ある剥片4点（接合により2個体），使用痕ある剥片4点，剥片8点，石核1点の合計19点で，石器石材は，黒曜石4点，安山岩6点，珪質頁岩7点，チャート1点，ホルンフェルス1点である。遺跡内で剥片生産が行われたと考えられる母岩は，珪質頁岩1母岩（028-①）に限られており，それ以外はすべて遺跡外で製作され，製品や素材として搬入された単独母岩である。

2）母岩の特徴と内容

・028-①：自然面及び節理面は橙褐色，内部は緑がかった淡褐色の嶺岡産珪質頁岩である。石器群の内訳は，加工痕ある剥片1点，剥片3点，石核1点の合計5点で，総重量は97.5gである。5点すべてが接合する。ブロックの西側にまとまって分布する。

・028-②：黒灰色で，白色の夾雑物を含む安山岩である。石器群の内訳は，楔形石器1点，加工痕ある剥片3点（接合して1個体），剥片2点の合計6点で，総重量は21.7gである。

・028-③：淡黒褐色透明の黒曜石である。φ1mm以下の夾雑物を少量含む。使用痕ある剥片1点（2.7g）の単独資料である。

・028-④：青みがかった黒色不透明の黒曜石である。φ1mm程の白色の夾雑物を含む。使用痕ある剥片1点（1.3g）の単独資料である。

・028-⑤：黒灰色で乳白色の縞が多数入る，不透明で粗悪な黒曜石である。使用痕ある剥片1点（5.5g）の単独資料である。

・028-⑥：黒色半透明で黒色の縞が入る黒曜石である。使用痕ある剥片1点（2.1g）の単独資料である。

・028-⑦：節理面は橙褐色，内部は灰緑色の嶺岡産珪質頁岩である。小型の剥片1点（1.4g）の単独資料である。

・028-⑧：褐色で部分的に黒褐色の珪質頁岩である。均質緻密で，よく珪化している。剥片1点（4.1g）の単独資料である。

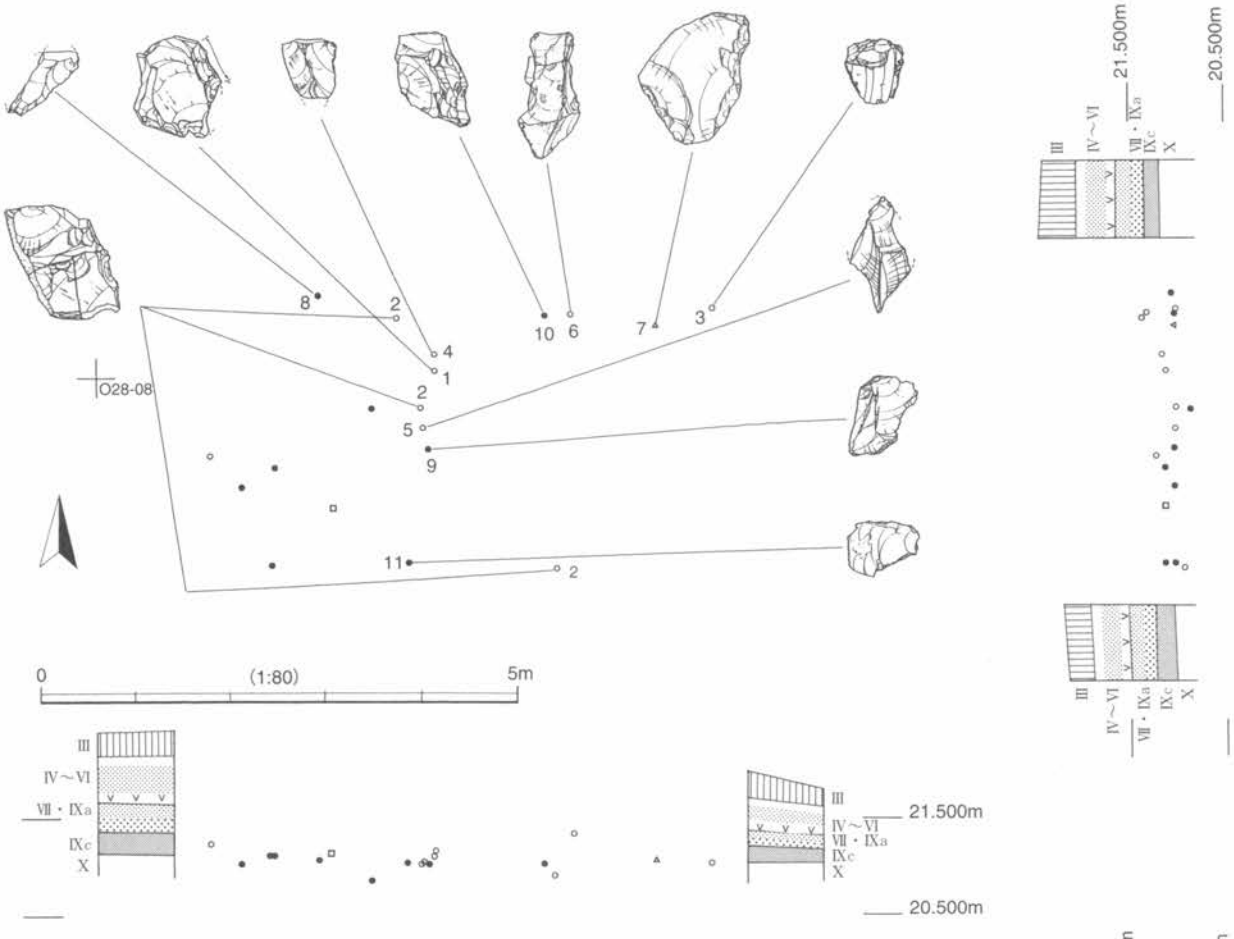
・028-⑨：青灰色で黒色の縞が入るチャートである。剥片1点（2.1g）の単独資料である。

・028-⑩：緑がかった黒灰色のホルンフェルスである。石質は粗いが，比較的均質である。台形石器1点（9.2g）の単独資料である。

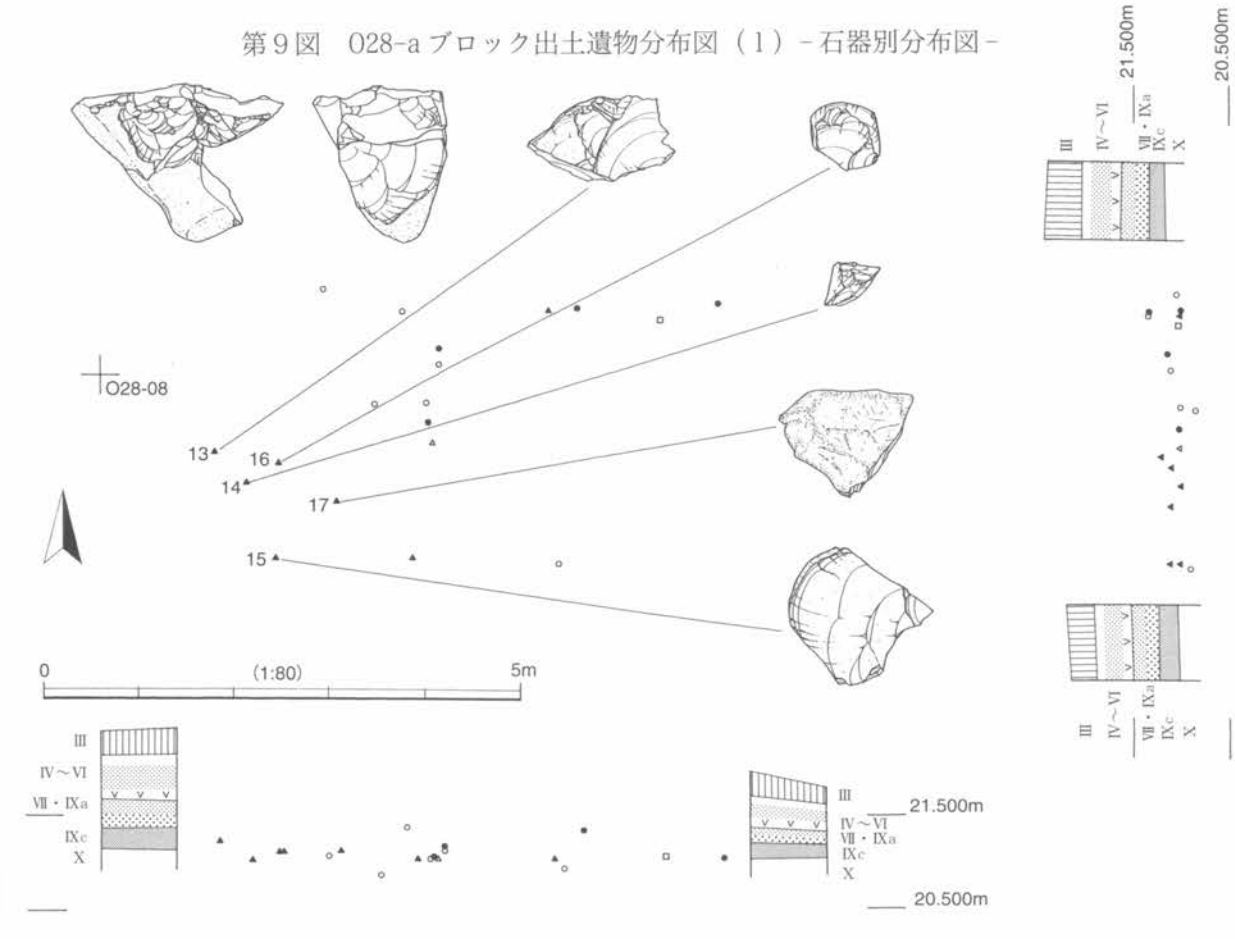
3）出土遺物（第11・12図）

台形石器（第11図7）　7は，ホルンフェルス製の横長剥片を素材とする台形石器である。素材の打面と末端側の2側縁に対し，裏面から緩やかな角度で調整加工を行っている。

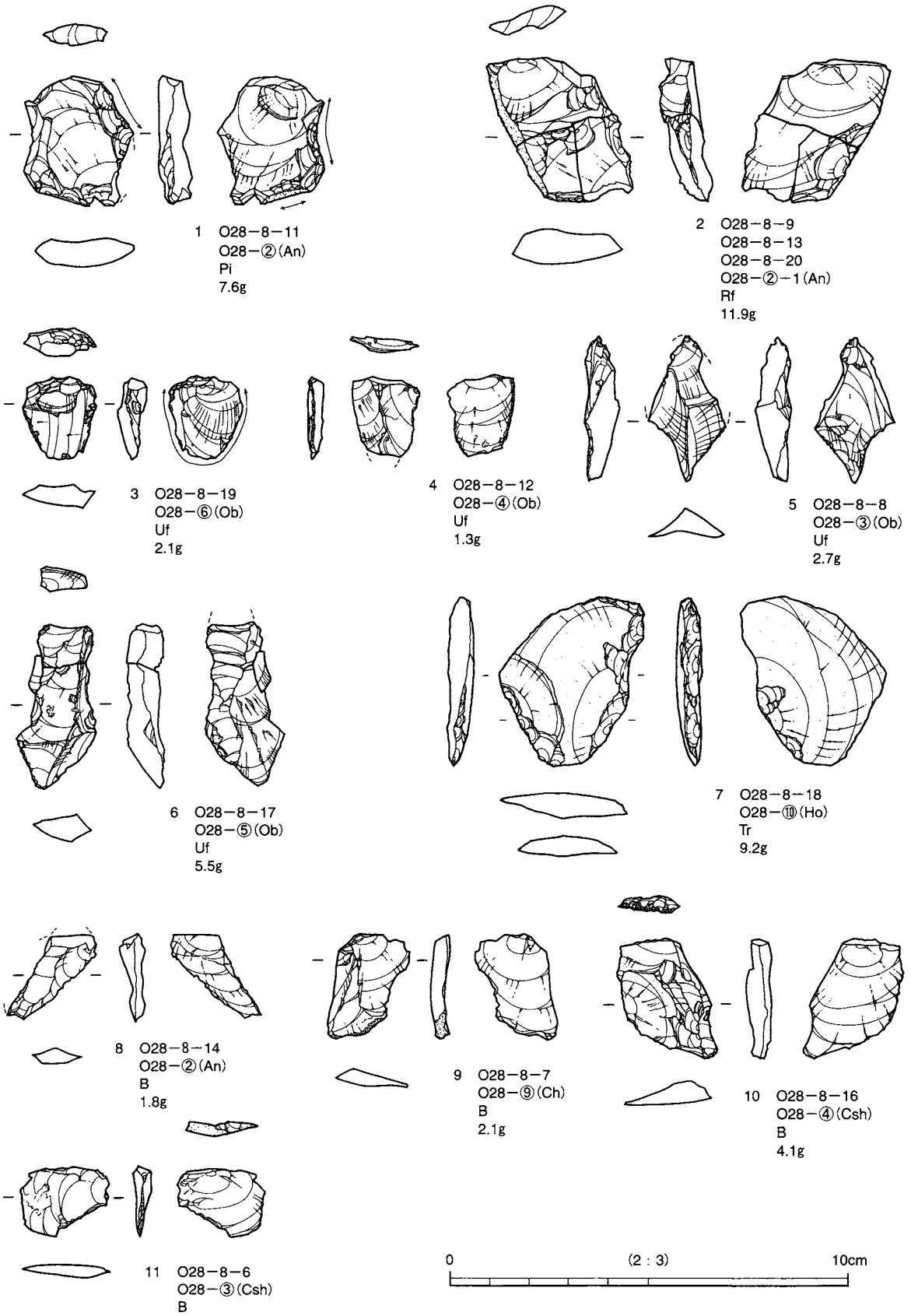
楔形石器（第11図1）　1は，安山岩製の楔形石器である。幅広で寸詰まりの縦長剥片を素材とする。正面右側縁と裏面右側縁の縁辺が潰れている。正面下端は平坦な自然面が残るが，その表裏にも細かな剥離痕がみられる。



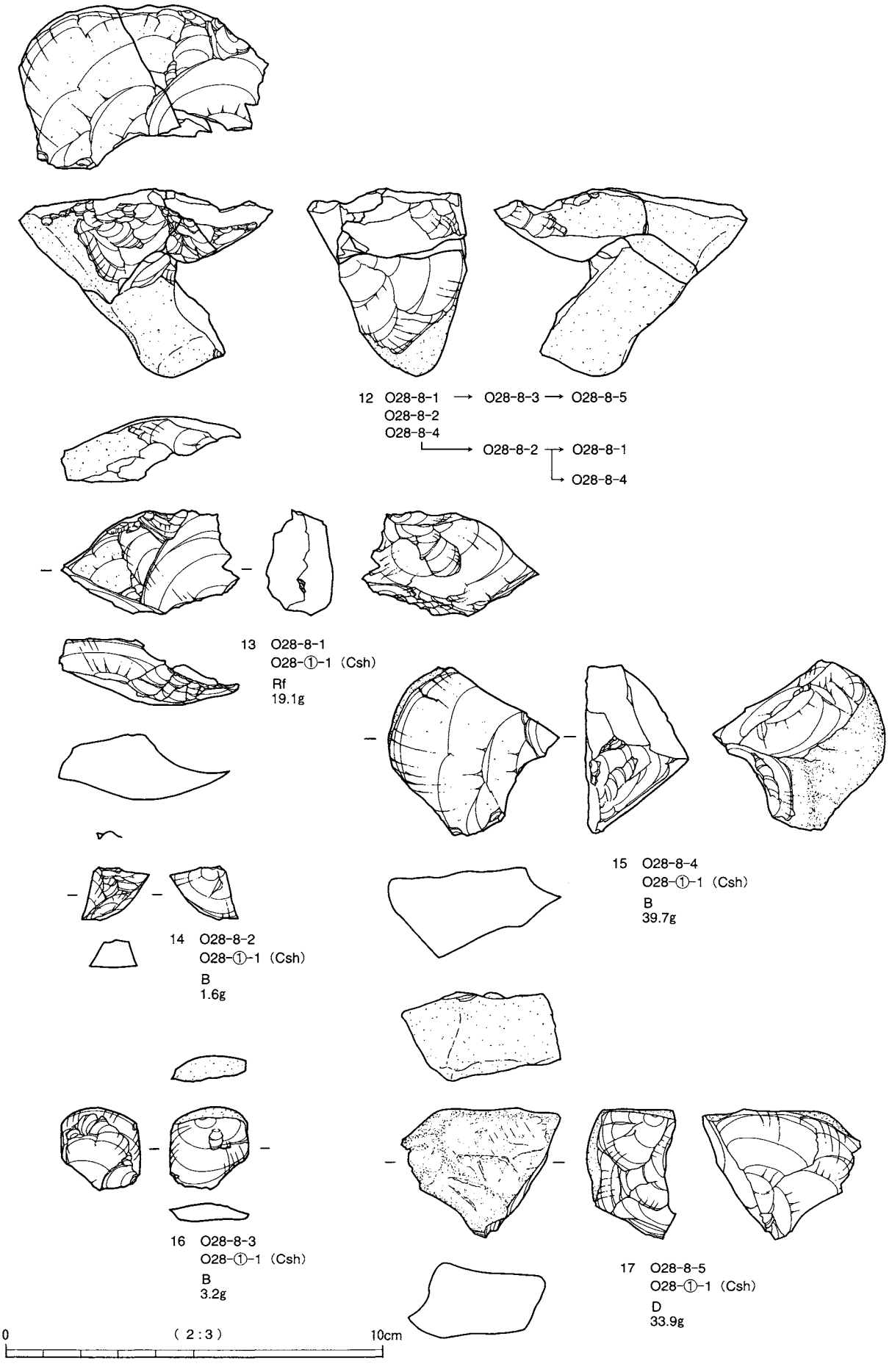
第９図　028-aブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－



第10図　028-aブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－



第11図　028-aブロック出土遺物実測図（1）



第12図　028-aブロック出土遺物実測図（2）

加工痕ある剥片（第11図2）　2は，安山岩の加工痕ある剥片である。1と同一母岩で，類似した形状の剥片を素材として，表裏に不連続な剥離痕がみられる。3つに割れているが，意図的な分割なのか，加工途上での欠損なのかは不明である。

使用痕ある剥片（第11図3～6）　3は，小型で幅広の縦長剥片を用いた使用痕ある剥片である。鋭利な両側縁に刃こぼれがある。4も3と類似した形状の素材を用いており，裏面右側縁には微細な剥離痕が連続する。5は，欠損した剥片の鋭利な縁辺を用いた，使用痕ある剥片である。6は，正面の剥離方向が一定しない縦長剥片を用いた使用痕ある剥片である。正面左側縁下半に刃こぼれがある。なお，4点の使用痕ある剥片は，すべて黒曜石の単独母岩で，それぞれの原産地も異なる可能性が高い。

剥片（第11図8～11）　8～11は，いずれも不定型の剥片である。8は安山岩で，1・2と同一母岩である。9～11はチャートと珪質頁岩の単独資料である。

4）接合資料とその関連資料（第12図）

・028-①（第12図12～17）　12は，加工痕ある剥片1点（13），剥片3点（14～16），石核1点（17）の接合資料である。拳大の円礫を用い正面側からの粗い剥離によって上位に打面を設定し，正面を中心に中・小型の不定型な剥片を生産している。次に，裏面の自然面に打面を移し，13～15を含む大型の横長剥片や16他の剥片を連続して剥離する。最終的に石核が破損し，残った17が残核である。また，大型の横長剥片は石核となり14等小型の剥片を若干剥離して，本母岩の作業は終了している。

第2表　028-aブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
028-①(Csh)									1												3		1	5		5
028-②(An)								1	3												2			6		6
028-③(Ob)										1														1		1
028-④(Ob)										1														1		1
028-⑤(Ob)										1														1		1
028-⑥(Ob)										1														1		1
028-⑦(Csh)																					1			1		1
028-⑧(Csh)																					1			1		1
028-⑨(Ch)																					1			1		1
028-⑩(Ho)		1																						1		1
合　計		1						1	4	4											8		1	19		19

第3表　028-aブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)										4														4		4
安山岩(An)								1	3												2			6		6
珪質頁岩(Csh)									1												5		1	7		7
チャート(Ch)																					1			1		1
ホルンフェルス(Ho)		1																						1		1
合　計		1						1	4	4											8		1	19		19

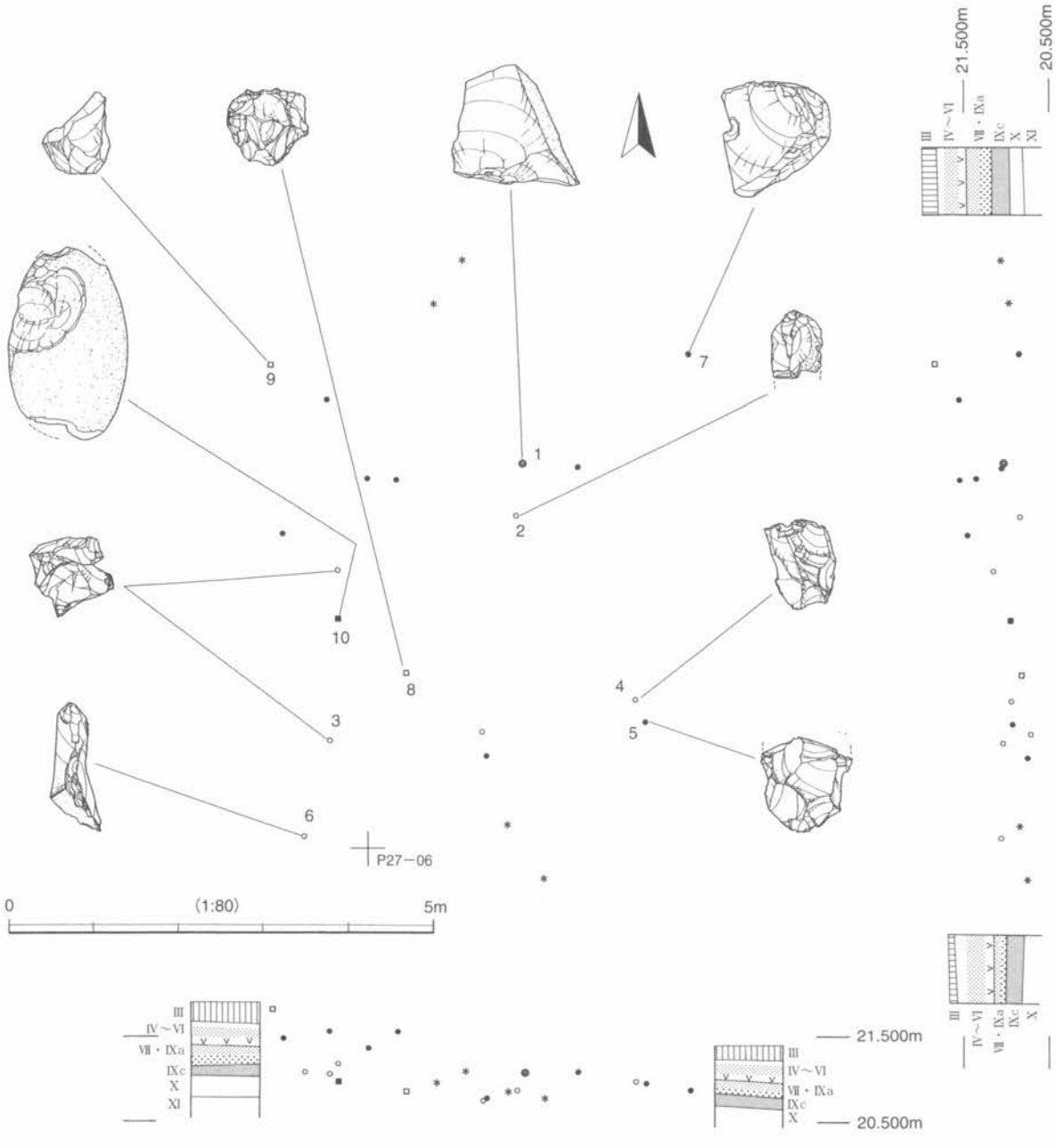
2　P27-aブロック（第13～16図，第4・5表）

1）ブロックの概要

P27-aブロックは，調査範囲東端の027-05, P27-01・06グリッドに位置する。ブロックの立地は，鷲谷津遺跡東端にある，南に開口する谷奥に面した東斜面である。

ブロックの規模と形状は，長軸８ｍ，短軸６ｍの楕円形の範囲に22点の石器群が散漫に分布する。出土層位はⅨｃ層を中心とするが，斜面部のため，出土遺物の高低差は最大１ｍにもおよぶ（第13・14図）。

ブロックを構成する石器群は，掻器１点，楔形石器３点（接合により２個体），加工痕ある剥片１点，使用痕ある剥片１点，石刃１点，敲石１点，剥片８点，石核２点，礫４点（接合により３個体）の合計22点である。石器石材は，黒曜石１点，安山岩４点，頁岩４点，珪質頁岩２点，チャート７点である。礫は，流紋岩２点（接合して１個体），頁岩１点，珪質頁岩１点で構成されている。遺跡内で剥片生産が行われたと考えられる母岩は，チャート１母岩（P27-①）にすぎない。礫は，流紋岩１個体と珪質頁岩１個体が完形あるいはこれに準じており，頁岩１個体の遺存率は25％以下である。礫の出土位置は，ブロックの南北に分散しており，まとまってはいない。



第13図　P27-aブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－

2）母岩の特徴と内容

・P27-①：緑がかった青灰色のチャートである。石器群の内訳は，楔形石器３点（接合により２個体），剥片１点，石核２点の合計６点で，総重量は36.４ｇである。

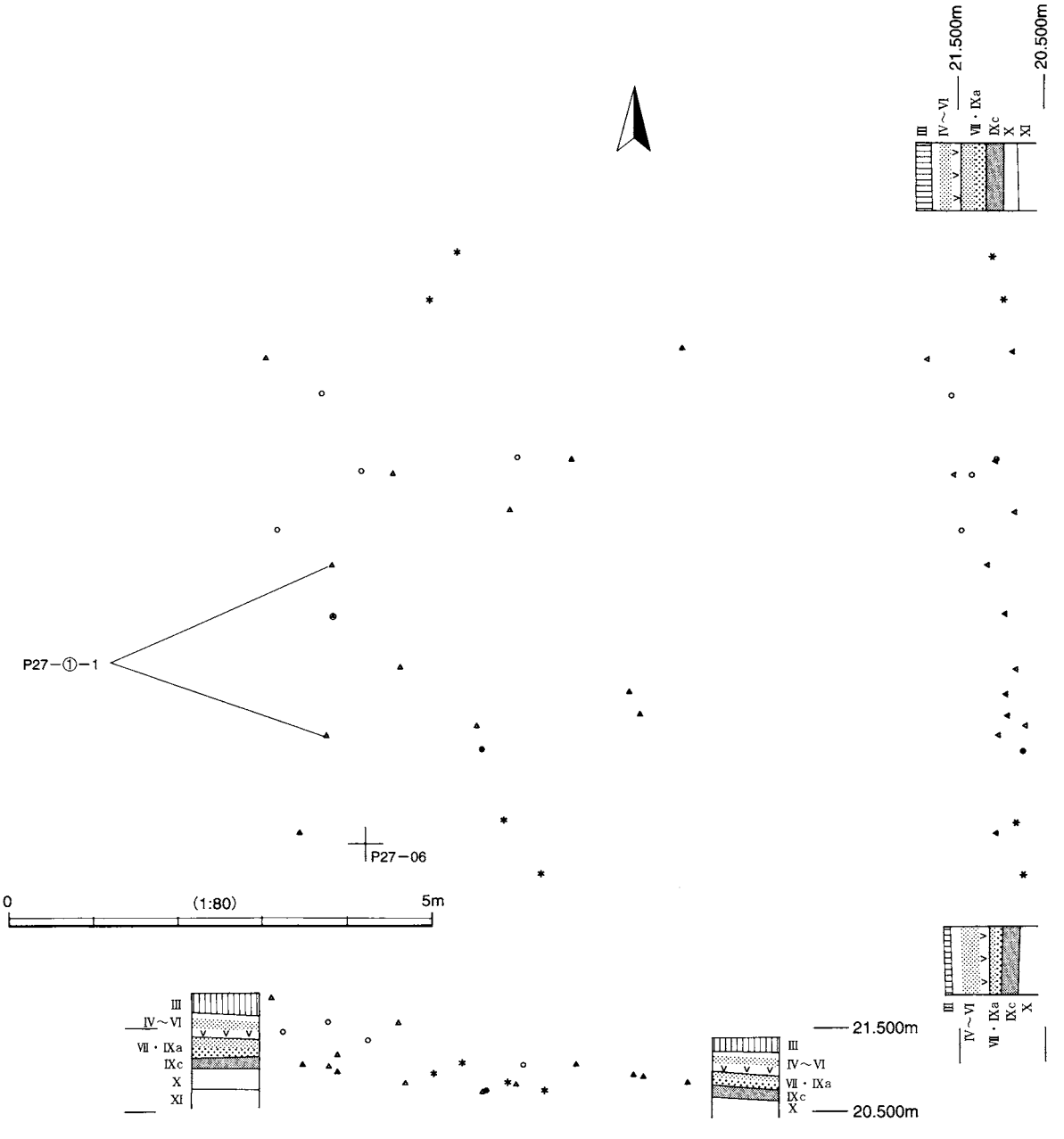
・P27-②：自然面は褐色，内部は灰緑色の嶺岡産珪質頁岩である。石器群の内訳は，剥片２点で，総重量は31.０ｇである。

・P27-③：黒褐色で均質緻密な東北産頁岩である。石器群の内訳は，使用痕ある剥片２点で，総重量は11.８ｇである。

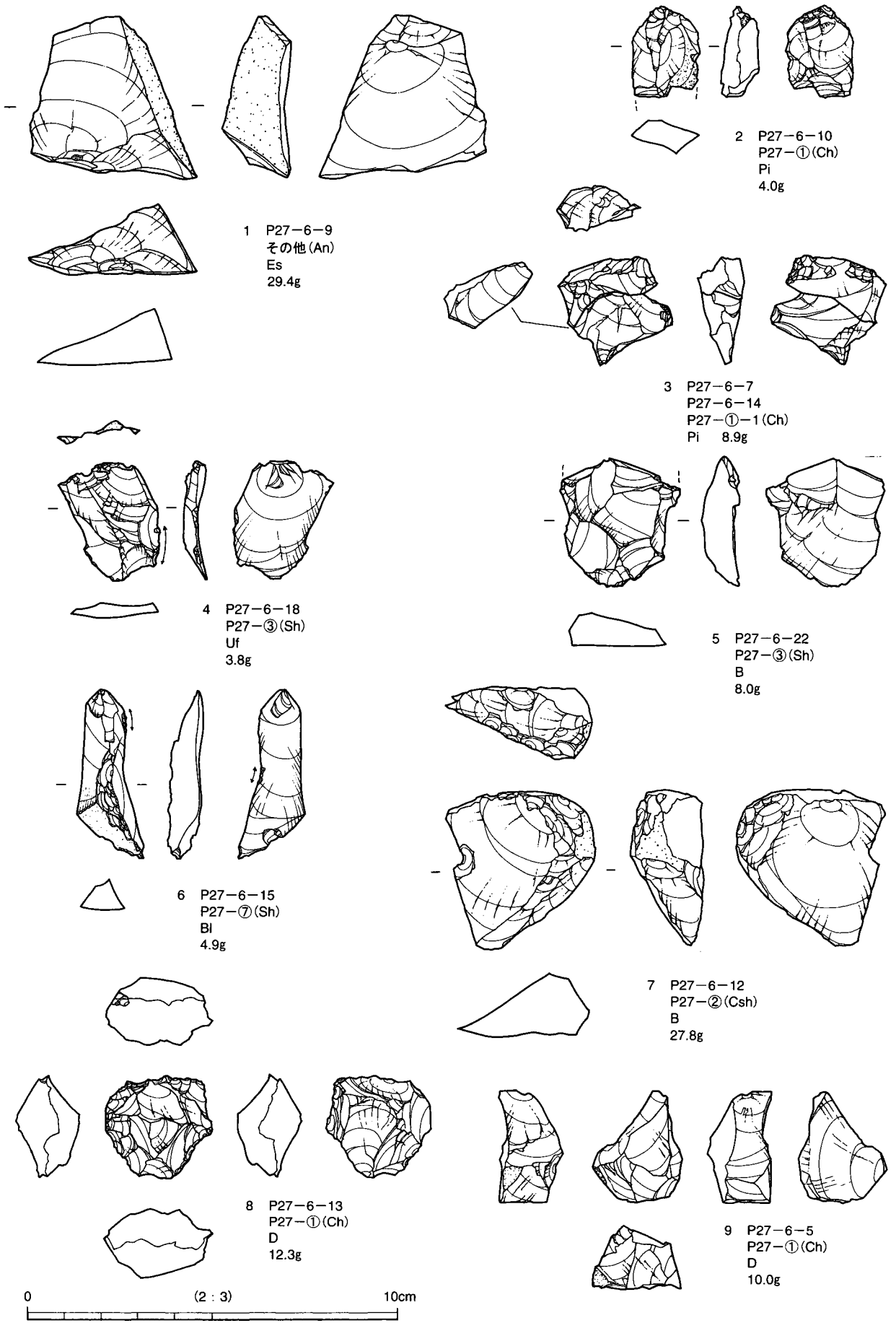
・P27-⑤：きめの細かい砂岩である。被熱のため赤化黒変し，ヒビが入っている。敲石１点（141.９ｇ）の単独資料である。

・P27-⑦：自然面は灰白色，内部は暗褐色の東北産頁岩である。石刃１点（4.９ｇ）の単独資料である。

なお，母岩分類のできなかった資料として，黒曜石の剥片１点（0.６ｇ），安山岩の掻器１点，剥片３点



第14図　P27-aブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－



第15図　P27-aブロック出土遺物実測図（1）

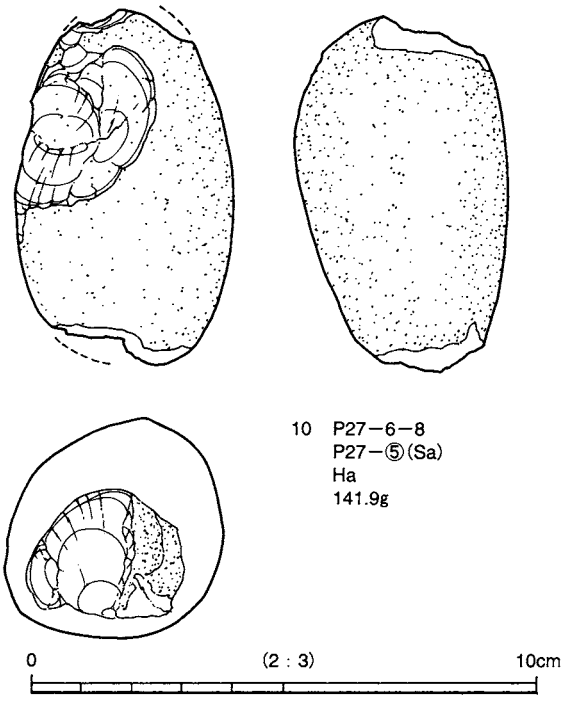
（総重量42.0ｇ），チャートの加工痕ある剥片１点（1.7ｇ）がある。

３）出土遺物（第15・16図）

掻器（第15図１）　１は，安山岩の厚手で不定型の剥片を素材とする掻器である。素材剥片の末端部に急角度の調整加工を施し，刃部を作り出している。刃部以外の部位に，調整加工はみられない。

楔形石器（第15図２・３）　２は，チャートの縦長剥片を素材とする楔形石器である。上端の表裏には細かな剥離痕が連続し，上端の縁辺は潰れている。下半部は大きく欠損する。３も２と同一母岩のチャートを用いた楔形石器である。中央で２つに割れたものが接合した。

使用痕ある剥片（第15図４）　４は，東北産頁岩の幅広の縦長剥片を用いた，使用痕ある剥片である。打面の一部に自然面があり，正面は多方向からの剥離面によって構成されている。



第16図　P27-aブロック出土遺物実測図（２）

石刃（第15図６）　６は，東北産頁岩を用いた「稜付き石刃」である。打面は点状で，正面下端に平滑な自然面を残し，中央には石核時の側面調整痕がある。鋭利な縁辺部には，微細な刃こぼれが連続してみられる。

第４表　P27-aブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
027-①(Ch)								3													1		2	6		6
027-②(Csh)																					2			2		2
027-③(Sh)										1											1			2		2
027-④(Rh)																									2	2
027-⑤(Sa)																1								1		1
027-⑥(Csh)																									1	1
027-⑦(Sh)											1													1		1
その他（Ob）																					1			1		1
その他（An）					1																3			4		4
その他（Ch）									1															1		1
その他（Sh）																									1	1
合　計					1			3	1	1	1					1					8		2	18	4	22

第５表　P27-aブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)																					1			1		1
安山岩(An)					1																3			4		4
流紋岩(Rh)																									2	2
頁岩(Sh)										1	1										1			3	1	4
珪質頁岩(Csh)																					2			2	1	3
チャート(Ch)								3	1												1		2	7		7
砂岩(Sa)																1								1		1
合　計					1			3	1	1	1					1					8		2	18	4	22

剥片（第15図5・7） 5は，4と同一母岩の頁岩の剥片である。4と同様，正面は不定方向の剥離面によって構成される。上半部が欠損するため，本剥片の細かな内容は不明であるが，正面を被う剥離面の状況から，石刃石核の打面形成か打面再生に関連して剥離されたものと考えられる。7は，珪質頁岩の不定型な剥片である。打面や側面にみられる剥離面が不定方向であることから，打面と作業面を頻繁に入れ替える作業手順が想定される。また，打面周辺には，剥離がスムーズに通らずに潰れた小剥離面が多数みられることから，本剥片の剥離にあたって，強い打撃の繰り返されたことがうかがえる。

石核（第15図8・9） 8は，チャートの剥片を素材とする石核である。表裏両面を作業面とし，縁辺から求心的に剥片剥離を行って小型の剥片を生産しており，残核は，最終的に厚手の両面体となっている。9もチャートの剥片を素材とする石核で，小口部分から小型の剥片を剥離している。

敲石（第16図10） 10は，砂岩の敲石である。下端が使用により潰れている。また，強い被熱により赤化し，正面左側や上端が崩れている。

第2文化層

第2文化層は，立川ローム層Ⅵ層下部からⅦ層にかけて包含されている石器群である。定型的な石器はみられないため，帰属時期の詳細は不明である。

石器群の出土地点は，M28-aブロックとN26-aブロックの2か所である。両ブロックとも小規模で，剥片と石核を中心に構成されている。

1 M28-aブロック（第17～19図，第6・7表）

1）ブロックの概要

M28-aブロックは，調査区南部のM28-19グリッドに分布する。ブロックの立地は，西に向かって大きく開口する谷頭である。

ブロックの規模と形状は，長軸3m，短軸2mの楕円形の範囲に5点の石器群が分布する。出土層位はⅦ層で，出土遺物の高低差は少ない（第17・18図）。

ブロックを構成する石器群は，剥片4点，石核1点の合計5点である。石器石材は，チャート4点，砂岩1点で，チャートの3点は同一母岩である。

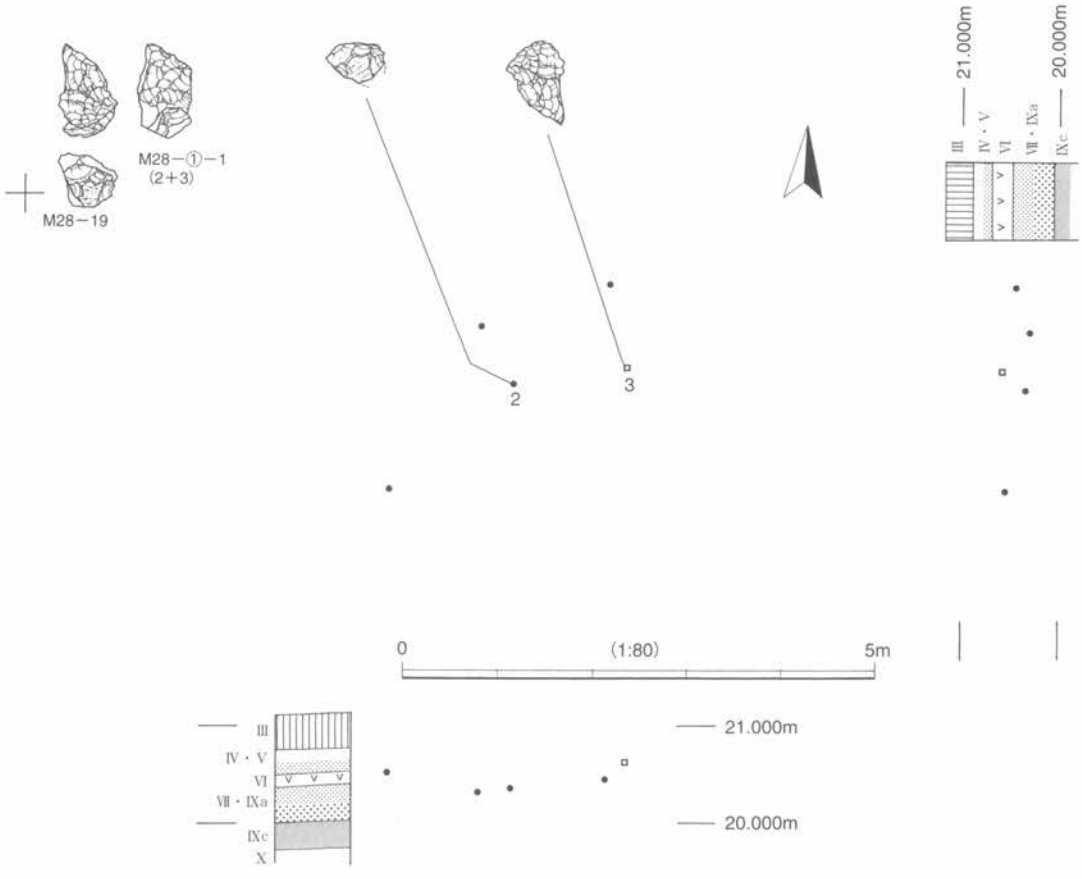
2）母岩の特徴と内容

・M28-①：青灰色で良質のチャートである。褐色及び灰色の節理面をもつ。石器群の内訳は，剥片2点と石核1点で，石核に剥片1点が接合する。剥片，石核ともに極めて小型であり，総重量は9.8gにすぎない。本ブロックに限って分布する。

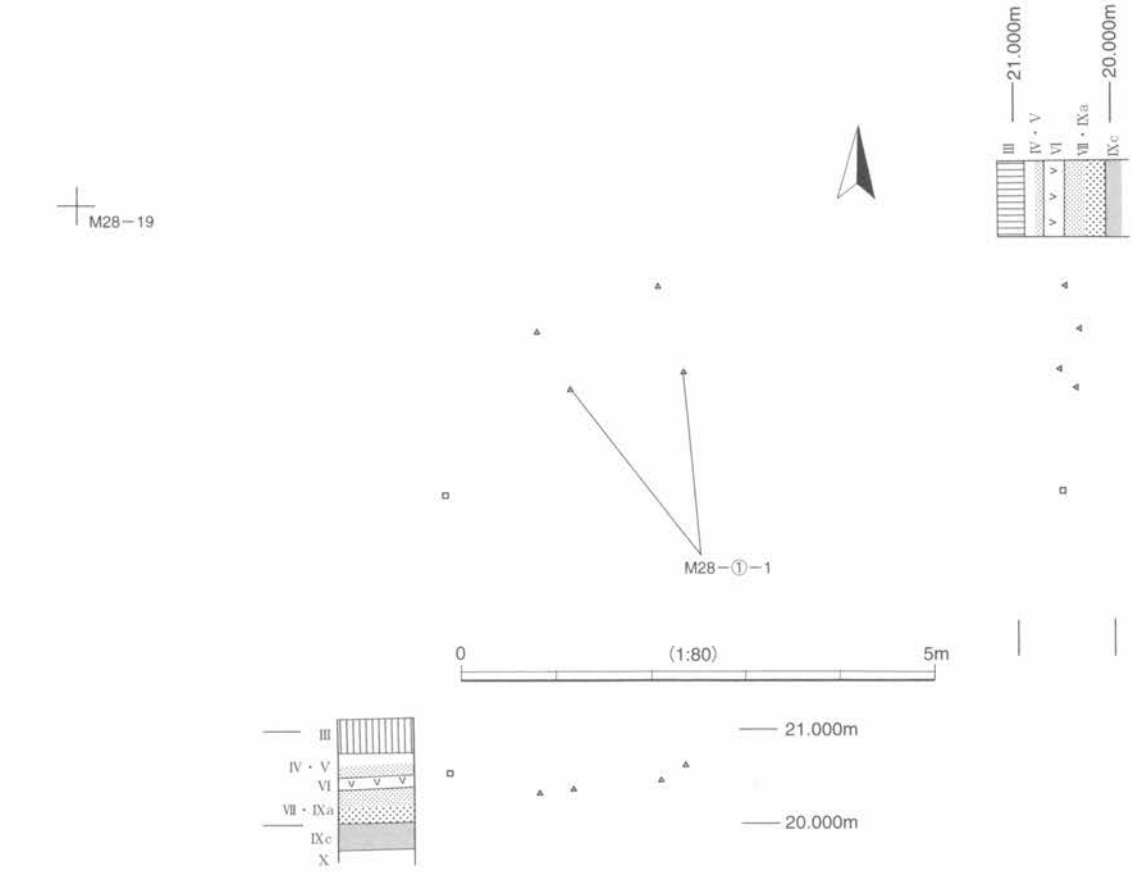
なお，母岩分類できなかった資料に，チャートの剥片1点（1.0g）と砂岩の剥片1点（1.6g）がある。いずれも特徴が乏しく，小型の資料であるため，母岩分類できなかった。

3）接合資料とその関連資料（第19図）

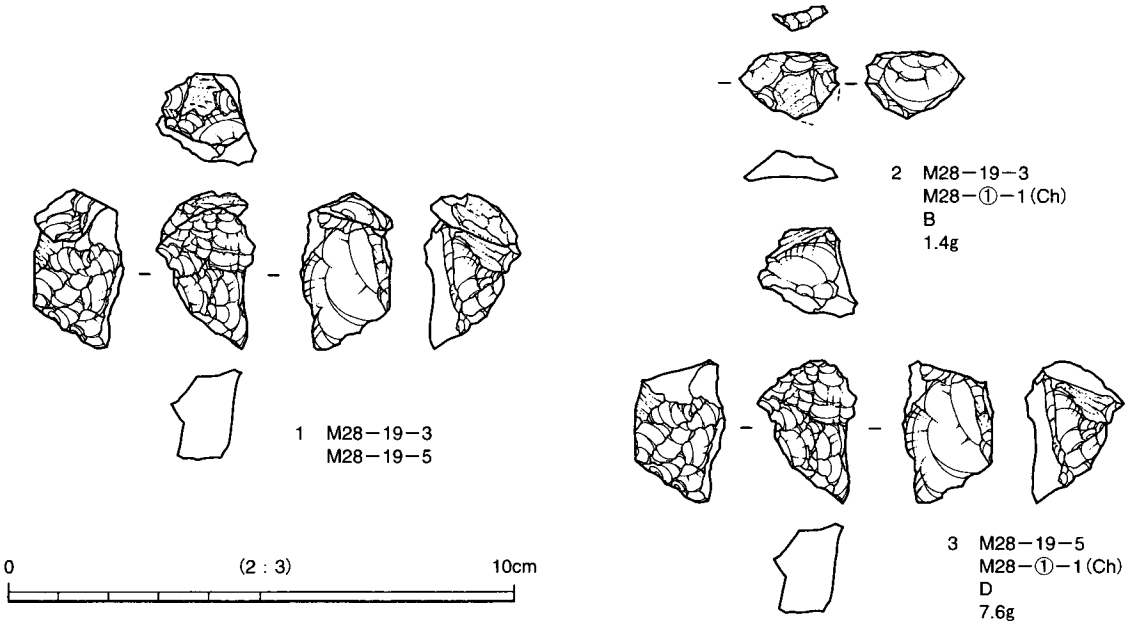
・M28-①（第19図1～3） 1は，小型の剥片と石核の接合資料である。中型厚手の不定型な剥片を石核の素材として，素材剥片の打面を切断している。次に，素材剥片の側面（実測図上端）から小型の剥片（2）を剥離して打面を設定し，正面を作業面として小型の剥片を生産している。剥離がスムーズには通らなかったようで，作業面の上端は潰れている。生産された剥片は少なく，早々に石核（3）は放棄されている。



第17図　M28-aブロック出土遺物分布図（1）　－石器別分布図－



第18図　M28-aブロック出土遺物分布図（2）　－石材別分布図－



第19図　M28-aブロック出土遺物実測図

第6表　M28-aブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M28-①(Ch)																					2		1	3		3
その他 (Ch)																					1			1		1
その他 (Sa)																					1			1		1
合　計																					4		1	5		5

第7表　M28-aブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
チャート(Ch)																					3		1	4		4
砂岩(Sa)																					1			1		1
合　計																					4		1	5		5

2　N26-aブロック（第20～24図，第8・9表）

1）ブロックの概要

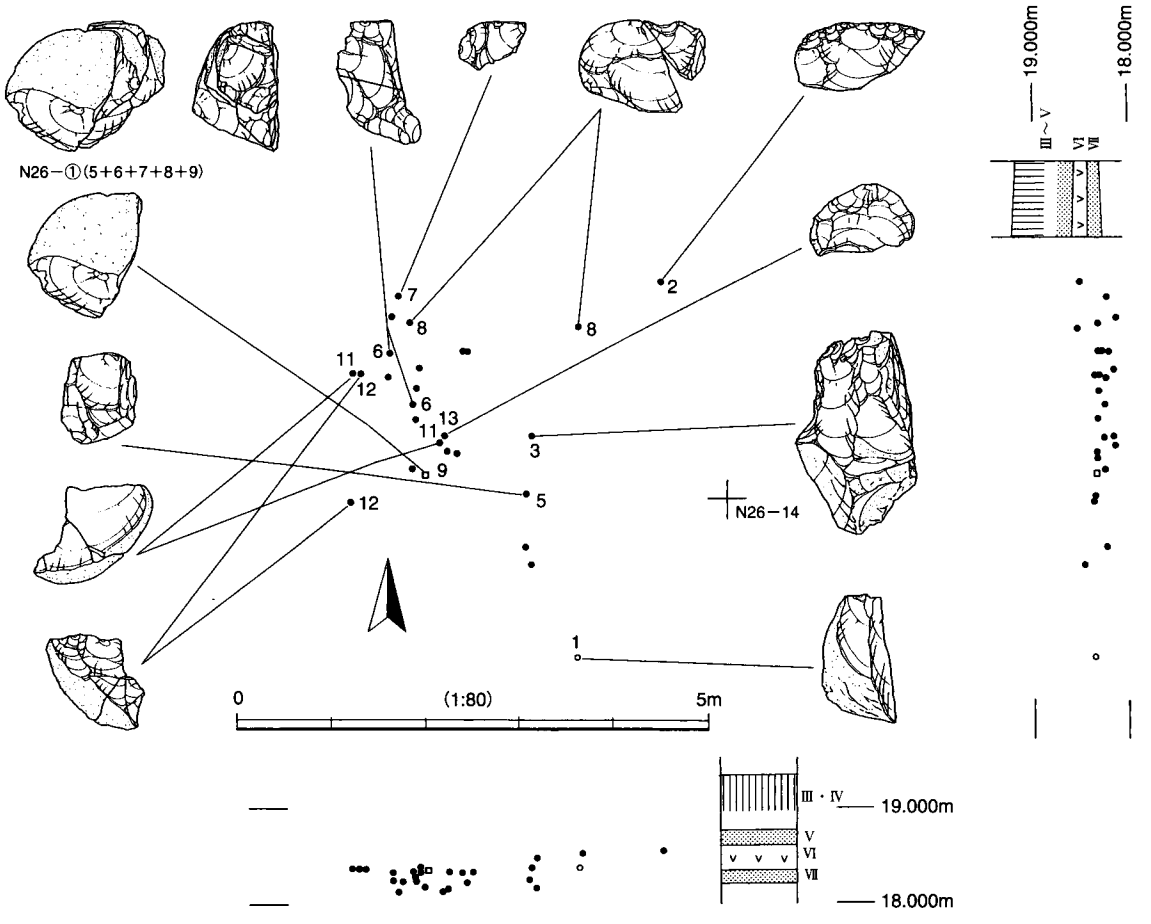
N26-aブロックは，調査範囲北端のN26-08・13グリッドに位置する。ブロックの立地は，鷲谷津遺跡北端を東西に走る谷津に面した台地の北側緩斜面である。

ブロックの規模と形状は，直径5m程の略円形の範囲に27点の石器が分布する。出土層位はⅥ層下部からⅦ層にかけてで，出土遺物は40cm程の高低差をもって包含されている（第20・21図）。

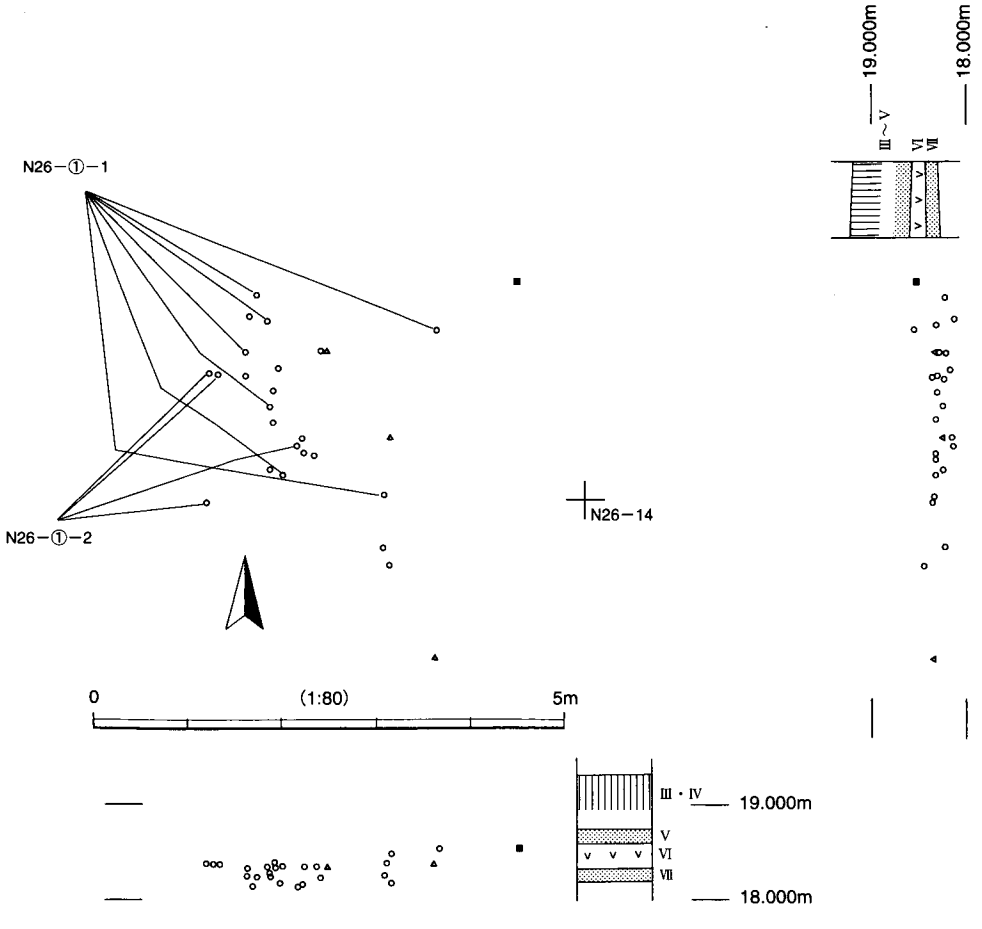
ブロックを構成する石器群は，使用痕ある剥片1点，剥片25点，石核1点の合計27点である。石器石材は，黒曜石1点，安山岩22点，チャート3点，瑪瑙・玉髄1点である。遺跡内で剥片生産が行われたと考えられる母岩は，安山岩1母岩（N26-①）だけである。

2）母岩の特徴と内容

・N26-①：自然面，内面ともに黄色みがかった褐色の安山岩である。φ1㎜以下の白色の夾雑物が散漫にみられる。石器群の内訳は，剥片21点（接合により17個体），石核1点の合計22点で，総重量は79.2ｇである。本ブロックの大半の資料が，本母岩である。



第20図　N26-aブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第21図　N26-aブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－

・N26-⑦：内外とも青灰色で，部分的に橙褐色の縞が入るチャートである。使用痕ある剥片１点（8.2ｇ）の単独資料である。

・N26-⑨：乳白色で均質な瑪瑙である。剥片１点（6.2ｇ）の単独資料である。

・N26-⑩：自然面と節理面は淡褐色，内部が青灰色のチャートである。剥片１点（37.0ｇ）の単独資料である。

なお，母岩分類のできなかった資料は，黒曜石の剥片１点（0.4ｇ），チャートの剥片１点（0.2ｇ）である。

3）出土遺物（第22～24図）

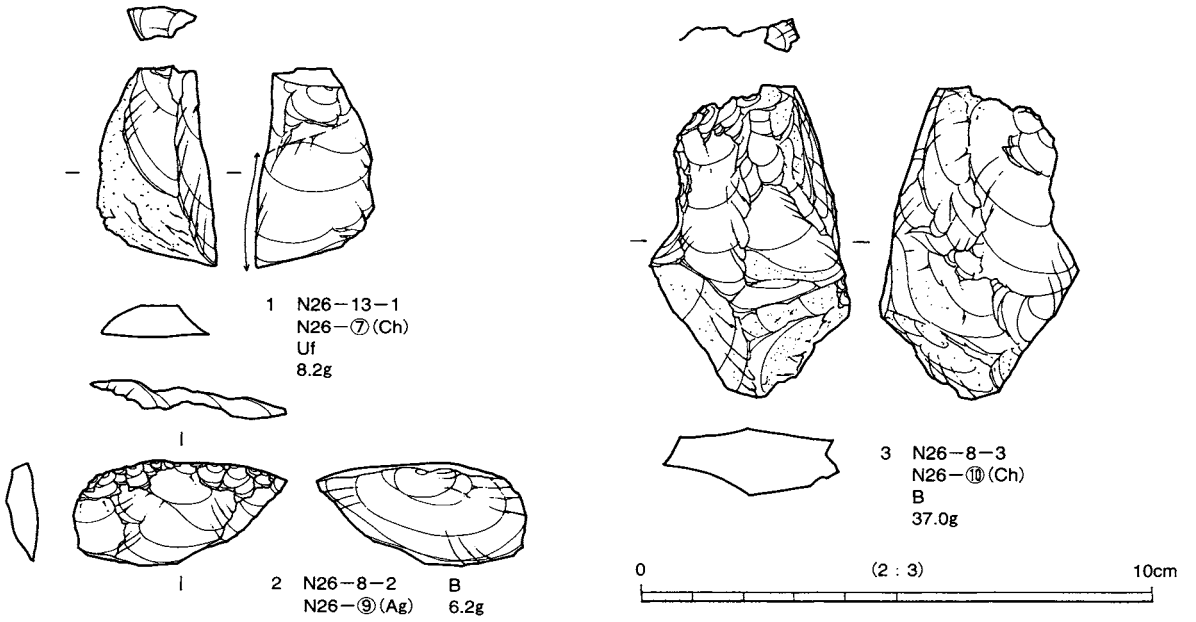
使用痕ある剥片（第22図1）　1は，チャートの縦長剥片を用いた使用痕ある剥片である。平坦な打面をもち，正面左側には大きく自然面を残す。また，正面右側には，裏面と同方向の剥離面がある。裏面の

第８表　N26-aブロック母岩別石器組成表

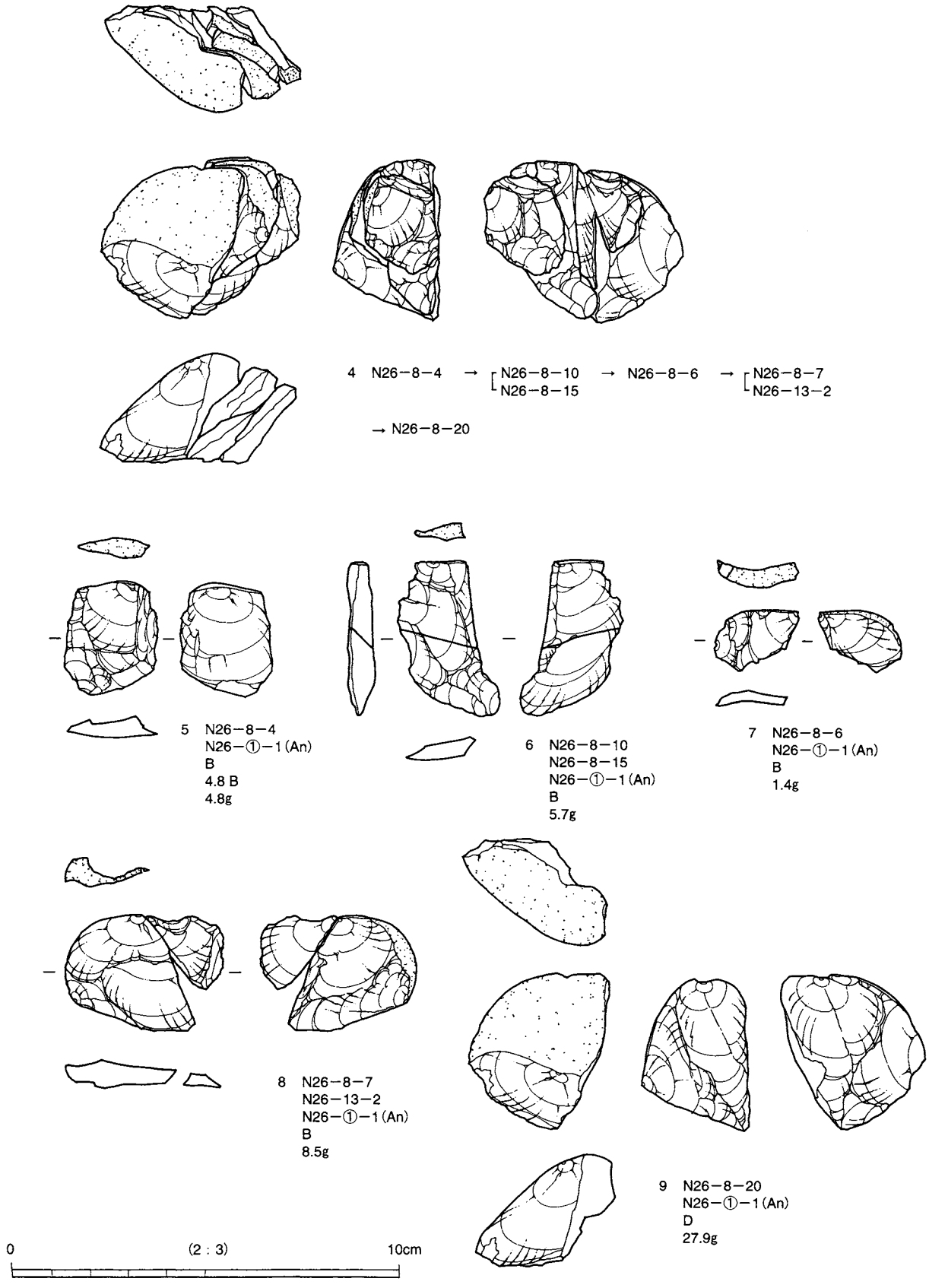
母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
N26-①(An)																					21		1	22		22
N26-⑦(Ch)										1														1		1
N26-⑨(Ag)																					1			1		1
N26-⑩(Ch)																					1			1		1
その他（Ob）																					1			1		1
その他（Ch）																					1			1		1
合　計										1											25		1	27		27

第９表　N26-aブロック石材別石器組成表

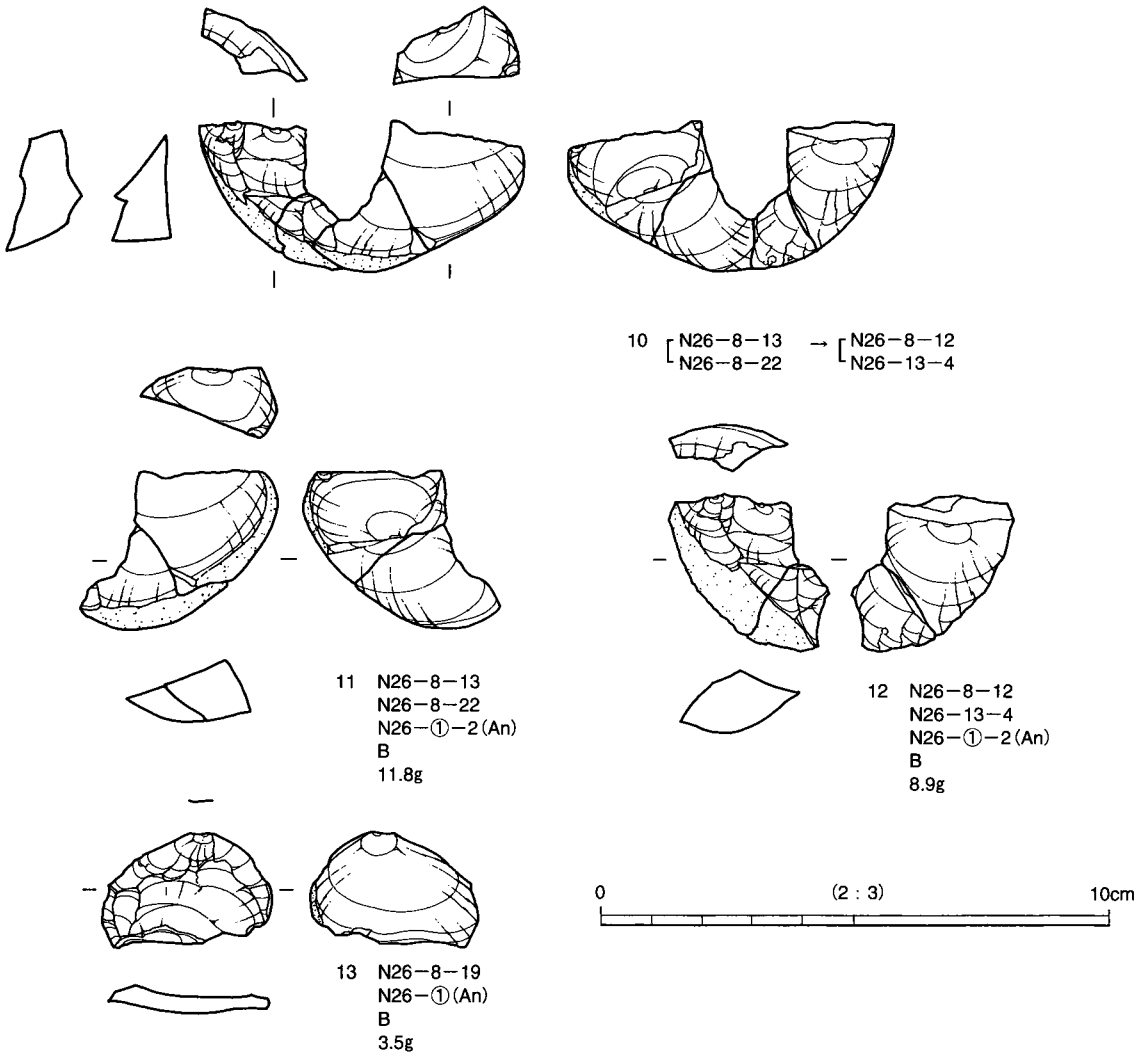
母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)																					1			1		1
安山岩(An)																					21		1	22		22
チャート(Ch)										1											2			3		3
瑪瑙・玉髄(Ag)																					1			1		1
合　計										1											25		1	27		27



第22図　N26-aブロック出土遺物実測図（1）



第23図　N26-aブロック出土遺物実測図（2）



第24図　N26-aブロック出土遺物実測図（３）

左側縁に微細な剥離痕がみられる。

剥片（第22図２・３）　２は，瑪瑙の横長剥片である。平坦な打面をもち，正面は，同一打面からの剥離面で構成されている。打面直下には，石刃の頭部調整のような，細かな剥離面が連続する。３は，チャートの不定型な縦長剥片である。打面の大部分は，はじけて線状になっている。正面の剥離面は，ほぼ同一方向の面で構成される。

４）接合資料とその関連資料（第23図４～９，第24図10～13）

・N26-①（第23図４～９，第24図10～13）　本母岩は，第23図４と第24図10の２群の接合資料11点と，非接合資料11点よりなる。

４は，剥片６点（接合して４個体）と石核１点の接合資料である。安山岩の小型の円礫を３分割～４分割したものを石核素材とし，曲面の自然面を打面として，中型不定型の剥片を生産している。打点は広範囲に移動しており，得られた剥片の正面には，多方向の剥離面が残されている。６～８は，いずれも打点で割れており，剥片生産が順調ではなかったことを物語っている。

10は，不定型な剥片４点（接合して２個体）の接合資料である。４の接合資料と異なり，分割した平坦面を打面にして剥片生産を行っている。

13は，非接合資料の剥片である。４の接合資料に含まれる剥片と共通した特徴をもつ。

第３文化層

第３文化層は，立川ローム層Ⅳ層（下部）からⅤ層にかけて包含されている石器群である。18か所のブロックが検出されているが，そのうち11か所が相互に隣接して分布しており，残りの７ブロックは散在する。定型的な石器としては，切出形のナイフ形石器と掻器が主体的で，その他の石器は少ない。また，一般的には本段階に特徴的な角錐状石器はみられない。なお，複数のブロックで掻器の刃部再生作業が頻繁に行われている。

１　L26-aブロック（第25～27図，第10・11表）

１）ブロックの概要

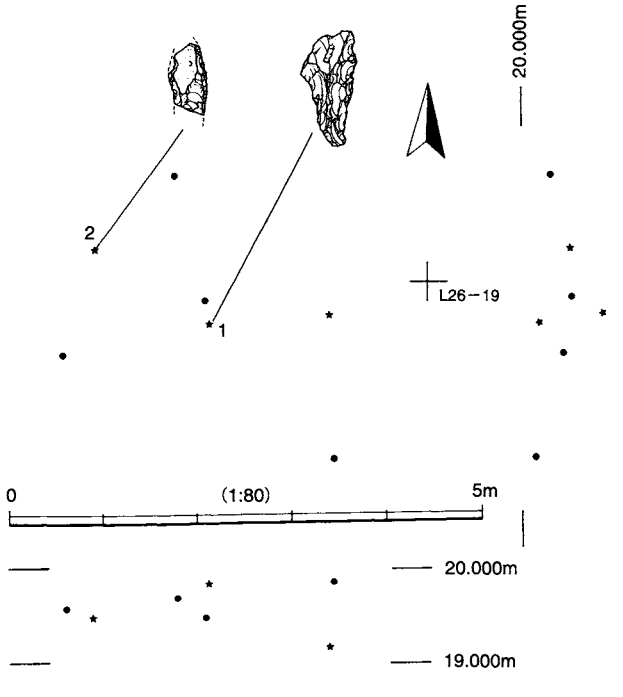
L26-aブロックは，調査範囲北西部のL26-13・18グリッドに分布する。ブロックの立地は，南北両側を谷によって開析された，幅10ｍ～20ｍの馬の背状の狭い台地上に位置する。ここには，本文化層に帰属する11か所のブロックが，東西40ｍ，南北15ｍの長楕円形の範囲にまとまって分布しており，接合資料や同一母岩の共有関係によって互いに結びついている。

ブロックの規模と形状は，直径3.5ｍ程の範囲に７点の石器群が散漫に分布する。出土層位はⅣ層を中心に，50㎝程の高低差をもって包含されている（第25・26図）。

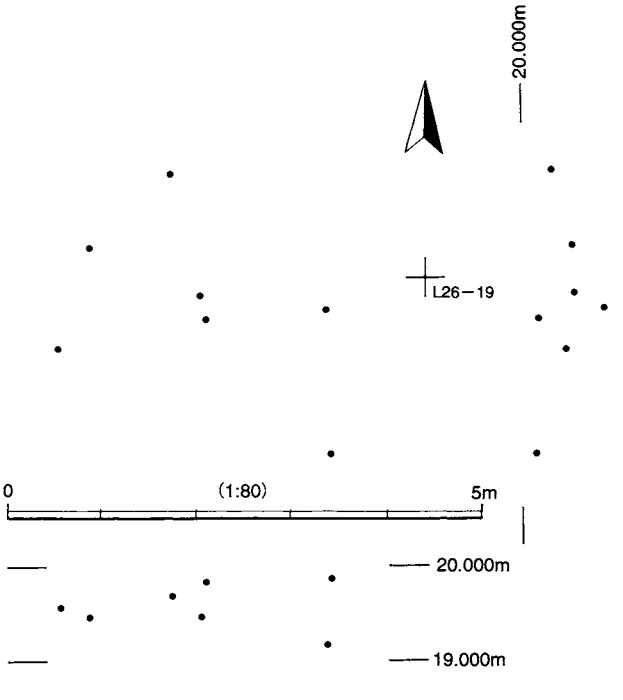
ブロックを構成する石器群は，ナイフ形石器３点，剥片４点の合計７点で，すべて黒曜石である。

２）母岩の特徴と内容

本ブロックから出土した石器群は，黒色不透明で夾雑物が多く含まれる，栃木県高原山産と考えられる

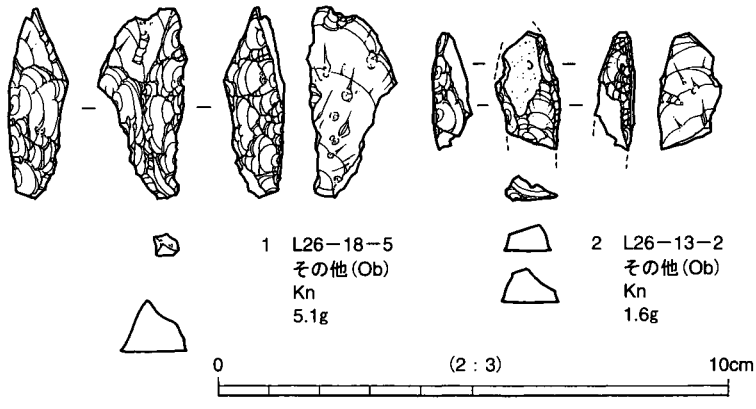


第25図　L26-aブロック出土遺物分布図（１）
－石器別分布図－



第26図　L26-aブロック出土遺物分布図（２）
－石材別分布図－

黒曜石である。接合資料はなく，図示した２点のナイフ形石器を除くと，ナイフ形石器の小破片と小型の剥片で構成されていること，色調，夾雑物の含まれ方が微妙に異なることなど特徴が乏しく，母岩分類はできなかった。類似石材が周辺ブロックにも多数分布することも，本ブロックで母岩分類ができなかった要因のひとつである。総重量は，9.9ｇである。



第27図　L26-aブロック出土遺物実測図

3）出土遺物（第27図）

ナイフ形石器（第27図1・2）　1は，黒曜石の不整形な縦長剥片を素材とする切出形ナイフ形石器である。素材剥片の打面を基部にあて，その両側を入念に調整している。素材の一次面は，先端部左側にわずかに残されている。２も，黒曜石の縦長剥片を用いたナイフ形石器である。先端，基部ともに欠損しており，形態の詳細は不明であるが，両側縁に細かな調整加工がみられることから，切出形ナイフ形石器の一部かも知れない。１と２は類似した石材を用いてはいるが，色調や不純物の含まれ方が微妙に異なっており，同一母岩ではないと考えられる。

なお，図示しなかったが，この他にナイフ形石器の基部の小破片が１点ある。形態は不明である。

第10表　L26-aブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
その他（Ob）	3																				4			7		7
合　計	3																				4			7		7

第11表　L26-aブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)	3																				4			7		7
合　計	3																				4			7		7

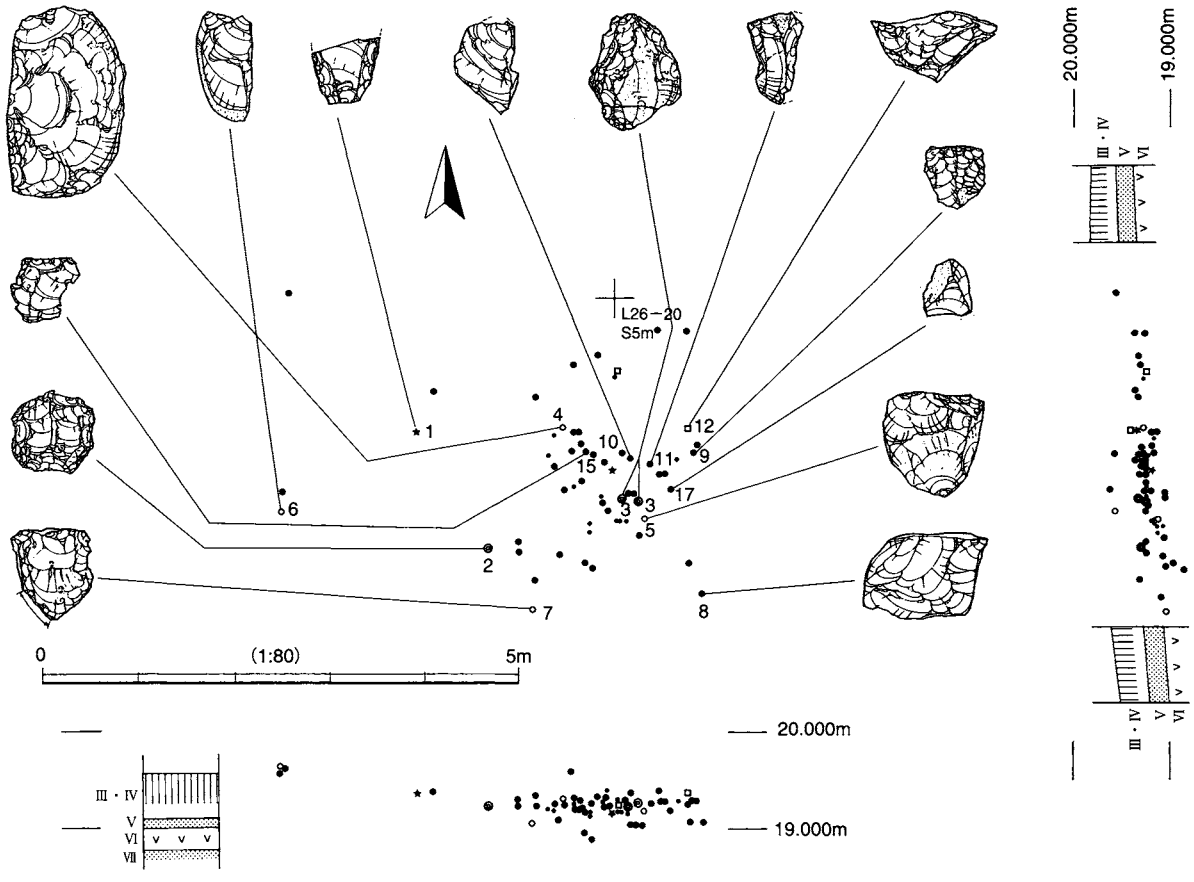
2　L26-bブロック（第28～31図，第12・13表）

1）ブロックの概要

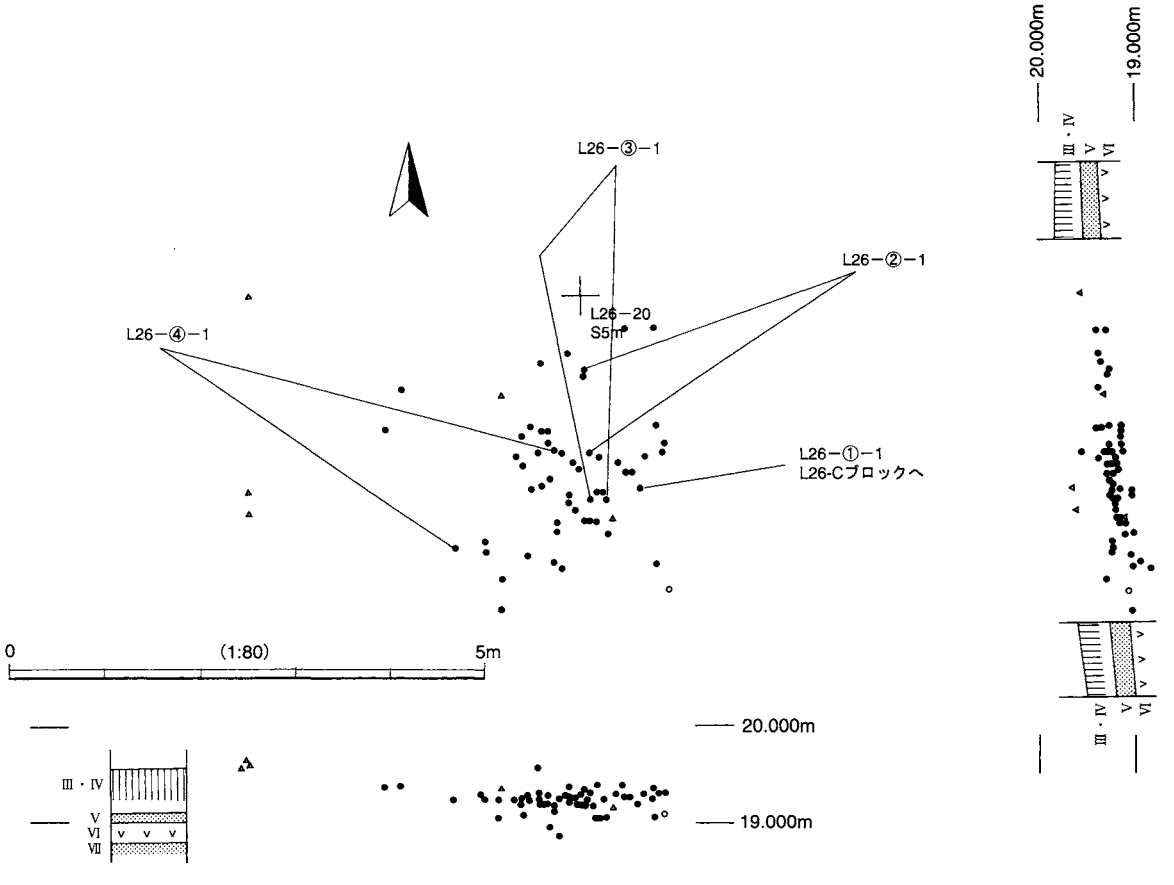
L26-bブロックは，調査範囲北西部のL26-25, M26-21グリッドに分布する。ブロックの立地は，西側に隣接するL26-aブロックと共通する。

ブロックの規模と形状は，長軸5.5ｍ，短軸４ｍ程の楕円形の範囲に61点の石器群が分布する。ブロックの東半部には直径２ｍ程の密集部があり，本ブロックの９割以上の石器群が分布する。西半部には数点の石器が散在する。出土層位はⅣ層を中心に，50㎝程の高低差をもって包含されているが，石器群の密集部分は比較的よくまとまっている（第28・29図）。

ブロックを構成する石器群は，ナイフ形石器２点，掻器３点，削器１点，楔形石器２点，使用痕ある剥片１点，剥片39点，砕片11点，石核２点の合計61点で，石器石材は，黒曜石55点，安山岩１点，チャート５点である。焼け礫はみられない。



第28図　L26-b ブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－



第29図　L26-b ブロック出土遺物分布図（2）－石材別分布図－

2）母岩の特徴と内容

・L26-①：灰色がかった黒色半透明で，φ１㎜以下の夾雑物をわずかに含む黒曜石である。自然面は平滑で，やや黄色みを帯びている。本ブロックでは剥片１点（1.8ｇ）の単独資料であるが，L26-cブロックには，本例と接合する剥片素材の石核１点がある。

・L26-②：黒色半透明で，黒色の縞が入り，φ１㎜～２㎜の夾雑物を含む黒曜石である。石器群の内訳は，使用痕ある剥片１点，剥片５点（接合して４個体）の合計６点で，総重量は23.2ｇである。同一母岩は，L26-eブロックに１点ある。

・L26-③：漆黒色不透明で，φ１㎜～２㎜の夾雑物を多量に含む黒曜石である。石器群の内訳は，掻器１点と，その刃部再生剥片２点で，すべて接合する。掻器１個体の単独資料として本ブロックに搬入され，刃部の再生がなされたと考えられる。総重量は12.2ｇである。

・L26-④：黒色半透明で，形状の整った円形の夾雑物を含む黒曜石である。石器群の内訳は，掻器１点，剥片４点の合計５点で，掻器１点と剥片１点は表裏で接合する。総重量は11.0ｇである。

・L26-⑦：黒灰色不透明で，大小の夾雑物を多量に含む黒曜石である。削器１点（42.2ｇ）の単独資料であるが，母岩分類のできなかった資料の中に，類似した石材が若干ある。

・L26-⑲：青灰色から赤褐色にまで変異するチャートである。節理が発達しており，あまり良質ではない。赤褐色は被熱のためかも知れない。楔形石器１点（19.9ｇ）の単独資料である。

・L26-⑳：緑がかった灰白色の安山岩である。剥片１点（13.7ｇ）の単独資料である。

・L26-㉑：黒色で，きめ細かいチャートである。小型の剥片１点（0.6ｇ）の単独資料である。

・L26-㉒：赤みを帯びた乳白色のチャートである。剥片１点（0.9ｇ）の単独資料である。

・L26-㉓：青灰色で，きめ細かいチャートである。剥片の欠損品１点（0.6ｇ）の単独資料である。

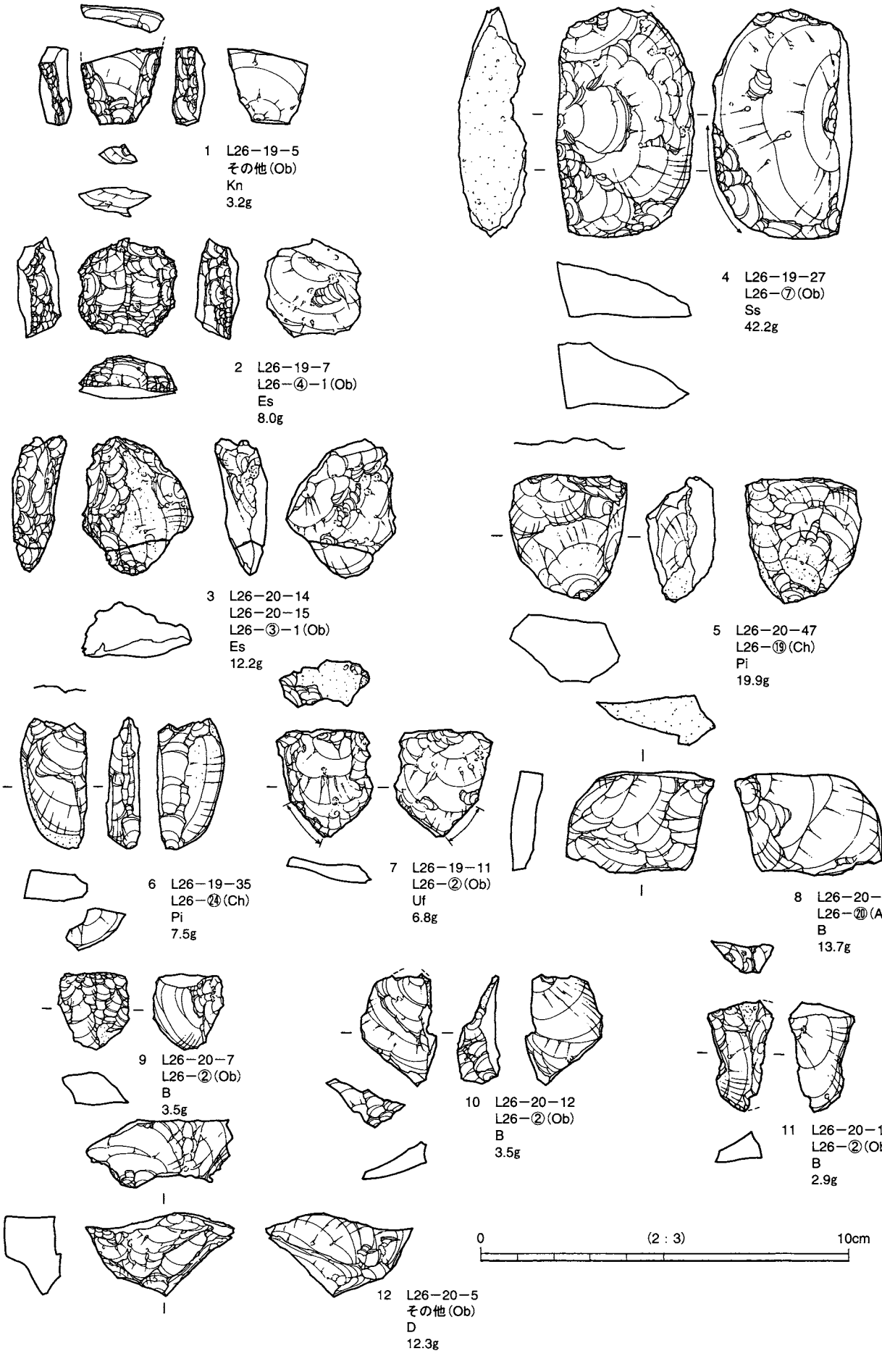
・L26-㉔：自然面が橙褐色，内部が青灰色で，きめ細かいチャートである。楔形石器１点（7.5ｇ）の単独資料である。

なお，母岩分類のできなかった資料に，黒曜石のナイフ形石器２点，剥片25点，砕片11点，石核１点（総重量33.3ｇ）がある。

3）出土遺物（第30・31図）

ナイフ形石器（第30図１）　１は，黒曜石の縦長剥片を素材とする，基部調整のナイフ形石器である。素材剥片の打面を基部に残して，基部の両側に細かな調整加工を施している。上半部は正面側から大きく欠損している。

掻器（第30図２・３）　２は，黒曜石の掻器である。厚手で不定型な剥片を素材とする。素材の打面を大きく残し，それ以外の部位に調整加工を行っている。素材の長軸と石器の長軸は，ほぼ一致する。刃部中央には，緩やかな刃部の曲線を断ち切るような，抉れた大きな剥離痕がみられる。これは，刃部再生を行った形跡と考えられる。本遺跡で数例観察された掻器の刃部再生は，まず第一に刃部中央を大きく折り取り，次にその両脇を細かく調整して刃部を再生するものである。したがって，再生時の調整が少ない場合，刃部中央に折り取りの面が残されることになる。もっとも，このような刃部の状態で，掻器としての機能を充分に果たし得たかは疑問が残る。３も，黒曜石の掻器である。２と同様，厚手で不定型な剥片を素材とする。素材の長軸と石器の長軸は大きくずれている。ところで，実測図下端にみられる最終的な刃部は，調整加工が少なく，掻器特有の急角度の刃部とは言い難い形状である。これは，刃部が製作途上で



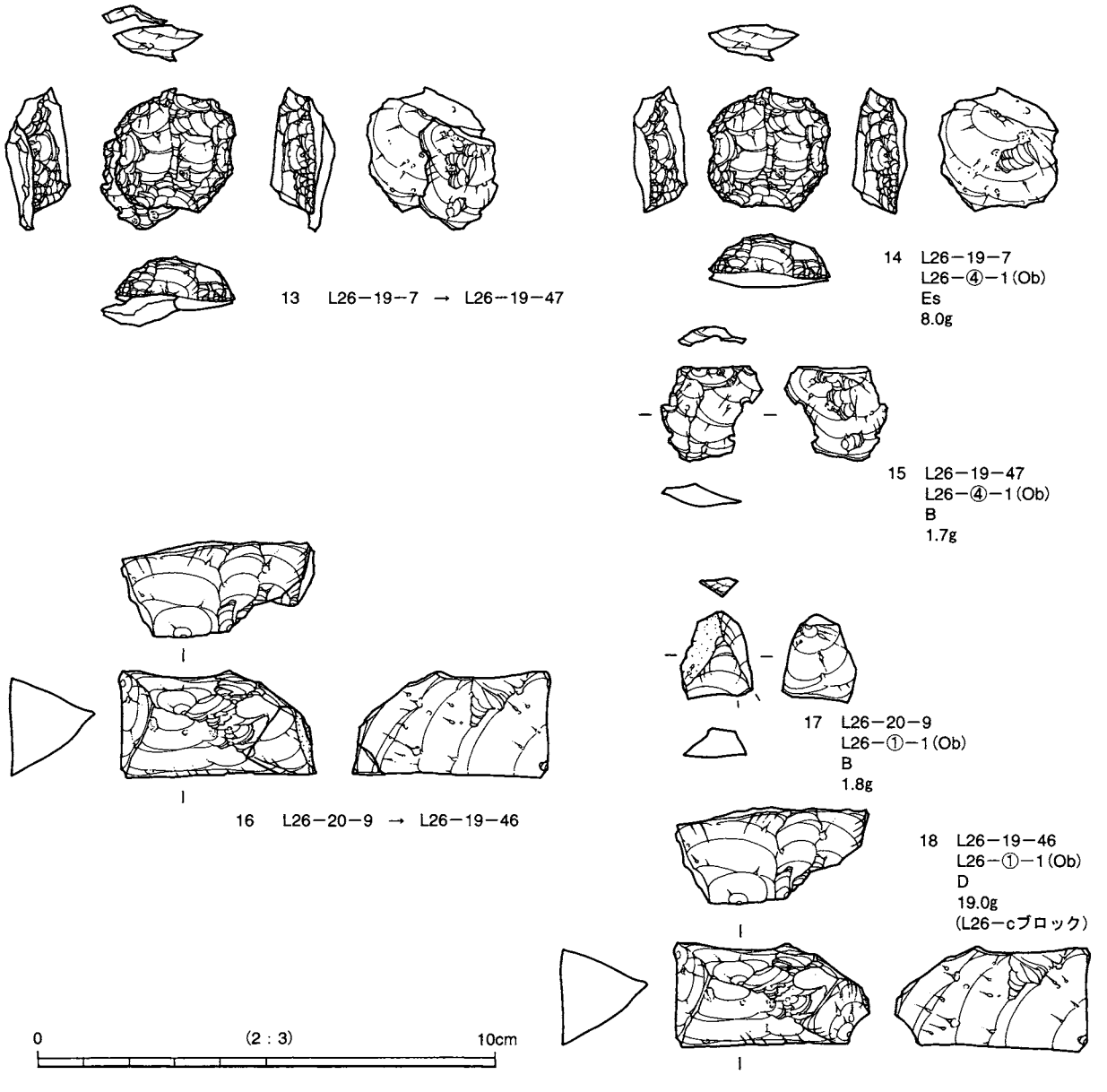
第30図　L26-b ブロック出土遺物実測図（1）

欠損し，廃棄されたためと考えられる。その一方で，元々の刃部は素材剥片の末端部（実測図左側縁）にあり，繰り返し刃部の再生を行った結果，これ以上再生が不可能なまでに寸詰まりになり，刃部の位置を大きく変更した可能性もある。

削器（第30図4）　4は，黒曜石の削器である。自然面を打面とする大型の横長剥片を素材に用い，裏面の一部に刃部を作り出している。正面左側をみると，打面周辺を薄く仕上げるためか，打面から数度の打撃が加えられている。また，中央の剥離面は末端まで抜け，素材の主要剥離面（裏面）をも切っている。

楔形石器（第30図5・6）　5・6とも，チャートの楔形石器である。5は，裏面に素材の主要剥離面を大きく残し，右側面下半部には自然面がみられる。厚手で，素材はあまり小型の礫ではないようである。被熱により赤化している。6は，薄手で左側縁に自然面を大きく残す。上端が細かく潰れており，正面右側面に楔形石器特有の縦長の割れ面がみられる。素材は小型の円礫と考えられる。

使用痕ある剥片（第30図7）　7は，黒曜石の不定型な縦長剥片を用いた使用痕ある剥片である。鋭利



第31図　L26-bブロック出土遺物実測図（2）

な左側縁下部に微細な剥離痕がある。

剥片（第30図8～11） 8は，安山岩の横長剥片，9～11は，黒曜石の不定型な剥片である。9は，正面が縞状の細長い剥離面によって被われており，掻器の刃部再生剥片の可能性がある。

石核（第30図12） 12は，黒曜石の厚手の剥片を素材とする石核である。裏面には，素材の主要剥離面が残されている。厚手の剥片の末端部を切断して打面を作り，中・小型の不定型な剥片を生産している。

4）接合資料とその関連資料（第30図3・第31図13～18）

・L26-①（第31図16～18） 16は，小型の剥片と石核の接合資料である。接合資料からみた剥片剥離作業は，厚手の縦長剥片を素材とし，素材の長軸と直交する方向で交互剥離を行い，17を含む小型の剥片を生産している。石核は，横断面が三角形の稜付き石刃に似る。

・L26-③（第30図3） 3は，掻器に小型の刃部再生剥片1点が接合する資料である。詳細は上述したとおりである。

・L26-④（第31図13～15） 13は，掻器1点と剥片1点が表裏で接合する資料である。同一打面を用い，連続して剥離した幅広不定型の剥片の1点を掻器に調整加工したことがわかる。ただし，本母岩は，この2点の接合資料を除くと，掻器の刃部再生剥片を含む小型の剥片で構成されており，素材剥片の生産は別遺跡で行われた可能性が考えられる。

第12表　L26-bブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
L26-①(Ob)																					1			1		1
L26-②(Ob)										1											5			6		6
L26-③(Ob)					1																2			3		3
L26-④(Ob)					1																4			5		5
L26-⑦(Ob)						1																		1		1
L26-⑲(Ch)								1																1		1
L26-⑳(An)																					1			1		1
L26-㉑(Ch)																					1			1		1
L26-㉒(Ch)																					1			1		1
L26-㉓(Ch)																					1			1		1
L26-㉔(Ch)								1																1		1
その他 (Ob)	2																				25	11	1	39		39
合　計	2				2	1		2		1											41	11	1	61		61

第13表　L26-bブロック石材別石器組成表

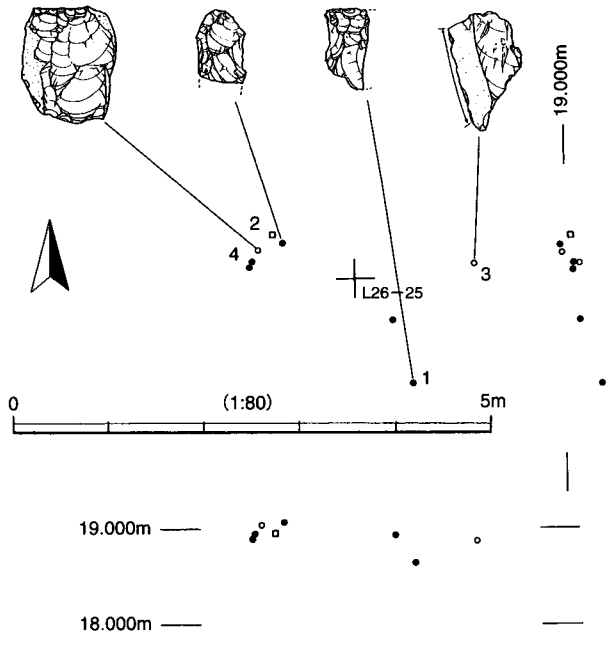
母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)	2				2	1				1											37	11	1	55		55
安山岩(An)																					1			1		1
チャート(Ch)								2													3			5		5
合　計	2				2	1		2		1											41	11	1	61		61

3　L26-cブロック（第32～34図，第14・15表）

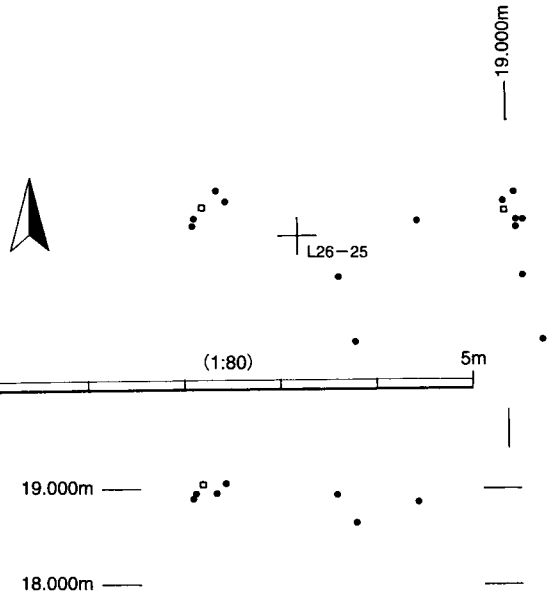
1）ブロックの概要

L26-cブロックは，調査範囲北西部のL26-19・20・25グリッドに分布する。ブロックの立地は，隣接するL26・M26グリッドに分布する他の10ブロックと共通する。

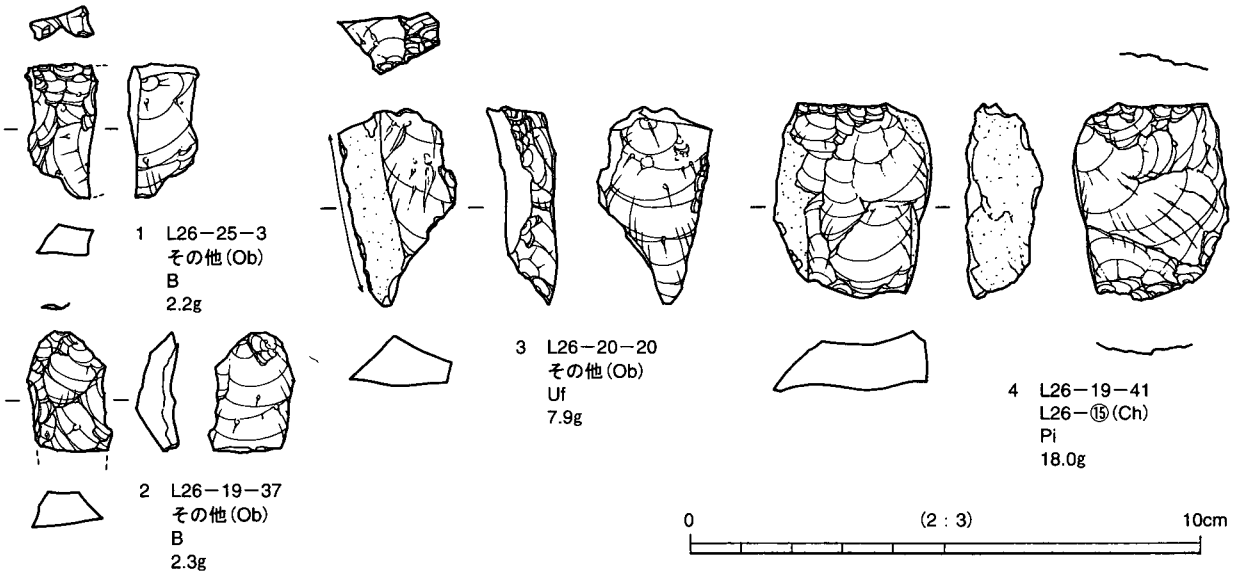
ブロックの規模と形状は，直径3m程の範囲に8点の石器群が散漫に分布する。出土層位はⅣ層を中心に，30cm程の高低差をもって包含されている（第32・33図）。



第32図　L26-cブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－



第33図　L26-cブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－



第34図　L26-cブロック出土遺物実測図

ブロックを構成する石器群は，楔形石器1点，使用痕ある剥片1点，剥片5点，石核1点の合計8点で，石材は，黒曜石7点，チャート1点である。

2）母岩の特徴と内容

・L26-①：母岩の特徴と内容はL26-bブロックで記したとおりである。本ブロックでは石核1点（19.0g）の単独資料である。L26-bブロックの剥片1点と接合する。

・L26-⑮：自然面は灰褐色，内部は青灰色のチャートである。節理が発達しており，剥離がスムーズに通っていない剥離面が多い。楔形石器1点（18.0g）の単独資料である。

なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石の使用痕ある剥片1点，剥片5点（総重量16.4g）がある。

総じて黒色不透明で，灰白色の夾雑物を多く含む，栃木県高原山産と考えられるものである。

3）出土遺物（第34図）

楔形石器（第34図4）　4は，チャートの不定型な剥片を素材とする楔形石器である。正面の左右に自然面がみられることから，原石は小型の円礫と考えられる。裏面の中央部には，大きく主要剥離面が残る。上下両端は線状に潰れ，表裏に細かな剥離痕がある。

使用痕ある剥片（第34図3）　3は，黒曜石の不定型な縦長剥片を用いた，使用痕ある剥片である。正面左側には平滑な自然面があり，右側は裏面と同一方向の剥離面である。左側縁は鋭利な縁辺で，刃こぼれがみられる。打面は複剥離面で，右側面には細かな剥離面が連続するが，石核の側面調整痕，あるいは旧作業面と考えられる。

剥片（第34図1・2）　1は，黒曜石の不定型な縦長剥片である。複剥離打面で，正面は裏面とほぼ同一方向の剥離面で構成されている。打点で2つに割れている。2も黒曜石の不定型な縦長剥片である。下半部は欠損する。

第14表　L26-cブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
L26-①(Ob)																							1	1		1
L26-⑮(Ch)								1																1		1
その他（Ob）										1											5			6		6
合　計								1		1											5		1	8		8

第15表　L26-cブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)										1											5		1	7		7
チャート(Ch)								1																1		1
合　計								1		1											5		1	8		8

4　L26-dブロック（第35～37図，第16～17表）

1）ブロックの概要

L26-dブロックは，調査範囲北西部のL26-20グリッドに分布する。ブロックの立地は隣接するL26・M26グリッドに分布する他の10ブロックと共通する。

第16表　L26-dブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
L26-⑰(An)									1															1		1
その他（Ob）					1				1	1											4	1		8		8
その他（An）																					1			1		1
L26-⑥(An)																									1	1
L26-⑫(Rh)																									1	1
L26-⑭(Sa)																									1	1
合　計					1				2	1											5	1		10	3	13

第17表　L26-dブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)					1				1	1											4	1		8		8
安山岩(An)									1												1			2	1	3
流紋岩(Rh)																									1	1
砂岩(Sa)																									1	1
合　計					1				2	1											5	1		10	3	13

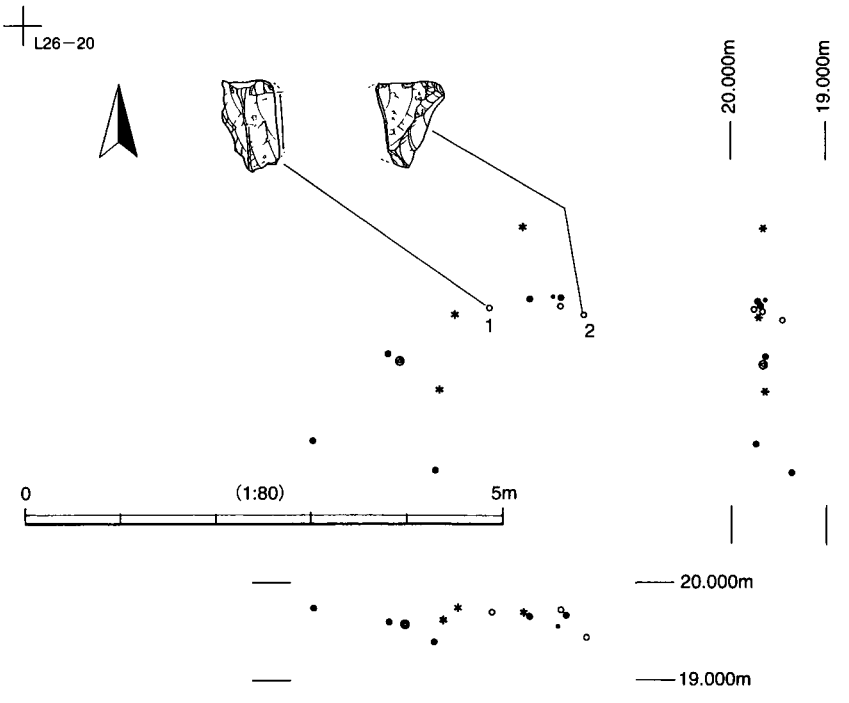
ブロックの規模と形状は，長軸４ｍ，短軸２ｍの楕円形の範囲に13点の石器群が散漫に分布する。出土層位は，Ⅳ層を中心にして，30㎝程の高低差をもって包含されている（第35・36図）。

ブロックを構成する石器群は，掻器１点，加工痕ある剥片２点，使用痕ある剥片１点，剥片５点，砕片１点で，これに礫３点が加わる。石器石材は，黒曜石９点，安山岩１点である。礫は，安山岩，流紋岩，砂岩が各１点ずつ出土している。この内，安山岩礫（L26-⑥）は，小破片がL26-eブロックに分布しており，接合する。礫の重量は，L26-⑥（安山岩）が211.6ｇ，L26-⑫（流紋岩）が36.7ｇ，L26-⑭（砂岩）が8.4ｇである。

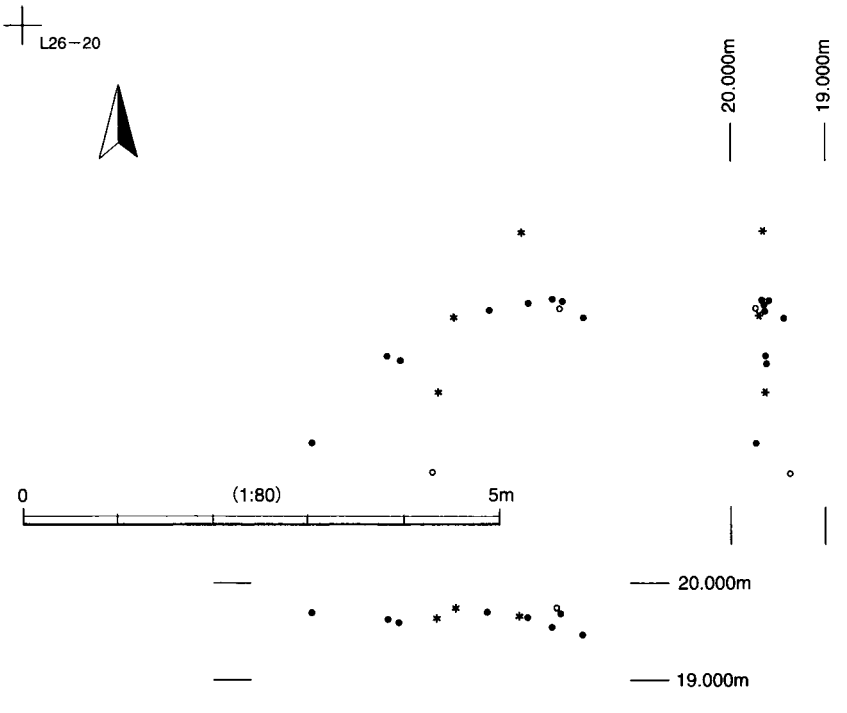
２）母岩の特徴と内容

・L26-⑰：緑がかった黄褐色の，軟質の安山岩である。加工痕ある剥片１点（20.9ｇ）の単独資料である。

母岩分類できなかった資料は，黒曜石の掻器１点，加工痕ある剥片１点，使用痕ある剥片１点，剥片４点，砕片１点（総重量16.8ｇ），安山岩の剥片１点（2.2ｇ）がある。黒曜石は，黒色不透明で，夾雑物を多く含む高原山産と考えられるものである。掻器は，小破片のため図示し得なかった。



第35図　L26-dブロック出土遺物分布図（１）－石器別分布図－

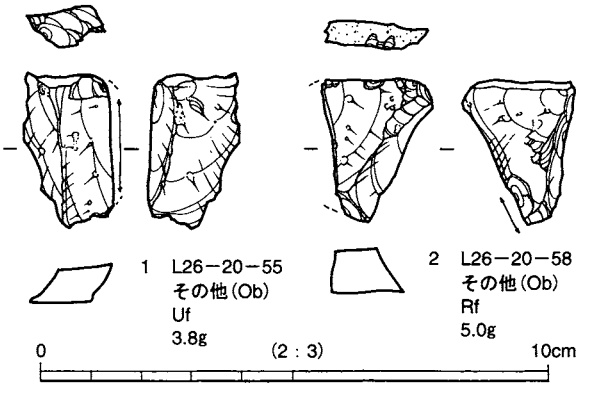


第36図　L26-dブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－

3）出土遺物（第37図）

加工痕ある剥片（第37図2）　2は，黒曜石の不定型な縦長剥片を用いた，加工痕ある剥片である。裏面下端に加工痕がみられる。素材剥片は，剥離時に打点で2つに割れている。

使用痕ある剥片（第37図1）　1も2と同様な剥片を用いた，使用痕ある剥片である。平滑な自然面を打面とする。正面は，裏面と同一方向の剥離面で構成されている。本剥片剥離時に打点で割れているが，割れによって形成された鋭利な縁辺に，微細な剥離痕がある。

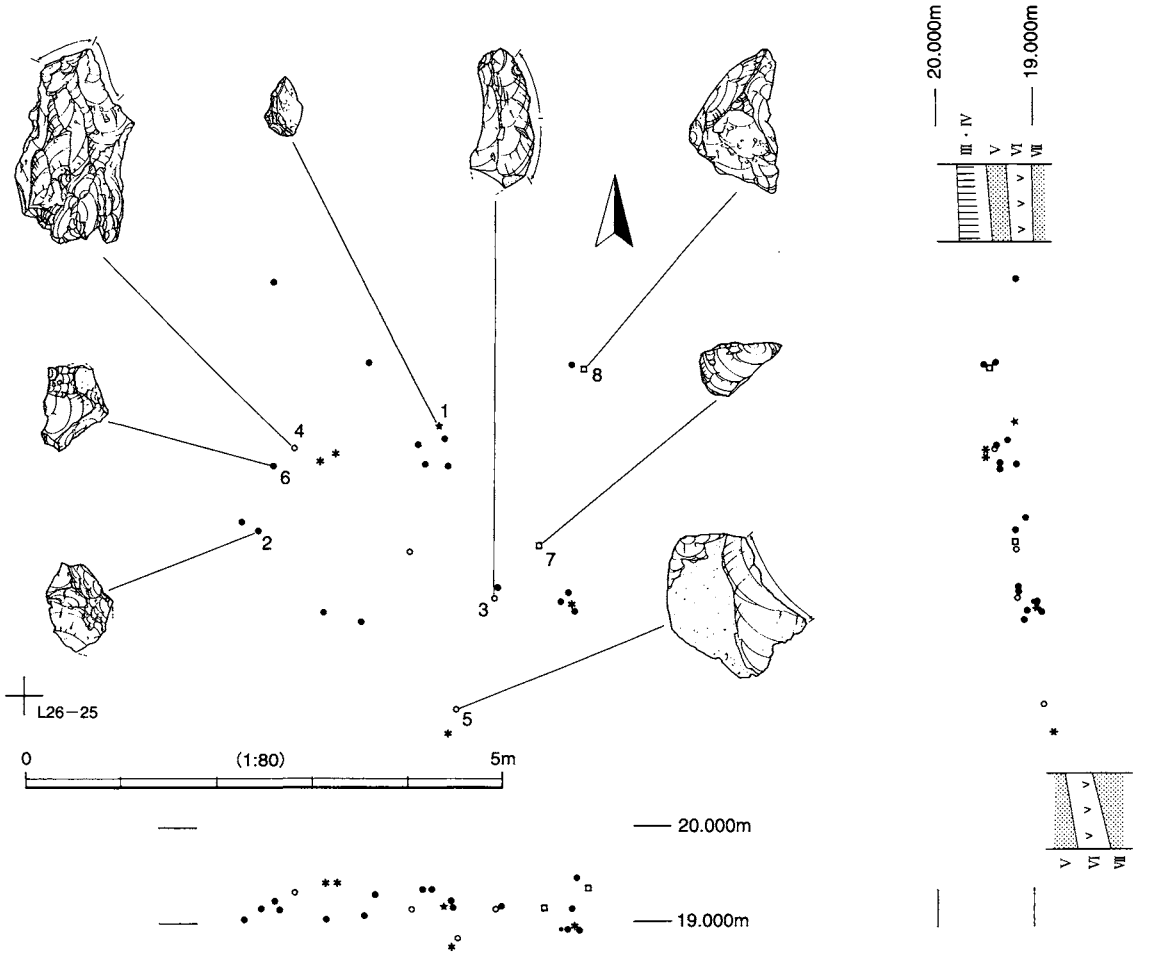


第37図　L26-dブロック出土遺物実測図

5　L26-eブロック（第38～40図，第18・19表）

1）ブロックの概要

L26-eブロックは，調査範囲北西部のL26-20・25グリッドに分布する。ブロックの立地は，隣接するL26・M26グリッドに分布する他の10ブロックと共通する。



第38図　L26-eブロック出土遺物分布図（1）－石器別分布図－

ブロックの規模と形状は，直径５ｍ程の範囲に28点の石器群が散漫に分布する。出土層位はⅣ層を中心に，50㎝程の高低差をもって包含されている（第38・39図）。

ブロックを構成する石器群は，ナイフ形石器１点，削器１点，加工痕ある剥片１点，使用痕ある剥片２点，剥片16点，砕片１点，石核２点で，礫４点が加わる。石器石材は，黒曜石23点，安山岩１点で，礫は，安山岩１点（L26-⑥：34.4ｇ），流紋岩３点（L26-⑧：216.0ｇ，L26-⑩：170.5ｇ，L26-⑬：22.6ｇ）である。

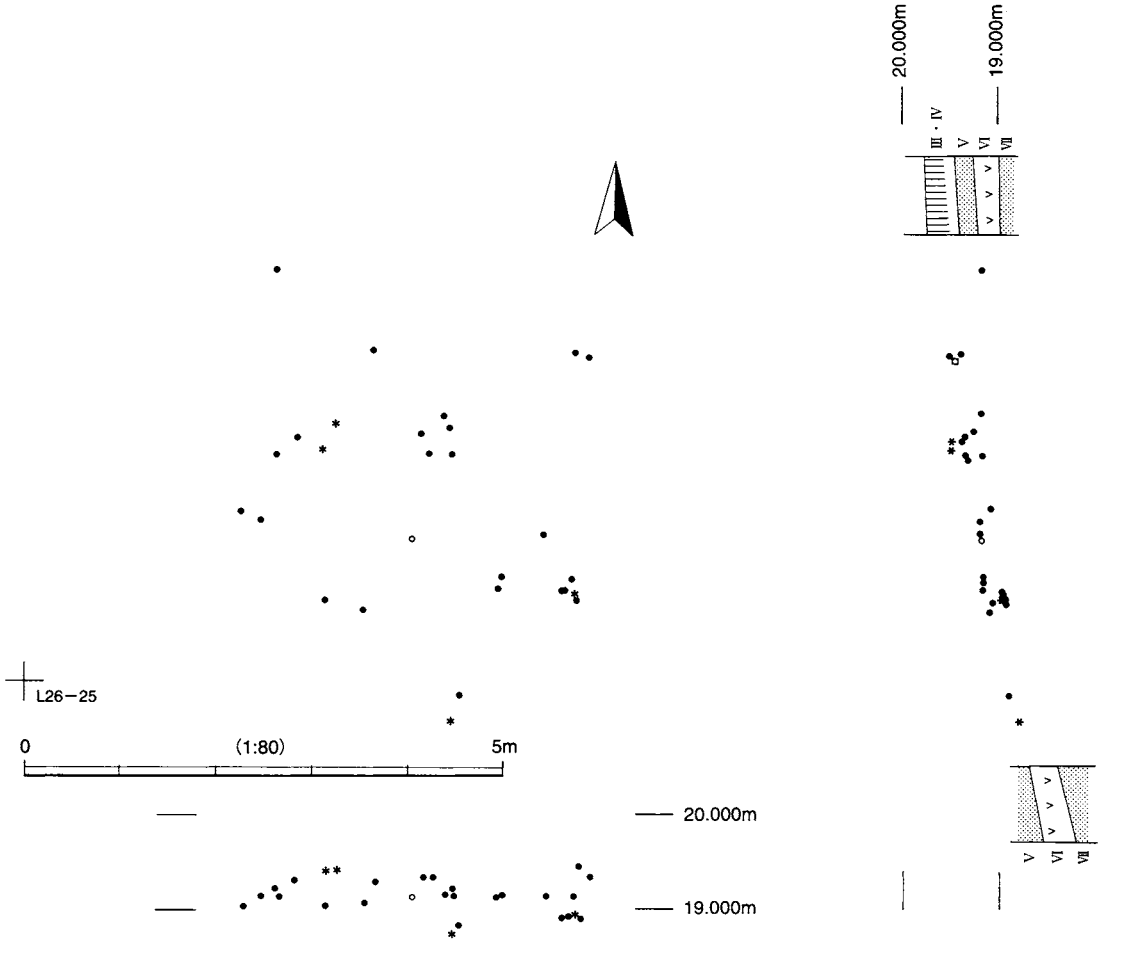
2）母岩の特徴と内容

・L26-②：母岩の特徴は，L26-bブロックで記したとおりである。本ブロックでは，中型剥片の折れたもの１点（3.6ｇ）が単独出土している。本母岩に帰属する他の資料は，L26-bブロックに分布する。

・M26-①：暗灰色の安山岩である。表裏は風化により荒れているが，軟質ではない。本ブロックでは，使用痕ある剥片１点（16.5ｇ）の単独資料である。同一母岩は，M26-cブロックに１点，M26-fブロックに４点が分布する。

・M26-⑥：黄色みを帯びた黒色不透明の黒曜石である。夾雑物を多く含み，また節理がみられる。石器群の内訳は，削器１点，剥片１点，石核１点で，総重量は56.8ｇである。削器と石核は大型の剥片を素材としたもので，搬入品の可能性がある。石核が残されているが，まとまった剥片剥離作業を行った形跡はない。なお，同一母岩が，M26-cブロックに２点，M26-fブロックに２点分布する。

・M26-⑫：黄色みを帯びた黒色不透明の黒曜石である。夾雑物を多く含み，また灰色の帯がみられる。自



第39図　L26-eブロック出土遺物分布図（２）－石材別分布図－

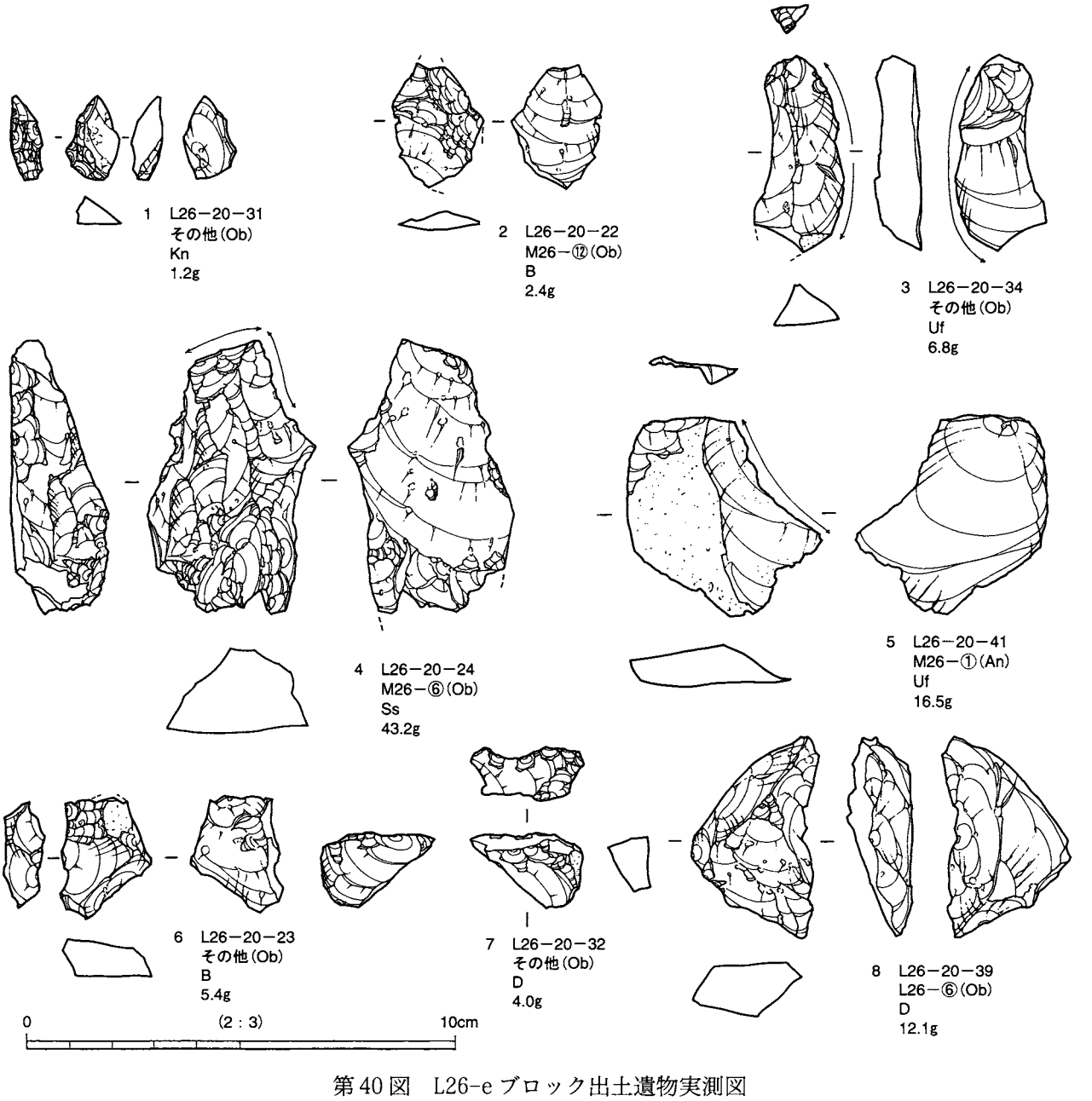
然面は平滑で光沢がある。剥片1点（2.4ｇ）の単独資料である。同一母岩が，M26-bブロックに1点，M26-cブロックに8点，M26-fブロックに8点，ブロック外に2点分布する。ただし，ブロック間の接合資料はない。

なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石のナイフ形石器1点，加工痕ある剥片1点，使用痕ある剥片1点，剥片13点，砕片1点，石核1点がある（総重量25.5ｇ）。概ね，黒色不透明で夾雑物を多く含んでおり，栃木県高原山産と考えられるものである。L26-②，M26-⑥，M26-⑫母岩や隣接する他のブロックの母岩と類似するものもあるが，明瞭な特徴に欠けることから，同一母岩にはしなかった。

3）出土遺物（第40図）

ナイフ形石器（第40図1）　1は，黒曜石の横長剥片を素材とする切出形のナイフ形石器である。平坦な打面を残し，末端側の1側縁に表裏から調整加工を施して，切出形に仕上げている。

削器（第40図4）　4は，黒曜石の削器である。大型で不定型の縦長剥片を用い，打面を切断して，左



第40図　L26-eブロック出土遺物実測図

側縁の上部に粗い調整を行っている。上端と右側縁の一部に刃こぼれがみられる。下端は欠損する。

使用痕ある剥片（第40図3・5） 3は，黒曜石の縦長剥片を用いた，使用痕ある剥片である。左側縁に刃こぼれがみられる。5は，安山岩の不定型な剥片を用いた，使用痕ある剥片である。打面に続く右側縁上半部に刃こぼれがみられる。

剥片（第40図2・6） 2・6は，黒曜石の不定型な剥片である。いずれの資料も正面の剥離方向は一定しない。

石核（第40図7・8） 7・8は，黒曜石の剥片を素材とする石核である。7は，平坦な打面を用い，小型不定型の縦長剥片を生産している。8は，中型の横長剥片を剥離した痕跡がある。

第18表　L26-eブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
L26-②(Ob)																					1			1		1
M26-①(An)										1														1		1
M26-⑥(Ob)						1															1		1	3		3
M26-⑫(Ob)																					1			1		1
その他（Ob）	1								1	1											13	1	1	18		18
L26-⑥(An)																									1	1
L26-⑧(Rh)																									1	1
L26-⑩(Rh)																									1	1
L26-⑬(Rh)																									1	1
合　計	1					1			1	2											16	1	2	24	4	28

第19表　L26-eブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)	1					1			1	1											16	1	2	23		23
安山岩(An)										1														1	1	2
流紋岩(Rh)																									3	3
合　計	1					1			1	2											16	1	2	24	4	28

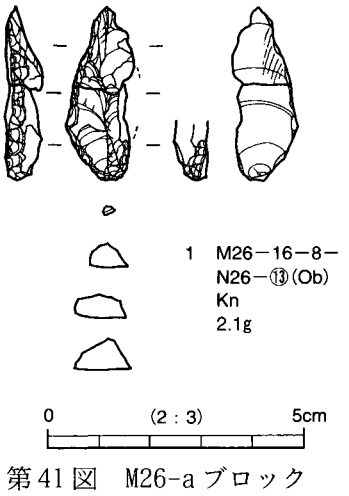
6　M26-aブロック（第41～43図，第20・21表）

1）ブロックの概要

M26-aブロックは，調査範囲北西部のM26-16グリッドに分布する。ブロックの立地は，隣接するL26・M26グリッドに分布する他の10ブロックと共通する。

ブロックの規模と形状は，直径2.5m程の円形の範囲に3点の石器群が分布する。出土層位は，Ⅳ層を中心として，ほぼ水平に包含されている（第42・43図）。

ブロックを構成する石器群は，ナイフ形石器1点，剥片2点で，石材は，3点とも黒曜石である。

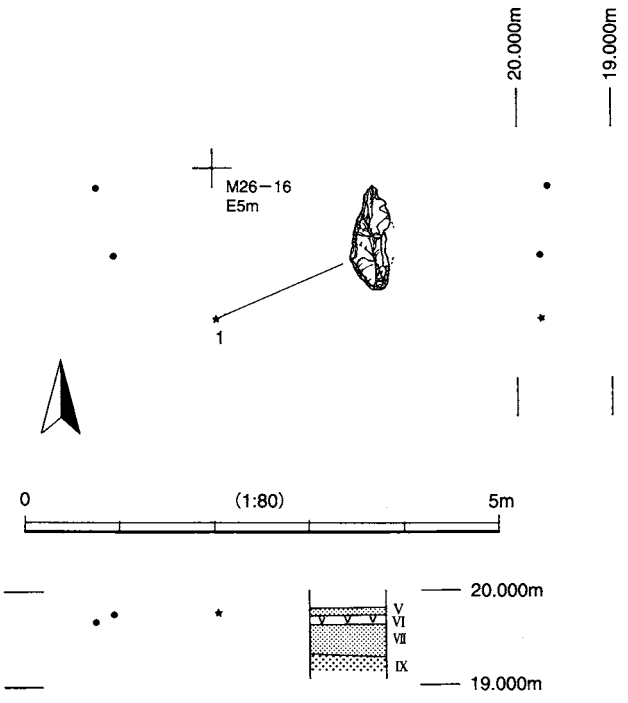


第41図　M26-aブロック出土遺物実測図

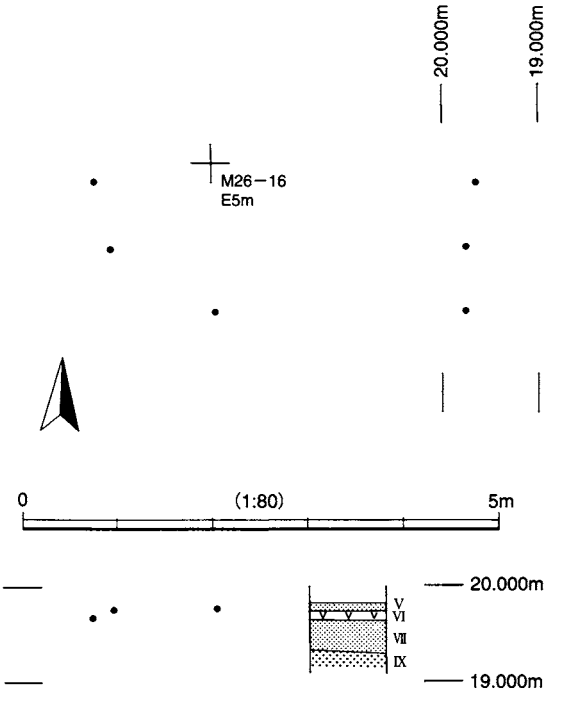
2）母岩の特徴と内容

・M26-⑬：黒色半透明で，墨を流したような黒色の縞が入る黒曜石である。肉眼的に信州産とみることができる。ナイフ形石器1点（2.1g）の単独資料である。

なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石の剥片2点（総重量2.4g）がある。いずれも，黒色不透明で夾雑物を多く含むものである。



第42図　M26-aブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－



第43図　M26-aブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－

3）出土遺物（第41図）

ナイフ形石器（第41図1）　1は，黒曜石の石刃を素材とした，2側縁調整のナイフ形石器である。素材の打面を基部にわずかに残して，左側1側縁と右側の下半分に，裏面から調整加工をしている。石器の長軸と素材の長軸は，ほぼ一致する。

第20表　M26-aブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M26-⑬(Ob)	1																							1		1
その他（Ob）																					2			2		2
合　計	1																				2			3		3

第21表　M26-aブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)	1																				2			3		3
合　計	1																				2			3		3

7　M26-bブロック（第44～46図，第22・23表）

1）ブロックの概要

M26-bブロックは，調査範囲北西部のM26-16グリッドに分布する。ブロックの立地は，隣接するL26・M26グリッドに分布する他の10ブロックと共通する。

ブロックの規模と形状は，長軸3m，短軸2m程の楕円形の範囲に8点の石器群が分布する。出土層位はIV層を中心に，ほぼ水平に包含されている（第44・45図）。

ブロックを構成する石器群は，剥片5点，石核3点の合計8点である。石器石材は，黒曜石2点，安山

岩５点，珪質頁岩１点である。

２）母岩の特徴と内容

・M26-⑫：母岩の特徴は，L26-eブロックで記したとおり，黄色みを帯びた黒色不透明の黒曜石である。φ１㎜の夾雑物を多く含む。同一母岩は，L26-eブロックに１点分布する他は，M26-fブロックにまとまっており，本ブロックでは，掻器の刃部再生に伴う剥片１点（0.6ｇ）の単独資料である。

・M26-⑭：黒色不透明な黒曜石である。やや灰色がかり，φ１㎜の夾雑物を多く含む。剥片１点（6.6ｇ）の単独資料である。

・M26-⑯：自然面は橙褐色，内部は緑がかった灰色で，黒色の縞が薄墨を流したように入る珪質頁岩である。県南嶺岡産と考えられる。本ブロックでは，大型の剥片１点（28.7ｇ）の単独資料であるが，同一母岩がM26-fブロックに１点ある。

・M26-⑳：黄褐色に風化した安山岩である。φ１㎜の夾雑物を多く含み，黒色の縞が多数入る。石核１点（92.5ｇ）の単独資料である。

なお，母岩に分類できなかった資料として，安山岩の剥片２点，石核２点がある（総重量89.9ｇ）。総じて褐色に風化し，細かな夾雑物が多数みられる安山岩で，この内，剥片１点と石核２点は，同一母岩の可能性もある。

３）出土遺物（第46図）

剥片（第46図１～５）　１は，珪質頁岩の不定型な剥片である。正面および左側面の剥離方向は一定せず，多方向からの剥離面で被われている。２は，黒曜石の不定型な縦長剥片である。正面の剥離方向は，裏面と同じで一定している。３・４は，安山岩の不定型の縦長剥片である。４の正面は，裏面とは異なる方向の剥離面と自然面で被われている。５は，黒曜石の小型の剥片である。端部に細かな剥離痕があり，掻器の刃部再生に伴う剥片と考えられる。

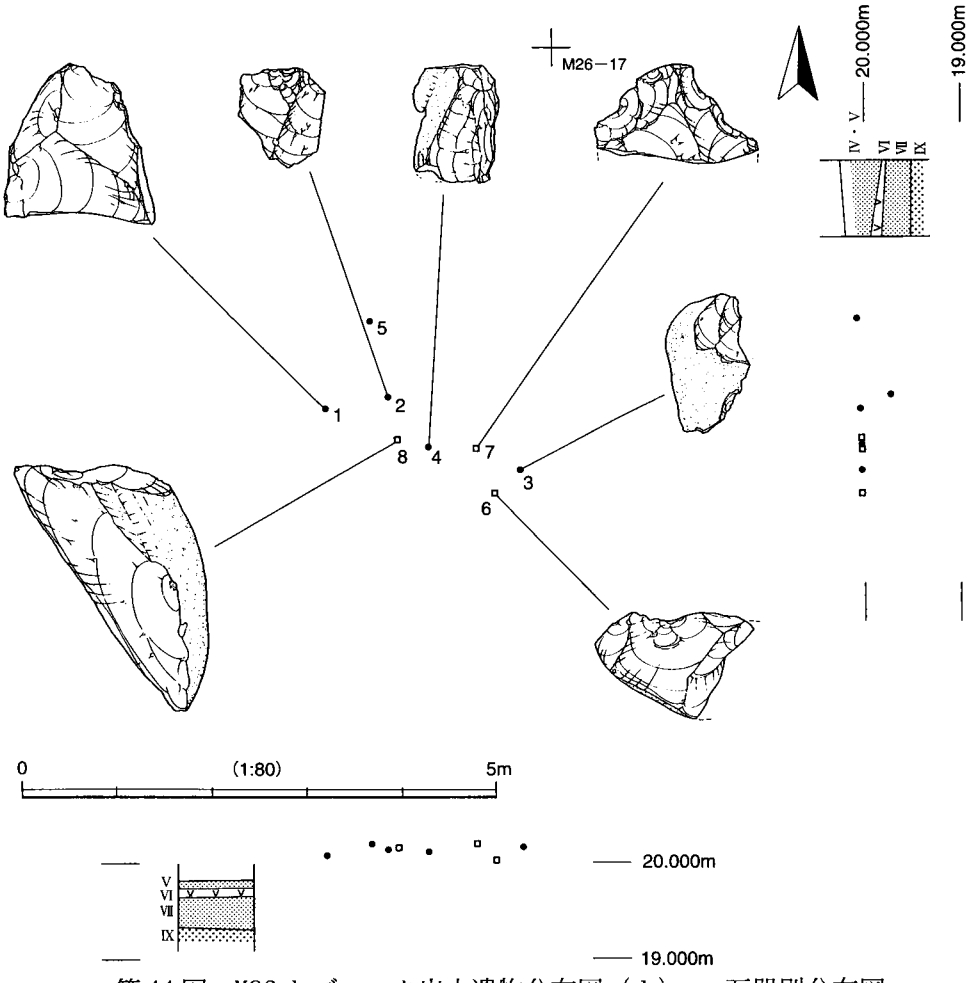
石核（第46図６～８）　６～８は，安山岩の石核である。６は，安山岩の円礫を分割したものを素材とし，分割面を打面にあて，幅広の不定型な剥片を剥離している。７は，厚手の剥片を素材として，主要剥離面を打面に用い，小型の剥片を生産している。８は，安山岩の円礫を半分に割ったものを素材として，上端から横長剥片を剥離している。

第22表　M26-bブロック母岩別石器組成表

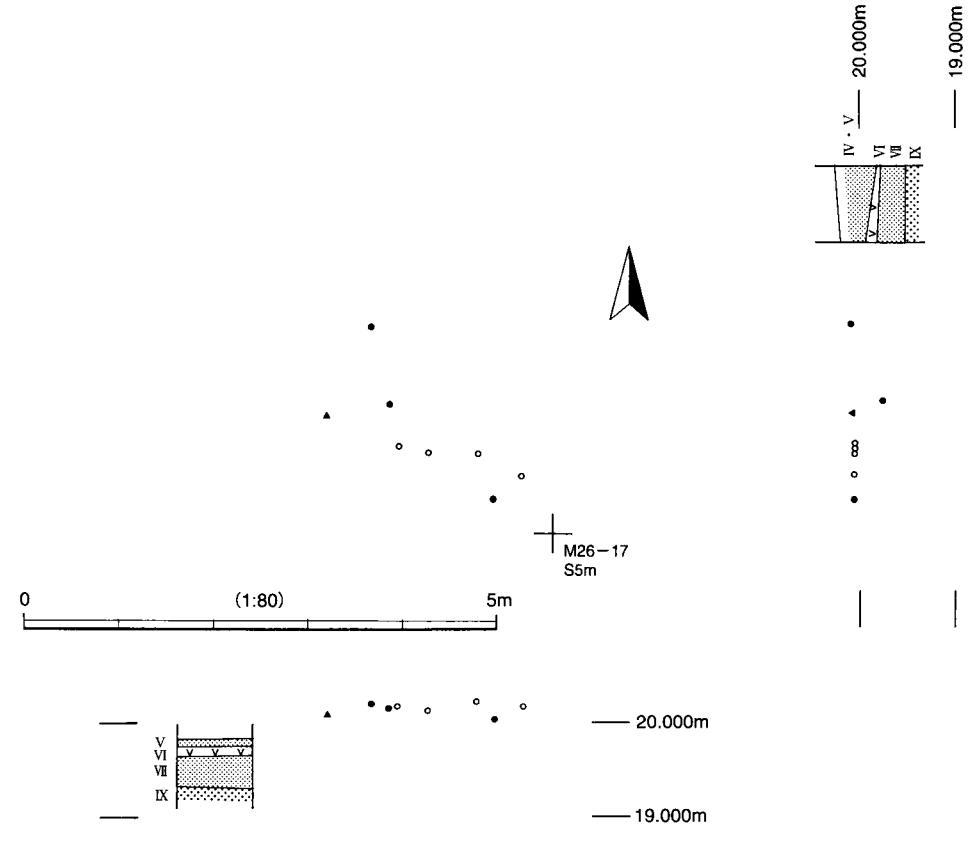
母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M26-⑫(Ob)																					1			1		1
M26-⑭(Ob)																					1			1		1
M26-⑯(Csh)																					1			1		1
M26-⑳(An)																							1	1		1
その他(An)																					2		2	4		4
合　計																					5		3	8		8

第23表　M26-bブロック石材別石器組成表

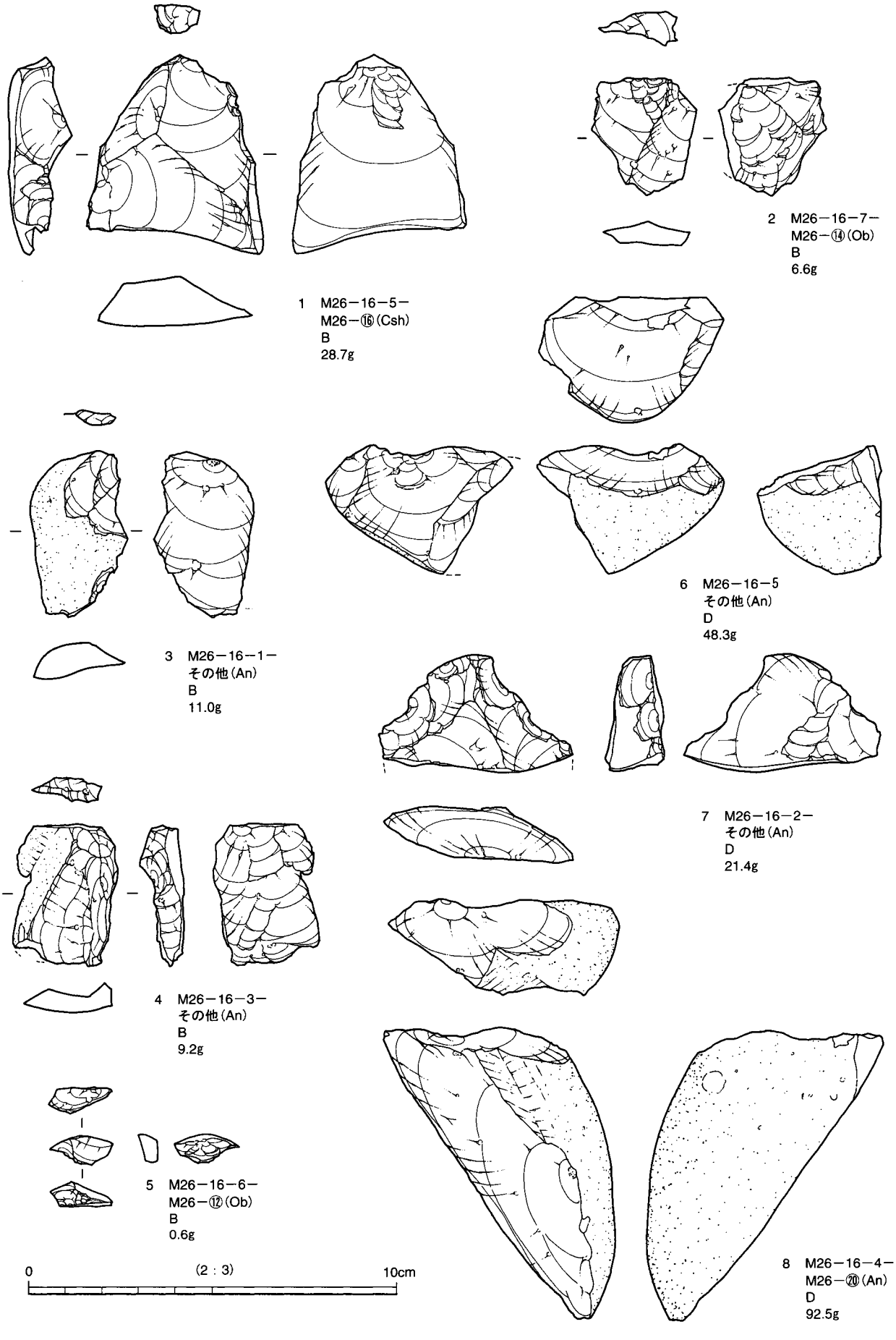
母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)																					2			2		2
安山岩(An)																					2		3	5		5
珪質頁岩(CshA)																					1			1		1
合　計																					5		3	8		8



第44図　M26-b ブロック出土遺物分布図（1）　−石器別分布図−



第45図　M26-b ブロック出土遺物分布図（2）　−石材別分布図−



第46図　M26-bブロック出土遺物実測図

8　M26-c ブロック（第47～50図，第24・25表）

1）ブロックの概要

M26-c ブロックは，調査範囲北西部の M26-17 グリッドに分布する。ブロックの立地は，隣接する L26・M26 グリッドに分布する他の 10 ブロックと共通する。

ブロックの規模と形状は，直径４ｍの範囲に 40 点の石器群が分布する。出土層位はⅣ層を中心に，ほぼ水平に包含されている（第47・48図）。

ブロックを構成する石器群は，ナイフ形石器２点，掻器１点，使用痕ある剥片６点，剥片 26 点，砕片５点の合計 40 点である。石器石材は，黒曜石 32 点，安山岩５点，珪質頁岩２点，ホルンフェルス１点である。

2）母岩の特徴と内容

・M26-①：母岩の内容は，L26-e ブロックで記したとおり，暗灰色から灰褐色の安山岩である。L26-e ブロックに１点分布する他，M26-f ブロックに４点まとまっており，M26-c ブロックの１点と M26-f ブロックの３点が接合する。本ブロックでは，使用痕ある剥片１点（4.3ｇ）の単独資料である。

・M26-②：自然面と節理面は明橙褐色，内部は緑がかった灰褐色の嶺岡産珪質頁岩である。剥片２点の接合資料（総重量 15.5 ｇ）である。同一母岩は，M26-f ブロックに３点ある。

・M26-③：黒色不透明で，灰色の縞が入る黒曜石である。φ２㎜～３㎜の円形の夾雑物を含む。本ブロックの内訳は，使用痕ある剥片２点（接合して１個体）である（3.0ｇ）。

・M26-⑥：黒色不透明の黒曜石である。全体に黒みが強く，細かな夾雑物を多く含む。掻器と使用痕ある剥片各１点である（総重量 16.3 ｇ）。同一母岩は，L26-e ブロックに３点，M26-f ブロックに２点分布する。

・M26-⑩：黒色不透明の黒曜石である。全体に灰色がかるが光沢があり，夾雑物は少ない。本ブロックでは，剥片１点（4.6ｇ）の単独資料であるが，同一母岩は，M26-f ブロックにも１点分布する。

・M26-⑫：母岩の内容は，L26-e ブロックで記したとおりである。本ブロックに分布する石器群の内訳は，ナイフ形石器１点，使用痕ある剥片３点，剥片４点で，総重量 55.4 ｇである。自然面のある剥片や石核がみられないことから，剥片剥離作業の中段階の資料群といえる。同一母岩は，L26-e ブロックに１点，M26-b ブロックに１点，M26-f ブロックに８点ある。

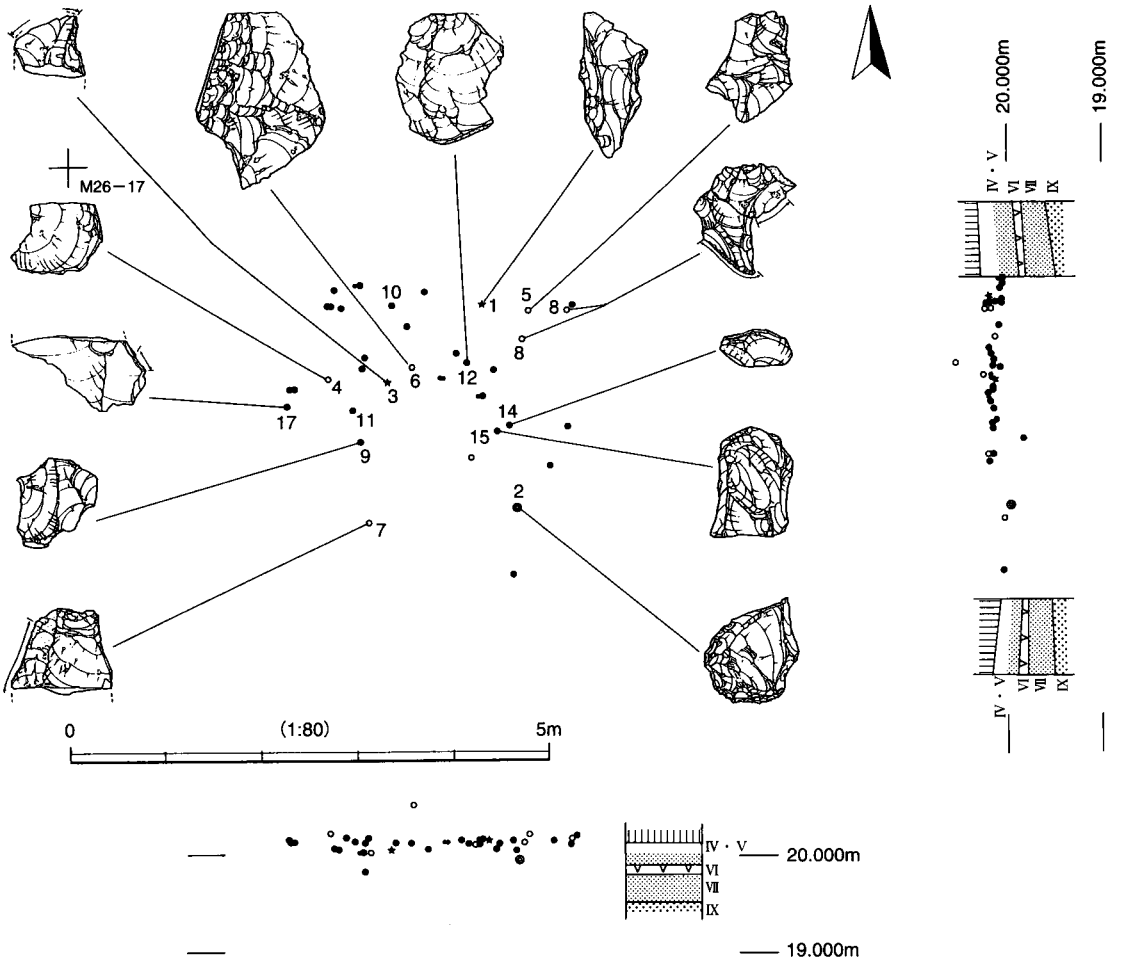
・M26-㉑：黒灰色と灰白色の縞が入るホルンフェルスである。ナイフ形石器１点（8.6ｇ）の単独資料である。

・026-④：黒色半透明で白い縞の入る黒曜石である。夾雑物が散在する。小型の剥片１点（0.9ｇ）の単独資料である。

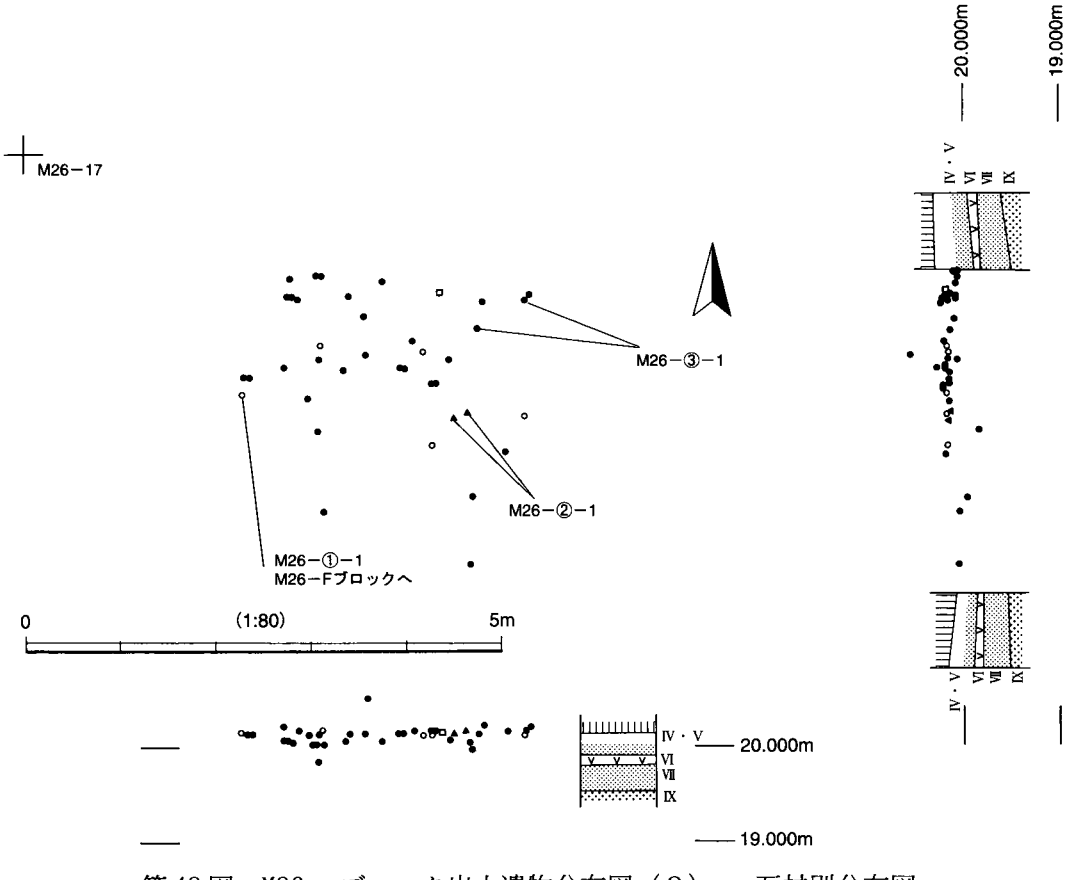
なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石の剥片 13 点，砕片５点（総重量 4.6 ｇ），安山岩の剥片４点（総重量 19.7 ｇ）がある。黒曜石の剥片類は，黒色不透明で夾雑物を含むもので，M26-⑫に似た一群である。概ね，栃木県高原山産と考えられる。安山岩は，表面が黄褐色に風化した夾雑物の多いもので，M26-①とは異なる内容である。

3）出土遺物（第49・50図）

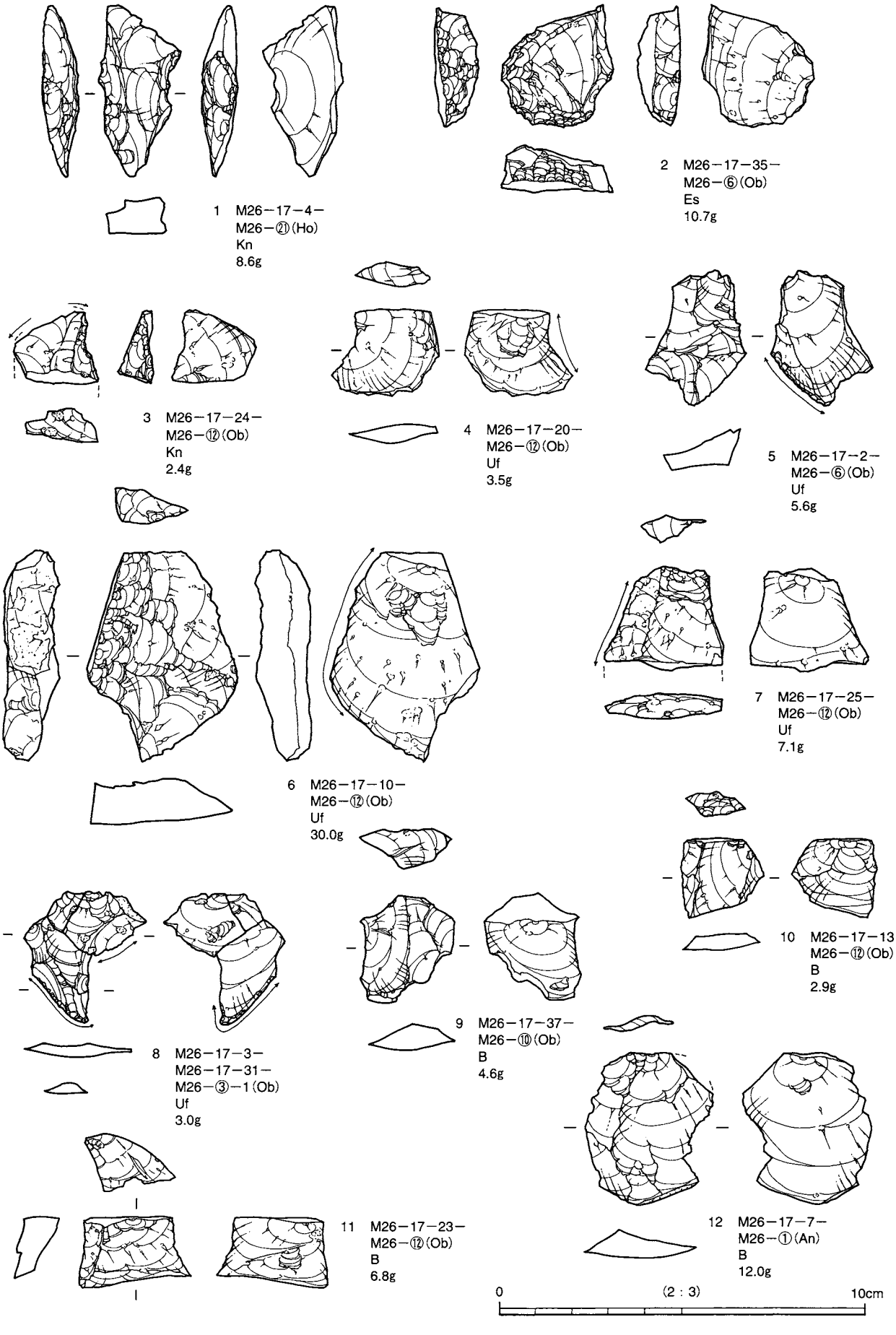
ナイフ形石器（第49図１・３）　１は，ホルンフェルスの横長剥片を用いたナイフ形石器である。素材の打面と反対側の１側縁に裏から調整加工を施し，切出形に仕上げている。３は，黒曜石の横長剥片を用いたナイフ形石器である。打面側に調整加工がなされているが，下半部は欠失しており，形態は不明である。



第47図　M26-c ブロック出土遺物分布図（1）　−石器別分布図−



第48図　M26-c ブロック出土遺物分布図（2）　−石材別分布図−

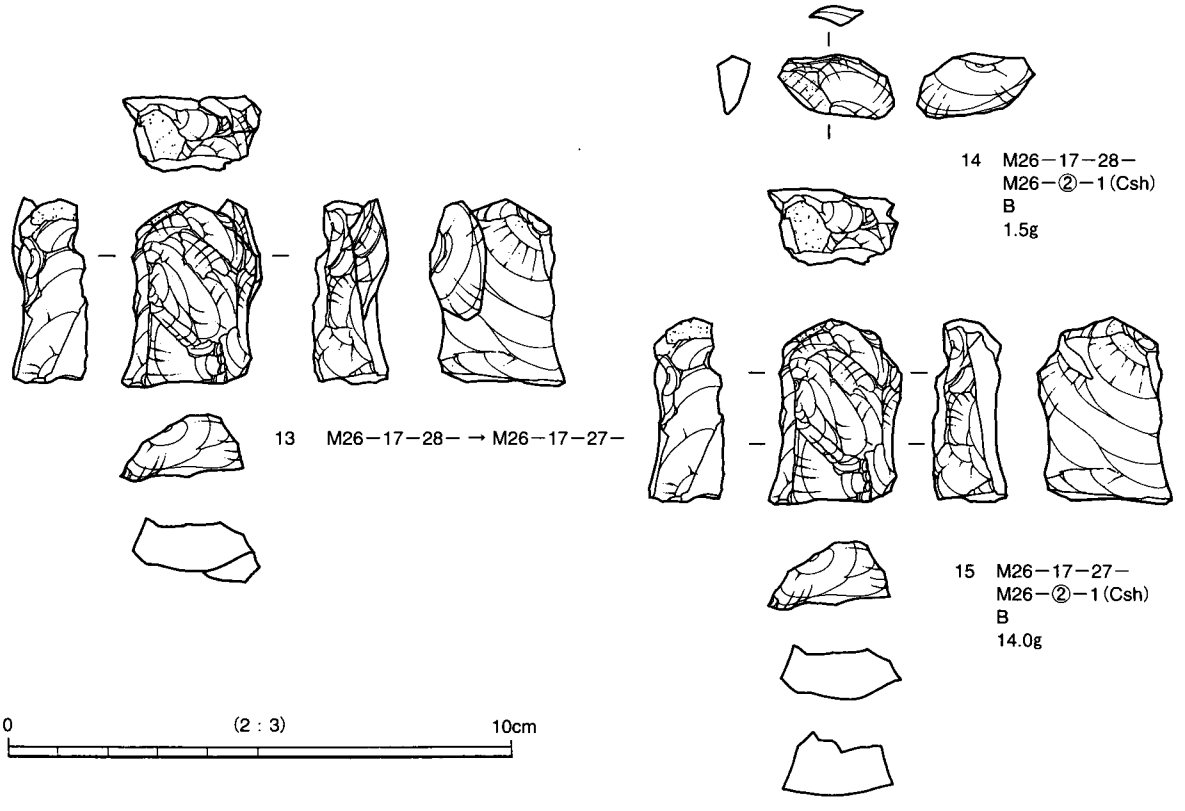


第49図　M26-c ブロック出土遺物実測図（1）

掻器（第49図2）　2は，黒曜石の掻器である。厚手の不定型な剥片を素材として，素材の側縁に弧状の刃部を作り出している。上端は，折れ面にも加工が及んでいる。

使用痕ある剥片（第49図4～8）　4～8は，黒曜石の不定型な縦長剥片を用いた，使用痕ある剥片である。5～8は，正面は多方向からの剥離面で構成されている。

剥片（第49図9～12）　9・10は，黒曜石の不定型な剥片である。正面にある剥離面と裏面との剥離方



第50図　M26-cブロック出土遺物実測図（2）

第24表　M26-cブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M26-①(An)										1														1		1
M26-②(Csh)																					2			2		2
M26-③(Ob)										2														2		2
M26-⑥(Ob)					1					1														2		2
M26-⑩(Ob)																					1			1		1
M26-⑫(Ob)	1									3											4			8		8
M26-㉑(Ho)	1																							1		1
O26-④(Ob)																					1			1		1
その他（Ob）																					13	5		18		18
その他（An）																					4			4		4
合　計	2				1					7											25	5		40		40

第25表　M26-cブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)	1				1					6											19	5		32		32
安山岩(An)										1											4			5		5
珪質頁岩(Csh)																					2			2		2
ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ(Ho)	1																							1		1
合　計	2				1					7											25	5		40		40

向は一定しない。11は，黒曜石の厚手の不定型な剥片である。打面は平坦な1枚の剥離面で，正面は裏面と同一方向の剥離面で構成される。下端には底面が付く。12は，安山岩の不定型な縦長剥片である。

4）接合資料とその関連資料（第50図13～15，第60図17）

・M26-②（第50図13～15） 13は，嶺岡産珪質頁岩の剥片2点の接合資料である。多方向からの剥離の後に15（中型の縦長剥片で下半部欠損）を剥離し，同一打面から14（小型の不定型な剥片）を剥離している。

・M26-①（第60図17） 17は，剥片の欠損品である。M26-fブロックの資料と接合しており，後述する。

9 M26-dブロック（第51～54図，第26・27表）

1）ブロックの概要

M26-dブロックは，調査範囲北西部のM26-21・22グリッドに分布する。ブロックの立地は，隣接するL26・M26グリッドに分布する他の10ブロックと共通する。

ブロックの規模と形状は，直径5mの範囲に55点の石器群が分布する。出土層位はⅣ層を中心に，60cmの高低差をもって包含されている（第51・52図）。

ブロックを構成する石器群は，ナイフ形石器1点，掻器6点，加工痕ある剥片2点，使用痕ある剥片4点，剥片35点，砕片6点，石核1点の合計55点である。石器石材は，黒曜石54点，チャート1点である。

2）母岩の特徴と内容

・M26-④：黒色不透明の黒曜石である。掻器の製作に関わる接合資料2点（21.8g）がある。

・M26-⑤：黒色不透明で薄い灰色の縞が入る黒曜石である。本ブロックでは掻器1点（14.9g）の単独資料であるが，M26-eブロックに刃部再生剥片があり，接合する。

・M26-⑨：淡褐色で白色の縞が多数入るチャートである。本ブロックでは使用痕ある剥片1点（2.1g）の単独資料であるが，M26-fブロックの剥片1点と接合する。また，026-bブロックに同一母岩が3点分布する。

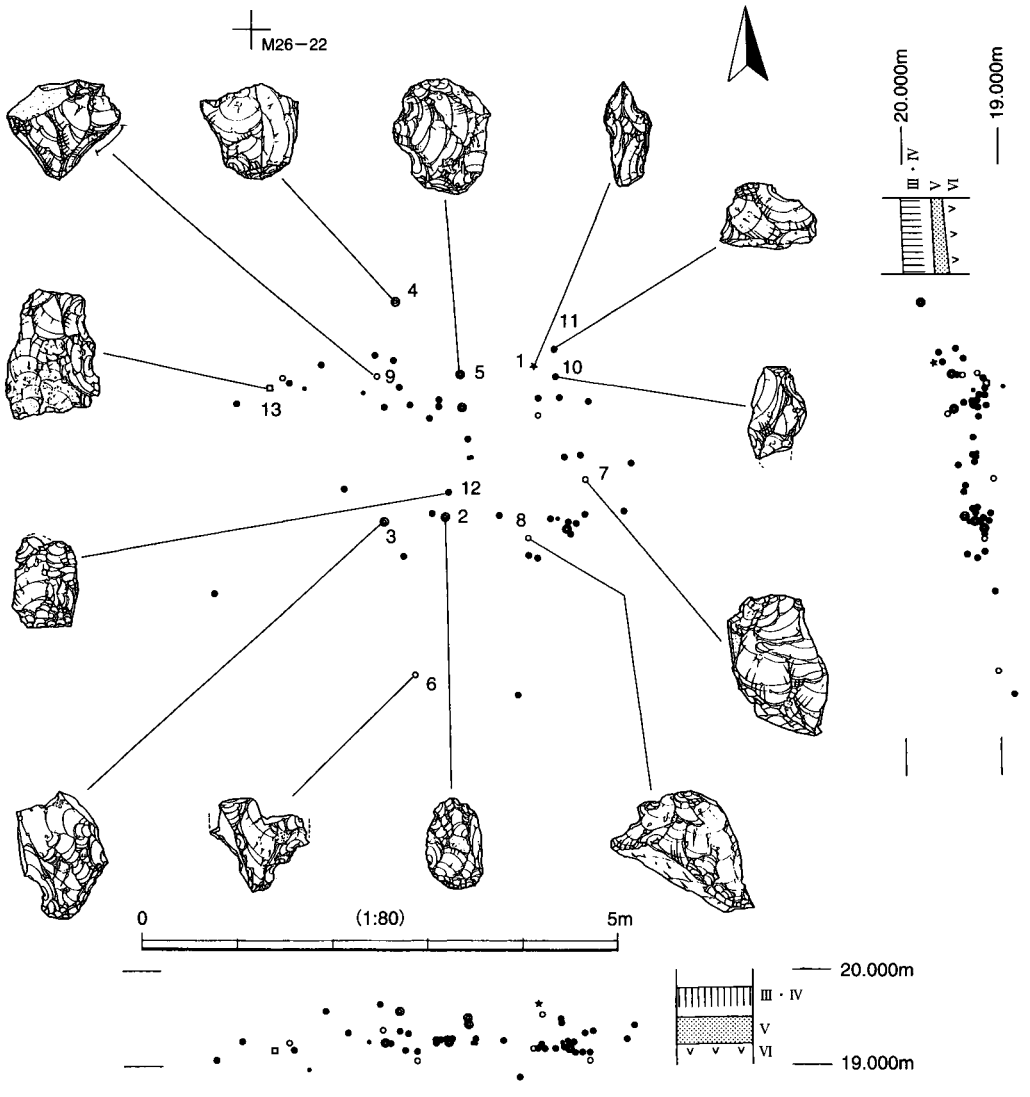
なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石のナイフ形石器1点，掻器3点，加工痕ある剥片2点，使用痕ある剥片3点，剥片35点，砕片6点，石核1点がある（総重量169.4g）。総じて，黒色不透明で夾雑物を含む，栃木県高原山産と考えられるものである。信州産と考えられる黒曜石はみられない。

3）出土遺物（第53・54図）

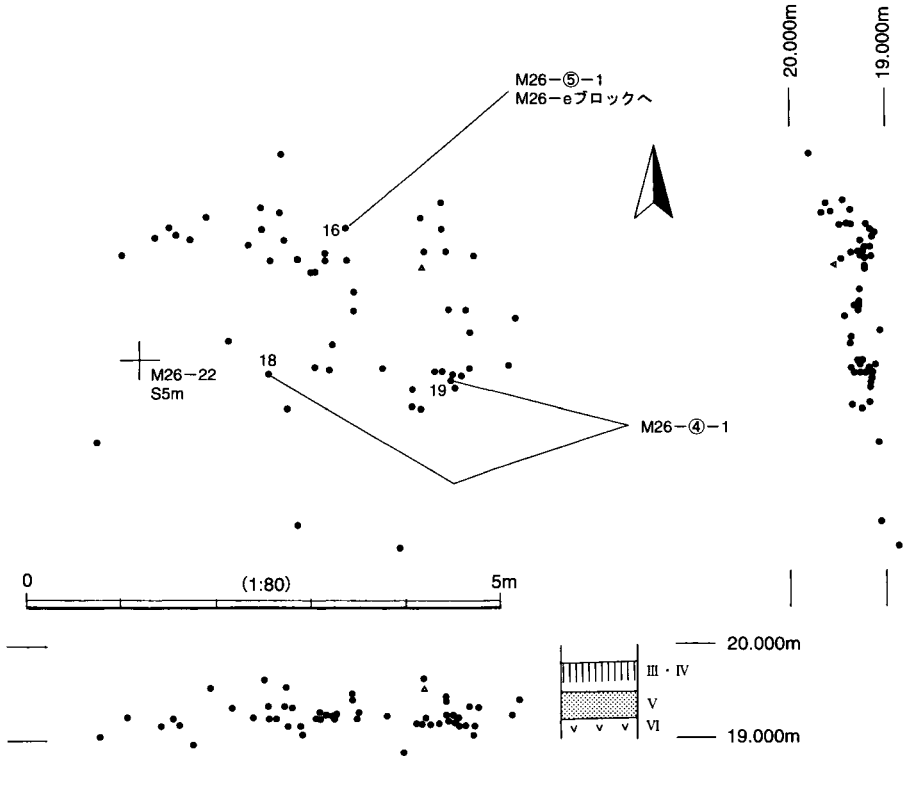
ナイフ形石器（第53図1） 1は黒曜石の横長剥片を用いたナイフ形石器である。打面側の一部に無加工の部分を残し，それ以外の全体に調整加工を施し，切出形に仕上げている。

掻器（第53図2～5，第54図14～19） 2は，黒曜石の横長剥片を用いた掻器である。右側面には切断面があり，部分的に加工が及んでいる。素材の打面はポジティブな剥離面で，その打面から正面に向けて掻器の刃部に特有の剥離がなされていることから，掻器の刃部再生剥片を利用したと考えられる。3は，黒曜石の不定型な剥片を素材とする掻器である。素材の主要剥離面側に加工を施している。なお，本掻器の製作に関わる資料が接合する（第54図17～19）。4は，黒曜石の不定型で厚手の剥片を素材とした掻器である。素材の打面側に裏面から加工して，刃部を作り出している。上端の折れ面から正面に剥離がみられることから，上半部が欠損した後も利用したと考えられる。5は，黒曜石の不定型な剥片を素材とする掻器である。素材剥片の端部に刃部を作り出している。刃部再生剥片が接合する（第54図14～16）。

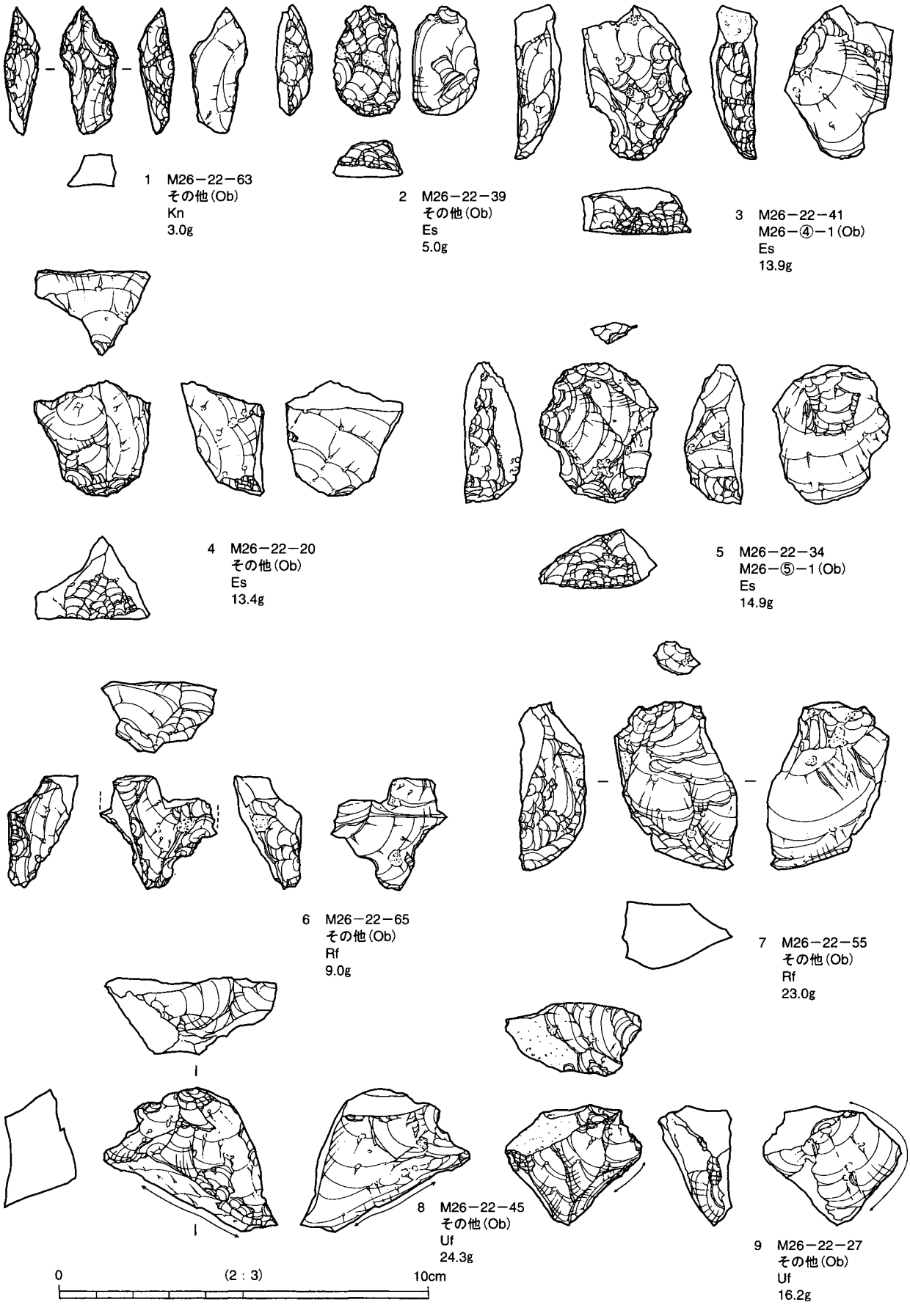
加工痕ある剥片（第53図6・7） 6は，黒曜石の不定型な剥片を用いた，加工痕ある剥片である。右



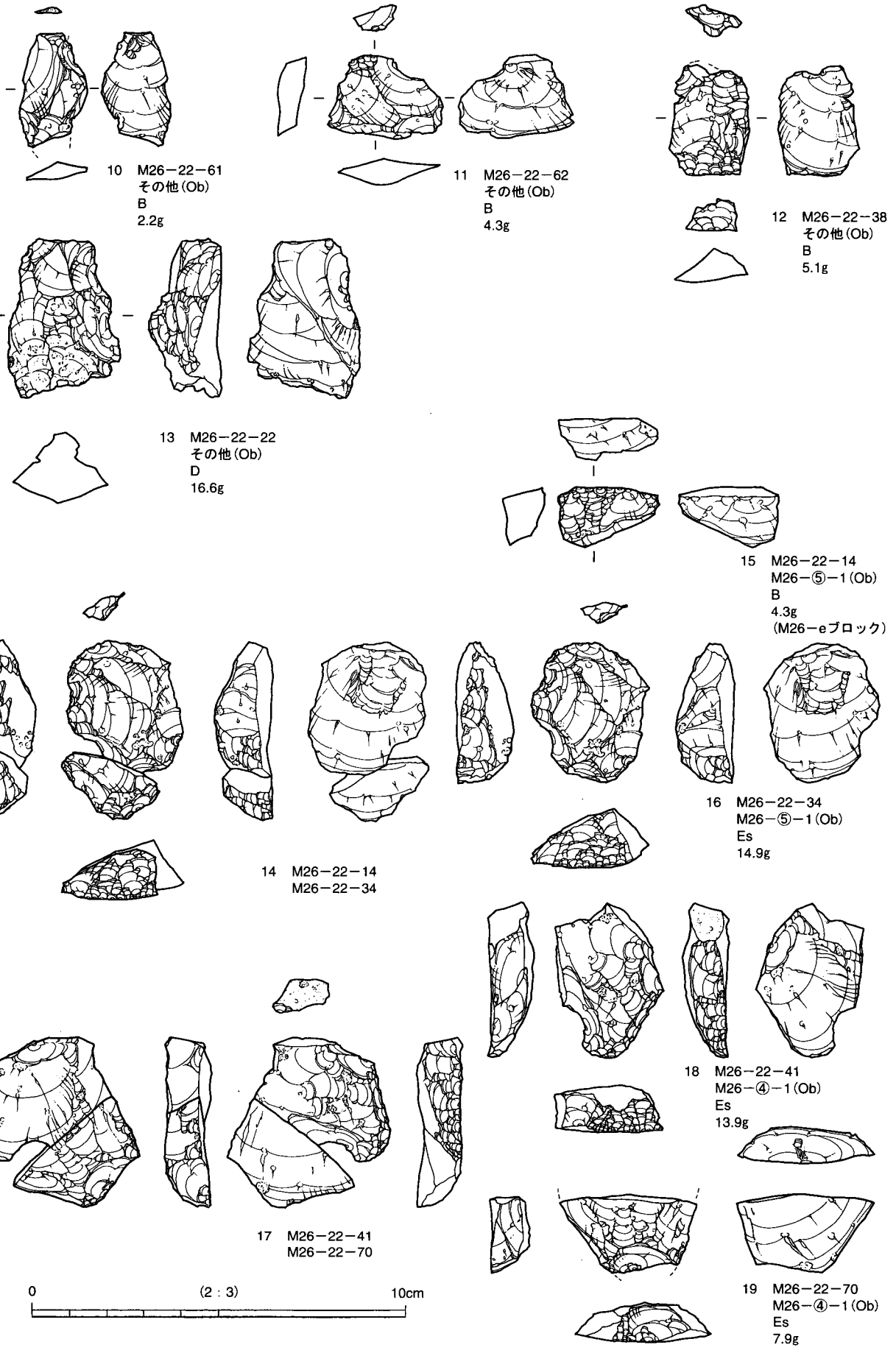
第51図　M26-dブロック出土遺物分布図（1）　−石器別分布図−



第52図　M26-dブロック出土遺物分布図（2）　−石材別分布図−



第53図　M26-dブロック出土遺物実測図（1）



第54図　M26-dブロック出土遺物実測図（2）

側面には裏面から粗い調整があり，左側面には折れ面に細かな調整がみられる。素材の主要剥離面には，掻器と同様の磨滅があり，同種の機能をもっていた可能性がある。上半部は大きく欠損する。7は，黒曜石の厚手の不定型な剥片を用いた，加工痕ある剥片である。左側縁の中央に粗い調整がみられる。

使用痕ある剥片（第53図8・9） 8は，黒曜石の不定型な剥片を用いた，使用痕ある剥片である。末端部に刃こぼれがみられる。正面の剥離面は，裏面（主要剥離面）に比べて磨滅していることから，本遺跡に移動後に剥離されたと考えられる。9は，黒曜石の不定型な剥片を用いた，使用痕ある剥片である。打面は，自然面と横方向からの剥離面で構成される。正面の剥離方向は一定しない。右側縁に刃こぼれがある。

剥片（第54図10～12） 10～12は，黒曜石の剥片である。10・12は縦長剥片であるが正面の剥離方向は一定しない。11は，正面の打面に接して細かな剥離面があり，掻器の刃部再生剥片と考えられる。

石核（第54図13） 13は，黒曜石の石核である。厚手の不定型な剥片を素材として，右側面と裏面から不定型な剥片を生産している。

4）接合資料とその関連資料（第54図14～19）

・M26-⑤（第54図14～16） 14は黒曜石の掻器（16）と刃部再生剥片（15）の接合資料である。はじめに，刃部の中央を大きく割り取って15を剥離し，その次に中央の大きな剥離面の両側を細かく調整して新たな刃部を作成している。

・M26-④（第54図17～19） 17は黒曜石の掻器2点の接合資料である。まず不定型の剥片を素材として，素材の末端部に調整する。この刃部が完成したか否かについては，中央に折れ面があり，明らかでない。この折れ面は，刃部再生に係る剥離面の可能性もある。次いで，中央部から大きく2つに割れ，上半部については，素材の主要剥離面側に調整加工を施して，新たな刃部を作り出している。

第26表　M26-dブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M26-④(Ob)					2																			2		2
M26-⑤(Ob)					1																			1		1
M26-⑨(Ch)										1														1		1
その他（Ob）	1				3				2	3											35	6	1	51		51
合　計	1				6				2	4											35	6	1	55		55

第27表　M26-dブロック石材別石器組成表

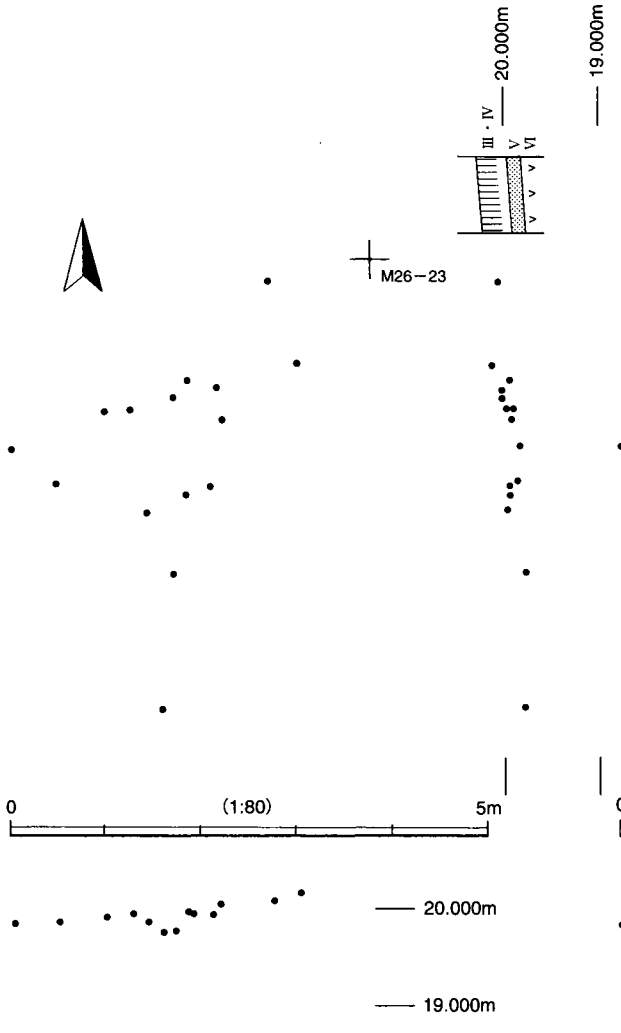
母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)	1				6				2	3											35	6	1	54		54
チャート(Ch)										1														1		1
合　計	1				6				2	4											35	6	1	55		55

10　M26-eブロック（第55・56図，第28・29表）

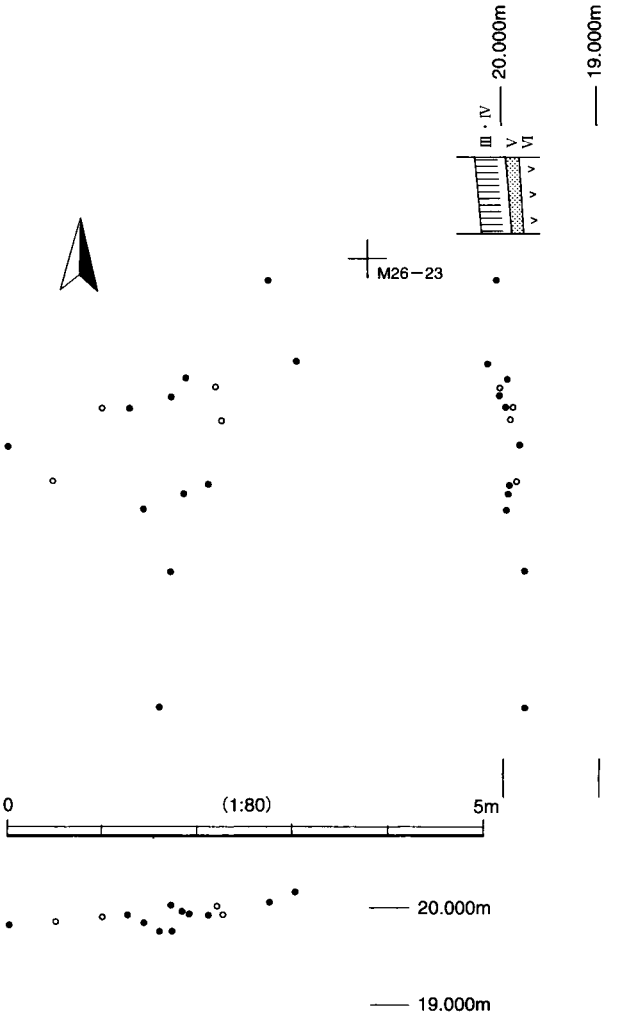
M26-eブロックは，調査範囲北西部のM26-22グリッドに分布する。ブロックの立地は，隣接するL26・M26グリッドに分布する他の10ブロックと共通する。

ブロックの規模と形状は，長軸5m，短軸3mの楕円形の範囲に15点の石器群が分布する。出土層位はⅣ層を中心に，40cmの高低差をもって包含されている（第55・56図）。

ブロックを構成する石器群は，剥片15点である。石器石材は，黒曜石11点，安山岩4点である。



第55図　M26-eブロック出土遺物分布図（1）
－石器別分布図－



第56図　M26-eブロック出土遺物分布図（2）
－石材別分布図－

第28表　M26-eブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M26-⑤(Ob)																					1			1		1
M26-⑦(An)																					4			4		4
M26-⑪(Ob)																					10			10		10
合　計																					15			15		15

第29表　M26-eブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)																					11			11		11
安山岩(An)																					4			4		4
合　計																					15			15		15

2）母岩の特徴と内容

・M26-⑤：黒色不透明で薄い灰色の縞が入る黒曜石である。M26-dブロックに掻器1点があり，それに本ブロックの刃部再生剥片1点（4.3ｇ）が接合する。

・M26-⑦：黄色みを帯びた灰褐色の安山岩である。石器群の内訳は，剥片4点（接合して3個体）で，総

重量は8.2ｇである。

・M26-⑪：黄色みを帯びた淡黒色不透明の黒曜石である。夾雑物を多く含む。石器群の内訳は，小型の剥片10点で，総重量は6.4ｇである。

3）出土遺物（第54図）

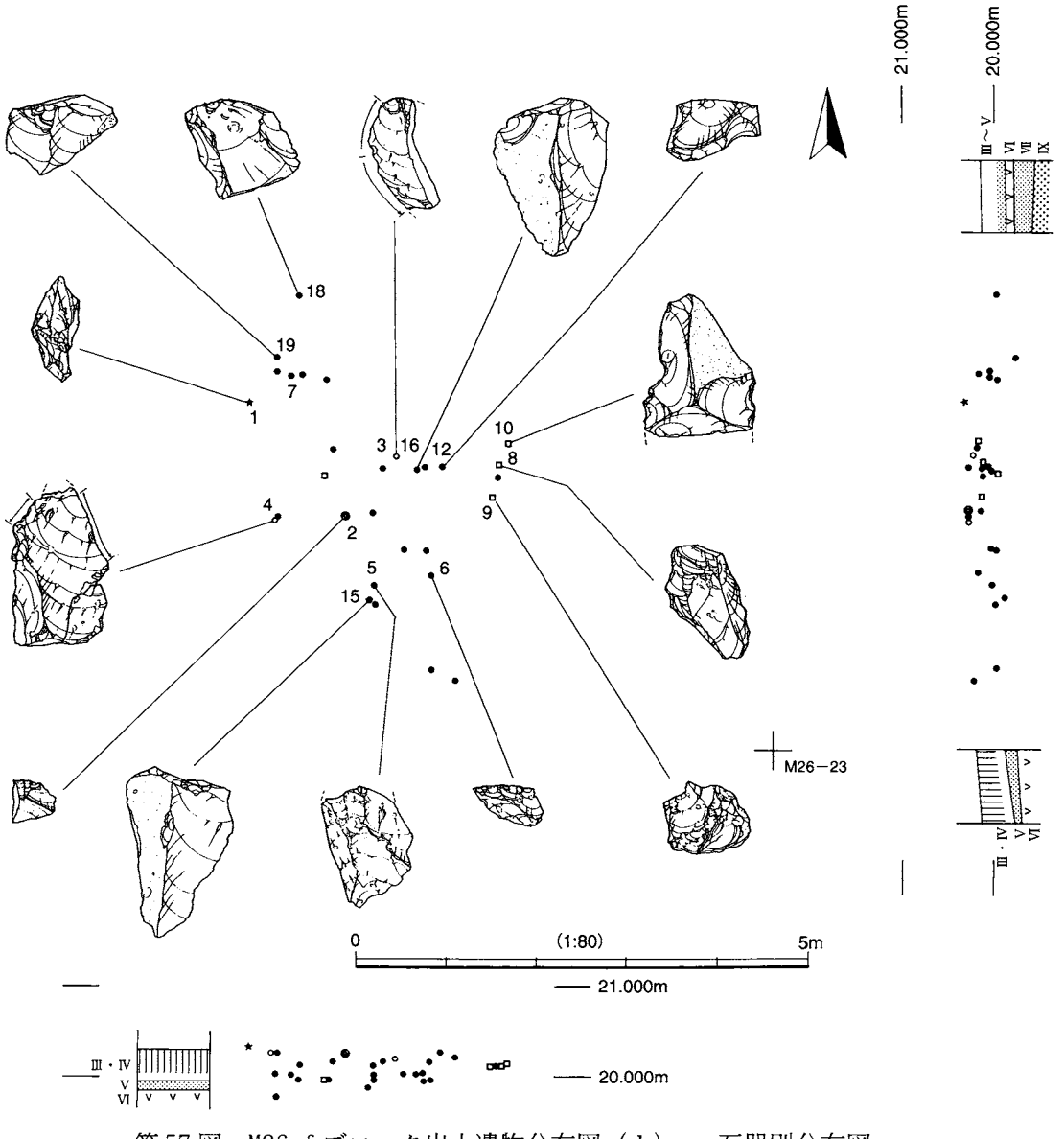
剥片（第54図15） 本ブロックの出土遺物は小型の剥片類が大半を占めるため，M26-dブロックの項で記した，掻器の刃部再生剥片1点を図示するに留める。

11 M26-fブロック（第57～60図，第30・31表）

1）ブロックの概要

M26-eブロックは，調査範囲北西部のM26-17グリッドに分布する。ブロックの立地は，隣接するL26・M26グリッドに分布する他の10ブロックと共通する。

ブロックの規模と形状は，長軸5ｍ，短軸3ｍの楕円形の範囲に31点の石器群が分布する。出土層位はⅣ層を中心に，50㎝の高低差をもって包含されている（第57・58図）。



第57図 M26-fブロック出土遺物分布図（1） −石器別分布図−

ブロックを構成する石器群は，ナイフ形石器１点，掻器１点，使用痕ある剥片２点，剥片22点，砕片１点，石核４点の合計31点である。石器石材は，黒曜石18点，安山岩８点，珪質頁岩４点，チャート１点である。

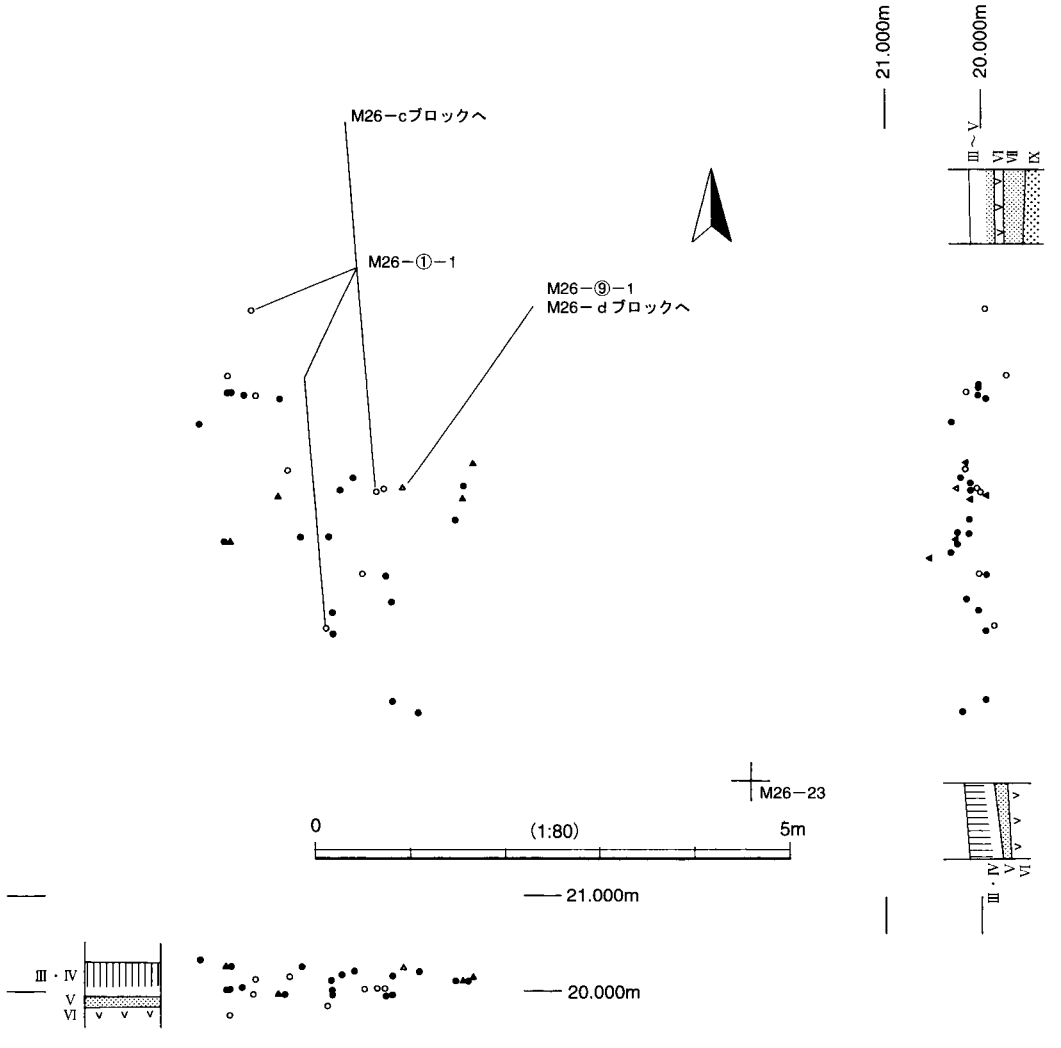
2）母岩の特徴と内容

・M26-①：母岩の特徴は，L26-eブロックで記したとおり，暗灰色の安山岩である。石器群の内訳は，剥片４点で，うち３点はM26-cブロックの剥片１点とともに接合する。本ブロックの総重量は，54.2ｇである。

・M26-②：母岩の特徴は，M26-cブロックで記したとおり，緑がかった灰褐色の珪質頁岩である。本ブロックでの石器群の内訳は，剥片２点，石核１点である（総重量7.4ｇ）。この他，M26-cブロックに２点ある。

・M26-⑥：母岩の特徴は，L26-eブロックで記したとおり，黄色みを帯びた黒色不透明の黒曜石である。夾雑物を多く含む。石器群の内訳は，使用痕ある剥片１点，剥片１点で，総重量17.5ｇである。同一母岩は，L26-eブロックとM26-cブロックに分布する。

・M26-⑨：母岩の特徴は，M26-dブロックで記したとおりで，淡褐色で白色の縞が多数入るチャートである。



第58図　M26-fブロック出土遺物分布図（２）　－石材別分布図－

本ブロックでは，剥片１点（4.7ｇ）の単独資料であるが，M26-dブロックの使用痕ある剥片１点と接合する。

・M26-⑩：母岩の特徴は，M26-cブロックで記したとおり，全体に灰色がかる黒色不透明の黒曜石である。本ブロックでは，剥片素材の石核１点（7.8ｇ）の単独資料であるが，同一母岩は，M26-cブロックに１点ある。

・M26-⑫：母岩の特徴は，L26-eブロックで記したとおり，黄色みを帯びた黒色不透明の黒曜石である。本ブロックでの石器群の内訳は，ナイフ形石器１点，掻器１点，使用痕ある剥片１点，剥片４点，石核１点で，総重量は36.1ｇである。本母岩は，L26-eブロックに１点，M26-bブロックに１点，M26-cブロックに８点，ブロック外に２点あるが，接合資料はない。

・M26-⑯：母岩の特徴は，M26-bブロックで記したとおり，緑がかった灰色で，黒色の縞が薄墨を流したように入る，嶺岡産の珪質頁岩である。本ブロックでは，石核１点（25.5ｇ）の単独資料であるが，M26-bブロックにも同一母岩がある。

なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石の剥片６点，砕片１点（総重量2.6ｇ），安山岩の剥片４点（総重量5.5ｇ）がある。黒曜石は，黒色不透明の栃木県高原山産と考えられるものである。

3）出土遺物（第59・60図）

ナイフ形石器（第59図１）　１は，黒曜石の横長剥片を素材とする，基部調整のナイフ形石器である。左側縁は裏面から，右側面は正面から粗い調整加工を行っている。

掻器（第59図２）　２は，掻器の刃部再生剥片である。本剥片剥離時に，打点で２つに割れている。石材は黒曜石である。

使用痕ある剥片（第59図３・４）　３は，黒曜石の縦長剥片を素材とする使用痕ある剥片である。打点で２つに割れた剥片を用いている。鋭利な縁辺の表側に，広く刃こぼれがみられる。４も黒曜石の縦長剥片を用いた使用痕ある剥片である。

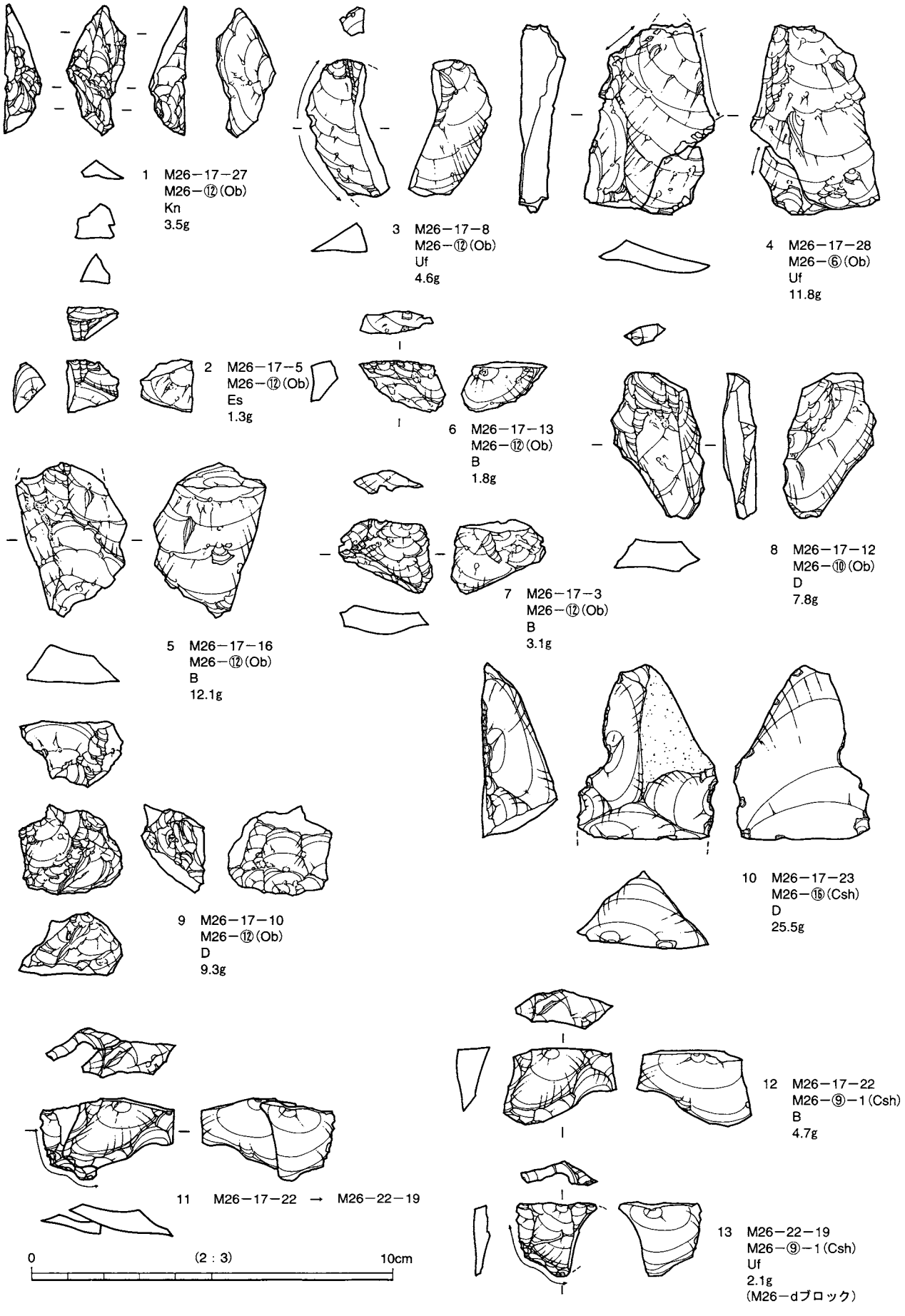
剥片（第59図５～７）　５～７は，黒曜石の剥片である。正面の剥離方向が一定しない，不定型の剥片が主流である。

石核（第59図８～10）　８は，黒曜石の横長剥片を素材とする石核である。素材剥片の裏面側を作業面として小型の剥片を剥離している。９も黒曜石の石核である。打面と作業面を入れ替えながら小型不定型の剥片を生産し，最終的にサイコロ状になっている。10は，嶺岡産珪質頁岩の不定型な剥片を用いた石核である。素材の裏面（主要剥離面）を打面として，横長剥片を剥離している。

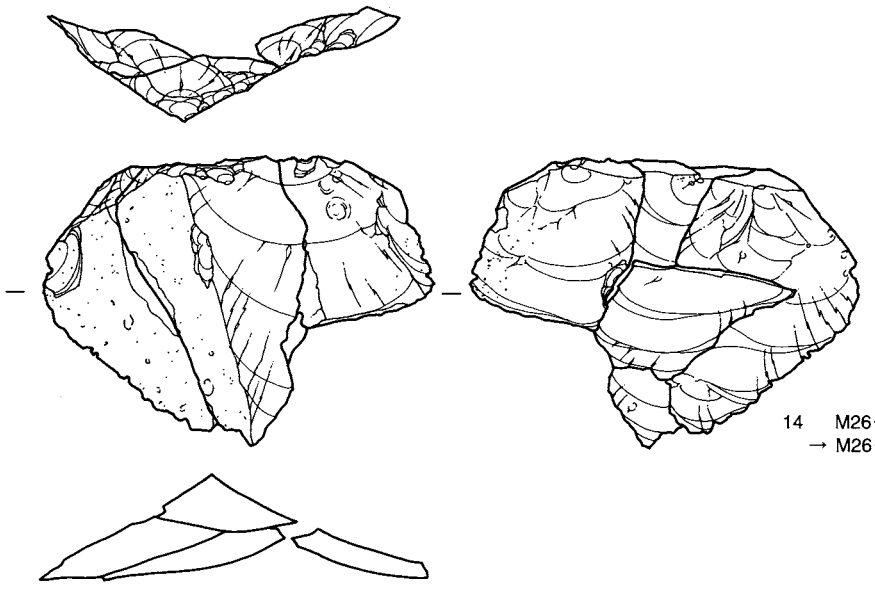
4）接合資料とその関連資料（第59・60図）

・M26-⑨（第59図11～13）　11は，チャートの横長剥片（12）と横長剥片を用いた使用痕ある剥片（13）の接合資料である。12は，本ブロックの出土であるが，13は，隣接するM26-dブロックから出土している。平坦な打面を用い，連続的に横長剥片を剥離しているが，12の正面には12・13の主要剥離面とは逆方向の剥離面がみられ，打面や作業面の広範な移動を伴う剥片剥離作業が想定される。これは，026-bブロックで出土している同一母岩の石核のあり方とも一致する。

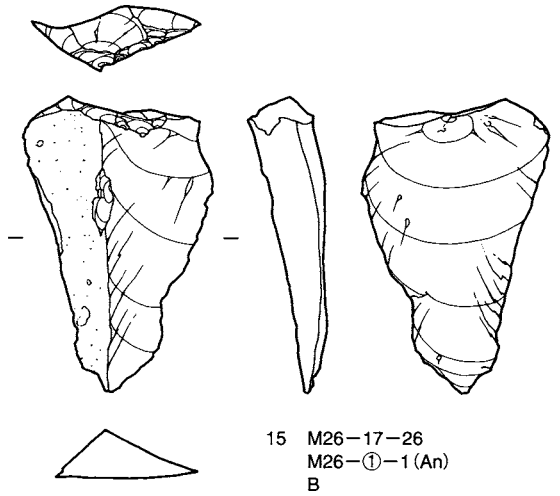
・M26-①（第60図14～19）　14は，安山岩の不定型な縦長剥片３点と使用痕ある剥片１点の接合資料である。粗い複剥離による同一打面を用い，連続して剥離されたものである。18の正面は荒れており，打撃痕もあることから，円礫が分割された状態で本ブロックに持ち込まれ，剥片生産を行ったと考えられる。



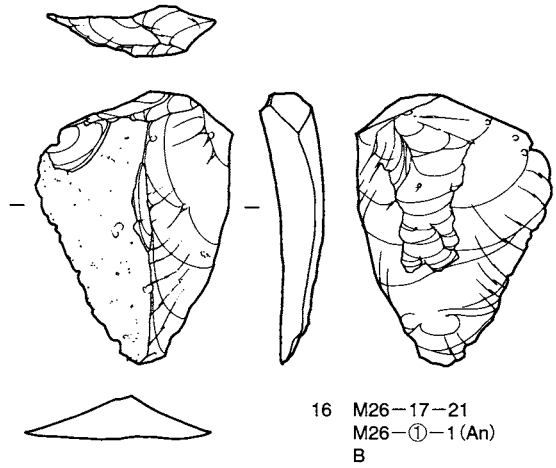
第59図　M26-f ブロック出土遺物実測図（1）



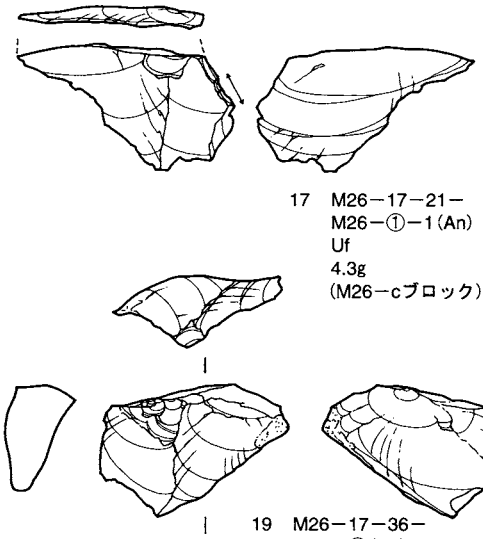
14　M26－17－26 → M26－17－21 → M26－17－21－
→ M26－17－33－



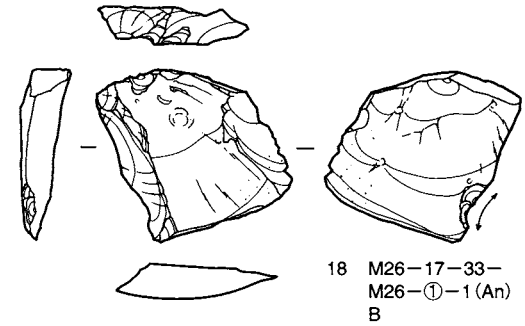
15　M26－17－26
M26－①－1(An)
B
17.8g



16　M26－17－21
M26－①－1(An)
B
16.4g

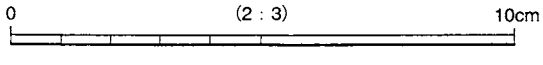


17　M26－17－21－
M26－①－1(An)
Uf
4.3g
(M26－cブロック)



18　M26－17－33－
M26－①－1(An)
B
10.2g

19　M26－17－36－
M26－①(An)
B
9.8g



第60図　M26-f ブロック出土遺物実測図（2）

17は，M26-cブロック出土である。上半部が欠損するが，右側縁には刃こぼれがある。本ブロックで生産され，持ち出されている。

第30表　M26-fブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M26-①(An)																					4			4		4
M26-②(Csh)																					2		1	3		3
M26-⑥(Ob)										1											1			2		2
M26-⑨(Ch)																					1			1		1
M26-⑩(Ob)																							1	1		1
M26-⑫(Ob)	1				1					1											4		1	8		8
M26-⑯(Csh)																							1	1		1
その他 (Ob)																					6	1		7		7
その他 (An)																					4			4		4
合　計	1				1					2											22	1	4	31		31

第31表　M26-fブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)	1				1					2											11	1	2	18		18
安山岩(An)																					8			8		8
珪質頁岩(Csh)																					2		2	4		4
チャート(Ch)																					1			1		1
合　計	1				1					2											22	1	4	31		31

12　L26-a～e・M26-a～fブロック周辺部（第61・62図、第32・33表）

1）出土石器群の概要

L26・M26グリッドでは，東西40m，南北15m程の範囲に，第3文化層に帰属する11か所のブロックがまとまって分布していたが，ブロックとブロックの間にも合計20点の石器群が点在していた（第61図）。

石器群の内訳は，掻器2点，削器1点，楔形石器1点，使用痕ある剥片1点，剥片5点，石核2点，礫8点である。石器石材は，黒曜石8点，安山岩1点，頁岩1点，珪質頁岩1点，チャート1点である。礫は，流紋岩5点（L26-⑤：305.1g，L26-⑨：170.8g），砂岩1点（M26-⑮：19.2g），安山岩2点（M26-⑧：305.1g）で，4母岩に分類した。

2）母岩の特徴と内容

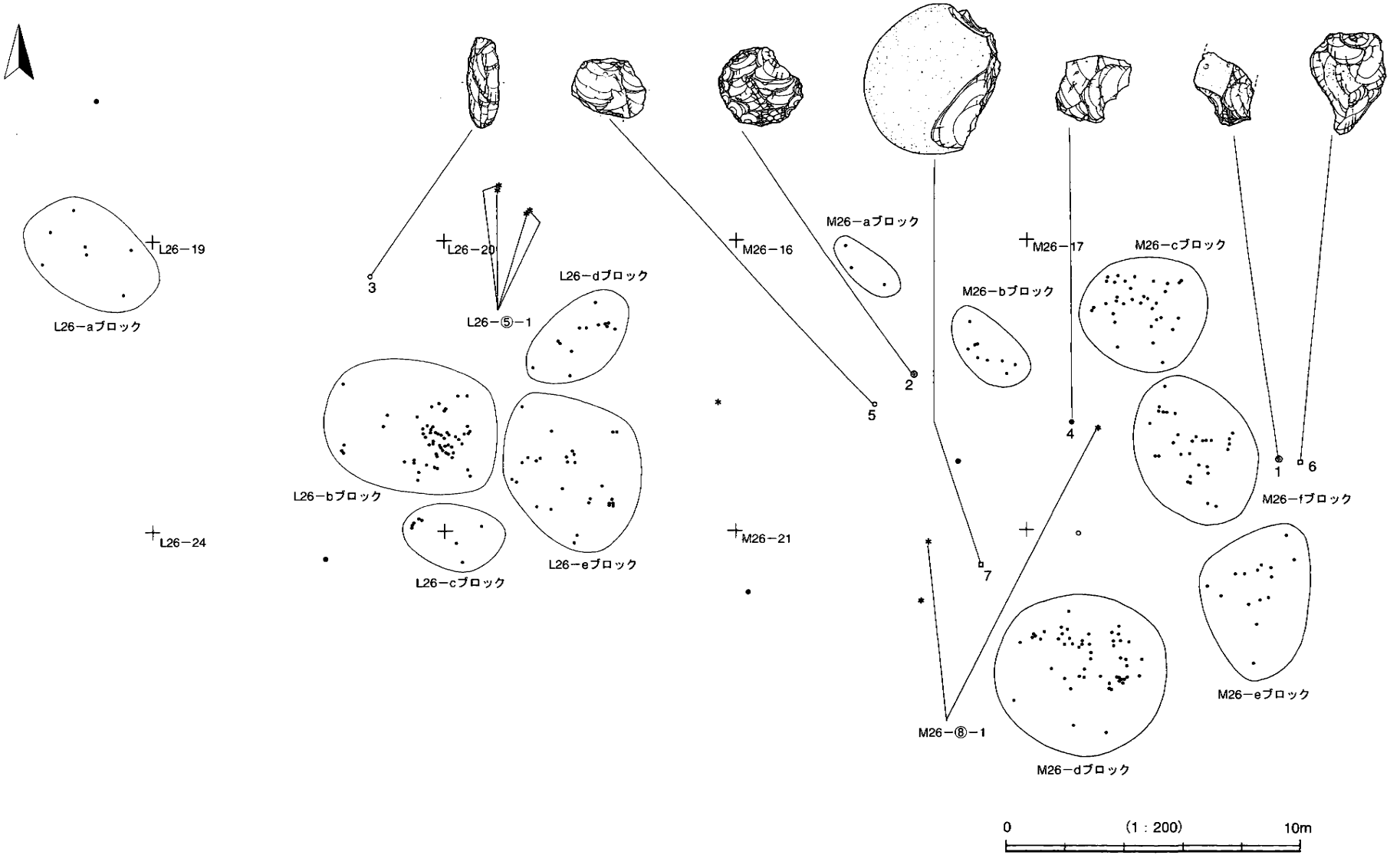
・L26-⑱：黄灰色で青灰色の縞が不定方向に入るチャートである。小型の円礫を素材とする，楔形石器1点（5.0g）の単独資料である。

・M26-⑫：母岩の特徴は，L26-eブロックで記したとおり，黄色みを帯びた黒色不透明の黒曜石である。ブロック外での石器群の内訳は，掻器1点，剥片1点で，総重量は13.9gである。L26-eブロックに1点，M26-bブロックに1点，M26-cブロックに8点，M26-fブロックに8点ある。

・M26-⑰：淡褐色の安山岩である。原石は，拳よりやや小振りの円礫で，剥片剥離作業があまり進行してはいないで，原石の7割以上が残っている。石核1点（147.9g）の単独資料である。

・M26-⑱：黄褐色で軟質の頁岩である。全体にきめ細かく，均質である。剥片1点（1.0g）の単独資料である。

・M26-㉒：自然面，内部とも橙褐色で，部分的に紫色の縞が入る珪質頁岩である。紫色の部分は，玉髄に似る。石核1点（13.4g）の単独資料である。

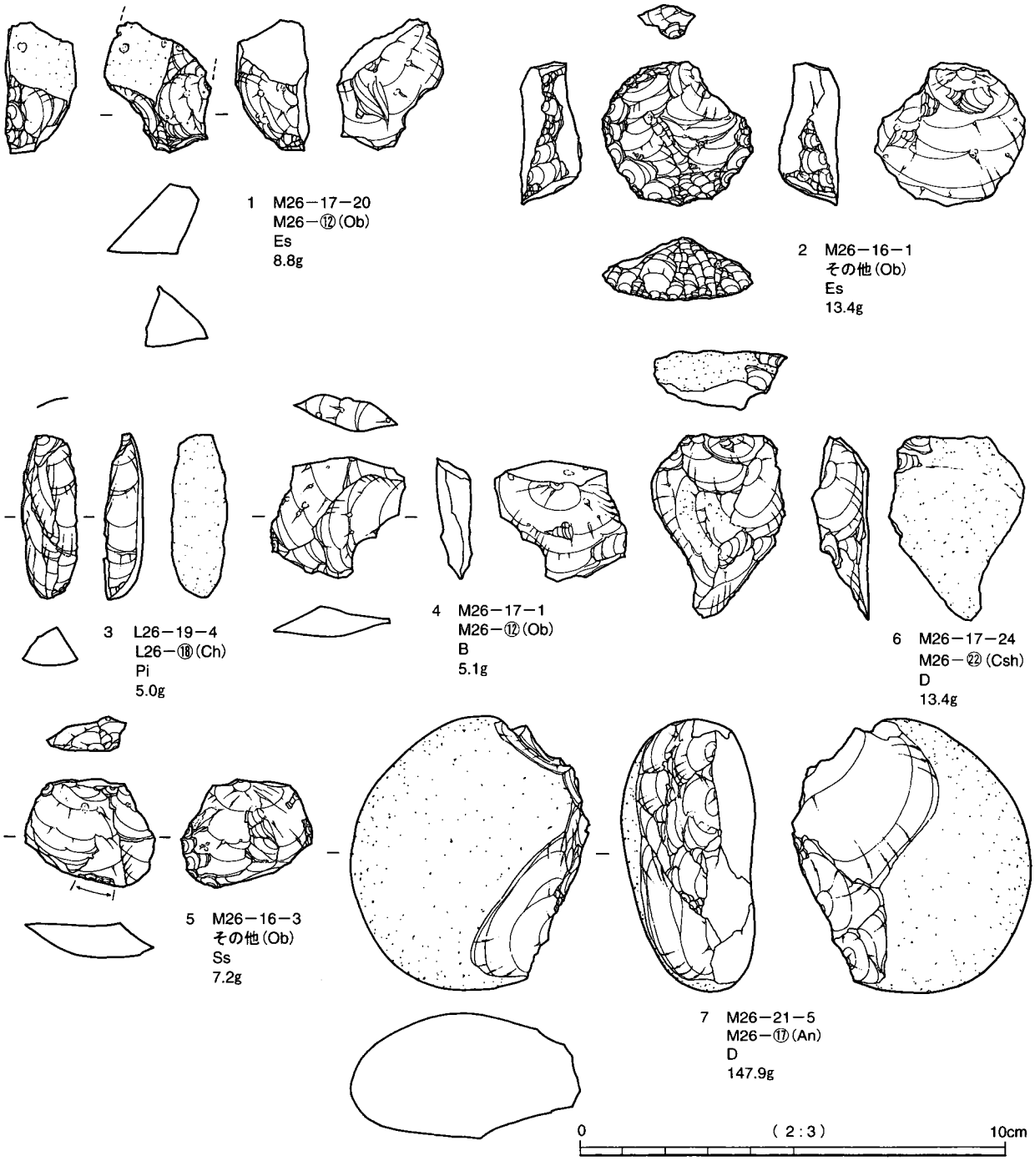


第61図　L26-a～e・M26-a～fブロック周辺部出土遺物分布図

なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石の掻器１点，削器１点，使用痕ある剥片１点，剥片３点がある（25.３ｇ）。いずれも黒色不透明で夾雑物の多い，第３文化層通有の黒曜石である。使用痕ある剥片と剥片は，長さ１㎝～２㎝の小型品である。剥片の中には，掻器の刃部再生に伴うと考えられるものもある。

３）出土遺物（第62図）

掻器（第62図１・２）　１は，黒曜石の厚手不定型の剥片を用いた掻器である。下端に幅の狭い刃部があり，その両側は粗く，抉るような剥離がみられる。上半部は欠損している。２は，黒曜石の不定型な剥片を用いた掻器である。黒色不透明で夾雑物の多い黒曜石で，部分的に灰色不透明のところがある。栃



第62図　L26-a～e・M26-a～fブロック周辺部出土遺物実測図

木県高原山産と考えられるが，石質の特徴が乏しく，母岩分類はできなかった。素材剥片の打面を残し，ほぼ全周にわたって調整加工がみられるが，下端はとくに厚手で急角度の調整を行っており，下端に限定された刃部であることがわかる。裏面は，使用のためか，傷だらけである。

削器（第62図5） 5は，黒色不透明の黒曜石を用いた，不定型な剥片を素材とする削器である。裏面の両側縁に浅く細かな剥離面が連続する。

楔形石器（第62図3） 3は，チャートの円礫の一端を用いた楔形石器である。

剥片（第62図4） 4は，黒曜石の不定型な剥片である。平坦な大きな打面をもち，正面は同一方向の剥離面で構成されている。

石核（第62図6・7） 6は，珪質頁岩の剥片を用いた石核である。右側が大きく欠損するため詳細は明らかではないが，裏面の自然面を打面として，求心的に小型の横長剥片を生産したと考えられる。7は，拳よりやや小振りの安山岩の円礫を用いた石核である。チョッパーのような交互剥離によって，横長剥片を生産している。

第32表 L26-a～e・M26-a～fブロック周辺部母岩別石器組成表

母岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合計
L26-⑱(Ch)								1																1		1
M26-⑫(Ob)					1																1			2		2
M26-⑰(An)																							1	1		1
M26-⑱(Sh)																					1			1		1
M26-㉒(Csh)																							1	1		1
その他（Ob）					1	1				1											3			6		6
L26-⑤(Rh)																									4	4
L26-⑨(Rh)																									1	1
M26-⑧(An)																									2	2
M26-⑮(Sa)																									1	1
合計					2	1		1		1											5		2	12	8	20

第33表 L26-a～e・M26-a～fブロック周辺部石材別石器組成表

母岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合計
黒曜石(Ob)					2	1				1											4			8		8
安山岩(An)																							1	1	2	3
流紋岩(Rh)																									5	5
頁岩(Sh)																					1			1		1
珪質頁岩(Csh)																							1	1		1
チャート(Ch)								1																1		1
砂岩(Sa)																									1	1
合計					2	1		1		1											5		2	12	8	20

13 M27-aブロック（第63～65図，第34・35表）

1）ブロックの概要

M27-aブロックは，調査範囲中央部のM27-09・10グリッドに分布する。ブロックの立地は，西に向かって大きく開口する谷頭である。

ブロックの規模と形状は，直径3mの範囲に19点の石器群が分布する。出土層位はⅣ層を中心に，30cmの高低差をもって包含されている（第63・64図）。

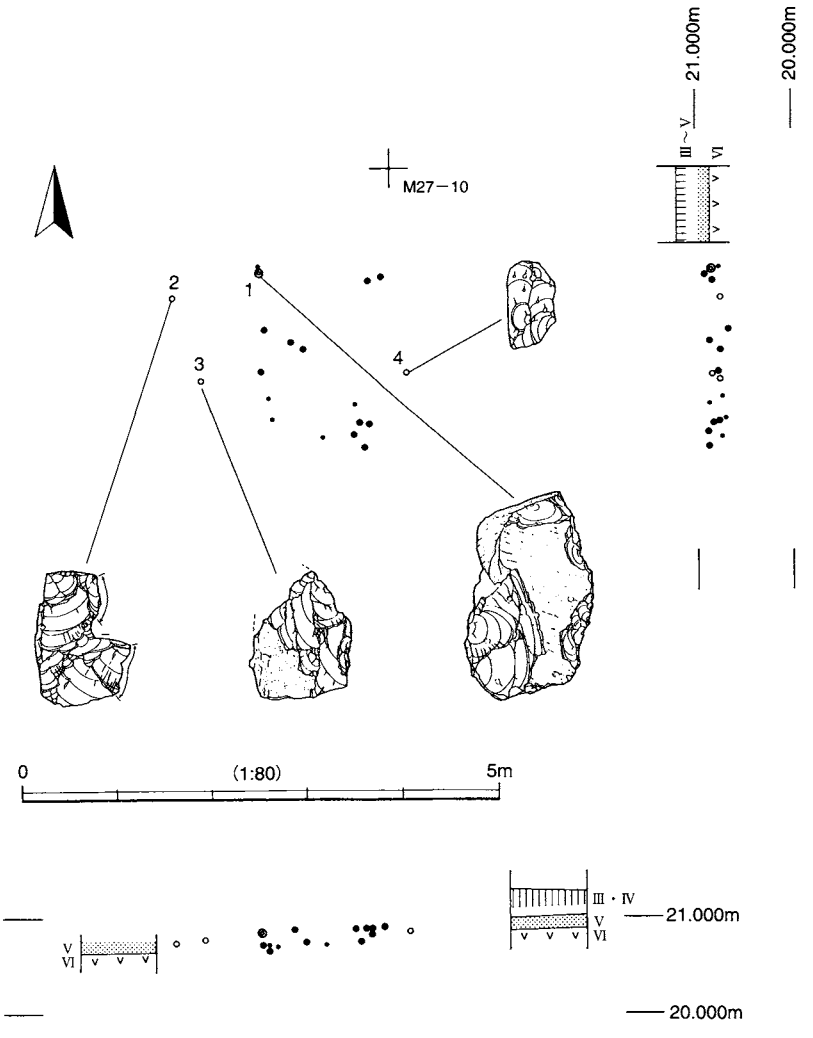
ブロックを構成する石器群は，掻器2点，削器1点，加工痕ある剥片1点，剥片10点，砕片5点である。石器石材は，黒曜石18点，チャート1点である。

2）母岩の特徴と内容

・M27-②：黒色不透明で夾雑物を多く含む黒曜石である。黄色みを帯びた黒色の縞が部分的にみられる。自然面は平滑な面が直交しており，原石は角礫と考えられる。石器群の内訳は，大型の掻器1点，削器1点，加工痕ある剥片1点で，総重量は55.3ｇである。本ブロックには，製品だけが分布する。

・M27-③：青灰色で節理の発達するチャートである。自然面は，黄色みを帯びる。加工痕ある剥片1点（25.4ｇ）の単独資料である。

・N27-⑩：漆黒色不透明で夾雑物を多く含む黒曜石である。自然面は，細かなあばたをもつ曲面となっている。本ブロックでは小型剥片1点の単独資料（1.0ｇ）であるが，N27-aブロックには6点の石器群が分布する。



第63図　M27-aブロック出土遺物分布図（1）　−石器別分布図−

なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石の剥片9点，砕片5点がある（総重量5.8ｇ）。黒色不透明でM27-②母岩に似たものと，漆黒色不透明でN27-⑩母岩に似たものの二者がみられるが，小型の資

第34表　M27-aブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M27-②(Ob)					1	1			1															3		3
M27-③(Ch)									1															1		1
M27-⑩(Ob)																					1			1		1
その他 (Ob)																					9	5		14		14
合　計					1	1			2												10	5		19		19

第35表　M27-aブロック石材別石器組成表

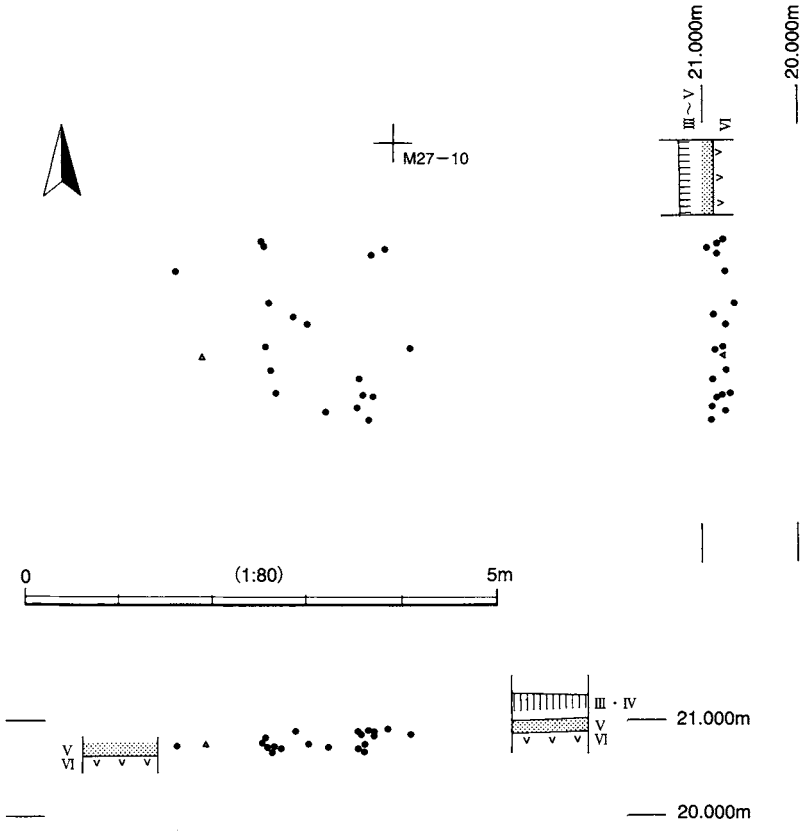
母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)					1	1			1												10	5		18		18
チャート(Ch)									1															1		1
合　計					1	1			2												10	5		19		19

料が中心であるため，いずれかに決定できなかった。

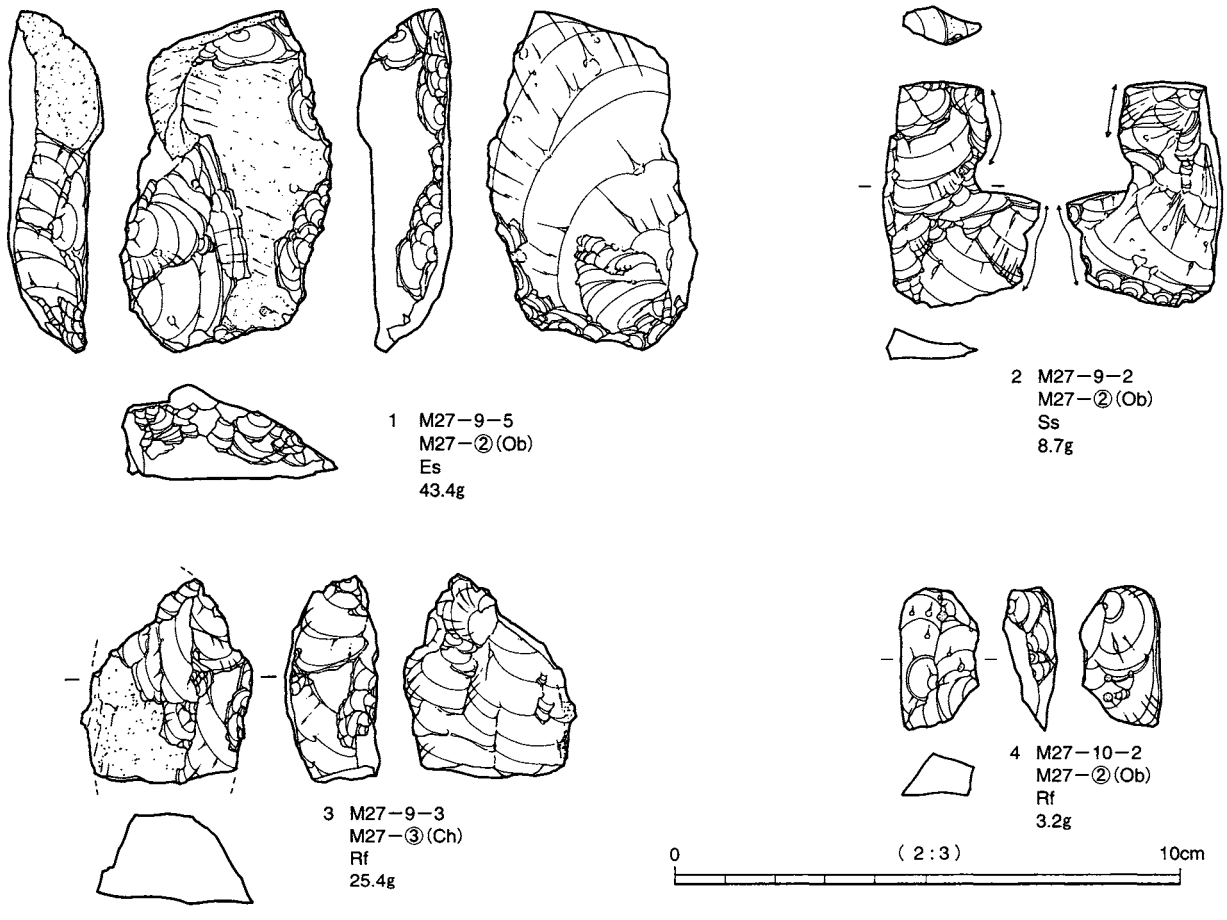
3）出土遺物（第65図）

掻器（第65図1） 1は，黒曜石の大型厚手で横長の剥片を用いた掻器である。実測図右側（裏面）下端には，正面から急角度の調整加工を行い，掻器特有の刃部を作り出している。正面左側縁には調整加工がなく，素材剥片の打面を残しているが，右側縁には大きさの不揃いな小剥離面が連続しており，装着を目的とした調整加工と考えられる。正面には，光沢のある自然面が広く残されている。

削器（第65図2） 2は，黒曜石の不定型な縦長剥片を用いた



第64図　M27-aブロック出土遺物分布図（2）　−石材別分布図−



第65図　M27-aブロック出土遺物実測図

削器である。素材の末端に平坦剥離による調整加工がみられる。

素材は，剥離時に打点で２つに割れた剥片で，鋭利な右側縁には微細な剥離痕が断続的にみられる。これを使用による痕跡とみると，端部の調整加工は，刃部を形成したものではない可能性もある。

加工痕ある剥片（第65図３・４） ３は，チャートの厚手で不定型の剥片を用いた，加工痕ある剥片である。右側縁の中央部に粗い調整がみられる。正面は，自然面と不定方向からの剥離面で構成されている。上下両端ともに欠損している。４は，黒曜石の横長剥片を用いた加工痕ある剥片である。右側縁に急角度の調整がみられるが，ナイフ形石器のように安定したものではない。

14　M27-b ブロック（第66～68図，第36・37表）

１）ブロックの概要

M27-b ブロックは，M27-a ブロックの南東に隣接し，M27-10 グリッドに分布する。ブロックの立地は，西に向かって大きく開口する谷頭である。

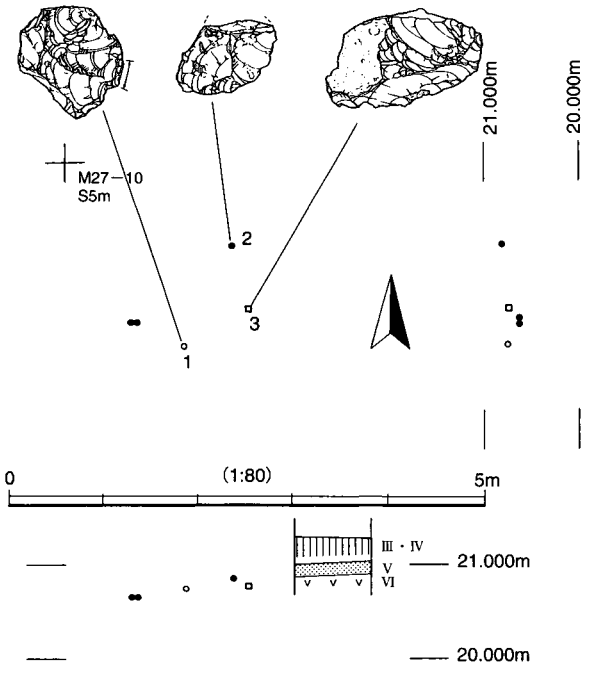
ブロックの規模と形状は，直径２ｍの範囲に５点の石器群が分布する。出土層位はⅤ層である（第66・67図）。

ブロックを構成する石器群は，使用痕ある剥片１点，剥片３点，石核１点である。石器石材は，すべて黒曜石である。

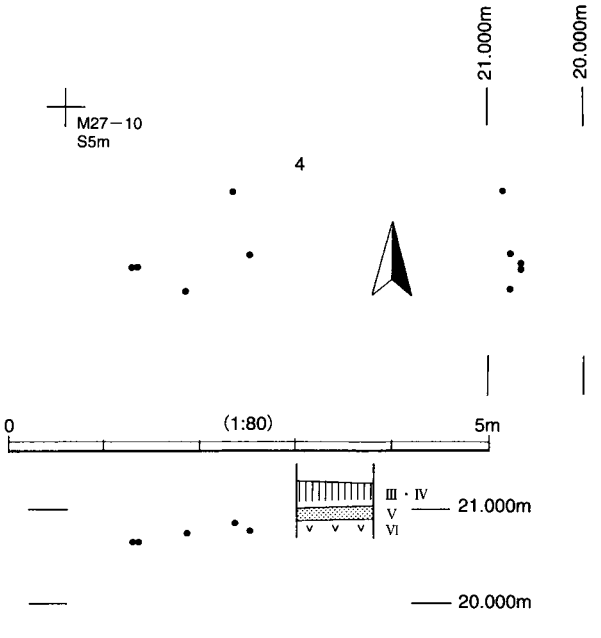
２）母岩の特徴と内容

・M27-①：黒色不透明で，大型白色の夾雑物を含む黒曜石である。全体に黒みが強く，黄褐色の途切れ途切れの縞が細かく入る。石核１点（24.3ｇ）の単独資料である。

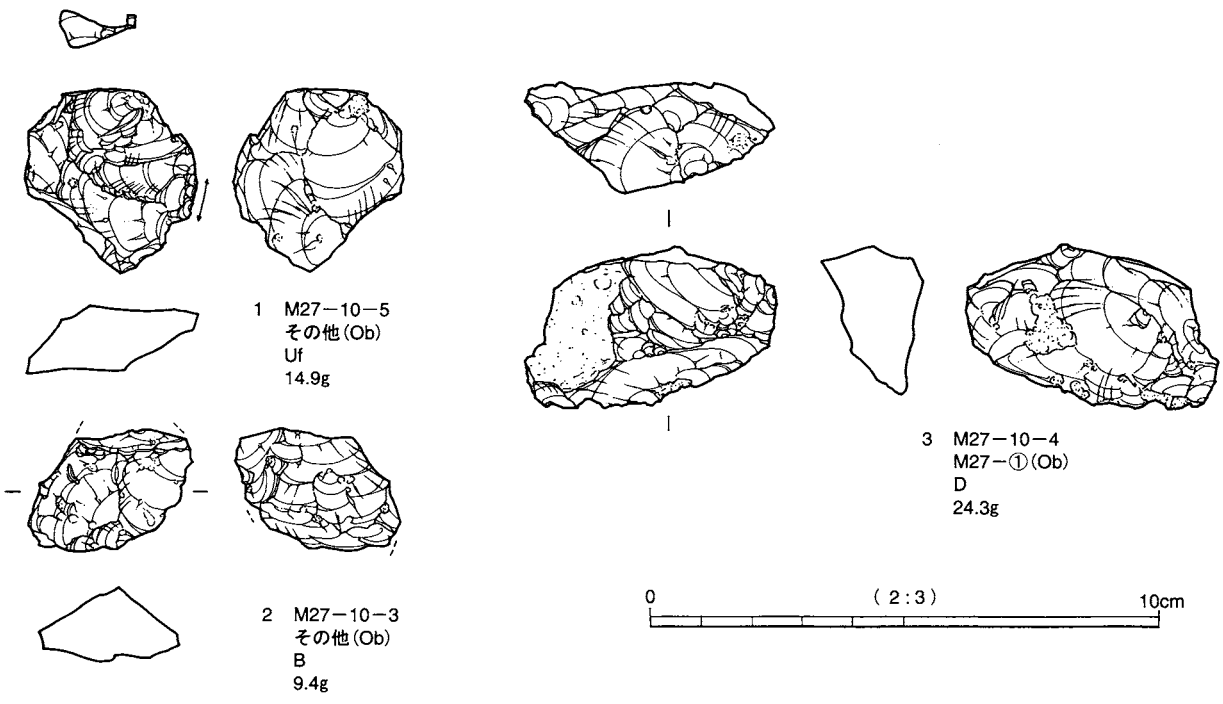
なお，母岩分類できなかった資料に黒曜石の使用痕ある剥片１点，剥片３点がある（総重量25.0ｇ）。



第66図　M27-b ブロック出土遺物分布図（１）
－石器別分布図－



第67図　M27-b ブロック出土遺物分布図（２）
－石材別分布図－



第68図　M27-bブロック出土遺物実測図

漆黒色のもの，灰黒色のものなど母岩は複数含まれるが，いずれも栃木県高原山産と考えられる。

3）出土遺物（第68図）

使用痕ある剥片（第68図1）　1は，黒曜石の使用痕ある剥片である。素材は，正面が多方向からの剥離面に被われている，不定型厚手の剥片である。鋭利な右側縁の一部に刃こぼれがみられる。

剥片（第68図2）　2は，黒曜石の不定型な剥片である。打面が欠損する。1と同様，正面の剥離方向は一定しない。

石核（第68図3）　3は，黒曜石の石核である。素材は不定型厚手の剥片である。素材剥片の打面部を作業面として小型の剥片を剥離している。

第36表　M27-bブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M27-①(Ob)																							1	1		1
その他 (Ob)										1											3			4		4
合　計										1											3		1	5		5

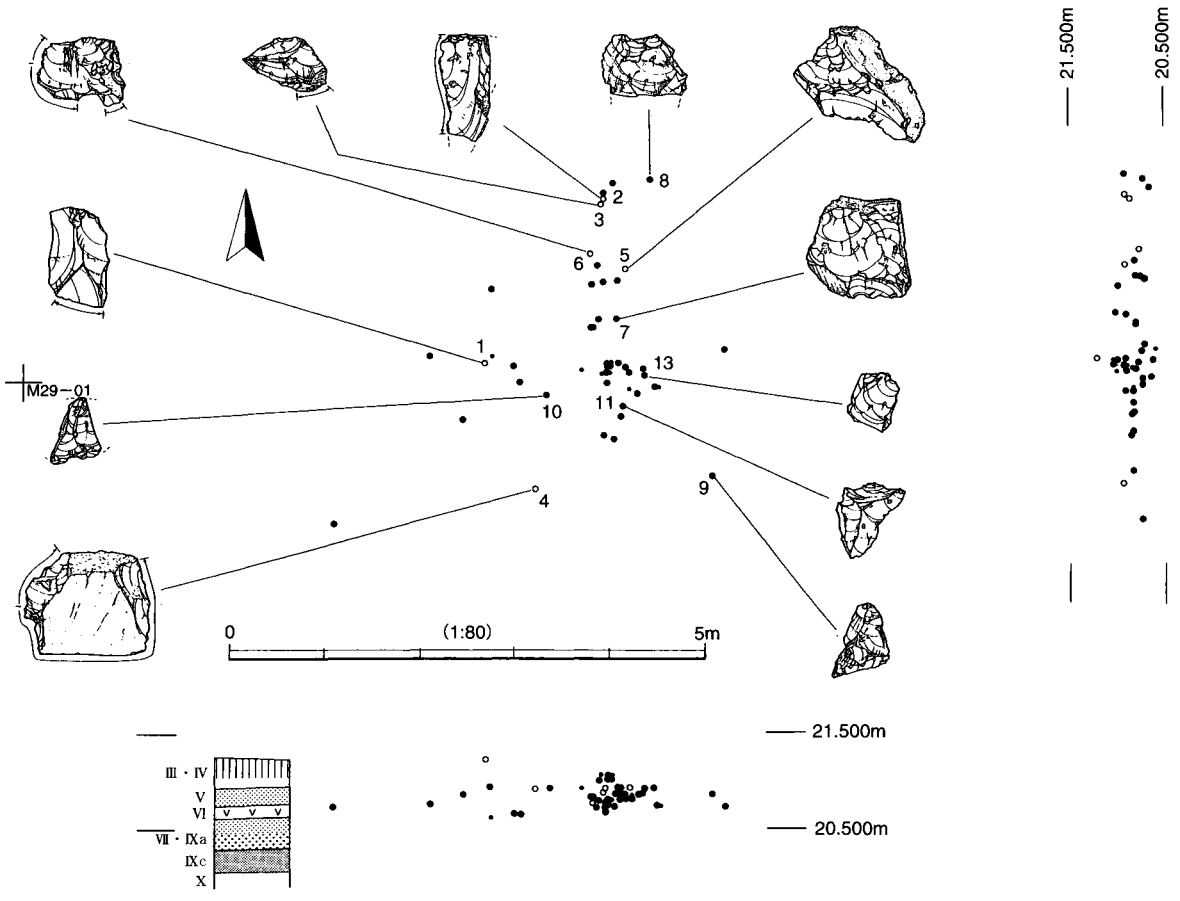
第37表　M27-bブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)										1											3		1	5		5
合　計										1											3		1	5		5

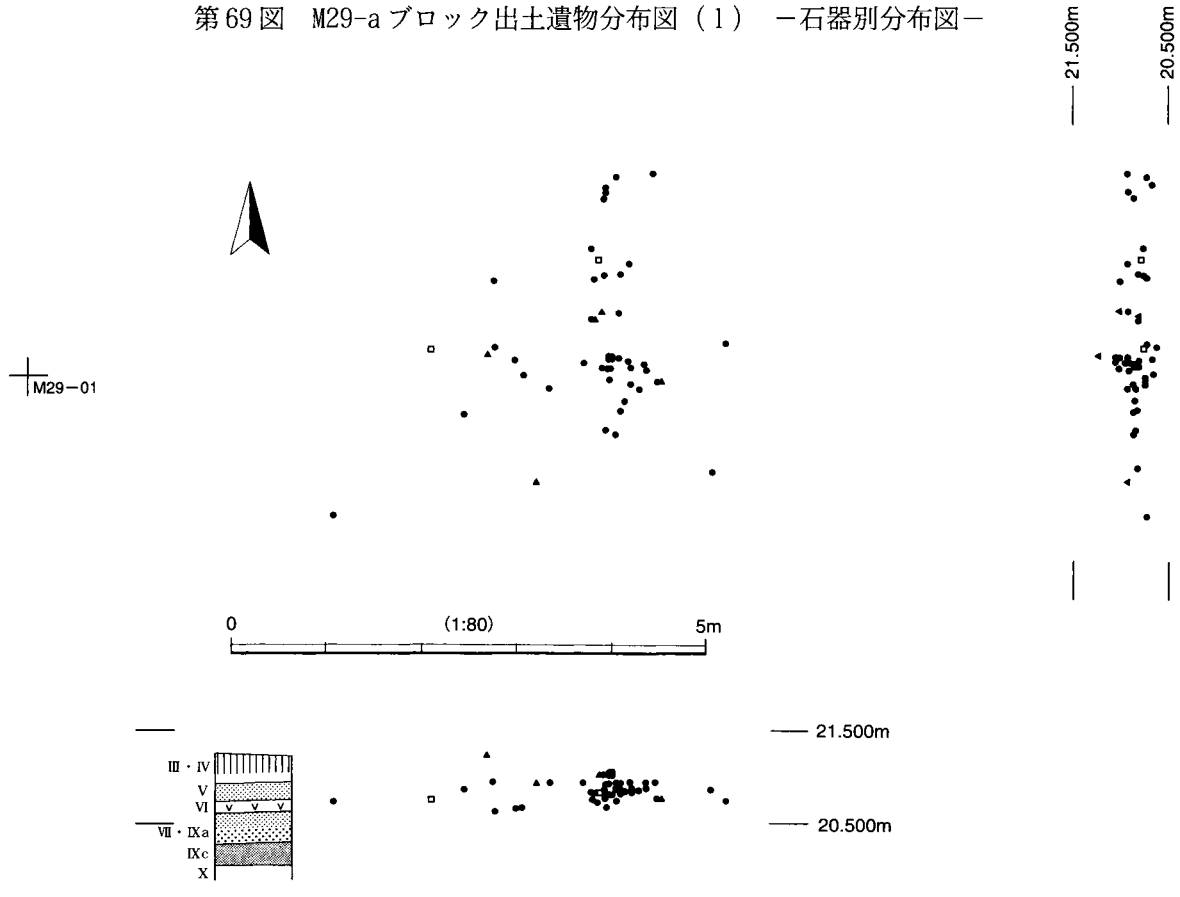
15　M29-aブロック（第69～71図，第38・39表）

1）ブロックの概要

M29-aブロックは，調査区南端のM28-91・M29-01グリッドに分布する。ブロックの立地は，西に延びる



第69図　M29-aブロック出土遺物分布図（1）　−石器別分布図−



第70図　M29-aブロック出土遺物分布図（2）　−石材別分布図−

幅40ｍ程の台地の中央平坦部である。

ブロックの規模と形状は，直径４ｍの範囲に49点の石器群が分布する。出土層位はＶ層を中心に，最大80㎝の高低差をもって包含される（第69・70図）。

ブロックを構成する石器群は，加工痕ある剥片１点，使用痕ある剥片５点，剥片36点，砕片７点である。石器石材は，黒曜石が42点と主体を占め，珪質頁岩４点，頁岩１点，瑪瑙２点が加わる。

2）母岩の特徴と内容

・M29-①：黒色不透明で，φ１㎜～２㎜の夾雑物を多く含む黒曜石である。青灰色の細い縞が数条みられる。自然面はザラザラで光沢がない。石器群の内訳は，使用痕ある剥片２点，剥片６点で，総重量は18.8ｇである。

・M29-②：黒色不透明で，夾雑物を少量含む黒曜石である。自然面は淡黒色で，内部は光沢に富む。石器群の内訳は，加工痕ある剥片１点，剥片１点で，総重量は3.9ｇである。

・M29-③：黒色不透明で，夾雑物を含む黒曜石である。M29-①やM29-②母岩に比べて，やや黄色みを帯びる。自然面は黒灰色で平滑である。石器群の内訳は，剥片２点で，総重量は4.4ｇである。

・M29-④：黒色不透明で，φ３㎜以上の夾雑物を多量に含む黒曜石である。自然面は黒灰色で，平滑面と曲面が近接してみられる。剥片１点（21.0ｇ）の単独資料である。

・M29-⑤：橙色と乳白色が混在する，良質の瑪瑙である。剥片２点で，総重量11.2ｇである。

・M29-⑥：橙褐色と灰白色，暗灰色の帯が入る珪質頁岩で，嶺岡産と考えられる。自然面も橙褐色，灰褐色を呈し，平滑な面が多い。使用痕ある剥片１点（16.4ｇ）の単独資料である。

・M29-⑦：淡褐色で黄灰色の節理をもつ東北系の頁岩である。明褐色及び暗褐色の縞が水平に入る。使用痕ある剥片１点（5.1ｇ）の単独資料である。

・M29-⑧：淡褐色から暗褐色にかけて漸移的に変化する珪質頁岩である。石器群の内訳は，剥片２点，砕片１点で，総重量2.6ｇである。

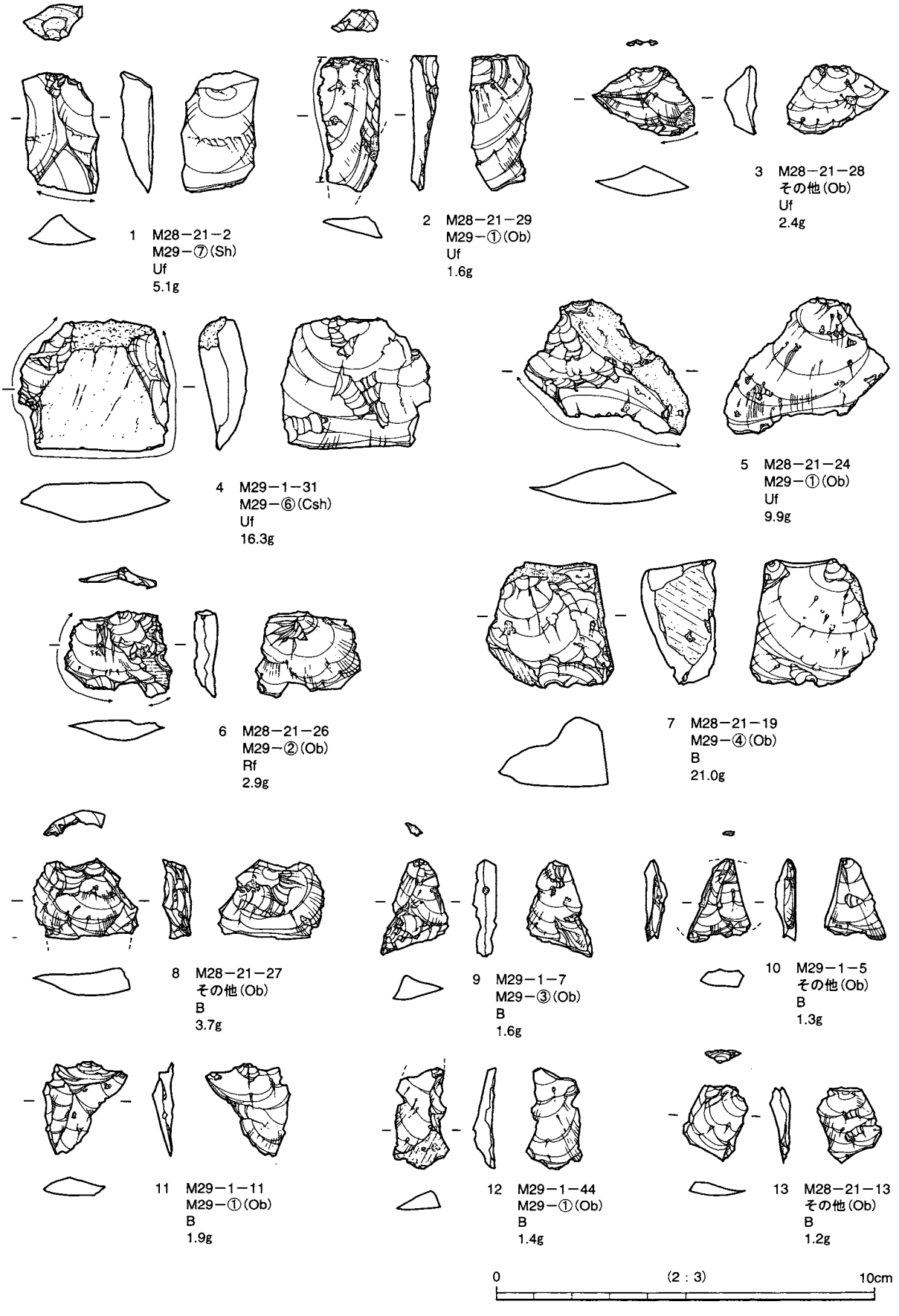
なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石の使用痕ある剥片１点，剥片22点，砕片６点がある（総重量16.3ｇ）。黒色不透明で夾雑物を含み，M29-①～M29-③のいずれかに類似するようであるが，小型の資

第38表　M29-aブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M29-①(Ob)										2											6			8		8
M29-②(Ob)									1												1			2		2
M29-③(Ob)																					2			2		2
M29-④(Ob)																					1			1		1
M29-⑤(Ag)																					2			2		2
M29-⑥(Csh)										1														1		1
M29-⑦(Sh)										1														1		1
M29-⑧(Csh)																					2	1		3		3
その他（Ob）										1											22	6		29		29
合　計									1	5											36	7		49		49

第39表　M29-aブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)									1	3											32	6		42		42
珪質頁岩(Csh)										1											2	1		4		4
頁岩(Sh)										1														1		1
瑪瑙・玉髄(Ag)																					2			2		2
合　計									1	5											36	7		49		49



第71図　M29-aブロック出土遺物実測図

料が多いこと，各母岩の中間的な様相にもみえることなどから，分類しなかった。

3）出土遺物（第71図）

加工痕ある剥片（第71図6） 6は，黒曜石の不定型な剥片を素材とする，加工痕ある剥片である。正面右側縁に粗い調整加工があり，左側縁から末端にかけては，刃こぼれがみられる。

使用痕ある剥片（第71図1～5） 1は，東北系頁岩の縦長剥片を用いた使用痕ある剥片である。幅広の平坦な打面で，頭部調整がみられる。正面には，主要剥離面と同一方向の剥離面と，90度直交する剥離面がある。末端部に刃こぼれがある。2・3・5は，黒曜石の不定型剥片を用い，鋭利な縁辺に刃こぼれがみられる。4は，嶺岡産珪質頁岩の不定型な剥片を用いた，使用痕ある剥片である。正面中央には自然面が大きく残り，その両側に方向の一定しない剥離面がある。素材の打面を除く各縁辺に刃こぼれがみられる。

剥片（第71図7～13） いずれも黒曜石の中・小型不定型な剥片である。正面を構成する剥離面の方向は，主要剥離面と概ね同方向である。

16 N27-aブロック（第72～90図，第40・41表）

1）ブロックの概要

N27-aブロックは，調査区中央部のN27-14グリッドに分布する。ブロックの立地は，台地中央の平坦面である。

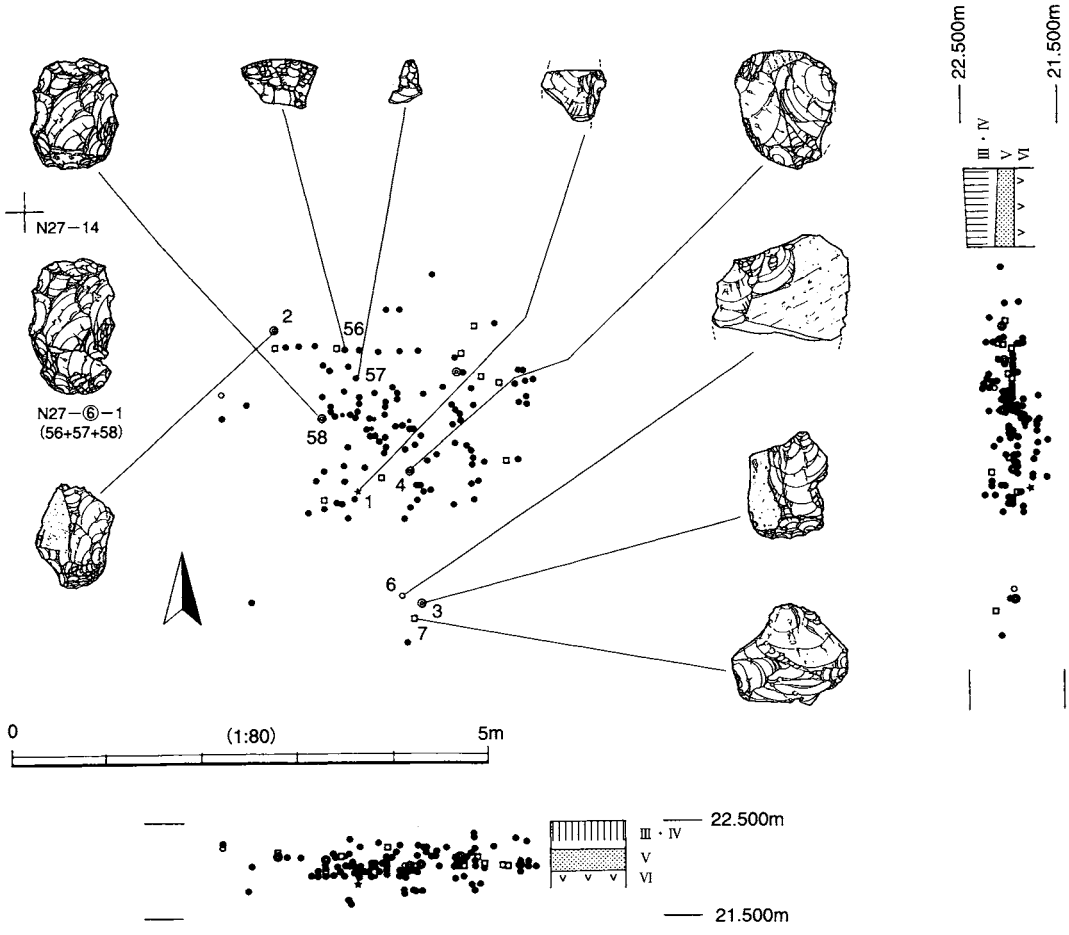
ブロックの規模と形状は，直径4mの範囲に127点の石器群が分布する。出土層位はV層を中心に，50cm程の高低差をもって包含されている（第72～79図）。後述するとおり，良好な接合資料が得られたが，各母岩の構成石器ともブロック全域に広がっており，特定の母岩がブロックの一角に偏在して分布する傾向はみられなかった。また，剥片剥離作業に関連する資料とナイフ形石器，掻器，使用痕ある剥片などとの間にも，分布上有意な偏りは認められなかった。多様な行為が累積的になされた結果なのか，不要品としてまとめて捨てられたものか，判断し得ない状況である。

ブロックを構成する石器群は，ナイフ形石器1点，掻器5点，加工痕ある剥片1点，使用痕ある剥片1点，剥片104点，砕片5点，石核10点である。石材は，加工痕ある剥片1点が粘板岩である他は，すべて黒曜石である。本ブロックは，第3文化層の他のブロックと同様，栃木県高原山産と考えられる黒曜石で構成されているが，黒曜石126点の内79点は10母岩に分けられ，5母岩は剥片剥離作業に係る良好な接合資料を得ることができた。また，掻器の刃部再生過程を知るうえで重要な接合資料もある。

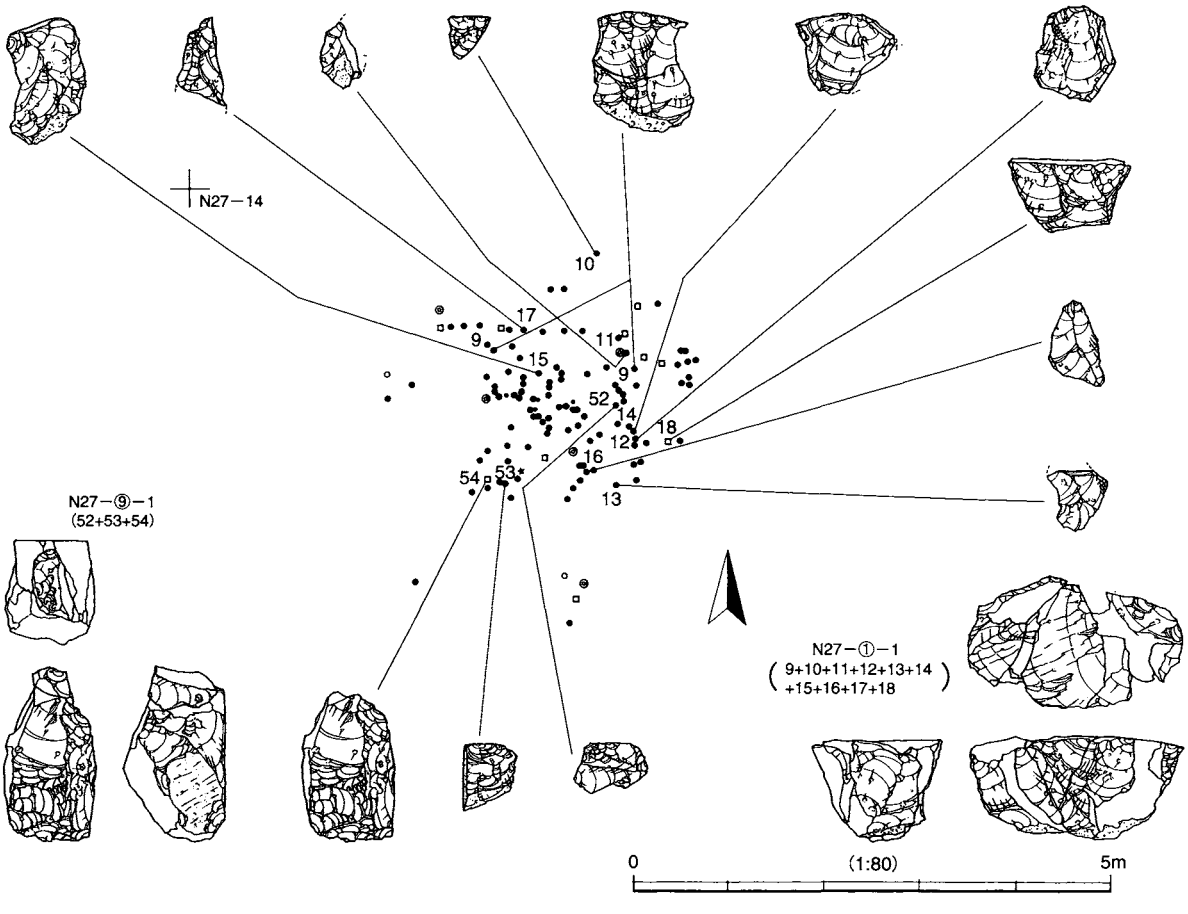
2）母岩の特徴と内容

・N27-①：黒色不透明で光沢があり，φ1mm程の夾雑物を多く含む黒曜石である。夾雑物は黄褐色で不整形のものと灰色で球形のものが混在する。灰色の細い線が，数条平行している。自然面は黒灰色で，ごつごつしている。石器群の内訳は，剥片10点（接合して9個体），石核1点で，全点が接合してひとまとまりになる。総重量は，71.2gである。接合資料からみて，原石が粗く分割され，1/3程になったものが本ブロックに持ち込まれたと考えられる。本ブロックに限って分布する。

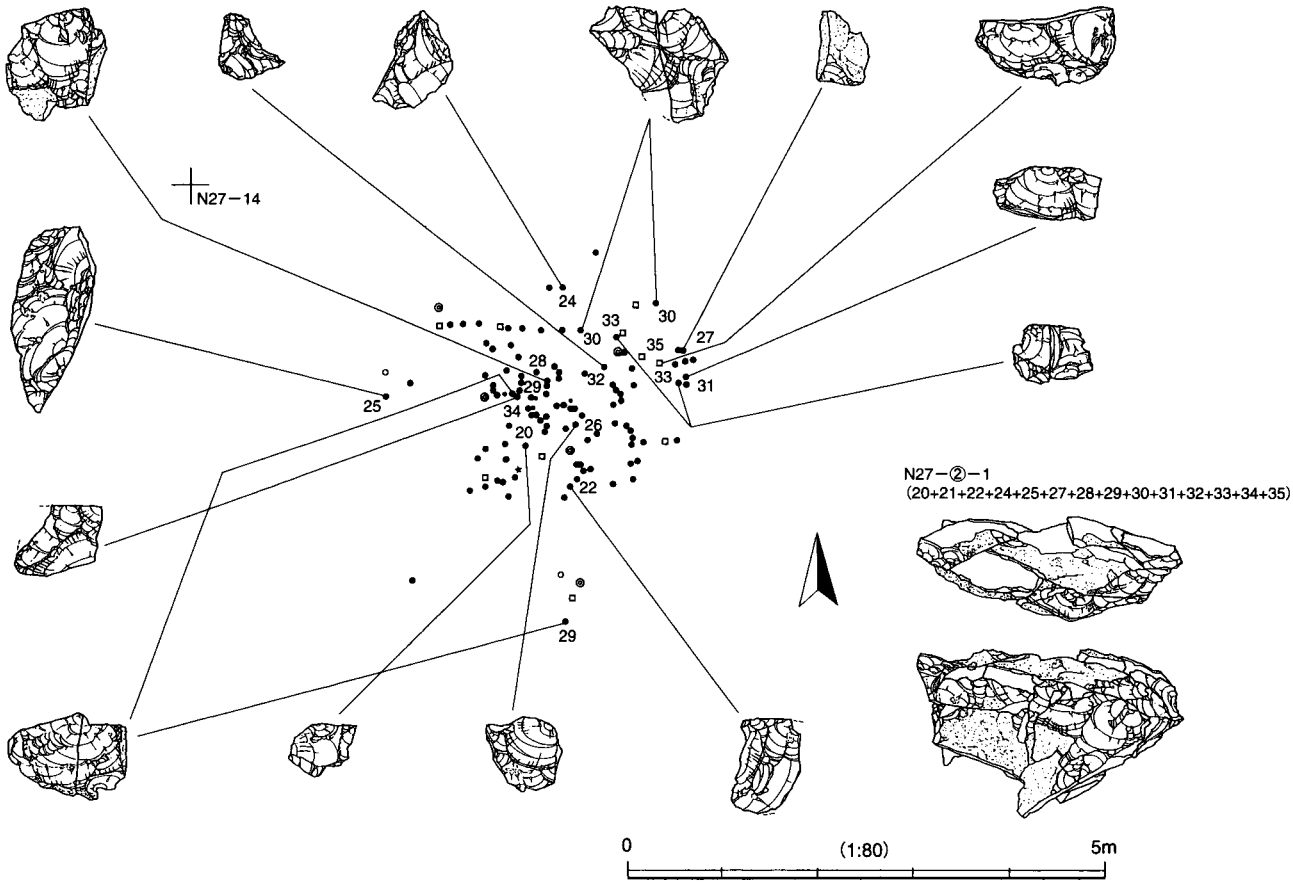
・N27-②：黒色不透明で光沢があり，φ1mm～3mmの夾雑物を多く含む黒曜石である。自然面は黄褐色で，黒灰色の細かな線が多数入る。全体に磨滅しており，緩やかな曲面となっている。石器群の内訳は，剥片17点（接合して14個体），石核1点で，このうち剥片16点（接合して13個体）と石核1点が接合してひとまとまりになる。総重量は102.3gである。大型厚手の剥片として持ち込



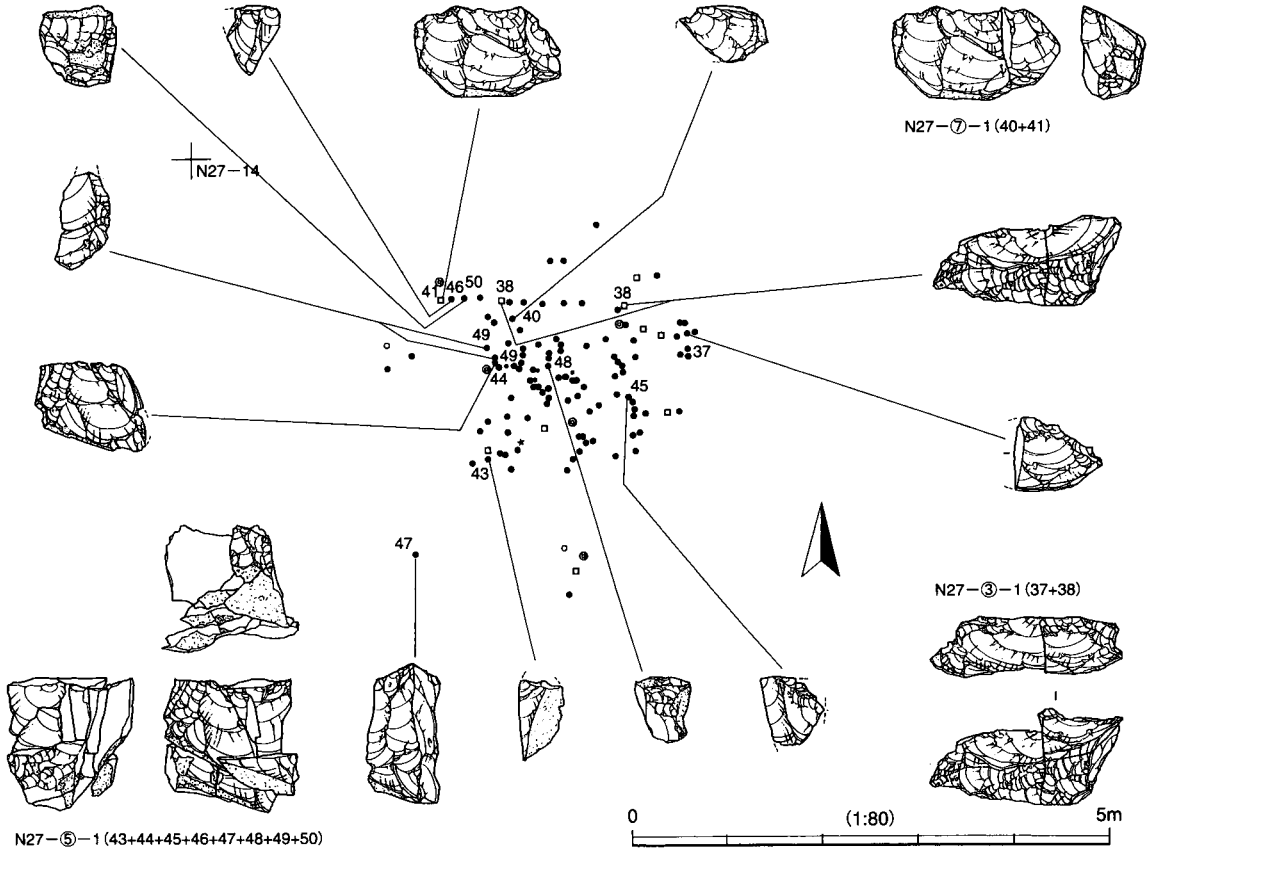
第72図　N27-a ブロック出土遺物分布図（1）　－石器別分布図（1）－



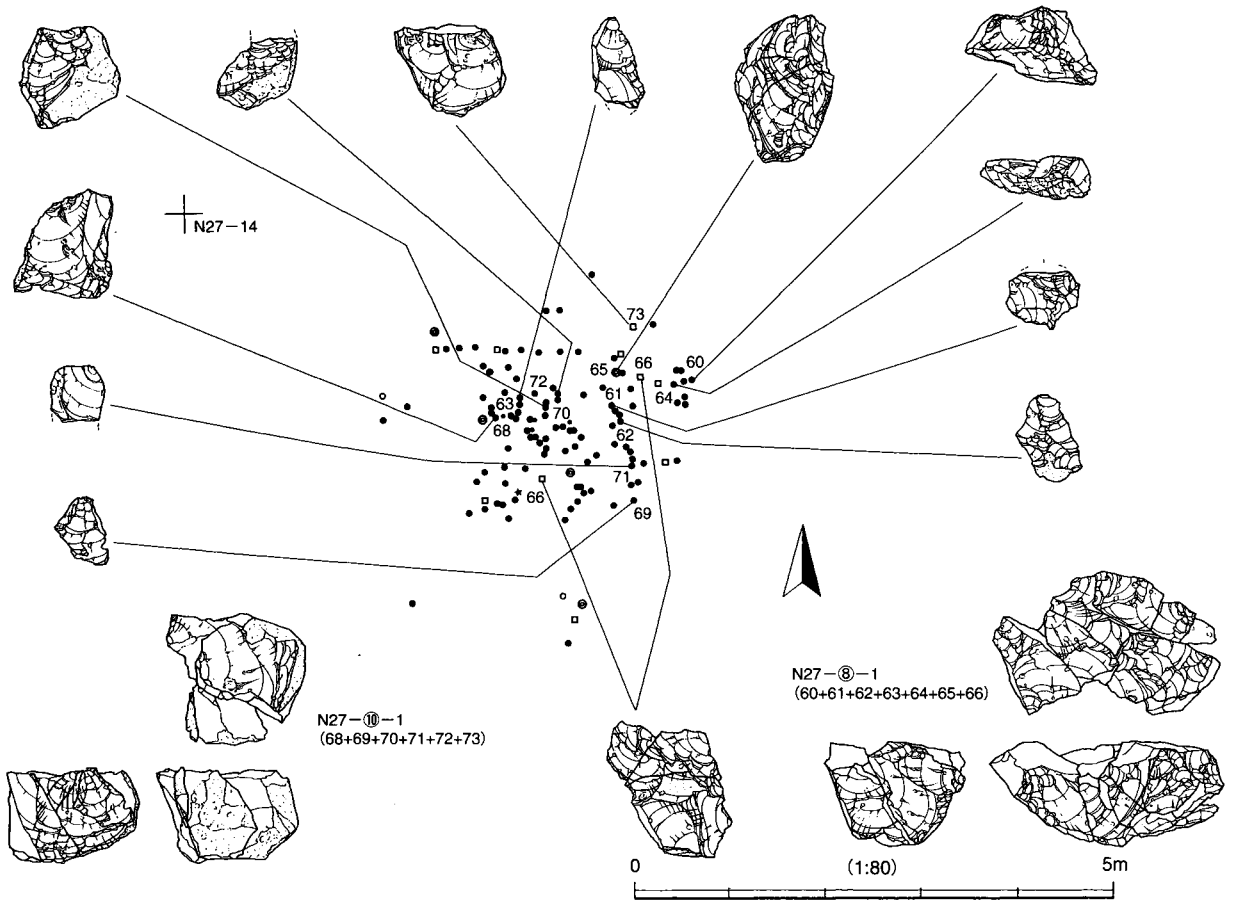
第73図　N27-a ブロック出土遺物分布図（2）　－石器別分布図（2）－



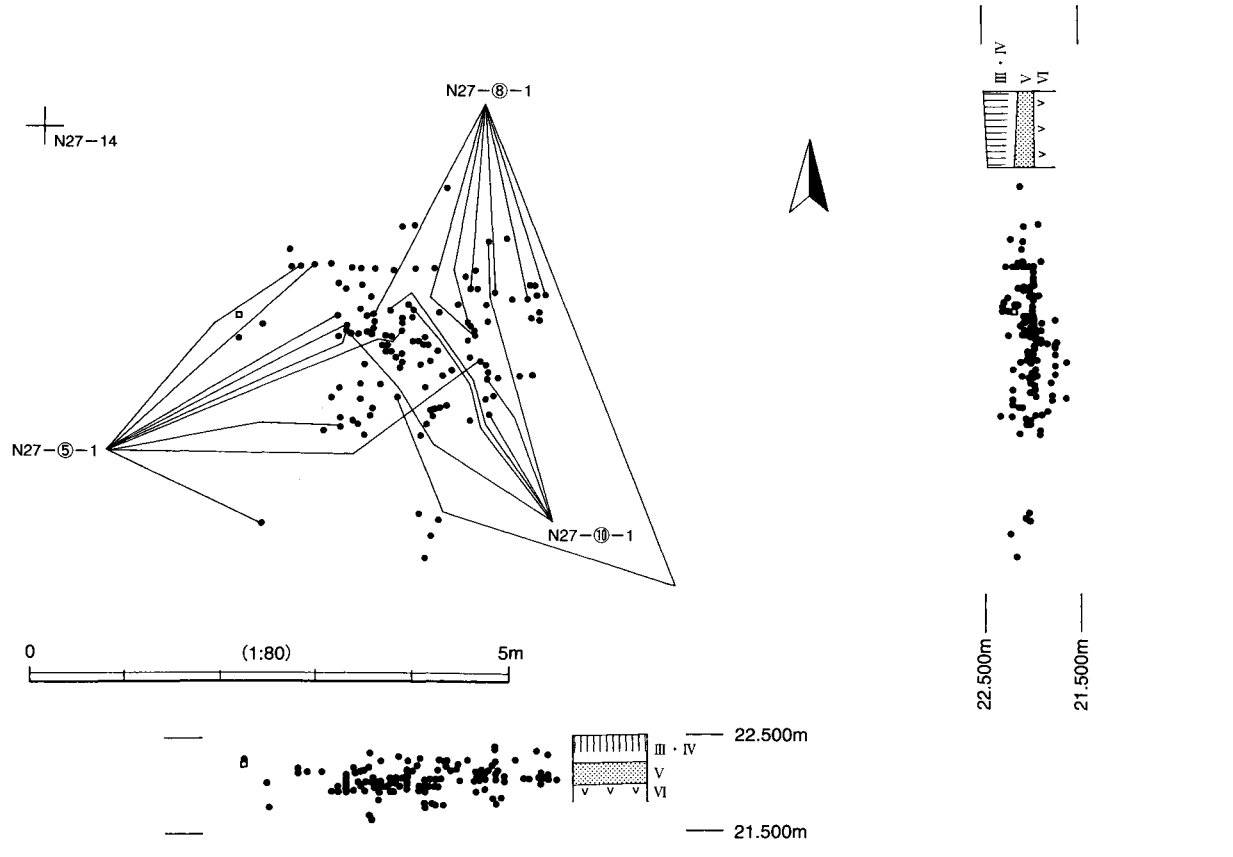
第74図　N27-aブロック出土遺物分布図（3）　−石器別分布図（3）−



第75図　N27-aブロック出土遺物分布図（4）　−石器別分布図（4）−



第76図　N27-a ブロック出土遺物分布図（5）　−石器別分布図（5）−



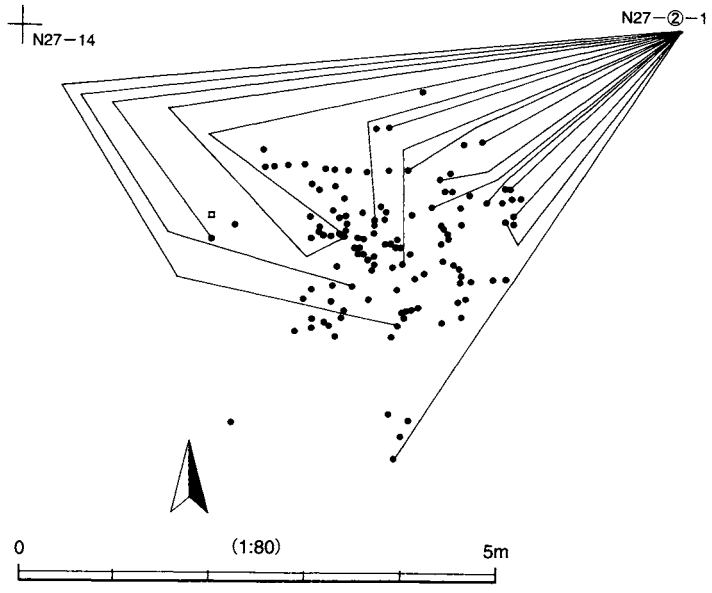
第77図　N27-a ブロック出土遺物分布図（6）　−石材別分布図（1）−

まれ，剥片剥離作業がなされたと考えられる。本ブロックに限って分布する。

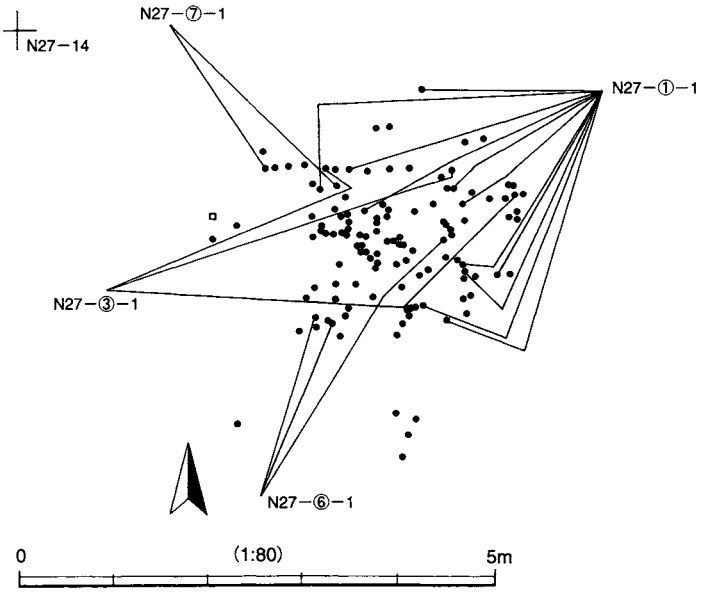
・N27-③：黒色不透明で光沢があり，φ１㎜～４㎜の夾雑物を多く含む黒曜石である。石器群の内訳は，剥片１点，石核２点（接合して１個体）で，総重量は27.0ｇである。３点すべてが接合する。本ブロックに限って分布する。

・N27-⑤：黒灰色不透明で，φ１㎜～２㎜の夾雑物が散在する黒曜石である。部分的に灰色みの強いところもある。自然面は黄褐色で，光沢のある平滑面である。原石は，接合資料から判断して，平滑な自然面が数面ある，小型の角礫と考えられる。石器群の内訳は剥片20点で，このうち剥片10点（接合して７個体）がひとつに接合する。総重量は54.8ｇである。本ブロックに限って分布する。

・N27-⑥：黒色不透明で，φ１㎜～２㎜の夾雑物を多く含む黒曜石である。自然面は残されていない。内面は光沢のある黒色で，灰色の細い縞が１条みられる。石器群の内訳は，掻器１点と刃部再生剥片２点で，すべて接合する。本ブロックの外で製作され，持ち込まれた掻器に刃部再生作業を行ったと考えられる。総重量は23.0ｇである。本ブロックに限って分布する。



第78図　N27-aブロック出土遺物分布図（７）
－石材別分布図（２）－



第79図　N27-aブロック出土遺物分布図（８）
－石材別分布図（３）－

・N27-⑦：黒灰色不透明で，φ１㎜程の夾雑物が散在する黒曜石である。自然面は黄褐色で光沢があり，平滑面が多面体となる角礫である。N27-⑤と極めて類似した質感であるが，別母岩である。石器群の内容は，剥片１点，石核１点で，相互に接合する。接合資料からみて，原石は拳の半分程度の小型のものと考えられる。総重量は31.2ｇである。本ブロックに限って分布する。

・N27-⑧：青灰色を帯びた黒色不透明で光沢があり，φ１㎜～４㎜の夾雑物を多く含む黒曜石である。自然面は黒灰色で，比較的磨滅している。石器群の内訳は，掻器１点，剥片７点，石核２点（接合し

て１個体）で，このうち掻器１点，剥片５点，石核２点（接合して１個体）が接合してひとまりになる。総重量は82.5ｇである。N27-①と類似した分割礫の状態で，本ブロックに持ち込まれたと考えられる。本ブロックに限って分布する。

・N27-⑨：黒色不透明で，φ１㎜～３㎜の夾雑物を多く含む黒曜石である。黒色で平滑な自然面と，黄灰色で平滑な節理面があり，内面，自然面，節理面ともに強い光沢をもつ。石器群の内訳は，剥片２点と石核１点で，３点とも接合する。総重量は，60.6ｇである。本ブロックに限って分布する。

・N27-⑩：黒色不透明で，φ１㎜～４㎜の夾雑物を含む黒曜石である。内部は光沢があり，灰色の細い縞が数条平行する。自然面は灰色がかった黒色で光沢はないが，互いに直交する平坦な面があり，もともと角礫であったと考えられる。石器群は，剥片５点と石核１点で，すべて接合する。総重量は58.5ｇである。本ブロックに限って分布する。

・N27-⑪：黒色不透明で細かな夾雑物が散在する黒曜石である。自然面は，黒灰色で比較的平滑ではあるが光沢はない。石器群は，掻器１点とその刃部再生剥片１点で，互いに接合する。総重量は9.9ｇである。

なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石のナイフ形石器１点，掻器２点，使用痕ある剥片１点，剥片38点，砕片５点，石核１点（総重量79.9ｇ）と粘板岩の加工痕ある剥片１点（3.8ｇ）がある。黒曜石の石器群は，いずれも黒色不透明で夾雑物を多く含む点で一致しており，上記の母岩に帰属すべき資料も含まれていると考えられる。しかし，特徴が不明瞭なものや小型のものなど，不確実なものについては，最終的に各母岩から除外した。肉眼観察では，すべて栃木県高原山産と考えられる。

３）出土遺物（第80～90図）

ナイフ形石器（第80図１）　１は横長剥片を素材とするナイフ形石器である。石器の上下両端が大きく欠損しており，本来の形態は不明であるが，素材剥片の末端側に調整加工がみられることから，切出形の可能性が高い。

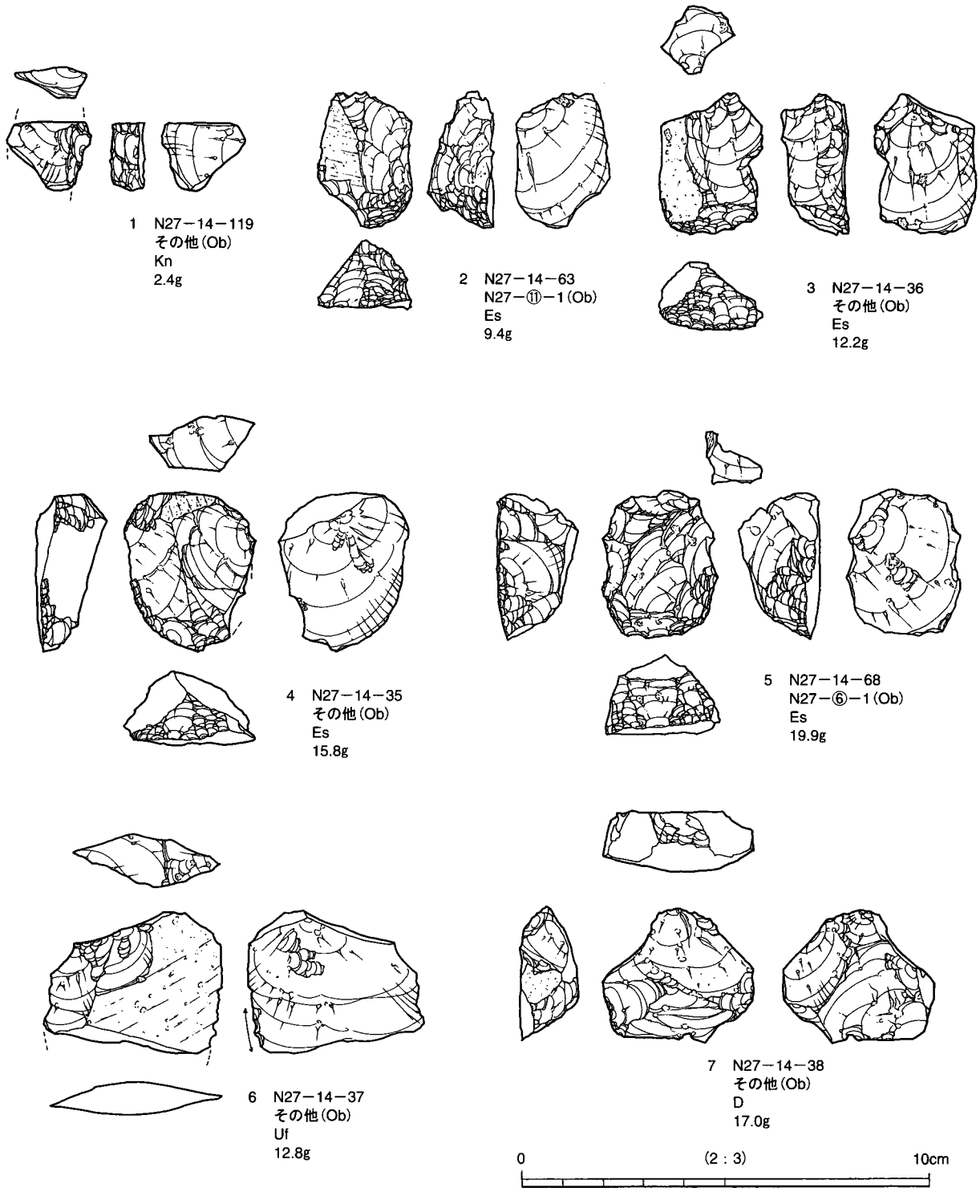
掻器（第80図２～５）　２～５は，中型厚手で不定型の剥片を素材とする掻器である。素材や刃部の位置は各例とも共通する。３～５は，素材の打面を残し，端部側に刃部を作り出している。２は素材剥片の打面を除去してはいるが，素材の用い方や刃部の位置は他の例に類似する。５は刃部とその両側縁に調整加工がみられるが，他は刃部に限られた調整である。なお，２および５は刃部再生に関連する接合資料が得られており，後述する。以上の４点は，本ブロックに製品として持ち込まれた可能性が高い。一方，N27-⑧母岩は，掻器１点が剥片や石核と接合しており，本ブロックで製作されたことがわかる。

使用痕ある剥片（第80図６）　６は，中型薄手の不定型剥片を用いた使用痕ある剥片である。正面右側は平滑な自然面で，その右側の鋭利な縁辺に刃こぼれがみられる。石器下半部は欠損する。

石核（第80図７）　７は，中型厚手の剥片を用いた石核である。正面中央部に素材の主要剥離面を大きく残し，その両側には小型不定型の剥片を生産した形跡がある。

４）接合資料とその関連資料（第81図）

・N27-①（第81図８～18）　８は，黒曜石の剥片10点（接合して９個体；９～17）と石核１点（18）の接合資料である。本接合資料からみた剥片剥離作業は，以下のとおりである。①；原石を粗く分割する。分割面は実測図８の上面にある平坦な面である。②；分割面を打面として，剥片剥離作業を開始する。打面調整はなく，平坦な分割面をそのまま利用し，石核の各面から，自然面の残る剥片を剥離したと考えられる。



第80図　N27-aブロック出土遺物実測図（1）

なお，実測図正面及び左側面にみられる下端からの剥離面は，原石の分割に伴う古い剥離面の可能性がある。また，実際に本母岩に帰属する，自然面に被われた剥片が全くみられないことから，②の段階までは，本遺跡以外の場所で実施されたと考えられる。石核上面の平坦面が傷だらけであることも，本母岩が持ち運ばれてきた傍証のひとつになると思う。もちろん，剥片剥離作業に伴って，滑り止めのために打面を擦った可能性も残されてはいるが，本文化層の剥片の打面を観察した結果，その大半に同様の擦痕がみられないため，

この考えは採らない。③；石核側面に自然面のない状態で，本格的に剥片剥離作業を行い，9から17までの剥片を連続して生産している。得られた剥片は，幅広不定型な，縦長剥片である。最終的に石核の全面から剥片が剥離され，石核（18）が残される。

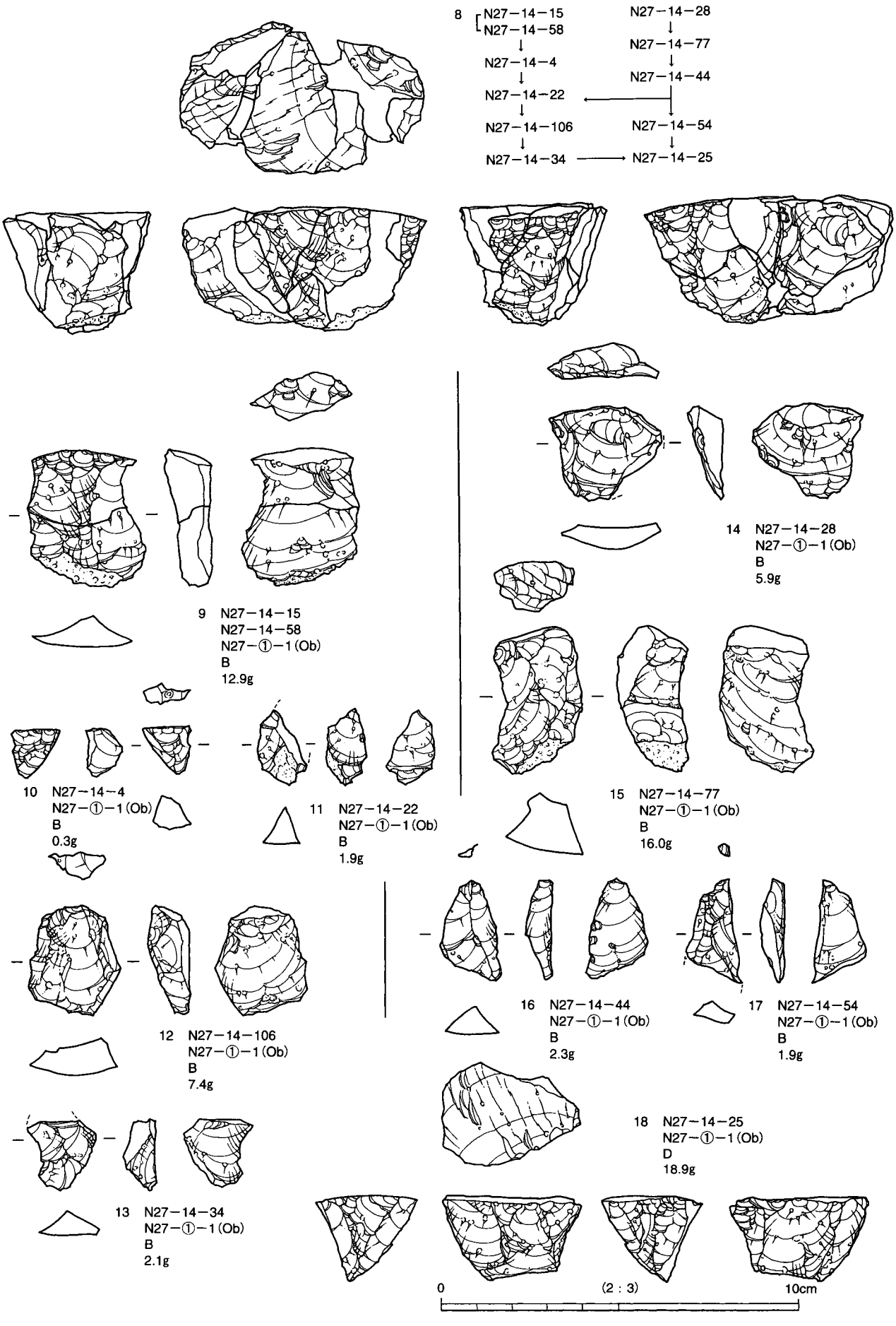
・N27-②（第82～84図19～35）　19は，黒曜石の剥片16点（接合して13個体；20～22・24・25・27～34）と石核1点（35）の接合資料である。本接合資料からみた剥片剥離作業は，以下のとおりである。①；原石から大型厚手の剥片を剥離し，石核の素材とする。実測図19の裏面には，左方向からの大きな剥離面が部分的に残っているが，これが素材剥片の主要剥離面である。なお，この段階については本ブロック外で行われ，石核素材の大型剥片が持ち込まれたと考えられる。②；素材剥片の打面部（実測図19正面右端）を交互剥離によって除去する。③；素材の主要剥離面を作業面とし，実測図19裏面の上位から，中・小型不定型の剥片を生産する。この過程で20～22が剥離され，実測図23の状態となり，さらに24・25を剥離して，実測図26の状態となる。④；実測図26の正面を作業面として，全面ないし部分的に自然面の残る中・小型の剥片を生産する（27～29）。27は下位の打面から，28・29は上位の打面から剥離している。⑤；再び作業面を裏面とし，求心的な打点移動で剥片を得ている。上位の打面から30・31が，右横位から32が，下位から33が剥離される。最終的な石核は，交互剥離と求心的な打点移動の形跡を残している。得られた剥片は，企画性に乏しい中・小型不定型の剥片であるが，残された資料は，横長剥片が多い。

・N27-③（第85図36～38）　36は，黒曜石の剥片1点（37）と石核2点（接合して1個体；38）の接合資料である。まず，大型厚手の剥片を石核の素材とし，素材剥片の平坦な主要剥離面（実測図36の裏面）を打面，正面を底面として横長剥片を連続して生産している。打面調整はみられない。

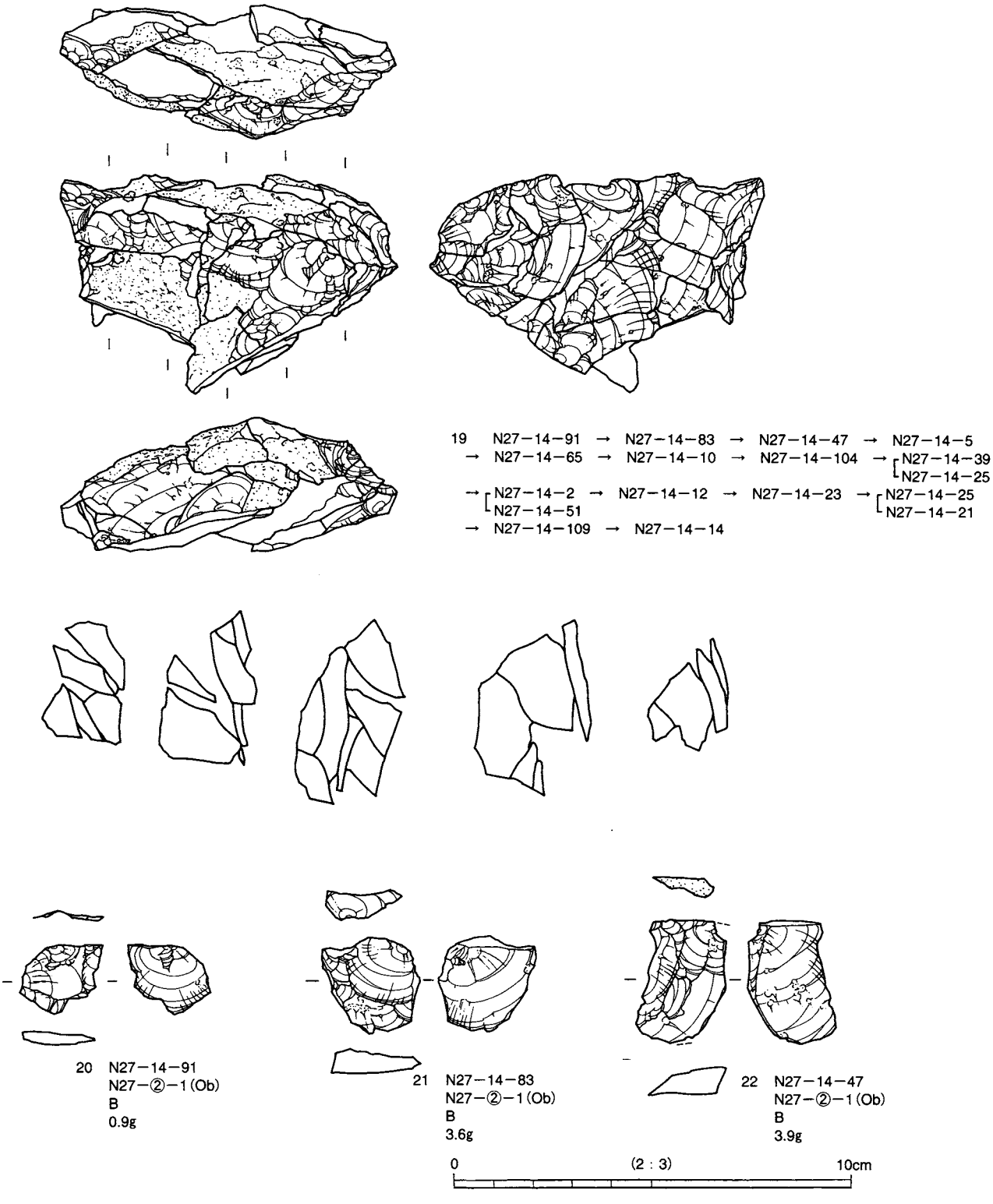
・N27-⑤（第86図42～50）　42は，黒曜石の剥片10点（接合して8個体；43～50）の接合資料である。接合資料からみた，剥片剥離作業は，以下のとおりである。①；実測図42の正面，裏面，上面，下面の各面に自然面が残されていることから，小型の角礫を石核素材とし，本ブロックで剥片剥離作業を開始したと考えられる。②；実測図42正面を作業面，右側に打面を設定して，43を剥離する。③；②の作業面と打面を入れ替えて，剥片を数枚剥離する（実測図42の右側面の剥離面）。④；③の作業面を打面，実測図42の下端を作業面として，剥片を剥離する。⑤；平滑な自然面を打面（実測図42の上面）に用い，44→45→47→46・48→49の順で剥片剥離がなされる。⑥；実測図42の下面を作業面として，左方向から50を剥離する。⑦；石核は打面と作業面を頻繁に転移し，サイコロ状になったと考えられるが，本ブロックには残されていない。得られた剥片は，形状の整っていない横長剥片（44）や縦長剥片（49）などで，企画性に乏しい。

・N27-⑥（第87図55～58）　55は，黒曜石の掻器1点（58）と刃部再生剥片2点（56・57）の接合資料である。55は，正面と裏面の剥離方向が一致しない，中型厚手の不定型剥片を素材とする掻器である。石器長軸と素材の剥離軸は斜交する。刃部再生は，まず刃部中央を大きく折り取る（56）。次に，刃部中央にできた折れ面の両側を細かく調整し，刃部の形状を整える（57）。この作業に関連した側面調整はなく，刃部だけがそのまま後退し，寸詰まりの掻器になる（58）。なお，打面は光沢が少なくくすんでおり，正面の他の剥離面とは状況が異なる。裏面は使用されたためか，あるいは石器の状態で長く持ち運ばれたためか，傷だらけである。

・N27-⑦（第85図39～41）　39は，剥片1点（40）と石核1点（41）の接合資料である。拳の半分程度の黒曜石の角礫を用い，平滑な自然面を打面として，小型不定型の剥片を生産するものである。

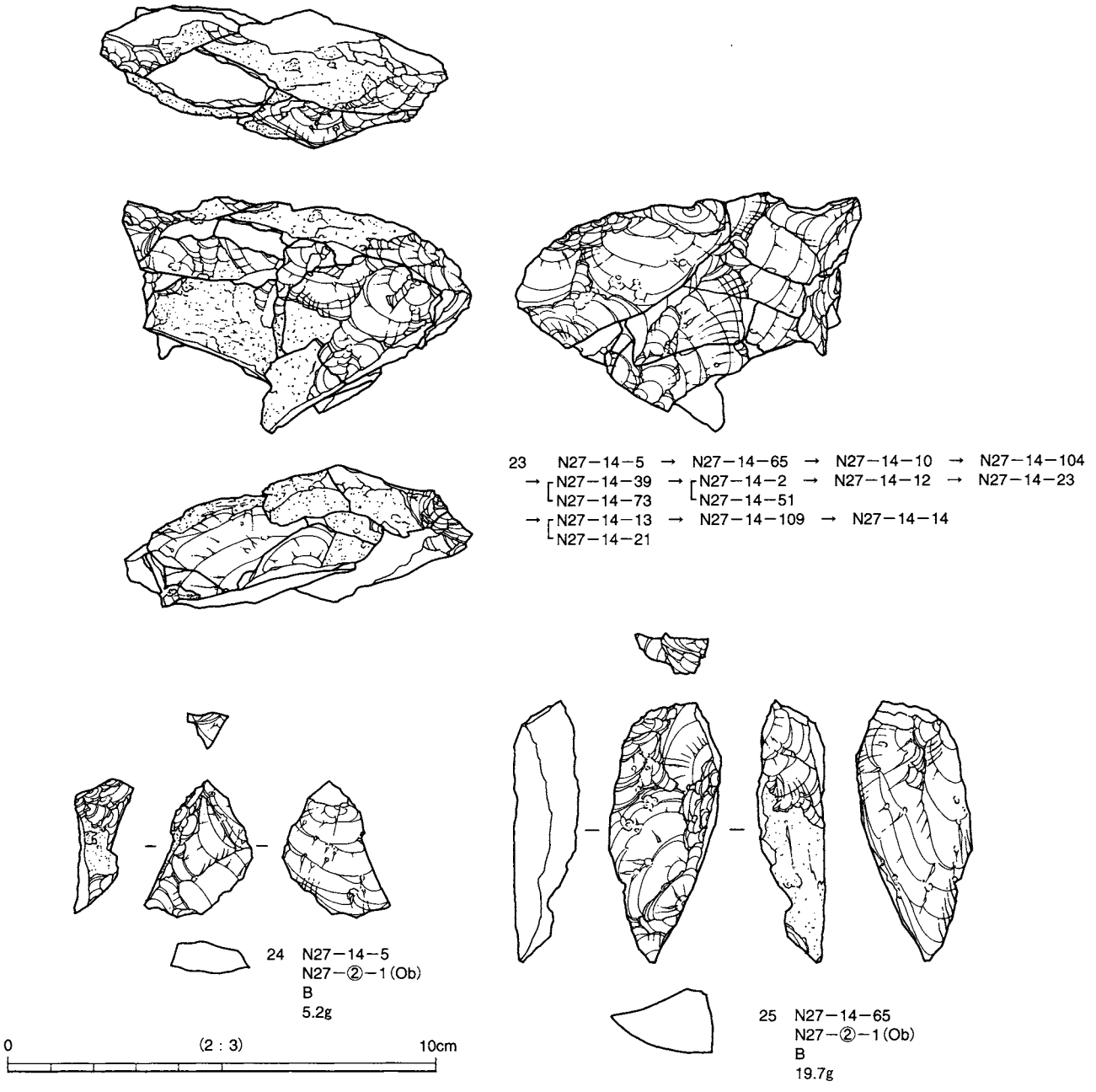


第81図　N27-aブロック出土遺物実測図（2）



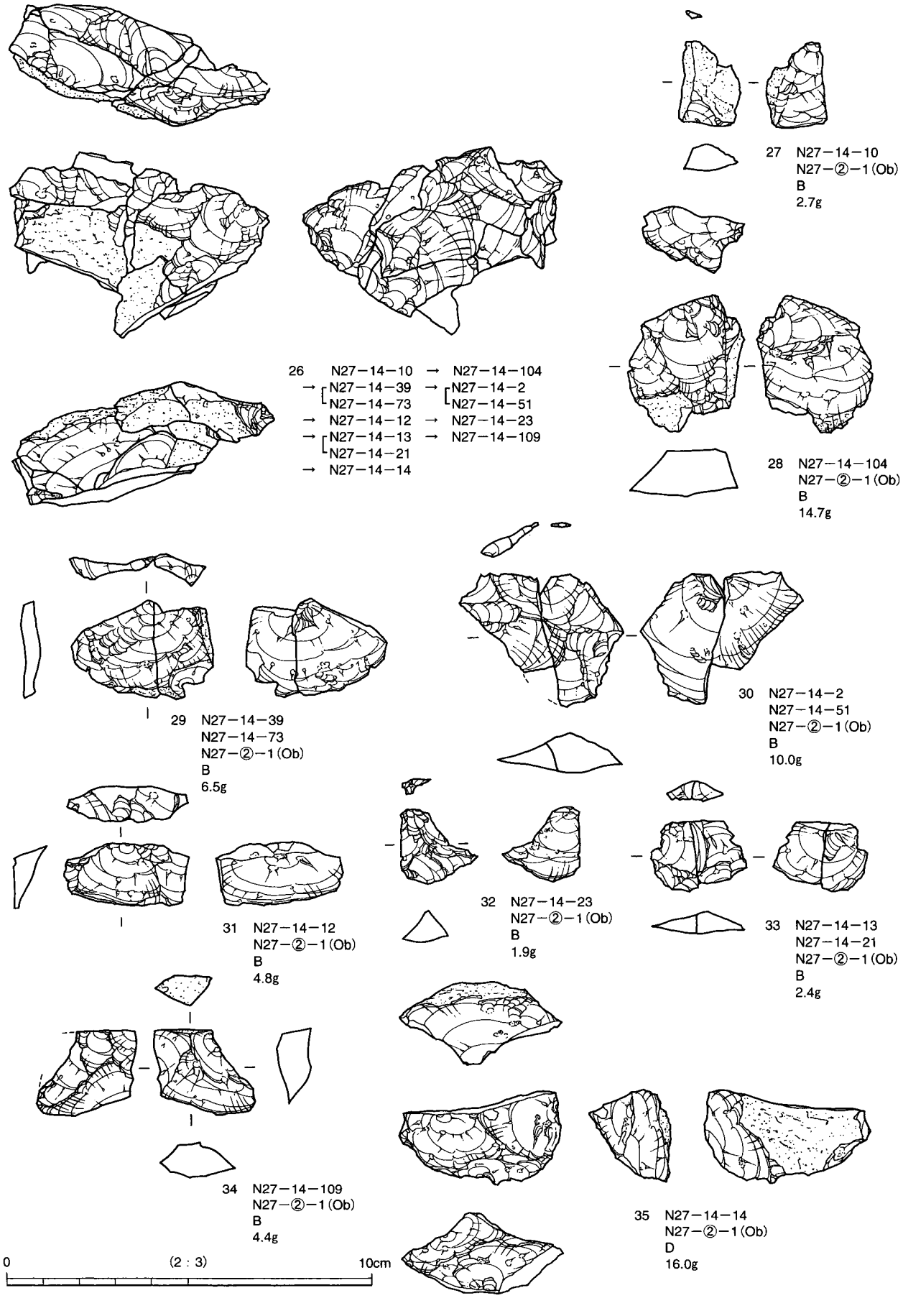
第82図　N27-aブロック出土遺物実測図（3）

・N27-⑧（第88図59～66）　59は，黒曜石の掻器2点（接合して1個体；65）と剥片5点（60～64），石核2点（接合して1個体；66）の接合資料である。接合資料からみた，剥片剥離作業は，以下のとおりである。①；原石を粗く分割する。分割面は実測図59の上面で，分割以後の剥離面によって切られているが，中央部右寄りに小さく残っている。なお，この分割面や側面の古い剥離面には，N27-①（第81図8）

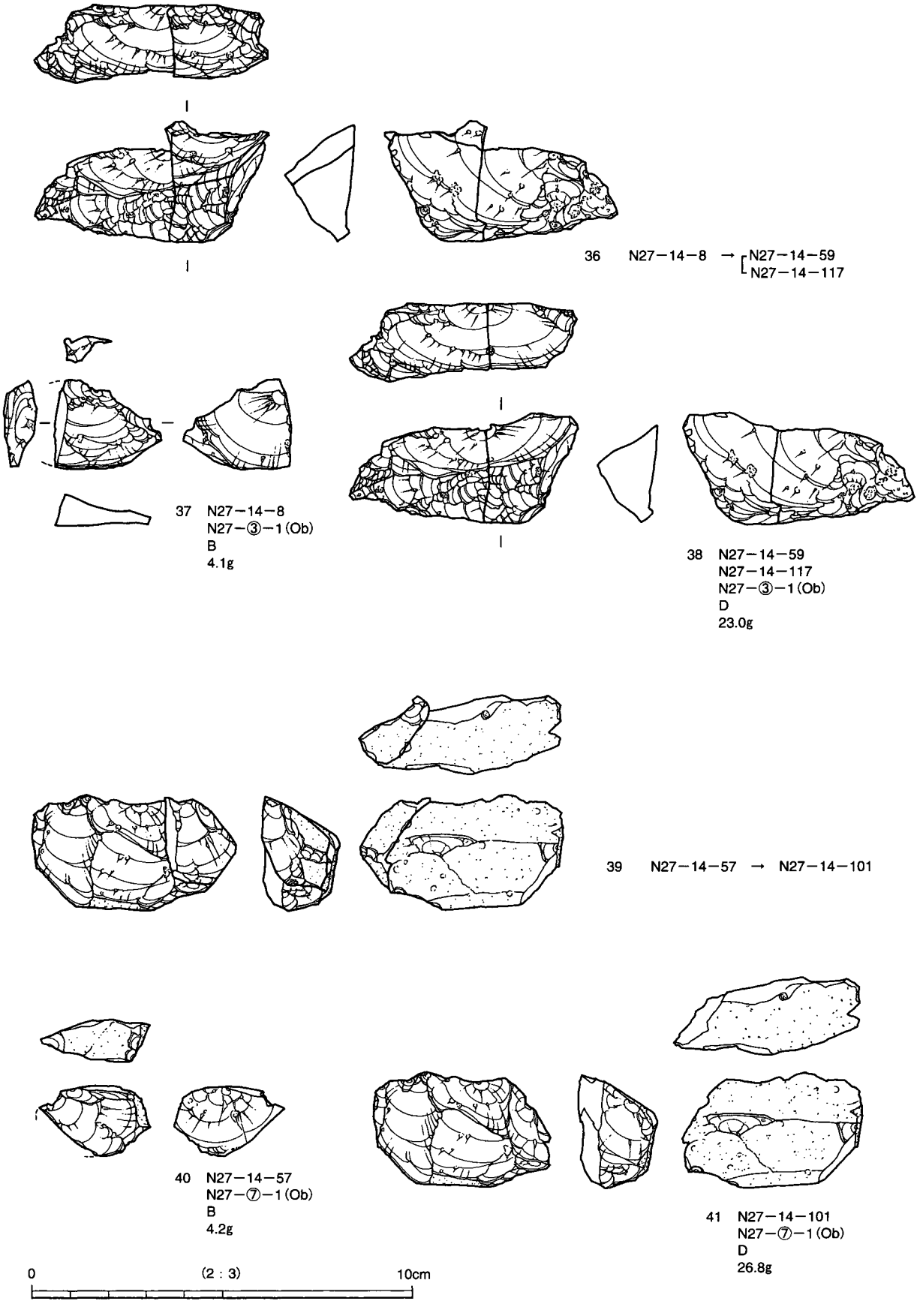


第83図　N27-aブロック出土遺物実測図（4）

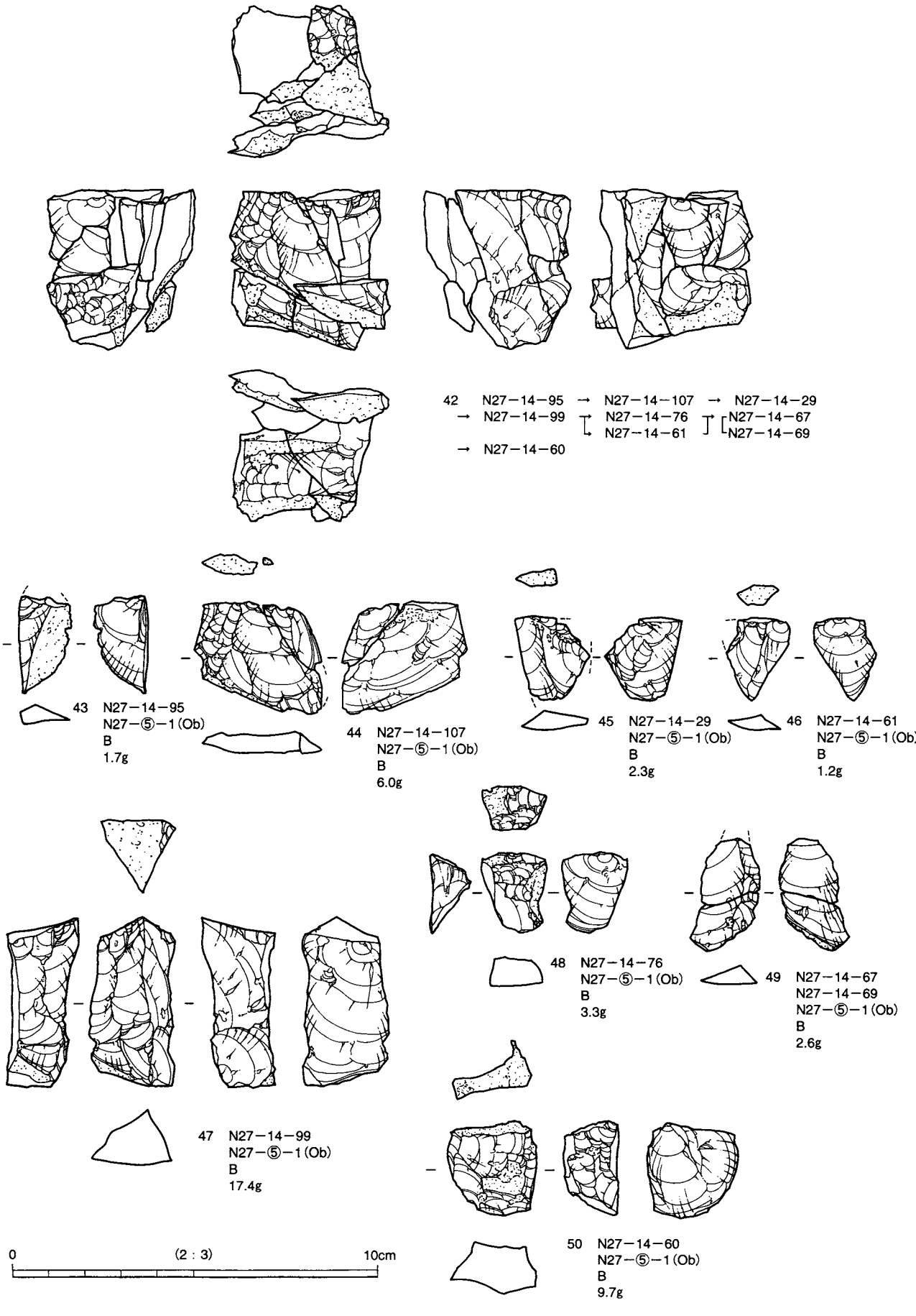
の分割面と同様の傷が付着している。したがって，分割作業及び一部の剥片剥離作業については本遺跡外で行われ，石核（素材）の移動に伴って傷が付着したこと，傷のない周囲の剥離は接合資料こそないものの，本遺跡あるいは本ブロックで行われた可能性が高いことが考えられる。②；分割面を作業面とし，周回的な打点移動と求心的な剥片剥離作業によって，不定型の剥片を剥離する。この作業によって得られた剥片は，側面から剥離された剥片と形態的差異がみられないことから，目的とする剥片の一部と考えられる。③；実測図59の上面を打面として，60を含む剥片数枚を59の左端から剥離する。④；60の剥離によって生じた面を打面，59上面を作業面として，61を含む剥片数枚を剥離する。⑤；再び59上面を打面として62・63を含む剥片を剥離する。⑥；剥片剥離作業中に石核が2つに大きく割れ，65は剥片の一端に調整加工を施し，掻器にしている。割れたもう一方の石核は，64を含む剥片を若干剥離し，最終的に66が残る。石核の



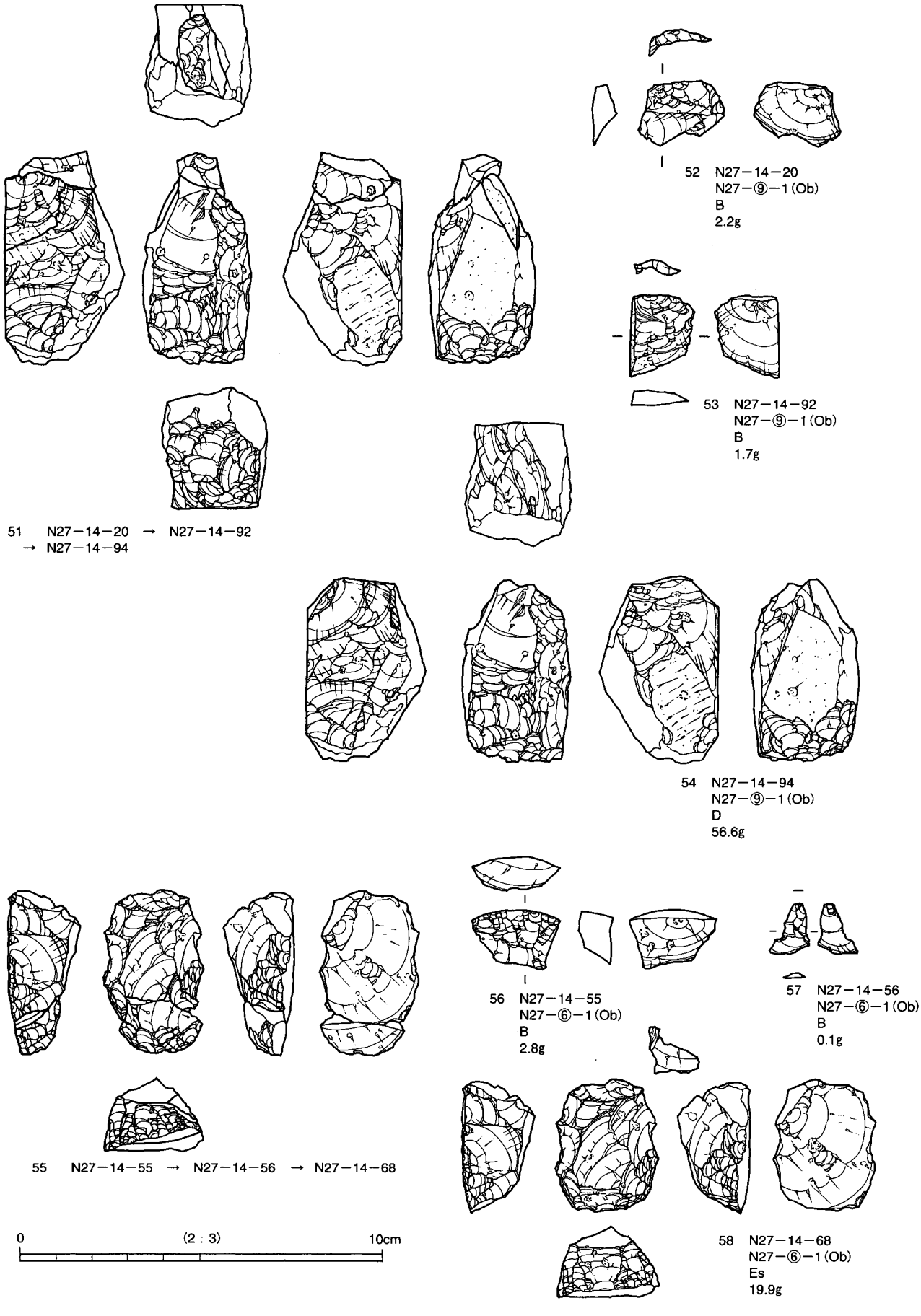
第84図　N27-aブロック出土遺物実測図（5）



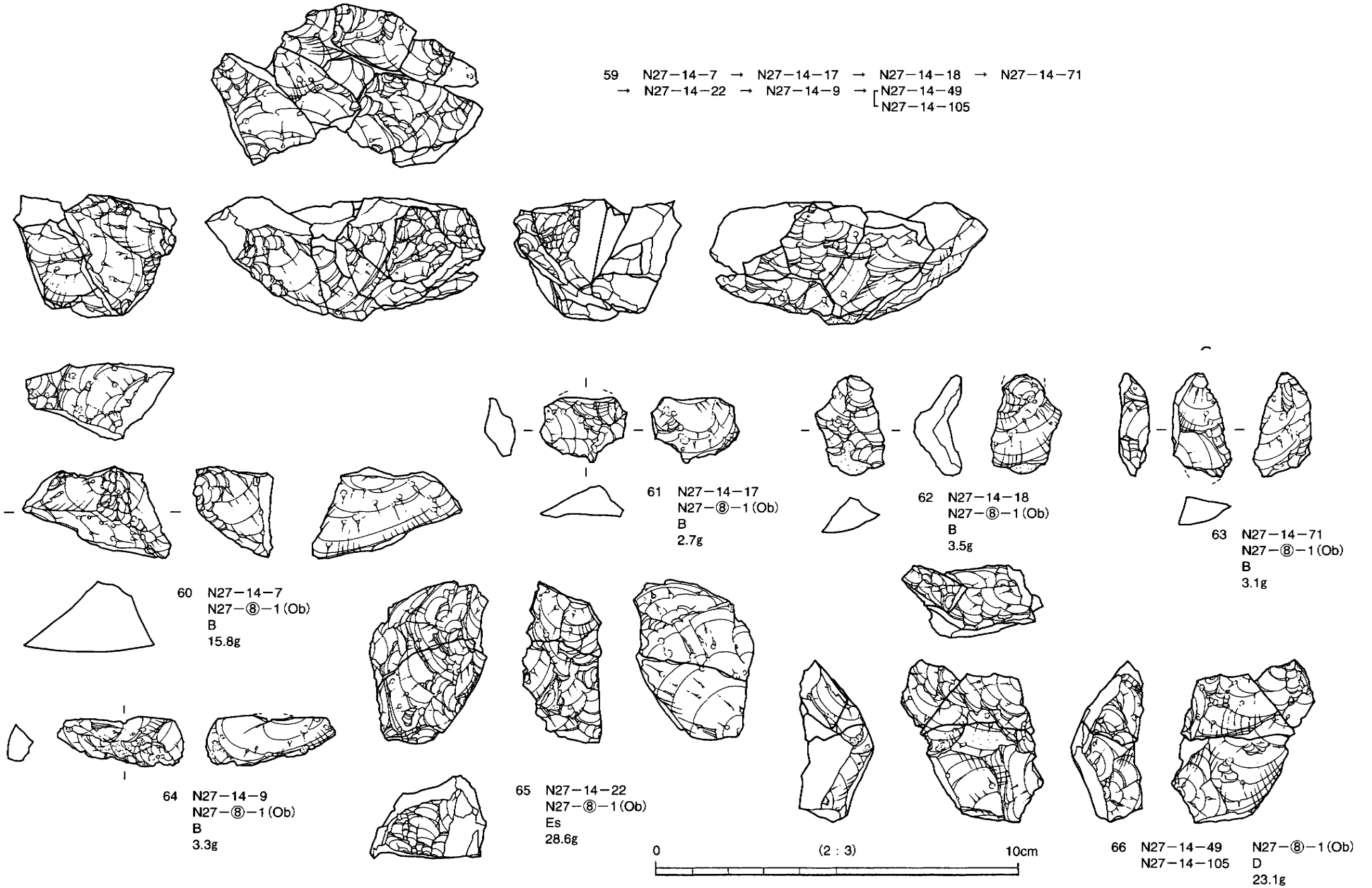
第85図　N27-aブロック出土遺物実測図（6）



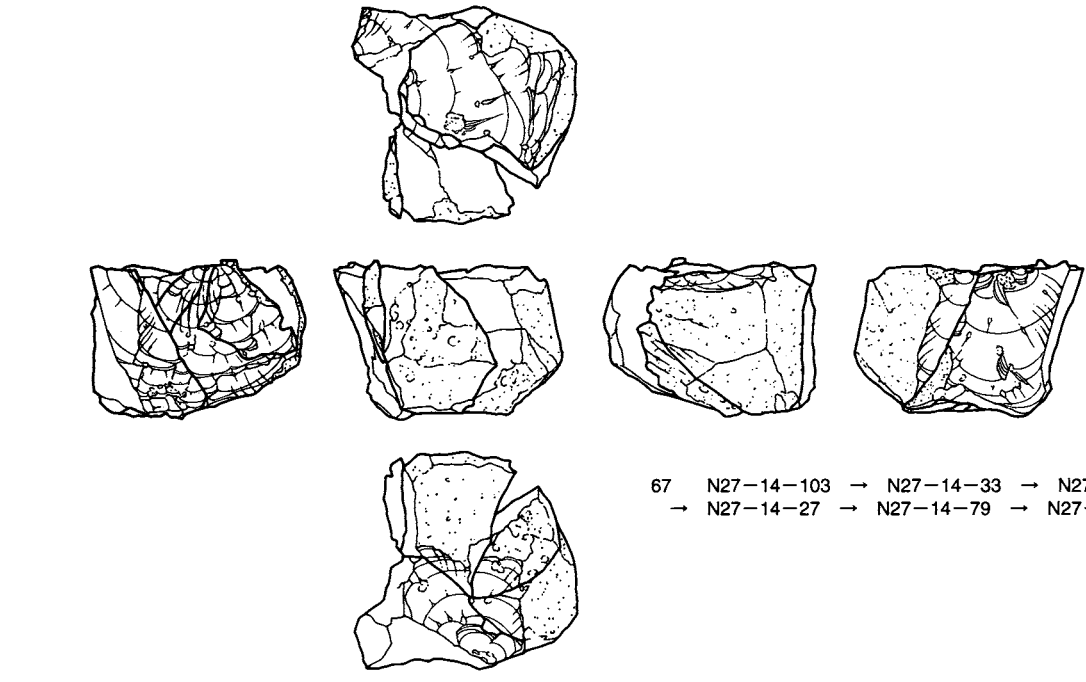
第86図　N27-aブロック出土遺物実測図（7）



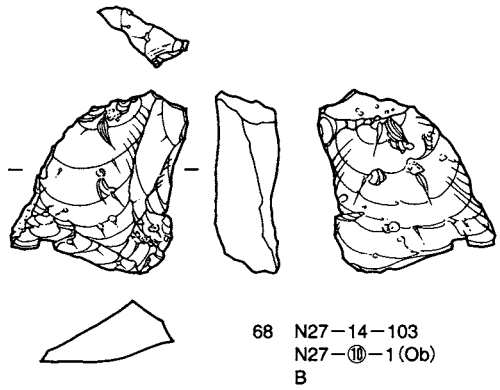
第87図　N27-aブロック出土遺物実測図（8）



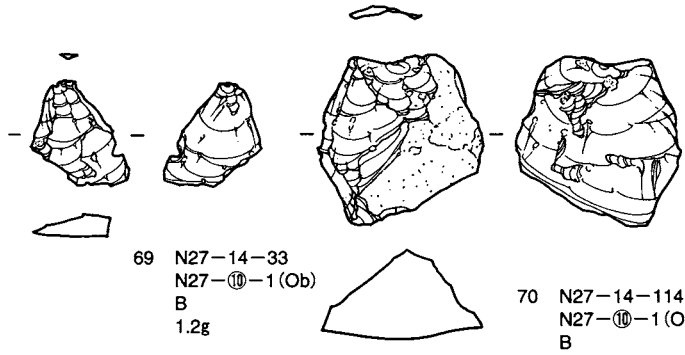
第88図　N27-aブロック出土遺物実測図（9）



67　N27−14−103 → N27−14−33 → N27−14−114
→ N27−14−27 → N27−14−79 → N27−14−3

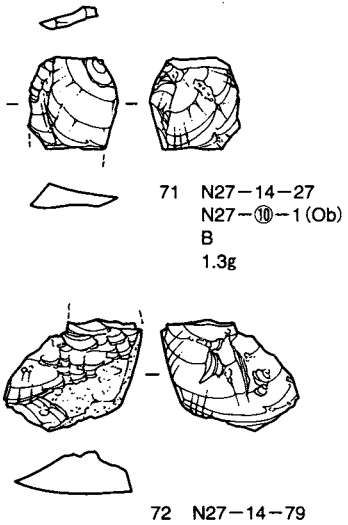


68　N27−14−103
N27−⑩−1(Ob)
B
10.0g



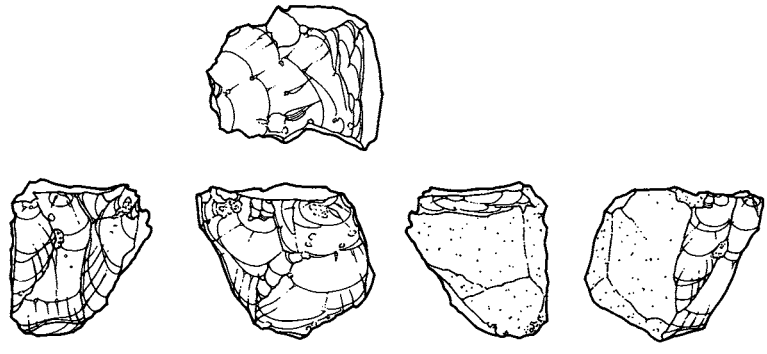
69　N27−14−33
N27−⑩−1(Ob)
B
1.2g

70　N27−14−114
N27−⑩−1(Ob)
B
14.2g



71　N27−14−27
N27−⑩−1(Ob)
B
1.3g

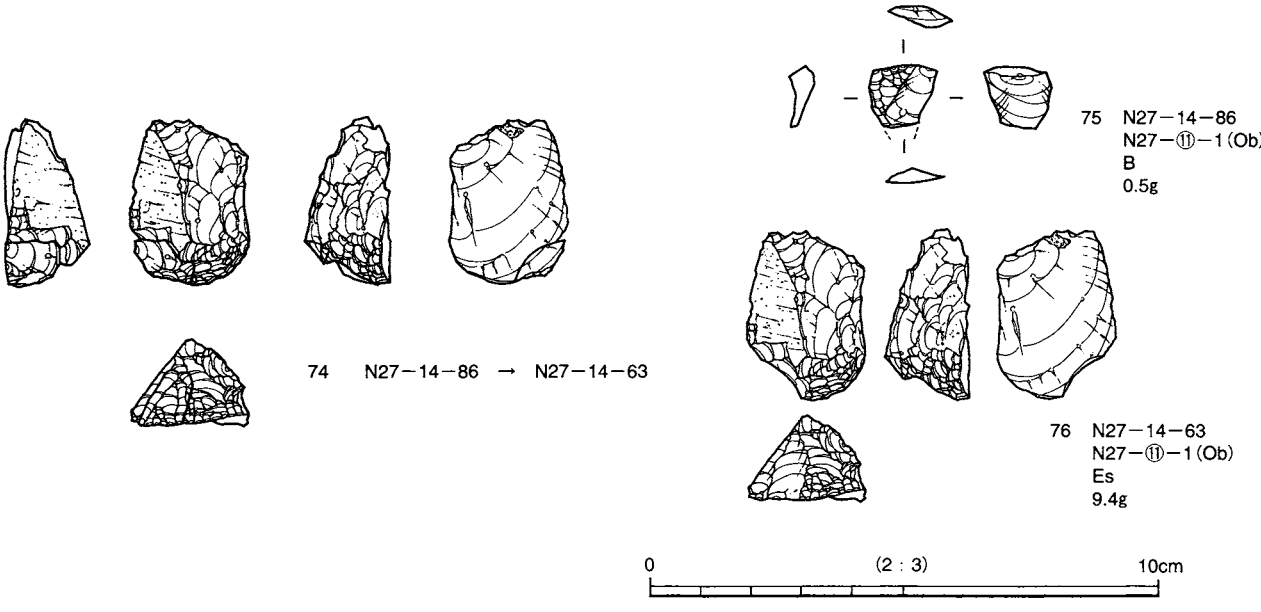
72　N27−14−79
N27−⑩−1(Ob)
B
4.1g



73　N27−14−3
N27−⑩−1(Ob)
D
27.3g

0　(2：3)　10cm

第89図　N27-aブロック出土遺物実測図（10）



第90図　N27-aブロック出土遺物実測図（11）

第40表　M27-aブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
N27-①(Ob)																					10		1	11		11
N27-②(Ob)																					17		1	18		18
N27-③(Ob)																					1		2	3		3
N27-⑤(Ob)																					20			20		20
N27-⑥(Ob)					1																2			3		3
N27-⑦(Ob)																					1		1	2		2
N27-⑧(Ob)					1																7		2	10		10
N27-⑨(Ob)																					2		1	3		3
N27-⑩(Ob)																					5		1	6		6
N27-⑪(Ob)					1																1			2		2
その他（Ob）	1				2					1											38	5	1	48		48
その他（Sl）									1															1		1
合　計	1				5				1	1											104	5	10	127		127

第41表　M27-aブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)	1				5					1											104	5	10	126		126
粘板岩(Sl)									1															1		1
合　計	1				5				1	1											104	5	10	127		127

形状は，表裏両面を作業面とし，多方向から剥片を剥離した盤状のものとなっている。

・N27-⑨（第87図51～54）　51は，剥片2点（52・53）と石核1点（54）の接合資料である。本接合資料からみた剥片剥離作業は，以下のとおりである。①；原石を分割して，石核素材を得る。実測図51の右側面にある節理面が分割面と考えられる。②；51の正面下半を中心に，打面と作業面を入れ替えながら，剥片剥離作業が実施されるが，剥離がスムーズにとおらず，小さくはじけるように割れている。打面は，繰り返し打撃が行われたにも関わらず剥離がとおらなかったため，著しく潰れている。③；作業面を上半部に移し，打面と作業面を入れ替えながら剥片生産がなされる。51の上端で52が剥離され，この剥離面を打面として53が剥離される。残された石核の形状は，直方体となっている。

・N27-⑩（第89図67～73）　67は，剥片5点（68～72）と石核1点（73）の接合資料である。67の接合資料からみた剥片剥離作業は，以下のとおりである。①；拳よりもひとまわり程小振りの，黒曜石の亜角礫を石核素材とする。②；上下両端で，それぞれ1枚ずつの剥片を剥離し，打面と底面を設定する。③；打面調整，側面調整を行わず，平坦な打面を用い，打点を左右に振りながら，順次中・小型不定型の縦長剥片を生産している（68→69→70→71→72）。作業面の中心は，67の実測図の左端である。④；作業の終了した石核は，全周の1/2程の範囲に作業面をもち，裏側は自然面が広く残っている。

・N27-⑪（第90図74～76）　74は，掻器（76）と刃部再生剥片（75）の接合資料である。74は，不定型の剥片の端部に刃部を作り出した掻器である。刃部再生は，75ともう1枚の剥片を刃部左端から順に剥離して始まっているが，失敗したのであろうか。剥片を2枚剥離した段階で作業を中断し，本石器の機能を停止させている。

17　O26-aブロック（第91～93図，第42・43表）

1）ブロックの概要

O26-aブロックは，調査区東北部のO26-06・11グリッドに分布する。ブロックの立地は，北側の谷に向かう緩斜面である。

ブロックの規模と形状は，直径3m程の範囲に33点の石器群が分布する。ブロック内は，石器と礫とが重なって分布しているが，礫はブロックの北端に，直径1.5mの範囲でまとまっている。出土層位はⅣ層を中心に，50cm程の高低差をもって包含されている（第91・92図）。

ブロックを構成する石器群は，ナイフ形石器1点，剥片19点，砕片2点，石核2点，礫9点である。石器石材は，安山岩12点，黒曜石6点，珪質頁岩3点，頁岩3点である。石器類24点のうち，14点については母岩分類が可能で，5母岩に分類した。礫は2個体（O26-⑤：248.9g，O26-⑦：112.7g）で，いずれも流紋岩である。O26-⑤は，灰褐色で部分的に赤化しているが，O26-⑦は，内外とも著しく被熱し，紅色～桃色に変色している。

2）母岩の特徴と内容

・O26-⑥：褐色がかった黒灰色の安山岩である。比較的硬質であるが，全体にザラついている。夾雑物はごくわずかである。自然面は褐色でザラついた曲面である。石器群の内訳は，剥片9点で，総重量は21.8gである。なお，剥片1点は，O26-bブロックの剥片1点と接合し，1個体となる。

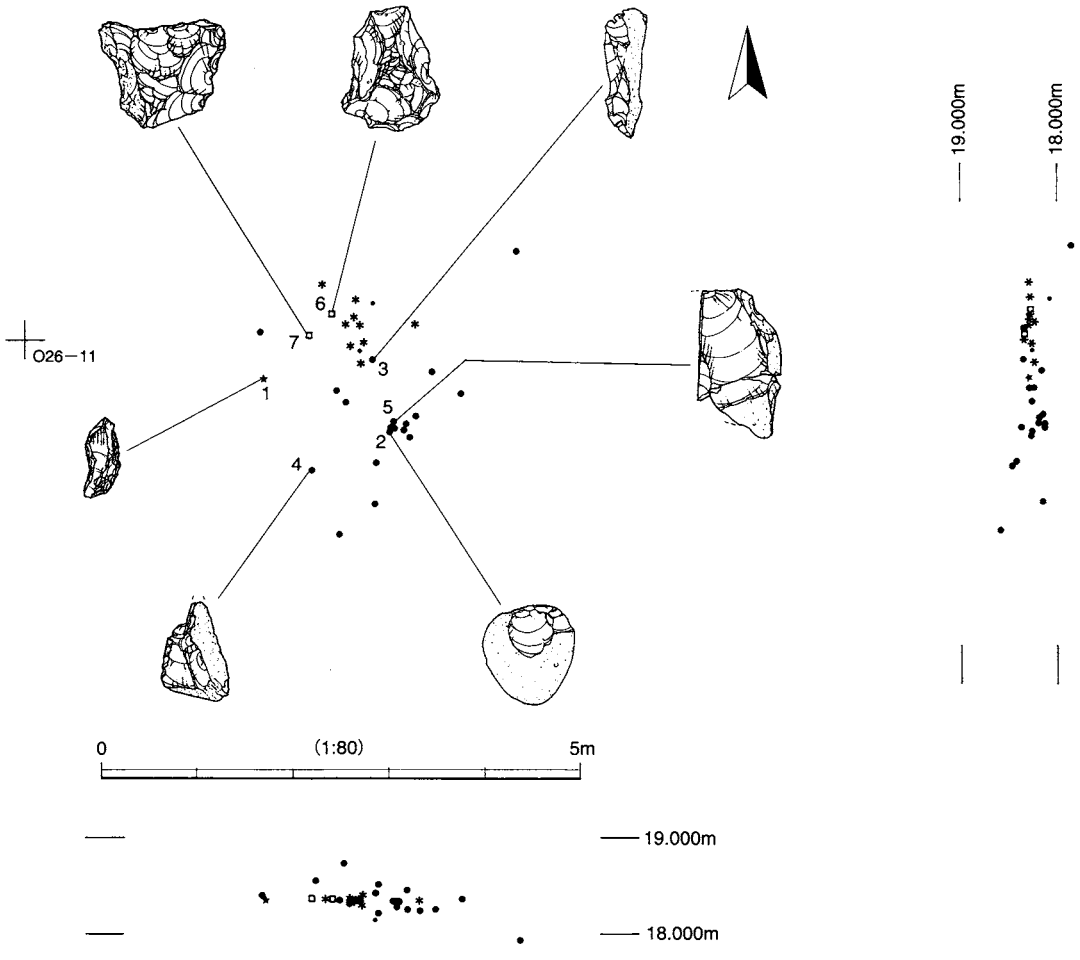
・O26-⑧：淡黄褐色で，黒灰色の縞が入る，良質な珪質頁岩である。剥片1点の単独資料（0.9g）である。

・O26-⑩：大半は灰褐色で，きめ細かいが，部分的に橙褐色の不純物層が入る珪質頁岩である。石核1点の単独資料（21.9g）である。

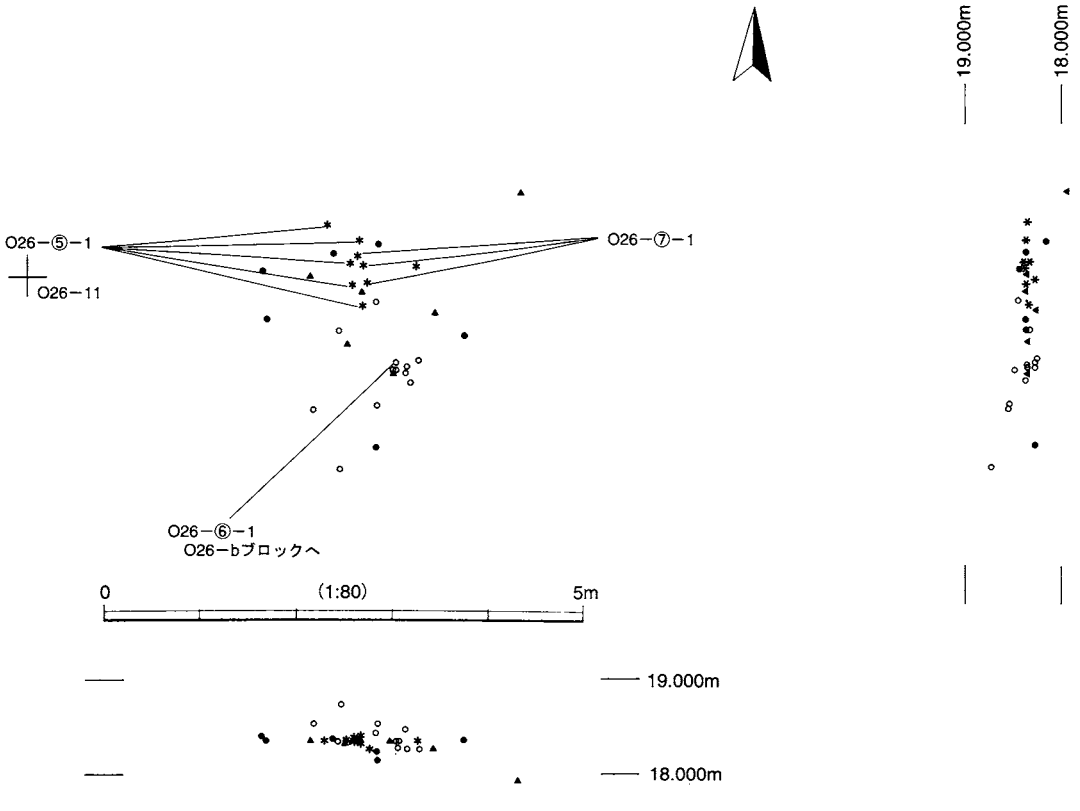
・O26-⑪：暗褐色から黄褐色に変化する珪質頁岩である。節理はみられず，きめ細かい。剥片1点の単独資料（2.0g）である。

・O26-⑫：黄褐色で軟質の頁岩である。自然面も黄褐色で，光沢のある曲面である。石器群の内訳は，剥片2点で総重量は7.5gである。

母岩分類できなかった資料に黒曜石のナイフ形石器1点，剥片3点，砕片1点，石核1点（総重量26.7g），安山岩の剥片3点（1.0g），頁岩の砕片1点（0.1g）がある。黒曜石は，ナイフ形石器1点が淡黒



第91図　O26-aブロック出土遺物分布図（1）　−石器別分布図−



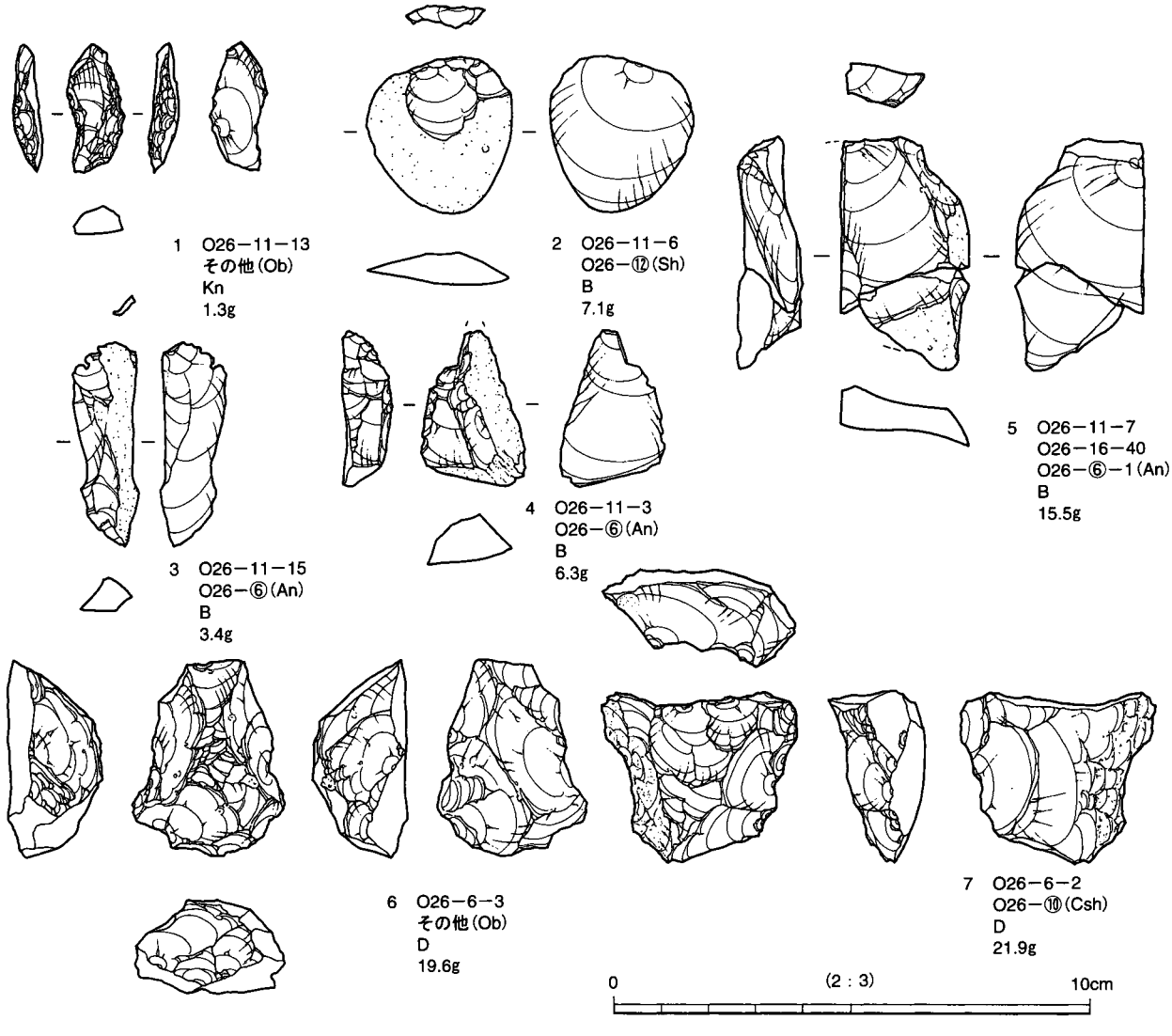
第92図　O26-aブロック出土遺物分布図（2）　−石材別分布図−

色透明の信州産と考えられる資料であり，それ以外の５点は黒色不透明で夾雑物の多いものである。後者は，同一母岩の可能性もあるものの，相互に接合するものはない。周辺ブロックにも類似した資料はみられるが，特徴が乏しく，母岩分類できなかった。安山岩は026-⑥に類似するが，小型の欠損品であり，母岩分類からはずした。

３）出土遺物（第93図）

ナイフ形石器（第93図１）　１は，黒曜石の横長剥片を用いた，切出形のナイフ形石器である。黒曜石は，淡黒色透明で夾雑物を含まない良質なもので，信州産と考えらる。素材剥片の打面側１側縁と末端部の大半に調整加工を行っており，先端部左側に加工のない縁辺をわずかに残している。また，素材剥片の打面は完全に除去されず，薄く残っている。

剥片（第93図２～５）　２は頁岩，３～５は安山岩の剥片である。いずれも不定型で正面の一部に自然面がみられる。なお，５は，上半部が026-bブロック，下半部が026-aブロックから出土したものが接合している。



第93図　026-aブロック出土遺物実測図

石核（第93図6・7） 6は，厚手の剥片ないしは分割礫を素材とする黒曜石の石核である。正面中央やや左下に，分割面と考えられる剥離面が小さく残る。表裏を作業面として，交互剥離と周回的な打点移動によって不定型の剥片を生産している。素材の面は残されていない。7は，中型厚手の剥片を用いた，珪質頁岩の石核である。表裏を作業面とし，交互剥離と周回的な打点移動によって不定型の剥片を生産している。裏面には，素材剥片の主要剥離面を大きく残す。

第42表 O26-aブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
O26-⑥(An)																					9			9		9
O26-⑧(Csh)																					1			1		1
O26-⑩(Csh)																							1	1		1
O26-⑪(Csh)																					1			1		1
O26-⑫(Sh)																					2			2		2
その他 (Ob)	1																				3	1	1	6		6
その他 (An)																					3			3		3
その他 (Sh)																						1		1		1
O26-⑤(Rh)																									5	5
O26-⑦(Rh)																									4	4
合　計	1																				19	2	2	24	9	33

第43表 O26-aブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)	1																				3	1	1	6		6
安山岩(An)																					12			12		12
頁岩(Sh)																					2	1		3		3
珪質頁岩(Csh)																					2		1	3		3
流紋岩(Rh)																									9	9
合　計	1																				19	2	2	24	9	33

18 O26-bブロック（第94～98図，第44・45表）

1）ブロックの概要

O26-bブロックは，調査区東北部のN26-20・O26-16グリッドに分布する。ブロックの立地は，北側の谷に向かう緩斜面である。

ブロックの規模と形状は，長軸7m，短軸4m程の範囲に60点の石器群が分布する。出土層位はV層を中心に，最大1mの高低差をもって包含されている（第94・95図）。

ブロックを構成する石器群は，ナイフ形石器3点，掻器2点，削器1点，使用痕ある剥片3点，敲石1点，剥片40点，砕片3点，石核4点，礫3点である。石器石材は，黒曜石29点，安山岩23点，流紋岩1点，チャート3点，ホルンフェルス13点である。石器類57点のうち，26点については母岩分類が可能で，9母岩に分類した。礫は2個体（N26-②：38.8g，O26-⑧：71.9g）で，砂岩と流紋岩である。いずれも被熱により赤化している。

2）母岩の特徴と内容

・M26-⑨：淡褐色で白色の縞が多数入るチャートである。M26-dブロックに使用痕ある剥片1点，M26-fブロックに剥片1点が分布しており，互いに接合する。本ブロックの資料は接合しない。石器群の内訳は，剥片2点，石核1点で，総重量は9.5gである。

・N26-④：青みがかった黒灰色のホルンフェルスである。自然面はなめらかで凹凸のない曲面である。石核

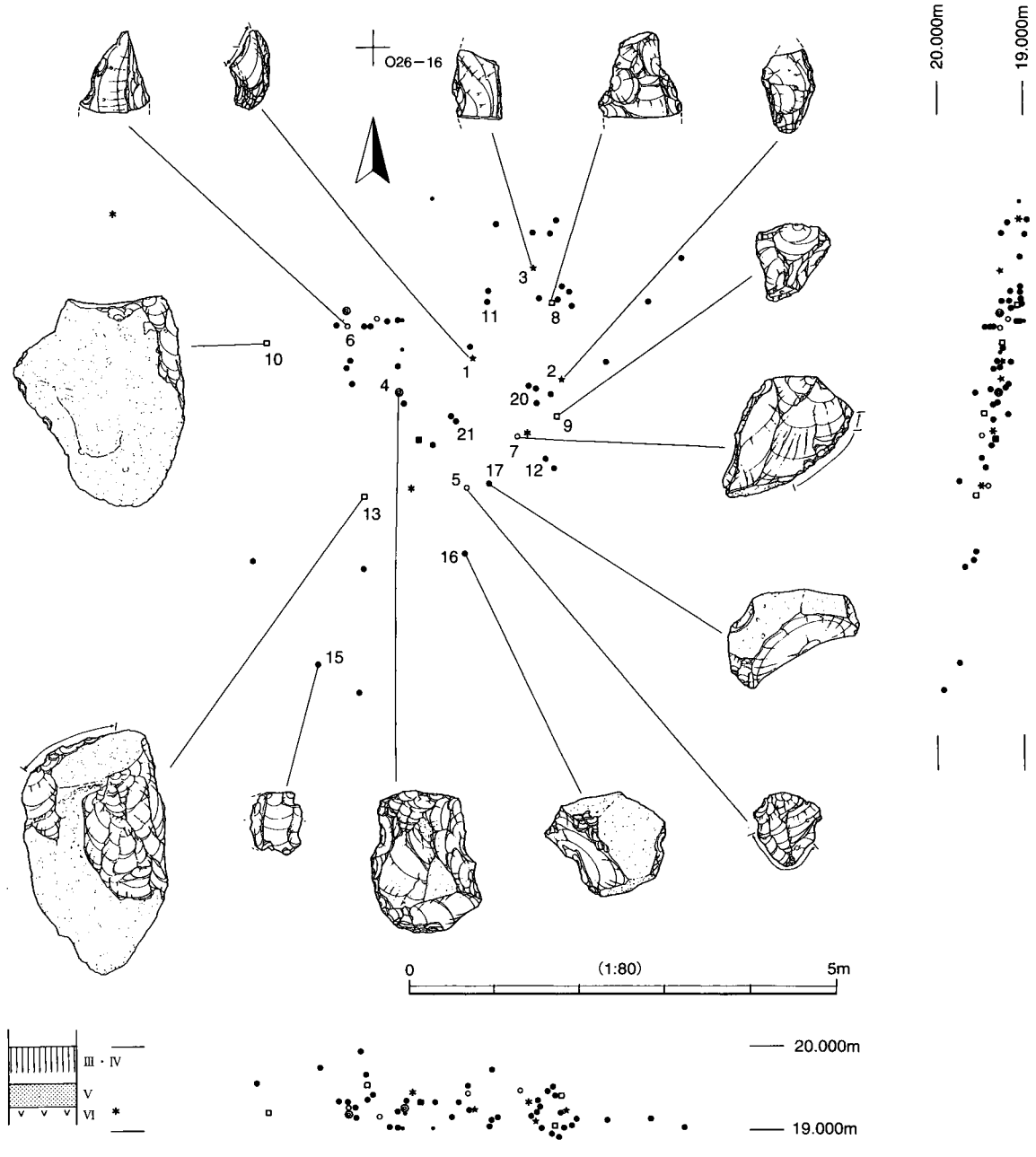
1点（154.4ｇ）の単独資料である。

・N26-⑤：淡黒褐色で白色の夾雑物の目立つ安山岩である。自然面はザラつく曲面で，拳大の円礫と考えられる。石器群の内訳は，剥片1点，石核1点で，総重量は133.2ｇである。

・N26-⑥：淡青灰色の安山岩である。剥片1点（1.9ｇ）の単独資料である。

・O26-①：黒灰色から淡黒褐色に変化する安山岩である。夾雑物は少なく，細い淡褐色の縞が多数入る。自然面はザラつくが，凹凸の少ない曲面である。石器群の内訳は，掻器1点，刃部形成の剥片3点で，互いに接合する。総重量は77.1ｇである。

・O26-②：内面は黒褐色，自然面は暗褐色で，白色の夾雑物が多数入る安山岩である。石器群の内訳は，削器1点，剥片6点で，剥片2点が接合する。総重量は42.1ｇである。



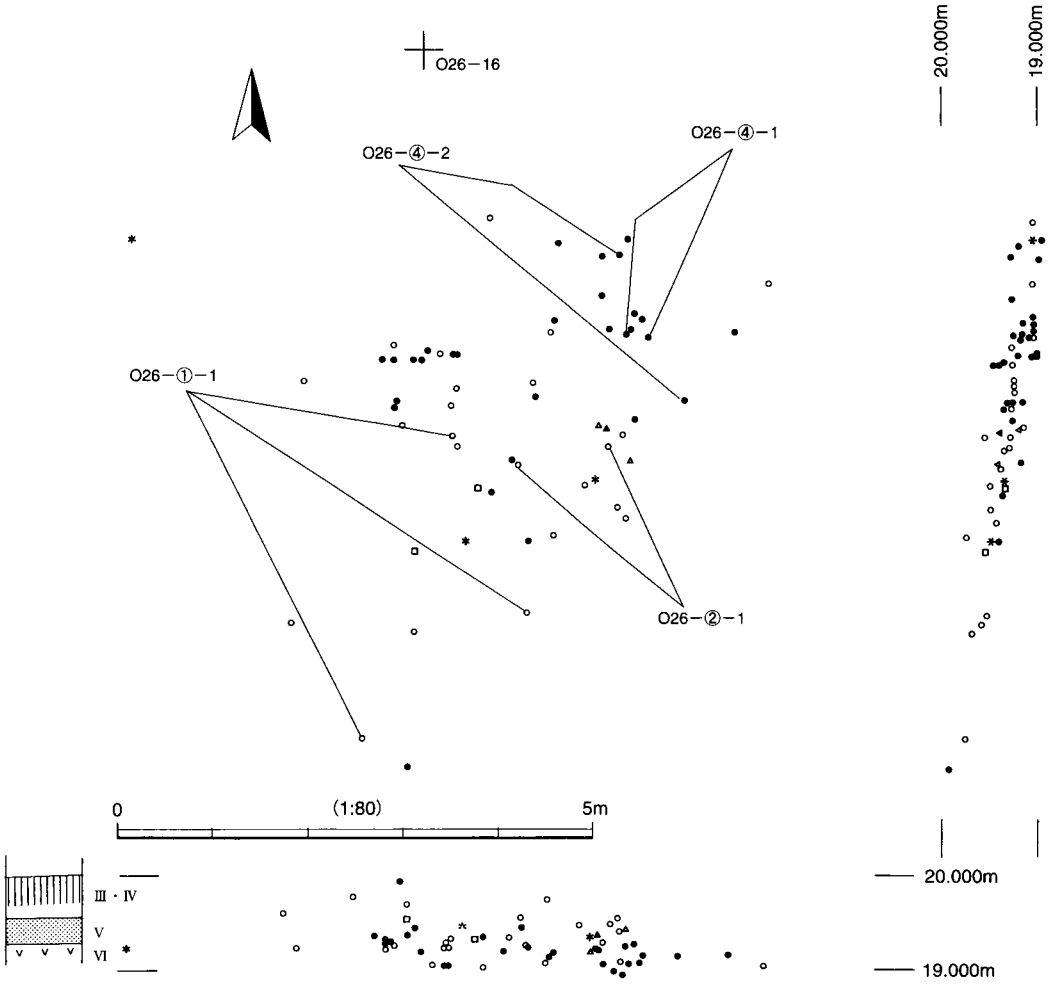
第94図　O26-bブロック出土遺物分布図（1）　－石器別分布図－

・026-④：黒色不透明で夾雑物の多い黒曜石である。光沢に富むが，内部は部分的に灰色ににごる。石器群の内訳は，使用痕ある剥片１点，剥片４点，石核１点で，石核１点と剥片１点が接合する他，剥片２点が接合して１個体になる。総重量は18.３ｇである。

・026-⑥：褐色がかった黒灰色の安山岩である。本ブロックでは，剥片１点（11.５ｇ）の単独資料であるが，026-aブロックの剥片と接合する。

・026-⑨：淡黄褐色の流紋岩である。敲石１点（35.１ｇ）の単独資料である。

なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石のナイフ形石器３点，使用痕ある剥片２点，剥片17点，砕片１点（総重量28.０ｇ），安山岩の掻器１点，剥片５点，砕片２点（総重量16.８ｇ）である。黒曜石は，全て黒色不透明で夾雑物を含むものであるが，ナイフ形石器の一部や小型の剥片の多くは，灰色みが強く，一つのまとまりを構成するように思われる。それ以外の製品は，単独母岩の可能性もある。したがって，本ブロック内に限定して黒曜石を考えれば，026-④と灰色みの強い一群と単独母岩に分類できる。しかし，以上の点を踏まえた上で，なお，周辺ブロックに分布する資料との異同が不明瞭であることから，母岩分類しなかった。安山岩は，概ね本ブロックに分布する各母岩の，いずれかに帰属すると考えられるが，小型であったり，特徴の乏しい部分であったりして，母岩を決定できなかった。



第95図　026-bブロック出土遺物分布図（２）　－石材別分布図－

3）出土遺物（第96・97図）

ナイフ形石器（第96図1～3） 1は，黒曜石の横長剥片を用いた，切出形のナイフ形石器である。素材剥片の末端側1側縁と打面側の一部に裏面から調整加工を施している。打面に続く鋭利な縁辺には，刃こぼれがみられる。黒曜石の特徴は，淡黒色不透明で夾雑物が少ない。2は，黒曜石の横長剥片を用いた，切出形のナイフ形石器である。素材剥片の末端側1側縁と打面側の一部に裏面から調整加工を施している他，裏面の打瘤部にも細かな剥離がみられる。先端部が欠損している。黒曜石の特徴は，黒灰色不透明で灰色の縞が入り，微細な夾雑物が多い。3は，ナイフ形石器の破片である。黒曜石の横長剥片を素材とし，裏側から打面を除去しているが，上下右側が欠損しており，形態は不明である。調整が粗いことから，未成品かも知れない。黒曜石の特徴は，黒灰色不透明で夾雑物が多い。

掻器（第96図4） 4は，安山岩の大型不定型の剥片を素材とする掻器である。素材剥片の打面を残し，末端側に刃部を作り出している。また，両側縁も裏側から調整加工している。なお，本石器の製作に関連した接合資料が得られており，後述する。

削器（第96図7） 7は，安山岩の横長剥片を用いた削器である。素材剥片の末端部に，裏面から細かな調整加工を行っている。

使用痕ある剥片（第96図5・6） 5は，黒曜石の不定型剥片を用いた使用痕ある剥片である。正面にある数枚の剥離面は，いずれも裏面と一致する。末端側に刃こぼれがある。6は，黒曜石の横長剥片を用いた使用痕ある剥片である。打面部は欠損するが，その折れ面と末端部に不連続ながら細かな剥離痕がみられる。

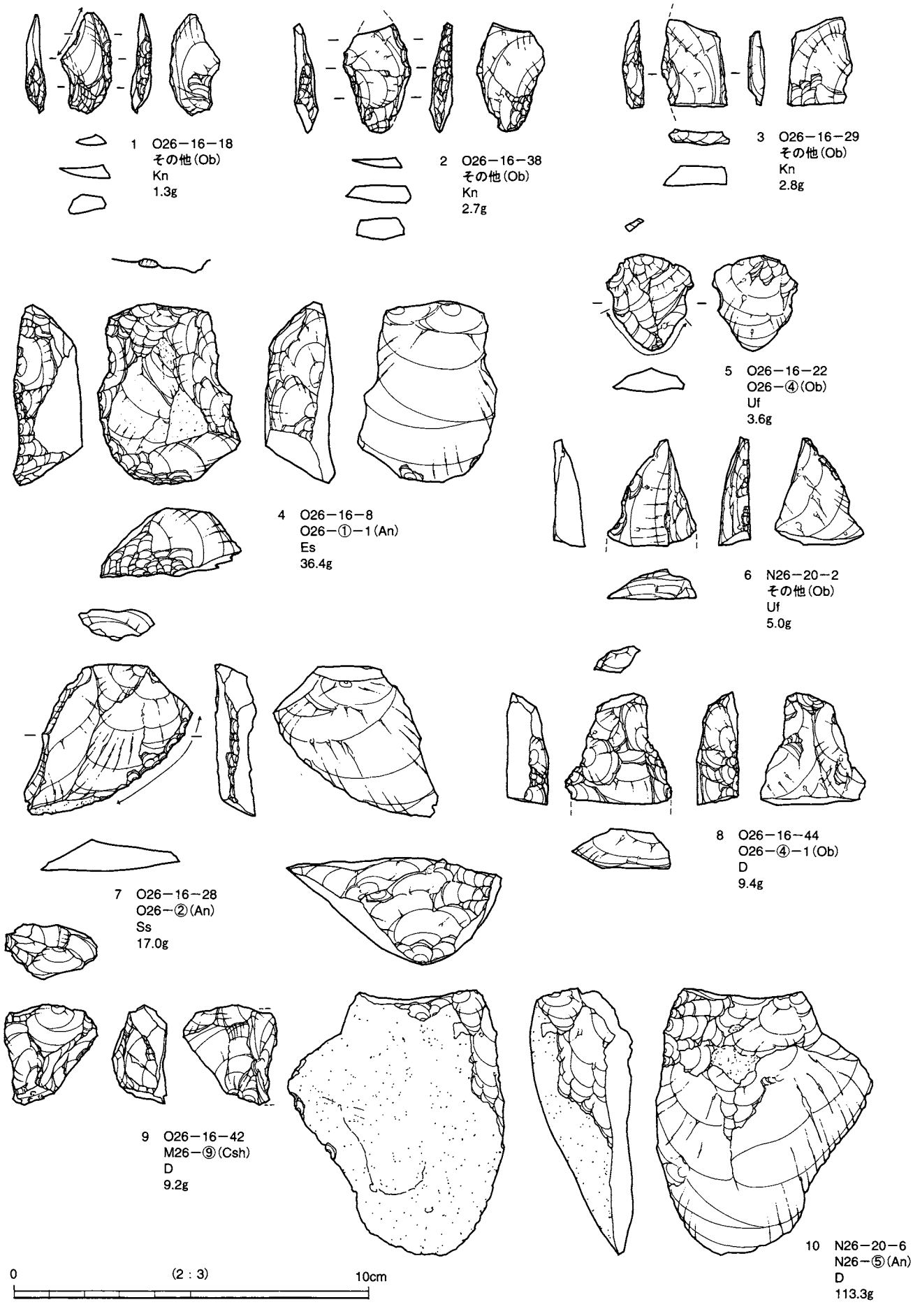
剥片（第97図11・12） 11と12は，安山岩の剥片である。11は，正面にある剥離面の剥離方向が一定しない横長剥片である。12は，正面が自然面に被われ，左側が欠損している。

石核（第96図8～10，第97図13） 8は，黒曜石の中型不定型の縦長剥片を用いた石核である。素材剥片の主要剥離面（実測図左側）を作業面として，両側縁から小型不定型の剥片を生産している。正面中央及び上端左側に素材の主要剥離面が，上面には打面が残る。9は，チャートの剥片を用いた石核である。表裏両面を作業面として，多方向から小型の剥片を剥離している。裏面の左側には素材剥片の主要剥離面が残る。10は，安山岩の大型不定型の剥片を用いた石核である。素材の打面及び正面右側面，裏面上半部を作業面として，不定型な剥片を剥離している。正面には自然面が大きく残されている。13は，ホルンフェルスの大型剥片を用いた石核である。上端を作業面として，打面を除去するように剥片剥離を行っている。上端及び正面には自然面が大きく残る。なお，正面右側には，裏面よりも古い縦長の剥離面が複数みられる。本石核の素材は，縦長剥片石核が斜めに壊れたものとも思える。

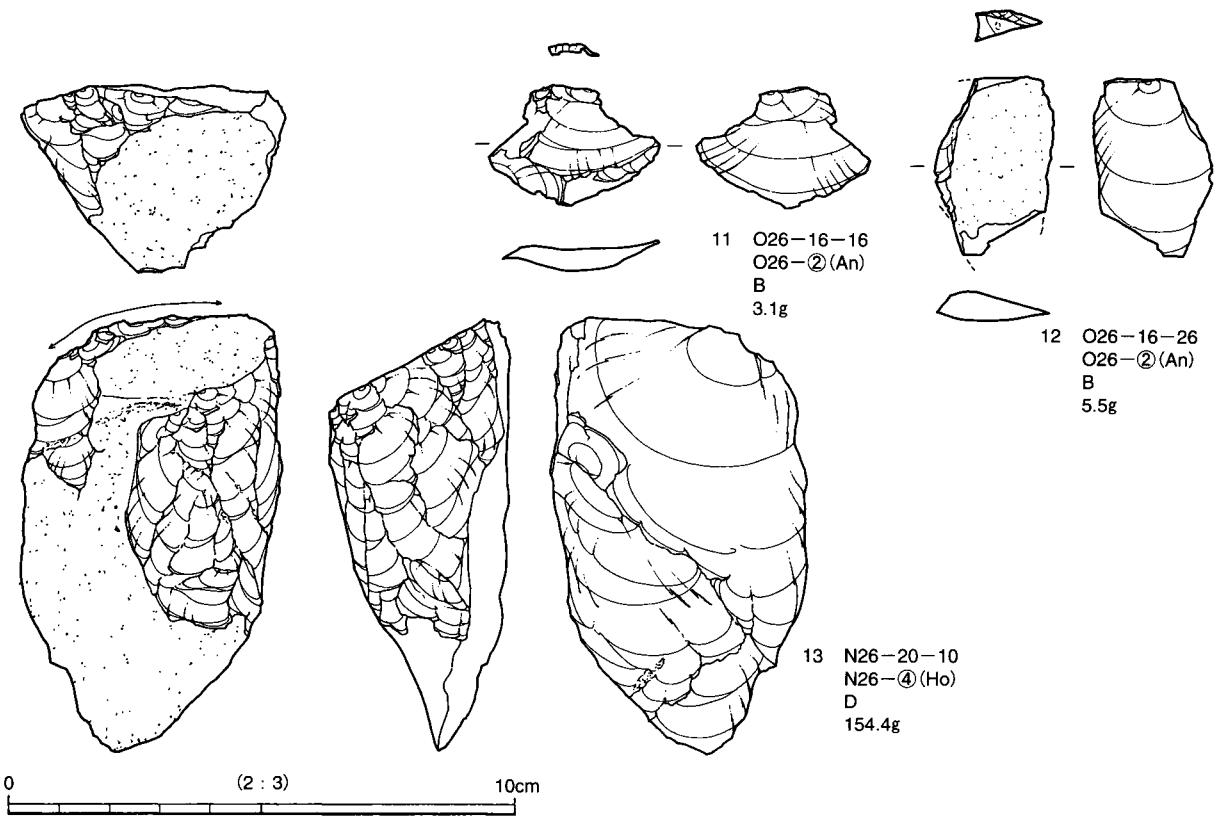
4）接合資料とその関連資料（第98図14～21）

・026-①：（第98図14～18） 14は，掻器1点（18）と刃部形成剥片3点（15～17）の接合資料である。正面に自然面が大きく残る大型厚手の不定型な剥片を用い，主要剥離面を打面として，刃部形成のために15～18を順次剥離している。ただし，16・17は，細かな刃部形成のための剥離というよりは，むしろアクシデントで大きく折れたような形状である。17の剥離以後に細かな刃部形成と側面調整を行い，掻器が完成している。

・026-②：（第98図19～21） 19は，剥片2点（20・21）の接合資料である。平坦な打面を用い，不定型な縦長剥片を連続的に剥離している。接合資料には自然面が広くみられることから，比較的初期の段階の剥片剥離作業であろう。



第96図　O26-bブロック出土遺物実測図（1）



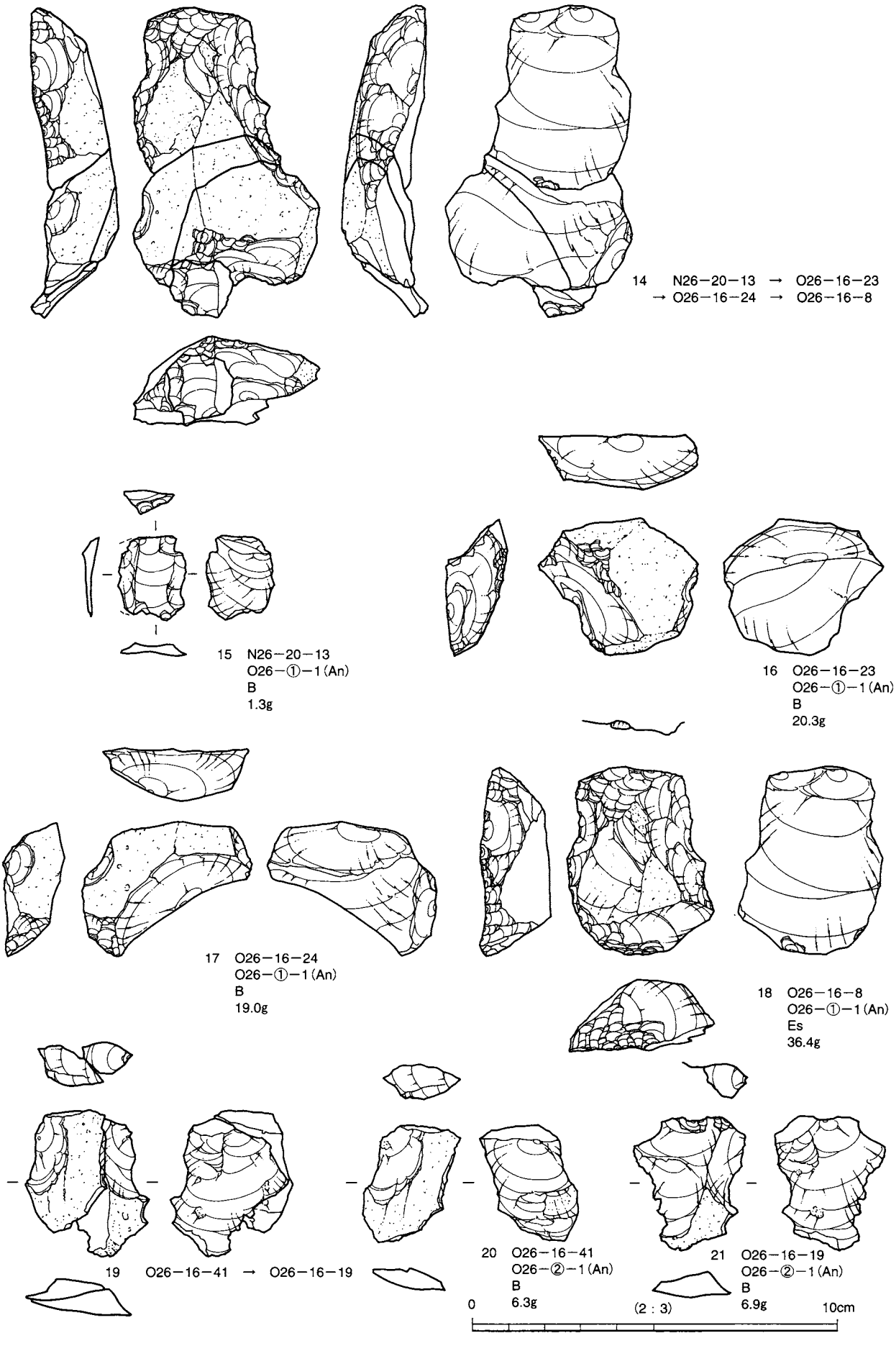
第97図　O26-bブロック出土遺物実測図（2）

第44表　O26-bブロック母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M26－⑨(Ch)																					2		1	3		3
N26－④(Ho)																							1	1		1
N26－⑤(An)																					1		1	2		2
N26－⑥(An)																					1			1		1
O26－①(An)					1																3			4		4
O26－②(An)						1															6			7		7
O26－④(Ob)										1											4		1	6		6
O26－⑥(An)																					1			1		1
O26－⑨(Rh)																1								1		1
その他　(Ob)	3									2											17	1		23		23
その他　(An)					1																5	2		8		8
N26－②(Sa)																									1	1
O26－⑧(Rh)																									2	2
合　計	3				2	1				3						1					40	3	4	57	3	60

第45表　O26-bブロック石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)	3									3											21	1	1	29		29
安山岩(An)					2	1															17	2	1	23		23
流紋岩(Rh)																1								1	2	3
チャート(Ch)																					2		1	3		3
ホルンフェルス(Ho)																							1	1		1
砂岩(Sa)																									1	1
合　計	3				2	1				3						1					40	3	4	57	3	60



第98図　O26-bブロック出土遺物実測図（3）

19　O27-aブロック（第99～101図，第46・47表）

1）ブロックの概要

O27-aブロックは，調査区東北部のN27-20・O27-16グリッドに分布する。ブロックの立地は，北側の谷に向かう緩斜面である。

ブロックの規模と形状は，直径3.5m程の範囲に12点の石器群が分布する。出土層位はV層を中心に，20cmの高低差をもって包含されている（第99・100図）。

ブロックを構成する石器群は，使用痕ある剥片1点，剥片7点，石核4点である。石器石材は，すべて黒曜石である。石器群12点のうち，6点については母岩分類が可能で，2母岩に分類した。

2）母岩の特徴と内容

・O27-①：黄色みを帯びた黒灰色不透明で，夾雑物を多く含む黒曜石である。自然面は平滑面で多面体のようになっている。石器群の内訳は，剥片2点，石核3点（接合して2個体）で，総重量は91.7gである。

・O27-②：黒灰色不透明で，φ2mm～3mmの夾雑物を多量に含む黒曜石である。石核1点の単独資料（69.2g）である。

なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石の使用痕ある剥片1点，剥片5点（23.3g）がある。黒色不透明で夾雑物を多く含むものが主体で，半透明のものも若干みられるが，いずれも類似資料が周辺の各ブロックに分布するが，特徴が乏しく確定できなかった。

3）出土遺物（第101図）

使用痕ある剥片（第101図1）　1は，黒曜石の縦長剥片を用いた使用痕ある剥片である。正面は裏面と同一方向の剥離面を主体に構成され，末端部にだけ，裏面と直交方向の剥離面がある。鋭利な両側縁に刃こぼれがみられる。

剥片（第101図2・3）　2は黒曜石の縦長剥片である。全体に厚手であるが，打瘤は発達せず，裏面は平坦である。正面は，裏面と直交方向の剥離面で構成される。3は，正面に自然面を大きく残す不定型の剥片である。上半部は欠損する。

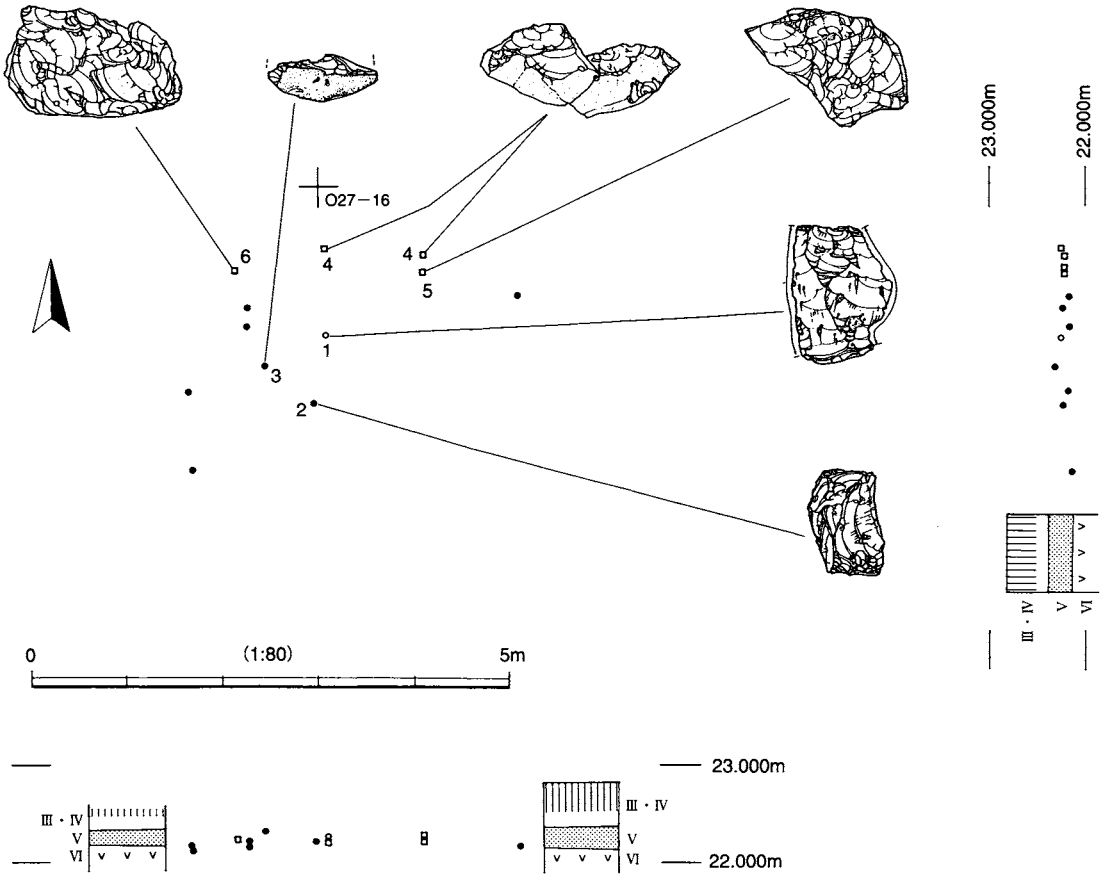
石核（第101図4～6）　4は，黒曜石の石核である。実測図右面の左側に分割面を，左面下半に自然面を残す。上面は作業面で，分割面を打面として不定型の剥片を剥離しているが，途中で石核が2つに割れている。5も4と同一母岩の石核である。打面と作業面を頻繁に入れ替えながら，不定型な剥片を生産している。自然面はみられないが，分割面は実測図上面の下半に細長く残っている。6は，黒曜石の角礫を分割して石核素材としたものである。正面図を起点として，下面と裏面に平滑な自然面が広く残る。分割面を作業

第46表　O27-aブロック母岩別石器組成表

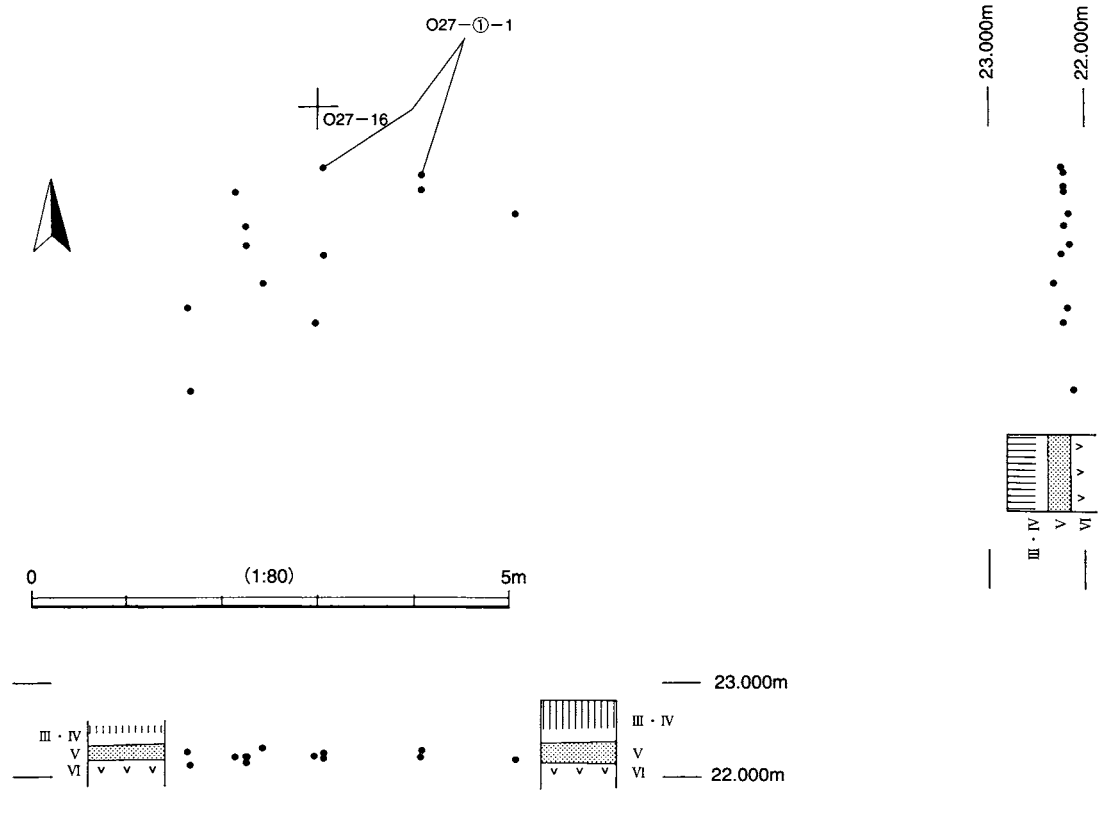
母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
O27-①(Ob)																					2		3	5		5
O27-②(Ob)																							1	1		1
その他（Ob）										1											5			6		6
合　計										1											7		4	12		12

第47表　O27-aブロック石材別石器組成表

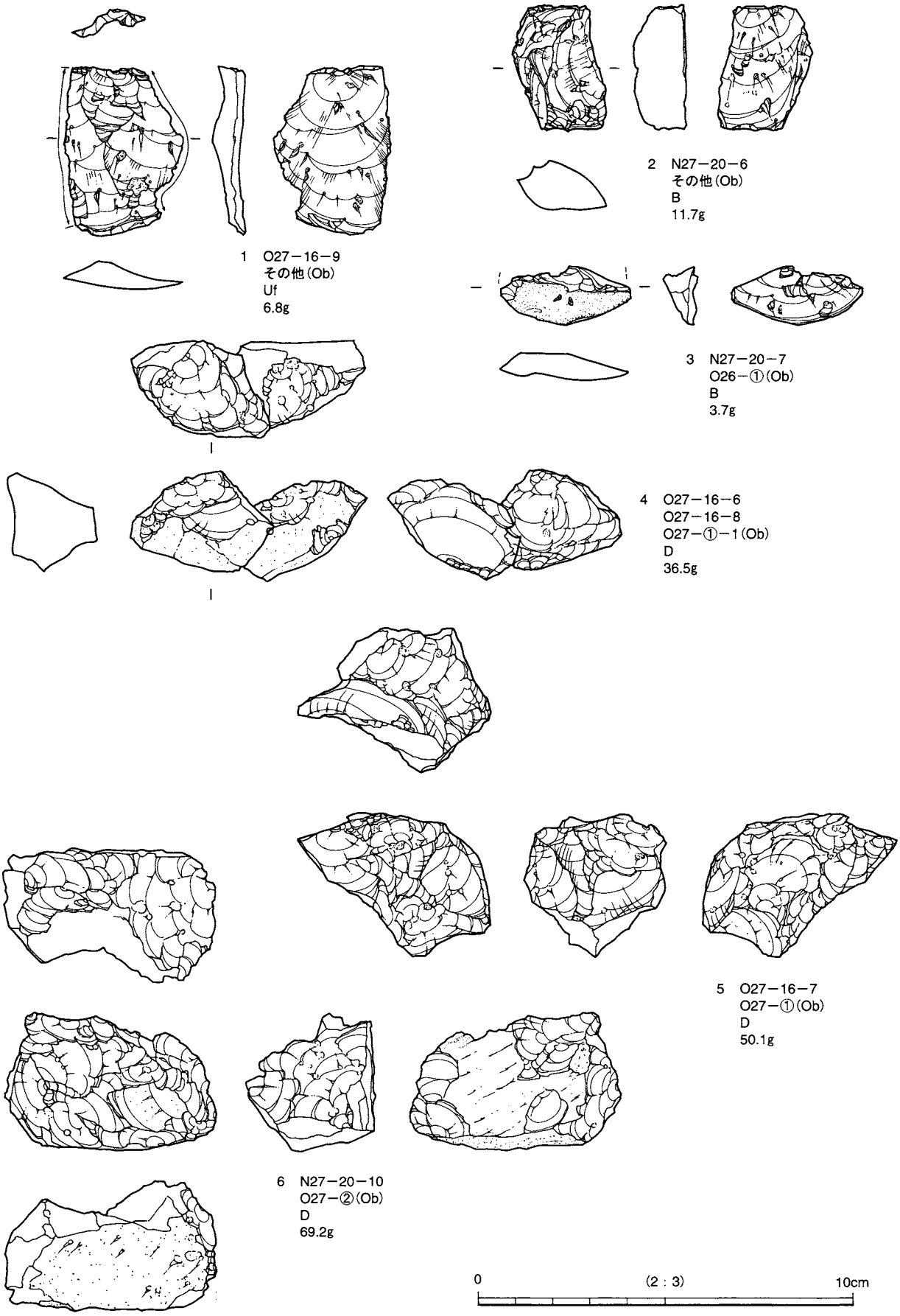
母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)										1											7		4	12		12
合　計										1											7		4	12		12



第99図　O27-aブロック出土遺物分布図（1）　−石器別分布図−



第100図　O27-aブロック出土遺物分布図（2）　−石材別分布図−



第101図　O27-aブロック出土遺物実測図

面として，多方向から不定型の剥片を生産している。剥離がスムーズにとおっていない剥離面が多く，良好な剥片はほとんど生産されていないと思われる。

単独出土遺物（第102図，第48・49表）

1）概要

ここでは，今まで記述してきたブロックとは直接関連せず，単独で出土した遺物について報告する。単独出土遺物は，石器9点，礫1点で，概ね，第3文化層に帰属すると考えられる。石器は，ナイフ形石器1点，加工痕ある剥片1点，剥片4点，石核3点で，石材は，黒曜石3点，安山岩2点，珪質頁岩3点，凝灰岩1点である。9点のうち5点について，母岩分類することができたが，すべて単独母岩である。

2）母岩の特徴と内容

・M27-④：暗褐色で均質緻密な東北産頁岩である。剥片1点（12.9ｇ）の単独資料である。

・N26-③：内部は黒みの強い黒灰色，自然面は黄褐色の安山岩である。φ1㎜以下の夾雑物を多く含む。石核1点（35.0ｇ）の単独資料である。

・N26-⑧：淡い灰緑色の珪質頁岩である。均質緻密で，かなり硬質である。ナイフ形石器1点（11.3ｇ）の単独資料である。

・N27-③：灰色がかる黄緑色の凝灰岩である。粒子はきめ細かく，均質である。石核1点（20.1ｇ）の単独資料である。

・P26-①：内部は緑色がかった黄灰色，節理面は橙褐色の嶺岡産珪質頁岩である。きめ細かく，均質である。加工痕ある剥片1点（4.9ｇ）の単独資料である。

なお，母岩分類できなかった資料に，黒曜石の剥片3点（総重量18.4ｇ）と安山岩の石核1点（52.4ｇ）がある。いずれも，特徴が乏しいことから，上述のブロックから出土した資料との異同を決定できなかった。

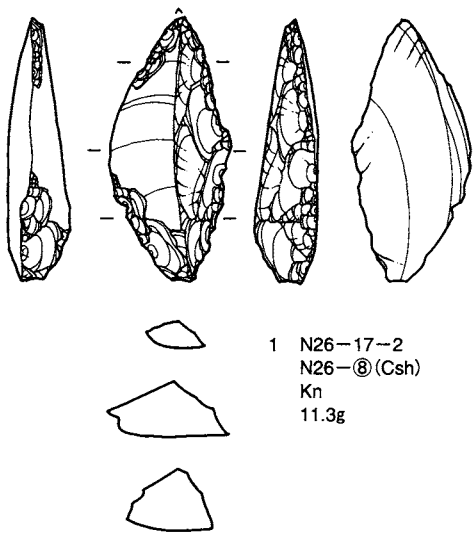
3）出土遺物（第102図）

ナイフ形石器（第102図1）　1は，灰緑色をした珪質頁岩のナイフ形石器である。横長剥片を用い，素材の打面部1側縁と，末端部の先端と基部とに裏面から調整加工を行っている。正面左側にはポジティブな剥離面が大きく残っており，本石器の素材が厚手の剥片を素材とする石核から剥離されたことを示している。Ⅳ層から出土している。

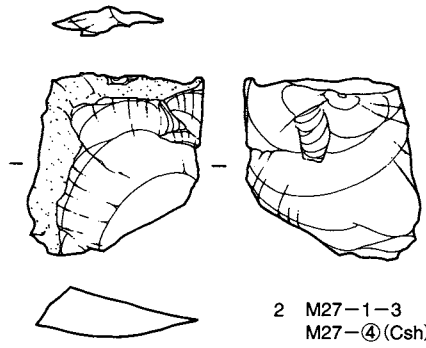
加工痕ある剥片（第102図4）　4は，珪質頁岩の加工痕ある剥片である。平坦な節理面を打面とする不定型な剥片を素材とし，裏面の下端に細かな調整加工を施している。裏面左側には，素材の主要剥離面が残る。

剥片（第102図2・3）　2は，頁岩の不定型な縦長剥片である。正面には自然面が残り，また，1枚の剥離面も裏面とは剥離方向が逆である。したがって，本剥片が剥片剥離作業の初期段階に剥離された可能性が高い。Ⅶ層出土である。3は，黒色不透明で，大型の夾雑物が多量に含まれる黒曜石の不定型な剥片である。正面右側には石核時の分割面が残り，その打点周辺は細かく潰れている。

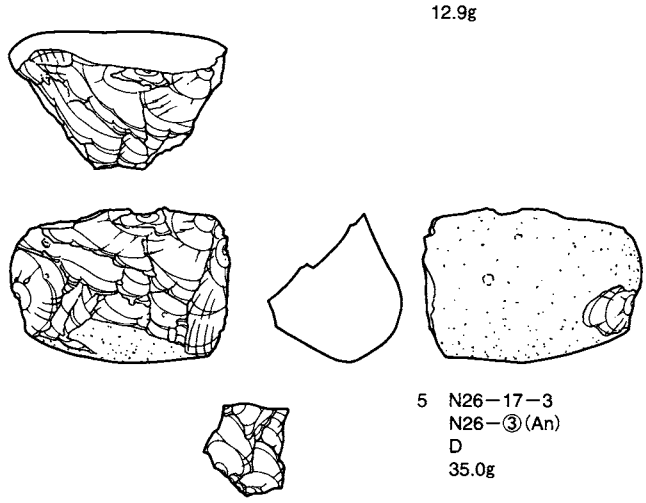
石核（第102図5～7）　5は，安山岩の石核である。正面の上端及び下端から裏面にかけて，広く自然面が残っており，この自然面を打面として不定型な剥片を剥離している。小型で扁平な円礫を半分程に分割し，石核の素材に用いたと考えられる。6は，凝灰岩の石核である。上下に打面を設定し，ほぼ全周を作業



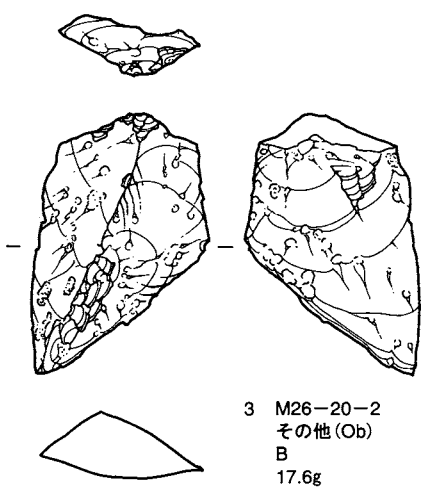
1 N26−17−2
N26−⑧(Csh)
Kn
11.3g



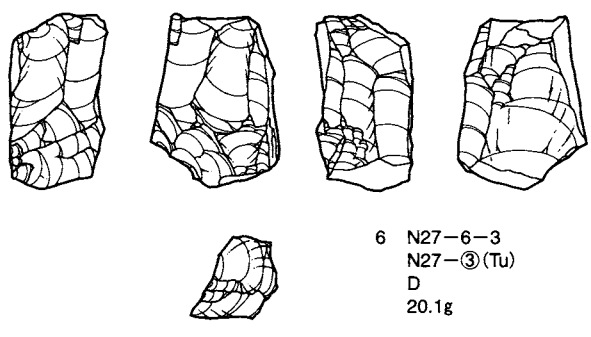
2 M27−1−3
M27−④(Csh)
B
12.9g



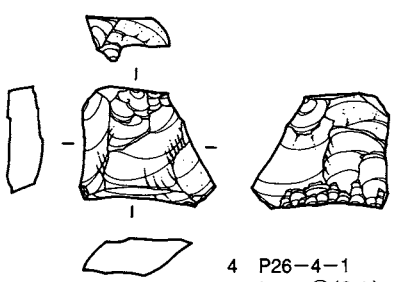
5 N26−17−3
N26−③(An)
D
35.0g



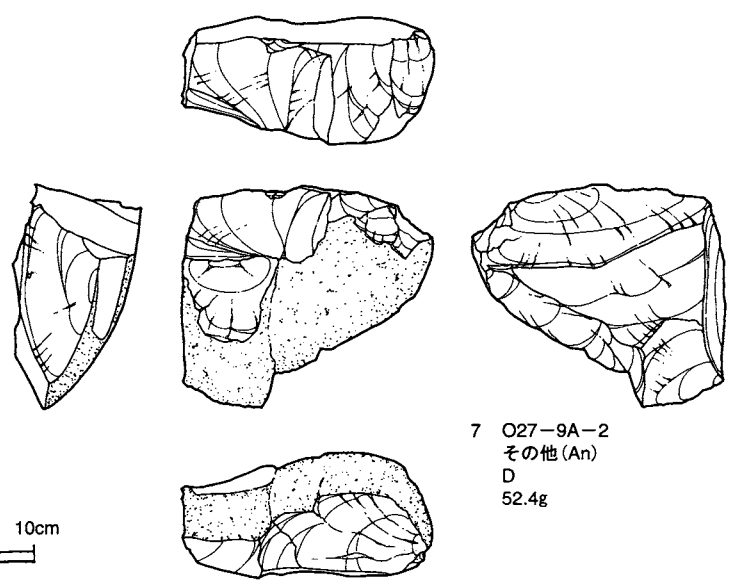
3 M26−20−2
その他(Ob)
B
17.6g



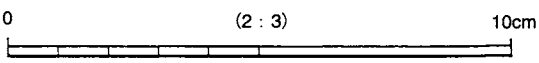
6 N27−6−3
N27−③(Tu)
D
20.1g



4 P26−4−1
P26−①(Csh)
Rf
4.9g



7 O27−9A−2
その他(An)
D
52.4g



第102図　単独出土遺物実測図

面として，小型の石刃を剥離している。正面及び左側面は上設により，右側面は下設打面により剥片剥離作業を行っている。打面は，上下とも複剥離打面である。打面再生と作業面の転移を繰り返し実施しながら石刃を生産し，作業の進行に従って石刃の企画も小型化したものと考えられる。7は，内外とも淡褐色の安山岩を用いた石核である。円礫を分割したものを石核の素材とし，不定型の剥片を各部分から得ている。

第48表　単独出土遺物母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
M27-④(Sh)																					1			1		1
N26-③(An)																							1	1		1
N26-⑧(Csh)	1																							1		1
N27-③(Tu)																							1	1		1
P26-①(Csh)									1															1		1
その他 (Ob)																					3			3		3
その他 (An)																							1	1		1
その他 (Rh)																									1	1
合　計	1								1												4		3	9	1	10

第49表　単独出土遺物石材別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bs	Mb	Mc	Sp	Ha	Ab	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合　計
黒曜石(Ob)																					3			3		3
安山岩(An)																							2	2		2
流紋岩(Rh)																									1	1
頁岩(Sh)																					1			1		1
珪質頁岩(Csh)	1								1															2		2
疑灰岩(Tu)																							1	1		1
合　計	1								1												4		3	9	1	10

上層遺構出土遺物（第103・104図）

1）概要

ここでは，上層（縄文時代以後）遺構の調査中に出土した資料で，旧石器時代に帰属すると判断した石器を報告する。なお，実測図を掲載したもの以外に，黒曜石の小型の剥片5点，頁岩の小型の剥片1点がある。

2）出土遺物（第103・104図）

ナイフ形石器（第103図1～4）　1は，黒色の東北産頁岩を用いたナイフ形石器である。小型の石刃を素材とし，平坦な打面を基部に残して，基部の両側縁と先端部左側に，微細な調整加工を行っている。左側縁の調整加工は，中央で一度途切れている。2は，暗灰緑色の嶺岡産珪質頁岩を用いたナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし，基部に打面をわずかに残し，左側縁全体と右側縁の基部寄りに調整加工を施している。石器の長軸と素材の長軸は一致する。3は，黒色不透明で，青灰色の縞が入り，夾雑物を多く含む黒曜石のナイフ形石器である。不定型な剥片を素材として，素材の剥離軸を石器の長軸に合わせている。右側縁に急角度の調整加工がみられるが，上下両端は新しく欠損しており，形態は不明である。左側縁の鋭利な縁辺には刃こぼれがみられる。4は，淡黄褐色の頁岩を用いたナイフ形石器である。小型の石刃を素材とし，打面を斜めに切っている。下半部は欠損している。

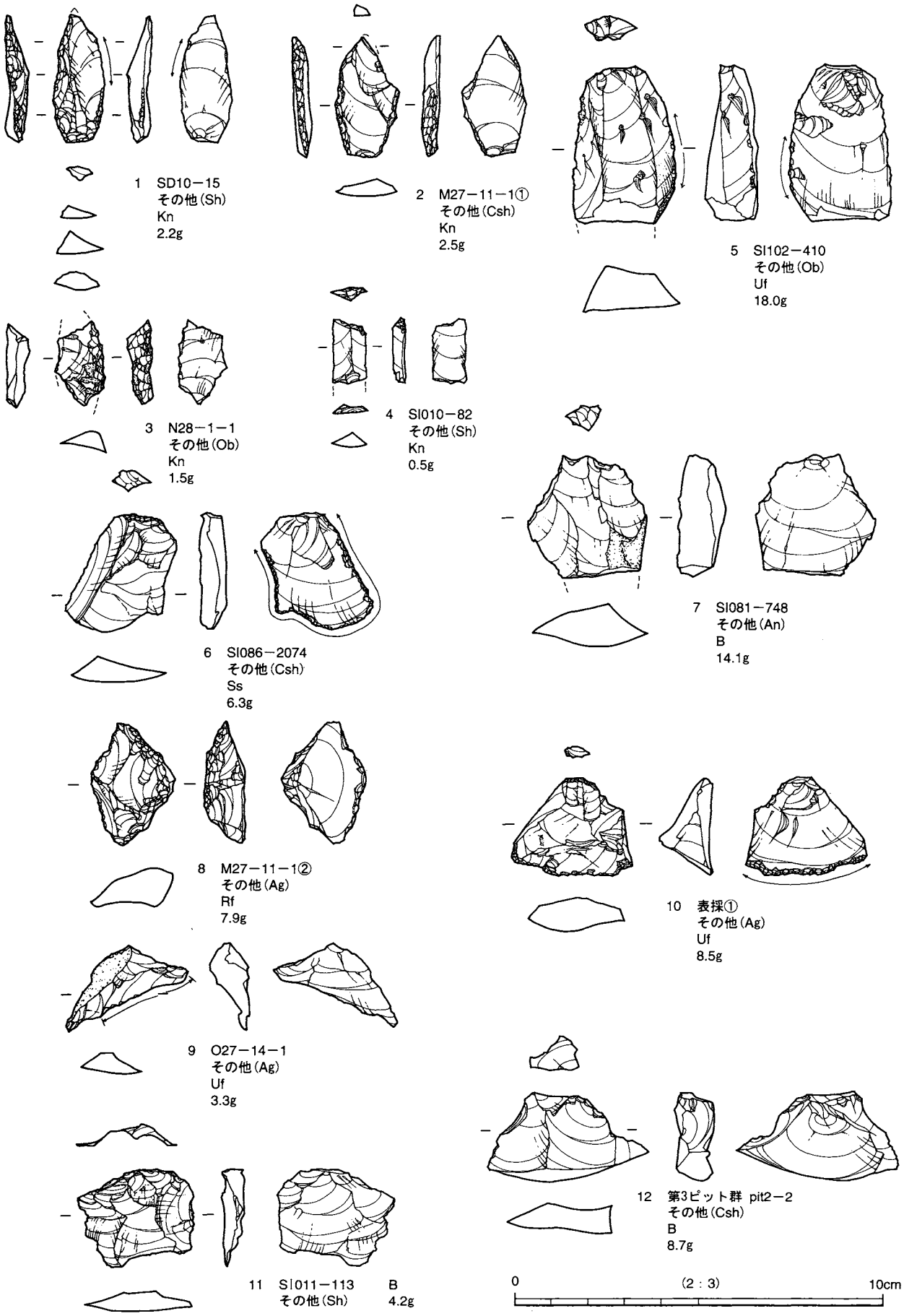
削器（第103図6）　6は，淡灰緑色の嶺岡産珪質頁岩を用いた削器である。不定型な剥片を素材として，裏面の両側縁に微細な調整加工を行っている。末端部には，刃こぼれがみられる。

加工痕ある剥片（第103図8，第104図13） 8は，紫がかった暗褐色の玉髄の加工痕ある剥片である。正面右側面は細かい剥離痕が密集して潰れていることから，素材は楔形石器から剥離された横長剥片と考えられる。裏面の末端に細かな剥離痕がある。13は，青みがかった黒灰色不透明で，夾雑物を多く含む黒曜石である。正面は，石核素材時の分割面が大きく残り，裏面は，打面を粗く除去した剥離面がある。下端には黒色でザラつく自然面が残る。

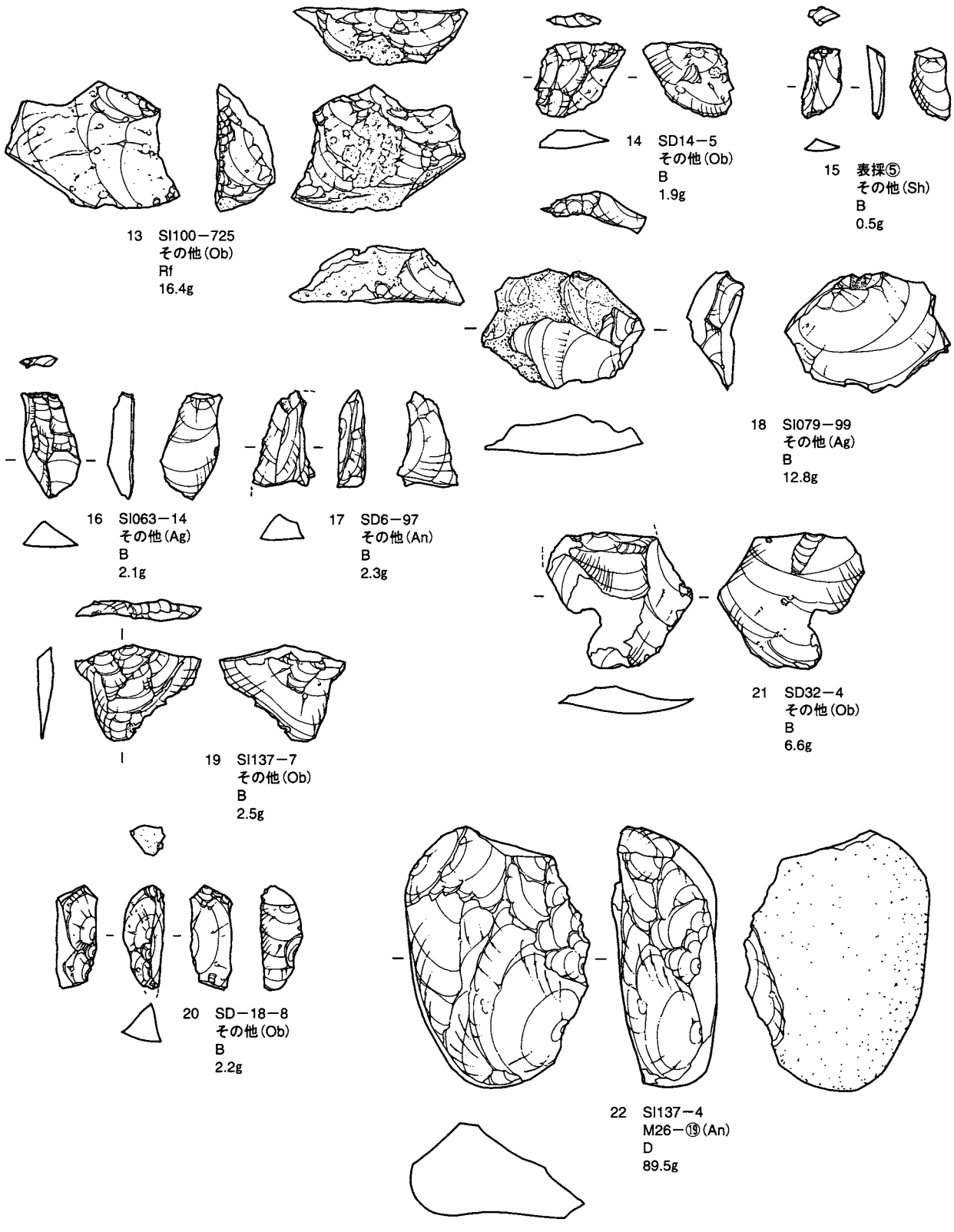
使用痕ある剥片（第103図5・9・10） 5は，淡黒色半透明で，球形の夾雑物が散在する良質な信州産黒曜石である。複剥離打面の中型の石刃で，鋭利な右側縁に刃こぼれがある。左側縁には，石核素材時の分割面が残る。下端は新しい欠損である。9は，白色不透明の瑪瑙の使用痕ある剥片である。正面に多方向の剥離面と平滑な自然面をもつ横長剥片を素材とし，下端に刃こぼれがみられる。10は，白みがかった明橙色の瑪瑙の使用痕ある剥片である。打面が小さく，正面の剥離面は多方向から横長剥片を用いている。裏面の下端に刃こぼれがみられる。

剥片（第103図7・11・12，第104図14～21） 7は，淡褐色の安山岩の不定型な剥片である。正面は，裏面と同一方向の剥離面と，自然面で構成される。下端は，新しく欠損する。11は，赤みがかった褐色の頁岩による不定型な剥片である。12は，暗褐色の東北産頁岩による不定型な剥片である。打面と正面の剥離面が交互に形成されている。末端はヒンジフラクチャーとなっている。14は，淡黒色不透明で，夾雑物の多い黒曜石を用いた，不定型の剥片である。正面左側にある剥離面は，裏面とは90度異なる。15は，淡黄褐色の頁岩による小型剥片である。16は，橙色がかる乳白色で半透明の瑪瑙の縦長剥片である。17は，黄色みがかった褐色の安山岩の剥片である。各所が欠損しており，元の形状は不明である。18は，明橙色と乳白色の混在する瑪瑙の不定型な剥片である。正面は，裏面と直交する方向の剥離面と自然面とから成っている。19は，黒色半透明で夾雑物を含む黒曜石の横長剥片である。20は，黒色不透明で夾雑物を含む黒曜石の縦長剥片である。横断面は三角形で，正面には互いに直交する剥離面がみられるが，稜付石刃とは性格の異なるものであろう。21は，淡黒色透明で黒色の縞が入る黒曜石の剥片である。本遺跡では数少ない信州産の黒曜石である。

石核（第104図22） 22は，内部は褐色で夾雑物が散在し，自然面は黄褐色の安山岩を用いた石核である。拳ほどの円礫を2分割したものを素材とし，分割面を作業面として不定型な剥片を生産している。分割面は実測図正面中央に縦に細長く残る剥離面である。



第103図　上層遺構出土遺物実測図（1）



第104図　上層遺構出土遺物実測図（2）

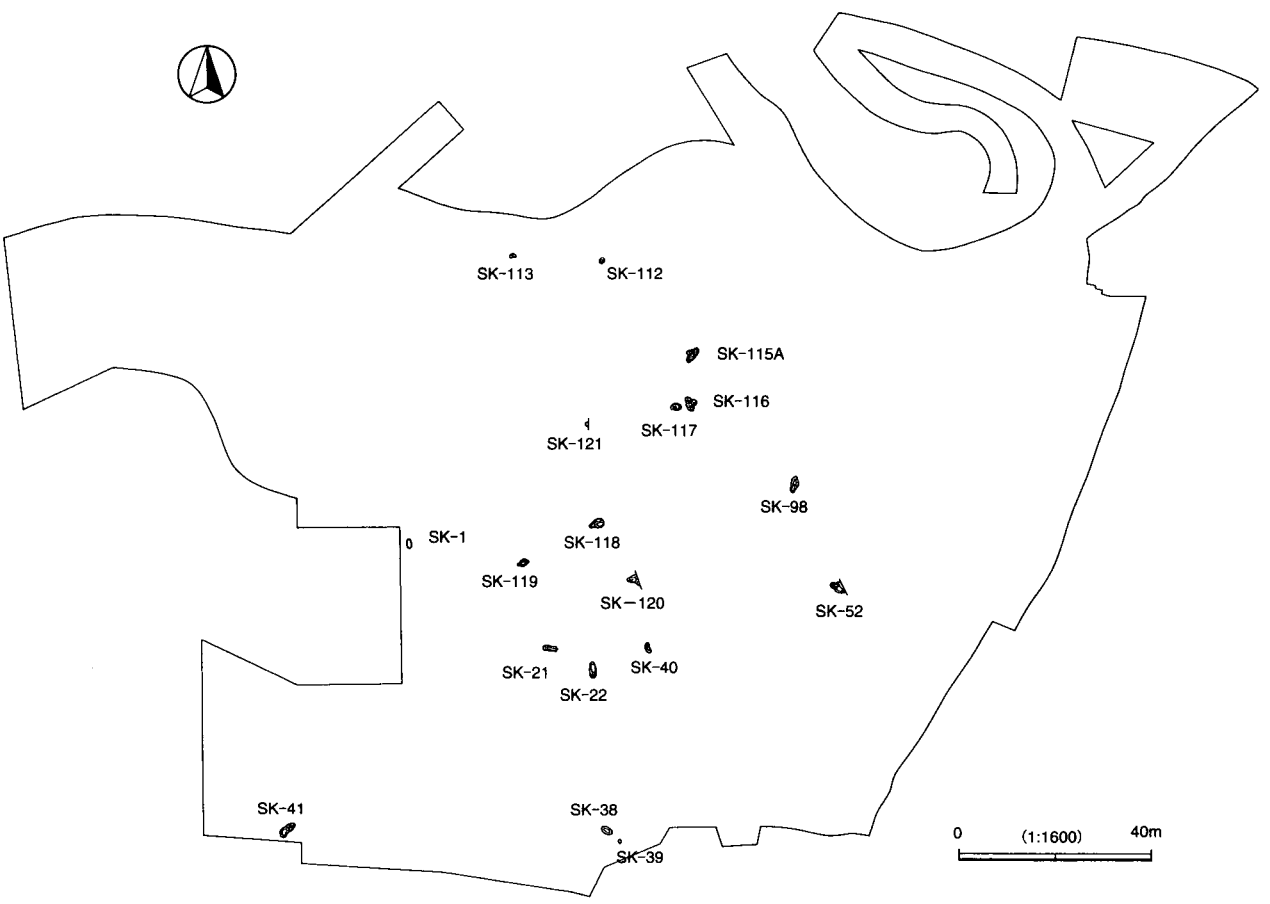
第３章　縄文時代

鷲谷津遺跡で検出された縄文時代の遺構は，炉穴17基，陥穴１基，土坑１基の計19基で，いずれも早期後半の条痕文系土器期の所産である。炉穴のなかには２基が重複してタコ足状の平面形を呈するものが含まれており，実際の基数は19基～20基にのぼるものと思われる。遺構外からは，早期前葉の撚糸文系土器から中期後半の加曽利Ｅ式土器までの資料が出土しているが，その主体は条痕文系土器であり，当該期が鷲谷津遺跡の縄文時代の主体をなすといえる。

第１節　炉穴と遺物

SK-21（第106図，図版75・106）

N28-06で検出された。長径2.86ｍ，短径0.80ｍの東西に長い不整長楕円形を呈し，西端と東端の２か所に火床面をもつ。掘込みは70㎝とやや深い。遺構の東端はピット状に20㎝～30㎝ほど深くなっており，そこに存在する火床部の焼土堆積の上面がやや抉れていることから，西側の火床面より古い可能性が



第105図　縄文時代炉穴配置図

ある。両火床部とも焼土は厚く堆積しているが，火床面の被熱はそれほど顕著ではない。なお，東側火床部付近をSI-018に切られている。図示できる遺物はないが，条痕文系土器の小破片数点が出土した。

遺物は1点を図示した。表裏に貝殻条痕文が施される口縁部破片で，口唇部は連続して指頭押捺を加えることによって緩やかな鋸歯状を呈する。胎土中には植物繊維を含んでおり，焼成は悪く脆い。茅山下層式期の資料であろう。ほかに条痕文系土器の小破片が数点出土している。

SK-22（第106図，図版75・106）

N28-07で検出された。長径3.09m，短径1.18mの南北に長い不整長楕円形を呈する。掘込みは最深部で69cmを測るが，底面の凹凸が激しく一定ではない。底面の南寄りには浅いピット2基が眼鏡状に掘られており，その部分を火床部としているが，平面形は必ずしも一致せず，焼土堆積はピットのかなり外側まで広がっている。SK-21と同様，焼土の堆積は厚いものの火床面の被熱は弱い。

遺物としては条痕文系土器の小破片が数点出土しており，うち比較的大型の1点を図示した。表裏貝殻条痕文の胴部破片であるが，細別型式は不明である。

SK-38（第107図，図版75・106）

N29-02で検出され，一部N28-22に及んでいる。長径1.95m，短径1.22mの不整楕円形のプランを有し，底面はほぼ平坦で42cm程掘り込まれている。火床部は遺構のほぼ中央から北西端にかけて広く分布しており，焼土の堆積も15cm以上と厚いが，火床面の被熱は弱い。遺物は出土しなかった。

SK-39（第107図）

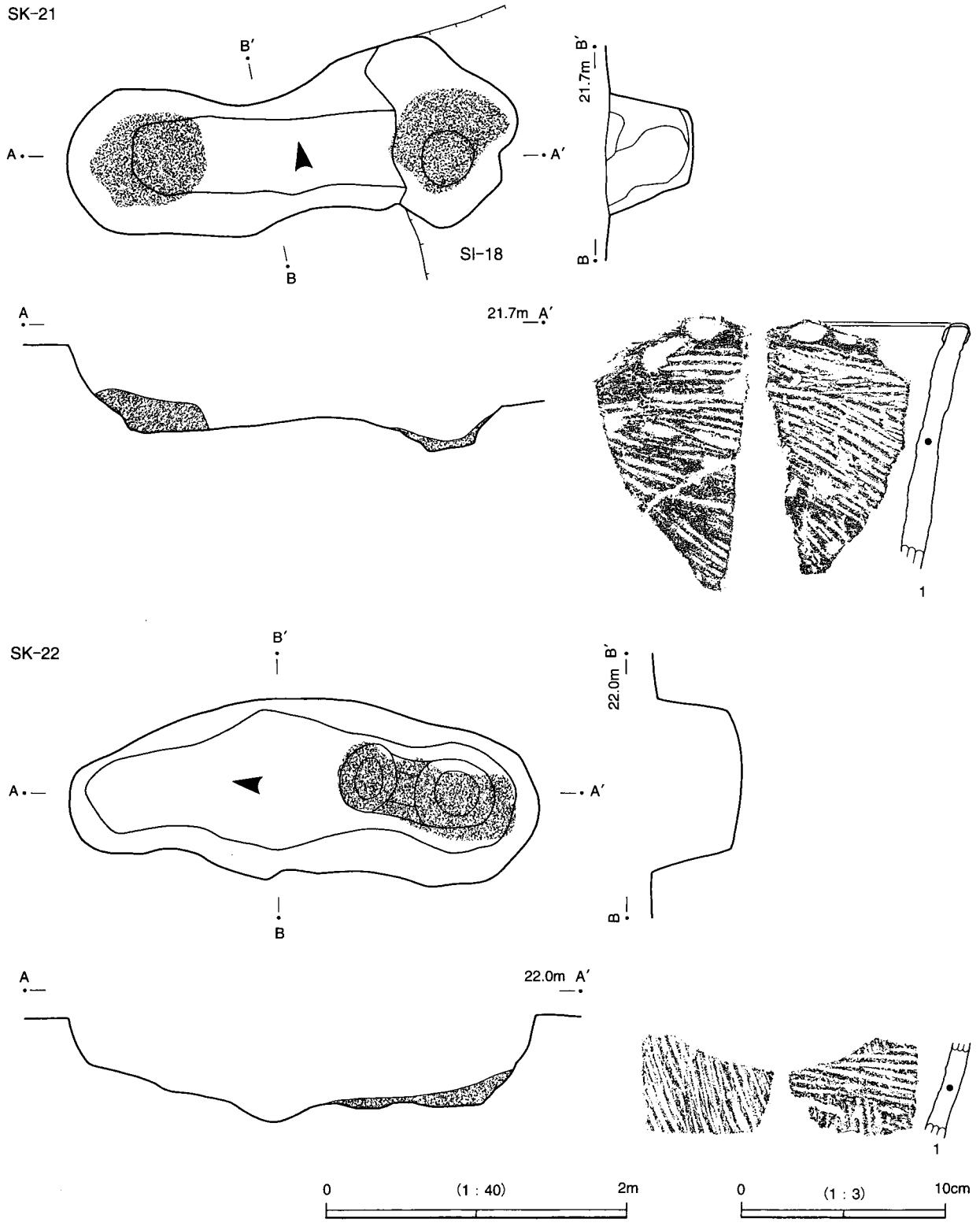
N29-02～03にかけて存在する。不整円形を呈する土坑のなかに良好な焼土堆積がみられたことから，炉穴の火床部のみが遺存したものと判断した。底面から壁面にかけて全体に焼土が厚く堆積しているにもかかわらず，その焼土が遺構外に全く及んでいないことからも，遺構の上部が削平されたものと考えるのが妥当であろう。長径74cm，短径68cm，深さ32cmと小規模である。本跡のすぐ南側にはSD-4が東西に走っており，その関連で遺構の上部が削平された可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SK-40（第107図）

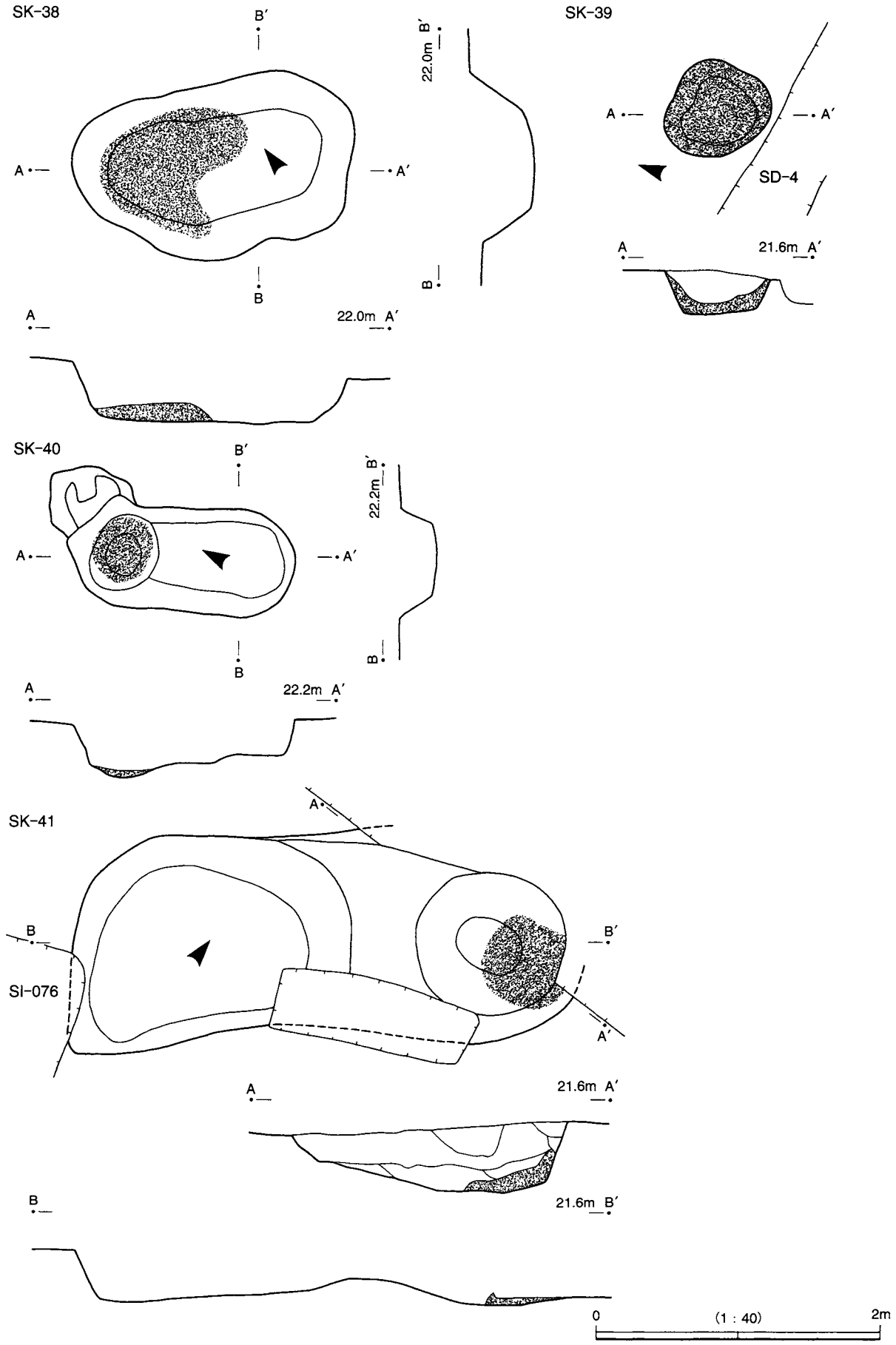
N28-08～09にかけて存在する。長径1.57m，短径0.76mの北西～南東に長い楕円形を呈し，深さは40cmを測る。形状は整っているものの，他の炉穴に比してかなり小規模である。北端に浅いピットが掘込まれ，その部分に焼土堆積がみられるが，火床面の被熱は顕著ではない。本跡の北側には足場状の段がついているが，火床部のすぐ上であることを考えると足場である可能性は低い。遺物は出土していない。

SK-41（第107図）

L28-25～L29-05にまたがっている。付近は攪乱が激しく，西隅をSI-076に切られているため本来の正確な規模は不明であるが，遺存部で計測する限りでも長径3.49m，短径1.32mと大規模である。全体では北東～南西に長い不整長楕円形を呈しており，中央部がやや浅くなっている。深さは最深部で48cmを測る。火床部は北東端に1か所あるのみで，遺構の規模のわりには小さい印象を受けることから，西側半



第106図　SK-21・22と出土遺物



第107図　SK-38・39・40・41

分は別の遺構であるのかもしれない。遺物は出土していない。

SK-52（第108図，図版76・106）

O27-22～O28-02にかけて存在する。長径3.16m，短径1.06mの北西～南東に長い長楕円形を基本とするが，一部タコ足状の張り出しを有する。あるいは南北に主軸をもつ長径1.80m程の炉穴が重複しているのかもしれないが，深さは約49cmで均一であり，火床部の状況等にも差異がうかがえないことから同時に営まれた遺構であると判断した。火床面は4か所あり，いずれも浅くピット状に掘込まれている。焼土の堆積は良好で，火床面も被熱赤化が進んでいる。

本跡は遺物が比較的豊富であり，計7点を図示した。いずれも表裏条痕文のみの胴部破片で細別型式は判然としないが，1～4や7のようにハイガイと思われる放射肋の細かい貝殻で深く施文するものと，5や6のように放射肋の幅が広い貝殻で浅く施文するものの二者が存在している。7は底部付近の胴最下部の破片で，表面の破片下端には貝殻条痕文が及んでいない。

SK-97（第109図，図版76・106）

N28-04に位置し，北端がわずかにN27-24にかかっている。東側をSI-086に切られているため全容は不明であるが，遺存部から推定される形状は不整楕円形である。長径は1.48mが遺存しており，短径は1.06m，深さは56cmを測る。火床部は南西端付近に1か所あるが，焼土の堆積は薄く，火床面の被熱も顕著ではない。図示できる遺物はないが，埋土中から条痕文系土器の小破片が数点出土している。

SK-98（第109図，図版77・106・107）

O27-11～16にかけて検出された。長径3.20m，短径1.21mの南北に長い不整長楕円形を呈する。中央部より南側がやや深くなっており，最深部で66cmとかなり深い。火床部は北端，南端，中央やや南寄りの3か所に存在しており，いずれも焼土の堆積はそれほど厚くないが，両端の2か所は火床面の被熱が顕著である。

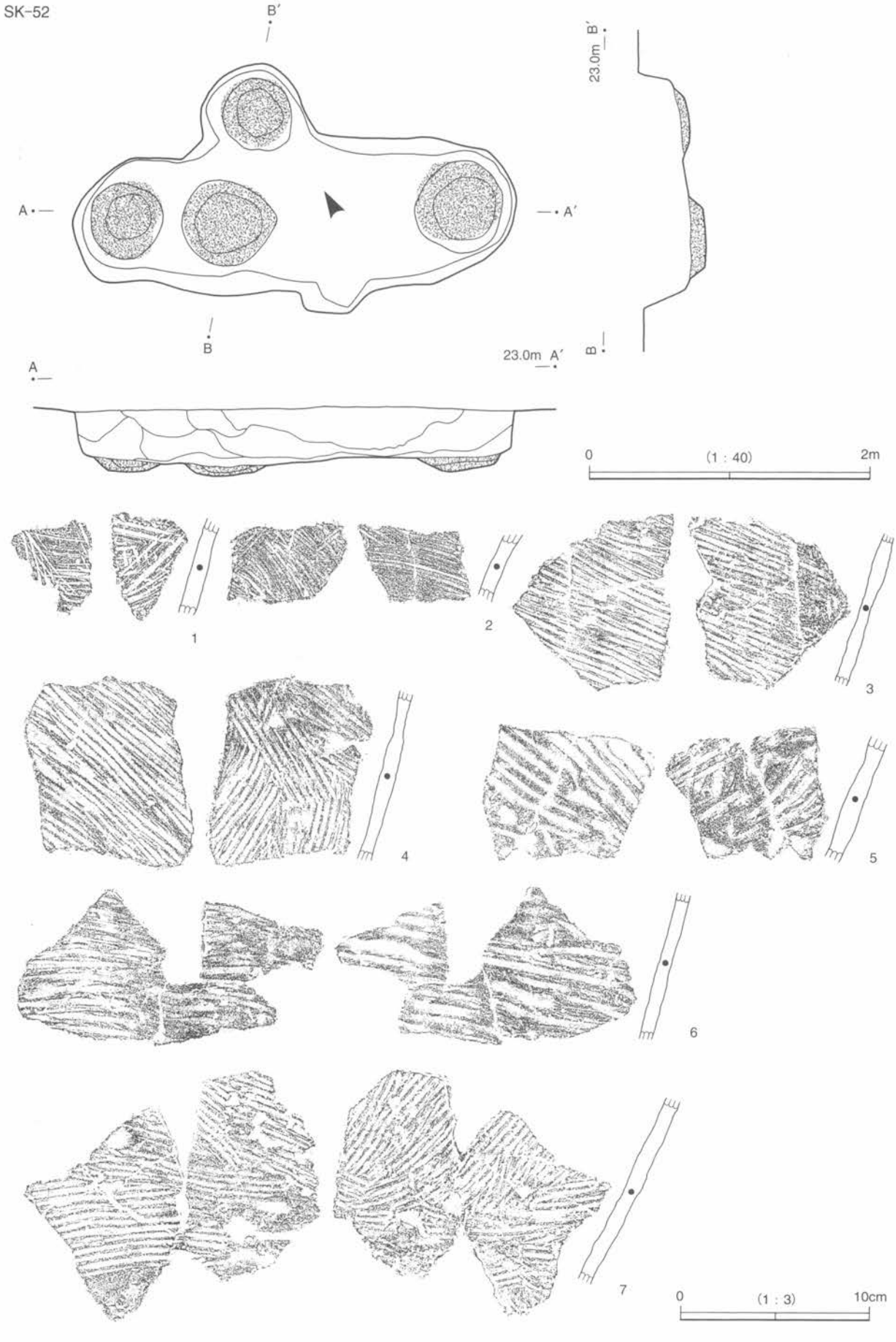
遺物は2点を図示した。尖鋭な波頂部をもつ波状口縁深鉢形土器で，表裏に粗い貝殻条痕文が施される。遺存度が低いため確実に判断できないが，おそらく4単位の波状口縁となろう。胎土中には大量の植物繊維を含んでいる。茅山下層式期の所産と思われる。出土遺物はこの2点のみである。

SK-113（第110図，図版77・106）

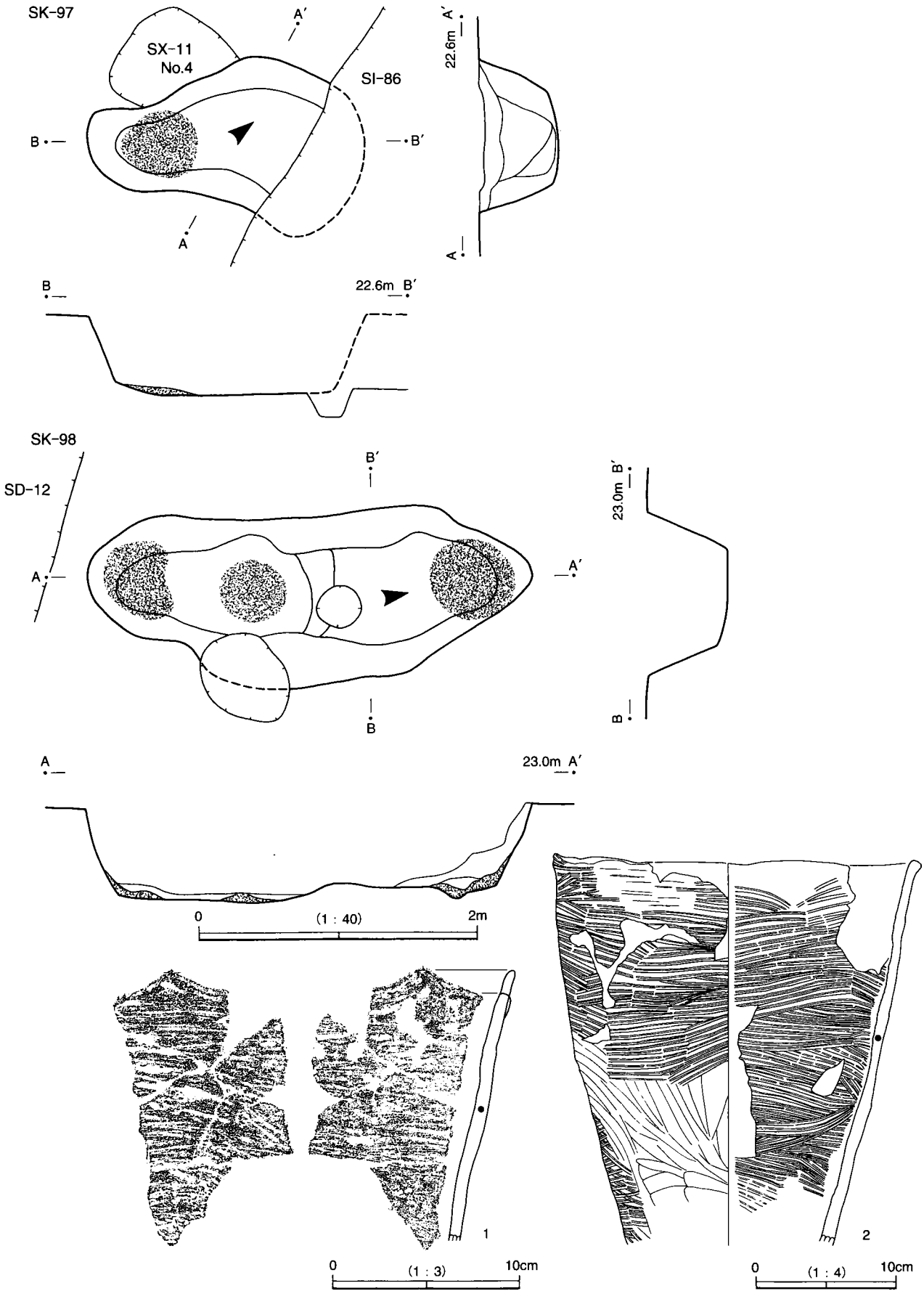
M26-19で検出された。南側を攪乱されているため正確な規模は不明であるが，遺存部から推定される平面形は長径0.86m，短径0.74mの比較的整った楕円形である。深さは21cmを測り，SK-39と同様に火床部の掘込みのみが遺存したものである可能性が高い。焼土堆積は約6cmの厚みを持ち安定しているが，底面との間にはロームを主体とする暗黄褐色土層が介在しており，その被熱痕は顕著ではない。遺物は出土しなかった。

SK-115（第110・111図，図版78・106）

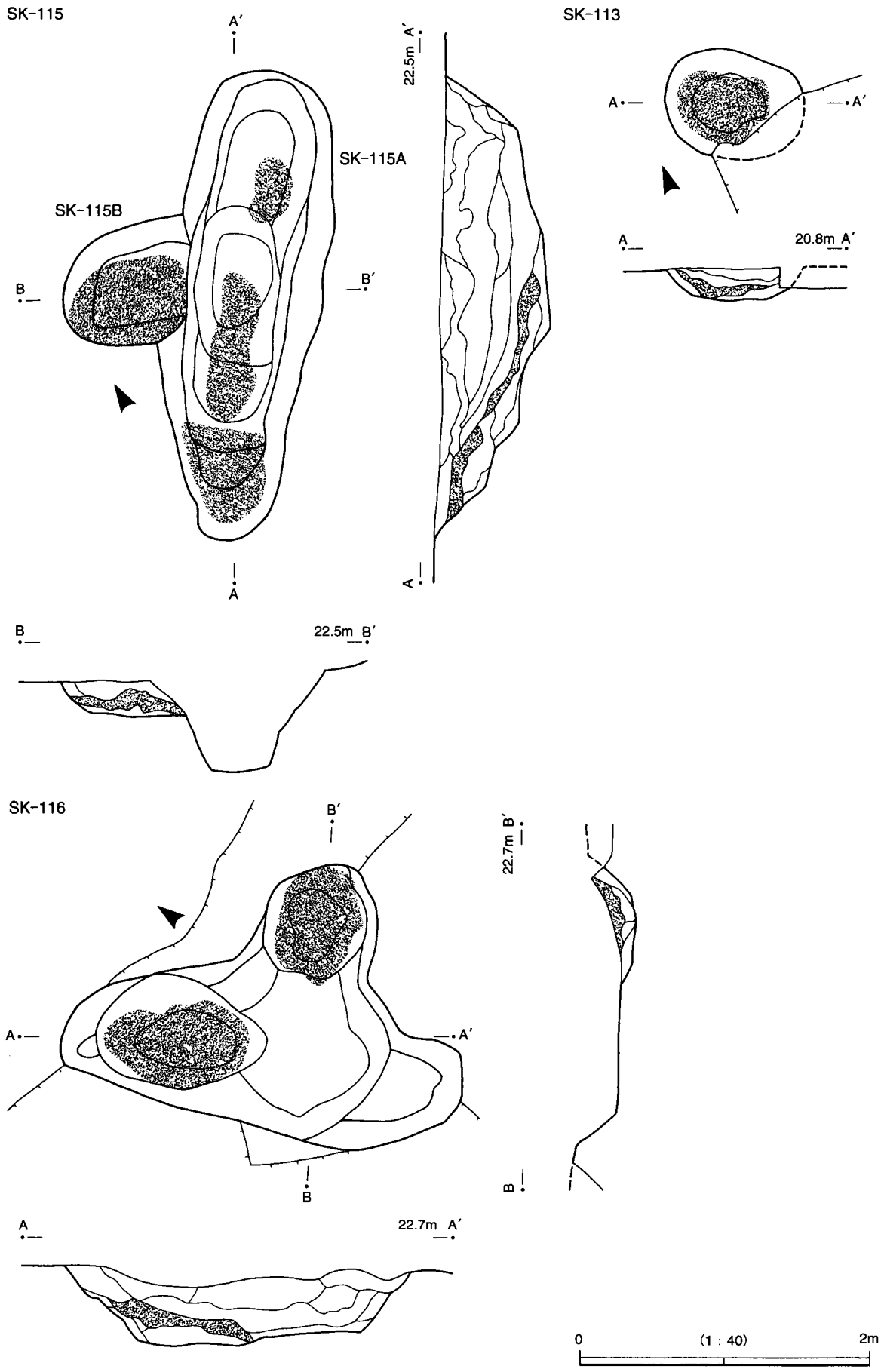
N27-04に存在する。2基の炉穴が重複しており，調査時にSK-115A・SK-115Bと枝番を付した。SK-115A



第108図　SK-52と出土遺物

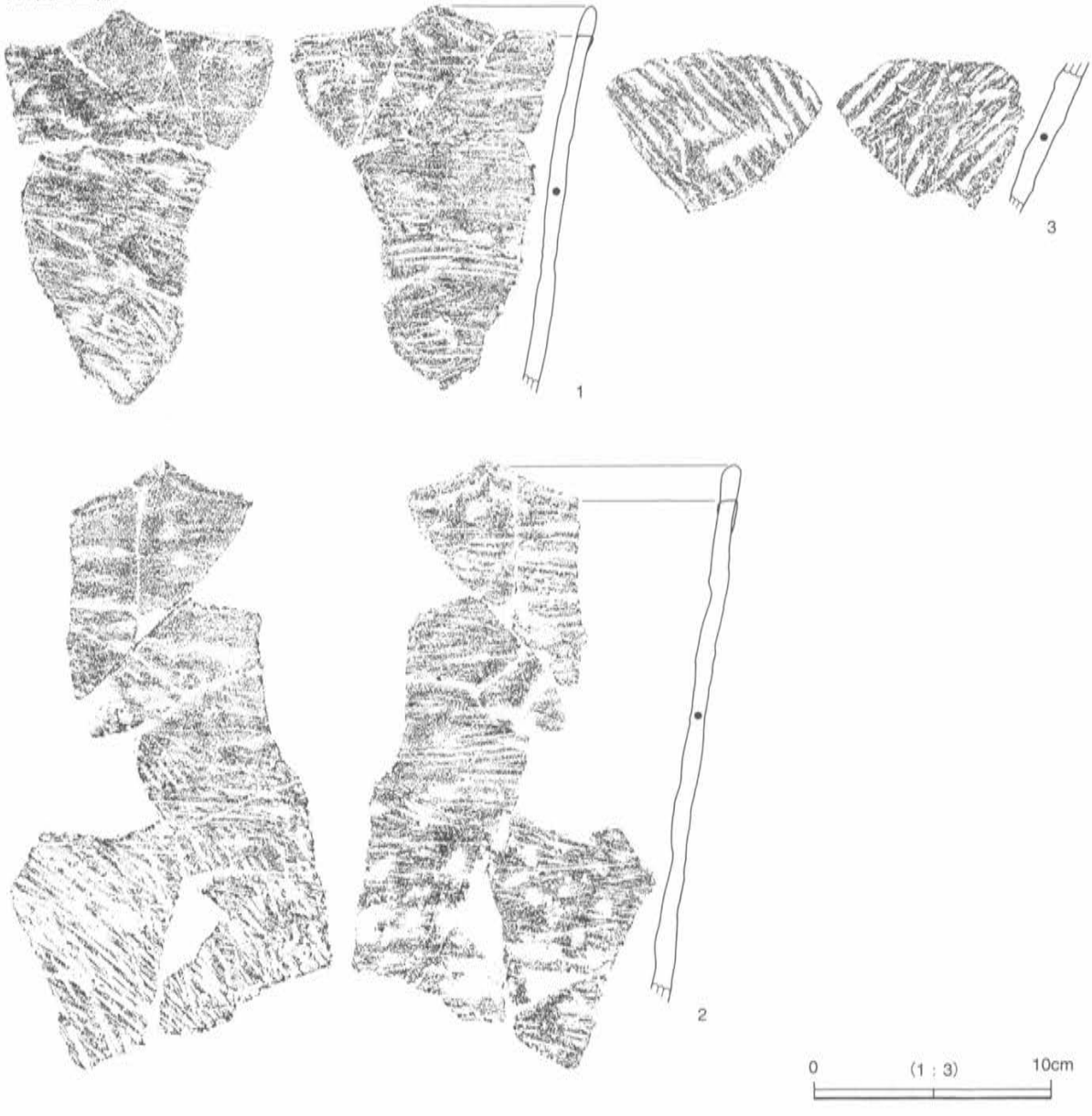


第109図　SK-97・98と出土遺物

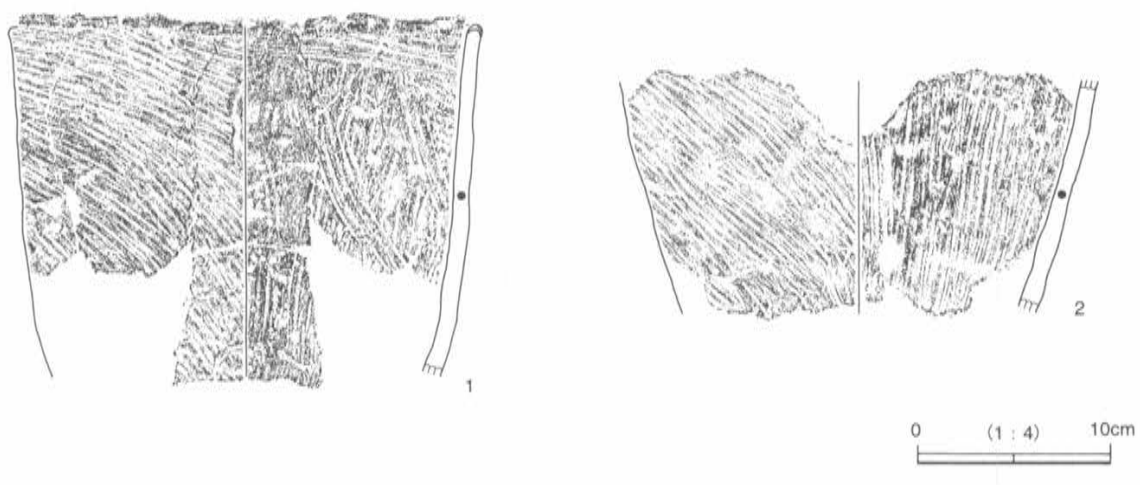


第110図　SK-113・115・116

SK-115出土土器



SK-116出土土器



第111図　SK-115・116出土遺物

は長径3.23 m，短径1.04 mの北東～南西に長い長楕円形を呈し，SK-115BはSK-115Aの北西壁の中央付近に直交する形で重複する長径0.86 m以上，短径0.86 mの楕円形のプランをもつ。底面はSK-115Bは比較的平坦であるがSK-115Aでは階段状を呈しており，深さはSK-115Aが最深部で76 cmとSK-115Bの25 cmと比較するとかなり深い。火床部はSK-115Aに3か所，SK-115Bに1か所あるが，いずれも底面との間には被熱赤化の進んだロ－ムブロックを主体とする層が介在している。SK-115Bの火床部がSK-115Aの埋土に切られていることから，SK-115Aのほうが新しいことは確実である。

遺物は3点を図示した。1と2は同一個体で，SK-115Bから出土した。SK-98出土の資料と類似する形態の波状口縁深鉢で，胎土中には大量の植物繊維を含んでいる。表裏とも貝殻条痕文が粗く施されるが，表面の口縁部直下には認められない。茅山下層式期であろう。3はSK-115Aから出土した表裏貝殻条痕文の胴部破片である。SK-115Aは出土遺物が乏しく，時期決定をすることができなかった。

SK-116（第110・111図，図版78・107）

N27-09で検出された。周辺は攪乱が激しいが幸い浅く，遺構の最上部が破壊されているのみで全形をうかがい知ることが可能である。平面形はタコ足状で，最大径は2.81 m，その直交方向の径は1.04 mを測り，深さは最深部で54 cmである。火床部は北西側に張り出した部分と東側に張り出した部分の2か所にあり，いずれも浅いピット状の掘込みを伴っている。ともに焼土の堆積は厚く下位の層の被熱も顕著で，とくに東側の火床面ではレンガ状に赤く焼きしまっている。南側には足場と思われる段がついている。

遺物は比較的豊富で，径の復元可能な2点を図示した。1は口縁部から胴下部までが遺存する資料で，口唇部には指頭押捺が密に施されて緩やかな鋸歯状を呈している。文様は表裏とも貝殻条痕文であるがその施文は密である。2は胴下部の資料で，1よりも径は大きいようである。文様は表面が斜位の，裏面が縦位の貝殻条痕文が施されている。ともに茅山下層式期の所産であろう。

SK-117（第112図，図版78・107）

N27-08に位置する。北東側でSD-25と接し，西端を攪乱により破壊された不整楕円形の炉穴である。長径は1.38 mが遺存し，短径は1.16 m，深さ52 cmを測る。底面は平坦で，西寄りに浅い掘込みを伴う火床部が存在する。焼土はこの掘込みの中に充満しており，火床面は被熱赤化が進んでいる。

図示できる遺物は1点である。胴下部の小破片で，表面には貝殻条痕文が観察できるが裏面は調整痕のみで無文である。細別型式は不明である。

SK-118（第112図，図版78・107）

N27-17で検出された。長径2.99 m，短径1.73 mと比較的規模の大きい不整楕円形のプランを有する。主軸方向はほぼ東西であり，南壁際が西から東へ向かって下がる4段の階段状に掘込まれて，深さ59 cmを測る東端の最深部に火床部を設けている。焼土堆積の範囲は広く，火床面もレンガ状にしまるほどの熱を受けている。

遺構の規模は大きいが遺物の出土量は少なく，図示できたのは1点のみである。口径40 cmの深鉢形土器で，口唇部には刻みが密に加えられている。胴中部を「く」の字状に内屈させて稜を設け，口縁部文様帯と胴部文様帯の境界としている。口縁部文様帯は貝殻条痕文を地文に沈線によって幾何学的に区画し，

区画内は押引き手法による集合結節沈線を充填したり，地文を磨消したり，貝殻条痕文をそのまま残したりしている。沈線の交点には円形竹管を押捺する。胴部文様帯及び裏面全体には貝殻条痕文が施されるが，上方ほど密であり下方は散漫になる。典型的な鵜ヶ島台式の資料である。

SK-119（第113図，図版78）

N27-20で検出された。全形は長径1.94m，短径1.28mの菱形に近い不整方形を呈するが，深さは10cm程と浅い。内部に主軸方向に沿って長楕円形の土坑が掘られ，その北東端に袋状にピットを設けて火床部としている。火床部のある最深部の深さは63cmを測る。焼土堆積は10cm程と厚く，火床面も被熱赤化が顕著である。遺物は出土しなかった。

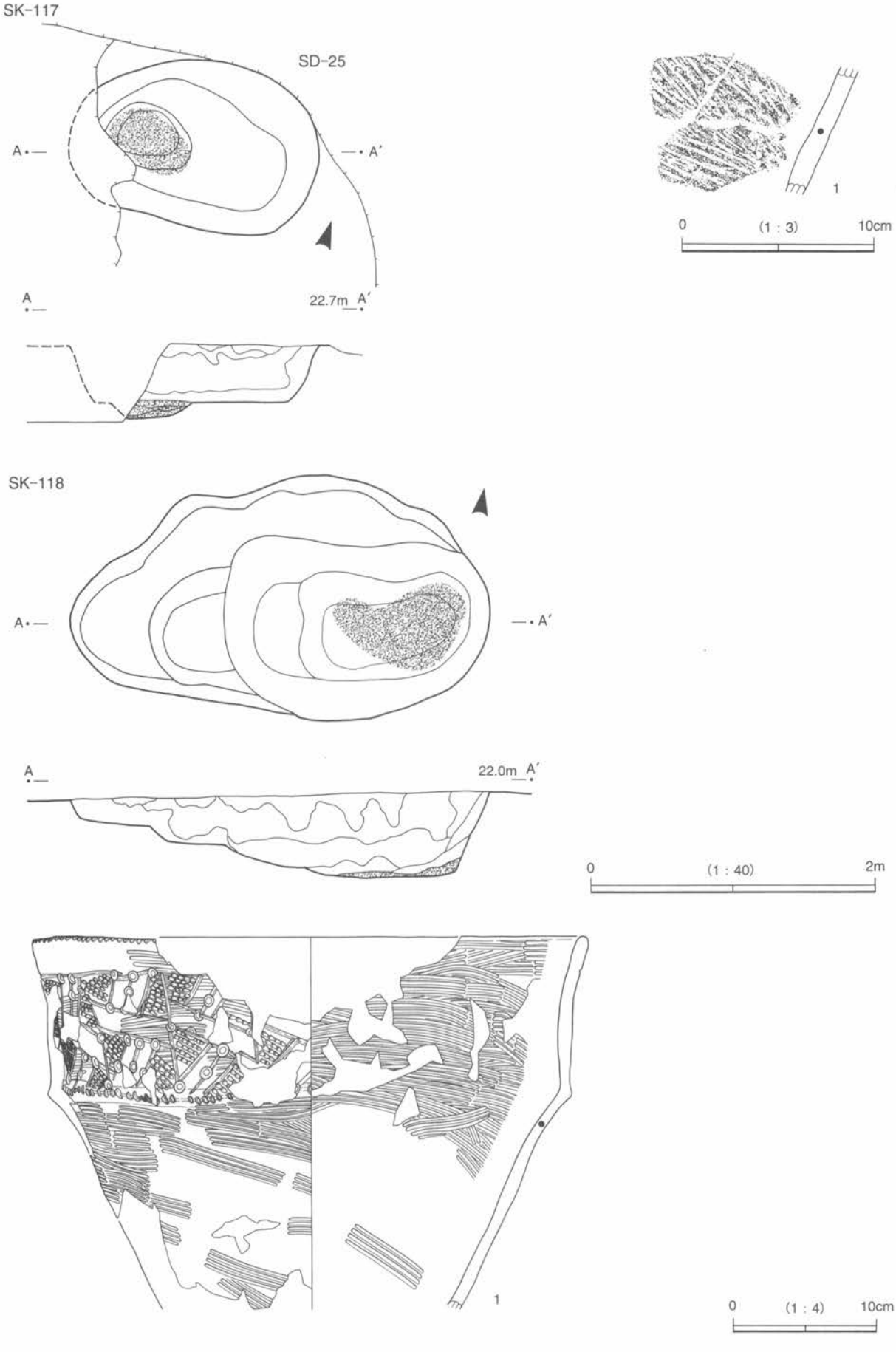
SK-120（第113図，図版79・106）

N27-22～23にまたがって存在する。全体ではタコ足状の平面形を呈するが，土層断面から2基の不整楕円形の炉穴が重複しているものと判断した。西側に張り出す新しい方をSK-120A，南東側の古い方をSK-120Bとして報告する。なお，東側はSI-001に切られている。SK-120Aは西端付近に浅い掘込みを設け火床部としている。焼土の堆積は約10cmと厚く，火床面はそれほど顕著ではないものの被熱赤化が進んでいる。SK-120Bと接する部分にある浅い段は，本跡に伴う足場であろう。A－A'の土層断面をみると，この部分の埋土がSK-120Bの埋土を切っている。SK-120Bは底面が北から南へ下る階段状になっており，56cmを測る最深部を火床部としている。火床部に伴うピット状の掘込みと焼土堆積の範囲は一致しない。焼土の堆積は約20cmと極めて厚いが，火床面の被熱は不明瞭である。

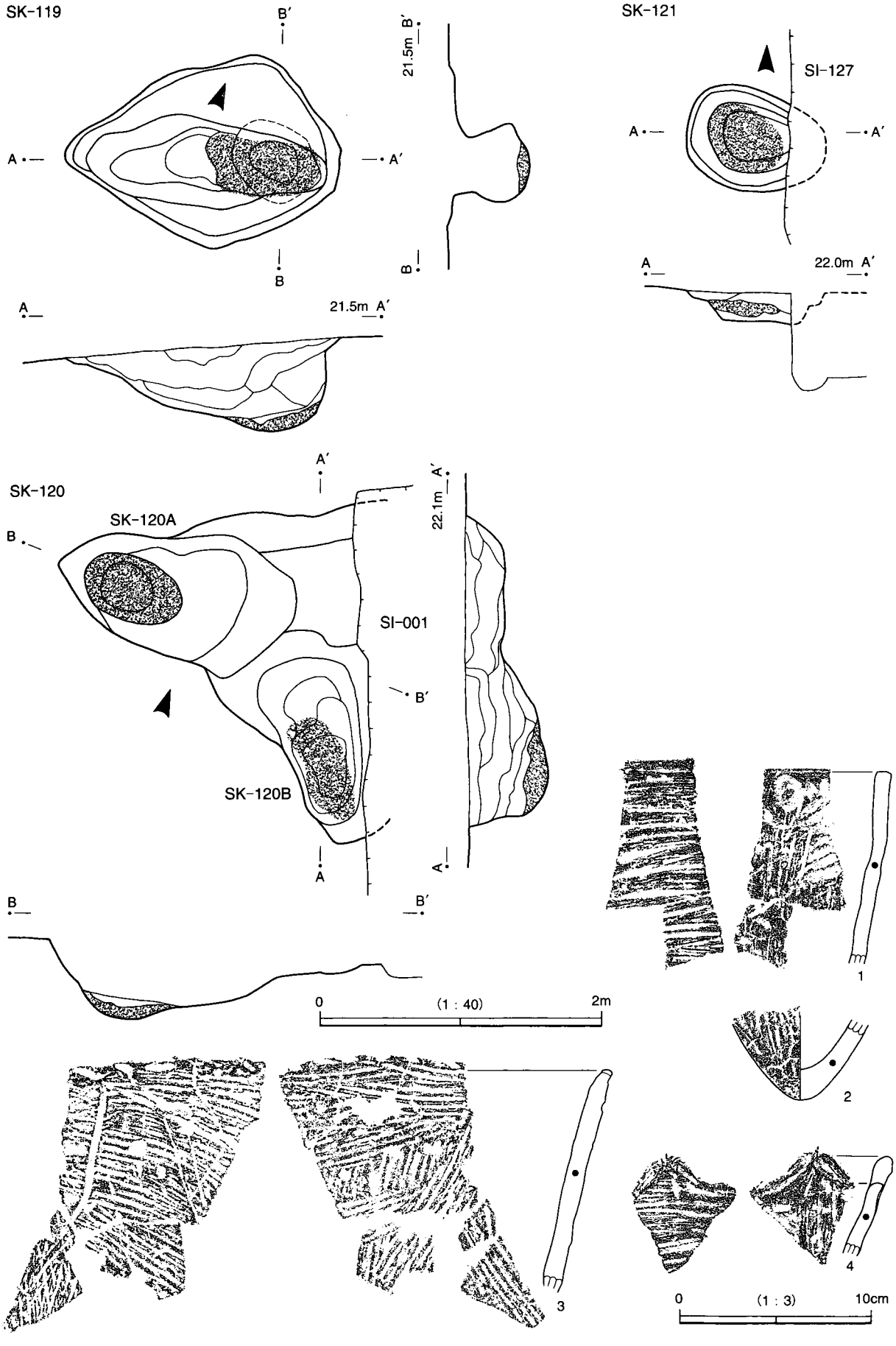
遺物は4点を図示した。1と2がSK-120A，3と4がSK-120Bからの出土である。1は比較的直に立ち上がる口縁部破片で，口唇部の断面はかなり角張っている。表裏面ともに貝殻条痕文が粗く施されるが，裏面ではとくに粗くなっている。2は砲弾形を呈する尖底土器の底部破片である。表面には縦位の貝殻条痕文が観察できるが，裏面は遺存状況が不良で判然としない。3はわずかに外反しながら立ち上がる口縁部破片で，口唇部には斜位の刻みが加えられている。表裏とも密に貝殻条痕文が施され，表面には縦位の粗い沈線文様が観察できる。4は波状口縁深鉢の小破片で，SK-98やSK-115の資料と類似する形態をとるものと思われるが，口縁部の断面形態が角張っている点で若干様相を異にする。表面には横位の貝殻条痕文が浅く施されているが，裏面は調整痕のみである。4点とも茅山下層式期前後の資料と思われ，出土遺物からはSK-120AとSK-120Bとの新旧関係は判断しがたい。

SK-121（第113図，図版79）

N27-07の西端付近に位置し，東側約1/4をSI-127に切られている。長径0.72m以上，短径0.72mの小規模な楕円形を呈し，テラス状の段を1段有する。段より下位の掘込み部分を火床部とするが，その範囲は東端までは及んでおらずSI-127には切られていない。焼土の堆積は15cm程あり被熱赤化したロームブロック等も含んでいるが，火床面にはほとんど被熱の痕跡はない。SK-39やSK-113と同様，火床部の掘込みのみが遺存している可能性が高い。遺物は出土しなかった。



第112図　SK-117・118と出土遺物



第113図　SK-119・120・121と出土遺物

第２節　陥穴と遺物

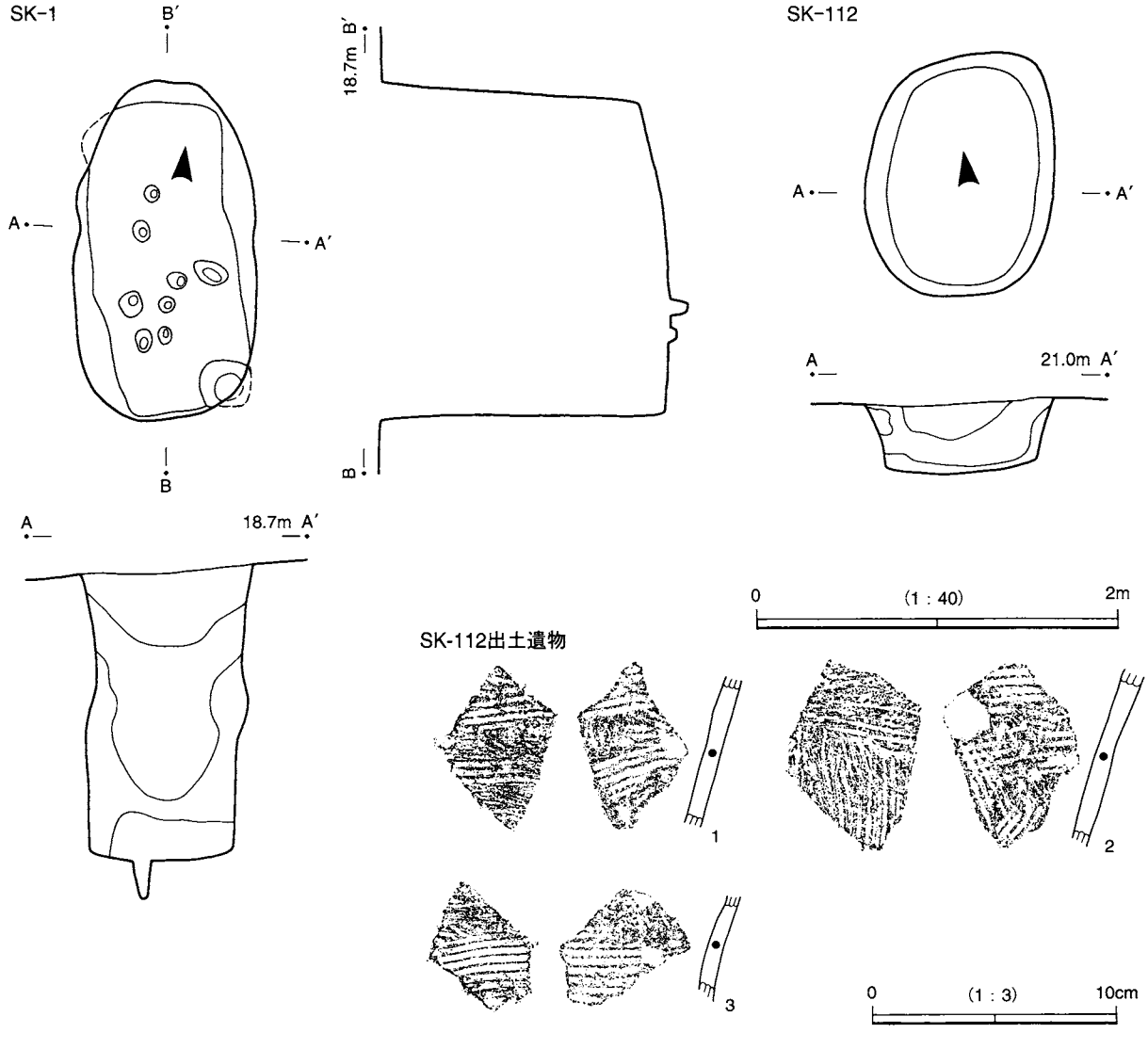
SK-1（第114図，図版74）

M27-23の北西端付近で検出された。長径1.86ｍ，短径1.02ｍの隅丸長方形の平面形を呈する。掘込みは1.66ｍと深く，壁はほぼ垂直に立ち上がるが，北西と南東の隅はややオーバーハングしている。底面からは計９基のピットが検出されたが，うち８基は中央部付近に不規則に存在する浅く小規模なもので，逆茂木を設置した痕跡である可能性が高い。残る１基は南東隅に掘られた径，深さとも約20㎝のものであるが，その性格は判然としない。埋土最下層には開口期間中に雨水とともに流入したと思われる黒色腐植土が堆積しており，埋土上層は自然堆積を思わせる状況を呈している。遺物は出土していないが，概ね早期後半を中心とする時期の所産とみて大過なかろう。

第３節　土坑と遺物

SK-112（第114図，図版77）

N26-16に所在する。長径1.32ｍ，短径1.04ｍの隅丸長方形を呈する土坑で，比較的整った掘りかたを



第114図　SK-1・112と出土遺物

持ち，深さは38㎝を測る。埋土中には全体に少量の焼土粒が含まれているが，明瞭な焼土の堆積や火床面がみられないことから，炉穴ではないと判断した。

遺物は3点出土している。いずれも胴部の小破片で，表裏に貝殻条痕文が施されている。帰属時期の細別は判然としないが，ほかに検出されている炉穴と概ね同時期とみてよかろう。

第4節　遺構外出土遺物

土器（第115・116図，図版109・110）

遺構外または後世の遺構埋土中に混入して出土した縄文土器について報告する。計49点を図示した。これで本遺跡で出土した全資料の約半数にのぼっており，総出土量は少ない。そのうち，1～35が鷲谷津遺跡C区，36～49がD区から出土した。

1～19は早期前半の撚糸文系土器である。1～5は井草1式土器である。いずれも口縁部が大きく肥厚し，肥厚部外面には縄文が施文される。なお，3は肥厚部上面，すなわち口唇部に撚糸文が横走する希有な例である。肥厚部の下位には縄文や撚糸文が横走する口縁部文様帯が設けられ，5点とも遺存していないが，さらに下位には縄文や撚糸文が縦走する胴部文様帯が存在したと思われる。6～11は1～5に比して口縁部外面の肥厚が小さくなり，肥厚部外面への縄文施文は継続されるが口縁部文様帯は省略されている。井草2式に比定される。12は口縁部はほとんど肥厚せず，文様は口縁部直下から施文された縦位の縄文のみになっている。夏島式に比定されよう。13～15は同一個体である。わずかに肥厚する口縁部には刻みが加えられ，幅約2㎝の無文部を介して胴部文様帯が観察できる。口縁部直下の無文帯の存在から稲荷台式と判断してここに示したが，口縁部の肥厚や刻みの施文といった特徴からみると井草2式期までさかのぼる可能性も考えられる。16～19には撚糸文系土器の胴部破片を示した。

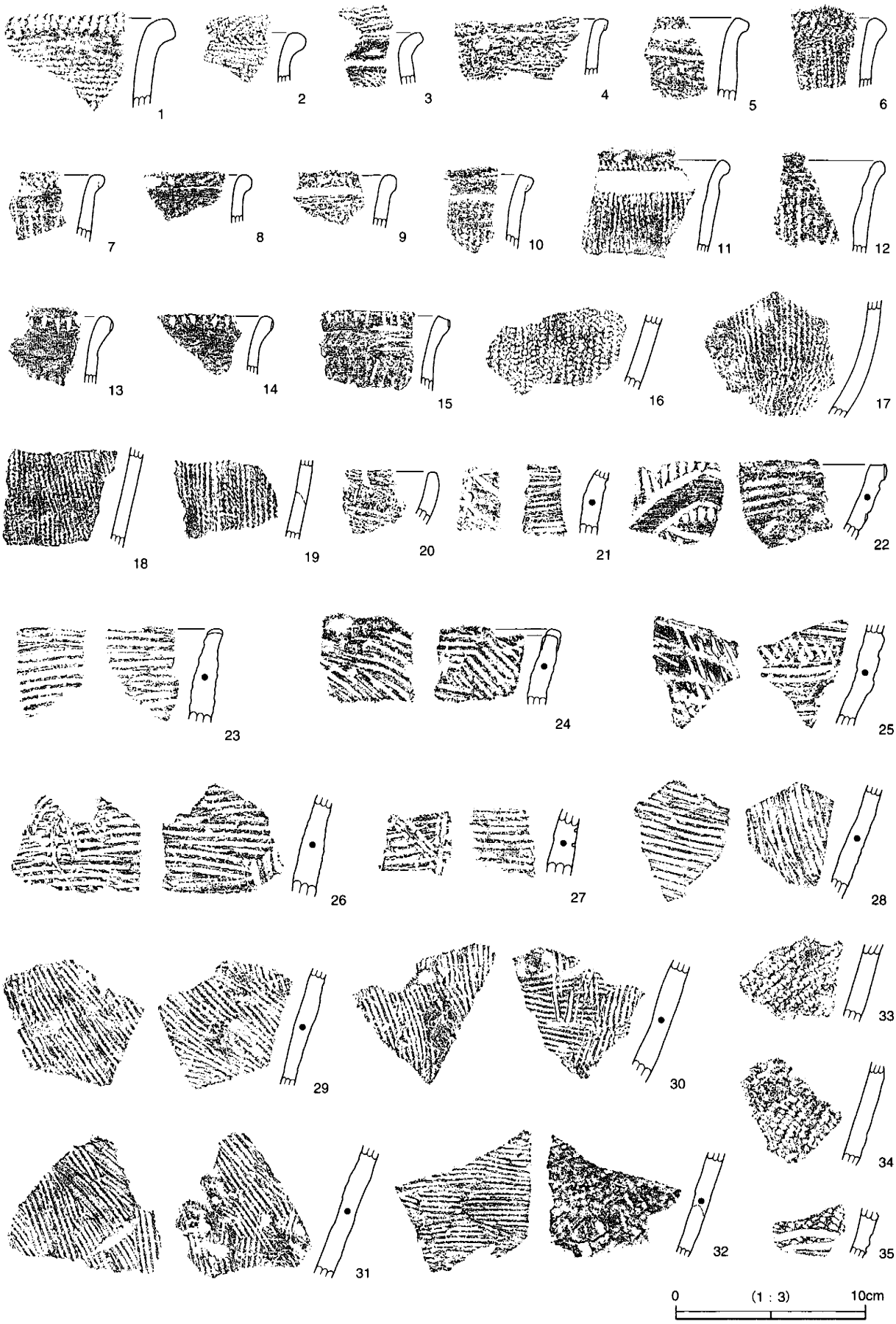
20は早期中葉の沈線文系土器である。口縁部は緩やかに内湾し，おそらくハイガイとおもわれる小型のアナダラ属の貝殻腹縁を連続押捺することによって文様を描出している。田戸上層式と思われる。

21～32には早期後半の条痕文系土器を示した。21は口縁部付近の破片で，沈線による区画と条痕文の磨消し，円形竹管の刺突等の特徴から鵜ヶ島台式に比定される。22は太沈線による区画と集合沈線の充填によって幾何学的文様が描出されており，野島式と思われる。23と24は表裏条痕文のみの口縁部破片で，いずれも口唇部に指頭押捺を加えることによって小波状口縁を作出している。25は外面に幅6㎜～10㎜の隆線を3条貼付し，その上から貝殻条痕文を施している。26と27は表裏貝殻条痕文の胴部破片であるが，外面に半截竹管の押引きによる文様が観察できる。23～27の5点は，茅山下層式ないし茅山上層式期の資料であろう。28～32には表裏条痕文のみの胴部破片を示した。

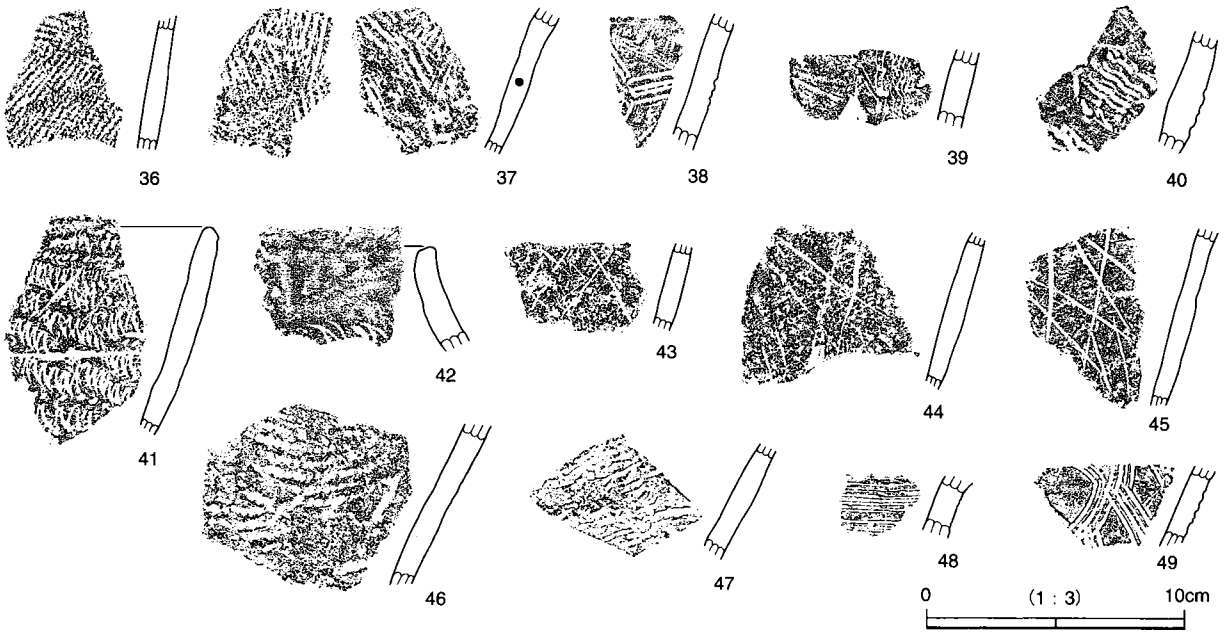
33と34は同一個体で，表面にＬＲ単節縄文が横回転施文されるのみである。胎土中には砂粒の混入量が多く，焼成は良好で堅緻である。前期後半段階の資料であろう。35は加曽利Ｅ式に伴う連弧文土器である。縦回転施文されたＲＬ単節縄文を地文に平行沈線が横走しており，破片上端には連弧文の一部であると思われる沈線が観察できる。33～35の3点以外はすべて早期に帰属する資料であった。

36は早期撚糸文系土器の胴部破片である。胴上部ではＲＬ単節縄文が横走し，胴下部では縦走している。前者が頸部文様帯，後者が胴部文様帯となろう。井草1式に比定される。

37は早期後半の条痕文系土器の胴部破片である。胎土中には植物繊維を含み，表裏ともアナダラ属貝殻腹縁による貝殻条痕文が施されている。主文様が観察できないため細別型式は不明である。



第115図　遺構外出土縄文土器（1）



第116図　遺構外出土縄文土器（2）

38～40には前期後半の諸磯式と思われる資料を示した。38は半截竹管2本によって施した4条の平行沈線を文様要素とするが，小破片であるため全体の文様構成は不明である。39と40も同様の文様要素であるが，押引き手法である点と波状に施文される点で異なっている。半截竹管は39では径が小さく細いものが，40では39に比して径が大きく太いものが使用されている。

41と42は前期後半の浮島式期の資料である。ともに口縁部破片で，交互に連続して押した貝殻腹縁文を文様の基本とする。41では口縁部直下から幅の狭いものが6段以上が連続して施されている。42は鉢形を呈すると思われ，やや内傾する口縁部は無文で，破片下端に1段の貝殻腹縁文が観察できる。

43～45は同一個体である。尖鋭な工具による沈線が格子目状に粗く施文されている。文様構成からは判断がつかなかったが，胎土の特徴が41と酷似していることから前期後半の資料と考えここに示した。

46と47は単節縄文が横回転施文される資料である。46ではＲＬが，47ではＬＲが横回転施文され，47では結節文を伴っている。前期終末期の所産であろう。

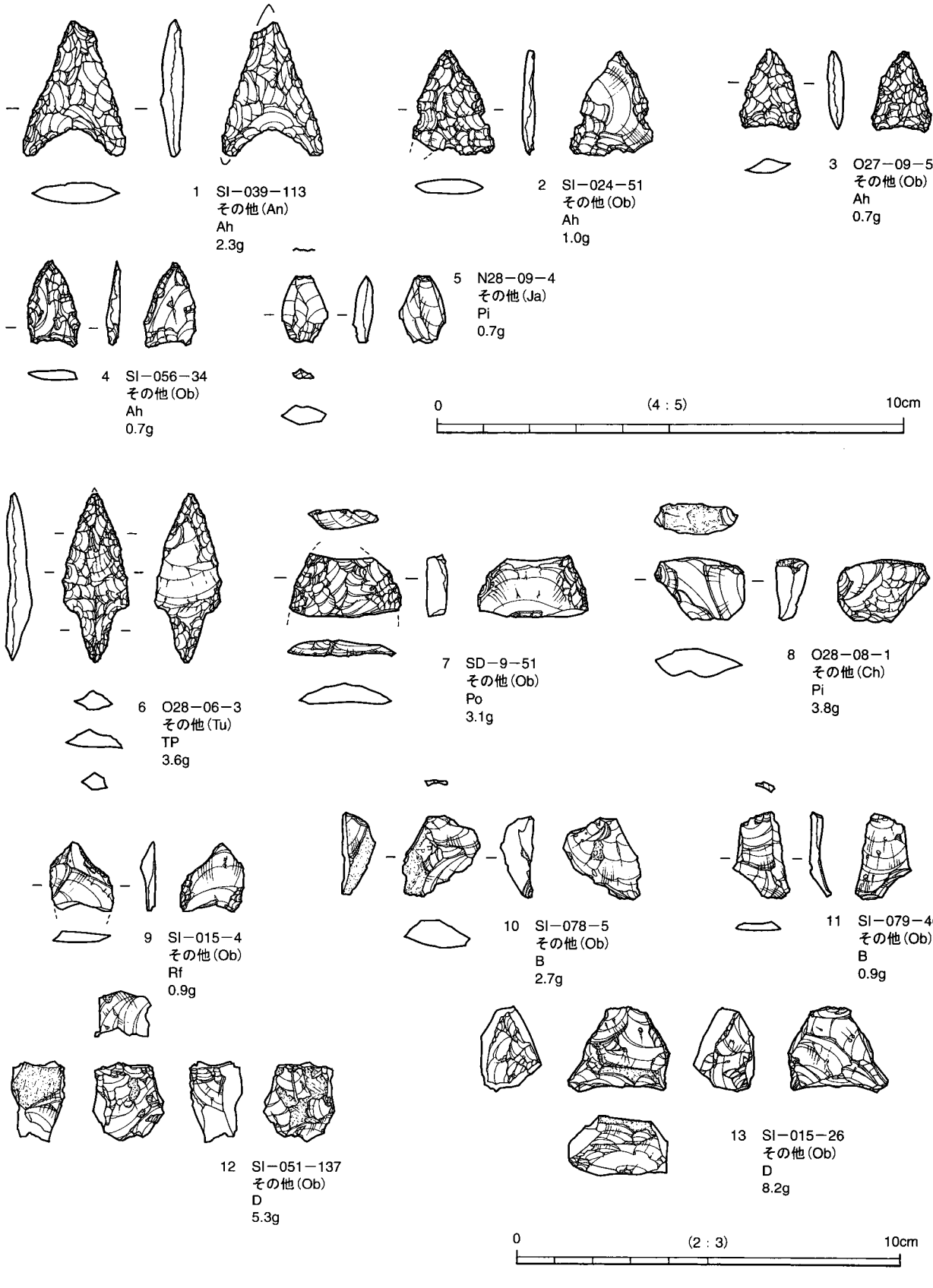
48は十三菩提式の小破片である。破片上端には彫刻手法による小三角形の陰刻文が並び，その下位に半截竹管によって施文した集合細沈線が横走している。

49は半截竹管2本による4条の平行沈線が縦位波状に2単位観察でき，双方が交叉して破片でみる限りではX字状を呈している。文様要素は3と類似するが，胎土が緻密で焼成も極めて良好であり他の前期後半の資料とは確実に異なっていることから，中期終末から後期前半にかけての所産であると判断した。

石器（第117図，図版108）

1～4は石鏃(Ah)で，1が安山岩(An)，2～4が黒曜石(Ob)製である。1は石材に規制されたためか他の3点に比してやや大型で，整った二等辺三角形を呈している。2では両側縁中央部付近のほぼ同じ位置に小さな抉り状の剥離が入っており，いわゆる飛行機鏃のような形態が意識されている可能性がある。

5と8はピエス・エスキーユ(Pi)で，5がメノウ(Ja)，8がチャート(Ch)製である。5は線状の打面を



第117図　出土石器等実測図（1）

有しており楔として使用された可能性がある。

6は凝灰岩(Tu)製の有茎尖頭器(Tp)で，縄文時代草創期の所産である。7も尖頭器(Po)で，先端部と基部を欠損しており全体の形状は不明であるが，6よりも大型であり茎のつく可能性は低いであろう。黒曜石製である。

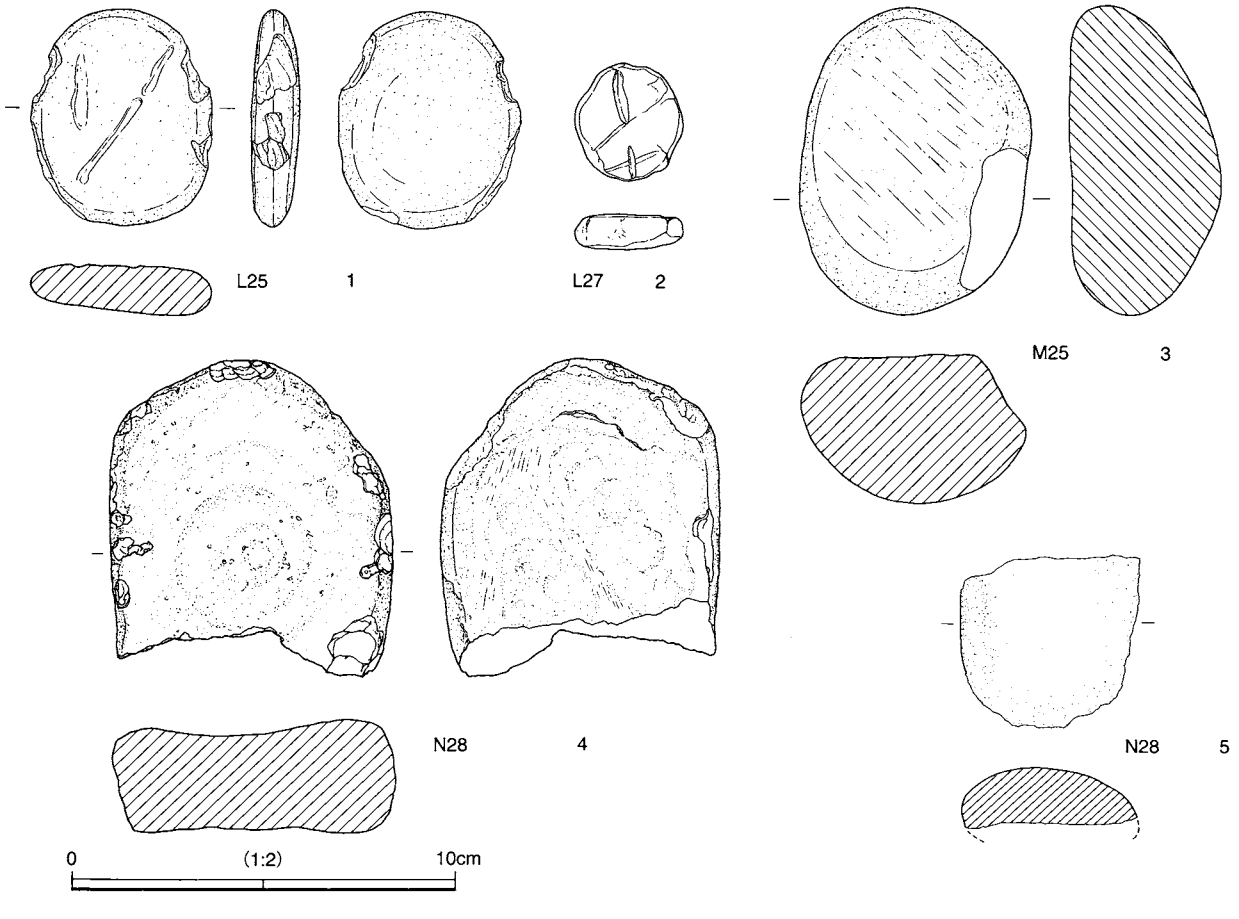
9は二次調整痕(Rf)のある黒曜石製の剥片で，貝殻状を呈する小剥片の側縁の一部に押圧剥離を加えている。平面形から判断すると石鏃の未製品である可能性も考えられる。

10と11は黒曜石の剥片(B)である。10は平面が貝殻状を呈しており，二次加工痕は観察できないものの石鏃の素材とするべく意識的に剥離されている可能性が高い。11は下端に折断痕があるが，これも石鏃の製作を意識した，すなわち剥片の形状を整えるための人為的なものであるかもしれない。

12と13は黒曜石製の石核(D)である。ともにかなり小型になるまで剥片剥離が繰り返されており，これ以上は不可能ともいえる残核状を呈している。

石製品・土製品（第118図，図版108）

1は石錘である。砂岩製で，対称に4か所を打ち欠いて，縄掛けとしている。2は土器片を利用した土製円板である。3は磨石である。砂岩製で，一面のみ激しく磨っており，平滑になっている。4は凹石である。砂岩製で，石皿に近い平坦な形状をもつ。縁辺が欠けており，敲石としても利用されたことを示し



第118図　出土石器等実測図（2）

ている。５は磨製石斧の断片である。強く被熱しているため，本来とは異なる用途に転用された際，破砕された可能性がある。

第50表　鷲谷津遺跡縄文時代遺構一覧

遺構番号	種別	形状	規模	主軸方向	火床面	備考
SK-1	陥　穴	隅丸長方形	186 ×102 ×166	N－06°－W	—	床面にピット（逆茂木痕か）
SK-21	炉　穴	不整長楕円形	286 × 80 × 70	N－78°－W	2	
SK-22	炉　穴	不整長楕円形	309 ×118 × 69	N－07°－W	1	
SK-38	炉　穴	不整楕円形	195 ×122 × 42	N－52°－W	1	
SK-39	炉　穴	不整円形	(74) × (68) × (32)	N－19°－W	1	火床面のみ遺存
SK-40	炉　穴	楕円形	157 × 76 × 40	N－22°－W	1	足場状の段がつく
SK-41	炉　穴	不整長楕円形	(349) ×132 × 48	N－52°－E	1	＜SI-076
SK-52	炉　穴	タコ足状	316 ×106 × 56	N－59°－W	4	２基重複の可能性
SK-97	炉　穴	不整楕円形	(148) ×106 × 49	N－37°－E	1	＜SI-086
SK-98	炉　穴	不整長楕円形	320 ×121 × 66	N－12°－E	3	
SK-112	土　坑	隅丸長方形	132 ×104 × 38	N－08°－E	—	
SK-113	炉　穴	楕円形	(86) × 74 × 21	N－70°－W	1	
SK-115A	炉　穴	長楕円形	323 ×104 × 76	N－33°－E	3	＞SI-115B
SK-115B	炉　穴	楕円形	(86) × 86 × 25	N－59°－W	1	＜SI-115A
SK-116	炉　穴	タコ足状	281 ×104 × 54	N－55°－W	2	２基重複の可能性
SK-117	炉　穴	不整楕円形	(138) ×116 × 52	N－71°－E	1	＜SD-25
SK-118	炉　穴	不整楕円形	299 ×173 × 59	N－79°－E	1	
SK-119	炉　穴	不整方形	194 ×128 × 63	N－68°－E	1	袋状の火床面
SK-120A	炉　穴	不整楕円形	(216) × (92) × 55	N－82°－E	1	＞SK-120B　＜SI-001
SK-120B	炉　穴	不整楕円形	(152) × (112) ×56	N－31°－W	1	＜SI-001・SK-120A
SK-121	炉　穴	楕円形	(72) × 72 × 20	N－83°－W	1	＜SI-127

第４章　弥生時代

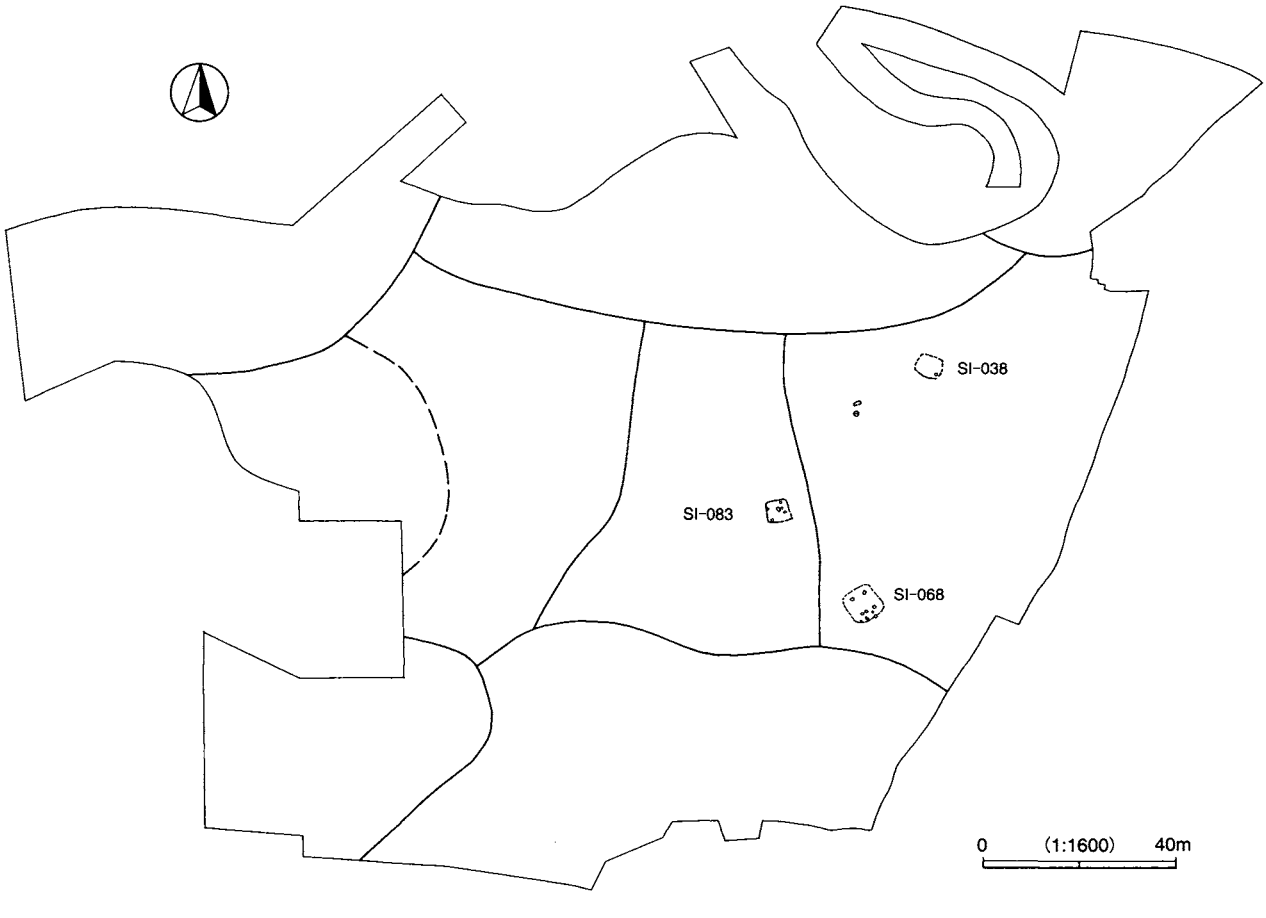
第１節　住居跡と遺物

弥生時代の住居跡とみられるのは３軒である。後述の土坑とともに，いずれも台地東部に位置し，奈良時代以降の住居によって切られている。当遺跡では，古墳時代後期後半以降の土地利用が激しく，弥生時代の遺構には削平されてしまったものもあると考えられる。しかし，弥生時代の遺構がない台地中央部・南部も，台地東部とほぼ同様の密度で後世の遺構が展開している。もし，それら未検出地帯に弥生時代の遺構が構築されていたならば，多少の痕跡は残るものと考える。したがって，弥生時代の遺構は，現在確認されている台地東部に，ほぼ限られていたものと思われる。

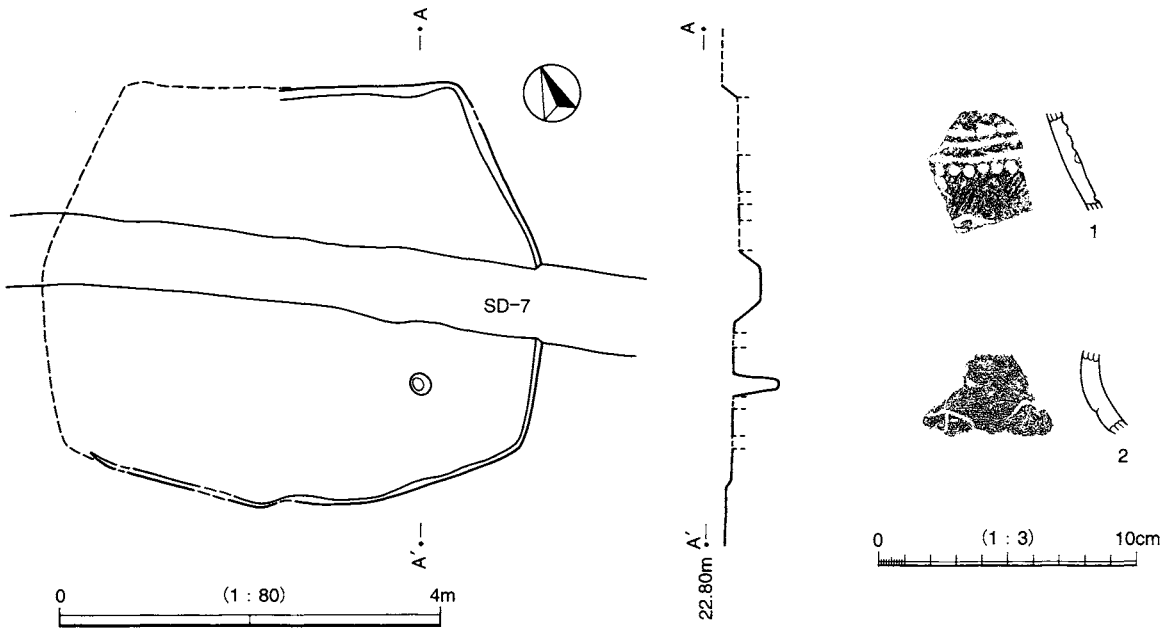
なお，以下に報告する中には，中期前半に遡る希有な検出例が含まれている。

SI-038（第120図，図版111）

台地東部の，北東寄りに位置する竪穴住居跡である。ゴボウ栽培用掘削機（トレンチャー）の爪痕が縦横に走り，溝のSD-7が中央部を横断している。このため，壁と床が大きく失われている。硬化した床面の一部と，径20㎝，深さ47.6㎝の小ピット１基がわずかに残存するのみである。わずかに残っていた暗黒褐色の覆土中から，20点余の土器片が出土している。これらはいずれも小片で，しかも様々な時代のも



第119図　弥生時代遺構配置図



第120図　SI-038と出土遺物

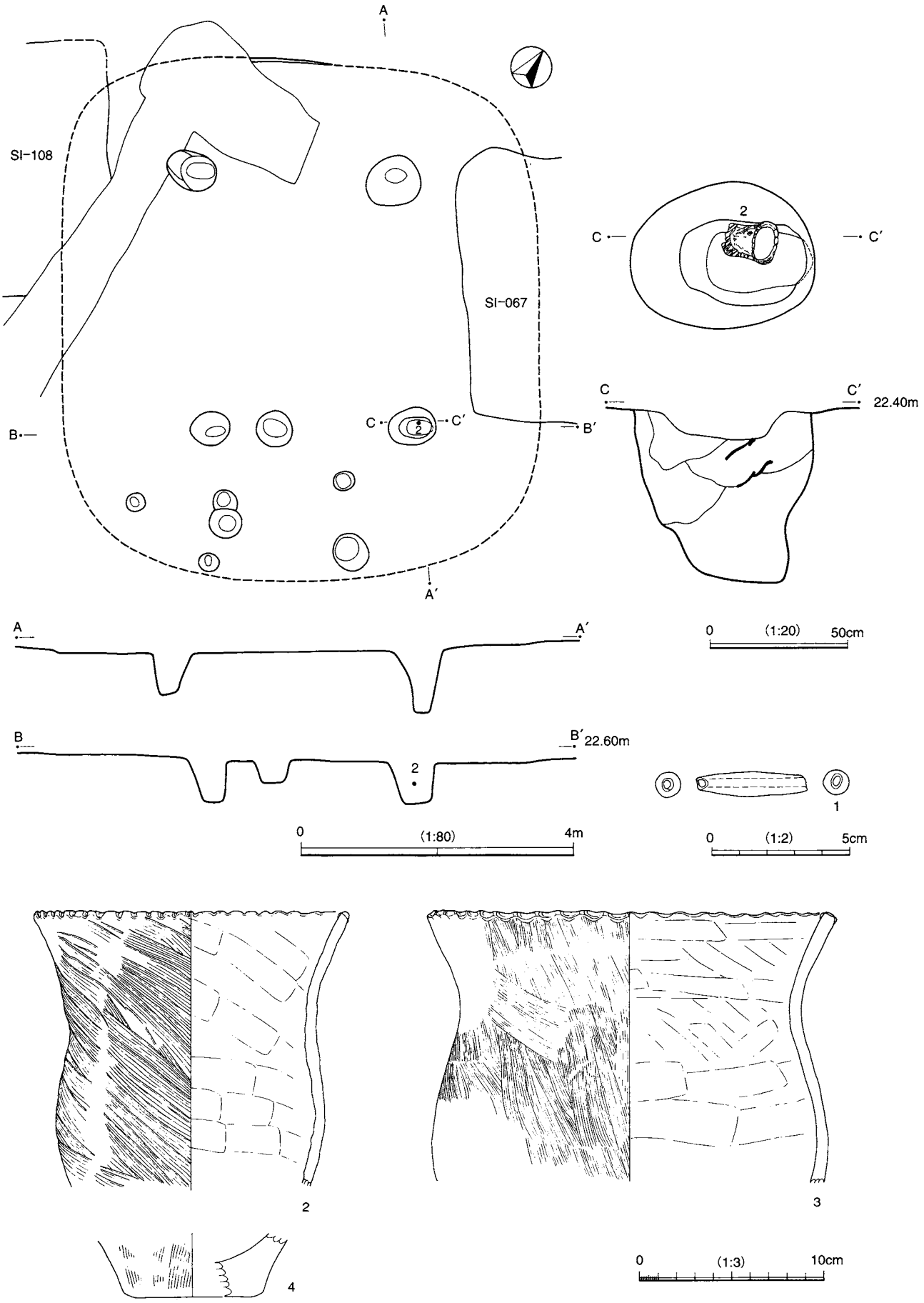
のが混在している。したがって，本跡の形態や時代を特定するのはきわめて困難な状況である。弥生時代の住居跡と推定した根拠としては，平面形態がSI-083に類似していること，出土した土器片の中に弥生中期前半のものが含まれていたことが挙げられる。

図示した２点の土器片は，いずれも壺の頸～肩部破片であり，沈線文をもつ。無節の縄文を地文にもつ壺片（１）は，文様が平行に横走する沈線文と刺突文で構成されている。胎土には砂粒が多く含まれ，淡い橙色に焼成されている。沈線文の下地が磨かれている壺片（２）は，前者より多孔質で，褐色に焼き上がっている。

SI-068（第121図，図版38・111）

台地東部の，南寄りに位置する竪穴住居跡である。東側をSI-067，西側をSI-108に切られており，北側には攪乱が入っている。遺存状態が悪いだけでなく，昭和63年度に東側の3/4が，平成２年度に残りが分割されて調査されたため，全容の把握は極めて困難であった。結果，壁はほとんど失われ，検出できたのは，わずかに窪んで硬化した床のみであった。その範囲から，長径８m，短径７m程度の楕円形ないし隅丸方形に近い平面形であったのではないかと想定される。主柱穴は方形に配置されたとみられる。柱穴の形態は横長の隅丸方形である。南の主柱穴に並んで，やや西寄りに浅いピットがある。これは，位置を考慮すると炉の可能性も考えられるが，焼土等は検出されなかった。ほかの小ピットについては，深さが30 cmから40 cmあるものではあったが，本跡に伴うとする積極的な根拠は見いだせなかった。

本跡に伴うと考えられる遺物は，柱穴内・床覆土から出土した土器である。まず，南東の主柱穴において，内部の覆土上部から，甕（２）が１点出土した。底部を欠いているものの，器形を保ったまま入れられていた。また，甕の上半部（３）は北西の柱穴内から，底部（４）は床覆土から出土した。いずれの甕も，口縁部は押圧による刻みによって波状を成し，外面は縦あるいは斜位のハケ，内面はヘラナデによって調整されている。これらの土器は，弥生時代中期中頃（宮ノ台式前半）に位置づけられよう。



第121図　SI-068と出土遺物

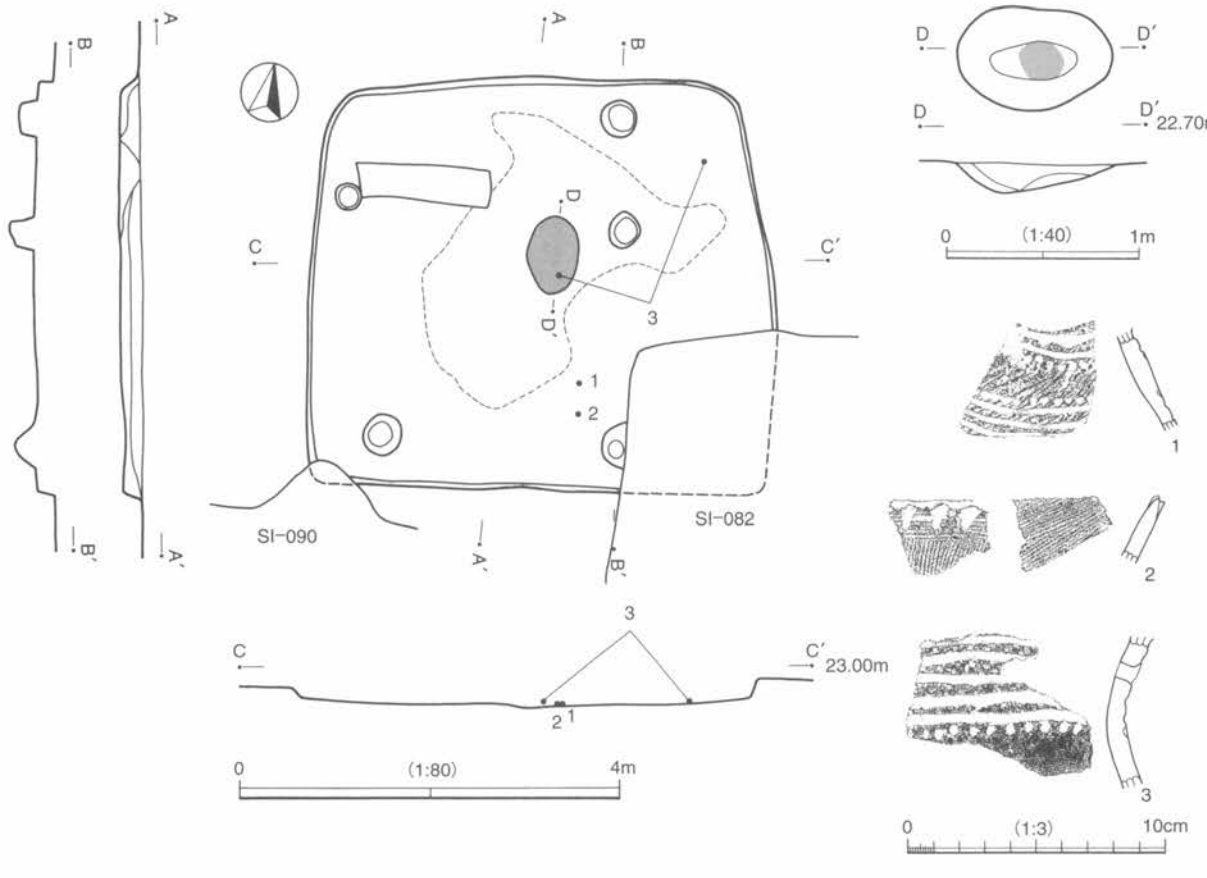
なお，管状土錘（1）は北壁際の攪乱内から出土した。形態からみて周辺の奈良時代以降の遺物が混入した可能性が高い。

SI-083（第122図，図版43・111）

台地東部，SI-068の北西20mに位置する竪穴住居跡である。南東隅は平安時代前半のSI-082によって大きく切られ，南西隅は古墳時代後期後半のSI-090のカマド部分に切られている。全体の遺存状態も悪く，後世の削平によって検出面から床までは20cmほどしか遺存していない。竪穴の形態は，四隅が鋭く，南辺が長い。隅丸方形というより，台形に近い形状である。柱穴とみられるピットは5か所ある。東側に3基が縦列し，西壁寄りに2基配置されている。ほぼ中央に地床炉がある。卵形をなす。焼土と白色砂質土が堆積しているが，火床面はあまり焼けていない。炉の周辺の床は踏み固められて硬化している。

覆土から土器片が70点出土しているが，大半は，遺構重複によって分離が困難であった奈良時代以降の土師器片である。その中に，弥生時代中期前半のものがわずかにみられた。壺の頸部（3）は，炉の覆土と床面で出土した破片が接合したものである。刻みをもつ甕口縁部（2）と，沈線文と刺突文で飾られた壺肩部（1）があり，両者とも床面から出土している。

隅丸方形という住居の形態は，古墳時代初頭のものに類似するが，該当する遺物はみられず，周囲の状況からもその時期の住居跡とは考えがたい。したがって，遺存した遺物は少量であるが，弥生時代中期前半の住居跡と推定される。県内全域を見ても，中期前半の住居跡の調査例はきわめて少なく，その形態もよくわかっていない。本例は中期後半に，一般的な隅丸方形または小判形の住居跡に先だって，台形に近



第122図　SI-083と出土遺物

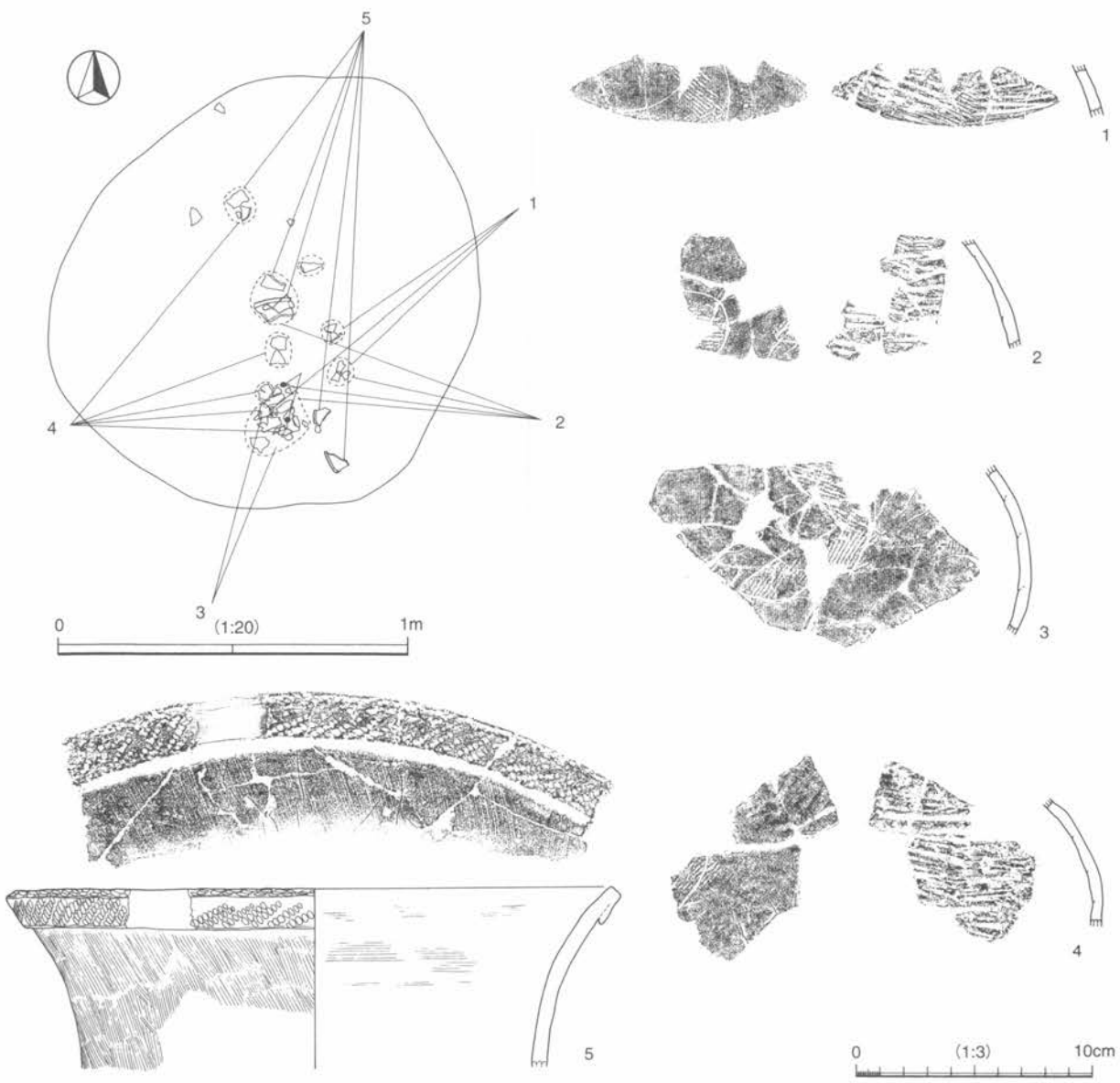
い不整方形の住居が用いられていたことを知ることができる貴重な資料といえる。

第2節　土坑（壙）と遺物

弥生時代の土坑（壙）とみられるのは2基である。先述の住居跡とともに，いずれも台地東部に位置し，奈良時代以降の住居によって切られている。2基とも中期前半に遡る可能性が高い。

SK-51（第123図，図版75・111）

台地東部に位置する土坑（壙）である。隣接する奈良時代のSI-070と平安時代のSI-071の，両者の下から検出された。調査時においては，掘込みが明確に確認できず，土器片がまとまって出土したために，その範囲を土坑として認識した。すなわち，削平された土坑の底面のみが検出されたと考える。



第123図　SK-51と出土遺物

土器は２個体ある。壺または甕（５）は，折返し状口縁部に，粗いＬＲの単節縄文帯をもち，頸部外面は縦ハケ，内面は横方向のハケ調整の後にナデによって仕上げられている。口縁部が1/4周ほど遺存する。外面には赤色塗彩がみられる。胎土には細砂粒が多く含まれるが，雲母は含まれない。

壺の破片（１～４）は，いずれも同一個体である。沈線で区画した磨消し縄文をもつ。破片の形状から，胴部はかなり球形に近いとみられるが，断片的な破片に限られるため，全体の形態を復原するには至らない。また，垂下する逆「く」の字状区画や，弧状の区画の一部が確認できるものの，全体の文様構成を知るには不充分である。沈線区画内には，無節の縄文を配しており，所々で縄文が区画からはみ出していることから，縄文を施した後で区画したことがわかる。文様の外は磨かれており，縄文→磨消し（研磨）→沈線区画の順に施文されている。内面には横位の条痕をもつ。胎土には，白色の砂粒と雲母が多量に含まれる。断面が黒色に焼き上がっている点は，５と大きく異なっている。

１～４は，文様や調整技法から，弥生中期前半の須和田式最終末の範疇にはいる土器と考えられる。５については，出土状況から同時期のものとみられるが，中期後半の宮ノ台式終末にも類似した土器があるので帰属時期を断定するのは難しい資料といえる。

SK-61（第124図，図版76・111）

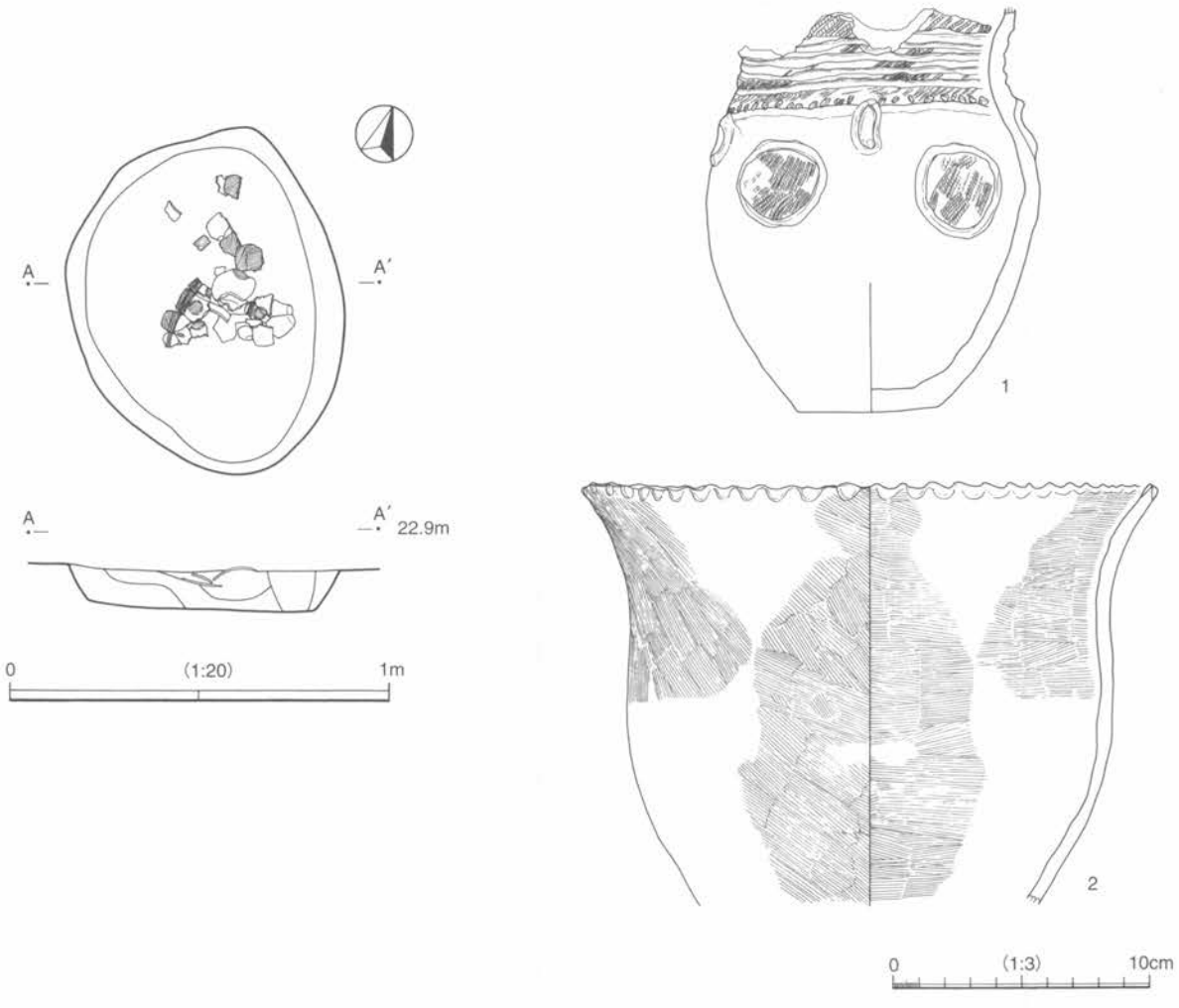
台地東部に位置する土壙である。SK-51と隣接し，平安時代のSI-071の中央部下層に検出された。後世の削平がSK-61自体にまで達し，遺存が悪い。検出時には，土器片が露出するような状況であり，底まで深くても15㎝，浅いところでは10㎝以下しか残存していなかった。覆土は，ローム粒・焼土粒を少量含む，暗い茶褐色土～黄褐色土と観察されており，人為的に埋戻されたことがうかがえる。

土壙中央を中心にして，小型の広口壺と甕が１点ずつ出土している。壺（１）は中央部に横倒し状態でまとまって出土し，甕（２）の破片は壺の下から北側にかけて出土している。これらの状況から，この土壙は，土器を組み合わせて埋設した，土器棺再葬墓であると考えられる。

壺（１）は，口縁部を大きく欠くものの，頸部以下はほぼ完存する。やや内湾気味の口縁部に，沈線文で区画された縄文帯がめぐる。頸部には縄文を地文として４条の沈線がめぐる。頸部下端は段になっていて刺突文が施される。その段に接して浮文が５か所に貼り付けられる。浮文は勾玉の背を貼り付けたような形状で，遺存しているのは３か所である。浮文の大きさは，長さ1.97㎝～2.30㎝，幅1.13㎝～1.29㎝である。肩部には，沈線で区画された円形の磨消し縄文が施されている。浮文の間にひとつずつ，ほぼ均等に５単位が割付けられている。その周囲から胴部は無文であり，研磨されている。底部には縦方向のヘラ削りによって整形した痕がある。頸部文様帯と肩の一部に赤色塗彩が残っており，外面は全体に赤彩されていたものと思われる。内面は剥離が著しく，器表面の残る部分はわずかであるが，ほぼ全面にわたってミガキが施されていたとみられる。胎土は細砂粒を多く含む精良な土で，淡い橙色に焼成されている。

甕（２）は底部を欠失し，口縁部の1/2周弱，胴部の1/4周が遺存する。口縁端部が波状に押圧され，外面が斜位のハケ，内面が横位のハケで調整されている。壺に比べて胎土は粗く，赤みの強い橙色に焼き上がっている。

これらの土器は，弥生時代中期前半の須和田式後半に位置づけられる。

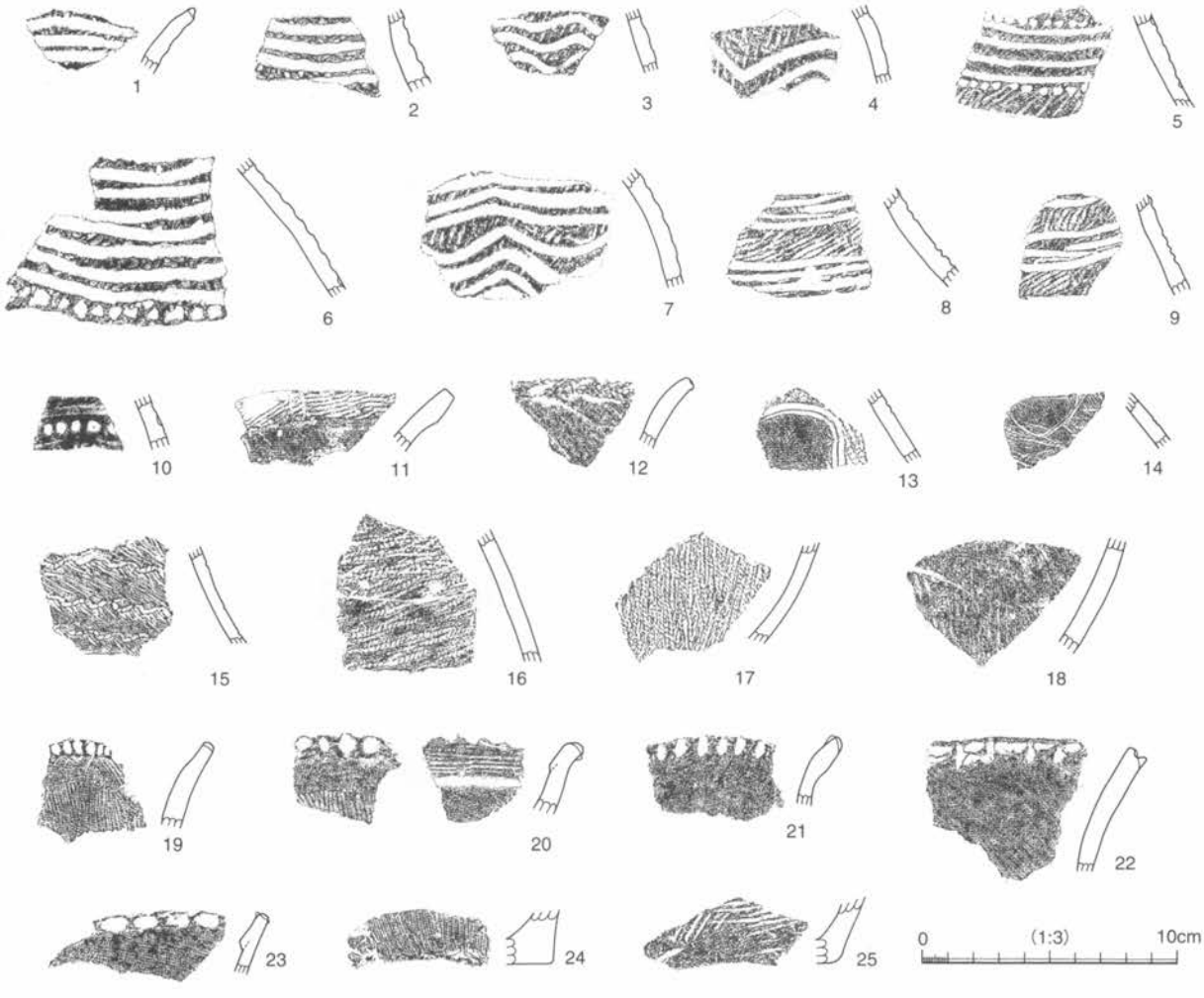


第124図　SK-61と出土遺物

第3節　遺構外出土遺物（第125図，図版110）

弥生時代の土器は，上記の遺構が検出された台地東部にその分布範囲が限られている。北側SI-038，西側SI-088，南側SI-092，東側SI-044に囲まれた範囲である。とくに，弥生時代中期前半の土器群はSK-51とSK-61の周辺部に集中している。

1～10は，無節の縄文を地文とし，横走する沈線文と刺突文で飾られた壺の口縁部～肩部の破片である。SI-038，083，SK-61の出土例に類似する。11・12は，口縁部に縄文帯をもつ壺，または甕の口縁部で，12の端部には刺突による刻みが見られる。13・14は，磨消し縄文に沈線区画の文様を加えた壺の破片である。SK-51に類例がある。15は粗いハケにS字状結節文を3段施した壺頸部である。16～18は，縄文（無節，単節）を地文にした壺，または甕の胴部，19～23は押圧による波状口縁をもつハケ調整の甕である。24はハケ調整の甕底部，25は無節の縄文が施された壺底部である。これらは，中期前半から中頃の土器群として捉えられ，沈線文をもつ壺類は中期前半に位置づけることができる。



第125図　遺構外出土弥生土器

第５章　古墳時代

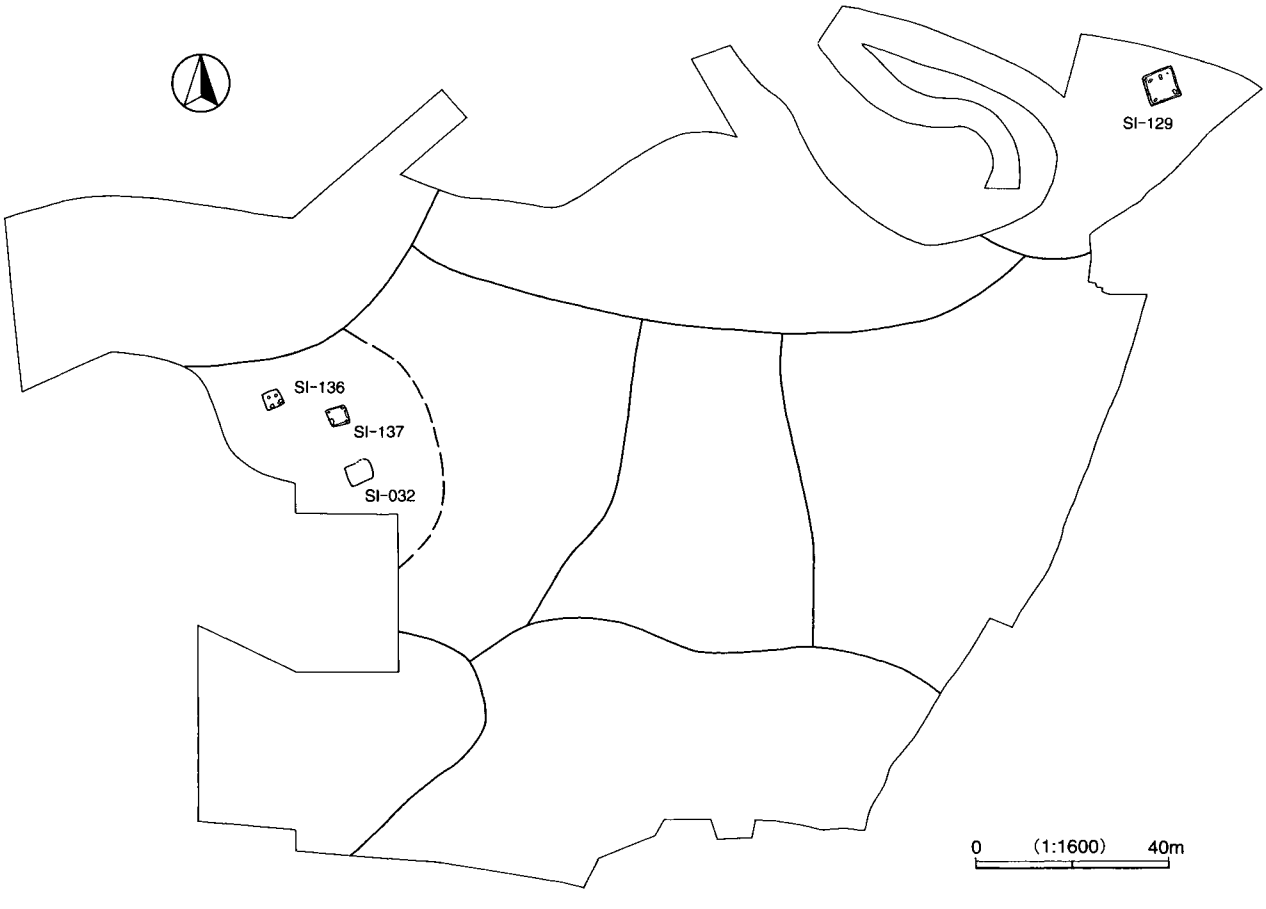
第１節　住居跡と遺物

古墳時代の遺構は，本報告では後期後半として区分した７世紀以降の竪穴住居跡を主体として，台地の主要平坦面に広く分布している。それ以前の中期～後期前半については少なく，該期の遺構と判断されたのは10軒だけである。その分布は，台地の東縁か，西縁，もしくは西部緩斜面に寄っており，台地の主要平坦面には存在しないのが特徴である。

中期の住居跡に限ると，南西から遺跡中央に入り込んでいる谷に面して，台地西部の緩斜面に３軒（SI-032・SI-136・SI-137）分布している。また，調査区の北東隅に，SI-129が１軒だけ離れて検出されている。合計４軒である。いずれもカマド波及以前の中期前半のものである。

後期前半の住居跡は，台地東部の東側縁辺と，台地南部の西側縁辺に，それぞれ３軒ずつ分布している。合計６軒である。

後期後半の住居跡数は27軒にのぼる。前時期に比べ数が急増するだけでなく，それまで空白だった台地中央部をはじめ，南部・東部にも広く面的に分布し，北部の一部にまで分布が達している。ただし，中野台遺跡を望む西側の谷沿い，すなわち台地西部や調査区北西隅には分布がみられない。最大のSI-086



第126図　古墳時代中期竪穴住居跡配置図

(一辺7.5m) は台地中央部に位置する。例外的に小さいSI-115でも一辺4.0m程度もあり，比較的大きいものが多く，規模差は余り目立たない。

なお，土器の説明に用いる記号については，考察に掲げた土器分類（第9章第2節1項）に拠っている。土器分類は時期別になっているので，本章の1．中期，および2．後期前半については，土器分類の「(1) 古墳時代中期・後期前半」を，3．後期後半については，土器分類の「(2) 古墳時代後期後半」を，それぞれご参照いただきたい。また，住居跡規模の詳細については附表1に，土器の観察結果は附表4にまとめて報告する。

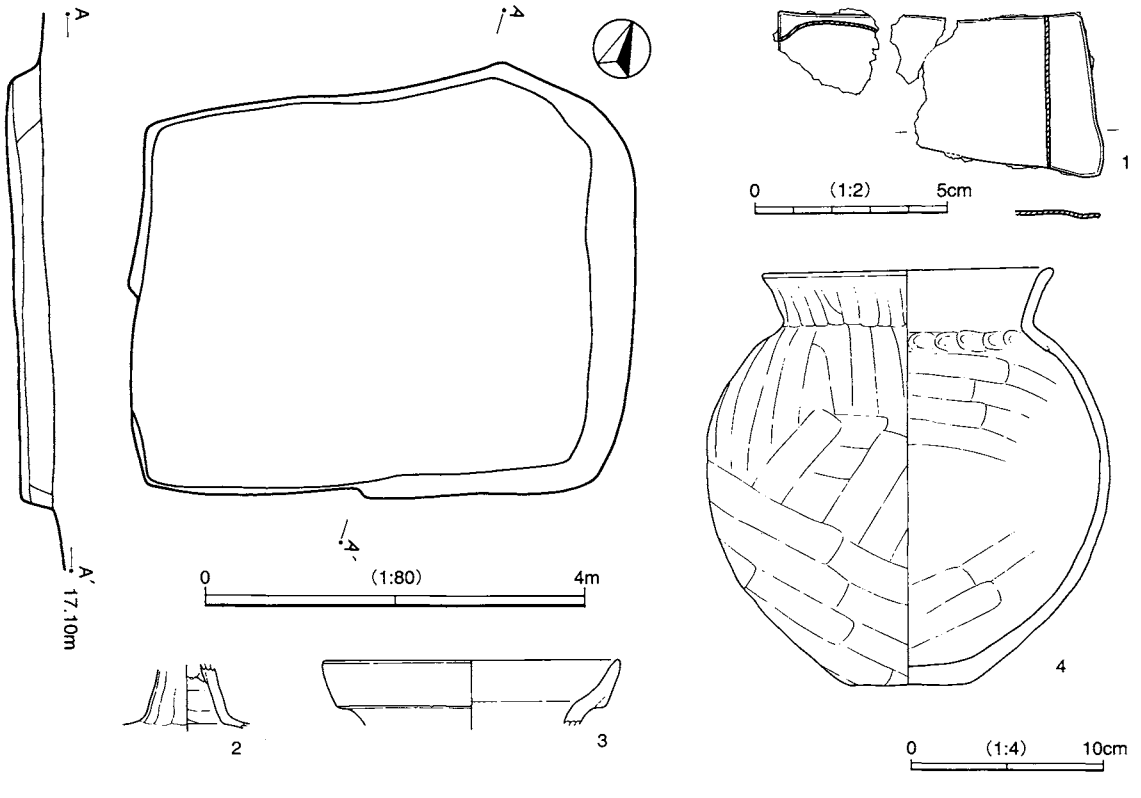
1．中期

SI-032（第127図，図版22）

西部緩斜面に立地する3軒のうち，最も南側に位置する。この一帯は，平安時代以降に大規模な整地が行われて一段低くなっており，台地縁辺の遺構は谷側が削平されて失われている。しかし，古墳時代中期の住居跡は削平以前から緩斜面の低い位置にあったため，完全に削平されるまでには至らなかった。

本跡は黒色の堆積土中に検出され，やや横長長方形に掘られた竪穴状遺構である。住居跡に分類したが，内部に柱穴・炉跡はなく，床の硬化面も確認されていないため，住居として使用されたかどうかについては確認できない。

南西隅の壁際には焼土塊があり，覆土内から和泉式前半の土器群とみられる甕B（4），二重口縁壺（3），屈折脚高坏（2）と，鎌あるいは穂摘み具の雛形とみられる薄板状の鉄製品（1）が出土している。土器類が出土しているものの，日常の生活痕が希薄であることから，通有の住居ではなく，祭祀用などムラで共有するような建物であったと考えられる。

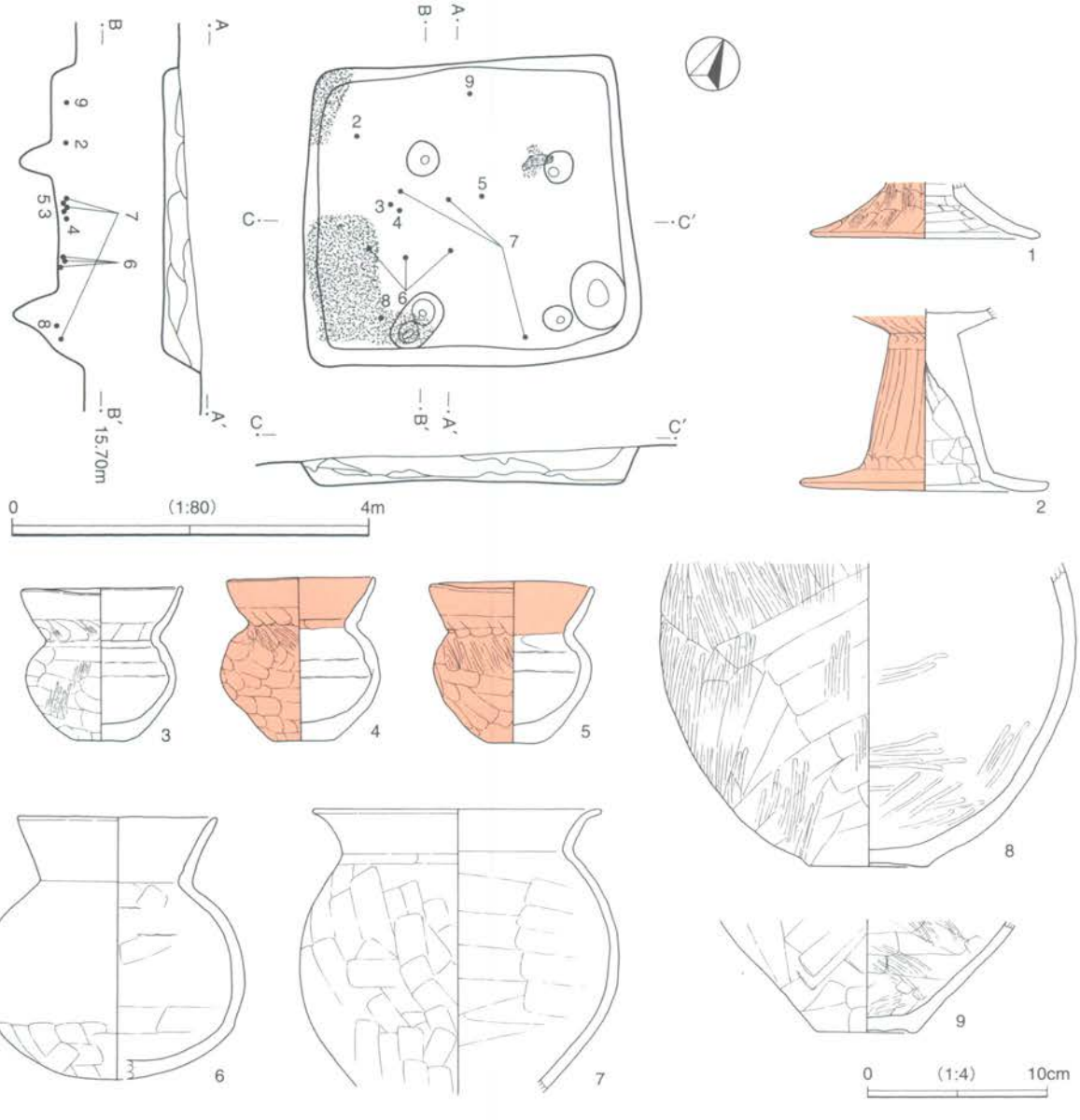


第127図　SI-032と出土遺物

SI-136（第128図，図版68・131）

西部緩斜面に立地する3軒のうち，最も西側に位置する竪穴状遺構である。SI-032と同様に谷頭部の黒色土中で検出された。柱穴4か所と貯蔵穴があるが，壁溝・炉は検出されていない。柱穴は，貯蔵穴のある南東寄りに設けられている。西側の広い範囲に焼土が堆積し，遺物も中央部から西側に多い。また，用材の形をとどめた炭化材が出土していることから，火を受けたものとみられる。

遺物の遺存も比較的良く，和泉式の高坏B（1・2），平底化した小型丸底壺である壺E（3～5），直口縁の壺D（6），外面にミガキまたは丁寧なヘラナデを施した甕A（8・9）を図示した。壺類に比べて甕の遺存状態が悪い。加えて，椀・鉢類がないことから，それら日常什器を持ち去った可能性はあるが，それらが比較的少ないという特徴も含めて，和泉式前半の土器群といえる。

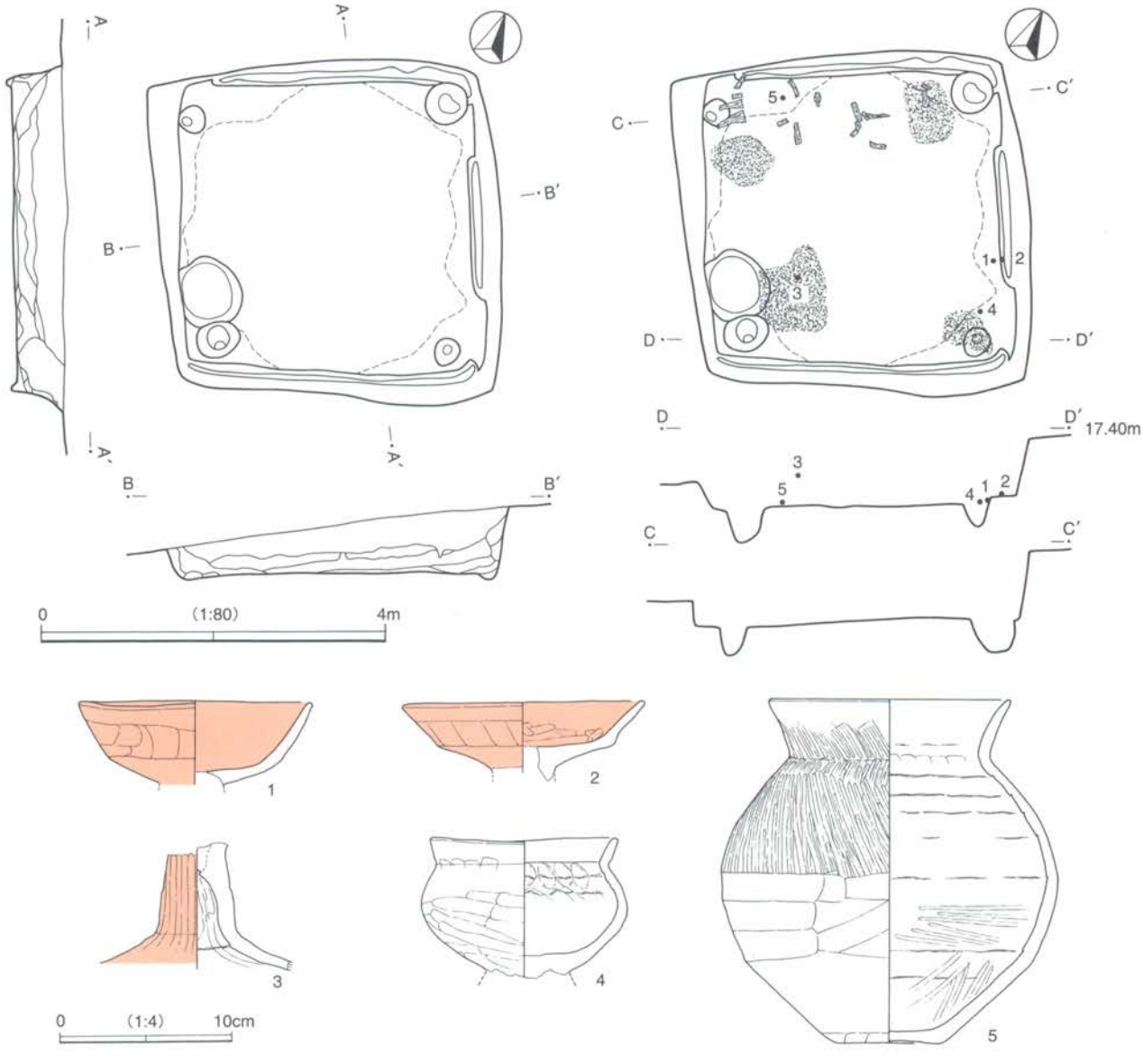


第128図　SI-136と出土遺物

SI-137（第129図，図版69・131）

西部緩斜面に立地する3軒のうち，SI-032とSI-136の間に位置する竪穴状遺構である。ややいびつな方形で，柱穴は四隅に設けられている。炉は検出されなかった。西辺を除いて，壁溝をもっているが，東辺両端では途切れている。南西の柱穴のすぐ北に，貯蔵穴が接している。床面は柱穴部分を除いて大半が硬化している。柱穴周辺に焼土が堆積し，北辺沿いでは炭化材もみられるところから，本跡は火を受けたものと考えられる。

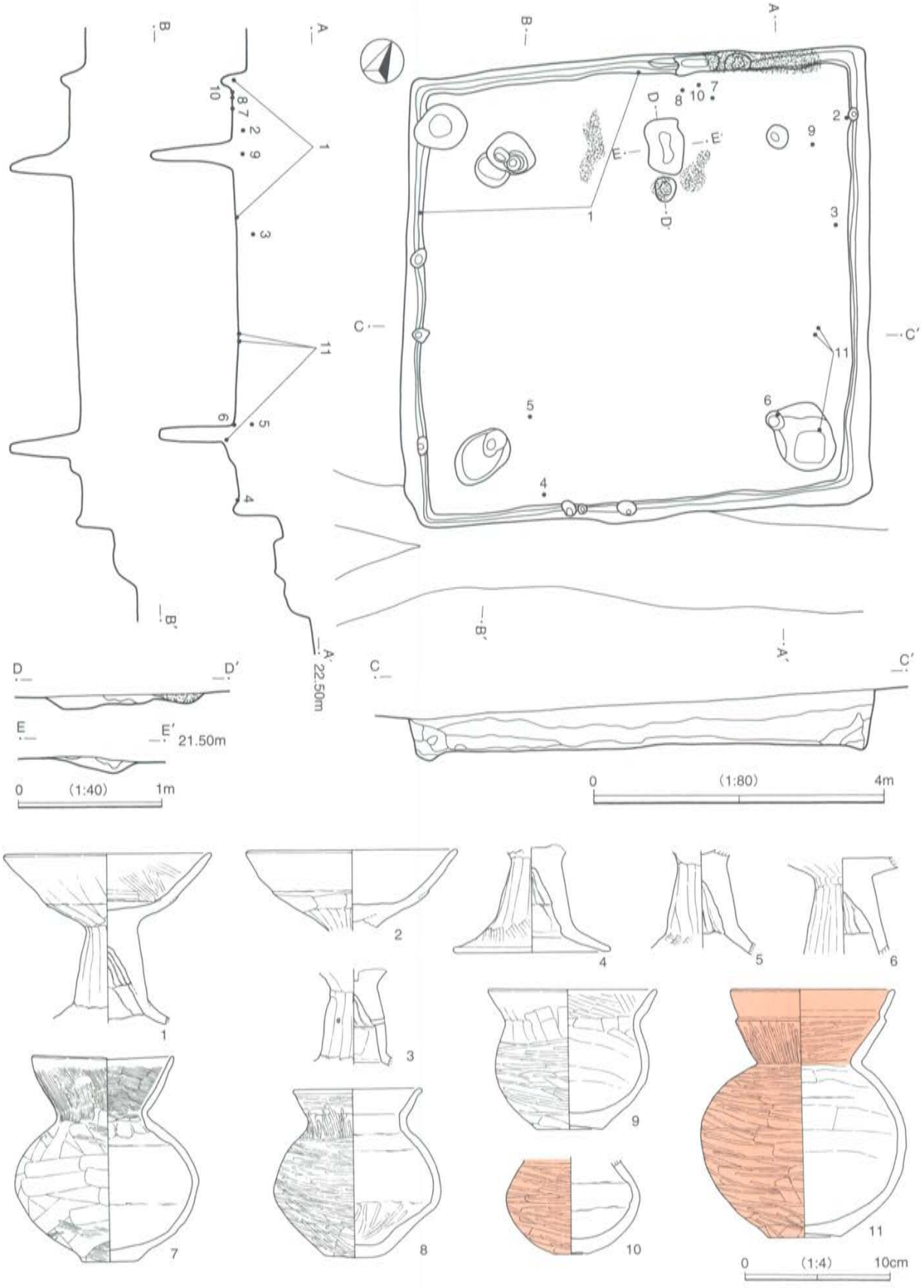
遺物は北壁の炭化材検出位置付近と，南東柱穴付近の2か所にまとまっている。いずれも赤彩の高坏A（1・3）と高坏B（2），台付の鉢A（4），肩部外面にミガキまたは丁寧なヘラナデを施した甕A（5）を図示した。SI-136同様，日常什器がないため廃絶に際して持ち去った可能性はあるが，和泉式前半の土器群に特徴的なあり方でもある。



第129図　SI-137と出土遺物

SI-129（第130図，図版64・129）

調査区北東隅に1軒だけ離れて検出された竪穴住居跡である。西から遺跡の北側に入っている谷の最奥

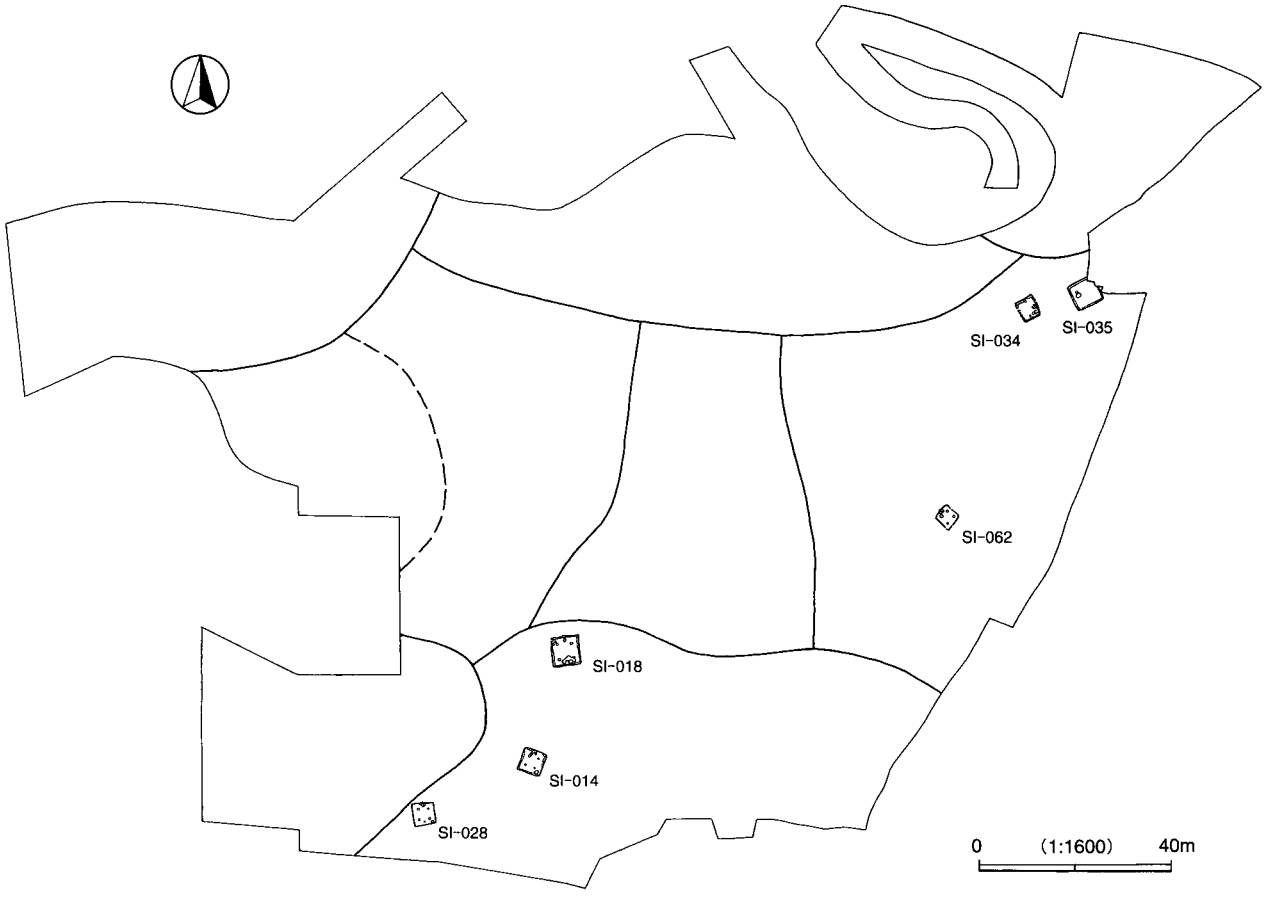


第130図　SI-129と出土遺物

部にあたり，北西に下がる緩斜面が形成されている。鷲谷津遺跡として調査したが，観音塚遺跡との境をなす谷より奥にあるので，本来は別の遺跡（集落）に含むべきかもしれない。本跡の南辺はSD-36・37と重複する。主軸は北からやや西へ振れている。壁溝は全周し，壁溝底部に1個～3個の小ピットをもつ。主柱穴は対角線上の隅寄りにあり，それぞれ深さ1m以上ある。北西の柱穴に建て替えの痕跡がみられる。北西隅と南東柱穴外側に貯蔵穴をもつ。貯蔵穴の内部に遺物はなかった。北辺壁寄りの中央部に炉が検出された。炉床の焼土化が進んでおり，かなり使い込まれていることがうかがえる。北辺の壁溝内と炉の周辺に焼土の堆積が見られ，炉と北辺壁の間に土器が集中している。

遺存の良いものは高坏・壺類・小型の甕に限られる。高坏は6点を図化した（1～6）。坏部は比較的小さく，口縁部下端に稜をもつ高坏Aで，脚部は中空の柱状部が裾部で屈折して大きく開く形態である。赤彩はない。脚部のひとつに，小孔を穿ったもの（3）が見られる。小型の壺・甕類は，壺B（7）が完形品，壺C（8）と壺A（11）が80%，赤彩の壺E（10）が口縁部を除いて遺存し，比較的遺存率が高い。4点とも形態が異なるが，丁寧に作られており，とくに8・10・11はヘラミガキで仕上げられた優品である。小型甕（9）は壺の形態ではないが，造りや大きさが小型壺と共通しており，機能的にも小型壺と同類であることを示している。和泉式の良好な土器群であるが，ここでも煮炊き用の土器など，日常に使われる土器の欠落が目立つ。

2．後期前半



第131図　古墳時代後期前半竪穴住居跡配置図

SI-014（第132図，図版12・113）

台地南部の西縁に位置する該期３軒のうち，中央の竪穴住居跡である。主軸をほぼ北にとり，対角線上に４か所の主柱穴を，南東隅に貯蔵穴をもつ。壁溝は全周せず，東側で途切れる。カマドは北壁の中央にあり，火床に支脚が残っていた。多量の炭化材と焼土が堆積し，大型の炭化材はいずれも内側に倒れたような状態で出土しており，本跡の上屋を構成する材であったと考えられる。土層は３層に分けられるが，いずれも炭化材，焼土粒を含んでおり，短期間に埋め戻されたことがうかがえる。

遺物は鬼高式の土師器を中心として床全体に散乱しているが，遺存の良いもの（２・５・９）はカマドの周辺と貯蔵穴の近くから出土している。坏類には内外面の一部を赤彩したもの（２・４）がある。坏B（２・３）は口縁部が外反し，底部をヘラケズリしている。これらがかなり扁平になっており，丸底の浅い坏（４）も加わってくるのは新しい要素である。しかし，赤彩の長頸壺である壺G（５）などの古い器種も残存しているので後期後半まで下るものではない。後期前半のうちに位置づけるのが妥当であろう。このほか，甕C（６・８），大型甑（９）などの土師器が出土している。西寄りの床面から出土した滑石製紡錘車（１）は径26.0㎜～37.8㎜，高さ15.6㎜，孔径7.2㎜～8.1㎜，重さ32.22ｇである。

SI-018（第133・134図，図版15・113・114）

台地南部の西縁に位置する該期３軒のうち，最北に位置する竪穴住居跡である。北辺の中央にカマドがあり，主軸をほぼ北にとる。主柱穴は４か所で対角線上に位置し，柱痕が認められる。カマド対面にあたる南壁際には，「m」の字形に２つの小区画を形成する，高さ４㎝ほどの土手状の高まりが敷設され，そのうちの東区画には貯蔵穴がある。壁溝は全周する。

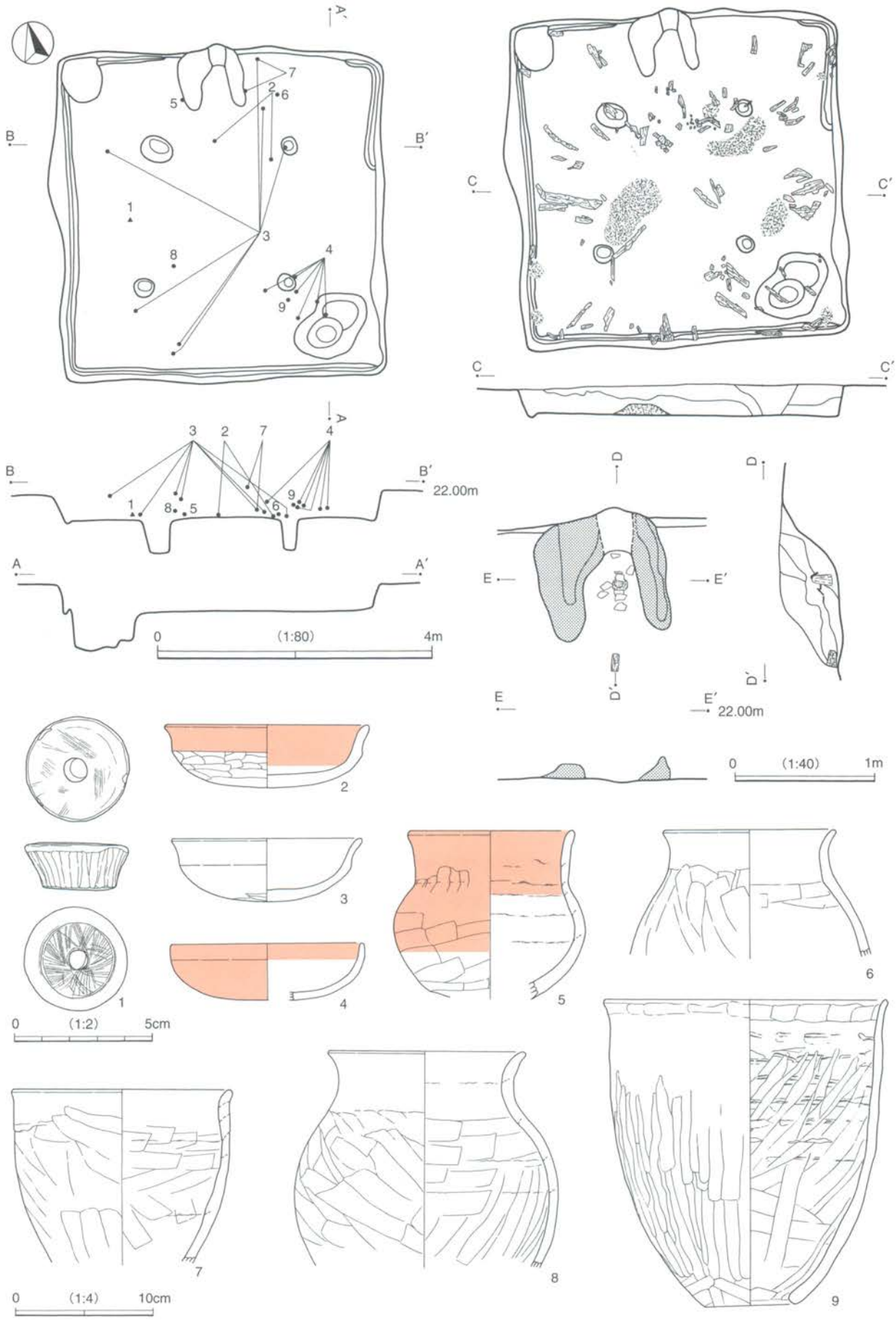
床には炭化材・焼土が散在し，カマドと貯蔵穴周辺の床面が焼土化していることからかなり激しく火を受けたことがうかがえる。覆土はほぼ２層に分けられ，いずれも炭化材・焼土を含んでおり，焼失後短時間に埋められたものと思われる。

ほとんどの遺物は北半にあり，図示した遺物のうち南東隅から出土した（２）を除いて北半から出土したものである。土師器坏には口縁下端に明瞭な稜をもつ須恵器蓋の模倣である坏B（１）と，椀形をした丸底の坏A（２）がある。ともに口縁部内外面を赤彩している。甕類では小型甕C（３・４）や椀A（５），鉢C（６），鉢D（７），大型の甕C（８・９・11）と甕D（10）が出土している。鬼高式の甕としては胴部の張りが強い形態であることから，後期前半でも比較的古相とみられる。

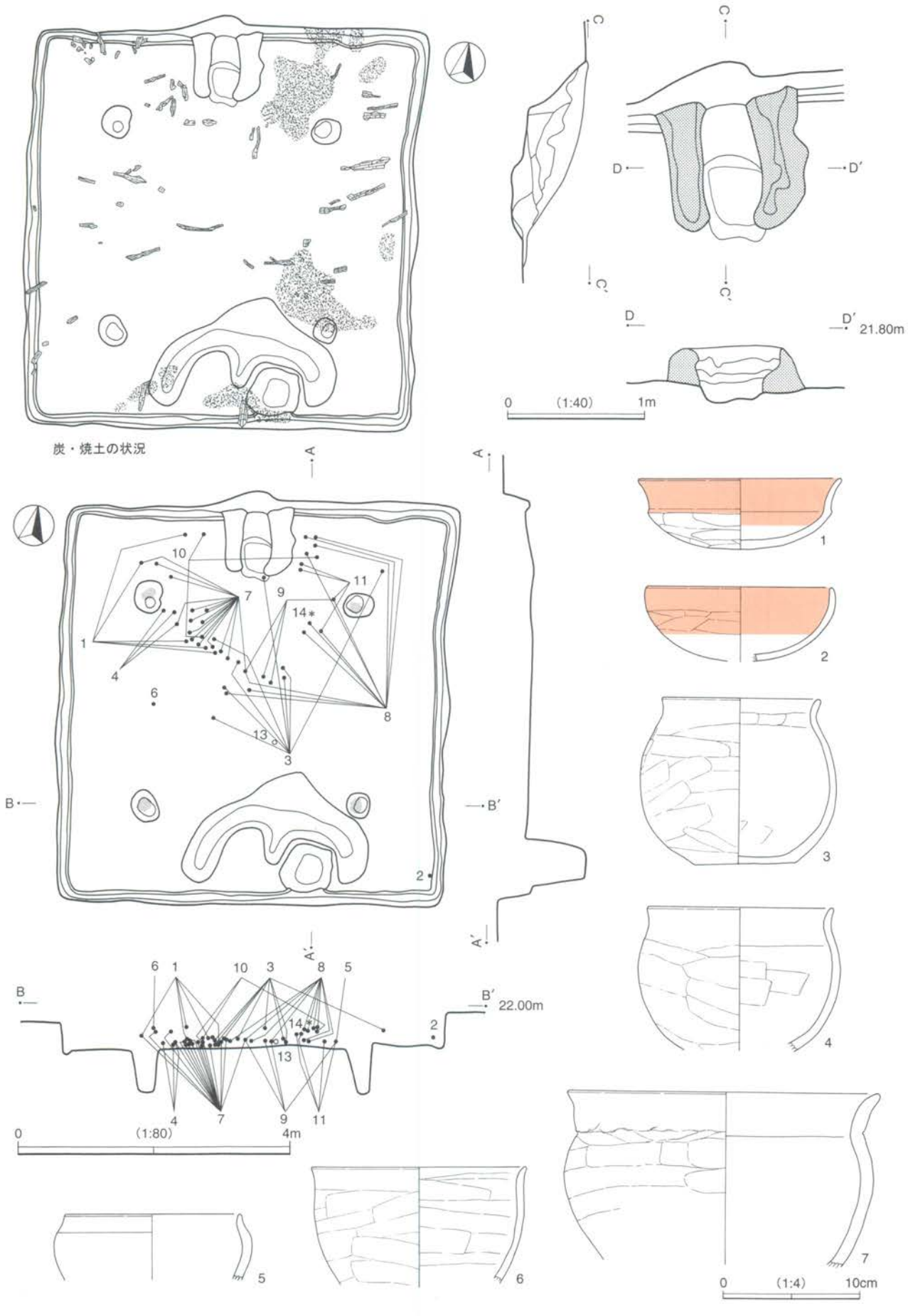
土錘（12・13）は土器に伴って出土している。長頸鏃とみられる棒状鉄製品（14）は覆土上層からの出土である。

SI-028（第135図，図版19・115・116）

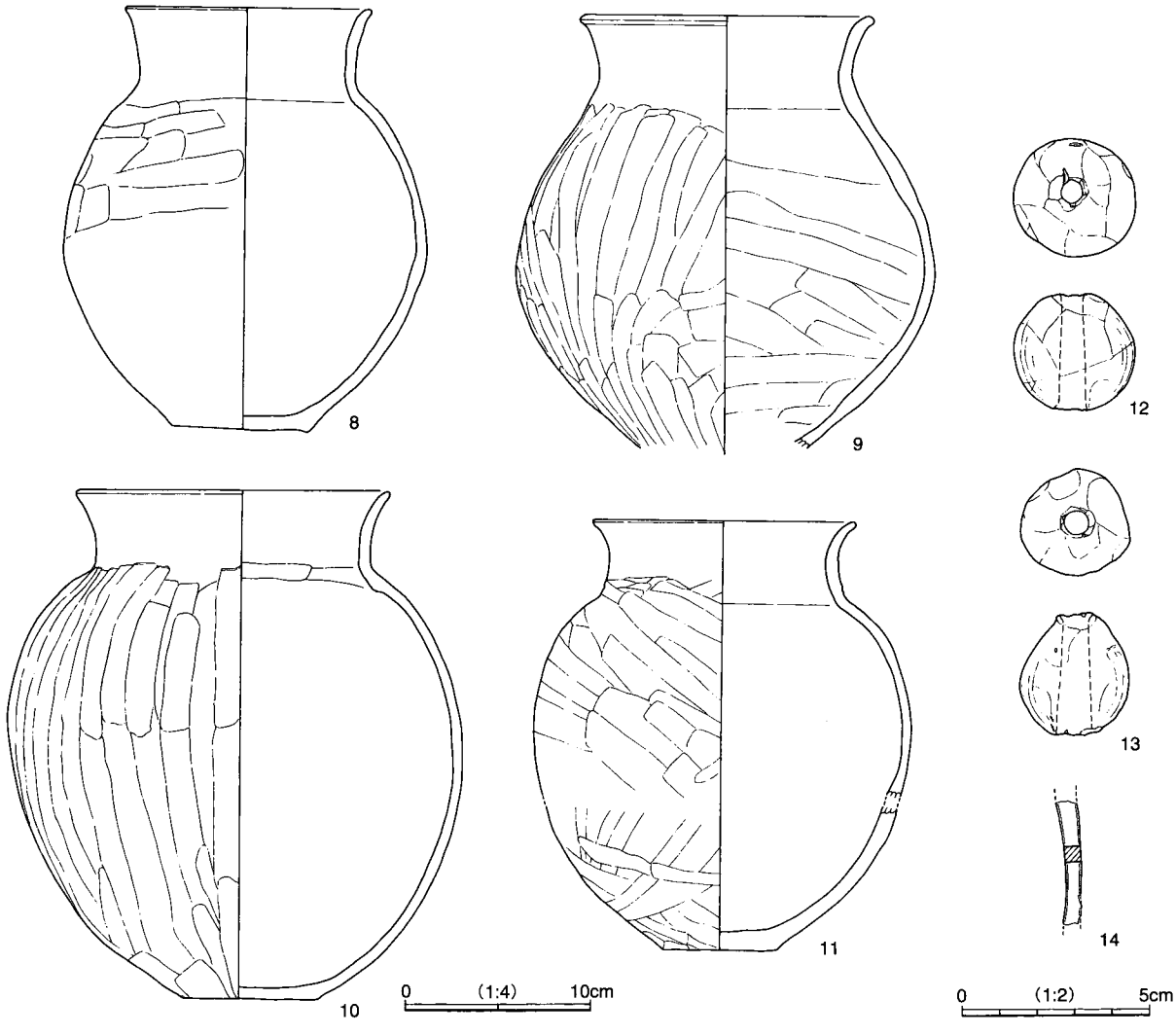
台地南部の西縁に位置する該期３軒のうち，最南に位置する竪穴住居跡である。主軸をほぼ北にとり，カマドを北辺中央に設ける。壁溝はなく，主柱穴は対角線上にあるが，やや中心部寄りに位置する。このほか，カマド対面にあたる南側中央に出入口施設のピットが，南東隅に貯蔵穴がある。遺物はカマド周辺にほぼ完形のまま検出されており，構造材の焼けたものと思われる炭化材や焼土が多量に出土した。覆土の各層に炭化材・焼土・ロームがブロック状に堆積しているため，焼失後人為的に埋め戻されたと考えられる。



第132図　SI-014と出土遺物



第133図　SI-018と出土遺物（1）

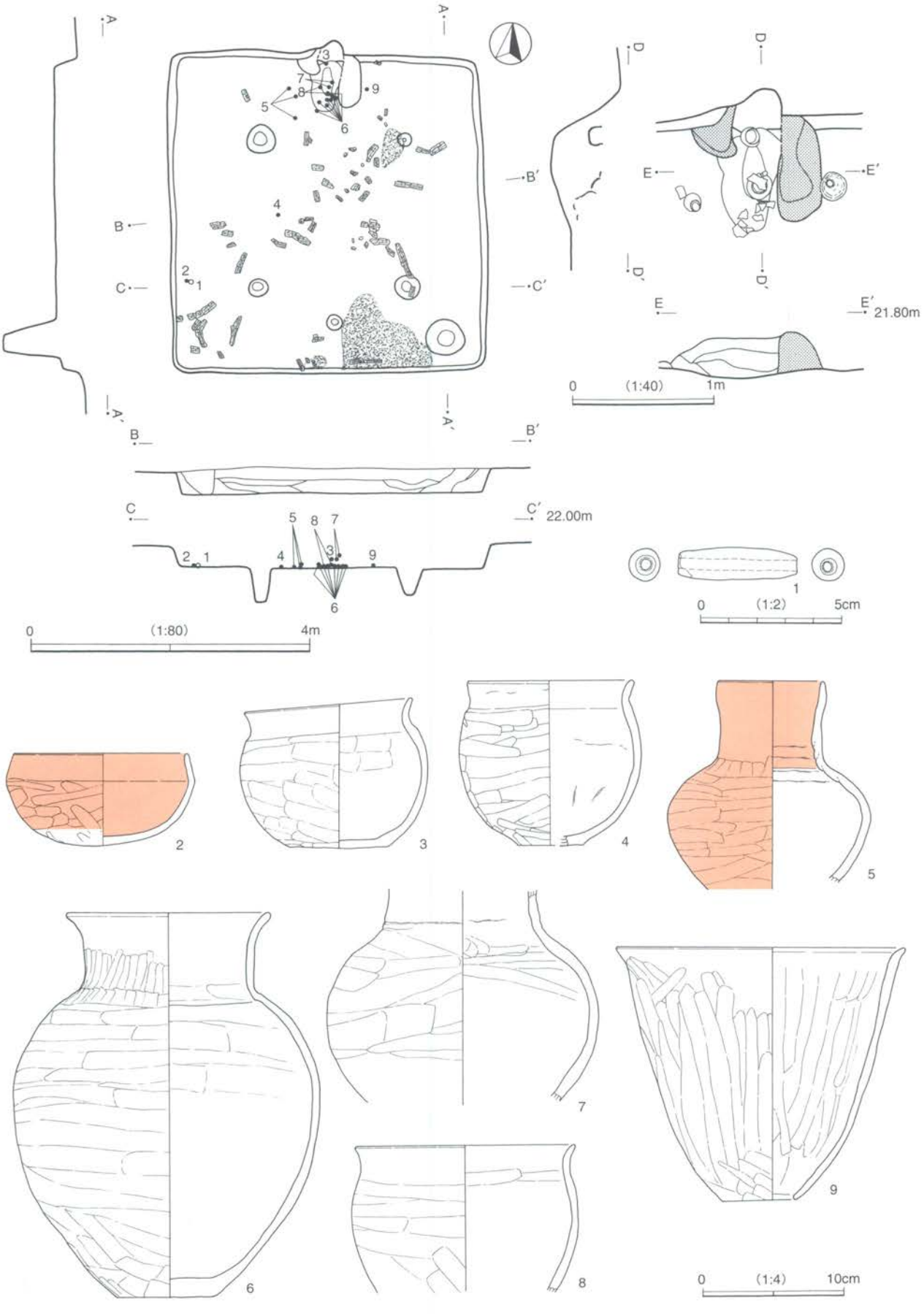


第134図　SI-018出土遺物（2）

残りの良い遺物はカマド周辺に集中しているが，大型甑（9）は袖の外側にあり，火床に据えられていたのは，煮炊き用の甕というより広口壺の形態をした土師器の甕C（6・7）と，小型甕B（3）である。左袖が大きく壊され，そこに壺G（5）が出土していることから，使用時の状態のまま放置されたとは考えがたい。廃絶に際して土器類を置き，カマドを閉じる儀礼的行為の痕跡と思われる。カマド以外では，床面から管状土錘（1）とともに椀A（2）と小型甕B（4）が出土している。口縁部の内傾する赤彩の椀A（2），長頸の壺G（5）は和泉式以来の伝統をもつもので，後期前半でも古相の土器群に位置づけられる。

SI-034（第136図，図版22）

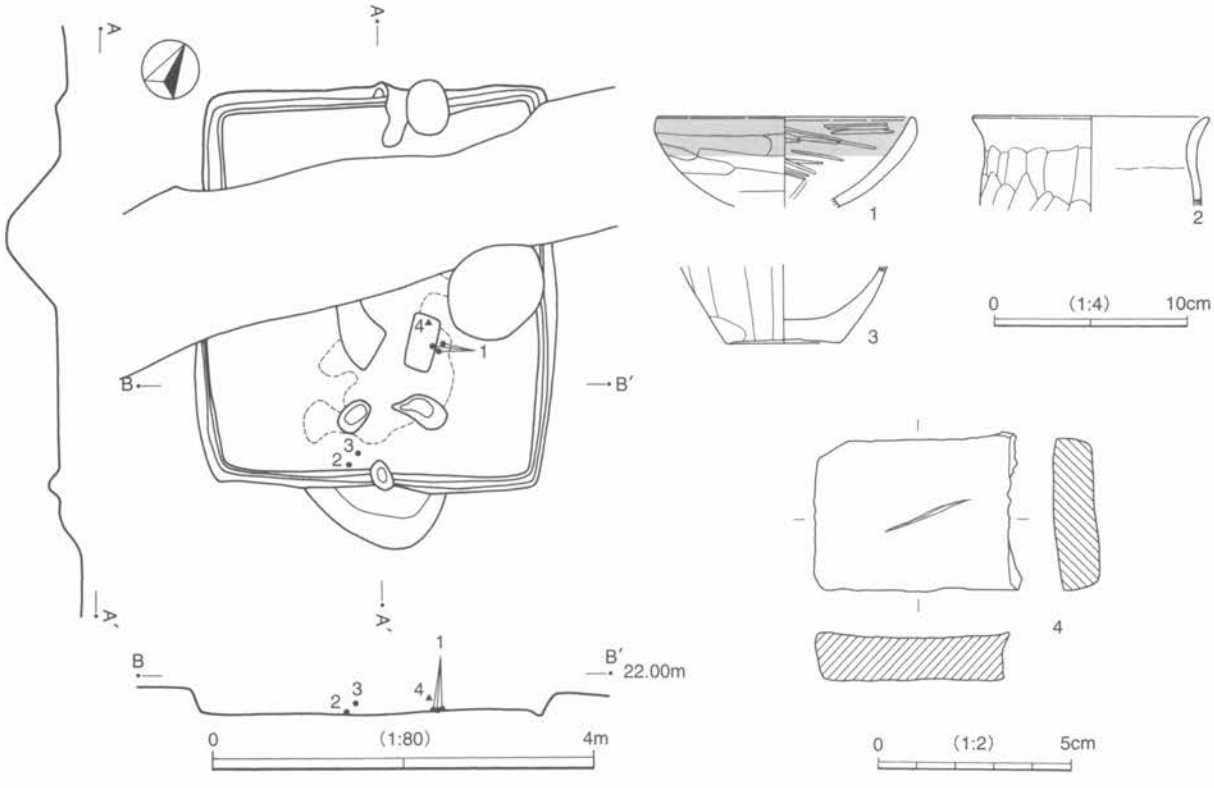
台地東部の北東端，谷を挟んで観音塚遺跡を望む東向き斜面に位置する竪穴住居跡である。主軸は北西方向で，北西辺やや東よりにカマドをもつ。北半分がSD-6に切られるほか，土坑や攪乱に切られており、遺存度はあまり良くない。カマドも東の袖が失われている。カマド対面の南東壁溝中央に小ピットがあり，これを中心として半円形の張出し部がついている。半円形の張出し部という類例は乏しいが，住居の内側にも半円状になると思われる高さ2cmほどの土手が認められるので，両者を一組にして出入口を構成する



第135図　SI-028と出土遺物

施設であったと思われる。この土手から住居の中央にかけて，床面が硬化している。

遺物の量は少なく，底部を欠失する坏１点・甕の一部２点・砥石１点を図示するにとどまる。厚手の坏（１）は直線的に大きく開く椀形で，口縁部外面に直立する面をもつ。甕（２）の胴部は寸胴になっている。後期でも新相の土器群である。砥石（４）は短冊形の新しい形態をもち，その出土位置が住居中央部の長方形土坑内であることから，後世の混入品とみられる。

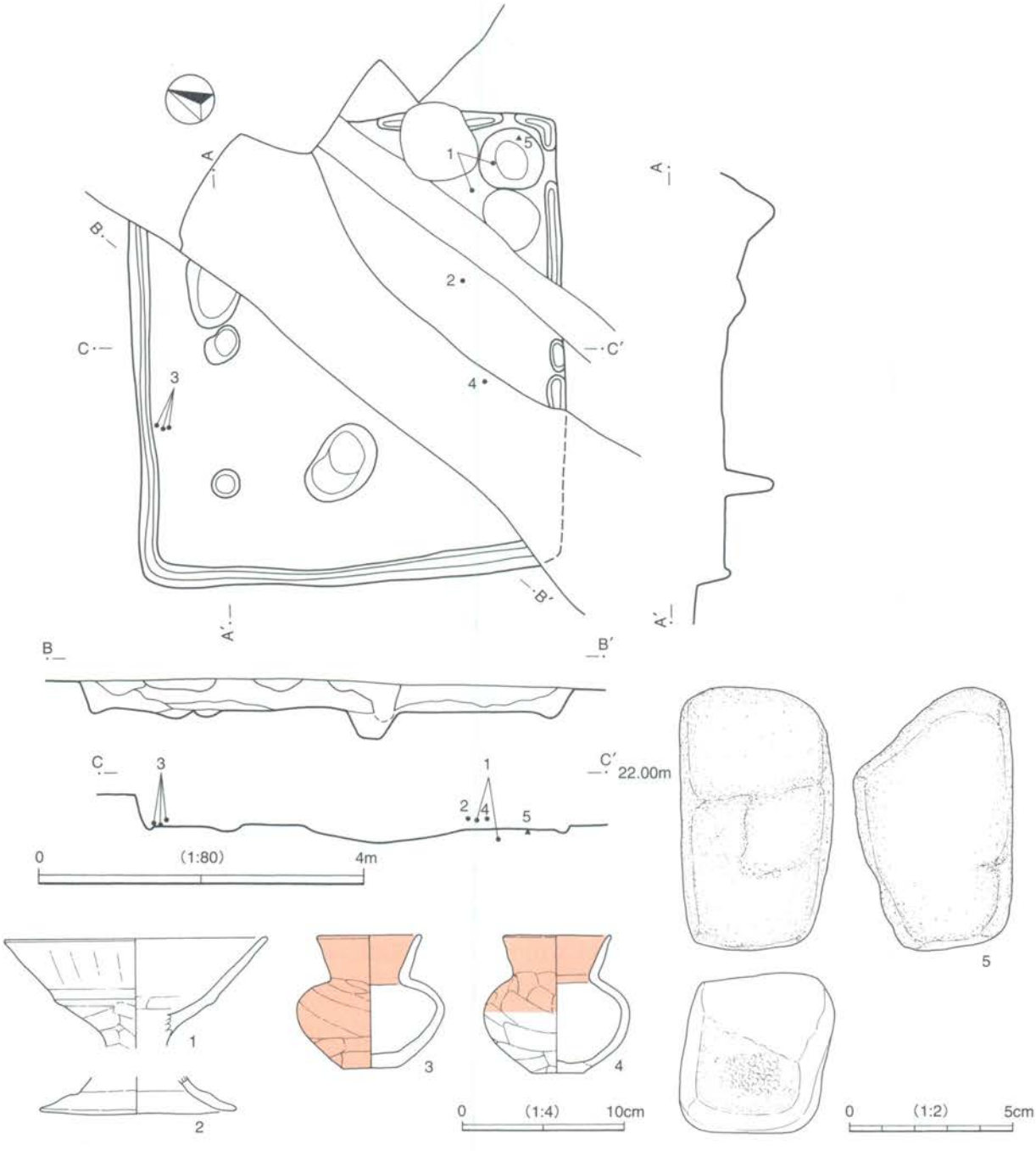


第136図　SI-034と出土遺物

SI-035（第137図，図版116）

台地東部の北東端，SI-034の東８mの位置に隣接する竪穴住居跡である。遺構中央をSD-10が通り，遺存度は良くない。主軸は東西からやや北に振れる。壁溝は全周していたものと推測される。カマドは検出されていないが，東辺北半分が調査区域外であるため，この部分にある可能性も否定できない。南東隅に貯蔵穴と思われるピットがあるほか，４か所のピットが検出されたが，形状や深さがまちまちで，柱穴と考えられるのは北西隅のひとつにすぎない。

遺物量は少なく，散在していた。高坏Cの坏部（１）と脚部（２）は遺存度が悪い。壺F（３・４）は平底化した小型丸底壺であるが，すこし肩が張っている。いずれも和泉式の特徴を受け継ぐものである。中期から後期初頭までの土器群と考えておく。このほか，南東隅の穴から出土した石槌もしくは敲石（５）を図化した。

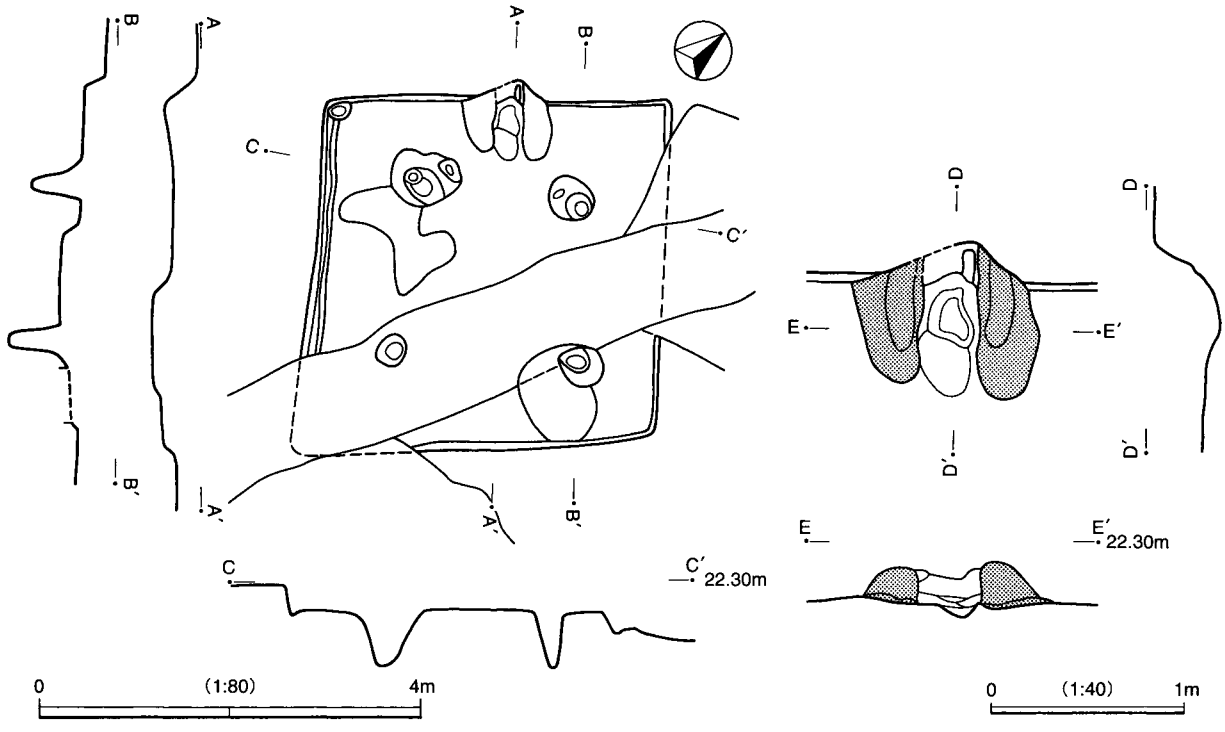


第137図　SI-035と出土遺物

SI-062（第138図，図版36）

台地東部の東端，南東へ下がる斜面に位置する竪穴住居跡である。斜面にあって流失し，奈良時代のSI-061に切られ，東辺中央から南隅にかけてSD-9が重複するため，遺存度は悪い。主軸を北西にとる。カマドは北西辺中央に位置し，対角線上に主柱穴4か所を検出した。西辺のみに壁溝が見られる。

図化可能な遺物はなかったが，内面にミガキをもつ赤彩の坏片1点が出土している。ただし，覆土に千葉市域産の須恵器甕片や常総型甕片を含んでいるので，SI-061に近い時期である可能性も残る。



第138図　SI-062

3．後期後半

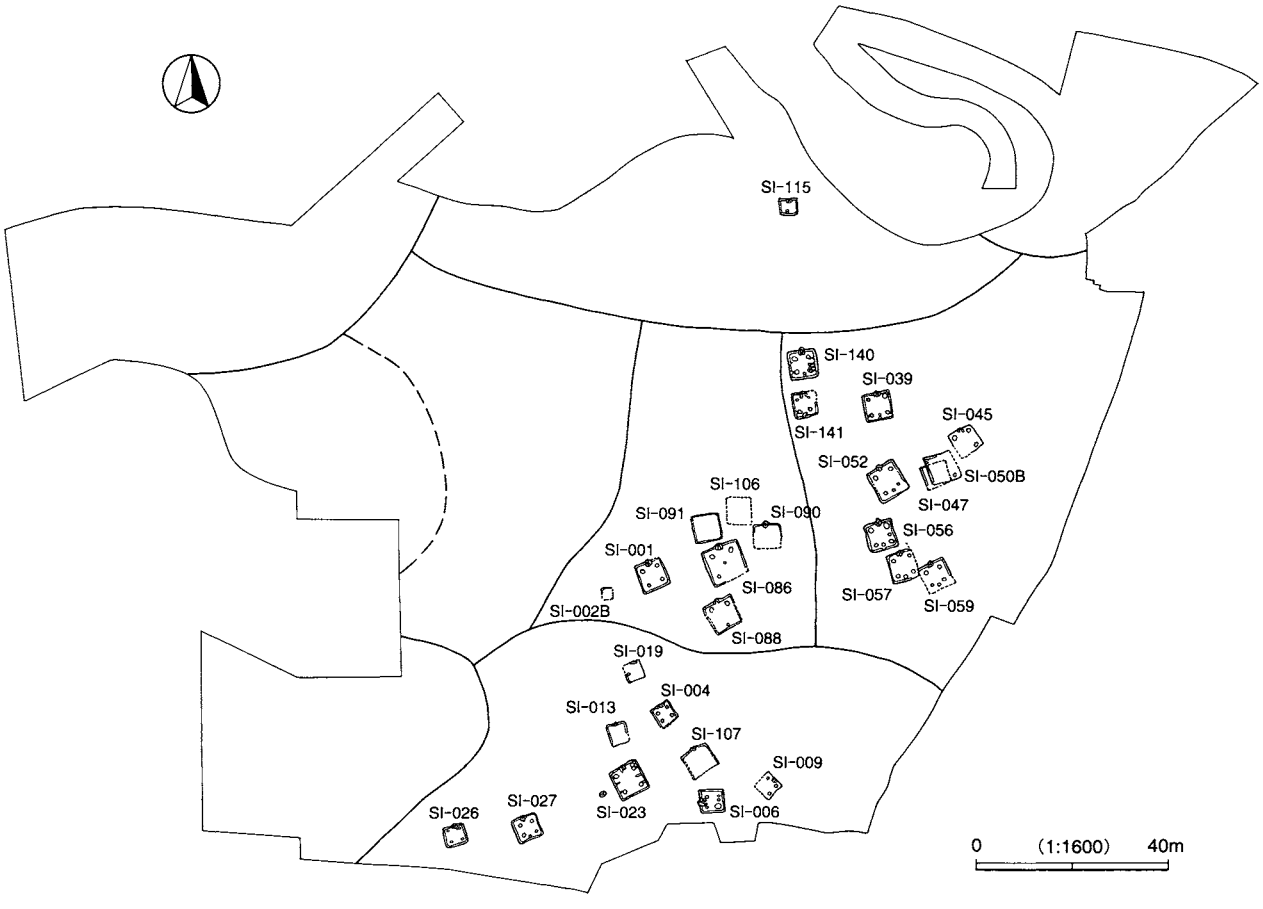
SI-001（第140図，図版6・112）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。SX-3に切られる。主軸は北からやや西に振れている。北辺中央部にカマドが設置されている。北隅は攪乱により失われているが，残存部では，対角線上に主柱穴4か所が検出されており，壁溝は全周している。柱穴の間を中心として，床に硬化面が形成されている。覆土は暗褐色から黒褐色の腐植土を主体としており，自然堆積の状態を呈す。

図示した遺物は，おもに北西側柱穴の周囲より出土した。壁際にほぼ完形の土師器甕A（6）が遺存しており，ほかの土師器甕（5・7・8）と甑（9）も，竪穴の北西区に集中している。須恵器坏類の中では，最も遺存のよかった坏（1）は，床面から出土したものである。口径15.8㎝の大型品で，灰白色の特徴的な胎土から東海産（湖西窯周辺）の製品とみられる。一見すると坏Hの蓋に類似するが，湖西窯周辺では丸い椀形の坏身（坏GⅡ）がやや遅れた時期に認められている。沈線状に凹んだ部分は，高台が剥がれた痕跡とも考えられ，この場合は底が突出する坏BⅠの類となる。坏（2）も，これと同じ焼成，胎土，形態を有し，坏GⅡとみられる。ほかの坏類（3・4）はいずれも底部に丸みをもつ高台付の坏Bである。湖西窯周辺ではこれらが併存しているようである。須恵器の時期は本報告で後期後半としたうちの，新相を示すといえよう。土師器甕D（5・7）は口縁部屈曲が鋭く，胴部が筒に近くなっている。地元の鬼高式の甕から脱却した，いわゆる「在地」の甕である。土師器甑（9）は，大型のもので，内面に粗いヘラミガキをもつのが特徴である。

SI-002B（第141図，図版6）

台地中央部の西寄りに位置する小型の竪穴である。SI-001の6m西にある。奈良時代のSI-002C，003



第139図　古墳時代後期後半竪穴住居跡配置図

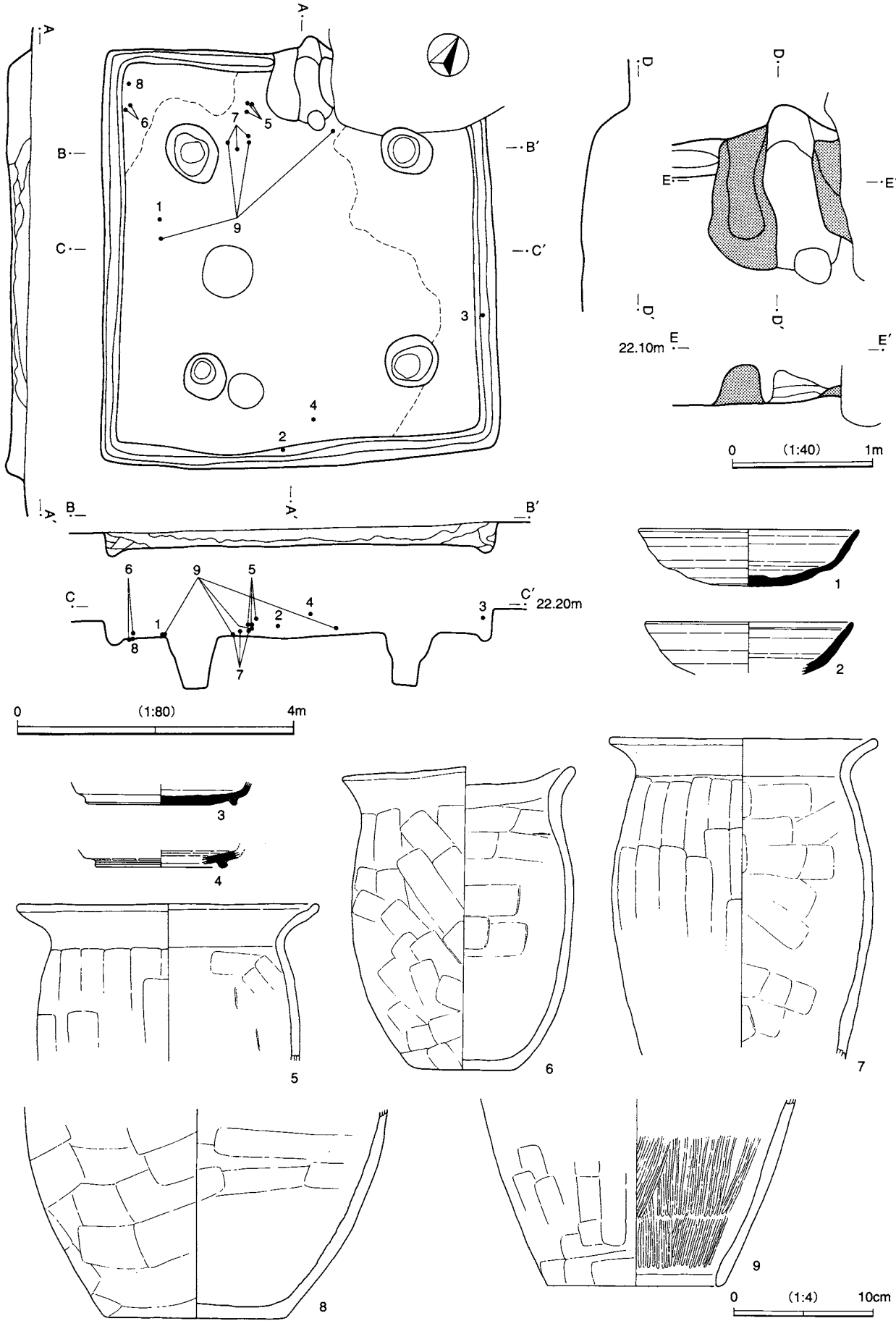
の構築により，覆土の大半を失い，検出できたのは壁溝と，ピット1か所のみである。長方形をなすが，カマド等が検出されなかったため，南北にのびる長軸方向を便宜的に主軸として図示した。南西隅のピットは貯蔵穴と思われる。出土した遺物は少なく，本跡の時期を知りうる資料は，重複を免れた箇所で検出された2点の須恵器のみである。

図示した須恵器広口壺（1・2）の口縁部は，口縁端部に面をもつ断面三角形の形態から，後期後半の古相を示す。

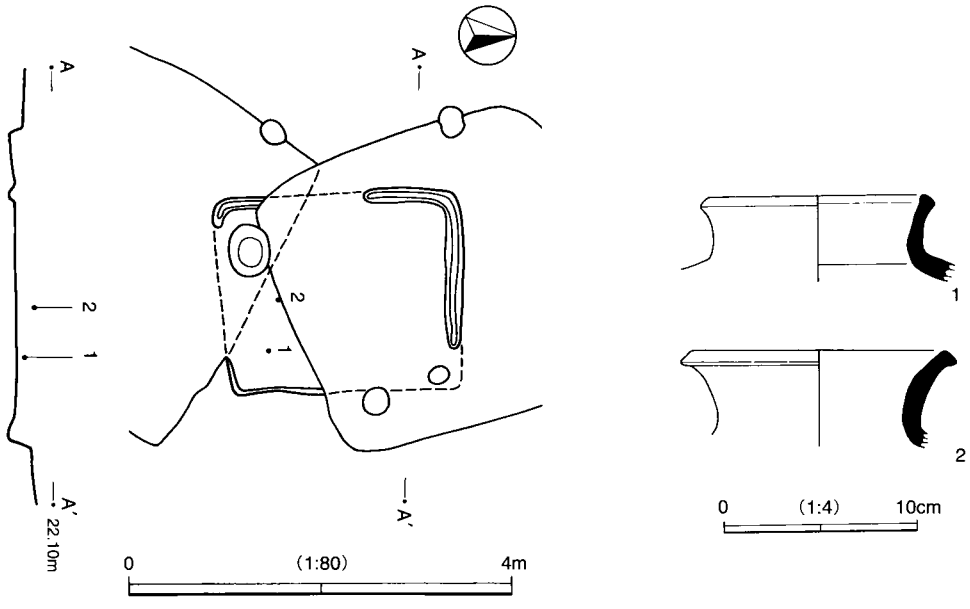
SI-004（第142図，図版7・112）

台地南部の中央付近，N28-13で検出された竪穴住居跡である。南西隅を奈良時代のSI-005に切られる。主軸を北西に置き，北西側中央にカマドが設けられている。壁溝は，カマド部分を除きほぼ全周している。主柱穴は対角線上に4か所整然と配置される。カマドの東袖脇に，深さ40㎝の円形ピットが検出されている。貯蔵穴と位置づけられるが，内部から遺物等は検出されなかった。覆土は，壁際にローム粒を多く含む暗黄色土・茶褐色土が堆積し，ほかはローム粒・黒色土粒・焼土粒を含む暗茶褐色土が堆積していた。この状況から，本跡は一気に埋め戻された可能性が高い。

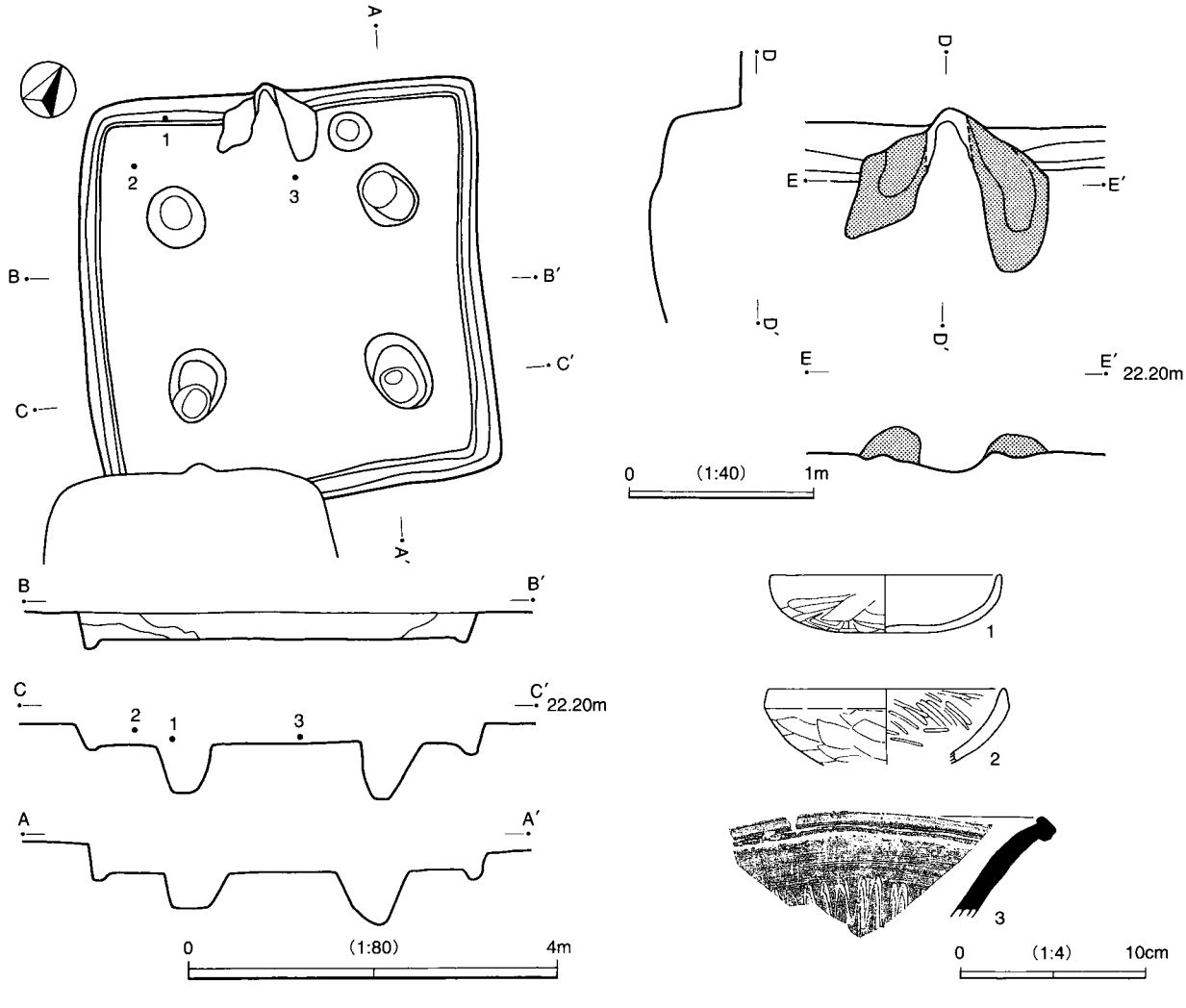
遺物はきわめて少なく，混入品も含めて20点ほどにすぎない。そのうち，本跡に伴うとみられるのは，土師器坏（1・2）と須恵器甕（3）である。土師器坏A（1）は，丸底でありながら，浅く，扁平な形



第140図　SI-001と出土遺物



第141図　SI-002Bと出土遺物



第142図　SI-004と出土遺物

態であり，奈良時代に盛行する盤状の坏に近い。土師器坏C（2）は，側縁に稜をもち，口縁部にかけてやや内傾する伝統的な坏で，内面はミガキ仕上げになっている。須恵器甕（3）は口縁部の小片であり，櫛描波状文が認められる。後期後半の新相，ないしは奈良時代の古相を示す。

SI-006（第143図，図版8・112）

台地南部の東寄りで検出された竪穴住居跡である。軸をほぼ東西にとる。カマドは西側中央に設けられている。カマドの遺存状態は良く，天井部分は崩落しているが，煙道はあまり壊れることなく検出された。主柱穴は対角線上に4か所認められる。そのうち，南東の1か所だけ柱穴の上半を大きく掘り広げられた状態で検出され，抜き取りが行われた様子がうかがわれた。ほかの柱穴では柱の裏込めが観察された。東側主柱穴2基に挟まれて，径58㎝，深さ約50㎝のピットが認められる。また，壁溝は，カマド部分をのぞき，壁際に全周しているのが確認された。覆土はほぼ4層に分層され，2層から4層（最下層）では，ロームブロックと焼土粒を比較的多く含んでいる。とくに，3層はローム粒の量が多い。これらの状況は，本跡が人為的に埋め戻されたことをうかがわせる。

遺物は比較的多く検出された。とくに，床面中央部とカマド付近に集中している。このうち，土器は8点図示した。遺存度は20%～30%と，あまり良好ではない。小型の須恵器坏（1）は，口縁部が外方に開く，やや丸底気味のもので，坏GⅠにあたる。土師器坏AⅠ（2）がこれに伴うとみてよい。大型の浅い坏で，内面はミガキ仕上げである。大型の鉢（3）は甕A（7）とともにやや上層で出土した。甕類（4～8）は，カマドの内部とその周辺を取り巻くかのように出土している。いずれも鬼高式の伝統を受け継ぐ在来の甕Aである。やや多様性が認められ，甕Dに近いもの（5）と甕Bに近いもの（6）が含まれている。後期後半では比較的古相を示す。

このほか，南の壁際で破損した砥石（9）が1点出土した。

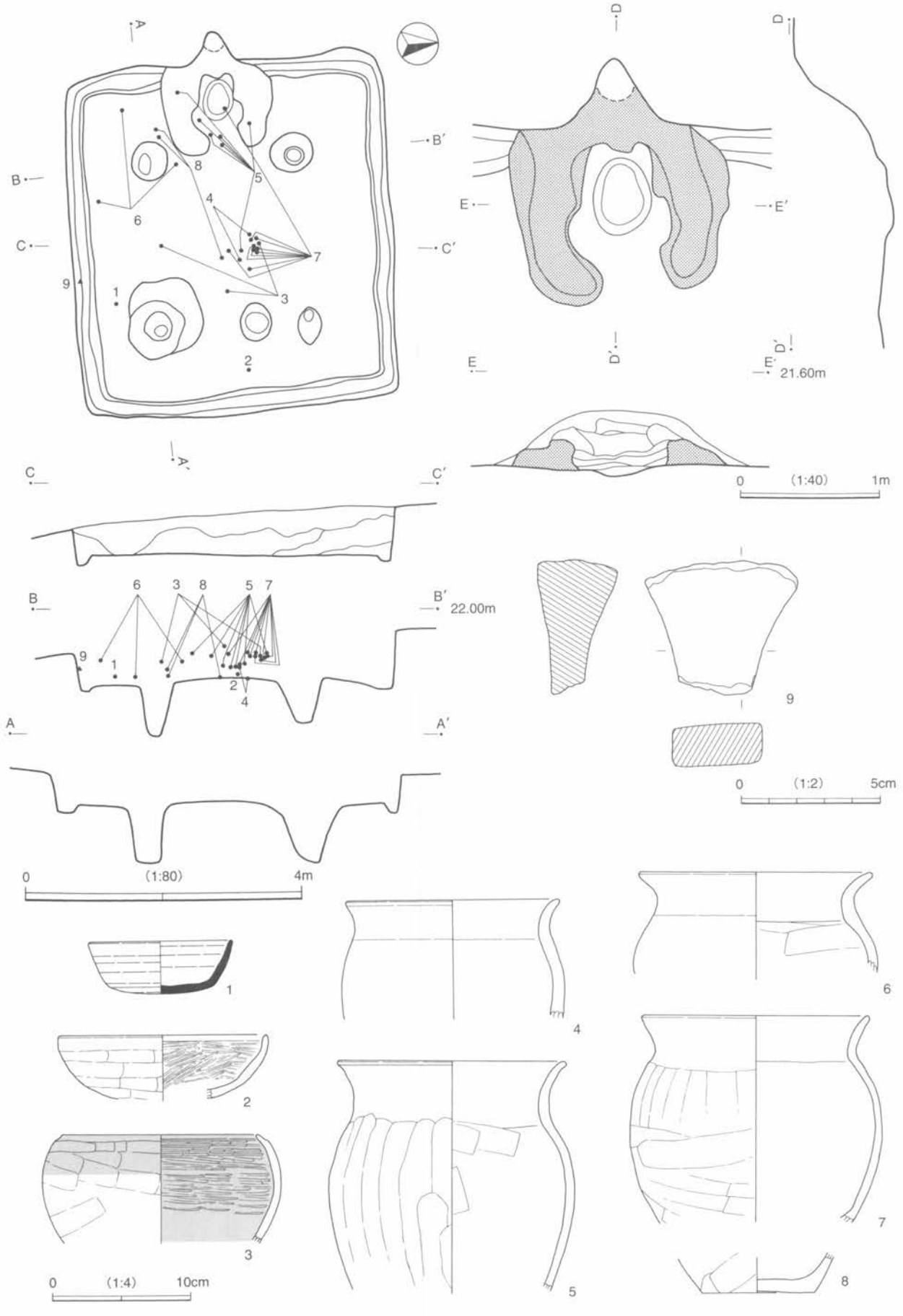
SI-009（第144図，図版9・112）

台地南部の東端に位置する竪穴住居跡である。SI-006 のさらに7m東にあたる。主軸をほぼ北西におき，北東辺中央にカマドを設ける。支谷に面する緩斜面にあるため，検出された壁高は北西で55㎝前後，南東で8㎝～11㎝であった。本跡をほとんど覆うように，上面で平安時代のSI-008が重複している。覆土は3層に分層できるが，ハードローム粒・焼土粒をまばらに含む土の上に，ハードロームを踏み固めたSI-008の貼床が載っている状況である。したがって，SI-008の構築に伴って多少の整地が行われたとみられる。柱穴は対角線上に4か所あり，それぞれに柱痕が明瞭に認められた。

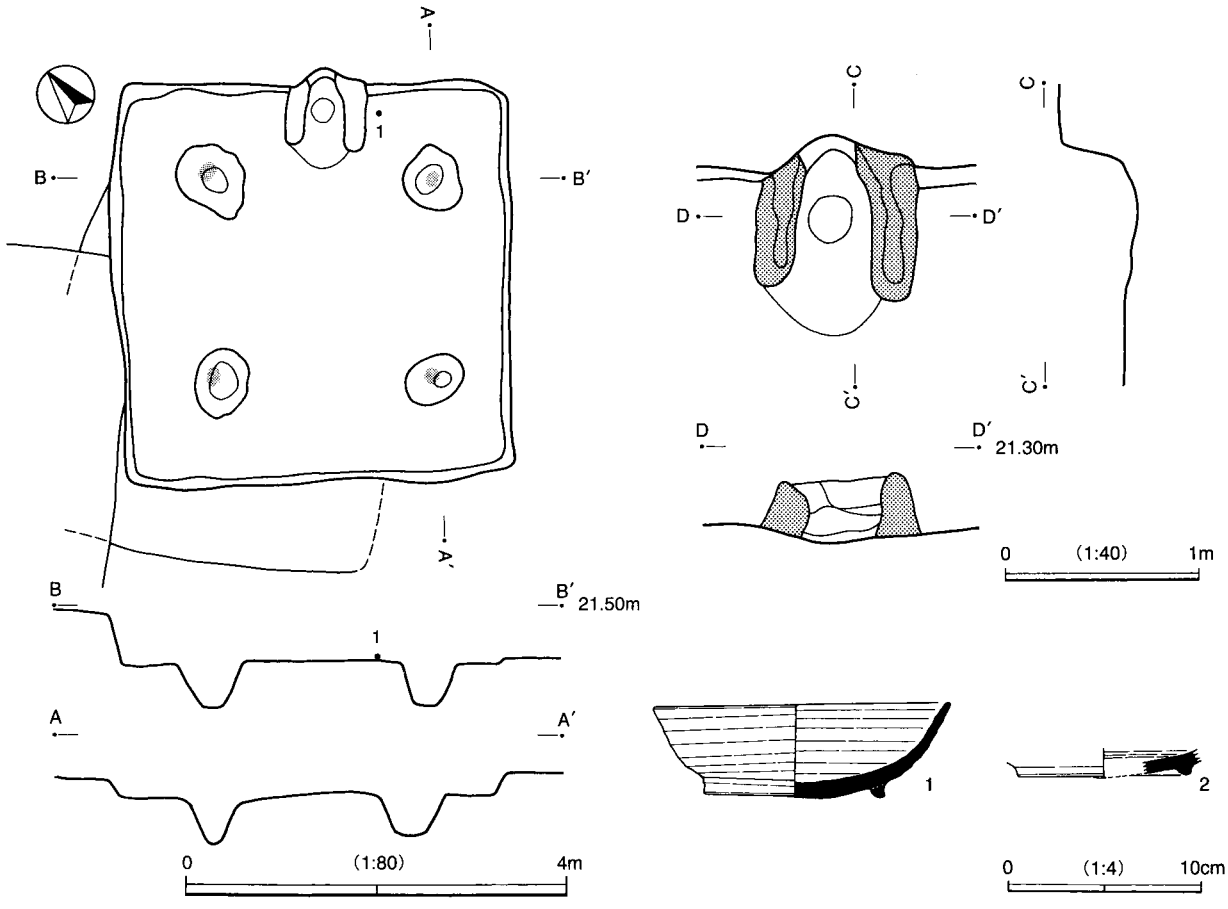
カマドの右袖脇に，遺存のよい須恵器坏BⅡ（1）が出土した。底部が高台からやや突出する特徴的な形態によって，東海産（湖西窯）の製品と判断できる。後期後半の所産といえる。

SI-013（第145図，図版11）

台地南部の中央付近に位置する竪穴住居跡である。SI-004の西7mにあたる。南東の隅付近をSK-14が，カマドと床面の一部をSX-7の2柱穴が，それぞれ切って構築されている。上部が全体的に大きく削平されており，検出面から床までの深さは16㎝～25㎝しかない。主軸をほぼ北にとっている。形態は，東側に比べ西側の辺がやや長い，不整長方形である。覆土は2層に分けられているが，いずれも暗茶褐色



第143図　SI-006と出土遺物



第144図　SI-009と出土遺物

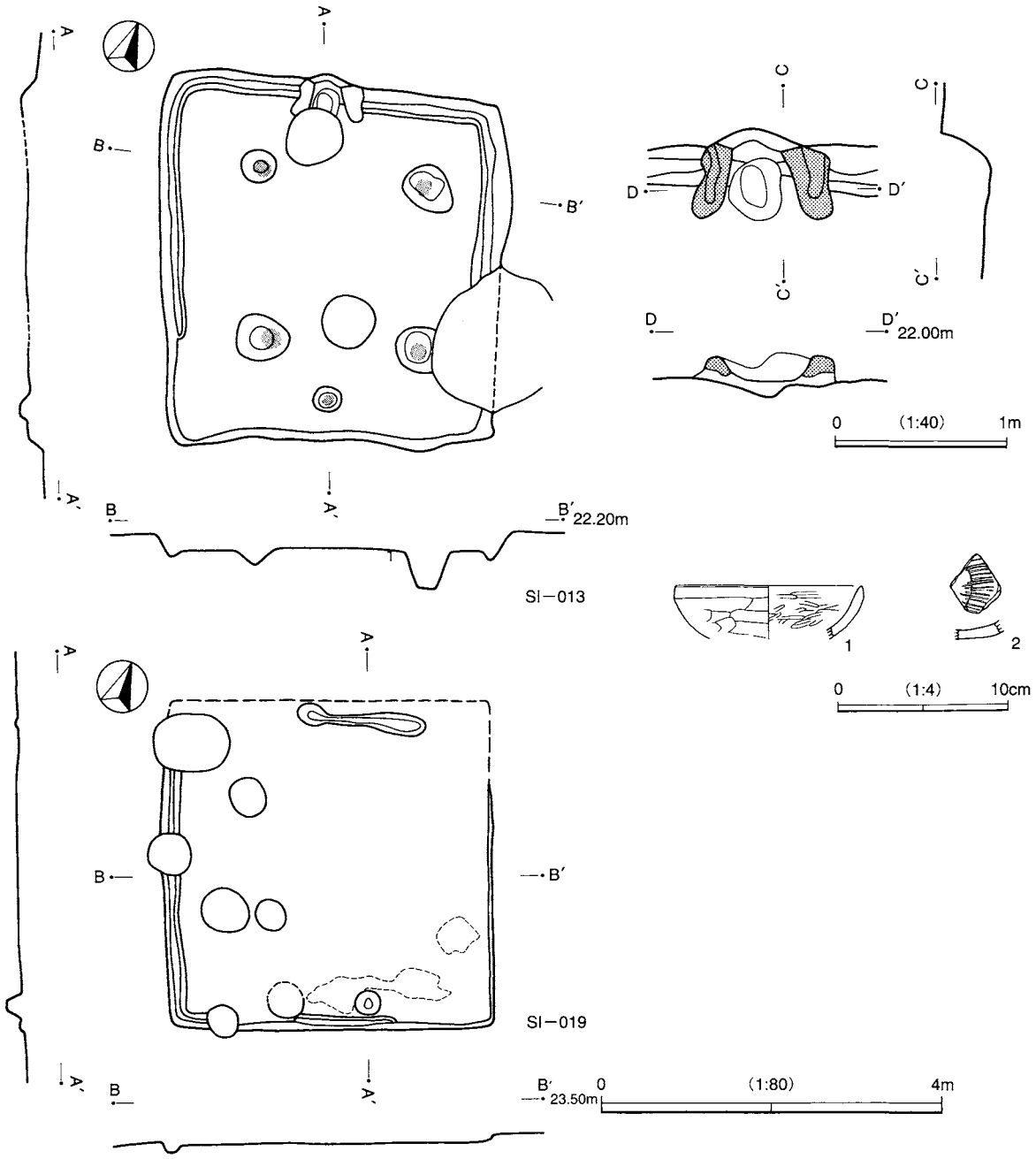
土にローム粒を霜降り状に含み，壁に近い場所ではローム粒が多い傾向にある。北辺の中央部にカマドが設けられている。柱穴は，ほぼ対角線に4か所確認され，南壁近くの小柱穴とともに，柱痕がそれぞれ明瞭に認められた。小柱穴は，カマドの対面に位置するので出入口施設とみられる。壁溝は，南側を除いて，廻っているのが確認されている。

遺物はきわめて少なく，図化できたものは2点にとどまる。坏C（1）は側縁に稜をもつ丸底の小型品で，内面をミガキ仕上げされている。土師器坏の破片（2）には，内面に放射状の暗文が確認できる。ともに，後期後半の所産とみてよい。

SI-019（第145図，図版15・114）

台地南部に位置する比較的小型の竪穴住居跡である。SI-013の北約10mにあたる。掘込みが浅く，確認面においてすでに床面が露出していた。東辺を除く3辺で，壁溝が廻っているのが確認されている。南辺中央よりやや東寄りで，径30cm，深さ19cmの小ピットが検出されたが，本跡との関連性を示すような位置に，柱穴は認められなかった。

遺物は出土しなかったため，時期決定は困難である。調査過程では，本跡と切り合う掘立柱建物のSX-1が，まず先に検出されて調査されている。その際，後期後半の遺物が出土している。本跡がSX-1より古いとすればそれ以前に遡ることになる。しかし，本遺跡で本跡のような小型の竪穴住居跡が卓越するのは，奈良時代である。以上を考慮するとあまり遡るとは考えにくく，本跡を後期後半のうちに位置づけるのが

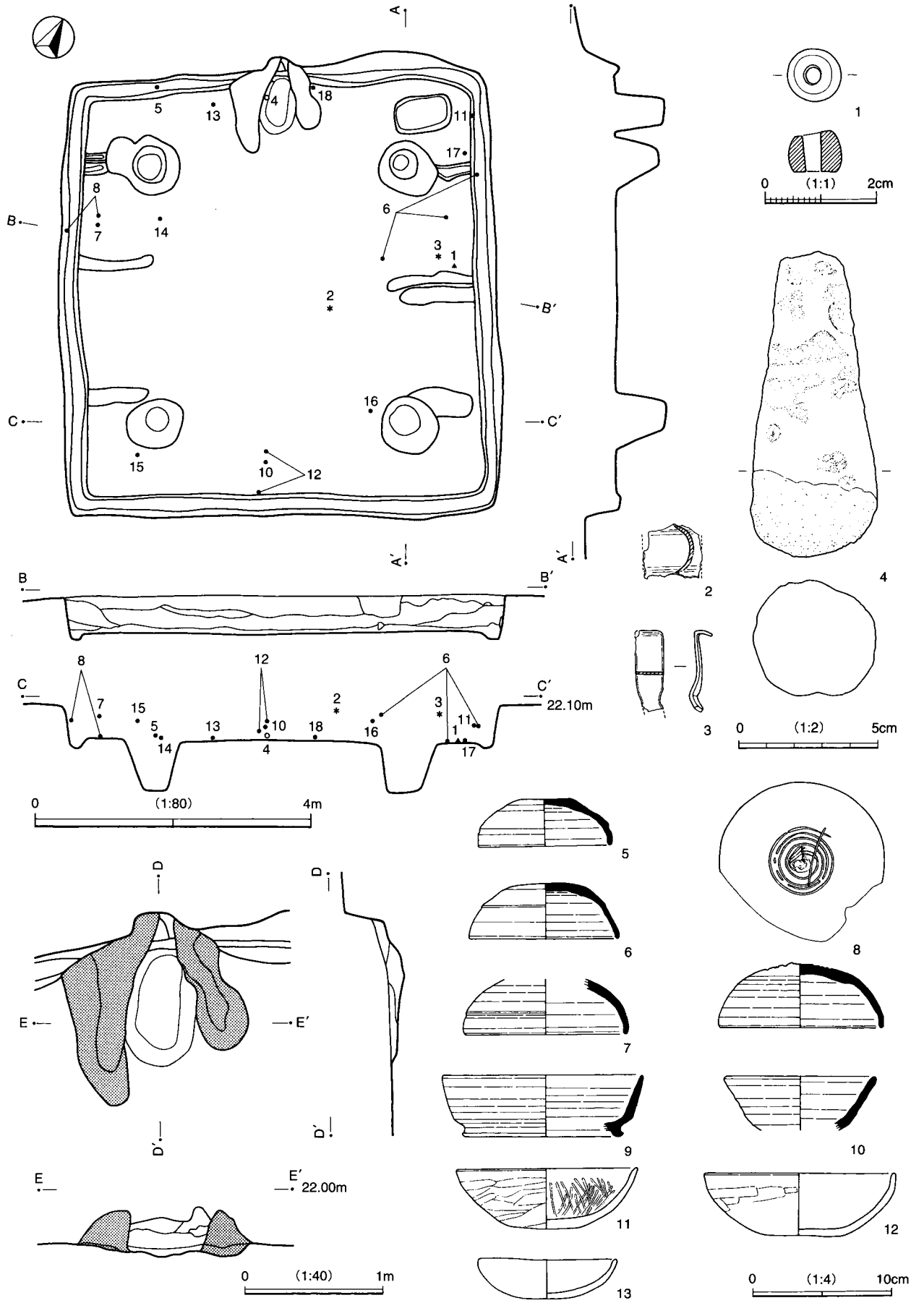


第145図　SI-013・019と出土遺物

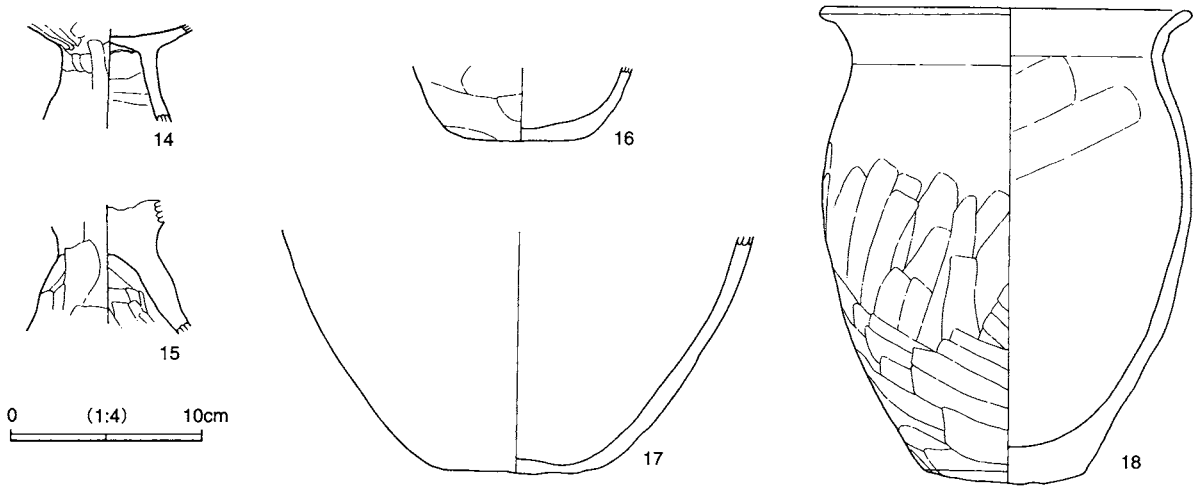
よいと考える。なお，SX-1出土の須恵器坏は，本跡からの混入である可能性もある。

SI-023（第146・147図，図版16・114）

台地南縁の中央部に位置する大型の竪穴住居跡である。主軸は，北からやや西に振っている。カマドは，北壁の中央に位置しており，火床に支脚（4）が遺存している。竪穴の北東隅には貯蔵穴がある。壁溝は全周しているのが確認され，東西それぞれの壁溝から，3条ずつ，間仕切溝が内側に向かって延びている。この溝は主柱穴とその間の中央部に向かって伸びており，これによってカマドと貯蔵穴を含む北側の区画，中央部の2区画，南側の区画に分けられる。覆土は大きく3層に分かれ，下層に焼土・砂質粘土粒を含む



第146図　SI-023と出土遺物（1）



第147図　SI-023出土遺物（2）

褐色土，中間に暗褐色土が斑状に混じる黒褐色土，上層に後世の遺物が混入した黒褐色土が堆積している。おそらく，若干埋め戻されたのち，自然に埋っていった状況を示していると考える。

遺物は散在する程度で，比較的少ない。壁際・柱穴・カマド周辺にやや多く分布する傾向がある。とくに80%以上遺存しているもの（5・8・12・13・18）は，いずれも壁際から出土している。須恵器坏Hの蓋（5～8）が4点ある。いずれも口径9.9㎝～12.0㎝の寸法に納まる小型のものである。これに組となる坏Hの身は伴わず，身としては，坏GⅠ（10）が1点ある。小型であり，半球形ではなく，口縁部が外方にまっすぐ開くものである。以上はいずれも後期後半の指標とした東海産須恵器であり，本遺跡では最も古相のものである。土師器では，大小の椀形坏AⅠ（11・13）と坏B（12），高坏A（14），甕A（16・17・18）がある。鬼高式の流れを汲む高坏A（14）は，坏部内面が黒色処理され，太い円筒形ではなく，円錐形に広がる脚をもつ。甕A（18）は，鬼高式の流れを汲む地元の土器であるが，やや肩が張るなどの伝統にはない要素がみられる。平底気味の坏（11・12）は，やや上位で出土している。土師器台付甕の脚部（15）は明らかに上層出土である。須恵器坏B（9）とともに，比較的新相を示す土器である。

金属器では，刀装具破片（2）と扁平板状鉄製品（3）があるが，明らかに上層出土であり，本跡に直接伴うものではない。また，東壁中央の間仕切溝付近から，黒色の石製丸玉（1）が出土している。径9.45㎜～9.60㎜，高さ6.25㎜～7.05㎜，孔径3.25㎜～3.40㎜，重さ1.04ｇである。

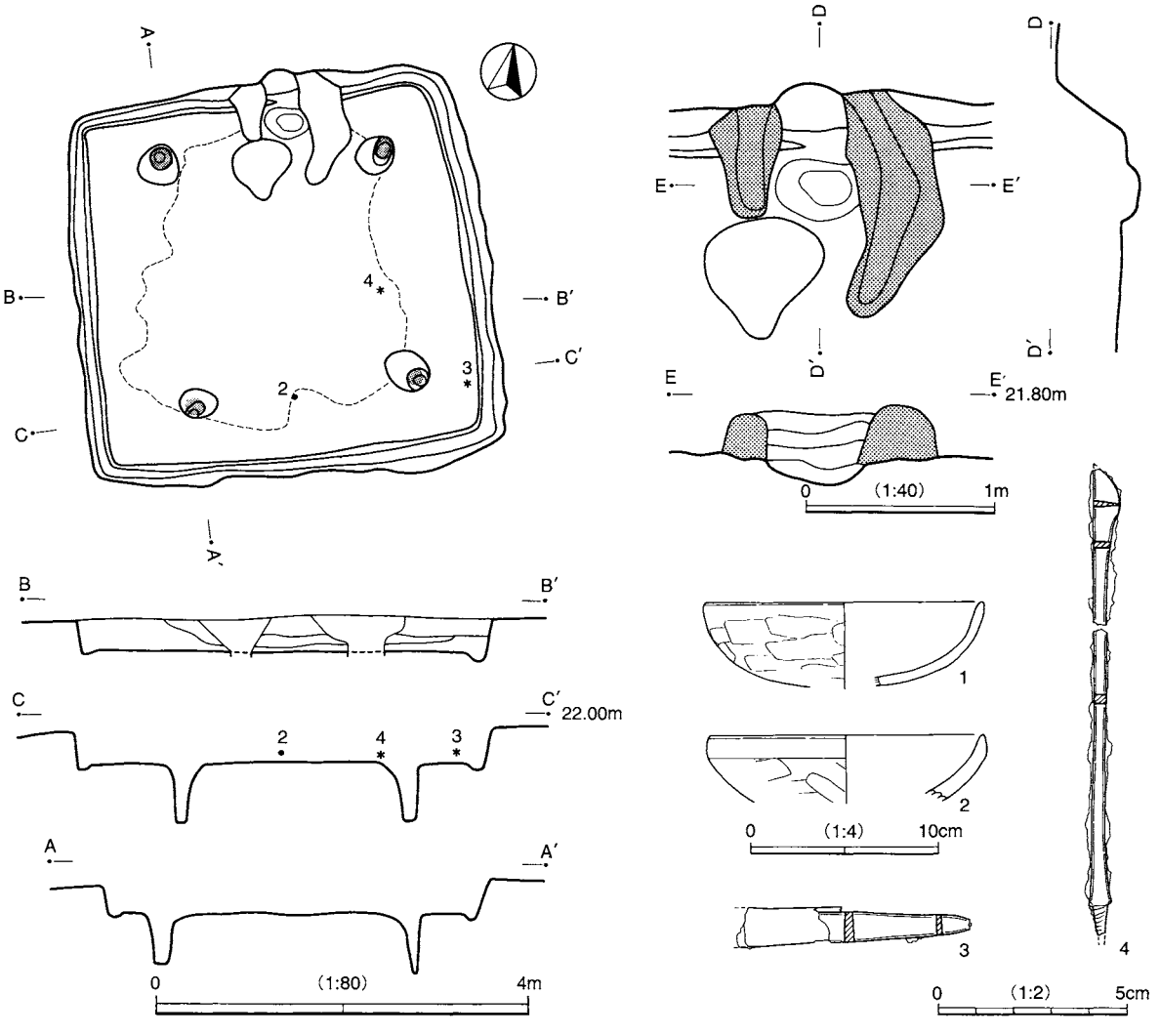
SI-026（第148図，図版18）

台地南部の西寄りに位置する竪穴住居跡である。主軸は北からやや西に振れている。カマドは北辺の中央からやや東寄りに設けられている。壁溝は全周している。対角線上に4か所の主柱穴があり，それぞれ柱痕が認められた。柱穴の間の床面は，踏み固められて硬化している。覆土は概して3層に分層できた。下層に腐植土を主体とした黒褐色土，中層にローム粒を霜降り状に含む暗茶褐色土，上層にローム粒と焼土粒をわずかに含む暗茶褐色土が堆積している。自然埋没とみてよい状態である。

床面近くで出土した遺物はわずかに10点である。覆土中の小片も含めて，4点を図示した。そのうち，土器は土師器坏2点のみである。坏AⅠ（1）は内面にミガキを施した浅い椀形のものである。丸底坏B

（2）は，口縁部が短く内傾する前代以来のものである。後期後半の古相に併行する。ほかに，畿内系暗文土器を模倣した坏片がみられたが，内面が剥落していて暗文は確認できない。

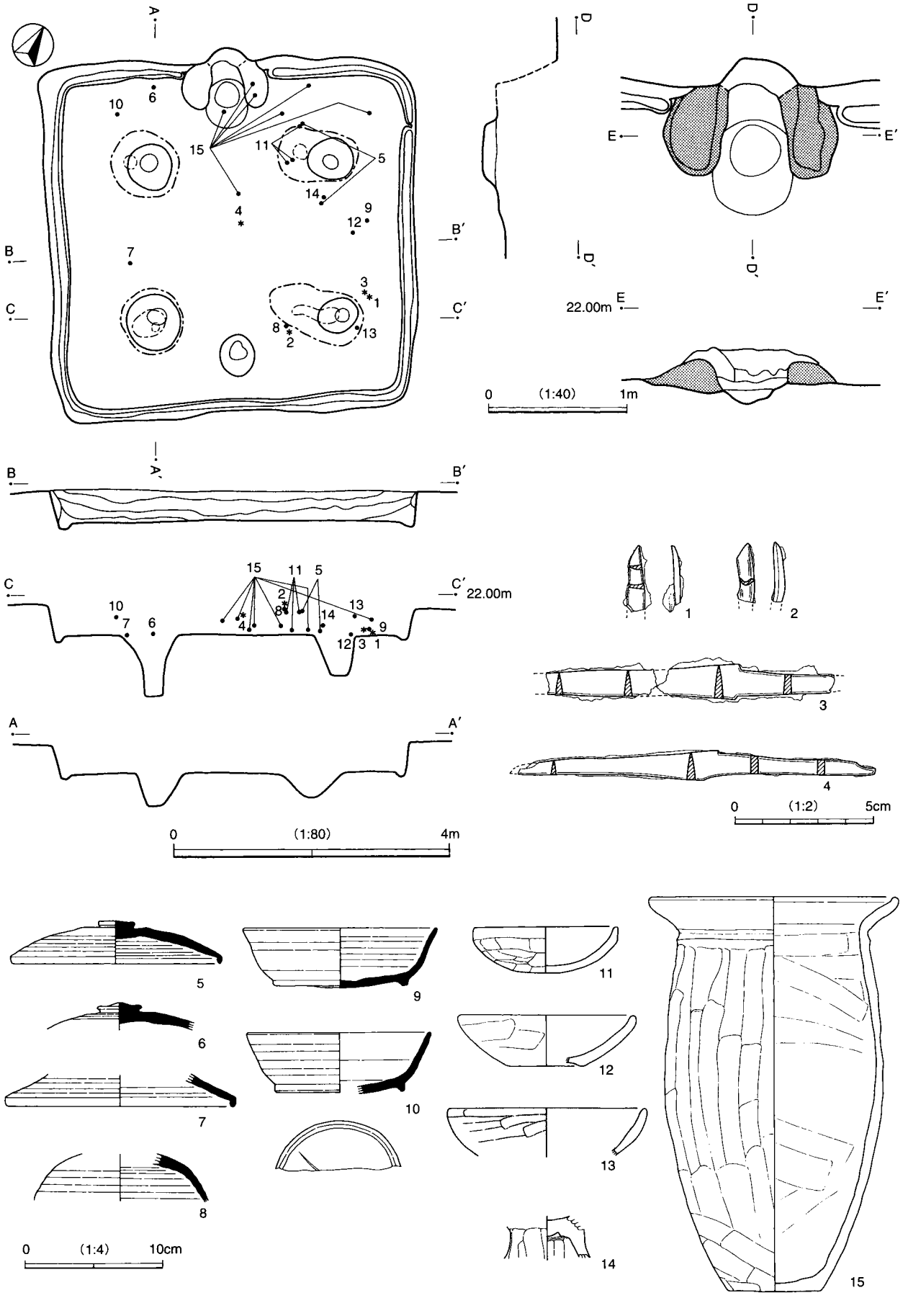
床面近くから刀子の茎（3）と鉄鏃（4）が1点ずつ出土している。鉄鏃は，刃部の小型化した片刃箭式長頸鏃である。「端刃」と呼ばれる形態のものに類する。坏類の示す時期に伴ってよいとみられるが，茎関が棘状ではなく台形をなす点などに疑問の余地がある。



第148図　SI-026と出土遺物

SI-027（第149図，図版18・115）

台地南部に位置する竪穴住居跡である。SI-026の10m東にあたる。主軸は北からやや西に振れている。カマドは北辺中央に設けられている。主柱穴はほぼ対角線上に4か所認められ，カマド対面にあたる南辺中央には出入口施設とみられるピットがある。柱穴は一度建て替えが行われており，以前の柱穴掘りかたと抜取り痕が検出されている。覆土は大きく4層に分層できる。下層にはロームブロック・ローム粒を含む褐色土とローム粒を多量に含む暗褐色土が，中層には明褐色土とローム粒を含む暗褐色土が，上層にはローム粒を含む黒褐色土が堆積している。下層は埋土の可能性が高い。



第149図　SI-027と出土遺物

遺物はほぼ全面に散在しているが，遺存の良いものは，おもにカマド周辺から東側にかけて分布する。そのうち，須恵器には，坏ＢⅡ（９・10）とその蓋（５～７）がある。坏身は高台から底部がやや突出するのが特徴である。これに組み合わせる蓋は，扁平な擬宝珠つまみが付く。これらは東海産（湖西窯周辺）とみられ，後期後半でも新相を示している。坏Ｈ蓋Ⅰ（８）は，かなり高さがあるもので，蓋でよいのなら古い形態を示すが，丸底の身をもつ坏ＧⅡである可能性もある。土師器には，坏ＡⅠ（13）・坏Ｂ（11）・坏Ｃ（12）がある。甕（15）は長胴であり，在来の甕とは大きく異なる。武蔵ないし相模方面からの搬入品と考える。鉄製品では，彫刻刀のような用途が考えられる２種類の小型工具（１・２）と，２点の刀子（３・４）が出土している。

SI-039（第150図，図版23・117）

台地東部のやや北寄りに位置する竪穴住居跡である。主軸を北にとり，カマドは北辺の中央に設ける。対角線上の主柱穴４か所のほか，カマド対面にあたる南辺中央に小ピット２か所を検出した。この小ピットの周囲は円形に若干高くなっている。小ピットと併せて出入口施設を構成すると思われる。壁溝は全周し，北西の柱穴を除いて，それぞれの柱穴から壁溝へ向かって間仕切溝が設けられている。床は堅緻であるが，とくにカマド前面から小ピット周囲のくぼみまで，帯状に硬化している。覆土は３層に分層でき，壁際の最下層にきわめて粘性の強い灰色を帯びた黒色土，中間にローム粒・ロームブロックを多量に含み粘性の強い暗褐色土，上層にローム粒を含みベトついた暗褐色土が堆積する。

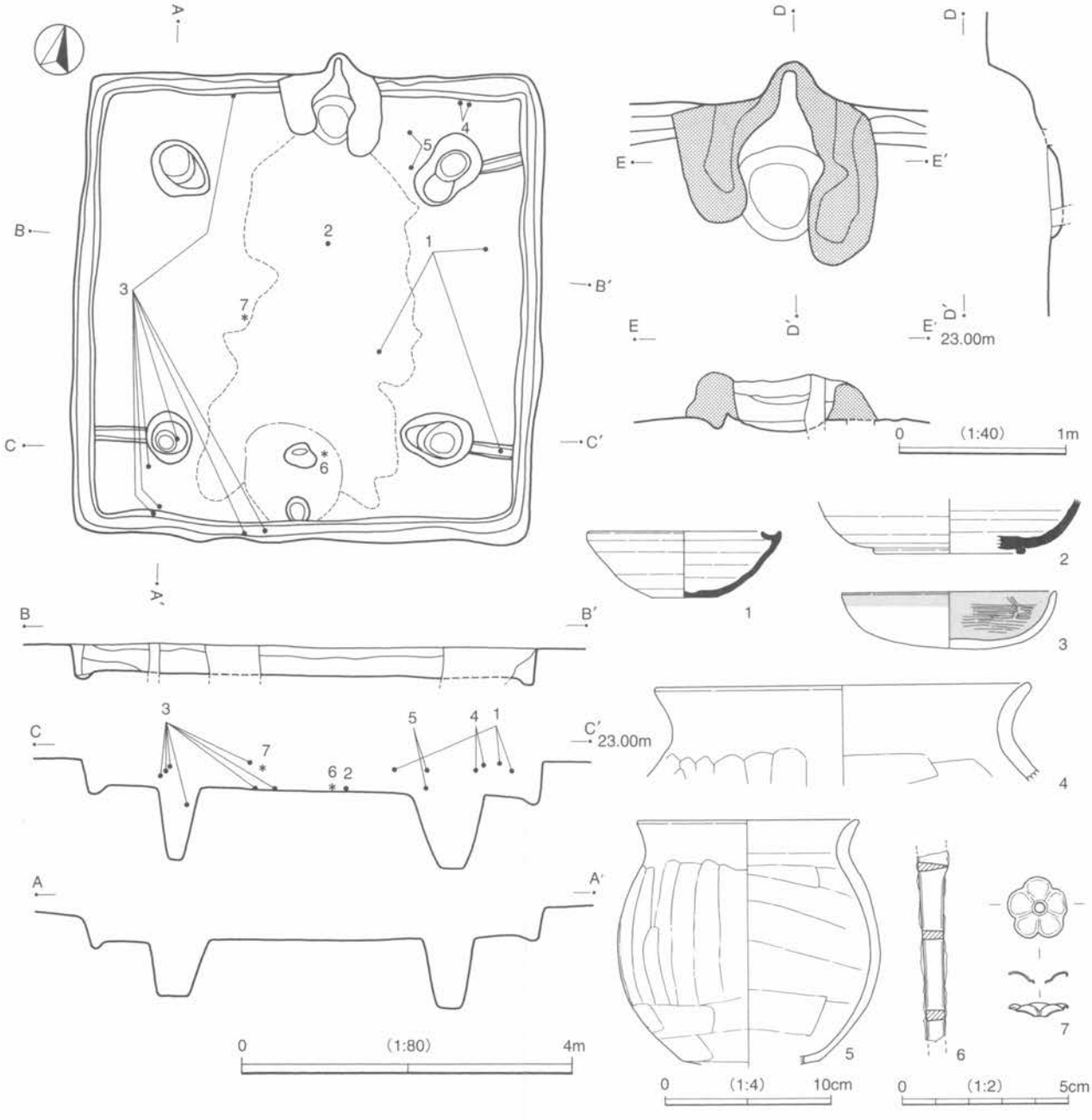
遺物は遺構全体に散在し，遺存はあまり良くない。須恵器坏Ｈ（１）は口径11.8㎝の小型品で，受け部が外側から見えなくなっており，蓋と身が逆転する時期のものである。須恵器高台付坏Ｂ（２）は底径の割に高台が小さく，底部の立ち上がりにかなり丸みをもつ。坏Ｂとしては古いとされる形態で，後期後半の比較的新相を示す。土師器坏ＡⅡ（３）は内面を黒色処理したものである。茄子形の小型甕（５）の形態には，同時期の奈良県飛鳥地方における甕の影響がうかがえる。土師器甕Ａ（４）や須恵器坏Ｈと同じ高さで出土している。

ほかに，出入口部付近にある浅い小ピット脇の床面から片刃箭式長頸鏃が１点（６），中央付近の覆土中から銅製花形座金具（７）が１点出土している。銅製花形座金具は径は17.34㎜～18.35㎜と小さく，５枚の花弁が立体的に作り出され，中心に径3.2㎜～3.3㎜の円孔が開いている。小箱のような小型製品に付けられていたものであろう。

SI-045（第151図，図版25・117）

台地東部に位置する竪穴住居跡である。SI-039から12ｍ南東に離れている。南隅を平安時代のSI-046に切られる。また，谷頭に位置するため，土砂の流出によって，谷側の壁高はわずか３㎝～４㎝しか残存していない。周辺に他時期のピットが散在し，遺存状態は良くない。主軸は北西にとる。北西辺中央にカマドをもつ。カマド西脇でのみ壁溝を検出した。主柱穴は対角線上に４か所認められる。カマド前面から竪穴中央に向かって，エプロン状に床の硬化部分が広がっている。

遺物は，覆土中の西半分を中心に比較的多く出土したが，図示できるものはわずかであった。須恵器はつまみを欠失した扁平な坏Ｂ蓋（１），壺口縁部（２），甕底部（３）が各１点ずつある。後期後半の新相を示す。土師器には，大型の鉢（４）と，甕Ｄ２点（５・６）が床面でまとまって出土しており，本跡に

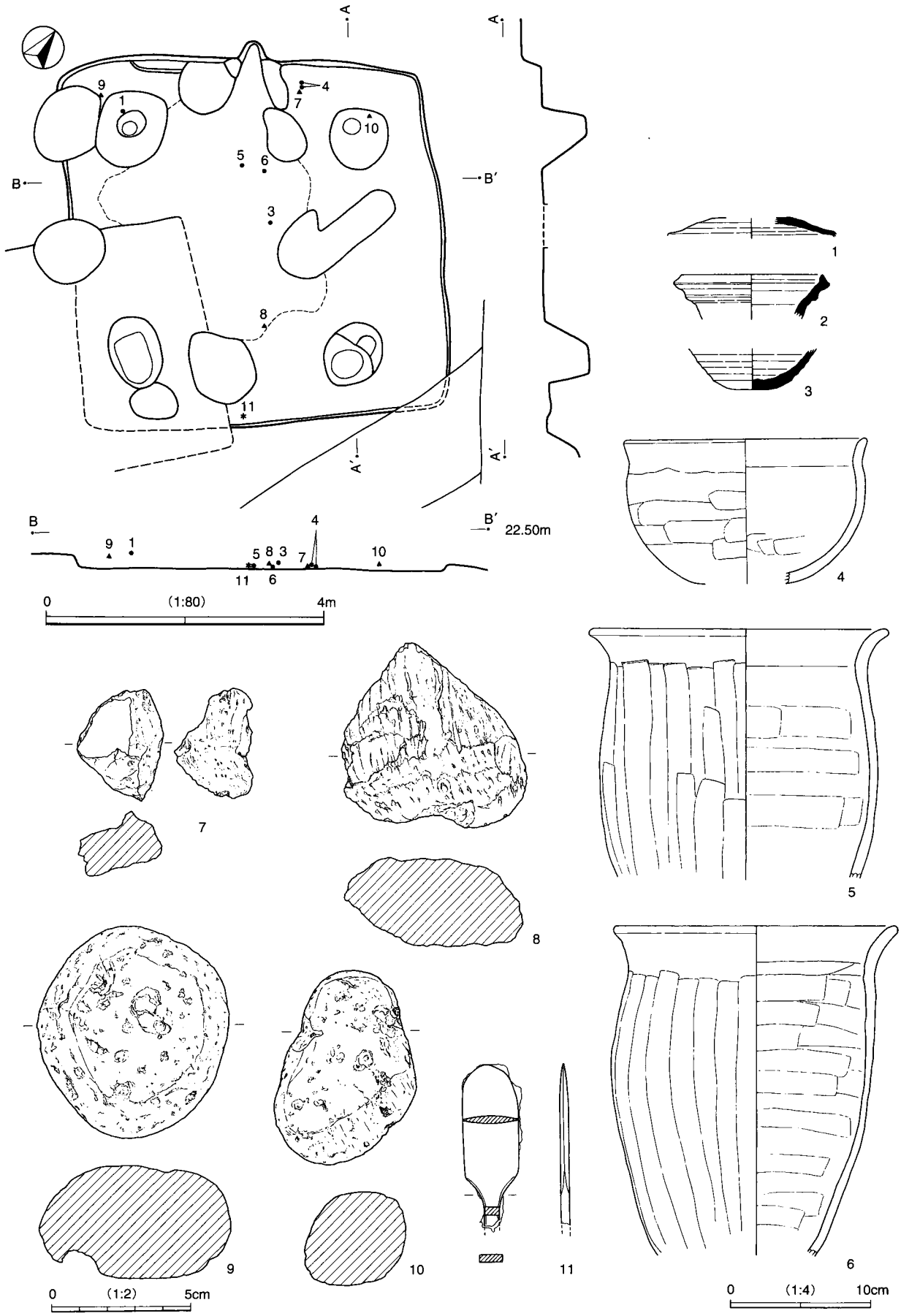


第150図　SI-039と出土遺物

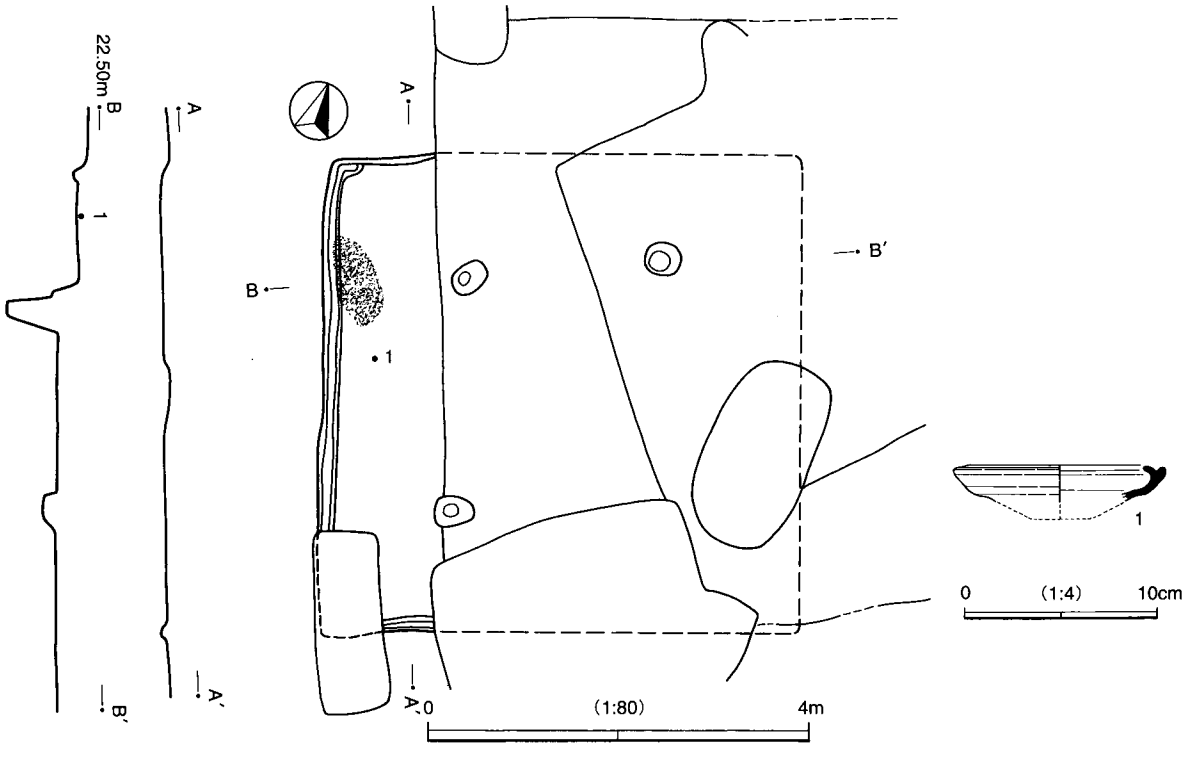
確実に伴うといえる。甕Dは奈良時代に盛行する「在地」の甕としては，口縁部屈曲がやや弱い。なお，本跡覆土からは，ほかに多量の千葉産須恵器片が出土しているが，後世に投入されたと考えられる。鉄器では剣形の広身鉄鏃（11）が1点出土している。また，軽石（7～10）が4点出土している。

SI-047（第152図，図版26）

台地東部に位置する竪穴住居跡である。SI-045の南西に隣接する。平安時代のSI-049，奈良時代のSI-050Aに東側を大きく切られ，SI-050Bとも重複するため，西側約1/4が残存するのみである。確認された壁高は7㎝～12㎝に過ぎない。西壁の中央部に砂層が検出されたので，注意深く調査をしたが，袖や火



第151図　SI-045と出土遺物



第152図　SI-047と出土遺物

床が検出されず，それがカマドであるとの確証は得られなかった。また，西壁に沿って，少量の焼土が確認されている。壁溝は西側と南側で確認されている。柱穴はSI-050Bの床下で３か所検出されている。本跡の形態と規模はこの柱穴をもとに推定し，図示した。

本跡に伴うと考えられる遺物は，砂層付近で検出された須恵器坏Ｈ１点（１）のみである。小型であり，受け部の立ち上がりがわずかに口縁より高い形態である。坏の身と蓋が逆転する時期のもので，後期後半では比較的古相を示す。

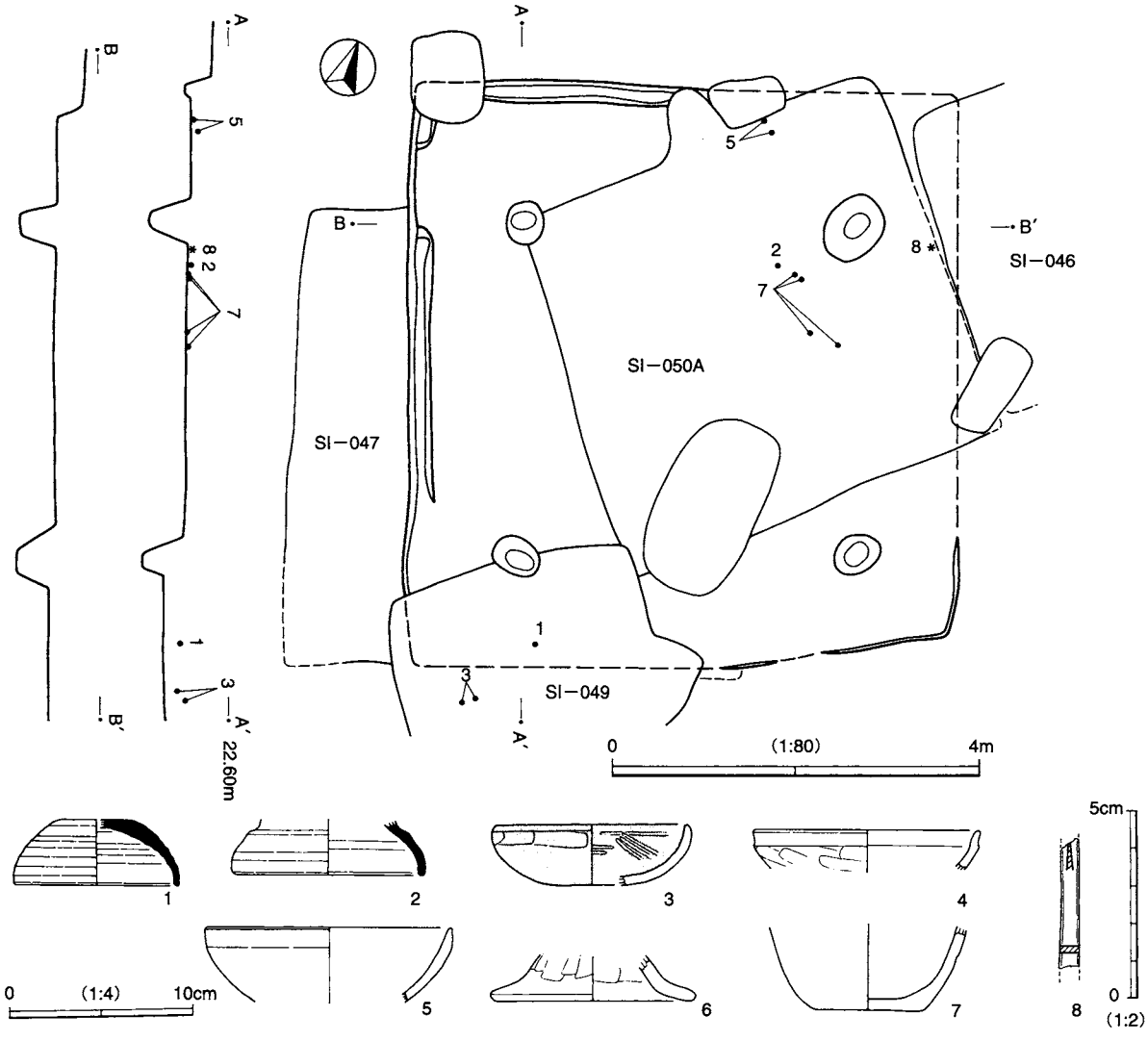
SI-050B（第153図，図版27・117）

台地東部に位置する比較的大型の竪穴住居跡である。平安時代のSI-046・SI-049，奈良時代のSI-050Aに切られ，SI-047とも重複していて，遺存状況は良くない。北東隅と南西隅では壁がほとんど残っておらず，壁の立ち上がりも明確ではない。主軸はほぼ北と推定される。西側と北側の壁に壁溝が確認されているほかは，対角線上に配置された４か所の主柱穴により，本跡の存在が認識できるに過ぎない。全体を覆うように切るSI-050Aは，床面が本住居跡より高いため遺物を分離できる。結果，床面に近い地点で出土した比較的良好な遺物は，すべて本跡に帰属すると考えられた。

北東の床面から出土したものが本跡に確実に伴う。須恵器坏Ｈ蓋Ⅰ（２），土師器坏Ｂ（４），坏ＡⅠ（５），甕Ａ（７），鉄製タガネ（８）である。後期後半の古相を示す。SI-049の床下から出土したものには，小型の須恵器坏Ｈ蓋Ⅱ（１）と，土師器坏ＡⅡ（３）がある。土師器坏（３）は内面をヘラミガキし，黒色処理が施されている。覆土からは高坏Ａの脚部（６）が出土している。

発掘調査時には，SI-047より本跡が先に掘り下げられている。SI-047の方が古い可能性はある。しか

し，SI-047の床は明らかに高い位置にあり，床面が脆弱であったために検出できなかった可能性もある。遺物の比較では本跡よりSI-047のほうが新しい。この場合，須恵器坏蓋（1）および土師器坏（3）は，平安時代住居跡のSI-049から本跡出土遺物に振り替えられたものであるから，位置関係から本跡ではなくSI-047に伴う可能性がある。以上の状況から，重複する5軒の前後関係は050B＜047＜050A＜049＜046となる可能性が高い。



第153図　SI-050Bと出土遺物

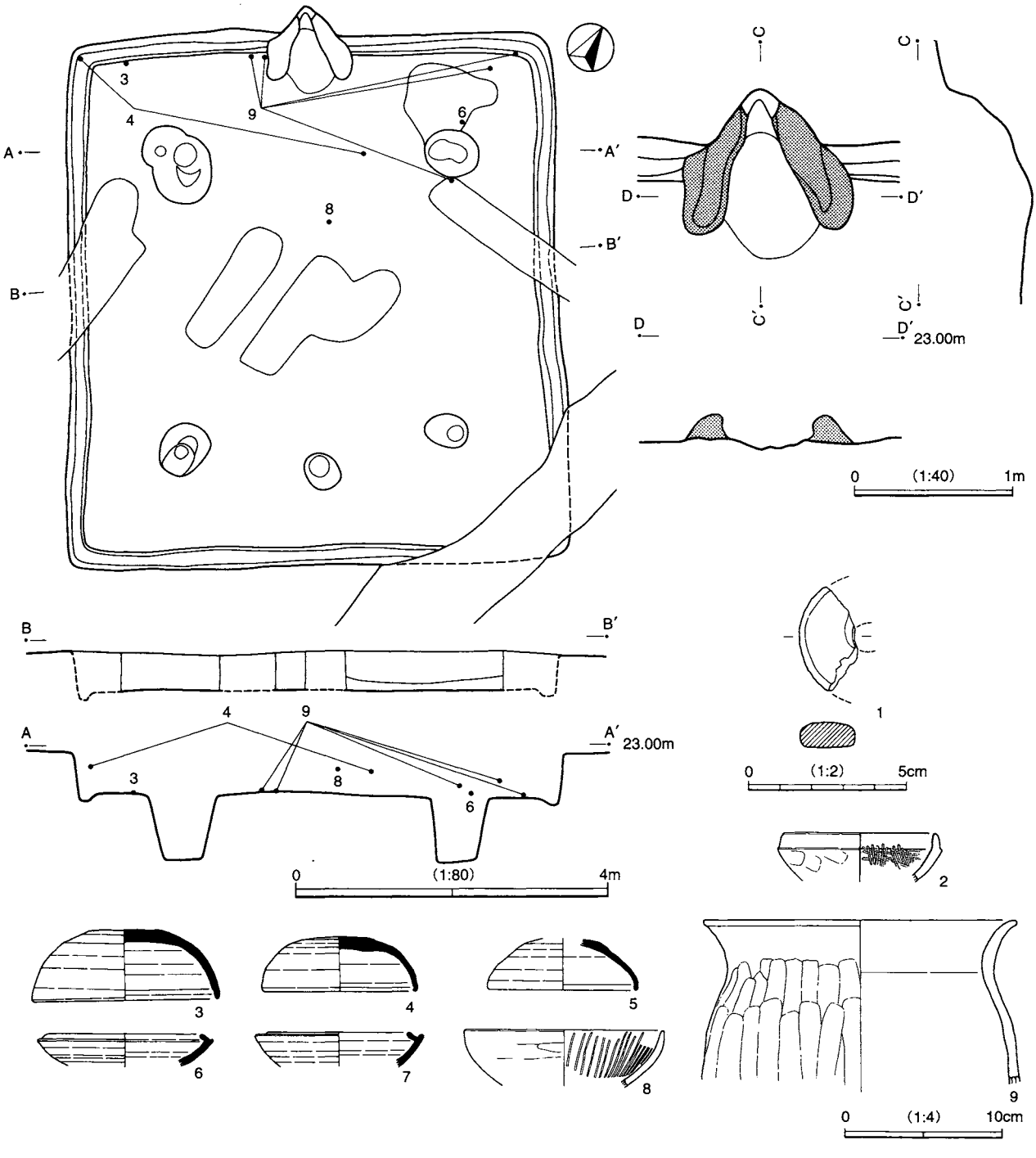
SI-052（第154図，図版29・118）

台地東部に位置する竪穴住居跡である。SI-047の3.5m北西にあたる。東の隅をSD-6が切る。主軸は北西にとる。北西辺の中央にカマドをもつ。壁溝は全周する。対角線上に4か所の主柱穴が配置されている。カマドの対面にあたる南東辺中央には小ピットが認められる。柱穴のうち，カマドに近い2基については，抜取りが行われた痕跡がある。本跡の覆土は，床のすぐ上でローム粒・焼土粒を含む暗灰褐色土が

一部に堆積していたほかは，ローム粒を霜降り状に含み，焼土粒が少量混入する単一の土層として認識されている。一気に埋戻された可能性が高い。

図化した遺物は，すべてカマド周辺の住居北側から出土している。

本跡に確実に伴うのは，甕A（9）と，一緒に北壁沿いの床面直上で出土したやや大型の須恵器坏H蓋（3）である。小型の須恵器蓋坏H（4～7）より古相を示す。土師器では，坏AI（8）がある。放射状暗文風のヘラミガキをもつ。坏B（2）は，須恵器坏身を模倣したものである。内面に黒色処理が施されている。甕A（9）と同様に，鬼高式の特徴を残している。明褐色の土製紡錘車の破片（1）は，土製



第154図　SI-052と出土遺物

としては比較的薄手である。

SI-056（第155図，図版32・33・118）

台地東部に位置する竪穴住居跡である。SI-052の４m南にあたる。主軸を北にとる。北辺にカマドを有し，対面の南辺中央に小ピットを有する。壁溝はこの小ピットの部分で途切れる。主柱穴は対角線上に４か所認められる。穴の上部がいずれも広げられているのは，柱が抜取られた痕跡と思われる。東側の２柱穴の間に，径55㎝，深さ23.5㎝のピットが認められるが，本跡に伴うかどうかについては確認できない。覆土は概ね４層に分かれ，最上層は耕作土である。以下，ローム粒・ロームブロックを含み，褐色土が斑に入る暗褐色土が２層あり，最下層はローム粒・ロームブロック・砂粒を含む黒褐色土である。人為的な堆積状況とみられる。

床面から出土した遺物としては，土師器坏ＡⅡ（７）が唯一，図示できるものであった。小型のもので，内面に黒色処理が施されている。カマドの周囲から北東隅にかけての覆土中からは，土師器が出土している。皿（６）は赤彩されているほか，極めて密な胎土を使用しており，やや大振りな造りの坏Ｂ（８）など，他の土師器とは異質な焼成である。暗文をもたないものの，近畿地方の暗文土器をかなり忠実に模倣している可能性が高い。高坏Ａ（９）は内面黒色処理が施され，地元鬼高式の流れを汲むものであるが，脚や口縁端部の造りが簡素になっている。甑（10）は内面に縦方向の粗いミガキをもつ。甕Ｄ（11）は，頸部屈曲が弱く，過渡的な様相をもつものの，胴部がより筒形に近くなった「在地」の甕である。これらは後期後半の土器群であり，本遺跡では比較的古相を示す。

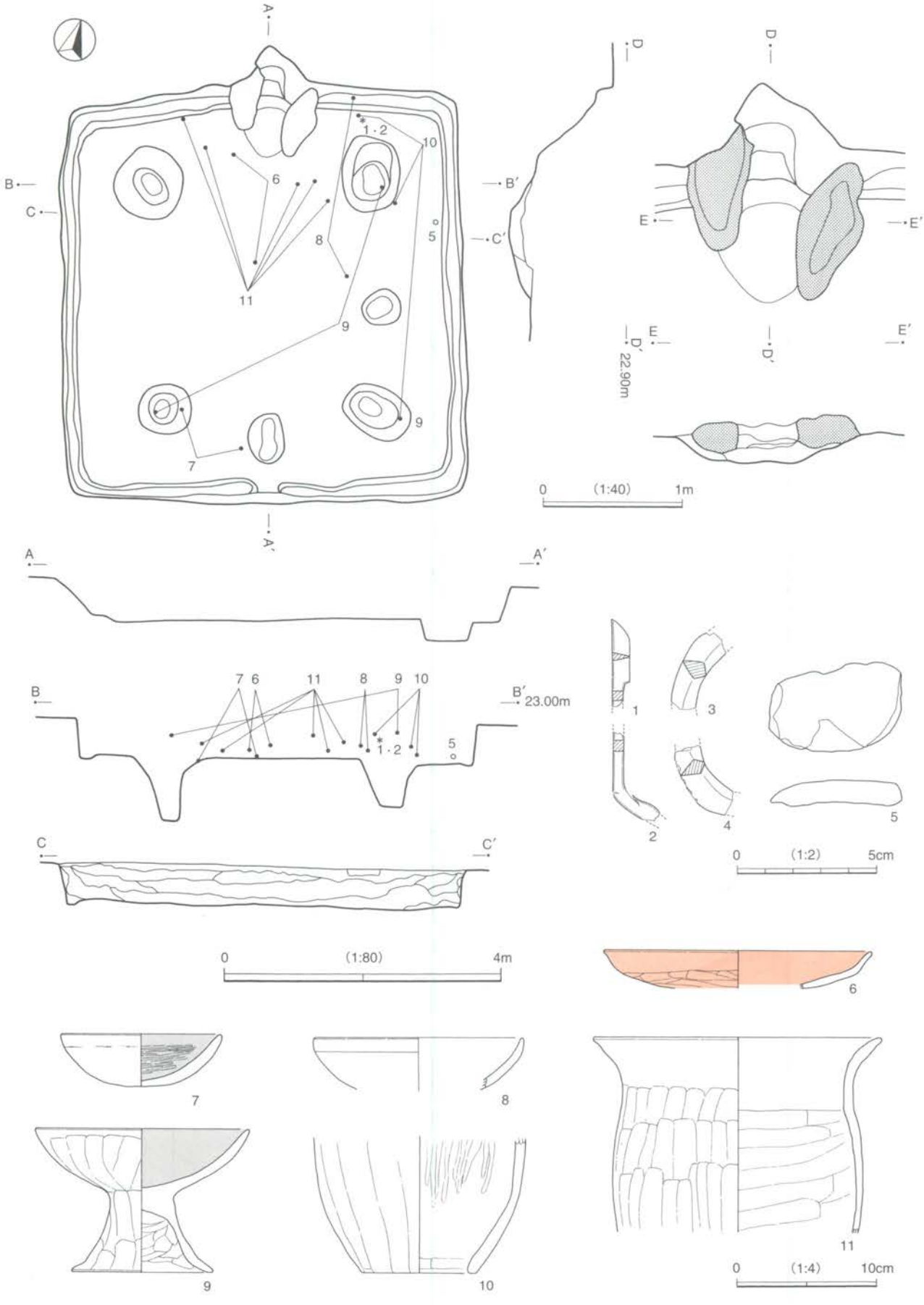
金属製品では，片刃箭式長頸鏃（１・２）と，断面菱形の環状鉄製品（３・４）が出土している。後者は覆土内遺物をまとめて採集した際に出土したもので，混入品の可能性もある。土板状に見える土器片（５）は念のため図示したが，風化の産物である可能性もある。

SI-057（第156図，図版33・118）

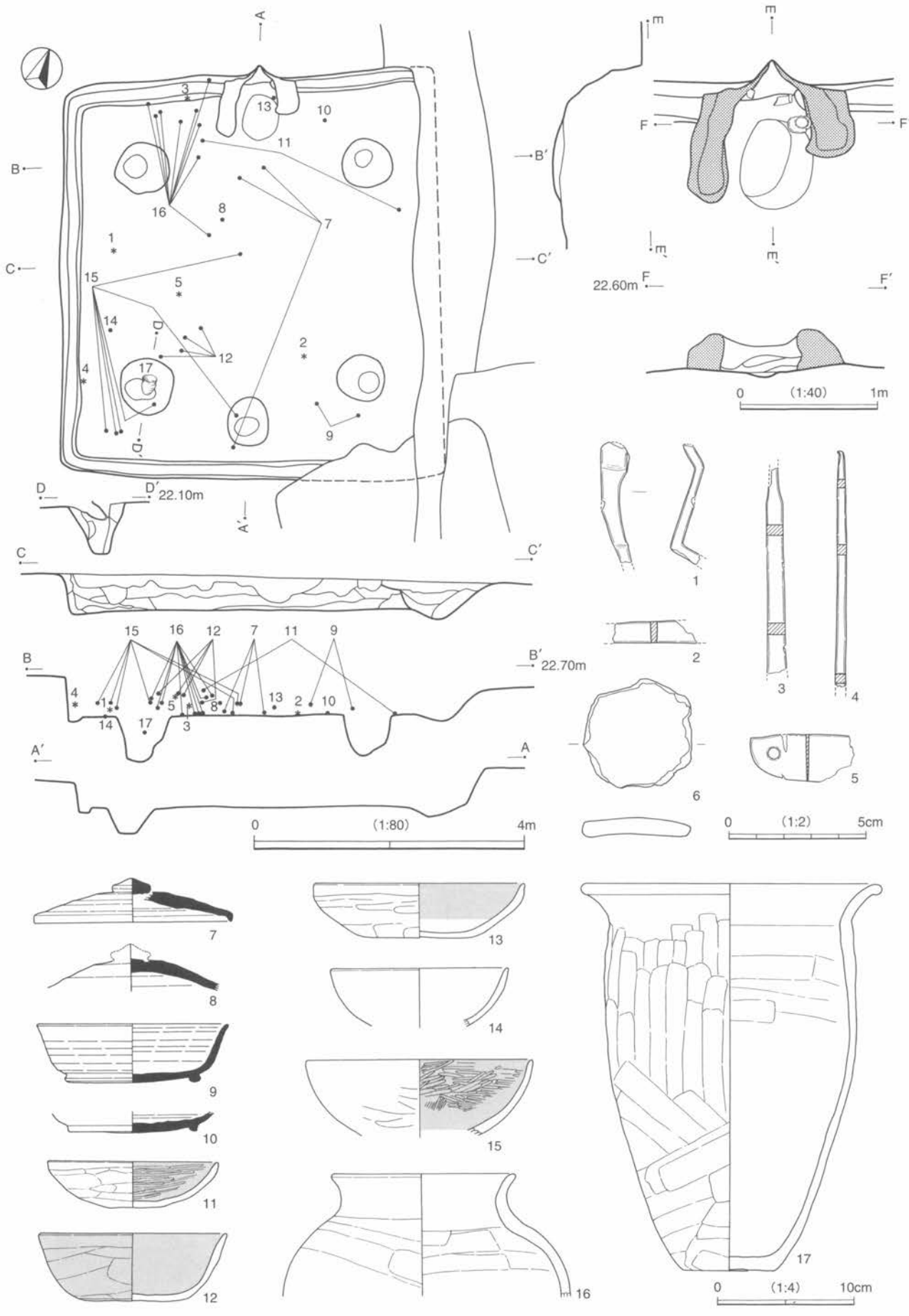
台地東部に位置する竪穴住居跡である。SI-056の南東に隣接する。主軸を北にとる。北辺にカマドが配置され，対面の南辺中央に小ピットが設けられている。東辺がSD-6に，南東隅が奈良時代のSI-058に切られている。壁溝は，残存部から推定すると，全周していたとみられる。覆土については，大きくは２層に分けられる。下の２層はローム粒・ロームブロックを含む褐色土と暗褐色土であり，埋戻しが行われた可能性があるが，その上に焼土粒・ローム粒を含む黒褐色土が堆積しているので，その後もしばらく窪んでいたと考える。上層には後世の攪乱が及んでいる。

遺物はカマド周辺と西半分に多く，図化した大半の資料はその付近から出土したものである。南西の柱穴の中からは，完形の甕（17）が１点出土している。断面から観察すると柱の抜取り痕と思われる層中に斜めに倒れた状態で出土している。左右の層は，ロームブロックを含むしまりのある層であり，動いた形跡はない。したがって，住居廃棄時に柱を抜取った後，甕を遺棄したようである。

本跡に確実に伴うのは，上記の甕（17）のほか，床面やカマドから出土した須恵器蓋坏（７・10），土師器坏（11・13・14），甕（16）である。須恵器坏ＢⅡの蓋（７・８）は，扁平な擬宝珠つまみをもち，口縁端部の立ち上がりが比較的高い。坏ＢⅡの身（９・10）は，底部が高台とほぼ同じか，あるいはわずかに下に出る形態である。これら須恵器は湖西窯産の特徴をもち，後期後半でも新相の遺物である。次に土



第155図　SI-056と出土遺物



第156図　SI-057と出土遺物

師器であるが，まず，坏ＡⅠ（14），坏ＡⅡ（11・15），坏Ｃ（13），坏Ｄ（12）がある。坏ＡⅡは大（15）と小（11）があり，内面にミガキが施され，黒色処理が施されている。坏Ｃ（13）は口縁直下に稜をもつ古い形態を有する一方，やや平底気味である。坏Ｄ（12）は遺物群中最上層から出土しているので，直接伴うものではなく，時期が下るものと考える方が妥当であろう。全面に黒色処理が施されている，深身の平底坏である。甕Ｄ（17）は，口縁部が外側に強く屈曲する長胴甕で，縦方向の列をなす粗いヘラケズリと，器面の激しい凸凹が特徴である。千葉県に成立する「在地」の甕としては典型的なものである。甕Ｂ（16）は，頸部から胴部にかけて緩やかな「Ｓ」の字を描き，比較的丸い胴部をもつ厚手の重い甕で，斜め方向の丁寧なナデにより，滑らかな器面をもつのが特徴である。もう一つの「在地」の甕である。

鉄製品は５点出土しており，刀子の茎（２），穂摘み具（５），先端部が鉤状になったヤスまたは紡錘具とみられる棒状製品（４）がある。ほかの２点（１・３）は用途を特定できないが，形状からみて小型の工具ではないかと思われる。このほか，周辺を打ち欠いた褐色の円形土師器片（６）が１点出土している。鷲谷津遺跡では検出されなかったが，大きな穿孔をもつ甕が該期に存在することから，そうした行為によって抜き取られた破片である可能性を考慮して，図示しておく。

SI-059（第157図，図版34・35）

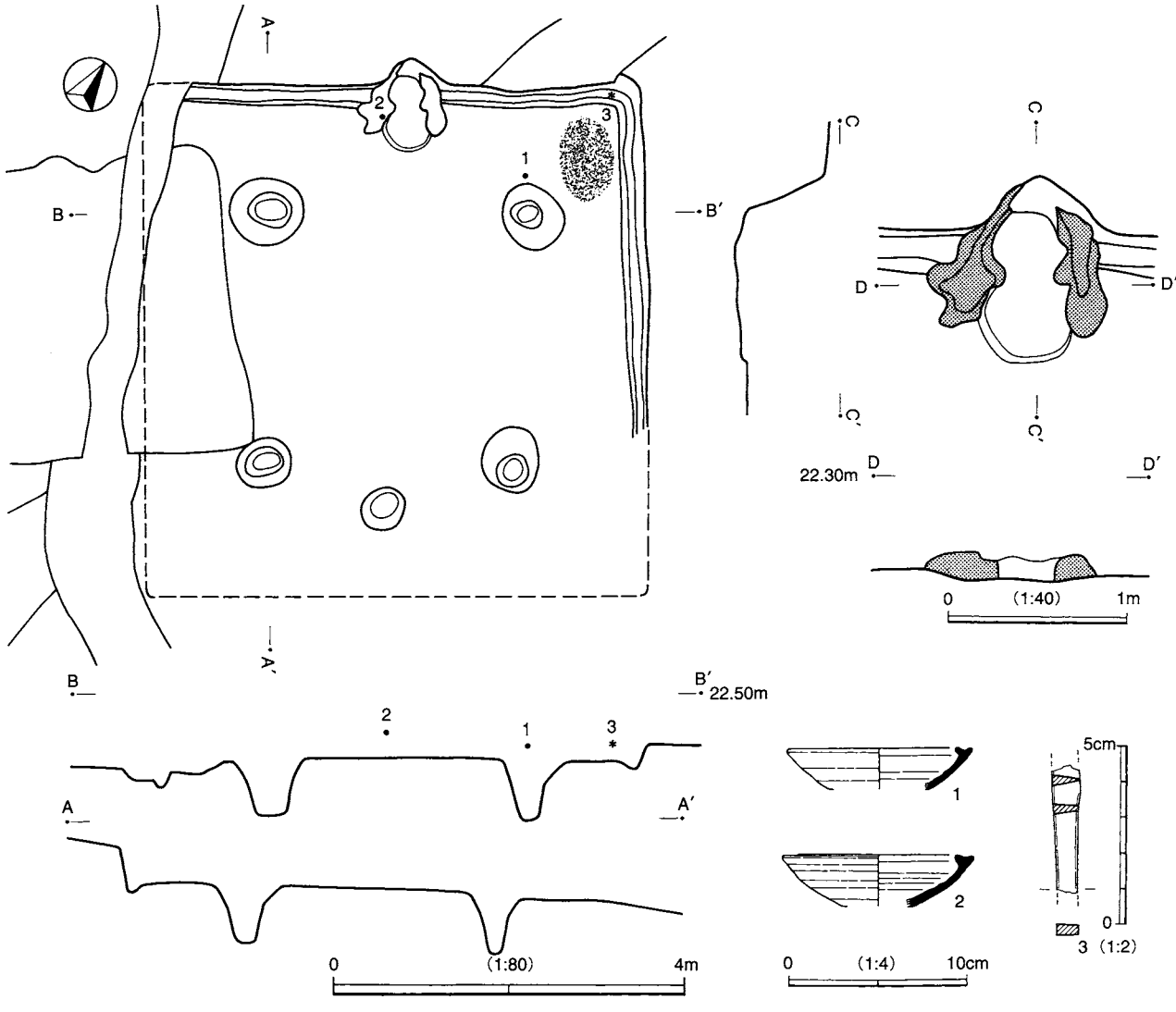
台地東部に位置する竪穴住居跡である。観音塚遺跡に面した谷の肩部に立地する。SI-057の南東隅に接するように築かれている。また西側部分は奈良時代のSI-058に切られ，SD-6とSD-9がこれを切って走っている。南東側は斜面にかかるため覆土が流失し，床面のみがわずかに残存する状況である。主軸は北からやや西に振れている。北辺にカマドが設置され，対面の南辺中央には小ピットが配される。主柱穴は対角線上に４か所配置されている。北側柱穴と壁溝の間の床面には焼土塊が検出された。遺存度のよい東辺，北辺には壁溝が確認できた。

遺物の遺存は悪く，わずかに須恵器坏２点が図化可能であったが，いずれも口縁部の1/4を残すのみである。蓋身逆転期の小型の坏Ｈ（１・２）である。後期後半の比較的古相を示す。北東隅で片刃箭長頸鏃とみられる鉄製品の破片（３）が出土している。

SI-086（第158・159図，図版44・123）

台地中央部に位置する，遺跡最大規模の竪穴住居跡である。南東隅をSI-085によって切られている。主軸は北からやや西に振っている。カマドは北辺の中央に設置されている。壁溝は全周する。対角線上４か所に主柱穴が配されているほか，壁溝内にも小ピットが存在する。カマドの対面にあたる南辺中央には，出入口施設とみられるピットがある。カマドの前面から南辺まで，主軸を中心に床面が硬化している。覆土各層に細かいロームブロックが混入しているので，廃絶時には埋戻しが行われた可能性が高い。

接合された遺物は上層出土のものが多く，それらは埋戻し時に一緒に投棄された可能性が高い。床面を含む下層遺物と上層遺物とでは，相互に接合することもなく，明瞭に区別できる。両者には形態差もみられる。下層や北東隅の床面から出土した須恵器坏ＢⅠ（11・14）は高台より下に底部が突出する形態である。これに対し，上層の坏ＢⅢ（10・13）は平らである。坏ＢⅡ（９・12）は中～上層から出土している。坏Ｇ（７・８・15）も上～中層出土であるが，下層の土器群と共伴しうるものであるから，土器の投棄には時期差があるものの，期間はあまり長くないと考える。坏Ｂ蓋には比較的突出度の高い宝珠つまみ（４）

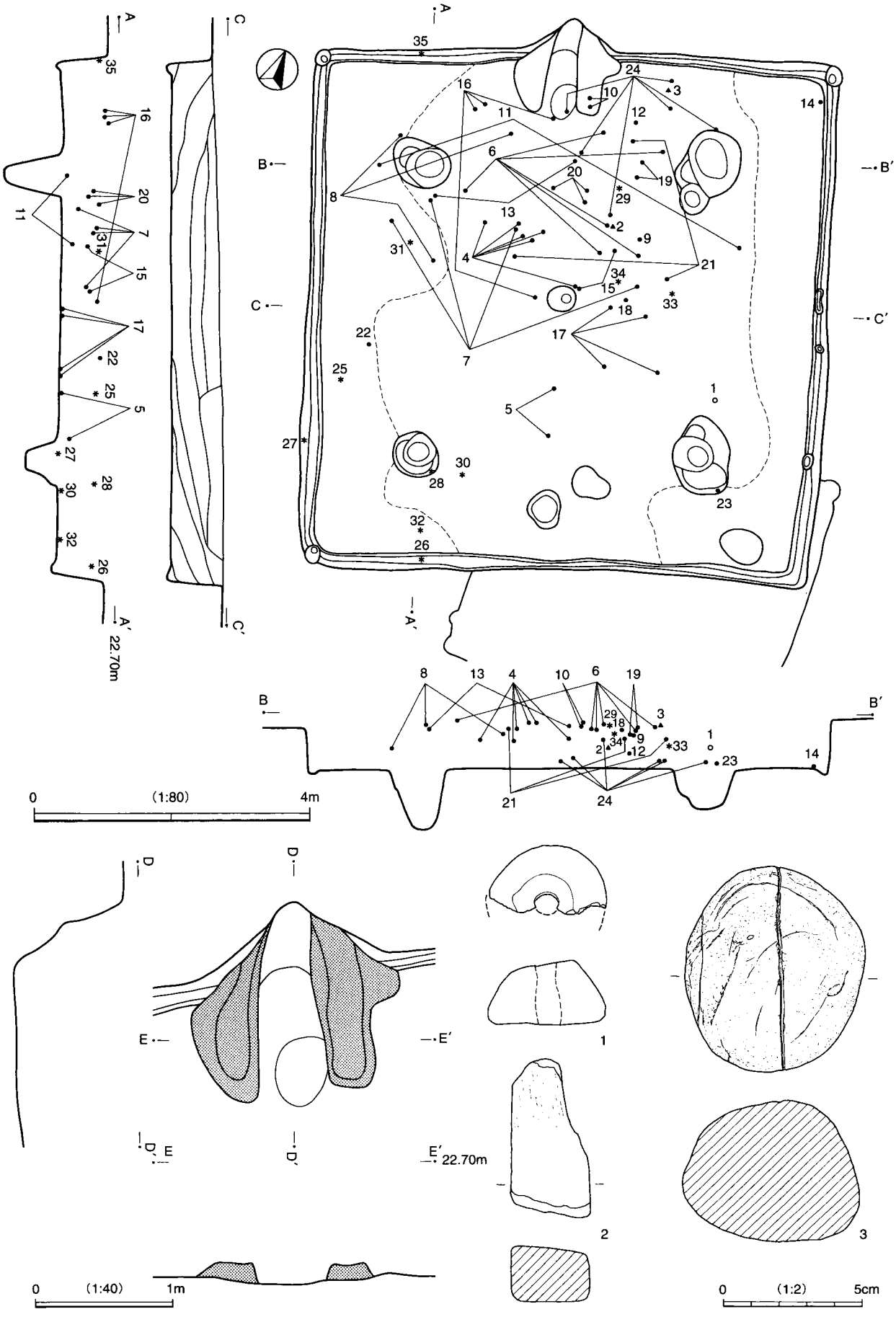


第157図　SI-059と出土遺物

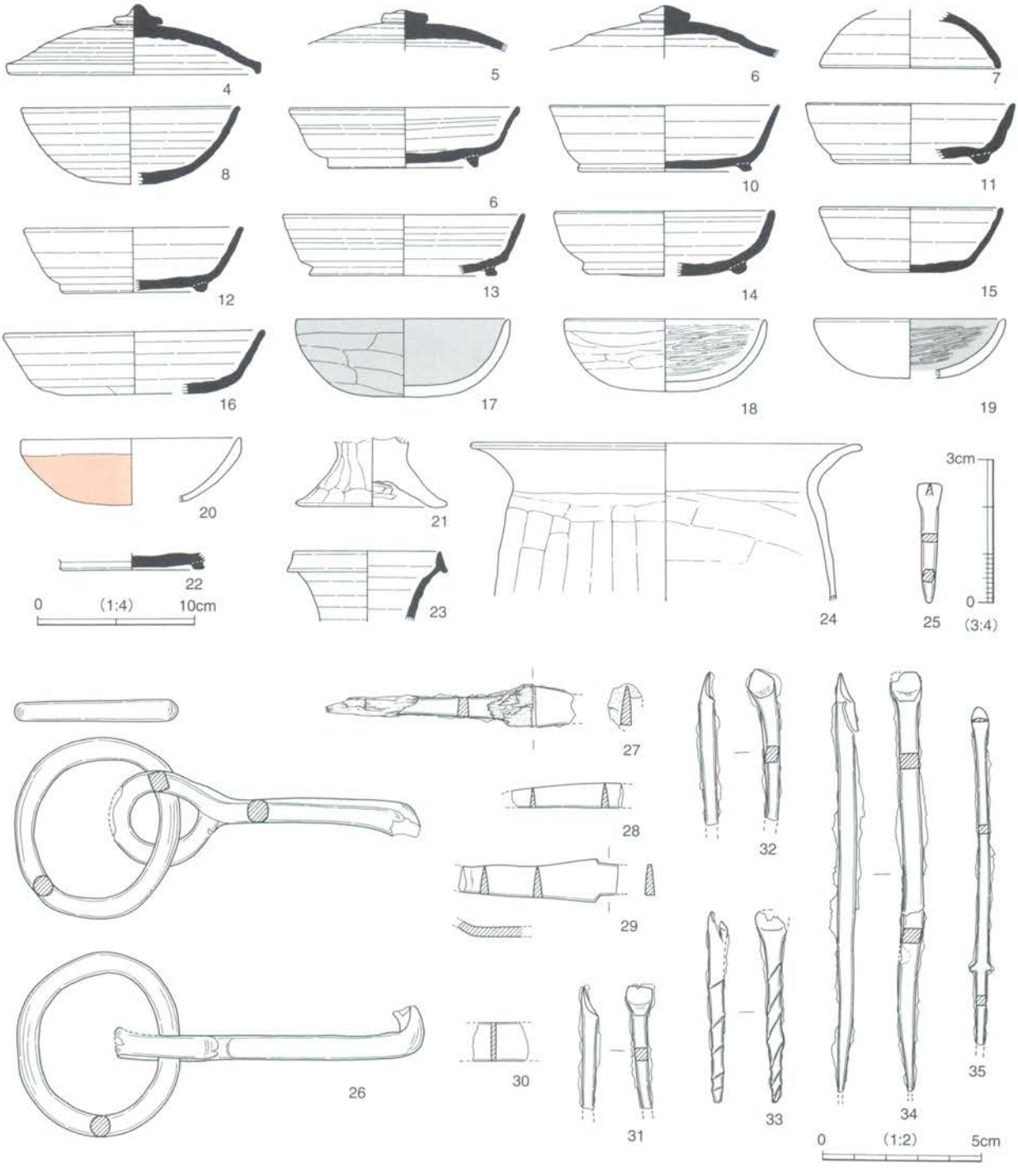
から，扁平な擬宝珠つまみ（５・６）までみられる。ほかに，下層で長頸壺口縁部片（23），上層で壺底部片（22）が出土した。これらは，東海産（湖西窯周辺）須恵器を中心として構成されていることから後期後半に位置づけたが，かなり新相を示す土器群である。

土師器坏類では，下層から土師器坏ＡⅠ（17）が出土している。黒色処理された大型の丸底坏である。上層からは，黒色処理されていない坏ＡⅡ（18），内面黒色処理されている坏ＡⅡ（19），赤彩されている坏Ｂ（20）など，色は様々であるが，いずれも深身の丸底坏が出土している。浅身の坏は伴っていない。土師器甕類では，下層から甕Ｄ（24）が出土している。頸部が強く屈曲している。上層からは台付甕の脚部（21）が出土している。ほかに，上・下両層から計11点もの暗文土器片が出土している。褐色の色調，焼成，密な胎土の使用，いずれも搬入品とみてよい。底部片内面に螺旋状の図形をもつことから，奈良時代の所産である可能性が高い。

鉄製品はまとまって出土しており，種類も多い。とくに，本遺跡で唯一の例となる，馬具（26）を出土している点が注目される。鉄製素環鏡板付轡であり，鏡板に立聞がなく，まったくの素環であるのが特徴



第158図　SI-086と出土遺物（1）



第159図　SI-086出土遺物（2）

的である。断面は円形に近く，ねじりや継ぎ目は確認できない。銜が鏡板に直接とりつき，中央連結部で欠損している。引手が接続していた痕跡はない。これらは最古型式の馬具を連想する単純な造りであるが，それと比べて環はやや楕円形をしており，大きい（最大径5.8㎝）点が異なる。むしろ，終末期古墳からの出土例がみられ，付近では当センターが調査した市原市中潤ヶ広遺跡23号墳（潤井戸天王台古墳群）に類例がある。武器類は長頸鏃（35）のみである。茎関に棘状の突起をもつ。馬具と同時期の所産とみられ

る。刀子（27～29）には，関の部分で柄の木質が良好に遺存しているもの（28）のほか，切先が欠損する前に意図的に折り曲げられて投棄されたもの（29）がみられる。多量に出土した小型の工具類（25・31～34）は，いずれも叩き潰したような刃部（31～34）をもつのが特徴的である。鑿あるいはタガネとして使用されたと考える。肉眼では，ねじりをもつようにみえるもの（33）が含まれるが，断面は四角形であり，X線写真では確認できなかった。細長い帯板状鉄製品（30）は刃部をもたず，用途が不明である。

このほか，土製紡錘車（1），砥石片（2），円礫（3）が出土した。紡錘車の孔内部は磨かれたように滑らかで，横方向の擦痕もあることから，実用品とみられる。二次焼成を受けており，そのために破損したとみられる。円礫に使用痕・加工痕等はないが、これらは人為的にもたらされたもので，土器等の廃棄行為と関連があるとみられる。

SI-088（第160・161図，図版45・46・125）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。SI-086の南3mに隣接する。平安時代のSI-087・089が東西両辺を切っている。主軸は北からやや西へ振れている。カマドを北辺の中央にもつ。壁溝は全周する。対角線上に主柱穴4か所が配置され，カマド対面の南辺中央に出入口施設とみられるピットが検出されている。このピットと東側主柱穴で囲まれた範囲の床は，踏み固められて硬化している。このほか，東辺中央に深さ42.2cmのピットが検出されている。ほかにも，明らかに後出の遺物（21・22）が床面から出土していることから，床面ぎりぎりまでの掘削を伴う別の遺構が存在したとみられる。覆土の各層には，いずれもロームブロックの混入が認められた。廃絶後に埋戻された可能性が高い。

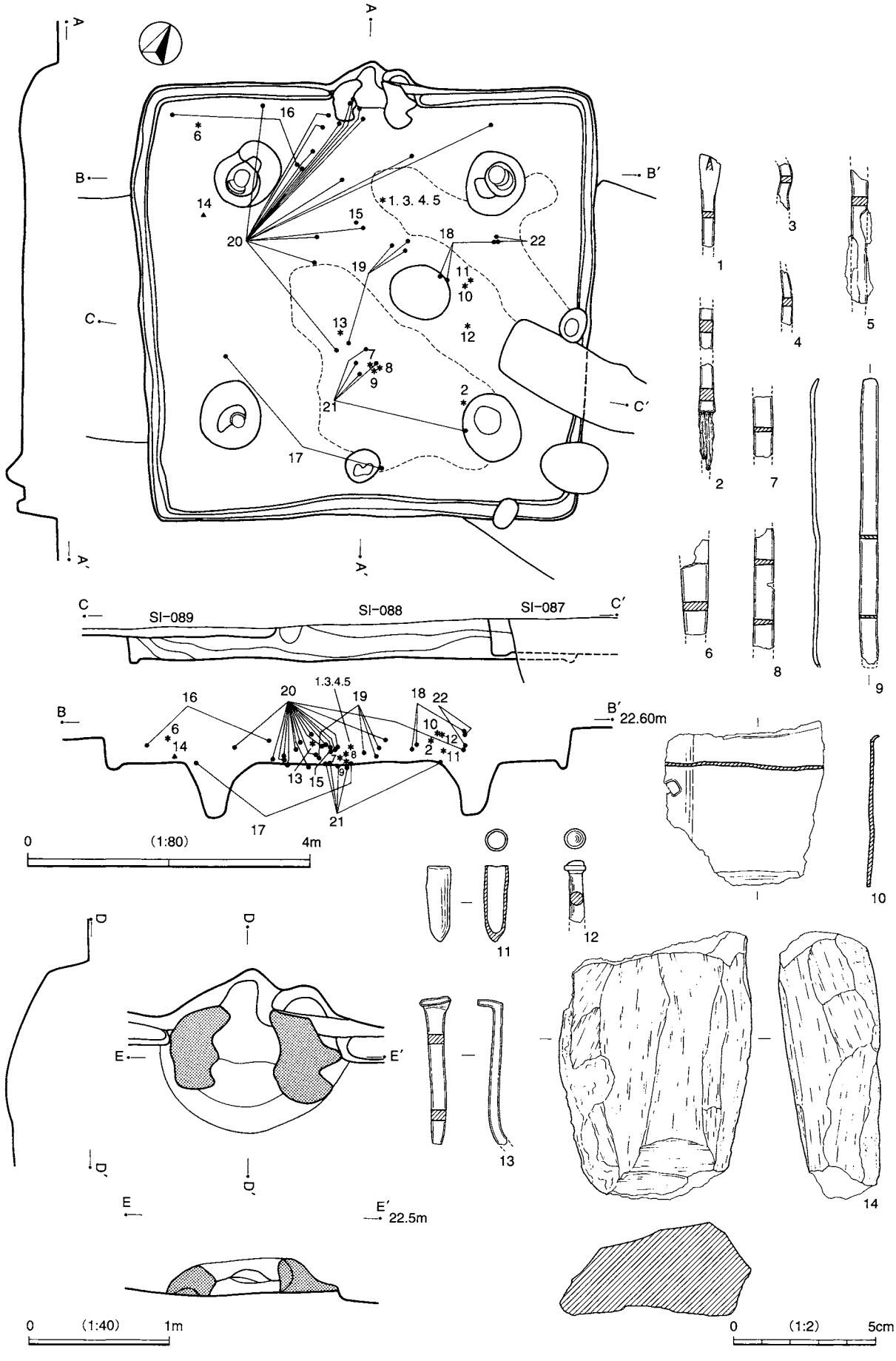
須恵器蓋坏B（15・16）の一対と，内面にミガキを施した土師器坏B（17）が本跡に伴うと考える。いずれも小片である。本跡を切るSI-087覆土中には，底部がやや突出した須恵器高台付坏Bがみられるが，本跡から混入したと考える。土師器甕D（18～20）は頸部がしっかり屈曲する類の「在地」の甕である。

鉄製品の出土量は比較的多い。しかし，いずれも断片的であり，用途不明なものが大半を占める。それらのうち，出土位置の明らかなものをおもに図示した。鉄鏃では，鑿箭式長頸鏃（1）と四面関の茎（2）がある。接合はせず，別個体とみられる。工具類では，小型工具とみられる棒状鉄製品（3～5），刀子等の茎（6），石突状の鉄製品（11），鋲頭ないし弓の両頭金具（12），釘（13）を確認できる。ほかに，方形の目釘孔をもつ薄板（10），両端に若干の反りをもつ帯板状鉄製品（7～9）がある。帯板状鉄製品は同時期のSI-086にも類例がみられるが，後出的な土器（21）と同一地点から出土しているので扱いには注意を要する。北西の柱穴付近では砥石（14）が出土した。

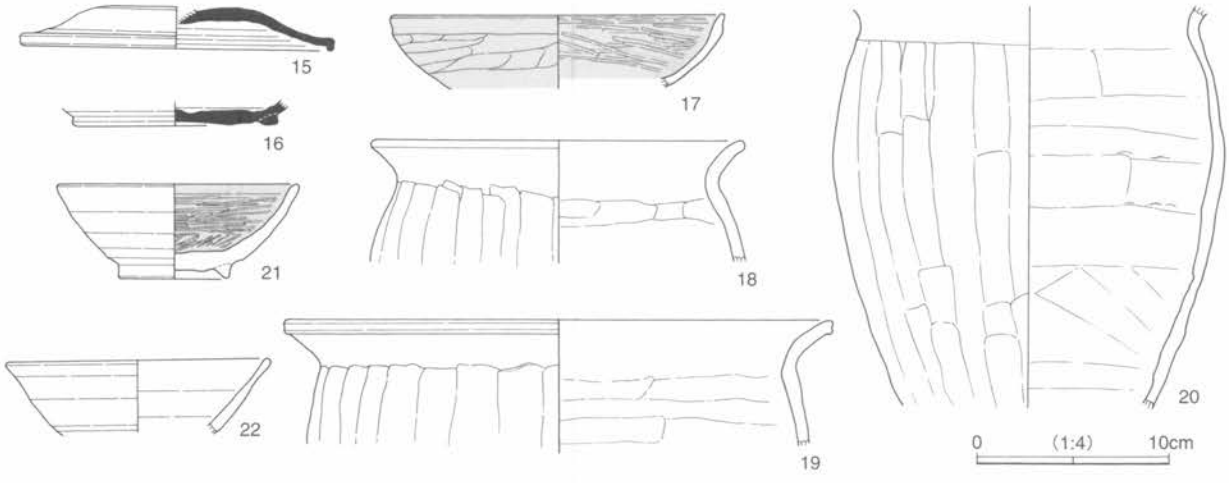
SI-090（第162図，図版46・47）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。SI-086の4m東にあたる。奈良時代のSI-084により大半を損ない，検出したのは柱穴の下部と，北辺のみである。主軸はほぼ北で，カマドを北辺中央にもつ。壁溝は全周していたと推定され，主柱穴4か所も対角線上であったと思われる。

わずかに残存した北辺部出土の遺物を図示した。須恵器坏H蓋Ⅱ（1）と，内面にミガキを施した土師器の鉢（2）がある。後期後半では比較的古相を示す。



第160図　SI-088と出土遺物（1）



第161図　SI-088出土遺物（2）

SI-091（第163図，図版47）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。SI-086の2m北に隣接する。奈良時代のSI-081構築により中央部の大半を損ない，検出されたのは南辺を除く周辺部と柱穴の下部のみである。また，北西隅は攪乱によって失われている。主軸は北と考えて図示している。北辺中央のやや内側に，焼土や白色砂質土の分布が認められたが，少量であったため，カマドの痕跡とは断定し難い状況であった。壁溝は全周していた可能性が高い。主柱穴は対角線上に4か所確認されている。本跡の覆土は，残存部で2層ないし3層に分層可能であり，各層ともロームブロックを含むことから，人為的に埋戻された可能性が高いと考えられる。

残存した遺物はわずかであったが，須恵器2点が図化可能であった。時期差があると考えられている坏H蓋Ⅰ（1）と坏B蓋（2）が共存している状況である。後期後半に位置づけられる。

SI-106（第164図）

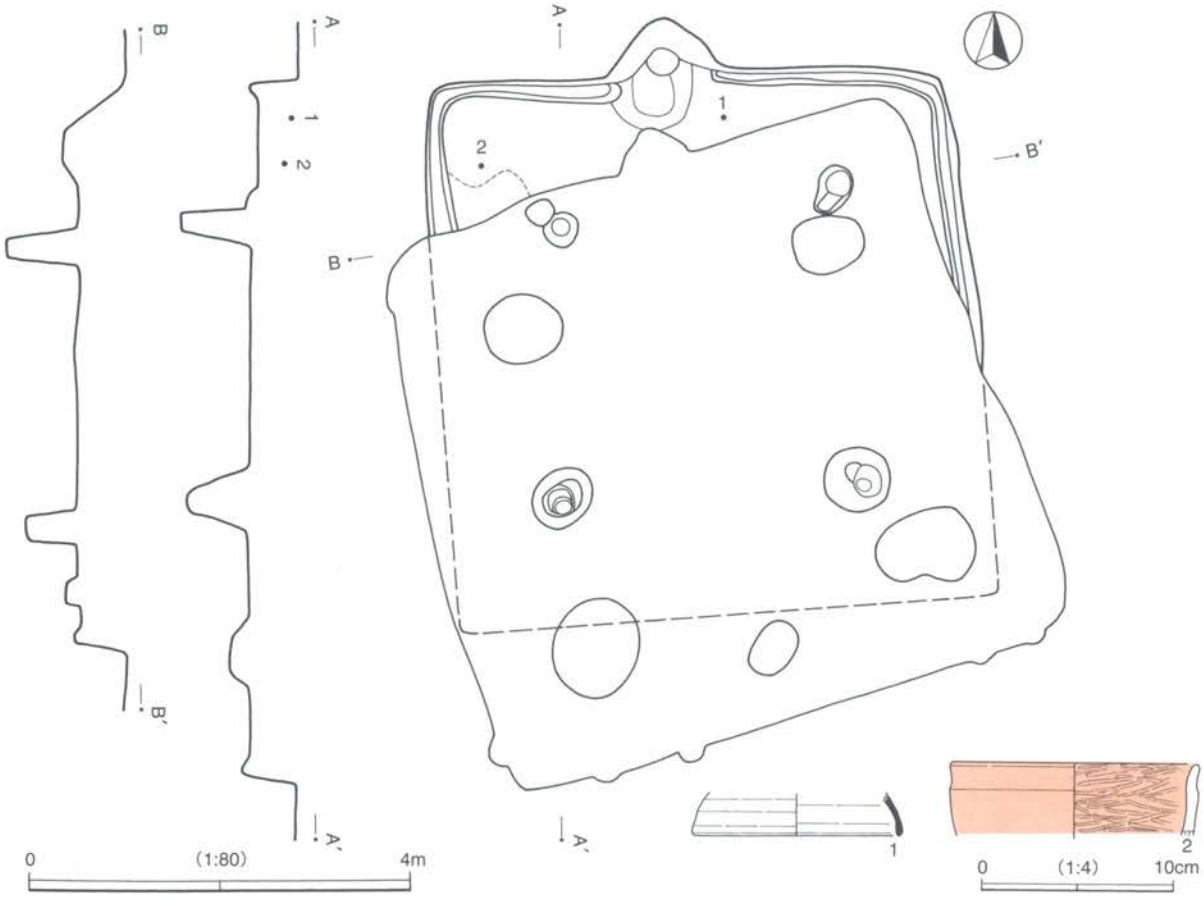
台地中央部に位置する竪穴住居跡である。SI-091の北東に隣接する。奈良時代後半のSI-098が，本跡とほぼ重なるように構築されているため，大部分が破壊され，東壁付近を残すのみである。

本跡に伴うとみられる遺物は認められず，造営時期は確定できない。SI-098との重複関係等から，それより遡る古墳時代後期後半の遺構である可能性が最も高いと考える。

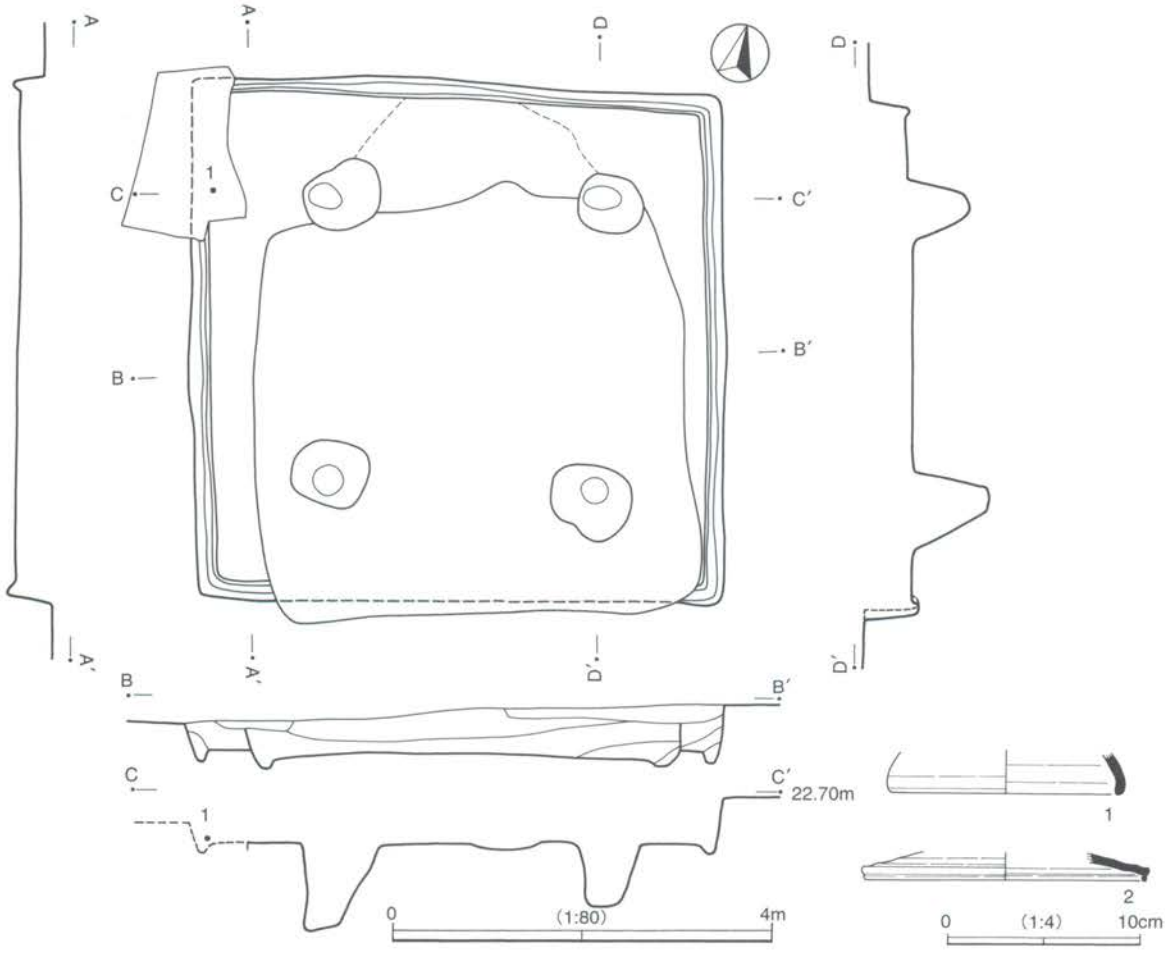
SI-107（第164図，図版54）

台地南部のやや東寄りに位置する竪穴住居跡である。奈良時代中頃のSI-010が本跡の南側を大きく切っており，西側を平安時代後期のSI-011Aが，北東隅を奈良時代末のSI-103が切っている状況である。このように，遺存状況は極めて悪いが，北西辺の中央にはカマド跡が認められ，北隅には貯蔵穴，西側には主柱穴が認められる。

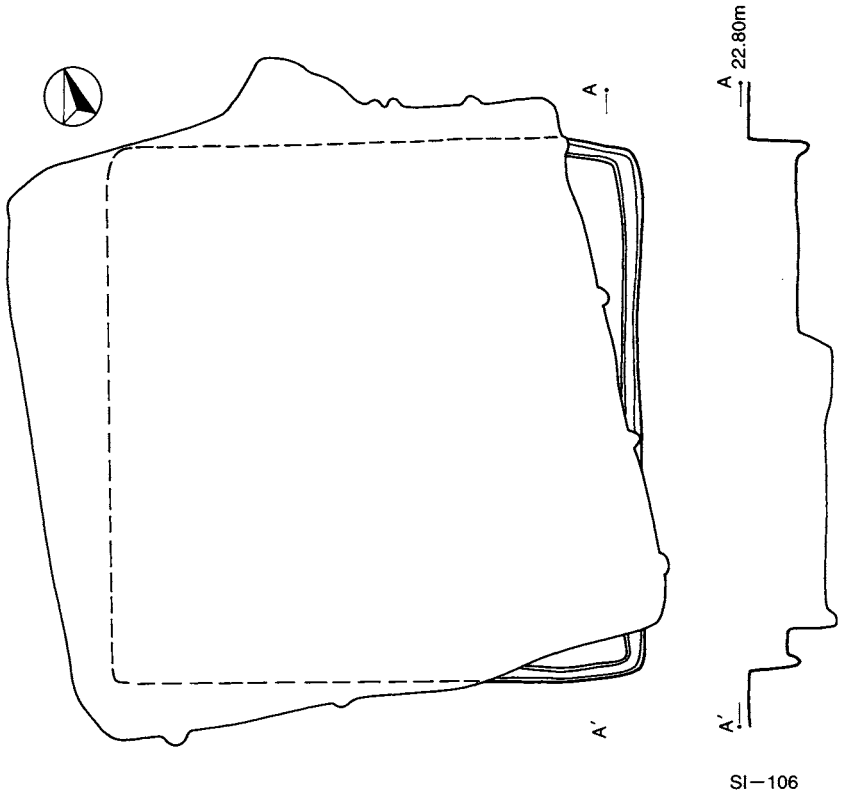
残存部から，鉄鎌ないし刀子と考えられる鉄製品の切先（1）と，土師器坏Cの口縁部片（2）が出土している。後者は半球形をした小型のものであり，古墳時代後期後半の所産と考える。

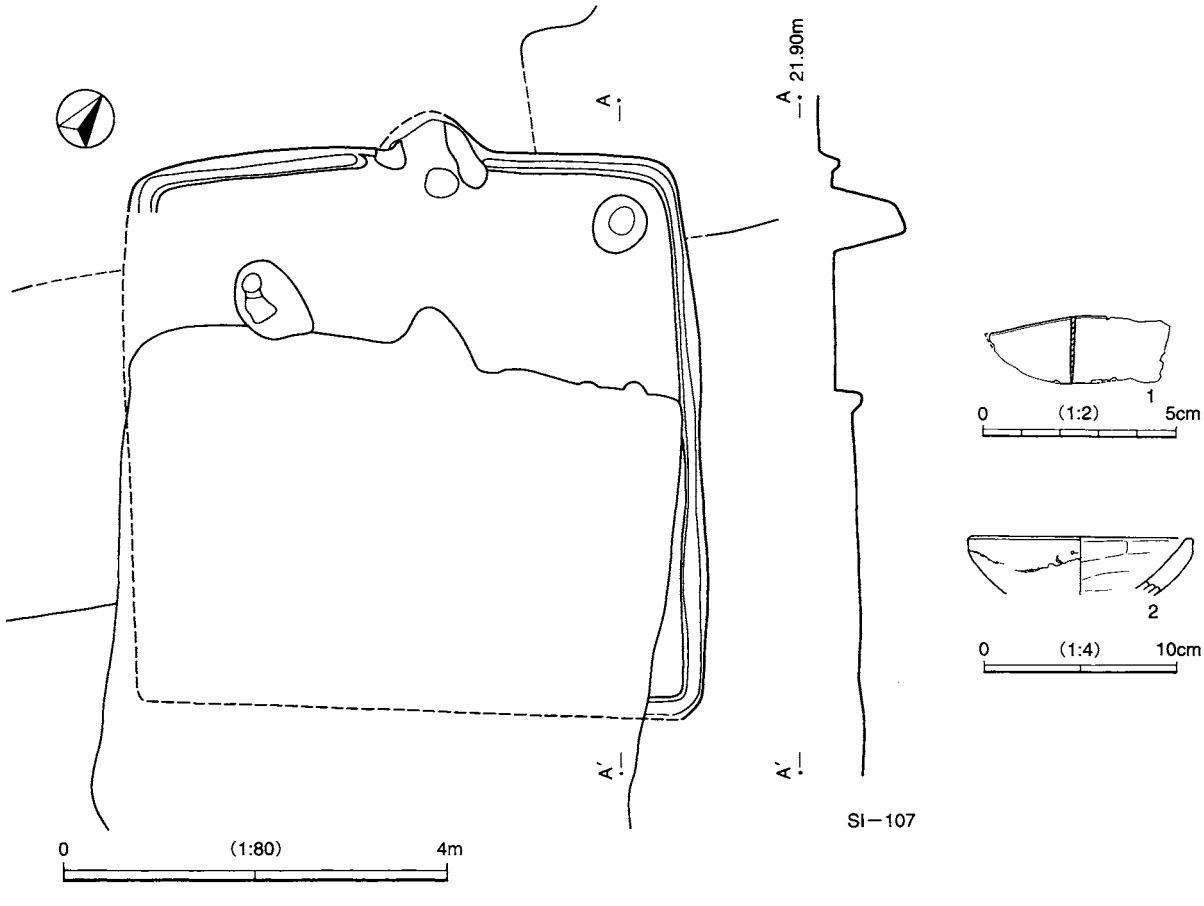


第162図　SI-090と出土遺物



第163図　SI-091と出土遺物



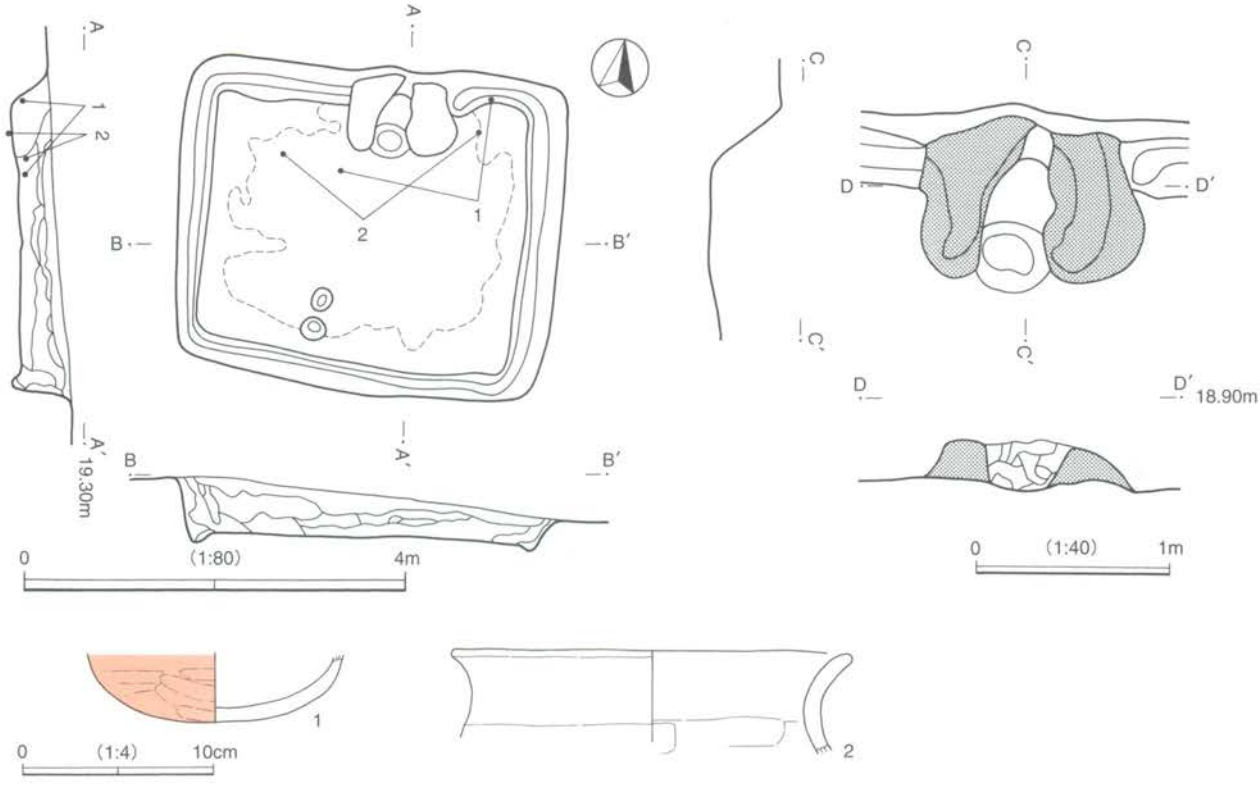


第164図　SI-106・107と出土遺物

SI-115（第165図，図版57）

台地北部に位置する比較的小型の竪穴住居跡である。平安時代のSI-114の西に隣接する。主軸は北にとる。北辺のやや東寄りにカマドをもつ。竪穴は東西にやや長い，長方形である。壁溝は全周している。南辺の西寄りに小ピットが2か所隣接して検出されているが，そのほかに柱穴は検出されていない。床面は踏み固められており，ほぼ全体に硬化面が広がっている。覆土は，北西隅から南東へ向かって土砂を投入したことを示しており，埋戻しをされた可能性がある。

図化した遺物はカマドの周辺から出土している。内面をミガキ，外面を赤彩した土師器坏A（1）と土師器甕Aの口縁部（2）がある。前者（1）は，やや深い形態をもつ古墳時代後期前半の坏と識別できず，甕口縁部の形態も前代のものと変わらない。一方，横長の竪穴形態は，本遺跡では奈良時代以降に一般化することから，本跡もあまり遡り得ない。したがって，後期後半の所産と考える。

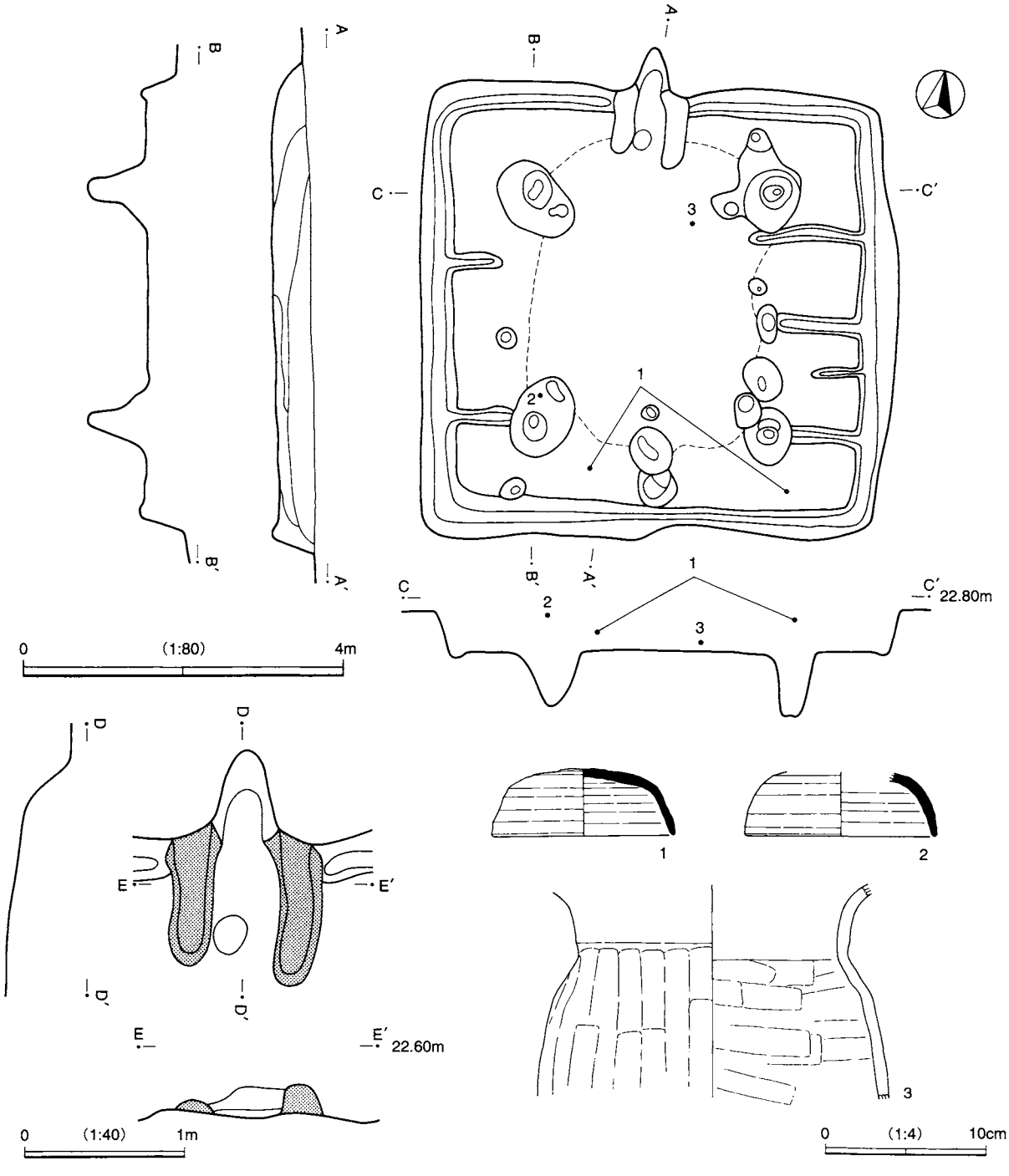


第165図　SI-115と出土遺物

SI-140（第166図，図版70・71）

台地東部の北西寄りに位置する竪穴住居跡である。SI-039の北西11mに位置する。主軸はほぼ北であり，SI-039と一致している。北辺にカマドをもつ。煙道部，袖部とも，前後に細長い構造である。主柱穴は対角線上に4か所確認されており，いずれも建て替えの痕跡が認められる。壁溝は全周し，主柱穴より外側には，西側に2条，東側に4条の間仕切溝が，左右の壁溝から直角に延びている。カマド対面にあたる南辺中央には小ピットが2基重なっている。これも建て替えが行われた可能性を示す。間仕切溝の周縁には，小振りなピットが列状に検出されている。これらは，屋内施設の補助的な柱穴と思われる。

出土した遺物は少ないが，3点を図示した。須恵器坏（1・2）はともに小片なので，蓋と身の見分けが困難である。ともに湖西窯を含む東海産とみられる灰白色の須恵器であり，口径等を考慮すると，坏H蓋とみられる。古墳時代後期後半では比較的古相を示す。土師器甕D（3）は，口縁部の屈曲が弱い過渡的な要素をもつ。

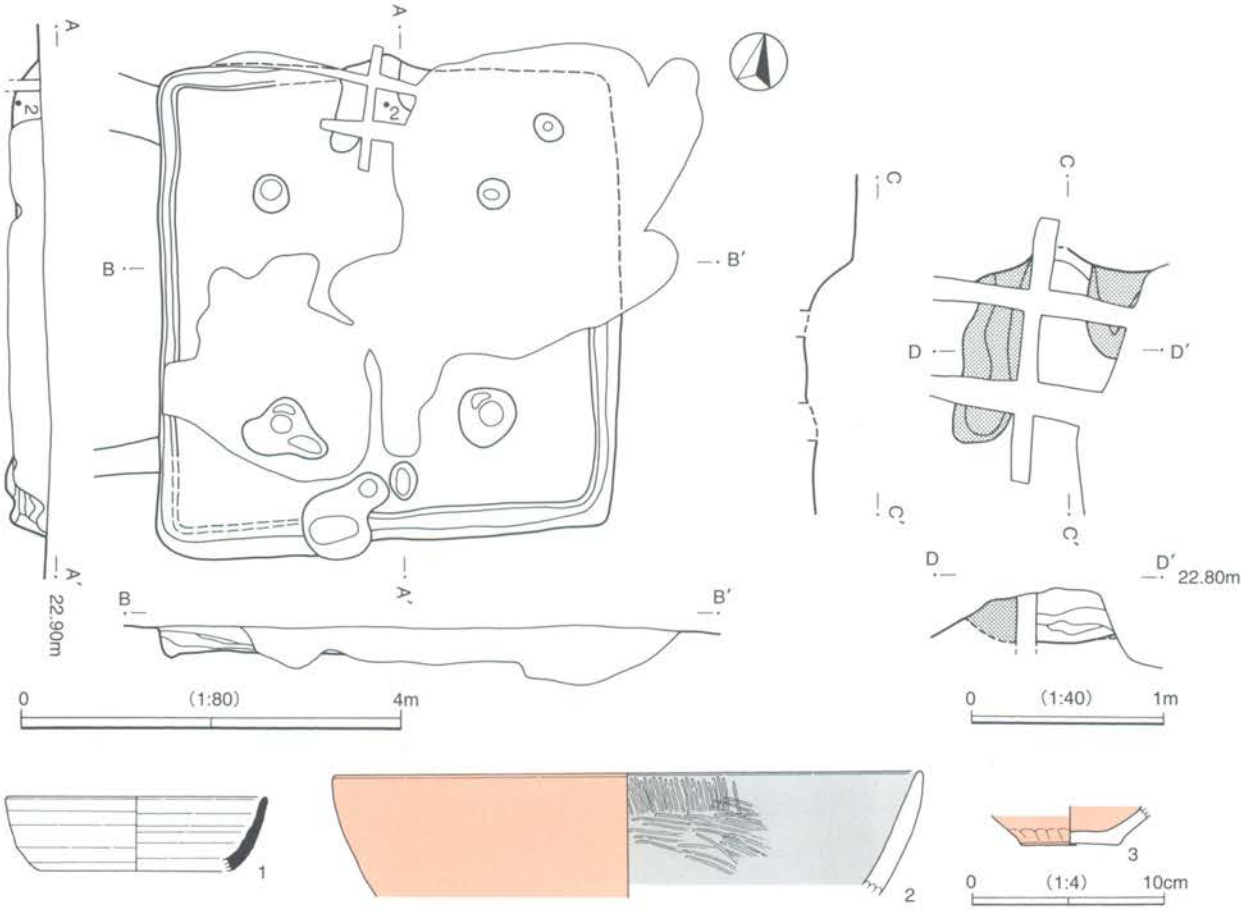


第166図　SI-140と出土遺物

SI-141（第167図，図版71）

台地東部の北西寄りに位置する竪穴住居跡である。SI-140のすぐ南に隣接する。近代の耕作により，広範囲に攪乱を受けて遺存状態は極めて悪い。主軸はほぼ北，SI-140と一致する。北辺にカマドをもつ。対角線上に主柱穴が4か所，カマド対面にあたる南辺中央に出入口施設とみられるピットがある。このピットの左脇と，竪穴北東隅にもピットが検出されたが，機能は不明である。残存部において壁溝は全周している。

須恵器坏（1）は，身と判断すると坏Bもしくは坏GIIであり，後期後半でも新相を示す。土師器坏（2）は小片で判断が難しいが，大型の坏AIIとみられる。外面が赤彩され，内面には丁寧なミガキが施されている。土師器壺（3）は内外面ともに赤彩の痕跡がある底部の破片で，さらに遡る時期（中期～後期）の遺物と考える。



第167図　SI-141と出土遺物

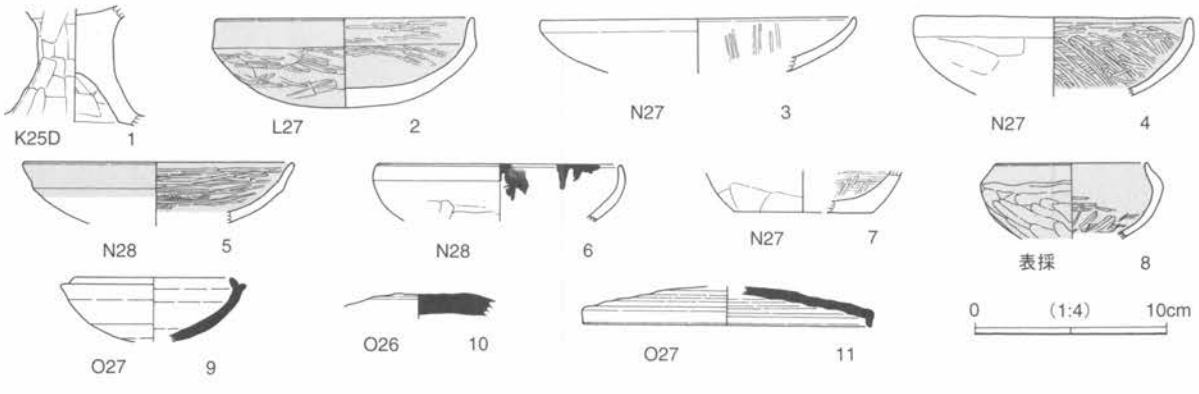
第２節　掘立柱建物跡と土坑

出土遺物から，古墳時代後期後半に遡る可能性のある掘立柱建物跡は，SX-1とSX-11の２棟である。数は少なく，立地や形態上の特徴は，奈良・平安時代の掘立柱建物跡と大きく異なる点もない。とくに後者の出土遺物は混入が疑われる。そこで，奈良・平安時代の掘立柱建物跡と一緒にこれらをまとめて詳述する（第６章第２節）。

同じく，後期前半に遡る可能性がある土坑はSK-19の１基のみ，後期後半に遡る可能性のある土坑はSK-36の１基のみである。これらも立地や形態上から，奈良・平安時代の遺構と大きく異なる特徴は抽出できない。したがって，奈良・平安時代の土坑と一緒に詳述する（第６章第３節）。

第３節　遺構外出土遺物（第168図，図版132）

遺構外から出土した該期の遺物のうち，図上復原の可能な11点を図示した。K25グリッド（鷲谷津遺跡D区）から後期初頭の土師器高坏（１）が出土しているほかは，後期後半のものである。土師器には大型の坏B（２・４・６），高坏の坏部（５），皿（３），小型の鉢（８），甕底部（７）がある。坏，高坏，鉢は，内面ミガキと内外面の黒色処理手法が特徴的である。内面に漆が付着するもの（６）も含む。内面に放射状の暗文をもつ浅い皿（３）は，後期後半の新相に位置づけられよう。須恵器は３点を図示した。小型の坏H（９）と大型の坏H蓋（10）は後期後半では比較的古相を示し，坏B蓋（11）は新相を示す。これらの出土位置は該期における集落の分布域と重なっている。



第168図　古墳時代後期後半遺構外出土遺物

第6章　奈良時代・平安時代

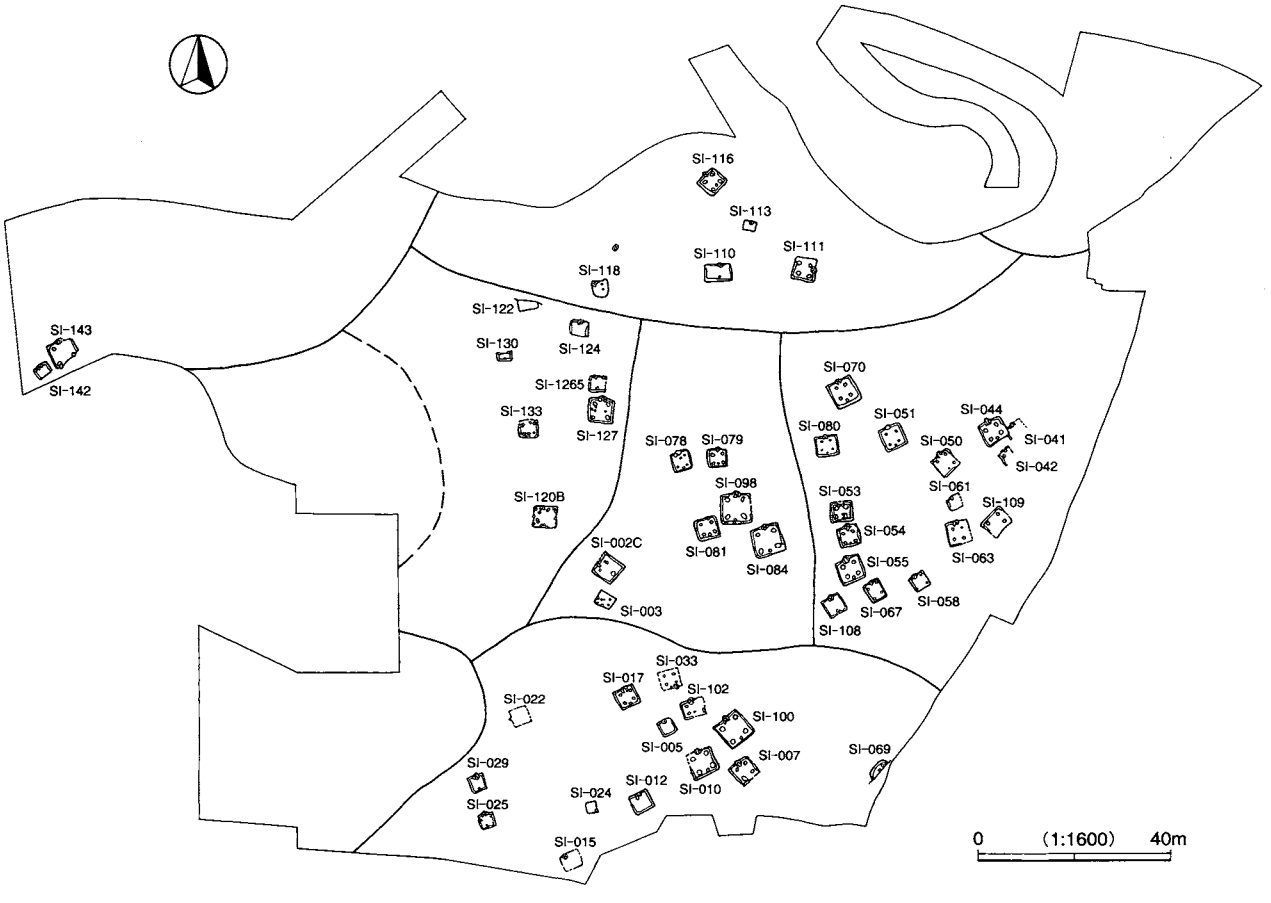
第1節　住居跡と遺物

奈良時代及び平安時代の竪穴住居跡は，古墳時代後期後半より一段と数を増す。分布は，前代をほぼ引き継ぐように，台地主要面に広く展開し，それとともに，前代にはみられなかった台地西部にも多数分布するようになる。台地北部では，SI-110に代表されるような，横長の住居跡などが営まれ，数がやや増加する。少し離れて，調査区北西隅にも分布が認められるようになる。

奈良時代には51軒あり，濃淡はあるが面的に広く分布する。最大規模のSI-098（一辺6.2m）は，前代と同様に台地中央部でみられる。また，これに匹敵する検出例は台地南部にもみられる。最小のSI-024（一辺2.3m以下）と，これら最大例との規模差は著しいものがある。

平安時代には53軒あり，広く分布する。しかし，台地中央部では南寄りに，台地西部では西寄りに偏る傾向がある。したがって，台地中央部にみられていた分布空白地が，さらに拡大しているように見える。一方，台地南部では，北東寄りに分布が移動し，集落全体としては台地主要平坦面への集約度が増している。最大規模のSI-087（一辺5.3m）は前代と同じく台地中央部にある。このすぐ南に，最小級のSI-094（一辺2.7m以下）が隣接している。前代と同じく規模差が目立つ。

なお，土器の説明に用いる記号と用語は，考察に掲げた土器分類（第9章第2節1項）に拠っている。



第169図　奈良時代竪穴住居跡配置図

土器分類は時期別になっているので，本章の１．奈良時代については，土器分類の「（３）奈良時代」を，２．平安時代については，土器分類の「（４）平安時代」を，それぞれ参照いただきたい。住居跡規模等の詳細については附表１に，土器の観察結果は附表４にまとめて報告する。

１．奈良時代

SI-002C（第170図，図版７）

台地中央部の西寄りに位置する竪穴住居跡である。南隅に平安時代のSI-002Aが重複する。北西に主軸をとり，カマドを北西辺中央に設ける。壁溝は全周する。主柱穴４か所のうち，１か所は攪乱により検出できなかったが，３か所はいずれも対角線上に設けられている。また，カマド対面にあたる南東辺中央に，出入口施設とみられるピットをもつ。全体に遺物の出土量は少なく，比較的遺存の良いものはカマド周辺に集中している。

図示した遺物のうち，箱形の土師器坏HIV（１）はロクロ製で，底部を回転糸切り後，周囲のみドーナツ状に手持ちヘラケズリ調整している。出土位置はほかの土器群と離れており，上層出土であることから直接本跡に伴うものとはいえない。奈良時代末を前後する時期の所産とみられる。一方，カマド付近で出土した土師器では，内面に丁寧なミガキをもつ坏Ａ（２），均整な造りの球形の鉢あるいは無頸壺（４），外面が滑らかな厚手の甕（６）がともに出土している。甕Ｂ（５・６）は，在来の鬼高式の特徴をもつ。これらは奈良時代よりも少し古い様相を示す。

SI-003（第171図，図版６）

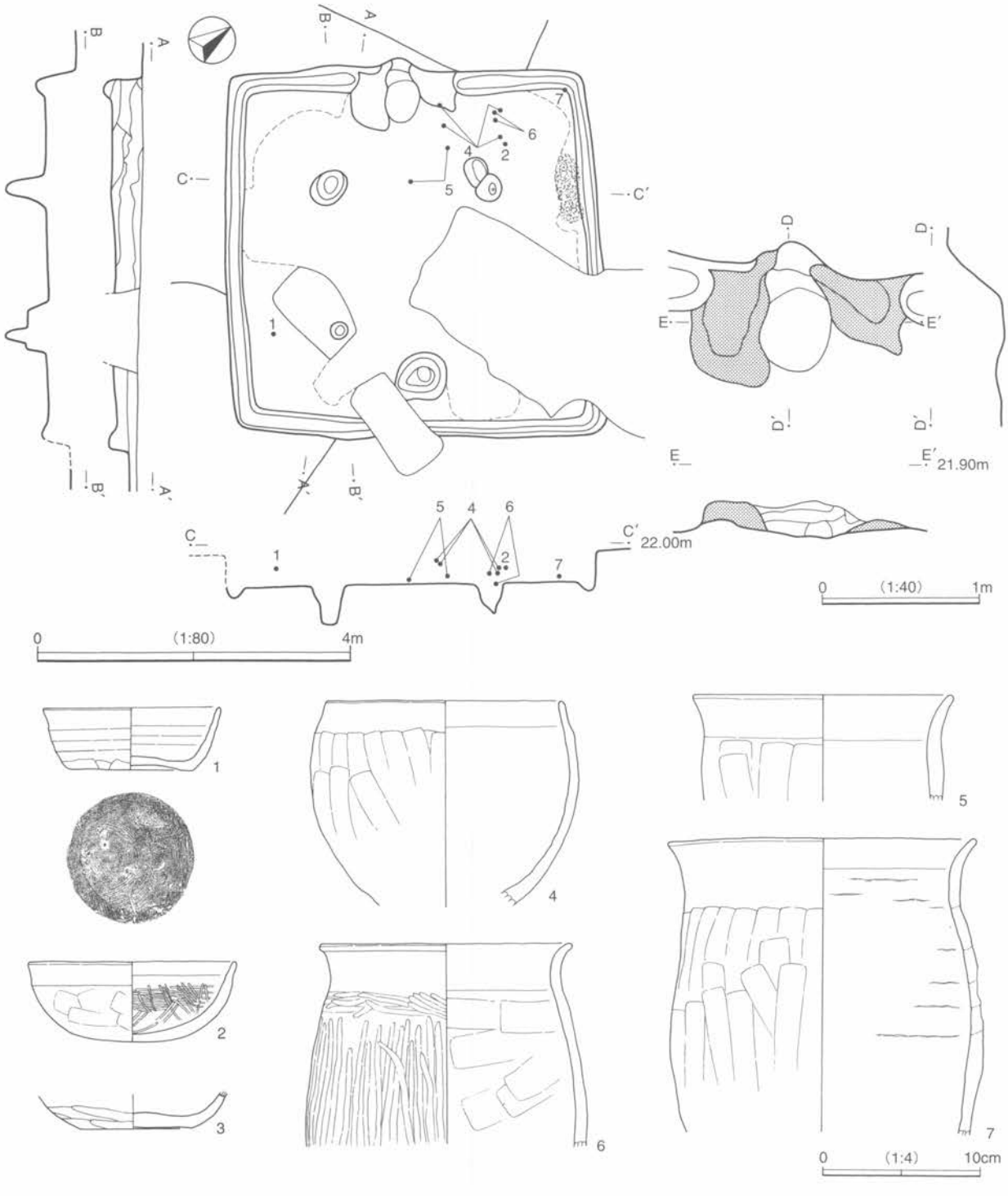
台地中央部の西寄りに位置する竪穴状の遺構である。SI-002Cの２ｍほど南に並列する。古墳時代後期後半のSI-002Bを切り，平安時代後期のSI-002Aに切られている。遺存度は甚だ悪い。該期の竪穴住居跡に比べると小型であり，形状はいびつな長方形である。深さ15㎝～20㎝の小ピットが全体に散在するが，本跡に伴う施設である確証は得られなかった。そのうち，壁を切って掘られたピットが２か所あり，とくに南西壁中央のピットは深く，床から約60㎝掘り込まれている。床面では，中央部を中心に硬化面が広がる。カマドは検出されなかった。このように，独立した住居跡としては不備な点が多く，SI-002Cに伴う施設の可能性がある。

断片的な遺物しか出土していない。須恵器坏（１・２）は回転ヘラケズリを施した比較的広い平底をもつ。甕（３）は，底径が小さく，薄手のものである。これらは奈良時代の土器群である。

SI-005（第172図，図版８・112）

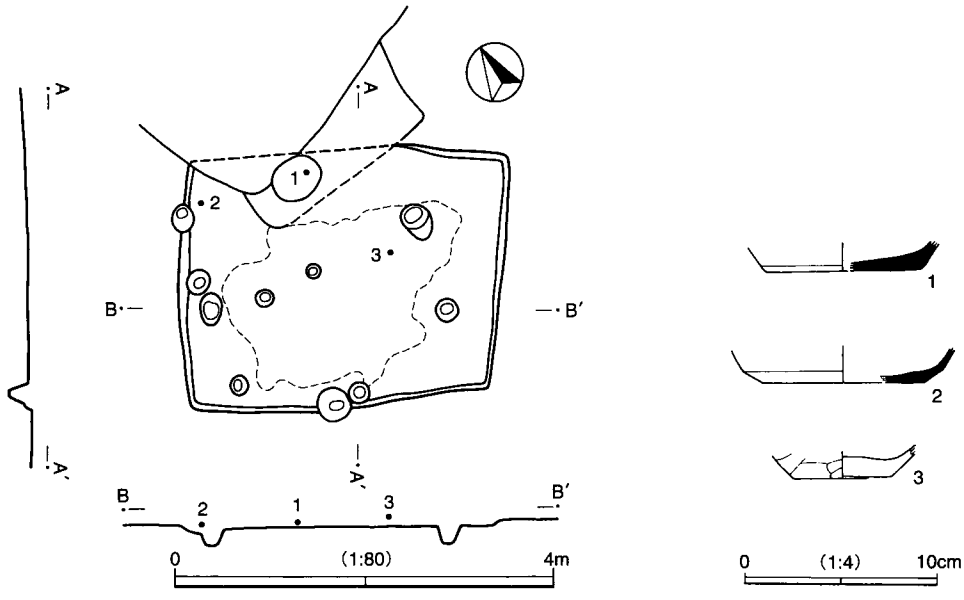
台地南部の中央付近に位置する比較的小型の竪穴住居跡である。SI-004の南東隅を切って重複する。主軸を北西にとり，カマドは北西辺中央に配置される。壁溝はSI-004との重複部分で判然としないが全周すると思われる。柱穴はなく，周縁部を除いて硬化面が広がっている。遺物はカマドを中心とした北西半分に集中する。接合資料は，覆土の流れ込み方向に沿って分布しており，住居跡廃棄の際に投入された可能性がある。とくに，甕・甑はカマド周辺で出土し，坏はカマドと対面する側の壁付近で出土している。

須恵器坏ＡⅠ（１）はやや口縁部の開く箱形で，底部周縁を手持ちヘラケズリしたものである。須恵器甕は口縁部の短く外反するもの（３）と口縁部が高く立ちあがって外反するもの（７・８）があり，いず



第170図　SI-002Cと出土遺物

れもタタキ整形であるが，前者はその後外面がヘラケズリされ，さらにナデによって整形痕がほとんど残っていない。これらの須恵器はいずれも焼成が甘く，黒褐色からにぶい黄橙色を発する。千葉市中原窯の製品である可能性が高く，奈良時代末から平安時代にかけての須恵器と考えられる。土師器坏（2）は外面をケズリで整形した平底のもので，黄橙色に焼成されている。大型の甕（4～6）のうち，武蔵型の甕A（5・6）は口縁部が「コ」の字形に変化する直前の特徴を有する。これらも，奈良時代末から平安



第171図　SI-003と出土遺物

時代にかけての土器群とみてよい。

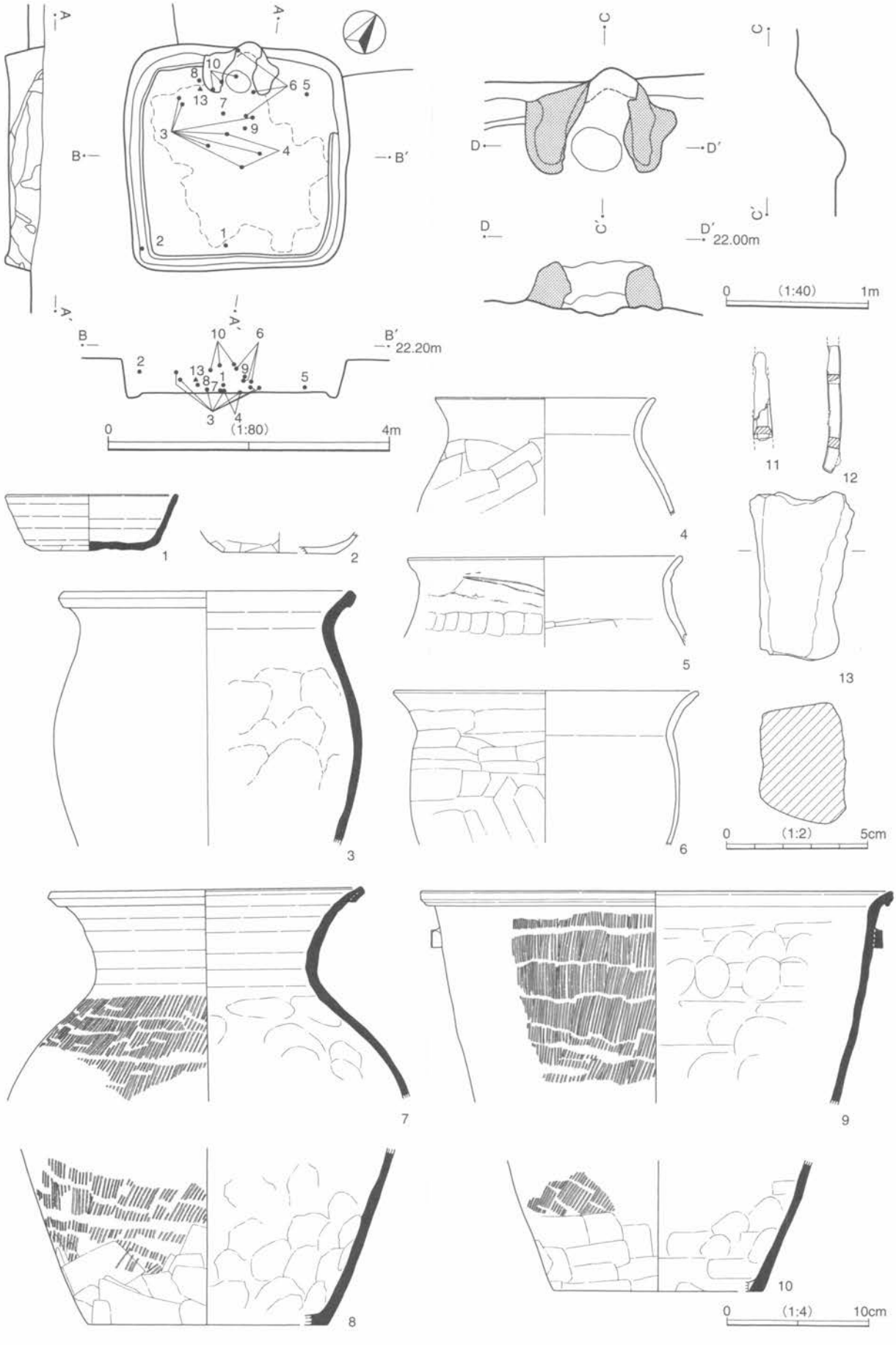
ほかに，砥石（13）はカマドの西袖脇にあり，覆土内から小型の工具とみられる棒状鉄製品が２点（11・12）出土している。

SI-007（第173図，図版９・112）

台地南部の東寄りに位置する竪穴住居跡である。主軸は北西にあり，カマドは北西辺中央に位置する。対角線上に主柱穴４か所が位置し，それぞれに柱痕が明瞭に認められた。柱穴の間の床面は，よく踏み固められて硬化している。壁溝は全周する。遺物はカマド周辺を中心に散在する。覆土は３層程度に分層できるが，中間層にローム粒を多く含み，短期間に埋戻された可能性がある。

カマドの焚口付近で刀子（19）が出土しており，切先をわずかに欠く。覆土内で砥石の破片（20）が出土した。また，図示しえなかった細片には，内面が平滑になっている須恵器甕片が含まれており，転用硯等を含んでいる可能性がある。

土器類は須恵器坏６点，土師器坏２点，須恵器甕１点，土師器甕８点，須恵器甑１点を図示した。須恵器はいずれも還元焼成された優品で，灰色から青灰色を呈する。坏ＡⅢ（５）は底部が広く，比較的浅いものである。高台付の坏ＢⅠ（３）も比較的浅めの坏部であるのが特徴的である。一方，やや深く口縁部が開き気味の坏ＡⅡ（１・２・４・６）があるが，（４）を除いて比較的上層で検出されたものである。火だすきをもつもの（１・５・６）は，市原市永田・不入窯の製品である可能性が高い。土師器では，丸底の坏Ａ（８），小型甕Ａ（９・10），武蔵型の甕Ａ（11・12・15・16），甕Ｃ（17），甕Ｂ（18）がみられる。坏（７）は覆土出土品である。甕Ｂ（18）はいわゆる「在地」の甕であるが，縦方向の強いケズリによって，やや照りが生じている。このほか，細片には畿内系暗文土器を模倣した坏Ｄがみられる。以上の土器群は，出土位置から若干の時期差を含むと考えられるが，総じて奈良時代の比較的新相を示している。



第172図　SI-005と出土遺物

SI-010（第174・175図，図版10・112）

台地南部，SI-007の３m北西に位置する竪穴住居跡である。古墳時代後期後半のSI-107を切り，平安時代のSI-011に切られている。やや西に振れた北を主軸とする。北側中央にカマドをもつ。柱穴は４か所で，北側の２か所は対角線上に，南側の２か所はやや南辺に寄って設けられている。カマド対面の南辺中央に小ピットがある。壁溝は北辺のカマド西側を除き全周する。カマドの東側では，壁溝中に小ピットが並んでいる。西側および東側の壁溝にも，ピット様のくぼみがみられる。遺物は床全体に散在しており，量はとくに多くないが，鉄製品がすべての柱穴付近で出土している点が注目される。

土器は坏類５点，皿２点，小型甕１点，甕５点を図示した。須恵器はいずれも灰色基調に還元焼成されている。ごく浅い坏AⅢ（１）と浅いAⅣ（２・３）があり，ほかに蓋の宝珠つまみ（５），高台付とみられる盤（６）がある。坏AⅣは永田・不入窯の製品である可能性が高い。須恵器坏AⅣと同じ形の土師器坏ＨＩ（４），須恵器盤と同じ形の土師器高台付盤（７）は，ともにロクロ製で，覆土中から出土した。（７）は内外面が赤彩され，（４）は明るい橙色に焼き上げられている。同じ器形であるが，ロクロ土師器と他の須恵器は色調から明らかに区別できる状態である。土師器甕類には，小型甕（８），武蔵型の甕A（10～12），「在地」の甕B（９・13）がある。以上の土器群は奈良時代の比較的新相を示している。ロクロ土師器を含む土器群としては初期のものである。

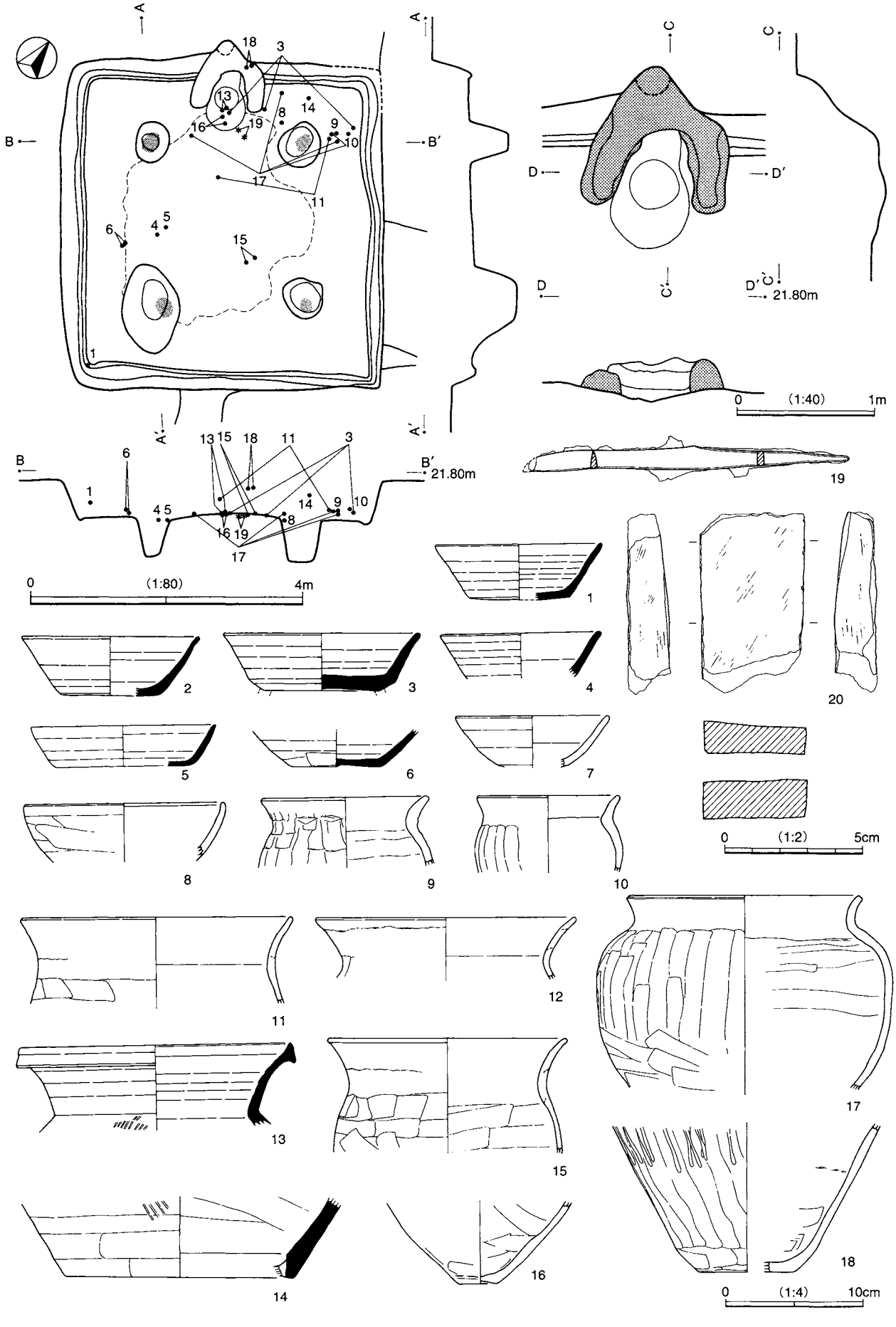
図化可能な鉄製品は11点にのぼる。北西の柱穴付近では，ヤリガンナ２点（15・18）・刀子１点（21）が出土した。また，北東では刀子２点（22・24），南東では刀子２点（19・23），出入口施設のピットでは片刃の鉄鏃１点（17），南西では鑿状の工具１点（16）が出土した。ほかに床面中央部で，釘１点（14），刀子１点（20）が出土した。

SI-012（第176図，図版10・11・113）

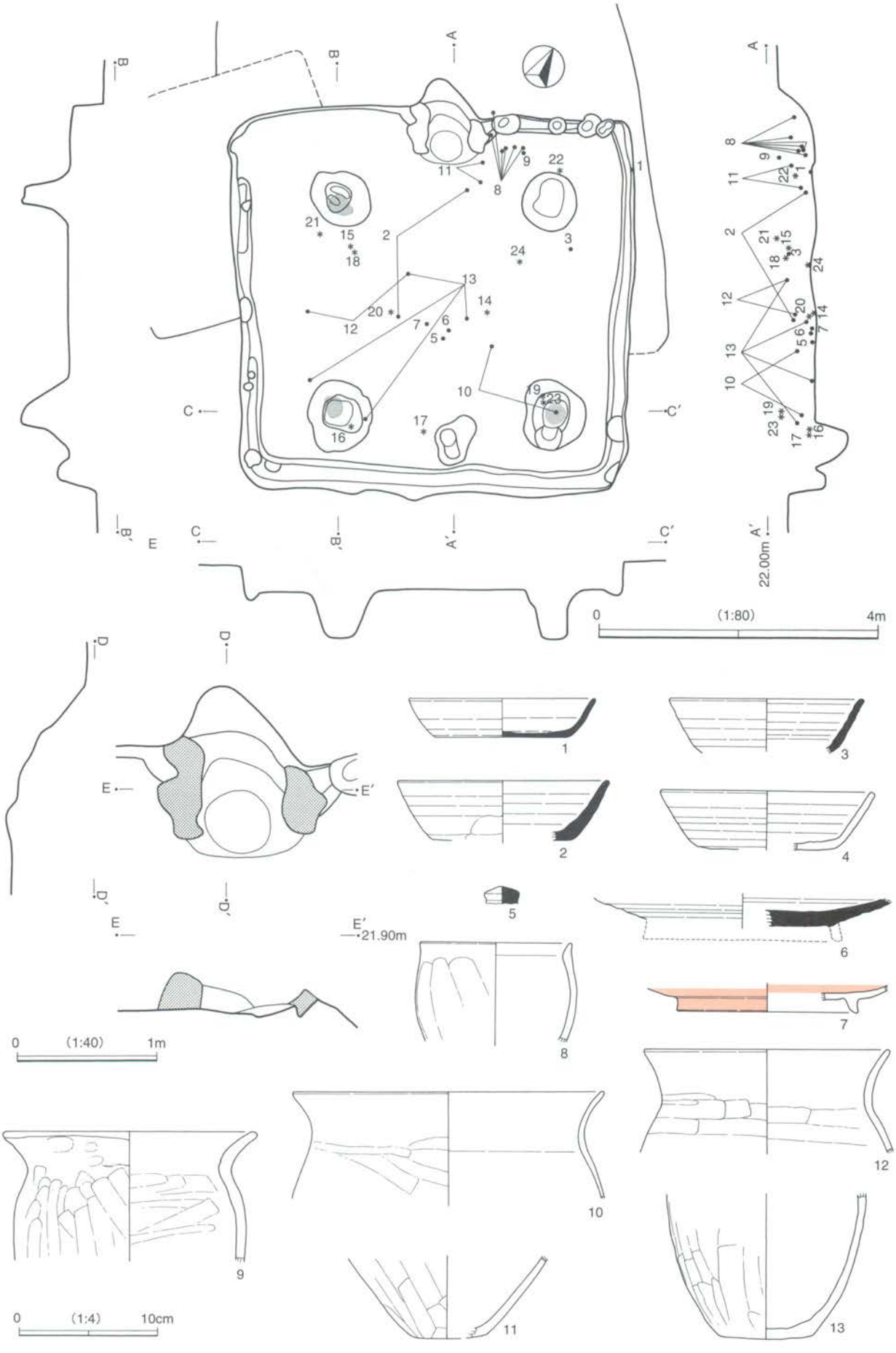
台地南部の南縁に位置する竪穴住居跡である。南東方向へ緩やかに下る斜面に面している。主軸は北からやや西寄りにとる。カマドは北辺中央に配置される。明瞭な柱穴は検出されなかったが，ほぼ対角線上の４か所に深さ10㎝程度のくぼみが検出されており，これらが柱を建てた痕跡と考えられる。出土した遺物は少ない。覆土にはロームブロック，ローム粒が多く含まれているので，廃絶後に埋戻しが行われた可能性がある。なお，床面中央部のやや西寄りにおいて，床表面が焼けて劣化した部分がある。そこでは，掘込みや遺物等は認められず，性格は特定できなかった。

遺物の遺存度は悪い。最も残りのよい土師器坏Ｅ（４）で半分強，須恵器坏AⅡ（１）で1/3程度遺存するほかは，断片的な資料である。須恵器坏類（１～３）はいずれも坏AⅡであり，青灰色に還元焼成されている。（１）は深身で開く形態であり，底部は回転ヘラ切り後，周囲のみドーナツ状に回転ヘラケズリ調整が加えられている。須恵器甕（５）はタタキ整形され，青灰色に還元焼成されている。土師器坏には，扁平な平底の土師器坏Ｅ（４）がある。口縁部に歪みがあり，焼成が甘く，暗褐色を呈する。内外面をヘラミガキ調整している。土師器甕には，胎土に雲母を含む常総型の甕Ｄ（６），赤褐色の甕Ａ（７）がある。以上の土器群は奈良時代の比較的新相を示している。

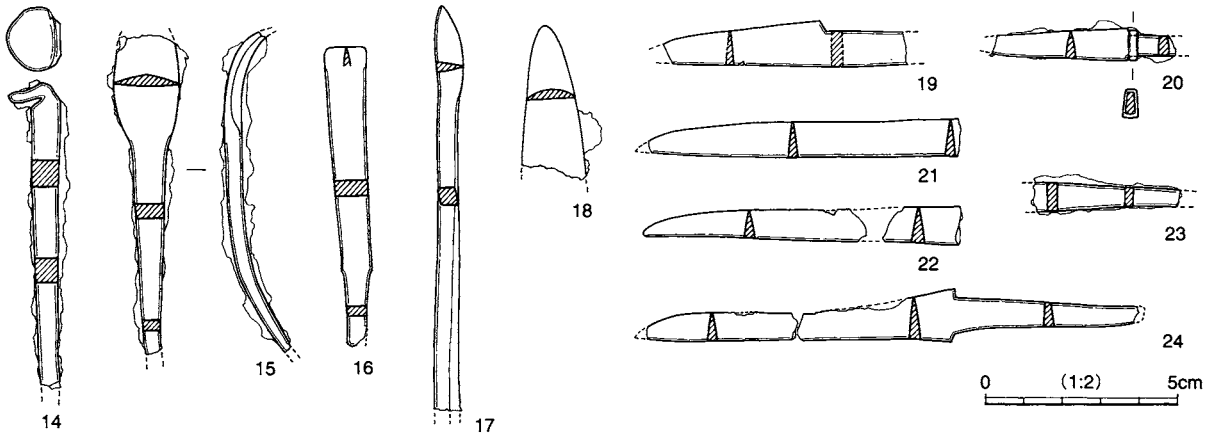
ほかに，刺突具と考えられる棒状鉄製品（８）が１点出土している。



第173図　SI-007と出土遺物



第174図　SI-010と出土遺物（1）



第175図　SI-010出土遺物（2）

SI-015（第177図，図版13・113）

台地南部の最南端に位置する比較的小型の竪穴住居跡であり，横長であるのが特徴的である。南側から入る谷の肩口に面している。主軸をやや西に振れた北にとり，カマドは北辺の西隅寄りにある。カマド前面から中央部にかけて硬化面が広がる。斜面に位置するため，壁がかなり流失し，大きい攪乱が2か所あるため遺存度は悪い。覆土にはローム粒が多く含まれ，人為的に埋戻した可能性もあるが，草根による攪乱と風化が著しい。

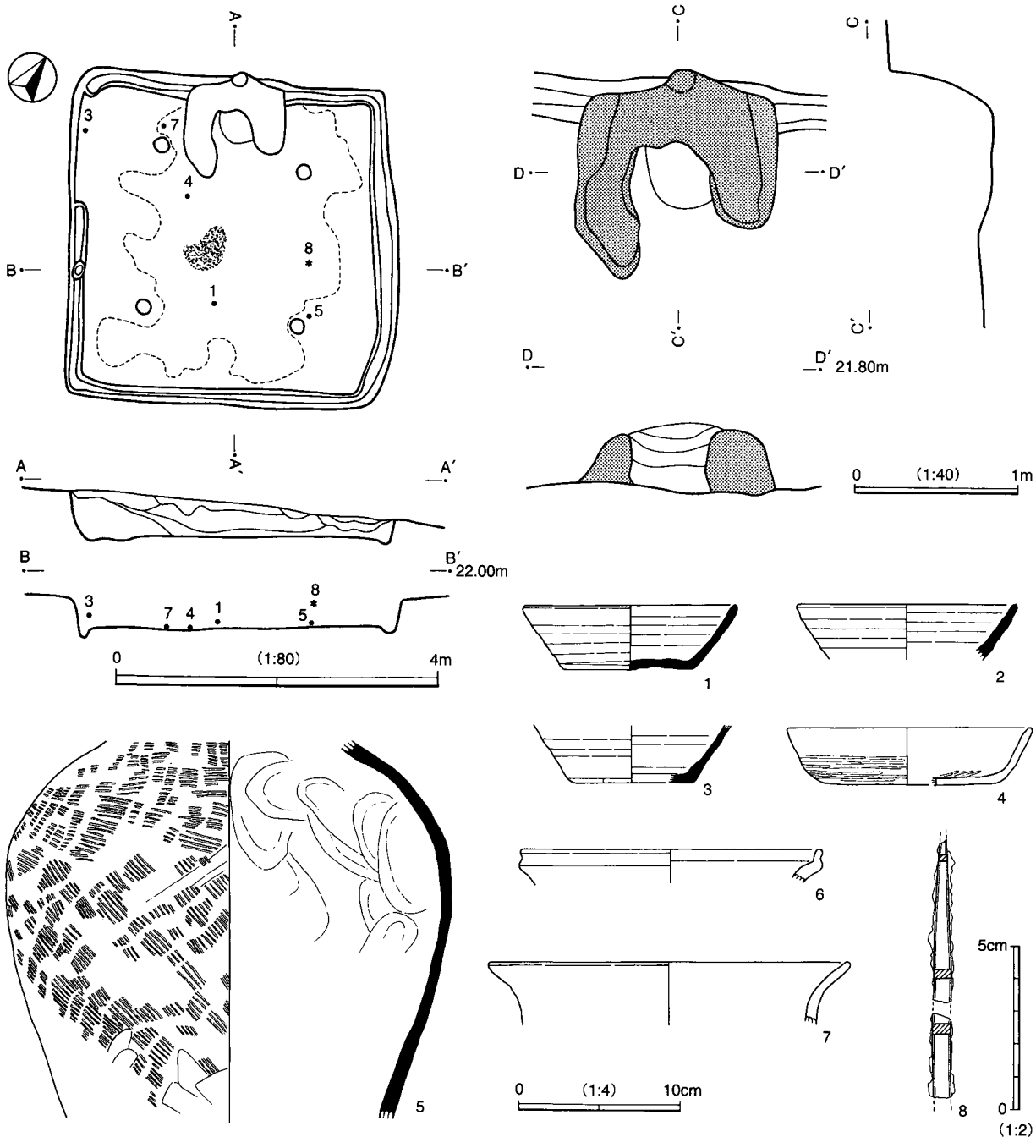
遺構の遺存状態の劣悪さに比べて，遺物は良く残っており，出土した土器片の大半が復原され，図化可能であった。図示した9点のうち，6点は70％～95％遺存している。須恵器坏Ⅳ（1～3）は浅い身であり，いずれも灰色に還元焼成され，胎土に雲母を含んでいる。土師器坏には，内面を漆仕上げした坏B（4）のほか，平底の坏Eがある。坏Eには、赤彩をもたないもの（5）と，内外面を赤彩した浅い形態のもの（6）がある。甕や甑も土師器で構成され，薄い武蔵型の甕A（7），内外面が滑らかで厚手の甕C（8），単孔の甑（9）がみられる。奈良時代の古相を示す土器群と考えられる。

SI-017（第178図，図版14・113）

台地南部の中央付近に位置する竪穴住居跡である。主軸をやや西に振った北にとる。カマドは北辺中央に設けられている。対角線上に主柱穴4か所が位置し，それぞれに柱痕が明瞭に認められた。柱穴の間の床面は，よく踏み固められて硬化している。壁溝は全周する。壁溝と壁の間には，幅4㎝～10㎝の平坦部がある。カマド対面の南辺中央には，出入口施設とみられるピットがある。このピットからカマドにかけての範囲では，床面が踏み固められて，硬化している。

床面下を精査したところ，各壁より32㎝～66㎝ほど内側において方形をなす，深さ36㎝～49㎝の掘込みが検出された。床下の土層は，ほぼ水平に堆積したロームブロックの層，及びロームブロックを含む黒褐色土層で構成され，その上部に硬化面が形成されている。掘りかたの形状は整然としており，遺物も検出されず，埋戻しも整然と行われている。内側の掘りかたに伴うカマド・柱穴の設置は行われていない。これらから，本跡の構築に際し，途中で設計を変更し拡張したと考えられる。

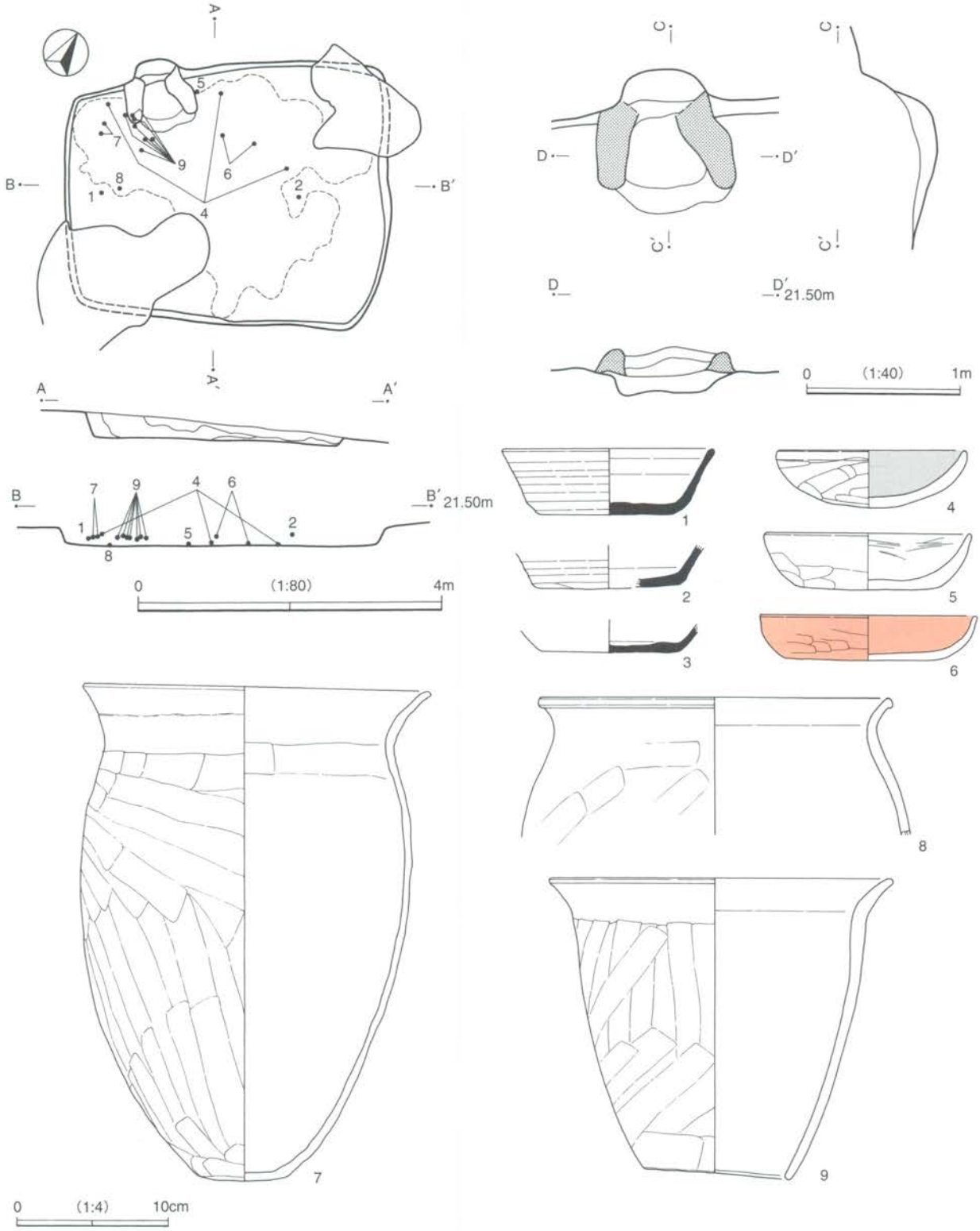
遺物は床全体に散在しており，遺存のよいものは硬化範囲の外側から出土した。カマド内では支脚片（7）が出土し，右袖脇では砥石（1）が出土している。また，北東隅付近で土玉が1点（2）出土した。



第176図　SI-012と出土遺物

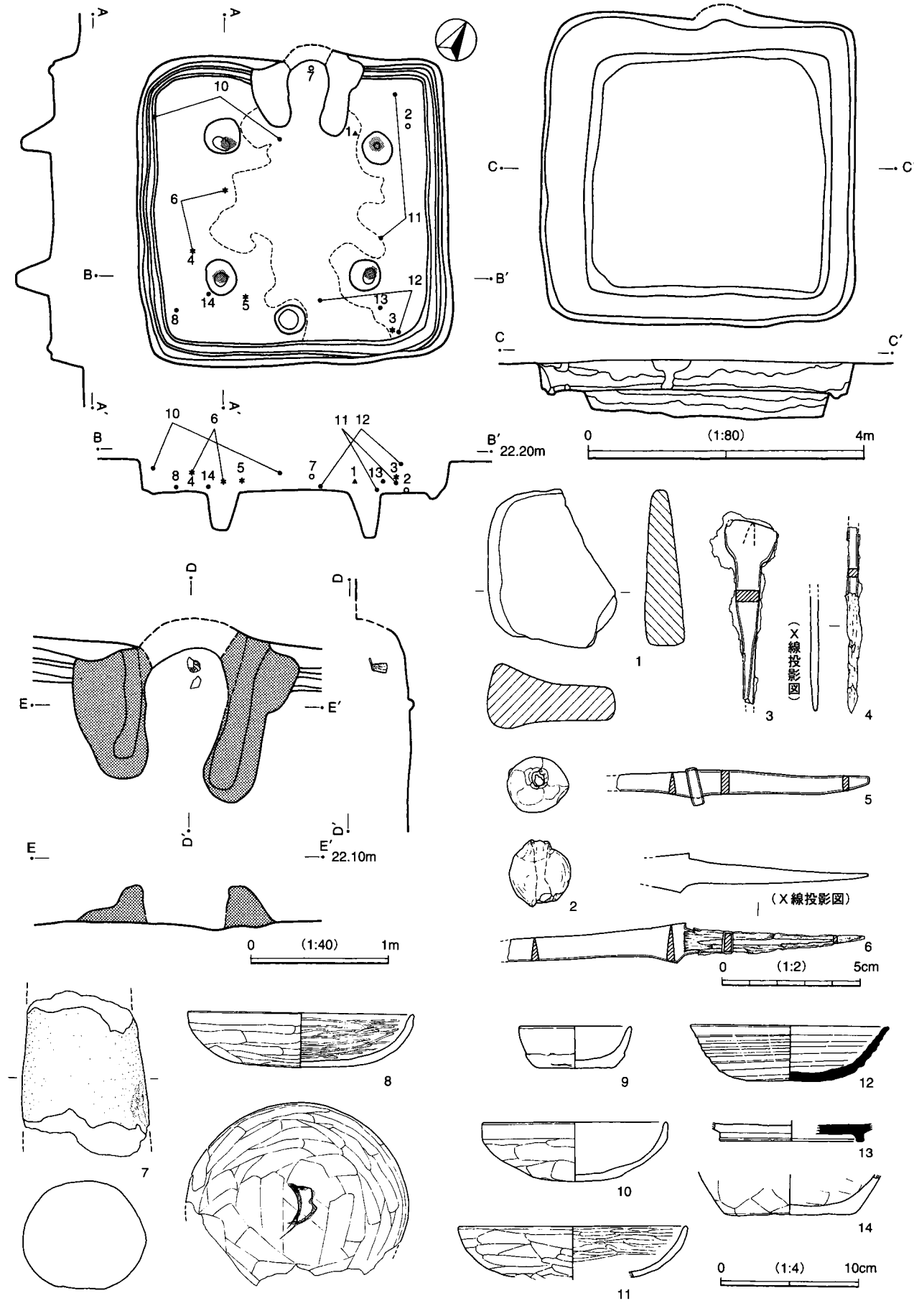
鉄製品は4点あり，鑿1点（3），刀子2点（5・6），工具の柄と考えられる棒状鉄製品（4）が出土している。

土器は7点図示した。須恵器は坏類のみであり，丸底に近い形態の坏C（12）と，坏Bの高台部（13）がみられる。いずれも白色砂粒を含み，灰色に還元焼成されている。坏Cは東海産（湖西窯周辺）の製品であろう。土師器では，底部に丸みのある，浅い坏Fが2点（8・11）ある。いずれも内面に丁寧なミガキが施されている。（8）の底外面には，かなり反った形の「β」字形墨書がみられ，さらに墨書の上をトレースするように，焼成後線刻がつけられている。「β」字形墨書は「得」の草書体を記号化した墨書



第177図　SI-015と出土遺物

とされている。小鉢形土器（9）は粗い造りが特徴的で，底部に木葉痕をもつ。坏B（10）は口縁部が直に立ち上がる丸底のものである。甕類については遺存がきわめて悪く，甕Bの底部（14）1点しか図示で



第178図　SI-017と出土遺物

きなかった。土器群の中で，須恵器は古墳時代後期後半の指標としたものを含むが，床面から出土した土師器坏Ｆは，奈良時代の古相を示す盤状坏である。

SI-022（第179図）

台地南部の西寄り，SI-017の西約20ｍに位置する竪穴住居跡である。東辺がSD-2と接している。掘込みが浅く，確認面においてすでに床面の痕跡が露出していた。壁は確認できず，西側にカマドの痕跡を検出したことから，図のような住居の存在を想定した。

遺物は少なく，いずれも細片のため図示しえないが，カマドの周辺から比較的薄手の土師器甕片が出土しており，口縁部などの特徴から奈良時代ころと考える。

SI-024（第180図，図版16・17・114・115）

台地南部南縁の中央付近に位置する。一辺1.85ｍ×2.1ｍのきわめて小型の竪穴住居跡である。主軸を南東にとる。柱穴は確認されなかった。カマドは南東隅にあり，袖部分や煙道は隅を外に向かって掘り込んだ掘りかたの中に設けられている。覆土全体にローム粒を多く含み，上層の土器片と床面の土器片が接合していることから，一気に埋戻されたと考えられる。

須恵器甑１点，土師器甕３点を図示した。須恵器甑Ｃ（１）は灰色に還元焼成され，胎土に雲母を含む。土師器には小型甕Ｃ（２），器壁が滑らかで厚い甕Ｃ（３），薄い器壁をもつ武蔵型の甕Ａ（４）がある。これらの特徴は，いずれも奈良時代の土器群であることを示している。

床面から両頭の棒状鉄製品（５）が出土しているが，用途は特定できない。

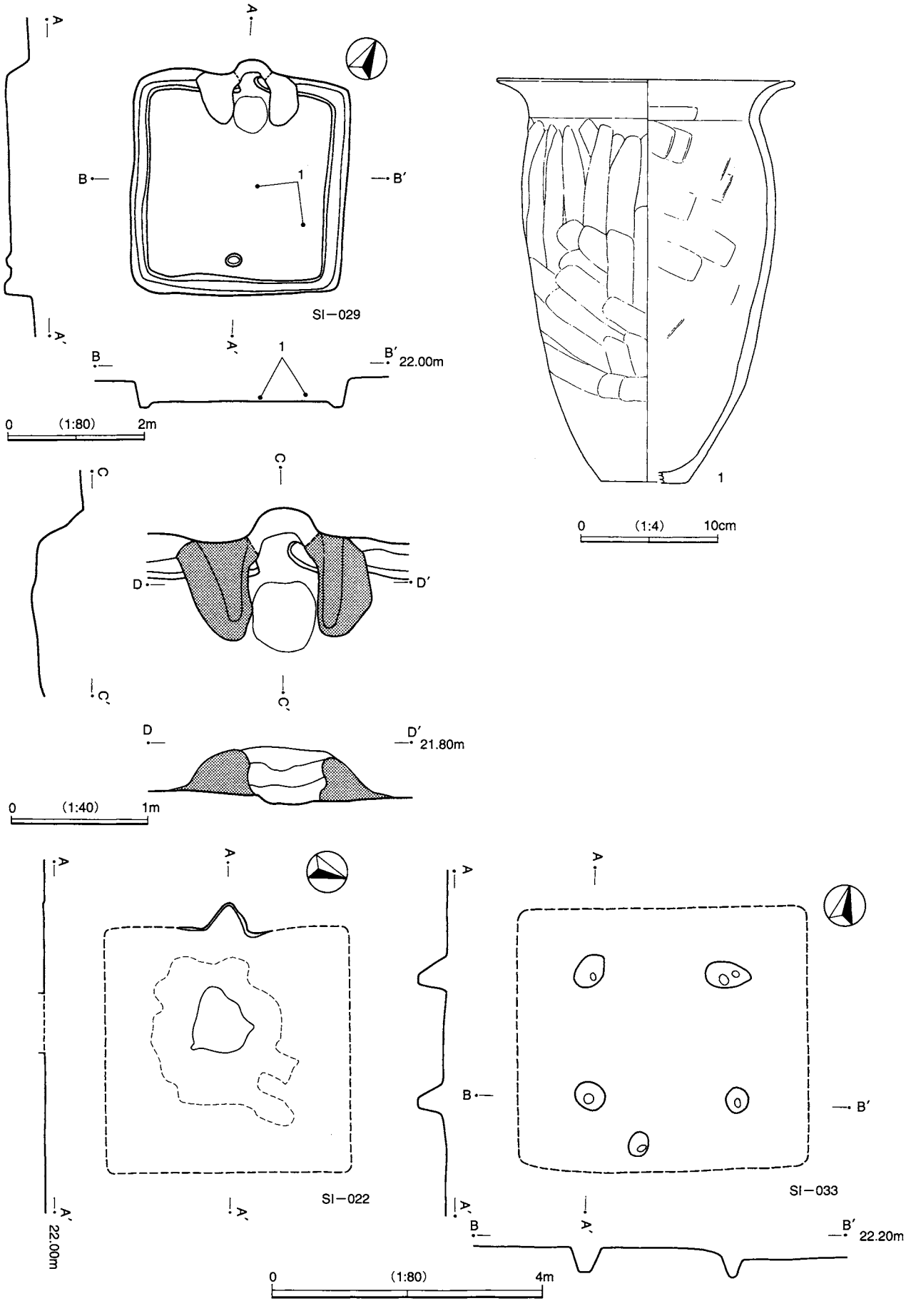
SI-025（第181図，図版17・115）

台地南部の南縁中央部に位置する比較的小型の竪穴住居跡である。主軸はやや西に振った北にとる。カマドは北辺のやや西寄りにある。壁溝はカマド両脇と南東隅を除いて検出された。柱穴と思われるピットは，カマド対面にあたる南辺中央のピットを頂点とする三角形状に両側２か所設けられている。いずれもきわめて浅いため，柱を埋込むことはできない。むしろ柱を置いた痕跡と考える。

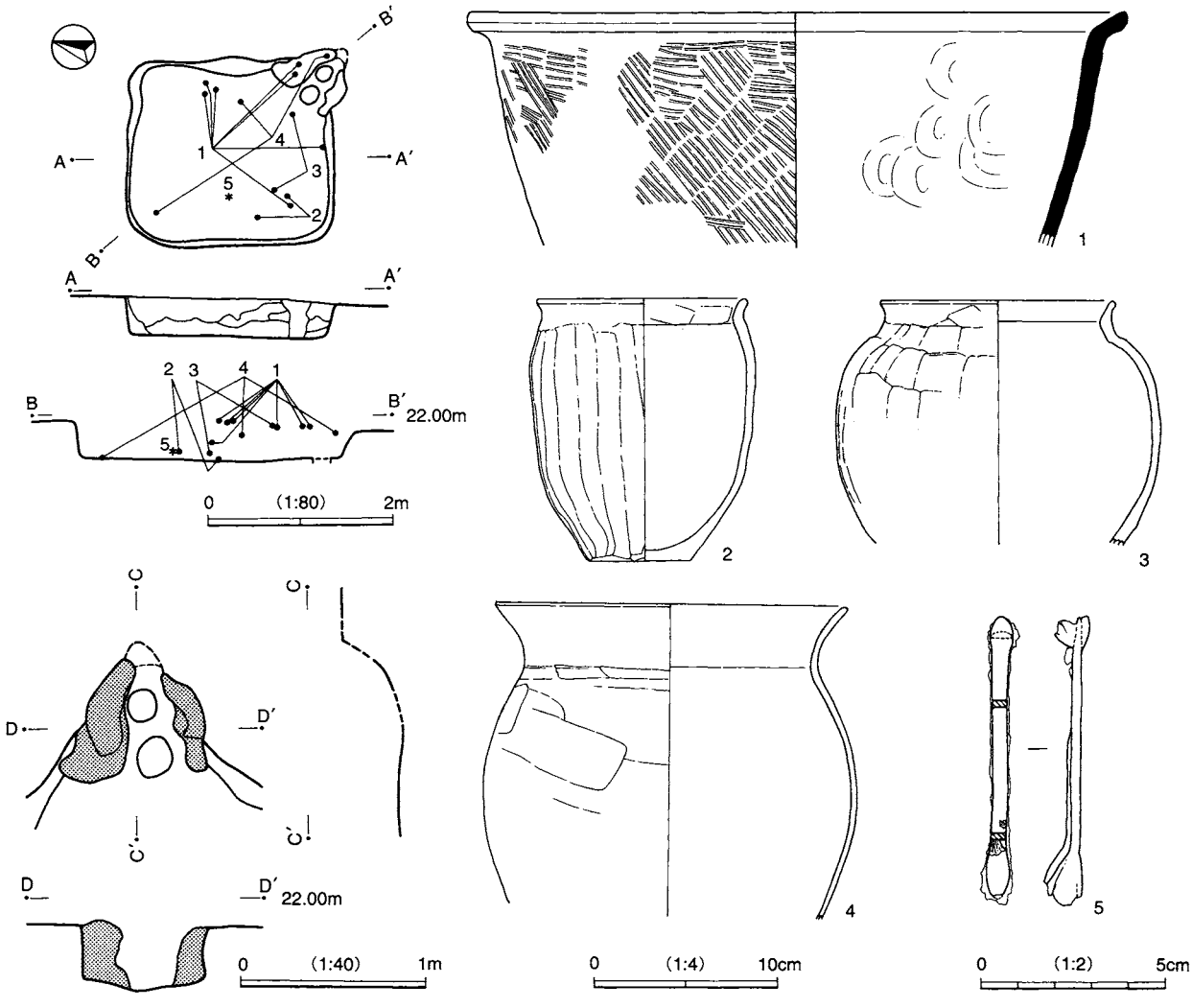
カマド内から完形の須恵器蓋（４）が出土したほか，カマド前方と南東部分から，比較的まとまった量の遺物が出土した。南東隅では刀子が２点（１・２）出土している。須恵器には，坏蓋ＢⅤ（３・４）と坏ＡⅡ（５・６・８・９），坏ＡⅣ（７）がある。坏蓋は円筒状のつまみをもつのが特徴である。底面に「り」形の線刻をもつ坏身（７・８）は，ともに黄橙色に焼成され，火だすきがみられる。ほかに，暗褐色を呈するもの（５）と，青灰色に還元焼成されたもの（３・４・６・９）があり，後者の方が多数を占める。土師器甕類では，武蔵型の甕Ａ（11～13），甕Ｂ（14・15），台付甕（10）がある。甕Ａの頸部は「コ」の字化の兆候が現れている。台付甕は小型で整った形態をもち，器壁が薄く，脚部も均整のとれた丁寧な造りである。奈良時代の新相を示す良好な土器群である。

SI-029（第179図，図版20・116）

台地南部，SI-025の５ｍ北に位置する比較的小型の竪穴住居跡である。主軸はやや西に振った北にとる。北辺中央にカマドがある。壁溝は，カマドの火床部を除き，袖の下部まで廻っている。柱穴はなく，



第179図　SI-022・029・033と出土遺物



第180図　SI-024と出土遺物

カマド対面の南辺中央に小ピットをもつ。

土師器の長胴の甕B（1）が1点出土している。奈良時代に盛行する典型的な「在地」の甕である。

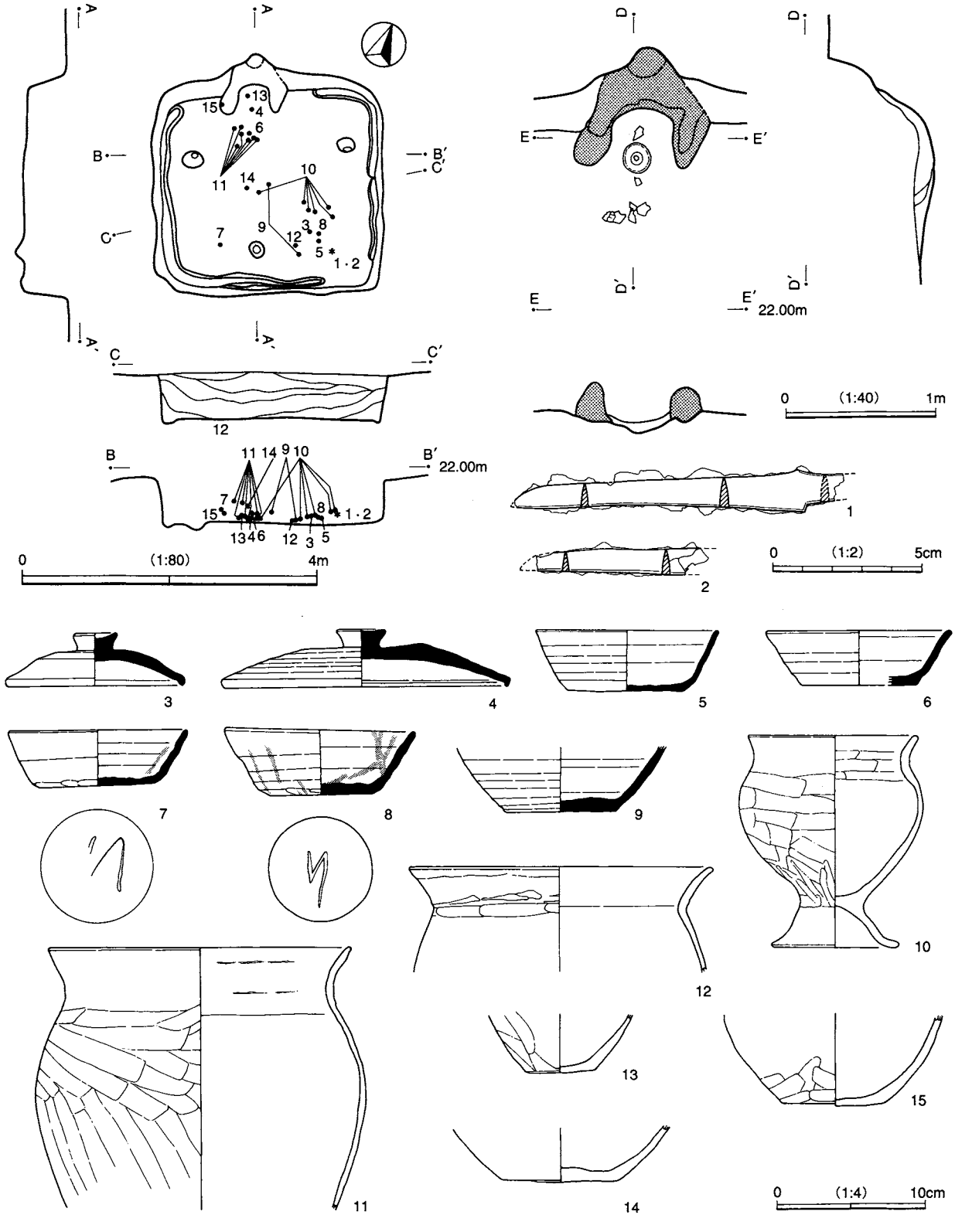
SI-033（第179図）

台地南部，SI-017の東約8mに位置する竪穴住居跡である。掘込みが浅く，確認面ですでに床面が露出している状態で検出された。対角に主柱穴を4か所有し，南辺やや西寄りに出入口施設と思われる小ピットがある。

遺物は，遺構の遺存度が悪いものの，細片ではあるが数多く出土している。しっかりと還元焼成された灰色の須恵器片が多く，その中に底部を回転ヘラケズリした坏身片を含むことなどから，奈良時代の所産と考える。

SI-041（第233図，図版24・117，平安時代のSI-040下層遺構として掲載）

台地東部の東端に位置する竪穴住居跡である。対岸に観音塚遺跡を望む台地斜面に面している。谷の傾斜とSD-10・イモ穴・電柱敷設による攪乱によって，南東部分が大きく失われている。また，平安時代のSI-040との重複部を2か年に分けて調査せざるを得なかったため，遺構の検出は困難を極めた。両遺構



第181図　SI-025と出土遺物

にわたって接合した遺物もあったことから，図面は分離しないで報告することとした（本節２項 SI-040)。

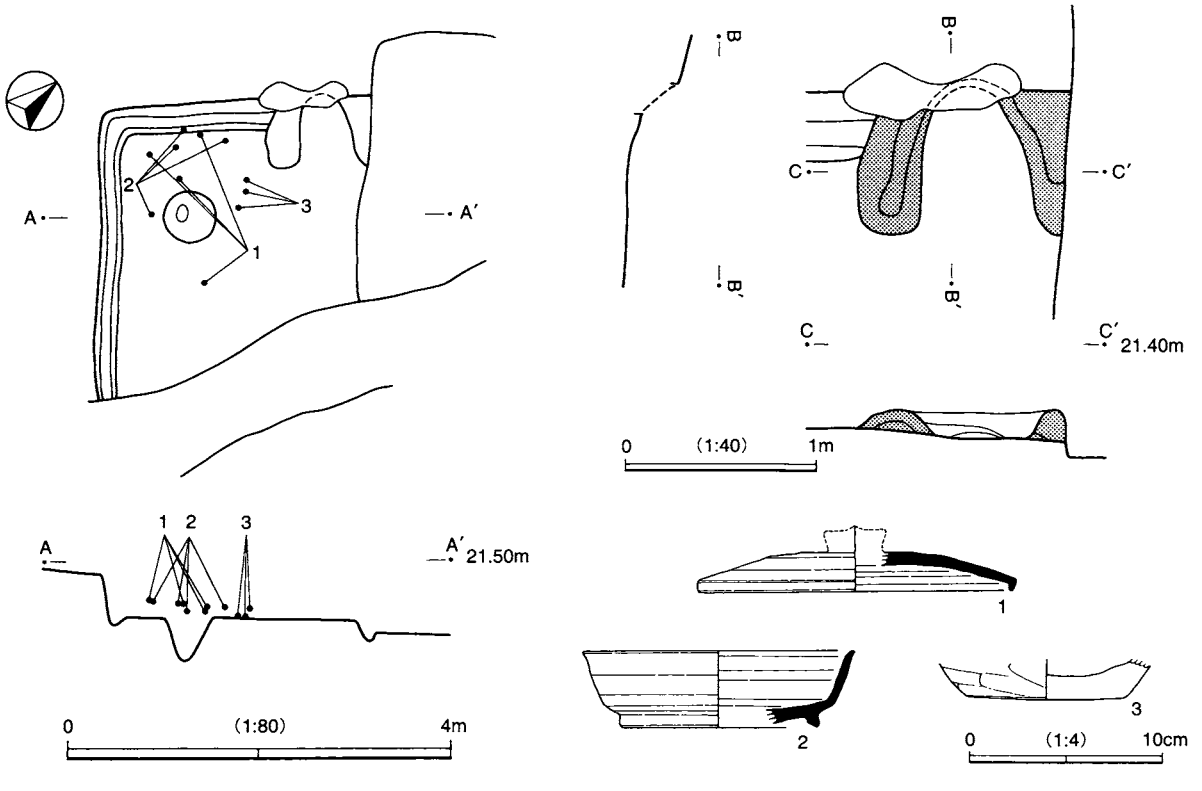
SI-041 は南半分を SD-10 の掘削により失い，SI-040 によって上部の大半が削平されている。残存部分はほとんど床面のみという状況である。主軸は北西で，カマドは北西辺中央に設けられている。カマドは火床部のみが確認されている。柱穴は２か所検出され，西辺の一部で壁溝が検出されている。

SI-041 に伴うとみられる遺物は次のとおりである。須恵器坏ＡIV（６）は浅身であり，青灰色に還元焼成されている。ロクロ製の土師器坏ＨII（７）は深身であり，黒褐色に焼成されている。土師器ではなく，須恵器坏ＡIIの可能性もある。鉄製工具（８）は柄の部分のみ出土している。転用硯（９）は，約18㎝×９㎝の硬い須恵器甕片が使用されており，長方形をなす。甕の外面は平行タタキのちナデ調整，内面は当て具痕を残し，一部ナデ調整している。この当て具痕を貫くように，約１㎜幅で黒色の擦り筋が認められる（網掛け部)。内面中央のやや右上には，径約７㎝ほどの範囲でくぼみの中が黒く染まっている。土器群は奈良時代の新相を示す。

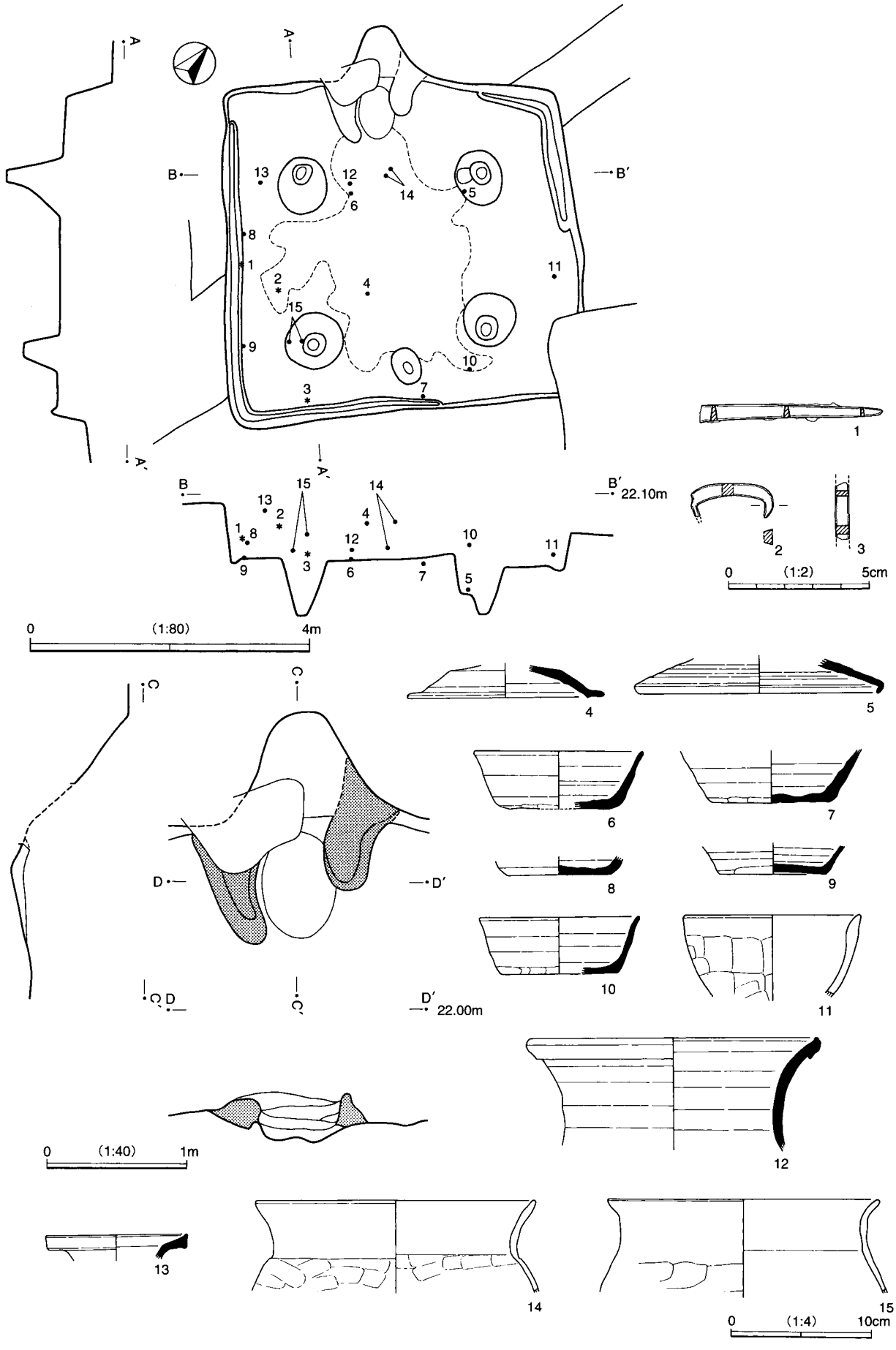
SI-042（第182図，図版117)

台地東部の東縁中央に位置する竪穴住居跡である。南半分を SD-10 によって，東半分を平安時代の SI-040 によって壊されている。主軸は北西で，カマドは北西辺のほぼ中央に位置すると思われる。北西隅で柱穴を検出した。この柱穴の周辺に遺物が集中して出土している。

図示可能な遺物は３点である。灰色に還元焼成された須恵器蓋坏Ｂが１組（１・２)，土師器甕（３）がある。坏が浅身であることから，奈良時代でも古相を示すものと考える。



第182図　SI-042 と出土遺物



第183図　SI-044と出土遺物

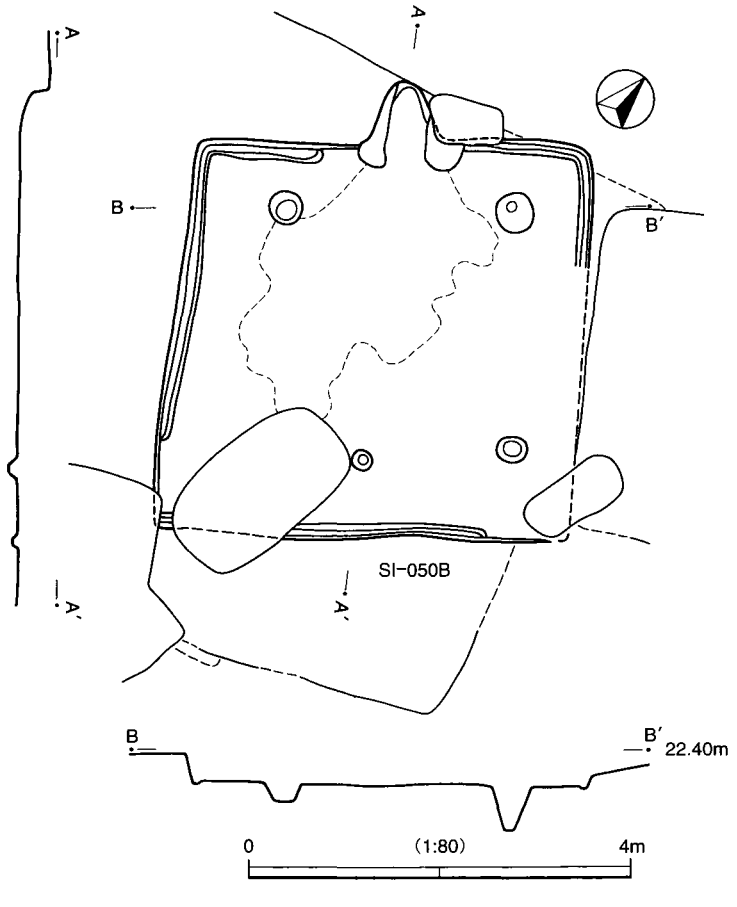
SI-044（第183図，図版24・117）

台地東部のやや北東寄りに位置する竪穴住居跡である。観音塚遺跡を望む谷頭に面する。東隅でSI-040に切られ，遺構中央を南北に走るSD-9に切られている。西にやや振った北を主軸とし，北辺中央にカマドをもつ。壁溝は西隅と東隅を除いて検出されている。対角線上に４か所の主柱穴がある。カマド対面の南東辺中央には小ピットがある。カマドの前面と，柱穴で囲まれた範囲では，床面が踏み固められて硬化している。遺物は床全体に散在するが，鉄製品はいずれも南西隅付近で出土している。

須恵器坏蓋Bが２種類（４・５），いずれも深身の須恵器坏ＡⅠ・Ⅱ（６～10）が５点みられる。１点(10)を除いて，青灰色～灰白色の還元焼成によるものである。蓋（４）は，口縁部のかえりが突出し，胎土に雲母を含むので，茨城産の可能性が高い。坏ＡⅠ（10）は，箱形をしており，焼成が甘く，黄褐色を呈する。ロクロ土師器との区別が困難であるが，須恵器坏（６）の形態や製作技法と同じであることから須恵器とした。須恵器甕口縁部（12）も，橙色に焼成された千葉地域の窯跡出土品に類例のある製品である。土師器では，鉢（11），武蔵型の甕Ａ（14・15）があるが，いずれも覆土上層から出土したものである。武蔵型甕の口縁部が「コ」の字形に変化しているのは，平安時代にみられる特徴である。須恵器坏蓋（４）の形状は古相を示すが，千葉産須恵器の存在，比較的遺存の良い箱形の坏２種の存在から，奈良時代の新相を示す土器群ととらえておく。

SI-050A（第184図，図版27）

台地東縁の中央付近に位置する竪穴住居跡である。古墳時代後期後半のSI-050B覆土上に重なって検出



第184図　SI-050A

された。主軸は北西にとる。壁溝は全周していたと思われる。カマドは北西辺中央にあり，対面の南東辺中央に小ピットをもつ。主柱穴は，４か所のうち３か所を確認した。ほぼ対角線上に位置する。カマド前面からエプロン状に床が硬化している。

図示できる遺物は出土しなかった。

SI-051A（第236・237図，図版28・118，平安時代のSI-051Bと一緒に掲載）

台地東部，SI-050Aの北西７ｍに位置する竪穴住居跡である。平安時代のSI-051Bに切られる。やや西に振った北に主軸をとる。壁溝はカマド部分を除いて全周する。カマドは北辺中央にあったが，SI-051Bのカマド構築の際に壊されたとみられる。カマドの対面にあたる南辺中央に小ピットをもつ。主柱穴は４か所検出されており，ほぼ対角線上に並ぶ。北東を除く３か所の柱穴を結んで，間仕切のような溝が検出されたが，これはSI-051Bの壁溝である。この壁溝の外側部分にのみ，SI-051Aの覆土が残存していた。覆土はローム粒を含み，微妙に色調の異なる６つの層に分けられる。埋戻しによって形成されたと考える。焼土及び炭化材は，最下層において少量が検出されるに留まった。一方，溝の内側にあたるSI-051Bでは，放射状に遺存する炭化材と，多量の焼土堆積が認められた。また，それを被覆していたのは黒褐色土であった。このように，内側と外側では明確な違いが認められるので，SI-051A→SI-051Bという２軒重複とみて間違いない。ただし，両跡とも床面がほぼ同じ高さであり，柱穴の内側から東側にはみ出るように硬化面が検出されたため，調査時には２軒重複の見解には至らなかった。

SI-051Aの遺物は土師器の常総型甕（８）と武蔵型甕（９）の２点である。常総型甕は粘土紐の継ぎ目で底部がきれいに抜けており，甑に転用された可能性がある。北西の柱穴に落込んだ状態で出土し，さらにその下から武蔵型甕の一部が出土している。ともに南壁際の破片と接合しているので，本跡廃絶時において意図的な投入がなされたと考える。このほか，図示しなかった細片には茨城県産須恵器の蓋坏などが多数含まれている。これらは奈良時代でも比較的古相を示している。

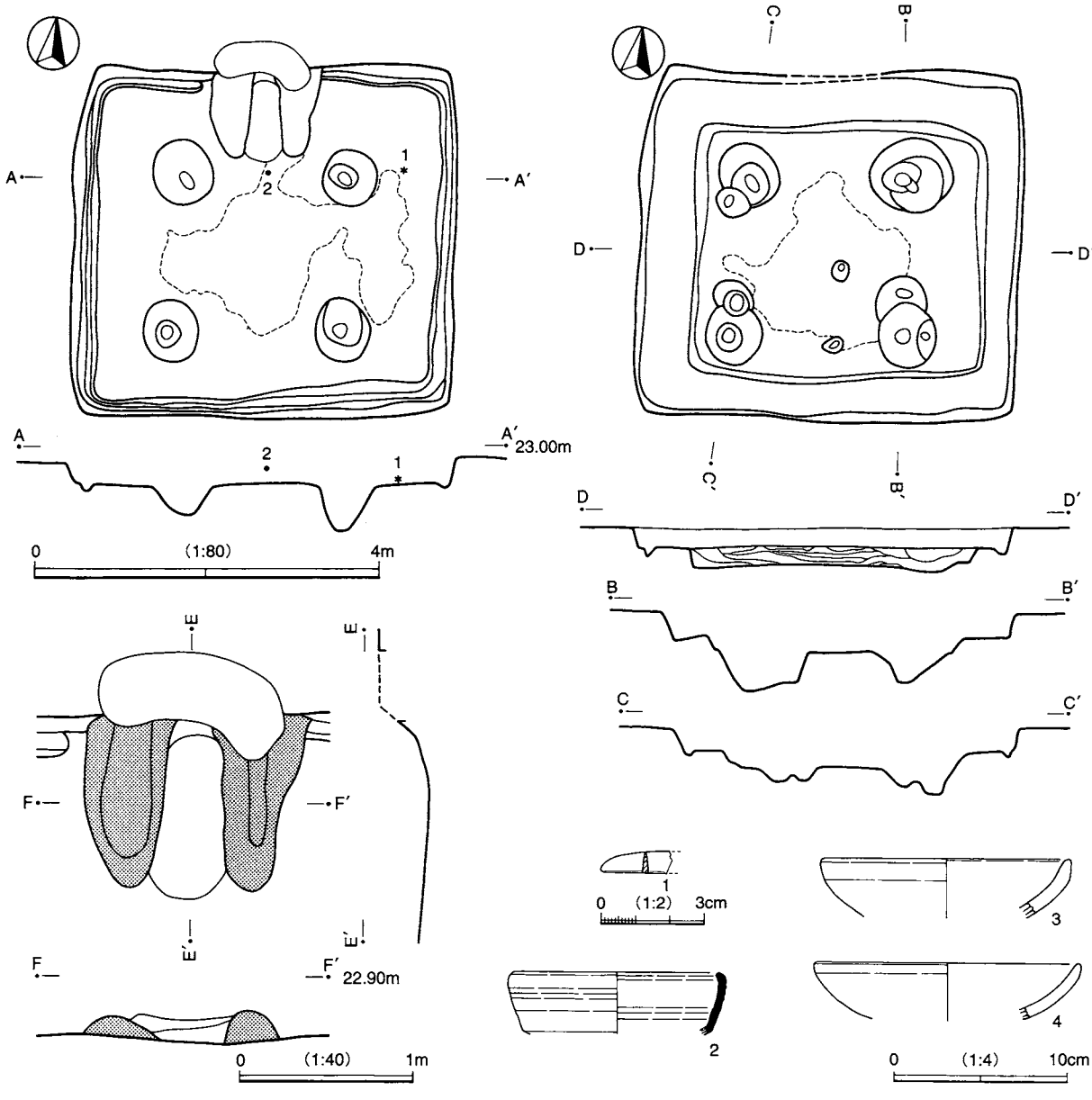
SI-053（第185図，図版30）

台地東部の中央付近，SI-050Aの20ｍほど西に位置する竪穴住居跡である。主軸を北にとる。北辺にカマドをもつ。壁溝は全周する。対角線上に４か所の柱穴があり，その間は踏み固められて硬くなっている。出入口施設とみられるピットはない。覆土はローム粒を含むが，しまりはあまり良くない。カマドの煙道は攪乱により失われている。床面下を精査したところ，一回り小さい方形の掘りかたが検出された。中央部の平坦面で20㎝程度低く，やや内側に柱穴と，その他の小ピット２か所が検出された。しかし，カマドの痕跡や，遺物は検出されなかった。したがって，構築途中で設計が変更され拡張された，などの可能性が考えられる。掘りかたの覆土は全体にロームを多く含み，大変硬く締まっている。

遺物は少なく，遺存度も低い。刀子切先を１点（１），須恵器坏Ａを１点（２），土師器坏Ｂの口縁部２点（３・４）を図示した。土師器坏が浅身であることから，奈良時代の古相を示す土器群と考える。

SI-054（第186図，図版31・118）

台地東部，SI-053の１ｍ南に近接する竪穴住居跡である。主軸は北からやや西に振れている。北辺にカマドが設けられ，対角線上に主柱穴が４か所，出入口施設とみられるピット，西辺中央とカマド両脇，



第185図　SI-053と出土遺物

四隅の壁溝中に小ピットが検出されている。東壁はカマド側でやや狭くなってきており，この部分からカマドにかけて壁溝も途切れる。主柱穴には柱根の痕跡が残っていた。覆土は最下層まで黒褐色の腐植土を主体としており，廃絶時の埋戻しはほとんど行われていないようである。

遺物の多くはカマドとその周辺に集中している。全体に遺存はあまり良くない。鉄製品はいずれも北東区で出土し，広根三角形の鉄鏃（10）は柱穴の上に出土した。小型のタガネ（9）と刀子片（11）は壁際で出土している。石槌（8）は，両面の中央に敲打痕がある。混入品かと思われたが，該期の石槌がほかにもあることから図示した。土器類では，須恵器坏のほかは甕類が中心である。箱形の須恵器坏ＡⅠ（1）

は胎土に少量の雲母を含み，灰色を呈する。須恵器甑（4）は橙色の焼成で，千葉産と考えられる。土師器では，まず武蔵型の甕A（5～7）が注目される。内外面をヘラケズリした，非常に薄手の造りであり，口縁部がいずれも「コ」の字化している。ほかに，小型の甕が2種類出土している（2・3）。奈良時代末から平安時代にかけての所産とみられる。

SI-055（第187図，図版32・118）

台地東部，SI-054の2m南に隣接する竪穴住居跡である。主軸は北からやや西に振れている。北辺にカマドを設け，壁溝は全周する。主柱穴は対角線上に4か所あり，出入口施設とみられるピットがカマド対面の南辺中央にある。主柱穴には柱根の痕跡が残っている。覆土上層は耕作が及んでいるため，かなり攪乱されている。同一個体の遺物出土位置も高低差が大きい。

住居内全体に遺物が散在しており，土器類のほかに管状土錘（1・2），石製臼玉（3），砥石（4），鉄製品（5～11）などがみられる。鉄製品は用途の特定できないものが多いが，穂摘み具（7），紡錘車の軸（9・10），小型のタガネ（11）などがあるとみられる。飾り金具（5）には，花弁形の縁取りがあり，頂部が半球形に作り出されている。帯状の金具（6）には目釘孔がある。

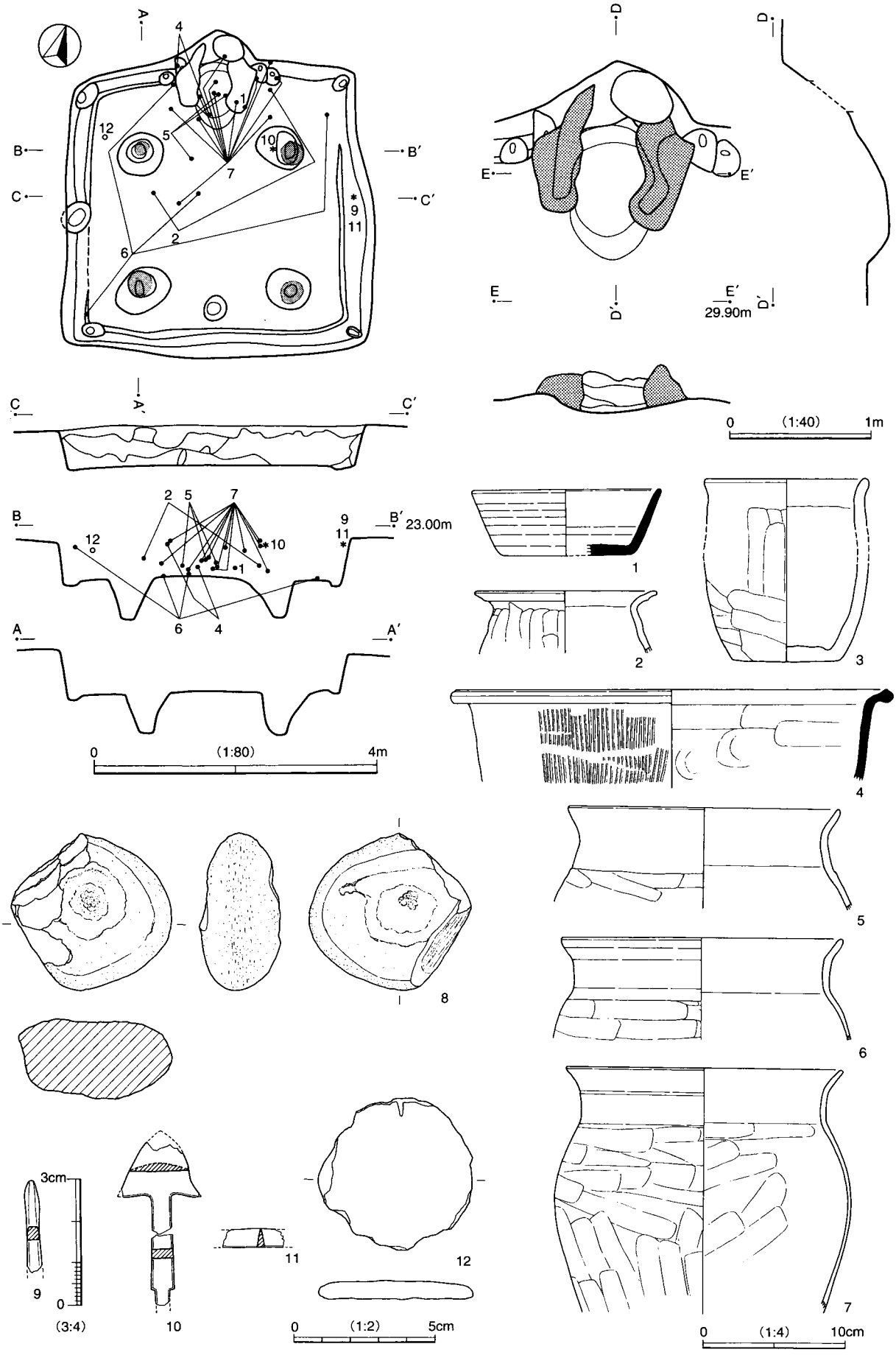
図化可能な土器は10点あったが，甕（21）以外は坏類で占められる。須恵器坏類には，蓋坏B（12・15）と，浅い坏AIV（13），深い坏AI（14）がある。いずれも灰色に還元焼成されている。とくに，火だすきを有するもの（14）は濃灰色をしており，市原市永田・不入窯産の可能性が高い。ほかに，須恵器坏片が3点（16～18）あるが，比較的下層から出土したもの（17・18）は灰白色に焼成されており，やや様相が異なっている。土師器坏には，平底の坏C（19）と丸底の坏A（20）がある。前者（19）は内面にミガキが施され，赤彩されているが，後者（20）は赤彩されていない。土師器甕D（21）は，胎土に雲母を多量に含む，常総型甕である。これらは，明らかに覆土上層出土のもの（12・19・21）が含まれているのでやや時期差を含む可能性はあるが，奈良時代の新相を示す土器群と考えられる。

SI-058（第188図，図版34・118・119）

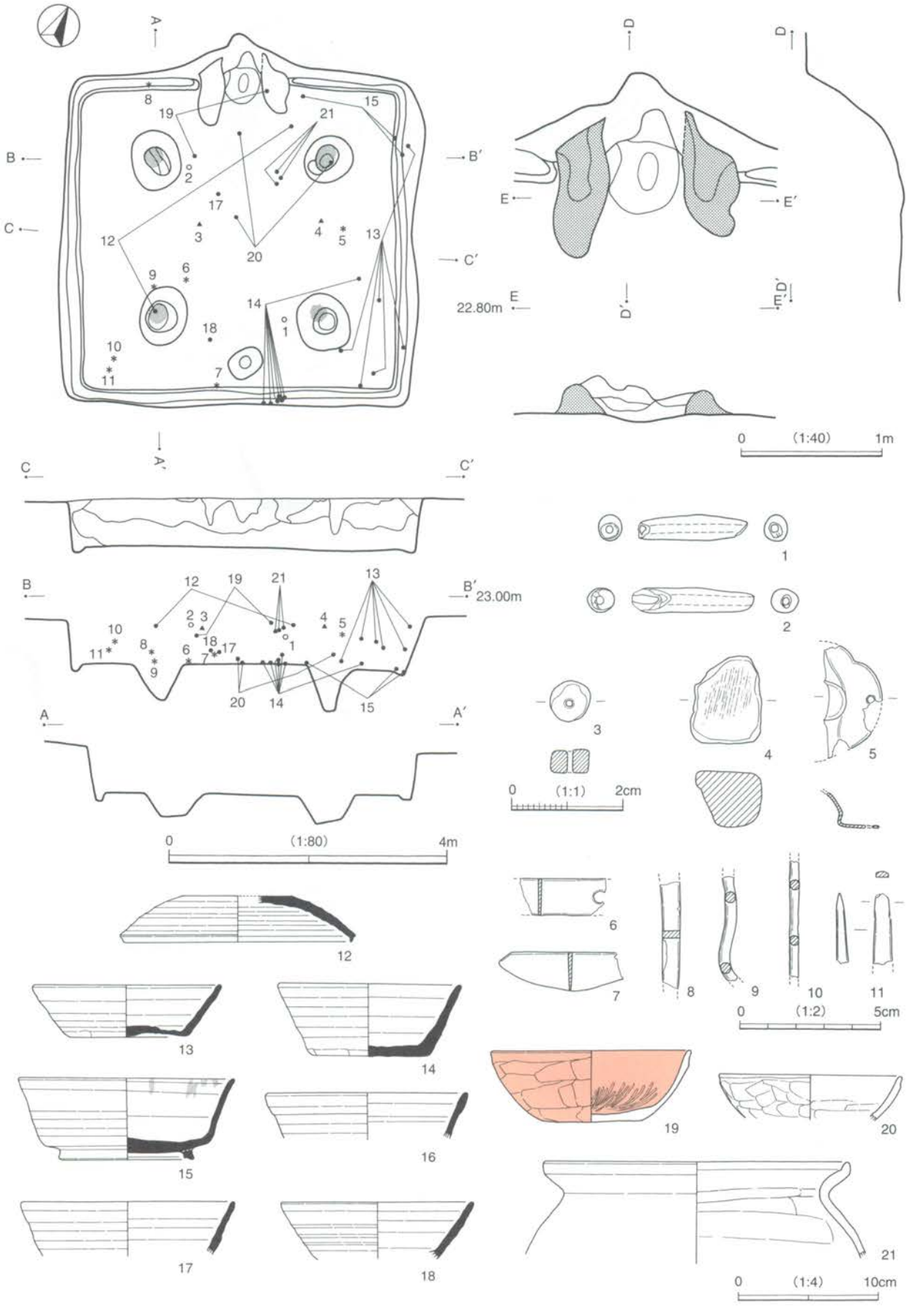
台地東部の南東寄りに位置する竪穴住居跡である。谷頭に面して遺構が密集しており，東側がSI-059の，北側がSI-057の覆土中で検出された。また，中央をSD-9が南北に走っている。やや西に振った北を主軸とし，カマドは北西辺の中央にある。主柱穴は，北側柱穴が少し内側にあるほかは，各隅に設けられている。壁溝は南西辺と，北隅に確認された。

遺物は，カマド内と北西区に比較的まとまって出土した。須恵器には，坏B蓋（1），坏A（2）がある。坏蓋は円筒状のつまみをもつ。いずれも焼きが甘く，黄橙色（1）～灰褐色（2）を呈する。胎土に白色砂粒が含まれるものの多くはなく，雲母や白色骨針は認められない。ロクロ土師器坏（3）も，黄橙色の焼成で，須恵器の可能性もある。

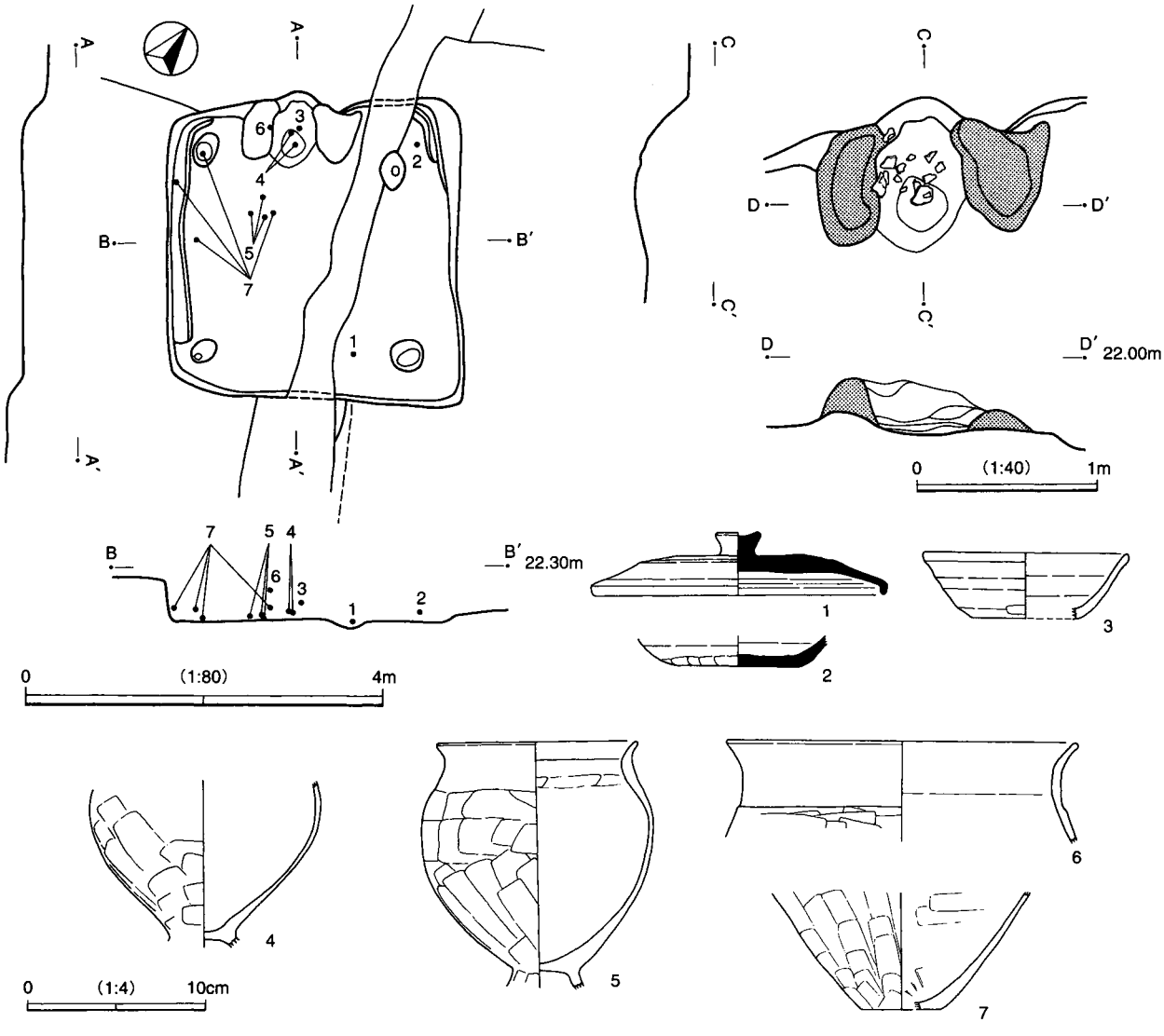
土師器甕4点のうち2点は台付甕である。SI-025にも類例があるが，本跡のものは口縁部の屈曲が鋭く，胴部や脚が極めて薄手である。搬入品と考えられ，台付甕としては最新段階のものである。円筒状のつまみをもつ坏B蓋や，黄橙色の須恵器坏Aをもつ点はSI-025と共通するが，坏の形態は底が小さい割に浅い。武蔵型の甕A（6・7）は口縁部の「コ」の字化が進んでいる。これらは新しい要素である。奈良時代末から平安時代にかけての土器群である。



第186図　SI-054と出土遺物



第187図　SI-055と出土遺物



第188図　SI-058と出土遺物

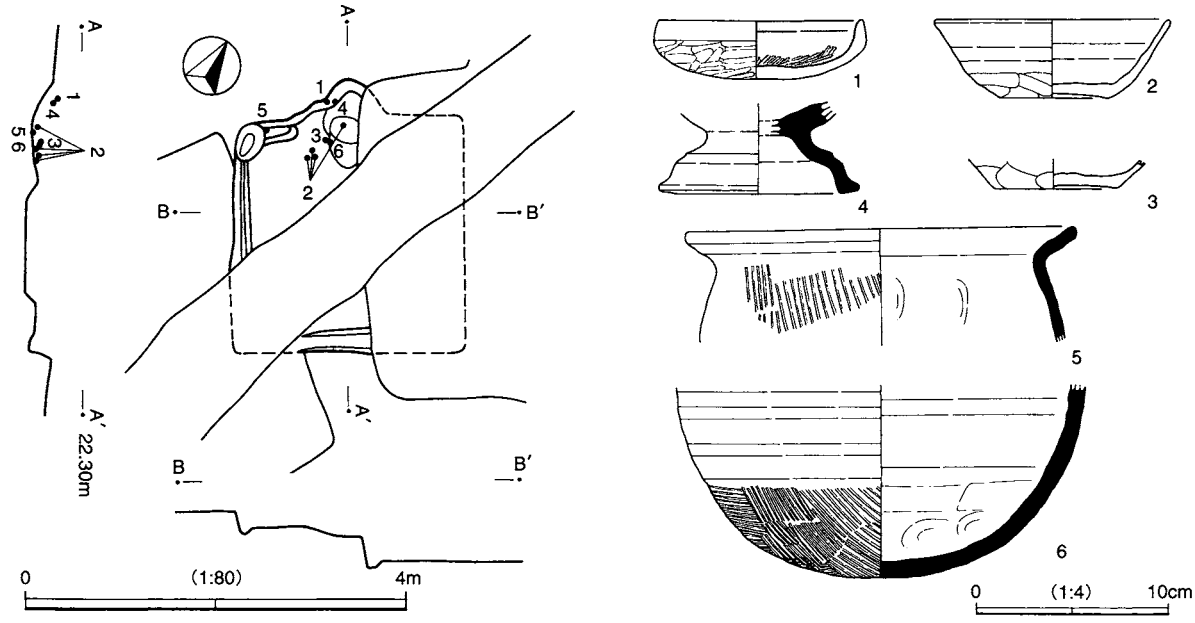
SI-061（第189図，図版36）

台地東部の東端に位置する住居群のなかで，とりわけ小型の竪穴住居跡である。東半分を平安時代のSI-060に切られ，南側をSD-9によって削られている。北西隅からカマドにかけての部分と，南辺の一部のみが検出された。主軸はやや西に振った北にとる。カマドは北辺中央に位置する。壁溝は全周していたと思われる。柱穴は検出されなかった。

カマド周辺から北西隅にかけてわずかに検出された遺物を図化した。内面黒色処理の土師器坏B（1），ロクロ土師器坏G（2・3），須恵器長頸壺脚台（4），赤褐色の須恵器甕口縁部（5），灰色の須恵器壺底部（6）がある。いずれもほぼ同位置から出土しているが，奈良時代以前（1・4・6）と平安時代（2・3・5）のものが混在している。

SI-063（第190図，図版37）

台地東部の東端に位置する竪穴住居跡である。SI-061の南2mに隣接する。西側では壁高が35cmある



第189図　SI-061と出土遺物

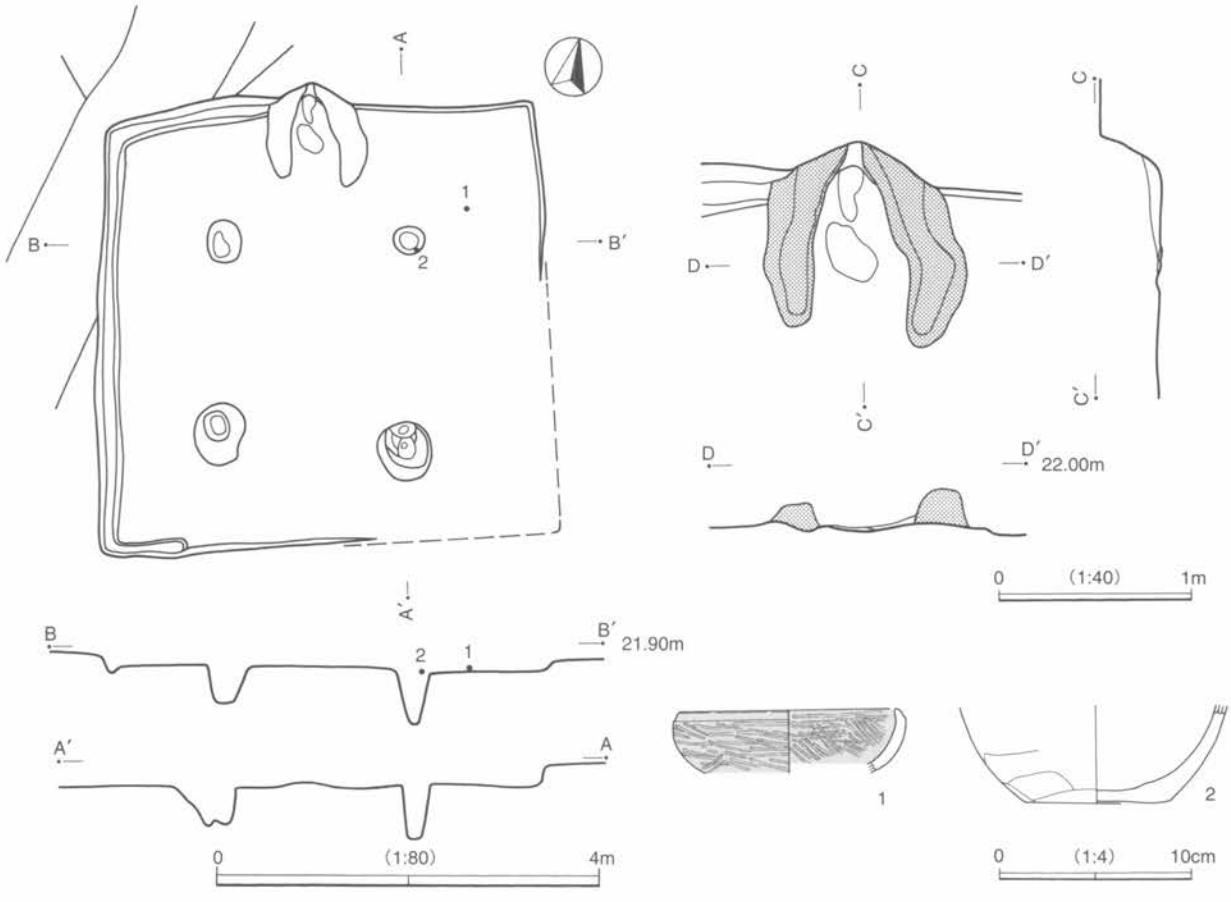
が，南東隅は流失している。主軸は北で，カマドを北辺中央に設けている。主柱穴は４か所認められる。やや南にずれている１か所を除き，ほぼ対角線上に位置する。覆土は，著しく攪乱を受けていたので，本来の堆積状況はわからなくなっている。また，遺構中央部で貝ブロックが検出された。覆土上部で検出されているので，本跡に直接伴うとは考えられない。住居廃絶後，一定期間をおいて後に投棄されたものであろう。

遺物はごくわずかで，破片の総数が50点ほどしかない。土師器の坏Ａ（１）と，甕Ｂ（２）と思われる底部破片を１点ずつ図化した。坏は丸底になるものと思われ，内外面に黒色処理が施されている。奈良時代か，それ以前に遡る土器群と考える。

SI-067（第191図，図版38）

台地東部の南寄り，SI-063の南西17ｍに位置する竪穴住居跡である。主軸はやや西に振れた北にとる。カマドは北西辺中央に位置している。主柱穴は対角線上に４か所みられる。壁溝は全周する。覆土はローム粒を多く含み，ブロック状の堆積をしていることから，人為的に埋戻されたものと考える。出土遺物は少なく，南東辺寄りに土器片10点余と，石器１点が出土したのに留まった。

土師器坏Ａ（１）と石槌（２）を図化した。土師器は，新しくとも奈良時代の古相か，それ以前の所産と考える。石鎚は，乳白色の硬い石灰岩もしくは玉髄質の石製で，扁平ながら整った六面体をなし，各面は磨られて平滑になっている。打撃により欠けている部分がみられ，図の向かって左側には打撃による凹面がある。縄文時代の磨石とはやや異なった様相がみられる。攪乱されていない部分の床面から出土しているので，混入品とは考えにくく，奈良時代ころに意図をもって本跡に持ち込まれたものと考える。ただし，出土地点は，弥生時代住居跡と重複する部分である。



第190図　SI-063と出土遺物

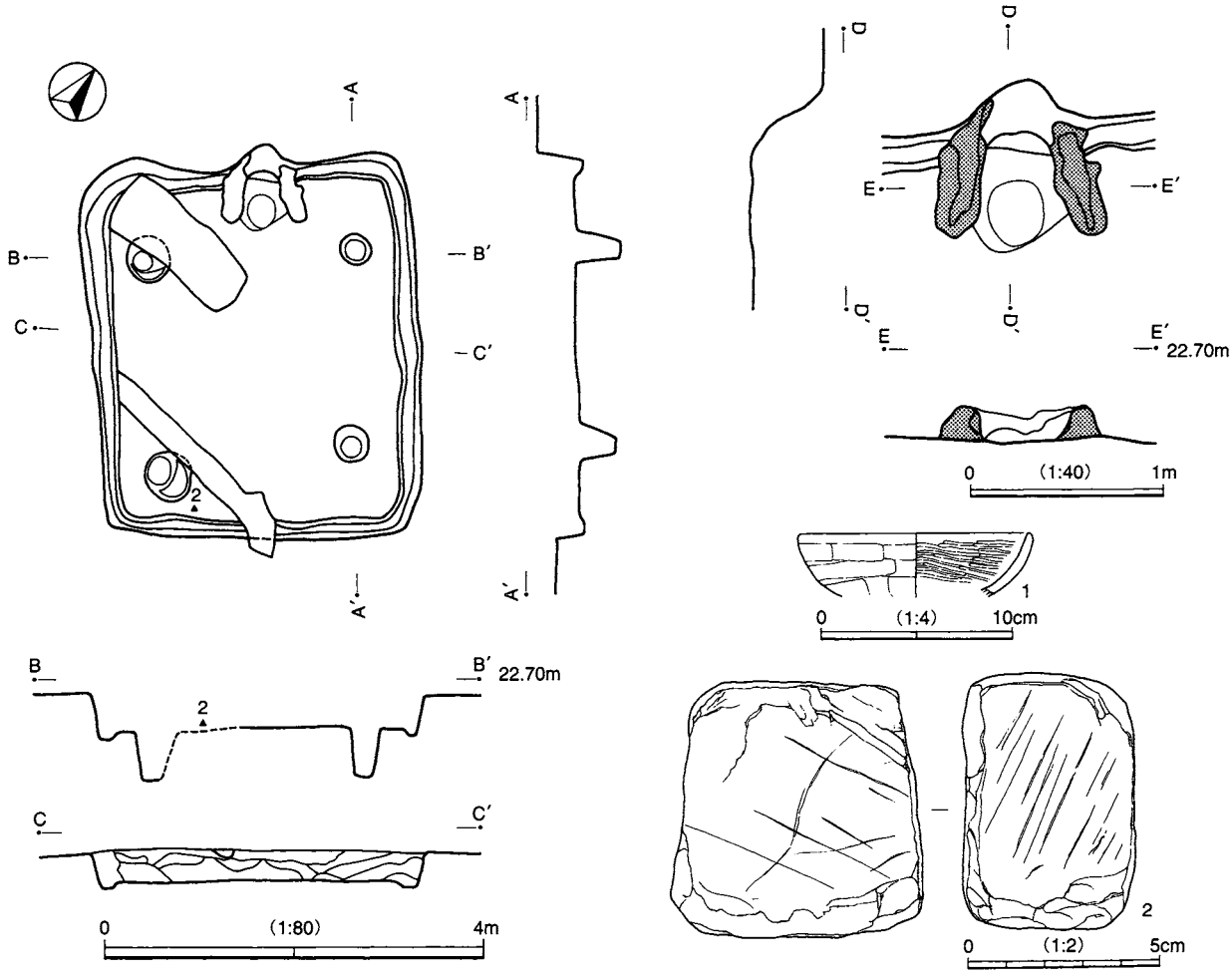
SI-069（第192図，図版120）

台地南部の最東端に位置する竪穴住居跡である。観音塚遺跡を望む谷の斜面部に離れて検出された。西側から北側にかけての壁溝をもつ壁と，4.0ｍ×1.5ｍの床面のみ残存しているのが検出され，そこから推定される形状は隅丸方形もしくは楕円形である。覆土上部をSD-10によって攪乱されているが，暗褐色土を主体とした３層に分けられる。いずれも自然堆積と考えられる。深さ20㎝前後のピットが３か所検出されたが，柱穴であるかは判然としない。

西辺南寄りの壁溝際で，比較的大きな薄手の土師器甕Ｂ片（２）を検出した。武蔵型甕としては比較的古い形態をもつので，奈良時代の所産である。ほかに鉄製刺突具が１点（１）出土した。

SI-070（第193図，図版39・120）

台地東部の北西寄りに位置する竪穴住居跡である。主軸は北からやや西に振れている。北辺中央にカマドが設けられている。カマド対面にあたる南辺中央の小ピットと，対角線上に位置する４か所の主柱穴のほか，カマド両側に一対のピットが検出されている。また，南西側と南東側の壁溝中にも壁柱穴と思われる小ピットが認められる。床面は全体に堅緻であるが，カマド前面から主柱穴の間にかけての範囲で，とくによく締まっている。土層は７層に分けられるが，自然堆積の状態を呈す。



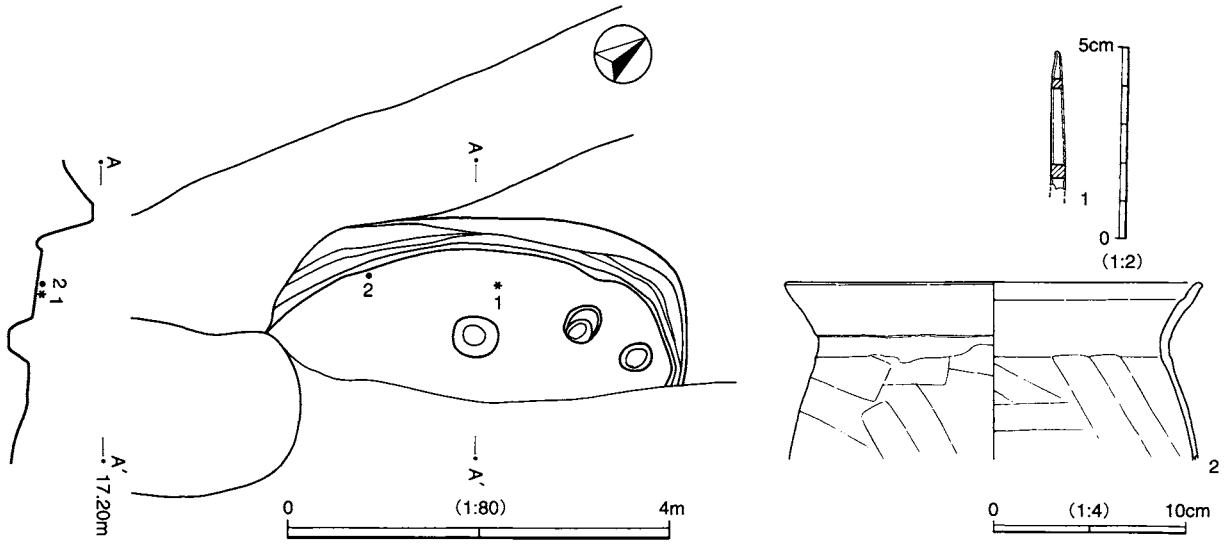
第191図　SI-067と出土遺物

図示した遺物はカマド前に集中して検出された。4点の須恵器坏B蓋には，灰色～灰褐色に還元焼成されたもの（4・5）と，赤みを帯びた橙色に焼成された須恵器もしくはロクロ土師器（7）がある。後者は，口縁端部内側に身を受ける「かえり」状の突帯がわずかにみられ，胎土には雲母が含まれていることから，常総地域で生産された可能性が高い。土師器では，坏には内外面にミガキを施した浅い丸底の坏Fが3点（8～10）あり，（8）の内面は黒色処理が施されている。また，浅い平底の坏Hが2点（12・13）ある。（12）は上部に強いヨコナデを施し，下部のみヘラケズリ調整をしており，ヨコナデ部分には内外面とも黒色処理がみられる。ロクロ整形をした（13）にも，内部に黒色処理の痕跡が認められるとともに，螺旋状の暗文がみられる。ほかに，内面に粗いミガキをもつ甑（14）と武蔵型の甕A（15）がある。奈良時代の比較的古相を示す土器群である。

鉄製品では鎌（1）と刀子（2）が1点ずつ出土している。鎌の切先や刃部はかなり摩滅し，使い込んだことがうかがえる。ほかに軽石（3）が1点ある。

SI-078（第194図，図版41）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。主軸は北からやや西へ振れている。北辺中央にカマドが設け



第192図　SI-069と出土遺物

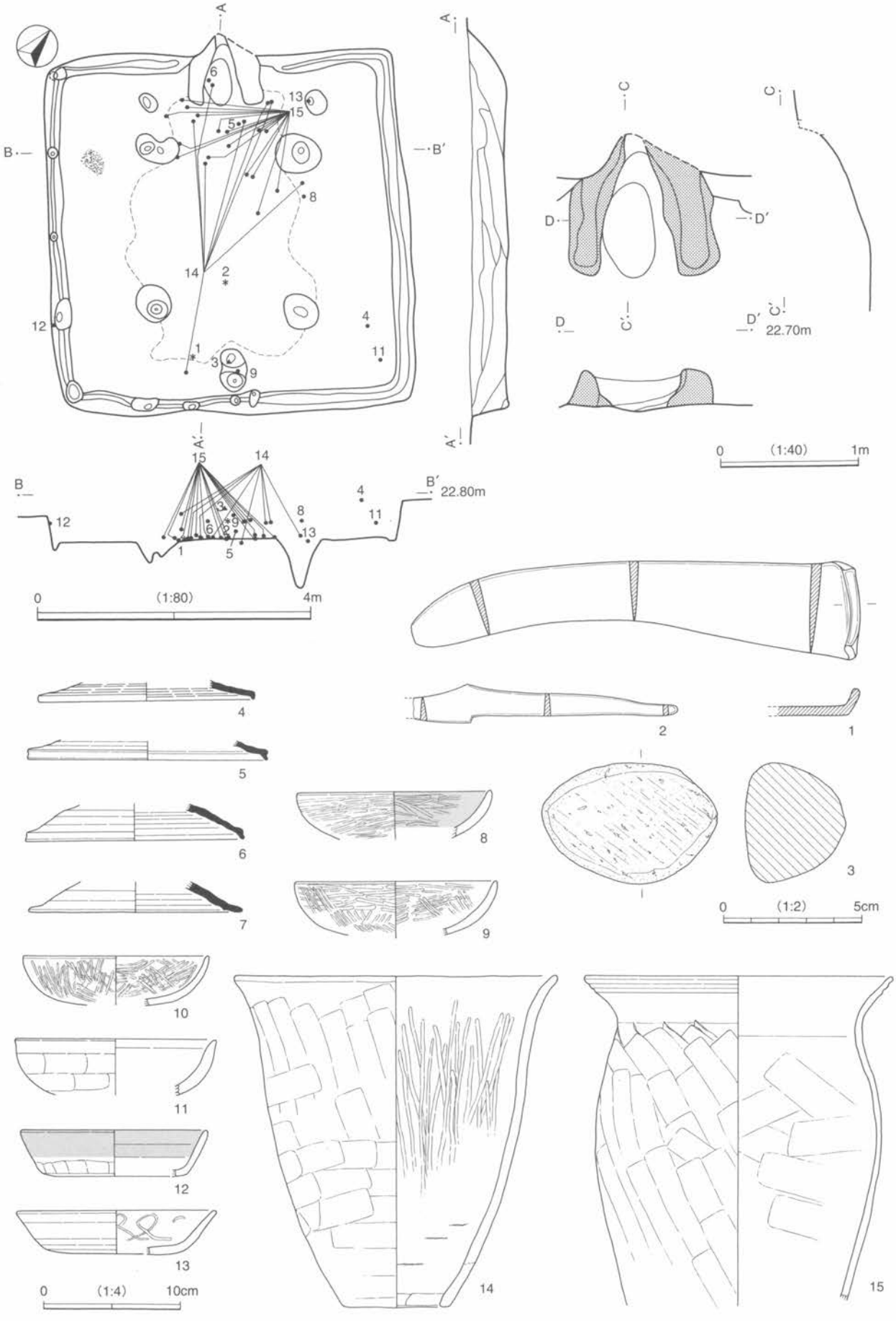
られている。壁溝は全周する。カマド西側手前に貯蔵穴，対角線上に主柱穴４か所，カマド対面の南辺中央に出入口施設とみられるピットが配されているほか，カマド正面にも，深さ10.1㎝のピットが検出されている。覆土各層にはロームブロックが多く混入していることから，人為的に埋戻されたと考えられる。

覆土中からは比較的多くの土器片が出土したが，本跡に伴うと思われるのは台付甕（１）のみである。脚の造りが厚く，短いことから，奈良時代でも比較的古相を示すと考える。

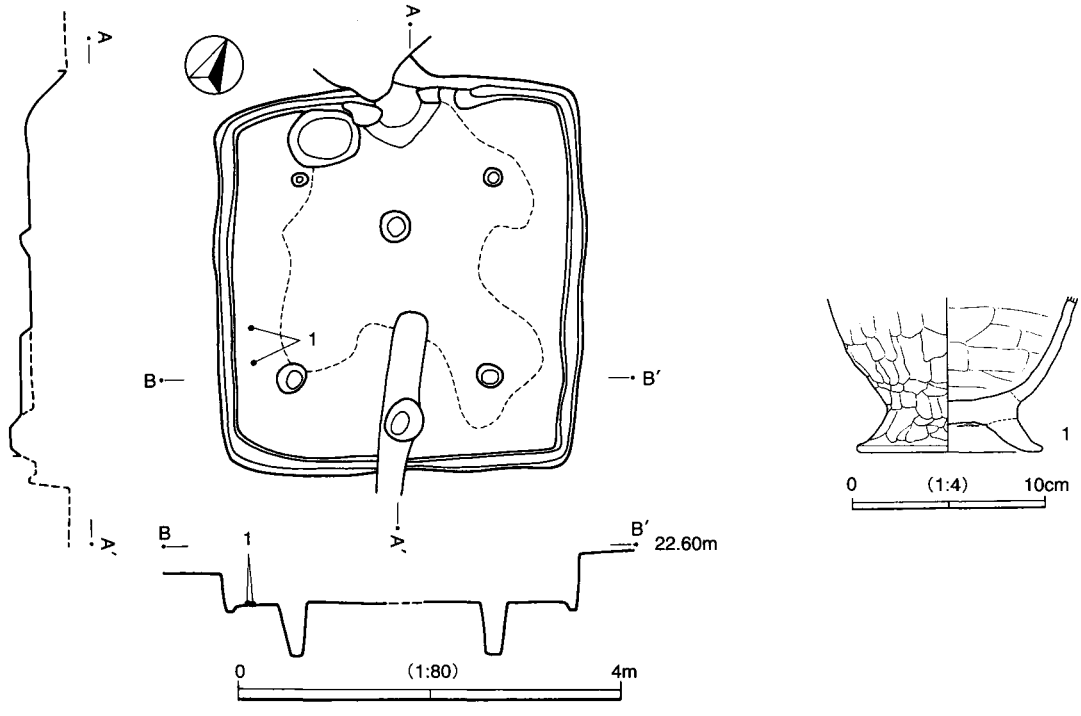
SI-079（第195図，図版41・120・121）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。SI-078の東４ｍに隣接する。主軸をほぼ北にとり，北辺にカマドをもつ。カマド対面の辺中央に小ピット，対角線上に４か所の主柱穴を有する。覆土は４層に分けられ，最下層に黒褐色腐植土が堆積していることから，廃絶直後における人為的な埋戻しはされなかったと考える。主柱穴の間を中心に床面全体が堅緻である。また，主柱穴には柱痕が認められた。

遺物の量，種類ともに多く，遺構全体から検出されており，出土位置で新旧を分離するのは困難である。土器類のほか，管状土錘が２点，鉄製品が５点出土している。鉄製品はいずれも断片的な資料であるが，鉄鏃（４・５）・刀子（６・７）が２点ずつ，端部を折り曲げた板状鉄製品（３）が１点ある。土器類では，希有な例として須恵器短頸壺の蓋（８・９）が２点みられる。市原市永田・不入窯跡群の製品に類似している。須恵器坏は広い平底の坏Ａを主体とするが，全容のわかる（10）はやや底の小さい坏ＡⅡである。須恵器甕類では，粗いが規則的に施された横筋のタタキ目をもつ，厚手の甕（20）がみられる。これら須恵器は，いずれも灰色に還元焼成されている。土師器坏類では，浅い丸底の坏Ｆ（15）がみられる。口縁の内側に油煙が付着しているので，灯明皿として使用されたとみられる。土師器甕類には「在地」の甕Ｂ（18），武蔵型の甕Ａ（21～23），小型甕（16・17）がある。小型甕の口縁端部をつまみ上げる特徴は新出の要素である。土器群としては奈良時代の比較的新相を示しているが，湖西産とみられるフラスコ形長頸壺（19）のように，永く伝えられたと考えられるものも出土している。



第193図　SI-070と出土遺物



第194図　SI-078と出土遺物

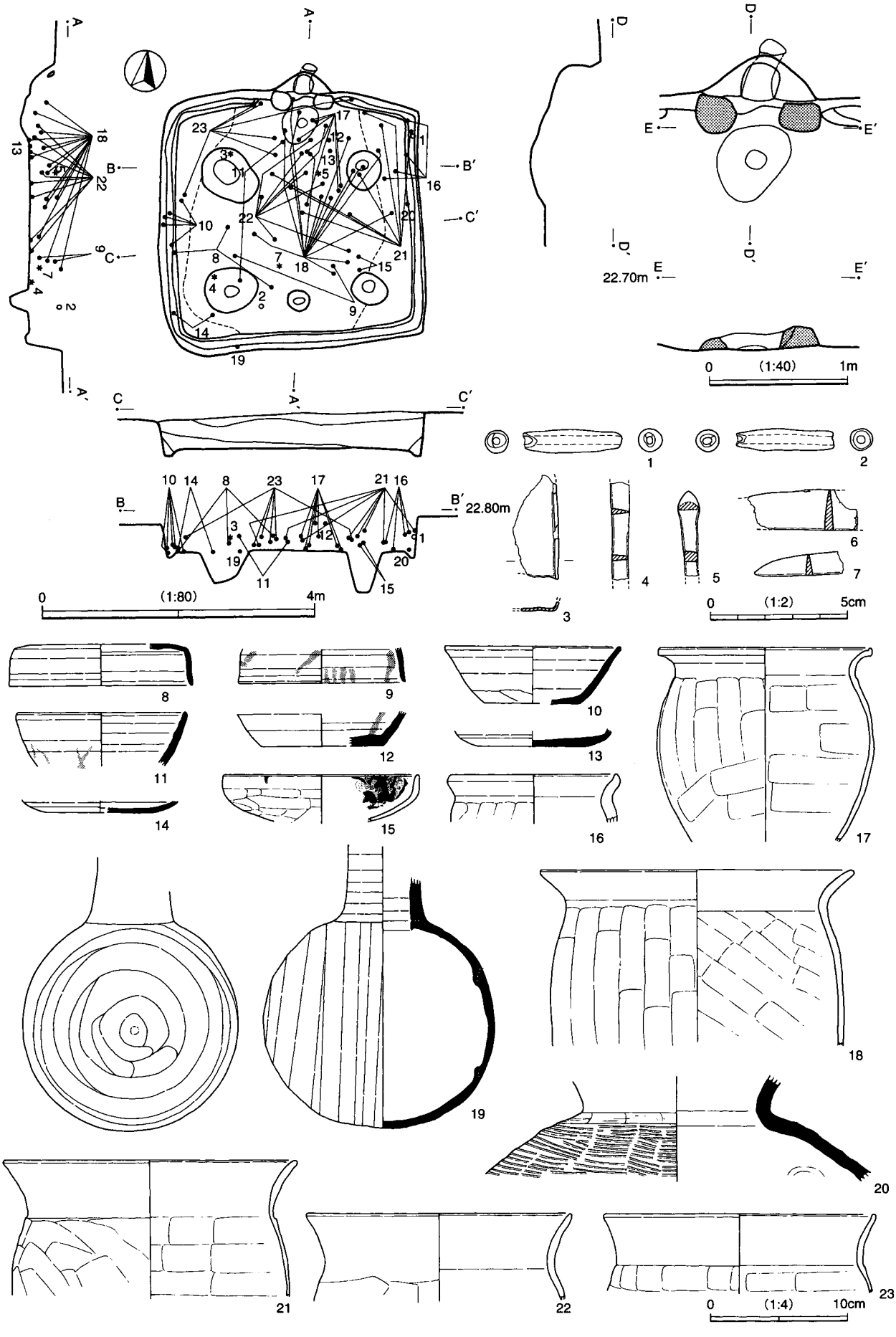
SI-080（第196図，図版42・121）

台地東部に位置する竪穴住居跡である。SI-079の19m東にある。主軸をほぼ北にとり，北辺中央にカマドをもつ。カマド対面の南辺中央に小ピットと，対角線上に4か所の主柱穴を有する。覆土は概ね3層に分層でき，最下層にローム粒・細ロームブロックを含む茶褐色土，中層にローム粒・ロームブロック・黒色粒を含む茶褐色土，上層にローム粒を混入する茶褐色土が堆積する。カマドは袖部のほかに天井材が残り，当時の状態に極めて近い状態で遺存しており，煙道と思われる部分も検出できた。火床部からは支脚（5）が立位で検出された。

遺物は遺構全体に散在しているが，図化可能なものは東側で出土した。須恵器坏Bが1組（1・2）ある。蓋（1）は硯に転用され，内面にやや平滑になった面があるほか，図の網掛けした範囲で墨がこびりついている。坏身（2）はかなり浅いものである。土師器では，内面を黒色処理した丸底の土師器坏B（3）と，在来の高坏脚部（4）が1点ずつある。奈良時代の古相を示す土器群である。

SI-081（第197・198図，図版42・121・122）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。SI-079の10m南にある。古墳時代後期後半のSI-091が埋没後，その覆土を掘り込んで構築されている。主軸をほぼ北にとる。ほぼ正方形であるが，東辺は西辺よりやや短い。カマドは北辺に設けられているが，わずかに東寄りにある。遺存状態は悪く，右側の袖を残すのみである。カマド対面の南辺中央に小ピットがあり，対角線上に4か所の主柱穴が認められるほか，西側壁溝中に1か所，東側壁溝中に3か所の，柱穴と思われる小ピットが検出されている。覆土は大きく2層に分けられ，下層に細ロームブロック・ローム粒・赤色粒が混入した黒褐色土，上層に細ロームブロック・赤色粒・炭化粒が混入した暗茶褐色土が堆積している。人為的な埋戻しの痕跡は見いだしがたい。

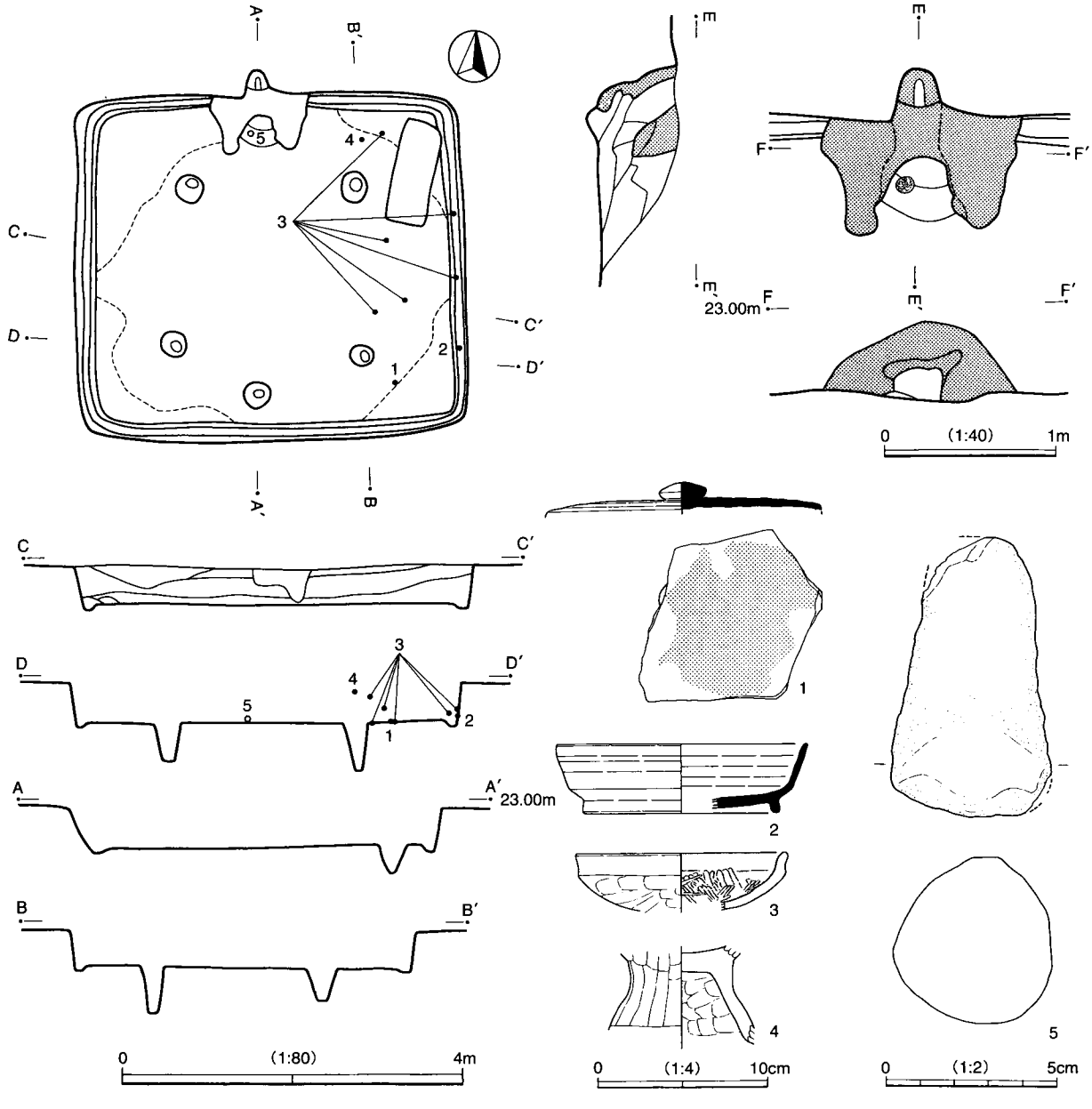


第195図　SI-079と出土遺物

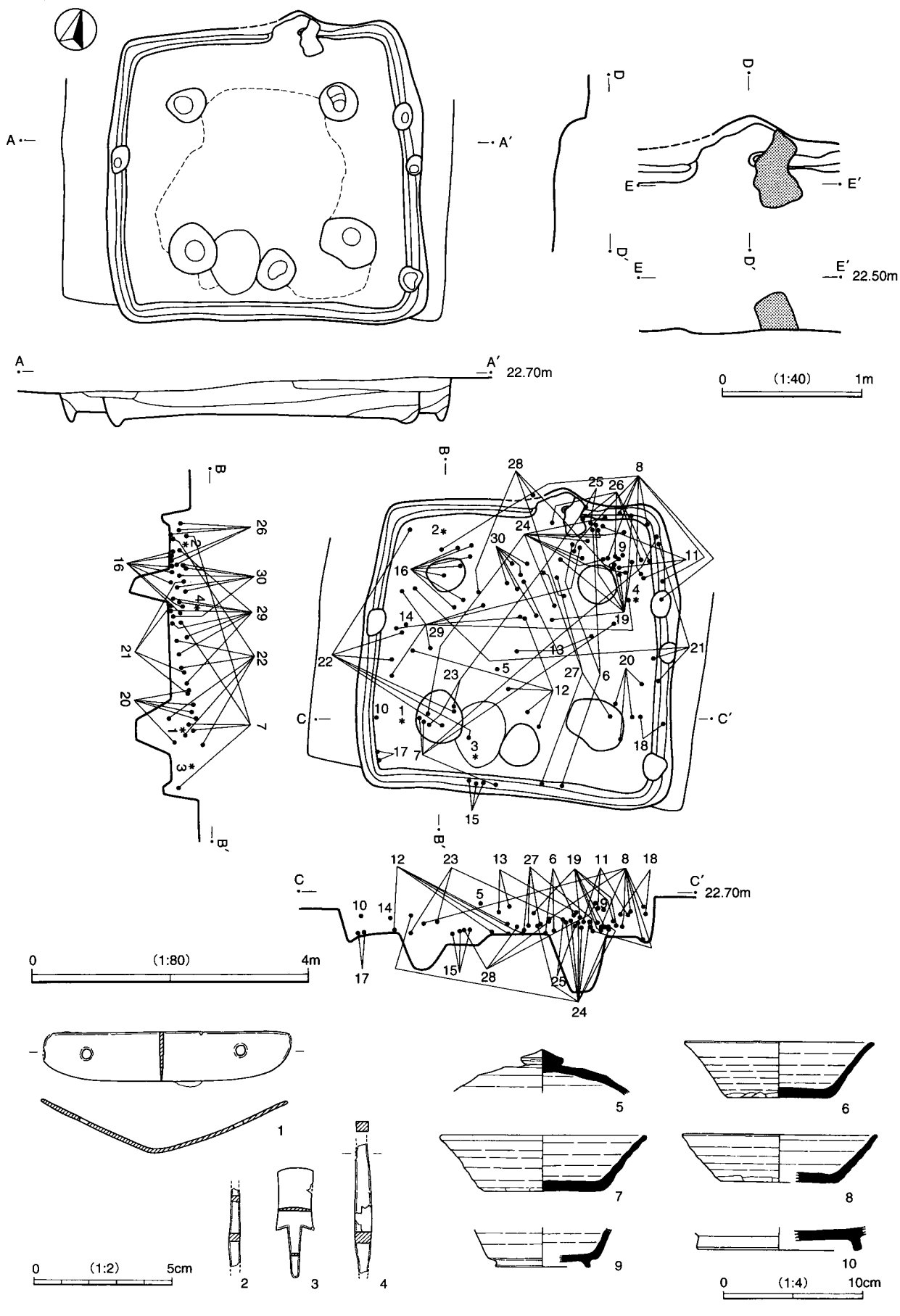
遺物は，覆土の上下を問わず，遺構全体から多量に出土した。とくに，カマドの北東周辺に集中する傾向がみられた。

鉄製品は４点あり，穂摘み具（１）・鉄鏃（３）・工具（２・４）がみられる。

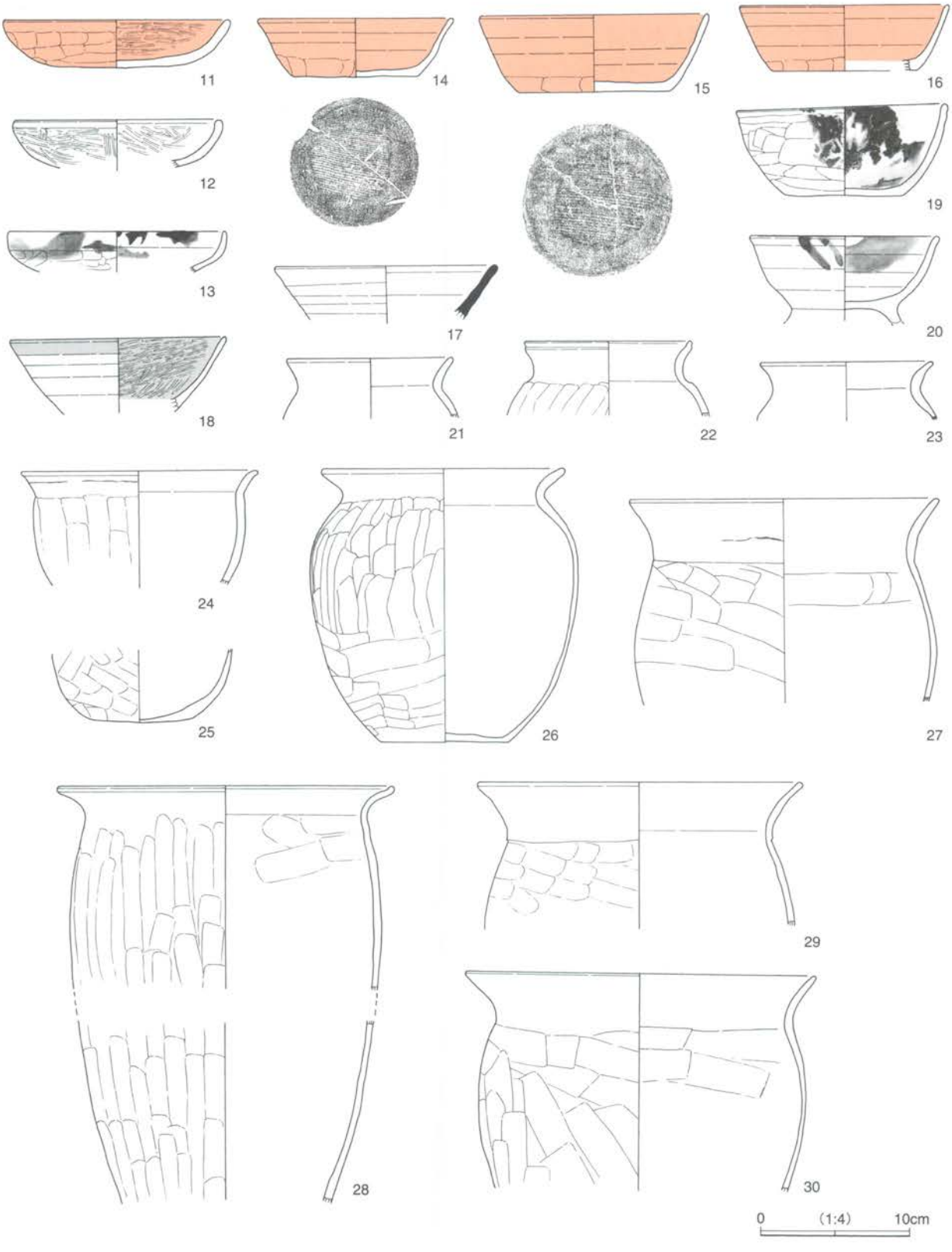
土器類は26点図示した。須恵器には，坏Ｂ蓋（５），大小の坏Ｂ（９・10），深身でやや開き気味の坏ＡⅡ（６・７），浅めの坏ＡⅣ（８）がある。土師器では，坏類にやや小型の丸い坏Ａ（12），浅い丸底の坏Ｆ（11・13），ロクロ土師器坏Ｇ（15・16），坏Ｈ（14），鉢Ｂ（19・25）がある。これらには内外面を赤彩したもの（11・14～16），漆あるいは油煙と思われる煤がつくもの（13・19）がある。甕類には，小型甕（21～25），武蔵型の甕Ａ（27・29・30），「在地」の甕Ｂ（28）と甕Ｃ（26）がある。「在地」の甕は薄手になり，口縁部をつまみ上げるなど，新しい変容の兆しがみえている。細片には，端部をつまみ上



第196図　SI-080と出土遺物



第197図　SI-081と出土遺物（1）



第198図　SI-081出土遺物（2）

げ，内面底から内壁面にかけて螺旋状の暗文が施される畿内系の坏が２片含まれている。これらは奈良時代の比較的新相を示す土器群と考える。

なお，須恵器坏（17），内面にミガキをして黒色処理した土師器鉢Ｃ（18），足高高台付坏（20）は平安時代の土器群が混入したと考える。しかし，いずれも床面のやや上で出土しており，層位的分離が可能という出土状況ではなかった。

SI-084（第199・200・201図，図版43・122）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。主軸は北からやや西に振っている。南辺が2.85ｍに比べて，北辺が2.55ｍとやや短い。カマドは北辺のほぼ中央にあり，壁溝は南東隅を除いて全周する。壁溝中には各辺３か所以上の小ピットが設けられている。柱穴は対角線上に４か所，カマド対面の南辺中央に出入口施設とみられるピットをもつ。カマド前から柱穴の間にかけて，硬化面が広がる。覆土は６層に分けられるが，各層にロームブロックが混入し，とくに中層に多量のロームブロックがみられることから，人為的に埋戻されたと考えられる。また，東側の一部では，もともとの掘りかたの上に貼床をしているのが検出されている。

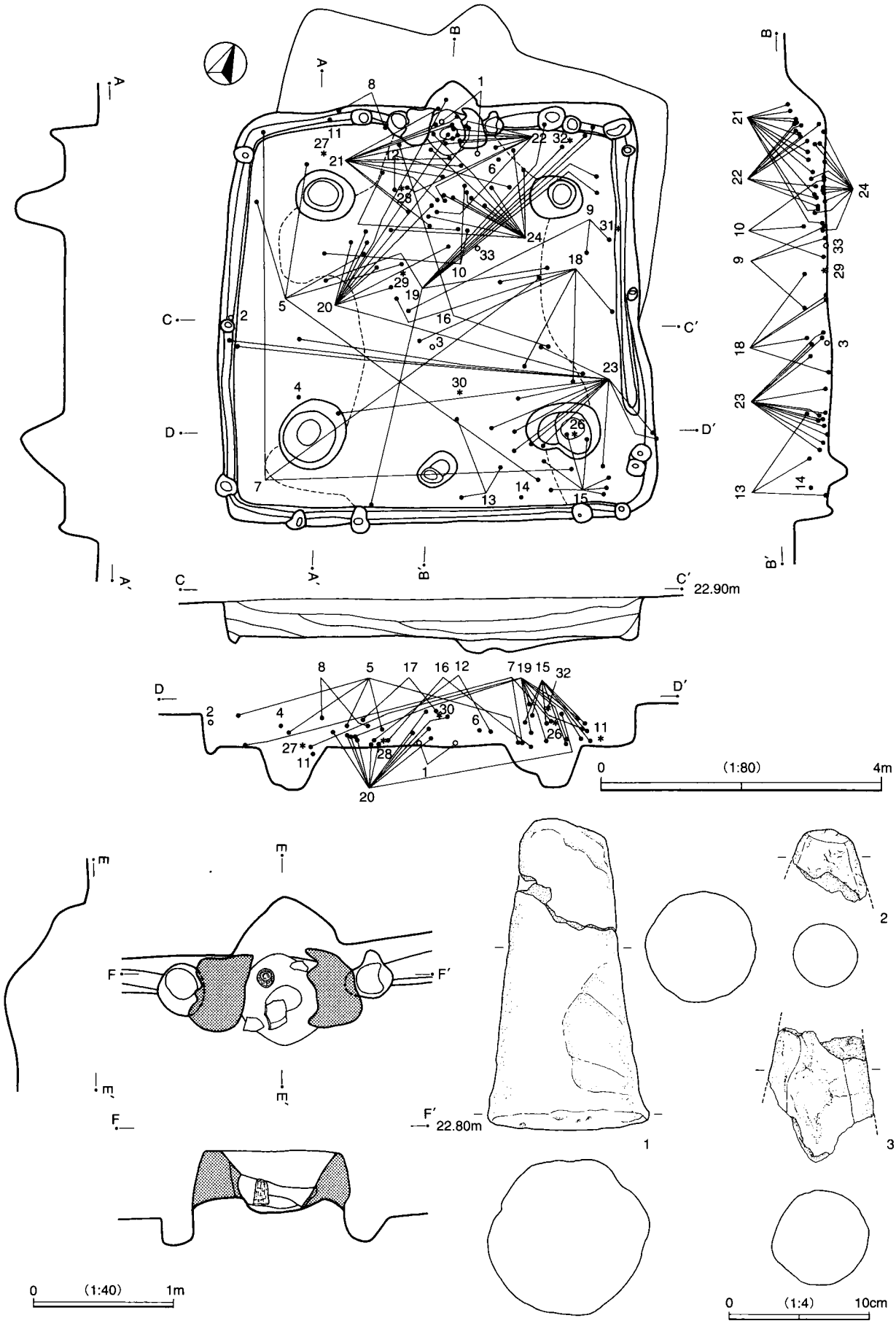
遺物は床面直上と覆土下層から多量に出土し，とくにカマド前面と南東の柱穴付近に集中している。カマドの火床には支脚（１）が１本立てられたまま遺存していたが，これとは別個体で，西側壁溝内と床中央部から同一のものと思われる２点の支脚片（２・３）が出土している。

土器類は21点図示した。須恵器は坏類のみであり，浅身の坏ＡⅣ（７・８・10），器壁下部を強く削った浅身の坏ＡⅤ（９），坏Ｂ蓋Ⅲ（４・６），同Ⅳ（５）があり，底部外面に「本」の線刻文字が読みとれるもの（11）がある。胎土に白雲母を含む茨城産（７・８・10～14）と，市原産（９）とみられるものがあるが，前者が主体である。土師器では，坏に内外面を黒色処理した丸底の坏ＤⅡ（15）と黒色処理をしていない坏ＤⅡ（17），赤彩した浅身平底の坏Ｅ（16）がみられる。甕は極めて器壁が薄い武蔵型の甕Ａ（18・20～23）が主体であるが，器壁が滑らかなやや厚手の甕（19），底部に木葉痕をもち，胎土に白雲母を含む常総型の甕Ｄ（24）が１点ある。奈良時代の比較的古相を示す土器群といえよう。

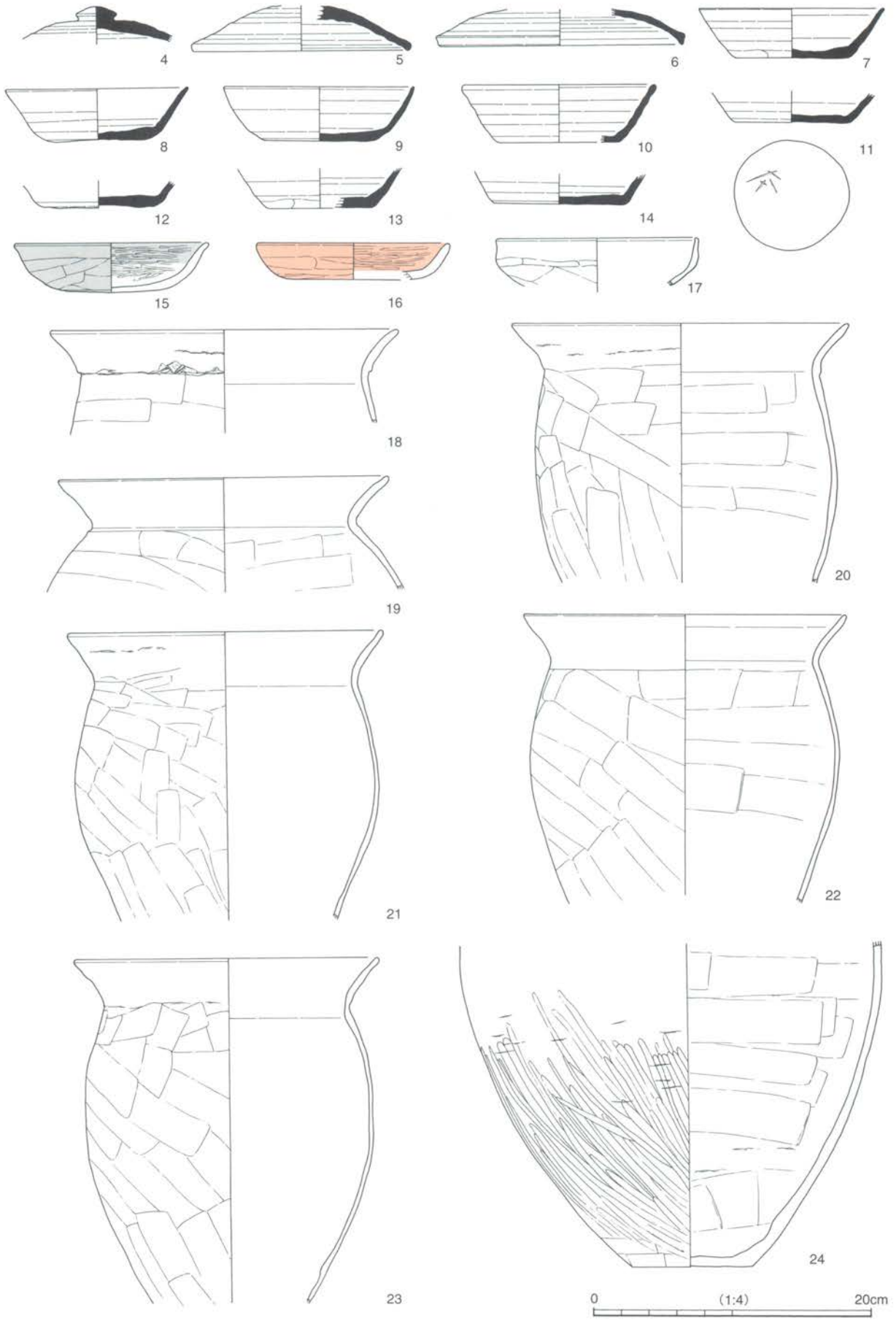
覆土から軽石１点（25），鉄製品７点，管状土錘１点（33）が出土している。鉄製品には刀子４点（26～28・31），穂摘み具（29），工具の柄２点（30・32）があり，刀子には意図的に折り曲げられて廃棄されたもの（31）がある。

SI-098（第202・203図，図版50・125・126）

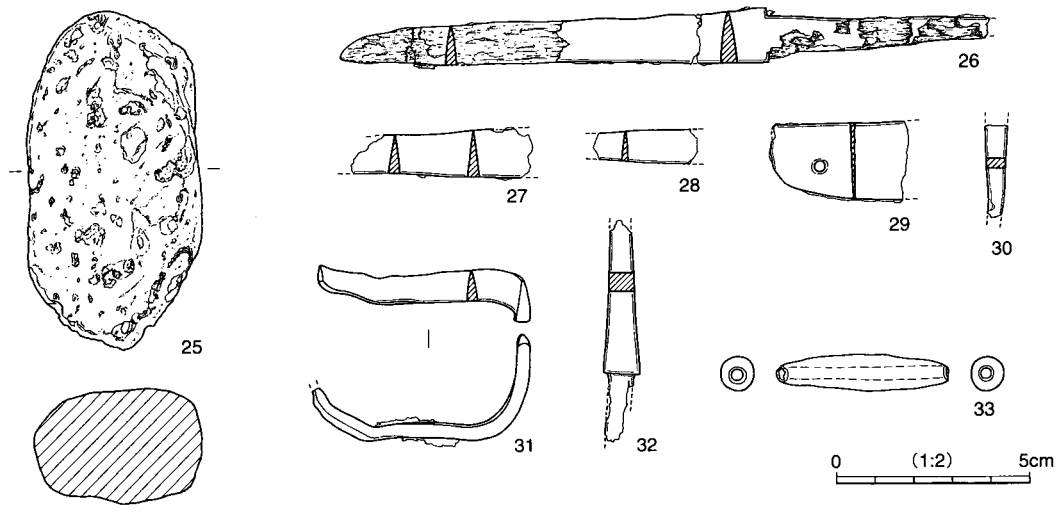
台地中央部に位置する竪穴住居跡である。SI-081・084と並ぶように検出されている。古墳時代後期後半のSI-106を切っており，上部を平安時代のSI-097に切られている。主軸はほぼ北で，カマドを北辺中央にもつ。壁溝は全周する。カマド前面から主柱穴の間の床面が踏み固められて硬化している。対角線上に主柱穴が４か所に配され，カマド対面の南辺中央に出入口施設とみられるピットがある。柱穴はいずれも上半が大きく掘り広げられており，抜取りが行われたようである。カマド両脇のほか，壁溝中に各辺２か所～７か所の小ピットがある。覆土の各層にはロームブロックが混入しており，上下する層の間で遺物の接合関係がみられるため，人為的に埋戻されたものと考えられる。床面直上から出土した遺物は，カマド周辺を中心に北側に集中する。また，カマドの中からも甕が１個体分出土した。



第199図　SI-084と出土遺物（1）



第200図　SI-084出土遺物（2）



第201図　SI-084出土遺物（3）

土製（1）と石製（2）の紡錘車が1点ずつ出土している。鉄製品は5点あり，刀子（3），穂摘み具（4），鉄鏃（5），鑷子（6），吊り手状の鉄製品（7）がある。

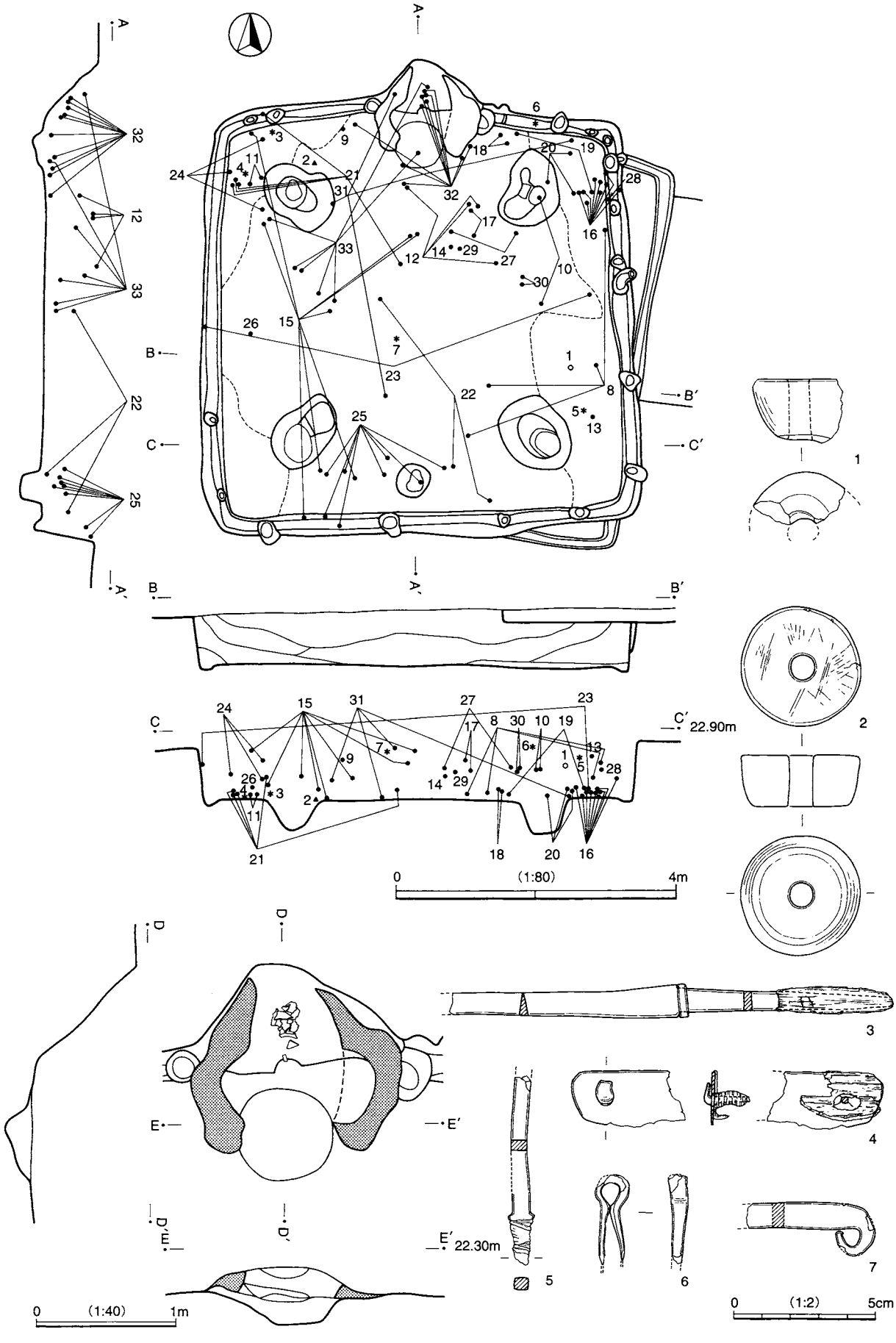
土器類は26点を図示した。覆土の上層と下層で出土位置が分かれているが，土器の形態にはあまり差がみられない。須恵器はいずれも坏類である。浅い逆梯子形の坏AIVが主体（8・10～14）である。底部外面には「×」印の線刻をもつもの（11）を含む。いずれも灰色に還元焼成されている。底径が口径の1/2以下の坏D（9）は，赤褐色に焼成された千葉産須恵器であり，明らかに覆土上層から出土しているので混入品と考える。土師器では，内面にミガキをもつ平底の坏C（15），黒色処理した丸底の坏B（18～20），赤彩した浅い平底の坏E（16），赤彩した浅い丸底の坏Fの大型品（17），赤彩した浅いロクロ土師器坏H（21～26）があり，坏類は浅身の坏が主体である。甕類は，武蔵型の甕A（32）と「在地」の甕B（30・31・33）である。覆土上層出土の甕（30）は薄手であり，口縁部に面を有するなど，やや変容している。混入品を除くと，奈良時代の比較的新相を示す良好な土器群である。

SI-100（第204図，図版51・126）

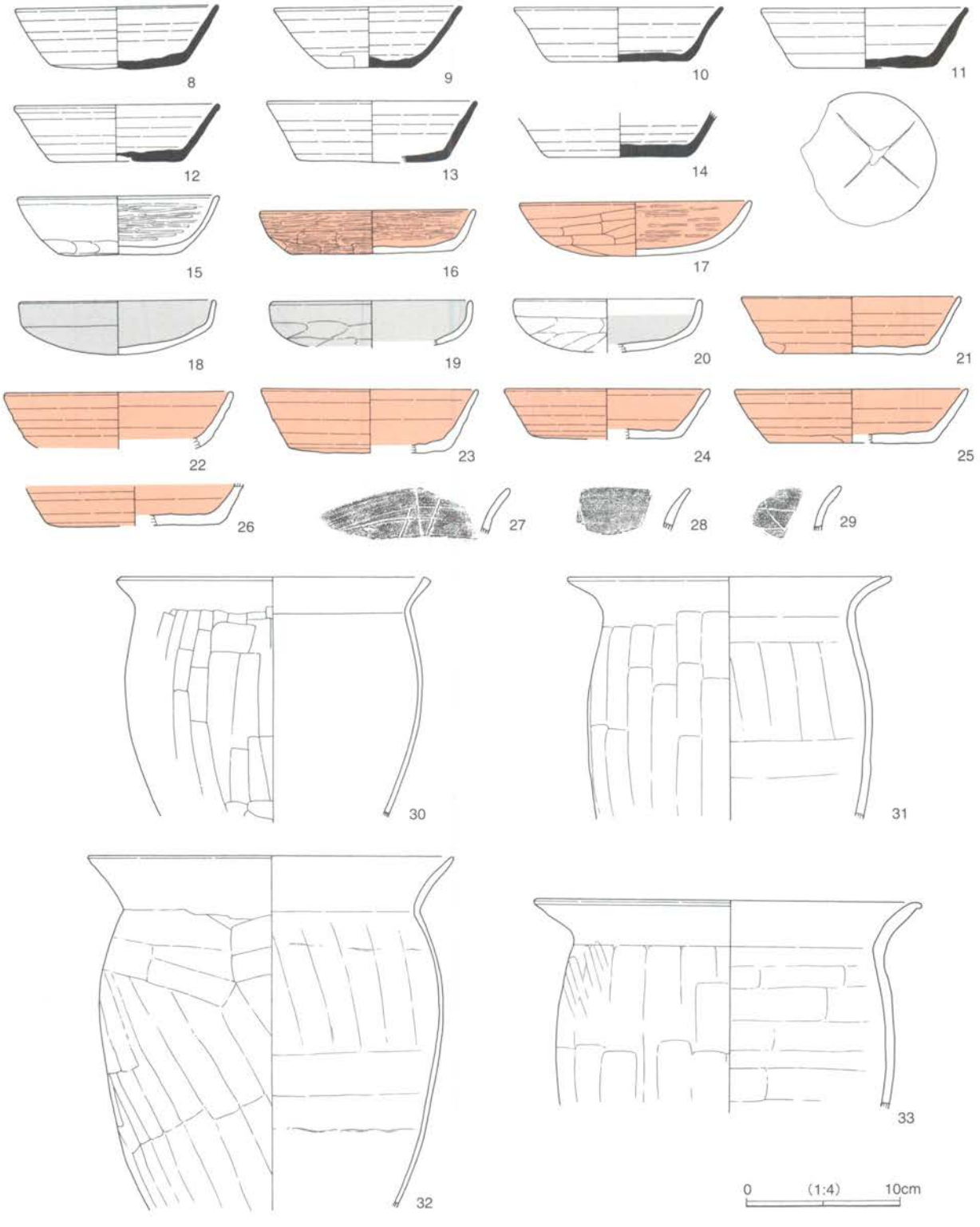
台地南部の東寄りに位置する竪穴住居跡である。主軸は北西にとっており，カマドが北西辺中央に設けられている。隅部分を除き，床面は踏み固められて硬化している。壁溝は全周する。壁溝中には計6か所の小ピットが検出されている。対角線上に主柱穴4か所が配され，カマド対面の南東辺中央に出入口施設とみられるピットがある。柱穴はいずれも上半が大きく掘り広げられており，抜取りが行われたようである。北側と南側の柱穴では，その東隣りにロームブロックを主体とする土が小山状に残されていた。これは，抜取りの際に出た排土と考えられる。本跡の覆土にも，各層にロームブロックが混入しており，異なる層の間で遺物の接合関係がみられるので，埋戻しが行われたと考えられる。

遺物は遺構内全域から出土しているが，遺存のよいものは北半分に集中している。

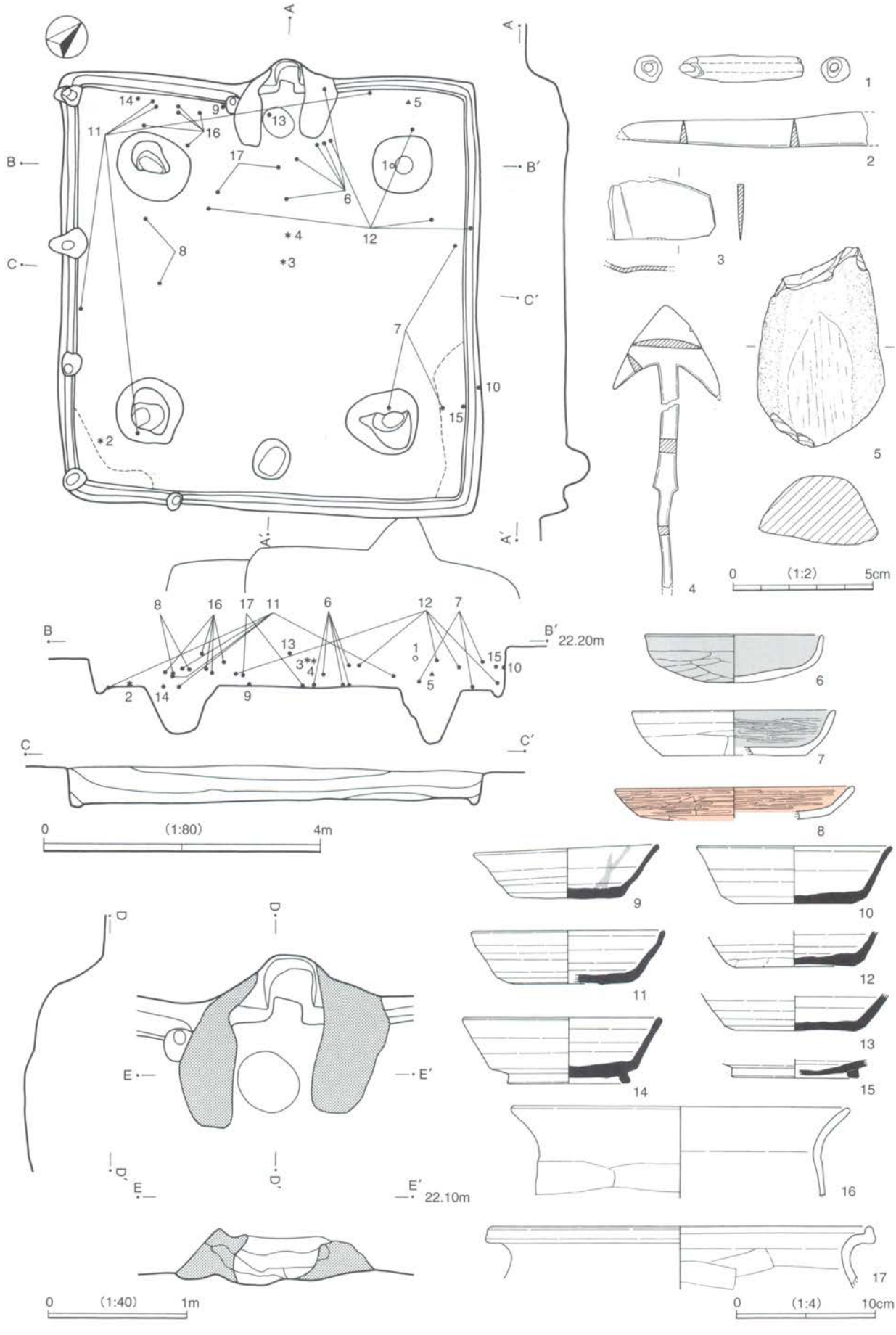
鉄製品には，刀子（2）・穂摘み具（3）・鉄鏃（4）がある。鉄鏃は覆土上層から出土した。当遺跡では珍しいことにほぼ全容が残っている。逆刺の深い，広根三角形式の長頸鏃である。ほかに，管状土錘（1），敲石（5）が出土している。敲石には被熱による剥離がみられる。



第202図　SI-098と出土遺物（1）



第203図　SI-098出土遺物（2）



第204図　SI-100と出土遺物

土器は12点を図化した。須恵器坏には浅身の坏AIV（9・10・12・13），器壁が内湾気味の浅い坏AV(11)，高台付坏BI（14・15）がある。いずれも灰白色～暗灰色で，例外（11・13）を除き雲母を胎土に含んでいることから，茨城産が主体になっているとみられる。土師器坏には，黒色処理が施された丸底の坏B（6），内面にのみ黒色処理が施された浅い平底の坏E（7），赤彩が施された浅い盤状の坏F（8）がある。甕には武蔵型の甕A（16）と常総型の甕D（17）があり，後者（17）の胎土には雲母が多く含まれる。やや上層から出土したもの（7・8・13・16）には，時期差を含む可能性があるが，総じて奈良時代の比較的古相を示す土器群である。

SI-102（第205図，図版52・126・127）

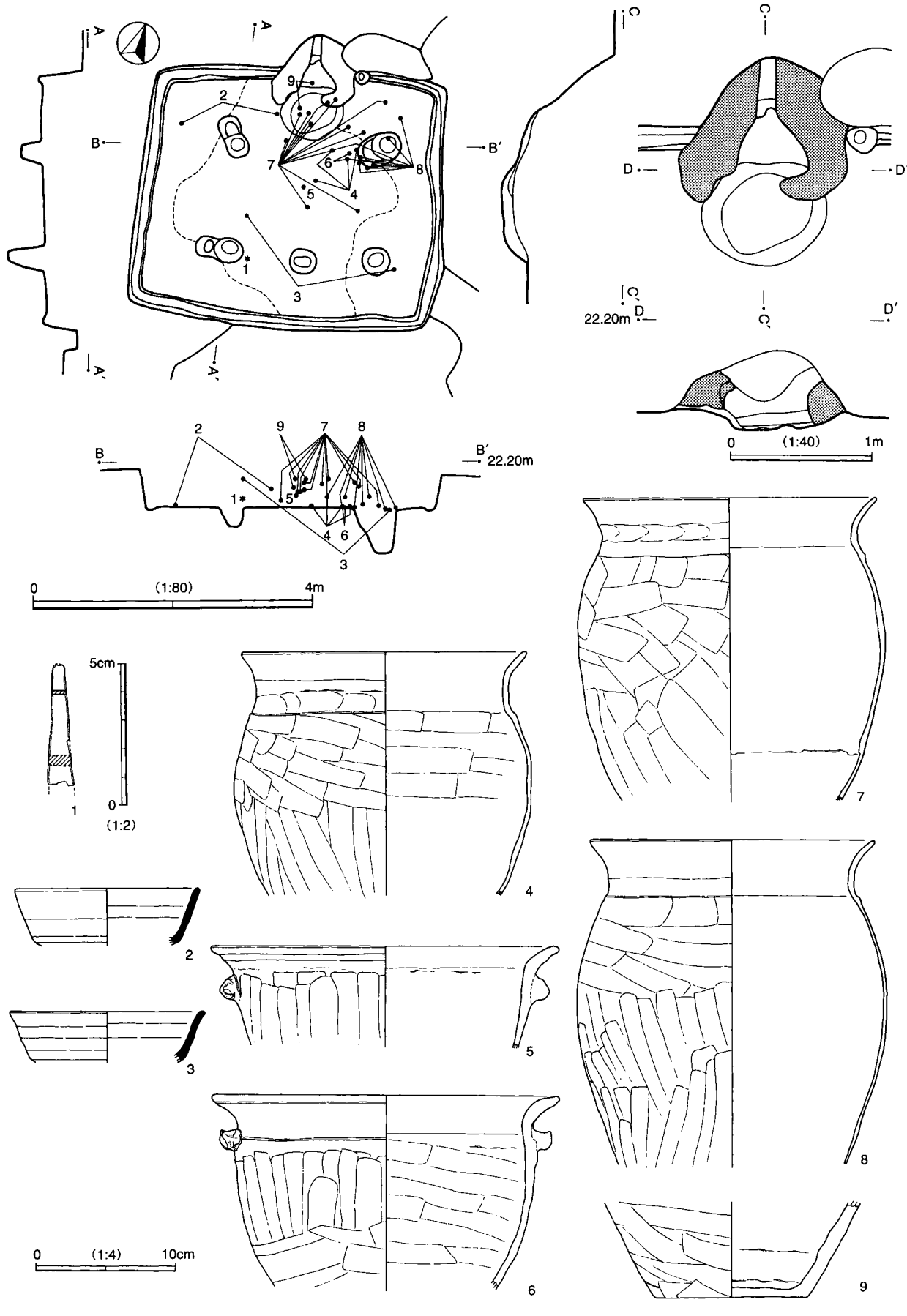
台地南部のやや東寄りに位置する，やや横長の竪穴住居跡である。SI-100 の北西4mに隣接する。平安時代のSI-101,105に切られている。主軸をほぼ北にとり，北辺中央にカマドが置かれている。覆土は概ね3層に分層できるが，全体にロームブロックが混入していたことから，人為的な埋戻しが行われたと考えられる。主柱穴は，対角線上に4か所検出されている。そのうち，3か所では建て替えが行われた痕跡が認められた。また，カマド対面の南辺中央に，出入口施設と思われるピットをもつ。柱穴で囲まれた床面部分に硬化面が広がっている。遺物の出土は多く，遺構全域から出土しているが，図示した遺物は，とくにカマドと北東柱穴周辺に集中している。

南西の柱穴付近で棒状鉄製品（1）が出土している。先端部が欠けていて確証は得られないが，小型のタガネとして使用されたものとみられる。土器は，坏2点，甕4点，甑2点を図化した。坏2点は，深身箱形の坏AI（2）とわずかに開き気味の坏AII（3）に分類できる。いずれも底部が欠けている。黒褐色～暗褐色（2），黄橙色（3）の色調から，土師器との区別が困難である。ロクロ製で，底部の回転ヘラケズリ調整技法や焼成の質感は，千葉産須恵器のものと考える。土師器甕（4・7～9）はいずれも武蔵型の甕Aである。口縁部直下にわずかな段をもち，断面が「コ」の字形に変わる直前の様相をもつ。土師器甑（5・6）は，伝統的な形態とは異なり，2点とも口縁部が強く外反し，高い把手をもつ。奈良時代末から平安時代初頭にかけての土器群とみられる。

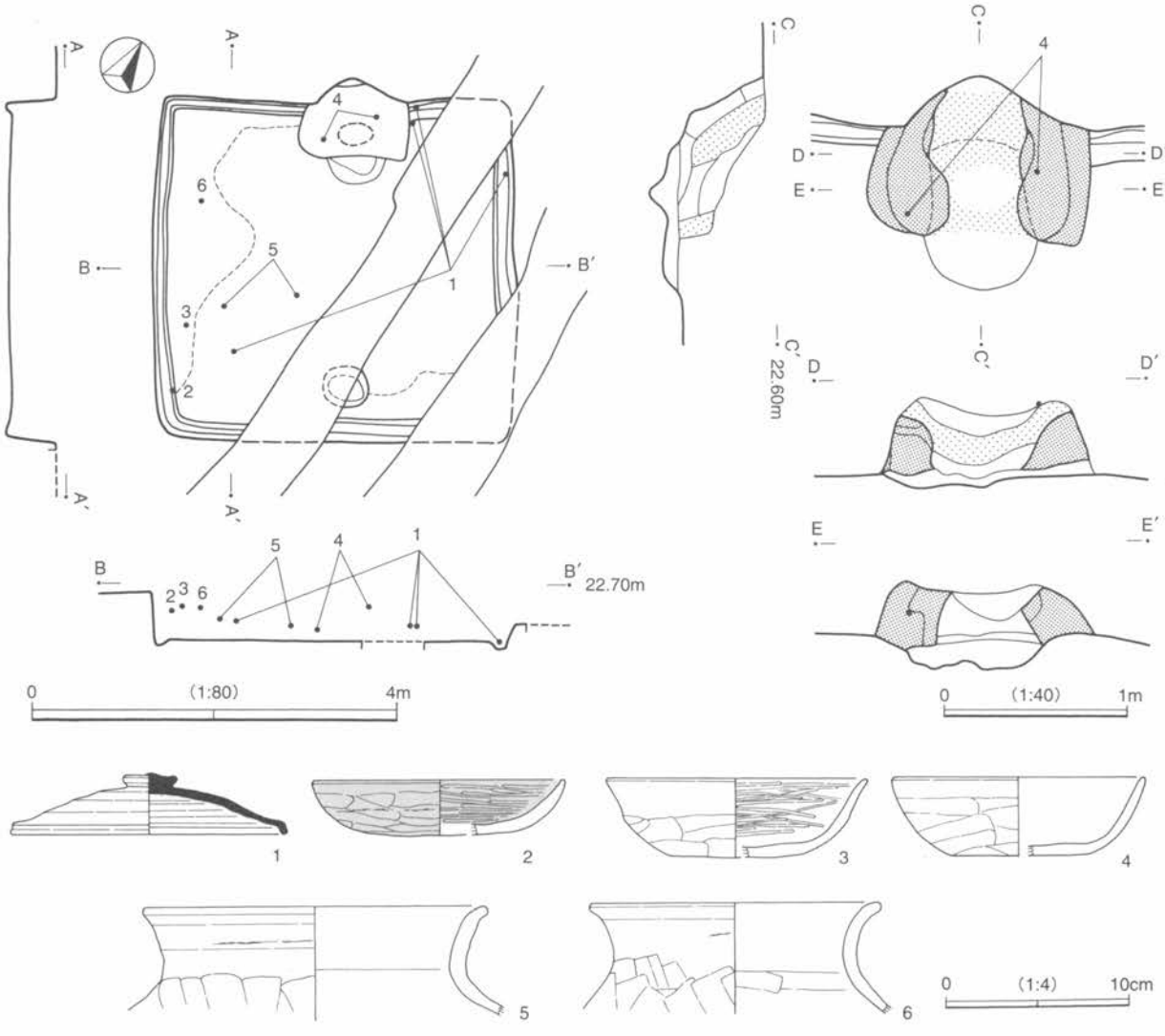
SI-108（第206図，図版54・127）

台地東部の南寄りに位置する竪穴住居跡である。東側に傾斜する谷の斜面に面する。主軸を西寄りの北におく。北辺中央にカマドをもつ。カマド対面にあたる南辺中央の小ピットは，遺構東半分が深く攪乱されていたため，一部分しか残存していない。残存部では硬化面が全体に広がり，壁溝も全周している。柱穴は検出されていない。カマドは袖部だけでなく，山砂で崩落しやすい上部構造が比較的原位置に近い状態で遺存し，掛口を想定することができた。土層はレンズ状に堆積し，最下層に黒褐色腐植土を主体とした土が15㎝～30㎝堆積していたことから，自然埋没の状態を示している。

遺物は残存した遺構内に散在し，図化したものはカマド内と西壁付近で出土した。須恵器坏B蓋III（1）は，灰色に還元焼成されている。土師器坏C（4）はカマド袖にめり込んだ状態で検出された。ケズリ調整ながら須恵器坏と同形に平底化したものである。土師器坏DII（3）も，やや口縁部が外反するという違いはあるが深身平底で，内面がミガキ調整されている。坏F（2）は，浅身丸底が特徴的で，内外面とも黒色処理が施されている。土師器甕（5・6）は，外面が滑らかな厚手のもので，「在地」の甕の一つ



第205図　SI-102と出土遺物



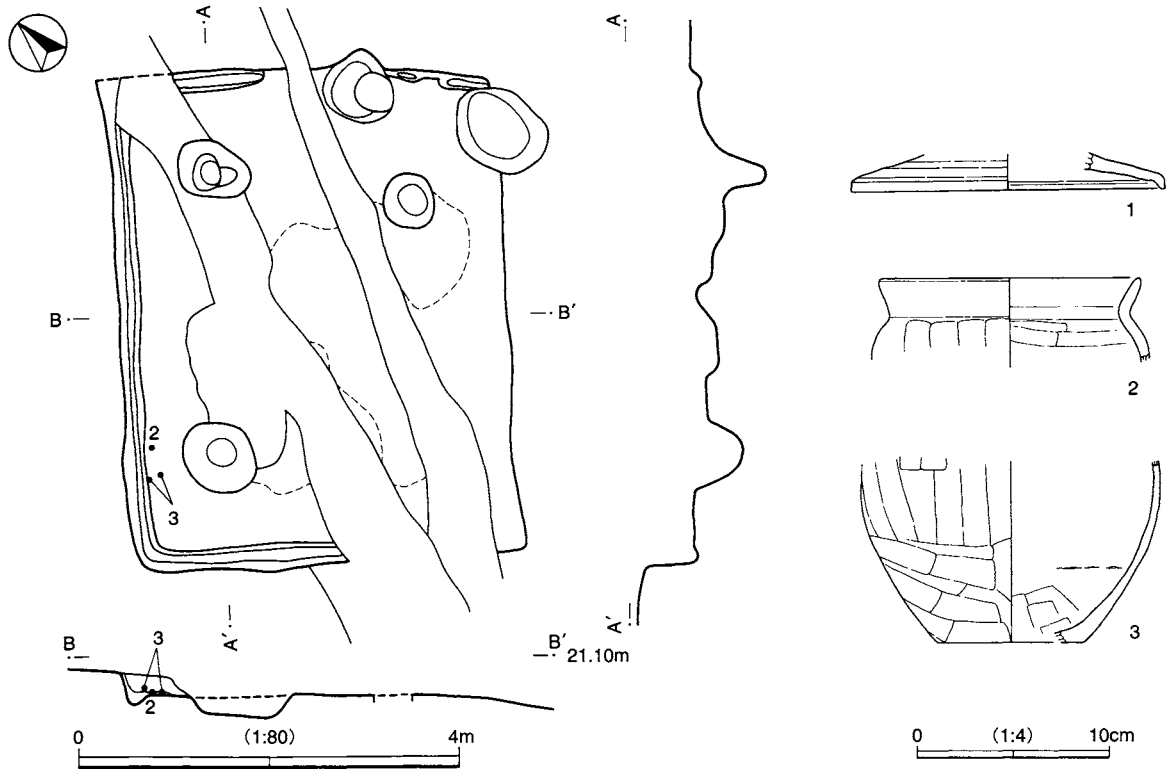
第206図　SI-108と出土遺物

である。これらは奈良時代の古相を示す。

SI-109（第207図，図版54）

台地東部の東端斜面に位置する竪穴住居跡である。中央部をSD-10と水道管の攪乱坑が走っている。土層は暗褐色土を主体としていた。攪乱により，層序を詳細に観察することはできなかった。壁溝は全周していたと思われるが，南東側部分は斜面のため流失し，床面の一部を検出するに留まった。床中央部は硬化している。柱穴と思われるピット3か所のうち，西側の2か所は対角線上に位置するが，残り1か所は，遺構のやや中央寄りに位置している。北東に主軸をとり，北東辺中央にカマドの火床部が確認された。カマドの右側，東隅付近に，径1.0m×0.8m，深さ15cmほどのくぼみを検出した。くぼみの覆土には，カマドから流入したと思われる焼土や砂質粘土が含まれる。しかし，本跡における機能は不明であり，伴うかどうかも不明である。

遺物はごくわずかに検出されている。図化した3点の土器のうち，坏B蓋の破片（1）は，にぶい赤褐



第207図　SI-109と出土遺物

色の焼き締まりの悪い製品である。千葉産須恵器である可能性がある。土師器では素口縁の小型甕A（2・3）がある。奈良時代の所産と考える。

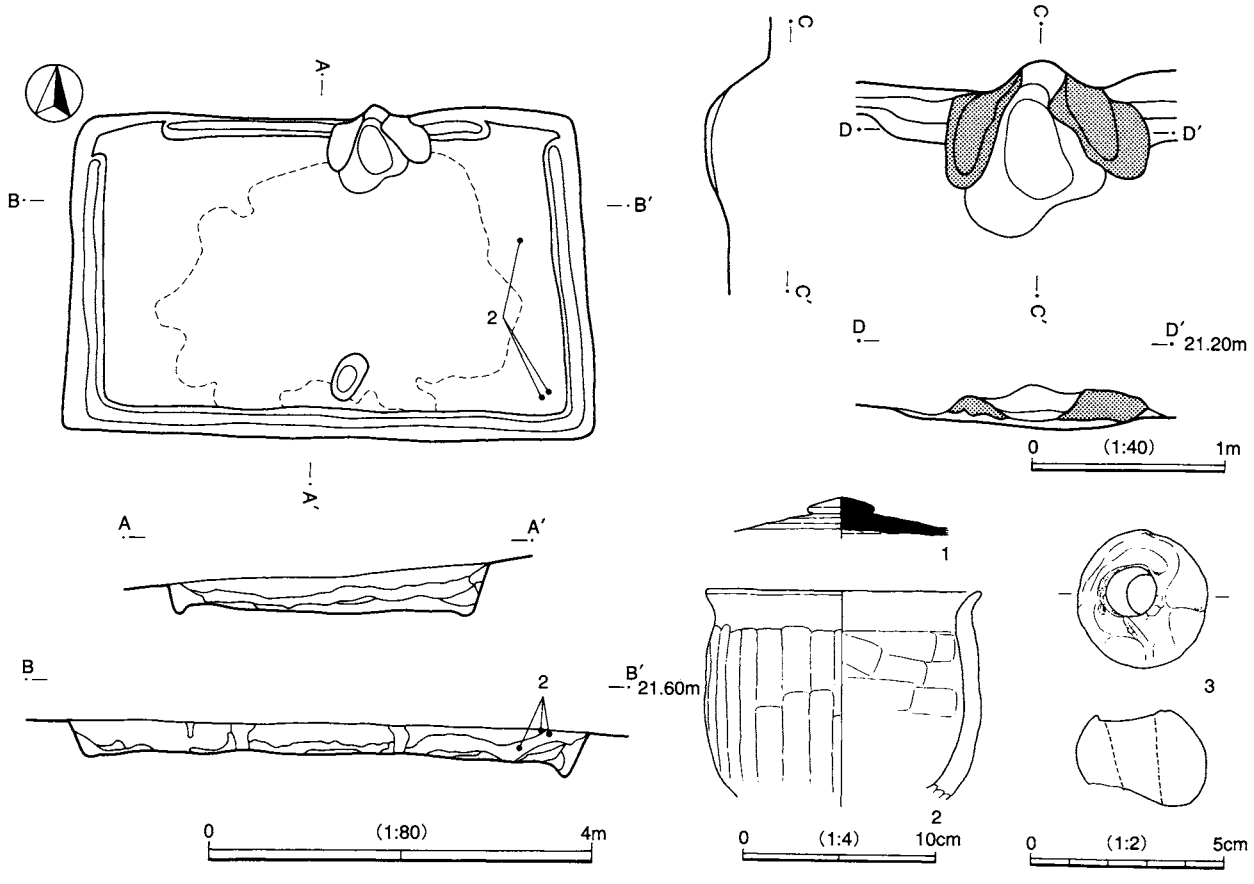
SI-110（第208図，図版55）

台地北部に位置する，特異な形状の竪穴住居跡である。ゆるやかに北側の谷へ向かう緩斜面に面している。主軸は北をとる。北辺にカマドをもつが，東から3分の1の位置に偏っている。本跡の形状は長辺が短辺の約2倍もの長さの，明瞭な長方形をしている。柱穴等は検出されず，唯一カマドと反対側の南辺に小ピットが検出されている。床面中央部には硬化面が広がる。壁溝は全周するが，北東・北西の隅で一部途切れる場所がある。覆土は下部で細かく分層できるが，基本的には4層に分けられる。覆土全体にローム粒が含まれ，上層ほど多く含まれている。人為的に埋戻された可能性が高い。長方形の形状から，通常の住居跡とは考えがたいが，その他の性格を示す手がかりはみあたらない。

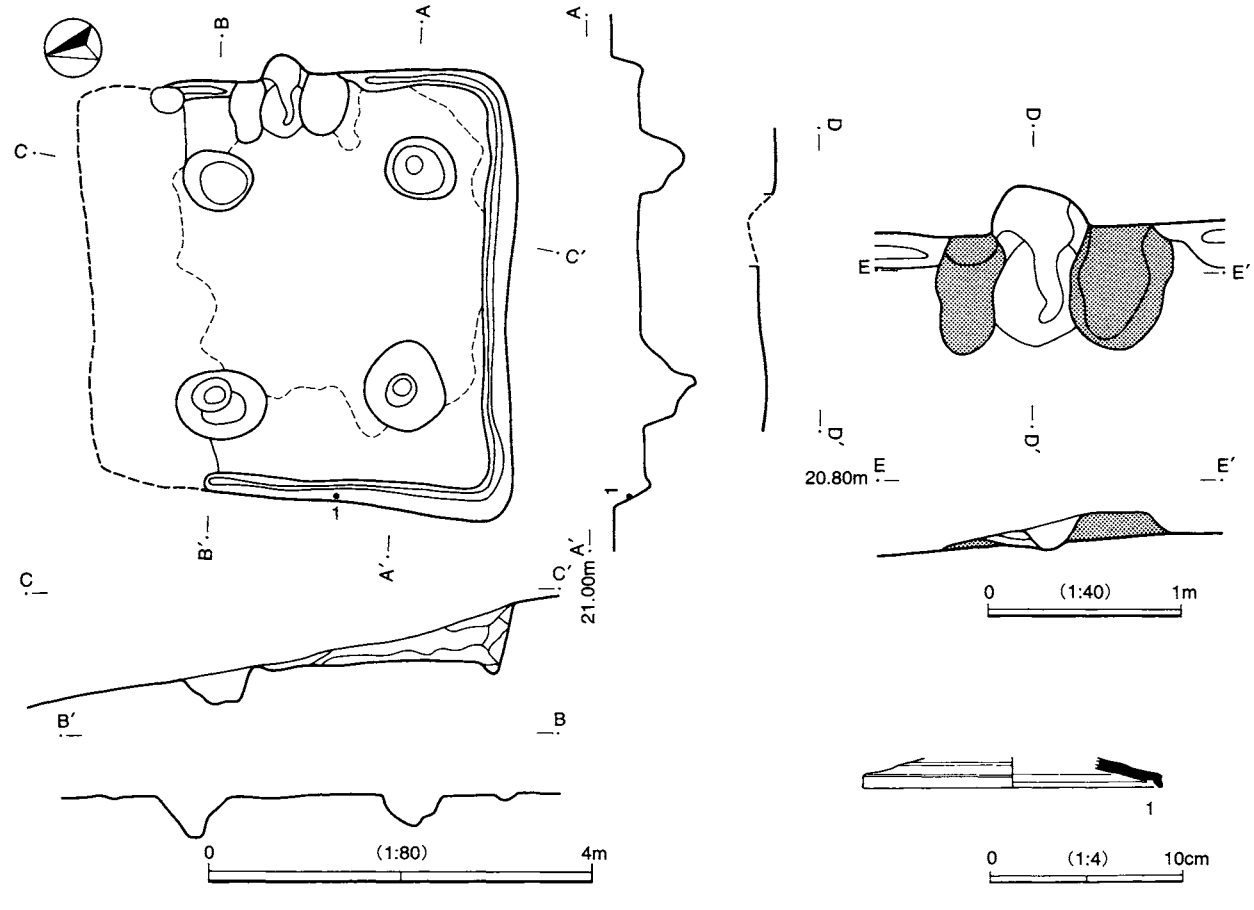
出土遺物は少なかった。図示できるものでは，須恵器坏B蓋（1），土師器小型甕C（2），土玉（3）がみられる。奈良時代の所産である。

SI-111（第209図，図版55・56）

台地北部に位置する竪穴住居跡である。SI-110と同じく，北側の谷へ向かう斜面に面している。土砂の流出によって北側約4分の1を失っている。主軸はほぼ東にとる。竪穴形態は，地形の制約により，主



第208図　SI-110と出土遺物



第209図　SI-111と出土遺物

軸方向に比べて直交する側の辺が，もともと短かった可能性がある。壁際の崩落土を除き，覆土は汚れた褐色土や黒色土を含む，暗褐色土が主体である。このことから自然堆積により埋没したと考えられる。カマドは，東辺のほぼ中央にあったと推定される。遺存状態は悪く，両袖の基部を検出したにとどまった。カマド寄りの柱穴２基では，底に硬化部分が２か所ずつ見つかっていることから，建て替えが行われた可能性が考えられる。しかし，柱穴の断面観察ではその確証を得ることができなかった。壁溝はほぼ全周していたとみられる。

須恵器坏Ｂ蓋の口縁部破片（１）が１点出土している。奈良時代の所産である。

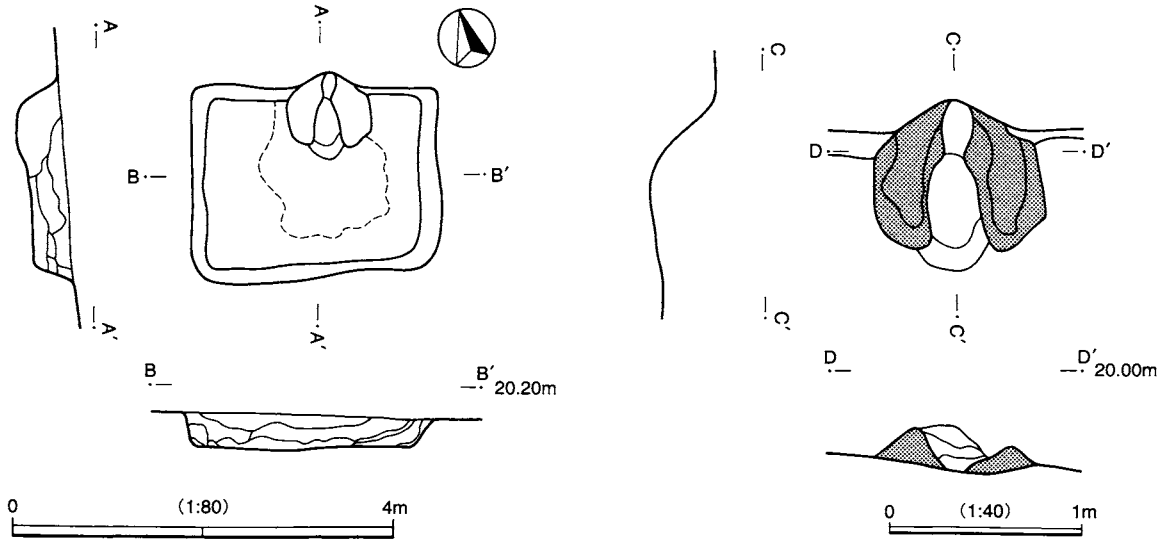
SI-113（第210図，図版56）

台地北部に位置する極めて小型の竪穴住居跡である。ゆるやかに北側の谷へ向かう斜面に面している。主軸は北からやや東へ振れている。カマドは北辺に置かれているが，中央からやや東に寄っている。竪穴形態は，南北の辺に比べて東西の辺がやや長い横長長方形をしている。これは，近在するSI-110に似た印象である。カマド前面に硬化面が広がる。壁溝，柱穴は検出されていない。覆土は概ね４層に分層できるが，ロームブロック等を多く含む層はなく，自然堆積による埋没と考えられる。

遺物は細片ばかりで，図示できるものはなかった。ただし，細片には千葉産須恵器片を含まず，胎土に雲母を含んだ土師器甕片，内面を赤彩した土師器片，台付甕ないし高坏の底部細片等がみられる。遺構の重複はないのでこれらが本跡に伴う可能性は高く，総合的に判断すると奈良時代までの遺構と考えられる。

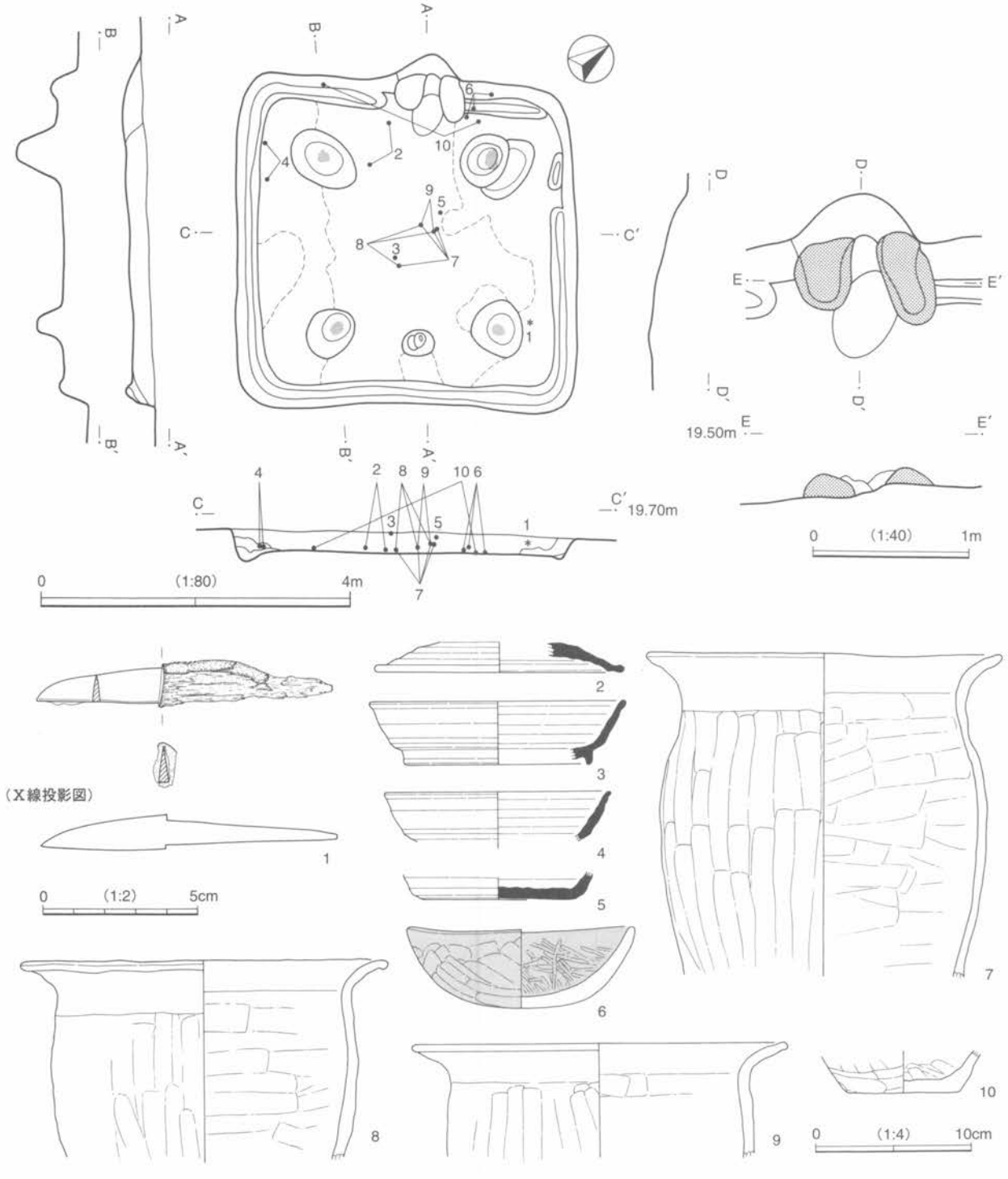
SI-116（第211図，図版56・57）

台地北部に位置する竪穴住居跡である。平坦部としては本遺跡最北にあたる。主軸を北西にとる。カマドは北西辺に設けられているが，中央からやや北側に寄っている。壁溝は全周し，北側隅で一部途切れる場所がある。柱穴は対角線上４か所に配され，出入口施設とみられるピットがカマド対面の南東辺中央にある。覆土は周縁部で３層に分層できるが，中層はローム粒が斑に混入した暗褐色土の単一層で，短時間に埋戻された可能性がある。遺物は少ないが，接合資料は比較的カマド寄りで検出されている。



第210図　SI-113

東隅の柱穴付近で刀子（1）が1点出土している。刀身は完存し，柄の木質部もかなり良く残っている。須恵器坏BⅡ蓋（2）は口縁部内側にわずかな突帯をもつ。須恵器坏BⅠ（3）は高台付である，坏AⅣ（4・5）は浅身で底が広く，開き気味の器形をもつ。これらの須恵器はいずれも灰白色に還元焼成されている。胎土に白雲母を含む茨城県産とみられるもの（5）を含む。土師器坏A（6）は内外面に黒色処



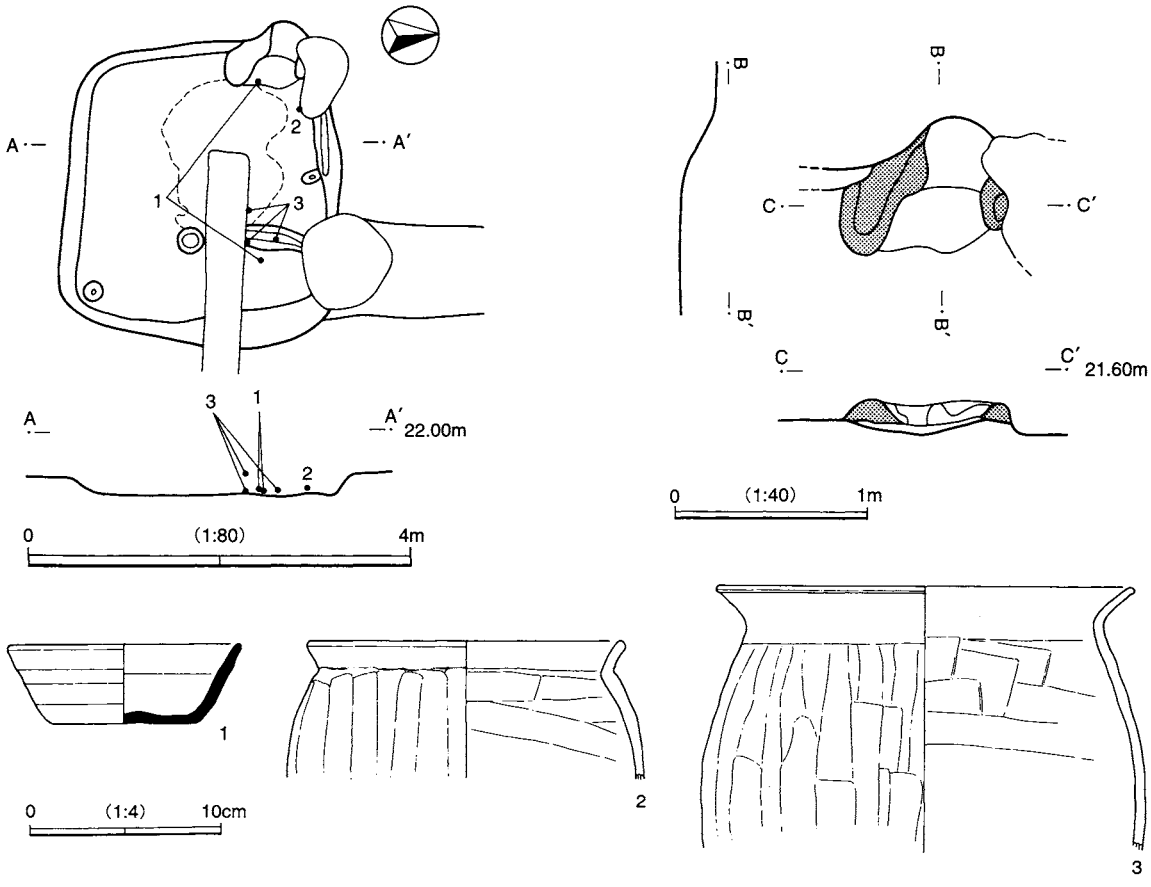
第211図　SI-116と出土遺物

理が施された丸底のものである。土師器甕B（7～9）は典型的な「在地」のものであり，ほかに小型甕底部（10）がある。奈良時代でも古相の土器群といえよう。

SI-118（第212図）

台地北部のやや西寄りに位置する小型の竪穴住居跡である。現代のゴミを含む盛土の下で検出された。北東隅にSD-17，SK-102が重複しており，中央部も帯状に攪乱を受けている。このため，壁は高いところで20㎝程度しか残っていなかった。主軸の方向は西にとる。カマドは北西の隅に作られている。カマドの軸は中心部へ向かっておらず，北側の壁に平行である。カマドの前には硬化面が広がり，カマド右側の一部にのみ壁溝が検出された。北東隅には間仕切状の溝がみられる。南東隅と北辺中央，遺構中央寄りに小ピットを検出したが，いずれも主柱穴とはいえない。

図示した遺物は，カマド前面と間仕切状の溝付近で出土した。橙色の須恵器坏AII（1）と土師器甕（3），同小型甕（2）がある。須恵器坏AIIは，千葉産とみられることから，奈良時代末以降の所産である。土師器甕も「在地」の甕Bが基本と思われるが，薄手であり，やや胴が張るなど，著しい変異がみられる。

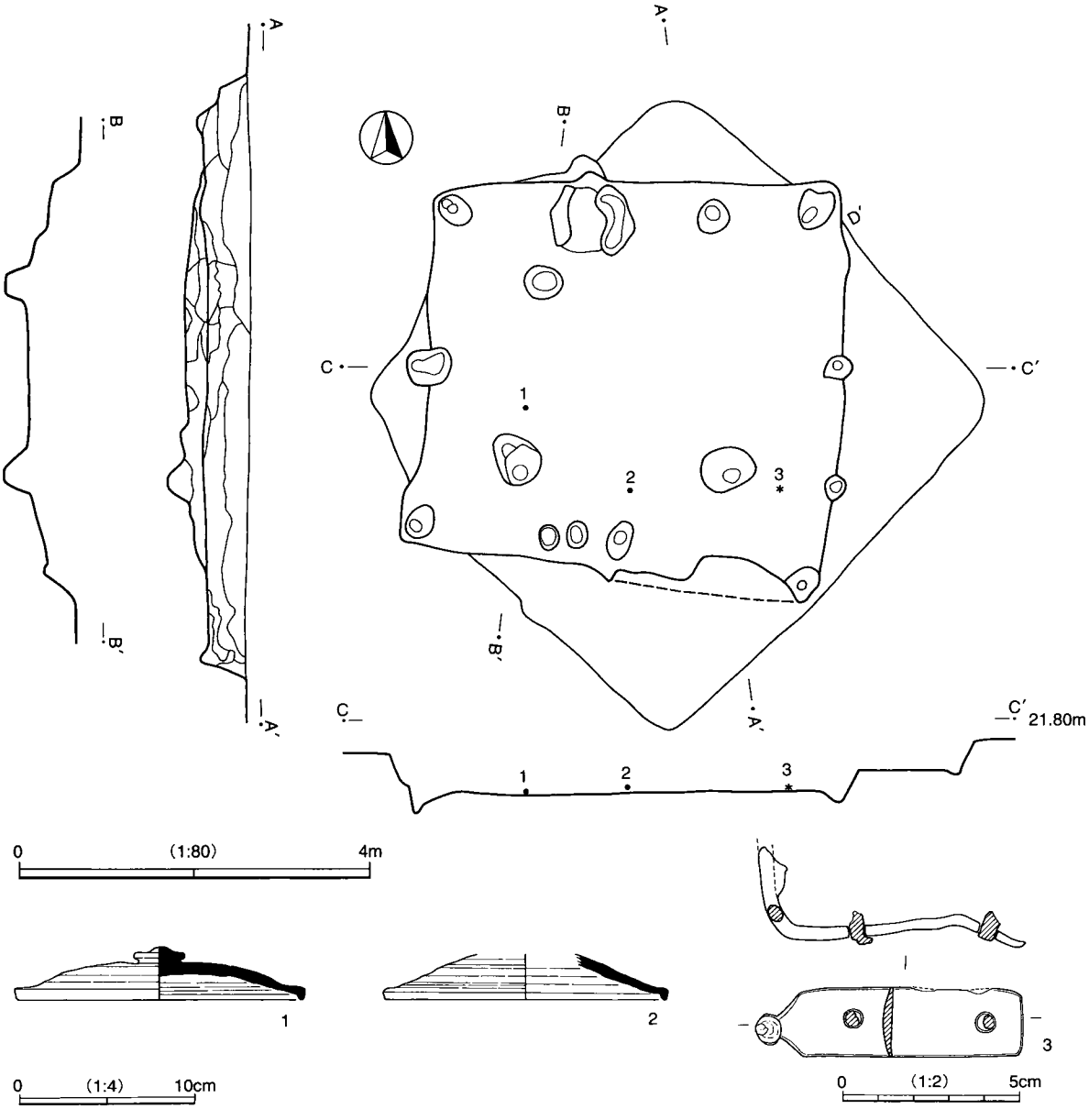


第212図　SI-118と出土遺物

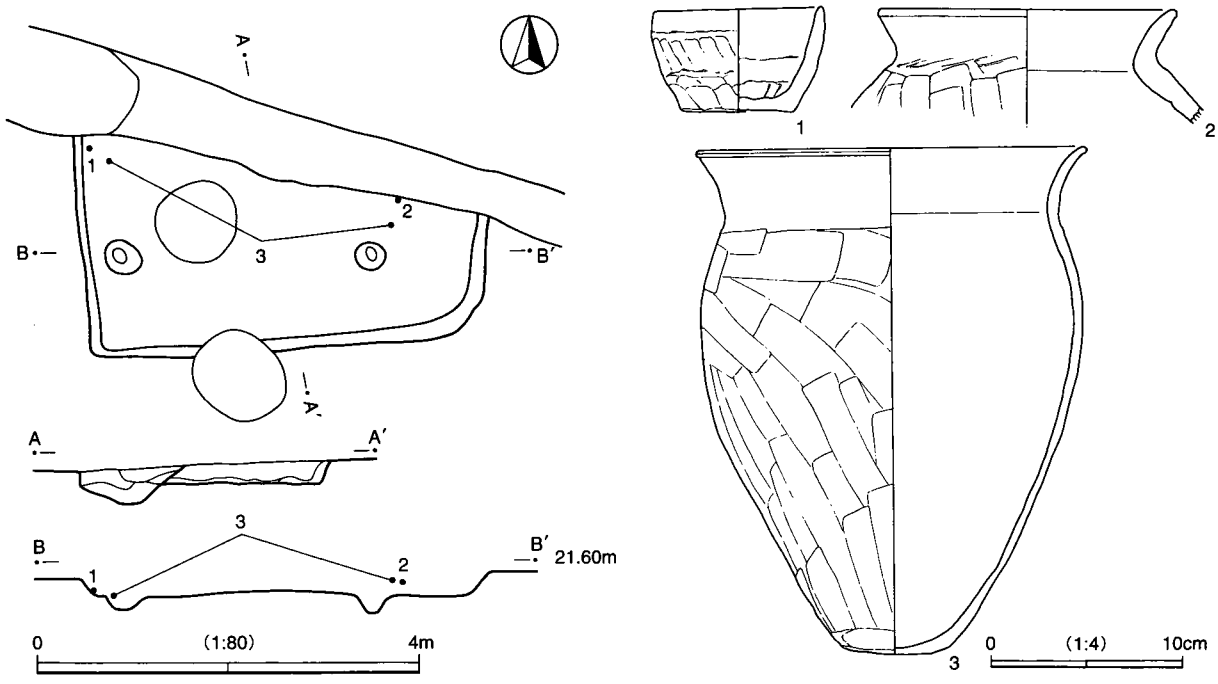
SI-120B（第213図，図版60・127）

台地西部の西端に位置する竪穴住居跡である。SI-120Bは主軸を北におく。約45度ずれて平安時代のSI-120Aが本跡を覆うように重複しているので，本跡はその最下部のみが遺存している状況である。東辺に比べ，西辺がやや短い不整長方形をなす。北辺やや西寄りにカマドが設けられている。カマドも上半が削平され，左袖部はSI-120Aカマドの掘込みに切られて遺存していない。壁溝は検出されていない。四隅と壁際にピットがみられる。深さは10㎝～20㎝で，いずれも住居跡の外側に向かって抉り込むように掘り込まれている。内部床面にも柱穴が検出されており，そのうち北東を除いた3か所で対角線上に並ぶものは主柱穴とみられる。

調査時はSI-120Aより本跡が新しく，覆土上面で検出された硬化面を本跡の貼床と考えていた。しかし，その面より下位において，図示したような奈良時代の遺物が出土していること，硬化面より上位では平安



第213図　SI-120Bと出土遺物



第214図　SI-122と出土遺物

時代遺物が出土し，さらに平安時代遺物が本跡の範囲外で出土していることから，小型の本跡のほうが古い遺構と判断した。

覆土の大半を失っているため，遺物は極めて少ない。須恵器坏Ｂ蓋Ⅲ（１・２）は灰白色に還元焼成された良品で，前者上面には自然釉が掛かっている。奈良時代の古相を示す。留め金具状の鉄製品（３）は２か所に鋲の痕跡が残る。

SI-122（第214図，図版61・128）

台地西部の北西寄りに位置する竪穴状の遺構である。北側半分をSD-28と現代の道路によって削平されている。また，SX-24が切っている。カマド，壁溝，硬化面は検出されていない。カマドについては攪乱によって消滅した可能性がある。深さ12.6㎝～21.3㎝のピット２か所が検出されたが，柱穴としてはかなり浅いものである。覆土は３層に分層できるが，下の２層はいずれも薄い堆積である。北西隅のSD-28との境から遺物が出土している。

小型の鉢（１）は手づくね風の粗い造りであり，古墳時代後期後半や，奈良時代でも古相の土器群に多く含まれる。甕の口縁部（２）は，厚手で外面が滑らかな「在地」のものである。武蔵型の甕Ａ（３）は，比較的厚手であり，古い要素をもつ。ほぼ１個体分が検出された。奈良時代の古相を示す土器群と考える。

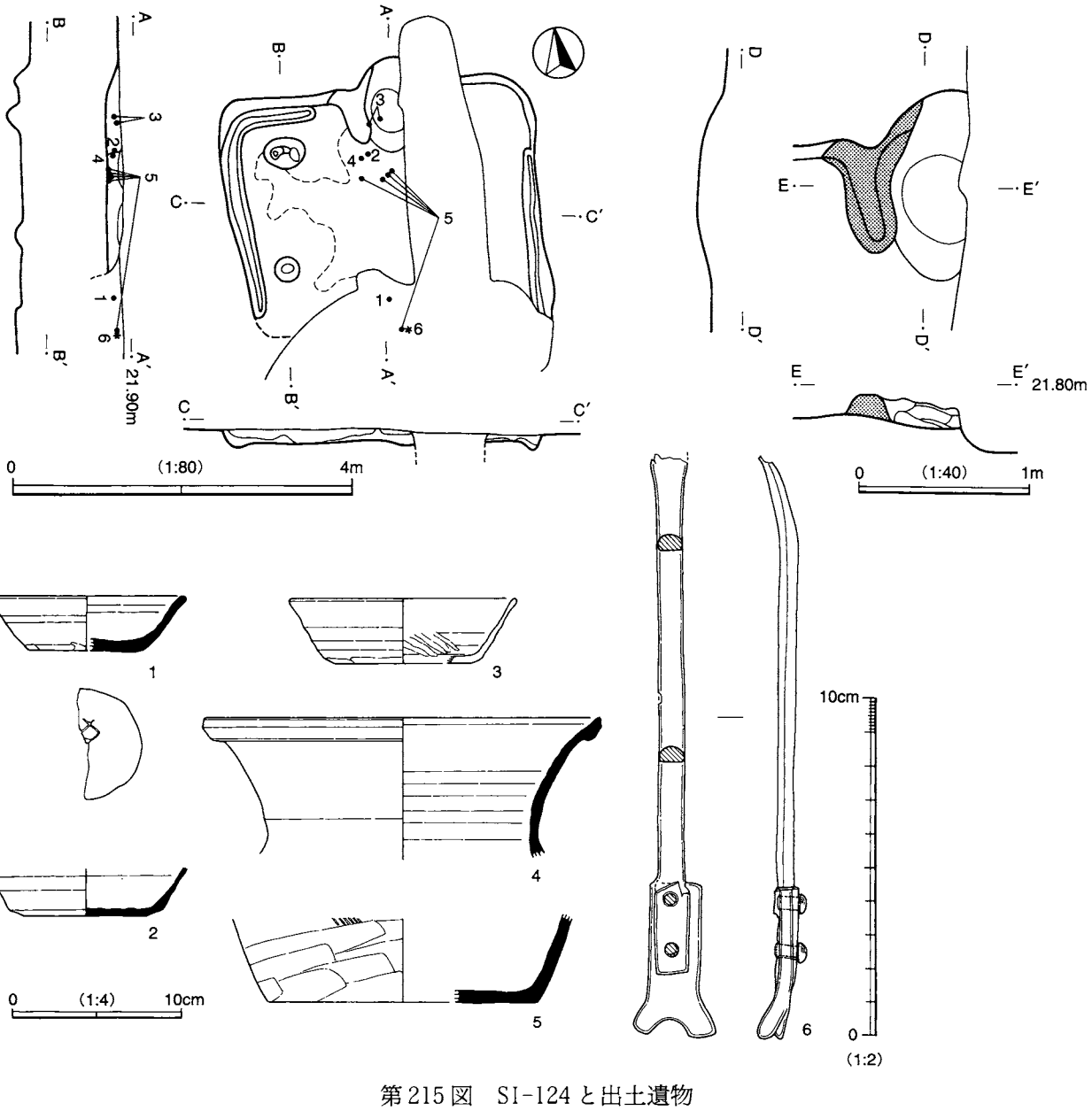
SI-124（第215図，図版61・128）

台地西部の北寄りに位置する竪穴住居跡である。SI-122の10ｍ南東にあたる。道路の下になったため，堅い現表土からの検出は困難を極めた。また，東側には南北の攪乱坑，南側には風倒木痕があり，本跡を

大きく破壊している。したがって，確認面から床面まで10㎝ほどしか遺存していない。主軸は北にとり，カマドは北辺の中央に設けられている。北西と南西の隅付近でピットが検出されているが，深さは12.2㎝～19.5㎝と極めて浅い。カマド前面からピット周辺までの床は，硬化面になっている。遺物の多くはカマド周辺で出土している。

坏類はいずれもにぶい橙色であり，須恵器と土師器の見分けは難しい。須恵器坏ＡⅡ（2）は，底部を回転ヘラケズリ調整している。ロクロ土師器坏H（3）は底部内面に粗いヘラナデ痕がある。両者の形態は近似し，ともにカマド付近で出土している。同じく，明赤褐色の須恵器甕口縁部（4）や暗灰黄色の須恵器甕底部（5）もその付近から出土している。これらは奈良時代末から平安時代にかけての土器群といえよう。一方，線刻をもつ須恵器坏（1）は，攪乱からの出土であり，明確に伴うものとはいえない。

鉄製工具（6）は攪乱中出土ではあるが，須恵器甕（5）と近い位置であったことから，それら土器群に伴う可能性は高い。切先を欠損しているが，刃部と棒状部の形態からヤリガンナとみられる。柄部の下端に釘抜き状の鉤が作り出されて，補強板が鋲留めされる特殊な形態である。

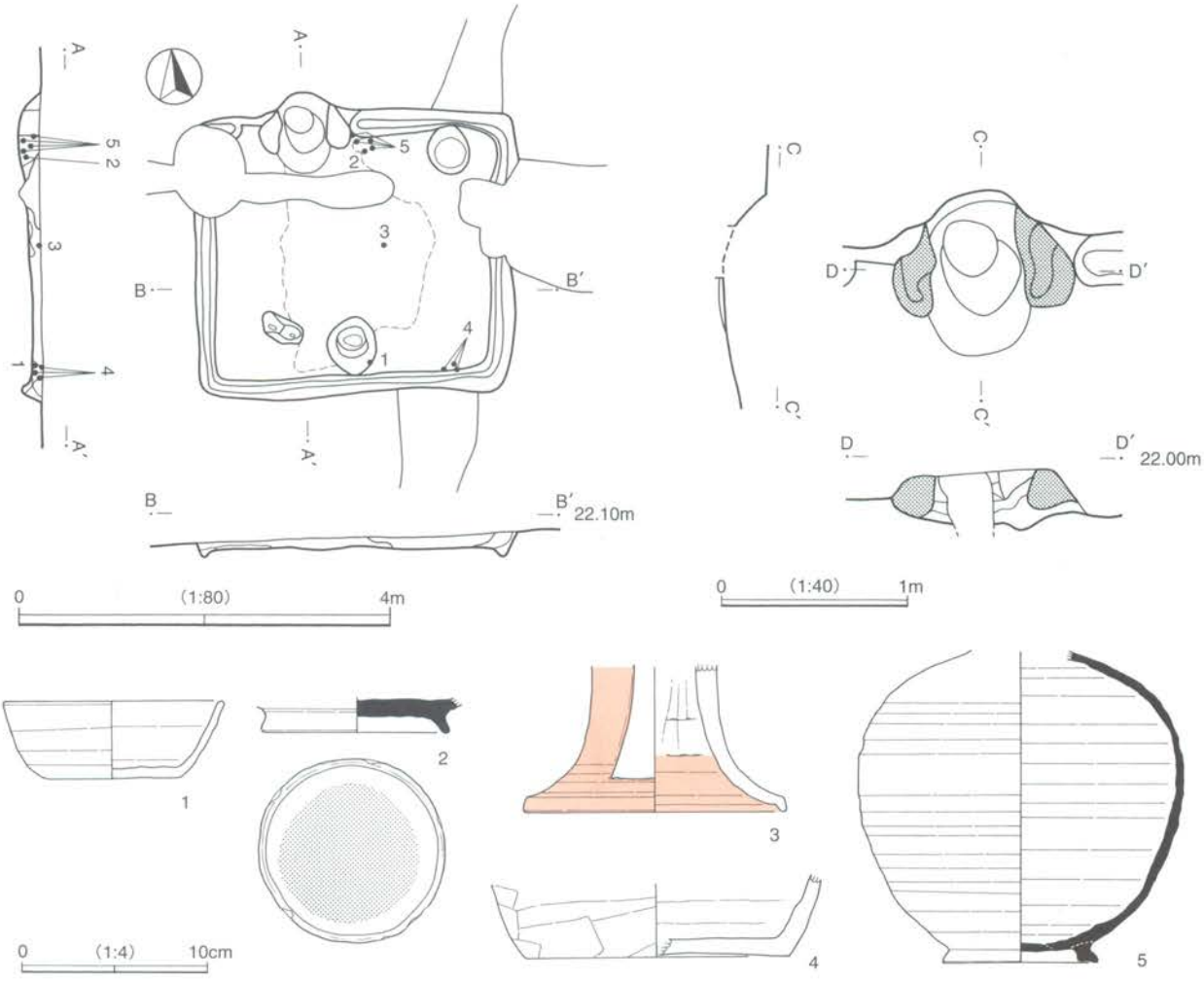


第215図　SI-124と出土遺物

SI-126（第216図，図版62・128）

台地西部の北寄りに位置する竪穴住居跡である。SI-124から8m南東にあたる。東辺をSD-29が切り，北辺を攪乱溝が走っている。主軸は北にとる。カマドは北辺の西隅寄りに設けられている。カマド前面から，出入口施設とみられるピットにかけて，床には硬化面が広がる。このピットの西にも，深さ25cmの不整形な小ピットがあるが，本跡の施設であるか明確にできなかった。このほか，北東隅に貯蔵穴様のピットが検出されている。遺物は，カマド東脇に比較的まとまって出土した。

土師器坏HIV（1）は焼きが甘く，にぶい黄橙色であることからロクロ製の土師器としたが，千葉産須恵器との区別が困難な製品である。箱形をなし，底部全面に回転ヘラケズリ調整が施される。奈良時代末から平安時代初頭にかけてのものである。須恵器坏Bの高台（2）は，灰色の硬質な須恵器である。底外面中央が擦れて平滑になっており，高台の縁にかけて器肌の凹部が黒く染まっているので，硯に転用されたとみられる。ロクロ土師器の高坏脚部（3）は，製作技法・形態ともに三方透かしの須恵器長脚高坏そのものであるが，赤彩されていることから，該期にロクロ整形される土師器の一つとして扱った。また，土師器甕底部（4）はにぶい黄橙色であり，該期の土師器甕にしては底径が大きすぎる点などから，千葉産須恵器の可能性がある。須恵器長頸壺（5）は薄手で均整がとれ，灰オリーブ色の自然釉が肩まで掛かる優品である。底内面にも自然釉が溜まっている。



第216図　SI-126と出土遺物

SI-127（第217・218・219図，図版62・63・128・129）

台地西部の北寄りに位置する竪穴住居跡である。SI-126の12ｍ南にあたる。SD-26・29が覆土上層を縦走するが，床面までの掘込みが深いため，本跡の損傷は少ない。主軸をほぼ北にとり，カマドは北辺中央に設けられている。対角線上の４か所の主柱穴のほか，中央部に深さ10㎝前後の一対の小柱穴がある。主柱穴にはそれぞれ建て替えの痕跡があり，古い柱の外側に，新しい柱が立てられている。柱穴の周囲は，ロームブロックやローム粒を含む暗褐色土で貼床が施され，隅部分を除き，床面は非常に堅く硬化している。壁溝は全周し，西辺中央から長さ60㎝の間仕切溝がのびる。検出面から床面まで53㎝～85㎝あり，本遺跡の竪穴住居では最も深い。覆土は大きく２層に分かれるが，床面には径１㎝のロームブロックやソフトロームを大量に含む暗褐色土砂質土や黄褐色土が10㎝～20㎝ほど堆積している。下層は全体に径５㎜程のローム粒を含む暗褐色土が主体，上層は径５㎜程のローム粒・焼土粒・炭化粒が散漫に混入する暗褐色土が主体で，多くの遺物は下層の上面から出土している。また，西側の小柱穴には灰が充満しており，住居廃棄時に上屋を焼却して埋戻したものとみられる。

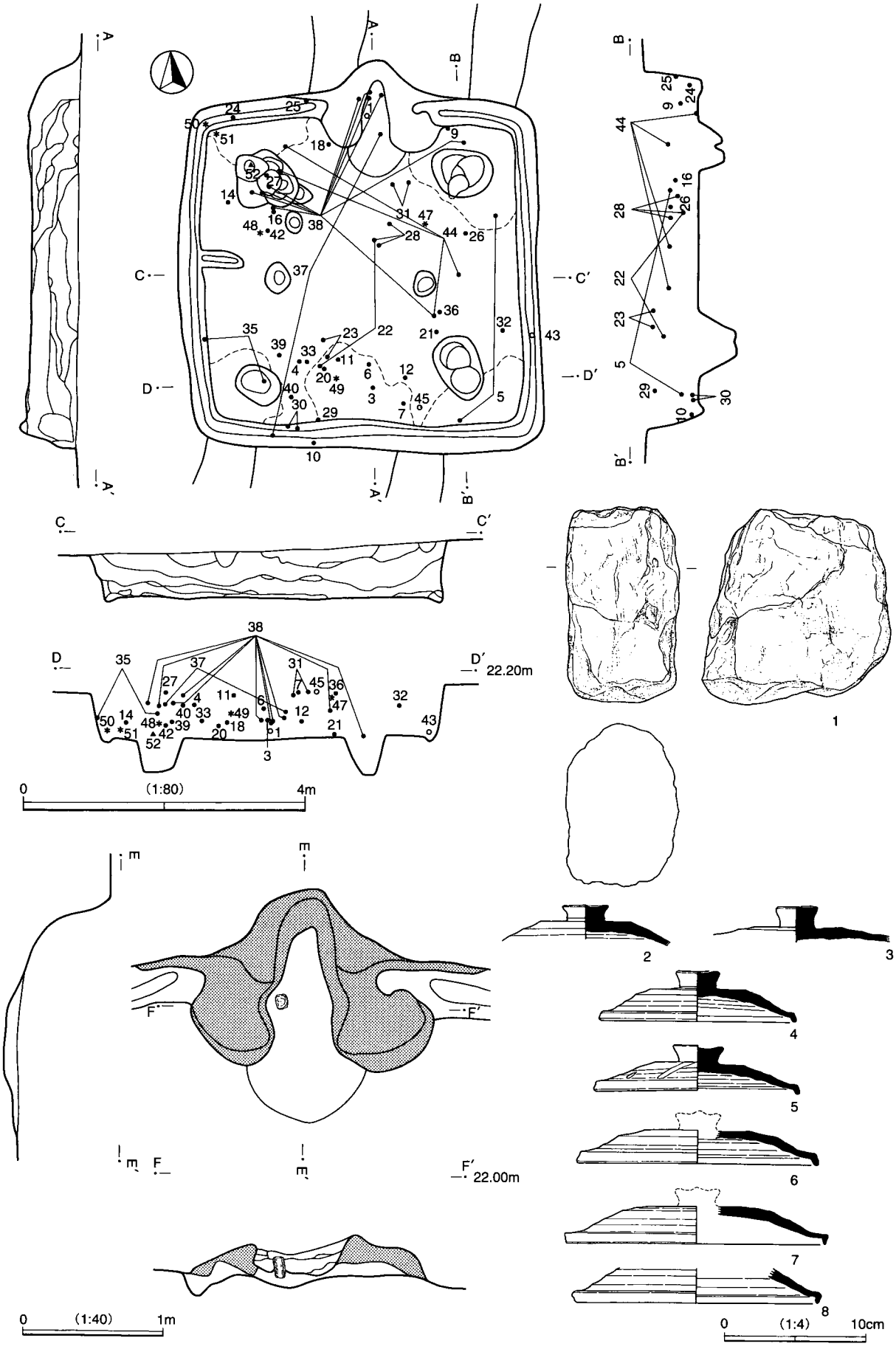
遺物は極めて多く，本遺跡では屈指の出土量を誇る。なかでも特筆されるのは，北西隅の床面に接する層で，和同開珎（51）が出土している点である。著しく錆が進んだ銅銭であり，図柄はＸ線写真（巻頭図版）に拠らねば見ることができないが（第７章第３節），千葉寺地区では観音塚遺跡に続いて２例目の出土である。

覆土内から，銅製の帯先金具（46）が出土している点も注目される。鋳銅製による厚手の造りで，鍍金等はない。長さ44.0㎜，幅29.3㎜，高さ6.6㎜，重さ16.72gである。

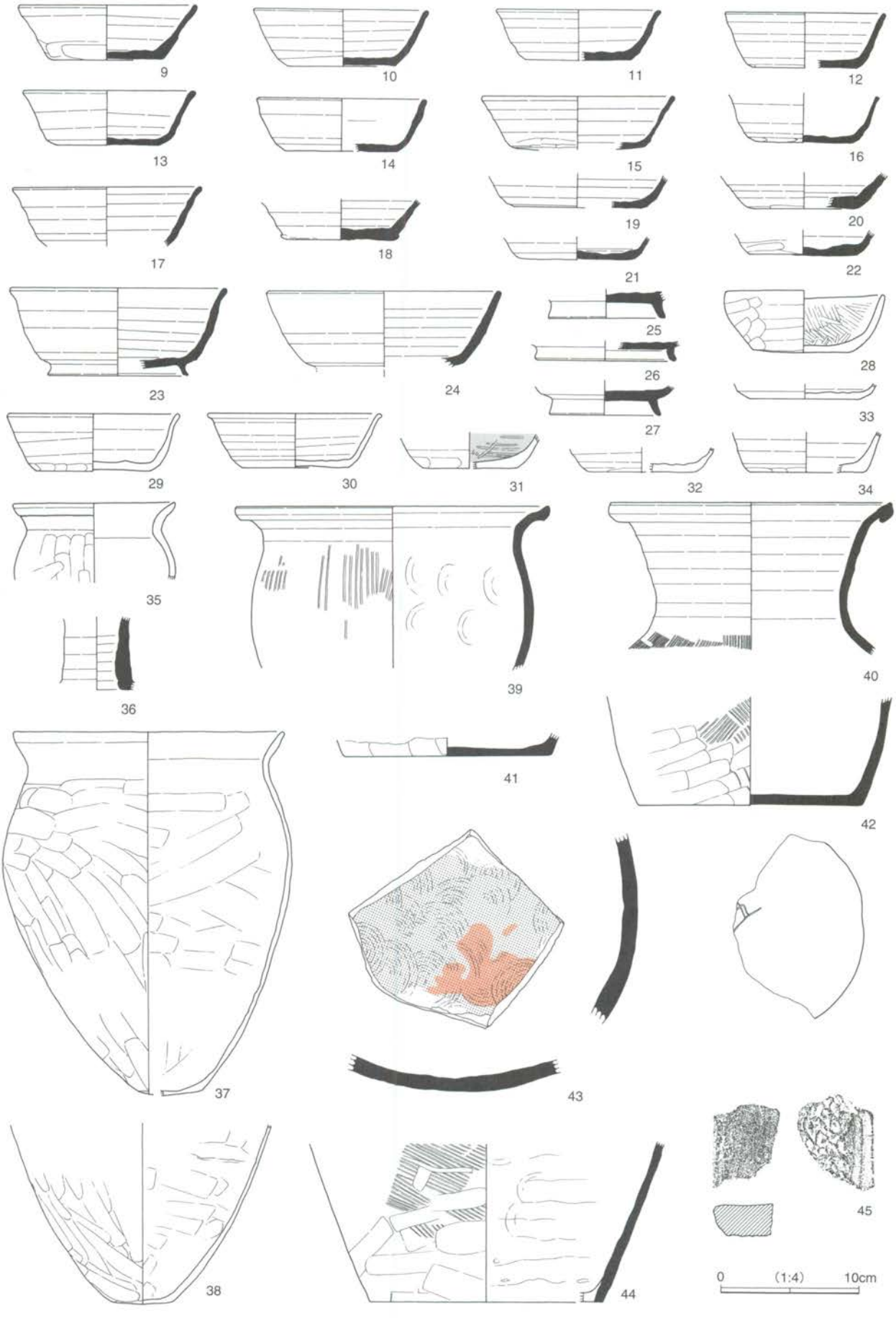
和同開珎と同じ床面直上の堆積層からは，釘（50）・須恵器転用硯（43）・石製紡錘車（52）も出土している。小型のタガネ（48）は下層，銅製の針金付棒状製品（47）・鉄鏃（49）・瓦片（45）は上層の遺物である。

転用硯（43）は，最大約15㎝の変形五角形をなす甕の胴部片を使用している。外面に平行タタキ，内面に青海波文を施す。灰白色を発する硬質の焼成で，東海産須恵器とみられる。破片の形は一部に整形した痕がある。内面中央部を中心に擦れており，部分的に光沢を有する。図の網部は擦り面の中でも朱色が付着した部分であり，廃棄直前には朱書用の硯であった可能性が高い。瓦（45）の表面は，斜格子タタキ痕をもつ。奈良時代後半に千葉寺で使用されていたものに類似する。

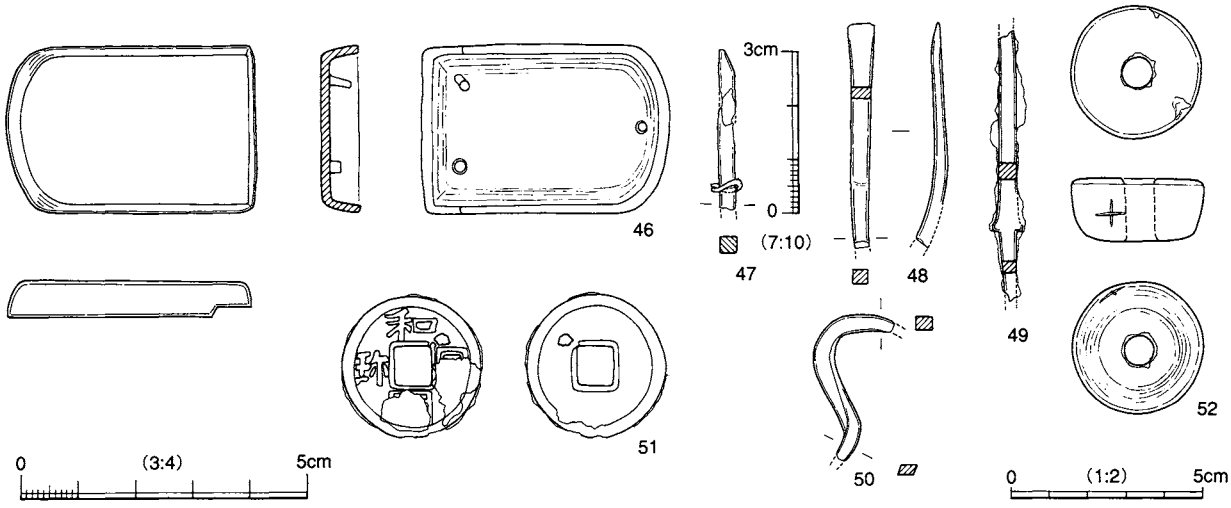
土器類は43点図示している。出土位置の明らかな35点のうち，床面直上で出土したものは２点，下層の上面付近で出土したものは17点，上層で14点，上下層間で接合したものが２点である。須恵器坏Ｂ蓋Ⅲが７点あり，口径15㎝以下の小型品（４・５）と17㎝以上の大型品（６～８）に分けられる。いずれも上下層で出土したものが混在している。須恵器坏身には，箱形の坏ＡⅠ（12・16），器壁が開く坏ＡⅡ（９・11・13・15），外壁下部を強く削る坏ＡⅤ（10・14），大型の深い坏ＢⅡ（23～27）があり，下層の上面から上層の下部で出土したものが大半を占める。土師器坏にはケズリ整形でありながら平底で，深い坏Ｃ（28・31），ロクロ整形で箱形をなす坏Ｈ（29・30，32～34）がみられる。須恵器壺甕類では，長頸壺頸部（36），甕（39～42），五孔の甑（44）があり，（42）の底面には「五」に類似した線刻がみられる。いずれも黒褐色～にぶい黄橙色に焼成されている。土師器甕類は小型甕Ａ（35）と武蔵型の甕Ａ（37・38）で構成される。武蔵型の甕は口縁部が「コ」の字化を始める直前の特徴を有する。これらは，奈良時代の新相を示す土器群といえよう。



第217図　SI-127と出土遺物（1）



第218図　SI-127出土遺物（2）



第219図　SI-127出土遺物（3）

土器群の出土層位は下層の上面に集中する傾向にあるが，上層にも相当量の土器が分布し，床面直上からも出土している。一方，土器の時期差はそれほど明確ではない。このような状況をみると，埋戻しは短期間のうちに，概ね3回に分けて行われ，その都度，意図的に遺物を投棄しているとみられる。和同開珎のような希有なものが認められる点など，これらの投棄行為には相応の意味があったと考えられる。

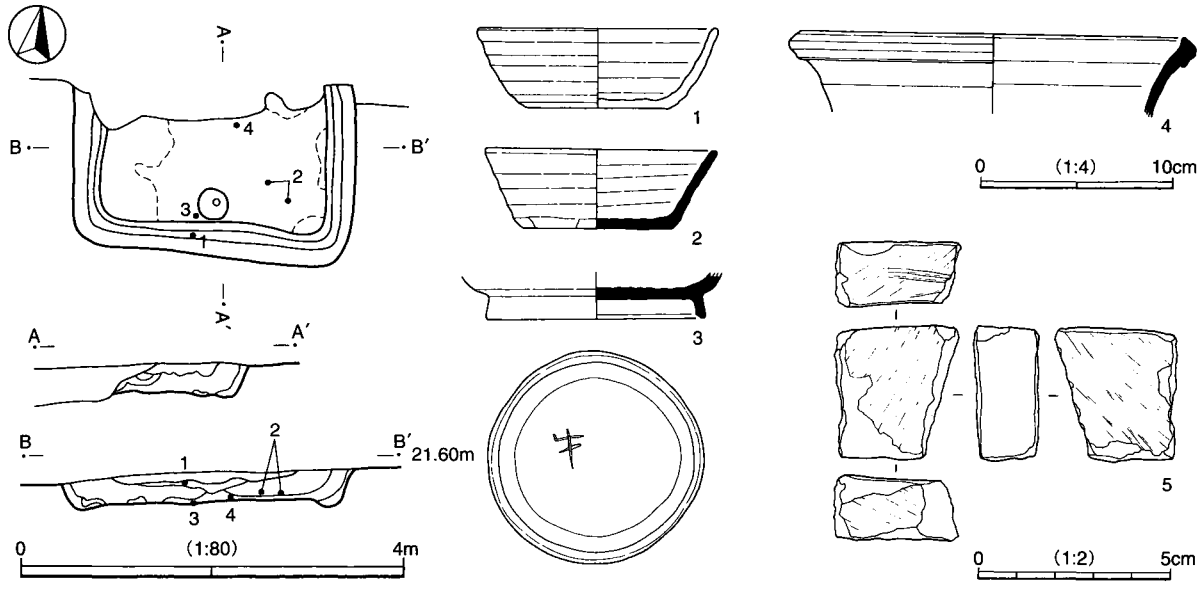
SI-130（第220図，図版65・129）

台地西部の北西寄りに位置する竪穴住居跡である。中野台遺跡との間に入る谷の最奥部に面している。北半分は近代の溝で攪乱されている。南壁際に小ピットがあることから，カマドはその反対側の北辺にあったものと推定される。主軸は北にとる。壁溝は全周する。床面は西壁際を除いて硬化している。残存した覆土の堆積状況をみると，最下層にロームブロック・ローム微粒を少量含む黒褐色土，中層にロームブロック・ローム微粒をわずかに含む暗褐色土と黒色土，上層にはローム粒をやや多く含む暗褐色土が堆積している。埋戻された可能性が高い。

図示した遺物は壁際と下層から出土した。南の壁際で出土した土師器（1）は，底部を強く回転ヘラケズリした坏Hで，暗褐色を呈する。ロクロ製なので千葉産の須恵器との判別が困難なものであるが，かなり焼きが甘い印象がある。須恵器とした坏類については，いずれもにぶい黄橙色であり，土師器との区別が難しいものばかりである。坏ＡⅠ（2）はやや開き気味ではあるが，深身の坏であり，底部は手持ちヘラケズリ調整が施されている。坏Bの高台（3）は，底部外面に「牛」字形のヘラ書きがある。ほかに，須恵器甕口縁部（4）があり，覆土中からは砂岩製砥石（5）が出土している。奈良時代の新相を示す土器群といえる。

SI-133（第276・277・278図，図版66・130，平安時代のSI-132下層遺構として掲載）

台地西部の西寄りに位置する竪穴住居跡である。中野台遺跡との間に南西からはいる谷に面している。北辺が平安時代のSI-132に切られている。主軸をほぼ北にとり，北辺中央にカマドが設けられている。主



第220図　SI-130と出土遺物

柱穴は対角線上に４か所検出されている。カマド対面の南辺中央には出入口施設とみられるピットがある。カマドはSI-132により破壊された状態である。南辺を除いて，壁溝が廻る。南壁では20㎝ほど内側に，柱穴と出入口ピットをつなぐような溝状のくぼみがあり，これが古い壁溝だとすれば，拡張がおこなわれた可能性が高い。覆土は概ね３層に分けられ，下層に５㎜大のローム粒が多く含まれるが，中層にローム粒・焼土粒を少量含む黒褐色土，上層にはローム粒が少量混入する暗褐色土が堆積し，上部を中心に自然堆積による部分が多いとみられる。

遺物は極めて少ない。須恵器坏Ｂ蓋（27）は宝珠つまみをもつ。須恵器坏Ａの底部（28）は，雲母を胎土に含んだ茨城県産とみられる。土師器坏ＡⅡ（29）は，やや平底ぎみの丸い器形で，黒色処理を施されている。奈良時代の比較的古相を示す土器群と考える。

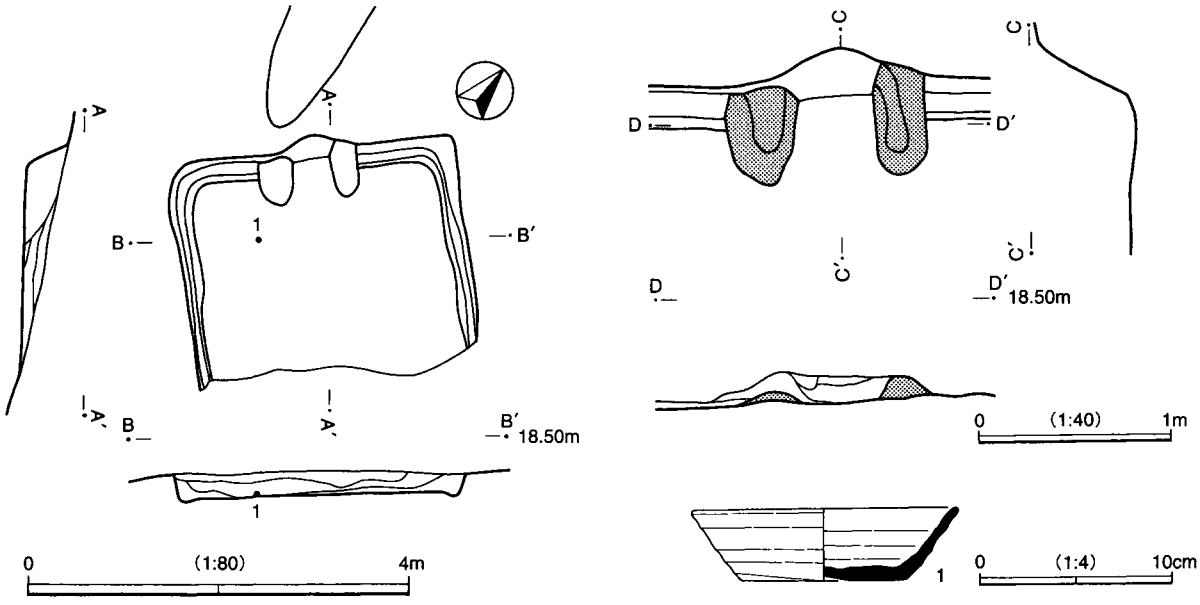
SI-142（第221図，図版72・131）－旧遺構名A-006-

調査区北西隅に位置する小型の竪穴住居跡である。中野台遺跡につながる鞍部南斜面に面している。斜面のために南側約1/3は流失している。主軸を北西にとり，カマドは北西辺中央に設けられている。壁溝は全周していたと考えられる。柱穴はない。覆土は壁の崩落土を除いて黒色腐植土を主体としたもので，下層にローム粒を少し含む黒色土，上層にややローム粒の多い黒褐色土が堆積する。自然堆積の可能性が高い。

遺物は極めて少なく，カマド左袖前で出土した須恵器坏（１）が図化可能な唯一のものであった。底広で浅い器形の坏AIVであり，黄灰色に還元焼成されている。奈良時代の比較的古相を示す。

SI-143（第222・223図，図版73・131・132）－旧遺構名A-007-

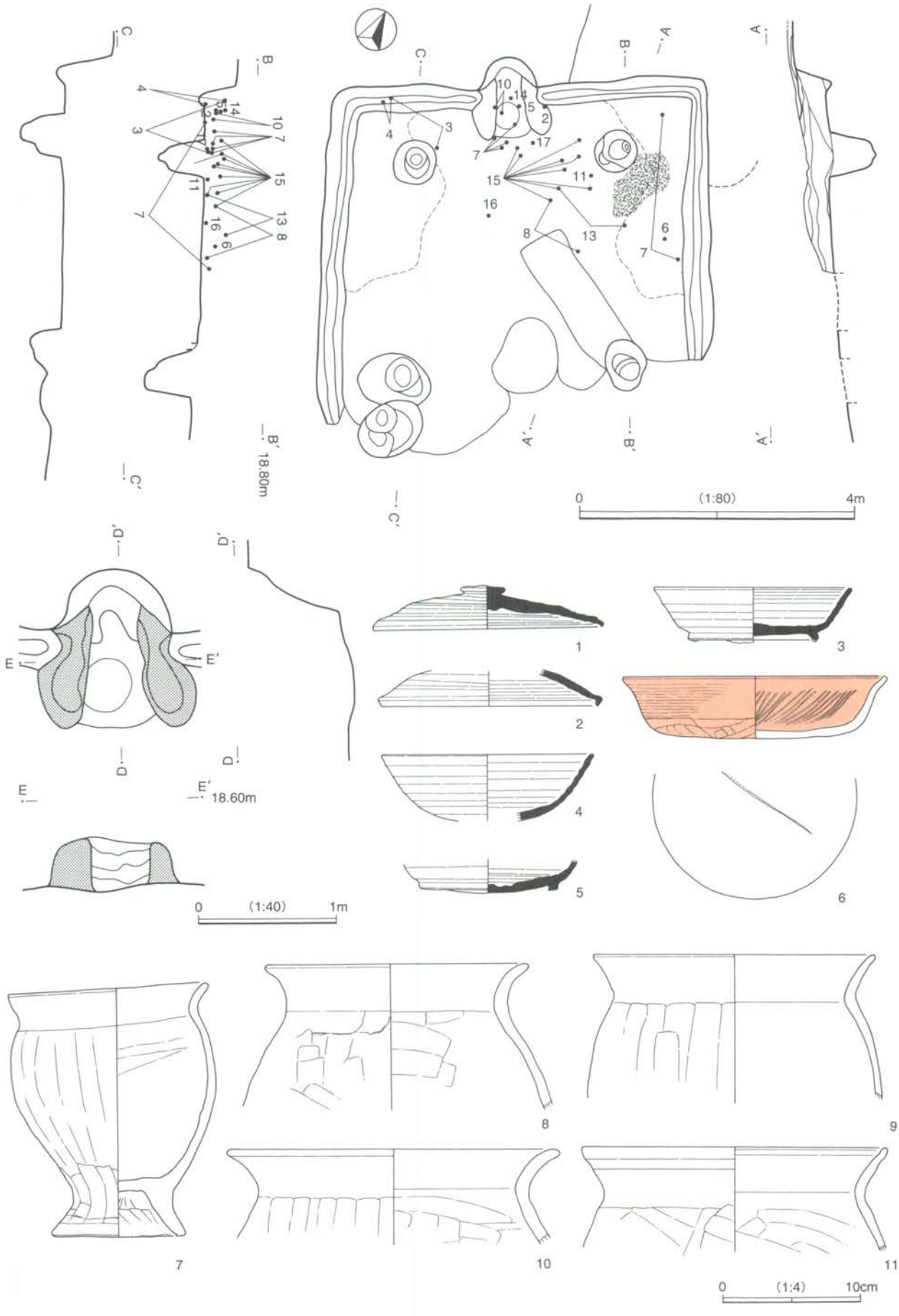
調査区北西隅，SI-142の北東に隣接する竪穴住居跡である。南側が斜面にかかるため約1/4が流失して



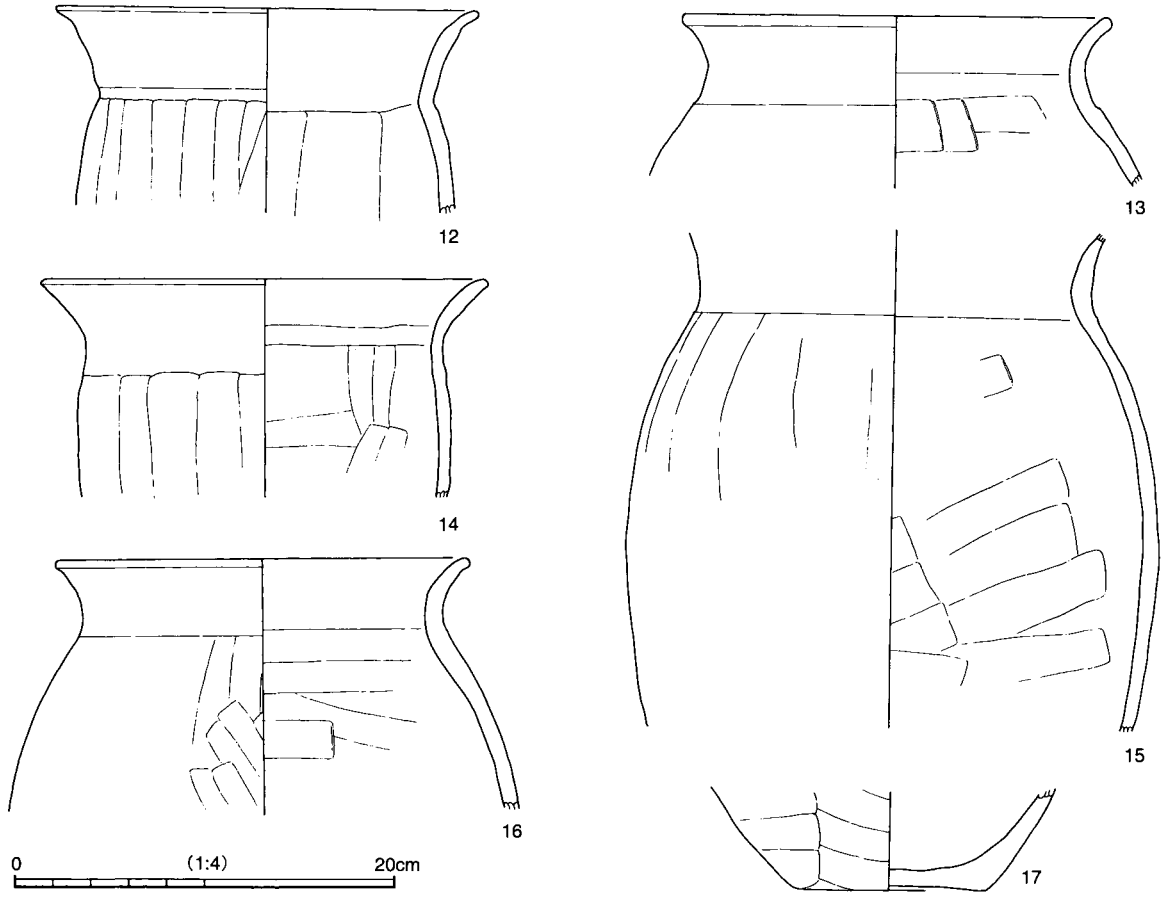
第221図　SI-142と出土遺物

いる。北東隅には平安時代のSI-144が重複する。主軸を北西にとり，カマドは北西辺中央に位置する。壁溝も全周していたと考えられる。主柱穴は4か所，対角線上にあったものと思われる。南西柱穴に接してやや浅いピットが検出された。貯蔵穴の可能性もある。覆土の上面は道路だったため硬化している。下層には，山砂を多く含む暗褐色土と淡褐色土，上層には暗褐色土が堆積している。遺物はカマド周辺に集中して出土した。

須恵器坏B蓋Ⅳ（1）は，灰白色に還元焼成されており，扁平な宝珠つまみをもつ。須恵器坏B蓋Ⅲ（2）は，灰白色に還元焼成されており，端部の屈曲が強い。高台付坏BⅠ（3）は，灰色に還元焼成されており，浅い器形が特徴的である。坏G（4）は灰色に還元焼成されており，東海産とみられる丸底の坏である。坏B（5）は灰白色に還元焼成されており，高台の下に底部が突出する東海産特有の形態をもつ。一般に，古墳時代後期後半の特徴を残すもの（4・5）と，その後の遺物が混在している状況と説明されよう。土師器坏（6）は，内面に斜格子暗文が施された畿内産土師器（坏DⅠ）である。口縁部はわずかに外反して端部が内側につまみ上げられた特徴的な形態で，底部に丸みをもつ。内外面とも赤彩されているが，地色はにぶい黄橙色で，胎土はかなりきめ細かい。口径19㎝に復原され，器高は4.6㎝，底部をヘラケズリし，強いヨコナデ痕を残す口縁部と区別している。このような特徴から平城宮Ⅲ期の坏AⅡに近い製品と考えられる。ほかに，小型の台付甕B（7），武蔵型の甕A（11），「在地」の甕B（9・10・12・14・15・17），厚手で滑らかな器面をもつ，もう一つの「在地」の甕（8・13・16）がある。これらは奈良時代でも古相を示す土器群であるが，土師器坏DⅠの存在を重視するなら，これらの土器群を奈良時代の中頃に位置づけられる。



第222図　SI-143と出土遺物（1）



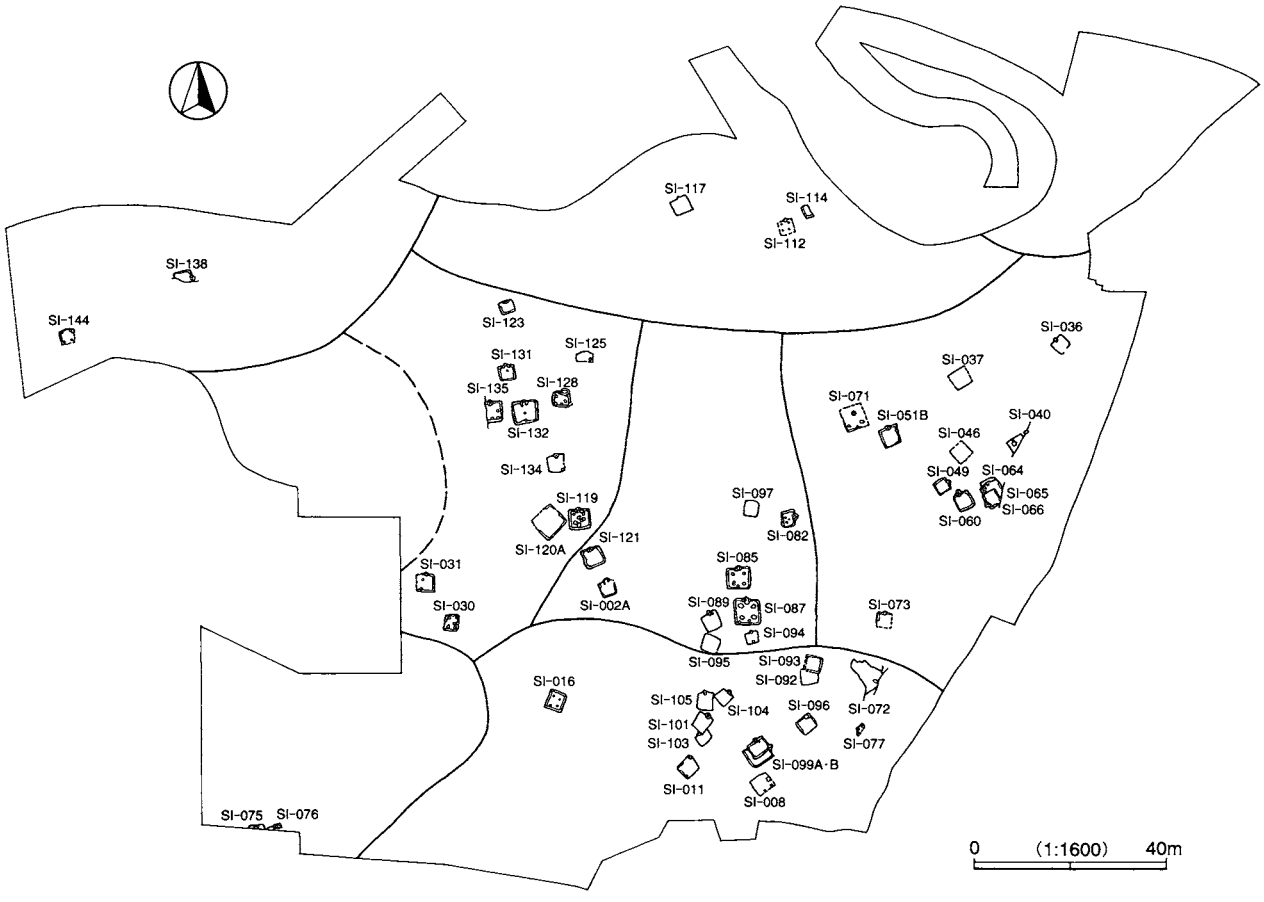
第223図　SI-143出土遺物（2）

2．平安時代

SI-002A（第225・226図，図版6）

台地中央部の西寄りに位置する小型の竪穴住居跡である。SI-002BとSI-002Cを切って構築されている。カマドは北辺に設けられ，ほぼ北に主軸をとる。残存壁高は5cm～15cmときわめて浅い。壁溝は全周すると思われるが，SI-002BとSI-002Cの覆土上に床面があるため，確認できない箇所もあった。南東隅の2か所にピットが検出されている。北側は径24cm，深さ16.8cm，南側は径30cm，深さ20cmである。揃わないため，用途は特定できない。また，北西の壁を切って小ピットが掘込まれている。これも，本跡の一部かどうかは不明である。北半分を中心に，炭化材と焼土が床面上に多量に検出された。火を受けたことがうかがえる。床面は，カマド前面から広範囲にわたって硬化している。

遺物は，北半と南西隅部を中心に出土し，鉄製品1点，土器14点が図化可能であった。坏類はすべてロクロ製の土師器である。皿F（2）は，浅くなった坏ともいえる器形である。底部は回転糸切り無調整である。椀DII（3・4）は内面黒色処理ではない。底に糸切り痕を残す。足高高台付坏（5）は，高台部分のみ残っている。土師器甕類には，鉢A（6），甕BないしD（11～15）があるが，器形や口縁部には多様性があり，同じ特徴を示すものがない。とくに，胴が大きく張る甕（15）は，従来の土師器とはまったく異なる形態をもち，厚手で大きい。むしろ，須恵器ないし陶器の大甕に近い。赤褐色に焼けた須恵器甕C（7～9）は，口縁が短く「く」の字に屈曲する形態である。口縁端部が丸みを帯び，簡略化し



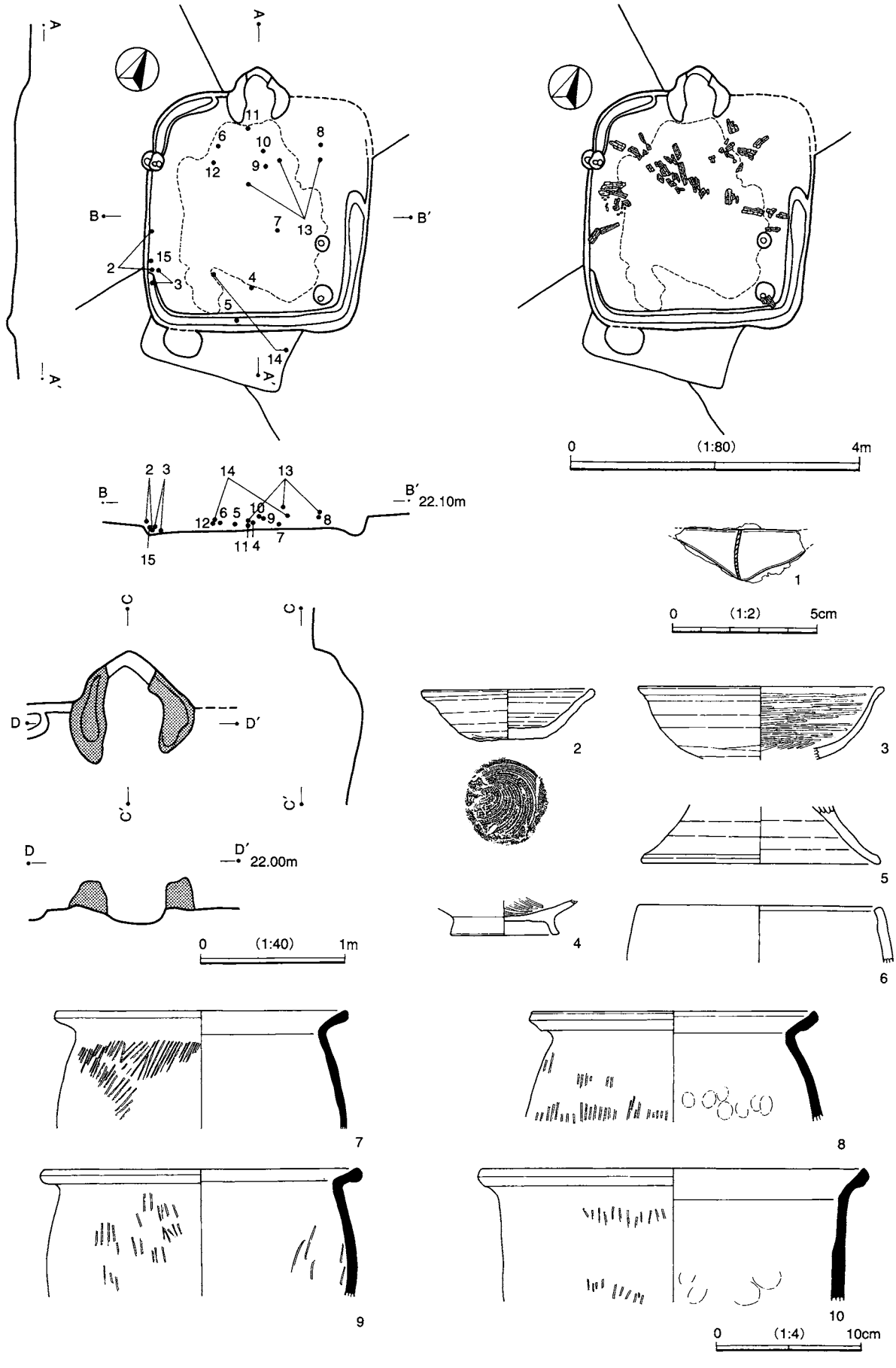
第224図　平安時代竪穴住居跡配置図

ている点と，外面のタタキ痕がナデ消しされている点が特徴的である。須恵器甑（10）は，灰色に還元焼成されている。口縁部は比較的丁寧な作りで，面が整っている反面，甕と同様にタタキ痕をナデ消しされている。これらは平安時代の新相を示す。

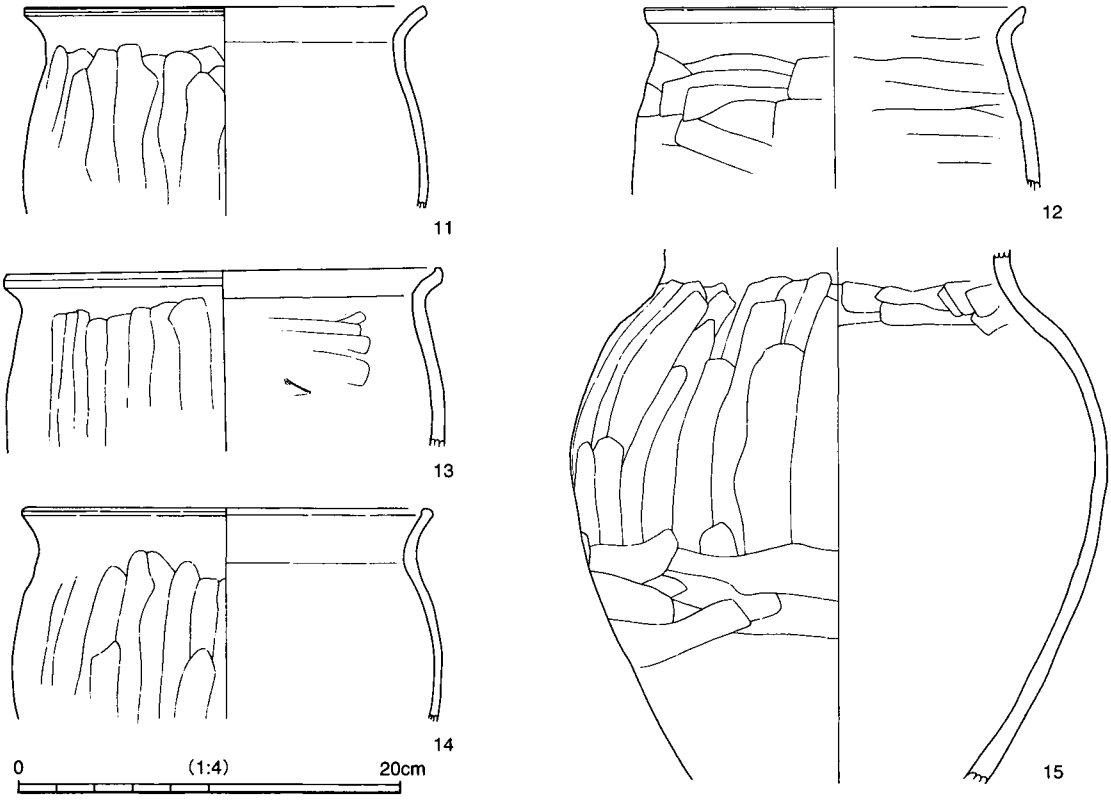
SI-008（第227図，図版112）

台地南部の南東隅に位置する竪穴住居跡である。主軸はほぼ北東にとる。観音塚遺跡に面した東斜面で，南に開口する谷の肩口に位置するため，大半が流失している。検出できた壁高は，一番よく残っていた南西部分でも，20㎝強であった。北東辺中央の床面には砂質粘土が広がっていた。これがカマドの痕跡と思われる。カマド痕跡の正面から南側の床は，踏み固められて硬化している。本跡に伴う可能性がある柱穴は，東隅と南東辺中央の２か所にのみ検出された。前者は径30㎝，深さ47.7㎝，後者は径20㎝×28㎝，深さ46.3㎝である。覆土にはローム粒がやや多めに含まれていた。埋戻されたと考えられる。SI-007，SI-009が埋没した上に掘込まれており，重複部分の壁を確認することは困難であった。この部分に関しては推定線を図に示している。

中央部で石製紡錘車（１）が出土した。土器類のうち，遺存のよいものはいずれも土師器である。カマドの周辺に比較的多く出土した。坏類はすべてロクロ製で，やや浅い坏ＢⅦ（２・３）と深い坏ＢⅧ（４・



第225図　SI-002Aと出土遺物（1）



第226図　SI-002A出土遺物（2）

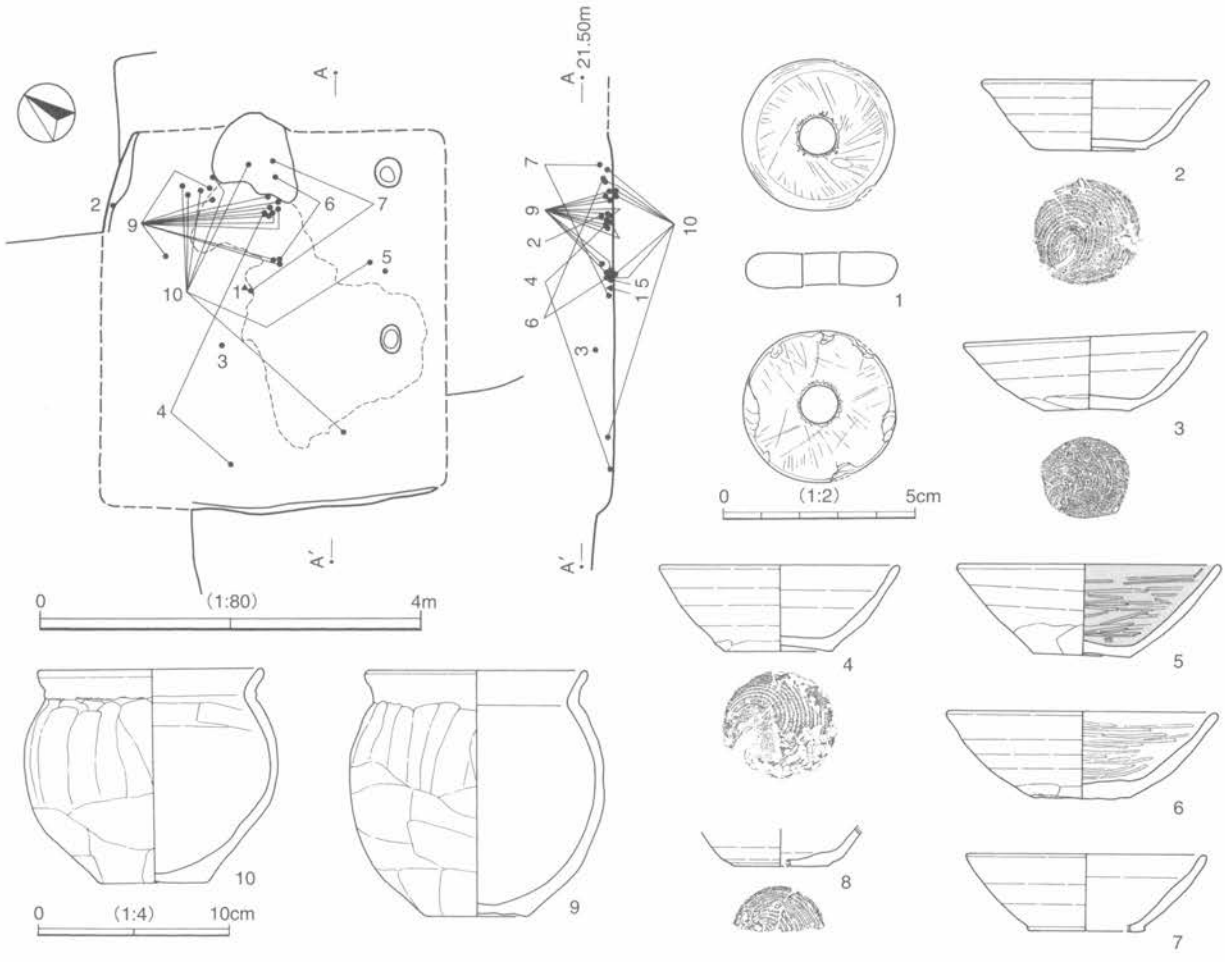
8）がある。これらの底部は回転糸切り無調整である。坏BVI（7）は底部遺存度が悪いため糸切り痕の有無を確かめることができない。若干大きい坏BVIII（5・6）は，底部に手持ちヘラケズリ調整，内面にミガキが施され，内面黒色処理を施しているもの（5）を含む。小型甕D（9・10）はほぼ同じものであるが，9の口縁端部は垂直な面を有する。これらは平安時代でも比較的新相を示す。

SI-011（第228図，図版10・113）

台地南部，SI-008の西11mに位置する竪穴住居跡である。SI-010の覆土を切って建てられているため，重複部分の壁は検出が困難であった。主軸はほぼ北西にとり，北西辺中央部にカマドをもつ。カマドの遺存状態は悪く，わずかに火床と，西側の袖を検出するにとどまった。南隅に径43cm，深さ85cmのピットが存在する。床の硬化面は，中心部に大きく広がっている。床面の高さはSI-010よりかなり上であるため，遺物の分離は比較的容易であった。また，遺物の分布範囲によって，床の範囲を検証することも可能であった。覆土は概ね3層に分層できる。下層は，暗褐色土と褐色土が斑点状に混合し，ローム粒を含む褐色土である。中層は，ローム粒・ロームブロック・黒色土を含む暗褐色土と黒褐色土である。上層は，褐色土を斑状に混合し，ローム細粒を含む暗褐色土である。

土器13点と台石を図示した。台石（14）は縄文時代の石皿を再利用したものと思われる。付着物はなく，用途は特定できない。

土師器坏類はすべてロクロ製である。坏BIV（1・2）は，器壁が急に立ち上がり，底部を手持ちヘラ

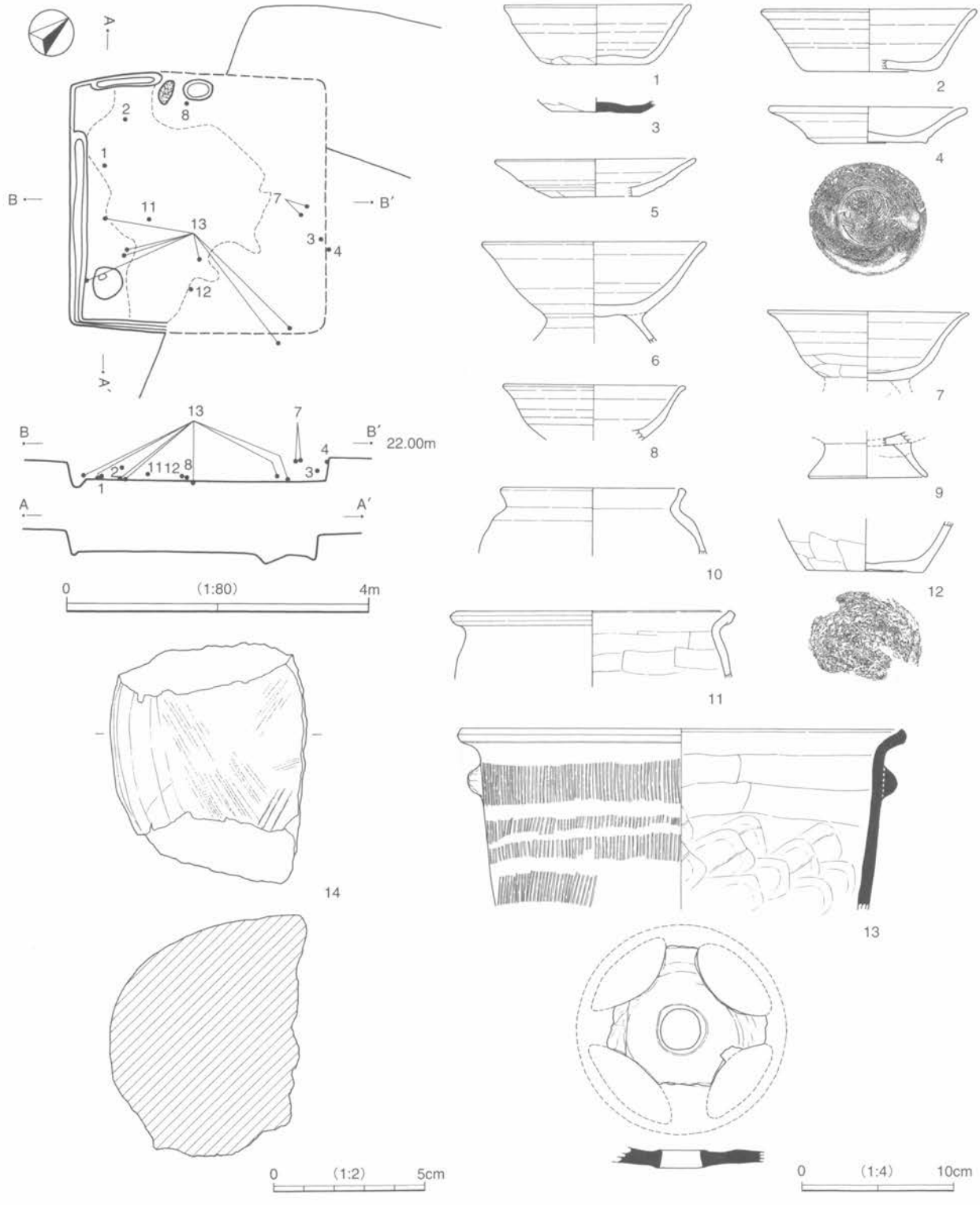


第227図　SI-008と出土遺物

ケズリ調整している。二次的な被熱により，器壁が剥落しているもの（2）を含む。皿A（4・5）は2個体あるが，少し特徴が異なる。前者は口縁端部が厚く，底部中央に回転糸切り痕を残し，周囲を回転ヘラケズリ調整している。後者は，端部が鋭く，底部を手持ちヘラケズリ調整している。土師器の甕類には，小型甕B（10），甕C（11）などがある。甕Cは暗褐色を発し，外面調整がヘラケズリであるなど，土師器の要素をもつが，口縁部形状は須恵器の特徴を示しており，焼成の甘い須恵器甕である可能性もある。甕の底部片（12）には，焼成前とみられる「×」ないし「キ」の字状のヘラ書きが認められる。須恵器甑B（13）は，橙色の千葉産須恵器であり，五孔の底部をもつ。これらは平安時代でも比較的古相の土器群といえよう。ほかに，土師器の足高高台付坏である坏X（6～9）があるが，突出して上層から出土したもの（7）を含んでおり，上記土器群に伴うとはいえない。時間差をおいて投棄されたと考える。

SI-016（第229図，図版13）

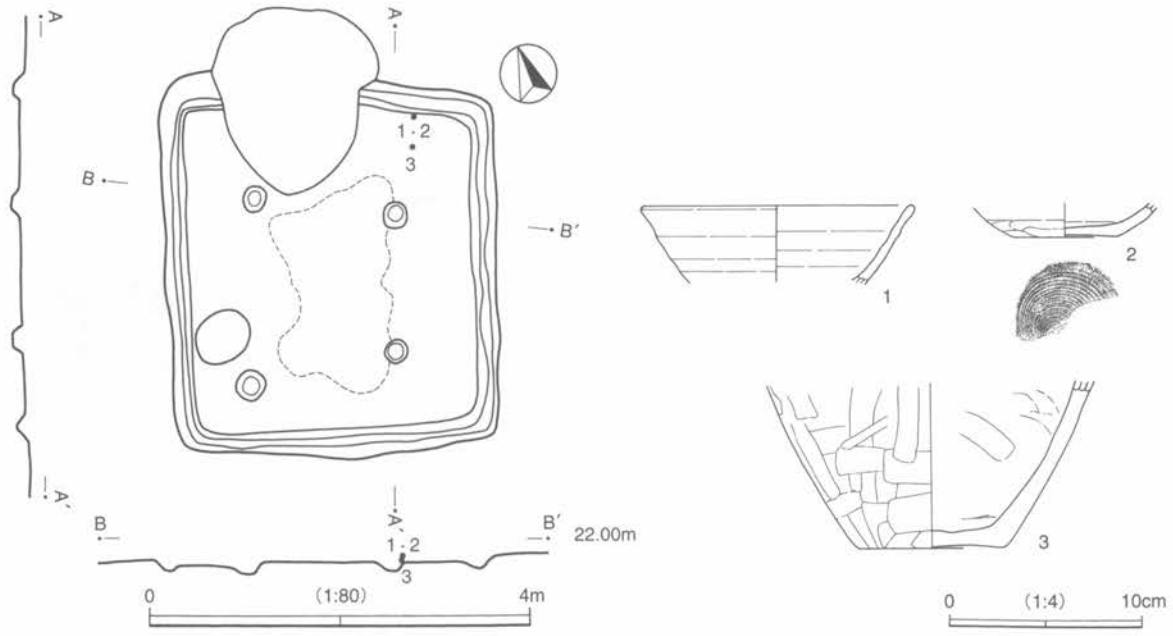
台地南部のやや北西寄りに位置する竪穴住居跡である。主軸はやや東に振れた北にとる。上部を削平されており，確認面から床までの高さはわずか4.5㎝～8.5㎝である。北辺中央部を，SK-37によって壊されている。カマドはこの位置にあったと思われる。壁溝は全周する。柱穴は対角線上にあるものの，西側の2つはやや外側に偏っている。いずれも深さ10㎝～13㎝と浅いものである。柱穴の間に硬化した床面



第228図　SI-011と出土遺物

が広がっている。

遺物の量は少なく，３点を図示するにとどまる。ロクロ土師器坏が２点（１・２），厚手の土師器甕底部が１点（３）である。回転糸切り無調整の底部をもつ坏（２）が存在するので，平安時代でも比較的新



第229図　SI-016と出土遺物

相の土器群とみられる。

SI-030（第230図，図版21・116）

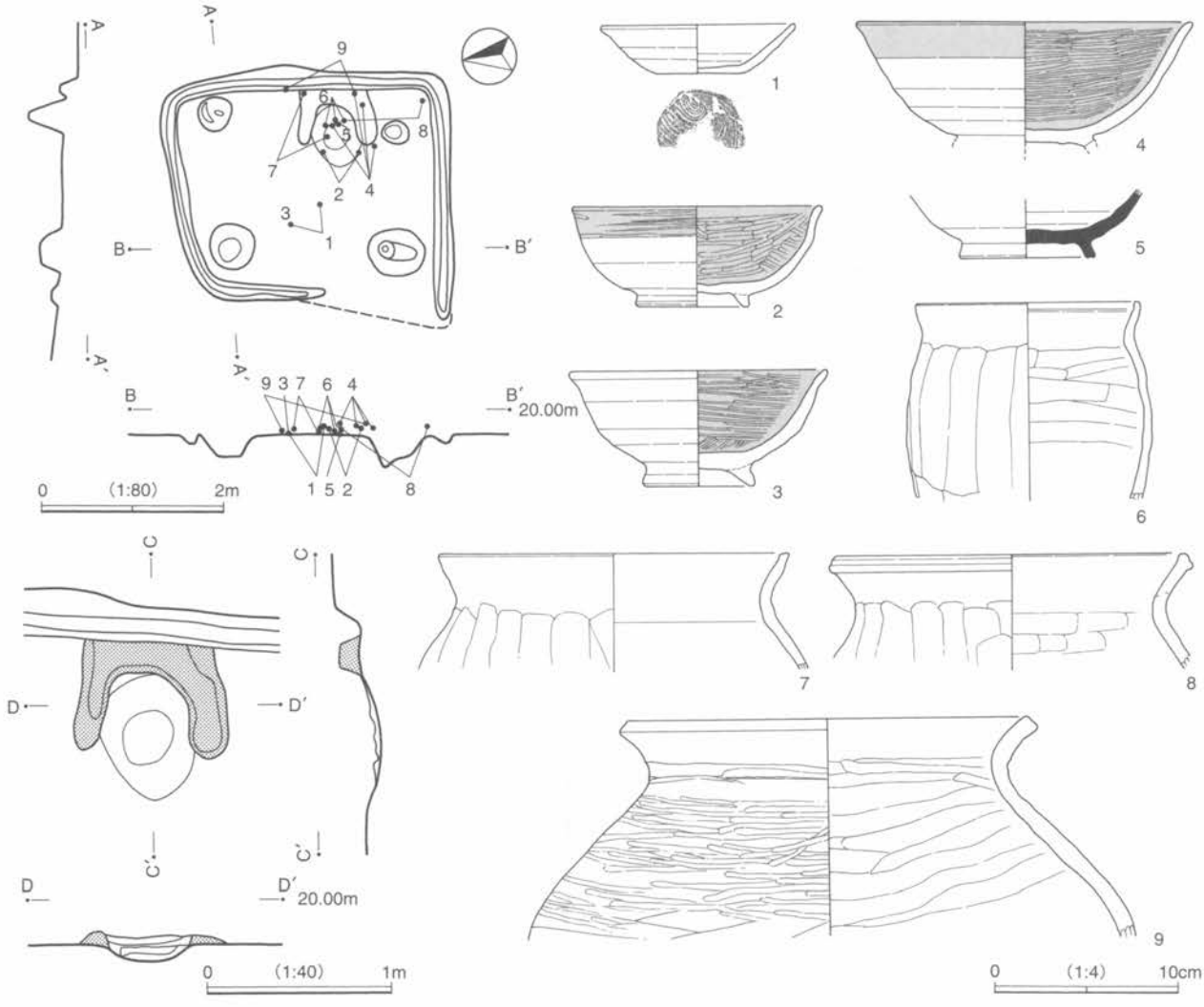
台地西部のSD-1を境にして，一段下がった斜面に位置する竪穴住居跡である。主軸は東にとり，東辺にカマドをもつ。柱穴は4か所で，それぞれ隅に近い位置にある。斜面側が流失しているため，確認された壁高は10㎝前後である。西辺南半分以外では壁溝が確認された。カマドは壁に煙道の掘りかたをもたない。カマドと壁の間にも壁溝がめぐる。

遺構上部には貝層が堆積していた。カマドの直上を覆っているが，本跡外へも大きく広がるので，本跡に直接関連するものとはいえない。なお，貝層の所見については，採取サンプルの内容も含めて，別項（第8章）に記すことにする。

遺物はカマドの周辺に集中して出土した。土師器が主体である。土師器皿F（1）は，底部が回転糸切り無調整である。土師器椀DⅠ（2・3）と椀DⅡ（4）は内面黒色処理を施されている。須恵器では暗褐色に焼成された椀（5）がある。土師器甕類は，小型甕C（6）を除き，かなり胴が張る厚手のものである。口縁部形状で甕B（7），甕D（8）に分類できる。甕（9）は，外面調整がナデを主体とし，土師器的な暗褐色の焼成であるが，須恵器や陶器の大甕に近い形態や大きさをもち，古相の土器群には含まれないものである。平安時代の新相を示す標識的な資料である。

SI-031（第231図，図版21・116）

台地西部の，一段下がった斜面に位置する竪穴住居跡である。SI-030の北西約6ｍに位置する。谷側の土が流出しているため，壁はほとんど検出できず，床面も西側1/4は失われている。主軸を北にとる。カマドは北辺中央に設けられているが，袖・火床部とも残存していない。カマド内に支脚の一部が遺存したが，劣化が激しく，図化及び取り上げはできなかった。流失している西側にピットが2か所検出された。深さは北側が8.1㎝，南側が20.6㎝と浅いものである。主軸に平行して並ばないため，仮に本跡に伴う



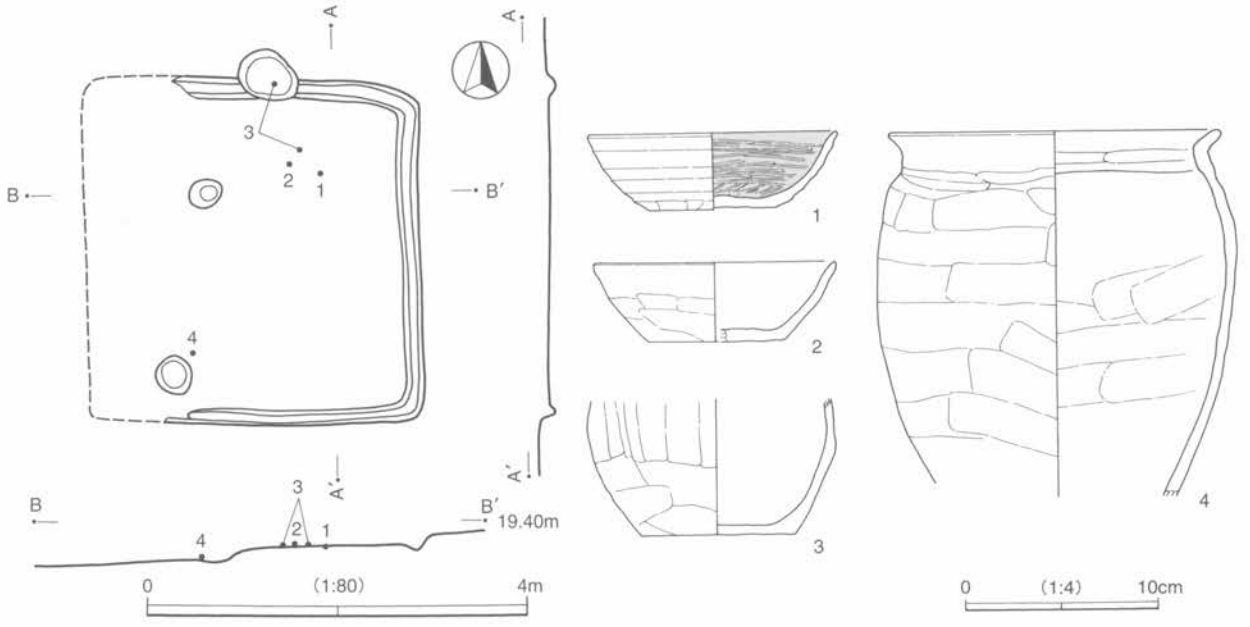
第230図　SI-030と出土遺物

としても，柱穴とは考えにくい。

遺物の量も極めて少ない。図示できたのはいずれも土師器である。そのうち3点がカマド周辺から出土し，甕1点が南側のピット付近で出土した。坏V（1）は内面を黒色処理されている。土師器坏AI（2）は，ロクロ整形した後外面をヘラケズリ調整している。いずれも底部は手持ちヘラケズリ調整である。また，小型甕（3），甕D（4）はともに比較的厚手の造りである。後者の甕は外面の横方向ヘラナデが特徴的で，古相の土器群には含まれないものである。平安時代でも比較的新相の土器群と考える。

SI-036（第232図，図版22・117）

台地東部の北東寄りに位置する小型の竪穴住居跡である。観音塚遺跡を望む谷の斜面に面する。南隅はSD-9と攪乱によって，西隅も攪乱によってやや損なわれており，さらに後世の削平と土砂の流出により，谷側の遺存度が悪い。壁の立ち上がりは10㎝～17㎝である。主軸を北西にとり，カマドは北西辺中央に



第231図　SI-031と出土遺物

設けられている。カマドの前から本跡中央にかけて床面が硬化している。柱穴・壁溝はみられない。

遺物は，カマドの内外で集中的に出土している。土師器坏類には，ロクロ製の皿と坏がある。皿D（2）は，底部を回転ヘラ切りしたのち，細い高台を貼付け，ヨコナデしている。坏BⅣ（1・3）は，底部を手持ちヘラケズリ調整している。土師器の小型甕D（4）は比較的薄手であり，口縁端部をわずかにつまみ上げている。須恵器の大型甕（5）は，明赤褐色に焼かれた千葉産須恵器である。これらは平安時代の古相を示す。

SI-037（第232図）

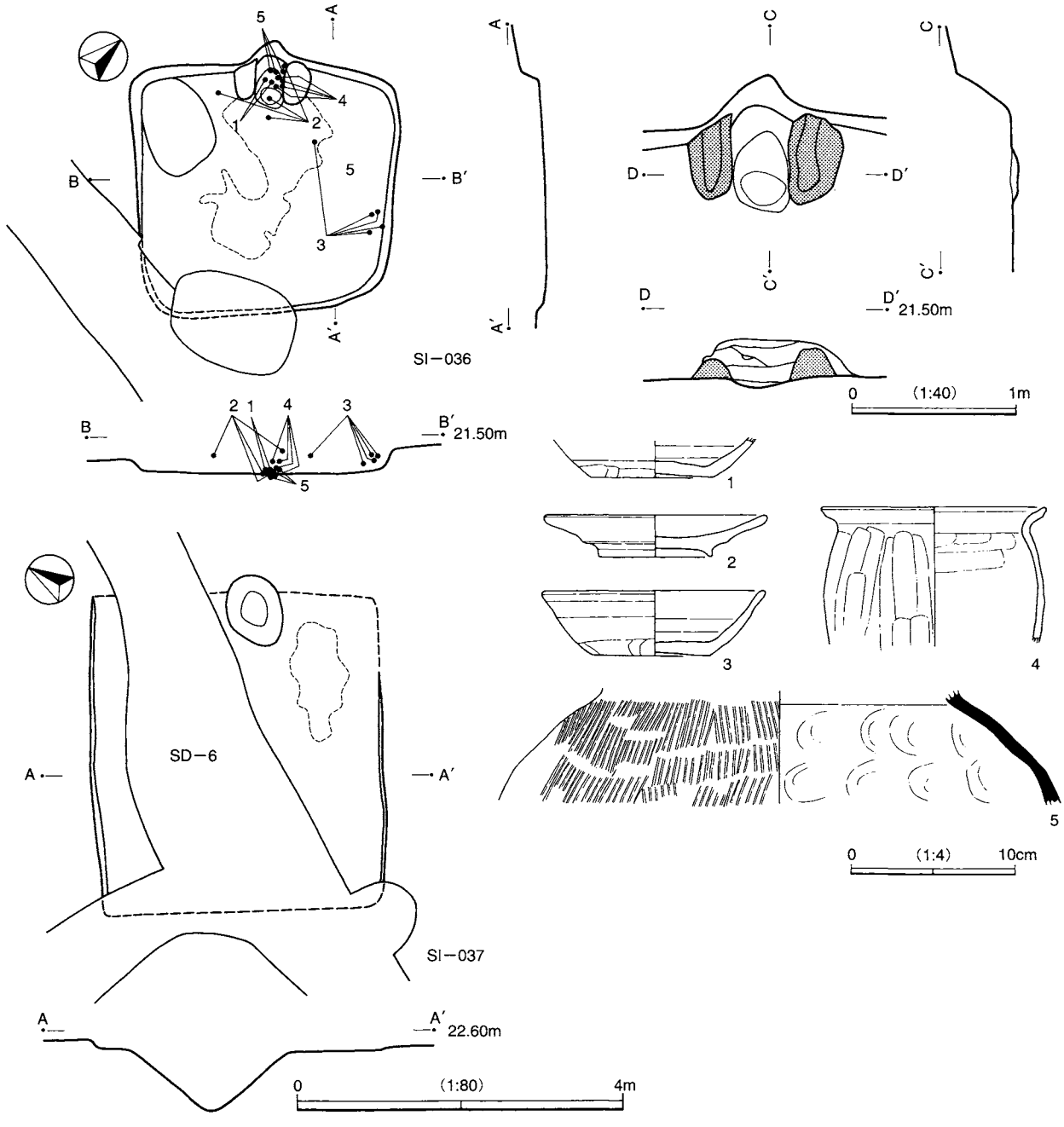
台地東部の北寄りに位置する竪穴住居跡である。削平され，さらに本跡の上部でSD-6とSD-7が交差しているため，遺存度は極めて悪い。検出できたのは，北東側にあったカマドの痕跡と，カマド脇の硬化部分及び主軸に平行する両壁面のみであった。

図化できる遺物は検出できなかったが，土器小片には千葉産須恵器片が多く含まれる。平安時代の所産とみられる。

SI-040（第233図，図版23・117）

台地東部の東端，観音塚遺跡を望む谷の斜面に位置する竪穴住居跡である。谷の傾斜で土が流失し，SD-10の掘削，イモ穴及び電柱敷設の攪乱によって，南東部分が失われている。奈良時代後半のSI-041と重複する部分で調査区が分かれており，別々に調査されたため遺構の検出は困難を極めた。また，両遺構にまたがって接合する遺物が存在するため，整理段階における両遺構の分離も困難を極めた。したがって，ここでは図面の分離をせずに報告する（本節1項 SI-041）。

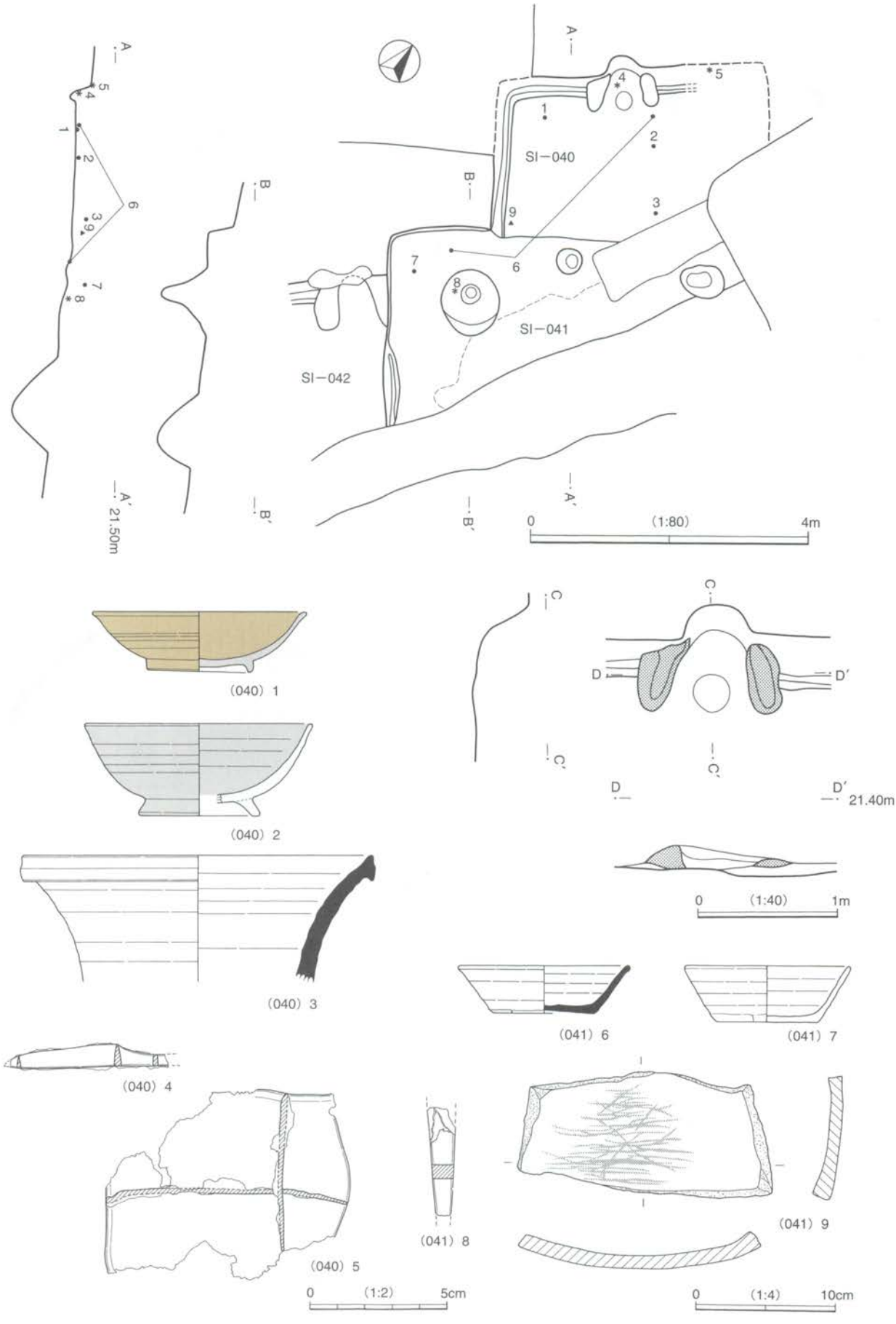
SI-040はSI-041より新しく，SI-041の覆土上に構築されていたと考える。残存するのは北西側1/4強



第232図　SI-036・037と出土遺物

である。カマドは北西辺中央に設けられ，主軸を北西にとる。壁溝は全周していた可能性が高い。柱穴は検出されていない。

図示した遺物のうち，SI-040に伴う遺物は5点である（1～5）。床面直上で出土した灰釉陶器の椀B（1）は，灰色を基調とし，内面の器壁にのみ薄い灰釉が施されて，わずかに緑色が掛かる。遺存度は70％以上である。内面が研磨ないし頻繁な使用によって摩耗し，灰釉が施されていない中央部分は平滑になっている。硯などに転用された可能性も考慮するべきであろう。土師器椀DⅡ（2）は，内外面が黒色



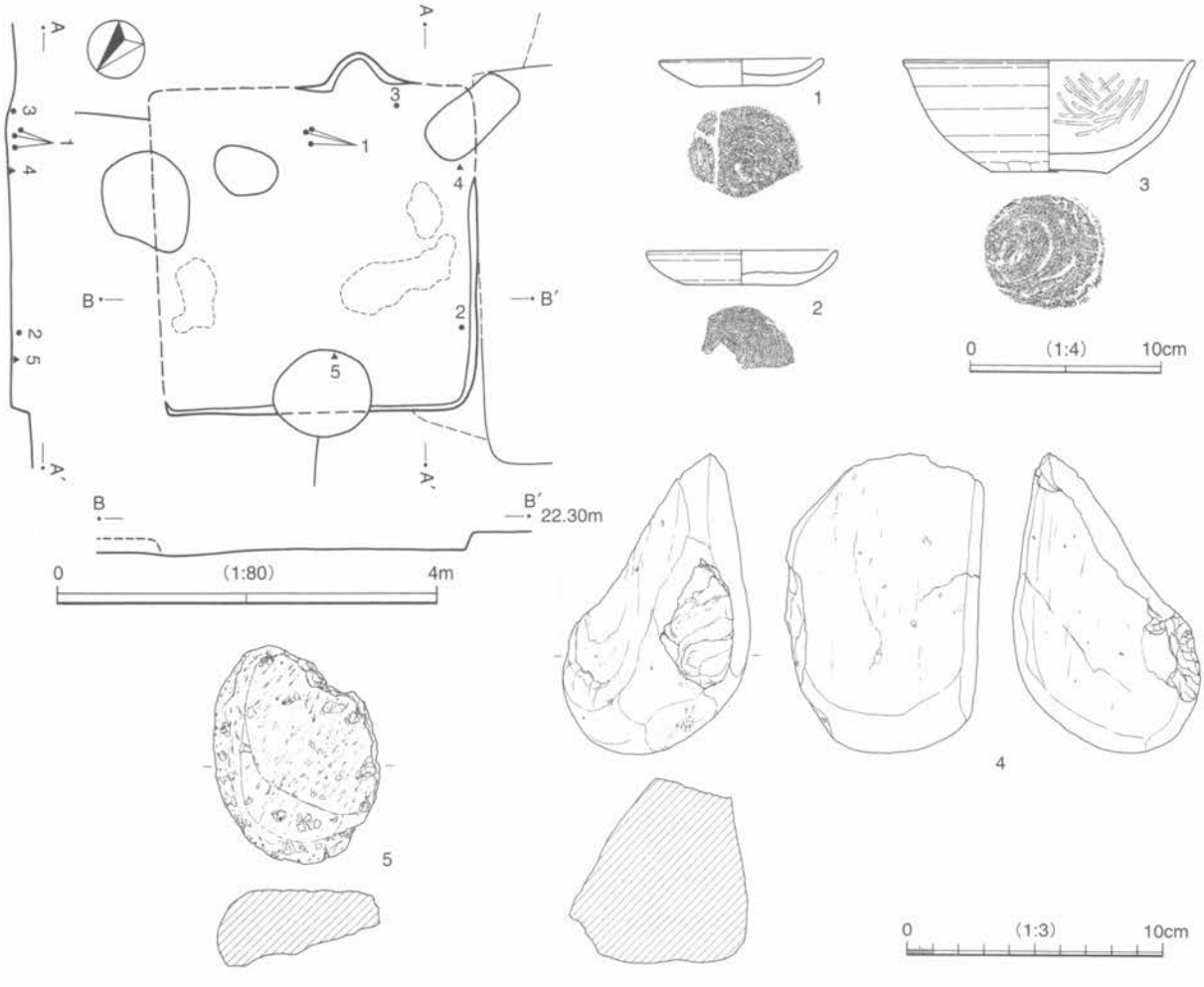
第233図　SI-040・041と出土遺物

処理されているが，ミガキは施されていない。須恵器甕口縁部（3）は，灰色に還元焼成された硬質のもので，内外面に自然釉が付着している。これらは平安時代でも新相を示す土器群である。鉄器では，刀子（4）と用途不明の鉄板（5）が出土している。

SI-046（第234図，図版25）

台地東部に位置する竪穴住居跡である。SI-049から西へ8mの地点にあたる。古墳時代後期後半のSI-045，SI-050Bの覆土を掘り込んで構築されている。主軸は南東に振れており，南東辺中央からやや南寄りにカマドの痕跡とみられる砂質粘土塊が検出された。遺存度は極めて悪く，床の硬化面は部分的に検出したのみである。壁溝，柱穴は確認されなかった。

出土遺物は全体に散在しているが，図示できたのは土師器3点と石2点である。カワラケ様の土師皿（1・2）には，底部が回転ヘラケズリ調整のもの（1）と，回転糸切り無調整のもの（2）がある。土師器椀A（3）は，外面の下端部を手持ちヘラケズリによって高台風に削りだしているが高台にはなっておらず，底は平らで，回転糸切り痕を残す。内面に弱いミガキが施され，黒色処理はされていない。焼け



第234図　SI-046と出土遺物

石片（４）は被熱により割れているが，用途は特定できない。ほかに，軽石片（５）が出土した。遺構の遺存状態は悪いが，土器群は平安時代でももっとも新相を示し，中世との間隙を埋める貴重な資料である。

SI-049（第235図，図版26・117）

台地東部に位置する小型の竪穴住居跡である。SI-046の南西４ｍに隣接する。SI-047，050Bの覆土を掘り込んで構築されている。主軸は北東に振れており，北東辺中央にカマドをもつ。床の硬化面は，中央部から南東壁にかけて検出されている。検出面から床までは20㎝あり，覆土は２層に分けられる。下層は少量のローム粒と黒色土粒を含む暗茶褐色土，上層はローム粒・砂質粘土・焼土粒を少し含む暗茶褐色土である。覆土から砥石（１）が出土したほか，中央床面とカマドから土師器・須恵器が出土した。

土師器坏ＢⅣ（２）は，黄橙色で，底部を手持ちヘラケズリ調整しており，ロクロ目が不明瞭で，やや厚みのある口縁部が特徴的である。当初はSI-047の遺物として取り上げられている。須恵器坏ＡⅤ（３）も黄橙色であり，土師器の可能性がある。やや大型で，ロクロ目をはっきり有し，底部は手持ちヘラケズリ調整である。須恵器甕類はいずれもにぶい褐色～暗褐色に焼成されている。甕Ｂ（５）・甕Ｃ（４）・大甕底部（８）がみられる。土師器甕には２種類あり，胎土に白雲母を含む常総型の甕Ｃ（６）と，「在地」系の甕Ｂ（７）がある。平安時代の比較的古相を示す土器群である。

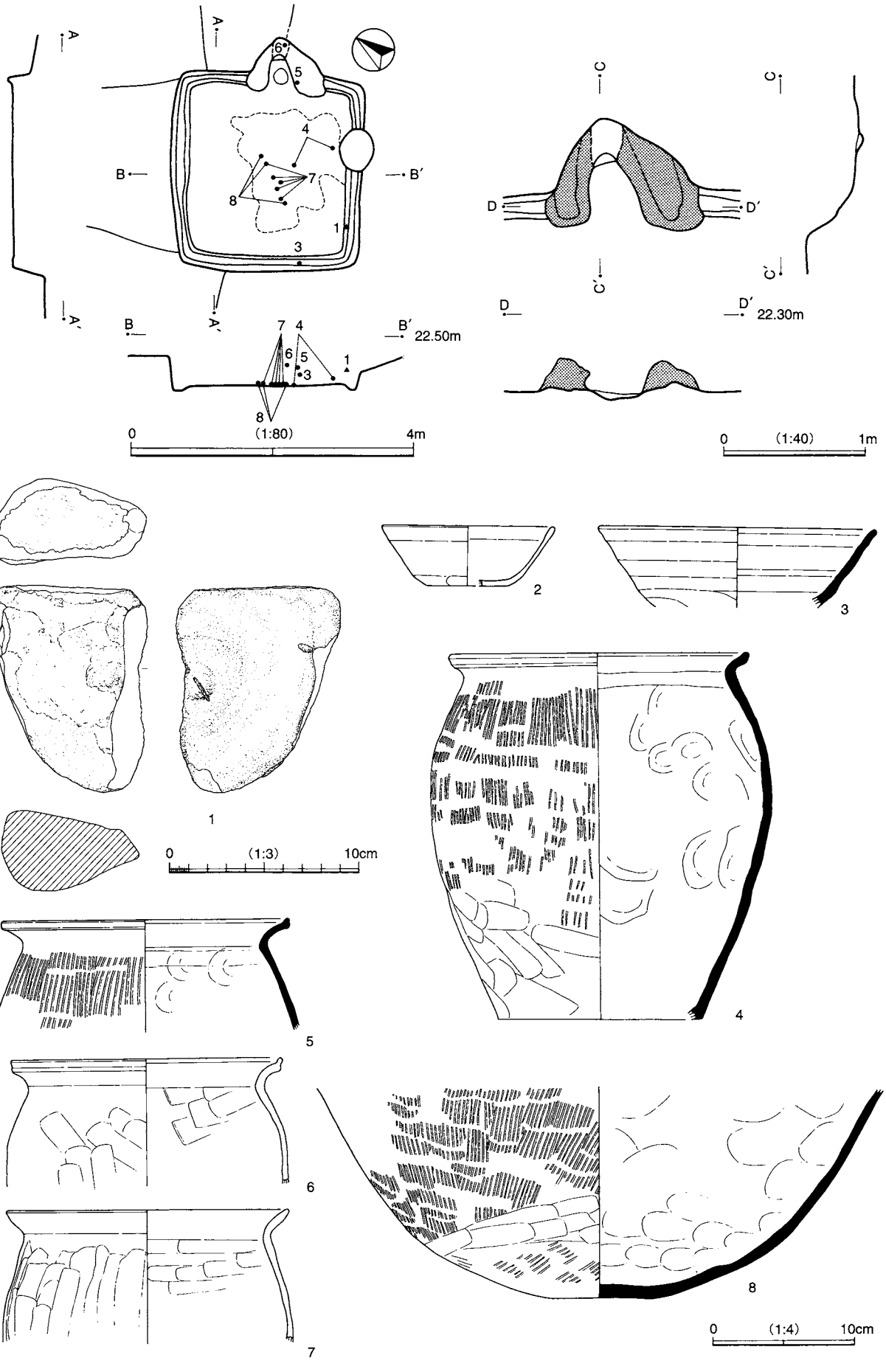
砥石（１）とした砂岩製の石片は，もともと縄文時代の凹石である。凹みから右辺は割れており，左辺と上辺には平滑な磨面が認められる。縄文時代遺構の密度に比して，平安時代竪穴住居跡から多く石器が出土する傾向が遺跡全体にみられるため，むしろ平安時代に砥石等として転用され，本跡から出土するに至ったと考える。

SI-051B（第236・237図，図版28・118，奈良時代のSI-051Aと一緒に掲載）

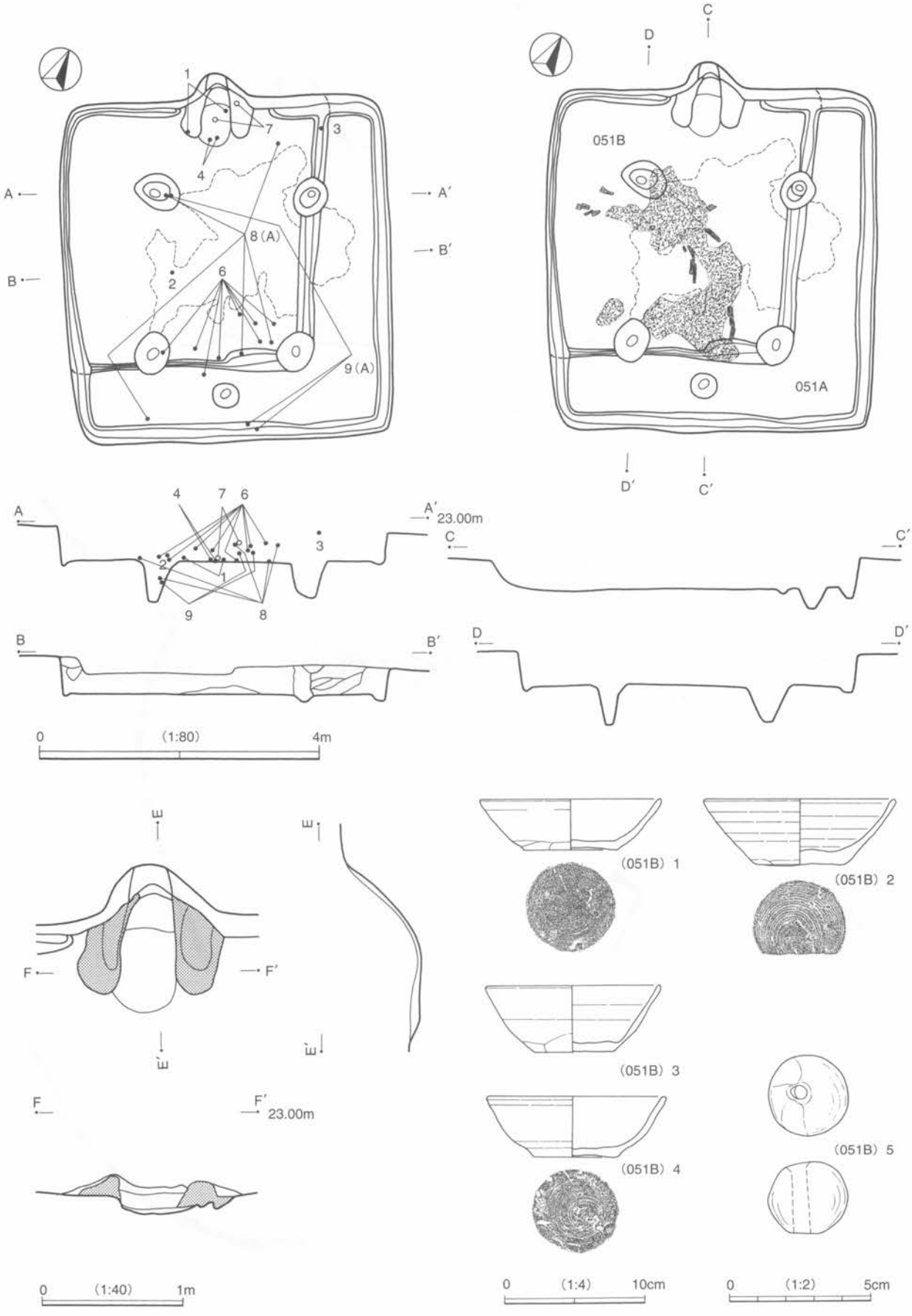
台地東部に位置する竪穴住居跡である。SI-049の北西10ｍにあたる。奈良時代のSI-050Aを切る。主軸は南北からやや西に振っている。カマドは北辺に設けられており，やや東に寄っている。柱穴はみられず，SI-051Aの柱穴を結ぶような位置に周壁溝がめぐっている。西辺と北辺はSI-051Aの周壁とほぼ重なるが，西辺はわずかにSI-051Aの外側まで掘り込んでいる。内部には，放射状に遺存する炭化材と，多量の焼土の堆積がみとめられ，その上を黒褐色土が覆っていた。遺物出土状況は偶然による火災を示すものではなく，住居廃絶時に廃材を焼いたとみられる。床の硬化面は壁溝内部を中心に検出されたが，東側では壁溝をはみ出るように検出されたため，調査時には２軒重複ではなく，１軒と考えられていた。両跡の床がほぼ同じ高さであったために硬化面が重なってしまい，分離が困難であった。

遺物はカマド内と床にほぼ完形の坏（１・２・４）と瓦片（７），南側周壁溝付近に甑（６）が出土した。また，確認面で坏（３）が出土した。坏類はいずれもロクロ製で，土師器とみられる。内面にミガキや黒色処理を施したものは含まれない。坏ＢⅦ（１）はやや浅めで，外面下部のみ手持ちヘラケズリ調整し，底部を回転糸切り無調整としている。坏ＢⅧ（２）も同じ調整である。坏ＢⅧには，底部を手持ちヘラケズリ調整しているもの（３）がある。椀ＡⅠ（４）は，回転糸切り無調整の底部であるが，高台風の形態になるよう厚く切り離している。五孔の甑（６）は，褐色を発する千葉産須恵器である。胴部外面には，焼成前に施された「分」の字形のヘラ書きがみられる。これらは，平安時代の比較的新相を示す。

カマド出土の丸瓦片（７）は，灰褐色～暗褐色で，比較的良好な焼成である。基部外面には，葺いた際



第235図　SI-049と出土遺物

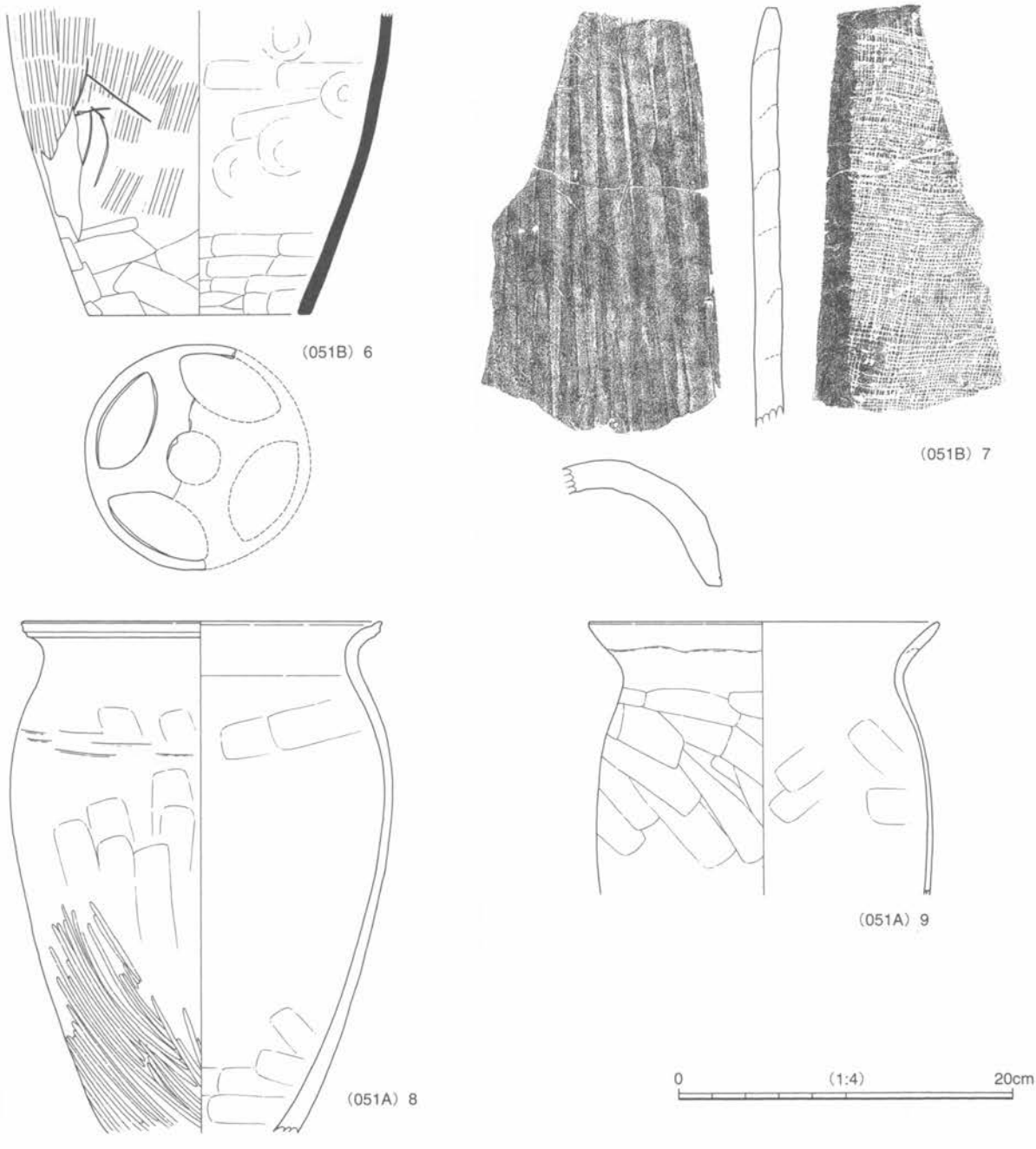


第236図　SI-051A・Bと出土遺物（1）

に隙間に詰めたとみられる淡褐色の泥が付着している。基部の破片は火床中央に立位で検出されているので，支脚に転用された可能性が高い。ほかに土玉（5）が出土している。

SI-060（第238図，図版35・36・119）

台地東部の東寄りに位置する一辺3mに満たない小型の竪穴住居跡である。主軸は南北からやや西に振れている。北西隅から南西にかけてSD-9が縦断し，北辺中央に設けられたカマドが大きく破壊されている。柱穴はみられない。カマド対面にあたる南辺の壁溝中に，小ピットが1か所検出された。出入口施設に関わるピットであろう。覆土については，各層にロームブロックを多く含み，斜面の高い方から斜めに



第237図　SI-051A・B出土遺物（2）

堆積しているので，比較的短期間で人為的に埋戻されたと考えられる。規模が小さい割に，遺物は多く，下層・カマド付近と，上層の２つに分かれて出土している。上下で接合する例は少ない。

下層・カマド出土土器はいずれも土師器である。坏類はロクロ製の土師器であるが，これには千葉産須恵器を含む可能性がある。底部が手持ちヘラケズリ調整されている。坏ＢⅡ（６・７・10）はやや浅めの身で，口縁部が外反する。坏ＢⅣ（９）はやや深めの身で、口縁部に厚みをもつ。皿ＡⅠ（４）は，底部が回転ヘラケズリ調整されている。土師器甕類は多様である。小型甕Ａ（14）は素口縁である。小型甕Ｄ

第238図　SI-060と出土遺物

(13) は口縁端部に面をもつ。甕C (17) は口縁部をつまみ上げている。これらは，平安時代の比較的古相を示す土器群である。

上層出土の土器には赤褐色～暗褐色を発する千葉産須恵器が含まれる。須恵器坏AVI（1・2）は，浅めではあるが，口縁端部に丸みをもつ。底部が手持ちヘラケズリ調整されている。坏（3）もほぼ同様の形態であるが，底部は回転ヘラケズリ調整されている。土師器坏BII（8）は，浅めの身である。土師器皿AII（5）は底部が回転糸切り無調整となっている。土師器小型甕B (15) は断面が三角形の口縁をもつ。ほかに，甕B (16)，甕E (18) などの大型の甕がある。大型の甕類はかなり厚手である。下層出土土器に比べ，わずかに新しい要素がみられる。

SI-064, 065, 066（第239・240・241図，図版37・119・120）

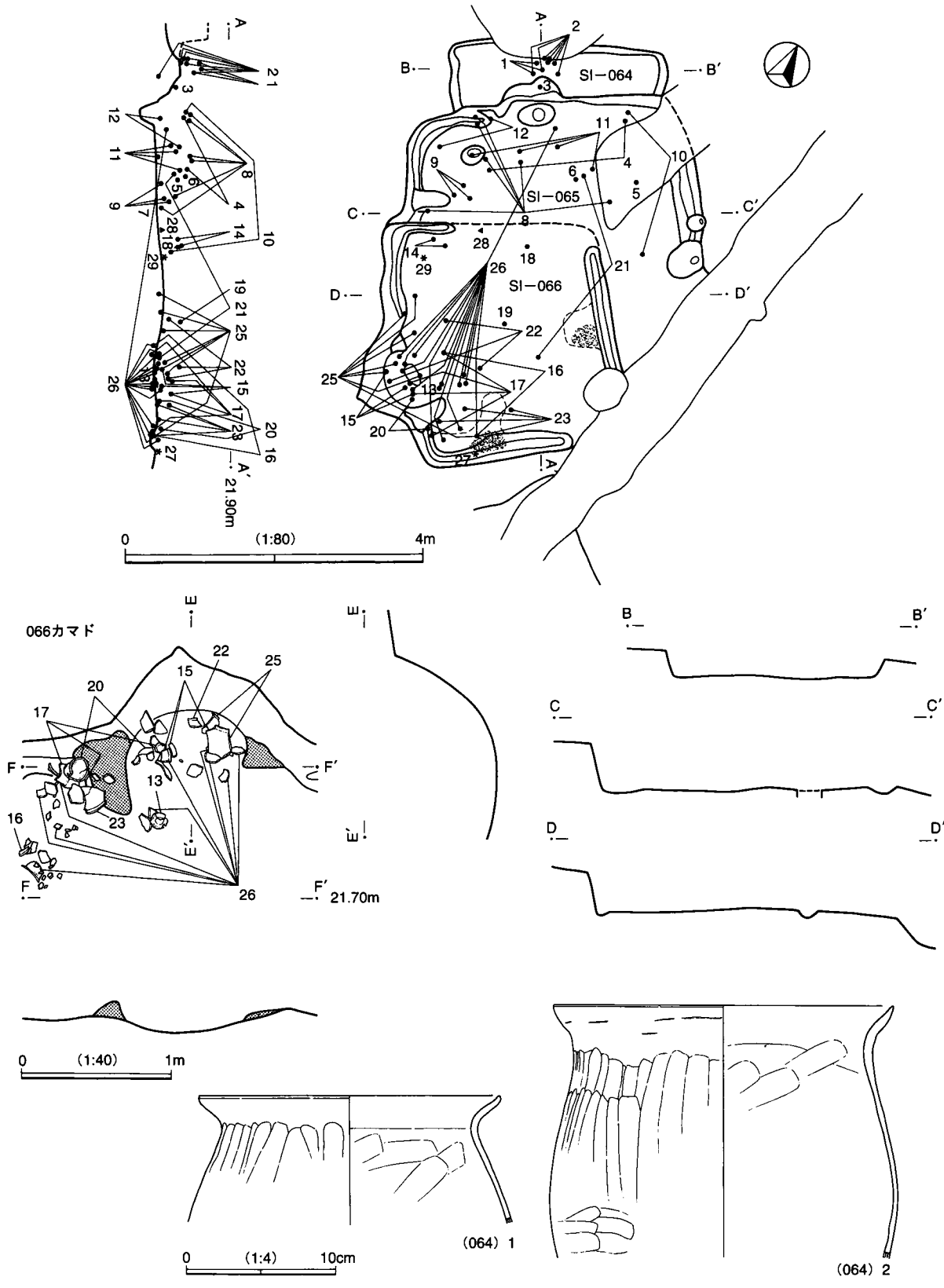
台地東部の東端に位置する竪穴住居跡群である。観音塚遺跡を望む谷の斜面に面しているため，流失により谷側が残存していない。そのうえ，SD-10が縦断し，最近の攪乱によっても，大きく削平されている。また，SI-064からSI-065及びSI-066の西半分にかけては，1988年に調査された。一方，SI-065及びSI-066の東半分は，1996年に改めて調査された。このため，土層観察からは遺構の切り合い等を確認できなかった。SI-065・SI-066の床面の高さがほとんど変わらないため不明瞭であるが，カマドや壁の掘り上がった状況からは，SI-064→SI-065→SI-066の順に構築されたとみられる。

SI-064は，一辺2.7m，残存する壁高40cmほどの小型竪穴状の遺構である。当初，SI-065の旧カマドの一部かと思われたが，独立した床面をもつことが判明した。SI-065より床が約30cm高い。SI-065の構築によって大半が削平され，柱穴，壁溝は検出されなかった。後世の攪乱を免れて，甕Bが2点（1・2）遺存した。

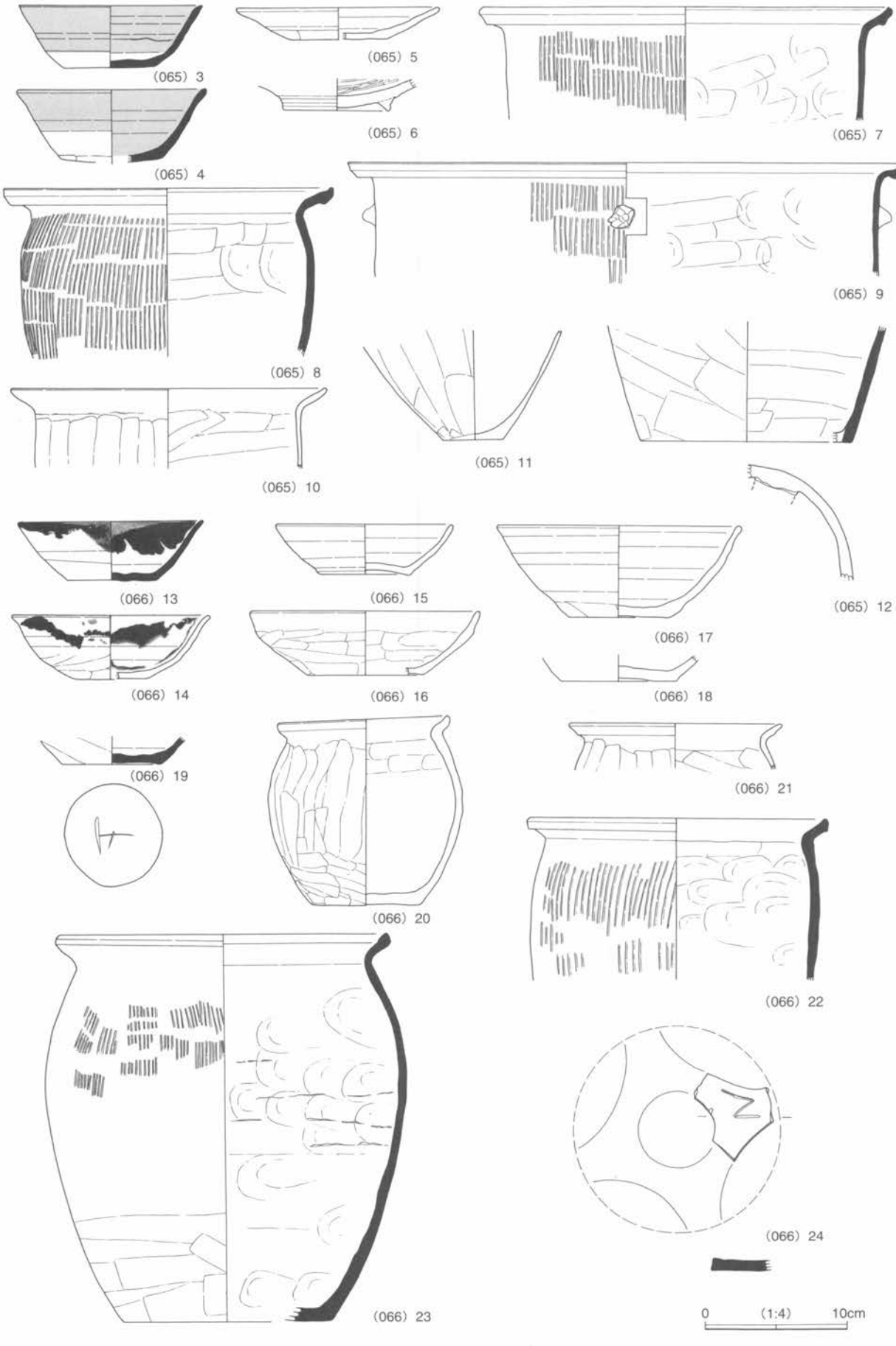
SI-065では，西側と北側にカマドが認められた。このうち，住居跡が廃棄された時点で使用されていたと思われるのは西側のカマドである。カマドの位置から推定すると，ほぼ北半分しか残存していない。北辺のカマドは，壁をややくぼめた程度の煙道がつき，直下に長径52cm・短径27cm・深さ24.5cmの火床部をもつ。袖は残っていないが，壁面やピットの上部は焼土と化している。西側のカマドはSI-066と重複しているため，ほぼ半分が失われている。火床部から須恵器甕（7）が出土している。壁溝は全周していたとみられるが，西カマドから北カマドまでと，東辺でのみ確認できた。北西隅部やや北寄りに，深さ26.5cmの小ピットが1か所検出された。主柱穴の可能性が高い。また，東壁溝中には深さ21cm前後のピットが2か所認められた。この機能は特定できない。

SI-066は，南西壁が検出面から55.6cm～58.6cm遺存するが，斜面側は流失して壁溝を残すのみで，それもSI-065の床面が検出面になっている。SI-065と重複する北西壁は検出されていない。北西辺では，SI-065カマドの南袖部の基部だけに壁溝が残っている。このような状況をみると，SI-065の方がSI-066より古い可能性が高い。この前後関係は下記の遺物の年代観とも合致する。主軸はほぼ南西にとっている。カマドは南西壁に設けられ，やや南に寄っている。カマド周辺を中心に遺物が集中して検出されており，南東壁溝中からは銅製の帯金具（巡方）1点が検出されている。

SI-065の遺物は，SI-065の範囲で出土したものに限って図示した。ただし，上記のようにSI-066との重複部分で出土したものが含まれる可能性もある。千葉市宇津志野窯産とみられる赤褐色の須恵器坏AVI（3・4），土師器の皿B（5），貼付高台付皿Dないし E（6）が該当する。9世紀中頃に操業を開始し



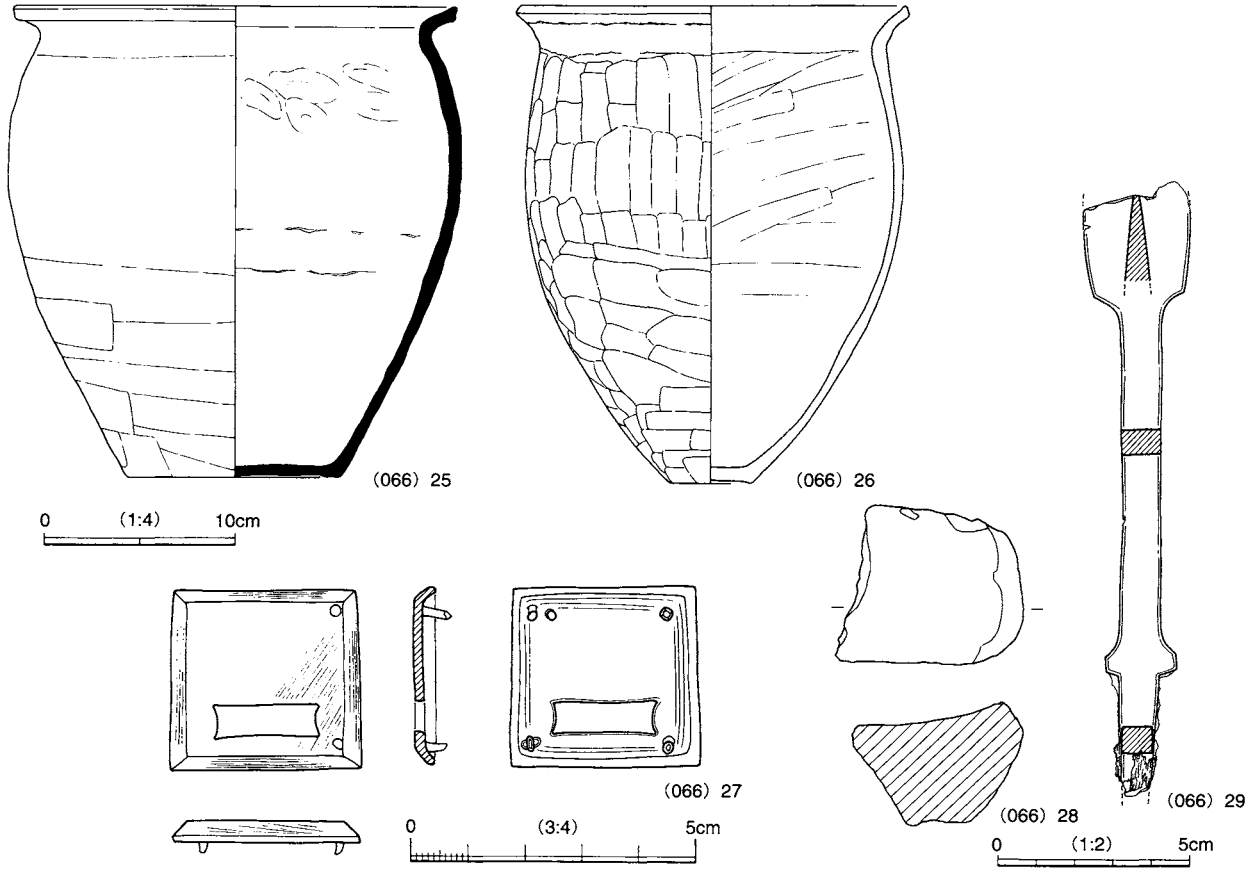
第239図　SI-064・065・066とSI-064出土遺物（1）



第240図　SI-065・066出土遺物（2）

たとされる宇津志野窯の製品が含まれるとすると，それ以後の年代を当てることになろう。須恵器甕・甑類（7～9・12）は，いずれも口縁部に多くの面をこしらえ，装飾的に仕上げている。灰色（7・8）に還元焼成されているものと，赤褐色（9），黒褐色（12）に焼成されているものがある。土師器甕類には，「在地」の系統（10）と，武蔵型の系統（11）があり，どちらも極めて薄いという特徴がある。これらは平安時代の古相を示す。

SI-066の遺物はカマド周辺から南側に集中しているため，これらによって時期を判断することが可能である。漆容器として使われた須恵器坏ＡⅤ（13）は，底部が小型化する傾向にあるが，暗褐色の焼き色や質感では千葉市中原窯の製品に近い。周囲を回転ヘラケズリ調整しているが，中心に糸切り痕を残す。ロクロ土師器の坏ＢⅡ（14）も漆容器として使われた。ロクロ土師器坏ＢⅦ（15）は，底部に回転糸切り痕を残す。土師器坏ＡⅠ（16）はロクロを使用した痕跡がなく，器面全体を横方向のケズリ調整で仕上げている。椀ＡⅡ（17）は，外面最下部と底面外周に強い手持ちヘラケズリ調整を加えて高台風に加工しているが，底面は平らで，中心に糸切り痕を残している。甕類には，土師器小型甕Ｂ（20），土師器甕Ｄ（26），須恵器甕Ｃ（22・23・25），須恵器甑（24）がある。須恵器の色は赤褐色（22・24・25）や暗褐色（23）であり，いずれも千葉産である可能性が高い。千葉市中原窯は，宇津志野窯より先行して操業したとされる。須恵器坏ＡⅤ（13）の産地が中原窯とすると，宇津志野窯産を含むSI-065の遺物より古いことになる。しかし，須恵器甕類の口縁部形状で比べるなら，宇津志野窯産を含むSI-065の遺物よりむしろ退化傾向が強い。土師器甕類もSI-065例とは形状がまったく異質で，かなり厚手のものである。土師器坏類には底



第241図　SI-066出土遺物（3）

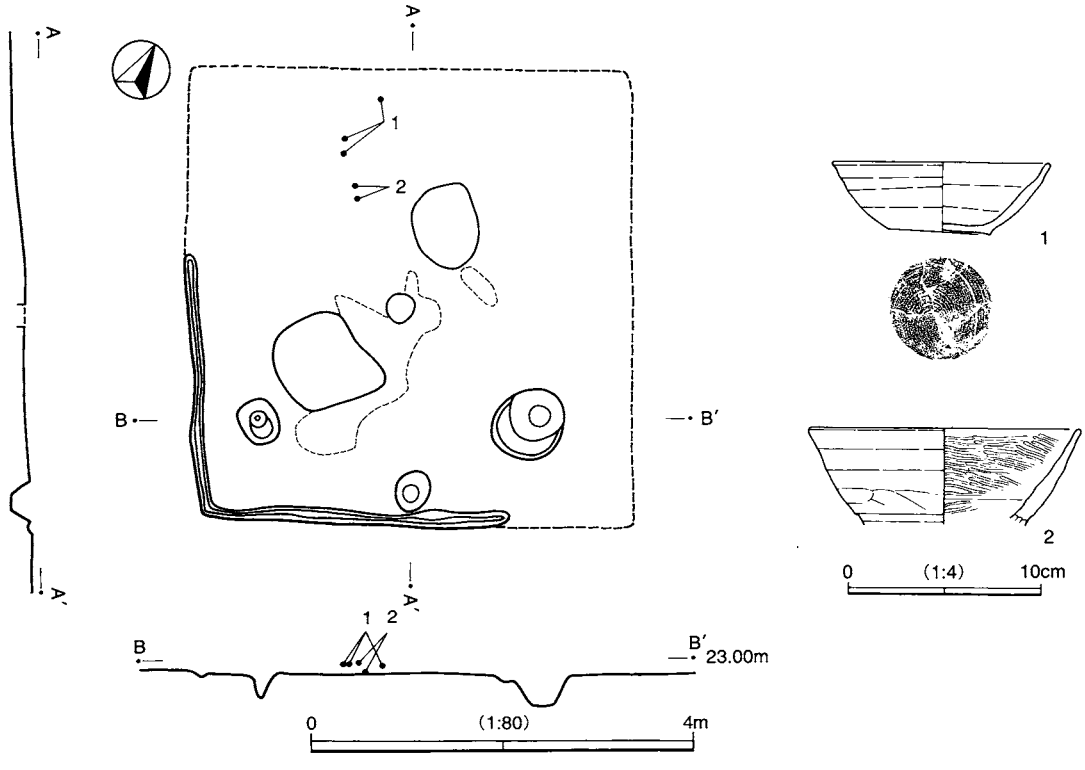
部を回転糸切り無調整のものが含まれる。少なくともSI-065例より新しいとみられる。総合的には平安時代の比較的新相を示す。

SI-066出土の銅製帯金具（巡方）は，縦31.41㎜，横32.00㎜，高さ4.00㎜で，17.80㎜×5.50㎜の長方形の透かしをもつ。裏の四隅には鋲脚が取り付けられ，最も長いものは6.8㎜ある。表面はかなり丁寧に研磨され，研磨時の擦痕を残している。伴出のSI-066出土土器は時期が下るため，帯金具は前代からの伝世品であろう。北西隅で出土した鉄製ノミ（29）は，棒状の柄部と茎の境に明瞭な突起をもつ。砥石（28）は小さな破片であるが，厚みがある。

SI-071（第242図，図版39・120）

台地東部の北寄りにある竪穴住居跡である。同時代の住居では，SI-051が南東３ｍに隣接する。上部の大半を削平されて失い，西辺から南辺にかけての壁溝の一部，柱穴２か所，南辺中央のピット，硬化面の一部を検出したのみである。南辺中央のピットを出入口施設と考えると，カマドはその対面位置にあった可能性が高く，主軸は南北からやや西へ振れる。覆土は検出時に失われて内容は不明である。

検出された遺物もごくわずかである。推定される床の範囲から出土した土師器坏を２点図示した。いずれもロクロ製である。浅い坏ＢⅦ（１）は底部に回転糸切り痕を残す。高台付坏ＢＸ（２）は内面にミガキをもつ。細片には，断面が「ｐ」字形となる口縁部片など退化傾向にある甕片を含む。平安時代の新相を示す。

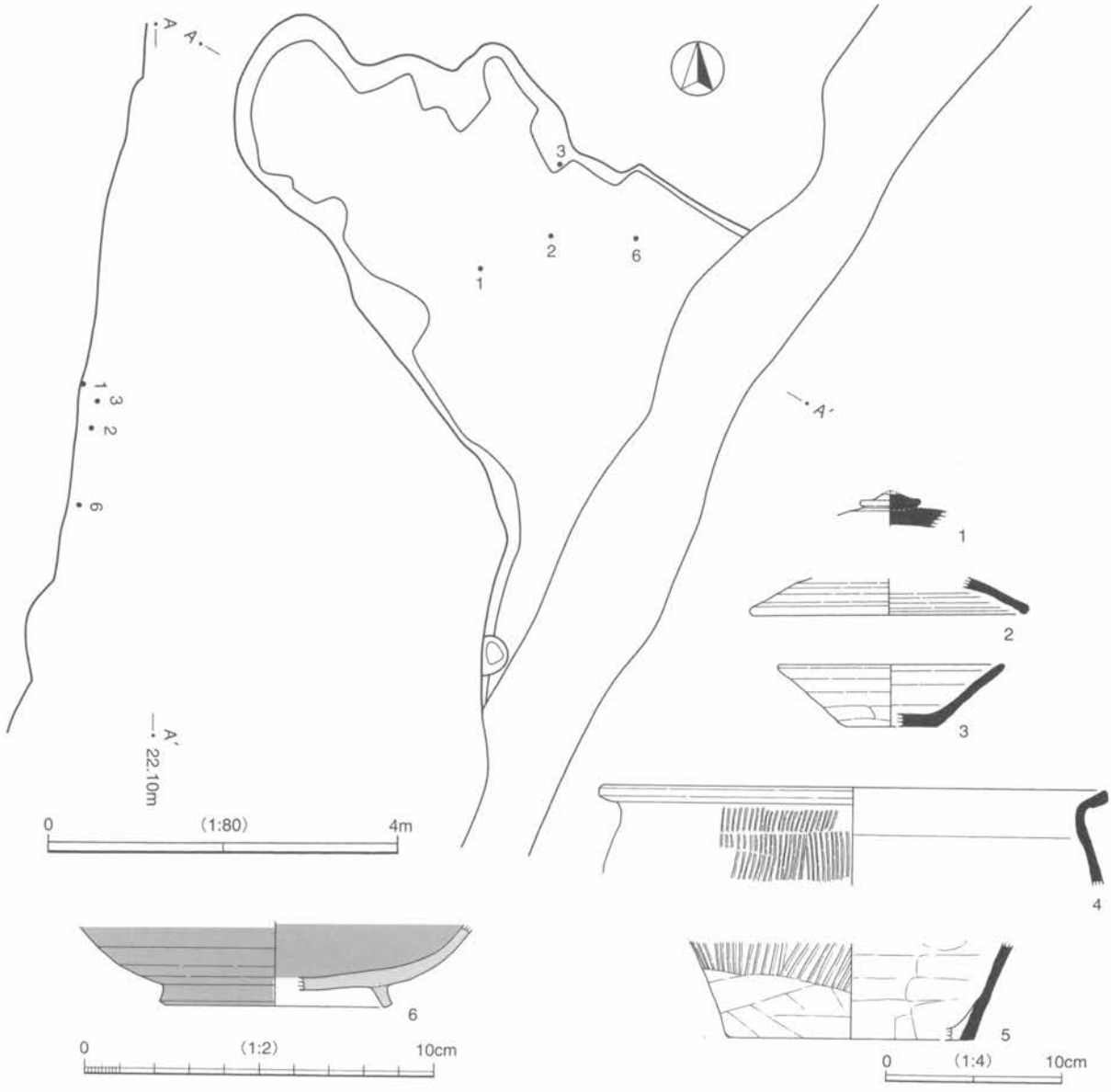


第242図　SI-071と出土遺物

SI-072（第243図）

台地南部の東端に位置する竪穴状の遺構である。観音塚遺跡に面した谷沿いの緩斜面にある。東側をSD-9と接している。SD-9は，谷の縁沿いに走るSD-10と並行した溝であり，台地と谷を区切る施設であったと考えられる。溝の年代は特定できないが，貝が投棄されているなど，集落に関係する溝であることは確かであり，古代に遡る可能性がある（第7章第1節）。

本跡は，覆土が黒色粒や焼土粒を少量含む暗茶褐色土であったため，当初住居跡として調査された。しかし，形状が不整で，カマドや柱穴等の施設もないため，ほかと同じ竪穴住居跡であるとは考えにくい。ただし，浅い竪穴状の遺構であり，覆土の遺物に緑釉陶器の破片があったことから，竪穴住居跡と同列に扱った。遺物は遺構全体に散在しているが，比較的遺存度の良い遺物は，遺構の輪郭がほぼ方形に復原できる東側部分で出土している。方形の竪穴住居跡と，不整形な土坑の切り合いによって本跡のような形状に見えている可能性もある。



第243図　SI-072と出土遺物

図示した６点は時期の異なる遺物が混在する状況を示している。灰色に還元焼成された奈良時代末ころの須恵器坏蓋（１・２）と，平安時代の比較的古相を示す黒褐色の須恵器坏Ｖ（３），青灰色の須恵器甕Ｃ（４），赤褐色の須恵器甑（５）がある。

緑釉陶器（６）は，薄手でシャープな造りの貼付高台付椀である。SI-072 と SD-9 の出土資料２片が接合し，底部が半周程度残っている。両片の接合部には打突によるつぶれや剥落があるが，ほかにはなく，意図的な破砕を認めるには至らない。底部は，回転ヘラケズリの後丁寧にナデ仕上げが施され，その際についた同心円状の筋がみられる。内外面から高台の端部に至るまで均一な浅い緑色の釉薬が掛かる。尾北産の黒笹 90 窯式との教示を受けた（愛知県立陶磁博物館井上氏による）。

SI-073（第 244 図，図版 40・120）

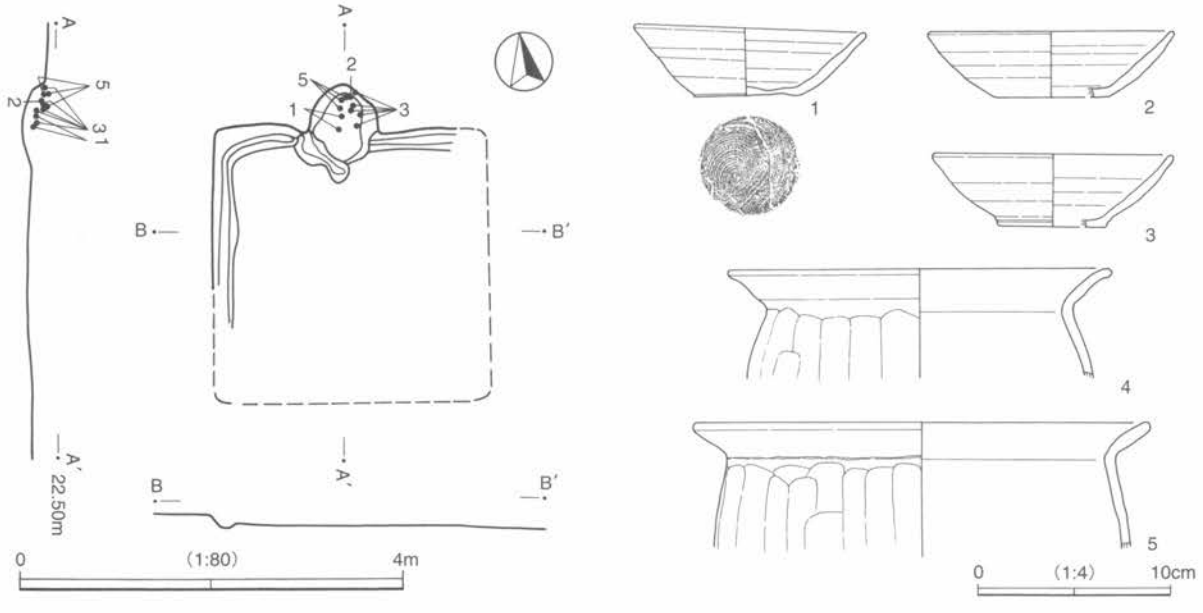
台地東部に立地する小型の竪穴住居跡である。東側に下る緩斜面に面しており，SI-072 からは北に９m離れている。大半が削平されており，カマドのある北辺から西辺にかけてのみ確認できた。残存している部分では壁溝が認められた。柱穴は検出されなかった。

遺物はカマド内で出土している。土師器坏類（１～３）は，いずれも底部に糸切り痕を残す。底径が小型化する段階の，浅い土師器坏ＢⅦであり，高台風に厚く切り離したもの（３）もある。土師器甕（４・５）はいずれも「在地」の系統である。口縁部屈曲が強く，厚手になっている。平安時代の新相を示す。

SI-075（第 245 図，図版 40・120）

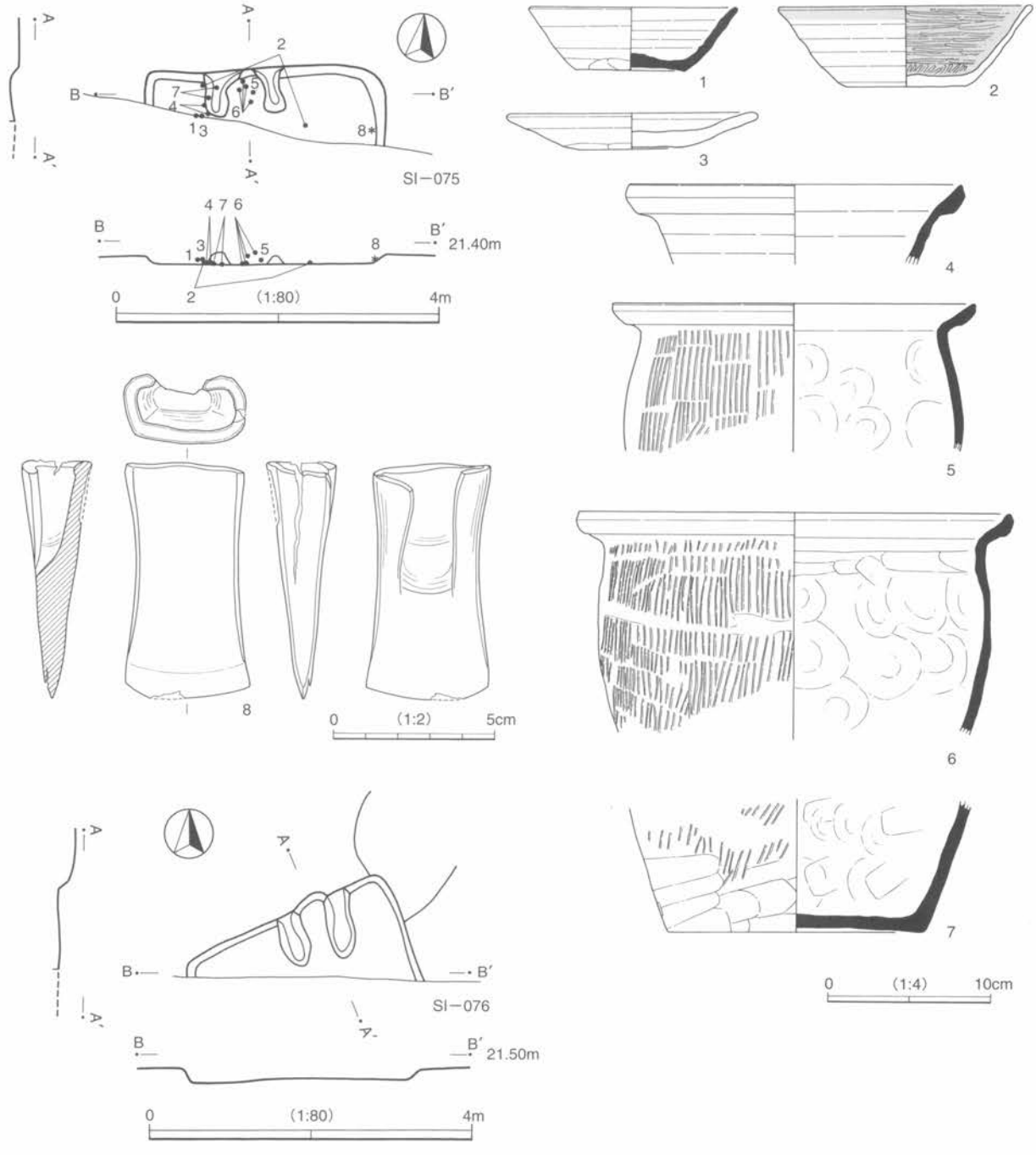
調査区南西隅に２軒だけ離れて検出された竪穴住居跡の一つである。集落としては，むしろ千葉急行線調査時に検出された，南西の舌状台地上に展開する遺構群との関係のほうが深いと思われる。遺構の北側は中野台遺跡を望む谷の緩斜面に面しており，流失している。

遺構の大半は調査以前の造成により失われている。検出されたのは，カマドのある側で，北端の 1/4 程度である。小型の竪穴住居跡で，主軸は北にとる。壁溝はなく，柱穴も検出されていない。



第 244 図　SI-073 と出土遺物

遺物は比較的遺存が良く，カマド左脇では完形の皿（３）の上に坏（１）が載っている状態で出土した。また，東側の壁際では，鉄斧（８）を検出した。須恵器坏（１）は暗褐色のもので，底部の中央に厚みがある坏ＡⅦに類する。千葉市宇津志野産の可能性が高い。須恵器甕（４～７）は，外面が灰色，内面が黄褐色のものを主体とし，千葉産須恵器独特の焼成である。甕の口縁部は丹念に面とりして装飾的に仕上げている。土師器坏ＢⅤ（２）は内面黒色処理されている。底部は回転ヘラケズリ調整であるが，中心に回転糸切り痕が残る。皿Ａ（３）は，底部を手持ちヘラケズリ調整されている。これらは平安時代の比較的古相を示す。



第245図　SI-075・076と出土遺物

SI-076（第245図，図版40）

調査区南西隅のSI-075の東に隣接して検出された竪穴住居跡である。大半が土地造成により失われ，カマド周辺のみが残存した。主軸はやや西に振れた北にとる。カマドが北辺の東から約1/3の場所に偏って置かれている。壁溝，柱穴は検出されず，遺物も出土していない。小型の竪穴住居跡であり，SI-075と並んで検出されたことから，SI-075とさほど異ならない時期の遺構と考える。

SI-077（第246図，図版120）

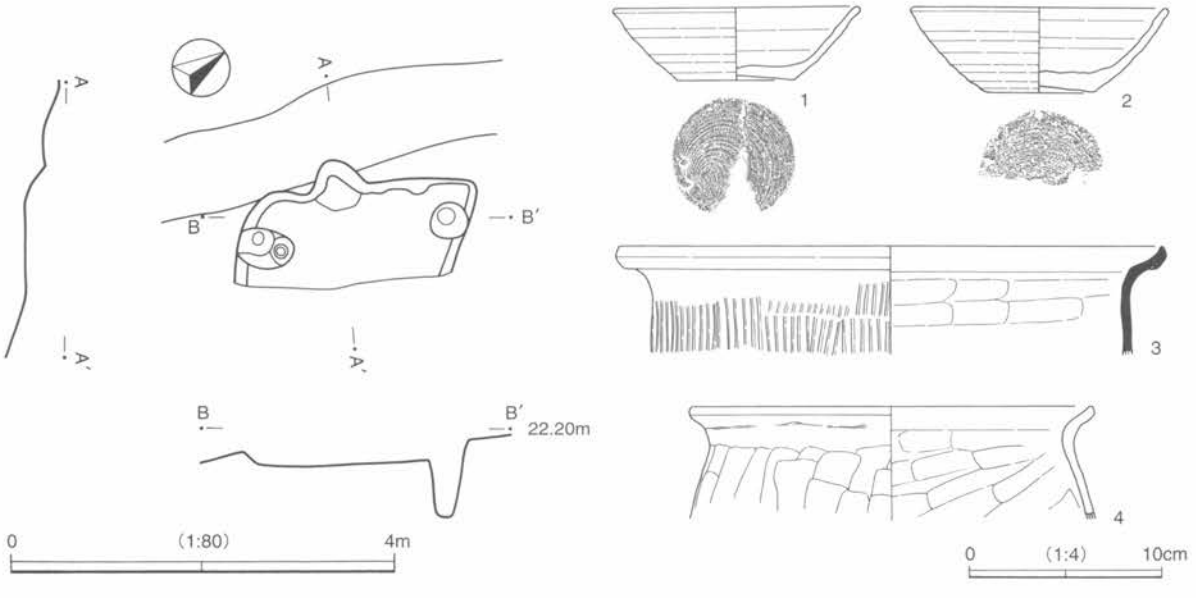
台地南部の東端，観音塚遺跡に面した傾斜面に位置する，小型の竪穴住居跡である。北側をSD-10が切っている。南側は斜面に流失し，かろうじてカマド周辺のみ検出できた。全体にやや不整形である。主軸は北西にとる。カマドは，北西辺の西から約1/3の場所に位置する。壁溝は検出されていない。東辺と西辺の壁際に柱穴と思われるピットが1か所ずつ検出された。

覆土中の遺物から土器4点を図示した。土師器坏は，やや浅い坏BⅦ（1）と深い坏BⅧ（2）がある。いずれも底径が小さくなっており，底部に回転糸切り痕を残す。須恵器甑（3）は，赤褐色に焼成されたもので，その口縁部は比較的丁寧な作りである。ほかに土師器甕D（4）がある。平安時代の比較的新相を示す土器群といえる。

SI-082（第247図，図版42・122）

台地中央部の東寄りに位置する小型の竪穴住居跡である。羽口・鉄滓・銅滓・土器転用ルツボなど，鍛冶工房関連の遺物が出土していることが注目される。

弥生時代中期前半のSI-083の覆土を掘り込んで構築されている。四隅はSX-12の柱穴と重複しているが，本跡の硬化面がその上に一部形成されているので，本跡の方がSX-12より新しい。主軸をほぼ東西にとり，東辺のほぼ中央にカマドをもつ。壁溝は全周している。硬化面は，四隅を除き全面に広がる。カマド両脇の袖部に，深さ17.1㎝と19.0㎝の小ピットが2基検出されている。南側袖部には，カマド材（黄白色砂質粘土）が残っている。西側の硬化面中に，内面まで硬化しているごく浅いくぼみが2か所検出さ



第246図　SI-077と出土遺物

れた。ここに柱を立てた痕跡という可能性がある。さらに，遺構のほぼ中央部には径15㎝×17㎝，深さ42.3㎝の小ピットがある。大きさの割に深いため，主柱穴以外に，特殊機能を有する施設が存在した可能性がある。覆土は４層に分層できる。とくに人為的な埋戻しが行われた痕跡はないが，最上層とその下層の間にはやや暗緑色を帯びた硬化面が存在する。遺物はこの硬化面付近に集中しており，ある程度埋没した後に，遺物が投棄されたことを示している。鍛冶関連遺物も付近の工房から一括投棄された可能性が高い。

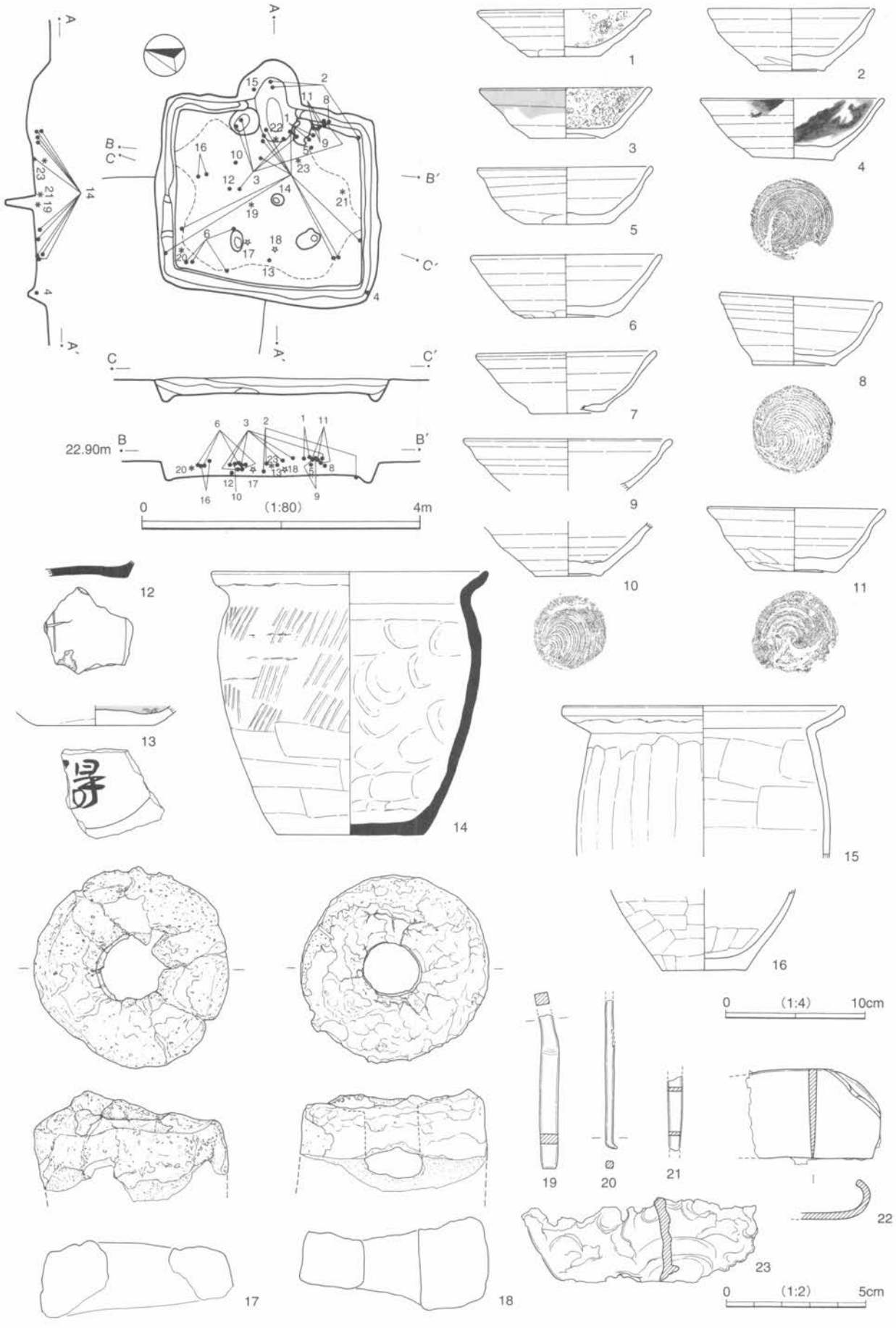
鍛冶関連遺物は遺構内全面から出土した。羽口は，本跡中央部の２点（17・18）のほか，カマドの覆土内からも小片が出土しているが，鍛冶炉に装着状態での出土ではないため，カマドとの関連は薄いと考えられる。いずれも溶解した鉄が付着した鉄用の羽口である。銅塊（バリ：23）や，銅滓の付着した土器転用ルツボ（１・３）など，銅鍛冶の遺物も出土している。これら鍛冶工房関連遺物のほかに，鉄製の紡錘具，あるいは漁具（20），鎌（22），工具の柄（19・21）の破片が出土している。

土器では須恵器とみられるものは少ない。図示した中では，２点のみである。須恵器甕底部片（12）は黒褐色に焼成されており，底外面に「十」字状の線刻が認められる。須恵器甕Ａ（14）は暗褐色の焼成で，外面のタタキ痕をナデ消しされており，口縁端部の造りが簡略化されている。坏類はいずれもロクロ製で，土師器とみられる。坏の底部調整は，手持ちヘラケズリ調整のもの（１・５・６）よりも，回転糸切り無調整（２～４・７・８・10・11）が主体である。ルツボに用いられたのは，浅い坏ＢⅦ（１・３）であり，前者は坏よりもⅢに近い形態である。やや大きめの坏ＢⅡ（５・６），深い坏ＢⅧ（８・11），底径が非常に小さい坏ＢⅨ（２・４・７・10）といった相違があるが，総じて器壁が内湾するという特徴をもつ。土師器坏ＢⅤ（13）は，内面にミガキと黒色処理を施されたもので，底部下面が手持ちヘラケズリ調整され，さらに，「得」の字の一部とみられる明瞭な墨書が認められる。甕Ａ（15）は，筒状の胴部をもつ厚手のもので，口縁部屈曲が強く，端部をつまみ上げている。甕底部片（16）とは別のものと考える。平安時代でも比較的新相の土器群である。

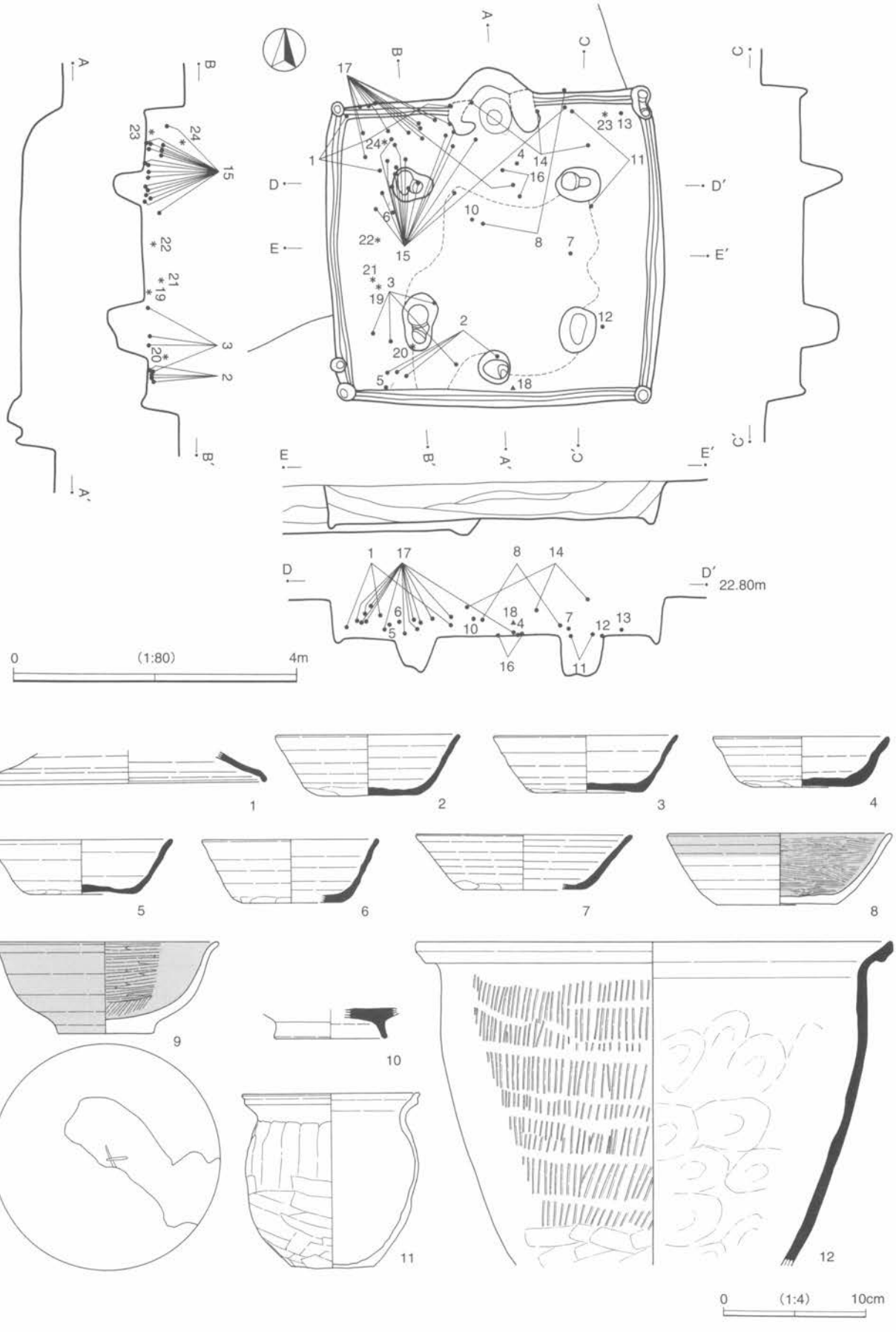
SI-085（第248・249図，図版44・123）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。古墳時代後期後半のSI-086の覆土を掘り込んで構築されている。主軸を北にとり，北辺中央にカマドが設けられている。壁溝は全周し，対角線上に４か所の柱穴をもつほか，四隅の壁溝内にも小ピットをもつ。カマドの対面にあたる南辺中央には，出入口施設とみられるピットがある。土層は５層に分層され，上部の２層以外はロームブロックを主体とした土砂であったので，人為的に埋戻されたものと考える。遺物はこの埋土の中に多く検出されている。

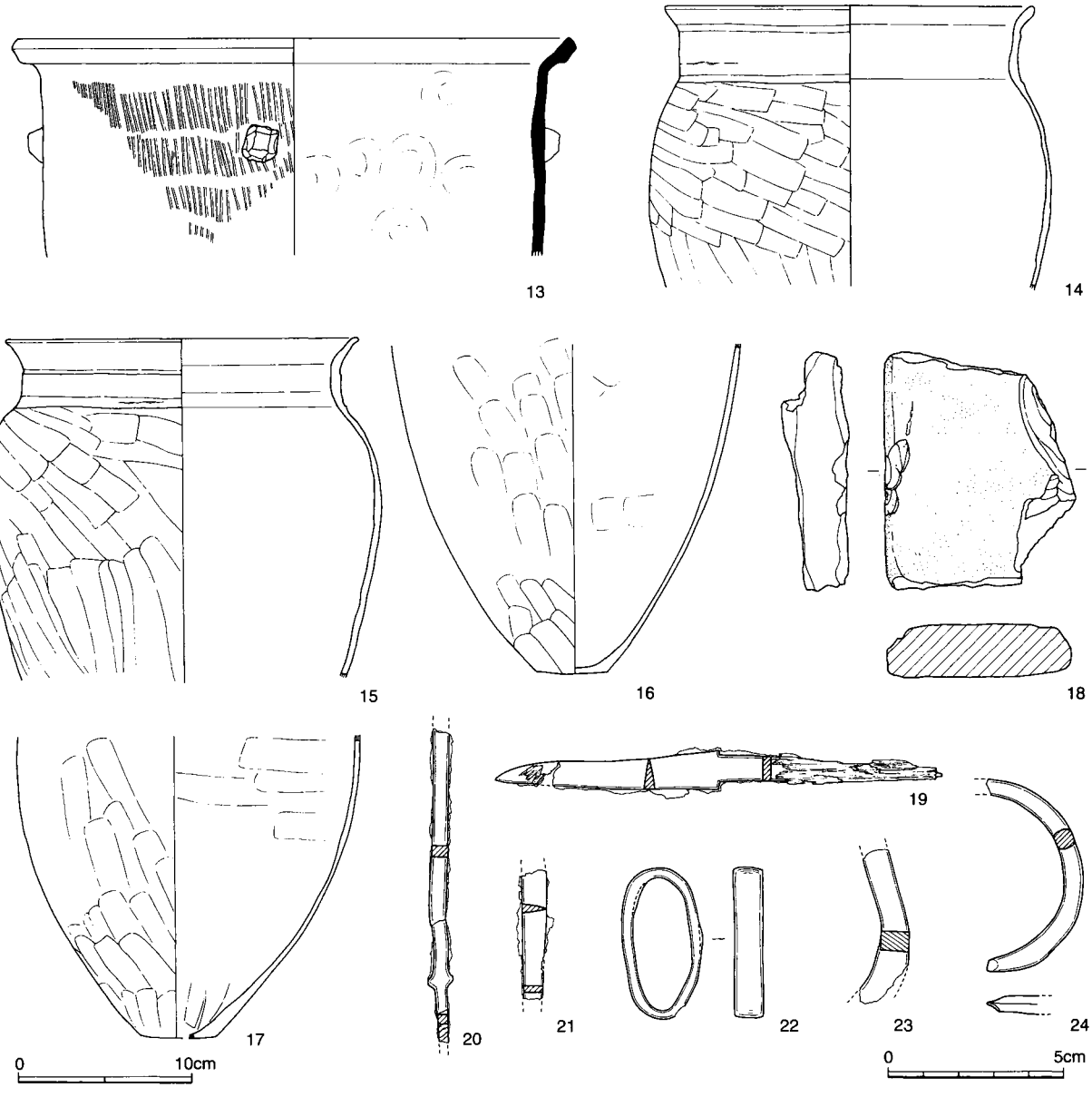
遺物の分布状況をみると，カマド周辺から西側に集中する傾向にあり，使用時の位置を保つものはないとみられる。全体に坏類の遺存がよい。須恵器坏ＡⅡ（３・５），坏ＡⅢ（２・６・７），坏ＡⅣ（４）は赤褐色から黒褐色に発色し，いずれも千葉産須恵器の焼成である。須恵器椀Ａ（10）は灰色に発色した硬質の須恵器である。外反する薄手の貼付高台をもつ。須恵器甕には，底部に向かってすぼまる甕Ｆ（12）がある。青灰色を発する。須恵器甑Ｂ（13）は，両側に方形の把手状突出部をもつものである。黄橙色を発する。土師器坏ＢⅤ（８）は，ロクロ整形の後，内面にミガキを施して黒色処理をしている。黒色範囲は口縁部外面に及んでいる。坏の底部は，ドーナツ状に回転ヘラケズリ調整され，中心に回転糸切り痕が残る。土師器椀Ｂ（９）は，平底であるが外見が削り出しの高台風である。内面にミガキを施し，漆のよ



第247図　SI-082と出土遺物



第248図　SI-085と出土遺物（1）



第249図　SI-085出土遺物（2）

うな淡い黒色処理をしている。処理は外面も施されているが，あまり遺存していない。底外面には，焼成後の「×」状線刻がある。土師器甕類には，口縁端部に稜をもつ小型甕A（11）と，薄い武蔵型の甕E（14～17）がある。該期としては比較的多く検出されている。平安時代の古相を示す。

鉄製品には，刀子（19），鉄鏃（20・21），責金具（22），工具の柄（23），環（24）がある。ほかに砥石（18）が出土している。

SI-087（第250・251・252図，図版45・124・125）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。SI-085の2.5m南に隣接する。古墳時代後期後半のSI-088の覆土を掘り込んで構築されている。主軸はほぼ北にとっており，カマドが北辺中央に設けられている。

壁溝は全周する。カマド前面から主柱穴の間にかけての床面が踏み固められ，硬化している。対角線上に主柱穴が４か所配されている。カマド対面にあたる南辺中央には，出入口施設とみられるピットがある。柱穴はいずれも上半が大きく掘り広げられていることから，柱の抜取りが行われたとみられる。カマド両脇のほか，壁溝中に計７か所の小ピットがある。覆土は，後世のイモ穴等によって攪乱されているが，概ね３層に分けられる。上層に細ロームブロック，中層にローム粒・細ロームブロック，下層にローム粒・ロームブロック混入の茶褐色土が堆積しており，各層ともロームブロックが混入した人為的な堆積状況を示している。遺物も各層から多量に検出され，異層間で接合関係がみられる。

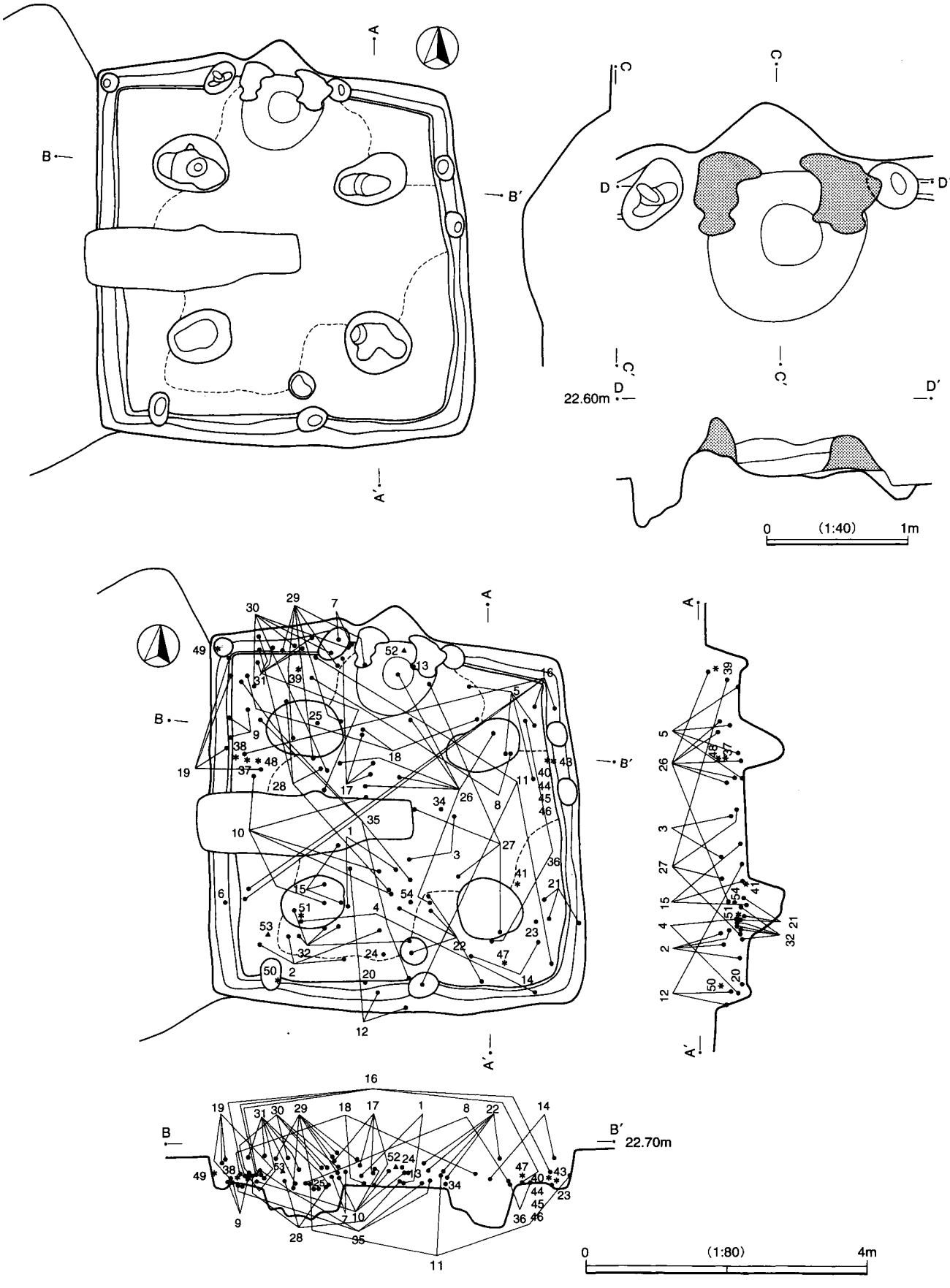
土器は遺存のよい坏皿類を中心に37点を図示した。質感や発色では須恵器と土師器の判別が困難なものが多く，とくに坏類は，技法によってロクロ土師器を区別することがほとんどできない。このため，ここで須恵器としたものは，すべて千葉産須恵器の窯跡出土資料との対照により，とくに似ているものに限って判断した。したがって，これらは千葉産須恵器とみられる。坏類には底部糸切り痕を残す例がないなど形態的な類似性が高く，同時性の強い良好な土器群といってよい。

須恵器としたもののうち，浅い箱形の坏ＡⅡ（３）や，底部に丸みのある坏ＡⅢ（２）は，中原窯の製品に類似する。口縁部が大きく開く坏ＡⅤ（５・７～９）は中原・宇津志野両窯跡の資料にみられる。底径が小さく（約1/2）深い坏ＡⅥ（10），見込みを深くナデる坏ＡⅧ（11）は，宇津志野窯の製品に特徴的な形態である。両方の窯が操業していたころ（９世紀中頃）の製品といえよう。甕・甑類（30～36）も暗褐色～赤褐色の焼成であり，宇津志野窯の製品に近い質感をもつ。口縁部片は，甑Ｂ（34）のＩ点しか図示できなかったが，面を整えて装飾的に仕上げている。甕の底部に「井」形の線刻をもつもの（25）もある。

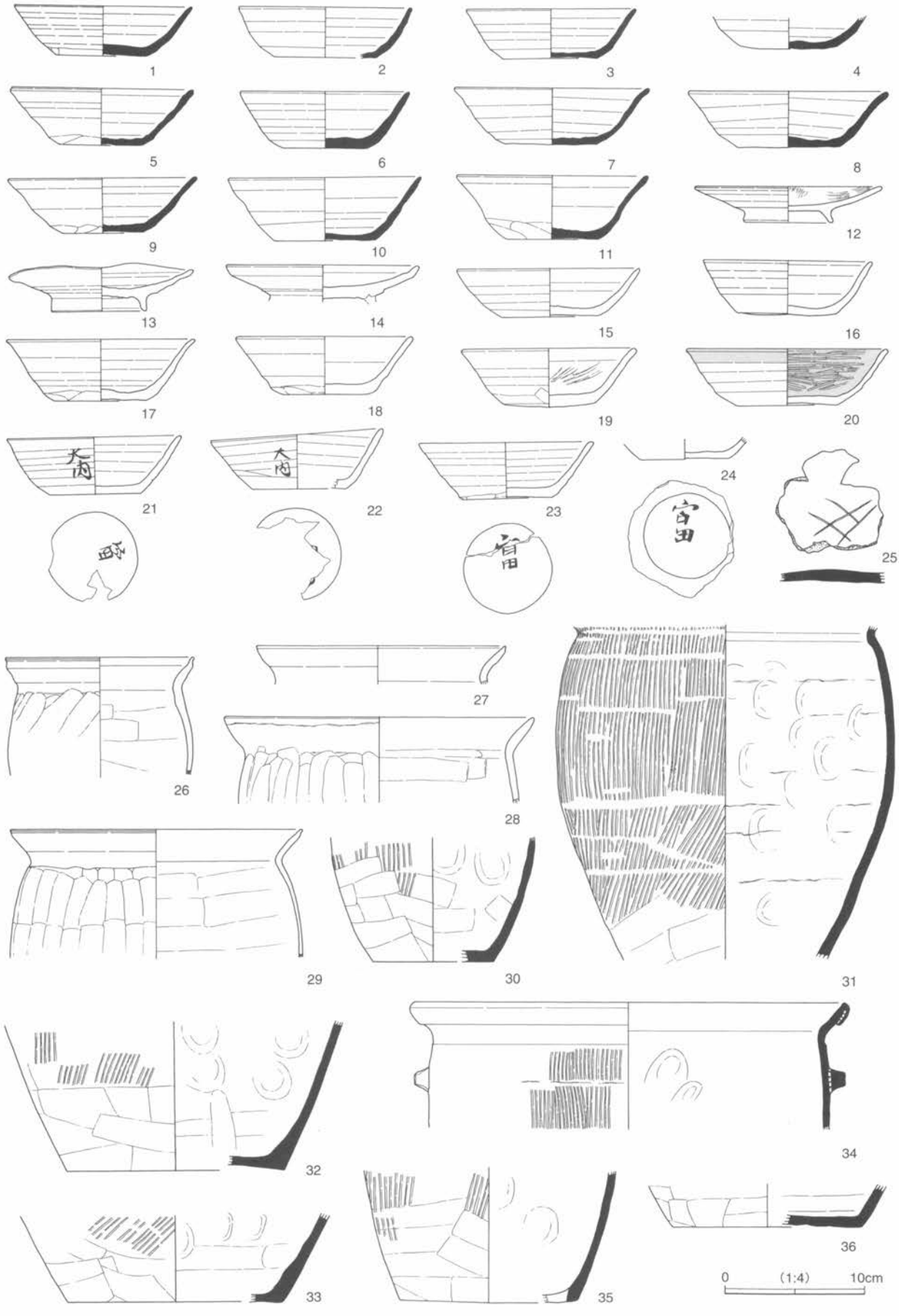
土師器とした坏類はすべてロクロ製である。坏ＢⅣ（15・16・21～23）は比較的浅めで底が小さく，斜めに開く形態である。坏ＢⅡ（17～19）は比較的深めで，口縁部が外反している。坏ＢⅤ（20）は内面黒色処理がなされている。これらのうち，器壁外面に正位で「大内」という墨書のあるものが２点（21・22），底外面に「富」または「宮田」と読める墨書のあるものが２点みられる（23・25）。「大内」墨書土器（21・22）は，底部にも「宮田」とほぼ同じ墨書をもつようであるが，現状ではその一部分しか残っておらず，小さい「ロ」しか見えない（第９章第４節）。Ⅲ類には，ⅢＤⅠ（12），ⅢＤⅡ（13），ⅢＥ（14）がある。ともに高台が付いており，体部は内湾する。土師器甕類には，つまみ上げ口縁部をもつ小型甕Ａ（26），武蔵型の甕Ｅ（27），「在地」の甕Ｂ（28・29）がみられる。いずれもかなり薄手である。平安時代としては古相の土器群である。

鉄製品には，長頸鏃（37～39），針状製品（40），刺突具（タガネ）（42），釣針（43），ヤリガンナ柄部（46），穂摘み具（47・48），刀子（49～51），釘（44）がある。ほかに，ねじりのある棒状品（41），Ｕ字形金具（45）など用途の特定できないものがある。また，形状の異なる２種類の砥石（52・53）が出土している。

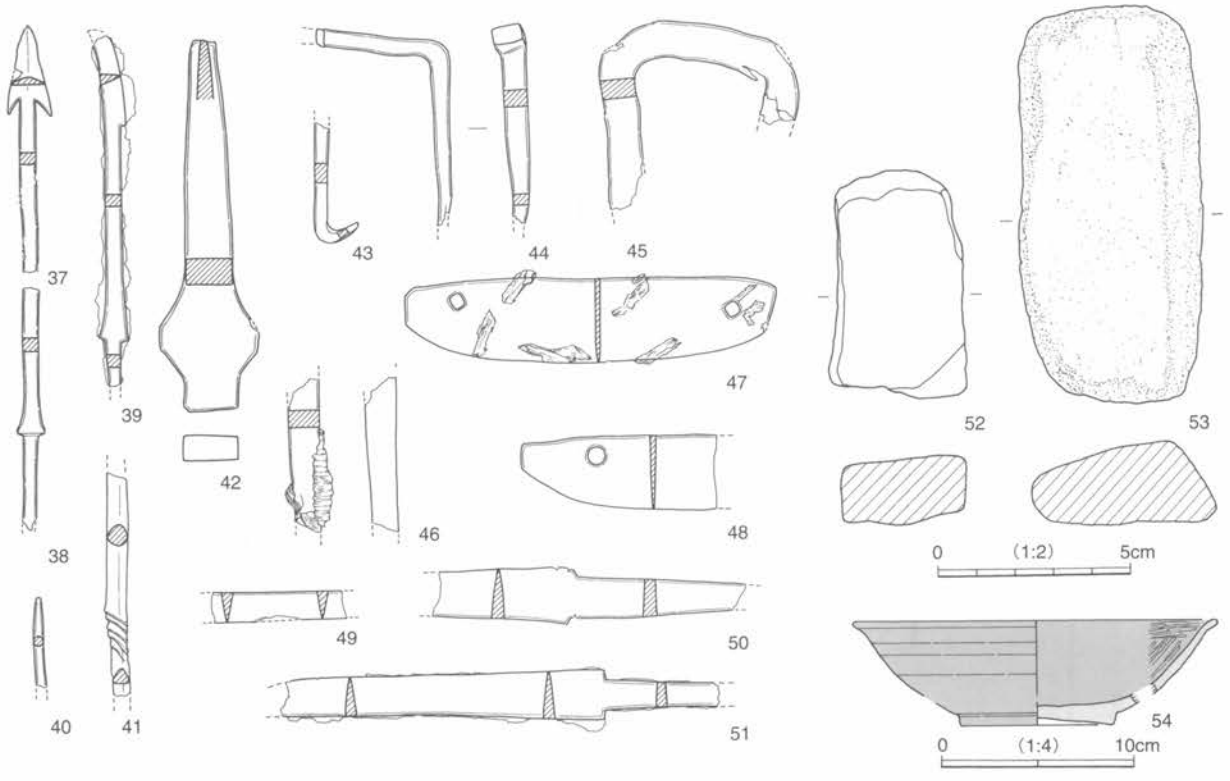
図の最後に掲げた緑釉陶器の椀（54）は，７片が散らばった状態で，比較的下層から検出された。奈良三彩と共通の白粉を生じる軟質の焼成であり，破断面は淡い黄色である。にぶい黄色～黄緑色の緑釉が，底面を含む全面に薄く施されている。内面には施釉前にヘラミガキが施されている。底面は剥離が進行しているが，高台風に厚く切り離され，回転糸切り痕がナデ消されている様子が観察される。平城宮Ⅱ～Ⅲ期に畿内で生産された緑釉陶器とみられるので，約Ⅰ世紀にわたって伝世されたのち，本跡に投棄された



第250図　SI-087と出土遺物（1）



第251図　SI-087出土遺物（2）



第252図　SI-087出土遺物（3）

ことになる。

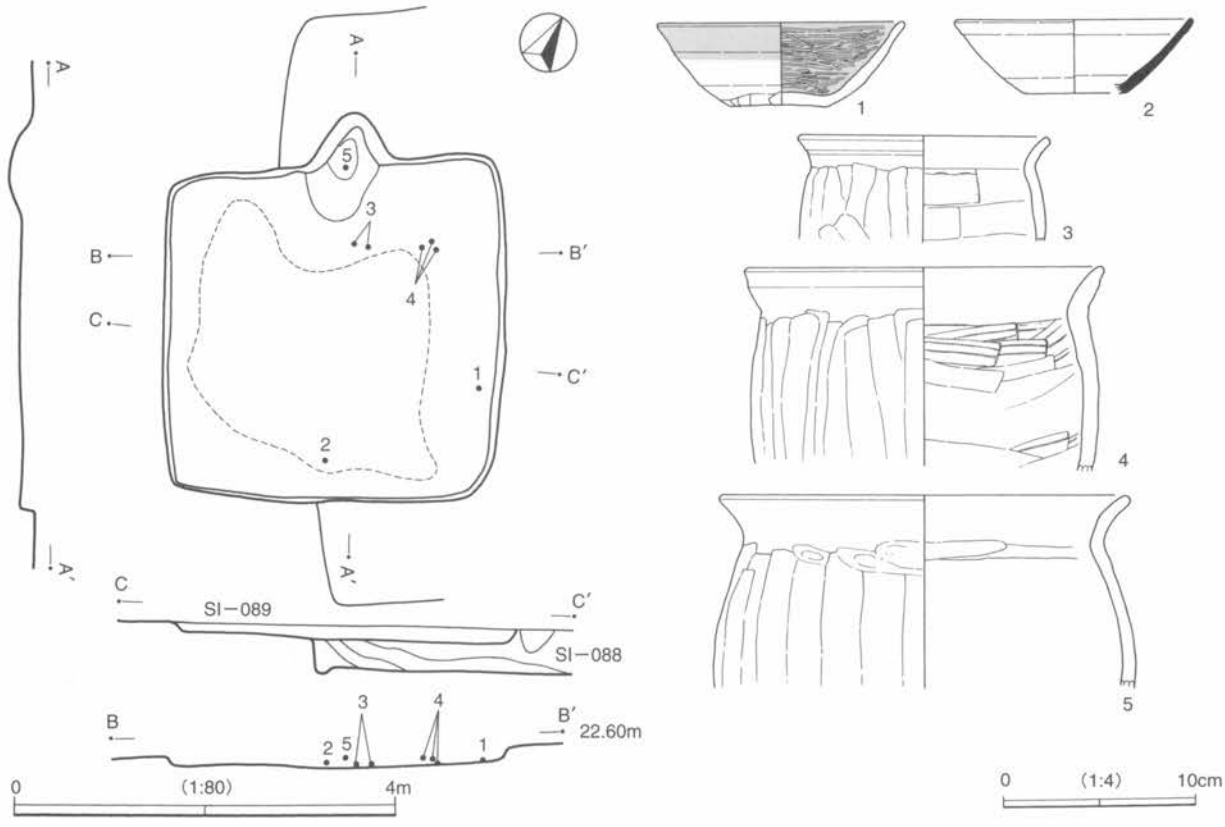
SI-089（第253図，図版46・125）

台地中央部に位置する竪穴住居跡である。SI-087の3m西に隣接している。古墳時代後期後半のSI-088の覆土を掘り込んで構築されている。壁高は10㎝～15㎝と浅く，かなり削平されている。主軸は北からやや西に振れており，カマドは北辺中央に位置している。壁溝，柱穴は検出されていない。カマドの前面に硬化面が広がっている。遺物はわずかながら床面近くで検出された。

土師器坏ＢⅤ（1）は底部の小型化が進んだ形態で，内湾気味の器形をもち，底部を手持ちヘラケズリ調整している。内面を黒色処理している。須恵器坏ＡⅤ（2）は赤褐色に発色しており，中原窯の製品に近いが，底径はかなり小さい。内湾気味の器形をもち，底部を手持ちヘラケズリ調整している。甕類は，「く」の字状口縁をもつ小型甕Ｄ（3），「在地」系の甕Ｂ（4・5）がある。いずれもかなり厚手である。SI-087より新しく，平安時代の比較的新相を示す土器群といえる。

SI-092（第254図，図版47）

台地南部の東寄りに，やや離れて位置する竪穴住居跡である。直後のSI-093によって北側の一部を壊されている。検出面から床までは10㎝前後しかなく，覆土の堆積状態は判然としない。壁溝，柱穴は検出されず，カマドはSI-093構築による破壊で失われた可能性が考えられる。



第253図　SI-089と出土遺物

遺物は少なく，小片である。外面にミガキを施した土師器坏（1），高台付のロクロ土師器皿（3），厚手の土師器甕B（2）がみられる。皿の高台は摩耗してほとんどなくなっている。

SI-093（第254図，図版47）

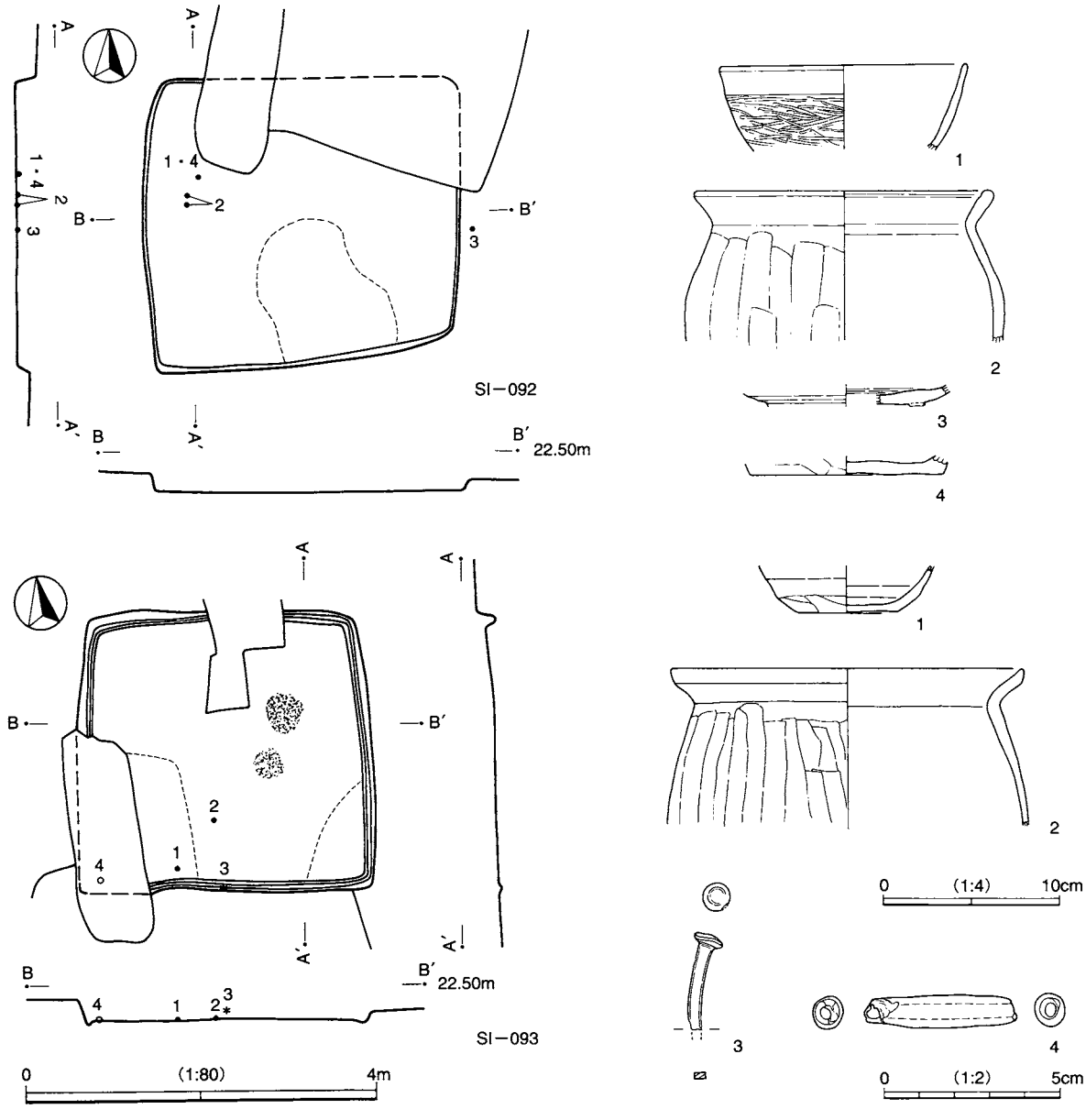
SI-092を切って構築された竪穴住居跡である。攪乱されている北側中央にカマドがあったとみられる。床までの高さは最も浅いところで8㎝，深いところで26㎝と浅く，SI-092同様に，かなり削平を受けている。覆土は，ローム粒を混入した暗褐色土であった。

遺物は，わずかながら南西隅付近に遺存していた。ロクロ土師器坏（1）は底部ヘラケズリ調整ながら底径が小さいという特徴をもつ。土師器甕B（2）は器壁が薄いという特徴を残しており，平安時代の比較的古相を示している。ほかに鉄釘（3），管状土錘（4）がある。

SI-094（第255図，図版48・125）

台地中央部の南寄りに位置する極めて小型の竪穴住居跡である。SI-087の南1.5ｍに近接している。近代の耕作によって全体的に攪乱を受け，遺存状態は良くない。主軸は北からやや西に振れている。カマドは北辺中央に設けられ，対面の南辺に出入口施設とみられるピットがある。主柱穴は検出されていない。遺構の東部分で焼土の散布が確認された。覆土はローム粒を混入した暗茶褐色土であった。

遺物は少量であったが，「大内」の墨書が書かれたロクロ土師器坏（1）が，床面から出土した。体部



第254図　SI-092・093と出土遺物

外面に正位で小さく書かれている。隣接するSI-087からも「大内」墨書土器が出土しているので，その関係が注目されるところである。SI-087出土の（22）の筆跡は，本例とかなり類似度が高い。土器の色は赤褐色で，須恵器の可能性も否定できない。底部は回転ヘラケズリ調整である。甕（2・3）は常総型甕の影響を思わせる「S」字状口縁をもつが，胎土に雲母を含まない「在地」系の土師器甕である。平安時代でも古相を示す。

SI-095（第255図，図版48）

台地中央部の南寄りに位置する竪穴状遺構である。SI-094の西6mにある。一辺3.4m前後の方形をなすが，最深部でわずかに5cmしか遺存しておらず，南辺は検出されていない。中央から西辺にかけて硬化

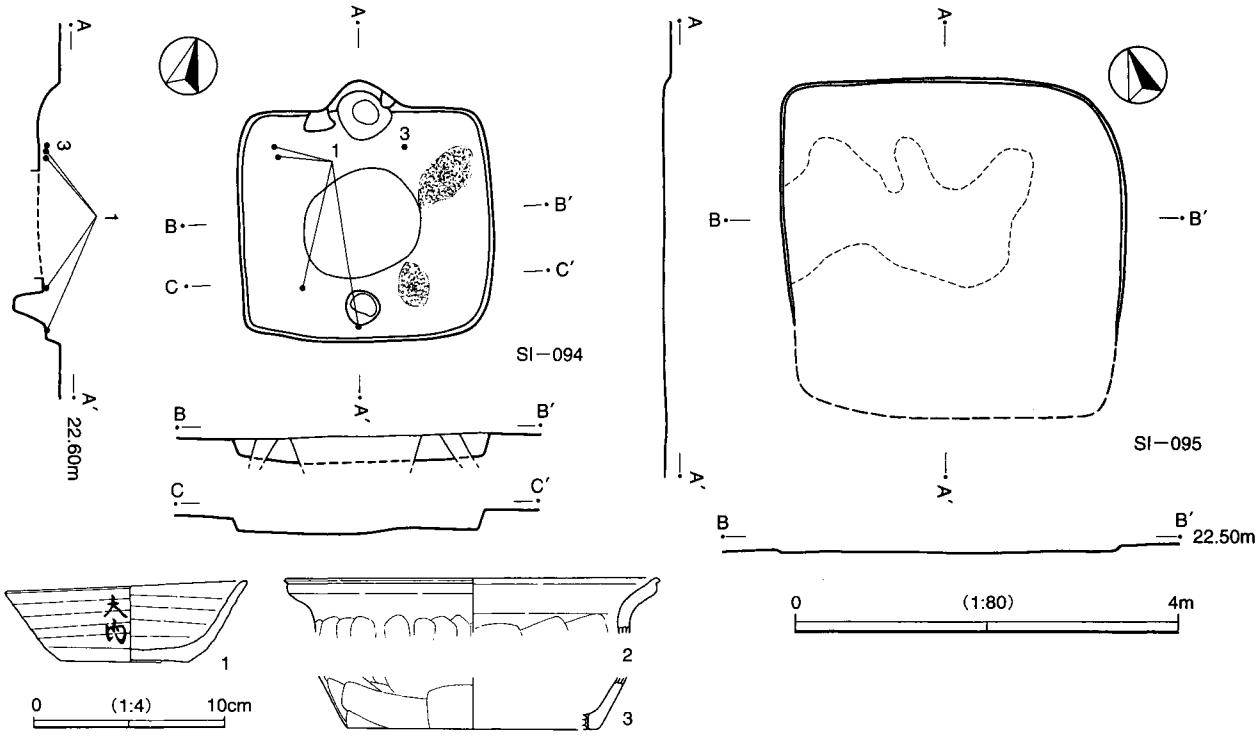
面が検出された。カマド，柱穴等は確認できず，住居跡という確証は得られなかった。

図示できる遺物は出土していない。覆土出土の土器小片には，底を回転ヘラケズリ調整した，ロクロ土師器坏片や，タタキ痕をもつ須恵器甕片があり，後者は千葉産須恵器の焼成である。これらは平安時代の所産とみてよい。

SI-096（第256・257図，図版49・125）

台地南部の東側で単独に検出された。カマドを北側隅部にもつ，一辺３m前後の小型竪穴住居跡である。東辺を除いて壁溝がある。柱穴は検出されなかった。覆土の各層にはローム粒が混入し，とくに下層にはロームブロックが含まれているので，自然堆積とは考えがたい。埋戻されたと考える。遺物は，上層から下層まで本跡全域で出土している。

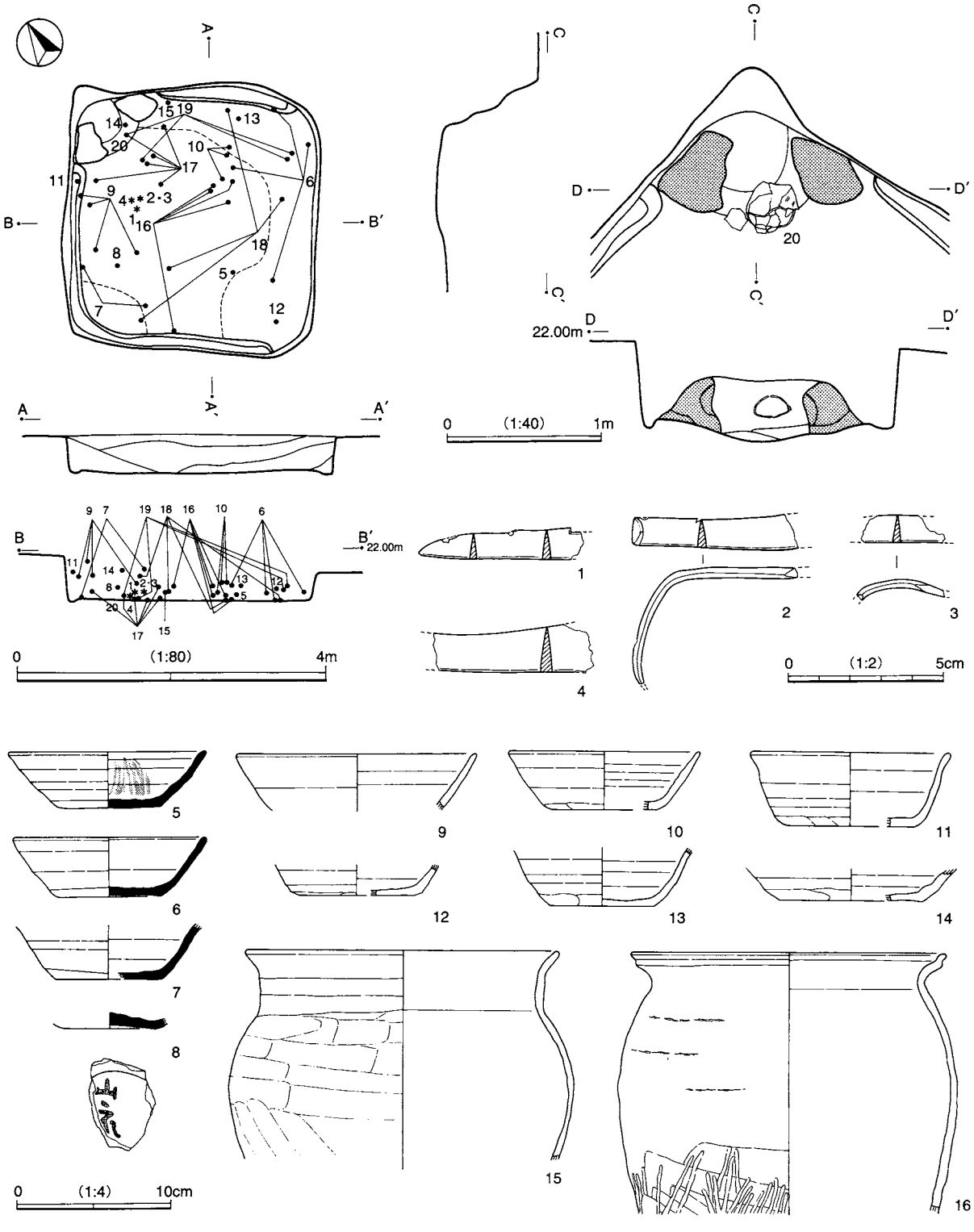
土器類は坏10点，甕６点を図示した。坏のうち青灰色から灰色に発色するもの（５・７・８）は明らかに須恵器と判断できるが，須恵器かロクロ土師器かの判別が難しい製品（６・９～14）が多い。底部の回転ヘラ切り技法が確認できるもの（６）のみを須恵器とした。須恵器坏類は，いずれもやや浅めの，坏AIVである。胎土に雲母が含まれず，焼成のやや甘い質感が市原市域の窯の製品とよく似ている。底面はいずれも手持ちヘラケズリされ，糸切り痕は認められない。そのうちの１点に朱書がみられる（８）。「山家」とみられるが，２文字目左側は欠損している。須恵器甕には，甕B（19）・甕D（18）・甕E（20）があり，灰色（18・20）や黒褐色（19）に発色している。（20）には雲母の混入がみられない。土師器坏類には，箱形の坏BI（11・12），やや浅い坏BIV（10・13）などがある。いずれの底面もケズリ調整さ



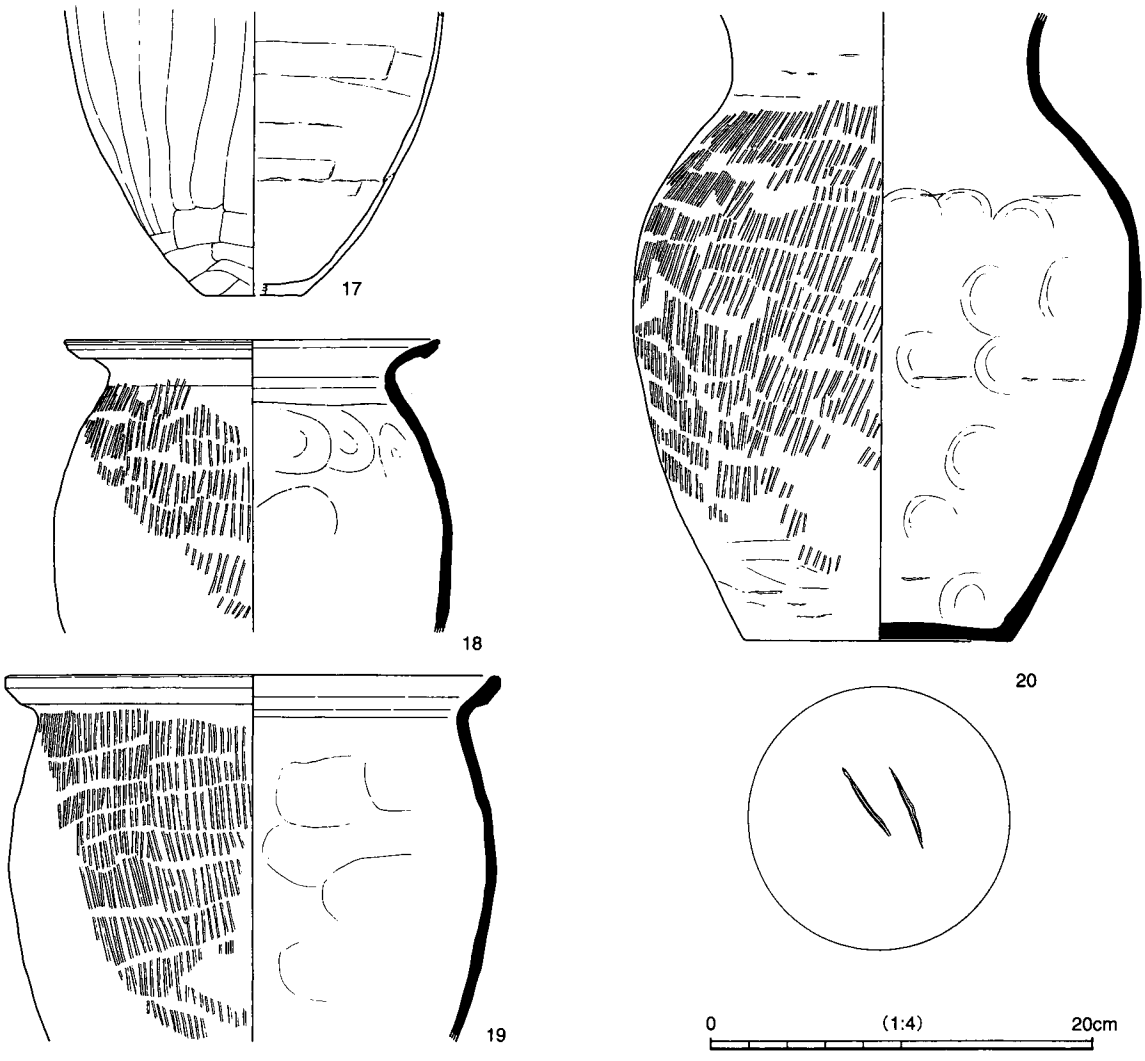
第255図　SI-094・095と出土遺物

れ，糸切り痕は認められない。土師器甕には，武蔵型の甕Ｅ（15・17）と，常総型の甕Ｃ（16）がある。武蔵型甕は口縁部が「コ」の字化したものである。これらの土器は平安時代の古相を示す。

床面付近で刀子が４点出土している。このうち（２）と（３）は明らかに折り曲げられた状態で出土している。



第256図　SI-096と出土遺物（１）



第257図　SI-096と出土遺物（2）

SI-097（第258図，図版49）

台地中央部の遺構密集区に位置する竪穴状の遺構である。奈良時代のSI-098，古墳時代のSI-106を掘り込んで構築されている。検出面から床までは，15㎝～28㎝と浅い。覆土全体がローム粒混入の暗褐色土と観察されている。主軸は北あるいは西にとる。カマド，壁溝，柱穴は検出されていない。西壁際に焼土の堆積がみられ，南東隅には床に硬化面が広がっている。

遺物はごく少量であるが，橙色の須恵器甕1点（1），羽口2点（5・6），長い帯状の銅製品（2），鉄鏃ないし工具（3），刀子（4）が図化可能であった。羽口は，本跡で使用された痕跡はなく，投棄または流入したものであろう。須恵器甕口縁部の退化傾向を考慮すると，平安時代の比較的新相を示すと考える。

SI-099A（第259図，図版50）

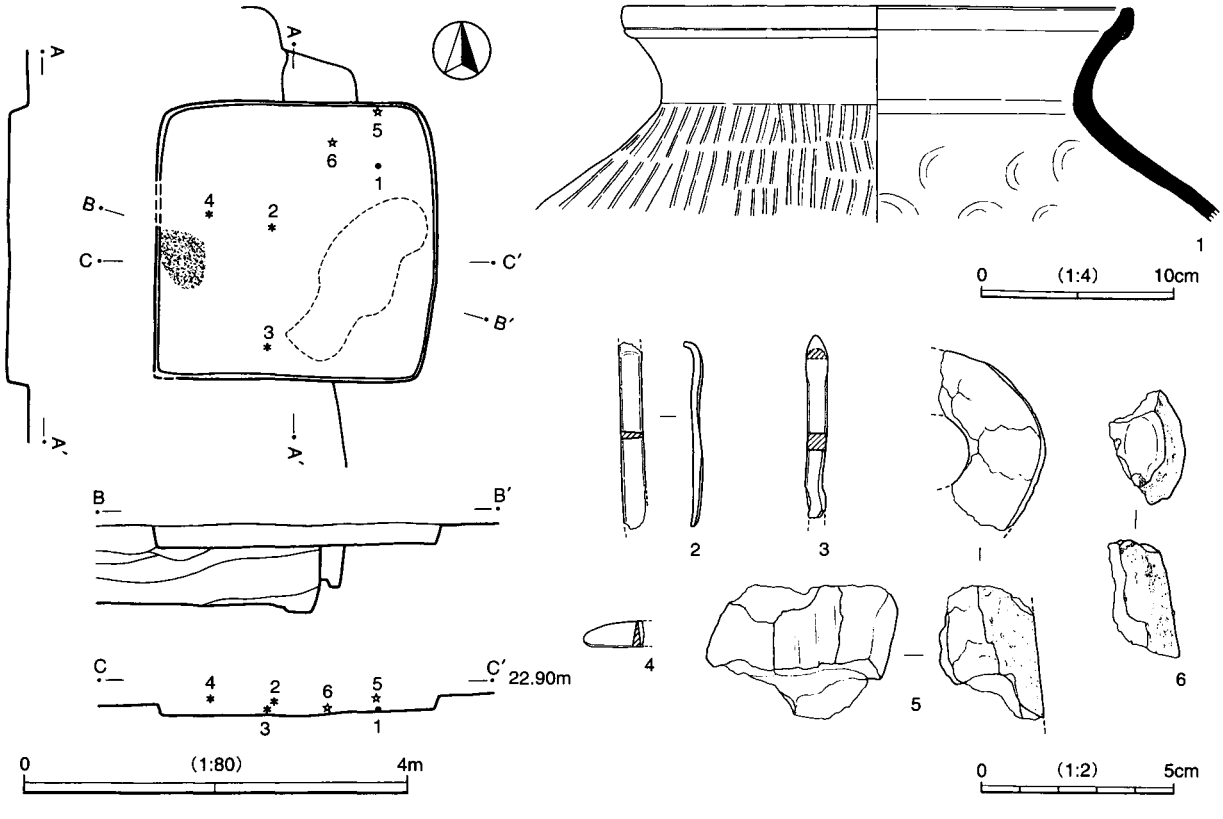
台地南部の東寄りに位置する竪穴住居跡である。観音塚遺跡を望む斜面に面している。SI-099Bと重複

し，それと床面を一部共有する。横長長方形であるのが特徴的で，主軸は北西にとっており，カマドは北西辺のやや東寄りに設けられている。壁溝は全周していたとみられる。カマドはすでに破壊されて袖部は残っていない。カマドから北隅にかけて焼土の堆積が確認されている。カマドの東側に２か所，深さ10㎝と17㎝の浅いピットが近接して検出された。SI-099Bとの前後関係については，重複部に後世の地境溝が入り込んでおり，土層断面では確認できなかった。焼土分布範囲をみると，本跡の縁辺部にのみ残存しているので，内側をSI-099Bにより掘り込まれている可能性はある。この場合，本跡に確実に伴う遺物はカマド出土遺物（５）のみである。

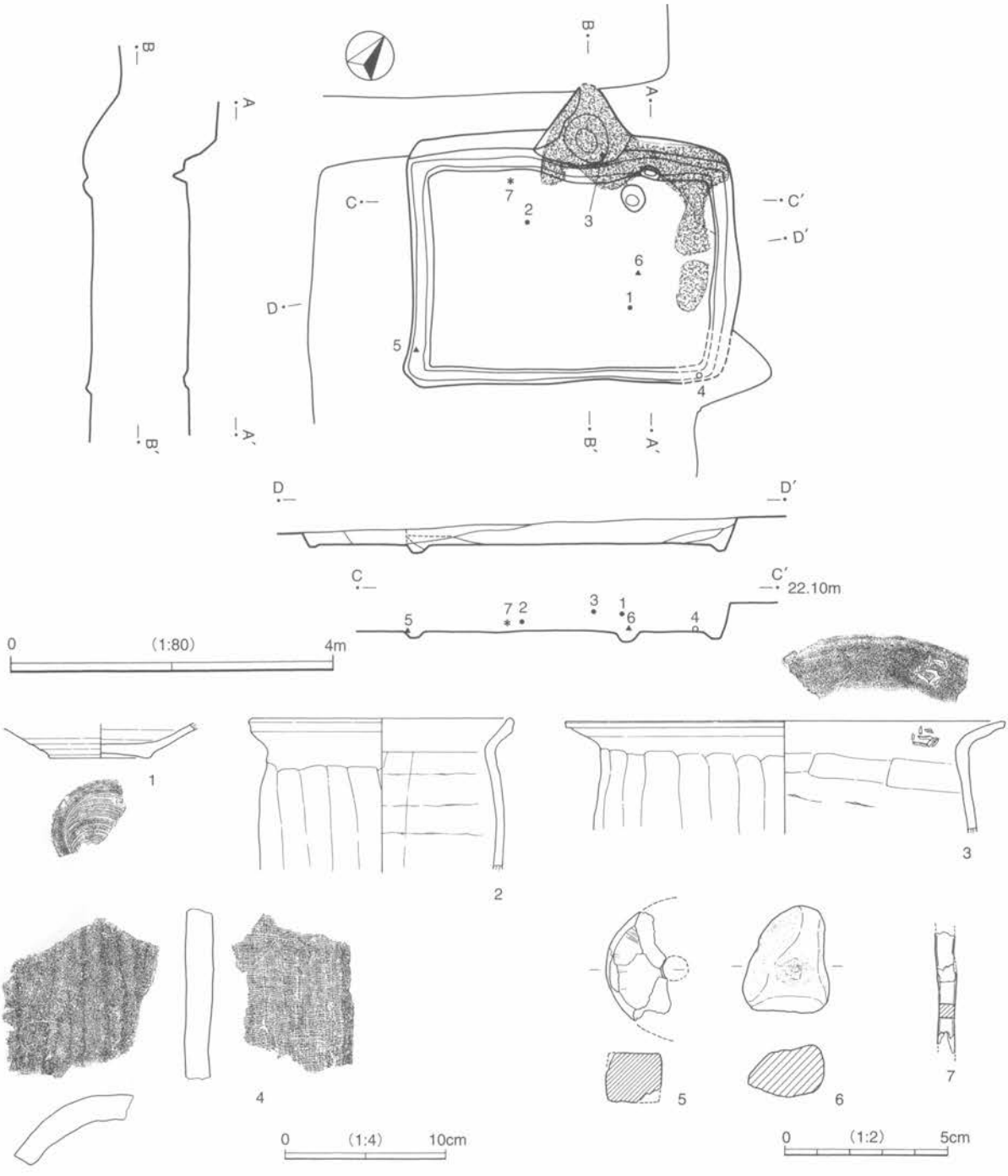
ロクロ土師器皿（１）は底部を回転糸切り後，中心はそのままにして周辺がナデツケされ，高台風に整形されている。土師器小型甕Ｂ（２）と甕Ａ（３）は比較的厚手である。（３）の口縁部内面には「占」字状のヘラ刻書がある。丸瓦片（４）は，SI-099Bのカマドと切り合う付近で出土しているので，同カマドからの混入の可能性もある。外面に列をなすヘラケズリ痕があり，内面に布目を残す。ほかに，土製紡錘車（５），凹石ないし台石（６），釘（７）がある。平安時代の新相を示す。

SI-099B（第260図，図版51・126）

本竪穴住居跡の北側約半分は，上記のSI-099Aと重複している。主軸を北東にとり，カマドは北東辺中央に設置されている。壁溝は全周していたと思われる。カマド前面から硬化面が広がる。竪穴の深さはわずか８㎝～12㎝しか確認できなかったが，カマド内と南西の壁際で遺物が遺存していた。

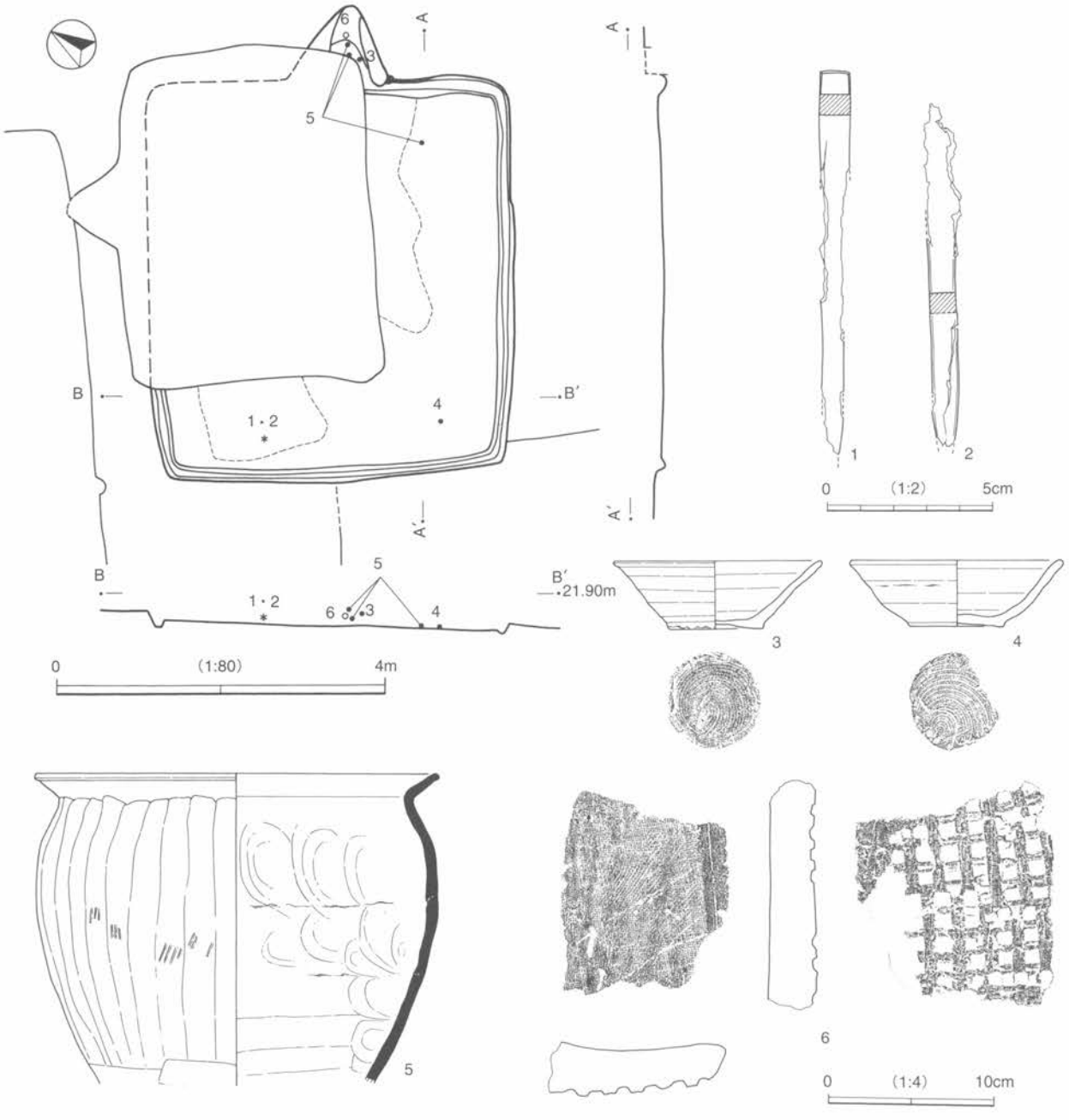


第258図　SI-097と出土遺物



第259図　SI-099Aと出土遺物

カマド内出土遺物は，土師器坏ＢⅨ（3），須恵器甕（5），瓦片（6）である。南西壁際では土師器椀ＡⅠ（4）と角釘が2点（1・2）出土した。土師器坏類はいずれもロクロ製で，底部が小さく，高台風に厚く切り離し，回転糸切り痕を残している。須恵器甕は，外面のタタキ痕が縦方向のヘラケズリによって消されている。焼き色はにぶい橙色である。口縁部には装飾性がまったくなく，素口縁である。瓦片は支脚に転用したと考えられる。平瓦であり，外面には深い大きな格子状タタキ目があり，内面には布目がついている。土器群は平安時代でも新相を示す。



第260図　SI-099Bと出土遺物

SI-101（第261図，図版51・52・126）

台地南部の東寄りに位置する竪穴住居跡である。奈良時代のSI-102・103の覆土を切って構築されている。主軸は北東にとり，カマドは北東辺中央に設けられている。覆土は削平や攪乱のためあまり遺存していなかったが，ローム粒を含む暗茶褐色土が主体であった。カマド袖部は検出されず，掘りかたと火床部を残すのみであった。壁溝，柱穴は検出されていない。遺物はカマド周辺と北東壁際で出土している。

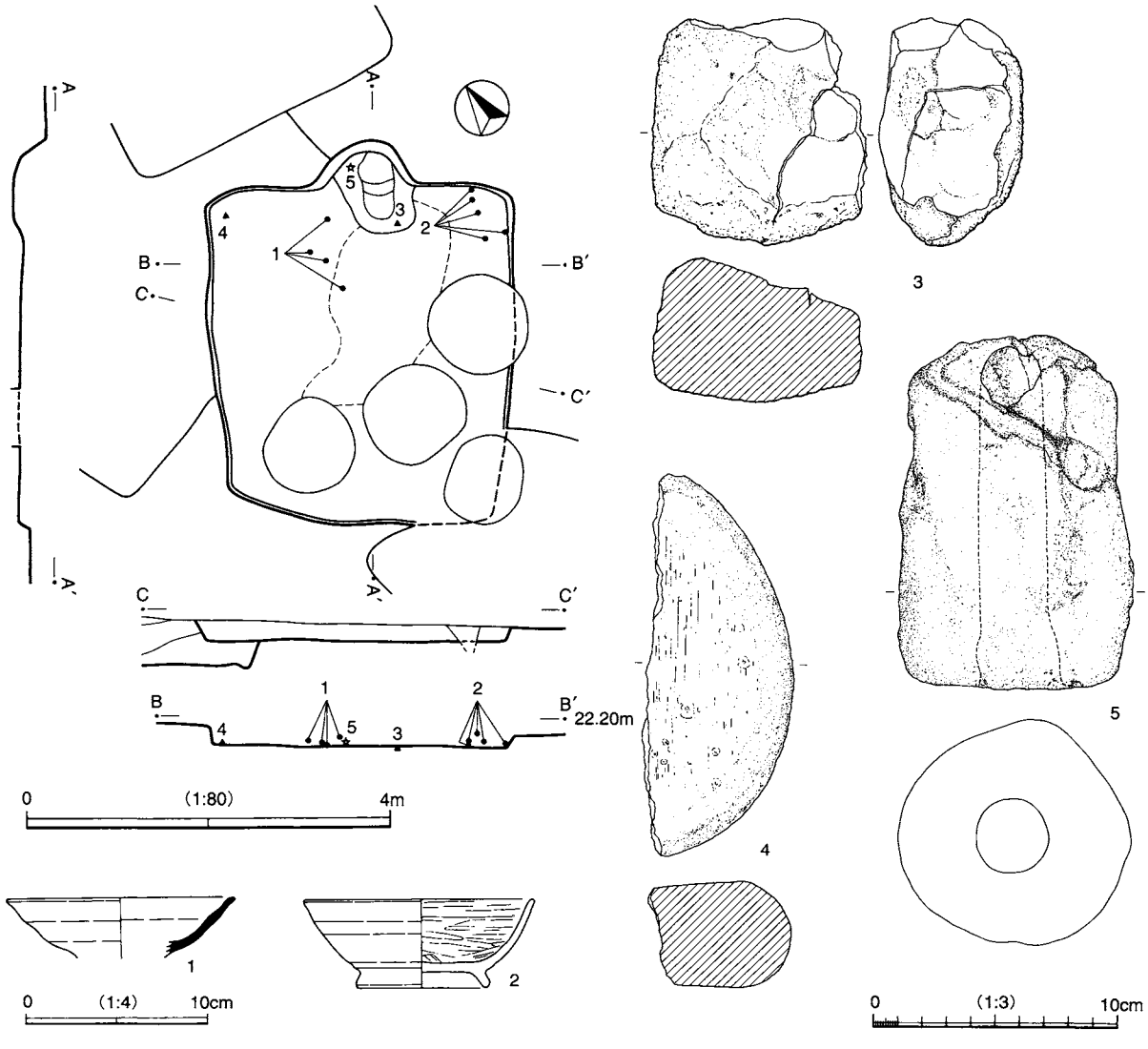
須恵器坏ＡＶ（１）は底径が小さく浅い器形で，黒褐色に発色している。土師器の貼付高台付椀ＤＩ（２）はロクロ製であるが，内面をミガキ調整されている。これらは平安時代の新相を示す土器群である。

大型の羽口（5）は直径95㎜，内径30㎜ある。ほかにも，炉壁片（3），縄文の石皿破片を転用した金床石（4）などの鍛冶関連遺物が出土している。とくに，羽口と炉壁はカマド内から出土しており，カマドに袖が残っていなかったことを考え合わせると，本カマドが鍛冶炉として使われた可能性も考えられる。しかし，鍛冶滓等の生産関連遺物は出土しておらず，確証は得られない。

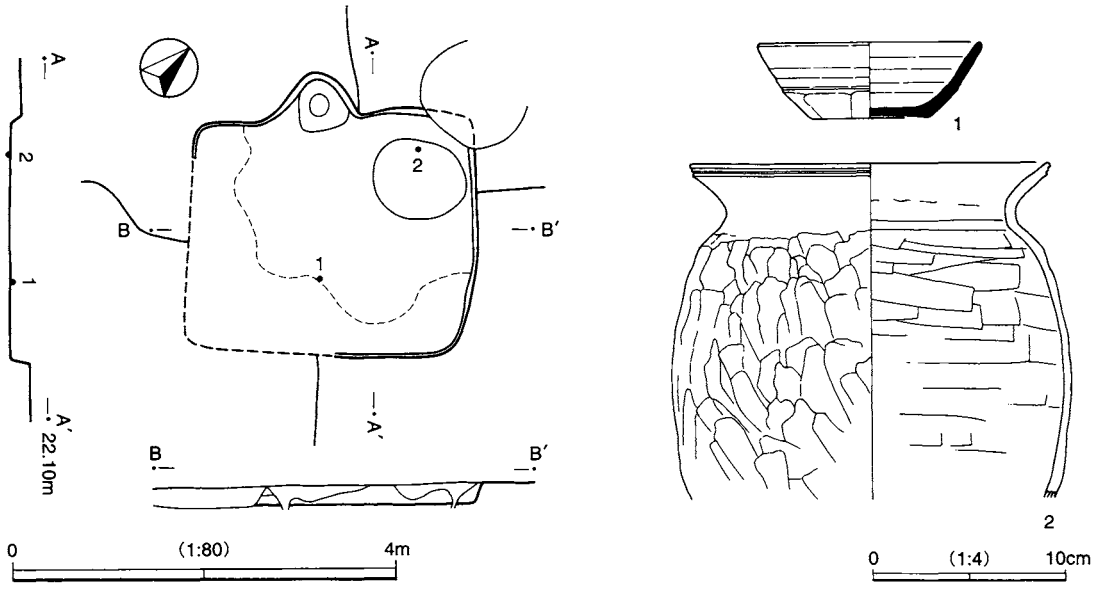
SI-103（第262図，図版53・127）

台地南部の東寄りに位置する小型の竪穴住居跡である。南側は古墳時代後期後半のSI-107を切り，北側は平安時代のSI-101に切られている。主軸は北西にとる。カマドは北西辺にあるが，ほとんど残っておらず，火床部分を確認したのみである。床は全体に硬化しており，柱穴は確認できなかった。遺存する壁高は約20㎝と浅い。さらに，近年の攪乱で旧状はかなり損なわれている。覆土にはローム粒の混入が多く，人為的に埋戻されたと考える。

遺物もごく少数である。赤褐色の須恵器坏（1）は底部を回転ヘラ切りし，体部外面下部のみ強く手持



第261図　SI-101と出土遺物



第262図　SI-103と出土遺物

ちヘラケズリ調整したもので，類例に乏しい深身の小型品である。土師器甕B（2）は外面を丁寧にヘラナデしている。平安時代の比較的古相の土器群と考える。

SI-104（第263図，図版53・127）

台地南部の東寄りに位置する竪穴住居跡である。SI-105の東に隣接している。主軸を北東にとる。壁高は15㎝～20㎝しか残存していない。床面全体が硬化しているが，柱穴，壁溝はない。カマドは北東辺の中央からやや東へ寄った位置に設けられている。ほとんど壊されており，火床部と袖の基部のみが確認された。カマドの東袖付近で，坏を1点検出した。

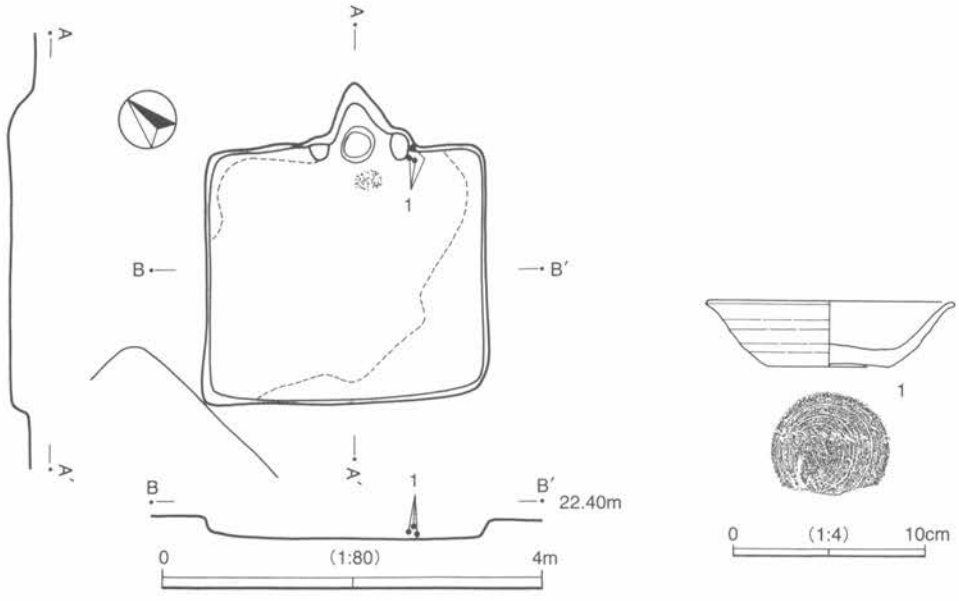
ロクロ土師器坏BⅦ（1）は，口縁部がやや外反し，浅く，底部は回転糸切り無調整である。平安時代の比較的新相を示す。

SI-105（第264図，図版53）

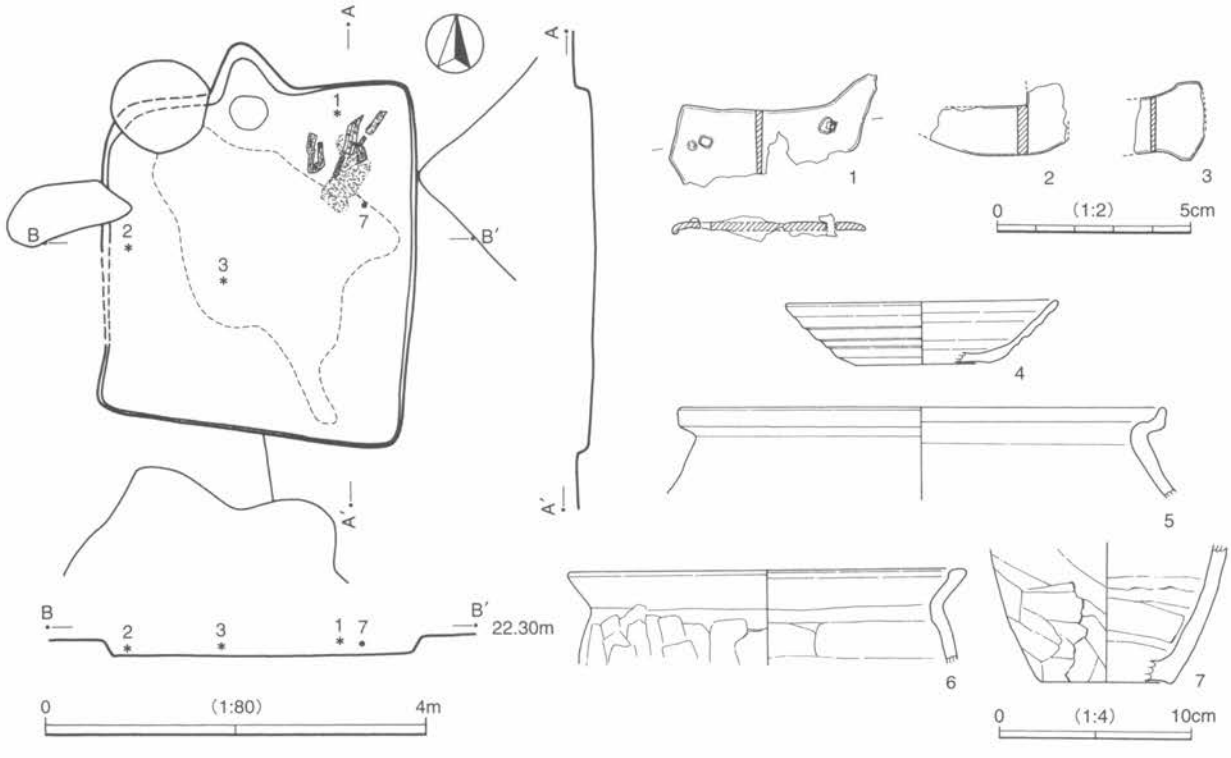
台地南部の東寄りに位置する竪穴住居跡である。SI-104の西に隣接する。壁高13㎝～20㎝程度が確認できた。主軸はほぼ北にとる。南西隅が奈良時代のSI-102と重複していたため，形は不明確であるが，南北にやや長い形状を呈する。北辺中央にカマドの痕跡とみられる掘りかたを検出した。その前面を中心として硬化面が広がっている。柱穴，壁溝は確認できなかった。焼土も，床面全体に広がっている。なお，北東隅では炭化材と焼土がまとまって出土しているが，床より2㎝～10㎝程度上で検出された。

鉄製品（1～3）は，3点とも比較的複雑な形を有する。刃部は確認できない。X線調査では（1）に目釘孔らしき痕跡が2つ認められる。これらは同一個体と考えられるが用途については特定できない。

土器は遺存度が低く，図の土師器坏1点と土師器甕3点も小片である。皿状の坏BⅦ（4），器壁に粗いロクロ目が残っており，底部を回転糸切りした後，手持ちヘラケズリで調整している。常総型の甕C（5）は受け口状の口縁部をもつ厚手のもので，ほかの甕（6・7）も厚手である。平安時代の比較的新



第263図　SI-104と出土遺物



第264図　SI-105と出土遺物

相を示す土器群である。

SI-112（第265図）

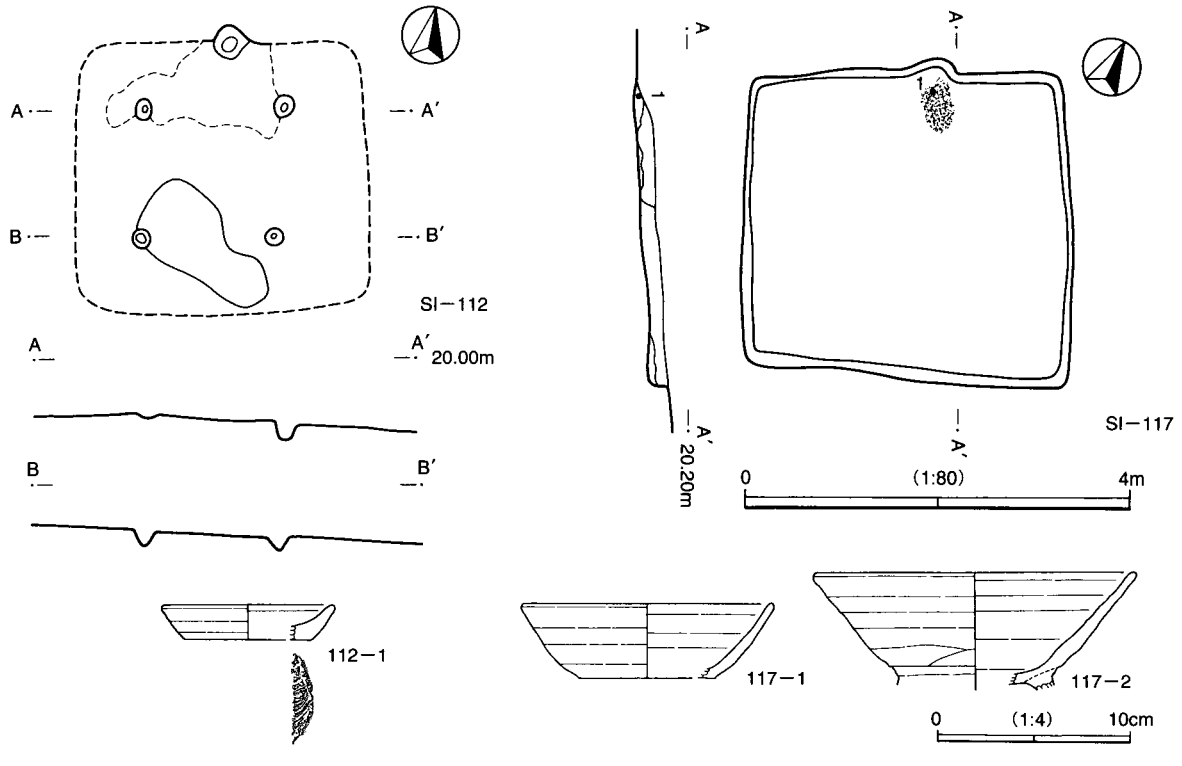
台地北部のやや東寄りに位置する住居跡である。周囲はやや東に下がる斜面で，北側の谷に面している。遺構は，中央と西側に攪乱を受け，硬化面の一部とカマド火床部，柱穴4か所が残存しているのみであった。調査時の観察によって推定された範囲を図示している。小型に復原できるので，平安時代に分類した。ただし，もっとも近い該期の遺構は西に20m離れたSI-117であり，近在するのは古墳時代後期後半のSI-114，SI-115である。

遺物は全部で土師器細片4点と砥石片1点である。そのうち，実測可能なものは土師器皿1点（1）のみである。底部は回転糸切り無調整である。形態的にはカワラケとされるものであるが，確実な中世遺構との切り合いは認識されていない。SI-046などにみられるような，平安時代のもっとも新相を示す土器群に含まれるものではないかと考える。

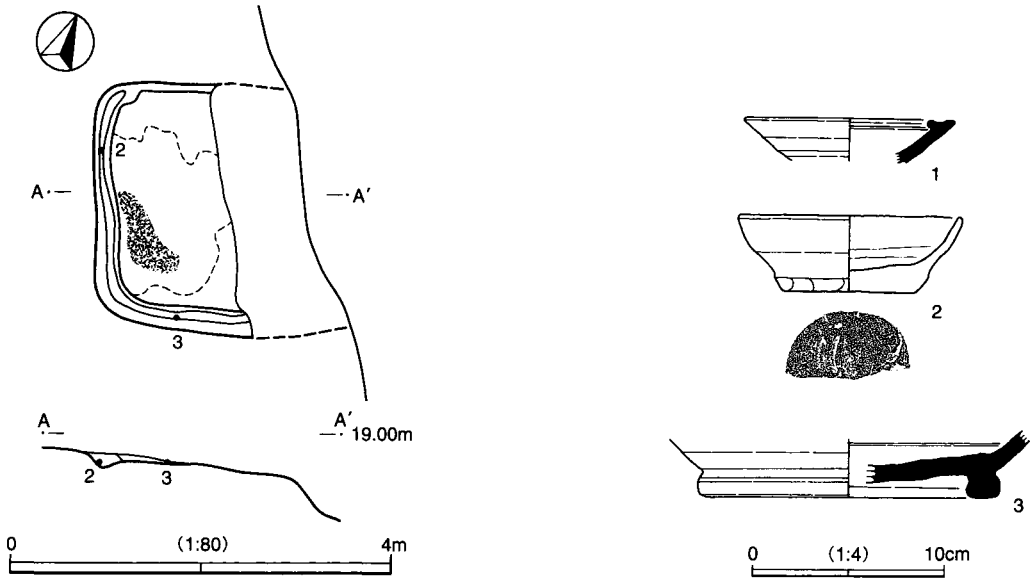
SI-114（第266図，図版56）

台地北部のやや東寄り斜面に位置する小型の竪穴状遺構である。東側をSD-16に伴う掘削により大半が削平され，半分も残存していなかった。軸は北からやや西に振れている。東辺と南辺では壁溝を確認した。カマドが検出されていないので，住居跡と断定するには要素が足りないが，本跡の規模は周辺の平安時代住居跡と一致している。柱穴はみられない。西辺寄りの硬化面上に焼土の堆積が確認されている。

遺物は壁溝中から検出された。古墳時代後期後半の土器と考えられる蓋身逆転期の須恵器坏H（1）と



第265図　SI-112・117と出土遺物



第266図　SI-114と出土遺物

須恵器高台付壺底部（3）が出土しているが，最も良好な状況で出土したのは土師器坏（2）である。坏は，ロクロ製でありながらやや不整形で，器壁が短く内湾し，外壁下端部だけを手持ちヘラケズリ調整している。褐色に焼成されている。底部は回転糸切り無調整である。これらの特徴は平安時代の新相を示すものと考える。

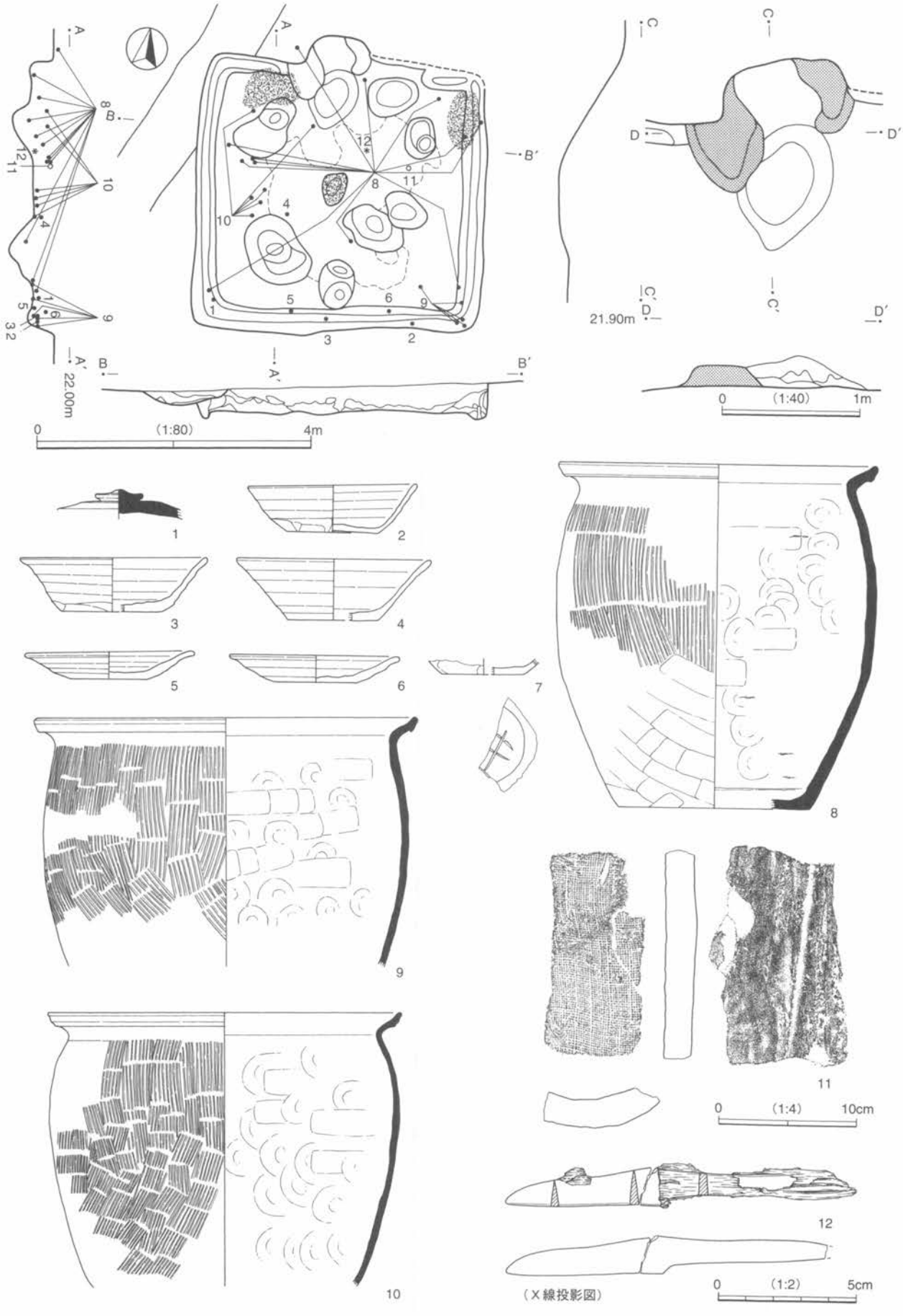
SI-117（第265図，図版58）

台地北部の北端に位置する竪穴状遺構である。形態は方形，大きさは一辺3m前後であり，該期の竪穴住居跡としては一般的形態である。しかし，カマド，壁溝，ピット，硬化面のいずれも確認できず，住居跡とは断定できない。覆土は焼土粒を含んだ暗褐色土である。北側の辺に接して，焼土及び砂質粘土が塊状に堆積するが，これらと床面との間には覆土が薄く認められ，カマドとは断定しがたい。

遺物は焼土の中から検出された。ロクロ土師器坏BⅦ（1）は，底部が回転糸切り無調整である。坏BX（2）は貼付高台が付いている。平安時代でも新相を示す土器群である。

SI-119（第267図，図版58・59・127）

台地西部に位置する竪穴住居跡である。北東隅をSD-26に切られる。主軸をほぼ北にとり，カマドは北辺に設けられている。壁溝は全周する。カマド対面にあたる南辺に出入口施設とみられるピットが検出されている。主柱穴はほぼ対角線上に3か所検出され，検出されなかった南東部分では，やや中央に寄った位置に，主柱穴に匹敵する深さ20cm～35cmのくぼみが2か所認められた。カマド東脇にも深さ17cmのピットがある。貯蔵穴としては浅い。柱穴間の床は硬化していた。硬化面中央部には52cm×38cm，深さ10cmの，被熱した浅い凹みがあった。工房の炉である可能性を考慮して調査したが，それを裏付ける痕跡は見いだせなかった。主柱穴内や住居跡の覆土は，上層を除いてロームブロックが含まれていた。人為的に埋戻された結果と考える。また，北辺両隅には，床面のやや上で山砂を伴った焼土が検出された。



第267図　SI-119と出土遺物

遺物は比較的多く出土した。図示した遺物はいずれも床面ないし下層から出土したものである。土師器坏皿類はとくに遺存度が高い。すべてロクロ製である。灰黄褐色の須恵器坏蓋（1）には扁平な宝珠つまみがつく。身の底部には糸切り痕を残すものはない。坏BII（3）は一定方向に手持ちヘラケズリが施されている。坏BIII（4）は回転ヘラケズリが施されている。坏BIV（2）は手持ちヘラケズリが施されている。皿AII（5・6）は回転ヘラケズリが施されている。また，坏（7）には底外面に「キ」の線刻がみられる。土師器坏（3）は，暗赤褐色を発する焼成の質感が宇津志野窯資料と似ており，須恵器の可能性もある。須恵器甕C（8～10）は暗褐色～明褐色を発する千葉産須恵器で占められている。いずれも平安時代の比較的古相を示している。

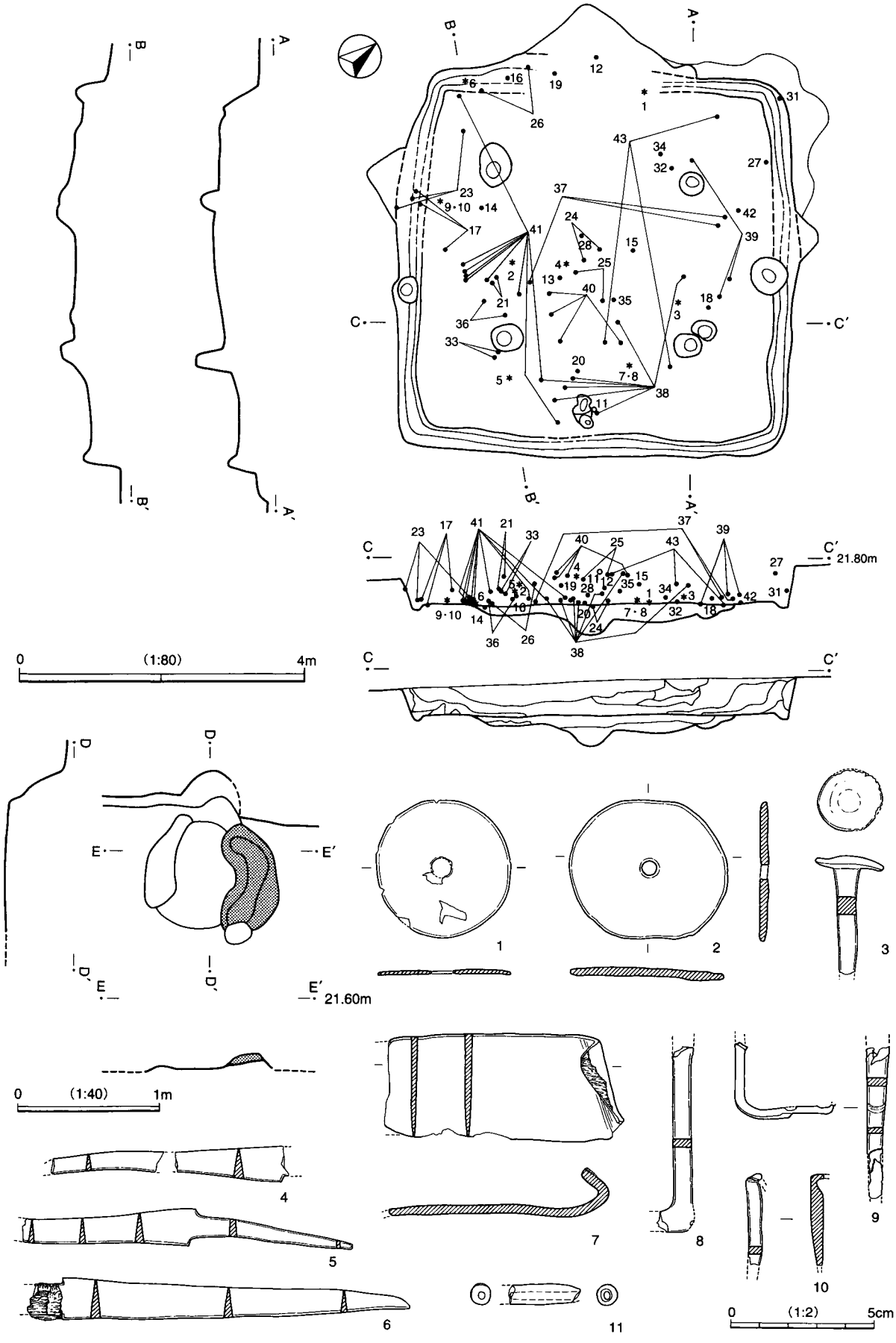
瓦片（11）は外面に縦列をなすヘラケズリ調整痕，内面に布目を残す。鉄製刀子（12）は床面でほぼ完形のまま出土した。

SI-120A（第268・269・270図，図版59・127）

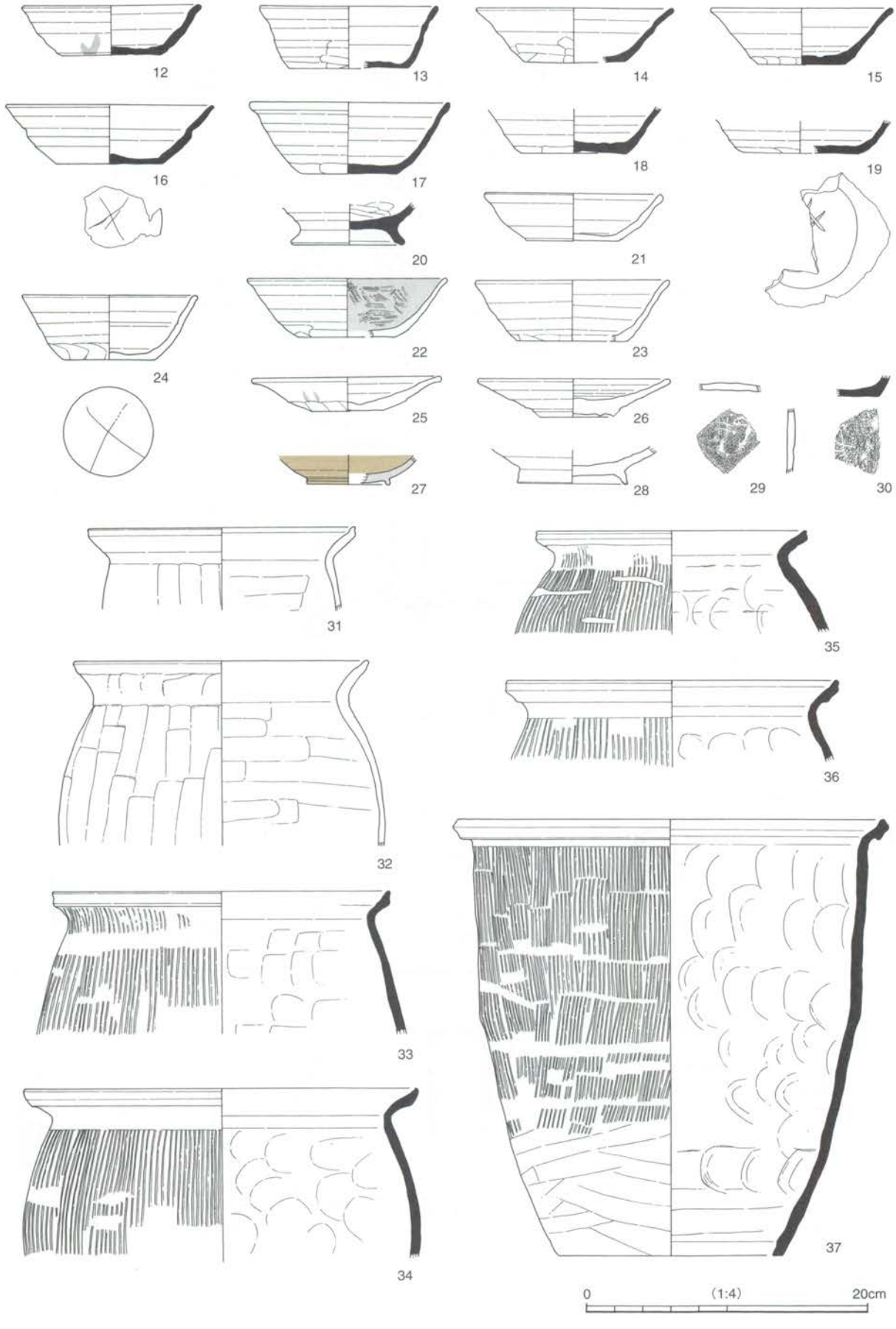
台地西部の南寄り，SI-119の西隣に位置する。該期としてはやや大型の竪穴住居跡である。奈良時代のSI-120B埋没後，その上に床を貼って構築している。貼床には硬化面が形成されている。調査時には深いSI-120Bの方が新しいと考えて調査したため，カマドが十分に確認できなかったが，土層図等の詳細な再検討の結果，北西辺中央では山砂と焼土粒が貼床上に分布していた記録があるので，そこにカマドが存在したものと考える。また，南西辺中央に出入口施設とみられるピットが存在することもこれを裏付ける。したがって主軸は北西方向である。主柱穴が対角に4か所認められ，壁溝はほぼ全周する。主柱穴以外に，北東及び南西辺で，壁溝中にそれぞれ径50㎝，深さ12.5㎝と，径35㎝，深さ18.9㎝のピットを検出した。北東辺のものは，主軸をはさんで南西辺ピット列と対称に位置するところから，本跡に伴う施設と考える。覆土の堆積にはロームブロックが認められ，遺物の接合関係が遺構内各所に及ぶことから，人為的な埋戻しが行われたとみられる。

遺物は多量に検出された。大きく分けて，床面付近から出土したもの（13・14・17・20・24・26・32・34～37）と，覆土上層から出土したものとがある。

土器類のうち，灰白色に還元焼成されているのは，灰釉陶器の椀（27）のみである。上層から出土したわずか10%に満たない小片ではあるが，丁寧に削り出した高台をもち，内面に中央を残して薄い灰釉が施され，堅く焼きしめられた良品である。坏・皿類（12～28）はいずれもロクロ製である。底部に糸切り痕を残すものはない。須恵器には，灰黄色～暗灰黄色に発色する坏AI（13・19），にぶい黄橙色の坏AIII（17・18），にぶい橙色で火だすきをもつ須恵器坏AIV（12），黒褐色ないし橙色の坏AV（14・15），にぶい褐色の坏AVII（16）・にぶい黄橙色の椀A（20）がある。千葉産須恵器とみられる。須恵器甕類も同様の焼成であり，灰色を発色するもの（35・36・40）は小片である。甕B（33・34・36・41），甑A（39）・甑C（37）が主体で，口縁部はやや簡略化したものと，装飾的なものとが混在している。一方，土師器には，内面にミガキと黒色処理が施されている坏BV（22）のほかは橙色に近い発色であり，浅い坏BIV（21），やや深い坏BII（23・24），口縁部が外反する皿B（25），同じく内湾する高台付皿DI（26・28）がある。皿Bには火だすきがみられるので，須恵器の可能性もある。土師器甕類には，「在地」の系統をひく甕A（31），甕B（32）がみられる。口縁部がつまみ上げられ，胴部がかなり薄手である。これらの土器群を総合的に判断すると，やや多様性がみられ，多少の時期差を含んでいるが，平安時代の古相を示



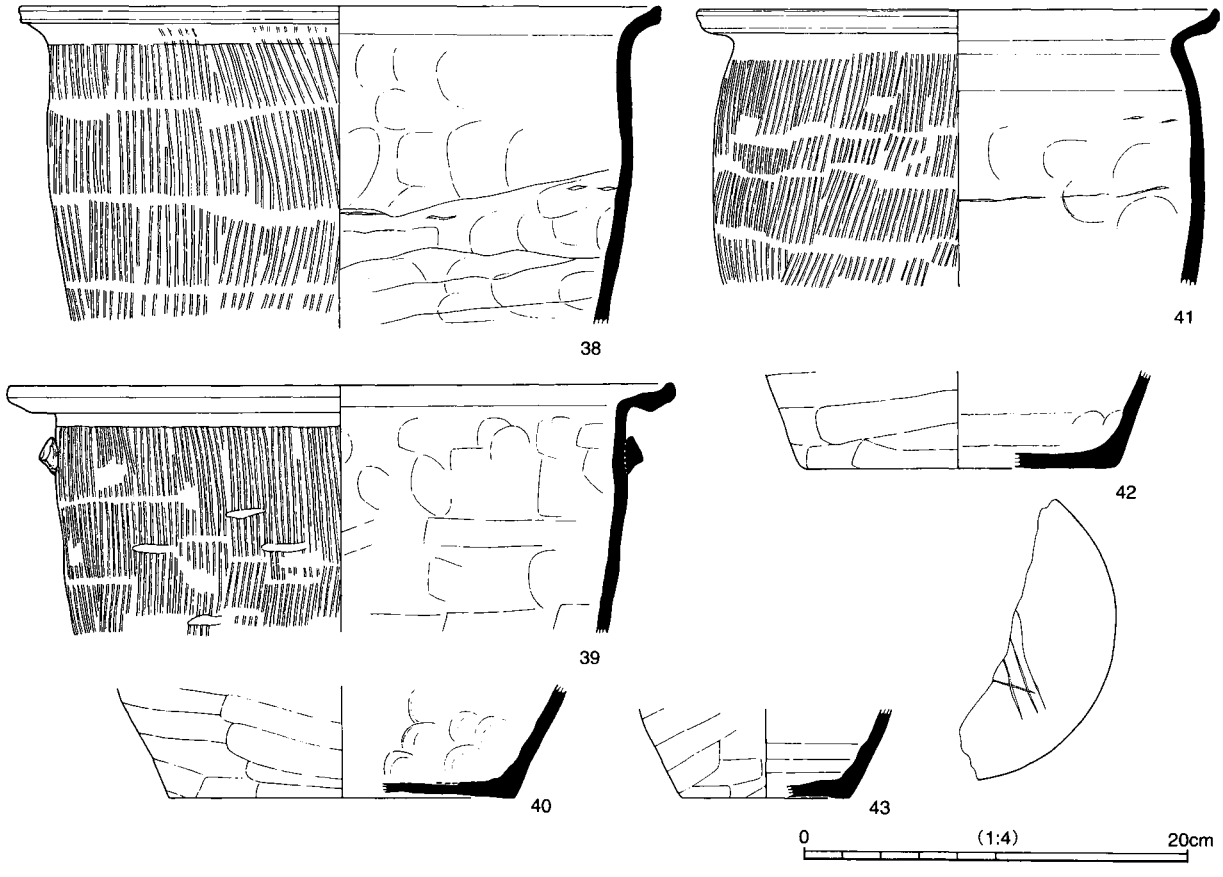
第268図　SI-120Aと出土遺物（1）



第269図　SI-120A出土遺物（2）

すものが多いと考える。

鉄器類（1～10）はこれらの土器に混じって出土した。紡錘車（1・2），釘（3・10），鎹（8），鎌（7），刀子（4～6），工具（9）がある。工具（9）はタガネの可能性が考えられ，意図的に折り曲げられた状態で検出された。土製品には管状土錘（11）がある。

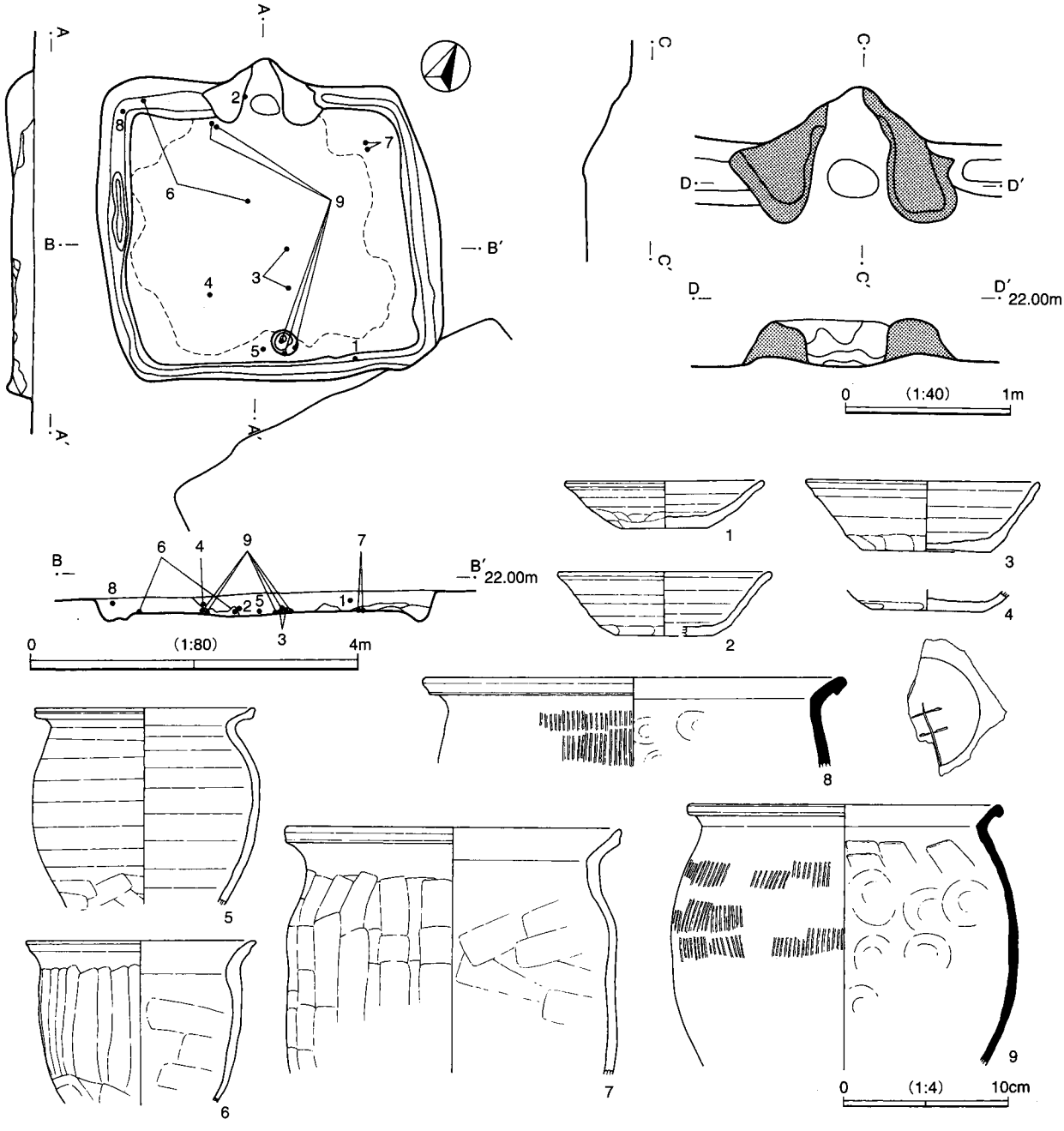


第270図　SI-120A出土遺物（3）

SI-121（第271図，図版60・127）

台地中央部の西寄りに位置する竪穴住居跡である。SI-119の南南東4mに隣接する。主軸は北からやや西へ振れている。全体に北辺に比べ南辺が東に少しずれて平行四辺形をなす。カマドは北辺中央に設けられている。壁溝は全周する。カマド対面にあたる南辺中央には小ピットがみられる。主柱穴は検出されていない。東辺の壁溝は，中央で二重になっている部分がある。改修された可能性はあるが，新旧関係は確かめられなかった。周縁部を除いて床に硬化面が形成されている。覆土は大きく2層に分けられ，その間に小さいブロックを含む薄い層がみられる。とくに，住居跡西側に堆積していた層にはロームブロック・焼土を多く含んでいる。本跡も人為的に埋戻されたと考える。

図示した遺物は床面直上で出土したものである。土師器坏皿類はいずれもロクロ製で，底部を回転糸切り後，手持ちヘラケズリ調整した皿B（1）や坏BIV（3）などがあり，底外面に「キ」の線刻をもつもの（4）が含まれている。甕類には，ロクロ整形された小型甕（5），厚手の土師器甕B（7），須恵器甕C（8・9）などがある。須恵器はいずれも褐色で，口縁部はやや丸みを帯びている。SI-120より後出

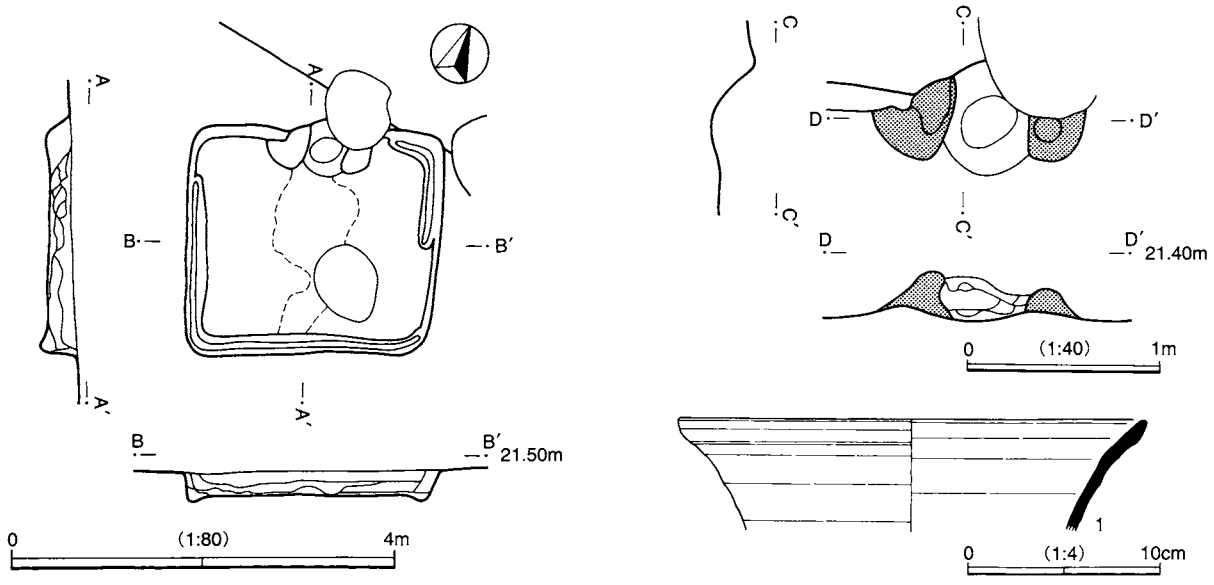


第271図　SI-121と出土遺物

的であるが，平安時代としては比較的古相を示す。

SI-123（第272図，図版61）

台地西部の北西に位置する。該期としても小型の竪穴住居跡である。SX-25が重複し，SD-28が北東隅をかすめる。主軸は北からやや西に振れている。カマドは北辺中央に設けられている。カマドの遺存状態は悪いが，支脚が火床部に立った状態で検出された。したがって，破棄したおりの破壊よりもSX-25構築時の破壊が大きいとみられる。壁溝は，北辺西半分と東辺南半分を除いて検出されており，ほぼ全周するとみられる。ピットは検出されていない。カマドの前面から南辺の壁溝まで，ほぼカマドと同じ幅の硬化面が形成されている。覆土は数層に分けられるがロームブロックなどを含まず，自然埋没と思われる。



第272図　SI-123と出土遺物

遺物はほとんど検出されなかったが，須恵器（1）が出土した。甕Eの口縁部とみられる。にぶい黄橙色を基調とするが外面はにぶい黒色に焼かれている。千葉産須恵器であり，胎土には雲母を含まない。千葉地域の須恵器窯が操業していた奈良時代末以降，平安時代の製品とみられる。

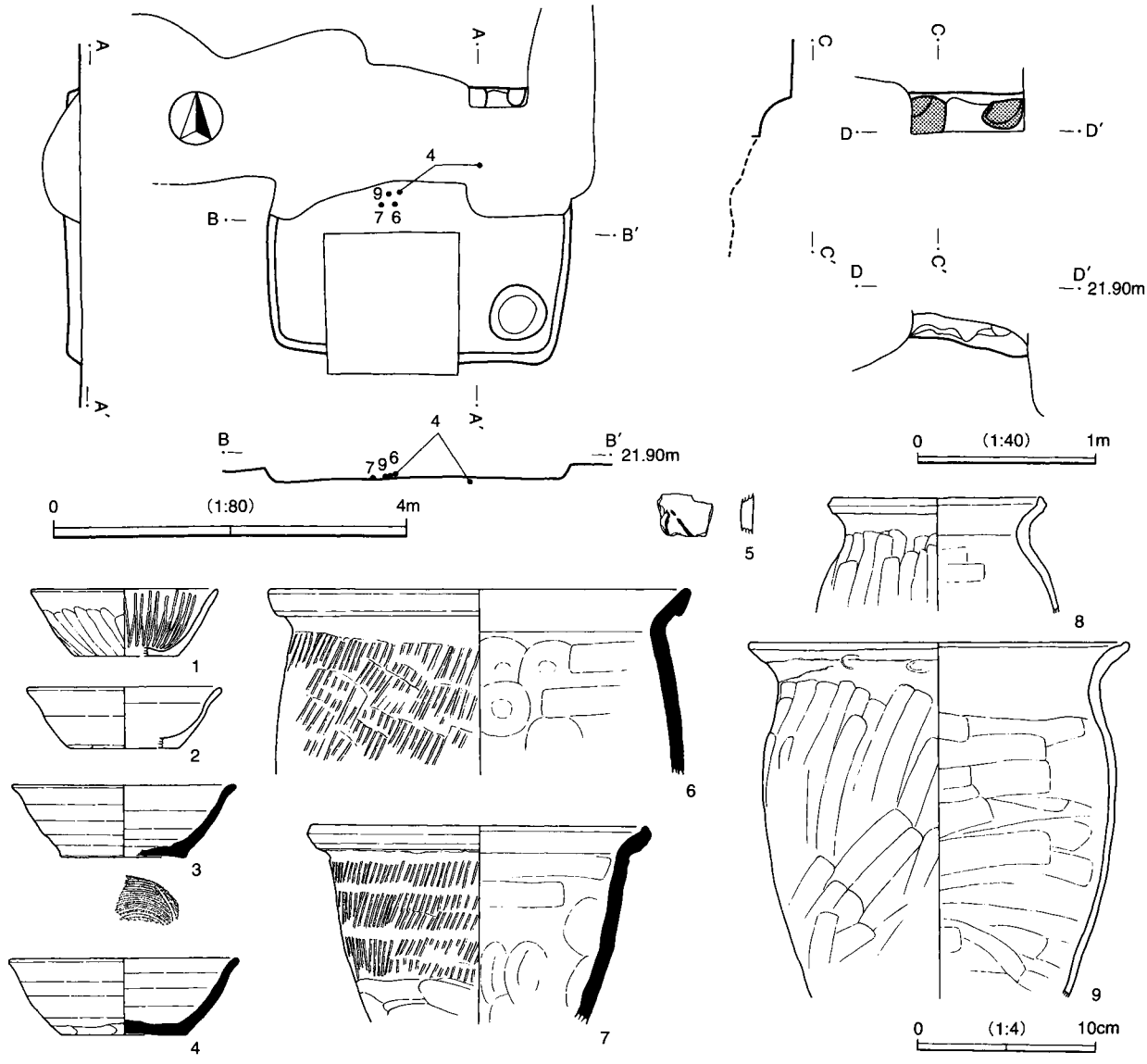
SI-125（第273図，図版128）

台地西部のやや北西寄りに位置する竪穴住居跡である。SI-123の南東16mにあたる。確認面から床面までの深さは10cm前後である。北半分は溝状の攪乱により削平され，カマドの一部が残るのみである。南半分も中央部を攪乱されている。カマドは北辺に位置するが，かなり東に片寄って作られている。主軸は北方向である。遺存部分に壁溝は確認できなかった。南東隅に底径40cmの貯蔵穴様のピットがあるが，その中からも遺物は検出されなかった。

遺構の状態に反し図示できた遺物は多い。甲斐型坏とされる土師器坏BVI（1）は本遺跡唯一の出土例である。縦方向のヘラケズリ調整が施され，内面に鋸歯状の暗文をもつ。土師器坏BII（2）もロクロ製で，底部を手持ちヘラケズリ調整されている。須恵器坏（3）はにぶい黒褐色であり，底部は回転糸切り無調整である。須恵器坏AV（4）は橙色であり，底部は手持ちヘラケズリ調整である。甕類には，にぶい黄橙色の須恵器甕C（6），橙色の須恵器甑（7），土師器小型甕A（8），「在地」系の形態を残す甕A（9）がある。甕の底部片に墨書の一部（5）が明瞭に認められる。総じて，平安時代でも比較的古相を示す。

SI-128（第274図，図版64）

台地西部の西寄りに位置する竪穴住居跡である。SI-125の南西9mにあたる。平安時代のSK-122を切る。カマド左脇から南辺までは，近代の溝によって攪乱されている。確認面から床面までは10cm前後である。主軸はほぼ北で，北辺中央にカマドが設けられている。壁溝は全周する。カマド対面にあたる南辺



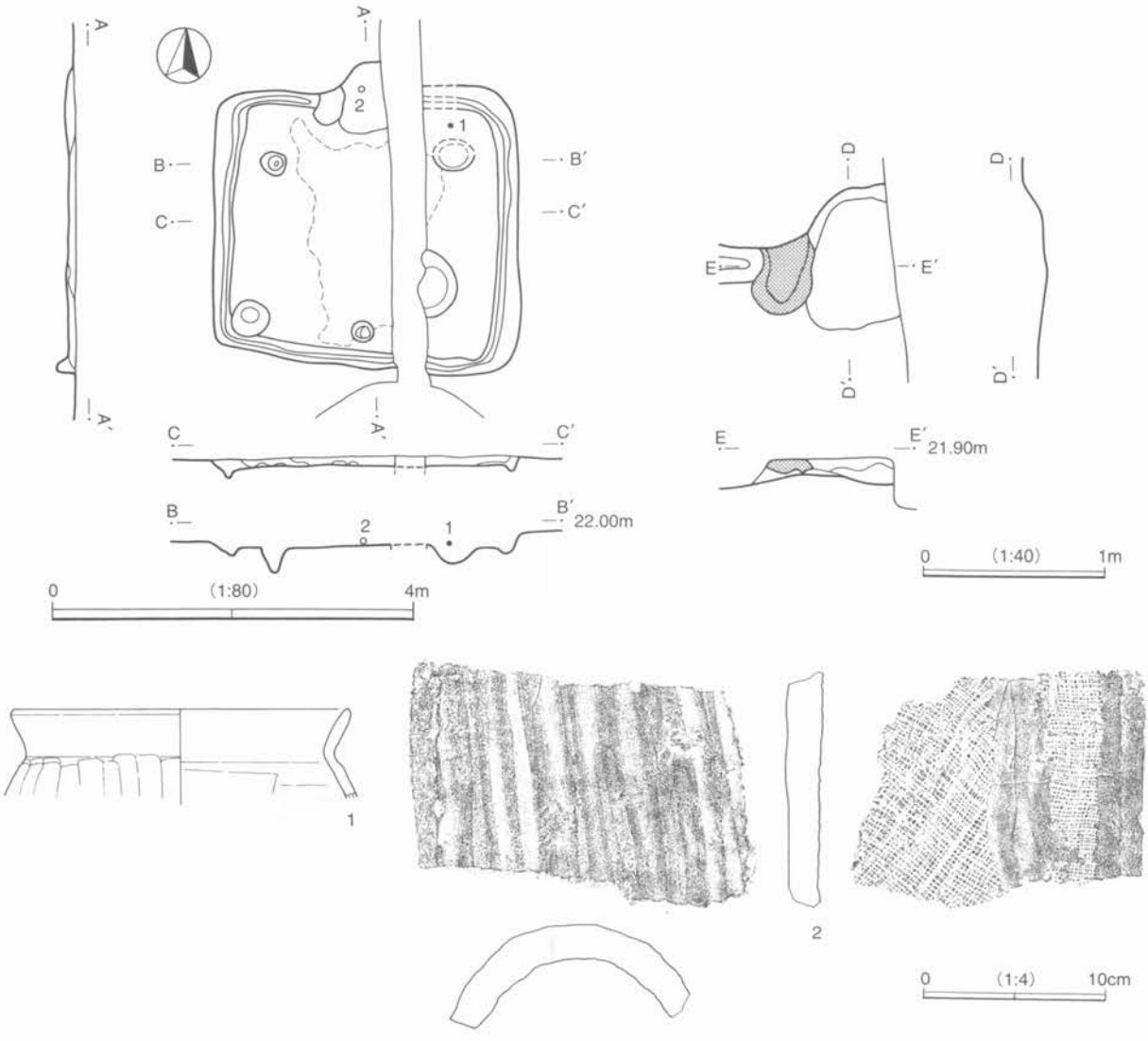
第273図　SI-125と出土遺物

中央に，出入口施設とみられるピットがある。そのほかに4か所のピットがあるが，配置は不規則で，本跡に伴うとはいえない。形態的に柱穴とみられるのは北西の1か所のみである。

北東隅で土師器甕口縁部破片（1）が出土した。カマド内にまとまって出土した土器細片の中には，丸瓦片（2）が含まれていた。瓦の外面には規則的な縦方向のヘラケズリ痕，内面には布目痕が残る。

SI-131（第275図，図版65・129）

台地西部の西寄りに位置する比較的小型の竪穴住居跡である。SI-128の西北西10mにあたる。南辺と西辺を，近代の攪乱により損なっている。主軸はほぼ北にとる。壁溝は全周する。カマドは北辺中央に設置され，内部より比較的大きな土器片が出土した。カマド前面に浅い凹みと，深さ6cm前後の小ピットがある。東側壁溝中には径24cm，深さ13cmの小ピットがある。主柱穴は検出されなかった。床の硬化面はカマド前面を中心に広がり，焼土と炭化材がその直上で検出された。覆土の状況から，薄く下層が堆積した後，比較的短時間で埋戻しが行われたとみられる。上層からは比較的大きな土器片が散見された。また，



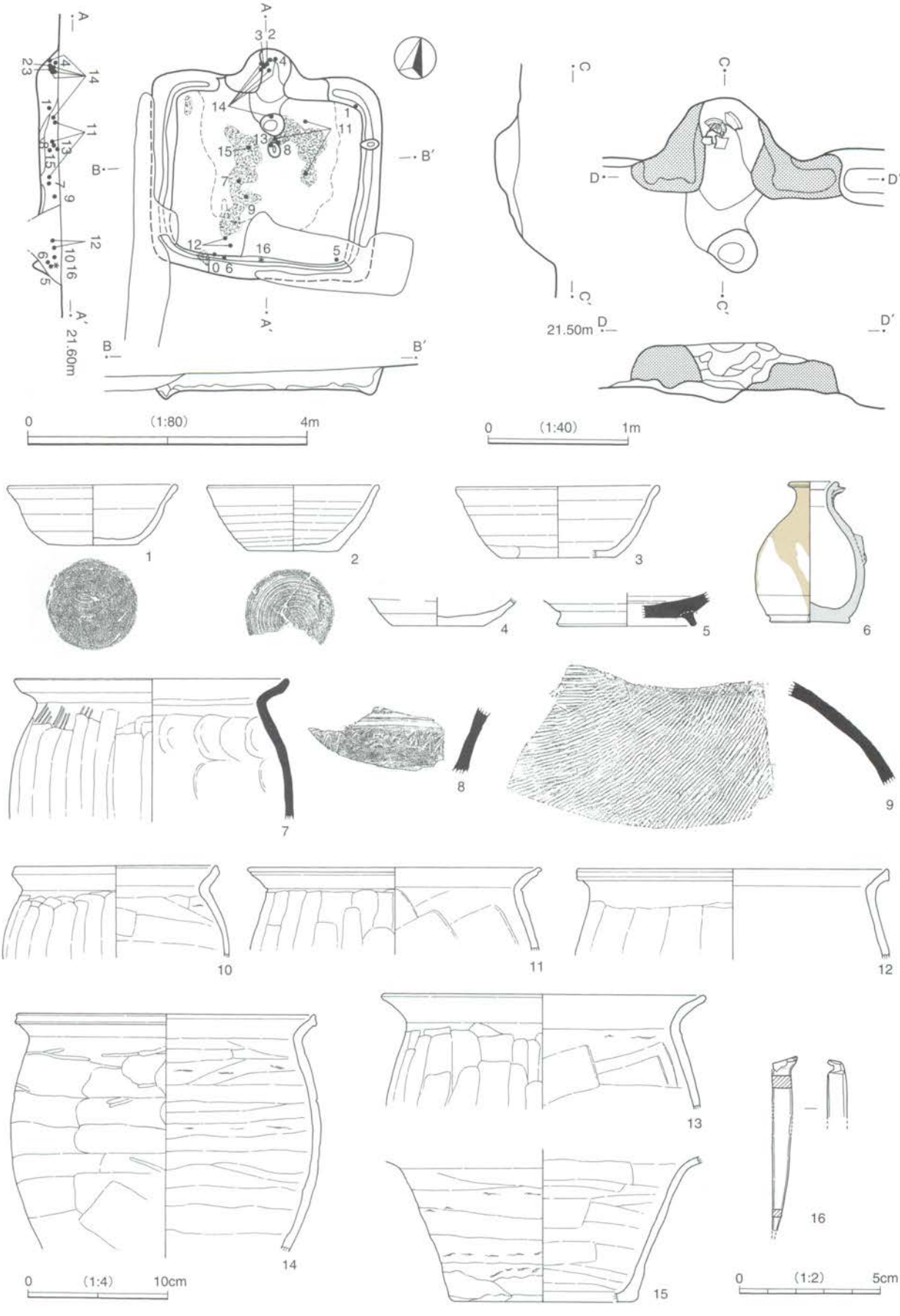
第274図　SI-128と出土遺物

カマド煙道部にも遺物が多くみられた（2～4・14）。

灰釉陶器の把手付小瓶（6）は，南壁際で，比較的下位から出土した。把手と口縁部の一部を欠損しているが，ほぼ完形である。灰白色の地肌をしており，口縁部から肩部にかけてくすんだ緑色の灰釉がたっぷりと施され，把手の周辺に集中して流れている。胴の下部を高台風に削り出しているが，底面は回転糸切りののち周囲をナデるにとどまり，ほぼ平らな面を形成している。

須恵器では，貼付高台付椀B（5）がある。黄灰色に還元焼成されている。橙色の須恵器甕（7）は，縦方向のヘラケズリでタタキ目が肩まで消されている。口縁部の造りは簡略化している。須恵器甕口縁部片（8）は灰色の硬い焼成で，2条の沈線と櫛描波状文がみられる。自然釉が多く掛かる須恵器甕胴部片（9）と同一個体と考える。

土師器の出土割合は須恵器よりやや上回っている。坏類はいずれもロクロ製である。坏BⅡ（1）は口縁部がやや反る形状で，底部にはドーナツ状に回転ヘラケズリ調整を施し，中央に糸切り痕を残す。坏BⅧ（2）は，比較的小型であるが，身が深く底径は小さい。底部を回転糸切り無調整としている。やや大



第275図　SI-131と出土遺物

型の坏ＢⅡ（３）は，底部を手持ちヘラケズリ調整している。坏の底部片（４）もかなり開く形状で，底部を回転ヘラケズリ調整している。甕類は多数出土しているだけでなく，多様性がある。小型甕Ｂ（10），鉢Ｂ（15）のほか，大型の甕（11～14）は口縁部特徴がそれぞれ異なっている。横方向の粗いナデが器壁全面に施される例（14）は，伝統的な土師器甕にはみられない要素である。これらの土器群は，総じて平安時代の比較的新相を示す。

鉄製品には，ほぼ完形の釘（16）があるが，出土位置は攪乱坑内であった。

SI-132（第276・277・278図，図版66・67・129・130）

台地西部，谷の最奥部に面する竪穴住居跡である。SI-131の南５ｍに位置し，奈良時代のSI-133北辺を切って構築されている。主軸を北からやや西に振っている。カマドは北辺に設けられている。カマドの火床部上には多量の灰が残され，よく使用されたことを示す。カマド対面の南辺中央に出入口施設とみられるピットがある。壁溝は全周し，底部に不規則に小ピットをもつ。主柱穴はみられない。遺構中央に深さ20㎝の小穴をもつ。この小穴は，覆土中に焼土を含むので，炉の可能性が高いが，炉床はそれほど被熱していない。覆土には，ブロックを含む層序がみられ，各層のロームブロック混入割合に差がある。遺物の接合が各層にまたがっている。これらは本跡が人為的に埋戻されたことを示す。遺物はカマドを中心とした北半分に集中している。

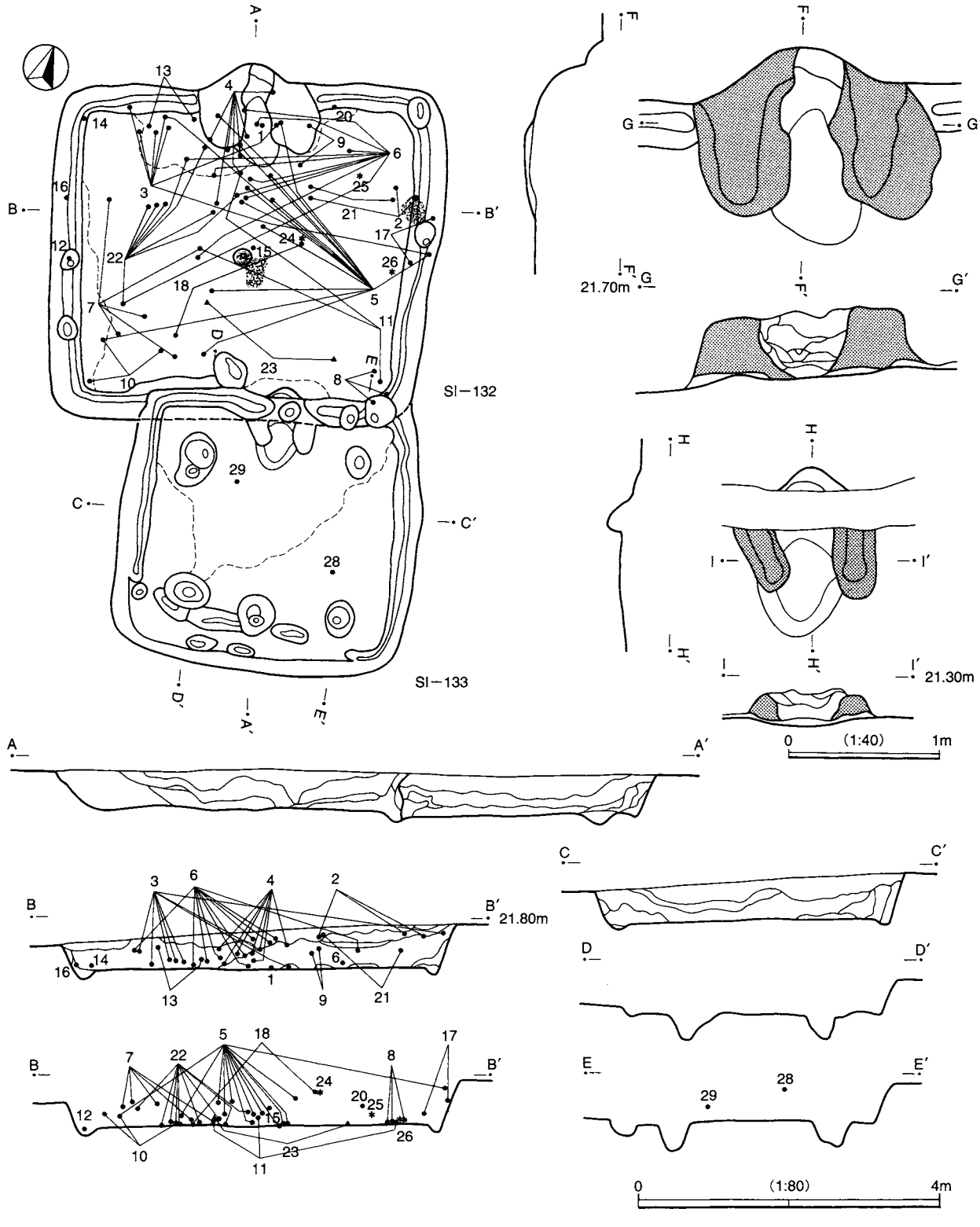
図示した土器は，褐色に発色する須恵器甕類が多い。内訳は甕Ｂ（３・４）・甕Ｃ（７）・甕Ｄ（１）・甕Ｅ（６）などである。五孔の甑（８）も褐色に焼けている。口縁部はやや丸みを帯びるが丁寧に作っている。土師器甕類には，武蔵型の甕Ｅ（10），受け口状の口縁部をもった甕Ｂ（９），鉢Ａ（11）などがある。武蔵型甕は口縁部が「コ」の字形と化している。坏皿類は，黒褐色の須恵器ＡⅥ（12・13）のほかはロクロ土師器とみられる。底に糸切り痕を残すものはなく，手持ちヘラケズリ調整をした浅い坏ＢⅣ（14・15・21）が中心である。底面に「井」の字状線刻をもつもの（20・21）を含む。皿ＣⅡ（16）は底部を手持ちヘラケズリ調整している。皿ＣⅠ（17）は底部を回転ヘラケズリ調整して高台風に削り出しており，内面にミガキをもつ。坏ＡⅡ（18）は内面黒色処理が施されている。高台付椀（19）は高台内部に糸切り痕が残っている。やや混入が疑われるものもあるが，総じて平安時代の比較的古相の土器群といえる。

「風」字硯（23）は，千葉産としては焼成の良い黒褐色の須恵器製である。同一個体とみられる破片２個が出土している。大きい破片には外面に高さ0.9㎝の長方台形の脚が１か所みられ，内面の小高い平滑部分には，使用の結果を示す若干の研磨痕が認められる。小さい破片にも脚を貼り付け，四角く切り取ったヘラの痕跡が認められる。

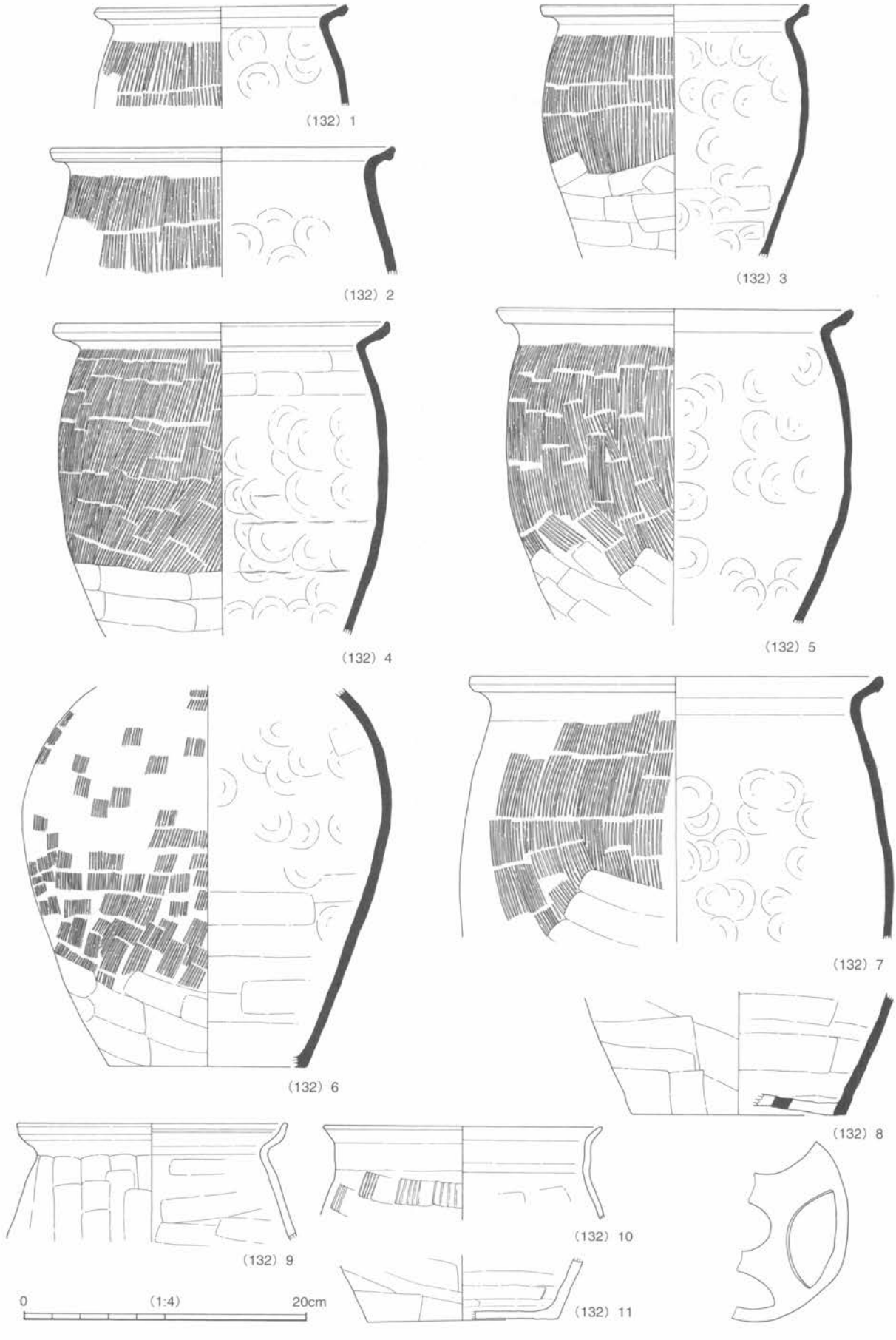
青銅製帯金具の一部（26）は，東壁際の床面から出土した。四隅に小円孔をもつ。極めて薄手の造りである。長方形ではあるが，絞具などの帯金具の裏金と考えられる。鉄製品にはタガネとみられる工具（25）と，刀装具とみられる筒状製品（24）が出土した。タガネは茎が大きく曲げられている。

SI-134（第279図，図版67・130）

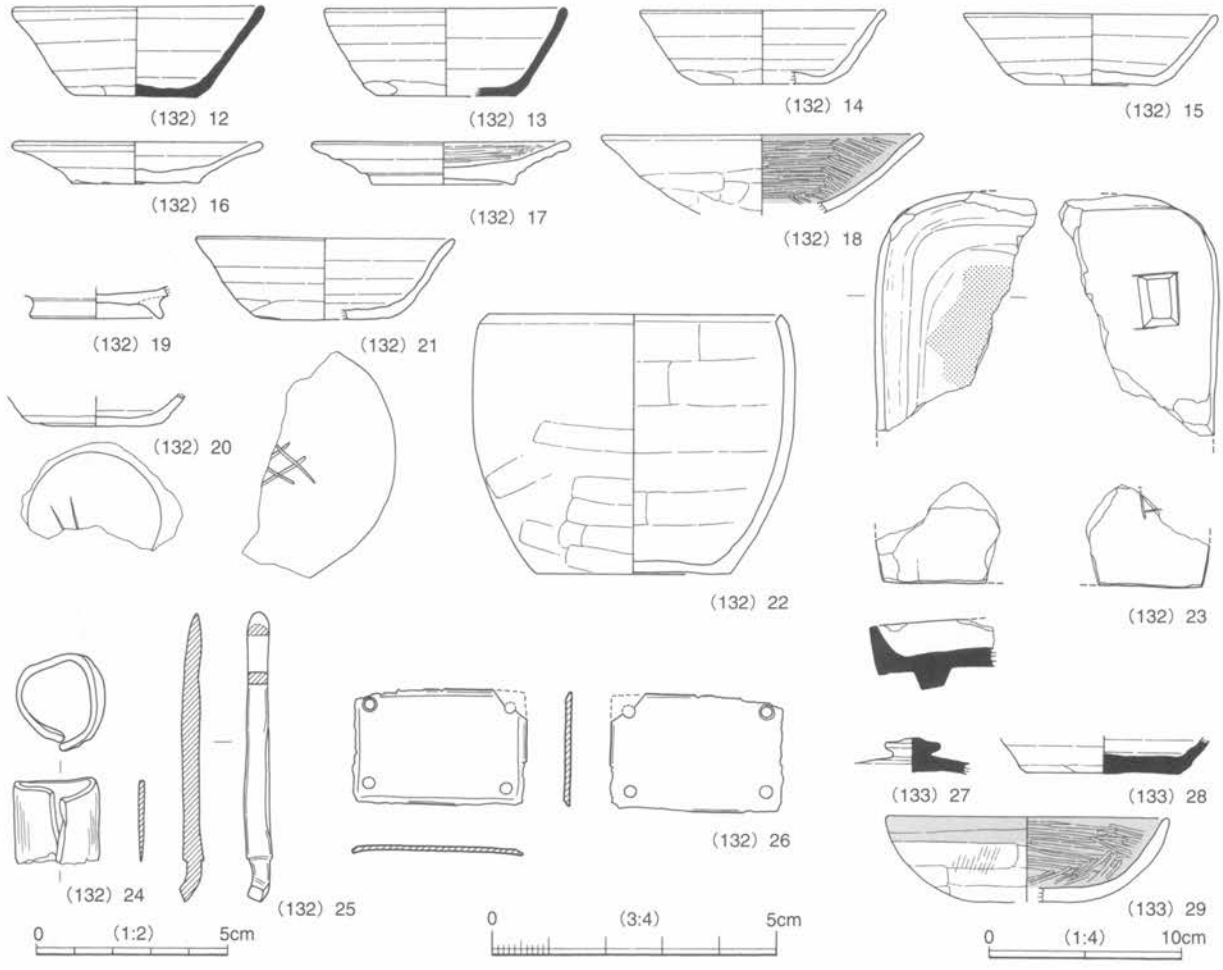
台地西部，谷の最奥部に面する竪穴住居跡である。SI-132とSI-119の中間に位置する。谷に向かってやや傾斜しており，遺存状態は良くない。SX-31を切り，SD-29に切られる。SX-28とも接するが，前後関係は明確でない。東辺の南側は最近の攪乱で失われている。主軸は北にとり，北辺中央にカマドが設けら



第276図　SI-132・133



第277図　SI-132・133出土遺物（1）

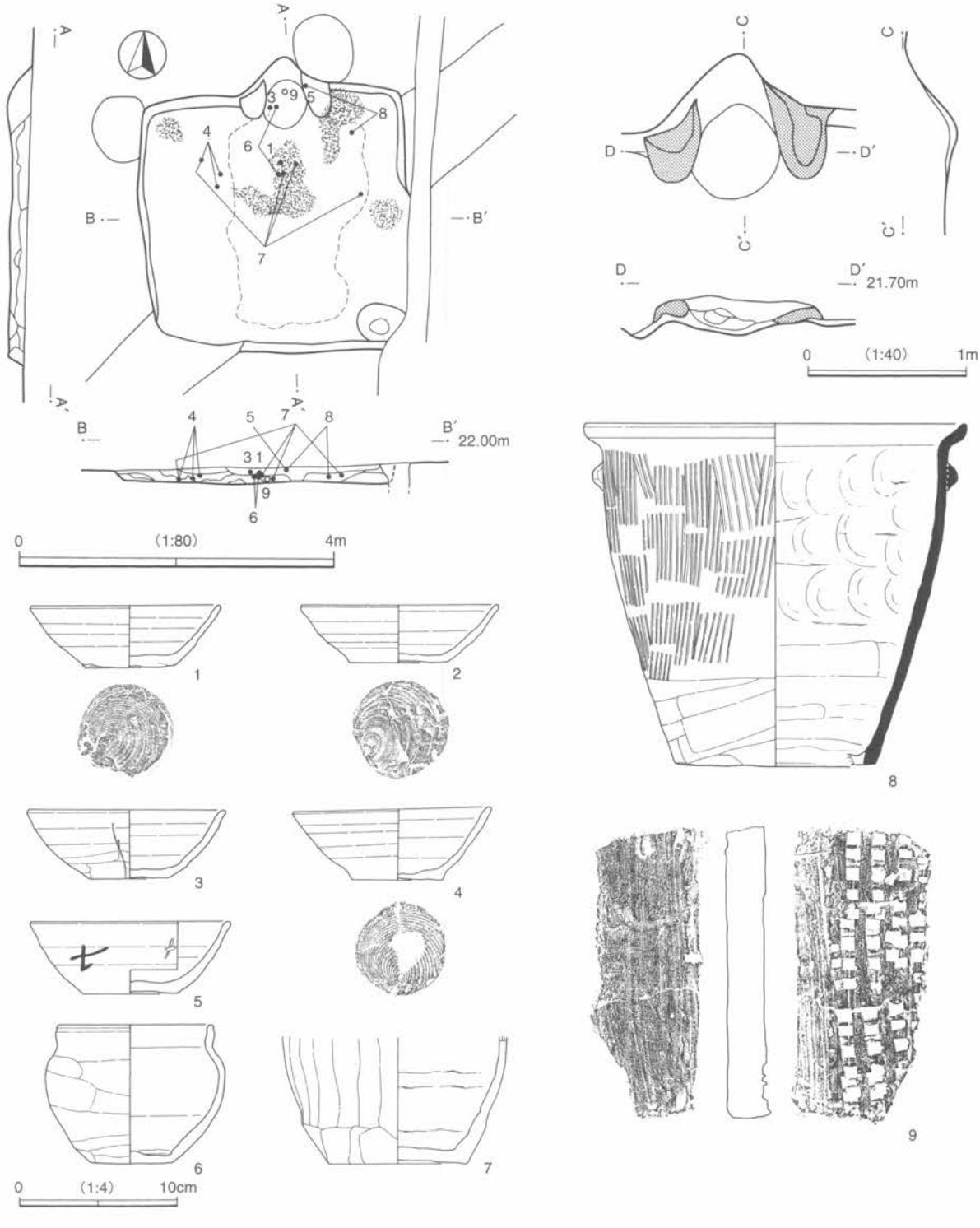


第278図　SI-132・133出土遺物（2）

れている。南東隅には径46㎝，深さ20㎝程度の円形ピットがある。貯蔵穴の可能性がある。硬化面はカマドの幅で帯状に広がる。柱穴，壁溝はない。覆土はブロックを含み，人為的な埋戻しで形成されたとみられる。北半分では，床面から間層を挟んで薄い焼土が分布する。この範囲に遺物が集中して出土した。カマド内からもやや多く出土した。

坏類はいずれもロクロ土師器である。浅い坏BⅦ（1・2・4）は，底部を回転糸切り無調整としている。坏BⅧ（3・5）は底部を手持ちヘラケズリ調整としており，線刻と墨書の両方が外面にそれぞれ施されている。5は「七」または「士」に近い形の墨書と，「×」状の線刻がある。3の墨書は判読不可能であり，線刻は，底から口縁の手前にかけて縦方向に筋をつけた単純なものである。甕類では，土師器小型甕B（6），甕A（7）とみられる底部片，須恵器五孔の甑B（8）がある。甑はにぶい褐色であり，口縁部はかなり簡略になっている。平安時代の比較的新相を示す。

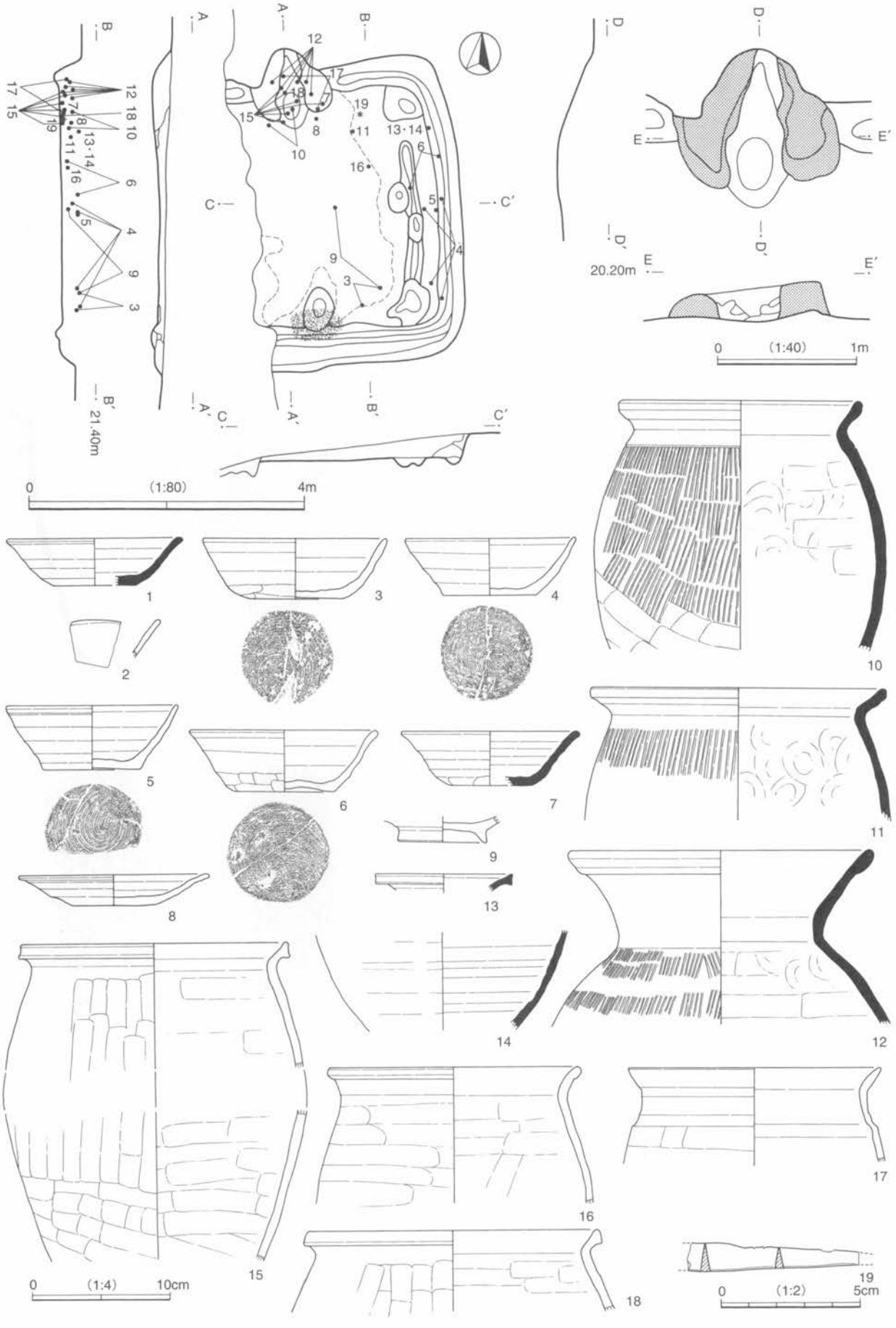
カマドの火床部，やや奥のほうから瓦片（9）が出土した。湾曲に対し外面には，整然とした粗い格子状タタキ痕をもち，内面には布目痕を残す平瓦である。



第279図　SI-134と出土遺物

SI-135（第280図，図版68・130・131）

台地西部の西端に位置する竪穴住居跡である。谷の最奥部に面する。SI-132の西隣にあたる。台地肩部に段が形成されているため西半分が削平されている。主軸はほぼ北にとり，カマドは北辺に設けられている。壁溝は全周していたと思われる。カマド対面の南辺中央に出入口施設とみられるピットをもつ。そ



第280図　SI-135と出土遺物

の周辺には焼土の堆積が確認されている。柱穴と思われるピットは北東隅と南東隅寄りにみられる。東辺では，壁溝内側にもう1条の溝と小ピットが2か所あり，また，南辺の壁溝外側には平坦面が検出されていることから，拡張が行われたと考えられる。台地側の壁高は30㎝程度遺存しているが，斜めに削り取られていて覆土の堆積状態は判然としない。遺物はカマド部分に集中して出土している。

坏皿類はロクロ土師器と判断したが，質感が中原窯等の千葉産須恵器と類似しているもの（1・7）があり，区別は困難である。いずれにも二次的に被熱した形跡がある。坏BⅡ（1・7）は，底部がそれぞれ回転と手持ちのヘラケズリにより調整されている点で異質である。底部が手持ちヘラケズリ調整されているのは，ほかに皿AⅡ（8）だけである。坏Ⅷ（4・5）は底部が回転糸切り無調整である。坏BⅨ（3・6）は，体部外面下部にのみ手持ちヘラケズリ調整が施され，底部を回転糸切り無調整としている。これには「一」字状の線刻を底部にもつもの（3）がある。高台付坏（9）は中央に回転糸切り痕を残している。また，小片であるが内面に漆が付着した坏（2）が認められる。須恵器甕類はいずれもにぶい黄橙色～明赤褐色で，甕C（11）・甕D（10）・甕E（12）がみられる。いずれも口縁部が丸みを帯び，簡略化している。灰釉陶器もしくは須恵器の瓶（13・14）は小片のため全体像を示しえない。土師器甕類は甕Dが基本であるが，口縁端部が三角形に角張るもの（15・18）と，丸みをもち胴部に横方向のナデを施したもの（16）がある。武蔵型の甕E（17）は，明瞭な「コ」の字状口縁をもち，かなり厚手になっている。平安時代の比較的新相を示す土器群である。

鉄製品には刀子（19）がある。カマド東脇から出土した。

SI-138（第281図，図版70・131）

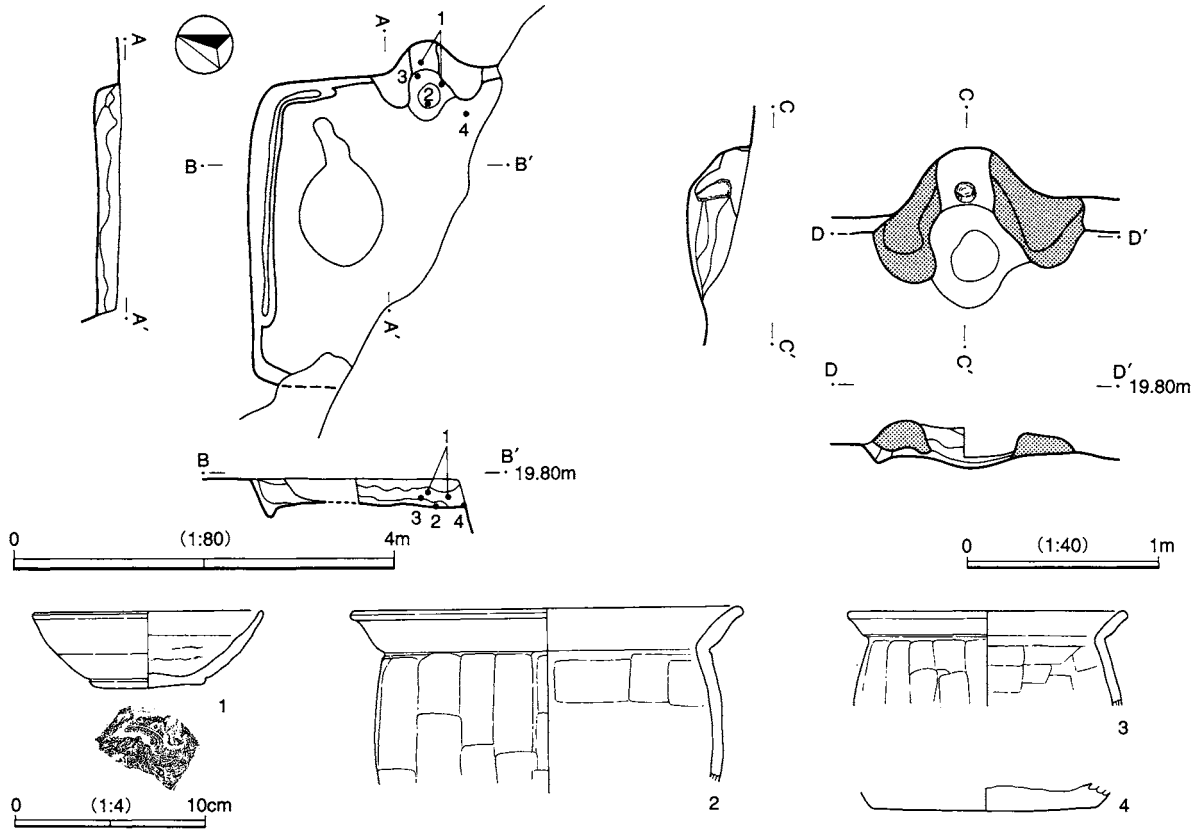
調査区北西隅に位置する竪穴住居跡である。中野台遺跡とをつなぐ細尾根の南斜面にあり，SD-32の南側に位置する。主軸は東北東にとる。南半分は整地により削平されている。カマドが東辺中央に検出され，北辺のみに壁溝が確認された。カマド内では煙道部近くで支脚が立位のまま出土したが，状態が悪く，取り上げることはできなかった。柱穴はみられない。遺物は少なく，図示したものはカマド内から出土した。

土師器椀AⅠ（1）は内湾する小型のもので，ロクロ製の浅い坏ともいえる。底部は回転糸切りで高台風に厚く切り離され，無調整である。土師器甕A（2・3）は，頸部屈曲が強く丸い素口縁をもつ。かなり厚手である。甕底部片（4）も甕Aの一部と思われる。これらは平安時代の新相を示す。

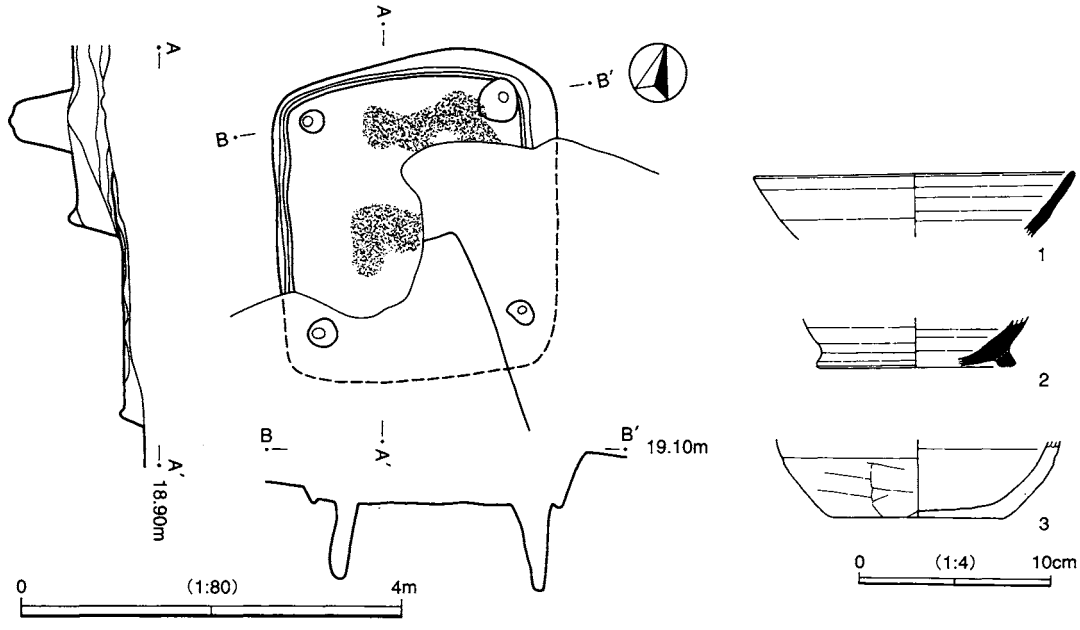
SI-144（第282図，図版73）

調査区北西隅，中野台遺跡との境界に位置する竪穴住居跡である。SI-138の西約25ｍにあり，奈良時代前半のSI-143北東隅を切って構築されている。南斜面に面しているため，南東側は整地による削平を受けて失われていた。カマドは検出されなかったが，削平された東辺にあったとすると，SI-138の主軸と一致する。壁溝が全周し，四隅に主柱穴がある。柱穴の深さは82㎝～91㎝あり，住居の規模に比して深い。遺物はごく少ないが，床面は全体に堅緻で，広い範囲に焼土が検出された。

須恵器坏（1）は灰色に還元焼成されており，ヨコナデによりロクロ目を消しているもので，胎土に白雲母を含む茨城県産須恵器とみられる。灰白色の須恵器壺（2）は東海産とみられる。底部内面に釉溜まりがみられる。土師器小型甕（3）はにぶい黄橙色で，強く丁寧に削って平底としている。SI-143からの混入を考慮するべき遺物もありそうであるが，奈良時代～平安時代初期の所産と考える。



第281図　SI-138と出土遺物



第282図　SI-144と出土遺物

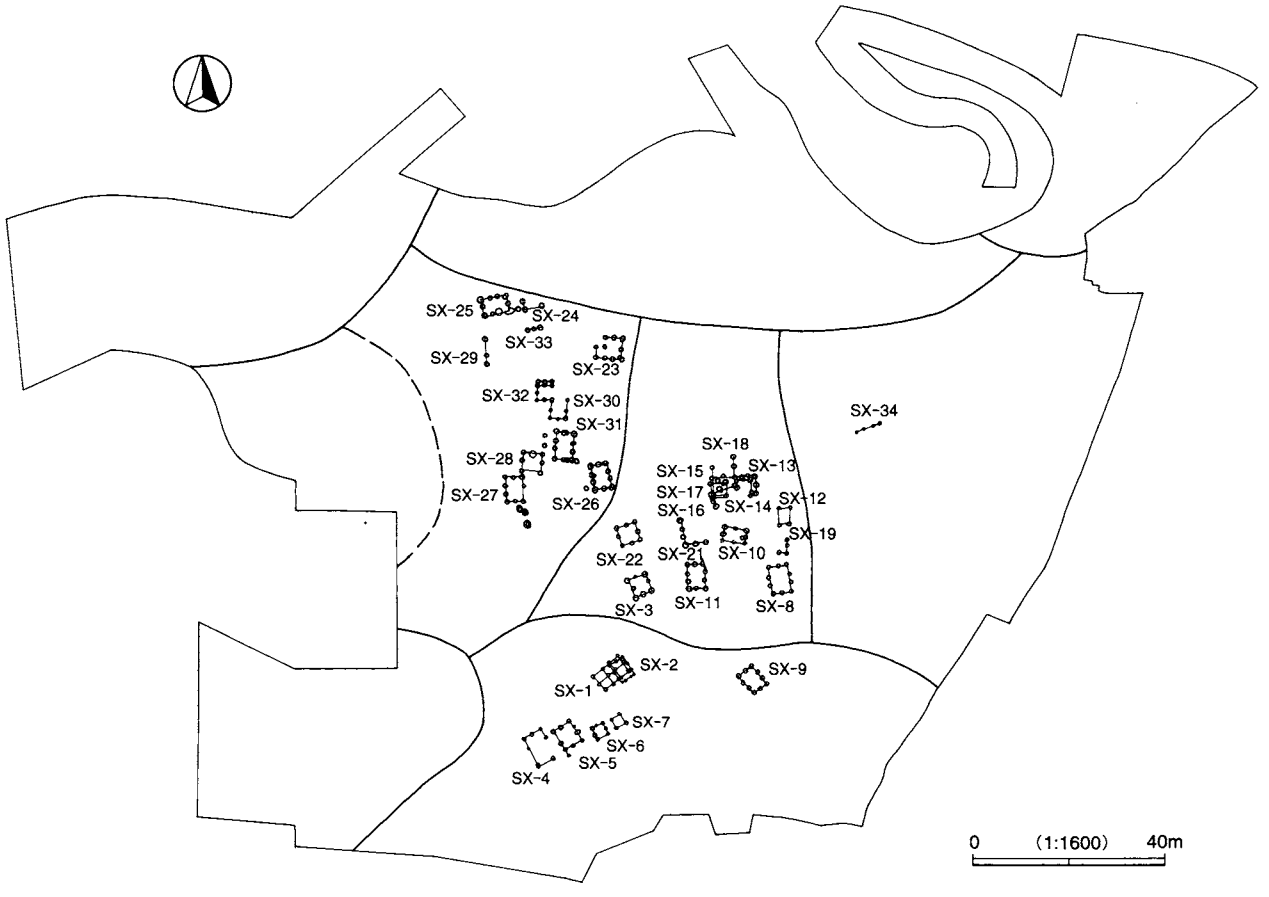
第２節　掘立柱建物跡と遺物

掘立柱建物跡として調査・記録された遺構は34棟である。このうち建物遺構として柱列が組となるのは30棟，後世の削平によって片側の柱列のみが残ったと思われる例は３棟，もとから柱列であったと考えられるのが１棟ある。建物の配置に規則性は認められないが，遺跡の中央部に集中している。奈良時代・平安時代の竪穴住居跡と相互に切り合う例が少なくなく，両者が併存していたことがうかがえる。

出土遺物から，奈良時代よりも遡る可能性のある建物が２棟（SX-1・11）あるが，主軸や形態上の特徴から積極的に分離が可能というわけではないので，ここでまとめて報告する。また，中世に下る可能性を残す建物も２棟（SX-4・5）あるが，柱穴がやや細いというほかは差異は少なく，出土遺物は古代が主体であることから本節に収録した。

桁行３間×梁行２間の南北建物が大半を占め，次いで２間×２間の建物が多い。３間×２間の建物の平均的な規模は桁行5.13ｍ，梁行3.71ｍである。桁行5.1ｍ（17尺〈１尺≒30㎝として換算〉）または5.4ｍ（18尺）×梁行3.6ｍ（12尺）の建物が最も多いが，規模にはかなりばらつきがある。柱間は1.8ｍ（６尺）前後の例が最も多いが，やはりばらつきが大きく，規格性は希薄である。総柱建物が１棟，庇付建物は３棟認められる。

柱掘りかたの状況には，柱の抜取り痕がほとんどなく，黒褐色土や暗褐色土の柔らかな腐植土を主体とした柱痕が確認された建物が多い。掘りかた覆土にはローム粒・ロームブロックを霜降り状に含む暗褐色土・黄褐色土が多用されており，白色粘土の使用はわずか１例にとどまる。以下に個々の所見を記すことにする。



第283図　掘立柱建物跡配置図

なお，出土遺物は第294図に，個々の遺構の規模については附表２にまとめた。

SX-1（第284図，図版88）

台地南部のやや北寄りに位置する桁行３間×梁行２間の総柱建物跡である。N28グリッドにあたる。遺物が出土しなかったSI-019を切って建てられ，SX-2に切られている。柱穴は遺構確認面から概ね60㎝～80㎝の深さがあり，径60㎝～70㎝である。束柱とみられる内側２か所の柱穴は，径が一回り小さく（45㎝），浅め（45㎝～55㎝）である。柱穴覆土の上層には，一様に灰白色の砂質土が含まれ，熱を受けて赤化したブロックやスサ状の炭化物が目立つ。上屋の焼失を示すものであろうか。

図化した遺物は，北西隅の柱穴内から出土した須恵器坏１点，南西隅の柱穴から出土した鉄鏃２点である。須恵器坏H（第294図－１）は口径10.6㎝の小型の身で，口縁の立ち上がりはわずか4㎜，受け部より約１㎜高いだけにすぎない。底部は平底気味の丸底である。鉄鏃は広身の鏃身と棒状部の破片（２）であり，同じ穴からの出土で，同一個体の可能性がある。須恵器坏Hは古墳時代後期後半を示すが，図示しえない遺物の中に，須恵器坏Bの蓋や高台の小片，鬼高式の系譜をひく内黒の坏片も含まれている。SI-019の時期決定資料にもなるので慎重に評価しなければならないが，本跡の造営時期は古墳時代後期後半以降と推定できる。

SX-2（第284図，図版88）

台地南部のやや北寄りに位置する掘立柱建物跡である。SX-1の東半部に重複し，ほぼ90度主軸を回転して建てられている。柱間の間隔からみて，基本的には桁行３間×梁行２間の建物であるが，南側の梁は柱間が短く３間になっている。南西隅の柱穴は奈良時代前半のSI-017を切っていることから，それ以降に建てられたことが推定できる。最も残りの良い南東隅柱で柱痕が確認されており，覆土は５㎝～10㎝に層を成す版築状である。

柱穴内からは土器片が出土しており，図化した須恵器坏身片（第294図－３）は北東隅の柱穴から出土した。灰色に還元焼成され，胎土に雲母を含む茨城県産須恵器の可能性が高い。図示できない細片には千葉産須恵器片や薄手の土師器甕片等がある。奈良時代末から平安時代前半のものと考えられる。これは遺構の重複状況とも整合する。

SX-3（第284図，図版93）

台地中央部の西寄り，SX-2の北に14ｍ離れて位置する，桁行２間×梁行２間の掘立柱建物跡である。古墳時代後期後半の住居跡SI-001を切っている。西辺中央の柱が攪乱により失われている。南辺と北西隅の柱穴は，大きさも一定で柱痕を残し，ローム粒・ロームブロックを主体とした版築状の根固めが見られ，しっかりした造りであることがうかがえる。掘りかた径80㎝の規模は，遺存の良い例としては本遺跡で最大の規模である。遺物は出土していないが，SI-001との切り合いから奈良時代以降の造営と推定される。

SX-4（第285図，図版88）

台地南部のやや西寄りに位置する，桁行３間×梁行２間の掘立柱建物跡である。古墳時代後期のSI-014を切って建てられ，溝SD-2に切られている。柱間は梁の方が若干狭いが柱筋は整っている。北隅柱穴の

覆土には砂粒を含む（第７章第１節１項SD-2)。掘りかた径は，遺存の良いところで50㎝程度であるが，深さは70㎝～80㎝と比較的深い。

周辺から土師器甕口縁部の小片などが出土しているが，図化可能なものはなかった。薄手の甕小片を出土していることや，SI-014との関係から奈良時代以降の建物と考えられる。SX-５に主軸が平行であることから，これと同時期の可能性が高い。

SX-5（第285図，図版89）

台地南部やや西寄りに位置する桁行３間×梁行２間の掘立柱建物跡である。SX-4と主軸をほぼ同じくして，東側に隣接している。西列の柱穴の１つは柱筋上になく，柱筋を大きく逸れた外側に柱穴が認められ，本跡に伴う確証はない。

柱穴の深さは，ほぼ35㎝～50㎝であるが，東列の北から２番目・南東隅の柱穴が20㎝～25㎝と浅い。掘りかた径は約50㎝程度である。梁行の両側には，柱間は異なるものの同じ主軸をとる２列の柱列が検出されている。配列で判断するなら，庇が本跡に伴う可能性がある。ただし，掘りかたが不整形であることから，調査時の所見では庇の存在に否定的であった。建物の内部で検出された２つの柱穴の性格は不明である。側柱では柱痕が確認されており，東列の１か所から炭化材の小片が認められた。

複数の柱穴内から武蔵型甕などの薄手の土師器甕小片が出土している。図示した土師皿（第294図－４）はロクロ製で，底部は回転糸切り無調整である。形態はカワラケと見分けがつかない。瀬戸・美濃産陶器細片１点が混入していることから中世の所産である可能性を残すが，本遺跡における出土遺物のうち，平安時代の新相を示す土器群に含まれるものと考える。

SX-6（第284図，図版89）

台地南部のほぼ中央に位置する掘立柱建物跡である。SX-5の東側に隣接し，SX-1の南８ｍにある。古墳時代後期後半の住居跡SI-013を切って建てられている。北側の梁行筋に検出された小柱穴を含めると２間×２間となるが，柱間が不均等で南側にはそれに対応する柱穴がないため２間×１間の可能性がある。ただし，小柱穴の深さには他の柱穴にほぼ同じものがあり，本跡に伴う可能性を否定できない。

図化不能であるが遺構確認面から茨城県産須恵器坏蓋の口縁部小片が出土している。身を受ける部分の内側にはカエリをもたない。ほかに千葉産須恵器片も若干混じる。奈良時代末以降とみられる。

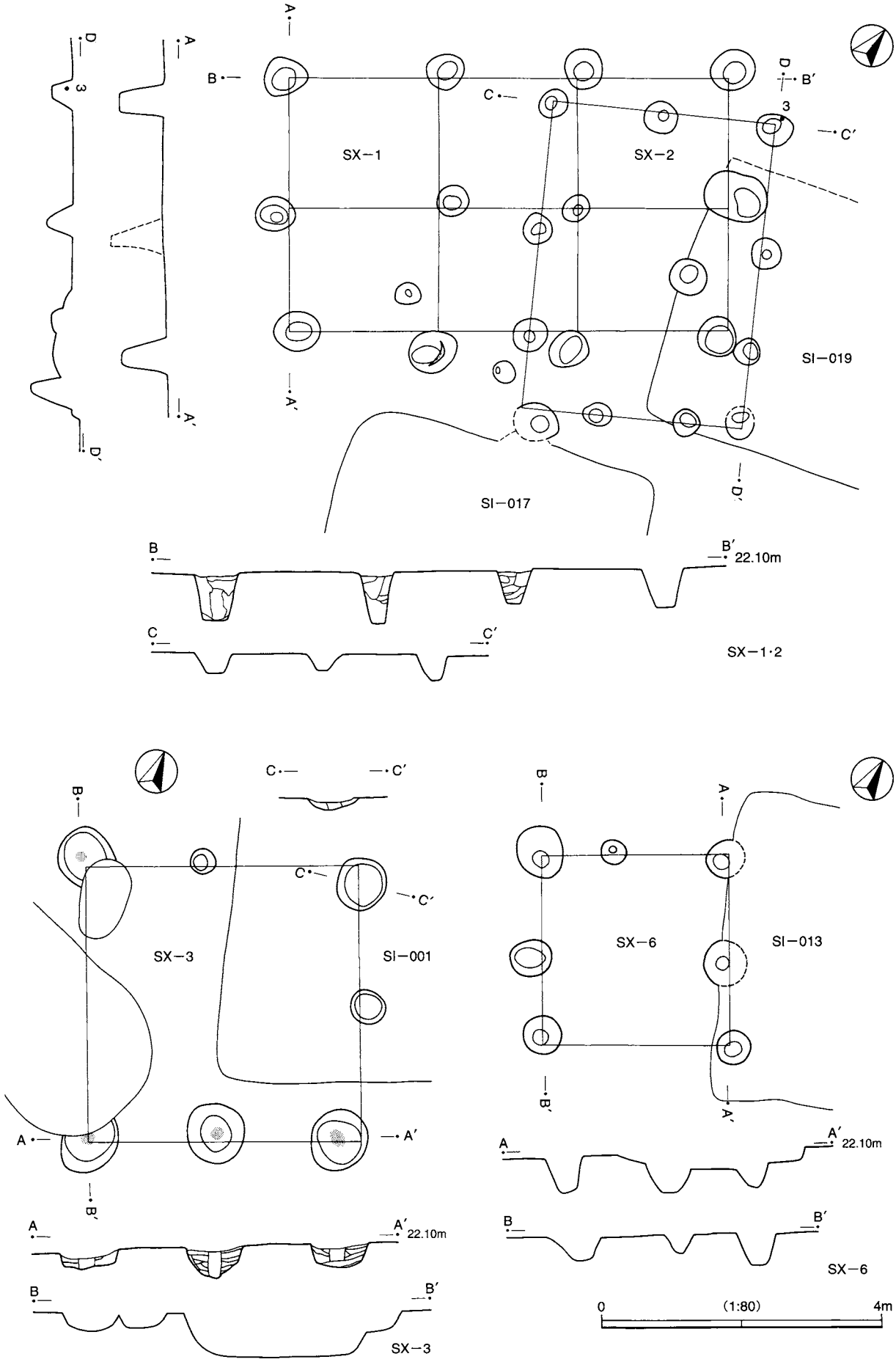
SX-7（第288図，図版89）

台地南部中央付近，SX-6の東側に隣接する１間×１間の掘立柱建物跡で，SX-6と主軸をほぼ同じくする。やはりSI-013を切って建てられている。柱穴の深さは遺存の良いもので60㎝である。

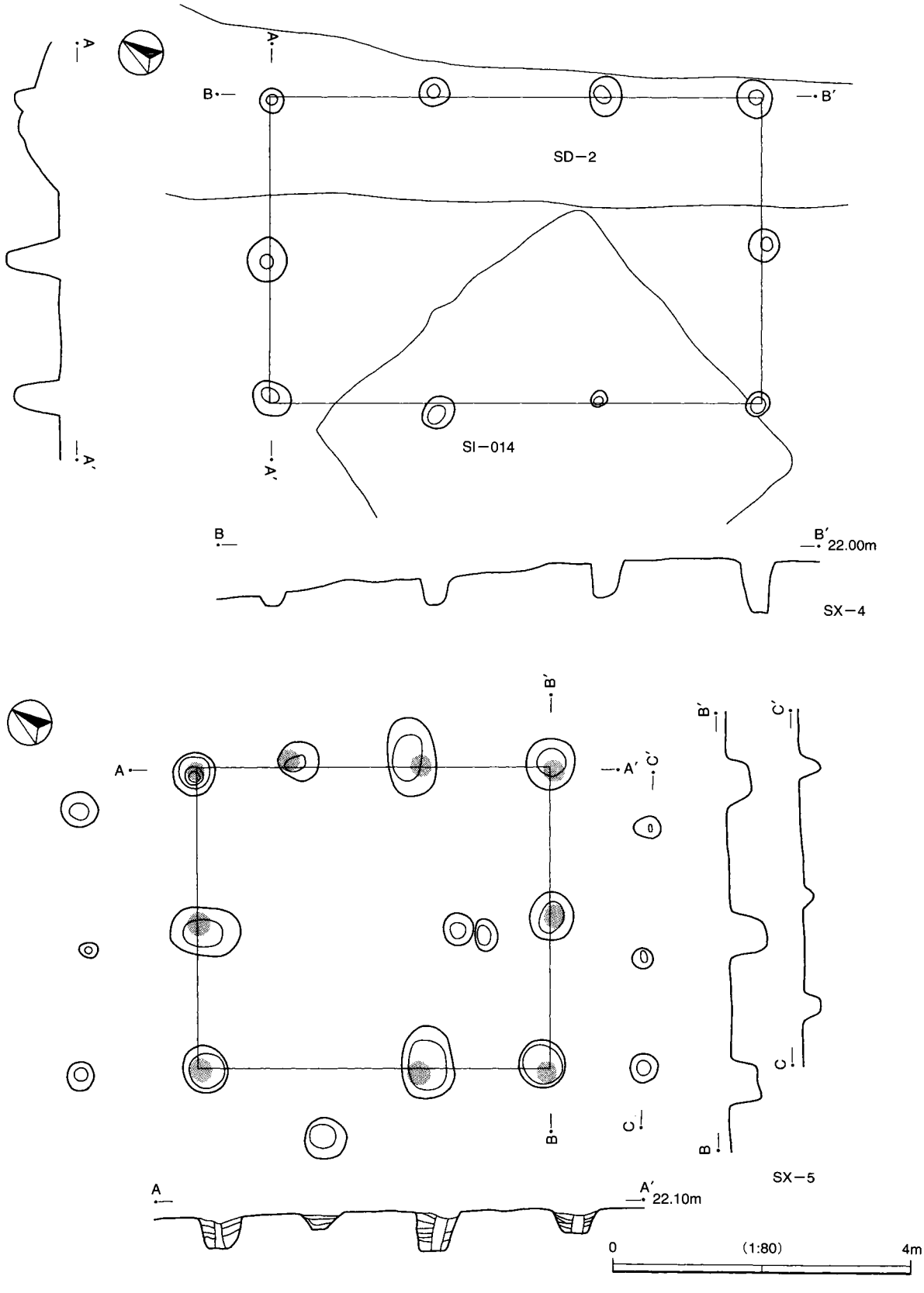
出土遺物はない。

SX-8（第286図，図版90）

台地中央部の南東寄りに，単独で検出された掘立柱建物跡である。南北に主軸をおく桁行３間×梁行２間の建物であるが，桁行の柱筋が通らず東西とも中間の２本が外側に配置されている。柱穴の中心部を結ぶと亀甲形の柱配置となるが，柱上部でずれを解消していた可能性もあり，ここでは両方の可能性を示し



第284図　SX-1・2・3・6



第285図　SX-4・5

た。柱穴の中心部で梁行を求めると，南北の側柱列で3.8ｍ，中央で4.2ｍである。また，南北側柱が50㎝～60㎝の深さをもつのに対し，中間の４柱穴は30㎝～40㎝と浅い。北列と東列で柱痕が検出されている。

茨城県産須恵器坏や千葉産須恵器甕のほか，薄手の土師器甕などが出土したが，いずれも細片で図化できるものはなかった。奈良時代末から平安時代前半とみられる。図示した土錘（第294図－５）は西側柱列の柱穴から出土した。ほかに，板状鉄製品（第294図－６）が出土している。

SX-9（第286図，図版90）

台地南部の東寄り，SX-8から南西約20ｍ離れて単独で検出された桁行３間×梁行２間の掘立柱建物跡である。柱間は1.6ｍで一定し柱筋も通っている。桁側柱穴の深さが50㎝～70㎝であるのに対し，梁中央の柱穴は40㎝前後の深さにとどまっている。

柱穴内から武蔵型甕に似た口縁部片や，内黒の土師器丸底坏片などが出土したが，いずれも細片であり，図化に耐えるものはなかった。奈良時代ころとみられる。

SX-10（第287図，図版90）

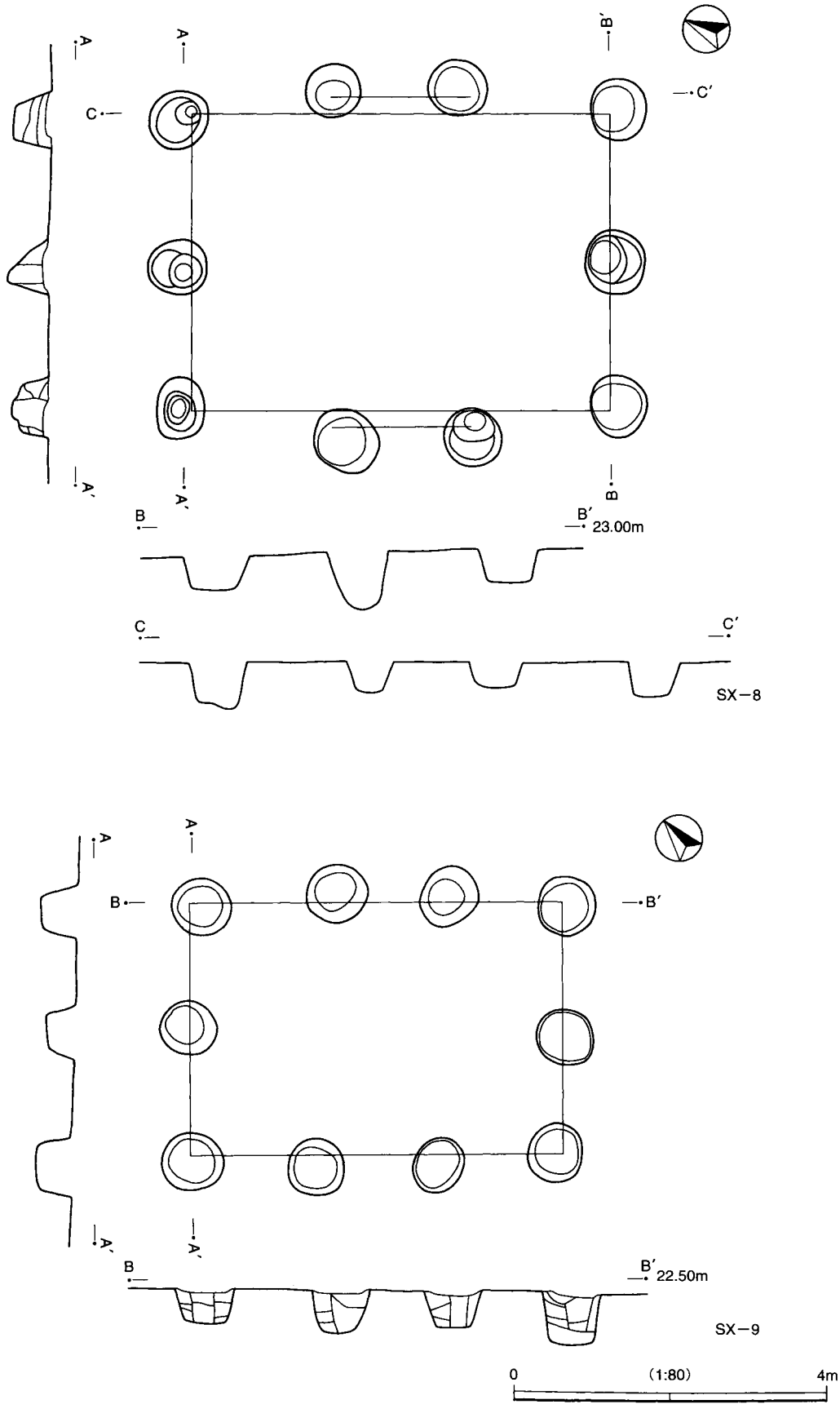
台地中央部の中央に位置する掘立柱建物跡である。SX-8の北西７ｍにあり，奈良時代前半の住居跡SI-081・084に挟まれている。本跡の南側部分は古墳時代後期後半の住居跡SI-086を切っている。SI-086にかかる南西隅の柱穴は，東側に対応するものが見つかっていないが，建物が北側に伸びる可能性が少ないため本跡に伴うものとして図示した。また，SI-086の方が先に調査されたため，柱穴の南半は推定復原している。中央部に束柱とみられる２つの柱穴があり，西側柱筋に対して直角に並ぶが，東の柱筋には並ばない。現状では平面形を復原することは困難である。柱穴の覆土には炭化粒・焼土粒の混入が目立つ。

いずれも細片で図化していないが，柱穴内から内面黒色処理のロクロ土師器椀や，薄手の土師器甕，千葉産須恵器片も若干出土している。平安時代の新相とみてよい。

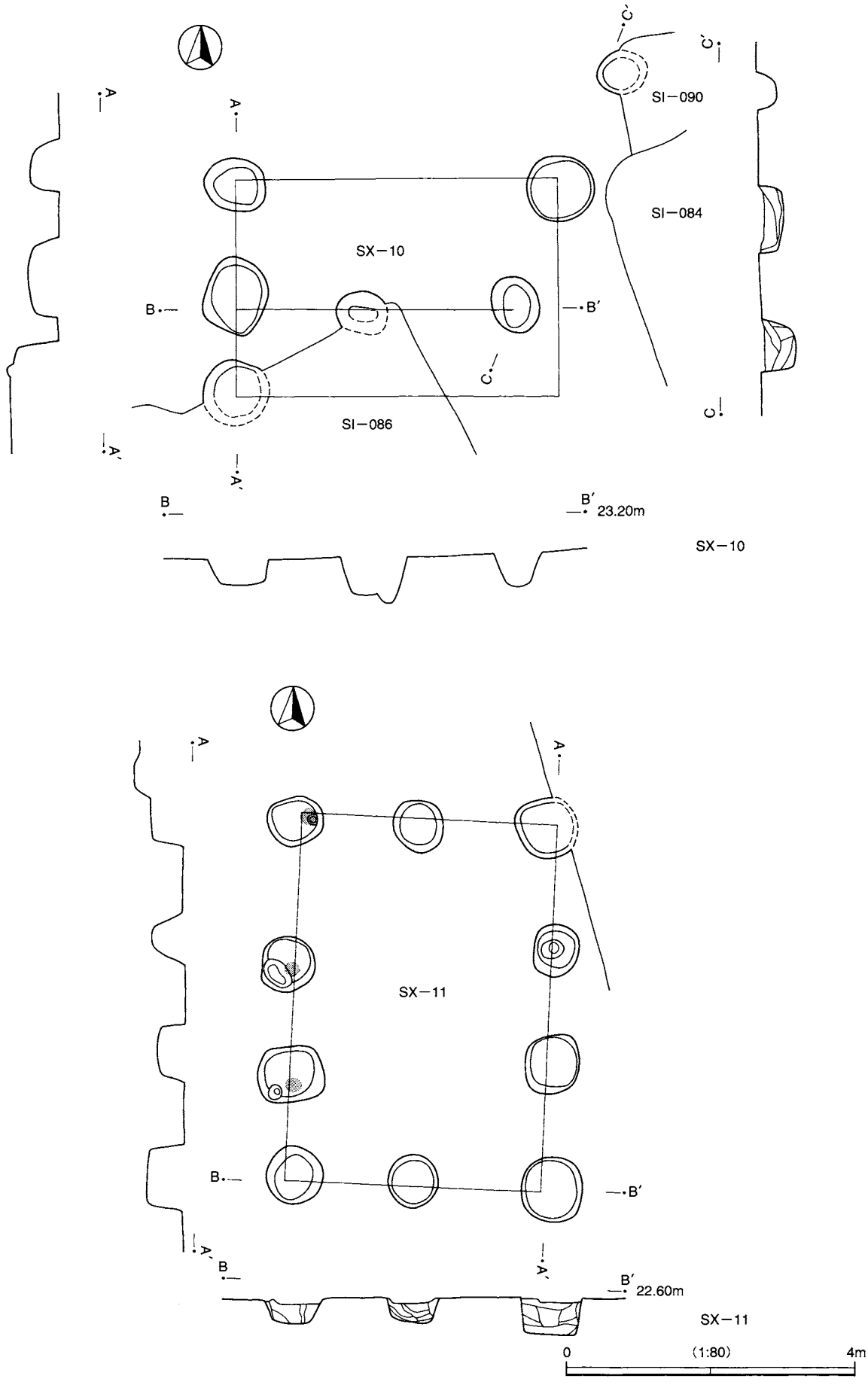
SX-11（第287図，図版91）

台地中央部に位置する桁行３間×梁行２間の掘立柱建物跡である。SX-10の南西６ｍにある。北東隅の柱は古墳時代後期後半のSI-086を切っている。梁と東側柱の柱間は1.8ｍと1.7ｍでそれぞれ等間隔であるが，西側柱の間隔はかなりばらつきがある。柱穴の径には多少の幅がみられるが，深さは検出面から50㎝前後でほぼ一定している。西側柱では柱穴底面に柱の重みがかかったと思われる硬化面が検出された（スクリーントーン部）。とくに北西隅の柱穴では，底面を一段掘り込んで柱を据えた痕跡がうかがえる。また，南東隅の柱穴覆土の最下層には粘土を含む版築状の根固めが確認されている。

北側の中央・東側柱・南西隅の柱穴から土器片が出土しており，北側中央から出土した須恵器短頸壺口縁部（第294図－７）を図示した。これはSI-086の遺物が混入した可能性が高く，SX-11の時期を判断する上限資料である。図示できないが，鬼高式の系譜を継ぐ内黒坏小片や，薄手の土師器甕小片，常総型甕の影響をうけた土師器甕口縁部小片がみられ，むしろ奈良時代に下る可能性が強い。



第286図　SX-8・9



第287図　SX-10・11

SX-12（第288図，図版91・132）

台地中央部に位置する1間×1間の掘立柱建物跡である。SX-10の北東7mにある。平安時代後期の鍛冶工房SI-082に切られ，弥生時代中期前半の住居跡SI-083と奈良時代中頃の住居跡SI-084を切っている。主軸はほぼ南北にある。桁行3.15m，梁行2.25mの規模である。柱穴の深さは検出面から30cm～50cmと浅く，SI-082に削平されたことが考えられる。

南東隅の柱穴内から図示した須恵器坏（第294図－8）が出土した。須恵器は千葉産特有の焼成により黒褐色を発し，底部をヘラ切り後手持ちヘラケズリ調整している。図示できない細片には，これと同様の焼成による須恵器甕小片や武蔵型甕に似た小片等も含まれ，SI-084との切り合いも考慮すると，本跡を奈良時代末から平安時代にかけて位置づけることができる。

SX-13（第289図，図版92・132）

台地中央部のやや北寄り，SX-10の北6mに複数の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が重複する地点がある。本跡はその建物群の一つ，桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡である。遺構の切り合い関係を見ると本跡は内側に建てられたSX-14とSX-18の南西隅の柱穴を切っており，また本跡南西隅の柱穴が奈良時代後半のSI-098のカマドを切っていることからこれらの遺構より新しいことがわかる。台地中央部建物群では最も新しいと考えられる。

柱穴内から出土した遺物には図示した須恵器坏・土師器坏・土師器甕が出土した。須恵器坏（第294図－9）は千葉産特有の焼成による暗褐色を発し，底部を手持ちヘラケズリ調整している。土師器坏（10）は椀形に近く，赤褐色を発し，内面にミガキをもつ。土師器甕（11）は底までヘラケズリ調整しており，厚手で比較的長胴であるとみられる。図示できないが，多く出土した土器細片は千葉産須恵器が主体で，若干の茨城県産須恵器小片や，武蔵型に似た薄手の甕小片が少量混じる。土師器坏（10）は平安時代の比較的新相を示すとみてよい。

SX-14（第289図，図版92）

台地中央部建物群の一つで，2間×2間の掘立柱建物跡である。SX-13の内側に，それと主軸をほぼ同じくして建てられている。桁行2.8m，梁行2.8mで柱間は1.4mである。南西隅の柱穴はSX-13の柱穴とほぼ同じ位置，SI-098のカマド付近にあったと推定される。また，南側と東側の中央には柱穴が検出されていない。南東を除いて隅の柱穴の深さは検出面から60cm～70cmである。

なお，確実に伴うとはいいきれないが，覆土出土遺物には千葉産須恵器坏小片等が若干みられ，平安時代の可能性が高い。

SX-15（第289図，図版92）

台地中央部建物群の一つで，1間×1間の掘立柱建物跡である。SX-14の西側に隣接し，それと主軸を同じくして建てられている。桁行3.2m，梁行2.4mと推定したが，南東の柱を除いて他の柱穴との重複が著しく，数値は柱穴の中心部を結んで割り出した。柱穴の深さは北側の2か所で確認されており，検出面から65cm前後である。本建物跡の中央部を貫いて1.6m間隔で南北に並ぶ3つの柱穴があり，主軸はほぼ一致するが本跡との関係は不明である。

須恵器坏（第294図-12）は千葉産特有の焼成で，黒褐色である。細片には同様の焼成による須恵器片と武蔵型甕をふくむ薄手の土師器片が主体を占め，若干の茨城県産須恵器等も混じる。奈良時代末から平安時代にかけての所産である。

SX-16（第289図，図版92）

台地中央部建物群の一つで，SX-15の南側に重複する掘立柱建物跡である。北西隅の柱がSX-15・SX-17の柱穴と重複しているが，前後関係は不明である。南東隅の柱はSI-098の覆土中にあったと思われるが検出されていない。また，現状では桁・梁ともに1間分の柱しか組み合わない。桁行2.8m，梁行2.1mである。柱穴の深さは55cm～60cmである。

南西の柱穴から須恵器坏底部（第294図-13）が出土している。千葉地域特有の焼成による黒褐色を発し，底部に手持ちヘラケズリ調整がなされる。図示できないが，ほかに千葉産の須恵器甕片，茨城県産の坏片や，還元焼成の坏B蓋，甕口縁部小片などが若干ある。土師器には薄手の甕小片多数や赤彩ロクロ土師器坏片等があるが，SI-098からの混入の可能性もある。土器は奈良時代の新相を示す。

SX-17（第289図，図版92）

台地中央部建物群の一つで，1間×1間の掘立柱建物跡である。SX-15と重なるように建てられており，主軸はSX-15よりやや北に振れている。北東の土層断面ではSX-15の方が新しく，北西の土層断面ではSX-17の方が新しいと記録されているため前後関係は不明といわざるを得ない。検出面からの柱穴の深さは40cm～62cm，桁行2.8m，梁行2.4mである。

柱穴から土器片が出土しているが，いずれも小片である。SI-098からの混入の可能性があるが，赤彩ロクロ土師器坏底部片，常総型甕片，茨城県産須恵器坏片のほか，薄手の甕小片が若干みられ，奈良時代の比較的新相を示す。

SX-18（第289図，図版92）

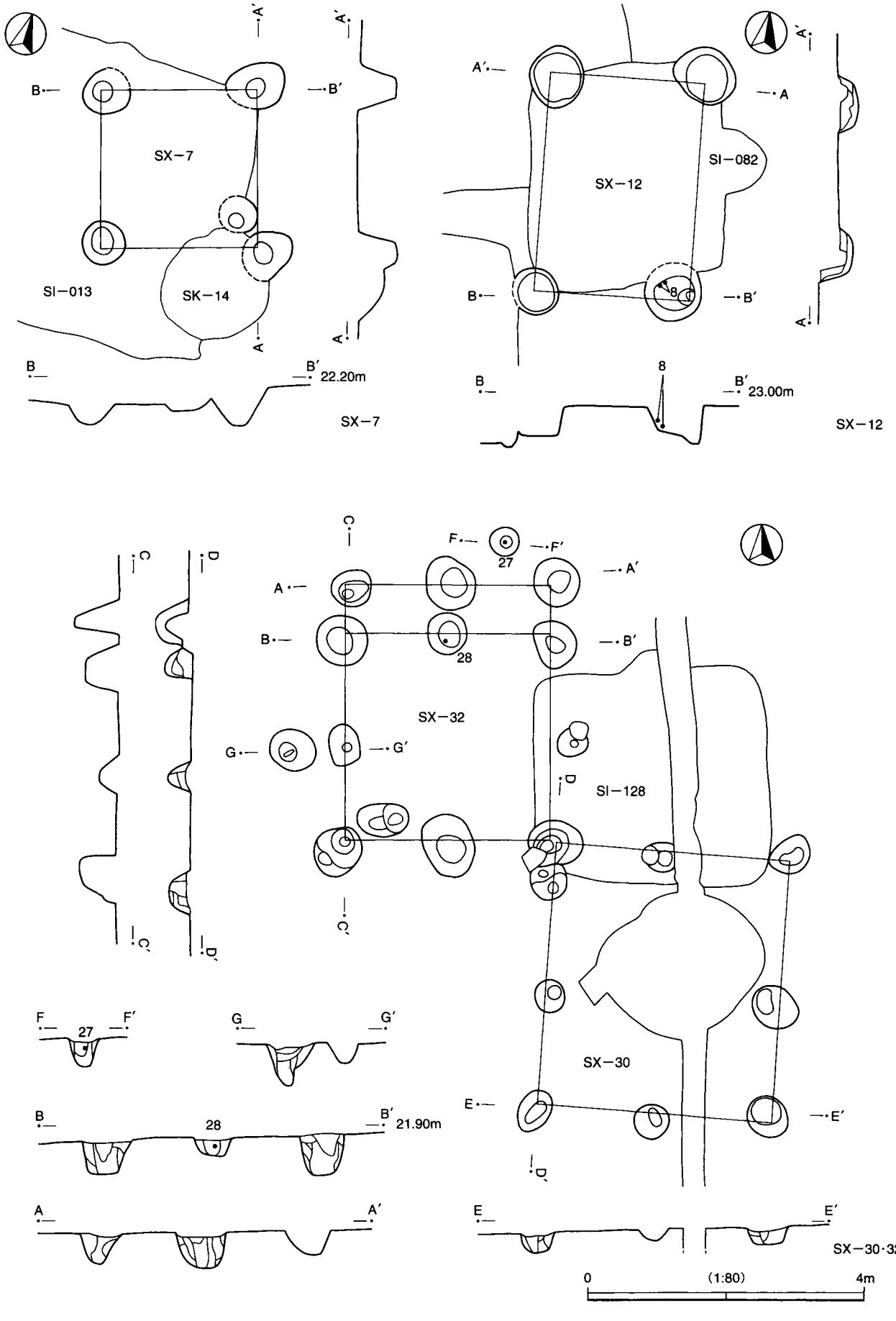
台地中央部建物群の一つで，2間×2間の掘立柱建物跡である。SX-15・SX-17の北側に隣接する。主軸はSX-17とほとんど変わらない。北東隅，および北辺中央の柱はSI-079の覆土中にあったと思われる。平安時代のSX-13に切られる。桁行4.5m，梁行4.2mである。柱筋は通るが柱間は一定でなく，1.7m・2.0m・2.25m・2.5mとばらつきがある。東側中央の柱が最も残りが良く，柱痕跡を確認している。

図示できない細片のなかには千葉産須恵器があり，手持ちヘラケズリ調整した坏底部片等がみられる。奈良時代末から平安時代前半にかけての所産とみられる。

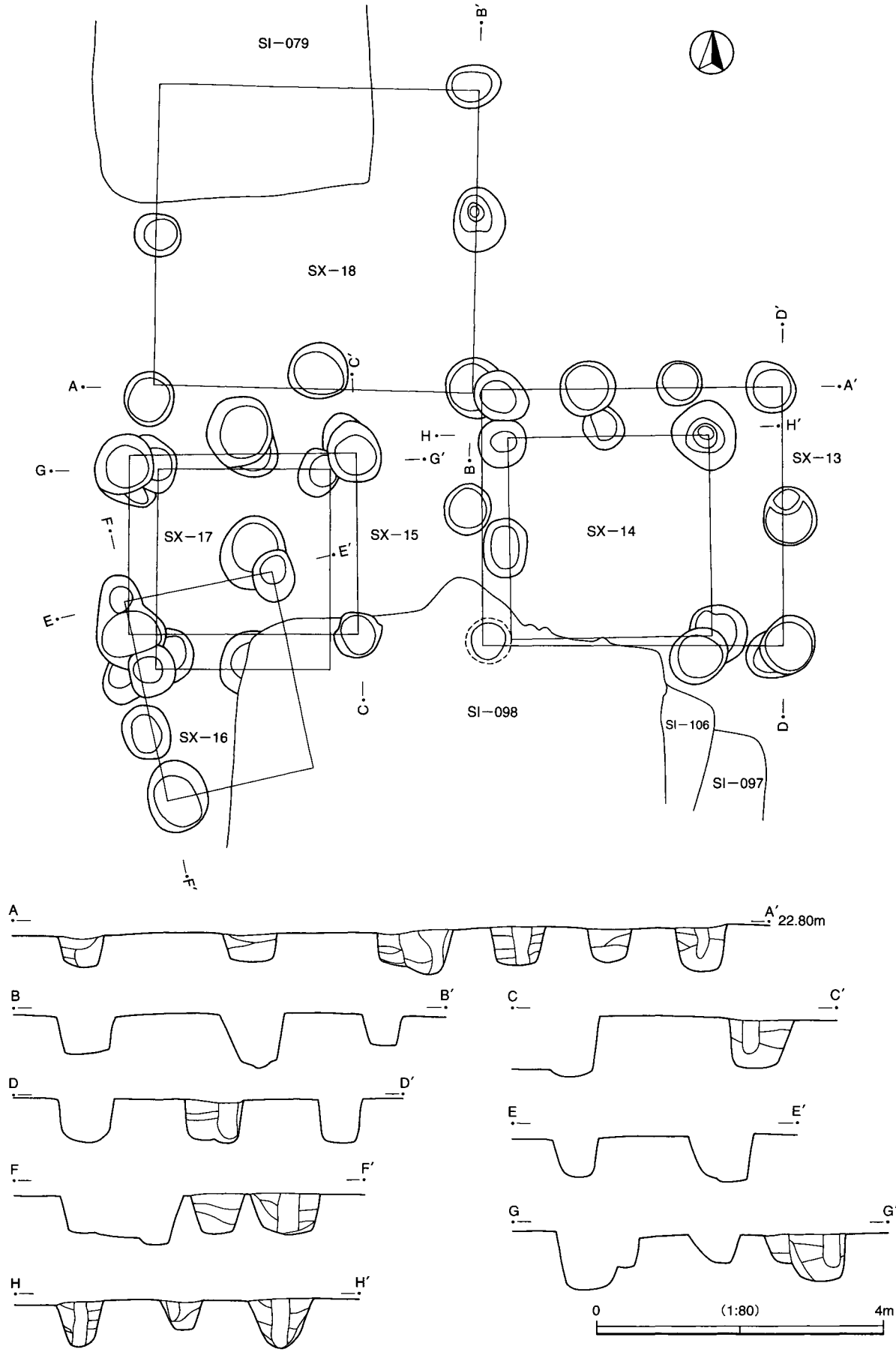
SX-19（第290図，図版91）

台地中央部のやや東寄りに位置する掘立柱建物跡である。SX-8とSX-12の中間に当たる。西側の柱穴は奈良時代中頃とみられるSI-084の覆土中に位置していたとみられるが，調査時にその痕跡は検出されていないため，SI-084に切られていると判断した。1間×2間と推定され，柱穴は比較的浅く，検出面からの深さは32cm～45cmである。

出土土器は武蔵型甕に似た薄手の土師器甕小片が主体であることから，SI-084より新しい可能性もあ



第288図　SX-7・12・30・32



第289図　SX-13～18

る。奈良時代の所産とみられる。

SX-20（第311図　後掲）

台地北部の西寄りに位置する，建物というよりは柵や垣のような施設であったと考えられる。柵列については後にまとめて報告する（第７章第１節２項）。奈良時代の所産と考える。

SX-21（第291図，図版92・93）

台地中央部に位置し，奈良時代中頃のSI-081を切っている掘立柱建物跡である。２間×３間の建物で，北東の３穴はSI-081の覆土中にあったと推定される。検出面で柱痕とみられる黒褐色土部を確認しており，抜取りは行われていないと考えられる。また，柱穴全体に炭化粒・炭化材の混入が見られ，火災にあった可能性もある。南東隅・南西隅・西列の柱穴底面には，柱根の当たりが検出されている。柱穴の深さは検出面から33㎝～46㎝である。

北西隅の柱穴内から出土した赤彩の土師器坏（第294図-14）を掲載したが，建物に伴うものではなく，整地時の上限資料である。細片資料には千葉産須恵器が大半を占め，平安時代に下る公算が大きい。

SX-22（第290図）

台地中央部の西寄り，SX-21の西８ｍに位置する２間×２間の掘立柱建物跡である。南に隣接するSX-3と主軸・規模がほぼ等しく，同時期に並列していた可能性が高い。南東隅を除いて柱痕が確認されており，柱の抜取りが行われた形跡はない。柱穴の深さは40㎝前後で，南東隅と西側中央を除いた底面に柱根の当たりが検出されている。

すべての柱穴から土器片が出土しているが，いずれも小片である。このうち，北辺中央の柱穴付近から出土した回転ヘラケズリ調整のロクロ土師器坏底部片（第294図-15）を図示した。ロクロ土師器坏片が細片にも多くあり，内面にミガキをもつ椀形の破片がみられる。千葉産須恵器も多く，坏には回転ヘラ切り底部片を含む。平安時代の比較的古相とみられる。

SX-23（第291図，図版92）

台地西部の北寄りにある掘立柱建物跡で，SD-26・29に切られている。西側に庇をもつ２間×２間の建物と推定されるが，北西隅の庇の柱は見つかっていない。北東の隅柱を除いて柱痕が確認されており，抜取りは行われなかったとみられる。西列と庇は削平を受けて浅くなっているが，東列は比較的残りが良く検出面から50㎝～60㎝の深さがある。

北東隅の柱穴覆土内（底面から27㎝上）からヤリガンナの完形品（第294図-16）が１点出土している。建築時に埋められたものであろうか。ほかには欠けた石塊があるが，土器は出土していない。

SX-24・25（第292図，図版93）

台地西部の北寄りに位置する２棟の掘立柱建物跡である。SX-23の北西20ｍにある。ともに東西主軸をとり，重複している。北側にSD-28，建物中央部に２軒の竪穴住居跡（SI-122・123）が絡み，さらに後世の攪乱も加わって複雑に重複している。柱の配置・覆土の状態から東側の桁行４間の建物をSX-24，西

側の３間×２間の建物をSX-25として組んだが，SX-24の中央に北側に伸びる柱穴があり，これを東側柱とすればSX-24は２間×２間の建物となる。後者によると，東側に同軸の建物がもう一棟あると想定される。いずれにしても，SX-24は奈良時代前半のSI-122を切って建てられ，SX-25との切り合いではSX-24が新しいことが確認できる。

SX-25はSX-24と主軸をほぼ同じくして建てられており，SI-123を切っている。柱間は1.7ｍで均等に配置されているが，南東隅柱はSX-24に切られ，南列の東よりの柱穴は攪乱によって失われている。SI-123の須恵器の甕口縁は奈良時代末から平安時代にかけての製品とみられるので（前節２項），SX-24・25はこれ以降の建物と推定される。

SX-26（第290図，図版93）

台地西部の東寄りに位置する３間×２間の掘立柱建物跡である。SX-22の北東８ｍにある。柱穴と重複する遺構はなく，遺存は良い。ほとんどの柱穴は検出面から60㎝ほどの深さがあり，南列では柱痕が確認されている。とくに梁中央の柱では，版築状の堅緻な根固めが見られる。北西隅と隣接する２穴にはテラス状の掘込みが付随し，柱の抜取りが行われた可能性がある。柱間は桁行1.7ｍ，梁行1.8ｍでほぼ均等に配置されている。

遺物は，西列の柱穴から出土した手持ちヘラケズリ調整の須恵器坏底部（第294図-17）と，周辺の落込み等から出土した回転ヘラケズリ調整のロクロ土師器坏底部（18）・土師器甕（19・20）を図示した。これに対し図示不可能な細片の主体は千葉産須恵器片であり，ロクロ土師器の坏や皿を含む。平安時代の比較的古相を示す土器群ととらえられる。

SX-27（第293図，図版93）

台地西部，SX-26の西15ｍに位置する３間×２間の掘立柱建物跡である。南北主軸をとる。重複するSD-27・29の掘削時に削平を受けたとみられ，とくに南側の柱穴は浅い。遺存の良い北列で深さ50㎝～60㎝，南列では20㎝～35㎝である。柱間は1.8ｍ（６尺）等間で整然と配置されている。

柱穴内から出土した坏３点と甕底部１点の合計４点の土師器を図化した（第294図-21～24）。坏のうち１点は内外面を赤彩した丸底のもの（21），１点には内面の底に漆の付着が認められる（24）。奈良時代の古相を示す遺物が含まれることから，これが建物の上限を示しているといえよう。

SX-28（第293図，図版93）

台地西部，SX-27の北側に隣接する２間×２間の掘立柱建物跡である。北東隅柱は平安時代前半のSI-134を切って掘り込まれ，南列はSD-29や攪乱（ブロック塀の基礎）による削平を受けている。柱穴の深さは最も遺存の良い北西隅で検出面から50㎝，重複のない東西列の中央で45㎝前後である。柱を抜取った形跡はなく，北西隅柱の土層断面には柱痕が認められる。

図化できるものはなかったが，柱穴内から出土した土器片には，底部手持ちヘラケズリ調整の茨城県産須恵器坏片と千葉産須恵器甕片があり，奈良時代末から平安時代にかけての所産と考える。

SX-29（図版93）

台地西部の北西寄り，SX-25の南４ｍに位置する３穴（４穴）の柱列である。北側の２穴との間に攪乱があり，１穴が失われているとみられる。掘りかたの形状・径はほぼ等しく，南端の柱穴では柱痕も確認されたため，掘立柱建物の一部と判断した。柱間は1.8ｍ（６尺）等間である。遺構の西側は地形自体が大きく整形されて，該期の遺構が存在しないため西側の柱穴はすべて削平されたものと考えられる。

これに伴う遺物は出土していない。

SX-30（第288図，図版93）

台地西部の中央，SI-128と重複する掘立柱建物跡である。SI-128の南縁に切られており，北列中央の柱穴はSI-128の床下から検出された。北側に伸びる形跡はなく２間×２間の建物とみられる。西列北側の２穴を除いて掘りかた底面に柱根の当たりが確認されている。北西の隅柱は西側に隣接するSX-32の南東隅柱と同じ位置にあり，柱掘りかたの土層ではSX-30の方が後から掘込まれたことがうかがえる。柱間は梁行が1.7ｍの等間隔であるのに対し，桁行は南側が1.7ｍ，北側が2.1ｍとなっている。西列には北西隅柱の掘りかたに切られた柱穴があり，ちょうど中央から1.7ｍの位置にあることからSX-32の柱穴を再利用するために設計を変更した可能性がある。

柱穴群からは土器片が少量出土している。その中から底部手持ちヘラケズリ調整の須恵器坏（第294図-25）を図示した。胎土に雲母を含む茨城県産須恵器とみられ，奈良時代末から平安時代にかけての所産とみられる。

SX-31（第292図，図版93）

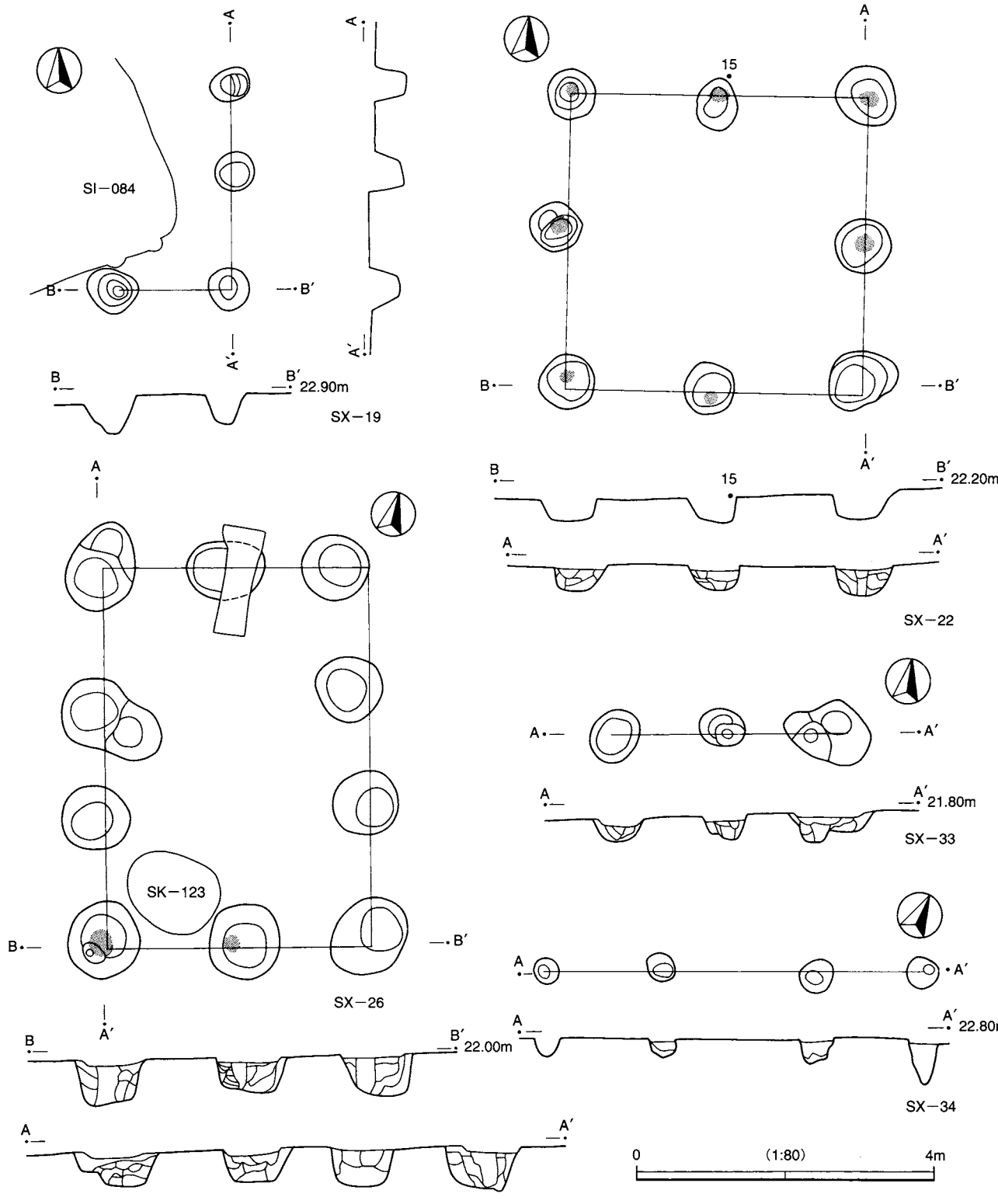
台地西部に位置する３間×２間の掘立柱建物跡である。SX-30の南側2.5ｍに主軸をほぼ同じくしている。SD-29と平安時代のSI-134に切られる。南西隅柱はSI-134の構築によって上半が失われ，SI-134の床下から検出された。柱穴は検出面から50㎝～55㎝の深さがあり，西列の３か所で柱痕が確認されている。柱間は1.8ｍ（６尺）等間である。なお，南東隅柱の東に隣接する小ピットは，形状・深さとも本跡との柱穴と同様であるが，本跡の関係は明らかではない。

北東隅柱内から出土した灰白色の須恵器坏底部（第294図-26）を図化したが，時期の判定には不充分な資料である。ほかに，千葉産須恵器としては還元度の強いタタキの甕片や坏片がある。本跡を切るSI-134は平安時代でも比較的新相の土器群をもつから，少なくともそれ以前に遡るといえる。

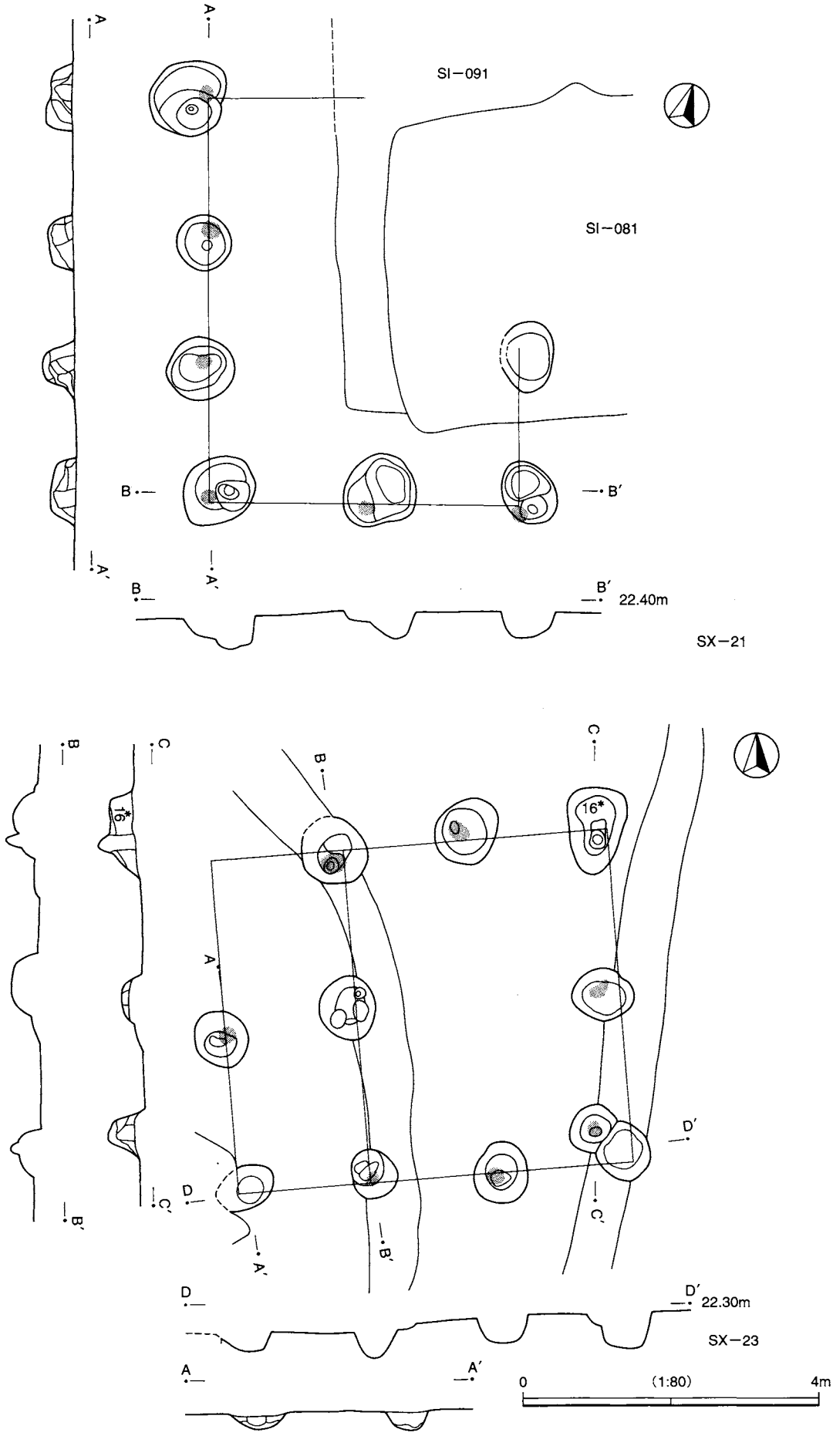
SX-32（第288図，図版93）

台地西部に位置する２間×２間の庇付建物跡である。SX-30の北西に隣接する。庇と推定される柱列は北面にあり，北列から70㎝の位置に近接して並んでいる。SX-30に比べ柱穴の掘込みが深く，SX-30が30㎝前後であるのに対し，SX-32では庇部も含めて50㎝前後のものが大半を占める。掘りかた覆土には柱痕とみられる腐植土層が何か所か確認されており，柱の抜取りが行われた形跡はない。

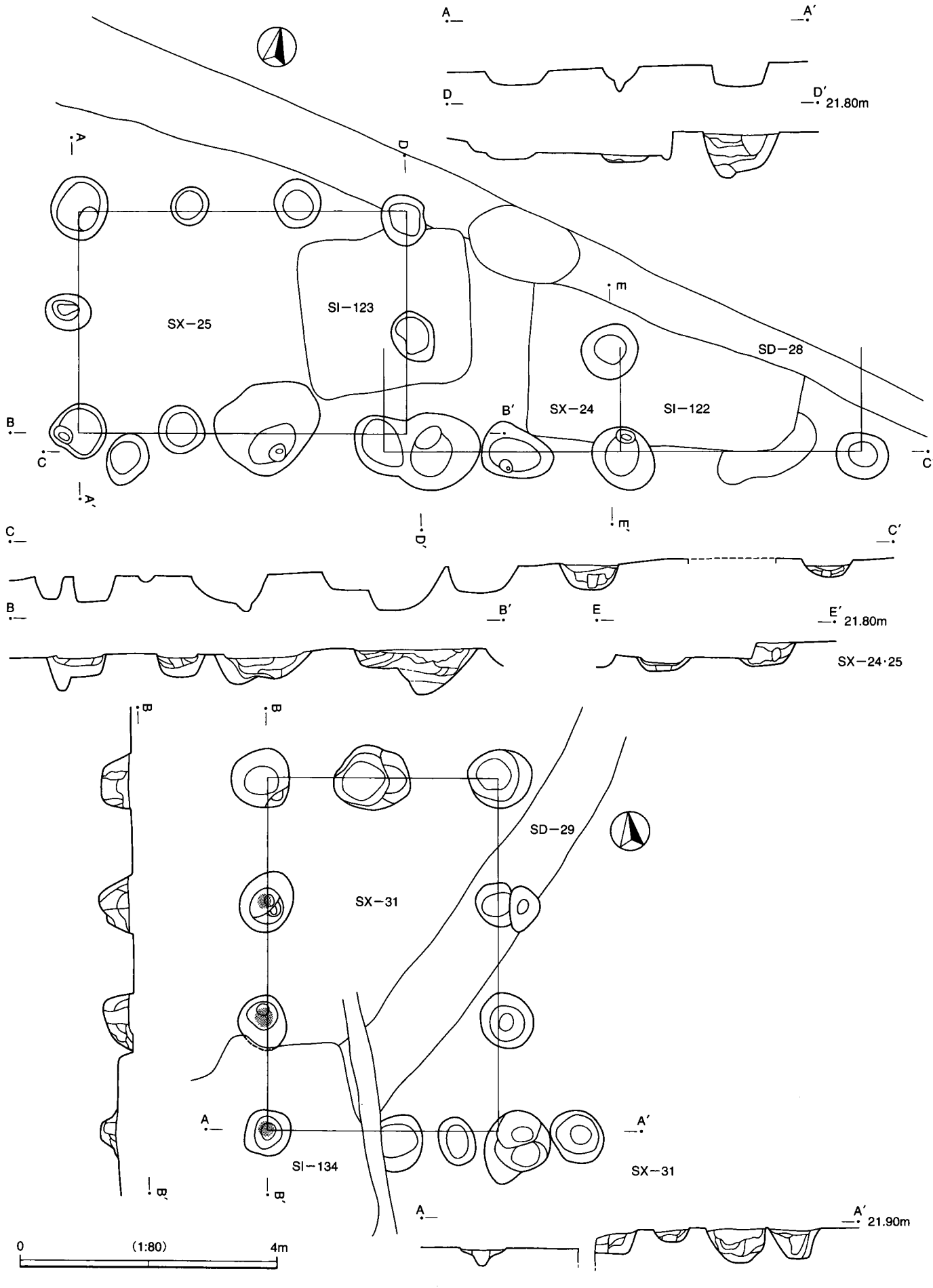
図示した遺物は，北列中央と庇前面の小ピットから出土した。須恵器甕片（第294図-27）は千葉産特有の焼成である。須恵器甕底部片（28）は灰色をしている。ほかに，千葉産須恵器片を主体とする細片が多く，茨城県産須恵器片も若干みられる。奈良時代末から平安時代にかけての所産と考える。上記の様に



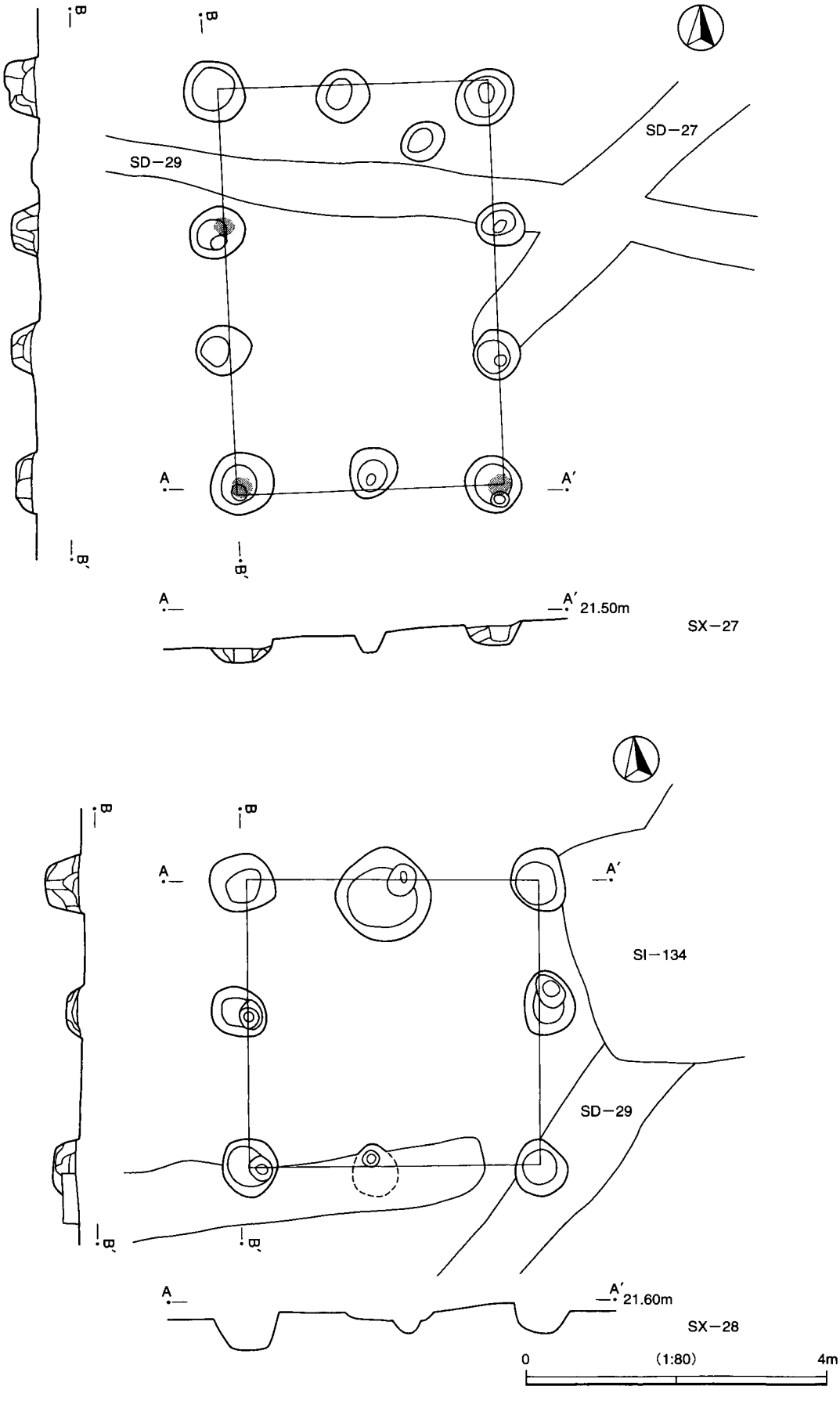
第290図　SX-19・22・26・33・34



第291図　SX-21・23



第292図　SX-24・25・31



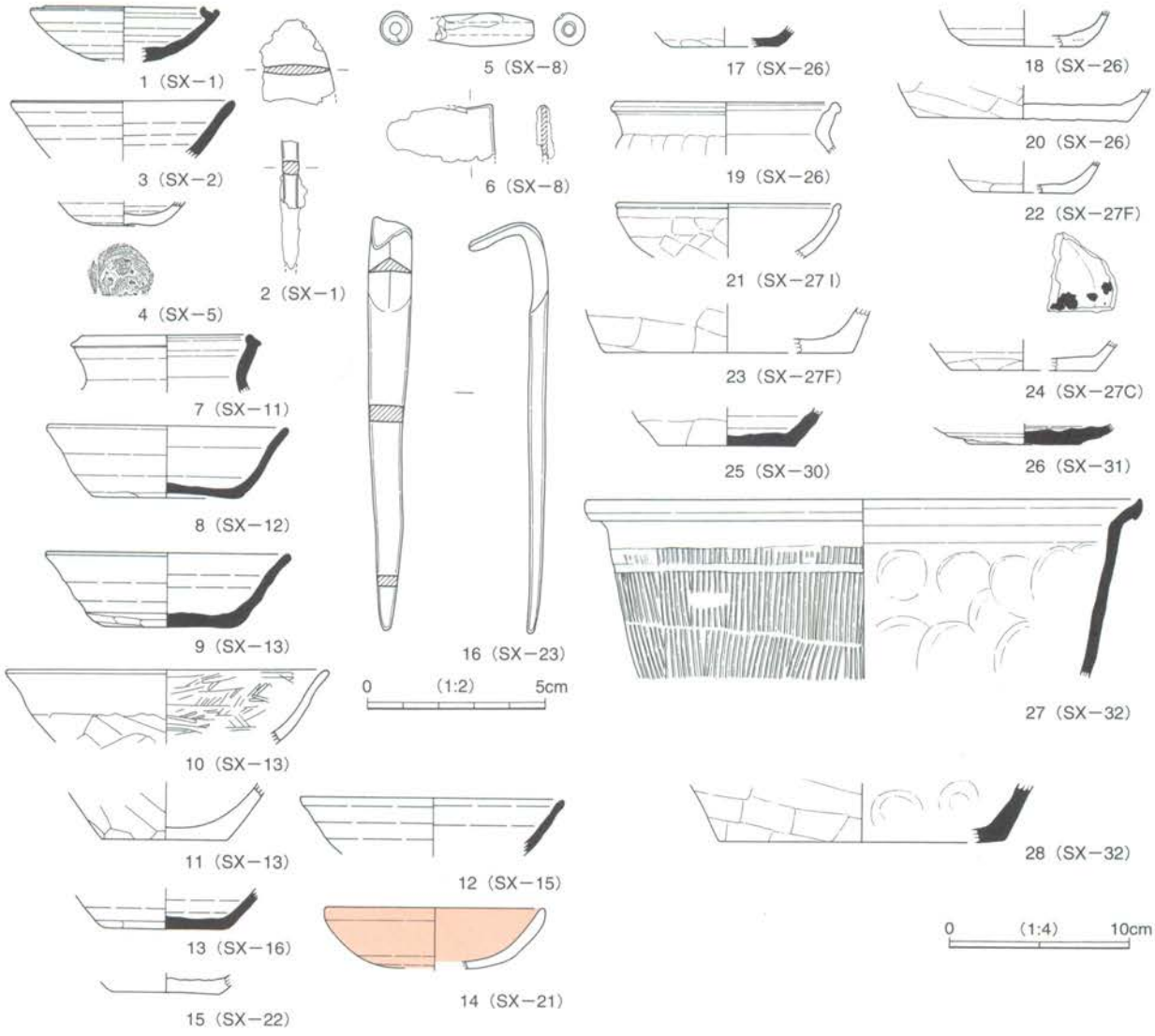
第293図　SX-27・28

SX-30より先行して建てられていたと考えられるが，出土土器を検討する限り造営時期があまり遡ることはない。

SX-33（第290図，図版93）

台地西部の北寄り，SX-32の北10ｍに位置する３穴の柱列である。土層に柱痕が確認されており，掘立柱建物の一部をなすものと推定した。南側一帯は大きく削平を受けていることがSI-125・130の遺存状況からうかがえ，これらの柱列に組合う柱穴も失われたものと考えられる。梁行２間の建物であった可能性がある。西端を除いて後から掘込まれた柱穴状の小ピットが重複している。柱間は1.5ｍである。

これに伴う遺物は出土していない。



第294図　掘立柱建物跡（SX）出土遺物

SX-34（第290図）

台地東部の西寄りに位置する４穴の柱列である。径33㎝～47㎝，深さ23㎝～60㎝の比較的小型のピットからなり，柱間隔も少しばらつきある。本来は北に隣接するSI-039およびSI-071と切り合っていたが，浅い穴のため検出が困難であったと思われる。覆土はいずれも黒色でよく締まっており，下層にややローム粒が多い傾向が見られた。

これに伴う遺物は出土していない。

第３節　土坑（壙）と遺物

土坑は竪穴住居跡の密集地区にほぼ対応するように分布する。これは，各期の集落に付随する施設であることの結果と考えてよい。ただし，報告する遺構の中には，掘立柱建物であったが，組になる他の柱穴が検出されなかった場合の柱穴を含んでいる可能性がある。

土坑には，径が２m以上の大型，１m～２mの中型，１m未満の小型がある。大型は方形の竪穴に近い形状をもつ。中型は円形のものと，方形・長方形を基調とし入念に埋戻された土壙とみてよいものがある。小型の土坑は円形を基調とし，断面観察等から柱穴と判断されるものを含む。そこで，１．大型の土坑，２．中型の円形土坑，３．中型の方形土坑，４．小型の土坑の４つに分けて順に記載していく。

以下に報告する土坑はいずれも内部より遺物を出土したもので，そのほとんどが奈良時代・平安時代に属すと考えられる。他時期の遺物も若干みられるが，土坑の形態に特徴がなく，積極的に該期の土坑と分離できないのでここで一括して掲載している。そのほか，形態上特段の特徴がなく，出土遺物がない土坑については，このような状況から察して該期の所産を含んでいる可能性は高いが，個別に時期を特定するのは不可能であり，土坑群の分布と各グリッド出土遺物を対照しながら，別章で報告することにした（第７章第２節）。また，土坑の形態・規模等については，附表３にまとめた。

なお本節では，台地東部，台地南部，および調査区南西隅・北西隅の４か所にある土坑群のうち，台地南部の土坑群は，良好な遺物を出土しているので比較的多く掲載している。台地東部の土坑群についても，細片ながら遺物を出土しているので比較的多く取り上げている。

１．大型の土坑

SK-3A・B（第295図）

台地南部の北寄りに位置する長方形の土坑（A）と隅丸方形の土坑（B）である。ともに竪穴状遺構とも呼びうる規模と形状をもつ。AがBを切る。Aは長さ約2.5m，幅約1.6m，深さ約40㎝であり，中央やや南寄りに深さ35㎝の小ピットがあるが本跡に付属するという確証は得られていない。Bは長さ約2.8m，幅約2.5m，深さ約30㎝であり，内部に径10㎝～20㎝の小ピットが検出されている。両者の床はほぼ同じ高さに検出され，平らであり，ともに少し硬化している。カマドや炉はもたないが，両者は竪穴住居跡と似た用途のために相次いで営まれた可能性がある。Aの覆土には多量のロームブロックが含まれ，一度に埋戻されたことがわかる。Bの覆土はローム粒や黒色土粒が混じっており，埋戻された可能性が高い。

遺物は少なく，平安時代ころとみられる土師器・須恵器甕の細片が若干出土したに過ぎなかった。

SK-4（第295図，図版74）

台地南部の南端，南斜面に面した台地肩部に位置する不整隅丸方形の土坑，または竪穴状遺構である。一辺約2.2m，深さ約30cmであり，東辺では床面に厚さ約10cm程度の焼土が検出された。床はやや丸底気味であり，中央付近に深さ約50cmの小ピットをもつ。覆土はロームの含有度から3層～4層に分けられ，埋戻された状態を示す。小ピットは最下層の覆土に覆われていたため，本跡に伴うとみてよい。

遺物は少ないが，奈良～平安時代にかけての須恵器坏・壺細片が出土した。

2．中型の円形土坑

SK-13（遺構第295図・図版74，遺物第299・300図・図版132）

台地南部の西寄り，SD-2とSD-4が交差する付近に位置する。平安時代のSI-016の東隣にあたり，ほぼ同時期に営まれた土壙と考える。平面形態は円形で，径は1.1m前後，深さは検出面から約30cmである。底面はやや凹凸があるものの平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。ローム粒を多量に含む黒色土と褐色土が底面から交互に堆積し，中層からほぼ完形の土師器坏2点，上層から鉄製品が出土しており，意図的な埋設が行われたことを示す。これらの特徴は，南部土坑群と同じ内容をもつが，分布は少し離れている。

ロクロ土師器坏（1）は底部が回転糸切り無調整のもので，平安時代でも比較的新相を示す。鎹とみられる鉄製品（33）が出土している。

SK-14（遺構第295図・図版74，遺物第299図・図版132）

台地南部中央付近に，中型の土坑10数基から構成される南部土坑群（SK-14・16～18・20・24～28等）のうち，もっとも時期決定資料に恵まれたのが本跡である。古墳時代後期後半のSI-013の覆土を切って作られた，平安時代の土壙と考える。ほぼ円形で，径は1.5m前後，深さ60cm前後である。皿状の底部をもち，壁はやや傾斜をもって立ち上がる。3層の覆土のうち最上層には砂質粘土粒と少量の焼土粒が含まれている。坏（3）が完形の状態で出土し，なおかつ支脚片等も出土しているので，カマドを破壊した際の砂や遺物が本跡に投入されている可能性がある。直接重複してはいないが，SI-013のカマドの砂である可能性が考えられる。下層はローム粒を含み，埋土と考えてよい。

須恵器高台付壺底部片（4）は黄味灰褐色の精良品で，破片の内面（上面）を硯に転用している。硬質の須恵器で格子タタキをもつ11cm大の甕胴部片（5）も，内面に平滑な面があり，やや黒ずんで見えることから転用硯と考える。ロクロ土師器坏（2・3）の底部は回転糸切り無調整であるが，4は縁辺外壁面のみ回転ヘラケズリにより形を整えている。淡褐色であり，黒斑を有する。図示しなかった土師器細片には足高高台付坏や内黒椀があり，厚手で硬質の須恵器甕片には口縁部にヘラ描波状文をもつ陶質の甕片も含む。遺物は平安時代でも新相を示す。

SK-16（第295図）

南部土坑群中の一つである。径約1.1m，深さ約70cmである。不整円形の上部に対し，底は円形でほぼ平坦である。覆土は2cm大のロームブロックを含む暗褐色土で占められており，一度に埋戻された可能性がある。

遺物は少なく，千葉産須恵器の甕片等が主体である。

SK-17（第295図）

南部土坑群中の一つである。径約1.0ｍ，深さ約50㎝の円形をなすが，浅い土坑Ａをもう一つの深い土坑Ｂが切っているという，重複した２基の土坑からなる。底は平らではないが，Ａは他の南部土坑群と同じく平らに構築されていた可能性がある。Ａの覆土はロームの含有度で３層に分けられ，埋戻された状態を示す。これを切っているＢの覆土はローム粒が少なく，自然埋没の可能性がある。

遺物は極めて少なく，千葉産須恵器片が若干含まれていた。

SK-18（遺構第295図，遺物第299図・図版132）

南部土坑群中の一つである。平面形態はほぼ円形を呈し，径は約1.1ｍ，深さは最大16㎝の浅い土坑である。床はほぼ平坦である。ローム粒をやや多く含む暗褐色土という覆土には，埋没過程を判断できる材料はない。

1/2ほど遺存するロクロ土師器坏（８）は，赤褐色を発し，静止糸切り無調整の底部である。平安時代としても新相を示す。

SK-19（第296図）

台地南部西寄りに位置し，重複する２基の土坑である。上部をSD-4に切られているとみられる。長さは約2.7ｍ，幅は約1.8ｍの不整楕円形で，すぐ北隣にも径約0.9ｍ，深さ50㎝の小型土坑がある。深い土坑Ａは浅めの土坑Ｂを切っている。

遺物は少なく，古墳時代後期の甕片等がみられる。

SK-20（遺構第296図・図版74，遺物第299・300図・図版132）

南部土坑群中の一つで，奈良時代のSI-017の南に隣接する。平安時代の土壙と考える。平面形態は円形で，径は約1.5ｍ，深さは1.1ｍである。底面はやや凹凸があるものの，壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は９層に分層できる。上部の１～４層には焼土をまばらに含み，５層以下はハードロームを多く含むなど，人為的に埋戻されたと考えられる。図示した遺物は，４層を中心に検出した。

ロクロ土師器皿（９）は赤褐色を発し，回転糸切り無調整の底部をもつ。一部煤が付着したか所があり，灯明皿に使われた可能性がある。図示したロクロ土師器坏口縁部片（10）のほか，細片にも底部回転糸切り無調整の土師器坏や，足高の椀の高台，内黒坏などの椀坏類が多数みられるとともに，陶質の甕などもみられ，平安時代の新相を示す。

ほかに，粘板岩製とみられる垂飾（36）が出土した。両側面には整形時の研磨痕が残る。下半分は欠損している。

SK-24（遺構第296図）

南部土坑群中の一つである。径約1.1ｍ，深さ約30㎝の円形土坑である。北側でSK-25と切り合っている。

遺物は細片が比較的多く出土し，回転糸切り無調整の土師器坏底片等がみられ，平安時代の比較的新相を示す。

SK-28（遺構第296図・図版75，遺物第299・300図・図版132）

南部土坑群中の一つで，群中では最も北寄りに位置する。平安時代の土壙と考える。奈良時代のSI-033の西に隣接する。平面形態は円形で，径は1.5m前後，深さは約60cmである。底部は皿状である。8層からなる覆土のうち上の6層まではローム粒を含む暗褐色～褐色土で，下の2層はローム粒と炭化物粒を含む黒褐色土であり，埋戻された可能性が高い。図示した遺物のうち下層から鉄鏃が，上層から土器が出土した。

鉄鏃（37）は両丸造りで，浅い逆刺をもつ三角形鏃身を有し，比較的太く長い棒状部（頸部）がつく。ロクロ土師器坏（11）は黄橙色を発し，回転糸切り無調整の底部をもつ。ロクロ土師器椀（12）は暗褐色を発する。ほかには内黒を含むロクロ土師器坏片が中心で，灰釉とみられる陶質の壺，軽石などが出土した。平安時代でも新相を示す。

SK-36（遺構第296図・図版75，遺物第299図）

台地南部南寄り，古墳時代後期後半のSI-023の東側に位置し，出土遺物からそれとほぼ同時期に営まれたとみられる土坑である。平面形態は楕円形を呈し，長軸で約1.1m，幅約0.9m，深さ約70cmである。底部は東側がやや深い。奈良・平安時代の土坑と区別できる形態上の特質はなく，同時期の土坑がほかにみいだせないため，ここにまとめて報告することとした。

覆土から須恵器片が2点検出された。須恵器坏蓋（13）は灰色によく還元された焼成で，外面は薄い自然釉により黒光りしている。須恵器坏身（14）も灰色によく還元された焼成である。いずれも小片であるが径10cm前後の小型品に復原でき，古墳時代後期後半の所産とみてよい。甕細片についても矛盾はない。

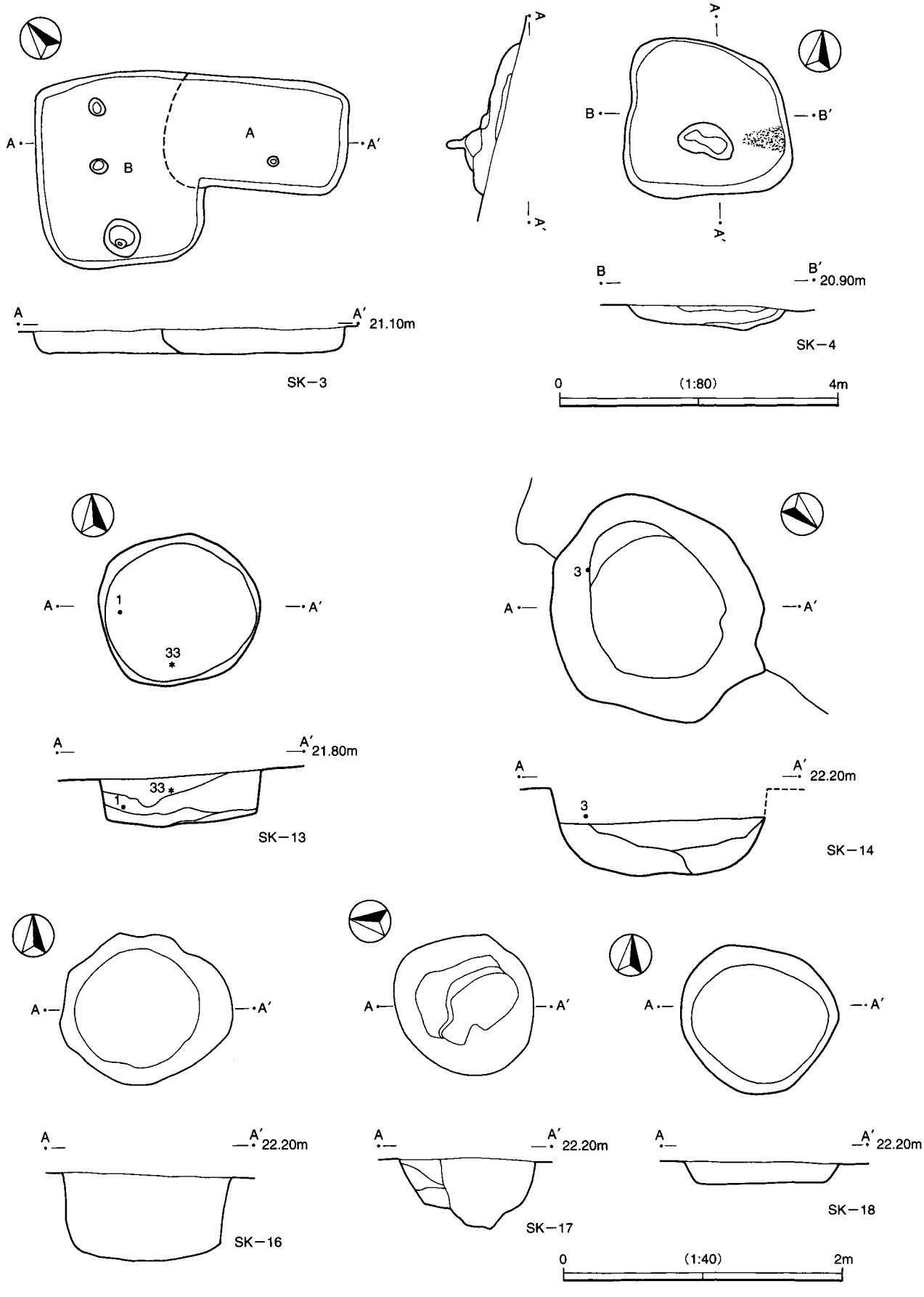
SK-55（遺構第296図，遺物第299図）

台地東部やや北東寄りには，SD-6とSD-9の間を中心に総数39基にも及ぶ土坑群（SK-50・56～60・62～95）がある。本跡はその中の一つであるが，径1.5m以上の円ないし楕円形で，群中では大きい部類に入る。SI-051の東に隣接し，SD-6との間に掘られている。底はやや丸底気味である。覆土最上層は焼土粒と炭化粒を含み，斜めに切れ込む層によって攪乱されている。上から2・3層はローム粒の含有度によって分けられ，しまりはないが埋戻された可能性がある。最下層は黒色土である。

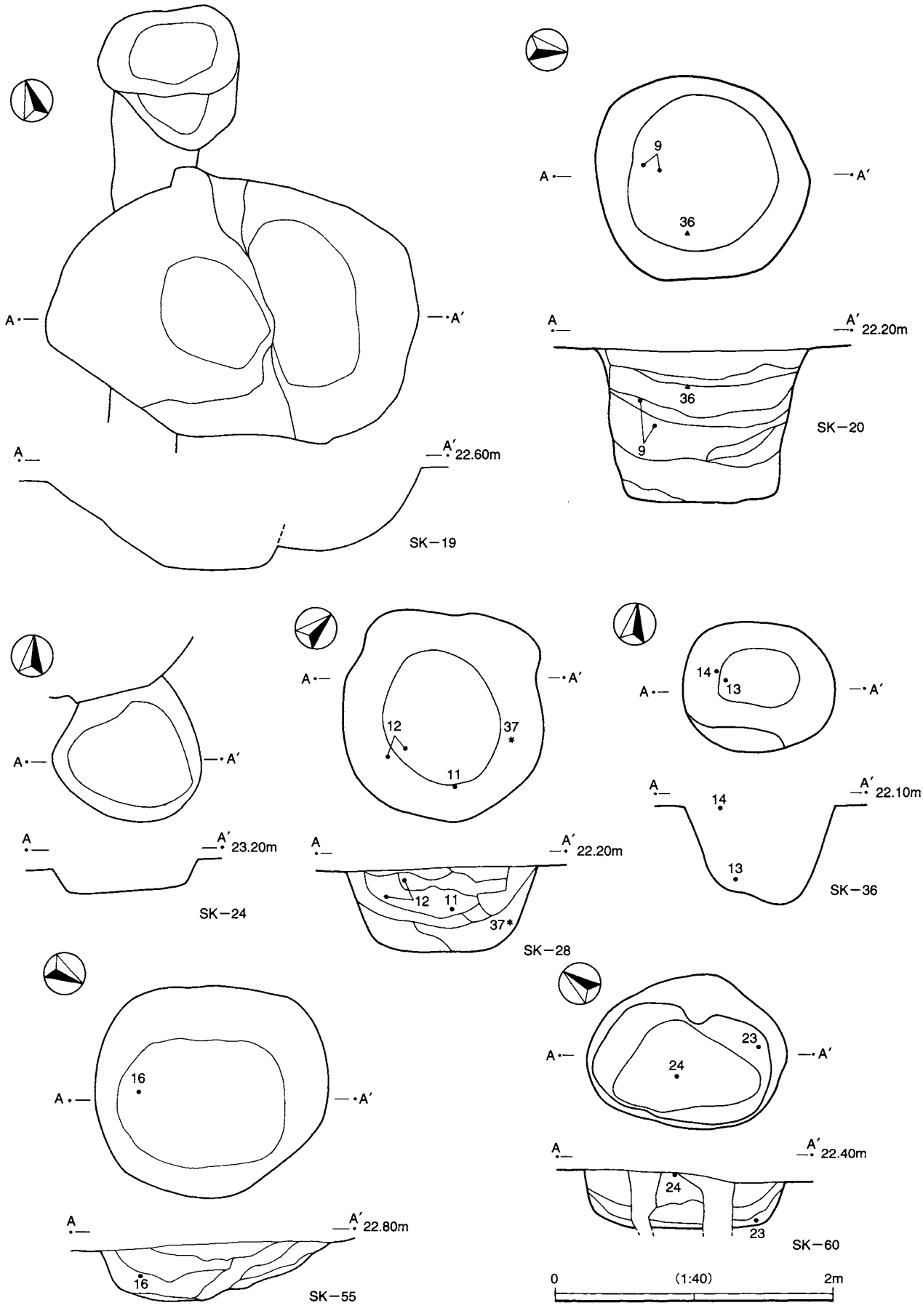
転用硯（16）は上から3層目で検出された。灰色に還元焼成された須恵器甕胴部の10.5cm×8.5cm大の破片を使用し，表側はタタキの後ヘラケズリ調整，内面には当て具痕跡を残すが，内面が二次的な擦れによりかなり平滑になっており，当て具痕内は周囲に比べてやや黒い。図の左上辺と右下辺の破断面は内面とは異なる粗い研磨を受けている。細片には底部を手持ちヘラケズリ調整した須恵器坏片や甕片などがある。

SK-60（遺構第296図・図版76，遺物第299図）

台地東部土坑群中の一つである。1.45m×1.10mの不整円形ないし楕円形であり，深さは約40cm，底



第295図　SK-3・4・13・14・16・17・18



第296図　SK-19・20・24・28・36・55・60

部は皿状である。覆土は３層に分けられ，２つの黒褐色土層の上にローム細粒を含む暗褐色土層が堆積する過程は，自然埋没とみるべきであろう。

下層から出土したロクロ土師器坏口縁部片（23）は椀形に近く，下部が手持ちヘラケズリ調整されている。細片にも同様の特徴がみられる。上層から出土したロクロ土師器坏底部片（24）は，底部外面が回転糸切り無調整，内面が黒色処理されているとみられ，外面に肉眼でもどうにか確認できる程度の墨書が遺存する。字は確定できないが，あえて候補をあげるなら，「万扁（遍）」などが考えられる。転用硯とみられる陶質の破片（25）は，薄く釉の掛かった滑らかな外面をもち，当て具痕を内面にもつ甕の肩部が使用されている。12㎝×11㎝大の破片には一部に整形痕がみられ，内面には幅１㎜前後を基調とする磨り痕が３か所認められ，わずかに黒い部位もみられるが使用度は低い。いずれも平安時代の所産とみてよく，比較的新相を示す土器群と考える。

３．中型の方形土坑

SK-15（遺構第297図・図版74，遺物第299・300図）

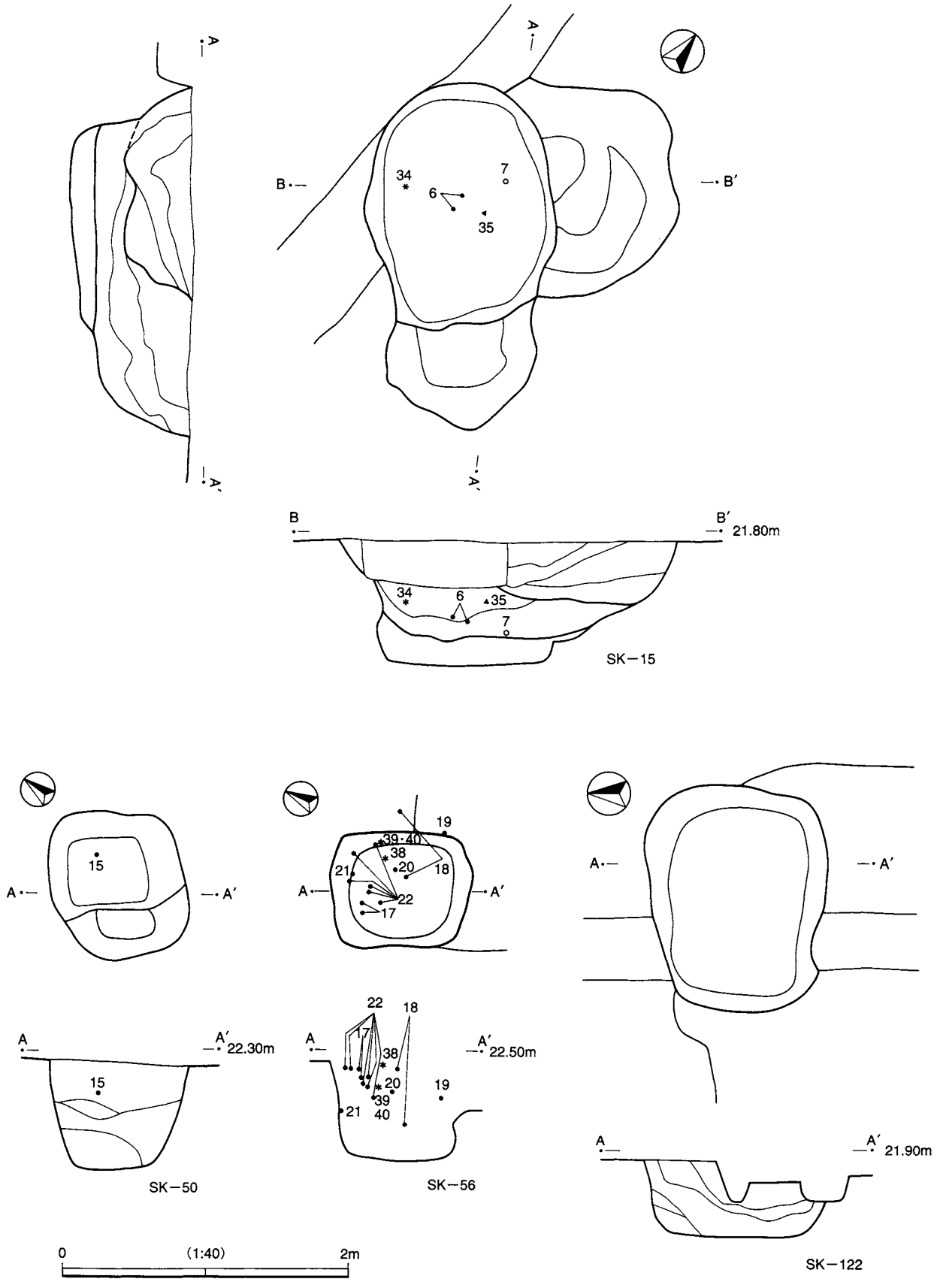
台地南部のやや東寄りに位置する土坑である。SD-14が切る。北に隣接する平安時代のSI-011とほぼ同時期に営まれたもので，南部土坑群中に含まれるが，形態から３基の土坑からなるとされており，最後の土坑は他に比べ少し時期が下る可能性がある。ただし，土層図では必ずしも切り合いが明確でなく，単独の土坑（有天井土壙）である可能性も残る。仮に３基からなるとして説明すると，最も深いＡは約1.6ｍ×1.3ｍの長方形で，そのすぐ上に営まれたＢとともに主軸を北西方向にとる。Ａはハードローム主体の土で人為的に埋められている。Ｂの覆土には，焼土粒と少量の砂質粘土が含まれており，図化した遺物もすべてそこから検出された。最上部のＣはＢが埋まった後に設けられており，ハードローム粒を含むその覆土はしまりに欠ける。

図示した遺物はすべてSK-15Bに帰属する。ロクロ土師器坏片（６）は椀に近い形態であり，底部を手持ちヘラケズリ調整している。布目瓦（７），鉄製刀子身（34），砂岩製砥石（35）はいずれも破片である。図示しなかった土師器片は多数に及び，坏底部片はすべて回転糸切り無調整であった。内黒椀片１点も含まれる。甕片は厚手のものが多い。ほかに灰釉陶器壺とみられる８㎝大の胴部破片や，陶質の甕片などがある。遺物は平安時代の比較的新相を示すものが多いが，遺構の重複に伴い若干の時期差を含んでいる可能性がある。

SK-50（遺構第297図，遺物第299図・図版132）

台地東部やや北東寄りには，SD-6とSD-9の間を中心に総数39基にも及ぶ東部土坑群（SK-50・56～60・62～95）がある。本跡はその中の一つである。古墳時代後期後半のSI-045北西隅を切っている。約1.0ｍ×0.7ｍの隅丸長方形で，底部も長方形，南西側に20㎝程度高い段状部分が付いているが，有天井土壙にしては小さ過ぎる。壁は直線的に立ち上がる。覆土下半分にはローム粒が多く，上半分には砂質粘土を多く含む。最上層中から完形の坏１点を正位で検出した。

ロクロ土師器皿（15）は明褐色を発し，底部を回転糸切りで切り離し，その際にはみ出た底部中央の粘土と，縁辺外壁面だけを，粗い手持ちヘラケズリによって形を整えている。平安時代でも新相を示す。細片には，甕片多数の中に底部手持ちヘラケズリ調整の坏などが混じる。



第297図　SK-15・50・56・122

SK-56（遺構第297図，遺物第299・300図・図版132）

東部土坑群中の一つである。古墳時代後期後半のSI-050B北西隅を切って設けられている。約1.0m×0.8mの隅丸長方形で，底部も隅丸長方形を呈し，ほぼ垂直に掘り込まれている。遺構確認面を中心に遺物がまとまって検出された。

須恵器坏（17）は千葉地域独特の焼成により赤褐色を発する。須恵器皿（18）は外面こそ灰色だが内面は橙色である。両者ともに底部は手持ちヘラケズリ調整がなされる。須恵器壺口縁部片（21）は灰色によく還元焼成され，深緑色の自然釉が掛かる優品である。須恵器甕（22）は暗褐色を発する。箱形のロクロ土師器坏底部片（19）は回転糸切りの後，回転ヘラケズリ調整しているが，底部中央部を削り残している。甕底部片（20）は底面が粗く削られていて平滑になっていない。ほかに，鉄鏃ないし工具とみられる鉄製品（38），鉤状部を有する用途不明鉄製品（39・40）がある。平安時代の古相を示す。

SK-122（遺構第297図・図版79，遺物第299図）

台地西部に位置する平安時代の土坑である。平安時代のSI-128によって切られ，南側上半を失う。約1.6m×1.2mの長方形をなし，深さは約50cmである。底面は隅丸長方形で，ほぼ垂直に立ちあがる。覆土はロームブロックを多量に含む土が北側から投入された状態で堆積している。

五孔の底をもつ須恵器甑片（28）は千葉地域独特の焼成により橙色を発する。ロクロ土師器坏片（29）は底部を回転ヘラケズリ調整している。細片も千葉産須恵器の甕や坏が中心で，わずかに常総型甕片が混じる。平安時代でも比較的古相を示す。

4．小型の土坑

SK-64（第298図）

東部土坑群の中でも，平安時代のSI-037の南側において，SD-6とSD-9の間に並んで存在するSK-64～68・84の一つである。径約0.6m，深さ約20cmの浅い円形土坑である。

土器はごくわずかながら千葉産須恵器を含む。

SK-67（第298図）

東部土坑群の中でも，平安時代のSI-037の南側において，SD-6とSD-9の間に並んで存在するSK-64～68・84の一つである。径約0.7m，深さ約20cmの浅い円形土坑である。底は平らではない。最上層はロームをほとんど含まず，下2層は比較的ローム粒を多く含む。

土器細片には奈良時代～平安時代にかけての極めて薄い土師器甕片を含む。

SK-68（第298図）

東部土坑群の中でも，平安時代のSI-037の南側において，SD-6とSD-9の間に並んで存在するSK-64～68・84の一つである。径約0.6m，深さ約30cmの浅い円形土坑である。底は平らではない。覆土中央に暗褐色土，その両側に黄褐色土が充填され，柱穴の特徴を有する。

土器細片には奈良時代ころとみられる須恵器坏片を含む。

SK-77（第298図）

東部土坑群中の一つである。SD-9とSD-10の間に位置する楕円形の土坑であり，東側は木根によって攪乱されている。長さ約0.9m，幅約0.6mであるが，断面観察によると土坑2基が重複している。深い土坑を浅い土坑が切っている。

土器細片には千葉産須恵器坏片を含む。

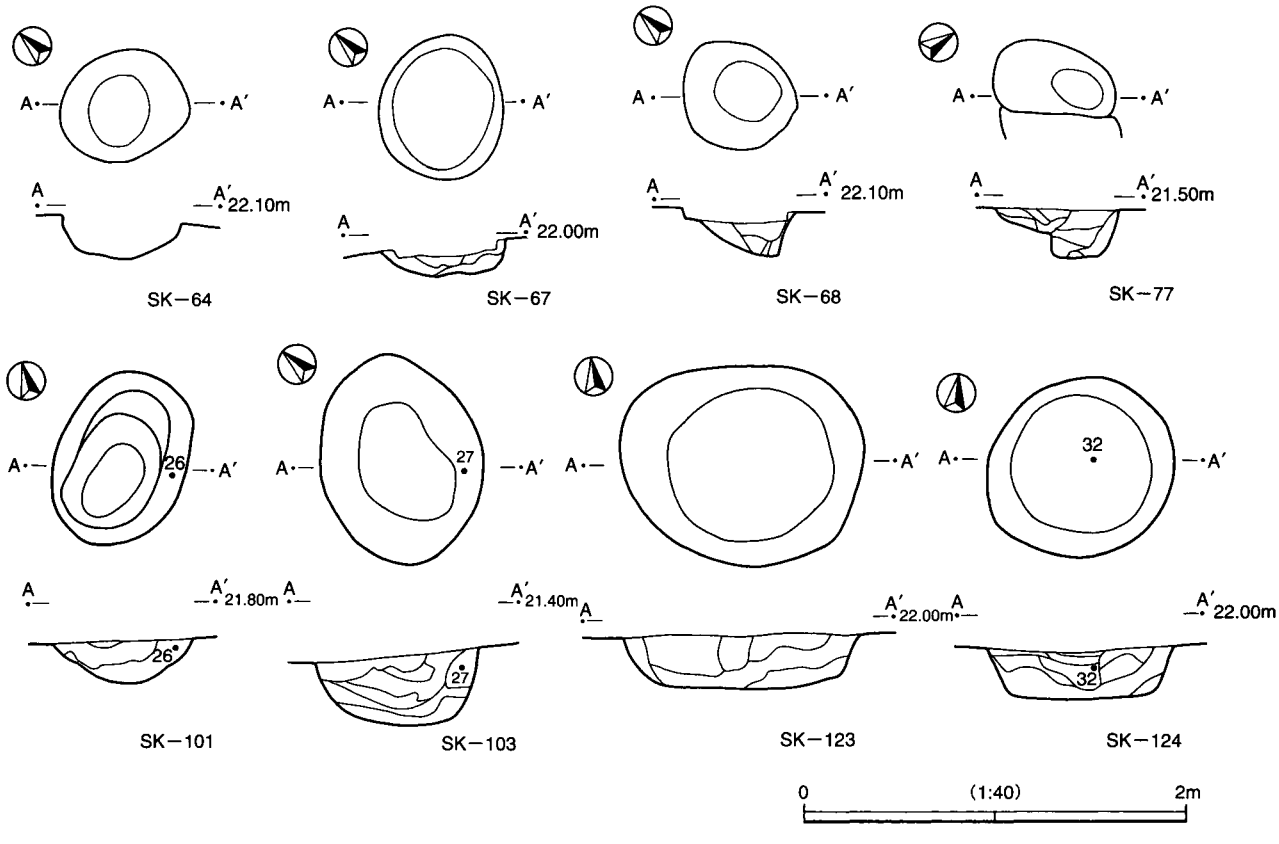
SK-101（遺構第298図・図版77，遺物第299図）

台地北部やや西寄り，奈良時代とみられる浅い柵列（土坑列）のSX-20と，SD-17に隣接する土坑である。約0.9m×0.7mの楕円形を呈し，深さは約20cm弱の浅い丸底の土坑である。SX-20の関連施設である可能性がある（第7章第1節2項）。

覆土中から須恵器坏（26）を検出した。千葉産須恵器特有の焼成により黄褐色を発する。底部を回転ヘラケズリした比較的箱形に近い坏であり，奈良時代の新相を示す。

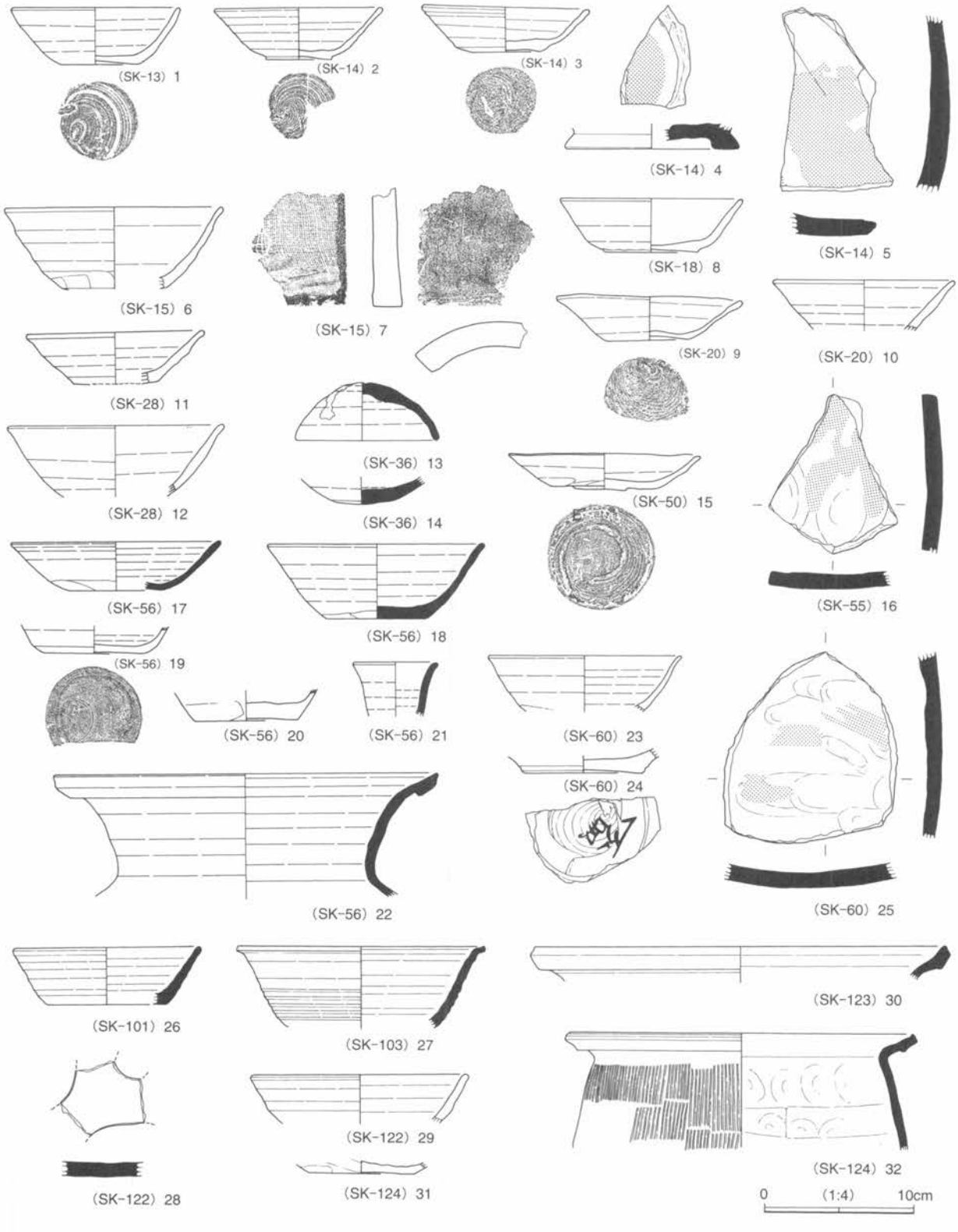
SK-103（遺構第298図・図版77，遺物第299図）

台地北部，SK-101の西約13mに位置する土坑である。約1.1m×0.9mのややいびつな楕円形を呈し，深さは約30cm，底部は皿状である。覆土は黒色土と，黄色土が互層をなし，埋戻しがなされているとみてよい。

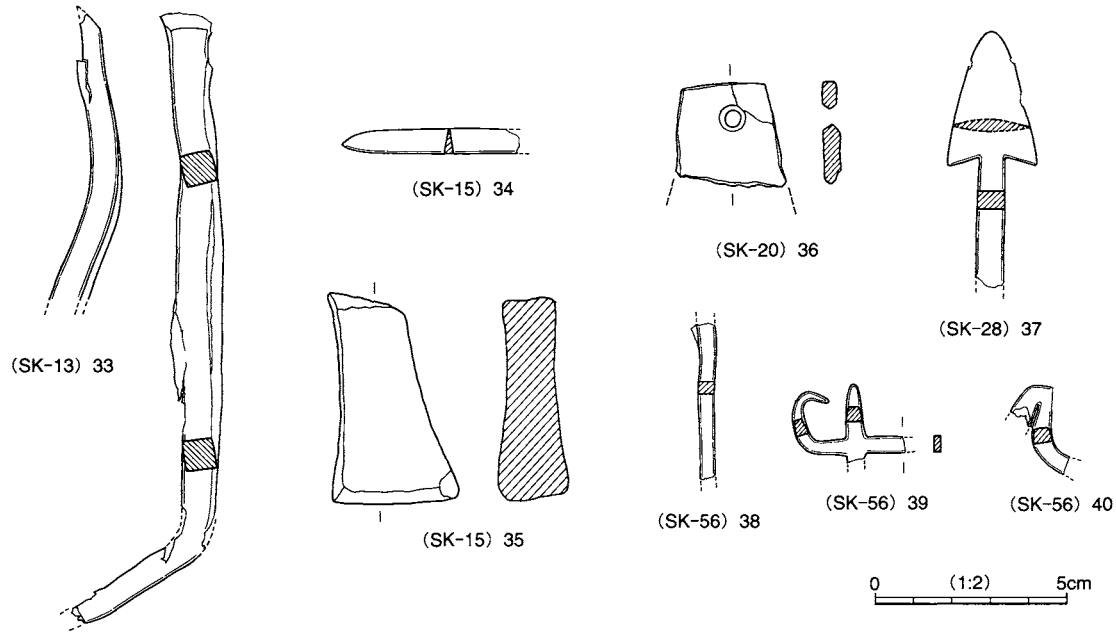


第298図　SK-64・67・68・77・101・103・123・124

覆土の上層から須恵器坏身片（27）が出土した。黄味灰褐色に還元焼成がなされた須恵器の優品で，口縁端部が強く外反する椀形に近い形態をとる。高台等の有無は確認できない。奈良時代の所産とみてよい。



第299図　土坑出土遺物（1）



第300図　土坑出土遺物（2）

SK-123（遺構第298図，遺物第299図）

台地西部のやや東寄り，奈良時代のSX-26の柱穴間に位置する土坑である。径約1.1ｍのほぼ円形を呈し，深さは約30㎝である。覆土は4層に分層できるが，壁際を除き，いずれも砂質粘土を大量に含む。人為的に埋められており，中心に砂を含まない層がみられるので，柱穴の可能性を示唆している。SX-26の柱穴覆土には山砂を含まないので，両者は別の遺構とみてよい。

覆土中から須恵器甕口縁部片（30）を検出した。千葉産須恵器特有の焼成で，褐色を発する。細片にも同様の焼成がみられる。奈良時代末から平安時代前半の所産である。

SK-124（遺構第298図・図版79，遺物第299図）

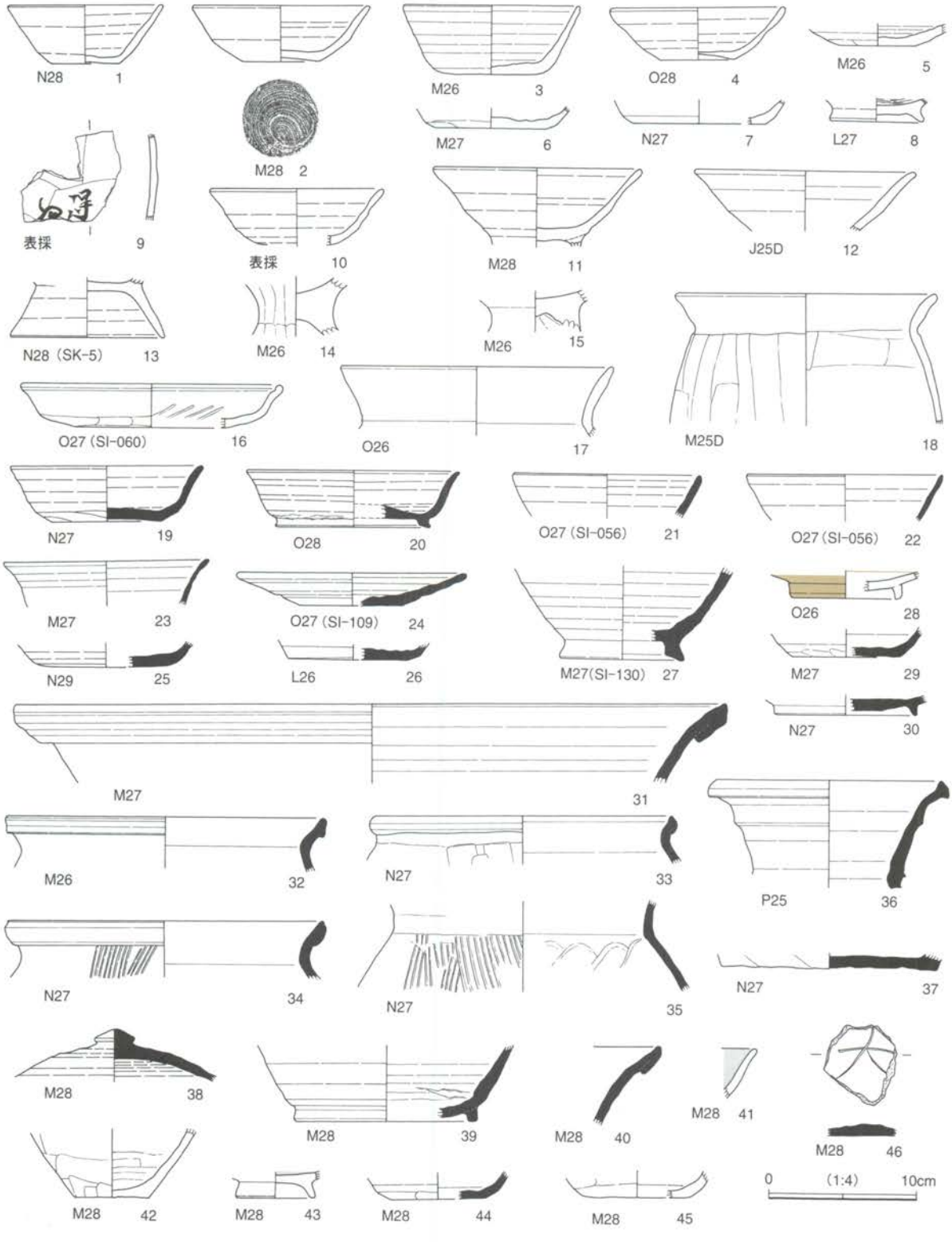
台地西部のやや北寄り，平安時代のSI-125の南側に隣接して位置する土坑である。径1.0ｍ～0.9ｍのほぼ円形を呈し，深さは26㎝である。土層は中心部と周辺部に分けられる。中央部には焼土や炭化材片を含む土が，周辺部はローム粒を多く含む埋土が検出され，柱穴様の堆積である。

覆土中央部分からロクロ土師器坏底部片（31）が出土した。橙色を発し，底部は手持ちヘラケズリ調整がされている。細片もロクロ土師器坏類が中心である。ほかに須恵器甕口縁部片（32）が出土した。千葉地域独特の焼成によりにぶい黄褐色を発する。平安時代の比較的古相を示す。

第4節　遺構外出土遺物（第301・302図，図版132）

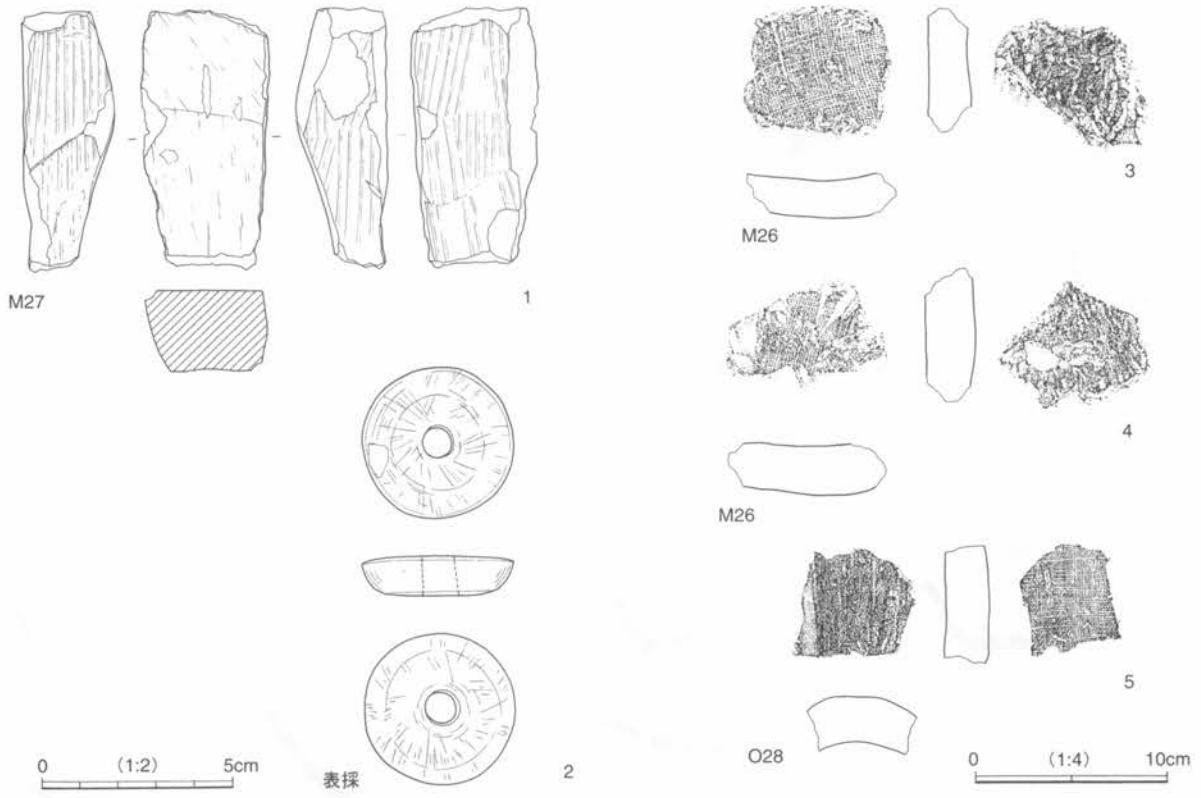
台地主要部に集落が全面展開するのに伴って，奈良時代・平安時代の遺物もほぼ全面に散布している。

土師器では，畿内から搬入されたとみられる暗文をもつ坏（16）が注目される。平城Ⅳ～Ⅴ期とみられ，併行関係を探る良い資料ではあるが，平安時代のSI-060から出土した極細片であることから，遺構に伴うものではないと判断する。そのほか，奈良時代の坏には，底部中央のみ糸切り痕を残して回転ヘラケズリ調整（3）と手持ちヘラケズリ調整（6），回転ヘラケズリ調整（7）を施したものがある。台付甕（14・



第301図　奈良・平安時代遺構外出土遺物（1）

15）も奈良時代に多い。図示したこれらは，遺構密度が薄い台地北部の東寄り（M26グリッドなど）で検出されたものが多い。平安時代の土師器では，底部回転糸切り無調整の坏（1・2・4），高台付椀（8・



第302図　奈良・平安時代遺構外出土遺物（２）

11・13）などの比較的新相を示す例が台地南部中央（N28グリッドなど）で検出されている。遺構分布では，該期の住居跡がむしろ西寄りに集中し，中央には南部土坑群が分布する。したがって後者に関連する遺物と考える。土師器にはほかに底部手持ちヘラケズリの皿（５），甕口縁部片（17・18），そして坏（10）と同一の攪乱坑から出土した墨書のある在地甕胴部片（９）を図示した。墨書は文字以外の可能性がある。

須恵器は大きく２つに分けることができる。還元焼成されたもの（19～22・25・27・30・33・34・36）と千葉地域独特の焼成のもの（23・24・26・29・31・32・35・37）である。前者は奈良時代が主体で，搬入品が多く，東海産（20・27・30・36）や茨城産（25）とみられるものを含む。一方，後者は平安時代が主体で，黒褐色（37）から褐色（31）まで発色は多様である。住居跡に分布の偏りは認められない。内面周辺から外面を施釉した灰釉陶器皿（28）もみられたが，極細片である。

以上とは別に，M28-4グリッド出土土器をまとめて掲載した（38～45）。SI-030を覆うようにして検出された貝層出土土器である。自然釉の掛かった硬質の須恵器（38・39）や，底部外面に「大」字形の線刻をもつ須恵器坏（46）のほか，土師器で内面黒色処理をした高台付椀（41・43）などがある。遺物には時期差がみられ，SI-030よりも古相を示す土器も少なくない。貝層に古相の土器が含まれる経緯は不明であるが，（41）・（43）は土器群の下限を示しており，貝層形成の時期に近いと考える。

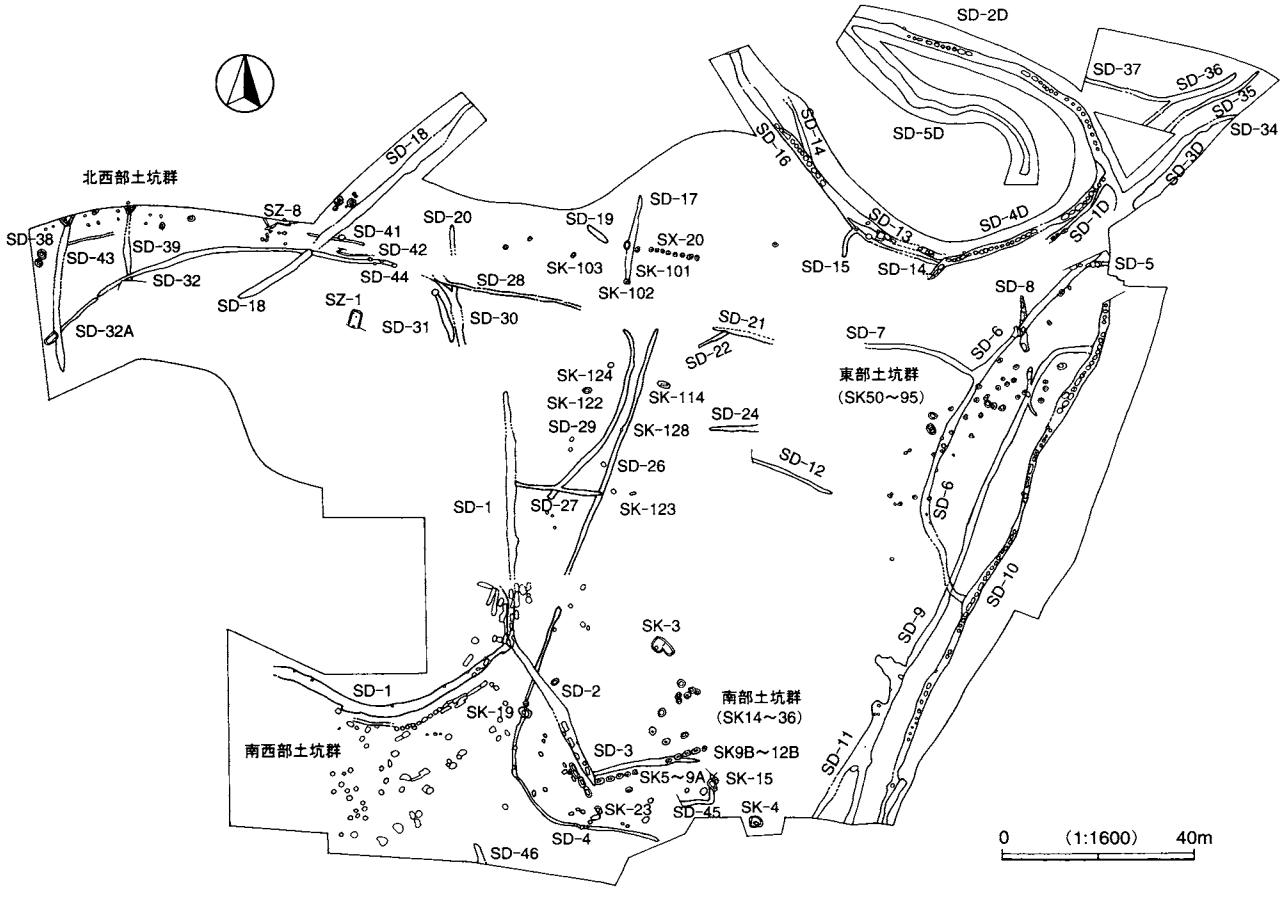
他に砥石（第302図－１），石製紡錘車（同２），布目瓦（同３～５）を当該時期の遺物として図示した。

第７章　その他の遺構と遺物

第１節　溝・柵列

溝・柵列等については，通路の機能や空間を区画するなどの機能が考えられるため，相互の関係が重要である。しかし，出土遺物などに恵まれた例は少なく，多くの検出例については造営時期ごとに分離することが困難である。遺物が出土した例では，奈良・平安時代の遺物が中心であり，中世以後の遺物は乏しい例が多い。これは，本遺跡が奈良・平安時代を中心に営まれた集落であることを反映しているが，混入品と断じる要素は少ないので，成立期が古代に遡る，あるいは前時代の区画を踏襲する形で中近世まで営まれた，などの可能性も考えられる。このような状況から，時期識別が困難な遺構と遺物を総合的に検討できるよう本章を設け，まとめて報告する。

本節では溝と柵列を扱う。溝に近接する土坑列や柵列は，溝に付随する施設とみなし，溝とともに報告する。また，溝中に土坑が連続する場合は，柵や生け垣などの区画施設が想定されるが，部分的に土坑を検出できなかった区間もあるので，これも溝として報告する。



第303図　溝・柵列・土坑群配置図

1．溝

SD-1（遺構第306図・図版80，遺物第310図・図版80）

西側の谷奥に位置し，台地西部の縁辺に沿って，一段低い西部緩斜面を囲んでいる溝である。幅1.0m～2.0m，深さ30cm～50cmの浅いU字形断面をもつ。北側で検出されたSD-30は同一遺構とみられ，総延長は130mに及ぶ。底に比較的平らな面をもつが硬化面等は検出されなかった。覆土は暗褐色～黒褐色で，砂粒はなく，崩落したローム粒を含むが自然な埋没による。

SD-2との分岐点の前後では，本溝と主軸を一にして列をなす長方形土坑列がある。長さは1.6mを中心に1.1m～2.0m，幅は0.5m～0.6m，深さは60cmを中心に，30cm～120cmのものがある。土層断面観察では，溝が土坑列の後に埋まっている様子が複数の箇所で認められた。土坑の覆土はしまりはないが，ローム粒を多く含み，埋土と考えられる。後述のように，土坑列はSD-2と密接な関係があるので，SD-1とSD-2の重複関係は，前者が後者を切っていると考える。出土した銅製品（33）は，帯飾りの裏蓋等と考えるが，時期決定根拠に欠ける。寛永通宝・文久永宝や，近世以降の板状鉄製品も出土しているので，主に営まれたのは近世以降とみられる。ただし，成立はSD-2等の時期に近い，中世に遡る可能性が残る。

本溝は調査区南西隅において西に大きく屈曲する。これに沿って，南側を併走する柵列がある。この柵列は，SD-2ないしSD-10，SD-16等と同じく中世の柵列（溝）と考える。

SD-2（第306図）

台地西部においてSD-1から分岐し，斜めに南東方向へ延び，台地南部の中央付近にまで至る，長さ約33mの溝である。幅1.1m～2.0m，深さ40cm～60cmの緩やかなU字ないしV字形溝である。底に硬化面等は検出されなかった。覆土は下層のほうがローム粒を多く含むが，作為的に埋められた痕跡はない。黒色砂質土が充填された窪みが最下層にみられる。これは，平安時代建物跡とみられるSX-4の北隅柱穴であり，本溝に切られている。SD-3やSK-5～12の柵列（本節2項）は，本溝の南東末端に接続することから，本溝と同時に存在した可能性が高い。このような状況から，本溝は主として中世以後に営まれたとみられる。

本溝南半部の底には，SD-1との分岐点にあるのと同じ長方形の土坑4基が軸を揃えて掘られている。調査時にはイモ穴と形態上の区別がつかないとされたが，SD-1土層断面観察の結果を踏まえると攪乱とは断じきれない。

出土遺物は細片ばかりで，平安時代の土師器・須恵器片が多い。

SD-3（遺構第306図，遺物第309図）

台地南部，SD-2の南東末端部から発し，ほぼ東方向へのびる長さ約22mの溝である。幅は約1m，深さは最深部で23cmの浅いU字形溝である。古墳時代後期後半のSI-023を切る。ほぼ同一方向に走るSK-5～12の柵列と途中で交わる（本節2項）。その地点のSK-10における土層断面観察では，本溝が柵列に切られている。覆土には水平堆積層がなく，ローム粒を多量に含むことから，埋戻しが行われたとみられる。最も右側の黒褐色土層は少量の砂粒を含むが，これは竪穴住居跡のカマドを切ったことに起因する。硬化面等はない。

平安時代の須恵器・土師器を中心とした遺物は多量に出土しているが，細片のため図示できるものはな

い。その中に中世のすり鉢片や，比較的扁平な砥石（1）が若干含まれている。泥面子も含まれるが，耕作等による混入であろう。柵列との切り合いを重視すれば，本溝は柵列の直前，すなわち中世に廃絶したとみられる。本溝は区画のための施設であり，方向をほぼ共有する柵列にその役割が引き継がれたと考える。

SD-4（遺構第306図，遺物第310図）

台地南部の西寄りを，「し」字形に走る約70ｍの溝である。台地西部を縦走するSD-26に連なり，総長は130ｍにも及ぶ。台地南縁の肩から西北西に延び，弧を描きつつ北北東へ90度方向転換し，ほぼ直線的にSD-26に連なる。SD-26の北端は台地北部との境界にまで達する。幅約0.5ｍ，深さ5㎝～15㎝のごく浅いU字形溝である。硬化面等は認められていない。もし，台地の主要な平坦部を囲むとすればSD-7，SD-11，SD-21，SD-22などとの関係があるとみられる。SD-26は平安時代前期のSI-119を切っているのが確認されており，SD-27には切られている。

SD-4から遺物は出土しなかったが，SD-26からは豊富に出土した。そのうち，千葉産須恵器の坏（19）とロクロ土師器椀（18）を図示した。前者は，底部手持ちヘラケズリ調整である。細片も平安時代ころの須恵器・土師器が中心で，陶磁器類は含まない。また，竪穴住居跡からはほとんど出土しない鉄製雛形（39）も，SD-26部分から出土している。

SD-5（第305図）

台地東部の北東端にあり，台地狭隘部を横断する溝である。近代の道路などにより攪乱され，検出できたのは約5ｍ程度である。SD-6と交差するが切り合いは不明である。溝中に径約1.1ｍ，深さ30㎝～40㎝の皿状土坑が連なる，柵列に近い形態をもつ。この点はすぐ南のSD-10などと類似する。

若干の須恵器・土師器細片が出土しており，内黒の土師器椀片など，平安時代の比較的新相の土器がみられる。これが成立の上限を示すなら，中世ないしそれ以前の施設とみて矛盾はない。

SD-6（遺構第305図・図版80，遺物第309・310図）

台地東部の北東側縁辺から弧を描きながら再び南東側縁辺に向かって伸びる溝である。遺存度の良いところでは幅約1.9ｍ，深さ50㎝～60㎝ほどの浅いV字形溝である。硬化面等は検出されていない。奈良時代のSI-058を切って作られているが，平安時代とみられるSI-037との切り合いは確認できなかった。周辺に多数の土坑が分布するが，溝の方向に対する規則的な配列はみられない。

奈良時代や平安時代の土師器・須恵器細片が多数出土している。陶磁器類はまったく出土していないので，古代に遡る可能性もあるが，泥面子が1点あるので断定はできない。ほかに割石（2），土玉（34），鉄製刀子（35），棒状鉄製品（36）があり，これらの遺物は古代の所産とみられる。

SD-7（遺構第305図，遺物第309図）

SD-6の中間点から横に分岐し，台地東部の北寄りを東西に走る約22ｍの溝で，約20ｍ西の台地中央部で検出されたSD-21，約60ｍ西の台地西部で検出されたSD-28，さらに西方の調査区北西隅で検出されたSD-44・SD-32へと連なる，総延長約200ｍの溝の一部とみられる。幅約0.8ｍ，深さ20㎝～30㎝，断面は逆台形であるが，西方では，幅や深さは同じで，断面がU字形となっている。鷲谷津遺跡から中野台遺

跡まで通じる溝であり，地形を考慮すると，道路として利用していた可能性が高い。SD-21 から SD-28 にかけては現代の道路と重なる部分がある。ただし，調査時に硬化面等の検出はなされていない。平安時代の SI-037 を切っている。

台地西部の SD-28 部分では，手持ちヘラケズリ調整をもつロクロ土師器坏底部片（28）が出土した。平安時代の所産である。東の SD-7 部分や，西の SD-32 部分でも平安時代頃の須恵器・土師器細片が若干出土している。陶磁器類はない。

SD-8（第 305 図）

台地東部の北寄りを，SD-6，SD-9 と交差してほぼ南北に走る溝である。北端から南の台地縁辺部で消えるまで，総長は約 30 mあり，幅は約 0.8 m，深さは約 20 cmである。底部に長径約 1.5 m，短径約 0.8 m，溝底部からの深さ約 40 cmの，長方形・楕円形の土坑が接しながら一列をなす。柵などの施設であったと思われる。特徴的なのは，中央付近で 3.5 mほどの間が途切れており，門や出入り口施設があったと想定される。

出土遺物は少なくないがいずれも細片である。平安時代くらいの須恵器・土師器片である。

SD-9（遺構第 305 図・図版 80，遺物第 309 図）

台地東部から南部にかけて，東端を縦走する溝である。北側台地縁辺より出発し，すぐに西から南へ方向を変え，台地の縁に沿ってまっすぐ南下し，南側台地縁辺に至るとそのまま斜面を下っている。長さは約 115 mに及ぶが，幅約 1 m，深さ約 20 cm～30 cmの浅い溝であり，底に比較的平らな面をもつ。硬化面等は検出されなかった。平安時代の SI-060 を切る。

多くの竪穴を切るため，出土遺物は極めて多く，須恵器・土師器片数は 1000 点を超える。時期は奈良・平安時代が主体である。そのうち，灰釉の陶器壺（5），土師器甕（6），外面下端のみヘラケズリ調整して，回転糸切り痕を残すロクロ土師器坏（7）を図示した。また，緑釉陶器片 1 点が出土し，本溝に接している SI-072 の出土片と接合した（第 243 図－6）。陶器の壺・甕の細片が極微量あるが耕作等による混入とみてよい。SI-060 のほかには平安時代の竪穴と重複していないのに，平安時代の比較的新相の土器群が多いことが注目される。本溝の成立時に近い時期の資料と考える。

南部の SD-11 が分岐する付近に，多量の貝が投入されていた。土層観察（第 305 図 G－G′ セクション）では底から薄い間層をわずかに挟んだだけで堆積している。投入されたのは溝の機能がまだ維持されていた段階であったと考える。

SD-10・SD-10B（遺構第 305 図・図版 81，遺物第 309 図）

台地東部と南部の東端を，SD-9 に平行して，さらに谷側（東側）を縦走する溝である。南部の東側斜面にかけて，斜面に沿ってほぼ直線的に走り，南部では次第に斜面を斜めに切りながら下っている。途中，平安時代の SI-040 と SI-066 などを切って構築している。検出された長さは 120 m以上に達し，北方では調査区北西隅の SD-2D へと連なっていくものと考える。幅は約 1.5 m，深さは 50 cm～80 cmの比較的深い V 字形溝であり，底部に長さ約 1.1 m，幅約 0.7 m，深さ約 20 cmの連続した楕円形土坑状のくぼみが認められる。柵などの施設が想定される。

SD-10の南端で，同一方向に掘られた短い溝SD-10Bと切り合っている。新旧関係は不明だが，SD-10Bの方がわずかに20㎝ほど深く，南端の土層断面には切り合いが見つからなかったので，深いSD-10Bのほうが新しい可能性がある。

SD-10は多くの遺構を切るため，出土遺物は比較的多い。奈良・平安時代の須恵器・土師器が主体である。そのうち，須恵器坏蓋（8）や土師器高台付椀（9・11），須恵器甕（12）を図示した。足高高台付坏（9）は内面黒色処理を施されており，平安時代の新相を示す。

SD-10Bには雲母を多量に含む茨城県産の須恵器坏片（10）があり，奈良時代の所産とみられるが，北隣にある奈良時代のSI-069に伴う遺物の可能性もある。

SD-11（遺構第305図，遺物第309図）

台地南部の東端に位置する溝である。SD-9から分岐し，斜面を下らずに台地肩部に沿って走る。長さは約27m，幅約1m，深さ約20㎝～30㎝の浅い溝であり，底に比較的平らな面があるが，硬化面等は検出されていない。分岐点ではSD-9よりわずかに浅く，段差がある。

出土遺物は多いが，奈良・平安時代の須恵器・土師器の細片が主体を占め，図示できたのは軽石（4）のみである。

SD-12（第307図，図版81）

台地中央部のやや北寄りに位置し，奈良時代のSI-079から東南東へのびる細い溝である。長さ約18m，幅約0.5m，深さ約20㎝の細いU字形溝である。重複するSI-019・SI-079・SX-18との前後関係は確かめられていない。

遺物は少なく，いずれも平安時代ころの須恵器・土師器細片である。

SD-13・SD-16（遺構第304図・図版81，遺物第309図）

台地北部の北端，北から入る谷の斜面に沿って弧状に走る一連の溝である。東方で連続するSD-4Dを含めて総長約100mに及ぶ。幅1m～1.5m，深さ約10㎝～30㎝の浅い溝であるが，底に長さ約1m，幅約0.6m～1m，深さ5㎝～20㎝の楕円形土坑が連続している。上述のSD-10や本溝が合流するSD-2Dと同じ特徴をもち，柵のような施設が想定される。

出土遺物は細片が多く，格子タタキをもつ瓦片1点（13）のみ図化した。表面は暗褐色，断面は褐色のやや軟質な焼成である。布痕はない。古代から中世の所産とみてよい。ほかの細片には近世陶磁器を含まず，古墳時代～平安時代土器片が中心である。

SD-14（遺構第304図・図版81，遺物第310図）

台地北部に位置し，SD-13と交差しながら斜面に沿って弧状に走る溝である。長さ約45m，幅約0.6m～1.2m，深さ約20㎝～50㎝のU字ないしV字溝であり，約20m東方で検出されているSD-1Dに連なるとみられる。SD-13との新旧関係は不明であるが，SD-1DとSD-4Dの関係と等しいなら，本溝の方が古い。硬化面等は検出されていない。

遺物は茨城県産を含む須恵器や土師器の細片を中心に若干数が出土した。そのうち，棒状鉄製品1点

(38) を図示した。紡錘具の軸と考える。

SD-15（第304図，図版81）

台地北部に位置し，SD-14の中央付近から南へ分岐し，平坦面に向かって6m程度検出された浅い溝である。幅約0.6m，深さは分岐点が最も深くて約20cmである。硬化面等は検出されていない。

遺物もごく少量で，須恵器・土師器片のみである。

SD-17（遺構第307図・図版82，遺物第309図）

台地北部のやや西寄りをほぼ南北に走る溝である。柵列SX-20とほぼ直交する方向であり，両者は関連する施設の可能性がある。長さ約18m，幅約1.3m以下，深さ約10cm以下のごく浅い溝で，底に広い平坦面をもつ。奈良時代のSI-118を切るので上限は平安時代ということになる。後述の土壙SK-102に切られることから，少なくとも近世初頭以前である。

図示した坏（15）は灰白色，五孔の甑（14）は暗褐色の千葉産須恵器である。細片も含め，土器は奈良時代の所産とみられる。

SD-18（遺構第308図・図版82，遺物第309図）

調査区北西隅に位置し，鷲谷津遺跡の台地と中野台遺跡の台地をつなぐ細尾根を，斜めに横断する長さ約63mの溝である。幅約1.5m，最深部約45cmの，断面が逆台形の溝である。広い平坦面を有するが硬化面等は検出されていない。年度を違えて調査した道路下のSD-40は本跡の中央部にあたる。注目されるのは，頂上部で約1.8mほど溝が途切れていることである。この陸橋の南端をかすめるようにして，SD-32（SD-7）が交差している。

須恵器坏蓋（16）と甕の底部（17）を図示した。いずれも灰白色の良好な焼成で，甕はタタキ整形の後ケズリによって平底を形成しており，底内面には自然釉が溜まっている。周囲に同時期の遺構はみあたらないので，これらは本溝の構築年代が古代に遡る可能性を示している。

SD-19（第307図，図版82）

台地北部の西寄り，SD-17の西約4mに位置する約5mの溝である。方向は南東方向で，幅は約1m，深さは浅いところで約15cm，北側に一段深くなる部分では，深さ約20cmである。

遺物はほとんどなく，瓦質土器細片があるのみであった。

SD-20（第308図）

台地北部の西端を南北方向に走る長さ約5m，幅約0.7m，深さ約10cm以下の浅い溝である。断面は逆台形で，比較的平らな面をもつが，硬化面等は検出されていない。覆土最下層の暗褐色土層には焼土粒が微量検出された。南方約7mで検出されているSD-28と交差したところで，SD-30に切られて消滅している。

遺物はほとんどなく，須恵器・土師器細片が若干認められた。

SD-21（第307図，図版83）

SD-7と一連の溝である。台地中央部の北端を走る。

SD-22（第307図，図版83）

台地中央部の北端に位置し，SD-21から分岐して西南西へのびる長さ約7mの溝である。幅約0.3m，深さ10cm以下と浅く，底に平坦面をもつが，硬化面等は検出されていない。遺物は出土しなかった。

SD-24（遺構第307図・図版83，遺物第310図）

台地中央部のやや北寄りを東西にのびる溝である。約9mが検出された。幅は最大の東側で約1m，深さは約10cmとごく浅いU字形の溝である。

図示したのは青銅製のキセル（37）である。差込みは破損しており本来はもっと長い。土圧の影響もあるが，頸の屈曲が短く強いことから，比較的新しい形態といえる。ほかに近世鉄釉陶器片がある。

SD-26（第307図，図版83）

SD-4と同一の溝である。台地西部の東側を縦走して中央部との境界を画する。平安時代前期のSI-119を切り，SD-27には切られる。

SD-27（遺構第307図・図版84，遺物第309図）

台地西部を東西に走る溝である。長さは約18m，幅は最大で約0.8m，深さは東の台地上面が最も深くて24cmであり，逆台形断面をもつ。硬化面等は検出されていない。SD-1とSD-26とをつなぐように見えるがこれらは同時には存在しておらず，SD-26よりは新しい。

遺物量は多くないが比較的大きめの土器片が多く，須恵器の坏（20・21），壺（22），甕（23）を図示した。壺のみ灰白色の良好な焼成であるほかは，黒褐色に焼成されている。坏の底部は細片も含めていずれも手持ちヘラケズリ調整されている。平安時代の比較的古相をしめす。

SD-28（第308図，図版84）

SD-7等と同じ溝である。台地西部の北寄りを東西に走る。

SD-29（第307図，図版84）

台地西部に位置し，SD-26の谷（西）側を弧状に縦走する道である。平安時代のSI-134を切る。幅約1m，深さ10cm～15cmの浅い溝で，底に比較的平らな面をもち，硬化面を形成している。

SD-30（遺構第308図・図版85，遺物第309図）

台地西部の北西に位置し，SD-28から南に分岐して南方のSD-1へと繋がる溝である。ただし，SD-1と異なり，SD-30では奈良～平安時代の須恵器・土師器が多量に出土し，近世遺物等が混じらないので，別遺構の可能性も残す。SD-20を切って構築されている。

出土遺物のうち，灰白色の焼成で，下部が丸い古墳時代後期後半の須恵器高台付坏（24），灰色の焼成

で底部を手持ちヘラケズリ調整した奈良時代の須恵器坏（25），灰褐色の焼成で底部を手持ちヘラケズリ調整した平安時代の須恵器坏（26），灰色の須恵器壺底部片（27）を図示した。

SD-31（遺構第308図・図版85，遺物第309図）

台地西部の緩斜面に沿って，SD-30の西側を平行に走る弧状の溝である。長さ約11m，幅0.7m～1.5m，深さ約30cmの比較的浅めの溝である。硬化面等は検出されていない。北西端に，すり鉢状の浅い小土坑があり，そこから南に延びている。

奈良～平安時代の須恵器・土師器細片が比較的多く出土している。そのうち灰白色の焼成で底部を手持ちヘラケズリ調整した奈良時代の須恵器坏（29）と灰色の五孔の甑底部片（30）を図示した。

SD-32（第308図，図版85）

SD-7等と同じ溝である。調査区北西隅の部分をさす。

SD-32B－旧遺構名A-015－（第308図）

調査区北西隅に位置し，中野台遺跡に通じる尾根部分を分断するように南北に走る溝である。長さ約30m，幅約1.4m，深さ約30cmと，底に平らな面をもつ広くて浅い溝であるが，硬化面等の検出はなされなかった。北側の谷へ落ちる部分（SD-38）には，ピットを不規則にもつ半円形の浅い土坑（SK-129）がある。

SD-33（第308図，図版85）

調査区北西隅に位置し，SD-32Bの東に平行して，尾根を分断するように南北に走る溝である。長さ約15m，幅約1.2m，深さ10cm～20cmと，広くて浅い。年度を違えて調査した北側の谷に面する部分（SD-39）に，同じくピットを不規則にもつ半円形の浅い土坑（SK-130）がある。

SD-34（第304図，図版86）

後述のSD-3Dと同一の溝で，北東端部分にあたる。

SD-35（第304図，図版86）

調査区北東隅に位置し，SD-3D北側を平行に走る長さ約20mの溝である。幅約0.6m，深さ20cm～30cmのV字形断面をもつ。

SD-36（第304図，図版86）

調査区北東隅に位置し，SD-35北側を平行に走る長さ約20mの溝である。幅0.5m～0.7m，深さ10cm～20cmのU字形断面をもつ。覆土上層の南側と溝の南側外面にかけて硬化面が形成されている。本溝は道の側溝であった可能性がある。

SD-37（遺構第304図・図版86，遺物第309図）

調査区北東隅に位置し，SD-36から北西に分岐して，そのまま谷に沿って北西に延びる長さ約30mの溝

である。幅0.5m～0.7m，深さ10cm～20cmのU字形断面をもち，SD-36とよく似ている。

古墳時代中期の高坏脚部（31）が出土しているが，これはSI-121からの混入とみられる。

SD-38・SD-39・SD-40（第308図）

それぞれSD-32B・SD-33・SD-18の一部である。

SD-41（第308図）

調査区北西隅の，北斜面に沿って走る細い溝である。SD-40（SD-18）を切って交差している。長さ約11m，幅20cm，深さ14cm，断面は方形である。

SD-42（第308図）

調査区北西隅の東寄り，SD-18の付近で検出されたやや幅広い溝である。水道管埋設坑に攪乱されて一部しか検出されていない。同様に底が平らなSD-18に合流する可能性や，南の沢を廻るSD-1（SD-30）等に連続する可能性がある。

SD-43（第308図）

調査区北西隅の西端において，現代の道路に沿って検出された長さ約8m，幅約0.5m，断面方形の溝である。

SD-44（第308図）

東方のSD-7と同一の溝である。調査区北西隅を東西に貫通する。SD-32の東側部分にあたる。

SD-45（第306図）

台地南部の南寄りを逆L字形に走る溝である。SI-011A付近から発し，約3mほど南下し，直角に折れて約3mほど西進したところで，SI-012の覆土中に消えている。幅約0.6m，深さ約10cm～30cmで，断面は浅いU字もしくは逆台形をしている。

重複して検出されたSK-15Bは平安時代でも新相の土器群をもつ。SK-15Aはその上に掘られている。本溝はこれらより先に検出されているのでSK-15Aを切っている可能性が高く，相互関係から中世以降に下る可能性が高い。

SD-46（第306図）

台地南部の南西端に位置し，さらに南方へと延びてゆく溝である。千葉急行線調査の001号溝に続くと考えられる。

SD-1D（第304図，図版86・87）

鷲谷津遺跡D区のうち，調査区北東隅の台地縁辺から緩斜面に展開する溝の一つである。SD-2Dから南へ発し，SD-4D（SD-13）と交差しながら弧状に西へ曲がる約20mの溝である。幅は約1m，深さは約30

cmのやや浅いU字形断面を有する。断面観察の結果，SD-4D（SD-13），次いでSD-2Dに切られ，群中で最も古いことが確認された。覆土中には宝永の火山灰とみられる青黒色砂がみられた場所もあったがごく一部であり，後世の攪乱で混入したとするなら，本跡は中世以前に遡る。途中検出できなかったものの，さらに約20m西方のSD-14へと連なっていくものとみられる。

SD-2D（第304図・図版87，遺物第310図）

鷲谷津遺跡D区のうち，調査区北東隅の台地縁辺から緩斜面に展開する溝の一つである。北西から入る谷を取り巻くように緩やかな弧を描きながら南に向きを変え，台地東部のSD-10に向かって南下する。検出された長さは70mほどで，幅は約2m～4m，深さは約50cm～60cmの浅いV字形断面を有し，底面に不整円形の浅い土坑が連続して検出された。SD-10や，南方で分岐するSD-4D（SD-13）と同じく，柵のような施設の痕跡とみられる。断面観察では，SD-1D，SD-4D（SD-13）を切り，SD-3Dに切られている。覆土中には宝永の火山灰とみられる青黒色砂がみられた場所もあったがごく一部であり，後世の攪乱で混入したとするなら，本跡は中世以前に遡る。

出土遺物は図化困難であるが，近世以降の陶磁器はなく，平安時代土器片が中心であり，中世のすり鉢片が1点含まれている。やや太めの管状土錘（40）もみられる。総じて中世以前の所産とみられる。

SD-3D（第304図，図版87）

鷲谷津遺跡D区のうち，調査区北東隅に位置し，台地縁辺から緩斜面に展開する溝の一つである。北東の台地奥部から，鷲谷津の台地に向かって延び，SD-2Dに合流する。断面観察では，SD-2Dを切って構築されている。長さは約30m，幅は約2m，深さは約40cmと浅く広い溝である。

出土遺物は図化困難であるが，近世以降の陶磁器はなく，平安時代土器片が中心であり，中世のすり鉢細片や陶器壺細片が含まれている。中世以前の所産である。

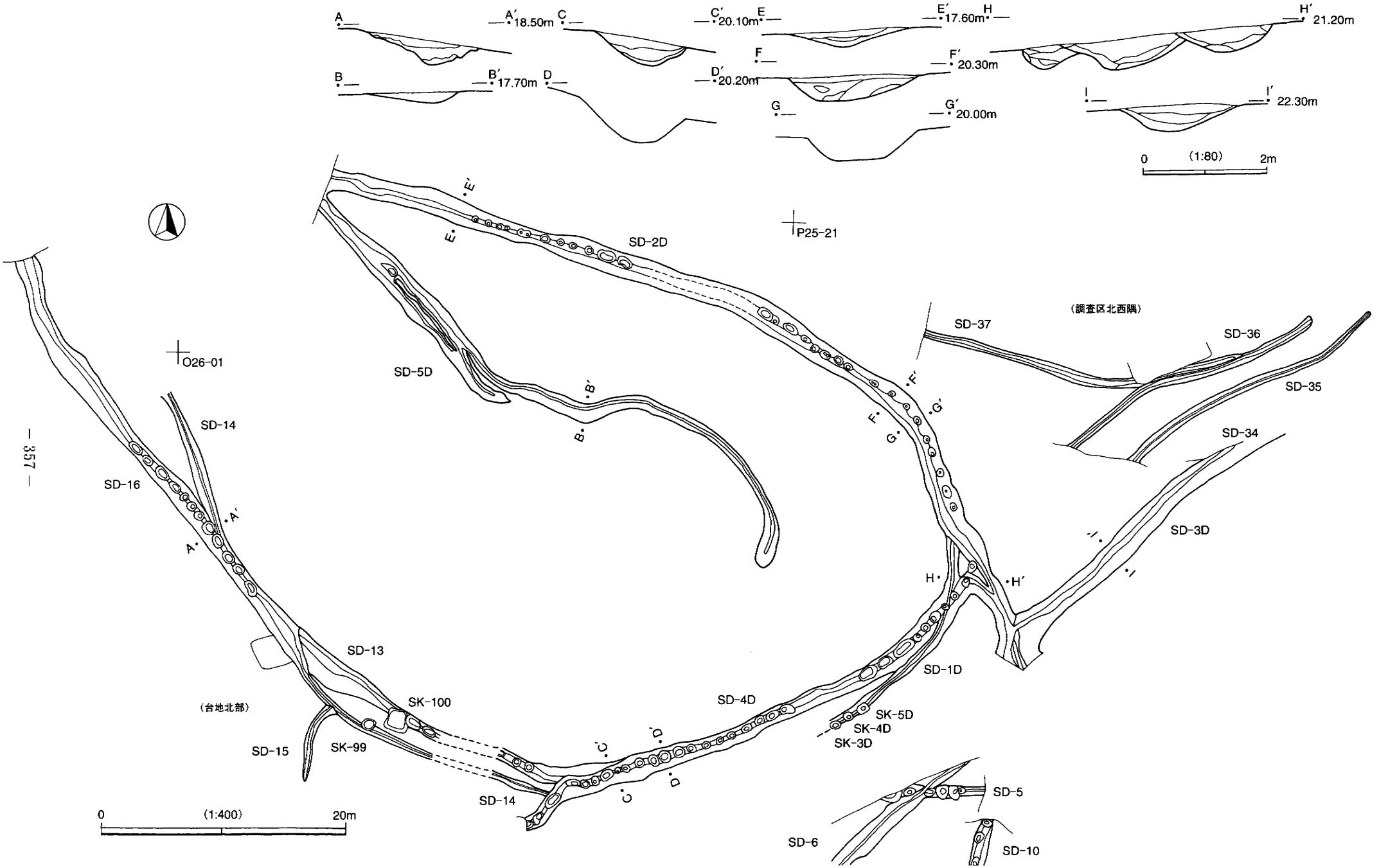
SD-4D（第304図，図版86・87）

鷲谷津遺跡D区のうち，調査区北東隅に位置し，台地縁辺から緩斜面に展開する溝の一つで，SD-13の東側約40m部分が本溝にあたる。柵列状の溝である。SD-1Dを切り，SD-2Dに切られる。

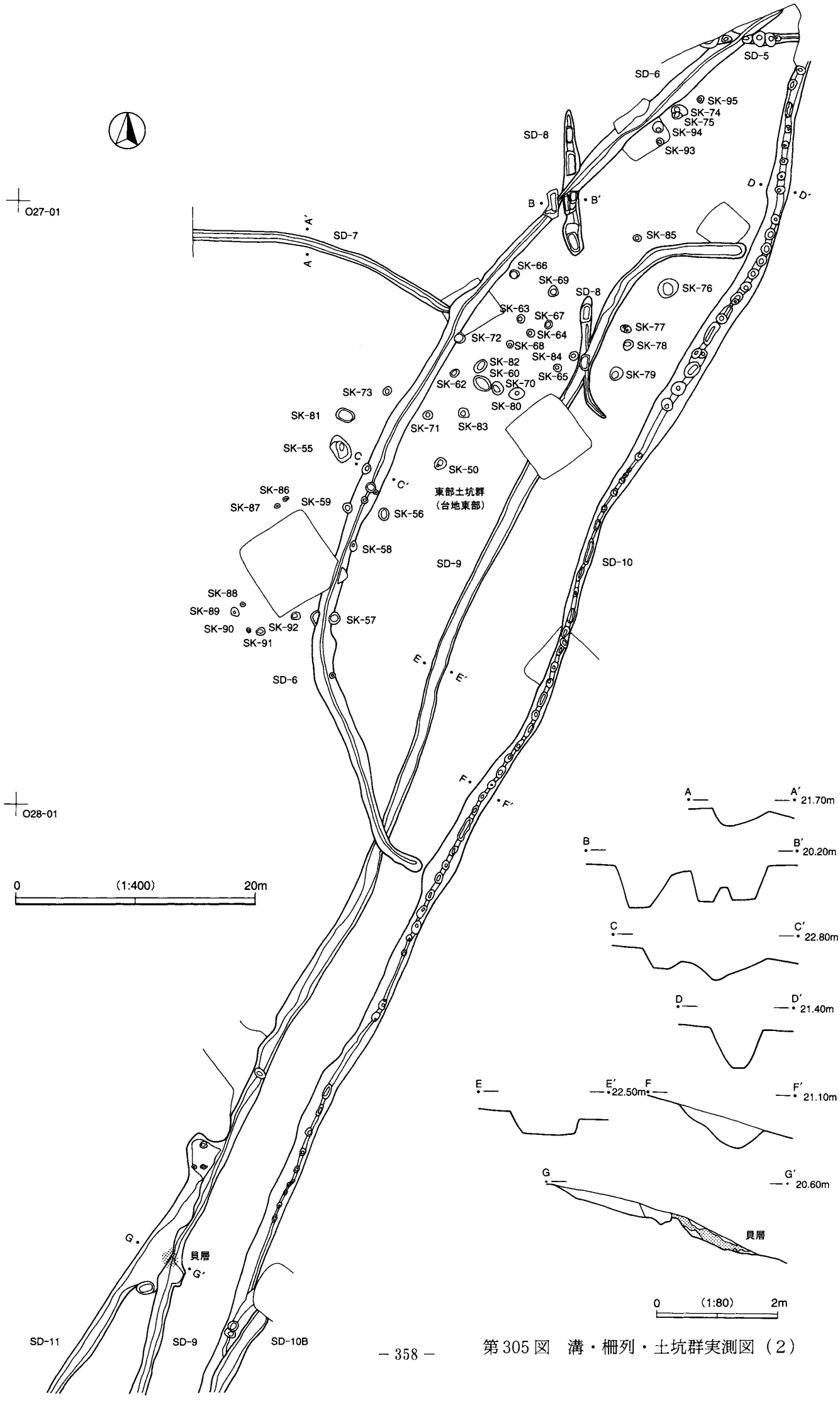
SD-5D（遺構第304図，図版87，遺物第309・310図）

鷲谷津遺跡D区のうち，調査区北東隅の台地縁辺から緩斜面に展開する溝の一つである。谷の斜面中にあり，SD-2Dの南側をうねりながらもほぼ平行して走る。長さは約50m，幅約0.6m～1.2m，深さ約10cm～30cmの浅い溝で，断面は山側に寄ったV字形である。

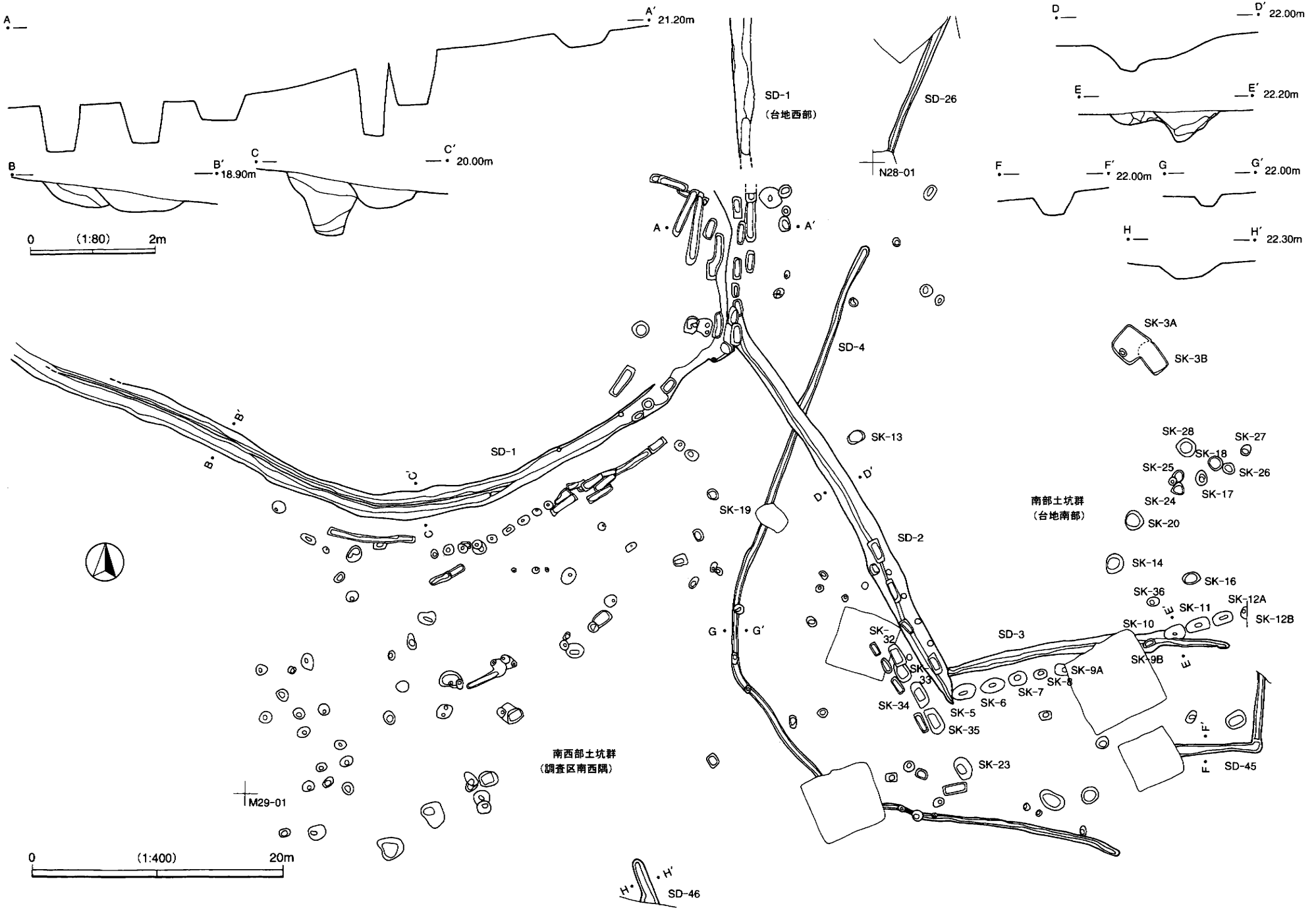
出土遺物は図化困難であるが，平安時代土器片のほか，中世のすり鉢細片1点と瀬戸・美濃焼とみられる陶器皿片3点を含む。近世の陶磁器細片も3点あり，うち1点が灰釉を施した仏飯椀（32）である。大型の管状土錘1点（44）と小型の管状土錘3点（41～43）が出土している。総じて中世から近世にかけての所産とみられる。



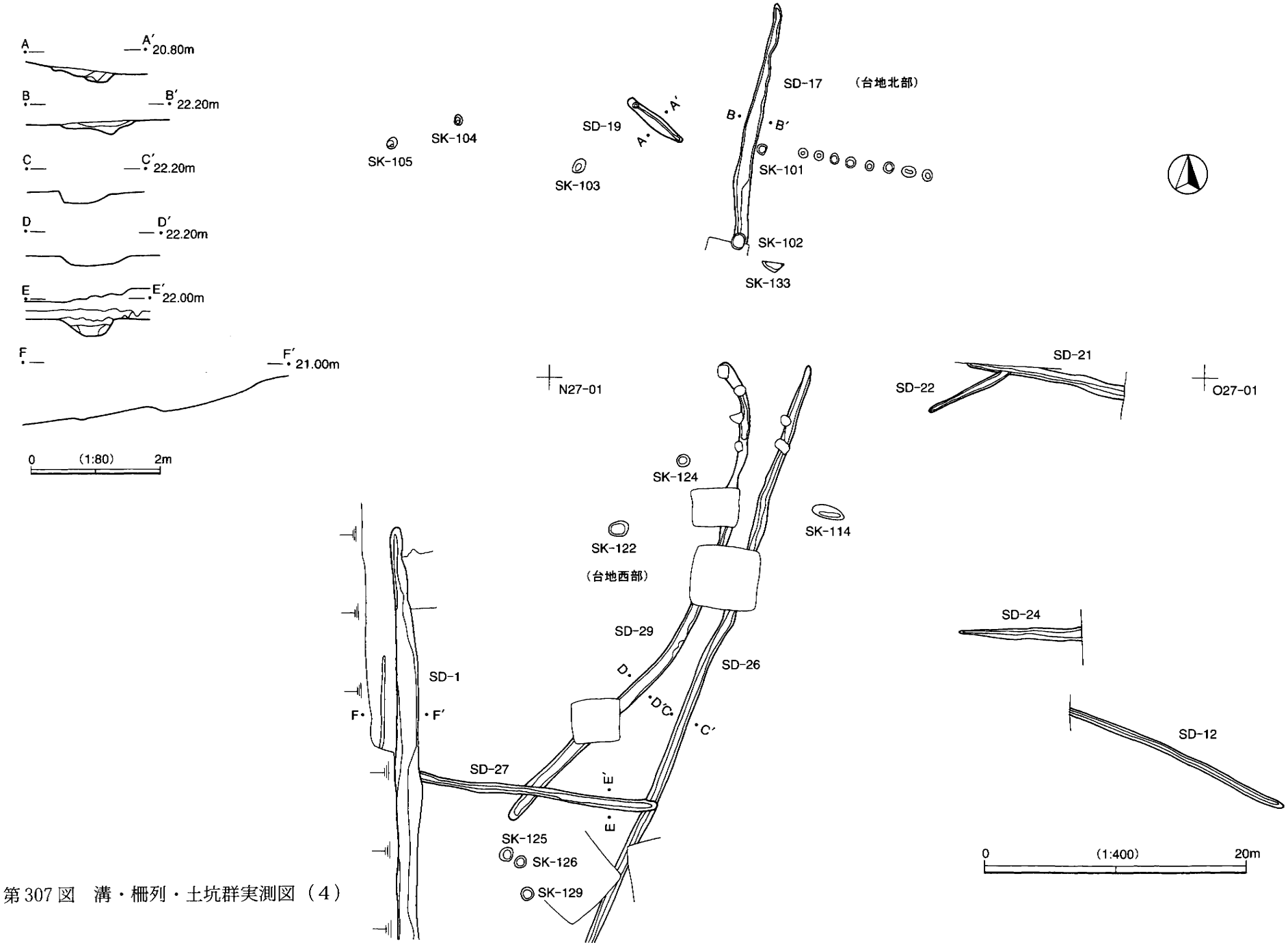
第304図　溝・柵列・土坑群実測図（1）



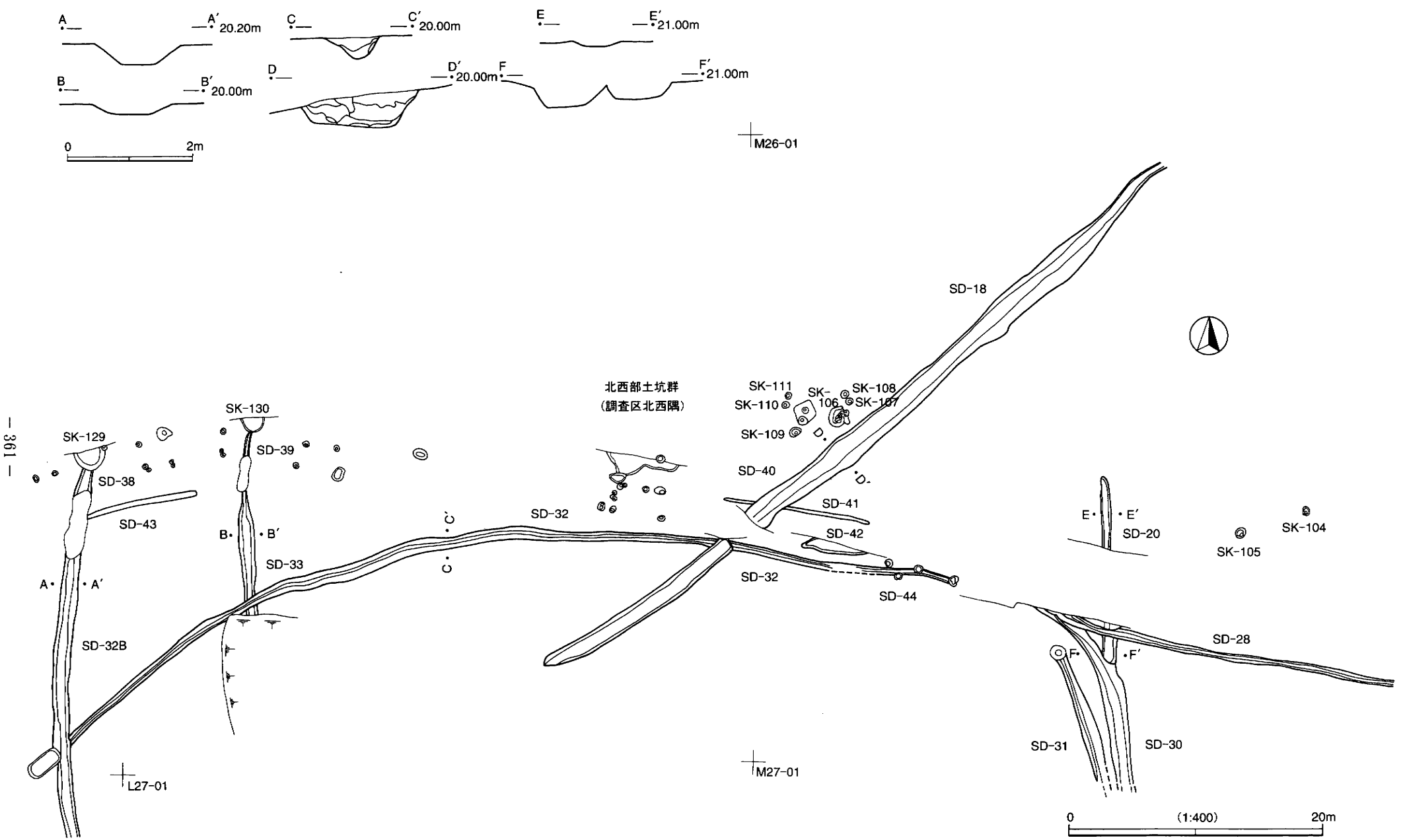
第305図　溝・柵列・土坑群実測図（2）



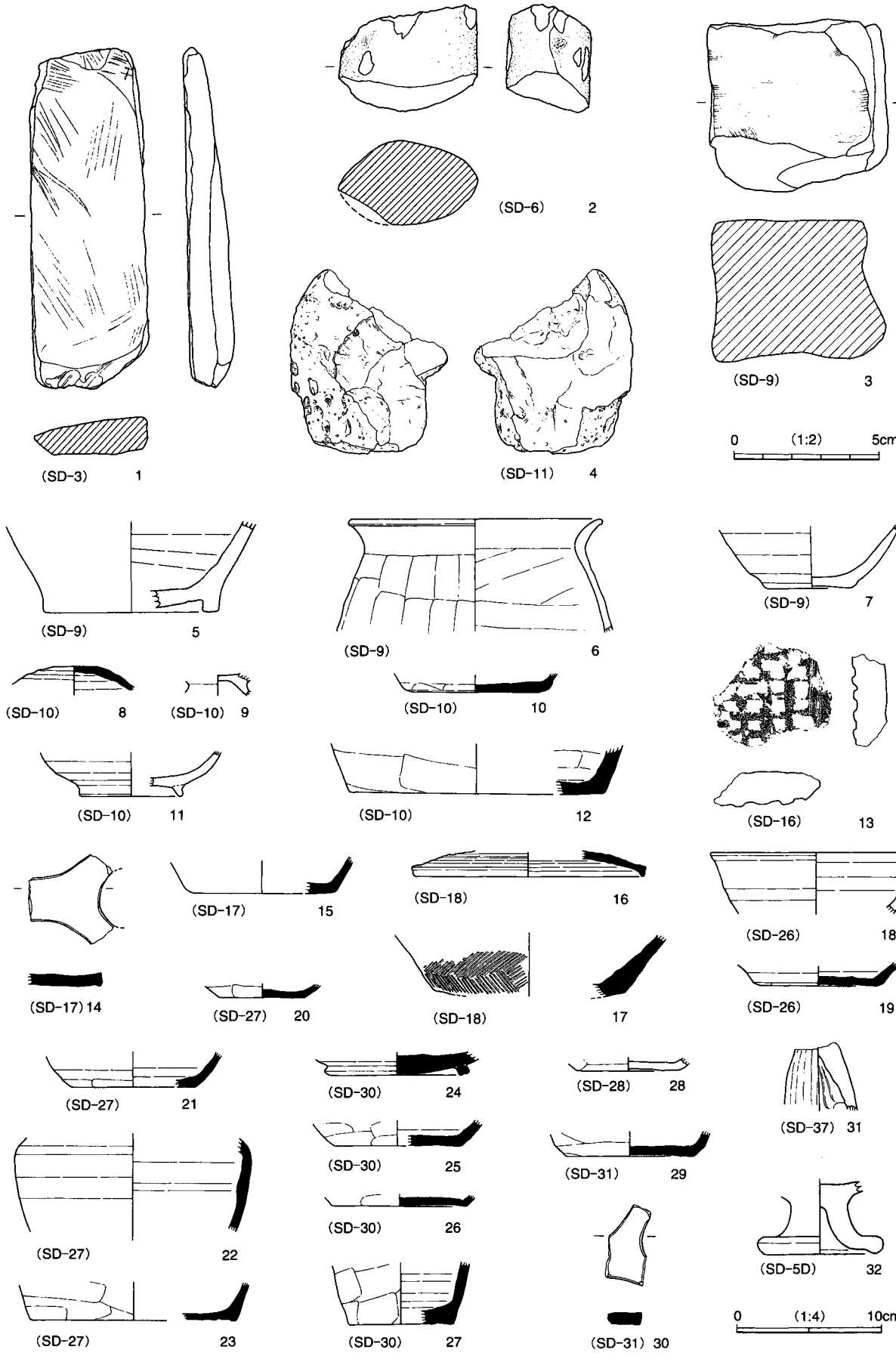
第306図　溝・柵列・土坑群実測図（3）



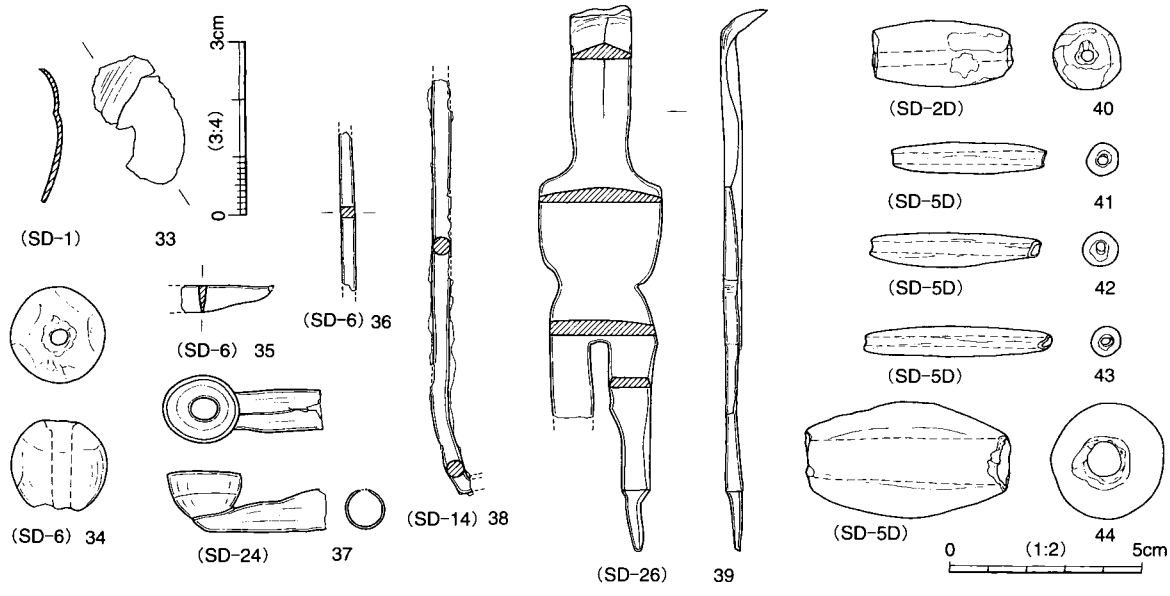
第307図　溝・柵列・土坑群実測図（4）



第308図　溝・柵列・土坑群実測図（5）



第309図　溝出土遺物（1）



第310図　溝出土遺物（2）

2．柵列

SK-5・SK-6・SK-7・SK-8・SK-9AB・SK-10・SK-11・SK-12AB（第311図）

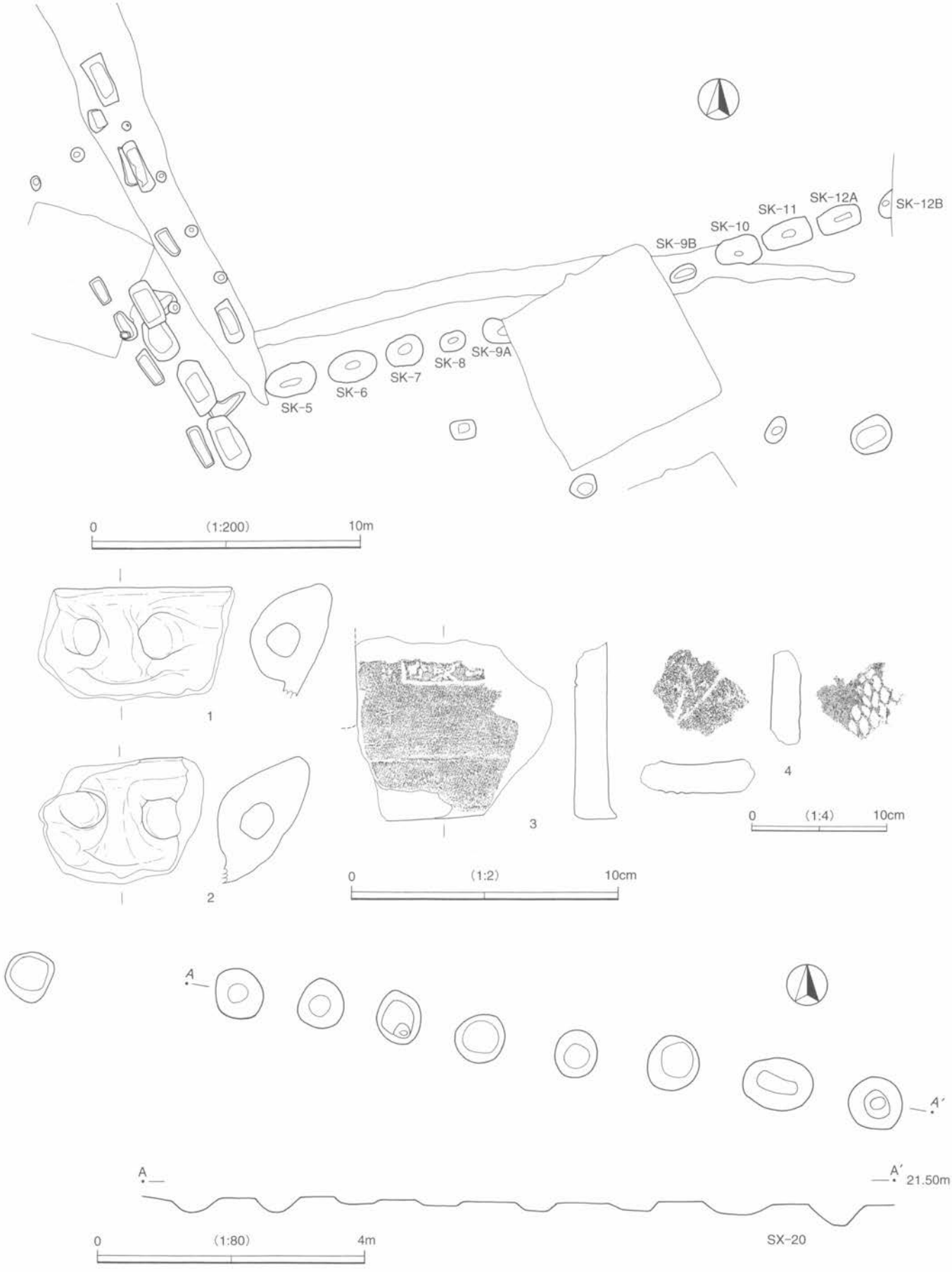
台地南部のほぼ中央に溝のSD-3と重複しながらもほぼ同一方向に並ぶ10基以上の土坑列である。溝と対応するように，東端のSK-5で直交するSD-2にぶつかり，列が終了する。個々の土坑は約1.8ｍ×1.0ｍの隅丸長方形であり，底の形態はすり鉢状になっている。すべての土坑が列と同一方向に主軸を向け，整然と等間隔に並んでいる。

なお，SD-2にも，対応するような土坑列（SK-33～35）がある。これらは形態的に少し違いがあり，調査時にはイモ穴となんら特徴を異にしない状況がみてとれた。この土坑列の南方延長上約３ｍ地点に位置するSK-23（第６章第３節）のほうが，むしろSK-5など本跡の形態に近い。

柵列西端のSK-5より遺物が出土した。まず，内耳鍋，もしくは焙烙の破片（１・２）がある。淡褐色～暗褐色をしている。板状の瓦器（３）は，淡褐色であり，表面に四角い枠と文字が陰刻されている。文字は判読不能である。破片左側上半部は透し孔の一辺であり，破片の下側は直角に貼り付けてあった他の粘土板が剥がれた痕跡がある。鬼瓦などの一部と考える。瓦片（４）は，外面に斜格子タタキ目をもつ。基本は淡褐色であり，二次的に火を受けて赤色化した痕跡がタタキ目の中だけ剥がれずに残っている。内面はケズリまたはナデ調整である。SD-16出土瓦と同様に，布目瓦とは特徴が異なる。ほかに古伊万里焼などの近世陶磁器片が２点，常滑焼などの中世陶器片が２点，須恵器長頸壺片が１点，５㎝大の焼け石11個がある。遺物は近世前期が下限と考えられ，中世に遡るものが主体を占める。

SX-20（第311図）

台地北部の西寄りに位置する，８基からなる土坑の列である。径は0.62ｍ～0.8ｍ，柱間は1.1ｍ～1.5ｍと当遺跡では通有の規模であるが，深さは12.4㎝をはじめ20㎝以下が３基，20㎝～30㎝が４基，



第311図　SK-5～12・SX-20と出土遺物

最も深い東端のものが33.7㎝で，浅くばらつきが大きい。また，これに平行する柱穴列がみられないため，建物というよりは柵や垣のような施設であったと考えられる。西に隣接するSK-101（第６章第３節）が同時期であれば，一連の施設とみなすことができる。

図示できる出土遺物はないが，灰白色に還元焼成された須恵器片と，褐色の土師器もしくは千葉産須恵器甕片が中心であり，奈良時代～平安時代の所産である。これらは本跡の上限を示す資料であり，他の柵列状溝と同様に中世に営まれた可能性もある。しかし，周辺に土器の混入源が少ないので，遺物の示す年代のとおり成立は古代に遡る可能性がある。

第２節　土坑群と建物跡

遺物を出土した土坑や掘立柱建物跡については，それぞれ第６章第３節及び第２節で報告したとおりである。その中に，中世以降に下る可能性もあるSX-4・5などが含まれていた。遺物をもたない例には古代以外の土坑も含まれているとみてよい。そこで，ここでは中世の確実な土坑・建物跡とともに，出土遺物に恵まれなかった土坑についても記述する。その際，形状に特段の特徴をもたない土坑が多いので，個別報告はせず，土坑群の分布を中心に報告することとし，溝と一緒に図示する（第304図～第308図）。形態や規模については附表３にまとめた。

１．土坑群

東部土坑群（第305図）

台地東部のSD-6・SD-9周辺に分布する，総数39基に及ぶ土坑群である。SK-50～95がこれにあたる。すでに触れたように奈良時代・平安時代の遺物を出土する土坑が多く，中近世遺物は見あたらないので，古代の所産である可能性が高い。SK-62～70，SK-80～84は，いずれも径１ｍ未満の小型円形土坑が並ぶように密集しており，掘立柱建物跡の存在を考慮するべきであろうが，組合せを抽出できなかった。

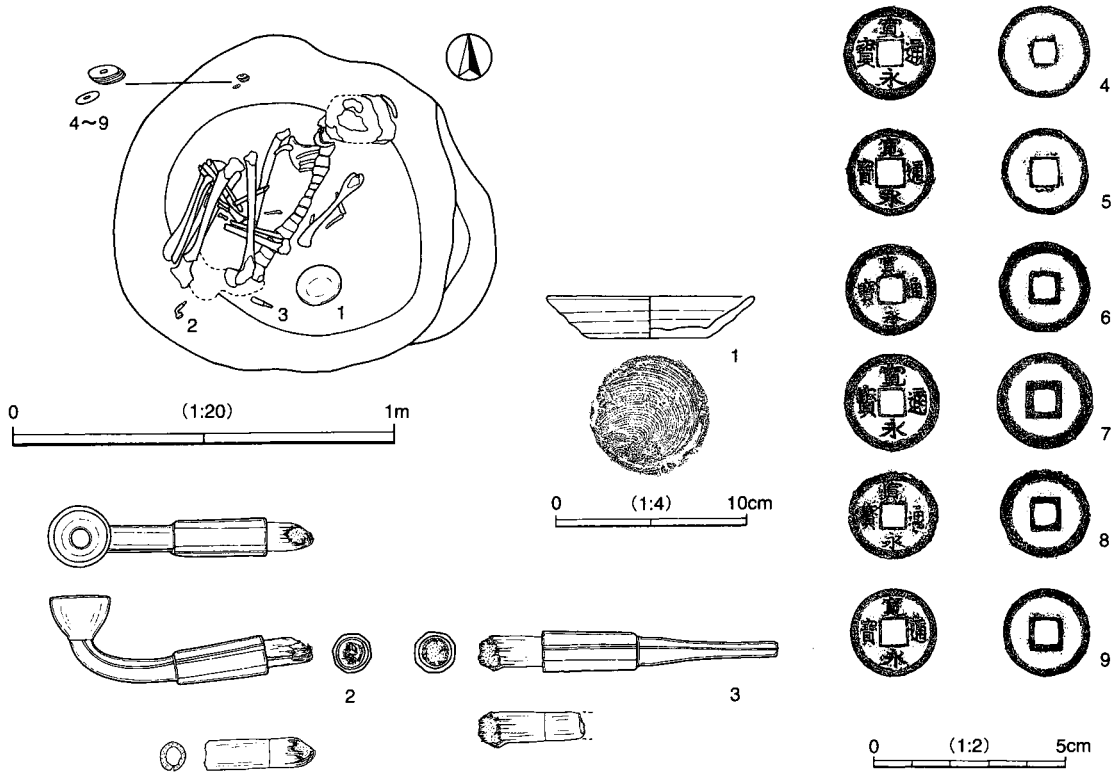
南部土坑群（第306図）

台地南部の中央に分布する，総数13基ほどの土坑群である。SK-14～36などがこれにあたる。すでに触れたように平安時代新相の遺物を出土する，径１ｍ～２ｍの中型円形土坑からなる。住居跡密集地区であるが，平安時代の住居跡と切り合っているものはない。並んでおらず，建物跡ではないと考える。平安時代の土壙群である可能性が高い。

北西部土坑群（第308図）

中世遺跡の中野台遺跡へと連なる調査区北西隅から，台地北部にかけての土坑を総称する。SK-99～113，129～133等がこれにあたる。調査区北西隅のSZ-8はこれらの一つと捉えることもできるが，比較的並んで検出されたので，掘立柱建物跡とみられる。

本土坑群の性格を知る上で数少ない手がかりとなるのがSK-102（第312図，図版77・146）である。台地北部西寄り，奈良時代のSI-118と，SD-17を切って設けられた土壙であり，径0.9ｍの円形で，深さは40㎝ほどである。内部より人骨とともにカワラケ１枚，六道銭として寛永通宝６枚，銅製キセル１本が出土した。座棺とみられる。新寛永を含む六道銭は近世中期に下るものであるが，これにカワラケが伴った



第312図　SK-102と出土遺物

ことは中世カワラケ編年研究にとっても参考にすべき埋納資料となる。

台地北部にこのような土壙がみられることは，一帯が墓域として機能していたことを示す。

土坑分布域からは比較的多くの中近世銭貨が採集されている。第３節で触れるように，六道銭として墓に納められる可能性が高い銭貨の出土位置は，時期を追って次第に西から東へ移行する。第４節ではグリッド出土土器・陶磁器にも同様の分布変化がみられる。

これらの状況から，中野台遺跡に近い調査区北西隅は中世の墓域であり，次第に墓域を東の台地奥部へと移しながら土壙が連綿と営まれ，後のSK-102に受け継がれてきた公算が大きいとみてよい。

南西部土坑群（第306図）

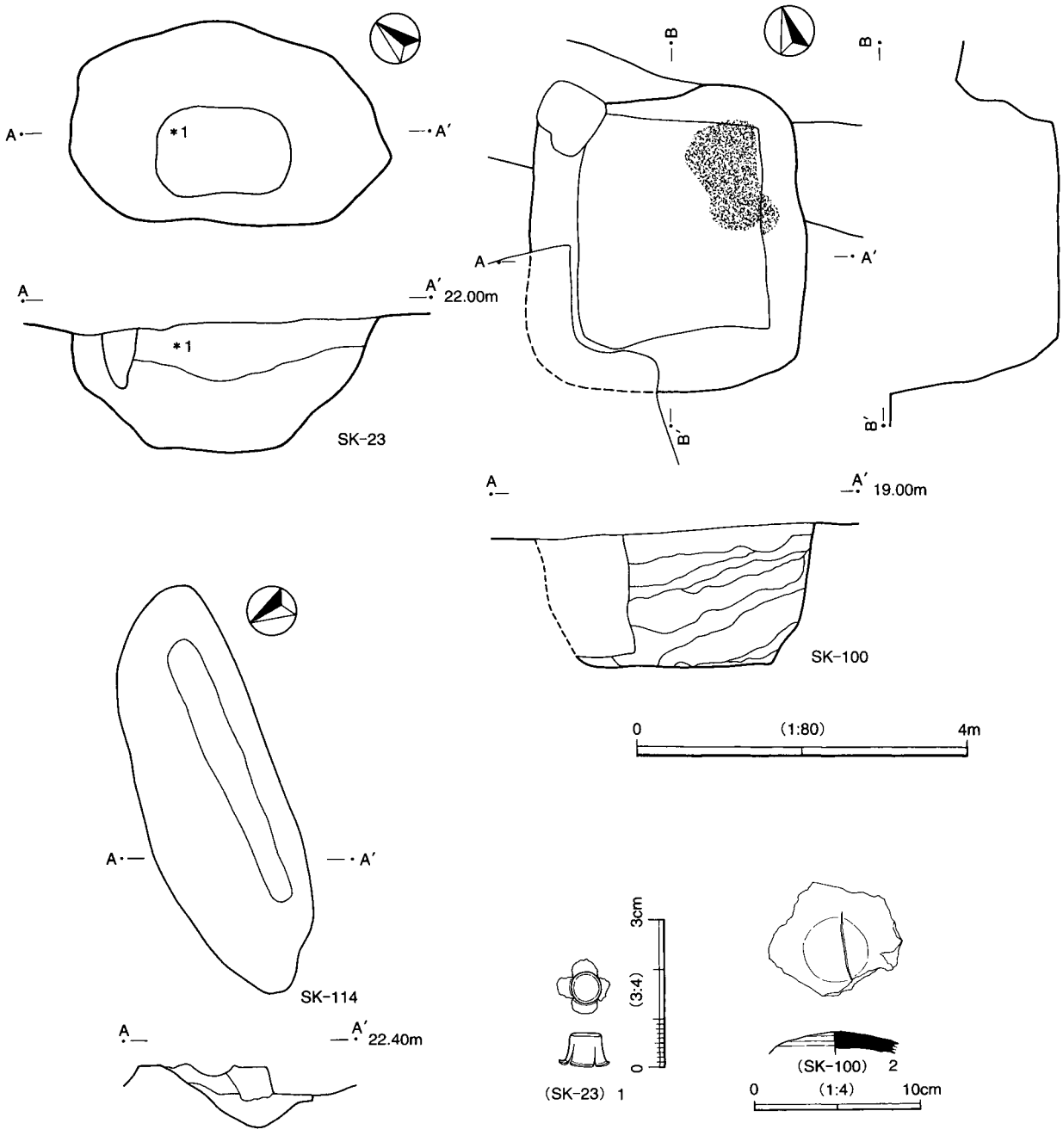
調査区南西隅には50基以上に及ぶ土坑が検出されているが，時期決定根拠には恵まれなかった。土坑分布域であるM28グリッドから銭貨等は採集されておらず，北西土坑群とは性格を異にする。一方で中世陶器片等の散布はみられ，近世陶磁器片は少ないことから，中世の所産が含まれていると考える（本章第４節）。

2．中世の土坑

SK-23（第313図）

台地南部の南端に位置する土坑である。奈良時代のSI-024の西に近接する。平面形態は1.86ｍ×1.23ｍの楕円形を呈し，深さは最深部で84㎝である。底部は平坦で，壁は緩やかに開きながら斜めに立ちあがる。調査時点では，SD-2に沿ってイモ穴が並んでおり，このイモ穴列の延長上に本跡があるとした一方で，形態や土層断面がそれらとは異なるとしている（第７章第１節２項）。覆土はしまりに欠ける。

上層より花弁付竿先金具（１）を検出した。ほかに８㎝大の焼け石が３個出土している。焼け石の出土



第313図　SK-23・100・114と出土遺物

は下記のSK-114のほか柵列のSK-5と共通要素であり，形態上からも中世以降の所産と考える。

SK-100（第313図，図版77）

台地北部の東寄り，北側より入る谷に沿って走るSD-13と重複する土坑である。溝との新旧関係は確認できなかった。底面は約1.3m×1.1mの方形ないし長方形を呈す。床面は平らに整えられ，壁は床から20cmの付近で一度屈曲し，直線的に立ち上がる。床直上に細かい炭化材が堆積していたほか，北東隅の壁が一部被熱により赤化している。これらから調査時には，内部で木材を燃やしたものと観察された。覆土は9層もの分層が可能で，ローム土と黒褐色土の互層を形成しており，短時間に入念な埋戻しがなされたと考えられる。

遺物は覆土中からごくわずか検出されたのみであり，図示した須恵器坏蓋片（2）以外に時期決定できる資料はない。同じくSD-13と重複するSI-114にも古墳時代後期後半の遺物が混入するので，付近に溝により破壊された該期遺構があり，そこから混入した可能性がある。溝との有機的関係を想定すると，平安時代以降と考えるべきであり，中世まで下る可能性がある。

SK-114（第313図）

台地中央部の北西寄りに単独で位置する長方形ないしは長楕円形土坑である。長さ約2.5m，幅約80cm，深さ約50cm以下で，非常に細長い。断面観察では溝状のSD-25に切られるとされたが，周辺の著しい攪乱のためSD-25が遺構として十分把握できず，本跡との関係も明確にはならなかった。

遺物は奈良・平安時代の土器片が中心であったが，8cm大の焼け石5個や，わずかに陶器細片がみられる。遺物総体としては古代であるが，中世まで下る可能性が高い。

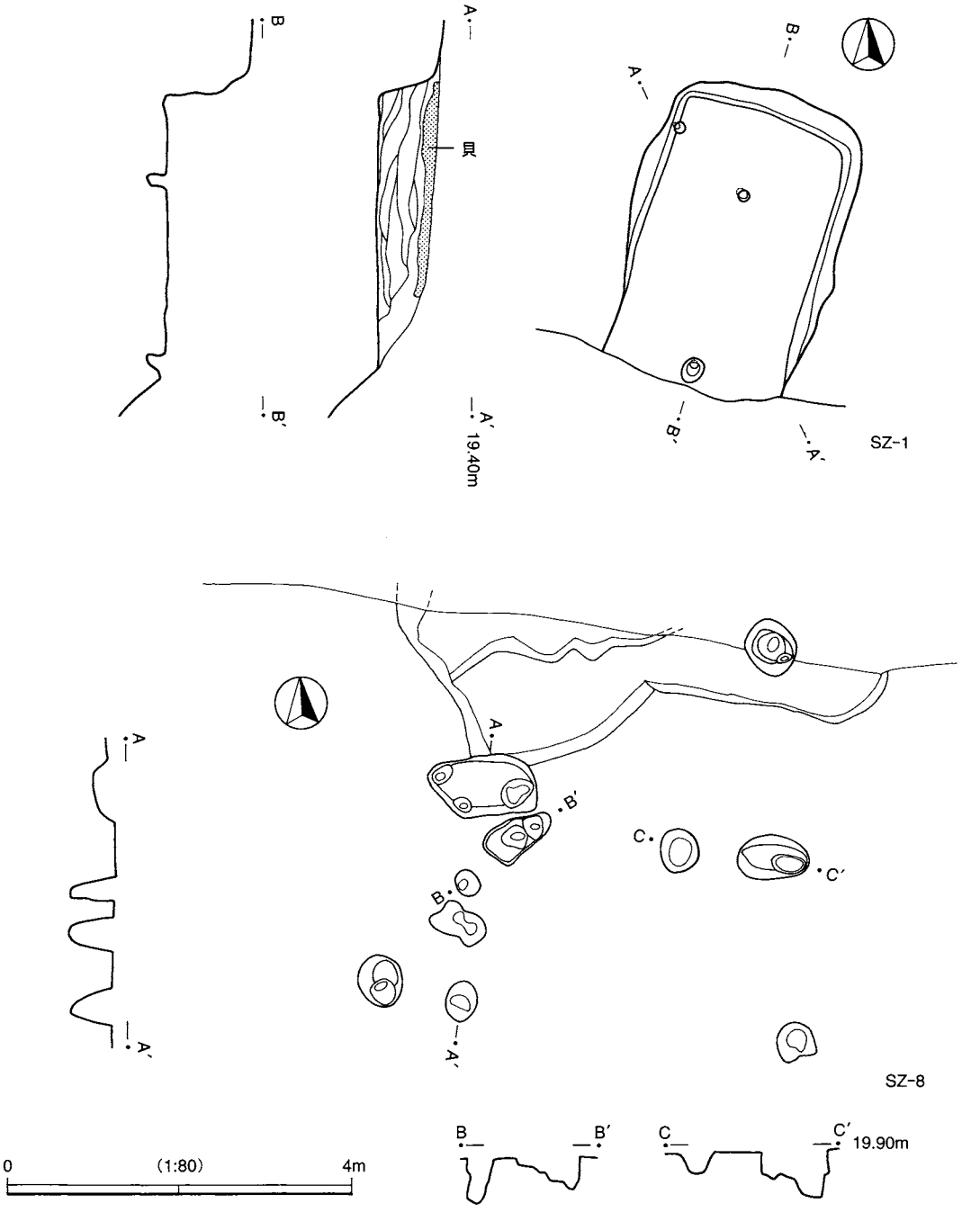
3．中世の建物跡

SZ-1（第314図，図版79）

中野台遺跡に近い調査区北西隅の東寄り，谷の緩斜面に面して位置する竪穴状遺構である。南端を後世の削平によって失う。長軸は推定4.5mで，南北からやや東に振れている。幅は約2.4mである。中軸上に小ピットが2か所並ぶ。また，北西隅寄りにも小ピットを検出した。土層は9層に分けられ，上から3層以下が堆積した時点では，南側の壁はまだ遺存していたと考えられるが，上部2層は，3層以下を斜めに切るような削平が行われたあとに形成されたものである。

最上層には貝の投棄が認められたが，本跡とは直接関係するものではない。貝の内容については第8章で触れる。

遺物はごく少なく，図示できるものはない。下層で黒曜石片が出土しているので，本跡が縄文時代の可能性はある。しかし，貝層内からは中世常滑産とみられる甕や壺片，瀬戸・美濃産とみられるすり鉢片が出土しており，上層が中世に形成されたのは確実である。本跡一帯が平安時代の竪穴住居跡の分布域に挟まれていることや，上記のように中世の墓域に近いことから，むしろそれらの時代における小型竪穴状の建物跡であると考える。



第314図　SZ-1・8

SZ-8（第314図）

中野台遺跡に近い調査区北西隅の北側斜面に面して検出された掘立柱建物跡もしくは土坑群である。径40㎝前後の小ピットからなり，ほぼ東西を主軸とした長方形に並んで見える。その一方，ピット単体では形態的にばらつきがあり，斜めに掘り込まれたものもあるなど，あまり企画性がみられない。

遺物は出土していないが，中世遺物の分布域に所在することから，中世の所産と考える。

第3節　出土銭貨（第315・316図，図版137）

鷲谷津遺跡では35枚の銭貨が出土した。種別，初鋳年代と各部計測値は第51表のとおりである。

特筆されるのは和同開珎（1）の出土である。しかも，奈良時代竪穴住居跡であるSI-127から出土している点で，同時期における貨幣流通史を探る上での資料的価値は極めて高い。

文字部分は完全に錆で覆われていて肉眼では判読できない（第6章第1節1項）。X線写真により読みとれた図像をそのまま実測したのが（1）である。これによれば，均整のとれた伸びやかな「新和銅」と呼ばれる，銀銭にはない字体のものであることがわかる。X線写真では図示した上部右側の穿孔と，左右対称位置にも穿孔らしい影が認められるが，意図的な造作であるかについては確認できない。

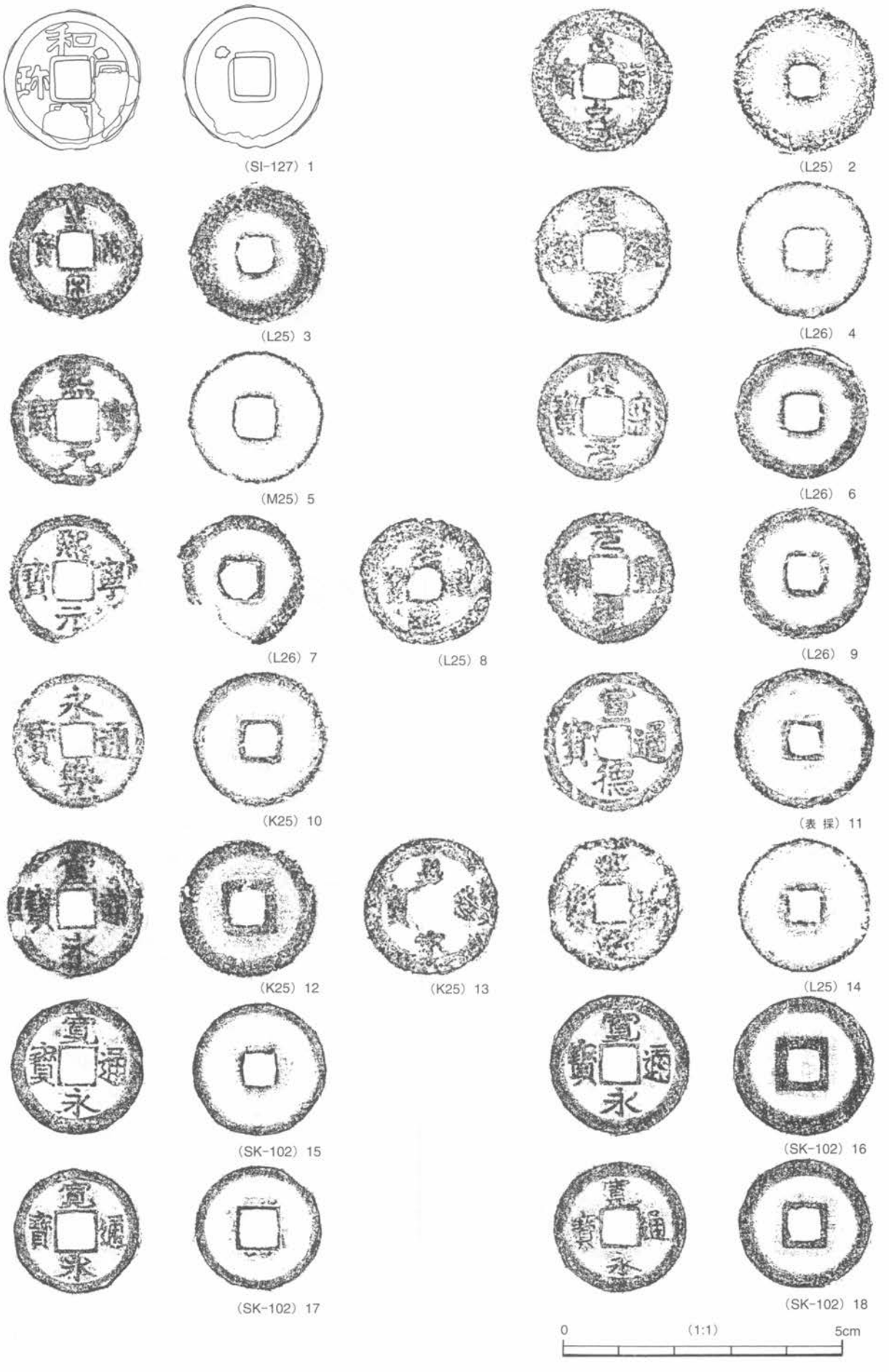
中世銭貨はいずれも北宋から明時代にかけて中国で鋳造された銅銭である（2～11）。遺構からの出土例はなく，グリッドでしか位置を把握できないが，グリッド番号のアルファベットが西から順につけられていることに注目すると，中世銭貨はK～Mの付く西方のグリッドを中心に分布している。とくに，調査区北西隅のL25・L26グリッドにおいて北宋銭・明銭が集中する（2～4・6～8）。ただし，この傾向は調査区北西隅に限られ，調査区南西隅では銭貨が採集されていない。

一方，寛永通宝などの近世銭貨はM～Nのグリッド，すなわちやや東方の台地主要部で多く出土しており，西方には少ない（12～31）。このうち確実に遺構に伴うのがN25グリッドにあるSK-102の六道銭（15～20）であり，このNのグリッドに至っては寛永銭しかみられない。

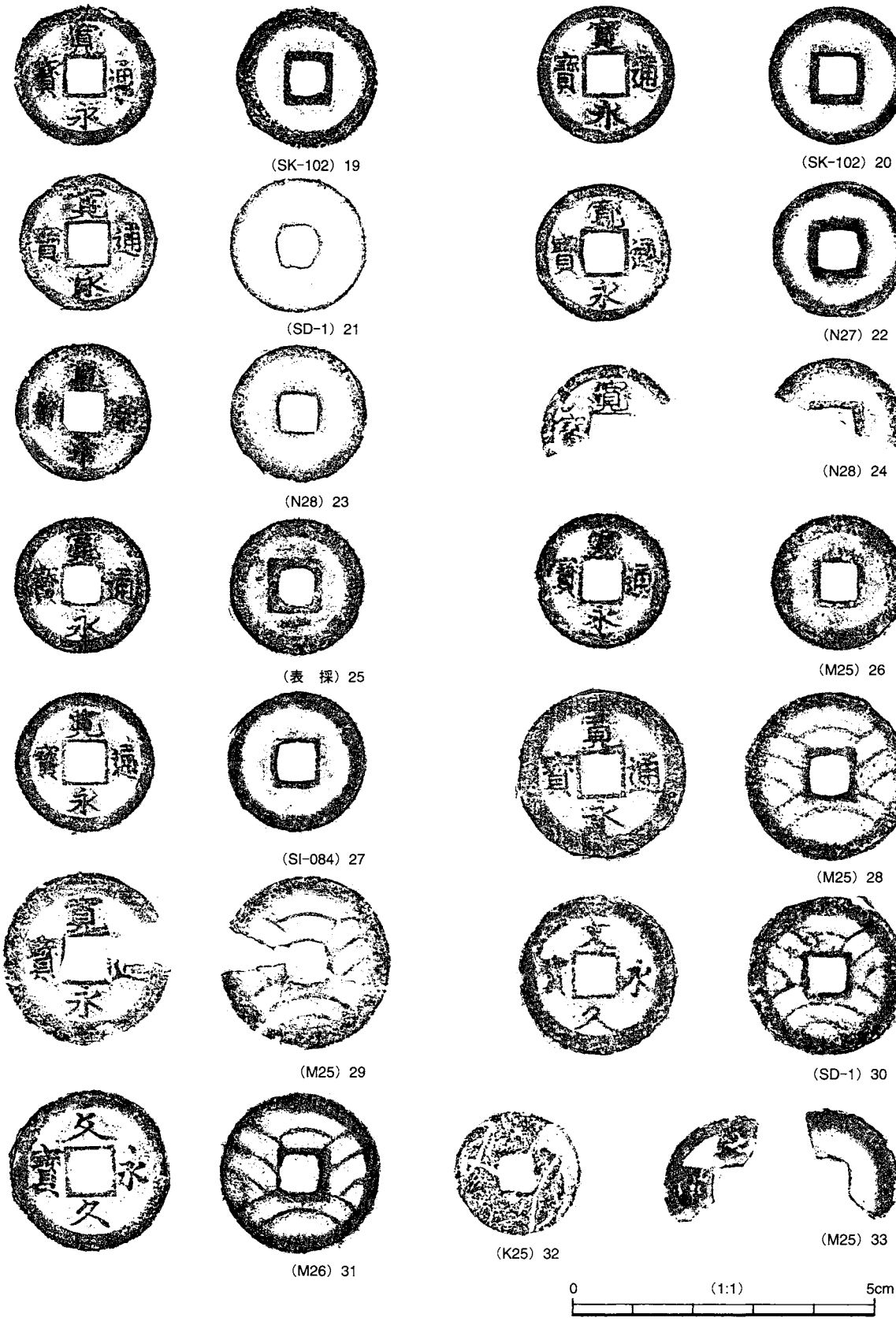
このように，銭貨は中野台遺跡に近い調査区北西隅においては中世の北宋銭・明銭が中心であり，中間

第51表　鷲谷津銭貨計測表

挿図番号	遺構番号	遺物No.	種類（書体等）	初鋳年	外縁外径	外縁内径	内縁外径	内縁内径	外縁厚	文字面厚	重量
1	SI-127	5	和同開珎　新和同，銅銭	708	24.48	20.56	8.53	6.45	1.31	1.11±	2.23
2	L25-16	12	至道元宝　北宋，銅銭(行書体)	995	25.30	17.15	7.05	6.00	1.60	1.50	4.05
3	L25-17	3	皇宋通宝　北宋，銅銭(篆書)	1039	24.15	16.90	7.55	6.15	1.03	1.06	2.41
4	L26-23	2③	皇宋通宝　北宋，銅銭(篆書)	1039	24.50	19.50±	8.10±	6.90	1.20	1.28±	3.15
5	M25-15	9	熙寧元宝　北宋，銅銭	1068	24.05	19.95	8.50	7.00	0.98	1.10	2.40
6	L26-23	2①	熙寧元宝　北宋，銅銭	1068	23.85	18.80	8.25	6.30	1.35	1.16	3.66
7	L26-23	3	熙寧元宝　北宋，銅銭	1068	—	—	7.80	6.45	1.30±	1.14	1.97
8	L25-19A	2②	元豊通宝　北宋，銅銭(篆書)	1078	24.05	18.30	7.70	5.50	1.30	1.18	3.65
9	L26-23	1	元祐(符)通宝　北宋，銅銭(篆書)	祐1086，符1098	24.50±	17.10	7.15±	5.75	1.30	1.25	2.43
10	K25-13	1	永楽通宝　明，銅銭	1408	24.30	20.50	7.15	5.65	1.75	1.55	4.81
11	表採	⑯	宣徳通宝　明，銅銭	1433	25.30	20.45	6.55	5.30	1.43	1.48	4.01
12	K25-7A	⑫	寛永通宝　古寛永，銅銭	1636～	24.80	20.20	7.40	5.85	1.00	0.88	2.20
13	K25-20A	10	寛永通宝　銅銭	1636～	24.25	17.85	—	—	1.15	1.13	2.21
14	L25-20	1	寛永通宝　銅銭	1636～	24.10	19.35	—	5.75	1.23	—	2.85
15	SK-102	4a	寛永通宝　古寛永，銅銭	1636～	24.30	18.70	7.10	5.80	0.93	0.90	2.61
16	SK-102	4d	寛永通宝　古寛永，銅銭	1636～	25.45	19.90	7.60	5.90	1.20	0.88	3.45
17	SK-102	4b	寛永通宝　新寛永，銅銭	1668～	23.10	18.65	7.95	6.25	1.20	1.03	3.13
18	SK-102	4c	寛永通宝　新寛永，銅銭	1668～	24.10	19.00	7.25	5.85	1.15	0.81	2.85
19	SK-102	4e	寛永通宝　新寛永，銅銭	1668～	23.55	18.35	7.60	5.95	1.20	0.90	2.35
20	SK-102	4f	寛永通宝　新寛永，銅銭	1668～	23.05	18.70	7.90	6.20	1.03	0.81	2.38
21	SD-1	8	寛永通宝　新寛永，銅銭	1668～	23.10	19.15	7.85	6.80	1.05	0.93	2.02
22	N27-23	3	寛永通宝　新寛永，銅銭	1668～	23.00	18.70	8.20	6.45	1.03	0.81	2.13
23	N28-10	1	寛永通宝　新寛永，銅銭	1668～	23.10	18.45	7.95	6.20	0.98	0.90	2.48
24	N28-14D	5①	寛永通宝　新寛永？，銅銭	1668～	—	—	—	—	1.03	0.73	0.95
25	表採	⑧	寛永通宝　新寛永，銅銭	1668～	22.75	18.00	7.30	5.85	0.93	0.79	2.35
26	M25-14	9	寛永通宝　新寛永，銅銭(背佐？)	1668～(1714～)	22.45	17.10	7.90	6.40	1.18	1.03	2.25
27	SI-084	283③	寛永通宝　新寛永，銅銭(虎ノ尾寛小字)	1668～(1736～)	23.40	18.50	7.70	6.50	1.03	0.96	2.69
	N27-14	3⑦	寛永通宝　新寛永，鉄銭	1739～	—	—	—	—	1.25	—	1.00
28	M25-13	1	寛永通宝　新寛永四文，銅銭(正字11波)	1768～(1769～)	28.10	20.65	8.35	6.55	0.98	0.94	3.46
29	M25-15	8	寛永通宝　新寛永四文，銅銭(正字11波)	1768～(1769～)	27.95	20.70	8.20	6.50	1.10	1.28	3.97
30	SD-1	4	文久永宝　銅銭(深字)	1863～	26.40	19.80	8.15	5.80	1.05	0.96	3.59
31	M26-17	38	文久永宝　銅銭(草文)	1863～	26.95	21.10	8.55	6.75	1.25	1.19	4.59
32	K25-07	12	—　銅銭	—	20.95	—	7.50±	5.65	1.15±	—	2.12
33	M25-12cdhi	4	—　銅銭	—	—	—	—	—	1.05	—	0.82
	K25-20B	11	—　銅銭	—	24.70	19.40	—	6.90	1.25	1.14	1.67


(SI-127) 1
(L25) 2
(L25) 3
(L26) 4
(M25) 5
(L26) 6
(L26) 7
(L25) 8
(L26) 9
(K25) 10
(表採) 11
(K25) 12
(K25) 13
(L25) 14
(SK-102) 15
(SK-102) 16
(SK-102) 17
(SK-102) 18
0
(1:1)
5cm

第315図　出土古銭（1）


(SK-102) 19
(SK-102) 20
(SD-1) 21
(N27) 22
(N28) 23
(N28) 24
(表 採) 25
(M25) 26
(SI-084) 27
(M25) 28
(M25) 29
(SD-1) 30
(M26) 31
(K25) 32
(M25) 33
0
(1:1)
5cm

第316図　出土古銭（2）

にあたるM25グリッド周辺で次第に寛永銭が多くなり，さらに東では寛永銭で占められるようになる。つまり，中世に始まる連続的な営みが次第に西から東へと移行していった蓋然性が高いと概括できる。

第４節　遺構外出土遺物

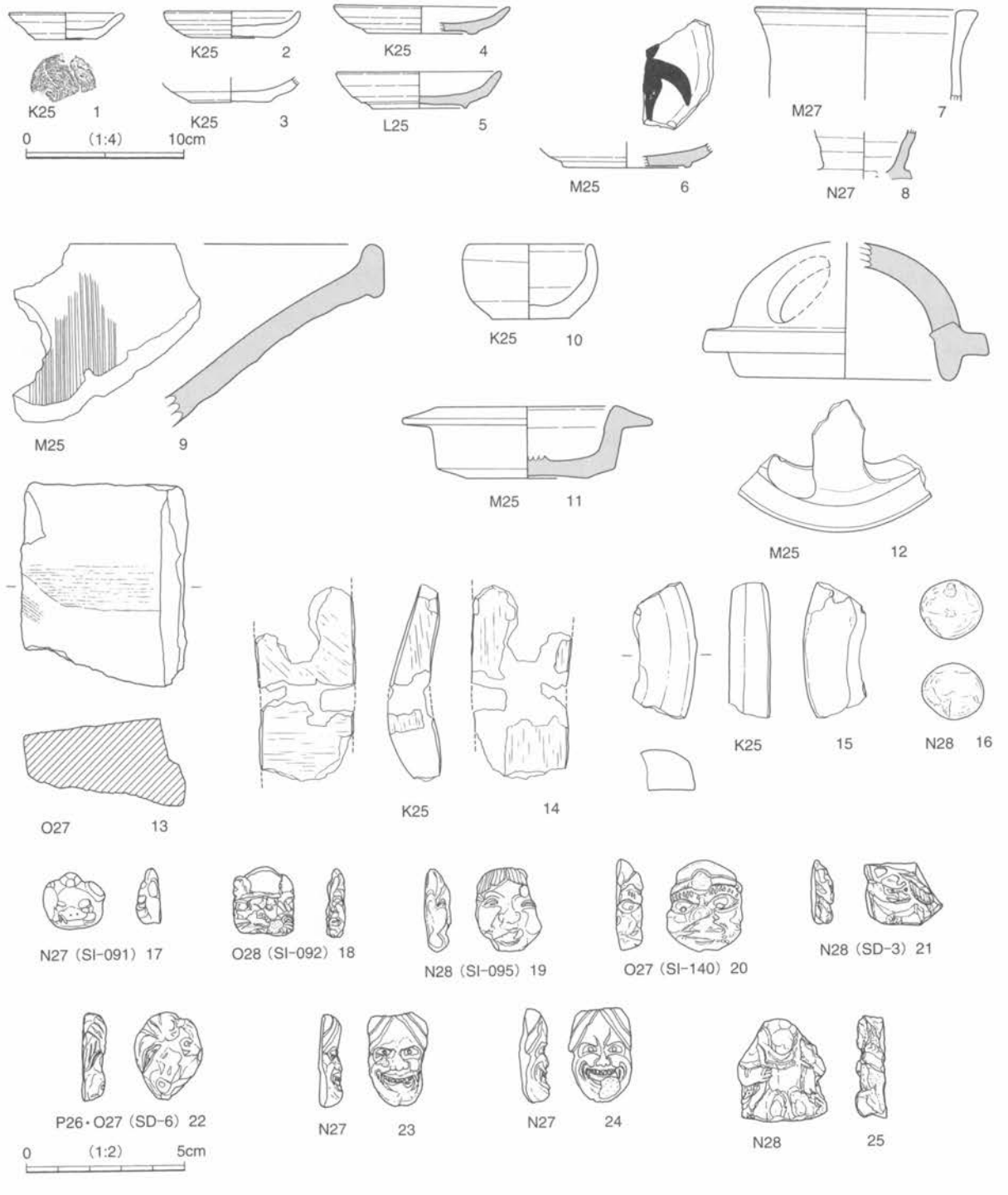
中世以降とみられる遺物は，主として鷲谷津遺跡Ｄ区にあたる台地北部の斜面から谷中にかけて多く分布する（第317図，図版136)。とくに調査区北西隅以北のK25～M25グリッドには，カワラケや陶器などの良好な中世遺物が分布しており，隣接の中世遺跡である中野台遺跡と直接的に関係する遺物群であることがうかがわれる。カワラケ（１～３）はいずれもロクロ製の底部糸切り無調整で，極めて浅い。中世瀬戸・美濃産すり鉢（９）は，大窯期１期新段階（16世紀初頭）とみられる。中世陶器の香炉蓋（12）は，二次的に白く焼けただれている。全面に灰釉をかけた中世瀬戸・美濃産皿（５）は，大窯期３期古段階（16世紀第Ⅲ四半期）とみられる。志野焼丸皿（４）は，大窯期５期（17世紀前葉）とみられる。瀬戸・美濃産の灰釉鉄絵皿（６）は近世初頭に卓越する。素焼き盃（10）は近世の所産である。上面に灰釉を施した燭台（11）も近世である。

一方，西側の谷に面した西部緩斜面から調査区南西隅にかけてのM27・M28グリッドも，細片ながら中世遺物が多い場所である。M27グリッドでは中世瀬戸・美濃産香炉片やすり鉢片とともに中国青磁の破片が採集されている。M28では白釉の陶器皿片などがあり，これらを併せると中世陶器片が19点もあるのに対し近世陶磁器片はわずかに５点しかなく，中世遺物の卓越が認められる。

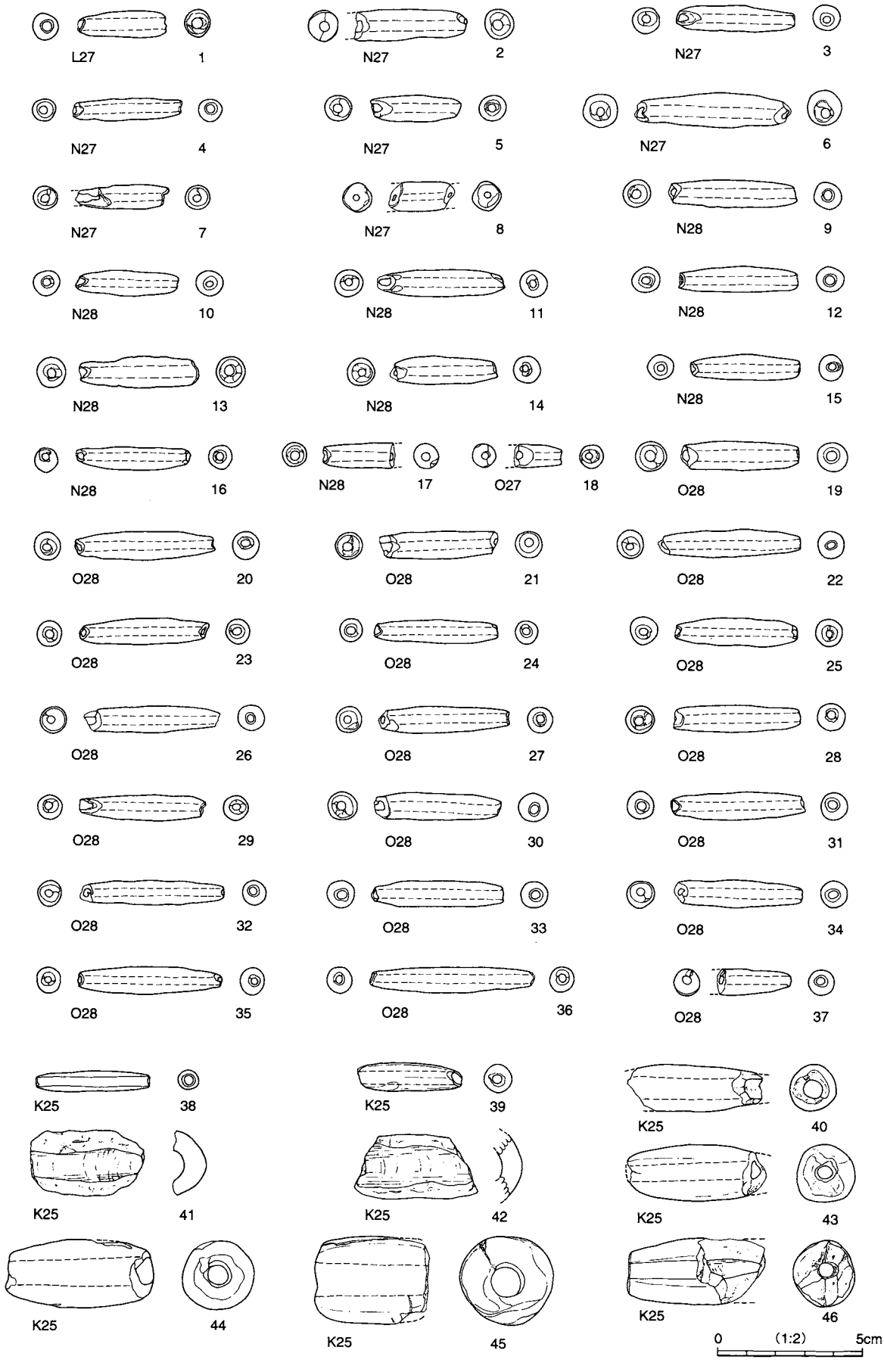
これに対し，台地主要面にあたるN27・28，O27・28グリッドは，近世陶器の灯明具（８）や泥面子（17～25）があり，中世陶器片等10点に対し近世陶磁器片は75点以上と後者が圧倒的多数を占める。

このように，調査区北西隅で中世陶器片等が卓越し，東では少ない。この状況は，銭貨の出土状況と対応している。また，調査区南西隅では銭貨が出土していないのに，中世陶器等の散布が認められた。これは，中世に北西隅と異なる土地利用がなされていた証拠と考える。

このほか，多量の管状土錘が出土しているが，形態から時期を推し量ることが難しいのでここにまとめて報告する（第318図，図版138・139)。このうち，Ｃ区の台地主要面から出土しているもの（１～39）に対し，Ｄ区の台地斜面や谷中からの出土遺物（40～46）は，両者に大きさや形態の相違が認められる点は注目される。小型で斉一性の高い前者は，奈良時代と平安時代の集落が所在する台地主要面からの出土であることから，当該期の所産であると考えられる。後者は中世主体の中野台遺跡と古墳時代主体の地蔵山遺跡の間の谷にあたり，両者の関連遺物が混在しているとみられる。



第317図　中近世遺構外出土遺物


L27 1
N27 2
N27 3
N27 4
N27 5
N27 6
N27 7
N27 8
N28 9
N28 10
N28 11
N28 12
N28 13
N28 14
N28 15
N28 16
N28 17
O27 18
O28 19
O28 20
O28 21
O28 22
O28 23
O28 24
O28 25
O28 26
O28 27
O28 28
O28 29
O28 30
O28 31
O28 32
O28 33
O28 34
O28 35
O28 36
O28 37
K25 38
K25 39
K25 40
K25 41
K25 42
K25 43
K25 44
K25 45
K25 46
0 (1:2) 5cm

第318図　管状土錘

第８章　貝・骨等の遺存体

第１節　貝サンプルの分析結果

平安時代の遺構内貝層２か所，遺構上の面状貝層１か所及び古代または中世遺構上の面状貝層１か所を調査した。平安時代の３か所の貝層は伴出土器に若干の差がみられるが，土器の示す時期と貝層の堆積時期がある程度ずれる可能性が高いことを考えると，９世紀後半から10世紀前半という幅でとらえるのが妥当と思われる。

貝サンプルは9.52㎜，４㎜，２㎜，１㎜メッシュの試験フルイによる水洗分離を経て，選別を行った。貝類の同定は，当センター所蔵の貝類標本（『研究紀要』19　千葉県文化財センター　1999）を用い，伊藤智樹と西野雅人が行った。なお，一部のサンプル中で多くの微小貝を検出したが、分析を行っていない。貝類のほかにSI-011でエイの歯版片が検出された。

千葉寺地区では中野台遺跡と観音塚遺跡でも古代と中世を中心とした多数の貝層が調査され，サンプルの分析結果を報告する予定がある。また，同じく村田川右岸の低地に面した千葉東南部地区・市原市千原台地区でも多くの貝サンプルの分析をすすめている。したがって，比較検討は今後の報告で併せて行うこととし，今回は事実記載を中心に行う。

１．出土状況

（１）SI-002A

住居跡の床面に堆積した1.２ｍ×0.９ｍ，厚さ10㎝ほどの混貝土層である。草の根が多くふかふかしていて攪乱層ともみられたが，住居跡床面を壊さず面的に堆積しているので，放棄された掘込みに廃棄されたものと考える。層の一部を任意にサンプリングした。掲載された土器群は貝層付近に中心があるので，貝層の時期（９世紀中葉から後葉）を示す可能性が高い。イボキサゴが組成の96％ほどを占めている。

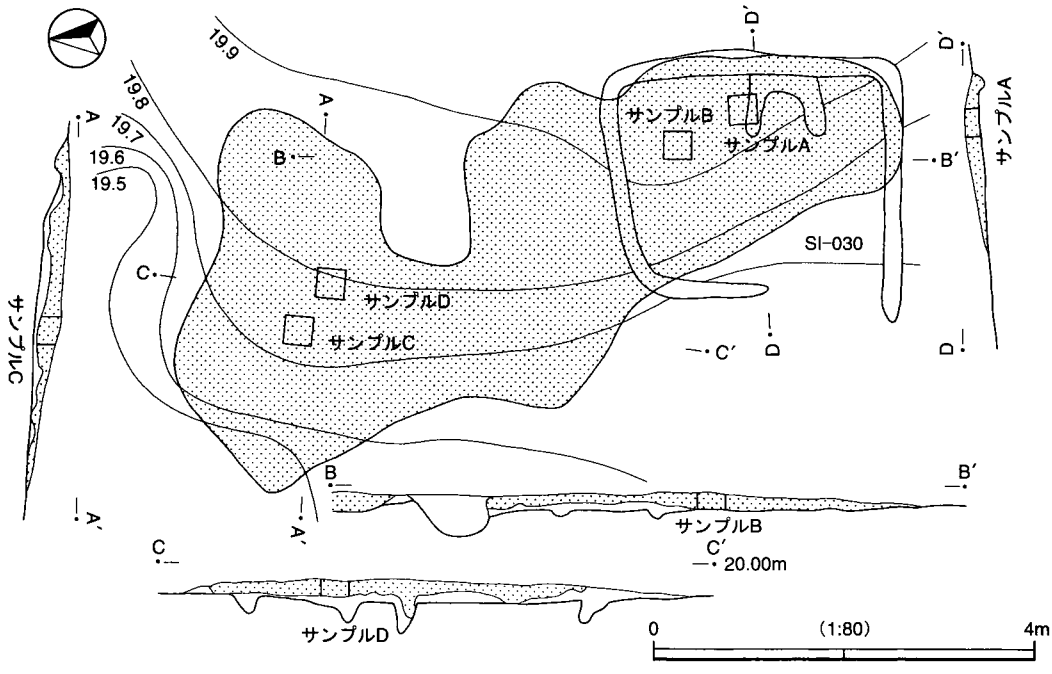
（２）SI-011A

貝層の堆積範囲には，奈良時代のSI-107と平安時代のSI-011Aが重複している。図では貝層の範囲が時代の新しいSI-011Aの壁から若干はみ出しているが，この住居跡の覆土中に堆積した可能性が高い。一部は調査区外に続いている。調査範囲での貝層の規模は，0.７ｍ×0.６ｍ，厚さ10㎝～15㎝である。貝層の時期は，遺構出土土器の示す９世紀末からそれほど離れないものとみられる。

（３）SI-030

長さ８ｍ×幅２～３ｍ，面積22.6㎡ほどの古代としては大きな貝層である。厚さの平均約15㎝として算出した体積は約3400ﾘｯﾄﾙである。貝層は，SI-030から住居外の緩斜面にかけて面状に広がる。住居跡の床面を直接覆っており，多くの土器を伴う。住居の廃絶後に，掘込みとその周辺がごみ捨て場となったものと考えられ，その形成時期は10世紀前半と推定される。

４か所でコラムサンプルが採取された。選別・集計はカットごとに行ったが，貝層は分層できず，集計の結果を見てもほとんどカットごとの変化が見られなかったので，報告はコラムサンプルごとにまとめることにした。４か所のサンプルのうち，Ａ・ＢとＣ・Ｄでは種構成やサイズの分布に差がみられる。貝殻



第319図　SI-030貝層分布図

の遺存状態はきわめて悪く，破砕率が高い。

（4）SZ-1

２m×４mの長方形の遺構が埋まりきってから，斜面に貝層を形成している。伴出土器は貝層に近い部分で中世陶器片１点，遺構覆土から須恵器・土師器片が各１点あるのみで，貝層と遺構の時期は不明確である。サンプル一覧では古代または中世としたが，この時代に限定するのも無理があるかもしれない。後に述べるように，貝種組成・大きさとも，平安時代の３つのサンプルとの差が目立っている。

２．貝種組成

４つの貝層から15種を検出した。主要な構成種であるイボキサゴ，アサリ，ハマグリ，シオフキガイ，マテガイは内湾砂底種であり，遺跡から近い干潟で採取が可能であったとみられる。ウミニナ科，アラムシロガイ，スガイ，マガキの幼貝は，イボキサゴ主体のサンプルで多いことから，混獲されたものと考えられる。村田川流域の貝塚に一般的にみられる特徴を示しており，希少種や，他の海岸から持ち込まれた可能性を示す種は認められなかった。

遺構別にみると，SI-002Aでイボキサゴが圧倒的に多いのに対して，SI-011A・SI-030・SZ-1では比較的多くの種がみられる。SI-011Aはイボキサゴとアサリが拮抗する。SI-030ではイボキサゴが半分を占め，ハマグリ，シオフキガイ，カガミガイ，アサリ，マテガイの５種が残りの半分近くを占めている。大きな貝層であり，複数の漁で採取されたものが混じった結果であろう。ところで，カガミガイは比較的よく採取できるにもかかわらず，あまり市場に出ない貝である。食用とするかどうかは地域差がみられ，当地では現在も，また縄文時代も価値が低いようである。このようにまとまって検出される例はきわめて少ない。SZ-1ではイボキサゴを除くとシオフキガイ，アサリが多く，サルボウガイもかなり多く混じる。

第52表　貝サンプル一覧

サンプル名	遺構	時期	詳細	採取ﾘｯﾄﾙ	備考	グリッド
SI002A	住居跡	平安	9C 中～後	36.8		N28-02
SI011A	住居跡	平安	9C 末	12.4		N28-24
SI030	面状貝層	平安	10C 前	96.7	以下のコラムサンプル 4 か所	M28-04
-A	(住居跡上)			19.5	30×30×5 cmを 4 カット	
-B				18.8	30×30×5 cmを 4 カット	
-C				28.2	30×30×5 cmを 6 カット	
-D				14.7	30×30×5 cmを 5 カット	
SZ001	面状貝層	古代 or 中世		15.5	時期・性格不明竪穴上	M26-21

第53表　貝類種名一覧

原始腹足目		
ニシキウズガイ科	イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) moniliferum*
	スガイ	*Lunella coronata coreensis*
中腹足目		
ウミニナ科	ウミニナ科	Potamididae gen. & sp. Indet.
タマガイ科	ツメタガイ	*Glossaulax didyma*
新腹足目		
アクキガイ科	アカニシ	*Rapana venosa*
ムシロガイ科	アラムシロガイ	*Reticunassa festiva*
フネガイ目		
フネガイ科	サルボウガイ	*Scapharca subcrenata*
ウグイスガイ目		
イタボガキ科	マガキ	*Crassostrea gigas*
マルスダレガイ目		
バカガイ科	シオフキガイ	*Mactra quadrangularis*
	バカガイ	*Mactra chinensis*
マテガイ科	マテガイ	*Solen strictus*
マルスダレガイ科	カガミガイ	*Phacosoma japonicum*
	アサリ	*Ruditapes philippinarum*
	ハマグリ	*Meretrix lusoria*
	オオノガイ	*Mya arenaria oonogai*
計	10 科	15 種

第54表　貝種同定結果

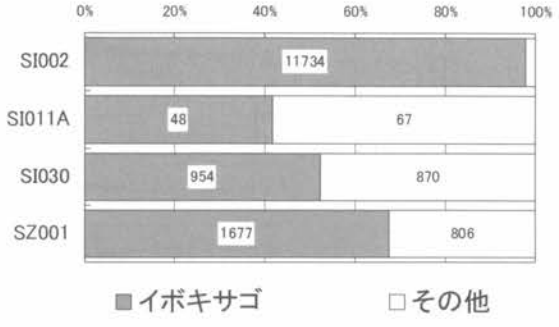
	SI002A	SI011A	SI030-A	SI030-B	SI030-C	SI030-D	SZ001
イボキサゴ	11734	48	269	237	157	291	1677
スガイ	5		6	6		2	
ウミニナ科	69		3	3	4		3
ツメタガイ	2	1	6	4	7	2	
アカニシ	1			1			
アラムシロガイ	180	1	16	17	3	2	26
サルボウガイ	1		3	4	9	2	63
マガキ	1						
シオフキガイ	28	4	35	28	56	42	491
バカガイ			1	1	4	1	
マテガイ	29		10	17	17	10	
カガミガイ	5	1	49	32	56	49	1
アサリ	148	51	16	21	22	17	213
ハマグリ	22	10	76	74	110	72	38
オオノガイ					1	1	
合　計	12247	116	490	445	446	491	2512

第55表　貝種組成

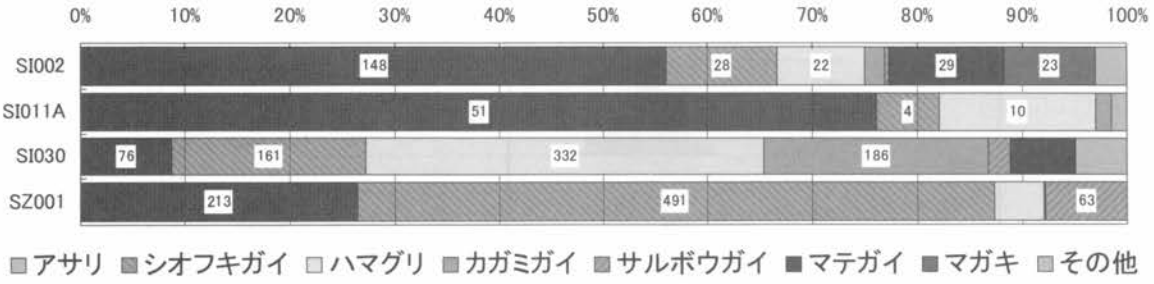
	SI002	SI011A	SI030	SZ001
イボキサゴ	11734	48	954	1677
シオフキガイ	28	4	161	491
ハマグリ	22	10	332	38
アサリ	148	51	76	213
カガミガイ	5	1	186	1
サルボウガイ	1		18	63
マガキ	23			
マテガイ	29		54	
その他	8	1	43	
合　計	11998	115	1824	2483

混入とみられるウミニナ科、アラムシロガイを除いた。

a. イボキサゴとその他の種の比率



b. イボキサゴを除いた組成



第320図　貝種組成

第56表　貝類計測値分布

イボキサゴ殻径

mm	SI002A		SZ001	
-10.0				
-11.0				
-12.0				
-13.0			7	3.5%
-14.0			47	23.5%
-15.0	3	1.5%	58	29.0%
-16.0	21	10.5%	52	26.0%
-17.0	58	29.0%	28	14.0%
-18.0	28	14.0%	7	3.5%
-19.0	34	17.0%	1	0.5%
-20.0	36	18.0%		
-21.0	16	8.0%		
-22.0	1	0.5%		
-23.0	3	1.5%		
-24.0				
-25.0				
-26.0				
試料数	200	100%	200	100%
平均	17.85		14.84	
標準偏差	1.67		1.15	

ハマグリ殻長

mm	SI002A	SI011A	SI030計
-15.0	5		
-20.0	4		1
-25.0			1
-30.0			4
-35.0			9
-40.0		2	15
-45.0		1	12
-50.0	1		7
-55.0	3		4
-60.0	1		5
-65.0			1
-70.0			2
-75.0			3
-80.0			3
-85.0	1		9
-90.0			3
-95.0			1
試料数	15	3	80
平均	31.83	39.17	51.13
標準偏差	22.28	2.36	19.35

サルボウガイ殻長

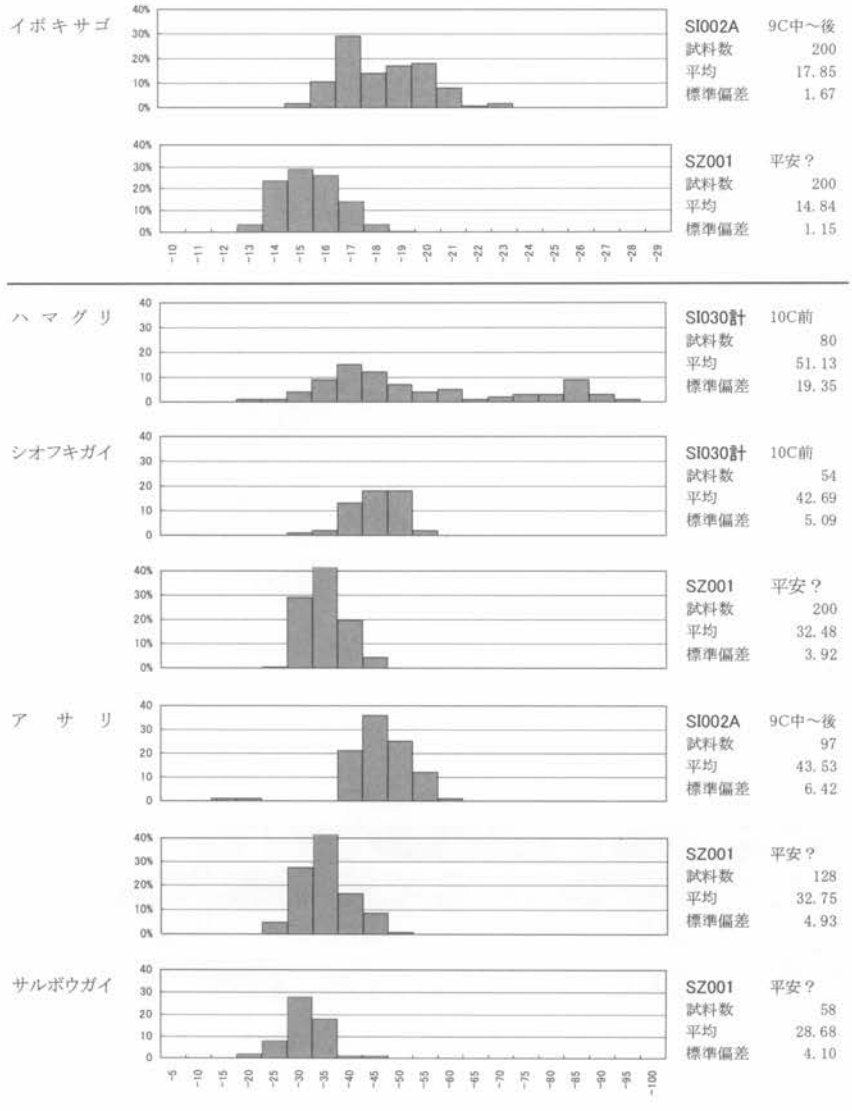
mm	SZ001
-15.0	
-20.0	2
-25.0	8
-30.0	28
-35.0	18
-40.0	1
-45.0	1
-50.0	
-55.0	
-60.0	
-65.0	
-70.0	
-75.0	
-80.0	
-85.0	
-90.0	
-95.0	
試料数	58
平均	28.68
標準偏差	4.10

シオフキガイ殻長

mm	SI002A	SI030計	SZ001	
-15.0	1			
-20.0				
-25.0			1	0.5%
-30.0		1	58	29.0%
-35.0	1	2	93	46.5%
-40.0		13	39	19.5%
-45.0	3	18	9	4.5%
-50.0	3	18		
-55.0		2		
-60.0				
試料数	8	54	200	100%
平均	39.38	42.69	32.48	
標準偏差	11.16	5.09	3.92	

アサリ殻長

mm	SI002A	SI011A	SI030計	SZ001	
-15.0	1				
-20.0	1				
-25.0				6	4.7%
-30.0				35	27.3%
-35.0			1	54	42.2%
-40.0	21	3	6	21	16.4%
-45.0	36	5	9	11	8.6%
-50.0	25	1	9	1	0.8%
-55.0	12	1	1		
-60.0	1				
試料数	97	11	27	128	100%
平均	43.53	41.59	42.69	32.75	
標準偏差	6.42	5.14	5.00	4.93	



第321図　貝類計測値分布

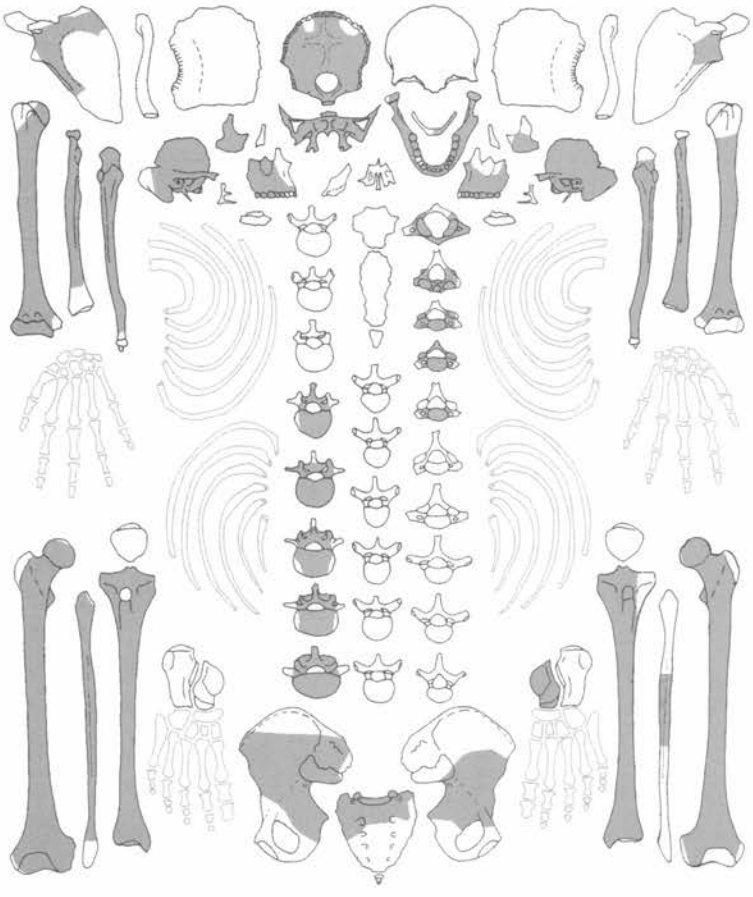
3．貝殻のサイズ

平安時代のSI-002A・SI-011A・SI-030と，時期不明のSZ-1ではかなり異なっている。前者は当地域の縄文貝塚の貝に比べて，かなり大きな個体が目立つが，後者ではどの種もやや小ぶりなものが多い。

SI-002 Aの1㎝～2㎝のアサリの幼貝はイボキサゴに混じって採取されたものとみられる。SI-030のハマグリはきわめてサイズのばらつきが大きく，2㎝ほどの幼貝から，9㎝を超える大型貝まで採取している。計測値分布のグラフをみると，4㎝～5㎝と8㎝～8.5㎝の2つのピークがある。サンプルA・Bには前者が，サンプルC・Dには後者が多いので，複数の漁に由来する，サイズの平均と分布の異なるデータが交じり合った結果と考えられる。試料数が少ないため，合計の数値のみを示したものである。

第2節　出土人骨

SK-102出土の埋葬遺体について，歯牙の同定分析は渡辺新氏に依頼し，それ以外は西野雅人が行った。遺体の保存状態は良くないが，ほぼ全身骨が遺存する。遺存部位はスケルトンマップ（第322図）の網掛け部分である。ただし，手足の骨と肋骨は同定せず，椎骨の一部など同定できなかった破片も多い。頭蓋は破片のみであった。大坐骨切痕が広いことから女性であろう。年齢は，第3大臼歯がすべて萌出していて，咬耗がほとんど進んでいないことから，壮年前期と推定される。なお，下顎左の第3大臼歯には咬合面に齲蝕がある。歯牙の計測値・観察結果は第57表に示す。[藤井1960]の方法による推定身長は149.97㎝ある。推定式（女性の大腿骨）は身長＝大腿骨全長×2.24＋61.043である。



第322図　SK-102人骨遺存部位

第57表　歯牙データ

歯種		保存	歯冠計測値		咬耗	齲蝕	形態観察
		冠／根	m-d	b-l			
上右	I1	○／○	8.5	7.1	1	0	シャベル形[S]
	I2	保存なし					
	C	保存なし					
	P1	○／○	7.2	9.6	1	0	
	P2	○／○	7.3	10.1	1	0	
	M1	○／○	10.7	12.4	2	0	咬頭[4]
	M2	○／○	9.8	12.7	1	0	咬頭[4-]
	M3	○／○	7.5	9.2	0	0	咬頭退化形, 単根
上左	I1	歯槽閉鎖途					
	I2	○／○	7.1	6.3	1	0	シャベル形[S], 近心方斜咬耗, 唇面黒灰色斑
	C	○／○	7.2	7.9	1	0	
	P1	○／○	7.0	9.3	1	0	エナメル質減形成
	P2	○／○	7.3	9.6	1	0	
	M1	○／○	10.4	12.5	2	0	咬頭[4]
	M2	○／○	9.5	12.1	1	0	咬頭[4-]
	M3	保存なし					歯冠ヒダ
下右	I1	歯槽閉鎖					
	I2	歯槽閉鎖					
	C	○／○	7.0	(7.9)	1	0	エナメル質減形成, 頬側面頸部歯石
	P1	保存なし					
	P2	保存なし					
	M1	○／○	12.3	11.4	2	0	Y5
	M2	○／○	11.6	10.2	1	0	+4
	M3	○／○	12.0	10.7	1'	0	
下左	I1	歯槽閉鎖					
	I2	○／○	6.3	5.8	2	0	遠心方斜咬耗
	C	○／○	7.0	7.5	2	0	
	P1	○／○	7.0	7.8	1	0	
	P2	○／○	7.7	9.2	1	0	
	M1	○／○	12.3	11.4	2	0	Y5
	M2	○／○	11.6	10.3	1	1	X4+1, 第6咬頭[3], 遠心面頸部齲蝕
	M3	○／○	11.1	10.3	1'	1	歯冠ヒダ, 単根, 咬合面齲蝕

第9章　考察

第1節　旧石器時代

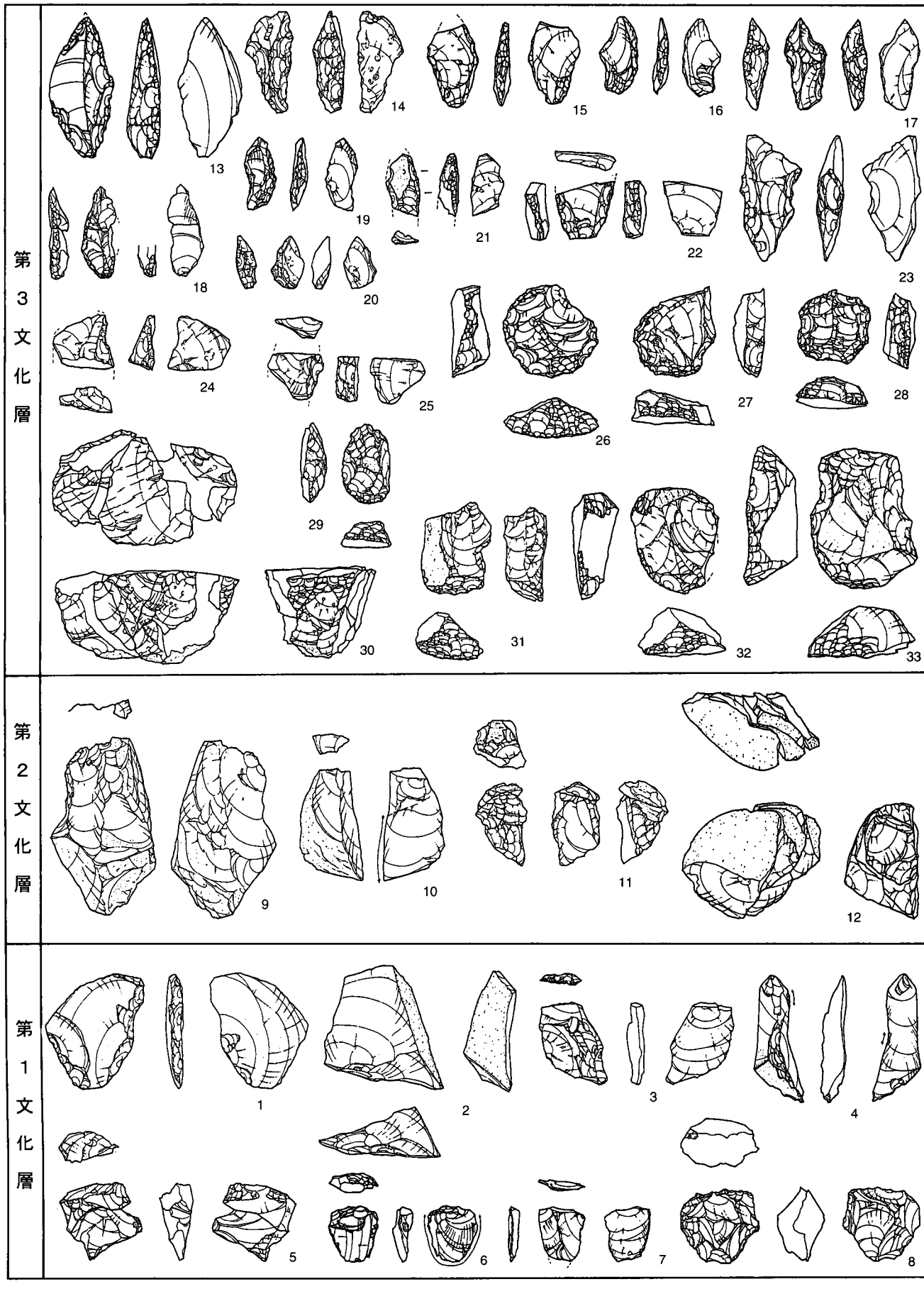
1．石器群の位置付け（第323図）

本遺跡では，22か所の石器ブロックとその周辺部，単独出土地点，上層遺構内から合計677点の旧石器時代石器群が出土し，これらを3枚の文化層に区分した。

第1文化層は，立川ローム層第2黒色帯下部のⅨc層を出土層準とし，小規模な2か所のブロックから41点の石器群が出土した。石器組成は，台形石器（1），掻器（2），楔形石器（5），加工痕ある剥片，使用痕ある剥片（6・7），石刃（4），敲石，剥片・石核類（3・8）で，石斧類がみられない点を除くと，小規模ながら当該期石器群の様相をよく示している。石器群の大多数は搬入品で，本格的な剥片生産に関連する資料は，O28-aブロックの珪質頁岩1母岩に限られる。石器石材は，黒曜石，安山岩，頁岩，珪質頁岩，チャート，砂岩，ホルンフェルスで，剥片生産がほとんど実施されていないことを反映してか，多種多様な石材が少量ずつ含まれる構成である。石材産地については，肉眼観察によると，黒曜石は，信州和田峠周辺産，八ヶ岳周辺産，神津島産を含むと判断され，それぞれが単独の製品として搬入されている。頁岩には，硬質緻密な東北産があり，珪質頁岩は，房総半島南部の嶺岡産と考えられる。安山岩や砂岩，ホルンフェルスなどは石材産地を特定することが困難であるが，上総丘陵砂礫層を含めた東関東地方一帯で採取可能なのであろう。黒曜石や安山岩による不定型な剥片類と東北産頁岩による石刃の組合せは，柏市中山新田Ⅰ遺跡や千葉市東大野第2遺跡，市原市草刈六之台遺跡など類例が多く，房総半島におけるⅨc層石器群の一般的な姿と捉えられる。反面，当該期の黒曜石は栃木県高原山産の利用頻度が最も高く，その点で本遺跡はやや異なっている。

第2文化層は，立川ローム層第2黒色帯上部周辺のⅦ層～Ⅵ層を出土層準とし，小規模な2か所のブロックから32点の石器群が出土した。石器組成は，使用痕ある剥片（10）と剥片・石核類（9・11・12）で，定型的な石器はみられない。搬入品が多く，剥片生産は，N26-aブロックにおける安山岩1母岩に限られる。石器石材は，安山岩を中心に，チャート，黒曜石，砂岩，瑪瑙が加わる。いずれも石材産地を特定することは困難である。一般的に，房総半島における当該期は，①東北産頁岩による大・中型の石刃石器群，②信州産黒曜石の中・小型石刃と2側縁調整のナイフ形石器を指標とする石器群の二者が顕著であるが，そうした遠隔地石材によらない石器群も散見され，当遺跡の石器群もこれに該当するのであろう。

第3文化層は，立川ローム層第1黒色帯周辺のⅤ層～Ⅳ層下部を出土層準とし，中・小規模の18か所のブロックとその周辺部から576点の石器群が出土した。石器組成は，ナイフ形石器（13～25）と掻器（26～29，31～33），削器等を中心とし，加工痕ある剥片，使用痕ある剥片など臨機的な石器も多い。ナイフ形石器は横長剥片，あるいは不定型の剥片を用いた切出形（14～17など）が主体をなし，これに石刃・縦長剥片製の2側縁調整（18），基部調整（22）がわずかに伴う。掻器は，いずれも厚手の不定型な剥片を利用したもので，遺跡内で刃部再生作業を行った形跡がある。剥片生産については，N27-aブロックから出土した黒曜石数母岩の接合資料からみて（30），粗割りされた拳大程度の黒曜石塊を石核の素材とし，分割面を打面として不定型の剥片や形状の整わない縦長剥片を生産したものが多い。また，各母岩



第323図　出土石器群編年図

の接合状況や分割面等に付着した細かな擦痕（キズ）から，分割礫の状態で長期に携行され，本遺跡に搬入されたことがわかる。この他，安山岩を中心に，厚手の剥片を石核の素材として，交互剥離によって不定型の横長剥片を生産するものもある。石器石材は黒色不透明で夾雑物の多い黒曜石が８割を占め，これに安山岩，珪質頁岩，チャートなどが加わる。黒曜石の大半は栃木県高原山産と判断され，これにごく少量の信州産が含まれるようである。石器組成，剥片剥離技術，石材構成から，武蔵野編年Ⅱａ期，相模野編年Ⅲ期に対応する典型的な内容である。ブロック数は多いものの，その大半が限定された空間に密集すること，石器石材が限定されること，中・小規模のブロックが主体であること，礫群を伴わないことなどから，その多くがほぼ同時期で一過性のものではないだろうか。

２．掻器の刃部再生について（第324図）

第３文化層を特徴づける点として，21点ものまとまった掻器があげられる。房総半島では，当該期に栃木県高原山産黒曜石を主体とする石器群に掻器が多出する傾向があり，典型例としては千葉市バクチ穴遺跡，山武郡芝山町岩山中袋遺跡などがあげられる。本遺跡では，こうした掻器の一群に，刃部再生過程を知る上で良好な接合資料を得ることができた。石器が製作から廃棄に至る過程で変形していくことについては，外国例も含めて研究が進展しつつあるが，接合資料による具体例となると意外に少ないようである。そこで，基礎資料の提示という意味で，ここで再度資料を掲載し，注意しておきたいと思う。

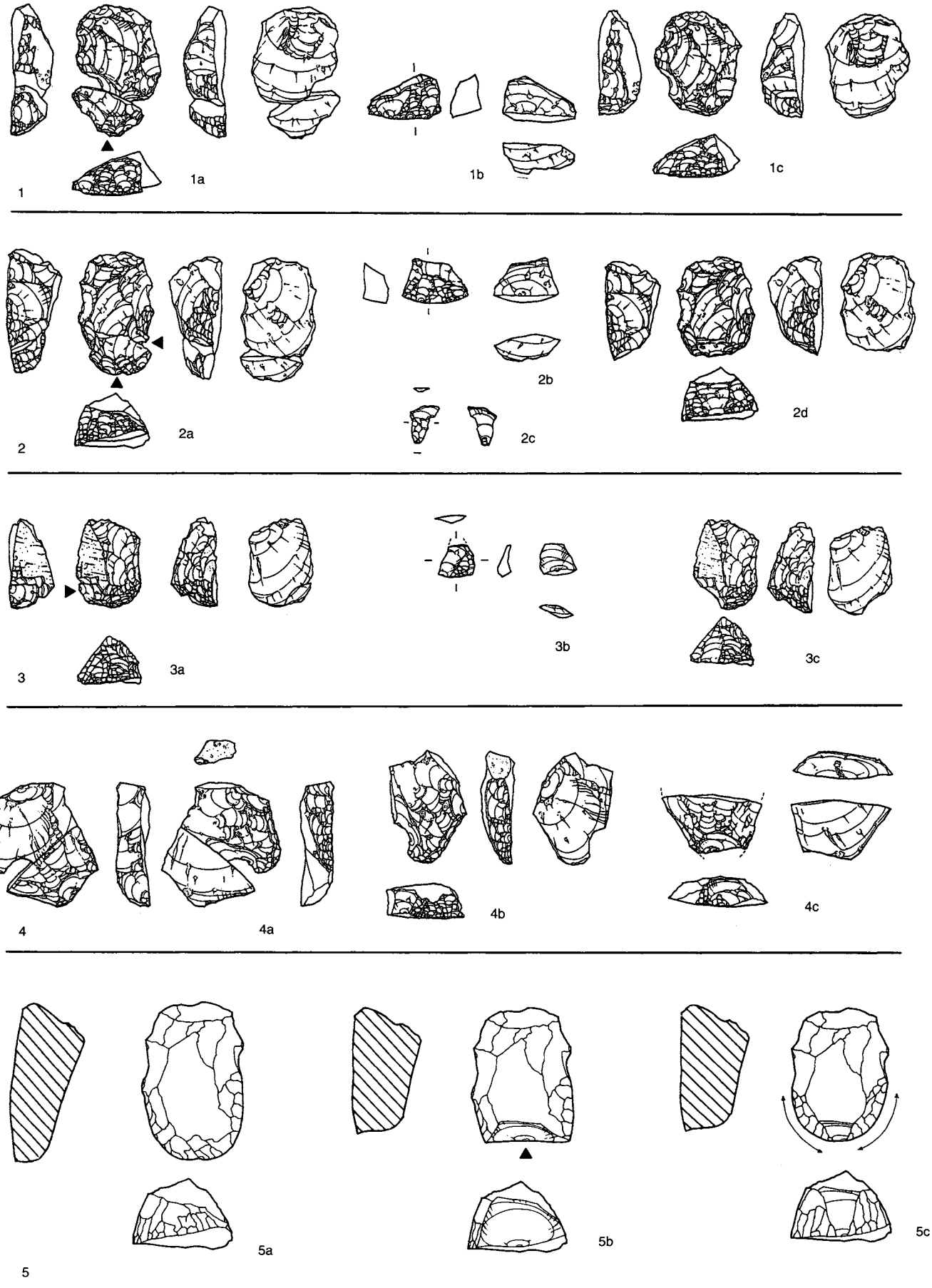
第324図１から３は，掻器の刃部再生に関わる接合資料である。また，４は掻器の製作に関連する資料である。いずれも栃木県高原山産黒曜石による不定型の剥片を用いていると考えられる。

1aは，掻器（1c）の刃部の左側に偏ったところに，横長剥片（1b）が接合したものである。1bは，打面に沿ってやや縦長の細かな剥離面が連続しており，打面と表面の接する部分が掻器の刃部の一部だったことを示している。また，1aをみると，1bと1cの接合面は小さく，接合面の両側には隙間があることから，1bを剥離した後，その剥離面の両側を細かく修正したことがわかる。なお，1aと1cとを比べると，石器の長軸が45度ほどずれており，掻器の刃部再生に伴って石器本体の外形を変えたことがわかる。同時に，当該個体の刃部の再生は，石器を柄からはずして行ったと考えられる。

２も基本的に１の接合資料と同じである。2aは，掻器（2d）の刃部正面に横長剥片（2b）と小型の縦長剥片（2c）が接合したものである。１と同様，2aから2bを剥離した後，2bによってできた大きな剥離面の両側を細かく調整して（2cの剥離を含む），新たな刃部を作り出している。本例は刃部再生前（2a）と再生後（2d）の石器長軸が一致しており，着柄状態のままでも刃部の更新が可能だったようである。

3aは，掻器（3c）の刃部の左側面に小剥片（3b）が接合したものである。3bの背面左側にもやや大きめの剥離痕があること，3bの剥離後にも小剥片が剥離されていることから，刃部再生の意図が感じられるが，おそらく失敗し，その後の作業を放棄した資料と考えられる。

4aは，当初，表面右側に刃部を作り出そうとしたが欠損したため，抉りをいれて上下切断し，掻器（4b）を製作した資料である。この他にも，L26-bブロック出土の第30図２のように刃部中央に大きな剥離面が残る掻器があること，2b，2cに似た剥片が散見されることから，さらに多くの個体で類似した作業が実施された可能性が高い。



第324図　掻器の刃部再生過程

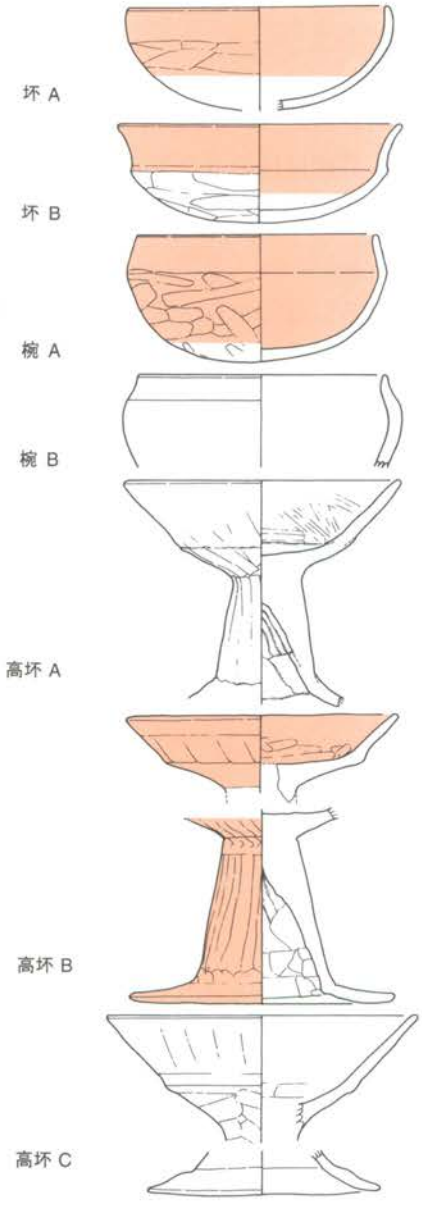
5は，本遺跡で確認できた刃部再生過程を模式化したものである。刃部の消耗が激しい掻器にあっては刃部の頻繁な更新が当然予想されることであり，上記の刃部再生の方法は，現代のカッターナイフのように，当初から備わっていたと考えられる。

石器の刃部再生がそれを用いた作業に直結した行為と仮定すると，刃部再生を行った場所は，その石器を使用した場所の可能性が高い。集落内の各空間が作業内容を限定していたとは考え難いが，それでも，どこで，どのような行為を行ったかを考える上で，数少ない手掛かりになると思う。

第２節　古墳時代から平安時代の土器分類と時期区分

１．土器分類

第５章及び第６章における土器の説明は，以下の土器分類に対応している。なお，各時期ごとに分類するが，混入品のうち前後に連続する時期のものについては，あえて分離していない。



（１）古墳時代中期・後期前半
（第５章第１節１・２項）

土師器坏類

坏Ａ：内湾する丸底。底部外面ヘラケズリ，ナデ仕上げ。内外面赤彩。

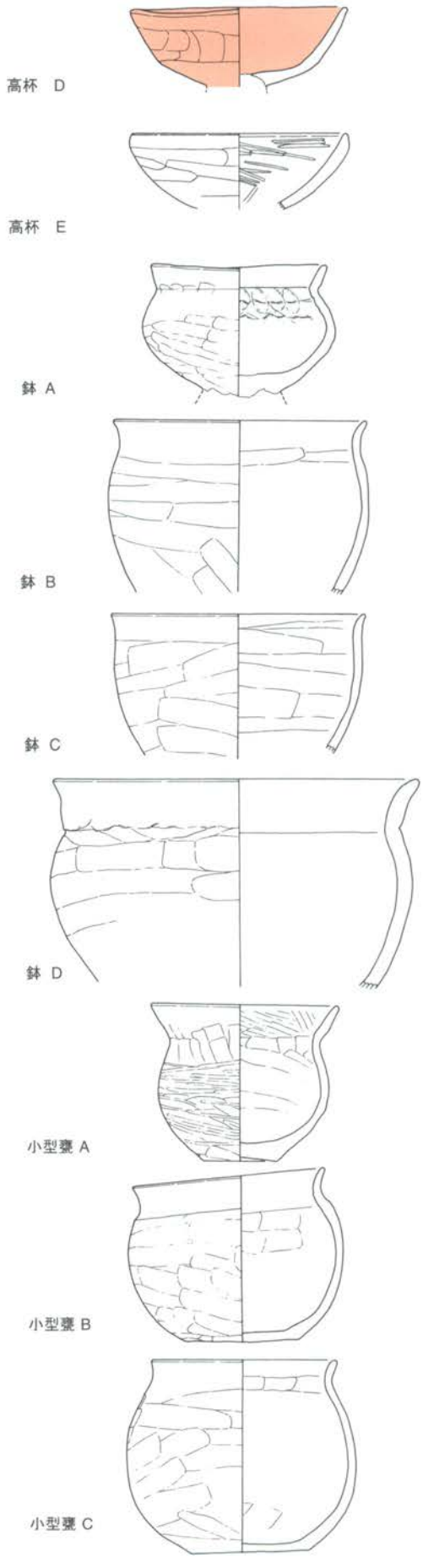
坏Ｂ：口縁強く外反し，下端に明瞭な稜をもつ丸底。底部外面ヘラケズリ，ナデ仕上げ。内外面赤彩。

椀Ａ：口縁内傾し，下端に稜をもつ深い丸底。底部外面ヘラケズリ，ナデ仕上げ。内外面赤彩。

椀Ｂ：口縁短く外反し，下端に弱い稜をもつ。

高坏Ａ：口縁外方に開き，坏底部に稜をもつ。脚の柱状部は中空で，裾は屈折して大きく開く。坏内面ハケ調整後ミガキ，外面はヘラケズリ調整。

高坏Ｂ：口縁部外反し，下端に明瞭な稜をもつ。坏



部は浅く，底面はほぼ水平。Aと同様中空の屈折脚がつく。坏部内外面・脚部外面赤彩。

高坏C：口縁下端に稜線があり，中空の屈折脚をもつ型式では最も新しい段階のもの。外面はヘラケズリ後ほとんど無調整で，全体に雑なつくり。

高坏D：坏部は内湾気味に開き，口縁下端に弱い稜をもつ。内外面赤彩。

高坏E：直接的に開く椀形の坏部をもつ短脚の高坏。内面はミガキ仕上げ。

鉢A：脚台付の鉢。鉢部は「く」の字状口縁をもつイチジク形。外面横位のヘラケズリ，内面ナデ調整。

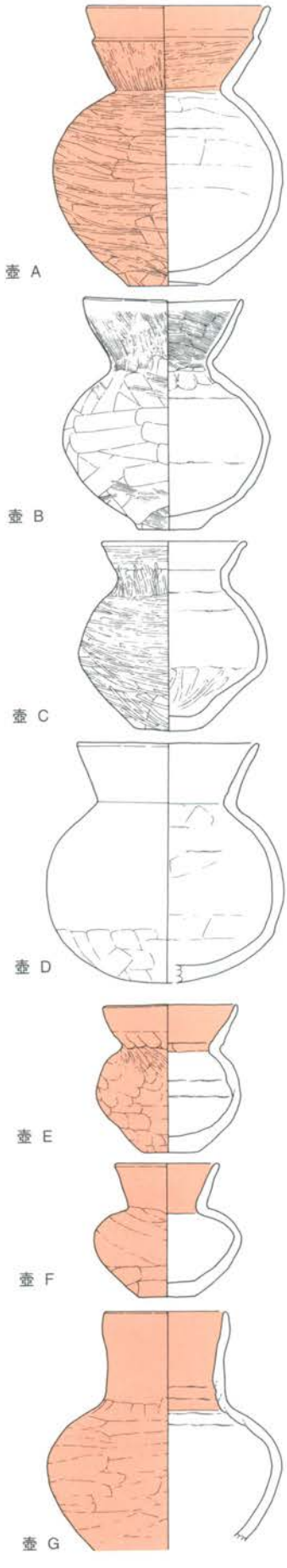
鉢B：弱く外反する口縁部をもつ深い鉢。胴部はややふくらみをもつ。外面ヘラケズリ，内面ナデ仕上げ。

鉢C：短く外反する口縁部をもつ。胴部のふくらみはわずかで，ゆるやかにすぼまっている。

鉢D：「く」の字状に外反する口縁部をもつ大型の鉢。肩がやや張る形態。平底と思われる。外面横位のヘラケズリ。

土師器壺甕類

小型甕A：大きく開いた「く」の字状口縁をもつ平底の甕。外面ヘラケズリ後ミガキ。内面口縁ハケ調整，以下ヘラケズリ後ナデ。



小型甕Ｂ：口縁強く外反し，体部との境に稜線をもつ。外面ヘラケズリ，内面ナデ調整。底部は大きな平底。

小型甕Ｃ：屈曲の弱い短い口縁部をもつ。全体に下半がふくらむナスビ形。平底の大きな底部をもつ。

壺Ａ：有段口縁の長頸壺。球形の胴部，やや上げ底気味の平底をもつ。外面・口縁部内面はミガキ仕上げ後赤彩。

壺Ｂ：やや内湾気味の直口壺。口頸部内外面ハケ調整。胴部ヘラケズリ後部分的にミガキ仕上げ。底部ハケ調整。

壺Ｃ：短く直立する頸に外反する口縁がつく。外面ヘラケズリ後ミガキ仕上げ。分割成形痕を明瞭に残す。

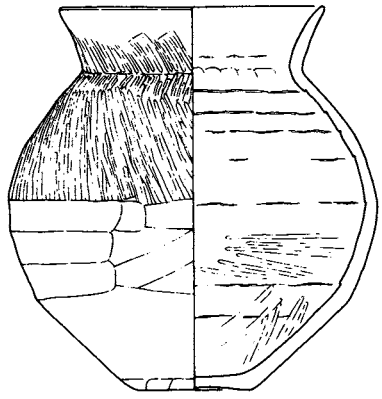
壺Ｄ：球形の胴部をもつ丸底の直口壺。外面・胴部は平滑なミガキ仕上げ，底部はヘラケズリ後ナデ，内面ヘラナデ。

壺Ｅ：小型の直口壺。平底。頸部～胴部外面細かくヘラケズリした後所々にヘラミガキ，内面頸部ヘラケズリ，胴部ナデ仕上げ，輪積痕明瞭に残す。

壺Ｆ：小型の直口壺。Ｅより長頸。肩が張るソロバン形の体部に平底がつく。外面ヘラケズリ後ナデ，内面ヘラナデ，外面と口頸部内面を赤彩。

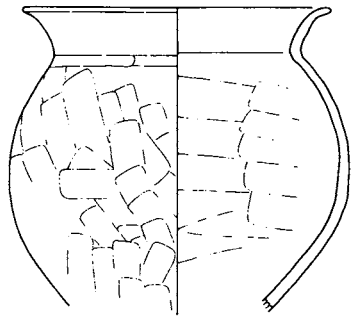
壺Ｇ：ほぼ直立する口頸部をもつ長頸壺。体部外面ヘラケズリ後ナデ，内面ナデ仕上げ，輪積痕残

る。外面と口縁部内面を赤彩。



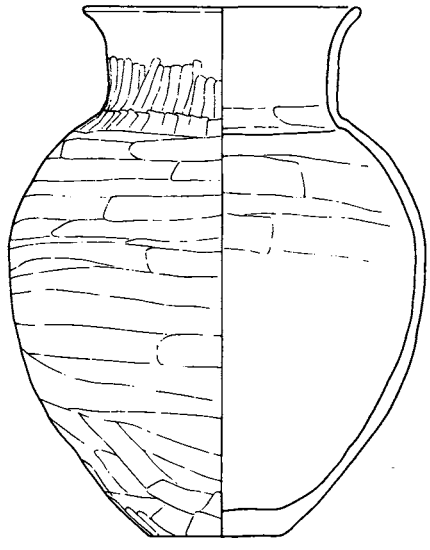
甕A

甕A：高く立ち上がる「く」の字状口縁の甕。外面ハケ調整後胴下半をヘラケズリする。内面胴部上半に輪積痕が明瞭に残る。



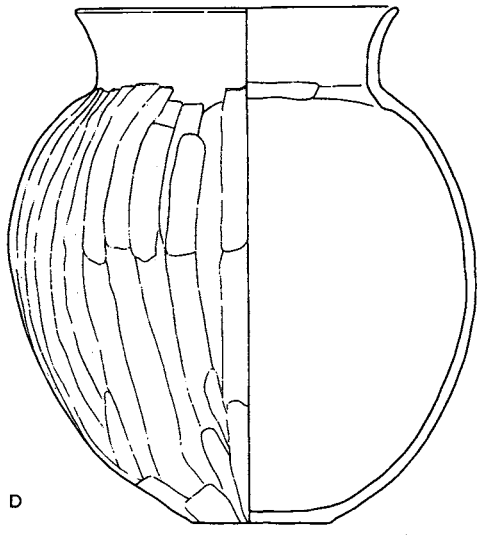
甕B

甕B：口縁端部が強く外反する「く」の字状口縁の甕。内外面共にヘラケズリ調整。



甕C

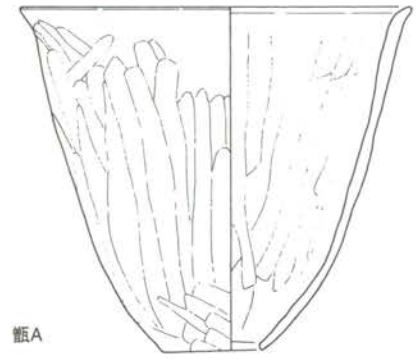
甕C：高く直立する頸部をもつ。胴部は倒卵形。頸部外面縦方向のヘラケズリ後ナデ，胴部外面横方向，底部斜位のヘラケズリ後ナデ，内面ナデ仕上げ。



甕D

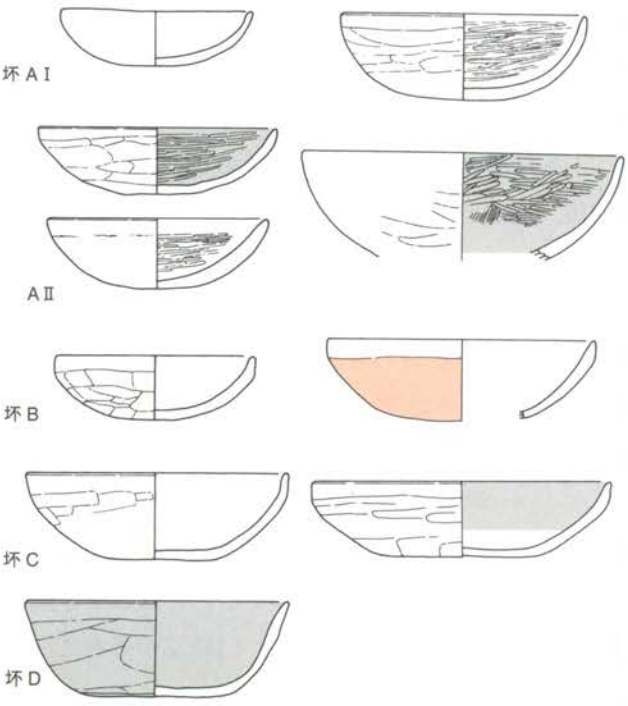
甕D：直立気味の口縁部に球形の胴部をもつ。外面縦方向のヘラケズリ，内面は口縁の屈曲部を横方向にヘラケズリし，胴部はナデ仕上げ。

甑A：単孔の甑。穿孔部ヘラケズリ，内外面共縦方向のヘラケズリ，底部外面は斜位の細かいヘラケズリ。

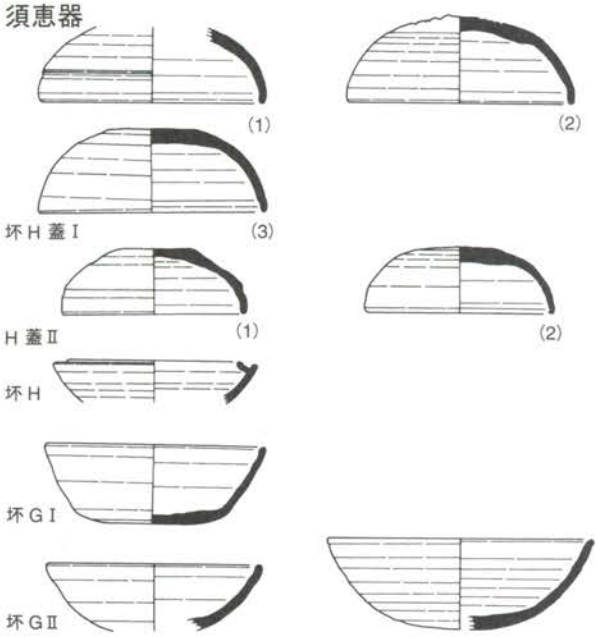


古墳時代後期後半

土師器



須恵器



（2）古墳時代後期後半
（第5章第1節3項）

土師器坏類

坏A：浅い椀形の丸底の坏。

AⅠ（小）：口径10㎝，高さ3㎝前後の丸底の坏。外面はヘラケズリ後ナデ仕上げ。

AⅠ（大）：口径13㎝，高さ4.5㎝前後の平底気味の坏。外面はヘラケズリのちナデ仕上げ，内面ナデ仕上げ。

AⅡ（小）：口径12.5㎝，高さ3.5㎝前後。ヘラケズリ，内面ミガキ仕上げの平底気味の坏。黒色仕上げするものもある。

AⅡ（大）：口径17.0㎝，高さ6.0㎝前後。

坏B：口縁部下端に明瞭な稜をもつ。外面ヘラケズリ，内面ミガキ。

（小）：口径11.0㎝，高さ3.3㎝前後。

（大）：口径14.0㎝，高さ4.0㎝前後。外面を赤彩するものがある。

坏C：口径14.0㎝～16.0㎝，高さ4.5㎝～5.0㎝前後の平底の坏。外面ヘラケズリ，内面ミガキ。内面黒色仕上げのものが多い。

坏D：口縁部がやや丸みをもって外方に立ち上がる平底の坏。藤原京期の須恵器坏Gを模倣した形態。

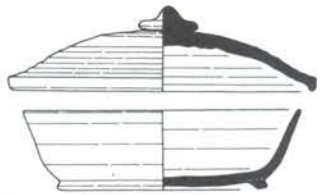
須恵器坏類（須恵器は飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告書Ⅱの分類に基づく）

坏H蓋：口縁部に受け部をもつ坏Hと組み合う蓋

HⅠ：口径12㎝前後，高さ4.5㎝前後。口縁部と天井部の境に稜をもつ（1），天井部まで一気に

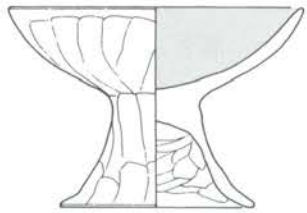
坏ＢⅠ

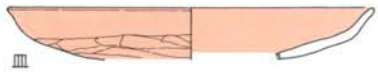
蓋坏ＢⅡ


蓋坏ＢⅢ

坏Ａ

土師器


高坏Ａ


皿

須恵器

壺Ａ

回転ナデ仕上げし，天井部にカキ目を施す（2），天井部を回転ヘラケズリし，口縁内面に沈線をもつ（3）がある。

ＨⅡ：口径10㎝前後，高さ2.5㎝前後口縁部と天井部の境に沈線をもつ（1）と，境がなく口縁内側に沈線をもつ（2）がある。短く内傾する径11㎝弱の受け部をもつ坏Ｈが組み合う。

坏Ｇ：口縁部が外方に開く，身の深い坏。

ＧⅠ：底部はやや丸みをもつ平底。口径11.5㎝，高さ4㎝前後。

ＧⅡ：椀形の丸底で，口縁部はやや外方に開いて立ち上がる。口径11.5㎝，高さ3.5㎝前後の小型品から口径14㎝前後，高さ5㎝前後の大型品がある。

蓋坏Ｂ：高台付の坏Ｂとそれに組み合うつまみ付の蓋。

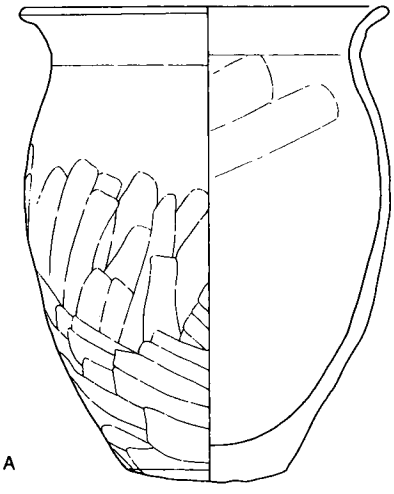
ＢⅠ：口径14㎝の組み合わせ。蓋は高さ5㎝前後の傘型で口縁端部がやや外に開く。坏は高台付で，丸みのある底部が突出する。口縁部はやや内湾する。

ＢⅡ：口径15㎝（前後）の蓋と14㎝前後の坏。蓋には低いつまみが付き，口縁端部が内傾する。坏はＢⅠと同様底部の突出する高台付であるが，口縁部が外方に開く点が異なる。

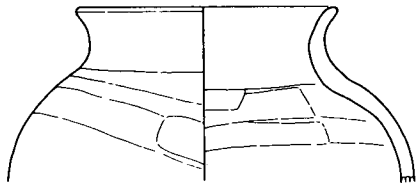
ＢⅢ：口径16㎝（前後）の蓋と15㎝～15.5㎝の坏。蓋には宝珠形のつまみが付き，口縁端部にはほぼ垂直の面がつくり出される。高台付の坏は底部がほぼ水平である。

坏Ａ：口径16.5㎝に及ぶ大型の坏。底部は回転ヘラケズリによる平底。

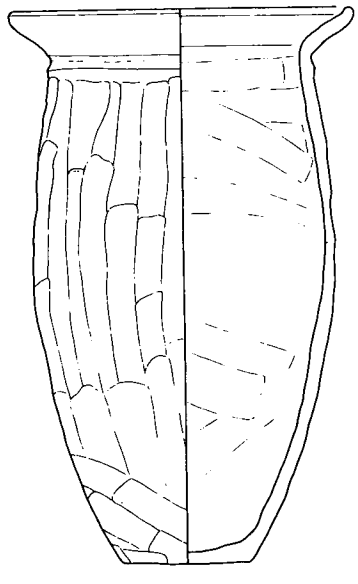
土師器



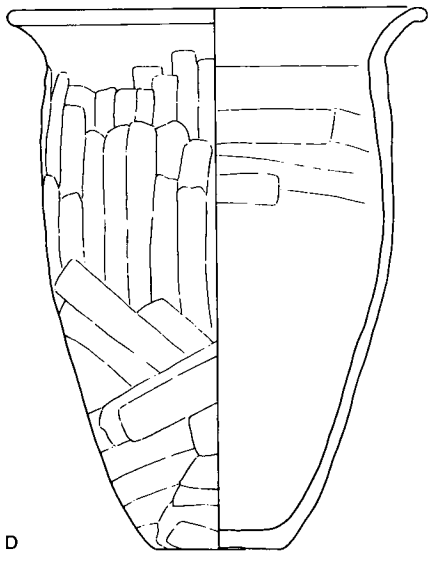
甕A



甕B



甕C



甕D

土師器高坏・皿

高坏A：中空のやや高い脚をもつ高坏。坏部は椀形のものと，外方に開く浅いものがある。

皿：浅い皿。口縁下端に稜をもつ。内外面赤彩。

須恵器壺甕類

壺A：フラスコ型長頸壺。湖西産とみられる。

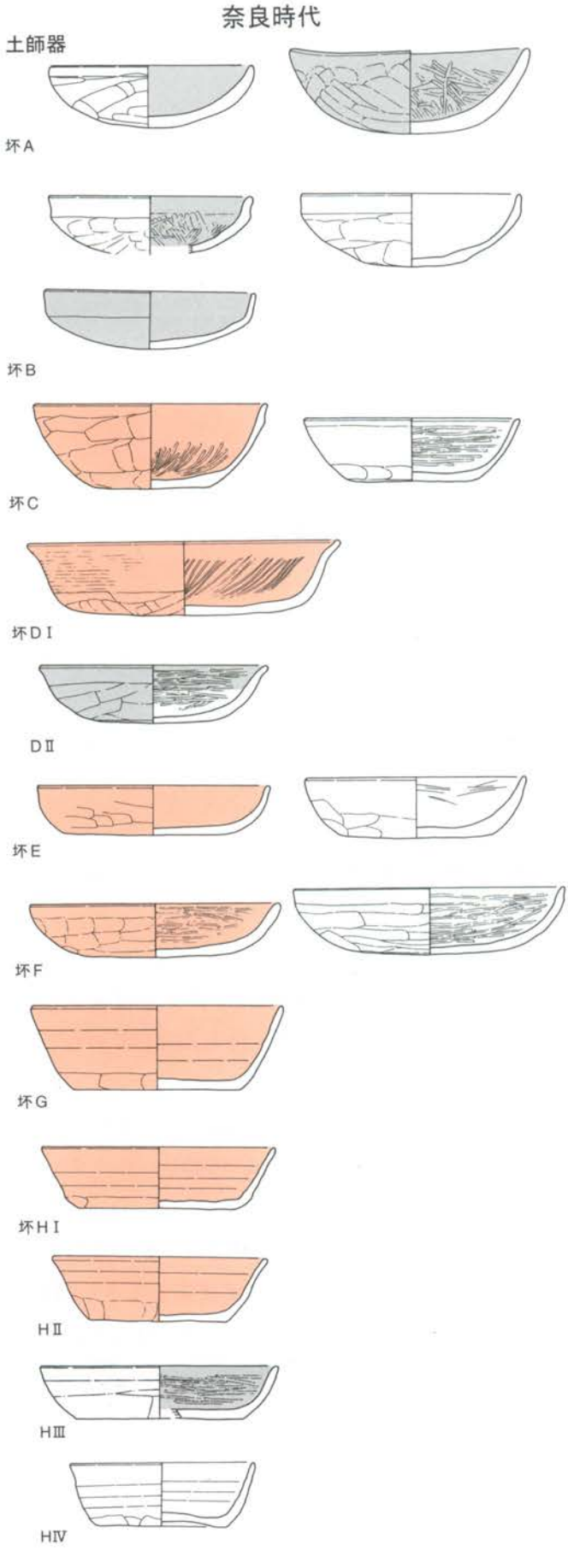
土師器壺甕類

甕A：口縁部の径と胴部最大径がほぼ等しい。胴部外面の上半は縦方向，下半は斜位のヘラケズリ。

甕B：肩が張り球形の胴部をもつ。外面は肩部から斜位のヘラケズリ，内面は横方向のヘラナデ。

甕C：口縁部が外方に大きく開き端部が内側につまみ上げられる。最大径は口縁部にあり，ほとんど張りのない長胴の甕。外面は底部付近まで縦方向のヘラケズリ，底部付近まで縦方向のヘラケズリ，底部付近で斜位に方向を変えてヘラケズリが施される。内面はヘラナデ。

甕D：口縁部の外方に大きく開き，端部は丸く納められて外側に玉縁をもつ。底部に向かってすぼまる器形で，胴部の張りはCよりも目立たない。胴部外面の上半を縦方向，下半～底部を斜位に方向を変えてヘラケズリしている。内面は横方向のヘラナデ，ナデ仕上げ。



（3）奈良時代

（第6章第1節1項）

土師器坏類

坏A：浅い丸底の椀形。外面ヘラケズリ，内面ヘラミガキ。内面黒色仕上げと，しないものがあり，口径12㎝，高さ3.8㎝の小型品と口径15㎝，高さ5.0㎝の大型品がある。

坏B：口縁ほぼ直立し丸底の底部との間に明瞭な稜を持つ。外面ヘラケズリ，内面ミガキ。

BⅠ：内面のみ黒色仕上げ。

BⅡ：内外面とも黒色仕上げ。

BⅢ：Ⅰ，Ⅱより深い丸底。黒色仕上げしない。

坏C：比較的深い平底の坏。外面ヘラケズリ，内面ミガキ。口径13.0㎝，高さ5.0㎝と口径14.5㎝，高さ5.2㎝の大型品があり，後者は赤彩。

坏D：底部に丸みのある浅い平底の坏。口縁端部がわずかに外反する。

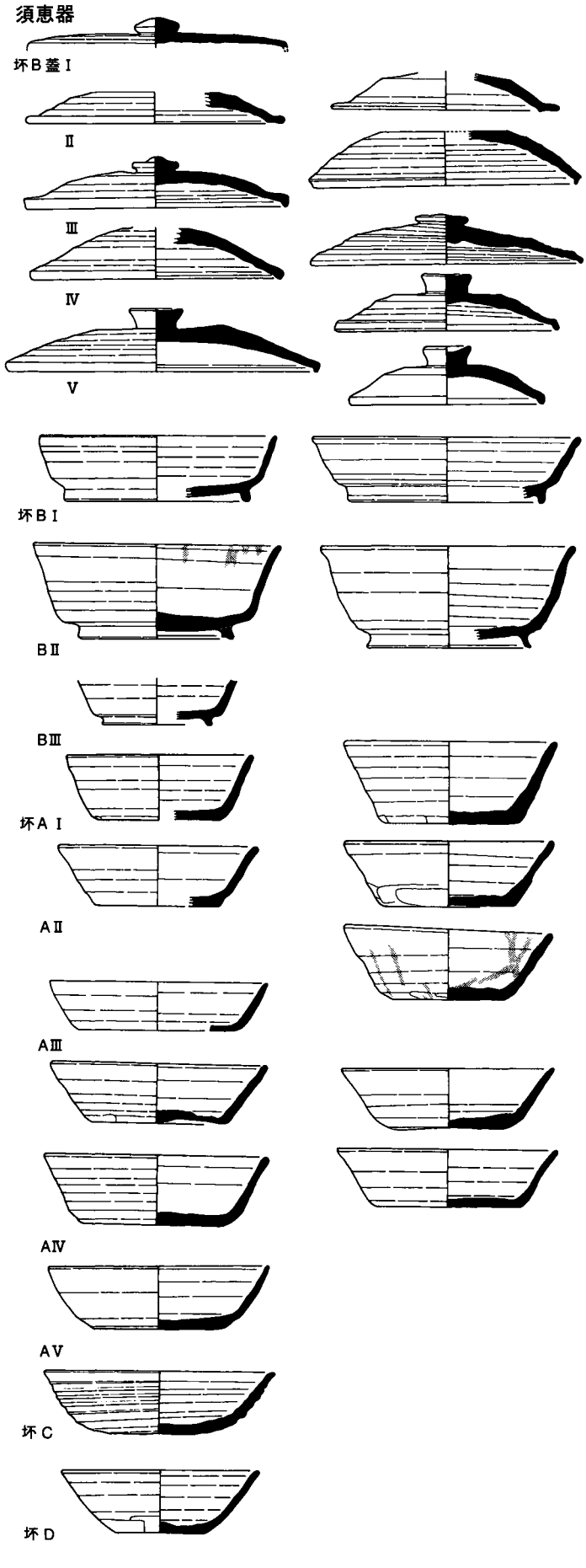
DⅠ：畿内産の暗文土器。内面に放射状・螺旋状の暗文，口縁部外面に横方向のヘラミガキが施される。

DⅡ：DⅠを模倣し，内面をヘラミガキしたもの。

坏E：平底の盤状坏。深さ3.0㎝の浅いものと3.7㎝の深いものがあり，前者は赤彩。

坏F：丸底気味の盤状坏。口径15.0㎝，高さ3.0㎝の浅いものと，口径16.5㎝～17.0㎝，高さ4.0㎝前後の大型品があり，前者は赤彩。

坏G：箱形のロクロ土師器。底部は手持ちヘラケズリ。口径15.5㎝，高さ5.2㎝の大型品と口



径11.5㎝，高さ4.0㎝の小型品があり，前者は赤彩、静止糸切り離し。

坏H：逆台形のロクロ土師器。口径13.0㎝～15.0㎝前後，高さ3.5㎝～5.0㎝前後。底部調整，彩色等により以下のように分けられる。

HⅠ：ロクロ土師器のいわゆる盤状坏。口径14.5㎝～15.0㎝，高さ3.5㎝～4.2㎝，底部全体を手持ちヘラケズリ。内外面赤彩。

HⅡ：底部静止糸切り離し後周縁を手持ちヘラケズリ。赤彩。

HⅢ：底部手持ちヘラケズリ。内面黒色仕上げ。

HⅣ：底部回転糸切り後，周縁手持ちヘラケズリ。

須恵器坏類

坏B蓋：高台付の坏Bと組み合うつまみ付の蓋

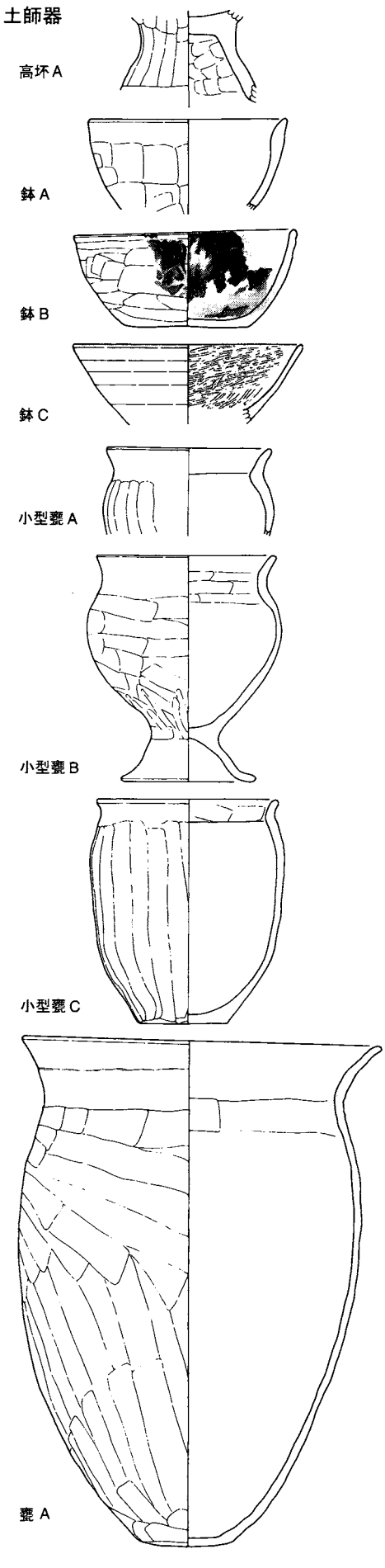
BⅠ：擬宝珠形のつまみをもつ非常に扁平な蓋。

BⅡ：口縁端部がほぼ水平に引き出されるタイプ。わずかにかえりの痕跡を残す。茨城県南部産か。口径16㎝前後のものと13㎝前後のものがある。

BⅢ：擬宝珠形のつまみをもち，口縁端部に面をもつ。回転ヘラケズリによって水平な天井部をつくり出している。口縁端部は内側へ強く折り込まれる。口径19㎝の大型品，16㎝前後の中型品がある。

BⅣ：笠型の天井部をもち，口縁の折り返しが不明瞭なもの。口径15㎝前後。

BⅤ：円筒形のつまみをもつ口径19㎝の大型品，径の割に大きなつまみがつく口径12㎝前後のものと，口径14㎝前後のものがあり，端部はほぼ直角に折れる。



坏B：高台付の坏。口縁部は直線的に外方に開く。

BⅠ：底部はやや出っぱり気味だが，高台の中に納まる。口縁がやや内湾するものと，外方に開くものがあり、口径14.5㎝前後と16㎝前後のものがある。

BⅡ：身の深い高台付の坏，口縁部はやや外反する。高台は外側に開いてふんばる形態。口径15㎝～16㎝，高さ6㎝～6.4㎝。

BⅢ：小型の高台付坏。底径7.6㎝。

坏A：平底の坏。口縁部は直線的に外方に開く。

AⅠ：口縁部の開きが少ない。箱形の平底坏。口径11㎝，13㎝前後のものがある。

AⅡ：AⅠより口縁部の開く逆梯子形の坏。底部の調整には回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリがある。口径12㎝～13㎝，高さ3.8～4.5㎝。火だすきのあるものは永田・不入産か。

AⅢ：浅く底部の大きい平底の坏。口径13.8㎝，底径10.0㎝に復元できる。ひと回り大きい口径14.0㎝～14.5㎝，高さ4.1㎝～4.7㎝のかなり厚手のものもある。

AⅣ：浅い逆梯子形。口径13.0㎝～13.5㎝，高さ3.5㎝～3.6㎝。

AⅤ：内湾気味に立ち上がる。口径13.8㎝，高さ3.9㎝。

坏C：丸みをもって外方に開き，底部は丸底風である。口径14.5㎝，高さ3.8㎝。湖西産。

坏D：底径の小さい平底の坏。口径12.6㎝，高さ4.0㎝。

土師器高坏・鉢

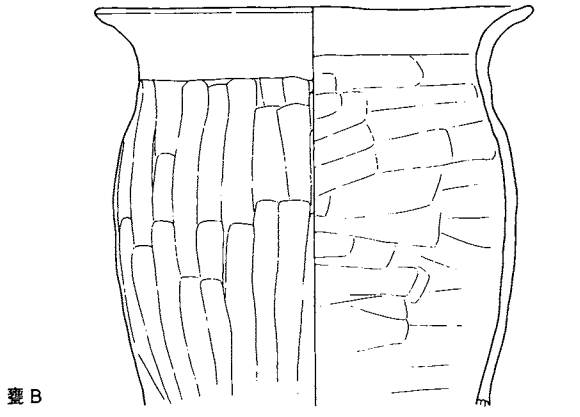
高坏A：脚部は大きく開く中空の柱状部をもつ。浅い椀状の坏部がつく前代の残存型式。

鉢A：口径の割に深い形態。口縁部が肥厚するのが特徴。外面幅の広い横位のヘラケズリ，内面ナデ。

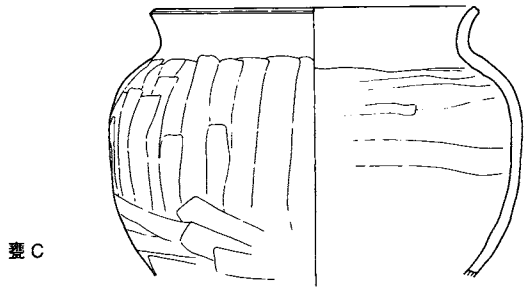
鉢B：大きな平底をもつやや内湾する形態。外面横方向のヘラケズリ，内面ナデ。

鉢C：直線的に開く形態。内面ミガキ仕上げ後黒色処理。

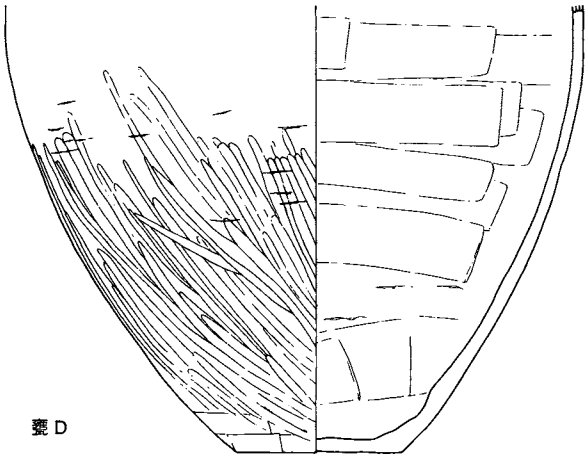
土師器



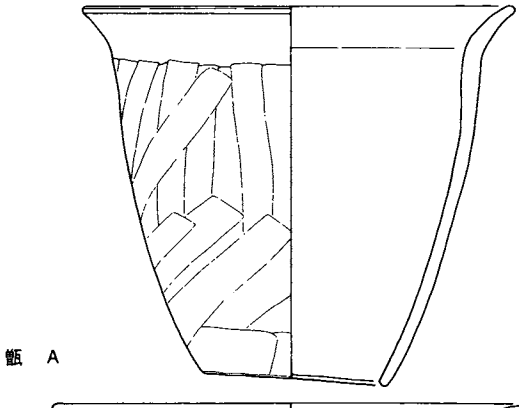
甕B



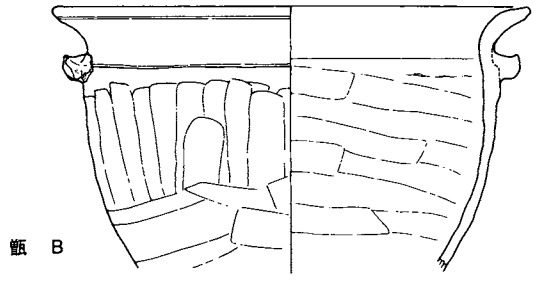
甕C



甕D



甑　A



甑　B

土師器壺甕類

小型甕A：「く」の字状口縁の小型甕。外面縦方向のヘラケズリ。

小型甕B：イチジク形の胴部をもつ脚台付の小型甕。胴部外面上半は横方向のヘラケズリ。底部付近は縦方向のヘラケズリ。かなり薄手。内面上半は横方向のヘラナデ，下半はナデ。

小型甕C：口縁部が短く外反する寸胴な小型甕。比較的大きな平底をもつ。外面大きく縦方向にヘラケズリ，内面ナデ仕上げ。

甕A：ゆるやかに開く「く」の字状口縁をもつ長胴甕。底部は小さく不安定。外面斜位～縦方向のヘラケズリ，内面頸部横方向のヘラナデ，以下ナデ仕上げ。かなり薄手。

甕B：強く外反する口縁部をもつ長胴の甕。外面縦方向のヘラケズリ，内面横方向のヘラナデ。

甕C：直口気味の口縁と強く張る肩部をもつ。胴部は球形に近い。外面縦方向のヘラケズリ～横方向のヘラケズリ，内面横方向のヘラナデ。

甕D：外面の胴部下半をヘラミガキする常総型の甕。内面は，横方向のヘラナデ。

甑A：口縁部が強く外方に開く単孔の甑。外面はヘラケズリ，内面はナデ調整。

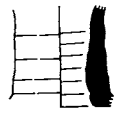
甑B：口縁部が強く外反する甑。胴部がやや丸みをもつ。牛角形の把手が２方向につく。外面

はヘラケズリ，内面はナデ調整。

須恵器

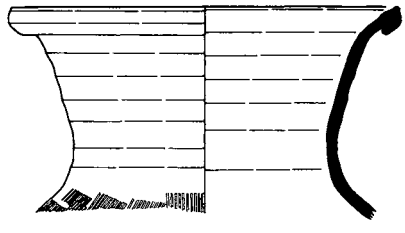
短頸壺蓋

長頸壺

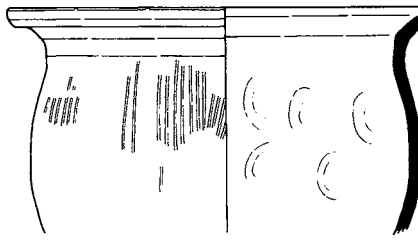


甕 A

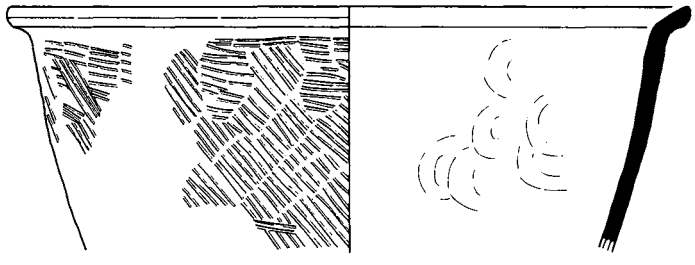
甕 B

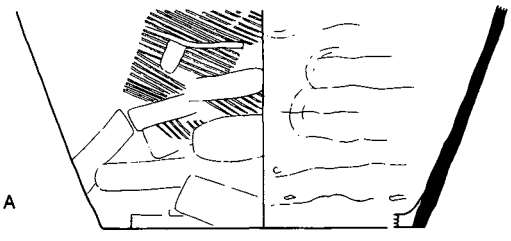


甕 C



甑 A





須恵器壺甕類

短頸壺蓋：永田・不入窯の製品に，口径13.1㎝の類品がある。口径13.6㎝，高さ3.1㎝。天井部回転ヘラケズリ。

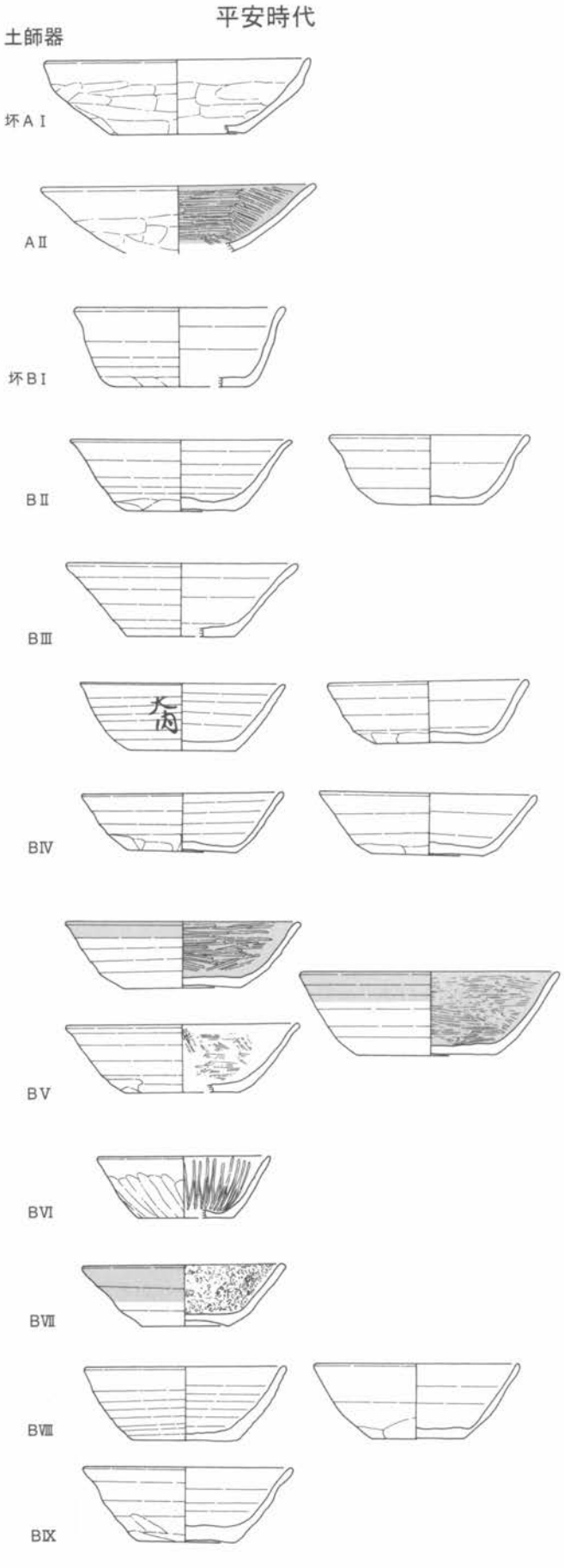
長頸壺：やや厚手の長頸壺。肩の張る胴部に付くとみられる。

甕A：口縁部に明瞭な面をもつ短頸の甕。口縁端部は下方につまみ出され，断面三角形を呈する。

甕B：口縁部に稜のある面をもつ。Aより長頸。やや肩の張る長い胴がつく。

甕C：口縁部が大きく外方に開き，端部をつまみ上げた広口の甕。胴部の張りは弱い。

甑A：口縁端部が短く外に開き外面に面をもつ。底に向かって直線的にすぼまる器形。叩き板成形で，底部外面をヘラケズリする。五孔の甑。



（4）平安時代

（第6章第1節2項）

土師器坏類

坏A：非ロクロ土師器。

AⅠ：口縁下端を境に底部に向かってすぼまる平底の坏。外面はヘラケズリ調整。きわめて希だが，千葉市域で9C後半代に残る例（高沢遺跡）がある。口径16.2cm，底径8.0cm，高さ4.5cm。

AⅡ：外方に大きく開く平底の坏。外面は口縁以下をヘラケズリ調整し，内面はヘラミガキ後黒色仕上げ。口径16.9cm。

坏B：ロクロ土師器

BⅠ：箱形。底部回転ヘラケズリ。口径12.8cm，底径8.3cm，高さ4.8cm。赤褐色。

BⅡ：口縁端部がやや外反する比較的深い逆梯子形。口縁部が内湾気味に立ち上がるものと直線的に開くものがある。口径11.9cm～14.8cm，底径6.5cm～7.0cm，高さ4.3cm～5.0cm。橙色～にぶい橙色。

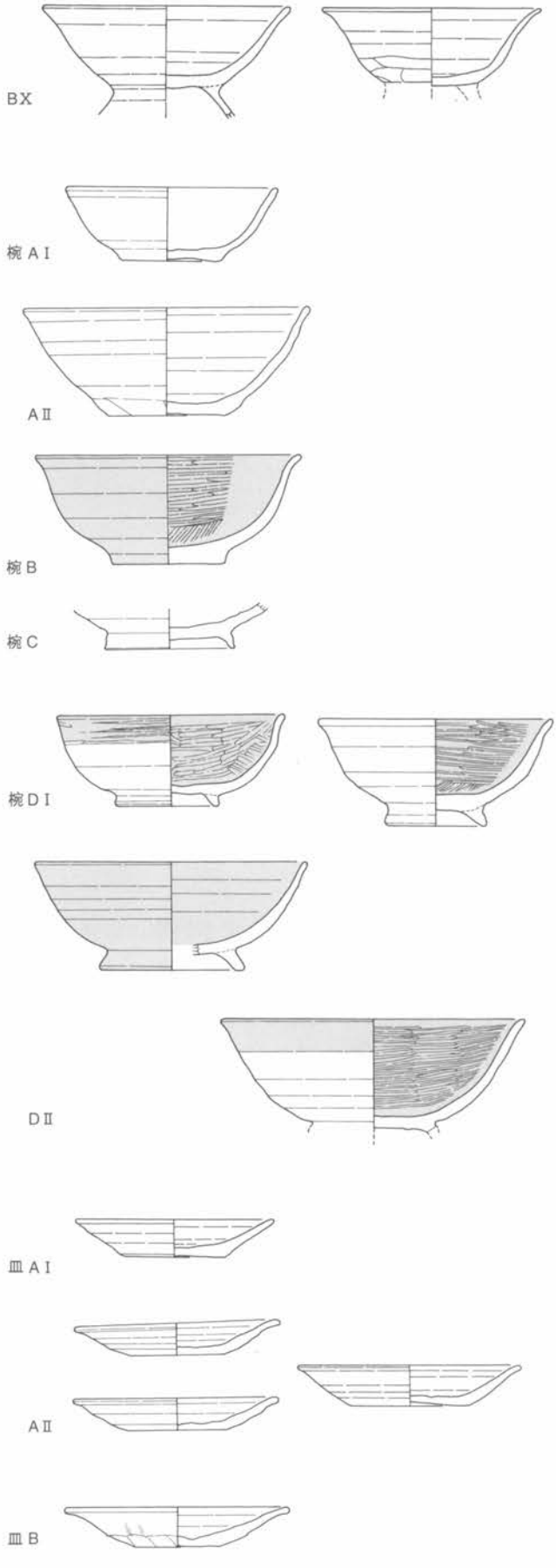
BⅢ：口縁部が大きく外反する形態。口径13.7cm，底径6.6cm，高さ4.4cm。褐色。

BⅣ：逆梯子形。口縁部が内湾気味に立ち上がるものと，直線的に開くものがあり，前者の方が深い傾向にある。底部調整は回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリの双方がみられる。口径11.9cm～12.6cm，底径6.5cm～7.2cm，高さ3.9cm～4.2cm。黄橙色～暗褐色，褐色，赤褐色。

BⅤ：内面を磨いて黒色仕上げする。底部を回転ヘラケズリするものと，手持ちヘラケズリするものがある。黄橙色。

BⅥ：平底で内面に連続鋸歯状暗文をもつ。いわゆる甲斐型坏。

BⅦ：底径が口径の半分以下（37%～49%）に小さくなったもの。底部は回転糸切り後無調整で，削出し高台風の例もある。灰褐色，明赤褐



色。

BⅧ：底径が小さく深い形態(38％～48％)。底部の切り離しには回転糸切りと静止糸切りがある。橙色，赤褐色。

BⅨ：BⅧよりさらに底径の比率が小さいタイプ(37％以下)。底部は回転糸切り後無調整。黄橙色。

BX：足高高台付坏。貼付けられている高台は高さ２㎝以上に達し，ロクロで整形されている。

椀A：底部を高台風にヘラケズリした椀。口縁部は回転ナデ仕上げ。

AⅠ：底部は回転糸切り離し後無調整。口径12.8㎝の小型品。

AⅡ：底部は回転糸切り離し後周縁を手持ちヘラケズリ。口径17.3㎝の大型品。

椀B：成形の粘土柱を高台風に切り離している。内面全体をヘラミガキし，うるし仕上げ。外面にもうるし仕上げの痕があるが，遺存が悪い。口径16.2㎝。

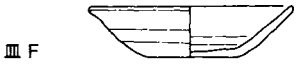
椀C：薄手の貼付け高台をもつ椀。高台端部を先細りに仕上げる。

椀D：薄手の貼付け高台をもち，内面をヘラミガキ後黒色仕上げした椀。

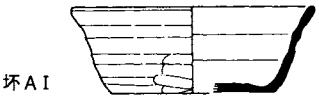
DⅠ：かなり内湾し，口縁端部が短く外反する形態。口径（14.0㎝前後）に対して，小さい高台（径6.0㎝前後）がつく。内面に加えて外面の口縁上部をヘラミガキしたものもある。

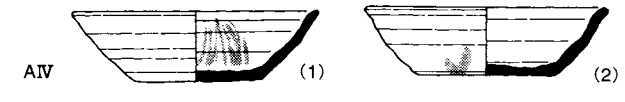
DⅡ：Ⅰより湾曲が弱く，深い大型品（口径16.4㎝～18.4㎝）。外方に大きく開く高台がつく。基本的には内面を磨いて黒色仕上げするタイプであるが，内外面共磨いて黒色仕上げする例がある。

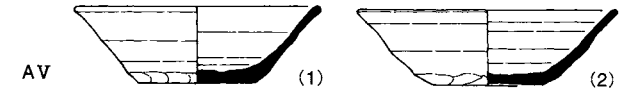
皿A：平底の浅い皿。回転糸切り離し後回転ヘラケ

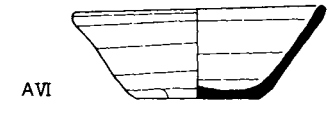


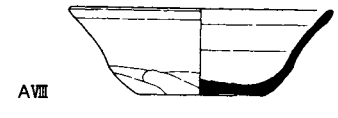
須恵器











ズリするものと無調整のものが伴出している。

ＡⅠ：口縁部が直線的に開くもの。口径12.0㎝，高さ2.3㎝。

ＡⅡ：口縁端部が外反するもの。口径12.0㎝～13.6㎝，高さ1.9㎝～2.5㎝。

ⅢＢ：口縁部が強く外反し，底部を手持ちヘラケズリする。火だすきがある。口径13.3㎝，高さ2.4㎝。

ⅢＣ：底部を高台風につくり出したもの。

ＣⅠ：底面を回転ヘラケズリし，内面をヘラミガキしたもの。口径13.1㎝，高さ2.2㎝。

ＣⅡ：底面を手持ちヘラケズリし，内面を磨かないもの。口径12.7㎝，高さ2.1㎝。

ⅢＤ：口縁部が直線的に開く貼付け高台付のⅢ。口径12.7㎝～13.5㎝，高さ2.6㎝～3.4㎝。

ＤⅠ：底面を回転ヘラケズリするもの。

ＤⅡ：底面回転ナデ。

ⅢＥ：口縁端部が短く立ち上がる貼付け高台付のⅢ。底面は回転ヘラケズリ。口径14.0㎝，高さ2.7㎝。

ⅢＦ：小型（口径11.0㎝以下）のⅢ。底部回転糸切り離し後無調整。

須恵器坏類

坏Ａ：口縁部が直線的に外方に開く平底の坏。

ＡⅠ：深い箱型。口径12.6㎝，底径8.5㎝，高さ4.4㎝。底部を手持ちヘラケズリ。灰黄褐色。

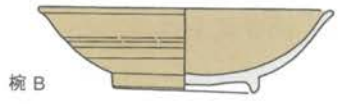
ＡⅡ：ＡⅠより浅い箱型。口径13㎝前後，底径7.5㎝，高さ4.0㎝。底部を手持ちヘラケズリ。黒褐色。中原窯の製品に類似する。

ＡⅢ：底部に丸みがある比較的深い形態。口径13.0㎝，底径7.1㎝，高さ4.1㎝。暗褐色。中原窯の製品に類似する。

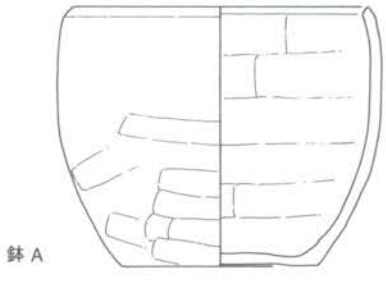
ＡⅣ：比較的浅い逆梯子形。火だすきがある。口径13㎝前後，底径7㎝前後，高さ3.5㎝前後。青灰色のもの（１）とにぶい橙色の厚手のもの（２）がある。

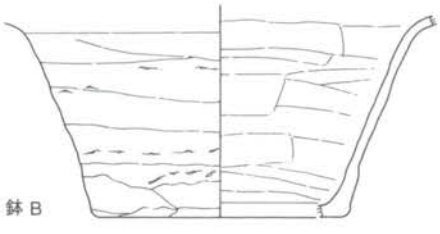
緑釉陶器

灰釉陶器



土師器





AⅤ：口縁部が大きく外に開く。底部小型化。口径13㎝～14㎝，底径6㎝前後。橙色～明赤褐色のもの（1）と黒褐色のもの（2）がある。2は中原窯の製品とみられる。

AⅥ：底径が小さく，深い逆梯子形。口径13.4㎝，底径6.5㎝，高さ4.7㎝。外面黒褐色～内面暗灰黄色。

AⅦ：大きく開く逆梯子形の大型品。口径14.4㎝，底径7.6㎝，高さ4.1㎝。底部回転ヘラケズリ。褐色。底部に線刻あり。

AⅧ：坏H　身込みを深くナデる逆梯子形の坏。口縁部は大きく外反する。口径13.9㎝，底径6.7㎝，底径6.7㎝，高さ4.6㎝。赤褐色。宇津志野窯の製品に類似する。

椀A：高く外反気味の貼付け高台をもつ。薄いつくり。高台径7.8㎝。

椀B：強く外反する厚手の貼付け高台をもつ。高台径7.3㎝。

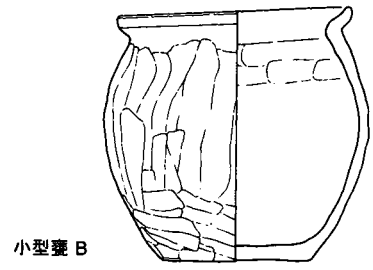
緑釉陶器

椀A：薄手でシャープなつくりの貼付け高台付椀。底部回転ヘラケズリ。全面に均質な釉が掛かる。尾北産の黒笹90号窯式。

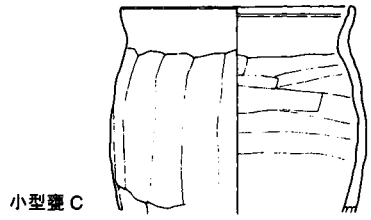
灰釉陶器

椀A：削出し高台の椀。猿投・黒笹14号窯式の堅く焼きしまった良品。高台は非常に小ぶりでていねいなつくり。内面全体に施釉。高台径6.0㎝。

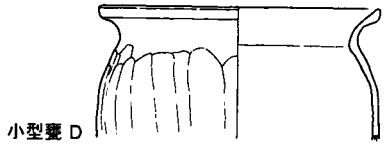
椀B：Aに比べかなり焼きの甘い製品。発色が悪く全体に黒ずんでいる。口縁部内面のみ施釉。やや内湾する貼付け高台がつく。底部から口縁部下半をヘラケズリする。猿投・黒笹90号窯式に類似する。口径15.5㎝，底径7.6㎝，



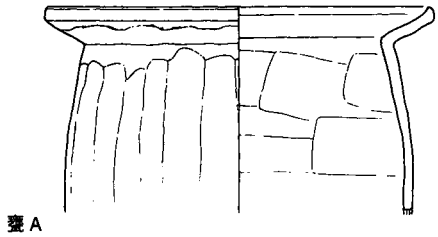
小型甕 B



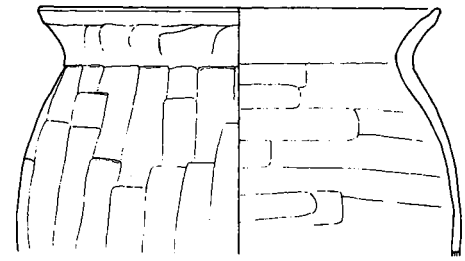
小型甕 C



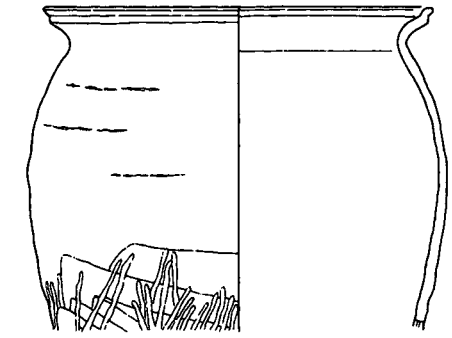
小型甕 D



甕 A



甕 B



甕 C

高さ 4.3 ㎝。

手付瓶：猿投・黒笹 14 号窯の製品。底部回転糸切り。

土師器鉢類

鉢Ａ：やや内湾気味の口縁をもつ平底の鉢。外面は横方向にヘラケズリした後上半をナデ仕上げ。内面は横方向のヘラナデ。

鉢Ｂ：口縁部が強く外反するバケツ型の平底の鉢。内外面とも横方向のヘラナデ。底部外面ヘラケズリ。粘土紐接合痕が残る。

土師器甕類

小型甕Ａ：ゆるやかな「く」の字状口縁をもつ。端部を強くナデ，明瞭な稜がある。外面上半は縦方向のヘラケズリ，下半は横方向のヘラケズリ。内面ナデ仕上げ。

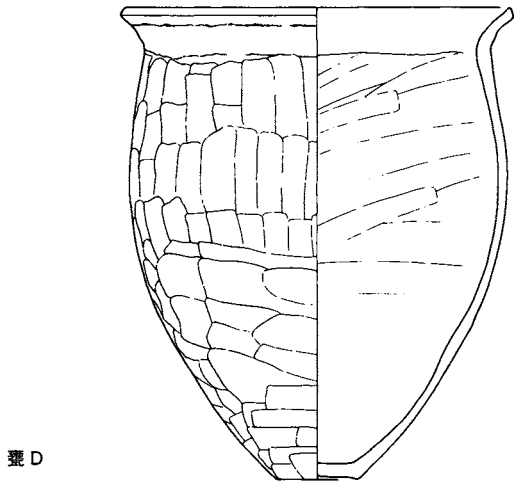
小型甕Ｂ：短い「く」の字状口縁で外面に面をもつ。外面上半は縦方向のヘラケズリ，下半は横方向のヘラケズリ。内面ヘラナデ。かなり厚手のつくり。

小型甕Ｃ：口縁はほぼ直立し，端部は短く内湾して内面に沈線をもつ。外面縦方向のヘラケズリ，内面横方向のヘラナデ。

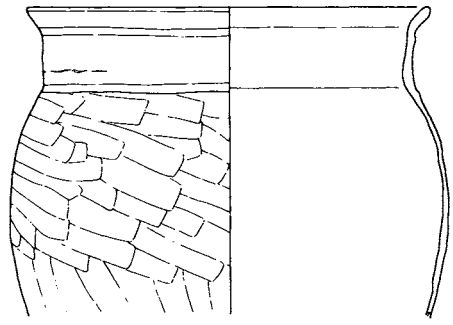
小型甕Ｄ：「く」の字状口縁。外面縦方向のヘラケズリ（Ａ～Ｃより細い），内面ナデ仕上げ。

甕Ａ：口縁部は大きく「く」の字状に開き，端部を若干つまみ上げている。最大径は口縁部にあり寸胴。外面縦方向のヘラケズリ，内面横方向のヘラナデ。

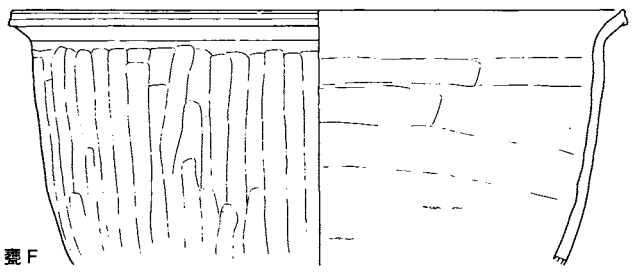
甕Ｂ：ゆるやかな「く」の字状口縁をもち，やや胴部の張る器形。口縁端部ヨコナデによって外



甕D



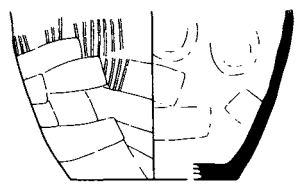
甕E



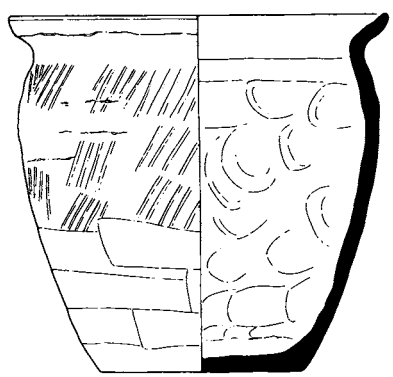
甕F

須恵器

小型甕A



小型甕B



甕A

面に面がつくり出されている。外面縦方向のヘラケズリ，内面横方向のヘラナデ。

甕C：胴部下半をヘラミガキすることを特徴とする常総型の甕。口縁端部が短く立ち上がって，つまみ出すように外反する。

甕D：「く」の字状の口縁部から底部に向かってすぼまり，非常に小さな底部がつくナスビ形の甕。外面上半縦のヘラケズリ，下半は横のヘラケズリ，内面はヘラナデ。

甕E：口縁部は直立して，上端だけ短く外反する。上半は横方向のヘラケズリ，下半は縦のヘラケズリ。非常に薄手。内面はナデ仕上げ。

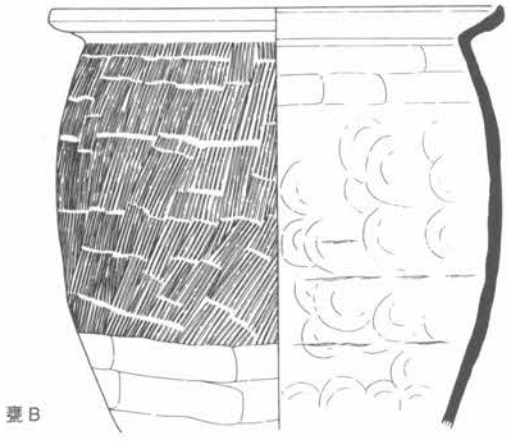
甕F：口縁部は短く外反し，外側に面をもつ。最大径は口縁部にあり，次第にすぼまる器形。

須恵器甕類

小型甕A：ロクロ成形の小型甕。底部外面を手持ちヘラケズリする。

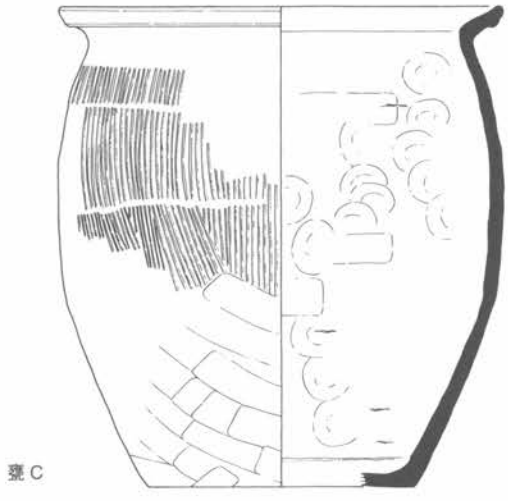
小型甕B：叩き板成形の小型甕。底部外面をヘラケズリする。

甕A：やや受け口状の「く」の字状口縁をもつ中型品。最大径は肩部にあるが，肩の張りは弱い。底部は安定感のある大きな平底。内外面に叩き板成形の痕が残り，外面上半を縦方向にヘラケズリするものとナデ仕上げするものがある。



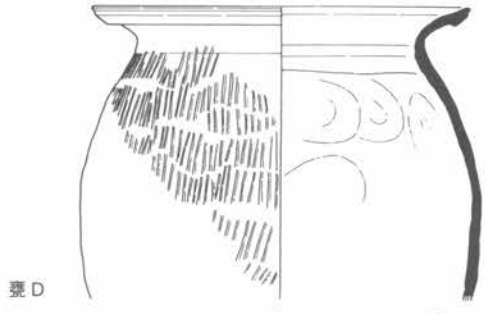
甕B

甕B：受け口状の「く」の字状口縁をもつ大型品。胴部上半に最大径がある。外面は叩き板成形痕を残し，下部に横方向のヘラケズリ，内面は頸部付近のみ横方向のヘラナデを行い，以下には当て具痕を残す。



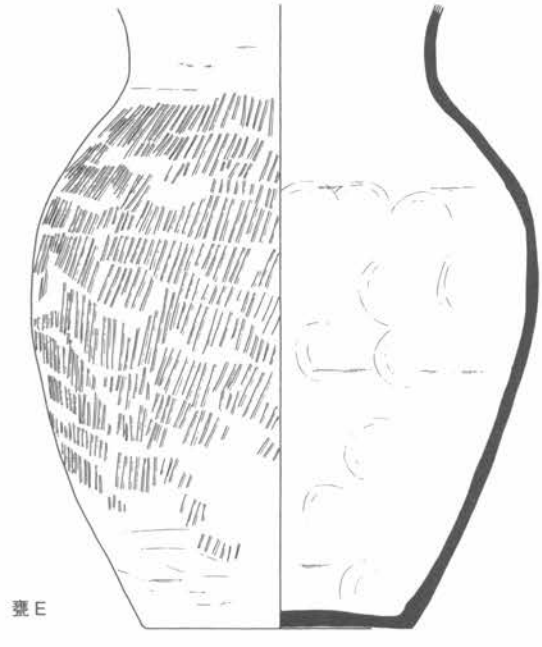
甕C

甕C：口縁部は「く」の字状で，外面に明瞭な面をもつ。胴の張りは弱い。大きな平底の底部をもつ。外面上半は叩き板成形痕を残し，下半は斜位のヘラケズリ。内面は当て具痕が残り，部分的にヘラナデがみられる。



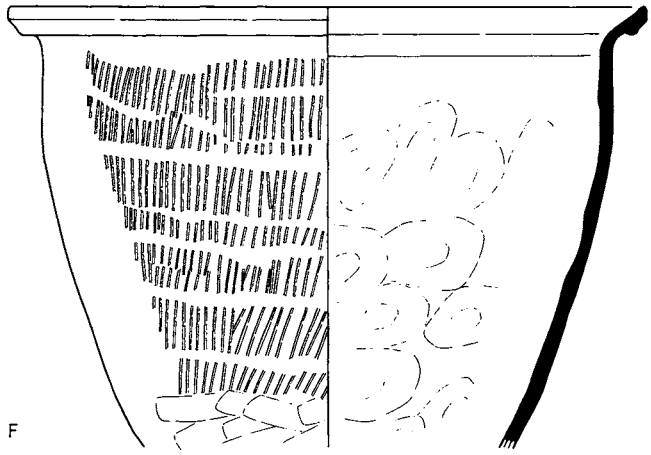
甕D

甕D：口縁部は強く外反した「く」の字状で，外面に面をもつ。A～Cに比べ頸のくびれが強く胴部に丸みがある。内外面に叩き板成形痕を残す。



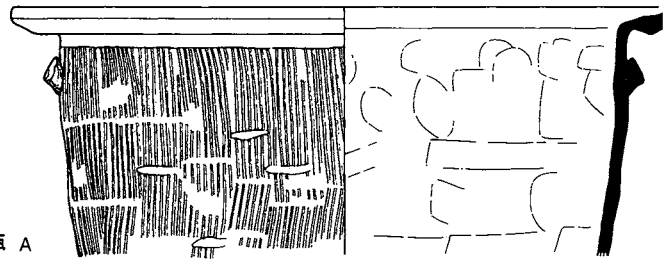
甕E

甕E：長頸の甕，外面叩き板成形痕。底部外面ヘラケズリ，内面ナデ仕上げ。大きい平底をもつ。



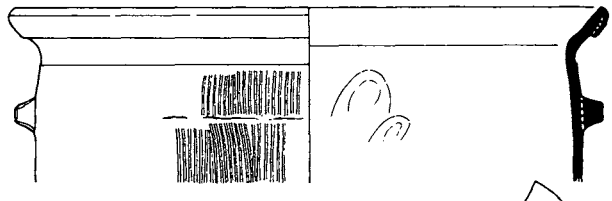
甕 F

甕F：口縁部は短く外反し，外側に稜をもつ面がつくり出される。最大径は口縁部にあり，底部に向かってすぼまる器形。外面に叩き板成形痕を残し，水平に横方向のナデが加わる。内面は，当て具痕がそのまま残る。



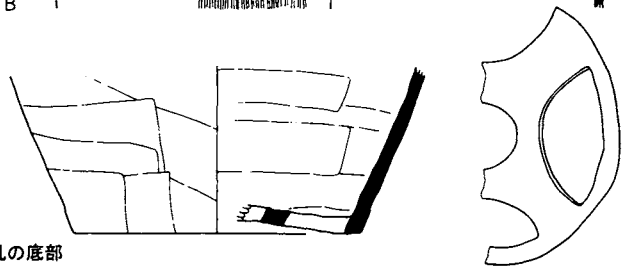
甑 A

甑A：五孔の甑。口縁部はほぼ水平に開き，外側に稜のある面をもつ。口縁直下に把手の形骸化した突起が２個ある。外面は叩き板成形痕を所々ナデ消し，内面にも当て具痕の上に横方向のヘラナデがみられる。



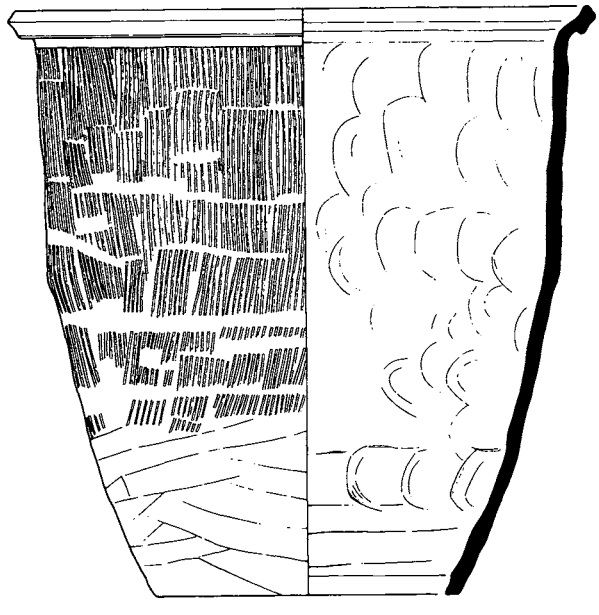
甑 B

甑B：五孔の甑。Aに類似するが，口縁部の外反度が弱い。把手状の突起の断面は台形。



五孔の底部

甑C：単孔の甑。孔の少し上にストッパー状の内面突帯がある。口縁に最大径があるがすぼまりは小さく，底部は比較的大きい。



甑 C

2．土器編年

本書は，遺跡内で大規模な集落が営まれた時期を「古墳時代後期後半」，「奈良時代」，「平安時代」に分けて報告を行っている。ここでは，この時期区分と実際の出土資料を対照するための前提として，土器編年を示す。なお，断片的資料しかない古墳時代中期及び後期前半の土器については，後の資料との間に断絶があるのでここでは触れない。1項の土器分類を参照いただきたい。

編年は竪穴住居跡出土の土器群から行った。とくに甕類を基軸とした。その結果が第325・326図である。

まず，千葉寺地区の土器群を概観すると，大きく2つに分けられる。

Ⅰ：甕・甑類の多くが土師器で構成される土器群
Ⅱ：甕・甑類の多くが須恵器で構成される土器群

千葉市周辺に現れる地域色の最たるものは，煮炊き用の甕類が独特の須恵器によってまかなわれることである。千葉寺地区では土師器が駆逐されるほどに強く現出している。むろん伝統的な須恵器の用いられ方ではないから，この地域色の発現をもって新旧の基準とすることができる。須恵器の質も異なる。灰色や灰白色に還元焼成された須恵器を主体とするⅠ群に対し，Ⅱ群は褐色やくすんだ黒褐色に焼成され，土師器と区別しにくい須恵器を主体とする。土師器を含め，器種別の形態や，皿の有無といった器種構成そのものにも，両土器群の間には目立った違いがある。これらすべての要素から，土器群における最大の画期が，Ⅰ群とⅡ群の間にあることがわかる。

つぎに，ⅠとⅡの土器群を細分する。

Ⅰの土器群については差異が大きく，区分はしやすい。加えて，近くの遺跡に指標とするべき良好な一括資料がある。千葉寺地区の5㎞ほど南に位置する，千葉市種ヶ谷津遺跡（第3次調査，主要地方道生実・本納線調査としては第2次）出土の土器集積遺構（ＳＸ）である。同遺構では，住居跡1軒分ほどの範囲に，復原可能な個体だけで600個体以上出土した。間層をほとんど挟まずに，関東各地の土器が密集状態で認められている。通常の集落跡と同じく，坏類や甕類で構成されているので，ある一時期，当地方で日常的に入手可能であった土器の大部分が網羅されているとみてよい（以下，種ヶ谷津資料と呼ぶ）。

種ヶ谷津資料は，土師器のみで甕が構成されており，Ⅰの土器群に含まれる。逆に，Ⅰ群は種ヶ谷津資料より多様である。種ヶ谷津資料を基準にして，「種ヶ谷津期」（3段階），その前の「先種ヶ谷津期」（2段階），その後の「後種ヶ谷津期」（4段階）の3つに区分することが可能である。また，種ヶ谷津資料に先行する土器群には，同資料に近い段階（2段階）のほかにも，古墳時代後期・鬼高式の伝統を色濃く残す，さらに古い土師器が含まれている（1段階）。これは，鷲谷津遺跡ではまだ少ない段階である。甕の形態等にも後の様相と大きな相違がある。このため，本来，Ⅰの土器群に含めるのは相応しくない。しかし，かつて鬼高式と真間式は連続的とされたように，この時期の変化は漸移的である。鷲谷津遺跡の開村時における土器群という意味から，あえて切り離すことはしていない。

Ⅱの土器群については差異が小さく，区分はしにくい。種ヶ谷津資料ほどの一括資料がないため，ここでは地域的な主要器種である須恵器甕類の「退化」を基軸とした。まず，甕類への須恵器使用という視点に戻ると，圧倒的多数の千葉産須恵器によって土師器甕類がほぼ駆逐される段階（1，2段階）と，須恵器が比較的少なくなる段階（3，4段階）が認められる。つぎに，須恵器甕類の口縁部に注目すると，前

者の甕が端部に多数の面をとり，丁寧かつ装飾的な造りであるのに対し，後者の甕は丸みを帯びたり，素口縁になっている。これを退化とみるなら，後者のほうが新しい。退化傾向を示す甕類には，器壁内湾・底部回転糸切り無調整の坏が伴うなど，共伴器種に明瞭な変化がみられる。なお，編年表では諸要素から前後をさらに２段階ずつに区分しているが，緩慢な変化であるため厳密な境界はない。

さて，変遷を理解するためには系統の整理が不可欠である。このとき，最大の難問は土師器甕類である。種ヶ谷津資料では，外部地域の武蔵型甕・常総型甕と，地域内部の「在地甕」の２種類・台付甕・小型甕があり，最低でも６種類の甕がそれぞれ多量に出土している。

長谷川厚によって「在地甕」とされたものは，通常頸部が「く」の字形に強く屈曲する，やや開いた筒型の長胴甕をさす。縦方向の粗いが規則的なヘラケズリ痕が特徴的で，器面の凹凸が激しい。これに対し，もう一つ異系統の甕がある。頸部から胴部にかけて緩やかな「S」字ラインを描くように，比較的ふくよかな胴部をもつ，厚手で重量感のある甕である。斜めや縦のヘラナデで器面が比較的滑らかに調整され，調整単位が明瞭でない場合がある。数は少なく，壺の要素も持ち合わせるが，在来の鬼高式甕から生じた「在地甕」である。両者の混乱を避けるため，便宜的に名前を与えておく必要があろう。形状から，頸部が「く」の字に屈曲する前者を「房総K」型，緩やかな「S」字を描く後者を「房総S」型としておく。

本節１項で行っている土器分類に照らすと，土師器甕類の系統は以下のように整理できる。なお，分類は暫定的に時期区分ごとの説明となっているので，本文中では混同しないよう記号の頭に，

コ＝古墳時代後期後半　ナ＝奈良時代　ヘ＝平安時代

の略号を付ける。また，図中の坏に「イ」とあるのは底部糸切り無調整のことである。

武蔵型　：ナ甕A・ヘ甕E

常総型　：ナ甕D・ヘ甕C

房総K型：コ甕D・ナ甕A（II群では，K'型＝ヘ甕A　　：千葉寺地区では系譜が続かない）

房総S型：コ甕B・ナ甕C（II群では，S'型＝ヘ甕B・D：器形のみ武蔵型に近似したもの）

台付甕　：ナ小型甕B

小型甕　：ナ小型甕A・C

他地域との併行関係を示す甕以外の外来系土器では，良好な土器群を伴う大きな破片のみ図に組み入れた。近畿地方の暗文土器（ナ坏DI）は，ほかにSI-081の２点，SI-086の11点，027-19グリッドやN27-24グリッドの各１点があり，模倣品（コ皿・ナ坏DII）についてはSI-007，SI-026の各１点がある。上総型坏は，SI-070でI群３段階の土器群との共伴例が唯一である。甲斐型坏（ヘ坏BVI）はSI-125でのみ出土している。灰釉陶器はほかに026グリッドで出土している。緑釉陶器はSI-087の伝世品を除くと，SI-072の出土例だけである。

その他の系統分類は編年図のとおりとした。II群における坏類は，ロクロ土師器と須恵器との見分けが困難であることから，系統分類を断念している。

須恵器窯の特定については，形態と，胎土や焼成等とを考慮して初めて見極めが可能になる。それでも既知の窯に限られてしまい，自ずと限界がある。したがって，本書ではとくに必要があるときのみ窯の特定を試みているが，基本的には東海産，茨城産などといった大枠での把握をするほうがよいと考えた。千葉市域及びその近隣に所在する窯で焼かれた須恵器は，黒褐色，暗褐色，褐色，赤褐色など独特の色調を有する軟質の焼成であるため，いわゆる須恵質に焼成された他地域の須恵器とは明確に一線を画す。千葉

市南河原坂窯，中原窯，宇津志野窯，富里町吉川窯，佐倉市端山越遺跡等の製品を一枠内でとらえ，ここでは「千葉産須恵器」とした。なお，南河原坂窯ではミガキをもつ土師器坏などが，窯ないし窯と隣接した場所で生産されているという。つまり，土師器と須恵器が異なる工人集団の産物とは認識しえない状況である。生産側，消費側ともに，土師器と須恵器の区別が曖昧になった土器群，というのがⅡ群の本質と考える。

以下，土器の群と段階を，時期変化であるとして期と読み替え，各期ごとの特徴を記していく。

（1）Ⅰ－1期

新しい土器様式が成立する直前の状態である。一部に次代への過渡的要素がある。千葉寺地区で本格的に集落形成が始まる段階の土器で，資料的には少ないため，欠けている器種の存在が想定される。

須恵器坏

東海産とみられる小型の丸い蓋（コ坏H蓋）を主体とする。身（コ坏H）の出土量は蓋に比べて極端に減少する。丸底と平底の中間で，素口縁の小型坏（コ坏ＧⅠ）がまれに含まれる。

土師器坏

須恵器坏H蓋と同形同大の，丸い小型坏（コ坏ＡⅠ）が主体である。内面をミガキ調整している。放射状の暗文をもつものがある（コ坏ＡⅡ）。鬼高式の特徴である身の模倣坏は極端に減少する。

高坏

土師器高坏が少数みられる。内面黒色処理を施した坏部に，太い脚部がつく（コ高坏Ａ）。坏部形態は単純化し，土師器坏と同じ椀形になる。脚も単純化し，短い「八」の字形で，下端部屈曲は形骸化する。

甕

鬼高式以来の伝統的な土師器甕である。口縁端部や頸部に丸みをもつ，縦長球形をした厚手の甕で，下ぶくれではなくなり，やや肩の丸みが増した，房総Ｓ型の原形が主体となる（コ甕Ａ）。口縁部や胴部などの一部形態に房総Ｋ型の特徴が出現し始める。

（2）Ⅰ－2期

先種ヶ谷津期である。須恵器は少なく，出土例のほとんどが東海産（湖西窯）と考えられる。土師器では房総Ｋ型甕の定着，台付甕出現，浅い坏の増加など，漸移的に新しい土器群の要素が出揃う。

須恵器坏

東海産の小型坏蓋（コ坏H蓋）が残り，高台付蓋坏（コ坏Ｂ）が加わる。高台付蓋坏には，高台より底が丸く突出する「出っ尻」のもの（コ坏ＢⅠ・ＢⅡ）と平らなものがある（コ坏ＢⅢ）。無蓋坏では，やや平底の小型坏（コ坏ＧⅠ）と，半球形の坏（コ坏ＧⅡ）がある。これらは時期差を含むとされるが，集落では混在した状態で出土する。

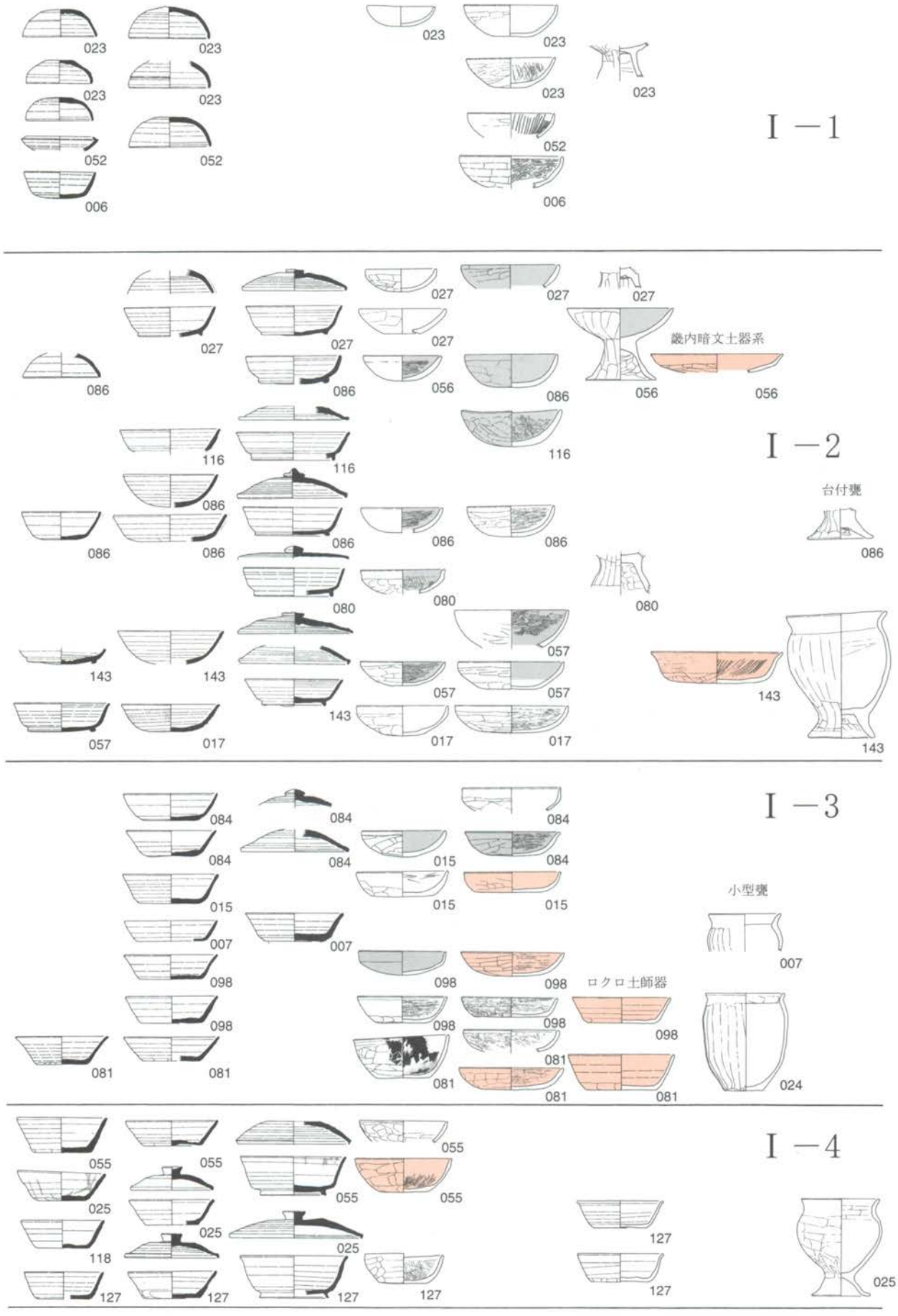
土師器坏

浅めの丸い小型坏が主体であるが，同形の大型坏がある（コ坏ＡⅠ・ＡⅡ・Ｂ）。内面はヘラミガキ・黒色処理が多い。また，平底気味の坏（コ坏Ｃ）や丸底の盤状坏（ナ坏Ｆ）が現れる。畿内の暗文土器（ナ坏ＤⅠ）やその忠実な模倣品（コⅢ）を伴うことがある。

高坏

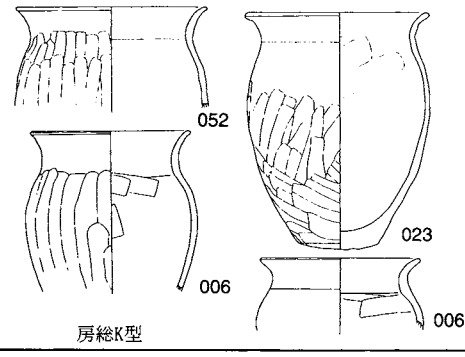
土師器高坏がごく少数例みられる。単純な椀形の坏部に，「八」の字形の太く短い脚が付く。内面はヘ

須恵器坏類　　土師器坏類　　高　坏

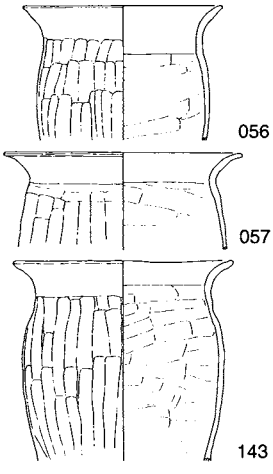


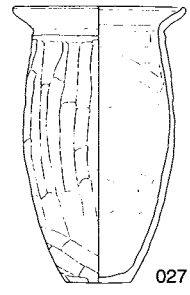
【番号は遺構名・SIを省略】

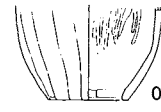
第325図　土器編年 I



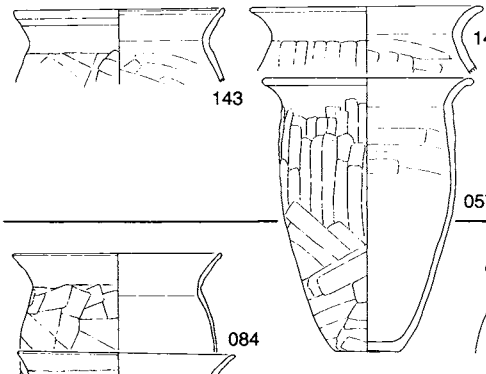
房総K型



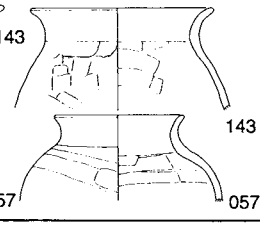




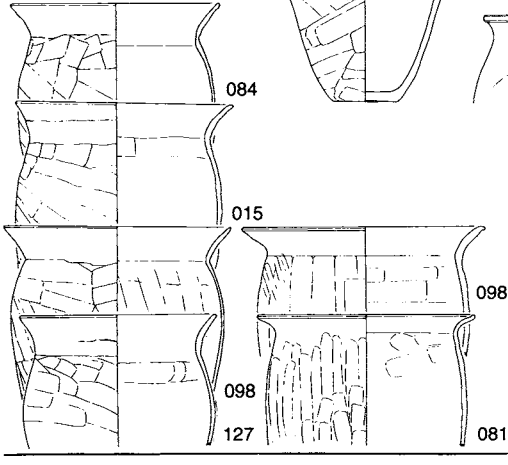
武蔵型

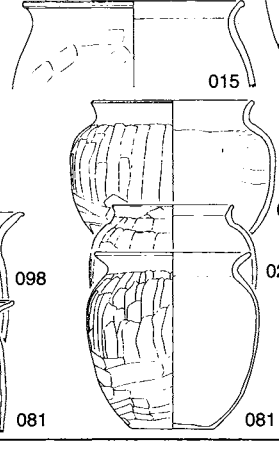


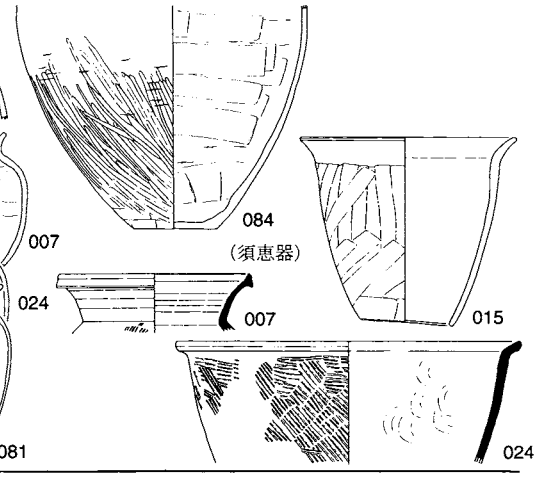
房総S型

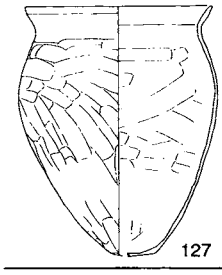


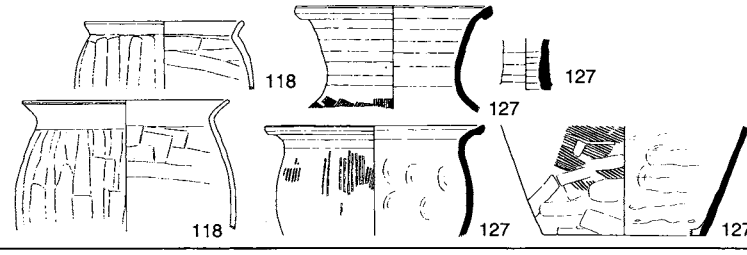
常総型

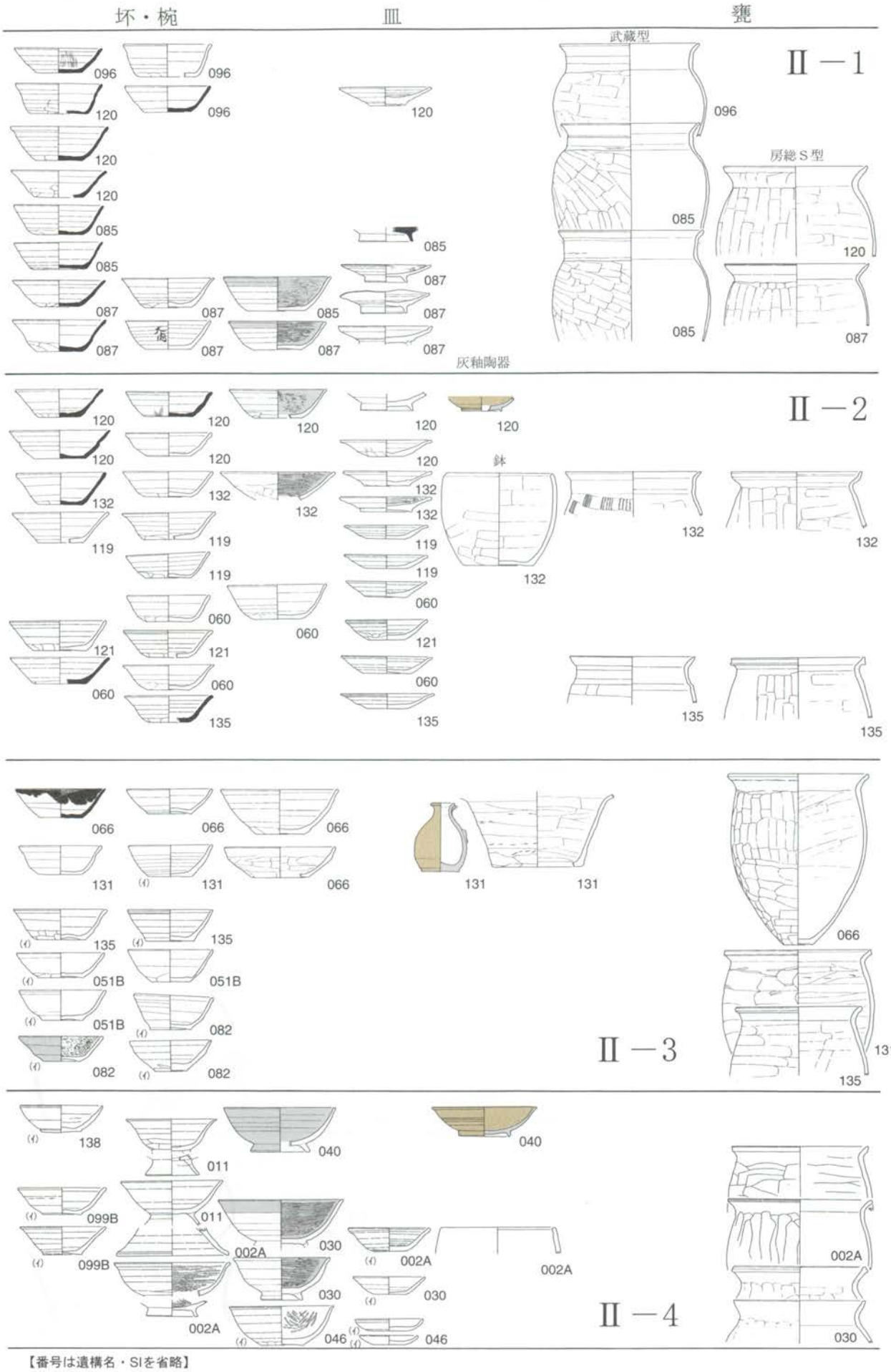






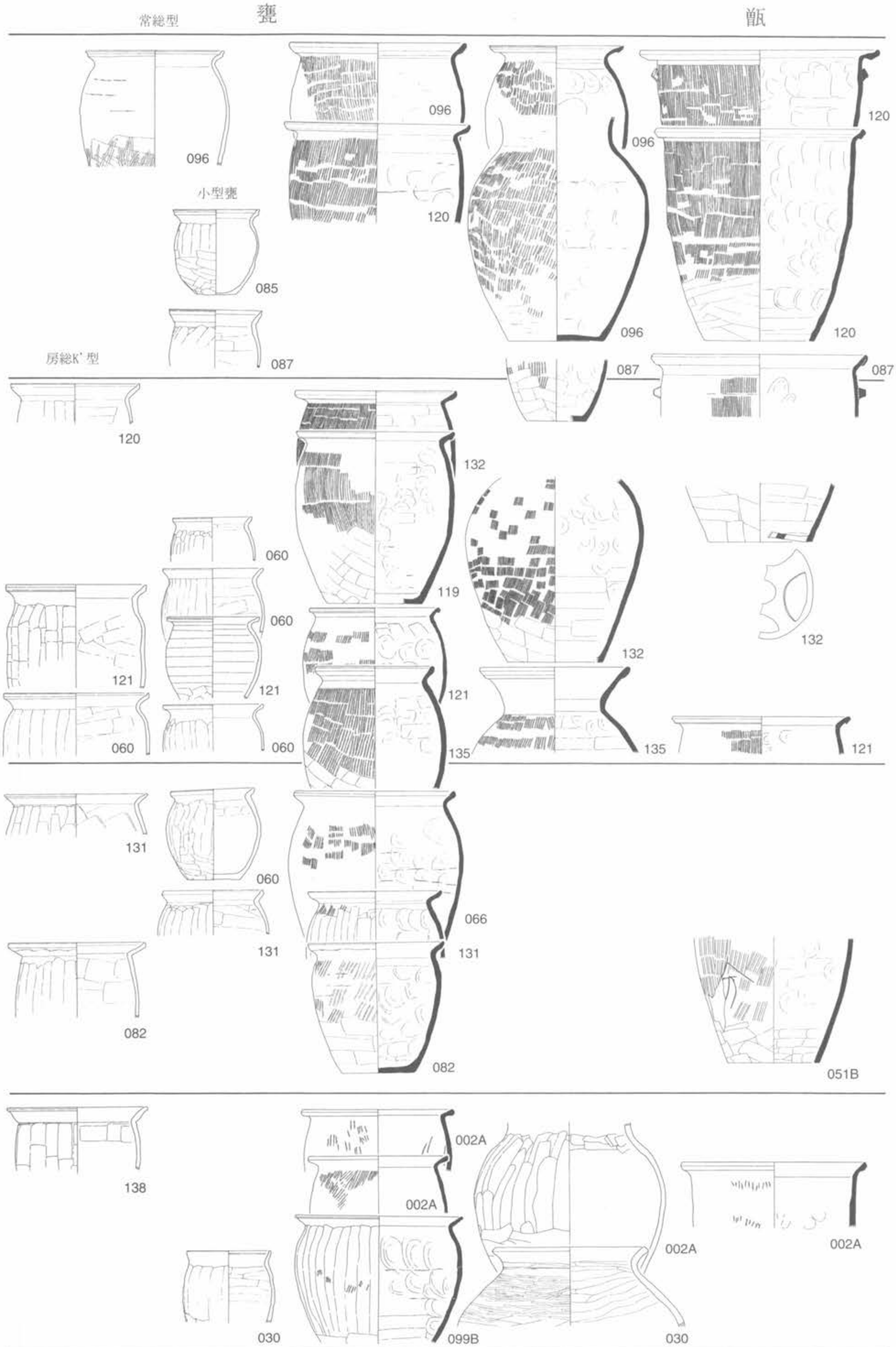






【番号は遺構名・SIを省略】

第326図 土器編年Ⅱ


常総型
甕
甑
096
096
096
120
120
120
小型甕
085
087
087
087
房総K' 型
120
132
132
132
060
060
121
121
121
119
060
060
135
135
121
131
060
066
131
131
082
082
051B
138
002A
002A
002A
002A
030
099B
030

ラミガキ・黒色処理が多い。

甕

房総Ｋ型と房総Ｓ型の土師器甕を主体とし，前者が急増する。房総Ｋ型（コ甕Ｄ・ナ甕Ｂ）は，頸部が「く」の字に屈曲し，外面に列をなす縦ヘラケズリ痕をもつが，初期ほど頸部屈曲が鈍く，調整にも過渡的要素が強い。地元鬼高式の流れを汲む厚手の房総Ｓ型（コ甕Ｂ）は，器形，頸部形状，口縁端部に丸みがあり，横や斜めの丁寧なヘラナデにより，外面がきわめて滑らかな段階である。この段階で出現する台付甕（ナ小型甕Ｂ）は，脚が短く，厚手の造りで，ゆがんだ甕形ないし鉢形をなす。武蔵型甕や常総型甕など，他地域の甕が参入を始めるがまだ比率は低い。武蔵型甕はまだ少し厚めである。

甑

底が抜けた単孔の土師器甑で占められる。ややふくらみをもつ鉢形をなし，厚手である。外面は縦を基調とするヘラケズリ，内面は器壁中央部に縦ミガキが施されるものが多い。暗褐色から明褐色をしている。

（３）Ｉ－３期

種ヶ谷津期である。土師器中心とした様式が完成する。須恵器は坏類にのみみられるのが基本で，東海産が姿を消し，茨城県産など近隣からの供給に切り替わる。地元では市原市永田・不入窯があるが，この段階での出土数は少ない。土師器では，盤状の坏が主体を占める一方，地元の甕を凌駕する量の武蔵型甕などが搬入され，異系統の甕が共存するという特徴がある。後半になると，搬入品の影響で地元の甕が変容を始め，ロクロ土師器の坏が登場するなど，様式が急速に崩壊を始める。

須恵器坏

浅身の坏（ナ坏ＡⅣ）が主体である。広い平底で，器壁は斜めにまっすぐ開き，鋭い口縁端部をもつ。浅箱形の坏（ナ坏ＡⅢ），下端を強く削った坏（ナ坏ＡＶ），浅身の高台付坏（ナ坏ＢⅣ）を伴う。深身の坏（ナ坏ＡＩ）や深身の高台付坏（ナ坏ＢⅡ）は種ヶ谷津資料にはあまり含まれないので，参入の時期が少し遅れる種類であると考える。

土師器坏

丸底の盤状坏（ナ坏Ｆ）と，平底の盤状坏（ナ坏Ｅ）が主体である。内面ミガキ・内外面赤彩が多い。小型の丸い坏（ナ坏Ａ・Ｂ）は減少する。畿内系暗文土器の模倣品（ナ坏ＤⅡ）が伴う。前半には厚手で粗い造りの小鉢が多数存在するが，鷺谷津遺跡では１例（SI-122）しかない。後半には，ロクロ製の坏（ナ坏Ｇ・ＨＩ）や深身の平底坏（ナ坏Ｃ・ナ鉢Ｂ）が出現する。盤状坏と同様，内外面赤彩が多い。

甕

武蔵型が増進し，次いで房総Ｋ型，房総Ｓ型，常総型の順に多い。武蔵型（ナ甕Ａ）は，明褐色を基調とし，横・斜めヘラケズリによる極薄（３㎜前後）器壁が特徴で，頸部が「く」の字に屈曲し，直線的で長い口縁部をもつ。房総Ｋ型（ナ甕Ｂ）は，暗褐色を基調とし，縦列をなす粗いヘラケズリが特徴で，比較的厚手であるが，後半には薄くなる。房総Ｓ型（コ甕Ｂ）は，暗褐色から明褐色を基調とし，上部縦ヘラナデ・下部横ヘラナデが特徴的な極厚の甕で，多様性に富み，須恵器短頸壺に類似した甕（ナ甕Ｃ）もこれに含まれる。後半には数が減少し，器壁は薄くなる。常総型（ナ甕Ｄ）は，胎土に大粒の白雲母を含む比較的淡い色調を基本とし，丁寧なナデと下半部の粗い縦ヘラミガキが特徴で，厚みがあり，「Ｓ」字状またはつまみ上げ口縁をもつ。底部外面に木葉痕を残すものがある。台付甕は資料的に恵まれないが，厚手・不整形である。小型甕（ナ小型甕Ａ・Ｃ）も厚手・不整形で，縦列の粗いヘラケズリが特徴である。

（4）Ⅰ－4期

後種ヶ谷津期である。土師器中心の構成であるが，須恵器が甕類に参入し始める。須恵器坏類は，灰色に還元焼成された市原市永田・不入窯産等が多く，甕類は黒褐色やにぶい黄橙色の千葉産が多い。土師器では，伝統的技法を保っていた盤状坏が消え，ロクロ土師器坏に交代する。地元の甕は減少し，搬入品の影響による変容が進む。これらは須恵器の比率増大と一体の現象で，Ⅱ式への過渡的様相である。

須恵器坏

箱形坏（ナ坏ＡⅠ）と，やや底が狭い坏（ナ坏ＡⅡ）が主体となる。浅身底広の坏は含まれなくなる。高台付坏（ナ坏ＢⅡ）も深身で，椀状の形態をなす。蓋のつまみには，中央が凹んでいるものを含む。

土師器坏

ロクロ製の坏（ナ坏H）が主体となる。須恵器坏と同形で，黒色処理が施されたもの，ケズリやミガキが加わるものを含む。箱形坏の底部調整には，糸切り痕を中央に残し，ドーナツ状に周囲をヘラケズリしたものが含まれる（ナ坏HⅣ）。器壁全面にヘラケズリ調整が施される坏は，須恵器に追随した深身平底の坏（ナ坏C）のみとなる。ロクロを使わない盤状坏は消滅し，以後，ロクロ整形が坏の基本となる。

土師器甕

主体となる武蔵型（ナ甕A）は，二度の口縁部ヨコナデのうち二次ヨコナデが口縁端部にのみ強く施され，頸部付近に施される一次ヨコナデとは分離する傾向がみられる。これにより口縁端部にも頸部とは別の屈曲が生じ，頸部「コ」の字化（ヘ甕E）への前兆が認められる。房総K型，房総S型は減少する。調整は伝統の縦ヘラケズリ（下部は横ヘラケズリ），形態は武蔵型に似て肩が張り，底部が小型化し，薄手化する。つまみ上げ口縁は常総型の影響と考える。台付甕は均整で薄手の搬入品がみられる。脚部の精美な造りは，前代で姿を消す厚手の台付甕とは大きく異なる。数は少なく次第に消滅する。

須恵器甕・甑

数は少ないが，長頸の甕（ナ甕Ｂ・ヘ甕Ｅ）と甑（ナ甑・ヘ甑Ｂ）がある。甑と同形の甕（ナ甕Ｃ）は希である。比較的操業開始が古い千葉市南河原坂窯にはこのような器種構成が認められる。千葉産須恵器の供給元はまだ少ない段階と考える。甕は三角形に近い，かなり鋭利な口縁部形態をもつ（ナ甕Ｂ）。

（5）Ⅱ－1期

ロクロ製の土師器・須恵器坏類と，須恵器甕類が飛躍的に比率を増し，隆盛を極める。黒褐色から褐色に焼成された中原窯などの千葉産須恵器を主体とする。入れ替わりに，土師器の伝統的な整形技法をもつ坏はみられなくなり，土師器甕類は著しく減少する。

坏類

灰色に還元焼成された須恵器は激減する。箱形坏（ヘ坏ＡⅠ）が若干残るほかは，底が狭く浅い坏（ヘ坏ＡⅡ～Ⅴ）や，口縁部が大きく外反する坏（ヘ坏ＡⅧ）が主体である。土師器はロクロ製が基本で，独自の技術的系譜をもたず，須恵器と連動する。古くは箱形坏（ヘ坏ＢⅠ）を多くみかけるが，すぐに底が狭く浅い坏（ヘ坏ＢⅣ）に交代する。椀に連なる大型坏（ヘ坏ＢⅤ）は，内面ミガキ・黒色処理が多い。赤彩は姿を消す。

皿

焼成・形態ともに須恵器か土師器かの区別が難しい。須恵器盤等を祖形として，一般的にはこの段階に参入する。高台の有無は別系統を示し，当初から両者が存在する。口縁部が盤状に立ちあがる（ヘ皿Ｅ）

か，坏部が内湾する（ヘ皿ＤⅠ・Ⅱ）ものが原形に近いので古いと考える。

須恵器甕・甑

甑と同形の甕（ヘ甕Ｂ）が主体となる。褐色の甘い焼成で，二次焼成を受けているものが多い。タタキ整形で，外面下部1/3に横ヘラケズリが加わり，胴上半部には幾本ものナデによる細い横筋が均等に配される場合が多い。口縁部は突帯やつまみ上げを複合的に施し，装飾的で複雑な造りである。甑も出土量は多く，焼成・調整は甕と共通で，口縁部は甕よりさらに複雑な面取りがされている。底部は単孔（ヘ甑Ｃ）と五孔（ヘ甑Ｂ）があり，後者が主体である。二方向に方形の突起をもつ。長頸の甕（ヘ甕Ｅ・Ｄ）は比率的にやや少ないが，造りは同様で，二次被熱もしている。口縁部突帯は比較的突出度が低い。

土師器甕

武蔵型は減少に転じながらも搬入が続く。器壁が極めて薄く，頸部断面が「コ」の字形に変わるのが特徴的である。房総Ｓ'型（ヘ甕Ｂ）は，Ｓ型を母胎に，胴部外面上半の縦ヘラケズリ（ナデ），下半の横ヘラケズリという伝統を受け継ぐ一方，胴部形態は武蔵型に近似し，頸部屈曲は鋭く，器壁は薄くなるという変化を経て成立する。常総型は少量搬入されている。小型甕（ヘ小型甕Ａ）は薄手で，均整がとれてくる。房総Ｓ'型と同じ調整がなされ，つまみ上げ口縁をもつ。

（６）Ⅱ－２期

ロクロ製の坏類と，須恵器甕類が隆盛である。暗褐色から明褐色に焼成された宇津志野窯などの千葉産須恵器が中心である。土師器甕類は最も減少する段階を迎えるが，後半になるとやや増加に転じる。

坏類

須恵器では，底が小さくやや深身の坏（ヘ坏Ａ）が主体である。器壁はまっすぐ斜めに立ち上がり，口縁端部が若干ふくらみをもつ。土師器では，ロクロ製の浅い坏が主体で，器壁がやや内湾気味（ヘ坏ＢⅣ）と外反気味（ヘ坏ＢⅡ）がある。大型の坏はやや口縁部が外反する（ヘ坏ＢⅡ・Ⅲ）。ヘラケズリを加え，内面にミガキを施し，さらに黒色処理をする坏（ヘ坏ＡⅡ）が希にみられる。

皿

鷲谷津遺跡では高台付皿は減少し，高台風の痕跡が残る土師器（ヘ皿Ｃ）や，平底の土師器または須恵器皿（ヘ皿Ａ）が主体となる。いずれも口縁部が外反するか，直線的である。糸切り痕を残すものを含む。

須恵器甕・甑

甑に似た甕（ヘ甕Ｂ）が主体である。後半になるとタタキ痕のナデ消しが始まり，口縁部はやや短くなるとともに，端部装飾がやや簡略になる（ヘ甕Ｃ）。長頸の甕や甑も同様の変化を示す。

土師器甕

武蔵型はほとんど搬入されなくなる。前半には薄手であるが，後半には器壁の厚みがかなり増す。房総Ｓ'型は，口縁部は短くなり，端部に須恵器と似たつまみ上げや面取りが施され，器壁は再び厚くなる。少量ながら参入を始める房総Ｋ'型は，Ｋ型とほぼ同じ特徴をもつが，調整や器形がかなり不規則・不整形である。小型甕（ヘ小型甕Ａ・Ｄ）はまだ比較的薄手のものが多い。ロクロ製は須恵器の可能性が高いとされるが，縦ヘラケズリ調整されたものと同様の器形・口縁部をもつ。

（７）Ⅱ－３期

須恵器と土師器の区別がより困難になるが，甕類に関しては，須恵器に対して土師器の比率が増加に転じ，共存するようになる。また，各器種ごとの形態的な変化が，Ⅱ式の中ではもっとも明瞭に起こる。

坏類

須恵器と土師器の区別はほとんどできない。器壁が内湾するのが特徴的である。ロクロ製の浅い坏（へ須恵器坏ＡＶ・へ土師器坏ＢⅡ・Ⅶ）が主体で，底部はヘラケズリ調整を含むが，基本的に回転糸切り無調整となる。椀を模倣する傾向が強まり（へ土師器坏ＡⅠ・Ⅱ・椀ＡⅠ），小型の深い坏（へ坏ＢⅧ）も，側面下部を椀の高台風に削り出す。これらの傾向は後半ほど顕著になる。なお，皿は著しく減少する。

須恵器甕・甑

依然として甑に似た甕（へ甕Ａ）が主体であり，タタキ痕をもつが，縦方向のヘラケズリやナデによりタタキ目を消すものが多い。口縁部装飾の退化が著しく，焼成はますます軟質になる。甑は減少する。

土師器甕

搬入品が減少，薄手の甕が消滅する。増加に転じる房総Ｓ’型（へ甕Ｄ）は，端部に面をもつ短い口縁部が特徴的で，外面の横ヘラケズリが，胴部上半にも施される場合がある。房総Ｋ’型（へ甕Ａ）は，胴部が均整な筒形と化し，鋭い頸部屈曲以外は，古式の姿に戻る。つまみ上げ口縁が多い。小型甕（へ小型甕Ｂ）は調整や口縁部形態が房総Ｓ’型と同じで，比較的厚手になる。

（８）Ⅱ－４期

全体的に土器の出土量が減少する。須恵器はそれと認識できる資料の減少が著しく，土師器との融合が進み，口縁部等の形態が簡略化する。

坏・椀類

すべてロクロ製である。小型の浅い坏または椀（へ椀ＡⅠ）と深い坏（へ坏Ⅸ）は高台風に底部を厚めに切り離し，回転糸切り痕を残す。足高高台付坏（へ坏Ⅹ）は，高さ２㎝～６㎝の高台をもち，丁寧なロクロ整形後，あまり調整を加えていない。低い高台をもつ椀（椀ＤⅡ）は，口縁端部の反り方などに繊細な造形がみてとれ，内面ミガキ・黒色処理などを施す。これらは共伴することがある。高台風に厚底となっている椀（へ椀Ｂ）は，木製椀とよく似た土師器最後の椀である。

皿

減退していた皿が再び現れる（へ皿Ｆ）。数は少なく，形は土師器の浅い坏に類似する。底部に回転糸切り痕を残す。カワラケ様の土師皿が出現するのはさらに後半のことである。

須恵器甕・甑

依然として甑に似た甕（へ甕Ａ）が主体である。タタキ痕は縦のヘラケズリやナデによりほとんど見えなくなり，口縁部は素口縁に近くなる。

土師器甕

房総Ｓ’型・Ｋ’型には大きな変化がないが，口縁部は単純化する。また，須恵器の甕（へ甕Ｅ）の形態をもちながら，外面をヘラケズリや丁寧なヘラナデ（ミガキ）とした暗褐色の甕が現れる。

３．時期区分

千葉寺地区の鷲谷津遺跡は，総合的にみて奈良・平安時代の大きな集落であり，隣接する観音塚遺跡についても同じことがいえる。古墳時代中期および後期前半とみられる資料も出土しているが，断片的にしか認められず，断絶がある。これに対し，奈良時代の直前，あるいは古墳時代の終わり頃と考えられる資料は比較にならないほど多い。本遺跡の集落が本格的に形成されるのはこの時期といえる。

本書では住居跡に関して，古墳時代を３時期（「中期」，「後期前半」，「後期後半」）に区分し，さらに「奈良時代」，「平安時代」の順に分けて報告している。とくに後期を２時期に分割したのは上記のような状況を考慮したためであり，実際には「後期後半」といっても，もっとも新しい時期に資料が集中している。むしろ後続する「奈良時代」との分離のほうが難しい状況といえる。

「古墳時代後期後半」の分離については，整理作業上の問題からあまり複雑な指標では行いえなかった。このため，作業当初から，飛鳥あるいは藤原宮を念頭に，そのころ生産されたと考えられている東海産の須恵器，あるいはそれに類似の須恵器が伴うこと，を指標としてきた。本書の構成は基本的にこの方針に沿ったものである。したがって，生産地における編年が正しかったとしても，そこから遠く離れた消費地である本遺跡では，様々な要因により廃棄される時期に誤差を生じているはずである。このことは当然，「奈良時代」以降の区分にも影響する。

上記の指標をもって，土器編年と時期区分を対照させるとほぼ次のようになる。

「古墳時代後期後半」　＝Ⅰ－１期・Ⅰ－２期
「奈良時代」　＝Ⅰ－３期・Ⅰ－４期
「平安時代」　＝Ⅱ－１～４期

これをみると，時期区分と土器群から連想される年代観に矛盾が生じている。Ⅰ－３期の分類基準となった種ヶ谷津資料は，その報告書においても８世紀第３四半期とされていて，少なくとも通常でいう奈良時代の始まりには位置づけられていない。

一方，Ⅰ－２期のSI-143出土土器に含まれる畿内系暗文土器は，平城京での事例から確実に奈良時代の所産と考えられる（SI-143に限っては，奈良時代に分類して報告した）。同様に，Ⅰ－２期のSI-086出土土器においても，層序的に分離不可能な状態で螺旋状の暗文をもつ搬入土器片が多数出土しており，奈良時代の所産と考えてよい。

「古墳時代後期後半」の古相にあてたⅠ－１期の須恵器についても問題がある。本来，蓋坏は，蓋と身が組で生産されたと考えられるかもしれないが，鷺谷津遺跡には坏H身の出土例が蓋に比べて著しく少ないという現象がみられる。千葉寺地区のⅠ－１期よりも以前には，身模倣の土師器坏が出土する段階があり，須恵器坏Hの身がこの段階に多数共伴する。

須恵器供給元が，はるか遠方の東海産に偏るⅠ－１・２期においては，限られた入手ルートの中で働く消費地独自の論理を考慮しなくてはならない。器種は小さい坏類に限られるので，容易には破損しない。祭祀で埋めてしまうものではなく，生活用具として定着していたなら，なおさら繰り返し大切に使用されたとみられる。もし，須恵器編年を額面どおり援用すると，奈良時代前半の土器資料は極めて少なくなり，集落に断絶があることになる。しかし，集落分布は，Ⅰ－２期とⅠ－３期の間に長い断絶があったというよりも，連続性があったとみるほうが無理のない様相である。土器編年上，土師器の変化も比較的連続的に追える。とすれば，須恵器坏類は新旧が混在しながら，かなり遅い時期まで残る可能性が高い。したがって，須恵器を指標とした区分である「古墳時代後期後半」は，そのうちⅠ－２期の相当部分が，奈良時代にくい込むことになる。

このように，本書における「古墳時代後期後半」，「奈良時代」，「平安時代」の時期区分は，土器編年上の区分に対し，近似値を示す時期名称であって，文献上の時代区分とはまったく異なる。土器編年上の区分が，文献の時代区分をまたがることは当然ありうる。

最後に，土器編年の考え方と時期区分についてもう一度整理しておきたい。

千葉寺地区鷺谷津遺跡では，奈良時代以前から，平安時代のかなり新しい時期まで，ほぼ継続的に集落が営まれ，各時期の土器が出土している。土器群は須恵器の入手状況に大きく影響を受けている。Ⅰ－２期まではほるか遠方の東海産須恵器にほぼ限られており，土器群は土師器を主体に構成されている。Ⅰ－２期からⅠ－３期にかけては，東海産から一転して，茨城県産や近隣の窯からの須恵器坏類を入手するようになる。須恵器は一変するが，土師器坏類・甕類には連続性が認められ，引き続き土師器を中心に構成されている。ただし，土師器甕類には近隣の県外産を多く含むようになる。土師器坏類も、増加した須恵器坏類と同じく、大きくて浅い形態が中心となる。この時点を，本書では「古墳時代後期後半」と「奈良時代」の境界としているが，実質は奈良時代の前半期に大きくくい込んでいると考える。

つぎに，最大の変化がみられるのがⅠ－４期からⅡ－１期にかけてである。千葉産須恵器が飛躍的に多くなることに関連して，煮炊き用の甕が須恵器に交代し，土師器甕類が激減する。この時点を「奈良時代」と「平安時代」の境界としたが，実質は平安時代に少し入っている可能性がある。

一方，ほぼ「平安時代」にあたるⅡ－１期からⅡ－４期にかけては，須恵器甕類が緩慢に変化（退化）してゆく過程である。坏類に大きな変化がみられるⅡ－３期，及びⅡ－４期についても，他器種においては比較的連続的な変化を示している。最終的にはカワラケ様の土師器皿を含むことから，中世直前まで断絶はなく，連綿と続いた公算が大きい。

第３節　出土金属製品

１．鉄製品

鷺谷津遺跡では，鍛冶関連資料を除いて405点の鉄製品が出土している。これらは洗浄・分類した後，Ｘ線撮影を行った。このうち，古墳時代から平安時代，および中近世の製品とみられる229点を図化した。計測表は附表22～35に示した。

図化した鉄製品の出土遺構は竪穴住居跡が最も多く，調査した144軒の住居のうち56軒が該当する。その他の遺構では，掘立柱建物跡15棟，土坑24基に出土例がある。

時期別に見ると，竪穴住居跡では古墳時代中期・後期前半が２/10軒，古墳時代後期後半が12/27軒，奈良時代が23/51軒，平安時代が19/53軒で，弥生時代を除いた141軒のうち56軒が該当する。掘立柱建物跡では古墳時代後期後半に帰属すると思われる例が２例，奈良時代と推定されるものが３例，平安時代の建物跡が６例，平安時代と推定される例が４例ある。土坑には古墳時代後期後半の例が２例，奈良時代の例が３例（うち２例は推定），平安時代に14例（うち４例は推定），中近世に３例みられる。

種類別に見ると，刀子が最も多く55点で，SI-010のように１軒から６点出土した例もある。ついで多いのは工具類で，柄部のみの例も含めると51点ある。用途を特定できないものもあるが，形状からヤリガンナとみられる例が10点，ノミが８点，タガネが９点，錐あるいは刺突具が４点，彫刻刀が３点ある。次に多いのは鉄鏃で29点あり，住居跡からは22点出土している。このほか，利器では穂摘み具が９点，鎌が６点（１点は用途不明瞭），鉄斧が１点ある。漁具とみられるものが６点あり，ヤスが２点，針状製品３点，釣針状製品１点が確認できる。また，紡錘具には，紡錘車２点・軸部４点がある。

古墳時代後期後半の竪穴住居跡で素環の轡が１点出土しており，集落内に騎馬を所有する人物が存在したことを示すものとして注目される。

一方，建物等に用いられた釘や鎹，楔などは27点が図化可能であった。このうち，竪穴住居跡から出土したものは14点である。土坑やグリッド出土品の中には中近世に下る可能性のものもみられるが，かなり大型の角釘があり，相当の大型建築物が存在したことがうかがえる。

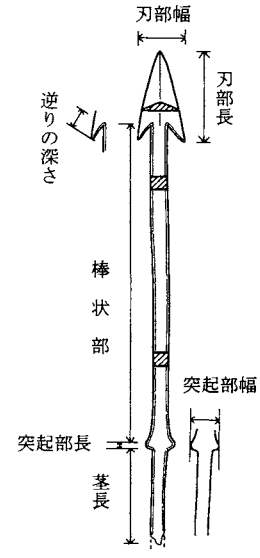
板状・棒状の鉄製品については，用途や年代のわからないものが大半を占める。

以下，種別に総括的な特徴を述べる。

（1）鉄鏃（第328図，図版148・149，附表22）

全体に刃部の遺存が悪く，図化した29点のうち刃部の形態がわかるものは13点にとどまる。刃部と判別できるものは17点である。

刃部の大きさ・形態から「広身」と「細身」に大別され，棒状部の有無によって有頸鏃と無頸鏃に分けられる。有頸鏃には棒状部の長い「長頸鏃」と棒状部の短い「短頸鏃」がある。無頸鏃には刃部を直接矢柄に挟み込むものと舌状の突起をもつものがあるが，本遺跡では前者はみられない。



第327図 鉄鏃の部分名称

細身の長頸鏃には片刃と両刃があり，刃部の形態によって片刃箭（1～3・6～9）・長三角形（11）・ノミ箭（13・14・16）に分類できる。片刃箭には明瞭な直角関をもつ3・6と刃部にふくらみをもつ1・2，さらに刃部と棒状部の境が不明瞭な7～9がある。棒状部と茎の境には突起が作り出されている。長頸鏃の突起部の形状には，明瞭な方形突起（5・13・15・17），方形がくずれて裾広がりになったもの（2・6・12），四面関に作り出されたもの（10）がある。

広身鏃は刃部の形態によって三角形（18・20），長三角形（21），剣身形（19），短冊形（23）に分けられる。棒状部が短い短頸鏃（18～21）と有舌の無頸鏃（23）がある。短頸鏃の棒状部と茎の境は両関に作り出され，ほぼ直角に切り込まれたもの（18）と，やや鈍角に切り込まれたもの（20）がみられる。

（2）刀子（第329・330図，図版147・148，附表23）

大きさ・形態ともに個体差が大きく，長期の使用によって刃部が摩耗したものが少なくない。また，SI-084（26）・SI-096（35・36）では意図的に折り曲げて廃棄したと考えられる例が出土している。刃部・背両側に関をもつものが大半を占めるが，刃部側のみに関をもつ例もある（1・2・16・17・54）。刃関には刃部に対してほぼ垂直に切り込まれたものと斜めに切り込まれたものがあり，柄の取り付け角度も多様であることがうかがえる。現存する柄の素材はすべて樹木である。46には茎を柄に固定するために巻いた植物繊維が残る。背関にも直角に近い角度で明瞭に切り込まれたものと緩やかな角度でつくり出されたものがあり，時期による差はとくに認められない。

（3）鎌・穂摘み具（第331図，図版150，附表24）

木製の横柄に装着したいわゆる草刈鎌と判断できるのは，1～4である。5・6は同様の用途を推定したが薄板で作られた形状の異なるものである。7～15は穂摘み具である。7～12には柄あるいは握り部を固定した孔が一対穿たれている。12では木製の握り部と目釘が残存している。13～15には孔がないが，刃部の形状から穂摘み具の一種と推定した。なお，7はほぼ中央で折れ曲がっており，刀子と同様，意図的に折り曲げて廃棄された可能性が高い。

（4）工具（第332・333図，図版149・152，附表25・26）

上記のように，柄部のみの例も含めると51点ある。形状からヤリガンナとみられる例が10点，ノミが8点，タガネが9点，錐あるいは刺突具が4点，彫刻刀が3点ある。

ノミには木材の加工に用いられる大型品（図333－1）と細工に用いられる小型品（図332－1～6）があり，小型品は刃部の割に長い鉄柄の付くタイプで，4にはねじりがある。6は短冊形の棒状部の先に刃をつくり出した形態で，幅を減じる茎との境に段がみられる。7・9は6を小型にした形態である。また，8・14は刃部の先端が丸く作られているが，ほぼ同様の工具である。木材の細工より金属の加工に用いた可能性が高いと判断し，タガネとした。10・11は，さらに小型の工具で，やはり金属の切断や加工に用いるタガネとみられる。12・13も小型の工具で，13は刃部が匙面状にくぼむ。彫刻刀のように用いられたものと考えられる。20・31・32は同一個体の可能性があり，刃部の形状からタガネ，あるいは彫刻刀として用いられたものであろう。そのほかの図332に示した棒状部・茎は，これらの工具の一部である可能性が高いものである。

図333には大型のノミ・タガネとヤリガンナを図示した。1のノミ棒状部と茎の境には，明瞭な方形突起が認められる。17は刃部の先端を欠くが，形態からノミとして用いられたと考えられる。4は大型のタガネである。

刃部の残るヤリガンナは，2・3・5～8の6点である。3は，柄部を二股につくり出した特殊な形態をもつ。溝（SD-26）から出土した。SD-26は，奈良時代以降に掘削された時期を特定できない溝であるため，3の時期については推測の域をでないが，古代のヤリガンナには例を見ない形態で，中世以降に下る可能性がある。

（5）鉄斧（第334図，図版151，附表27）

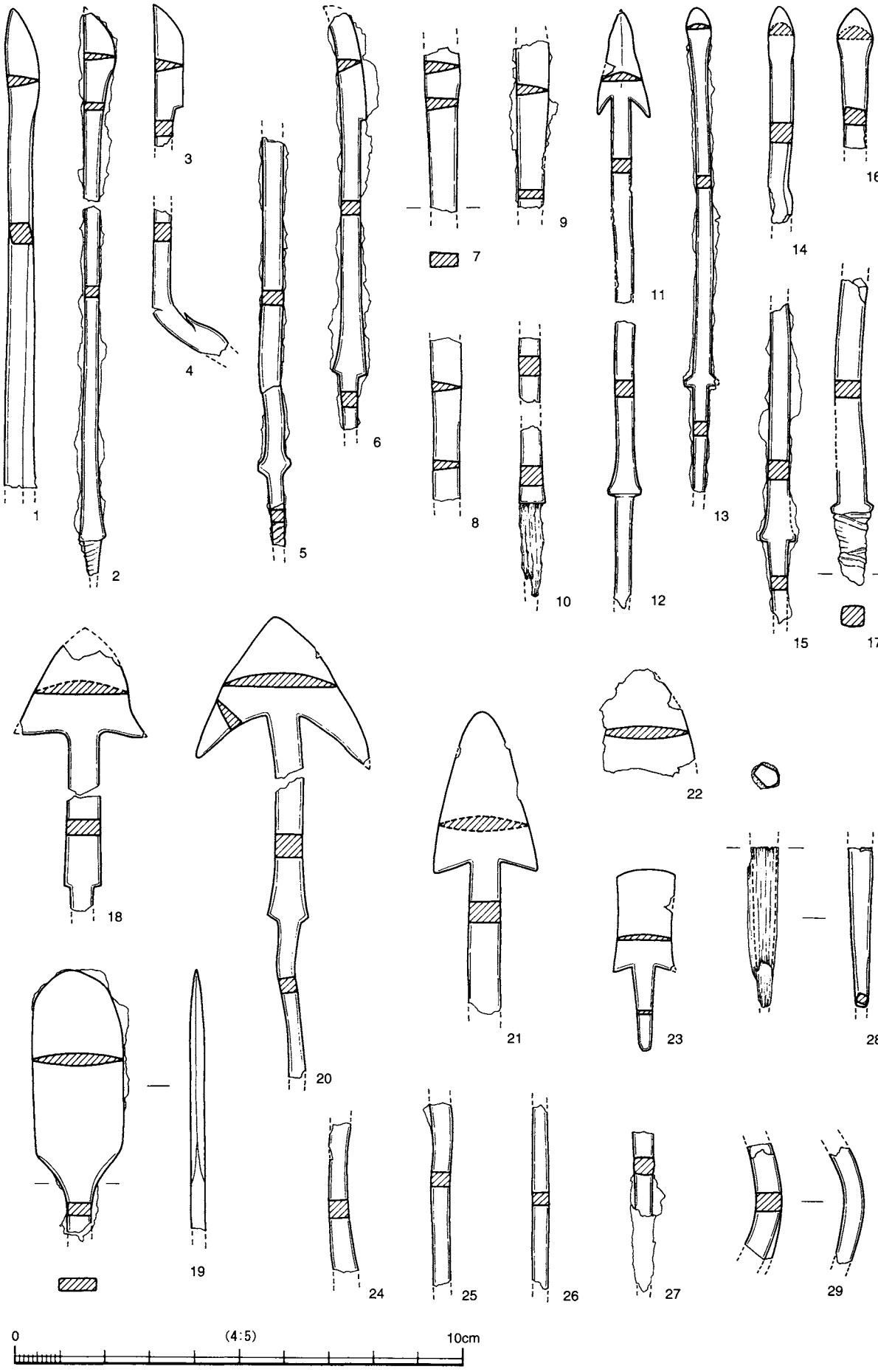
平安時代の住居跡から1点のみ出土している。柄の装着部を袋状につくり出し，断面はほぼ方形である。袋部の深さは35.5㎜あり，全長のほぼ半分に達している。刃部は7.25㎜～8.45㎜の幅で研ぎ出されており，現状では裏側（袋部折り返し側）の研ぎ出し範囲を確認できない。刃部の厚みは研ぎ出し部で5.60㎜，袋部下端で11.20㎜である。

（6）紡錘具（第334図，図版151，附表28）

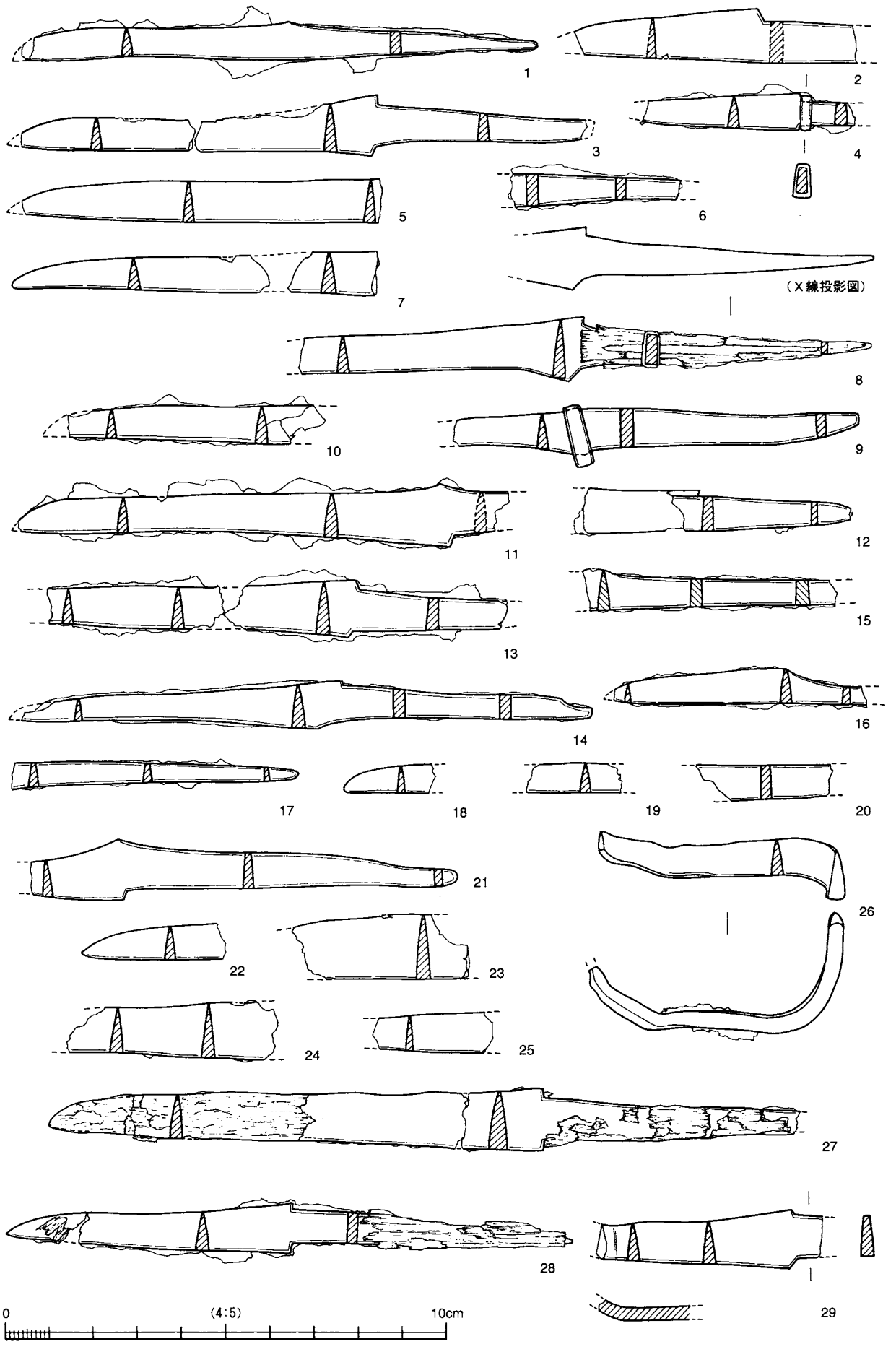
図示した紡錘車2点は平安時代の住居跡（SI-120A）から出土した。これに組み合う軸は出土しておらず，紡錘具の軸とみられる断面円形の棒状品はSI-055から2点，SD-14から1点出土している。これらはいずれも両端を折損しており，全体の形状は不明であるが，SI-055から出土した11・12の径は3.0㎜～4.0㎜，SD-14から出土した10の径は4.7㎜～5.0㎜で，SI-120Aから出土した2点の紡錘車の孔径に合うため，紡錘具の軸として用いられたものと推定した。13の断面は隅丸方形で，ヤスの可能性もある。

（7）漁具（第334図，図版151，附表29）

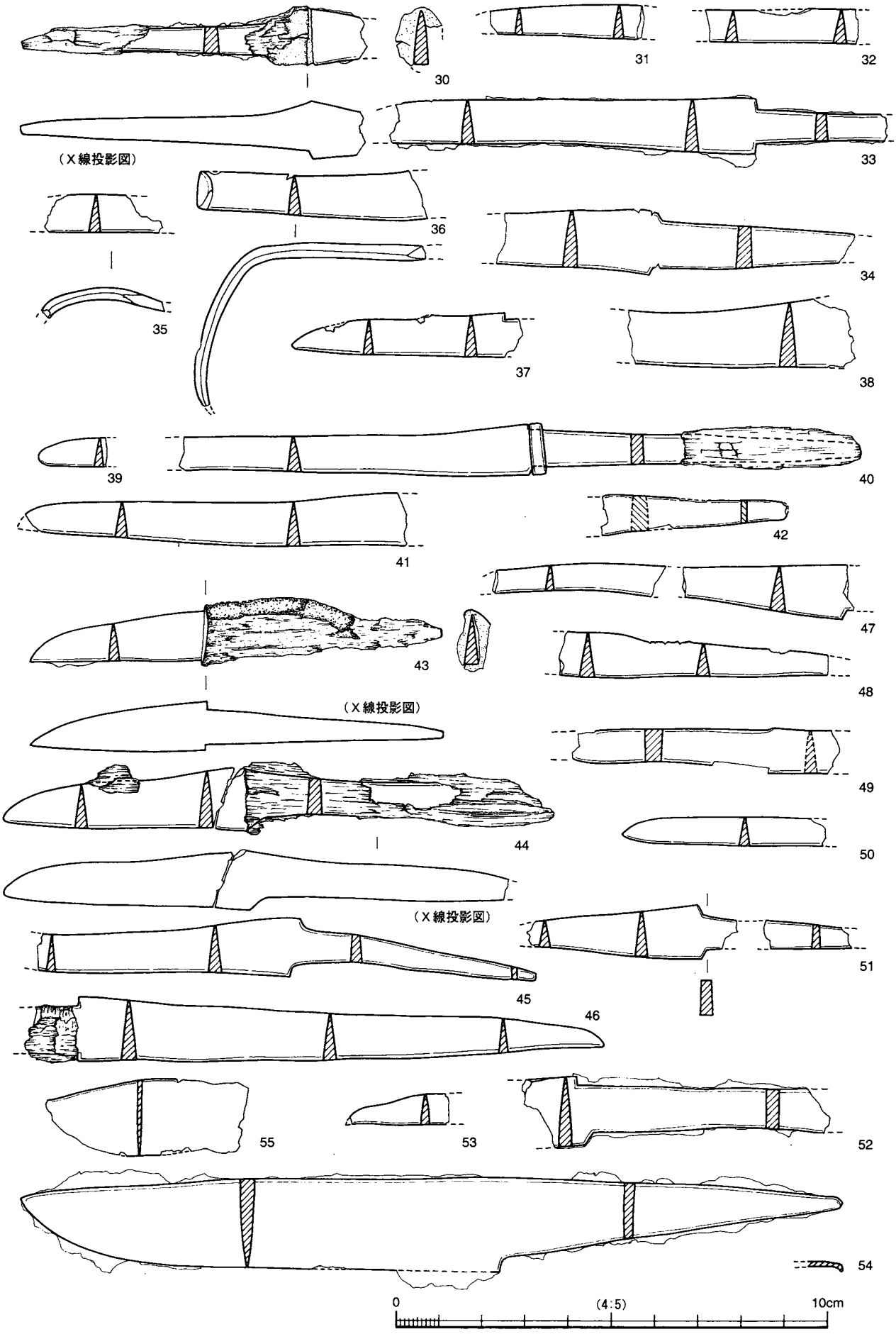
ヤスが2点，針状製品3点，釣り針状製品1点がある。15・16は短い鉤状の先端部をもち，断面方形の細い棒状部の形態からヤスと判断した。17～19については現状の先端部は丸く，断面円形で前者とは形状が異なる。針の可能性が高い。14は大きく鉤状に曲がる先端部の形状から釣針とみられる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
(4:5)
10cm

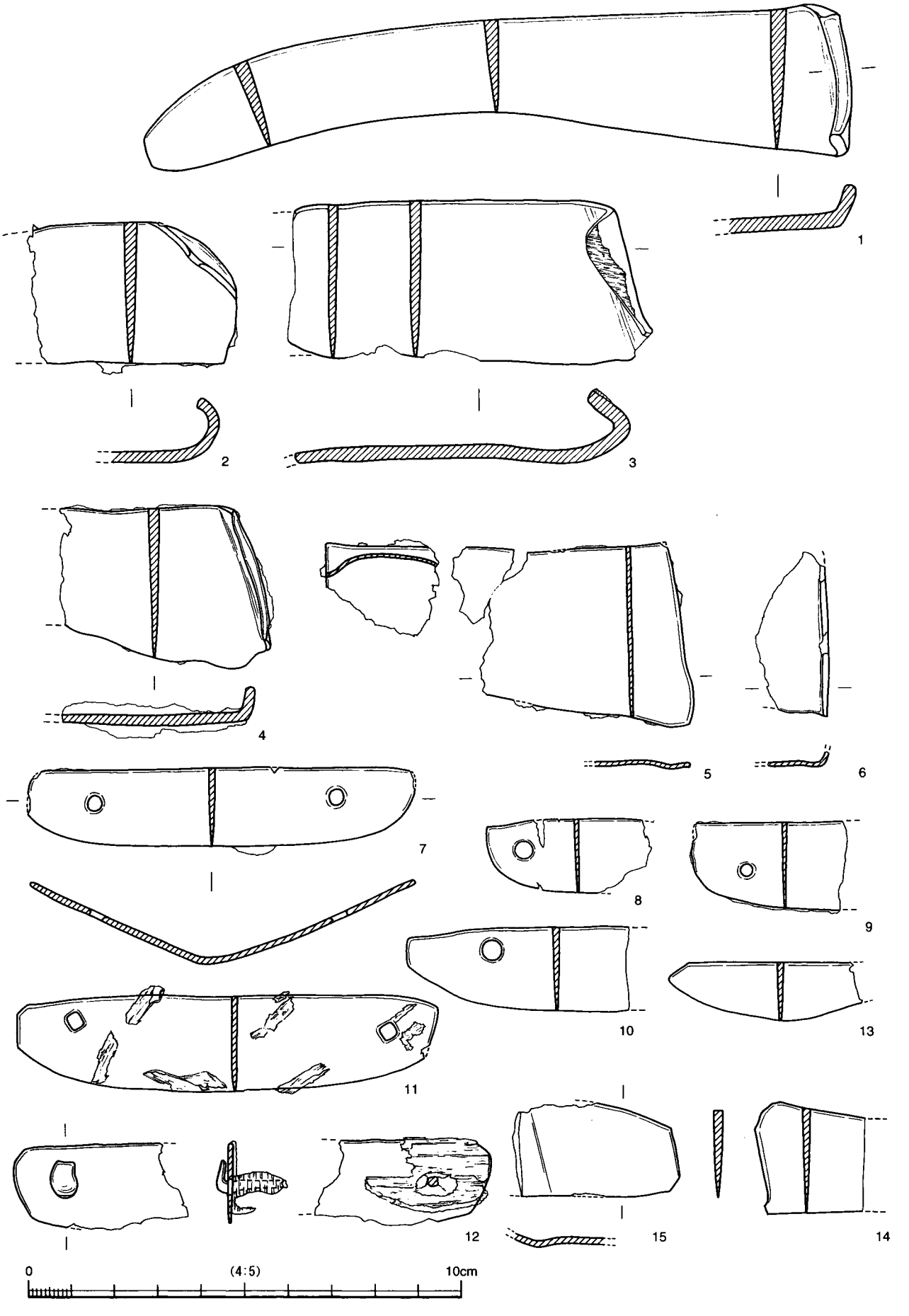
第328図 鉄鏃


1
2
3
4
5
6
7
（X線投影図）
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
(4:5)
10cm

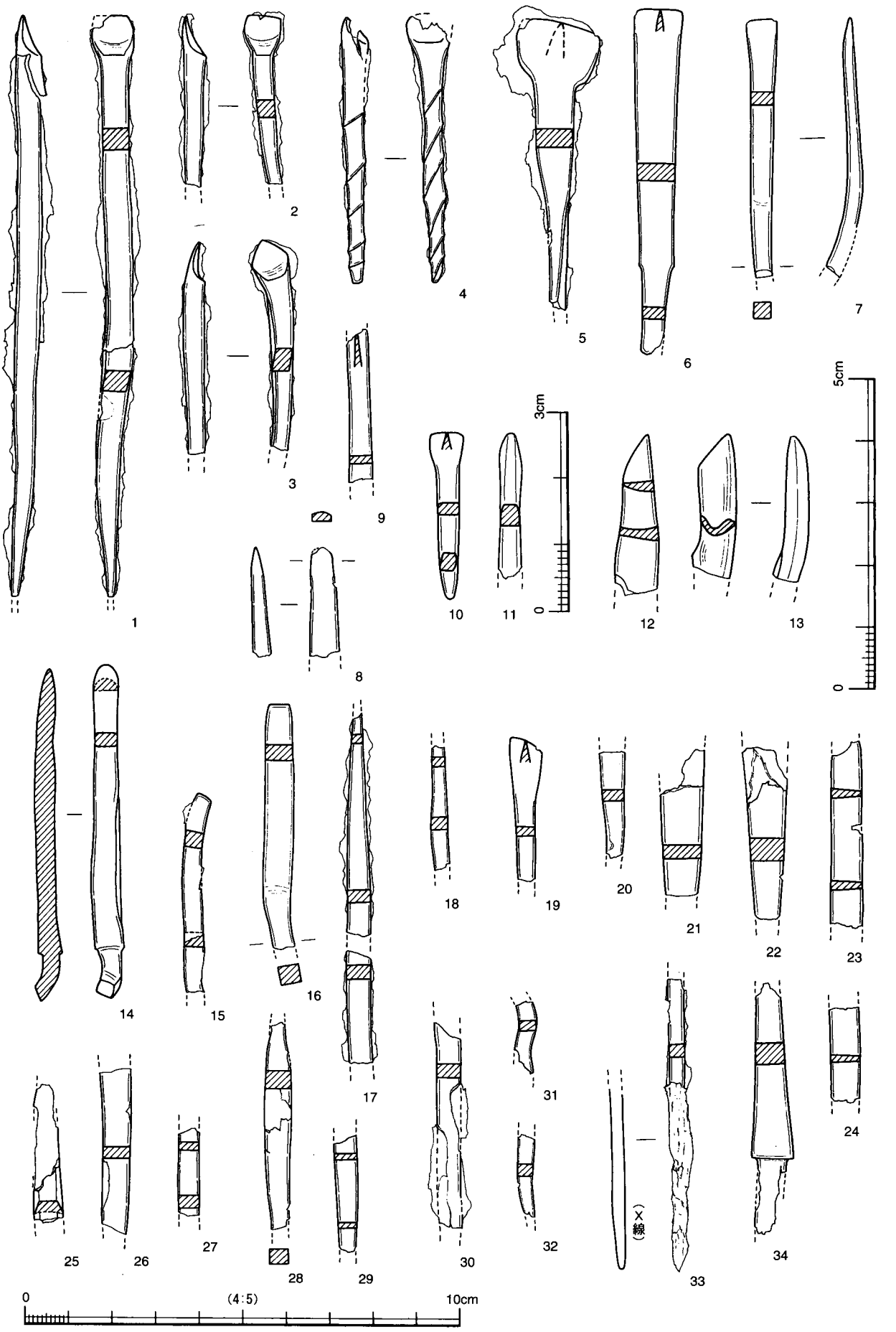
第329図 刀子（1）


30
31
32
（X線投影図）
33
36
34
35
37
38
39
40
41
42
47
43
48
（X線投影図）
49
44
50
（X線投影図）
51
45
46
55
53
52
54
0
(4:5)
10cm

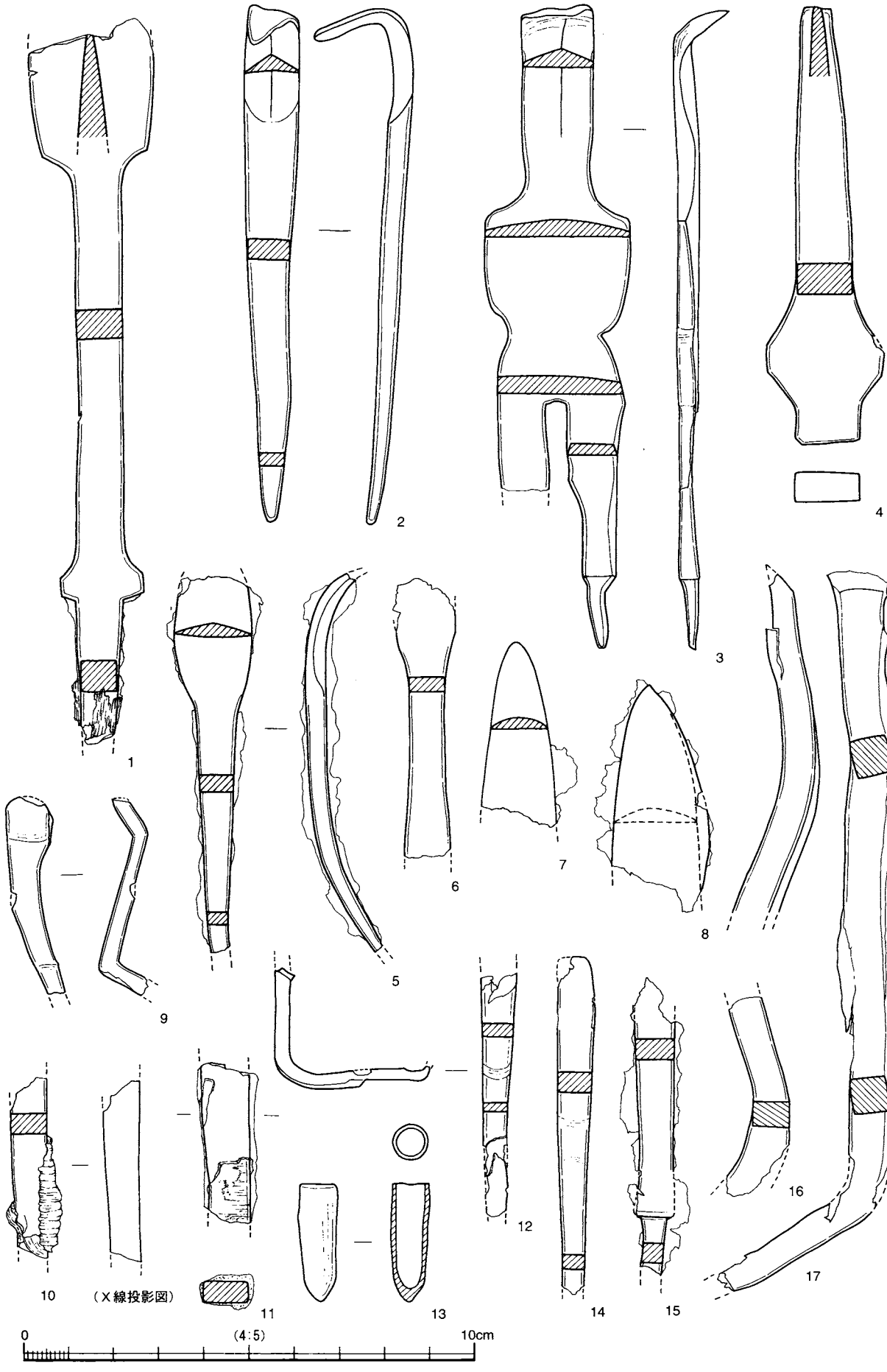
第330図 刀子（2）



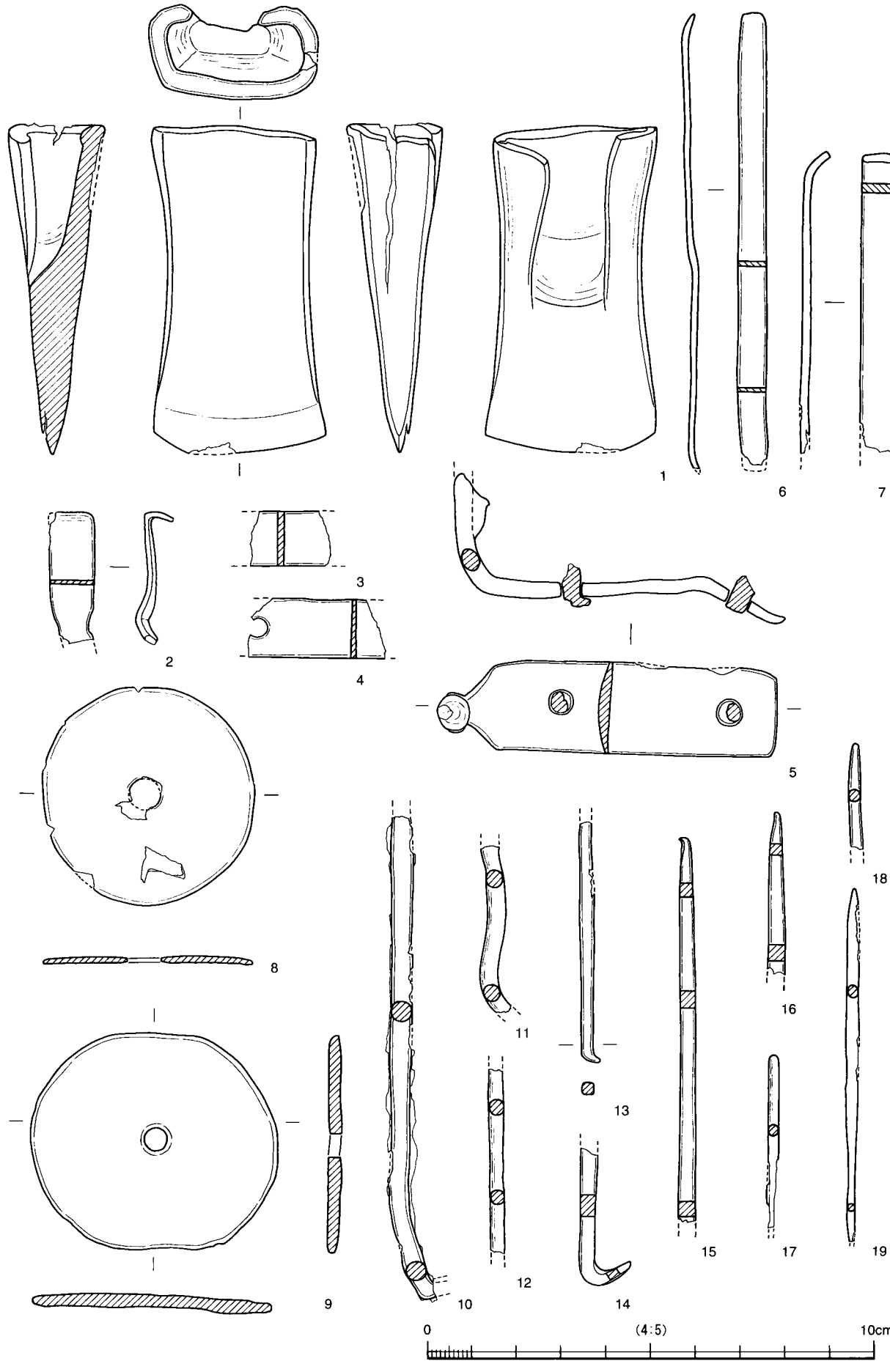
第331図 鎌・穂摘み具


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
X線
3cm
0
5cm
0
0
(4:5)
10cm

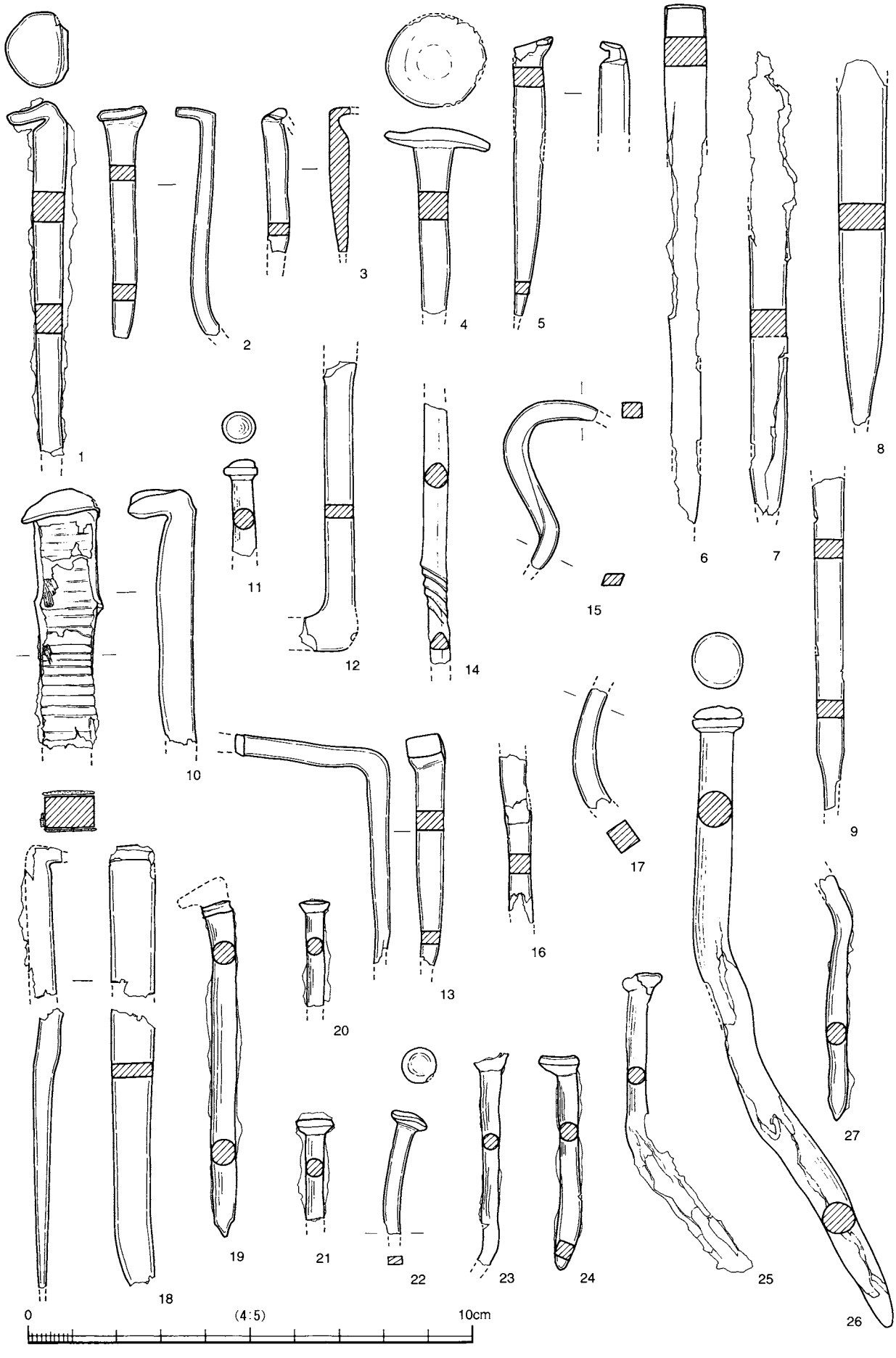
第332図 工具（1）



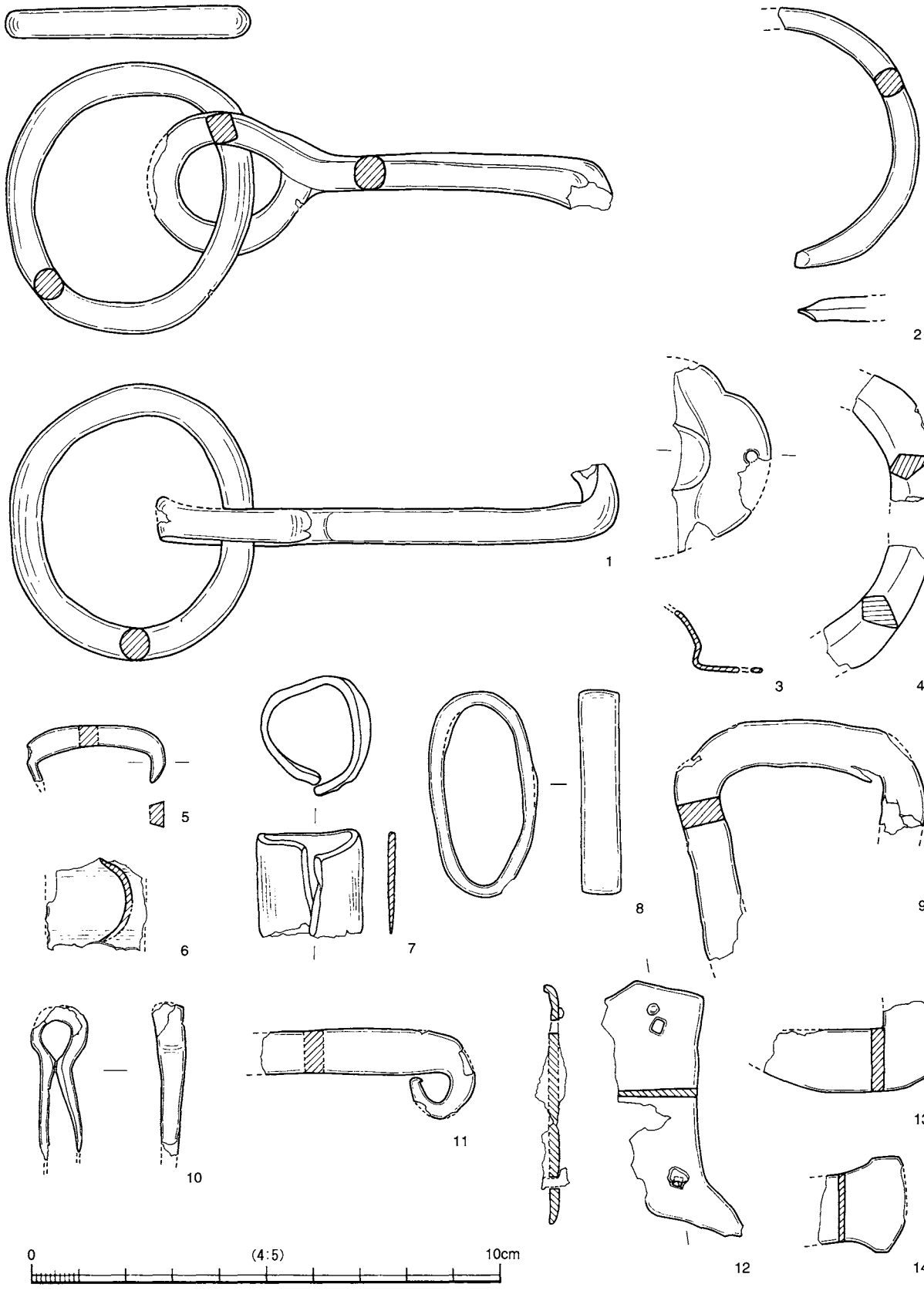
第333図 工具（2）



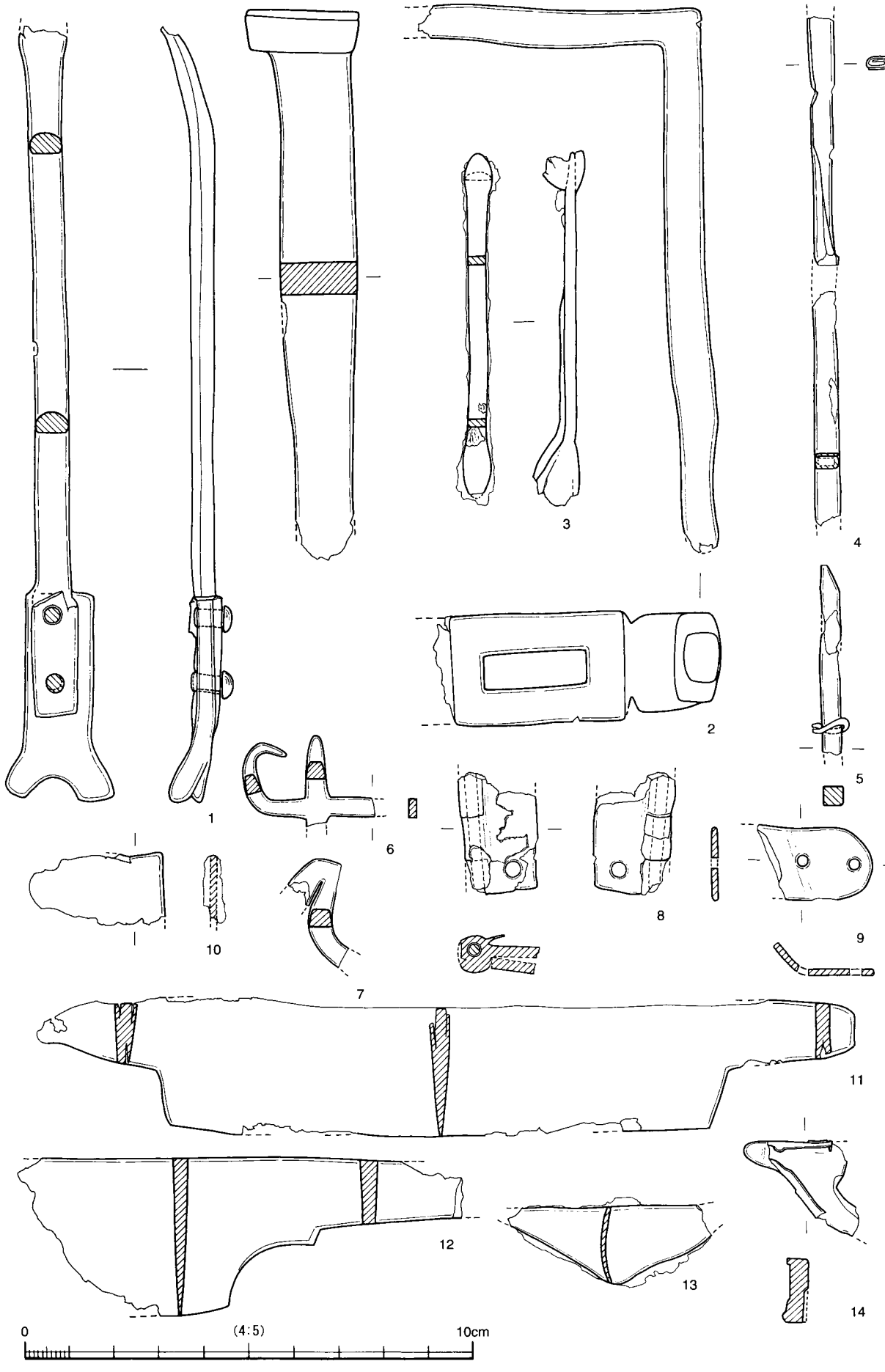
第334図 鉄斧・紡錘車・漁具等


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
(4:5)
10cm

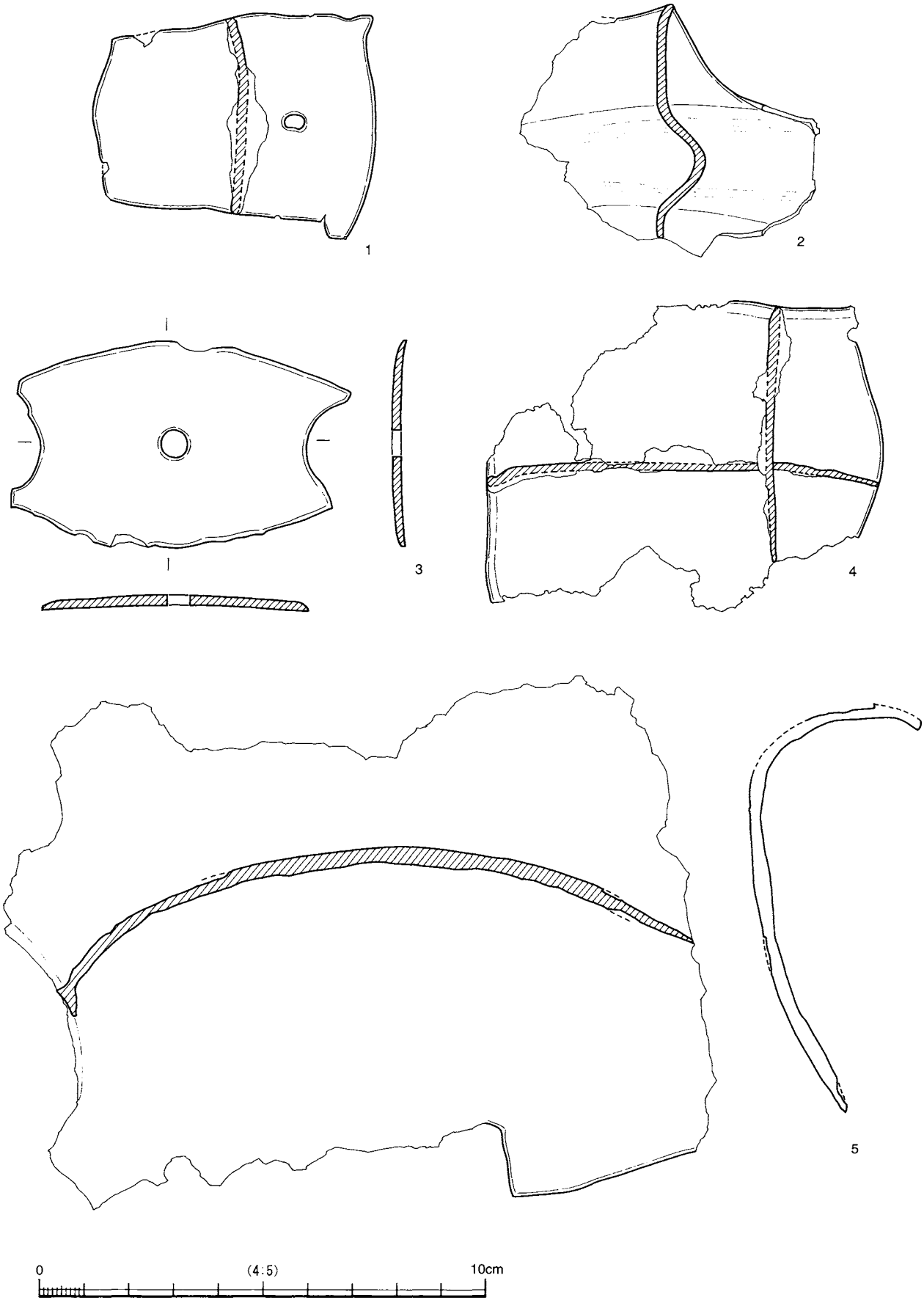
第335図 釘・鎹等



第336図 馬具・刀装具・鑷子・留金具等



第337図 その他の鉄製品（1）



第338図 その他の鉄製品（2）

（8）釘・鏃等（第335図，図版151，附表30）

頭部をＬ字形に折り曲げた角釘と頭頂部に厚みのある丸釘を古代から中世の釘として掲載した。６・７は平安時代前半の住居跡覆土下層から出土し，腐食して接合しないが本来は一体のものである。頭部を作りださない釘，あるいは楔として用いられた可能性が高いが，先端部の形状によってはタガネであった可能性もある。８も同様の用途が想定される。

12は角が直角にまがり，角で幅広になる形状から鏃と判断した。14はねじりが加わった棒状鉄製品である。平安時代前半の住居跡覆土下層から出土した。釘に類する用途が考えられる。

（9）刀装具等（第336図，図版153，附表32）

小刀の把縁金具（６）と大刀の責金具（８）がある。６は1/2周弱の破片で，腐食により周縁をほとんど失っているが，現存径（18.9㎜）や厚さから小刀の把縁金具と判断した。８はほぼ完形の責金具である。内径41.4㎜×16.5㎜の大きさからみて通有の大刀に付くものと思われる。７は，現状では歪んだ環状となっている。縁の片側が薄くなっているが，合わせ目はほぼ均一の厚さである。大きさから小刀，あるいは大型刀子の把縁金具の可能性が高い。

(10) 鑷子（第336図，図版153，附表32）

環状に曲げた頭部と脚の上部が遺存する。奈良時代後半の住居跡から出土した毛抜きである。やや内湾気味の長い脚部がつくタイプとみられ，2/3ほどを欠損していると思われる。

２．銅製品

古代の銅製品で注目すべきなのは，帯金具とSI-082のところで報告した，銅滓などの銅鍛冶跡に関わる遺物である。また，中世以降の銅製品では，分銅と，土壙に伴うキセル・古銭があげられる。計測表は附表36～38に示す。なお，和同開珎については出土銭貨の項にまとめた（第７章第３節）。

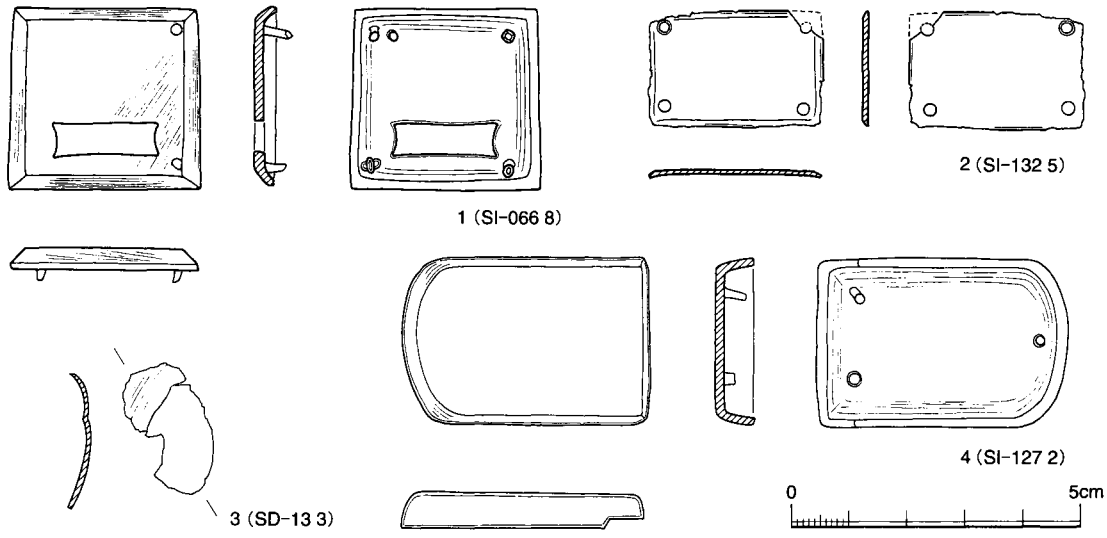
（1）帯金具（第339図，図版155，附表36）

帯金具は，方形の透しをもつ巡方（１）・裏金（２・３）・帯先金具（４）の４点である。巡方の大きさ31.41㎜×32.00㎜は，隣接する観音塚遺跡007号住居跡出土品（29.90㎜×31.60㎜）・054号住居跡出土品（30.00㎜×31.80㎜）・084号住居跡出土品（31.60㎜×34.20㎜）・239号住居跡出土品（32.50㎜×33.75㎜）に近い数値である。巡方は鷲谷津・観音塚遺跡で合わせて６点出土しており，観音塚遺跡出土の残りの１点は24.10㎜×28.20㎜とやや小振りである。いずれも単独で出土しており，本来一連であったものが分割された可能性も考えられる。

帯先金具は，裏に３鋲を配して帯に装着したものである。この型式の帯先金具は，観音塚遺跡でこれより小型の裏金が１点出土している。

（2）花形飾り金具等（第340図，図版155，附表37）

古代の銅製品では，ほかに花形飾り金具（１）と扁平な棒状製品（３）がある。花形飾り金具は５弁の花弁を打ち出したもので，中央に径3.30㎜×3.20㎜の孔をもつ。古墳時代後期後半の竪穴住居跡から出

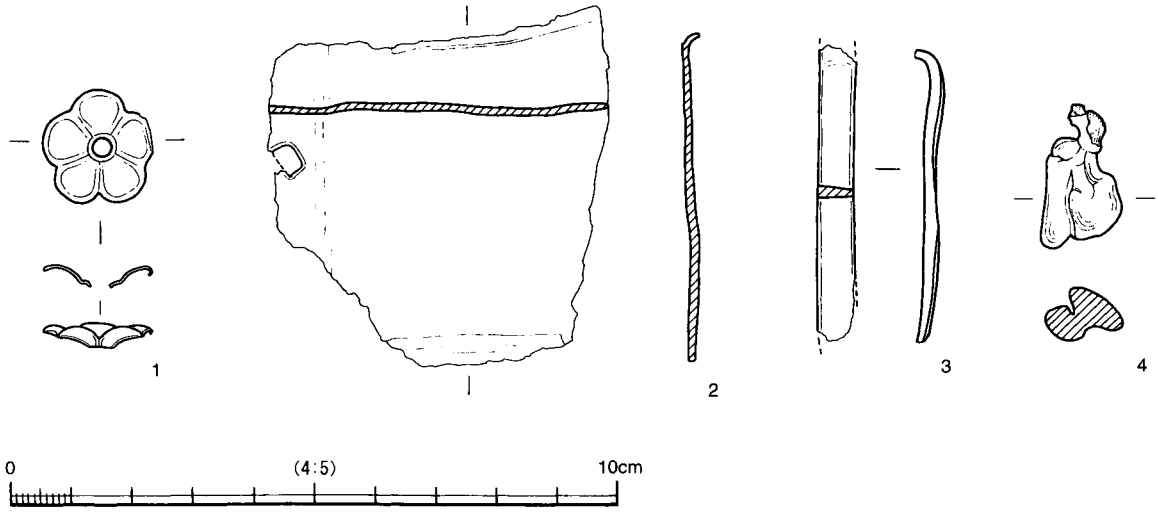


第339図 銅製帯金具

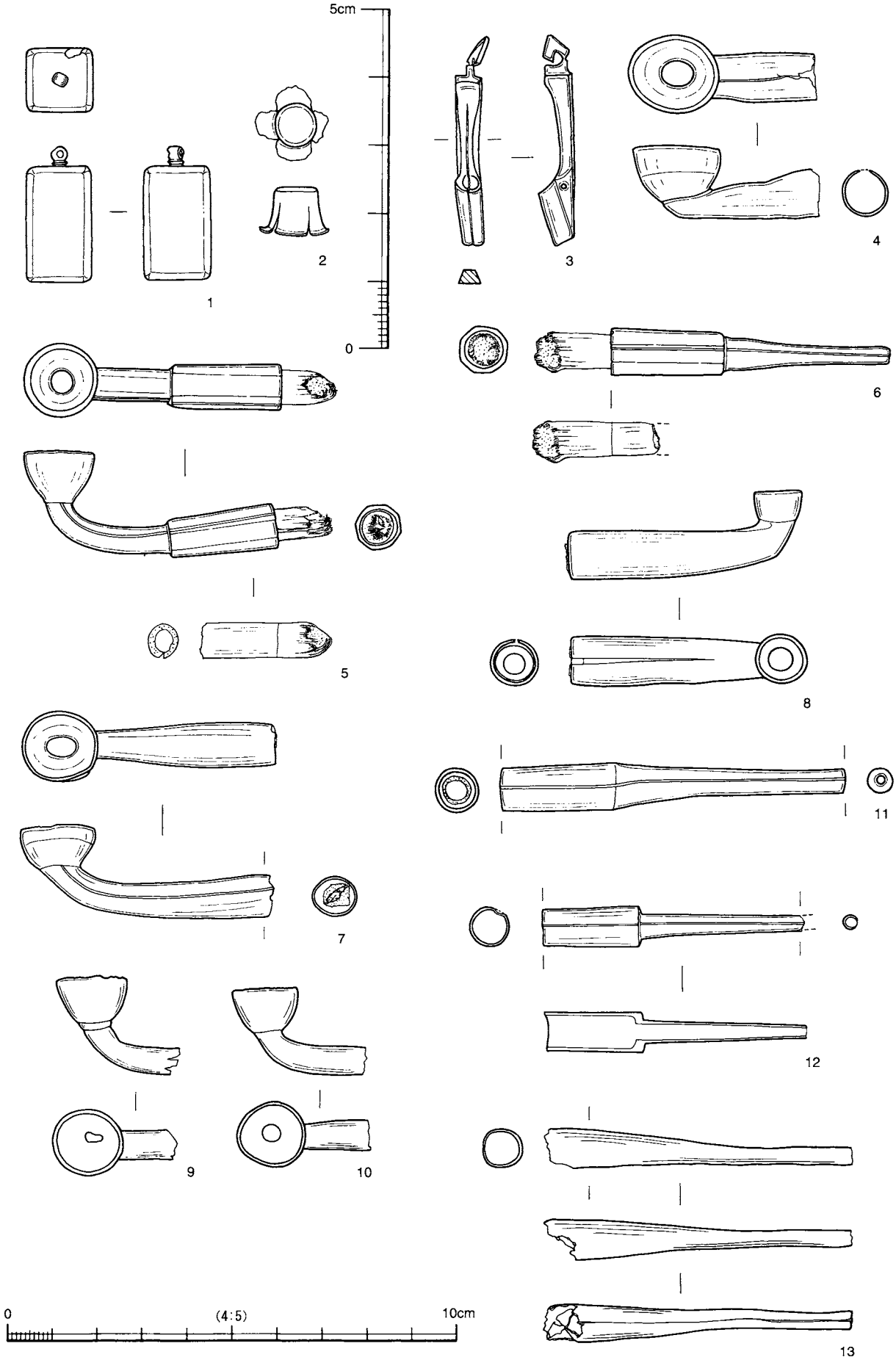
土しており，箱などの飾り鋲に用いられたものと考えられる。銅板（2）は厚さ1.1㎜の薄板の破片である。方形の孔が1つ確認できるが，用途は不明である。

（3）鍛冶関連遺物（第340図，附表37）

銅製品の工房に関わる遺物には，M25-12eグリッドから出土した銅塊（4）がある。前掲のSI-082（平安時代）からは銅の付着した坏転用坩堝・羽口と共に銅塊（バリ）が出土しており，銅鍛冶工房が確実に存在したことがうかがえる。M25-12eグリッドから出土した銅塊は，北側谷部の斜面で検出された精錬炉（大鍛冶跡：地蔵山遺跡SX-001，別途報告予定）の南側で，多量の鉄滓に混じって出土したものである。検出された炉は1基のみであるが，鉄・銅両方の精錬を行う工房が存在した可能性を示唆している。



第340図 銅製品（1）



第341図 銅製品（2）

（4）分銅（第341図，図版155，附表38）

直方体の本体に環状の釣手を付けた分銅である。角を面取りし，研磨している。刻印等の銘はない。重さは38.94ｇである。竿の一端に天秤皿を下げる小型の竿秤に用いられたもので，近代以降に使われていた真鍮製の類品（実見したものは47.25ｇ）が現存する。本品も質感から真鍮製とみられる。瓢箪形の木製容器に入ったものがあり，携帯用の竿秤であったことがうかがえる。

（5）キセル（第341図，図版155，附表38）

８点出土しており，雁首と吸口の双方が残る１点（５・６）は土壙墓から古銭と共に出土したものである。ほかの７点はグリッドで取り上げられた。墓に埋納されていたものが後世に攪乱を受けて表出した可能性が高い。いずれも銅板を鍛造して作られ，管状部を円形に作りだしたものと八角形に作りだしたものがある。５・６の木質部を見ると，吸口と雁首の間は長い木製の柄で結ばれていたことがうかがえる。

第４節　出土文字資料

鷲谷津遺跡では，墨書土器７点，朱書土器１点が確認された。遺物量に比して少ない。風字硯や，朱書用を含む多数の転用硯が認められるのとは対照的である。

墨書「得」（図版156）

平安時代のSI-082から出土した墨書は，左半分が欠損しているが，しっかりした字体の「得」である。内黒の土師器坏底部外面に書かれている。

SI-017出土の墨書は，三日月形に著しく反った「β」形をしており，後からトレースしたような焼成後の線刻もみられることから，重要な意味をもつ記号であったと想像される。「β」は「得」の草書体が記号化したものとされる。盤状坏の底部中央に書かれており，奈良時代に遡る墨書はこの１点のみである。

墨書「大内」（図版156・157）

平安時代のSI-087とSI-094から計３点出土した。いずれもしっかりした字体であり，坏の側面に正位で，縦に小さく書かれているのが特徴的である。墨の遺存状態は悪く，肉眼では一部しか見えない。

墨書「宮田」，「ロ」（図版157）

４点とも，SI-087において確認された。いずれも坏の底部外面にみられ，そのうち２点は，「大内」墨書土器である。

「宮田」の字が明瞭に見えるのは24のみである。間隔がやや開いているため二文字と考える。一文字と考えると，「富」となる。

ほかの３点はいずれも不明瞭で，小さな「ロ」の字のみが見えている状態である。23の赤外線写真では，「ロ」の周囲と，その上方にも墨書らしい線があるので，「宮田」の一部である可能性は高い。この場合，肉眼で見えている「ロ」は，「田」の右下部分にあたる。ただし，この部分だけ，とくに太く書かれているので，一筆書きとは考えにくい。もともとの字に合わせて，「ロ」のみ，別途書き加えられた可能性がある。赤外線写真では，これらの上部にもうひとつ，「大」がついていた可能性があり，この場合は

三文字となる。「大内」墨書をもつ残りの２点については，「ロ」の周囲に墨書らしい痕跡が認められるものの，遺存状況が悪いため，判読は困難である。

朱書「山家」（図版157）

平安時代のSI-096から出土した。灰色の器肌をもつ須恵器坏の底面に，朱筆で鮮やかに書かれている。「山」は明確であるが，「家」はやや崩れているのに加えて，左下が欠損しているため，ほかの読み方がありうるかもしれない。本遺跡では唯一の朱書である。

墨書「七」（図版158）

平安時代のSI-134から出土した。坏の側面に，正位で，大きく，勢いよく書かれている。現状では「七」もしくは「士」と読める。左上側が欠損している。

墨書「万ロロ」（図版158）

平安時代のSK-60から出土した。椀の底面に書かれている。肉眼では墨書の有無程度しかわからない。本文では，赤外線写真をもとに，「万扁」と解釈した。「万」は「不」の可能性もある。また，「万」の上部が「一」ではなく「宀」形にも見えるため，「宮田」等の可能性もある。

その他の墨書（図版158）

上記のほか，平安時代のSI-125出土土器と表土採取土器のなかに墨書土器がある。これらは欠損部が多く，全容が把握できない。SK-29の例は，唯一甕の胴部に書かれたものである。文字の可能性はあるが，目が二つ揃うことから，むしろ人面墨書土器の可能性が高い。

以上の墨書のうち，吉祥句や，よく用いられる文言を除くと，注目されるのは「山家」である。

『和名抄』にみられる郷のうち，所在地からすると，千葉寺地区はすくなくとも池田郷の一部，もしくはその中心的な位置を占めている可能性が高い。一方，山家郷は，同じく古代千葉郡域にはあるが，郡の最も西方に比定されている。千葉寺地区を山家郷の一部とみることには無理がある。

したがって，もし朱書資料を「山家」と読んでよいなら，西方に存在した山家郷との間に，直接的交流があったことを示す資料になるといえる。同一郡内における交流は，むしろ当然のことである。ただし，地元の郷名と考えられる「池田」が出土しないのに，他地区の郷名が記されている点は，慎重に考慮する必要がある。また，墨書が頻繁に出土する印旛郡内とは，墨書の機能が異なる可能性もあるので，単純に文字のみを評価することは，正当な手続きとはいえないであろう。

墨書に関連して，硯についても補足しておく。鷲谷津遺跡では，朱書用の硯として，SI-127から須恵器甕片の転用硯（43）が出土している。朱色のみ付着しており，赤外線写真でも黒色墨の遺存は確認できなかった。「山家」を出土したSI-096の土器群とは１段階程度の時期差しかなく，無関係というほど離れてはいないが，遺構の位置は相互に離れている。

ほかの硯には，風字硯（SI-132），転用硯（SI-041，SI-080，SK-14，SK-55，SK-60）がある。いずれも黒色墨用とみられるが，実際に墨が付着していたのは，SI-080出土の須恵器坏蓋転用硯のみである。

第５節　集落の展開

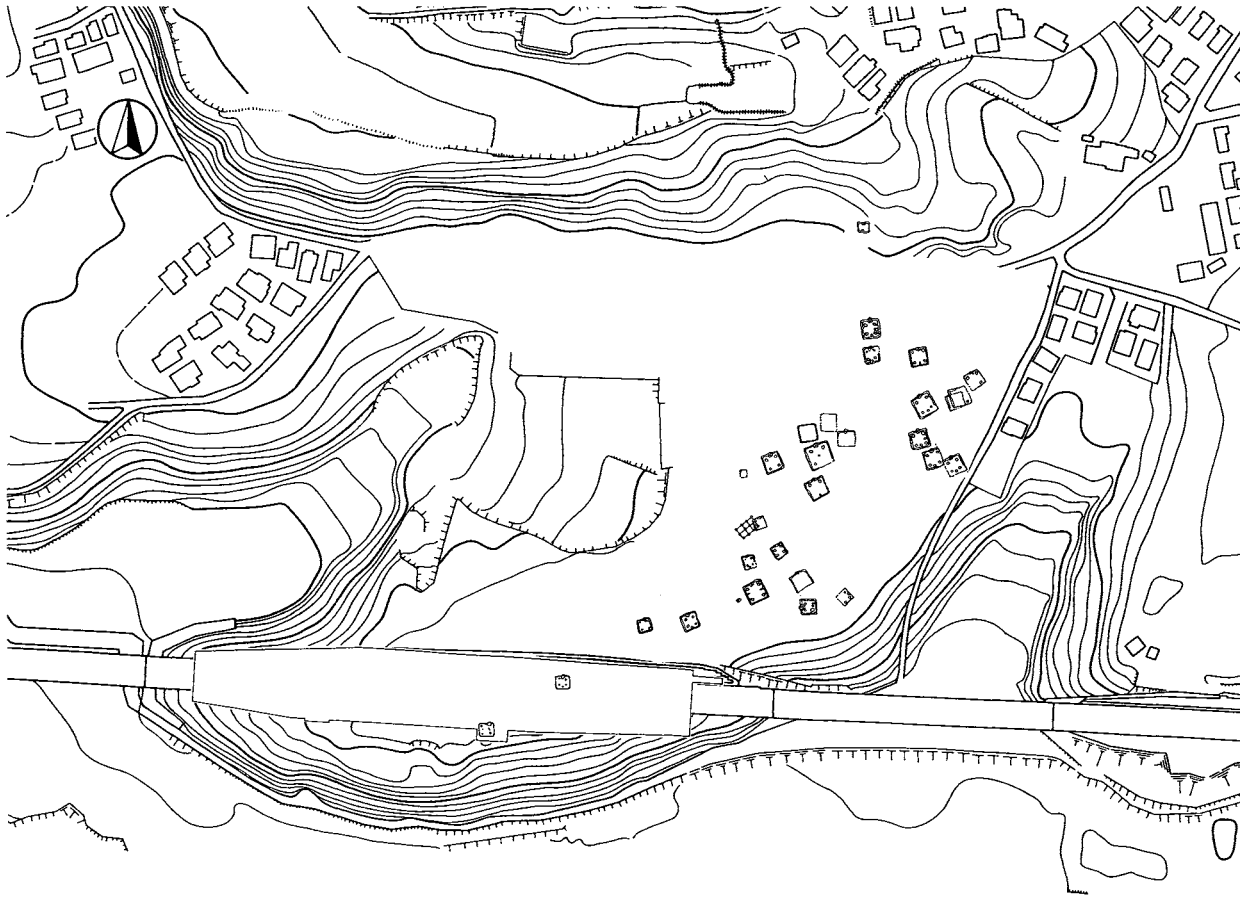
鷲谷津遺跡では，144軒の竪穴住居跡と34棟の掘立柱建物跡を検出している。ここではこれらの遺構を中心に集落の変遷を概観することにする。

遺跡には，縄文時代早期末から後期の土器片が散布している。このうち，遺構としては，早期の炉穴や土坑等が営まれている。台地平坦面を中心に散在し，あまり密度は濃くない。陥穴は斜面に１例みられるだけで，本遺跡が陥穴を用いる狩猟の場になることはあまりなかったといえる。

竪穴住居跡では，弥生時代中期前半終末期のものが最も古い。続いて，中期後半の例もみられる。いずれも残存するのは１軒ずつである。弥生時代中期前半終末期では，壺と甕を埋納した土壙が１基営まれている。見かけ上は単独の墓であるが，その周辺の包含層から該期の土器片が出土しているので，ほかにも遺構が存在した可能性は高い。とはいえ，集落としての密度は極めて希薄といわざるをえない。

次に住居跡を確認できるのは，古墳時代中期の初めになる。４軒の竪穴住居が，ほぼ同時期に営まれている。台地平坦面ではなく，斜面部や台地の狭窄部分に偏って分布する。再び間隙があって，古墳時代後期前半を中心に６軒の住居跡が営まれている。分布は台地平坦面に移るが，やはり東部や南部の台地縁辺に偏る傾向がみられる。この時代の集落は，時期的な断絶が認められるのに加え，合計しても10軒の竪穴住居跡が検出されているに過ぎず，後世に比べ，極めて密度が薄いといえる。

その後，新たに集落が営まれ，しかも急激に拡大するのは，古墳時代が終わるころ，本書でいう古墳時代後期後半である。この時期には27軒の竪穴住居跡が確認されている。それまで空白だった台地中央部



第342図 集落変遷図（古墳時代後期後半）

をはじめ，南部・東部にも広く面的に展開し，北部にまで達している。最大の竪穴住居跡（一辺7.5m）は台地中央部に位置し，それを筆頭に，大型の竪穴住居跡が多数営まれる。また，以後平安時代までの間，相前後する住居跡がほぼ主軸を同じくして重複，ないしは近接する，という現象がみられるようになる。つまり，土地利用における基本的な地割りが，以後継承されていったことを示唆している。このように，規模やその後の連続性を評価基準とするならば，集落展開における最初の画期は，明らかに古墳時代後期後半にあると考えられる。

遺跡内で唯一の総柱構造をもつSX-1は，状況から古墳時代後期後半に遡るとみてよい唯一の掘立柱建物である。しかし，重複関係から，長期の存続期間を想定することは困難である。該期の土坑も，極めて少ない。となると，村落景観として，墓や倉庫等，竪穴住居以外の集落施設を復原する手がかりがまったくない。これが当該期の特徴であり，房総においてはむしろ一般的なあり方と考える。すなわち，墓等は隣接する他の地区に集中していることが想定される。一方，掘立柱建物等については，ごく限られた遺跡でしか卓越しないと考える。

奈良時代に入ってしばらくすると，集落はさらに発展的な展開をする。該当する竪穴住居跡は51軒に達する。これは平安時代とした住居跡とほぼ同数にあたる。当該期は，土器群の実年代比定方法によっては，実際の奈良時代よりかなり短期間になることが予想され，半世紀程度に縮まるおそれもある。とすれば，極度に密集する様は他時期とは比較にならない。まさに集落全盛期と評価してよい。前代をほぼ引き継いで台地主要面に広く面的に分布し，前代にはみられなかった台地西部にも広がる。少し離れて，調査

第343図 集落変遷図（奈良時代）

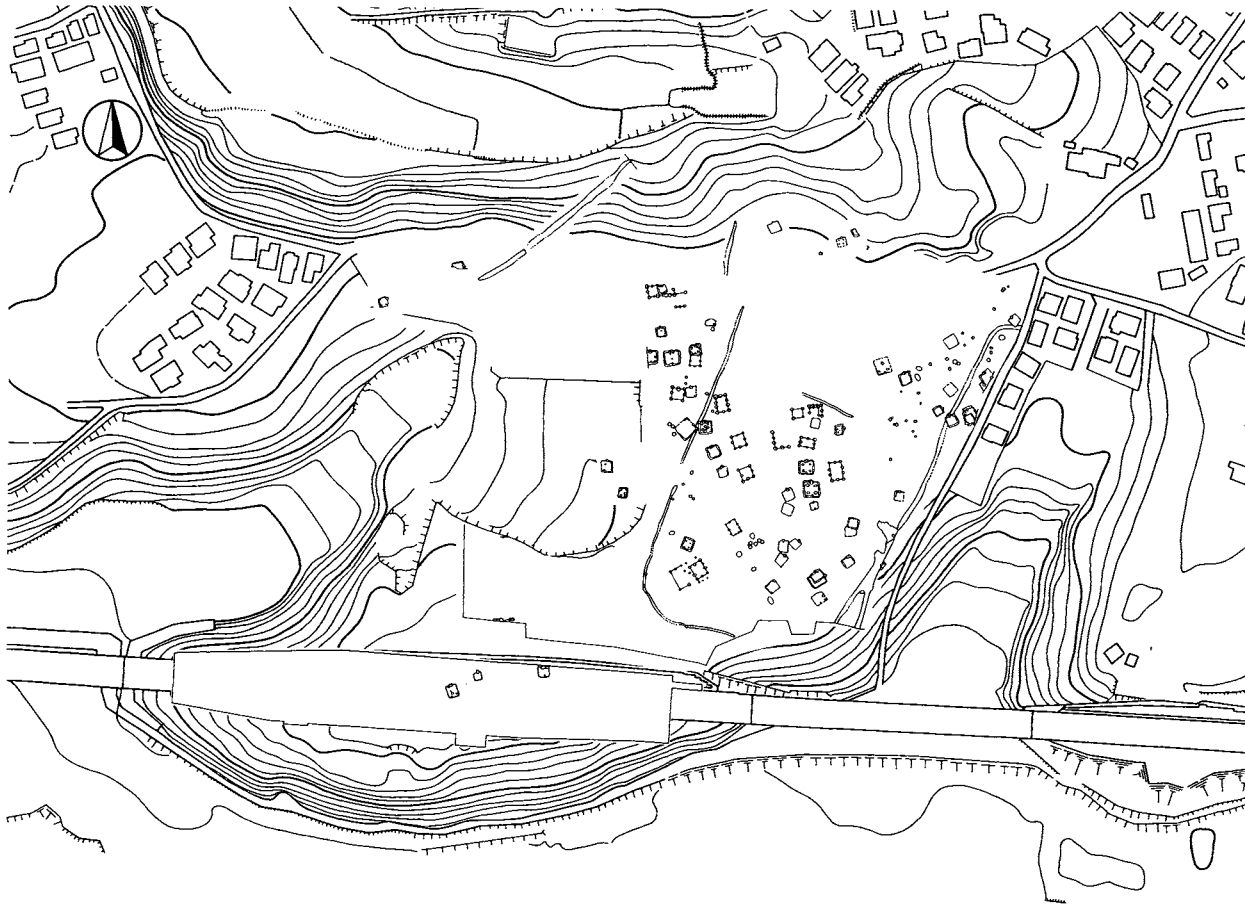
区北西隅にも分布している。台地北部には横長の住居跡などが新たに営まれる。これらに囲まれた台地中央部の北半分は，遺構がまったくない空間となっている。

最大規模の竪穴住居跡（一辺6.2ｍ）は前代と同様に台地中央部の南半分でみられ，これに匹敵するものが台地南部にもみられる。最小の竪穴住居跡（一辺2.3ｍ）との規模差が目立つ。注目されるのは，大小の竪穴住居跡が対になるかのように，隣接して営まれている点である。

同時に，２間×３間を基本とする掘立柱建物が多く分布するようになる。東部土坑群にはこの時期の遺物を含む例が多いが，墓などの施設というより，掘立柱建物の柱穴である可能性が高い。これを加えて分布をみると，台地中央と台地西部にやや多いが，明らかな偏りはなく，分散的に分布しているのが分かる。それぞれの隣には，大型の竪穴住居跡が対応するかのように位置しており，主軸も一致している。

このように，奈良時代における集落では，大型の竪穴住居と小型の竪穴住居，掘立柱建物の３種類の施設が復原できる。これらが併存するか否かを証明することは困難な作業であるが，たとえば千葉寺地区Ⅰ－３期後半のSI-098（一辺5.6ｍ）とSI-081（4.0ｍ），Ⅰ－４期のSI-127（4.5ｍ）とSI-126（3.0ｍ）など，極めて隣接する大・小の竪穴住居跡から，まったく同じ土器群が出土している例はある。少なくとも竪穴住居跡の大小に関しては，時期差に起因するとはいえないのが現状である。なお，古墳時代後期後半にはなかった，墓などの土坑は奈良時代においても集落中に認めることはできない。

集落が該期に隆盛を迎えることを，近在する千葉寺の建立と切り離して考えることはできない。千葉寺の建立時期の詳細は明らかではないが，寺域出土土器や瓦は，本遺跡のⅠ－３期に確実に併行するものが



第344図 集落変遷図（平安時代）

ありそうである。また，本遺跡ではカマド支脚にしばしば瓦を用いており，このことが千葉寺との関連を示唆している。とはいえ，本遺跡の東には，さらに大きな集落を内包する観音塚遺跡が控えており，この問題は本遺跡単独で解決できることではない。次回の報告を待ちたい。

平安時代に該当する竪穴住居跡は53軒である。前代とほぼ同数であるが，設定期間が長いため，集落の密度はかなり薄くなってきているとみられる。しかし，分布は前代の傾向をそのまま受け継いだものである。わずかに異なる点を挙げるならば，台地中央部では南寄り，台地西部では西寄りにやや偏る傾向がみられ，それによって台地中央部に存在する分布空白地が拡大している。一方では台地南部の分布が北東寄りに移動し，区画する溝の範囲に納まってくるので，集落全体としては台地主要面への集約度が増している。

最大規模の竪穴住居跡（一辺5.3ｍ）は前代と同じく台地中央部にある。そのすぐ南には最小級の（一辺2.7ｍ）竪穴住居跡が隣接している。この両者（SI-087とSI-094）は，この時期としては古相のⅡ－1期の土器群をもち，ともに同じ「大内」墨書土器を含むので，同時に存在したとみて矛盾はない。

台地中央部の西寄りから台地西部にかけて，竪穴住居跡と掘立柱建物跡が隣接する例が複数認められる。これらは軸が一致しており，SI-119とSX-26（Ⅱ－2期），SI-121とSX-22（Ⅱ－2期），SI-132とSX-30（Ⅱ－2期）のように，同じ土器群を出土している。併存していた可能性が高い。

このように，奈良時代と同じく，大・小の竪穴住居と掘立柱建物という施設の存在が復原可能である。基本的には，前代の景観をとどめ，受け継がれたと考えてよい。しかし，台地南部や台地東部には，前代

第345図 集落変遷図（中近世）

にみられなかった遺構，すなわち，柱穴とはみなしがたい大型・中型土坑が密集する。機能は明らかにしがたいが，墓などの可能性が考えられ，少なくとも前代にはみられなかった施設を新たに想定しなければならない。

そこで，平安時代についてもう少し詳しくみてみよう。平安時代でも比較的新相の土器群（Ⅱ－３期・４期）を出土する遺構を分析してみると，以前にはなかった特徴がある。まず，竪穴住居跡の主軸が変わる。カマドの位置を北ないし北西に置くという伝統は古墳時代後期後半以来継承されてきた。しかし，このころには，東，北東，南西など，ほぼ90度回転した位置にカマドが置かれる例が多い。竪穴住居跡の規模に関しても，大型（たとえばSI-099B）が引き続き存在するものの，小型が大多数を占めるようになる。これら新しい竪穴住居跡は，土坑群と同じく，台地南部や台地東部に多い。台地西部では新たに斜面部に構築している。これらの竪穴住居跡の周辺にあった掘立柱建物跡は見あたらなくなる。土坑には，完形に近い坏類や転用硯等を１～数点出土する例がみられる。新しい竪穴住居跡と土坑は重複することがなく，土坑群は，概ね居住地とみられる竪穴群の西隣に位置している。さらに，古代の溝は上限がこのころに求められる。溝と重複している竪穴住居跡は，いずれも平安時代の比較的古相（Ⅱ－１期・２期）の土器群をもつ例に限られている。したがって，その後の竪穴住居，土坑，及び溝は，併存しているとみて矛盾はない。

以上のように，奈良時代から平安時代の境界では，土器が最も大きく変化するのに対し，村落景観的には密度が減少するだけで，前代の様相がそのまま受け継がれているように見える。大・小の竪穴住居と掘立柱建物が基本的に組となっていた可能性が高く，施設の主軸方向にも大きな変化はない。墓などを想定し得るような土坑は，集落内部に存在しない。ところが，平安時代の後半（Ⅱ－３期）になると，居住地が東側に偏ってくるとともに，向きの違う竪穴住居が造営される。掘立柱建物は一般的な施設組成からはずれる。居住地を溝や道が囲み，その区画内には，居住地に隣接して土坑群が営まれるようになる。土坑群は墓の可能性がある。これらから，村落景観的に大きな変化が起こるのはむしろこの時期といえる。

本遺跡で最後に竪穴住居がみられるのは，およそ中世の直前であったと思われる。その後は台地の縁を画する柵や溝が中心なので，里山や畠などに転じていったものと考えられる。遺構の中心は西側に移り，斜面部などに土坑が営まれた。とくに，調査区北西隅においては，中野台遺跡から連続する土坑群があり，古銭の分布から推論すると，墓域に利用されていた可能性が高い。この墓域は場所を次第に東へ移動しつつ近世へと受け継がれてゆく。

離合集散の結果としての集落遺跡において，同時性を見極めることが分析の出発点と考えられてきた一方，同時性の証明は事実上不可能であるとする意見もある。本節では，時期をかなり長く区切った上で，施設の種類と土地利用という観点から，大枠での展開の把握をはかった。集落研究のもう一つの視点，すなわち集落の継続性については，言葉が十分尽くされなかった。ほぼ同時期の集落が隣の観音塚遺跡で展開しているため，鷲谷津遺跡単独での分析にはそれほど意味がないと考えるからである。ただし，古墳時代後期後半から平安時代まで，集落は連綿と営まれており，明確な断絶があったとは認めがたい点は重要である。そのなかで最盛期は奈良時代である。千葉寺地区を除くと，周辺地域における同時代の集落は多くは知られておらず，むしろその前後の時期の遺跡の方が多く知られている。奈良時代の直前，ないし奈良時代に周辺地域から集住することにより，急発展した集落であると仮定しておきたい。この場合，平安時代には再び離散するが，鷲谷津遺跡と隣接の観音塚遺跡を合わせると，それでも拠点的集落というのに

ふさわしい規模を保ったと考えられる。

参考文献

『千葉市宇津志野窯跡確認調査報告書』　千葉県文化財センター調査報告第219集　財団法人千葉県文化財センター　1992

『千葉市中原窯跡確認調査報告書』　千葉県文化財センター調査報告第186集　財団法人千葉県文化財センター　1990

『土気南遺跡群Ⅶ―南河原坂窯跡群　鐘つき堂遺跡』　千葉市土気南土地区画整理組合　財団法人千葉市文化財調査協会　1996

『主要地方道生実・本納線埋蔵文化財調査報告書２―笹目沢遺跡・種ケ谷津遺跡・大道遺跡―』　千葉県文化財センター調査報告第317集　財団法人千葉県文化財センター　1998

長谷川厚　「古墳時代後期土器の研究（３）―房総地域の諸相について―」　『神奈川考古』　27　1991

『千葉県文化財センター研究紀要』　14　財団法人千葉県文化財センター　1993

大村直　「古墳時代集落の分析視点」　『静岡県考古学会シンポジウムⅧ　古墳時代の集落』　静岡県考古学会　1995

第10章　結語

鷲谷津遺跡は旧石器時代から中近世までの複合遺跡である。

旧石器時代では，大きく3層に分かれて，22か所から総数677点の石器が出土している。

縄文時代の主な遺構としては，早期の炉穴17基が散在している。密度は薄い。

弥生時代においても密度は薄い。特筆されるのは，検出例がなく未だ様相が明らかではない中期前半の竪穴住居跡3軒と，再葬墓とみられる土壙が調査されたことである。

本遺跡の最大の特徴は，古墳時代から平安時代にかけて展開する集落遺跡という点である。竪穴住居跡144軒中，実に141軒がこの時期に営まれている。とくに，古墳時代の終わりから奈良時代にかけて飛躍的な発展を遂げ，すぐに最盛期を迎えた後，平安時代を通じて連綿と集落が営まれたとみられる。このような遺跡のあり方は，隣接の観音塚遺跡にもほぼ共通する特徴である。2遺跡を合わせた集落規模は，当時の拠点的集落にふさわしいものと思われる。

鷲谷津遺跡ではこれらを裏付けるように，和同開珎，銅製帯金具，緑釉陶器など奈良時代に搬入されたとみられる特殊な遺物が出土している。一方で，本遺跡においては竪穴住居跡等から生活に密着した甕類などの土器が豊富に出土した。少なくとも本遺跡に関しては，出土遺物が日用品を主体としていることから，政治的・宗教的な特殊性はあまり認められない。主体としては，民衆を中心とした生活の場であったことが推察される。

奈良時代の土師器甕等には，近隣の他地域から入手したものも多く，当時の物流が活発であり，生活に深く結びついていたことを知ることができる。その後，平安時代に入ると流通形態が変わり，料理等の煮炊き用に，土師器に変わって千葉産須恵器の甕を用いるようになる。通常の須恵器は硬質過ぎて煮炊きの道具に適さないため，他地域で当該用途に供することはまずない。これは単純な転用ではなく，本地域に独特の現象である。ここに，生活に根ざした地域性をみることができる。

また，考察で述べているように，本遺跡で検出された集落の発展契機は，近在する千葉寺の建立時期と関連する可能性がある。奈良時代前後における千葉寺の造営は，地域史的に非常に大きな意味をもっていると考える。

以上のように，本遺跡の発掘調査では，千葉県における古代の様相を知るうえで，貴重な考古学的資料を記録し提供する結果となった。隣接する観音塚遺跡・中野台遺跡は，さらに豊富な調査成果を有している。今後，千葉寺地区におけるこれらの遺跡を報告することにより，本遺跡の資料がますます有益なものとなることが期待される。

附　　表

附表１　竪穴住居跡一覧

※P1～P5の数値は主柱穴の深さ（cm）

遺構名	旧番号	平面形	規模 南北×東西(m)	面積(㎡)	主軸方向	壁高 (cm)	カマドの有無	主柱穴	P１	P２	P３	P４	P５	出入口施設	出入口施設の規模 (cm)	貯蔵穴	貯蔵穴の規模(cm)	所属時期
SI-001	SI-001	方形	5.4×5.2	27.51	N-24°-W	11～38	北辺中央	4	78.0	69.0	78.4	73.7	-	なし	-	なし	-	古墳後期後半
SI-002A	SI-002A	長方形	3.00×3.00	8.97	N-22°-W	5～15	北辺中央	0	-	-	-	-	-	不明	-	なし	-	平安
SI-002B	SI-002B	長方形	2.35×2.00	4.56	N-0°	0～8	不明	0	-	-	-	-	-	なし	-	南西隅	56.0×42.0×25.0	古墳後期後半
SI-002C	SI-002C	方形	4.15×4.4	18.24	N-51°-W	7～49	北西辺中央	3	35.0	不明	48.5	25.5	-	南東辺中央	68×60×45	なし	-	奈良
SI-003	SI-003	不整長方形	2.5×3.2	8.10	N-32°-E	3～7	なし	不明	-	-	-	-	-	不明	-	なし	-	奈良
SI-004	SI-004	方形	3.90×3.86	15.22	N-31°-W	18～39	北辺中央	4	41.7	61.8	53.7	55.4	-	なし	-	カマド東脇	47.0×43.0×39.6	古墳後期後半
SI-005	SI-005	方形	2.64×2.62	6.75	N-32°-W	23～51	北西辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-006	SI-006	長方形	4.42×4.05	17.98	N-94°-W	35～75	西辺中央	4	58.5	46.5	85.0	78.0	-	?	-	なし	-	古墳後期後半
SI-007	SI-007	方形	4.24×4.12	17.43	N-41°-W	2～63	北西辺中央	4	62.6	63.3	64.2	58.9	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-008	SI-008	長方形	(3.7)×(3.45)	(13.48)	N-55°-E	0～24	北東辺中央やや北寄り	2	47.7	46.3	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-009	SI-009	方形	3.96×4.00	15.60	N-47°-E	8～55	北東辺中央	4	41.5	48.2	39.5	47.6	-	なし	-	なし	-	古墳後期後半
SI-010	SI-010	方形	4.90×5.20	25.58	N-27°-W	12～50	北辺中央	4	64.7	74.9	69.3	69.1	-	南辺中央	79.0×53.0×48.8	なし	-	奈良
SI-011	SI-011A	方形	3.05×(3.0)	-	N-47°-W	25～32	北西辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-012	SI-012	方形	3.60×3.25	12.77	N-25°-W	20～59	北辺中央	4	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-013	SI-013	不整長方形	3.82×3.46	13.48	N-16°-W	16～25	北辺中央	4	45.7	33.5	49.1	20.1	-	南東辺中央	31×29×13.1	なし	-	古墳後期後半
SI-014	SI-014	方形	4.45×4.30	19.37	N-20°-E	26～45	北辺中央	4	45.1	30.7	40.2	48.6	-	なし	-	南東隅	75×(55.0)×45.2	古墳後期前半
SI-015	SI-015	不整長方形	3.00×4.10	12.54	N-22°-W	8～36	北辺西から1/3	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-016	SI-016	長方形	3.42×2.90	10.09	N-20°-E	4～9	(北辺中央)	4	10.0	12.4	12.5	13.0	-	なし	-	なし	-	平安
SI-017	SI-017	方形	3.80×3.92	14.75	N-26°-W	35～52	北辺中央	4	67.7	65.2	52.2	48.4	-	南辺中央	44×43×24.0	なし	-	奈良
SI-018	SI-018	方形	5.50×5.28	29.15	N-8°-W	34～54	北辺中央	4	55.1	74.6	63.5	68.4	-	なし	-	南辺中央より東寄り	39.0×31.0×89.1	古墳後期前半
SI-019	SI-019	方形	3.65×(3.60)	(12.94)	N-20°-W	0～8	不明	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	古墳後期後半
SI-022	SI-022	(方形)	不明	不明	N-109°-W	0	西辺	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-023	SI-023	方形	5.90×5.50	33.39	N-27°-W	34～58	北辺中央	4	67.1	74.6	76.4	57.2	-	なし	-	北東隅	85.0×52.0×73.2	古墳後期前半
SI-024	SI-024	長方形	2.1×1.85	3.66	N-125°-E	6～40	南東隅	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-025	SI-025	方形	2.56×2.70	7.08	N-17°-W	53～60	北辺中央やや西より	2	6.5	なし	なし	10.3	-	南辺中央前	21×23×12.2	なし	-	奈良
SI-026	SI-026	方形	3.76×3.90	14.68	N-16°-W	25～41	北辺中央やや東より	4	79.6	60.6	65.0	52.5	-	なし	-	なし	-	古墳後期前半
SI-027	SI-027	方形	4.66×4.85	22.59	N-21°-W	38～56	北辺中央	4	67.5	58.1	87.4	49.9	-	南辺中央	62×52×0.44	なし	-	古墳後期前半
SI-028	SI-028	方形	4.42×4.30	19.13	N-6°-W	23～35	北辺中央	4	51.3	39.5	47.5	45.6	-	南辺中央	21×22×10.4	南東隅	55.0×50.0×83	古墳後期前半
SI-029	SI-029	方形	2.70×2.60	7.08	N-22°-W	26～41	北辺中央	0	-	-	-	-	-	南辺中央前	20×21×4.4	なし	-	奈良
SI-030	SI-030	不整長方形	(2.15)×2.70	(5.75)	N-90°-E	0～14	東辺中央やや南側より	4	14.5	37.5	25.3	44.1	-	なし	-	なし	-	平安
SI-031	SI-031	方形	3.18×(2.52)	(8.26)	N-0°	4～13	北辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-032	SI-032	長方形	4.70×3.86	18.30	N-68°-E	0～36	なし	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	古墳中期
SI-033	SI-033	(方形)	不可	不可	N-14°-W	0	不明	4	37.9	33.6	37.8	41.9	-	南辺中央より西	38×29×37.3	なし	-	奈良
SI-034	SI-034	長方形	3.80×3.26	12.52	N-30°-W	7～30	北西辺やや東より	0	-	-	-	-	-	南東壁溝中央	32×20×11.2	不明	-	古墳後期前半
SI-035	SI-035	長方形	(5.30)×4.95	(26.25)	N-65°-E	31～40	(東辺)	1	不明	不明	不明	60.6	-	なし	-	南東隅	81.0×76.0×30.0	古墳後期前半
SI-036	SI-036	不整方形	2.80×3.00	(8.11)	N-47°-W	10～17	北西辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	(なし)	-	平安
SI-037	SI-037	長方形	(4.00)×3.45	(14.02)	N-60°-E	0～15	北東辺中央（痕跡）	不明	-	-	-	-	-	不明	-	不明	-	平安
SI-038	SI-038	楕円形	計測不可	計測不可	不明	0～15	-	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	弥生
SI-039	SI-039	方形	5.10×5.08	26.13	N-12°-W	30～44	北辺中央	4	76.4	88.0	86.0	69.2	-	南辺中央に２ヶ所	北側39.0×30.0×7.2 南側29.0×28.0×4.20	なし	-	古墳後期前半
SI-040	SI-040	(方形)	(3.20)×(－)	8.00残存	N-39°-W	27～45	北西辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-041	SI-041	(方形)	(5.10)×(－)	6.48残存	N-35°-W	14～44	北西辺中央	2	-	不明	不明	67.0	-	不明	-	不明	-	奈良

遺構名	旧番号	平面形	規模 南北×東西(m)	面積(㎡)	主軸方向	壁高 (cm)	カマドの有無	主柱穴	P1	P2	P3	P4	P5	入り口施設	入り口施設の規模 (cm)	貯蔵穴	貯蔵穴の規模(cm)	所属時期
SI-042	SI-042	(方形)	不可	5.90残存	N-41°-W	28～53	(北西辺中央)	1	47.8	不明	不明	不明	-	不明	-	不明	-	奈良
SI-044	SI-044	方形	4.30×4.75	20.68	N-29°-W	30～80	北辺中央	4	68.4	75.5	53.8	79.7	-	南東辺中央	52.0×40.0×24.3	なし	-	奈良
SI-045	SI-045	方形	5.10×5.15	(26.54)	N-34°-W	3～36	北西辺中央	4	0.75	64.0	67.9	81.3	-	なし	-	なし	-	古墳後期前半
SI-046	SI-046	方形	(3.40)×(3.40)	(11.40)	N-140°-E	16～21	南東辺中央やや南より	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-047	SI-047	方形	(4.80)×4.70	(22.32)	N-23°-W	7～12	西辺中央	3	(78.0)	(40.2)	不明	(44.2)	-	不明	-	不明	-	古墳後期前半
SI-049	SI-049	方形	2.35×2.25	5.33	N-32°-E	15～44	北東辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-050A	SI-050	方形	3.90×3.96	15.70	N-40°-W	0～30	北西辺中央	3	48.0	8.7	不明	18.5	-	南東辺中央	21.0×19.0×6.7	なし	-	奈良
SI-050B	SI-050B	方形	(5.90)×(5.85)	(34.52)	N-112°-W	1～36	不明	4	44.6	45.0	48.0	42.9	-	不明	-	なし	-	古墳後期後半
SI-051A	SI-051	方形	4.30×4.26	18.51	N-24°-W	31～54	北辺中央	4	53.4	45.3	52.1	59.6	-	南辺中央	38.0×37×30.6	なし	-	奈良
SI-051B	SI-051	長方形	3.49×3.25	-	N-24°-W	40～52	北辺中央やや東より	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-052	SI-052	長方形	6.30×5.78	36.81	N-32°-W	32～60	北西辺中央	4	81.8	50.9	86.8	83.7	-	南東辺中央	50.0×40.0×36.5	なし	-	古墳後期後半
SI-053	SI-053	長方形	3.52×3.90	13.93	N-6°-W	21～31	北辺中央	4	49.9	82.1	51.2	33.4	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-054	SI-054	方形	3.40×3.50	12.08	N-14°-W	49～64	北辺中央	4	56.6	55.7	61.6	58.5	-	南東辺中央	36×34×16.3	なし	-	奈良
SI-055	SI-055	方形	4.20×4.50	19.04	N-24°-W	60～85	北辺中央	4	65.2	73.1	45.0	55.3	-	南辺中央	49.0×40.0×20.9	なし	-	奈良
SI-056	SI-056	方形	5.30×5.30	27.89	N-15°-W	46～57	北辺中央	4	75.6	71.6	73.9	93.5	-	南辺中央	71.0×50×32.6	なし	-	古墳後期後半
SI-057	SI-057	方形	5.30×(5.10)	(26.68)	N-16°-W	24～64	北辺中央	4	59.9	67.7	71.6	67.8	-	南東辺中央	71.0×5.1×36.1	なし	-	古墳後期後半
SI-058	SI-058	方形	3.25×2.90	9.55	N-32°-W	6～47	北西辺中央	4	17.1	20.1	16.4	14.7	-	不明	-	なし	-	奈良
SI-059	SI-059	方形	(5.30)×(5.30)	(28.26)	N-25°-W	4～49	北辺中央	4	67.3	45.4	69.0	63.9	-	南東辺中央	50.0×47×29.0	なし	-	古墳後期後半
SI-060	SI-060	方形	2.88×2.95	8.43	N-29°-W	19～49	北辺中央	0	-	-	-	-	-	南東壁溝中	22.0×24.0×17.0	なし	-	平安
SI-061	SI-061	(方形)	(2.00)×(2.00)	(4.00)	N-26°-W	11～25	(北辺中央)	0	-	-	-	-	-	なし	-	不明	-	奈良
SI-062	SI-062	方形	3.50×3.46	(12.31)	N-46°-W	6～32	北西辺中央	4	62.7	63.0	44.3	59.0	-	なし	-	なし	-	古墳後期前半
SI-063	SI-063	方形	4.38×4.40	19.28	N-12°-W	2～35	北辺中央	4	58.4	43.0	64.3	39.9	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-064	SI-064	(方形)	2.70×(-)	6.72残存	N-21°-W	21～40	不明	0	-	-	-	-	-	不明	-	不明	-	平安
SI-065	SI-065	(方形)	3.30×(-)	12.76残存	N-26°-W	7～60	西辺中央+北辺中央(旧)	1	-	-	-	26.5	-	なし	-	不明	-	平安
SI-066	SI-066	長方形	2.5×2.8	(6.79)	N-120°-E	14～56	南西辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-067	SI-067	長方形	3.50×2.98	10.31	N-33°-W	25～54	北西辺中央	4	49.2	39.6	52.0	52.7	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-068	SI-068	楕円形	計測不可	計測不可	不明	2～8	-	4	89.3	56.5	58.0	85.9	-	-	-	-	-	弥生
SI-069	SI-069	(隅丸方形)	不可	9.57残存	不明	2～5	不明	不明	-	-	-	-	-	不明	-	不明	-	奈良
SI-070	SI-070	方形	4.7×4.8	22.45	N-25°-W	55～63	北辺中央	4	75.1	52.8	46.6	33	-	南東辺中央	62×35×23	なし	-	奈良
SI-071	SI-071	(方形)	(4.45)×(4.5)	(19.90)	N-20°-W	0～2	(北辺中央)	2	-	36.2	26.4	-	-	南東辺中央	43.0×35×21.1	不明	-	平安
SI-072	SI-072	不整形	5.96×1.30	-	-	8～15	なし	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	平安
SI-073	SI-073	方形	(2.5)×(2.5)	(6.16)	N-7°-E	10～25	北辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-075	SI-075	方形	(-)×2.7	6.57残存	N-4°-W	20～27	北辺中央	不明	-	-	-	-	-	不明	-	不明	-	平安
SI-076	SI-076	不整方形	(-)×2.6	6.61残存	N-22°-W	12～21	北辺東から1/3	不明	-	-	-	-	-	不明	-	不明	-	平安
SI-077	SI-077	不整方形	(-)×2.2	6.21残存	N-57°-W	11～26	北西辺西から1/3	2	67.0	不明	不明	66.0	-	不明	-	不明	-	平安
SI-078	SI-078	方形	3.68×3.40	12.5	N-19°-W	30～53	北辺中央	4	24.4	54.1	51.1	29.3	-	南辺中央	45.0×38.0×24.7	カマド西手前	76.0×0.59×22.7	奈良
SI-079	SI-079	方形	3.26×3.38	11.16	N-4°-W	41～57	北辺中央	4	63.0	48.7	57.0	45.2	-	南辺中央	32.0×31.0×27.8	なし	-	奈良
SI-080	SI-080	長方形	3.70×4.10	15.33	N-8°-W	30～47	北辺中央	4	40.3	58.1	47.2	50.3	-	南辺中央	33.0×30.0×33.6	なし	-	奈良
SI-081	SI-081	方形	3.80×4.00	15.2	N-11°-W	22～56	北辺中央やや東より	4	56.5	37.0	52.4	51.6	-	南辺中央	60×55×33.4	なし	-	奈良
SI-082	SI-082	方形	2.30×2.70	6.21	N-80°-E	17～31	東辺中央	2	なし	4.0	4.0	なし	-	なし	-	なし	-	平安
SI-083	SI-083	長方形	4.70×4.10	(19.23)	N-10°-W	12～21	炉	5	29.7	22.0	25.3	27.9	17.2	-	-	-	-	弥生
SI-084	SI-084	方形	5.40×5.50	29.91	N-11°-W	44～64	北辺中央	4	59.9	56.8	60.1	73.1	-	南辺中央	61.0×42×26.1	なし	-	奈良

遺構名	旧番号	平面形	規模 南北×東西(m)	面積(㎡)	主軸方向	壁高 (cm)	カマドの有無	主柱穴	P1	P2	P3	P4	P5	入り口施設	入り口施設の規模 (cm)	貯蔵穴	貯蔵穴の規模(cm)	所属時期
SI-085	SI-085	方形	4.10×4.30	17.14	N-4°-W	46～56	北辺中央	4	55.7	51.3	56.1	46.7	-	南辺中央	45.0×43.0×18.3	なし	-	平安
SI-086	SI-086	方形	7.20×7.10	51.12	N-22°-W	16～76	北辺中央	4	56.8	75.5	50.4	86.0	-	南辺中央	56.0×49×10	なし	-	古墳後期後半
SI-087	SI-087	方形	4.60×4.55	21.19	N-3°-W	38～51	北辺中央	4	63.1	53.6	68.4	50.9	-	南辺中央	40.0×37.0×27.5	なし	-	平安
SI-088	SI-088	長方形	5.65×6.00	33.91	N-27°-W	3～50	北辺中央	4	76.2	85.0	78.7	78.4	-	南辺中央	50.0×48×25.2	なし	-	古墳後期後半
SI-089	SI-089	方形	3.30×3.40	11.26	N-26°-W	10～15	北辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-090	SI-090	方形	(5.30)×5.15	(27.87)	N-0°	38～53	北辺中央	4	(59.6)	(78.7)	(77.2)	(82.0)	-	不明	-	不明	-	古墳後期後半
SI-091	SI-091	方形	5.20×5.10	26.50	N-10°-W	14～58	(北辺中央)	4	67.6	(87.6)	(80.8)	91.0	-	不明	-	不明	-	古墳後期後半
SI-092	SI-092	不整長方形	3.50×3.10	(10.67)	N-6°-W	10～30	不明	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-093	SI-093	方形	3.00×2.90	(8.97)	N-11°-E	8～26	(北辺中央)	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-094	SI-094	方形	2.25×2.50	5.80	N-14°-W	13～20	北辺中央	0	-	-	-	-	-	南辺中央	37.0×39.0×33.8	なし	-	平安
SI-095	SI-095	方形	3.40×(3.30)	9.32	N-18°-E	2～5	不明	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-096	SI-096	不整方形	3.00×3.00	8.88	N-8°-E	30～56	北隅	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-097	SI-097	方形	2.80×2.80	7.97	N-5°-E	15～28	なし	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-098	SI-098	方形	5.50×5.60	30.95	N-0°	63～83	北辺中央	4	67.2	52.4	44.9	60.4	-	南辺中央	47.0×48.0×27.0	なし	-	奈良
SI-099A	SI-099	長方形	2.40×3.50	8.50	N-36°-W	1～33	北西辺やや東より	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-099B	SI-099	長方形	4.6×4.0	18.29	N-56°-E	8～12	北東辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-100	SI-100	方形	5.70×5.70	32.4	N-40°-W	15～67	北西辺中央	4	80.3	69.3	62.9	71.0	-	南東辺中央	50×55.0×34.3	なし	-	奈良
SI-101	SI-101	長方形	3.50×3.20	11.36	N-33°-E	2～26	北東辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-102	SI-102	長方形	3.30×4.0	12.99	N-19°-W	2～26	北辺中央	4	64.2	45.4	53.2	29.6	-	南辺中央	39.0×36.0×21.9	なし	-	奈良
SI-103	SI-103	長方形	2.4×3.0	7.02	N-44°-W	15～22	北西辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-104	SI-104	長方形	2.5×3.0	7.23	N-46°-E	15～20	北東辺やや東より	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-105	SI-105	不整長方形	3.5×3.1	10.94	N-0°	13～20	北辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-106	SI-106	(方形)	5.2×(-)	4.49残存	(N-8°-W)	55～58	不明	不明	-	-	-	-	-	不明	-	不明	-	古墳後期後半
SI-107	SI-107	方形	5.5×(5.5)	31.25	N-37°-W	8～31	北西辺中央	1	不明	(56.1)	不明	不明	-	不明	-	北隅	62.0×54.0×71.0	古墳後期後半
SI-108	SI-108	方形	3.3×3.6	(11.91)	N-28°-W	6～52	北辺中央	0	-	-	-	-	-	南辺中央	42×(-)×10.5	なし	-	奈良
SI-109	SI-109	(方形)	4.7×(4.8)	18.53	N-45°-E	0～38	(北東辺中央)	3	24.2	不明	53.3	75.2	-	不明	-	なし	-	奈良
SI-110	SI-110	長方形	2.75×4.80	13.57	N-3°-W	10～50	北辺、東から1/3	0	-	-	-	-	-	南辺中央	55×29×10.0	なし	-	奈良
SI-111	SI-111	方形	4.00×(3.80)	13.15	N-100°-E	5～70	東辺中央	4	55.5	58.4	4.42	34	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-112	SI-112	方形	(2.80×3.10)	8.89	N-20°-W	不可	北西辺中央	4	(21)	(28.8)	(10.5)	(3.3)	-	なし	-	なし	-	平安
SI-113	SI-113	長方形	1.80×2.20	3.86	N-17°-E	25～40	北辺中央やや東より	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-114	SI-114	方形	2.20×(1.10)	2.53	(N-23°-W)	5～20	不明	0	-	-	-	-	-	不明	-	不明	-	平安
SI-115	SI-115	長方形	2.70×3.20	8.88	N-5°-W	25～65	北辺中央やや東より	0	-	-	-	-	-	南辺西寄りに 2ヶ所	20×24×13.2 26×21×14.2	なし	-	古墳後期後半
SI-116	SI-116	方形	3.50×3.90	13.50	N-50°-W	25～40	北西辺中央やや北より	4	46.4	59.4	32.8	56.8	-	東南辺中央	44×33×27.3	なし	-	奈良
SI-117	SI-117	方形	3.00×3.20	9.71	N-25°-W	2～18	(北辺中央やや東より)	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-118	SI-118	方形	2.60×2.50	(6.55)	(N-90°-W)	15～20	北西隅	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-119	SI-119	方形	3.40×3.60	12.28	N-8°-W	23～45	北辺中央	3	12.4	-	35.3	25.7	-	南辺中央	71.0×50.0×27.1	カマド東脇	79×57×17.7	平安
SI-120A	SI-120B	方形	(4.80×4.95)	23.23	N-45°-W	-	(北西辺中央)	4	32.1	37.5	28.1	11.2	-	南東辺中央	46.0×28.0×13.7	なし	-	平安
SI-120B	SI-120A	不整長方形	4.40×4.80	23.23	N-3°-E	10～52	北辺西より	3	-	29.5	27.7	27.9	-	南辺中央	43×29×4.7	-	-	奈良
SI-121	SI-121	平行四辺形	3.05×3.40	10.4	N-25°-W	20～30	北辺中央	0	-	-	-	-	-	南辺中央	30.0×31.0×11.1	なし	-	平安
SI-122	SI-122	(方形)	4.00×(-)	6.60残存	(N-10°-W)	20～30	不明	2	不明	21.3	12.6	不明	-	不明	-	不明	-	奈良
SI-123	SI-123	方形	2.00×2.30	4.58	N-20°-W	20～35	北辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-124	SI-124	長方形	(3.30)×3.30	2.48残存	N-5°-E	10～13	北辺中央	2	不明	不明	12.2	19.5	-	不明	-	不明	-	奈良

遺構名	旧番号	平面形	規模 南北×東西(m)	面積(㎡)	主軸方向	壁高 (cm)	カマドの有無	主柱穴	P1	P2	P3	P4	P5	入り口施設	入り口施設の規模 (cm)	貯蔵穴	貯蔵穴の規模(cm)	所属時期
SI-125	SI-125	方形	3.2×(3.0)	5.43残存	N-5°-E	10～18	北辺東隅	不明	-	-	-	-	-	不明	-	南東隅	67×62×14.2	平安
SI-126	SI-126	長方形	2.65×3.00	7.91	N-0°	5～25	北辺西から1/3	0	-	-	-	-	-	南辺中央	53×62×28.5	北東隅	44×52×7.1	奈良
SI-127	SI-127	方形	4.25×4.50	19.52	N-10°-E	53～85	北辺中央	4	44.6	57	52.7	49.2	-	なし	-	なし	-	奈良
SI-128	SI-128	方形	2.65×2.90	7.80	N-0°	8～12	北辺中央	1	-	-	-	23.7	-	南辺中央	25.0×27.0×12.4	なし	-	平安
SI-129	SI-129	方形	5.90×5.85	34.44	N-20°-W	25～60	炉	4	112.7	110	100.9	141.7	-	なし	-	北西隅、南東隅	68×65×61.6 80×97×65.0	古墳中期
SI-130	SI-130	(方形)	2.30×(-)	2.81残存	N-20°-W	23～35	(北辺)	0	-	-	-	-	-	南辺中央	30×32×18.0	不明	-	奈良
SI-131	SI-131	方形	2.35×2.55	6.05	N-7°-W	20～35	北辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	なし	-	平安
SI-132	SI-132	方形	3.75×4.30	16.03	N-12°-W	28～48	北辺中央	0	-	-	-	-	-	南辺中央	4.5×5.7×19.5	なし	-	平安
SI-133	SI-133	方形	3.20×3.20	10.24	N-12°-W	40～60	北辺中央	4	38.2	33.6	36.2	29	-	南辺中央	5.3×5.1×21.5	なし	-	奈良
SI-134	SI-134	方形	3.00×3.20	(9.87)	N-5°-W	7～13	北辺中央	0	-	-	-	-	-	なし	-	南東隅	46.0×(48.0)×18.0	平安
SI-135	SI-135	(方形)	5.50×(-)	11.52残存	N-6°-W	20～38	北辺中央	2	13.5	19.1	-	-	-	南辺中央	67.0×43.0×19.0	-	-	平安
SI-136	SI-136	方形	3.00×3.30	10.19	(N-27°-W)	23～40	なし	4	25.8	28.1	21.4	39.7	-	なし	-	南東隅	63×77×39.2	古墳中期
SI-137	SI-137	方形	3.35×3.30	11.30	(N-17°-W)	30～75	なし	4	37.2	24.2	38.4	33	-	なし	-	南西隅柱の北に隣接	69×81×18.9	古墳中期
SI-138	SI-138	(方形)	3.00×(-)	5.03残存	N-75°-E	20～28	東辺中央	0	-	-	-	-	-	不明	-	不明	-	平安
SI-140	SI-140	方形	4.85×5.00	24.54	N-10°-W	37～54	北辺中央	4	78.4	68.3	76.5	70.3	-	2ヶ所	58×52×30.5	なし	-	古墳後期後半
SI-141	SI-141	方形	4.50×4.40	(20.09)	N-10°-W	3～36	北辺中央	4	(65.2)	73.7	(85.7)	60.2	-	南辺中央	39×36×16	不明	-	古墳後期後半
SI-142	006	(方形)	2.60×(-)	(6.67)	N-40°-W	20～40	北西辺中央	0	-	-	-	-	-	不明	-	なし	-	奈良
SI-143	007	(方形)	(-)×5.00	(21.29)	N-30°-W	50～70	北西辺中央	4	67.1	64.6	43.4	64.8	-	不明	-	南隅	76×100×18.1	奈良
SI-144	026	(長方形)	2.50×(-)	(3.16)	N-74°-W	30～50	不明	4	97.2	74.9	98.4	81.9	-	なし	-	なし	-	平安

附表２　掘立柱建物跡一覧

遺構名	位置	時代	規模	主軸	桁行長	梁行長	柱間寸法	柱穴径	備考
ＳＸ-１	Ｎ２８	(古墳後期後半)	３×２	Ｎ－50°－Ｅ	6.3	3.6	1.8～2.2	0.45～0.70	総柱
ＳＸ-２	Ｎ２８	平安	３×２	Ｎ－34°－Ｗ	4.35	3.2	1.05～1.8	0.34～0.52	
ＳＸ-３	Ｎ２８	奈良	３×２	Ｎ－29°－Ｗ	3.9	3.9	1.8～2.1	0.48～0.84	
ＳＸ-４	Ｎ２８	(平安)	３×２	Ｎ－30°－Ｗ	6.6	4.2	2.1～2.2	0.32～0.54	
ＳＸ-５	Ｎ２８	(平安)	３×２	Ｎ－32°－Ｗ	4.8	4.05	1.2～1.8	0.56～1.06	庇付き？
ＳＸ-６	Ｎ２８	(奈良)	２×２	Ｎ－26°－Ｗ	2.7	2.7	1.2～1.5	0.36～0.76	
ＳＸ-７	Ｎ２８	奈良・平安	１×１	Ｎ－30°－Ｗ	2.3	2.3	2.3	0.62～0.70	
ＳＸ-８	Ｏ２７	(平安)	３×２	Ｎ－10°－Ｗ	5.4	3.8～4.2	1.8～1.9	0.43～0.55	
ＳＸ-９	Ｎ２８	(奈良)	３×２	Ｎ－41°－Ｗ	4.8	3.2	1.6	0.70～0.78	
ＳＸ-10	Ｎ２７	(平安)	(２×２)	Ｎ－８°－Ｅ	4.5	3.0	1.2～1.8	0.80～1.10	
ＳＸ-11	Ｎ２７	(奈良)	３×２	Ｎ－３°－Ｗ	5.1	3.6	1.3～2.1	0.72～0.93	
ＳＸ-12	Ｏ２７	奈良・平安	(１×１)	Ｎ－１°－Ｗ	3.1	2.2	2.2～3.1	0.72～0.92	
ＳＸ-13	Ｎ２７	平安	３×２	Ｎ－４°－Ｗ	4.2	3.6	1.4～1.8	0.63～0.83	
ＳＸ-14	Ｎ２７	(平安)	(２×２)	Ｎ－７°－Ｗ	2.8	2.8	1.4	0.60～0.92	
ＳＸ-15	Ｎ２７	(平安)	１×１	Ｎ－６°－Ｗ	3.2	2.4	2.4～3.2	0.68～0.92	
ＳＸ-16	Ｎ２７	奈良	(１×１)	Ｎ－17°－Ｗ	2.8	2.1	2.1～2.8	0.70～0.98	
ＳＸ-17	Ｎ２７	奈良	(１×１)	Ｎ－２°－Ｗ	2.8	2.4	2.4～2.8	0.64～0.84	
ＳＸ-18	Ｎ２７	奈良・平安	２×２	Ｎ－３°－Ｗ	4.5	4.2	1.7～2.5	0.66～0.92	
ＳＸ-19	Ｏ２７	奈良	(１×２)	Ｎ－２°－Ｅ	2.8	1.6	1.3～1.6	0.54～0.70	
ＳＸ-20	Ｎ２６	(奈良)	１列	Ｎ－80°－Ｗ				0.62～0.80	柱穴8・柵列
ＳＸ-21	Ｎ２７	(平安)	３×２	Ｎ－10°－Ｗ	5.4	4.2	1.8～2.1	0.75～1.12	
ＳＸ-22	Ｎ２７	平安	２×２	Ｎ－21°－Ｗ	4.0	4.0	2.0	0.66～0.86	
ＳＸ-23	Ｎ２７	奈良・平安	２×２	Ｎ－４°－Ｅ	4.5	3.6	1.8～2.3	0.68～0.96	庇付き
ＳＸ-24	Ｍ２６	平安	？×４	Ｎ－11°－Ｗ	7.4	1.6＋	1.6～1.85	0.82～1.04	
ＳＸ-25	Ｍ２６	平安	３×２	Ｎ－11°－Ｗ	5.1	3.4	1.7	0.56～0.97	
ＳＸ-26	Ｎ２７	平安	３×２	Ｎ－13°－Ｗ	5.1	3.6	1.7～1.8	0.88～1.02	
ＳＸ-27	Ｍ２７	奈良	３×２	Ｎ－４°－Ｗ	5.4	3.6	1.8	0.66～0.88	
ＳＸ-28	Ｍ２７	(平安)	２×２	Ｎ－８°－Ｅ	3.9	3.8	1.9～2.0	0.72～0.84	
ＳＸ-29	Ｍ２７	奈良・平安	１列	Ｎ－３°－Ｗ				0.78～0.94	柱穴４
ＳＸ-30	Ｎ２７	(平安)	２×２	Ｎ－６°－Ｅ	3.8	3.4	1.7～2.1	0.44～0.78	
ＳＸ-31	Ｎ２７	(奈良)	２×３	Ｎ－８°－Ｅ	5.4	3.6	1.8	0.64～0.98	
ＳＸ-32	Ｎ２７	(平安)	２×２	Ｎ－２°－Ｅ	3.0＋0.7	3.0	1.5	0.70～0.92	庇付き
ＳＸ-33	Ｍ２６	奈良・平安	１列	Ｎ－85°－Ｅ			1.5	0.52～0.76	柱穴３
ＳＸ-34	Ｏ２７	奈良・平安	１列	Ｎ－70°－Ｅ				0.33～0.47	柱穴４

附表３　土坑一覧

遺構名	旧番号（注記）	位置	平面形	規模（m）	深さ（m）	時期	遺構種類
SK-1	SK-001	M27-23	隅丸長方形	1.86×1.02	1.66	縄文	陥穴
SK-3A	SK-003A	N28-07	長方形	2.54×1.60	0.39	平安	土坑
SK-3B	SK-003B	N28-08	隅丸方形	2.78×2.45	0.27	平安	土坑
SK-4	SK-004	N29-04・05	不整隅丸方形	2.20×2.18	0.29	奈良～平安	土坑
SK-5	SK-005	N28-21	楕円形	1.98×1.15	0.40	中世	柵列
SK-6	SK-006	N28-21	楕円形	1.80×1.04	0.40	中世	柵列
SK-7	SK-007	N28-22	楕円形	1.42×1.00	0.29	中世	柵列
SK-8	SK-008	N28-22	楕円形	1.00×0.70	0.25	中世	柵列
SK-9B	SK-009	N28-18	楕円形	1.03×0.50	0.31	中世	柵列
SK-9A	SK-009A	N28-22	楕円形	[0.90] ×0.86	0.26	中世	柵列
SK-10	SK-010	N28-18	楕円形	1.64×1.00	0.49	中世	柵列
SK-11	SK-011	N28-18	楕円形	1.88×0.98	0.42	中世	柵列
SK-12A	SK-012	N28-18	楕円形	1.62×0.93	0.34	中世	柵列
SK-12B	SK-012B	N28-18	(楕円形)	[0.50] ×0.94	0.43	中世	柵列
SK-13	SK-013	M28-15	円形	1.16×1.07	0.34	平安	土壙
SK-14	SK-014	N28-17	円形	1.55×1.54	0.68	平安	土壙
SK-15	SK-015	N28-24	長方形	2.37×2.16	0.85	平安	土坑
SK-16	SK-016	N28-18	不整円形	1.24×1.06	0.65	平安	土坑
SK-17	SK-017	N28-13	円形	1.00×1.10	0.50	平安	土坑
SK-18	SK-018	N28-13	円形	1.16×1.10	0.14	平安	土坑
SK-19	SK-019	M28-15	不整楕円形	2.72×1.82	0.70	古墳	土坑
SK-20	SK-020	N28-12・13	円形	1.61×1.50	1.15	平安	土壙
SK-21	SK-021	N28-06	不整長楕円形	2.86×0.80	0.70	縄文	炉穴
SK-22	SK-022	N28-07	不整長楕円形	3.09×1.18	0.69	縄文	炉穴
SK-23	SK-023	N28-21	楕円形	1.86×1.23	0.84	中世	土坑
SK-24	SK-024	N28-13	円形	1.07×1.07	0.23	平安	土坑
SK-25	SK-025	N28-13	楕円形	1.47×0.93	0.80		土坑
SK-26	SK-026	N28-13	円形	1.06×0.94	0.24		土坑
SK-27	SK-027	N28-13	円形	0.93×0.83	0.50		土坑
SK-28	SK-028	N28-13	円形	1.65×1.57	0.60	平安	土壙
SK-32	SK-032	N28-16	隅丸長方形	1.80×0.85	0.79		土坑
SK-33	SK-033	N28-21	隅丸長方形	1.32×1.04	0.65		土坑
SK-34	SK-034	N28-21	隅丸方形	1.00×0.49	0.78		土坑
SK-35	SK-035	N28-21	隅丸長方形	2.20×1.00	0.66		土坑
SK-36	SK-036	N28-22	楕円形	1.09×0.96	0.73	古墳時代	土坑
SK-37	SK-037	N28-11	不整円形	1.96×1.57	0.26		土坑
SK-38	SK-038	N29-02	不整楕円形	1.95×1.22	0.42	縄文	炉穴
SK-39	SK-039	N29-02	不整円形	0.74×0.68	0.32	縄文	炉穴
SK-40	SK-040	N28-08	楕円形	1.57×0.76	0.40	縄文	炉穴
SK-41	SK-041	L29-05	不整長楕円形	3.49×1.32	0.48	縄文	炉穴
SK-50	SK-050	O27-14	隅丸長方形	1.17×0.98	0.59	平安	土坑
SK-51	SK-051	O27-07	不整円形	1.30×1.15	0	弥生	土坑
SK-52	SK-052	O28-02	長楕円形	3.16×1.06	0.49	縄文	炉穴
SK-55	SK-055	O27-13	楕円形	2.24×1.52	0.78	平安	土坑
SK-56	SK-056	O27-13	隅丸長方形	1.08×0.78	0.63	平安	土坑
SK-57	SK-057	O27-18	不整円形	1.03×0.82	0.49		土坑

遺構名	旧番号（注記）	位置	平面形	規模（m）	深さ（m）	時期	遺構種類
SK-58	SK-058	O27-13	長円形	0.94×0.52	0.37		土坑
SK-59	SK-059	O27-13	円形	0.85×0.74	0.69		土坑
SK-60	SK-060	O27-09	楕円形	1.45×1.09	0.40	平安	土坑
SK-61	SK-061	O27-07	不整円形	0.88×0.70	0.14	弥生	土壙
SK-62	SK-062	O27-09	円形	0.77×0.73	0.31		土坑
SK-63	SK-063	O27-05	円形	0.61×0.57	0.25		土坑
SK-64	SK-064	O27-10	円形	0.70×0.59	0.21	平安	土坑
SK-65	SK-065	O27-10	円形	0.64×0.59	0.23		土坑
SK-66	SK-066	O27-05	円形	0.75×0.68	0.32		土坑
SK-67	SK-067	O27-10	円形	0.76×0.65	0.19	奈良～平安	土坑
SK-68	SK-068	O27-10	円形	0.61×0.55	0.25	奈良	土坑
SK-69	SK-069	O27-05	円形	0.85×0.78	0.30		土坑
SK-70	SK-070	O27-09	円形	1.05×0.97	0.46		土坑
SK-71	SK-071	O27-09	円形	0.76×0.70	0.38		土坑
SK-72	SK-072	O27-09	(円形)	0.88×(0.80)	0.20		土坑
SK-73	SK-073	O27-09	円形	0.69×0.68	0.40		土坑
SK-74	SK-074	P26-21	(円形)	(0.97)×0.97	0.35		土坑
SK-75	SK-075	P26-21	(円形)	(0.72)×(0.61)	0.31		土坑
SK-76	SK-076	P27-01	円形	1.66×1.63	0.35		土坑
SK-77	SK-077	P27-06	楕円形	0.90×0.65	0.30	平安	土坑
SK-78	SK-078	P27-06	不整円形	0.90×0.70	0.26		土坑
SK-79	SK-079	P27-06	円形	0.96×0.96	0.63		土坑
SK-80	SK-080	O27-10	円形	1.38×1.25	0.50		土坑
SK-81	SK-081	O27-08	隅丸長方形	1.40×1.03	0.18		土坑
SK-82	SK-082	O27-09	楕円形	1.40×0.90	0.32		土坑
SK-83	SK-083	O27-09	不整円形	1.04×0.84	0.37		土坑
SK-84	SK-084	O27-10	円形	0.75×0.71	0.23		土坑
SK-85	SK-085	P26-21	円形	0.63×0.51	0.24		土坑
SK-86	SK-086	O27-13	円形	0.40×0.36	0.46		土坑
SK-87	SK-087	O27-13	円形	0.49×0.40	0.46		土坑
SK-88	SK-088	O27-17	円形	0.39×0.37	0.58		土坑
SK-89	SK-089	O27-17	円形	0.83×0.73	0.42		土坑
SK-90	SK-090	O27-17	円形	0.37×0.37	0.27		土坑
SK-91	SK-091	O27-18	円形	0.73×0.71	0.49		土坑
SK-92	SK-092	O27-18	円形	0.75×0.66	0.44		土坑
SK-93	SK-093	P26-21	円形	0.74×0.60	0.39		土坑
SK-94	SK-094	P26-21	円形	1.05×0.96	0.52		土坑
SK-95	SK-095	P26-21	円形	0.51×0.49	0.19		土坑
SK-96	SK-096	O27-22	円形	0.48×0.49	0.30		土坑
SK-97	SK-097	N28-04	(不整楕円形)	[1.48]×1.06	0.56	縄文	炉穴
SK-98	SK-098	O27-11	不整長楕円形	3.20×1.21	0.66	縄文	炉穴
SK-99	SK-099	O26-17	円形	1.00×(1.00)	0.30		土坑
SK-100	SK-100	O26-17	長方形	1.90×1.70	0.95	中世	土坑
SK-101	SK-101	N26-17	楕円形	0.95×0.70	0.30	奈良	土坑
SK-102	SK-102	N26-17	円形	1.00×0.85	0.30	近世	土壙
SK-103	SK-103	N26-16	楕円形	1.10×0.90	0.35	奈良	土坑
SK-104	SK-104	M26-20	円形	0.70×0.60	0.35		土坑
SK-105	SK-105	M26-19	円形	0.84×0.76	0.35		土坑

遺構名	旧番号（注記）	位置	平面形	規模（m）	深さ（m）	時期	遺構種類
SK-112	SK-112	N26-17	隅丸長方形	1.32×1.04	0.38	縄文	土坑
SK-113	SK-113	M26-20	(楕円形)	(0.86)×0.74	0.21	縄文	炉穴
SK-114	SK-114	N27-08	長楕円形	2.50×0.84	0.50	中世	土坑
SK-115A	SK-115A	N27-04	長楕円形	3.23×1.04	0.76	縄文	炉穴
SK-115B	SK-115B	N27-04	楕円形	[0.86]×0.86	0.25	縄文	炉穴
SK-116	SK-116	N27-09	蛸足状	2.81×1.04	0.54	縄文	炉穴
SK-117	SK-117	N27-08	不整楕円形	1.38×1.16	0.52	縄文	炉穴
SK-118	SK-118	N27-17	不整楕円形	2.99×1.73	0.59	縄文	炉穴
SK-119	SK-119	M27-25	不整方形	1.94×1.28	0.63	縄文	炉穴
SK-120A	SK-120A	N27-23	不整楕円形	1.56×0.88	0.58	縄文	炉穴
SK-120B	SK-120B	N27-22	不整楕円形	1.72×0.92	0.56	縄文	炉穴
SK-121	SK-121	N27-07	楕円形	[0.72]×0.72	0.23	縄文	炉穴
SK-122	SK-122	N27-06	隅丸長方形	1.56×1.22	0.54	平安	土壙
SK-123	SK-123	N27-17	円形	1.32×1.08	0.28	奈良	土坑
SK-124	SK-124	N27-02	円形	0.95×1.00	0.28	平安	土坑
SK-125	SK-125	M27-20	円形	1.02×0.92	0.12		土坑
SK-126	SK-126	M27-20	円形	0.90×0.84	0.42		土坑
SK-127	SK-127	M27-20	円形	1.00×1.00	0.30		土坑
SK-128	SK-128	N27-07	円形	1.04×(0.30)	0.12		土坑
SK-129	SK-129	K26-15	半円形	2.52×(1.80)	bgb		土坑
SK-130	SK-130	L26-12	半円形	1.90×(1.20)	0.25		土坑
SK-131	SK-131	K26-20	円形	1.92×1.75	0.90		土坑
SK-132	SK-132	K26-20	楕円形	1.32×1.08	0.75		土坑
SK-133	SK-133	N26-22	(隅丸方形)	(1.60)×(1.40)	データなし		土坑
SK-134	SK-134	K26-15	楕円形	0.50×0.35	0.90		土坑
SK-135	SK-135	K26-15	円形	0.40×0.42	0.22		土坑
SK-136	SX-004	M26-12	長円形	0.13×0.70	0.18		土坑
SK-137	016	K26-25	隅丸長方形	2.85×1.34	0.47		土坑
SK-1D	SK-001	O26-20	円形	0.83×0.90	0.29		土坑
SK-3D	SK-003	P26-11,16	楕円形	0.78×0.52	0.257		土坑
SK-4D	SK-004	P26-11,16	円形	0.65×0.68	0.26		土坑
SK-5D	SK-005	P26-11,16	隅丸長方形	0.98×0.68	0.551		土坑
SZ-1	SZ-001	M26-21	長方形	2.40×(4.5)	0.94	中世	竪穴状遺構
SZ-2	SZ-002	L26-13	隅丸長方形	0.99×0.78	0.973		土坑
SZ-5	SZ-005	L26-12	隅丸長方形	1.09×0.73	1.07		土坑
SZ-6-1	SZ-006	L26-11	円形	0.41×0.37	0.128		土坑群
SZ-6-2		L26-11	不整円形	1.05×[0.8]	0.43		土坑群
SZ-6-3		L26-11	円形	0.43×0.4	0.16		土坑群
SZ-6-4		L26-11	円形	0.35×0.35	0.26		土坑群
SZ-6-5		L26-11	楕円形	0.24×0.3	0.326		土坑群
SZ-6-6		L26-11	円形	0.29×0.24	0.364		土坑群
SZ-6-7		L26-11	円形	0.25×0.28	0.112		土坑群
SZ-6-8		L26-11	円形	0.22×0.24	0.202		土坑群
SZ-6-9		L26-11	円形	0.31×0.32	0.252		土坑群
SZ-7-1	SZ-007	L26-12	楕円形	0.48×0.4	0.227		土坑群
SZ-7-2		L26-13	円形	0.4×0.4	0.343		土坑群
SZ-7-3		L26-14	円形	0.4×0.37	0.349		土坑群
SZ-8-1	SZ-008	L26-15	円形	0.43×0.47	0.158	中世	土坑群

遺構名	旧番号（注記）	位置	平面形	規模（m）	深さ（m）	時期	遺構種類
SZ-8-2		L26-15	楕円形	0.83×0.5	0.54	中世	土坑群
SZ-8-3		L26-15	円形	0.44×0.49	0.233	中世	土坑群
SZ-8-4		L26-14	楕円形	0.83×0.41	0.321	中世	土坑群
SZ-8-5		L26-14	楕円形	1.23×0.7	0.236	中世	土坑群
SZ-8-6		L26-14	円形	0.25×0.31	0.508	中世	土坑群
SZ-8-7		L26-14	不整楕円形	0.58×0.3	0.58	中世	土坑群
SZ-8-8		L26-14	楕円形	0.46×0.37	0.442	中世	土坑群
SZ-8-9		L26-14	楕円形	0.58×0.5	0.67	中世	土坑群
SZ-8-10		L26-15	円形	0.59×0.64	0.29	中世	土坑群
SX-20-1	SX-20	N26-17	円形	0.68×0.76	0.264	奈良～平安	柵列
SX-20-2		N26-18	略円形	0.63×0.77	0.288	奈良～平安	柵列
SX-20-3		N26-18	略円形	0.64×0.8	0.124	奈良～平安	柵列
SX-20-4		N26-18	円形	0.78×0.78	0.148	奈良～平安	柵列
SX-20-5		N26-18	略円形	0.6×0.77	0.211	奈良～平安	柵列
SX-20-6		N26-18	円形	0.78×0.8	0.199	奈良～平安	柵列
SX-20-7		N26-18	楕円形	1.00×0.81	0.212	奈良～平安	柵列
SX-20-8		N26-18	略円形	0.82×0.79	0.337	奈良～平安	柵列

附表４　竪穴住居跡出土土器観察表

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-001	1	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	15.8±	4.1	-	-	40	少ない	4	3
SI-001	2	須恵器	坏	青灰色	灰色	14.8±	3.7+	-	-	20	少ない	11	1
SI-001	3	須恵器	高台付坏	浅黄色	灰白色	-	1.5+	10.0±	-	15	少ない	11	4
SI-001	4	須恵器	高台付坏	黒褐色	黒褐色	-	1.2+	9.7±	-	10	少ない	13	2
SI-001	5	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	21.7±	11.3+	-	-	20	多い(砂)	4	5
SI-001	6	土師器	甕	明黄褐色	明黄褐色	16.7	21.7	7.6	16.2	90	少ない	36	8
SI-001	7	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	19.2±	22.9+	-	18.8±	30	多い(砂)	20	7
SI-001	8	土師器	甕	明褐色	明褐色	-	15.3+	13.2	-	50	少ない	4	9
SI-001	9	土師器	甑	橙色	にぶい黄橙色	-	13.6+	12.6±	-	20	少ない	2	6
SI-002A	2	土師器	皿(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.0±	3.4	5.2	-	60	少ない(砂)	5	14
SI-002A	3	土師器	椀(ロクロ)	暗褐色	暗褐色	17.0±	4.8+	12.8±	-	30	少ない(砂)	4	5
SI-002A	4	土師器	高台付椀	黄橙色	暗黄橙色	-	2.4+	7.6	-	20	少ない	99	6
SI-002A	5	土師器	足高高台付坏	赤褐色	暗褐色	-	4.1+	16.1±	-	10	少ない	125	12
SI-002A	6	土師器	鉢	赤褐色	赤褐色	16.8±	3.8+	-	-	5	少ない(砂)	132	13
SI-002A	7	須恵器	甕	赤褐色	赤褐色	20.2±	8.2+	-	-	10	少ない(砂)	95	4
SI-002A	8	須恵器	甕	赤褐色	赤褐色	19.6±	7.7+	-	-	10	少ない(母)	168	1
SI-002A	9	須恵器	甕	赤褐色	赤褐色	21.8±	19.1+	-	-	10	少ない(母)	69	2
SI-002A	10	須恵器	甑	灰色	灰色	26.4±	9.3+	-	-	10	少ない	64	3
SI-002A	11	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	21.3±	11.0+	-	-	15	少ない	178	10
SI-002A	12	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	20.0±	9.5+	-	-	15	少ない	58	9
SI-002A	13	土師器	甕	暗赤褐色	暗赤褐色	22.6±	9.3+	-	-	20	少ない(砂)	66	8
SI-002A	14	土師器	甕	暗褐色	黒褐色	21.8±	11.1+	-	22.8±	20	多い(砂)	108	11
SI-002A	15	土師器	甕	黄橙色	にぶい赤褐色	-	27.7+	-	28.2±	30	多い(砂)	119	7
SI-002B	1	須恵器	壺	灰オリーブ色	灰オリーブ色	12.2±	4.5+	-	-	5	少ない	110	1
SI-002B	2	須恵器	壺	オリーブ黒色	暗灰黄色	14.4±	5.0+	-	-	10	多い(白)	116	2
SI-002C	1	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	11.3	4.0	8.0	-	80	多い(赤)	3	2
SI-002C	2	土師器	坏(丸底)	にぶい橙色	にぶい橙色	13.3±	5.1	-	-	50	少ない	8	4
SI-002C	3	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	-	2.3+	7.2	-	50	少ない	188	1
SI-002C	4	土師器	鉢	赤褐色	赤褐色	15.0±	13.0+	-	17.2±	30	多い(砂)	1	6
SI-002C	5	土師器	甕	黒褐色	黒褐色	16.4±	6.8+	-	-	5	少ない	1	7
SI-002C	6	土師器	甕	暗褐色	にぶい褐色	15.1±	12.8+	-	18.0±	30	少ない(砂)	1	3
SI-002C	7	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	19.5	33.7+	-	19.9±	60	少ない	5	5
SI-003	1	須恵器	坏	暗灰黄色	暗灰黄色	-	1.5+	5.1±	-	10	少ない	31	2
SI-003	2	須恵器	坏	暗黄灰色	黄灰色	-	2.0+	8.4±	-	15	少ない	29	1
SI-003	3	土師器	坏(ロクロ)	にぶい橙色	にぶい橙色	-	1.4+	7.8±	-	25	少ない	19	3
SI-004	1	土師器	坏(丸底)	明褐色	明褐色	12.6±	3.2+	-	-	30	少ない	3	3
SI-004	2	土師器	坏(丸底)	褐色	褐色	13.0±	4.1+	-	-	10	少ない	2	2
SI-004	3	須恵器	甕	青灰色	青灰色	-	5.7+	-	-	5	少ない(砂)	20	1
SI-005	1	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	12.5±	4.0	7.4	-	40	少ない	15	1
SI-005	2	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	-	1.6+	8.2±	-	15	少ない(母)	22	6
SI-005	3	須恵器	甕	黄橙色	暗褐色	26.0±	18.1+	-	22.0±	45	少ない(砂・母)	2	8
SI-005	4	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	14.0±	8.3+	-	-	20	少ない(砂)	29	9
SI-005	5	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	18.0±	6.5+	-	-	5	少ない(砂・母)	36	10
SI-005	6	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	21.2±	11.0+	-	19.0±	10	多い(砂・母)	44	11
SI-005	7	須恵器	甕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	22.0±	15.0+	-	-	20	少ない(砂・母)	12	4-1
SI-005	8	須恵器	甕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	12.7±	17.0±	-	10	少ない(砂・母)	46	4-2
SI-005	9	須恵器	甑	黒褐色	黒褐色	33.0±	15.0+	-	-	10	少ない(母)	9	5-1
SI-005	10	須恵器	甑	黒褐色	黒褐色	-	12.3+	14.8±	-	10	少ない(母)	5	5-2
SI-006	1	須恵器	坏	灰白色	灰白色	10.4±	3.8+	7.6±	-	20	少ない	4	3
SI-006	2	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	15.1±	4.5+	-	-	20	少ない	47	6
SI-006	3	土師器	鉢	暗黄褐色	明黄褐色	14.3±	8.0+	-	17.4±	20	少ない	24	5
SI-006	4	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	15.6±	8.6+	-	16.2±	15	少ない	28	7
SI-006	5	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	16.6±	16.6+	-	17.8±	30	少ない(砂)	16	9
SI-006	6	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	16.7±	7.8+	-	-	15	少ない	7	8
SI-006	7	土師器	甕	橙色	橙色	16.4±	15.0+	-	18.2±	20	少ない(砂)	25	10
SI-006	8	土師器	甕	赤褐色	黄橙色	-	2.5+	8.0	-	10	少ない	14	11
SI-007	1	須恵器	坏	灰色	灰色	12.4±	4.2+	7.4±	-	25	少ない(砂・白)	22	3
SI-007	2	須恵器	坏	灰色	灰色	13.2±	4.5+	7.6±	-	10	少ない(砂・母)	90	4
SI-007	3	須恵器	坏	灰色	黒灰色	14.4±	4.1	8.6	-	40	少ない(砂)	47	1
SI-007	4	須恵器	坏	青灰色	灰色	12.0±	3.2+	-	-	10	少ない(砂・白)	15	2

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	ヨコナデ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，工具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，工具痕，輪積痕	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	内面剥離
縦ヘラケズリ，横ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ，ミガキ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	ミガキ	不明	不明	
ヘラナデ	ミガキ	回転糸切り離し	ヨコナデ，回転ナデ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ後ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ後ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ後ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ後ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦方向ナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，ヘラケズリ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
横方向ナデ，縦・横ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ，横ヘラケズリ	-	-	SI-003と接合
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	自然釉
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	-	
ナデ，横ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
縦ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	-	内面摩滅
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，ミガキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ，輪積痕	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	
ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ	
口縁部回転ナデ，波状文	口縁部回転ナデ	-	—	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ，タタキ	口縁部ヨコナデ，あて具痕，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，横・斜位ヘラケズリ	口縁部横方向ナデ，ナデ	-	-	
口縁部回転ナデ，タタキ，ヨコナデ	口縁部回転ナデ，あて具痕，ヘラナデ	-	手持ちヘラケズリ	
タタキ，ヨコナデ	あて具痕，ヘラナデ	-	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
タタキ，横ヘラケズリ，ナデ	ヘラナデ，あて具痕	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	-	
横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	-	内外面黒色処理
口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横・縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，剥離	-	-	
ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	火だすき
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-007	5	須恵器	坏	青灰色	青灰色	13.8±	3.0+	10.0±	-	30	少ない	14	5
SI-007	6	須恵器	坏	灰色	青灰色	-	2.4+	7.2±	-	20	多い(砂・白)	18	6
SI-007	7	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	11.2±	3.7+	-	-	20	少ない	90	12
SI-007	8	土師器	坏	橙色	橙色	15.0±	4.2+	-	-	20	少ない(砂・白)	63	11
SI-007	9	土師器	小型甕	暗褐色	暗褐色	12.4±	4.1+	-	-	5	少ない	54	17
SI-007	10	土師器	小型甕	暗褐色	暗褐色	10.6±	6.0+	-	-	5	少ない	46	18
SI-007	11	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	20.2±	6.7+	-	-	5	多い(砂)	10	14
SI-007	12	土師器	甕	明黄褐色	褐色	19.4±	4.6+	-	-	5	少ない	90	16
SI-007	13	須恵器	甕	灰色	灰色	20.0±	6.0+	-	-	5	少ない	82	8
SI-007	14	須恵器	甑	灰色	灰色	-	5.3+	16.8±	-	5	少ない(砂・母)	45	9
SI-007	15	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	17.8±	8.4+	-	-	10	少ない(砂)	29	15
SI-007	16	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	-	6.1+	2.9	-	20	少ない	79	20
SI-007	17	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	16.8±	14.2+	-	21.7±	40	多い(砂)	6	13
SI-007	18	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	-	11.1+	7.0±	-	10	少ない(砂・白)	48	19
SI-008	3	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	10.7	3.9	4.4	-	100	少ない(赤)	32	1
SI-008	2	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	12.0	3.6	5.9	-	70	少ない(砂・赤)	4	4
SI-008	4	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.6	4.3	5.1	-	60	少ない	3	5
SI-008	5	土師器	坏(ロクロ)	橙色	黒褐色	13.3±	4.8	5.0	-	70	少ない(砂・白)	40	2
SI-008	6	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	14.3±	4.4	5.0	-	50	少ない	27	3
SI-008	7	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	12.0±	3.8+	5.5±	-	40	少ない	30	6
SI-008	8	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	-	1.9+	5.2±	-	30	少ない	7	7
SI-008	9	土師器	小型甕	黄橙色	黄橙色	11.8±	12.8	10.5	13.4±	60	少ない(砂)	7	9
SI-008	10	土師器	小型甕	黄橙色	黄橙色	11.8±	11.2	5.9	13.1±	60	少ない	1	8
SI-009	1	須恵器	高台付坏	黒灰色	灰色	15.3	5.1	9.4	-	75	少ない	4	1
SI-009	2	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	-	1.4+	9.2±	-	10	少ない	5	2
SI-010	1	須恵器	坏	灰色	灰色	13.7±	2.8+	9.6±	-	20	少ない(黒粒)	85	1
SI-010	2	須恵器	坏	灰色	灰色	15.4±	3.4+	8.0±	-	20	少ない	12	2
SI-010	3	須恵器	坏	暗灰色	灰色	14.0±	3.8+	-	-	20	少ない	153	3
SI-010	4	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	15.4±	4.2+	10.0±	-	30	少ない	84	6
SI-010	5	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	1.4+	-	-	5	少ない(母)	77	5
SI-010	6	須恵器	盤	青灰色	青灰色	-	2.5+	13.6±	-	20	多い(砂・母・白)	78	4
SI-010	7	土師器	高台付皿	赤褐色	赤褐色	-	2.0+	13.0±	-	10	少ない	14	7
SI-010	8	土師器	小型甕	赤褐色	黒褐色	11.2±	7.1+	-	11.8±	25	少ない(砂)	128	8
SI-010	9	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	18.4±	9.4+	-	-	10	少ない(砂)	119	11
SI-010	10	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	22.6±	7.7+	-	-	10	少ない(砂)	53	13
SI-010	11	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	-	6.1+	5.6±	-	10	少ない(砂)	85	10
SI-010	12	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	17.8±	7.4+	-	-	10	少ない(母)	17	12
SI-010	13	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	-	20.6+	6.6±	-	20	少ない(砂)	5	9
SI-011A	1	土師器	坏(ロクロ)	暗黄褐色	暗黄褐色	12.6±	3.9	7.1±	-	30	少ない(砂)	52	2
SI-011A	2	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	14.4±	4.1	8.2±	-	35	少ない	12	3
SI-011A	3	須恵器	坏	暗褐色	暗褐色	-	0.9+	5.9	-	20	少ない(砂)	42	7
SI-011A	4	土師器	皿(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	13.2	2.4	7.6	-	98	少ない(赤)	43	8
SI-011A	5	土師器	皿(ロクロ)	黄褐色	黄褐色	13.4±	2.5+	5.8±	-	30	少ない	54	9
SI-011A	6	土師器	高台付坏	赤褐色	赤褐色	13.0±	6.5+	-	-	30	少ない(砂)	37	6
SI-011A	7	土師器	高台付坏	暗褐色	暗褐色	13.4±	4.6+	5.8±	-	30	少ない	39	1
SI-011A	8	土師器	高台付坏	橙褐色	橙褐色	12.2±	3.7+	-	-	25	少ない	57	4
SI-011A	9	土師器	高台付坏	暗褐色	暗褐色	-	3.0+	8.0±	-	15	少ない(砂)	52	5
SI-011A	10	土師器	甕	黒褐色	黒褐色	12.4±	4.5+	-	-	5	少ない	54	12
SI-011A	11	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	18.2±	4.5+	-	-	5	少ない	26	11
SI-011A	12	土師器	小型甕	黒褐色	黄橙色	-	3.5+	7.8	-	10	少ない(砂)	2	10
SI-011A	13	須恵器	甑	橙色	橙色	29.4±	12.0+	-	-	15	少ない	1	15
SI-012	1	須恵器	坏	青灰色	青灰色	13.3±	3.9	8.1	-	50	多い(砂・白)	14	1
SI-012	2	須恵器	坏	青灰色	青灰色	13.4±	3.3+	-	-	20	少ない	26	3
SI-012	3	須恵器	坏	青灰色	青灰色	-	3.6+	7.2±	-	10	少ない(母・白)	21	4
SI-012	4	土師器	坏	暗褐色	暗褐色	15.1±	3.5	9.4±	-	60	少ない	18	2
SI-012	5	須恵器	甕	青灰色	青灰色	-	23.2+	-	27.7±	15	少ない(砂)	10	6
SI-012	6	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	18.4±	1.8+	-	-	5	多い(砂・母)	26	8
SI-012	7	土師器	甕	暗褐色	赤褐色	22.5±	3.9+	-	-	5	少ない(砂・母)	20	7
SI-013	1	土師器	坏	にぶい褐色	橙色	11.2±	3.2+	-	-	10	少ない	25	4
SI-013	2	土師器	坏	暗褐色	黄橙色	-	-	-	-	5	少ない	26	3

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ナデ	N28-25Aと同 一個体
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	内外面火だすき
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
横ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部回転ナデ，タタキ	口縁部回転ナデ	-	-	
ナデ，横ヘラケズリ，タタキ	ヘラナデ	-	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
ヘラケズリ，剥離	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
ミガキ，縦・横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	不明	大部分無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	ミガキ	不明	手持ちヘラケズリ	内面黒色処理
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	ミガキ	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	ヨコナデ	SI-008と接合
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	永田産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	-	-	-	宝珠つまみ
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	内外面赤彩
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ，指押さえ痕	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	武蔵型
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	SI-011Bと接合
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	ヨコナデ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	静止糸切り離し	不明	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
横方向ナデ	横方向ナデ	-	ナデ	SI-011Bと接合
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，横方向ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
横ヘラケズリ	ナデ	-	-	SI-01と接合 底部焼成前線刻
口縁部ヨコナデ，タタキ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	五孔
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
横方向ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	-	ヘラケズリ	
タタキ，ヨコナデ	ナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
ヘラケズリ	ナデ，ミガキ	-	-	
ヘラケズリ，ナデ	-	-	-	放射状暗文あり

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-014	2	土師器	坏(丸底)	明赤褐色	褐色	13.0	4.6	-	-	90	少ない(砂)	10	1
SI-014	3	土師器	坏(丸底)	黒褐色	黒褐色	14.0±	4.5	-	-	60	少ない(砂)	1	2
SI-014	4	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	14.1±	4.1	-	-	45	少ない(赤・砂)	15	3
SI-014	5	土師器	壺	明赤褐色	橙色	12.3	12.2+	-	13.4	95	少ない	28	4
SI-014	6	土師器	甕	暗褐色	暗赤褐色	12.6	9.0+	-	-	30	少ない(砂・赤)	31	6
SI-014	7	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	16.2±	12.8+	-	15.8±	30	少ない(砂)	34	7
SI-014	8	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	14.6	15.8+	-	19.2	70	少ない(砂)	4	5
SI-014	9	土師器	甑	黄橙色	黄橙色	20.5	22.1	6.5	19.8	95	少ない(砂)	20	8
SI-015	1	須恵器	坏	灰色	灰色	14.1	4.7	8.3	-	80	多い(砂・母・白)	12	1
SI-015	2	須恵器	坏	灰色	灰色	-	2.7+	9.6	-	30	多い(砂・母)	6	2
SI-015	3	須恵器	坏	灰色	灰色	-	2.0+	9.0	-	20	多い(砂・母・白)	25	3
SI-015	4	土師器	坏(丸底)	橙色	黄橙色	12.7	3.9	-	-	75	少ない	1	6
SI-015	5	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	13.8	3.8	9.6	-	95	少ない	29	5
SI-015	6	土師器	坏	赤褐色	赤褐色	14.6	3.0	10.6	-	80	少ない(砂・白)	2	4
SI-015	7	土師器	甕	黄橙色	橙色	22.6	32.3	6.0	21.8	70	少ない(砂)	18	7
SI-015	8	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	23.2	9.0+	-	-	10	多い(砂・黒粒)	11	9
SI-015	9	土師器	甑	橙色	橙色	22.4	19.8	8.7	-	70	少ない(砂・白)	13	8
SI-016	1	土師器	坏(ロクロ)	黄褐色	黄褐色	14.0±	4.2+	-	-	30	少ない	4	1
SI-016	2	土師器	坏(ロクロ)	暗黄褐色	暗黄褐色	-	1.8+	5.5±	-	10	少ない(母・赤)	4	2
SI-016	3	土師器	甕	黒褐色	黒褐色	-	8.7+	7.8	-	20	少ない(砂)	2	3
SI-017	8	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	16.7±	4.0	-	-	70	少ない(砂)	137	5
SI-017	9	土師器	手捏	赤褐色	黒褐色	8.0±	3.0	4.8±	-	25	少ない	166	10
SI-017	10	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	13.8±	4.4	6.6	-	35	少ない(砂)	61	7
SI-017	11	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	15.6±	3.7+	-	-	25	少ない	147	6
SI-017	12	須恵器	坏	灰色	灰色	14.5	3.8	6.6	-	70	少ない(砂・白)	26	1
SI-017	13	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	-	1.3+	10.7±	-	10	少ない(白)	162	4
SI-017	14	土師器	甕	黄橙色	暗褐色	-	3.0+	9.6	-	20	少ない(砂・母)	136	9
SI-018	1	土師器	坏(丸底)	赤褐色・黒褐色	赤褐色	15.8	5.2	-	-	40	少ない	19	2
SI-018	2	土師器	坏(丸底)	赤褐色	赤褐色	13.6±	5.5+	-	-	40	多い(砂・白)	1	1
SI-018	3	土師器	小型甕	赤褐色	黒褐色	11.6	12.2	7.3	-	80	少ない(砂・白・黒粒)	3	5
SI-018	4	土師器	小型甕	橙色	橙色	14.6±	10.5+	-	14.8±	40	多い(砂)	25	6
SI-018	5	土師器	椀	赤褐色	赤褐色	13.2±	4.8+	-	14.7±	10	少ない	60	4
SI-018	6	土師器	鉢	赤褐色	赤褐色	15.9±	8.7+	-	15.5+	10	少ない	6	3
SI-018	7	土師器	鉢	暗褐色	暗褐色	22.9	12.8+	-	22.6	60	少ない	13	9
SI-018	8	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	12.9	22.5	7.4	-	85	少ない	4	10
SI-018	9	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	15.9±	23.2±	-	22.6±	40	少ない(砂)	10	8
SI-018	10	土師器	甕	赤褐色	褐色	17.0±	27.0	7.3	24.6±	60	少ない(砂)	23	7
SI-018	11	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	14.2±	21.4±	5.6+	20.4±	25	少ない	50	11
SI-023	5	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	9.9	3.3	3.7	-	98	少ない	70	5
SI-023	6	須恵器	坏蓋	青灰色	灰色	10.9	3.9	-	-	70	少ない(砂)	49	1
SI-023	7	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	12.0±	4.0+	-	-	20	少ない	22	4
SI-023	8	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	11.9	4.6	-	-	80	少ない(砂)	21	6
SI-023	9	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	14.6±	4.6	11.7±	-	10	少ない	77	2
SI-023	10	須恵器	坏	灰色	灰色	13.2±	4.5+	-	-	20	少ない(砂)	6	3
SI-023	11	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	13.7	4.4	5.4	-	70	多い(砂)	73	7
SI-023	12	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	14.0	4.6	5.8	-	80	多い(砂・白)	3	8
SI-023	13	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	10.1	2.4	-	-	80	少ない	69	9
SI-023	14	土師器	高坏(脚部)	黄橙色	黄橙色	-	4.6+	-	-	20	少ない	25	10
SI-023	15	土師器	台付甕(脚部)	橙色	橙色	-	7.0+	-	-	20	多い(砂・白)	1	11
SI-023	16	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	-	3.8+	6.0	-	30	少ない(砂・赤)	18	12
SI-023	17	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	-	12.5+	9.5	-	30	少ない	72	14
SI-023	18	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	19.6	24.9	8.4	19.5	90	少ない(砂)	80	13
SI-024	1	須恵器	甑	灰色	灰色	28.0±	13.7+	-	-	10	多量(母・白・赤)	32	1
SI-024	2	土師器	小型甕	赤褐色	赤褐色	11.7	24.3	5.8	-	85	少ない(白)	51	3
SI-024	3	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	12.8±	13.3+	-	17.8±	30	多い(砂・白)	35	2
SI-024	4	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	18.9±	17.1+	-	20.5±	30	少ない	47	4
SI-025	3	須恵器	坏蓋	青灰色	青灰色	12.1	3.5	-	-	95	少ない(砂)	19	7
SI-025	4	須恵器	坏蓋	青灰色	青灰色	19.2	3.7	-	-	100	多い(砂・母・白)	50	6
SI-025	5	須恵器	坏	暗褐色	暗褐色	12.5	4.1	7.7	-	80	少ない(砂)	21	1
SI-025	6	須恵器	坏	青灰色	青灰色	12.5±	3.7+	7.1±	-	20	少ない(砂)	43	5

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
横方向ナデ，横ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	-	内外面赤彩
横方向ナデ，ヘラケズリ	ナデ	-	-	口縁部赤彩
ナデ，ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	-	内外面赤彩
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	内外面赤彩
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ，ヘラナデ，ミガキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，ミガキ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
横ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	-	内面漆付着
横ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩　外面の一部煤付着
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
縦・横ヘラケズリ	ナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ	ミガキ	-	ヘラケズリ	底部外面焼成後刻書・墨書
ナデ	ヘラナデ	-	-	底部に木葉痕
横ヘラケズリ，ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ，ミガキ	ミガキ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ナデ	
斜位ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
横方向ナデ，横ヘラケズリ	横方向ナデ	-	ヘラケズリ	内外面共に口縁部～体部赤彩
横ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	内外面共に口縁部～体部赤彩
横ヘラケズリ後ナデ	横ヘラケズリ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
ナデ	ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	横ヘラケズリ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ，ヘラナデ	横方向ナデ，横ヘラケズリ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	天井部：ヘラ切り離し	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	天井部：ヘラ切り離し	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	天井部：ヘラ切り離し	-	漏文
回転ナデ	回転ナデ	不明	ヨコナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
横ヘラケズリ，ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ，ナデ	
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ後ナデ	
ヘラケズリ	ヘラナデ，ミガキ	-	-	内面黒色処理の痕跡あり
ヘラケズリ	ヘラケズリ	-	-	
横ヘラケズリ，ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	
ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，ナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	ヘラケズリ	火だすき
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	円筒つまみ
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	円筒つまみ
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-025	7	須恵器	坏	黄橙色	黄橙色	12.2	3.7	7.8	-	60	少ない	3	3
SI-025	8	須恵器	坏	黄橙色	黄橙色	12.6	4.1	7.7	-	100	少ない(砂・赤)	20	2
SI-025	9	須恵器	坏	青灰色	青灰色	-	4.3+	7.5	-	50	多い(砂・白)	10	4
SI-025	10	土師器	台付甕	赤褐色	明赤褐色	10.2	8.6	14.3+	12.4±	40	少ない(砂)	14	8
SI-025	11	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	27.0	17.6+	-	22.5+	25	少ない(砂)	27	10
SI-025	12	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	20.7±	7.0+	-	-	10	少ない(砂)	23	11
SI-025	13	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	-	4.0+	4.7	-	10	多い(砂)	52	13
SI-025	14	土師器	甕	黒褐色	黄橙色	-	4.0+	8.0	-	20	少ない(赤)	7	12
SI-025	15	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	-	6.1+	6.9	-	20	少ない(砂・白)	53	9
SI-026	1	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	15.0±	4.6+	-	-	20	少ない(砂・黒粒)	14	2
SI-026	2	土師器	坏(丸底)	にぶい橙色	にぶい橙色	15.0±	3.6+	-	-	10	少ない(砂)	4	3
SI-027	5	須恵器	坏蓋	青灰色	青灰色	15.1±	3.1	-	-	70	少ない	40	4
SI-027	6	須恵器	坏蓋	青灰色	青灰色	-	2.0+	-	-	25	少ない	123	5
SI-027	7	須恵器	坏蓋	青灰色	青灰色	16.4±	2.3+	-	-	10	少ない	20	6
SI-027	8	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	3.5+	-	-	20	少ない	60	2
SI-027	9	須恵器	高台付坏	灰色	青灰色	14.2±	4.2	9.6±	-	30	少ない(砂)	74	1
SI-027	10	須恵器	高台付坏	青灰色	青灰色	13.4±	4.4	9.2±	-	30	少ない	3	3
SI-027	11	土師器	坏(丸底)	赤褐色	赤褐色	11.5	3.3	-	-	60	少ない(母・赤)	35	7
SI-027	12	土師器	坏	にぶい橙色	にぶい橙色	13.0±	3.6	4.0±	-	20	少ない(母)	72	10
SI-027	13	土師器	坏(丸底)	暗褐色	暗褐色	14.4±	3.5+	-	-	10	少ない	67	8
SI-027	14	土師器	高坏(脚部)	暗褐色	暗褐色	-	3.0+	-	-	5	少ない	98	9
SI-027	15	土師器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	17.8±	28.8	6.7±	15.8±	30	多量(砂・白)	32	12
SI-028	2	土師器	椀(丸底)	赤褐色	赤褐色	12.6	6.6	-	-	100	少ない(白)	1	1
SI-028	3	土師器	小型甕	赤褐色	黒褐色	12.0	10.4	7.1	-	98	少ない	21	4
SI-028	4	土師器	小型甕	黄橙色	黄橙色	12.2	11.8	4.5	12.5	90	少ない(砂)	2	3
SI-028	5	土師器	壺(坩)	赤褐色	にぶい赤褐色	7.4	14.8+	-	14.5	80	少ない(母・白)	5	2
SI-028	6	土師器	甕	橙色	橙色	14.7	27.5	7.0	21.5	90	少ない	9	5
SI-028	7	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	-	14.0+	-	19.6±	20	少ない(砂)	10	7
SI-028	8	土師器	甕	橙色	橙色	15.8±	10.6+	-	16.3±	30	少ない(砂)	9	6
SI-028	9	土師器	甑	赤褐色	黄橙色	20.6	18.0	5.1	-	98	少ない(砂)	8	8
SI-029	1	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	22.0	29.5	6.4	18.7	90	多い(白)	2	1
SI-030	1	土師器	皿(ロクロ)	橙色	橙色	10.9	2.6	5.0	-	75	少ない	32	1
SI-030	2	土師器	椀(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	13.8	5.4	6.3	-	90	少ない	22	2
SI-030	3	土師器	高台付坏	黄橙色	黄橙色	14.3±	6.4	6.2±	-	45	少ない(砂)	33	4
SI-030	4	土師器	椀(ロクロ)	赤褐色	黒褐色	18.4±	6.6+	-	-	50	少ない(砂)	14	3
SI-030	5	須恵器	高台付坏	暗褐色	黒褐色	-	3.2+	7.5	-	20	少ない	43	5
SI-030	6	土師器	小型甕	赤褐色	赤褐色	12.3±	10.7+	-	13.4±	30	多量(砂)	38	8
SI-030	7	土師器	甕	暗褐色	赤褐色	19.5±	6.6+	-	-	20	少ない	39	10
SI-030	8	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	19.5±	5.5+	-	-	10	少ない	3	7
SI-030	9	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	23.0±	11.8+	-	-	10	少ない(砂)	29	9
SI-031	1	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黒褐色	13.1±	3.9	6.7	-	45	少ない(砂)	6	2
SI-031	2	土師器	坏	赤褐色	赤褐色	12.7±	4.1	7.1±	-	30	少ない(赤)	10	1
SI-031	3	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	-	7.0+	8.0	-	30	少ない(砂)	9	3
SI-031	4	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	17.3	19.0+	-	-	70	多い(砂)	4	4
SI-032	2	土師器	高坏(脚部)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	3.3+	-	-	5	少ない(赤)	1	1
SI-032	3	土師器	壺	赤色	赤色	15.6±	3.7+	-	-	5	少ない(砂・赤)	1	4
SI-032	4	土師器	甕	橙色	橙色	15.2	21.4+	5.5	21.0±	40	多い(赤)	1	2
SI-034	1	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	13.6±	4.7+	-	-	30	少ない	18	2
SI-034	2	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	12.6±	4.7+	-	-	10	少ない(砂)	2	3
SI-034	3	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	-	4.0+	6.1	-	10	少ない(白・母)	1	4
SI-035	1	土師器	高坏(坏部)	赤褐色	赤褐色	15.9±	6.5+	-	-	10	少ない	6	3
SI-035	2	土師器	高坏(脚部)	にぶい褐色	にぶい褐色	-	2.3+	12.0	-	20	少ない	3	4
SI-035	3	土師器	壺(坩)	赤褐色	赤褐色	6.5±	8.1	3.4	9.2	50	少ない(白)	8	1
SI-035	4	土師器	壺(坩)	にぶい橙色	明褐色	6.5	8.3	3.3	-	98	少ない(白)	2	2
SI-036	1	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	-	2.4+	7.4	-	30	少ない(赤)	37	3
SI-036	2	土師器	高台付皿	橙色	橙色	13.6±	2.6	7.0	-	60	少ない(砂)	16	4
SI-036	3	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	13.7	3.9	7.2	-	65	少ない(砂)	2	2
SI-036	4	土師器	小型甕	橙色	橙色	13.8±	8.4+	-	13.4±	20	少ない	41	5
SI-036	5	須恵器	甕	明赤褐色	にぶい黄褐色	-	6.9+	-	-	5	少ない(赤)	44	1
SI-038	1	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	灰白色	-	-	-	-	5	多い(砂・赤)	12	1

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	火だすき　底外面焼成前線刻
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ，ミガキ，ヘラナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	脚部:横方向ナデ	-	図上で接合
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ，輪積痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
縦・横ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	-	
横・斜位ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	円筒つまみ
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	宝珠つまみ
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	ヨコナデ	底部焼成前線刻
横ヘラケズリ，ナデ	ミガキ	-	-	
横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ	ミガキ	-	-	内外面黒色処理
縦ヘラケズリ後ナデ	縦ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
縦・横ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，輪積痕	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ後ミガキ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	内外面赤彩
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ミガキ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，ミガキ	回転ナデ，ミガキ	不明	回転ナデ	内面黒色処理
回転ナデ，回転ヘラケズリ	ミガキ	不明	ヨコナデ	内面黒色処理
回転ナデ	回転ナデ，ミガキ	不明	手持ちヘラケズリ	内面黒色処理
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，横ヘラケズリ後ミガキ	口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	ミガキ	不明	手持ちヘラケズリ	内面黒色処理
横ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	
縦・横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	横ヘラケズリ，ヘラナデ	-	-	
縦ヘラケズリ	横ヘラケズリ	-	-	外面赤彩
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	内外面赤彩
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，ヘラナデ，指頭痕	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ，ナデ	ミガキ	-	-	口縁部黒色処理
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦・横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
縦ヘラケズリ，ヨコナデ，ヘラナデ	ナデ，ヘラナデ	-	-	
ヘラナデ	ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	ヘラケズリ	口縁内面～外面赤彩
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	ヨコナデ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
横方向ナデ，タタキ	ナデ，あて具痕	-	-	
ハケ，刺突文	ヘラナデ	-	-	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-038	2	弥生土器	甕	にぶい橙色	明赤褐色	-	-	-	-	5	少ない	29	2
SI-039	1	須恵器	坏	灰色	白灰色	11.8±	4.0+	4.0	-	30	少ない	4	1
SI-039	2	須恵器	高台付坏	灰黄色	灰色	-	3.2+	9.0±	-	20	少ない	52	3
SI-039	3	土師器	坏(丸底)	黄褐色	黒褐色	13.1	3.5	-	-	60	少ない(赤)	64	4
SI-039	4	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	22.9±	6.0+	-	-	10	少ない	30	5
SI-039	5	土師器	小型甕	黒褐色	黄橙色	13.5±	14.8+	8.4±	17.9±	30	少ない	35	6
SI-040	1	灰釉陶器	椀	灰褐色	灰色	15.5	4.3	7.6	-	85	少ない(砂・白)	28	1
SI-040	2	土師器	椀(ロクロ)	黒褐色	黒褐色	16.4±	6.5	8.8±	-	20	少ない	8	3
SI-040	3	須恵器	壺	暗灰黄色	灰色	25.2±	9.1+	-	-	5	少ない(砂・白)	16	2
SI-041	1	須恵器	坏	青灰色	灰色	12.6±	3.4	7.2	-	60	少ない	5	1
SI-041	2	土師器	坏(ロクロ)	黒褐色	黒褐色	11.8±	4.0	17.4	-	40	少ない(白)	8	2
SI-041	9	須恵器	甕(転用硯)	灰黒色	灰黒色	-	17.5+	-	-	5	多い(白)	20	3
SI-042	1	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	16.6±	2.0+	-	-	50	少ない	7	2
SI-042	2	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	14.2±	4.1	10.4±	-	20	少ない	23	1
SI-042	3	土師器	甕	灰黄褐色	灰黄褐色	-	2.3+	8.3±	-	5	少ない	13	3
SI-044	4	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	14.2±	3.3+	-	-	10	少ない(砂・母)	126	6
SI-044	5	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	17.6±	2.4+	-	-	10	少ない(砂)	33	7
SI-044	6	須恵器	坏	青灰色	灰色	12.2±	4.1	7.6±	-	40	少ない	86	1
SI-044	7	須恵器	坏	黄灰色	灰白色	-	3.7+	8.2±	-	30	少ない	106	2
SI-044	8	須恵器	坏	灰色	灰色	-	1.3+	7.4±	-	20	少ない	241	4
SI-044	9	須恵器	坏	灰色	灰色	-	4.0+	9.6±	-	20	多い(母・白)	246	3
SI-044	10	須恵器	坏	黄褐色	黄褐色	11.5±	4.0	8.1±	-	30	少ない	101	11
SI-044	11	土師器	鉢	黄橙色	黄橙色	12.6±	5.7+	-	-	5	少ない(砂)	62	13
SI-044	12	須恵器	甕	橙色	橙色	21.0±	7.9+	-	-	5	少ない	85	9
SI-044	13	須恵器	壺	灰黄色	灰黄色	10.1±	1.8+	-	-	5	少ない	153	8
SI-044	14	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色	19.8±	6.7+	-	-	10	少ない(白・赤)	83	15
SI-044	15	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	19.5±	7.2+	-	-	10	少ない(砂)	3	14
SI-045	1	須恵器	坏蓋	灰黄褐色	灰黄褐色	-	1.4+	-	-	20	少ない	106	2
SI-045	2	須恵器	壺	灰黄褐色	灰黄褐色	10.0±	3.2+	-	-	5	少ない	129	3
SI-045	3	須恵器	甕	灰色	灰色	-	2.9+	-	-	30	少ない	36	1
SI-045	4	土師器	鉢	黄褐色	黄褐色	15.0±	10.2+	-	-	30	多い(砂・母・赤)	140	6
SI-045	5	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	21.5	17.8+	-	19.9±	40	多い(砂・母)	59	4
SI-045	6	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	20.3	23.6+	-	18.7	65	多い(砂・母・白)	58	5
SI-046	1	土師器	皿(カワラケ)	黄橙色	黄橙色	8.8±	1.4	4.8±	-	40	少ない	14	2
SI-046	2	土師器	皿(カワラケ)	黄橙色	黄橙色	10.2±	1.8	6.0±	-	20	少ない	25	3
SI-046	3	土師器	椀(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	15.4±	5.9	6.2	-	25	少ない(砂・赤)	17	1
SI-047	1	須恵器	坏	灰色	灰色	10.6±	1.8+	-	-	10	少ない	2	1
SI-049	2	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	19.8±	5.4+	-	-	25	少ない(砂)	2	6
SI-049	4	須恵器	甕	赤褐色	暗褐色	20.8	25.8	14.5±	24.2	80	少ない	75	2
SI-049	5	須恵器	甕	にぶい褐色	褐色	20.0±	-	7.8+	-	10	少ない	63	4
SI-049	6	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	19.2±	9.3+	-	-	20	多い(砂・母)	67	8
SI-049	7	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	20.0±	9.5+	-	20.6±	20	少ない	29	7
SI-049	8	須恵器	甕	暗褐色	暗褐色	-	14.8+	7.0±	-	20	少ない(砂)	28	3
SI-050B	1	須恵器	坏蓋	青灰色	青灰色	9.0±	3.6+	-	-	20	少ない	049-40	049-1
SI-050B	2	須恵器	坏蓋	青灰色	青灰色	10.5±	3.1+	-	-	10	少ない	26	1
SI-050B	4	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	12.0±	2.2+	-	-	30	少ない	45	4
SI-050B	5	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	13.4±	4.1+	-	-	10	少ない(砂・赤)	18	3
SI-050B	6	土師器	高坏(脚部)	黄橙色	黄橙色	-	2.5+	11.3±	-	5	少ない	49	5
SI-050B	7	土師器	甕	赤褐色	黄橙色	-	4.6+	6.0	-	5	少ない	24	6
SI-050B	3	土師器	坏	黄褐色	黄橙色	10.6±	3.3+	-	-	30	少ない(赤)	049-6	049-5
SI-051A	8	土師器	甕	橙色	橙色	21.9±	30.1+	-	23.2	70	多い(砂・母・白・赤)	2	7
SI-051A	9	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	21.3±	16.4+	-	20.4±	20	少ない	31	8
SI-051B	1	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	13.0±	3.6	6.8	-	30	少ない	117	6
SI-051B	2	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	13.6±	4.7	6.4	-	45	少ない(砂)	56	2
SI-051B	3	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	12.5	4.7	5.6	-	90	少ない(砂)	4	5
SI-051B	4	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.8±	4.4	6.1	-	70	少ない	125	1
SI-051B	6	須恵器	甑	橙色	橙色	-	18.2+	13.5±	-	20	少ない(砂)	34	4
SI-052	2	土師器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	9.5±	3.1+	-	-	30	少ない	185	8
SI-052	3	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	12.1	4.4	-	-	100	少ない	77	1
SI-052	4	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	10.0	3.5	-	-	60	少ない	74	4

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
ナデ後ハケ	ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	図上で接合
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	-	内面黒色処理
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ，ミガキ	不明	ミガキ	内外面黒色処理
口縁部回転ナデ	口縁部回転ナデ	-	-	自然釉
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
タタキ	あて具痕，ナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
斜位ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	体部内面墨書
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
横ヘラケズリ	ナデ	-	-	
口縁部回転ナデ	口縁部回転ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	自然釉
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
口縁部回転ナデ	口縁部回転ナデ	-	-	自然釉
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ，ミガキ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ，斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，指圧痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	-	-	
横ヘラケズリ，横方向ナデ，タタキ	ヘラナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	口縁部つまみ上げ
ヘラケズリ後ナデ	-	-	-	
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	-	
ナデ，ヘラケズリ	ナデ，ヘラケズリ	-	-	
ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ	内外面黒色処理
口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ，ミガキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	常総型
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	武蔵型
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	周縁部ヘラケズリ	
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	静止糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
横ヘラケズリ，横方向ナデ，タタキ	ナデ，ヘラケズリ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	胴部外面焼成前線刻
ヘラケズリ	ミガキ	-	-	内面黒色処理　漆
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	天井部:ヘラ切り離し	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	天井部:ヘラ切り離し	-	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-052	5	須恵器	坏蓋	青灰色	青灰色	9.8±	3.2+	-	-	20	少ない	186	5
SI-052	6	須恵器	坏	灰色	灰色	10.0±	2.2+	-	-	5	少ない	168	3
SI-052	7	須恵器	坏	灰色	灰色	9.2±	2.3+	-	-	5	少ない	186	2
SI-052	8	土師器	坏	黄褐色	黄褐色	13.0±	3.7+	-	-	25	少ない	121	7
SI-052	9	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	20.0±	10.4+	-	-	40	多い(砂)	161	10
SI-053	2	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	12.0±	3.6+	-	-	20	少ない(砂)	17	1
SI-053	3	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	14.6±	3.5+	-	-	10	少ない	63	3
SI-053	4	土師器	坏	暗褐色	暗褐色	15.6±	3.2+	-	-	20	少ない	62	2
SI-054	1	須恵器	坏	灰色	灰色	13.6±	4.7	9.4±	-	10	少ない(母)	156	1
SI-054	2	土師器	甕	褐色	黄褐色	12.9±	4.4+	-	-	10	少ない	24	6
SI-054	3	土師器	小型甕	暗褐色	橙色	11.6±	13.0+	7.6	11.6±	35	多い(砂・赤)	188	5
SI-054	4	須恵器	甑	にぶい赤褐色	橙色	15.2±	6.5+	-	-	5	少ない	135	4
SI-054	5	土師器	甕	茶褐色	茶褐色	19.3±	5.4+	-	-	10	少ない	134	7
SI-054	6	土師器	小型甕	赤褐色	赤褐色	20.0±	7.2+	-	-	20	少ない	29	9
SI-054	7	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	19.6±	17.7+	-	21.0±	40	少ない	28	8
SI-055	12	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	17.0±	3.3	-	-	30	多い(砂・円)	7	7
SI-055	13	須恵器	坏	灰色	灰色	13.6±	3.7	8.6	-	50	多い(砂・円)	29	3
SI-055	14	須恵器	坏	灰色	灰色	13.2	5.2	8.3	-	70	多い(砂・円)	18	2
SI-055	15	須恵器	高台付坏	濃灰色	濃灰色	15.9	5.9	9.6	-	98	少ない	71	1
SI-055	16	須恵器	壺	灰色	灰色	14.4±	3.2+	-	-	5	少ない	150	6
SI-055	17	須恵器	坏	灰白色	浅黄色	15.3±	3.9+	-	-	10	少ない	152	5
SI-055	18	須恵器	坏	灰白色	灰白色	13.9±	3.9+	-	-	10	少ない	17	4
SI-055	19	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	14.5	5.1	7.0	-	70	少ない(砂・赤)	115	9
SI-055	20	土師器	坏	暗褐色	黄橙色	13.1±	2.2+	-	-	30	少ない	65	8
SI-055	21	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	22.0±	6.8+	-	-	10	多い(砂・母・白・赤)	93	10
SI-056	6	土師器	皿	黄橙色	黄橙色	19.3±	2.7+	-	-	20	少ない	43	4
SI-056	7	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黒褐色	11.6±	3.7+	-	-	20	少ない	24	7
SI-056	8	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	15.4±	3.7+	-	-	20	少ない	56	5
SI-056	9	土師器	高坏	黄褐色	褐色	15.5±	10.5	10.2	-	40	少ない	18	8
SI-056	10	土師器	甑	にぶい橙色	にぶい橙色	-	10.0+	8.4±	-	5	少ない	36	10
SI-056	11	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	20.6±	14.1+	-	18.0±	20	多い(砂・赤)	64	9
SI-057	7	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	14.6±	3.4+	-	-	25	少ない	21	4
SI-057	8	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	2.3+	-	-	10	少ない	96	3
SI-057	9	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	14.2±	4.5	10.0	-	35	少ない	28	1
SI-057	10	須恵器	高台付坏	黒灰色	灰色	-	1.5+	9.5±	-	20	少ない	142	2
SI-057	11	土師器	坏(丸底)	黄褐色	黄褐色	12.6±	3.5+	-	-	25	少ない	127	8
SI-057	12	土師器	坏	にぶい明橙色	にぶい明橙色	13.8±	4.8	8.0	-	40	少ない(砂)	48	10
SI-057	13	土師器	坏	赤褐色	赤褐色	15.9	4.0	8.4	-	80	少ない	173	7
SI-057	14	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	13.2±	4.3+	-	-	20	少ない	55	6
SI-057	15	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黒褐色	17.0±	5.6+	-	-	30	少ない	5	9
SI-057	16	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	13.7	9.0+	-	-	35	少ない	73	13
SI-057	17	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	22.0	28.3	6.7	18.2	60	多い(砂・円)	174	12
SI-058	1	須恵器	坏蓋	黄橙色	黄橙色	16.6±	3.6+	-	-	35	少ない(白)	38	3
SI-058	2	須恵器	坏	濃灰褐色	灰褐色	-	1.7+	7.0	-	20	少ない(砂)	35	1
SI-058	3	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	11.6±	3.2+	6.1±	-	15	少ない	64	2
SI-058	4	土師器	台坏甕	黄褐色	黄褐色	-	9.3+	-	13.0±	40	少ない(砂)	56	5
SI-058	5	土師器	台坏甕	赤褐色	赤褐色	11.2	13.9+	-	13.0	80	少ない	22	4
SI-058	6	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	19.7±	6.8+	-	-	10	少ない	54	7
SI-058	7	土師器	甕	にぶい赤褐色	橙色	-	6.5+	4.4±	-	10	少ない	2	8
SI-059	1	須恵器	坏	青灰色	青灰色	10.2±	2.3+	-	-	20	少ない	3	1
SI-059	2	須恵器	坏	青灰色	青灰色	10.6±	2.9+	-	-	20	少ない	12	2
SI-060	1	須恵器	坏	暗褐色	暗褐色	13.5±	3.6+	7.7±	-	25	少ない	40	6
SI-060	2	須恵器	坏	赤褐色	赤褐色	14.7±	3.9+	7.5	-	30	少ない(砂・赤)	129	5
SI-060	3	須恵器	坏	灰白色	灰色	-	1.9+	6.6	-	10	多い(砂・黒粒)	208	8
SI-060	4	土師器	皿(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.0±	2.3	6.0	-	40	少ない	55	14
SI-060	5	土師器	皿(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	13.6±	2.5	7.2±	-	40	少ない	153	12
SI-060	6	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	12.2±	3.8	6.6	-	60	少ない(砂・赤)	204	11
SI-060	7	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	13.4±	4.1	6.4	-	60	少ない(砂・赤)	192	2
SI-060	8	土師器	坏(ロクロ)	褐色	褐色	13.4±	3.1	6.0	-	30	多い(砂・赤・円)	131	4
SI-060	9	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	赤褐色	14.2	4.0	7.9	-	80	少ない(砂・赤)	148	1

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
ヘラケズリ後ナデ	ナデ，ミガキ	-	-	内面放射状暗文
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	-	
ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	武蔵型
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	永田産　火だすき
口縁部回転ナデ	口縁部回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
ヘラケズリ	ナデ，ミガキ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
ヘラケズリ	指ナデ痕，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，剥離	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
ヘラケズリ	ナデ	-	-	内外面赤彩
ヘラケズリ後ナデ	ナデ，ミガキ	-	ヘラケズリ	内面黒色処理　外面・底部不明瞭
ヘラケズリ	ナデ	-	-	内外面不明瞭
縦ヘラケズリ	ナデ，ミガキ　脚部：手持ちヘラケズリ	-	-	内面黒色処理
縦ヘラケズリ	横ヘラケズリ，ナデ，ミガキ	-	ヘラケズリ	底部赤彩
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	外面自然釉　宝珠つまみ
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
ヘラケズリ後ナデ	ナデ，ミガキ	-	ヘラケズリ後ナデ	内外面黒色処理　漆
ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	全面黒色処理　漆
ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	内面黒色処理
ナデ	ナデ	-	-	内外面不明瞭
ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ後ナデ	内面黒色処理
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ後ナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	円筒状つまみ
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
ナデ，横・斜位ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ナデ	
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	中原産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	中原産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	S1-061と同一個体　焼成不良
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-060	10	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	14.8±	5.0	7.0	-	40	少ない(砂・赤)	226	3
SI-060	11	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	13.3±	3.7+	-	-	15	少ない	37	7
SI-060	12	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	-	3.7+	3.2±	-	15	少ない	173	9
SI-060	13	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	14.8±	9.3+	-	15.0±	15	少ない(白)	260	19-1
SI-060	13	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	-	3.9+	6.5±	-	10	少ない(白)	4	19-2
SI-060	14	土師器	小型甕	暗褐色	暗褐色	11.7±	6.5+	-	-	25	少ない	168	17
SI-060	15	土師器	小型甕	黄橙色	黄橙色	14.9±	7.4+	-	-	15	少ない(赤)	141	20
SI-060	16	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色	23.3±	12.4+	-	-	5	多い(白・黒粒)	231	18
SI-060	17	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	21.6±	9.3+	-	-	30	多い(母・赤・白)	182	16
SI-060	18	土師器	甕	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	32.3±	13.4+	-	-	5	少ない(赤・針)	56	10
SI-061	1	土師器	坏(丸底)	赤褐色	黒褐色	10.7±	3.1	9.8	-	60	少ない(砂・白)	2	8
SI-061	2	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	12.4±	5.1	5.6	-	40	少ない	19	1
SI-061	3	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	-	1.4+	6.4	-	10	少ない	28	4
SI-061	4	須恵器	高台付壺	青灰色	灰色	-	4.7+	10.6±	-	20	少ない(砂)	1	6
SI-061	5	須恵器	甕	赤褐色	赤褐色	20.0±	6.0+	-	-	5	少ない	12	3
SI-061	6	須恵器	甕(丸底)	灰色	灰色	-	9.8+	-	-	5	多い(黒粒)	25	7
SI-063	1	土師器	坏(丸底)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	11.4±	3.3+	-	-	10	少ない	1	1
SI-063	2	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	-	5.2+	7.5	-	10	少ない(砂・白)	50	2
SI-064	1	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	20.5±	8.7+	-	-	10	少ない(砂・赤)	1	3
SI-064	2	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	22.8	16.9+	-	23.3±	40	少ない(赤)	1	2
SI-065	3	須恵器	坏	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	13.3	4.5	6.6	-	60	多い(砂・赤)	6	10
SI-065	4	須恵器	坏	赤褐色	赤褐色	13.6±	5.3+	7.0±	-	20	少ない(赤・白)	20	1
SI-065	5	土師器	皿(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	14.4±	2.3	6.8±	-	20	少ない(赤)	68	6
SI-065	6	土師器	高台付坏	黄橙色	黄橙色	-	2.1+	7.6	-	40	少ない(赤)	47	5
SI-065	7	須恵器	甑	灰色	灰色	29.2±	8.0+	-	-	10	少ない(白)	97	3
SI-065	8	須恵器	甕	灰色	灰色	23.4±	12.0+	-	20.0±	20	少ない	16	2
SI-065	9	須恵器	甑	赤褐色	赤褐色	39.6±	8.0+	-	-	10	少ない	5	4
SI-065	10	土師器	甕	橙色	橙色	22.6±	5.5+	-	-	5	少ない	63	8
SI-065	11	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	-	7.6+	4.4	-	20	少ない(砂)	28	7
SI-065	12	須恵器	甑	黒褐色	黒褐色	-	8.0+	15.0±	-	5	少ない	11	9
SI-066	13	須恵器	坏	暗褐色	黄橙色	13.0±	4.2	6.3	-	90	少ない	110	7
SI-066	14	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	14.2	4.5	5.2±	-	50	少ない	34	8
SI-066	15	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	12.5	3.6	6.2	-	70	少ない(赤・白)	106	10
SI-066	16	土師器	坏	赤褐色	赤褐色	16.2±	4.5	8.0±	-	35	少ない(砂・白・黒粒)	6	11
SI-066	17	土師器	椀(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	17.3	6.4	7.0	-	70	少ない	6	9
SI-066	18	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	-	1.8+	8.2	-	40	少ない	43	13
SI-066	19	須恵器	坏	赤褐色	赤褐色	-	1.5+	7.2	-	20	少ない	25	12
SI-066	20	土師器	甕	黄橙色	赤褐色	12.2	13.2	7.9	13.9	98	少ない(砂)	111	14
SI-066	21	土師器	甕	赤褐色	暗褐色	15.2±	3.3+	-	-	5	少ない	104	17
SI-066	22	須恵器	甕	赤褐色	赤褐色	21.0	11.4+	-	20.2±	25	少ない	11	4
SI-066	23	須恵器	甕	暗褐色	暗褐色	23.4	27.5+	14.8±	25.6	40	少ない	79	3
SI-066	24	須恵器	甑(底部)	黄橙色	黄橙色	-	-	-	-	5	少ない(白)	106	6
SI-066	25	須恵器	甕	赤褐色	赤褐色	23.2±	24.5	10.9	23.8±	50	少ない	122	15
SI-066	26	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	20.5	25.0	4.3	20.2	70	少ない(砂)	1	16
SI-067	1	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	12.2±	3.3	-	-	5	少ない(母)	11	2
SI-068	2	弥生土器	甕	黄橙色	黄橙色	17.2	14.9+	-	14.6	70	少ない(白)	1	2
SI-068	3	弥生土器	甕	暗褐色	赤褐色	22.0±	14.3+	-	21.2±	30	少ない(白)	4	3
SI-068	4	弥生土器	甕	明黄褐色	明黄褐色	-	3.5+	7.6+	-	5	少ない(白)	2	6
SI-069	2	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	21.6±	9.2+	-	-	10	少ない(砂)	22	1
SI-070	4	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	15.8±	1.4+	-	-	5	少ない	17	1
SI-070	5	須恵器	坏蓋	灰黄褐色	灰黄褐色	17.6±	1.4	-	-	10	少ない	39	13
SI-070	6	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	16.0±	2.6+	-	-	20	少ない	81	12
SI-070	7	須恵器	坏蓋	橙色	橙色	15.4±	2.2+	-	-	20	多い(母・白・雲母)	39	11
SI-070	8	土師器	坏(丸底)	にぶい橙色	にぶい橙色	14.4±	3.4+	-	-	10	少ない	10	2
SI-070	9	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	14.8±	3.8+	-	-	20	少ない	30	4
SI-070	10	土師器	坏(丸底)	明赤褐色	明赤褐色	13.5±	3.6+	-	-	20	少ない	36	10
SI-070	11	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	14.8±	4.0+	-	-	15	少ない(砂)	20	3
SI-070	12	土師器	坏	にぶい橙色	褐色	13.6±	3.4	10.5±	-	20	少ない(赤)	54	8
SI-070	13	土師器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	14.6±	3.1	10.2±	-	20	少ない	97	9
SI-070	14	土師器	甑	橙色	明褐色	23.7±	24.1±	7.9	-	50	少ない	39	5

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	-	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ後ナデ	内面黒色処理
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
ナデ，横ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ナデ	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
ヨコナデ，タタキ	ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	内面自然釉
ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ	-	-	内外面黒色処理　漆
ナデ，横ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	ミガキ，ヨコナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	方台形突起あり
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
斜位ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ	-	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	内外面漆付着　漆容器
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	内外面漆付着　漆容器
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	底部内面焼成前線刻
ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ	-	簾状圧痕	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	無調整	
ヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	SI-065と接合
ヨコナデ，タタキ	ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，横ヘラケズリ，タタキ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	SI-065と接合
-	-	-	手持ちヘラケズリ	底部焼成前線刻
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，横ヘラケズリ，タタキ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	雑なヘラケズリ	SI-065と接合
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
ヘラケズリ	ミガキ	-	-	
口縁部刻み，ハケ	口縁部刻み，ヘラナデ	-	-	
口縁部刻み，ハケ	口縁部刻み，ヘラナデ	-	-	
ハケ	ナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	自然釉
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
ヘラケズリ，ミガキ	ミガキ	-	-	内面黒色処理 漆
ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ	-	-	
ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ	-	-	
横ヘラケズリ	ミガキ	-	-	内外面摩滅
ヨコナデ，手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	-	手持ちヘラケズリ	内外面黒色処理
ヨコナデ	ヨコナデ	-	手持ちヘラケズリ	内面ラセン状暗文
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ミガキ	-	-	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-070	15	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい橙色	22.2	24.5+	-	-	70	少ない	39	7
SI-071	1	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	11.0	3.7	5.4	-	70	少ない(赤)	8	1
SI-071	2	土師器	高台付坏	赤褐色	赤褐色	14.0±	5.0+	-	-	15	少ない	4	2
SI-071	-	弥生土器	甕	暗褐色	暗褐色	19.8±	8.6+	-	-	10	少ない	3	3
SI-072	1	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	1.8+	-	-	10	少ない	14	4
SI-072	2	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	15.9±	2.1+	-	-	5	少ない	15	3
SI-072	3	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	12.8±	4.2	6.6±	-	25	少ない	20	2
SI-072	4	須恵器	甕	青灰色	青灰色	28.8±	5.5+	-	-	5	少ない	43	5
SI-072	5	須恵器	甑	赤褐色	にぶい赤褐色	-	5.5+	7.0±	-	5	多い(砂)	8	7
SI-072	6	緑釉陶器	椀	灰オリーブ色	灰オリーブ色	-	2.4+	6.6+	-	5	少ない	3	8
SI-073	1	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.1	3.6	5.5	-	98	少ない(赤)	21	1
SI-073	2	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	12.5±	3.4	5.9±	-	40	少ない(赤)	1	3
SI-073	3	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.5±	3.9	5.6±	-	40	少ない	3	2
SI-073	4	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	10.0±	5.6+	-	-	10	少ない	1	5
SI-073	5	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	13.8±	6.8+	-	-	15	少ない(赤)	10	4
SI-075	1	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	12.6	4.0	6.8	-	98	少ない(砂)	9	1
SI-075	2	土師器	坏(ロクロ)	黒褐色	黒褐色	15.3±	5.0	7.5	-	60	少ない(砂・白)	19	6
SI-075	3	土師器	皿(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	15.7	2.1	6.3	-	98	少ない(赤)	10	7
SI-075	4	須恵器	甕	青灰色	黄橙色	20.4±	5.0+	-	-	10	少ない	2	5
SI-075	5	須恵器	甕	赤褐色	暗褐色	22.2±	9.0+	-	-	5	少ない	17	4
SI-075	6	須恵器	甕	灰色	灰色	26.4±	13.7+	-	24.0±	20	少ない	11	3
SI-075	7	須恵器	甕	灰色	黄橙色	-	13.0+	25.8	-	20	少ない	7	2
SI-077	1	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	13.2±	3.8	6.4	-	50	少ない(赤)	4	3
SI-077	2	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	13.4±	4.4	5.6±	-	30	多い(赤)	3	2
SI-077	3	須恵器	甕	暗赤褐色	にぶい赤褐色	28.4±	5.5+	-	-	5	少ない	2	1
SI-077	4	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	21.0±	6.1+	-	-	10	少ない	1	4
SI-078	1	土師器	台付甕	暗褐色	暗褐色	-	13.1+	14.7	-	40	少ない(赤・白)	26	1
SI-079	8	須恵器	短頸壺(蓋)	灰色	灰色	13.6±	3.1	9.8±	-	10	少ない	5	3
SI-079	9	須恵器	短頸壺(蓋)	灰色	灰色	12.2±	2.5+	-	-	10	少ない	15	4
SI-079	10	須恵器	坏	灰色	灰色	13.0±	4.2	7.1±	-	70	多い(砂・母・白)	4	1
SI-079	11	須恵器	坏	灰色	灰色	12.4±	3.9+	-	-	30	少ない	272	2
SI-079	12	須恵器	坏	灰黄色	灰黄色	-	2.5+	4.5±	-	5	少ない(針)	79	7
SI-079	13	須恵器	坏	灰色	灰色	-	1.3+	8.2±	-	10	少ない	123	6
SI-079	14	須恵器	坏	灰色	灰色	-	0.9+	8.0±	-	10	少ない(砂)	430	5
SI-079	15	土師器	坏	橙色	橙色	14.4±	3.3+	-	-	25	少ない	394	11
SI-079	16	土師器	小型甕	赤褐色	褐色	12.3±	3.5+	-	-	5	少ない(赤)	465	15
SI-079	17	土師器	甕	暗褐色	黒褐色	15.6±	14.1+	-	15.9±	30	少ない(砂・白)	84	16
SI-079	18	土師器	甕	橙色	橙色	13.0±	12.8+	-	-	30	少ない(赤)	16	12
SI-079	19	須恵器	フラスコ瓶	灰色	灰色	-	19.1+	-	-	90	少ない	555	8
SI-079	20	須恵器	甕	灰色	灰色	-	7.9+	-	-	5	少ない(白)	91	9
SI-079	21	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	21.6±	10.0+	-	-	20	少ない	48	14
SI-079	22	土師器	甕	橙色	橙色	19.6±	8.3+	-	-	20	少ない(砂・赤・白)	100	17
SI-079	23	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	19.9±	5.8+	-	-	10	少ない	340	13
SI-080	1	須恵器	坏蓋(転用硯)	灰色	灰色	16.1±	1.9+	-	-	40	少ない(砂)	138	3
SI-080	2	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	15.0±	4.1	11.8±	-	30	少ない	43	1
SI-080	3	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黒褐色	12.2±	3.5+	4.6±	-	30	少ない	106	5
SI-080	4	土師器	高坏(脚部)	暗褐色	暗褐色	-	5.9+	-	-	30	少ない	150	7
SI-081	5	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	3.2+	-	-	25	少ない	102	7
SI-081	6	須恵器	坏	灰色	灰色	13.7±	4.1	7.3	-	25	少ない(砂・白)	771	3
SI-081	7	須恵器	坏	灰色	灰色	15.0±	4.0	8.3±	-	40	少ない(母)	227	2
SI-081	8	須恵器	坏	灰色	灰色	14.1±	4.0	8.2±	-	30	少ない(白)	769	1
SI-081	9	須恵器	高台付坏	青灰色	青灰色	-	2.8+	7.6±	-	25	少ない	780	5
SI-081	10	須恵器	高台付盤	黄橙色	黄橙色	-	1.8+	12.0±	-	20	少ない(砂・母・白)	1284	6
SI-081	11	土師器	坏(丸底)	赤褐色	赤褐色	15.2±	3.2+	-	-	30	少ない	786	15
SI-081	12	土師器	坏(丸底)	黄橙色	暗褐色	14.3	3.2+	-	-	50	少ない	255	16
SI-081	13	土師器	坏	赤褐色	赤褐色	14.8±	2.8+	-	-	25	少ない	26	13
SI-081	14	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	13.1±	3.9	8.5	-	60	少ない	134	9
SI-081	15	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	15.5±	5.2	10.4	-	80	少ない	1390	8
SI-081	16	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	14.2±	4.5	9.6±	-	25	少ない	950	10
SI-081	17	須恵器	坏	暗褐色	暗褐色	15.1±	3.5+	-	-	30	少ない	1385	17

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，横ヘラケズリ	回転ナデ，ミガキ	不明	不明	
ヘラナデ，結節縄文，撚糸文	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	宝珠つまみ
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
ヘラケズリ，タタキ	ヘラナデ，あて具痕	不明	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ナデ	緑釉陶器　尾北産のK90窯式
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ，ミガキ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	内外面黒色処理
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部回転ナデ	口縁部回転ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
横ヘラケズリ，横方向ナデ，タタキ	ヘラナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦・横ヘラケズリ	ナデ	脚部：手持ちヘラケズリ	ナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	永田産
回転ナデ	回転ナデ	-	-	火だすき　永田産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	火だすき
回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	火だすき
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	永田産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	火だすき　永田産
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ後ナデ	内面油煙付着
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，手持ちヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	回転ヘラケズリ	外面自然釉
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ，指頭痕	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	宝珠つまみ
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
ヘラケズリ	ミガキ	-	-	内面黒色処理
縦ヘラケズリ	横ヘラケズリ，工具痕	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	回転ナデ	宝珠つまみ
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	内面自然釉
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ	火だすき　内外面赤彩
ヘラケズリ，後ミガキ	ミガキ	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ	ナデ	-	-	内面黒色処理　漆
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	静止糸切り離し	手持ちヘラケズリ	内外面赤彩
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	静止糸切り離し	手持ちヘラケズリ	内外面赤彩
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	内外面赤彩
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-081	18	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	黒褐色	14.6±	5.0+	-	-	20	少ない	1604	14
SI-081	19	土師器	鉢	暗褐色	赤褐色	14.2±	6.1	8.0	-	50	少ない	160	12
SI-081	20	土師器	高台付坏	黄橙色	黄橙色	12.6±	5.0+	-	-	25	少ない(砂)	849	11
SI-081	21	土師器	小型甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	11.2±	4.0+	-	-	10	少ない	1294	27
SI-081	22	土師器	小型甕	暗褐色	暗褐色	11.2±	5.0+	-	-	20	少ない(赤)	122	26
SI-081	23	土師器	小型甕	暗褐色	赤褐色	11.8±	3.9+	-	-	10	少ない	901	25
SI-081	24	土師器	小型甕	赤褐色	暗褐色	16.0	7.6+	-	-	25	少ない	157	19
SI-081	25	土師器	鉢	暗褐色	赤褐色	-	4.8+	6.6	-	70	少ない(白)	1736	28
SI-081	26	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	16.6±	18.4	8.6	-	50	少ない	146	23
SI-081	27	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	21.0±	13.8+	-	20.6±	5	少ない(白)	140	20
SI-081	28	土師器	甕	明赤褐色	にぶい赤褐色	22.4+	上:13.6+ 下:12.3+	-	-	20	少ない	223	24
SI-081	29	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	21.8±	9.7+	-	-	20	少ない	94	22
SI-081	30	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	23.7±	14.5+	-	22.0±	25	少ない	138	21
SI-082	1	土師器	坏(ロクロ)	灰褐色	灰褐色	12.6±	3.4	5.2	-	30	少ない	224	20
SI-082	2	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	11.9	4.5	4.4	-	80	少ない	320	4
SI-082	3	土師器	坏(ロクロ)	灰褐色	黒褐色	12.4±	4.6	5.4+	-	45	少ない	93	19
SI-082	4	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	13.1	4.3	5.8	-	100	少ない(赤)	350	1
SI-082	5	土師器	坏(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい橙色	12.7	4.1	6.0	-	100	少ない(赤)	386	2
SI-082	6	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	13.8±	4.5	6.0	-	40	少ない	7	6
SI-082	7	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	13.2±	4.3	5.2±	-	25	少ない(赤)	393	9
SI-082	8	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.5±	5.3	6.0	-	50	少ない(砂)	392	3
SI-082	9	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	15.1±	3.7+	-	-	20	少ない	387	8
SI-082	10	土師器	坏(ロクロ)	暗褐色	暗褐色	-	3.9+	4.7	-	40	少ない(赤)	74	7
SI-082	11	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	赤褐色	12.5±	4.6	5.8	-	50	少ない	388	5
SI-082	12	土師器	甕	暗褐色	黒褐色	-	1.2+	-	-	5	少ない	140	14
SI-082	13	土師器	坏	暗褐色	黒色	-	1.4+	8.6±	-	20	少ない	58	10
SI-082	14	須恵器	甕	暗褐色	暗褐色	20.1±	18.9	10.5	-	50	少ない	209	11
SI-082	15	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	20.2±	11.3+	-	-	10	少ない	406	12
SI-082	16	土師器	甕	赤褐色	暗褐色	-	5.9+	6.0	-	10	多い(砂・白)	97	13
SI-083	1	弥生土器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	-	-	-	5	少ない	10	2
SI-083	2	弥生土器	壺	にぶい褐色	灰黄褐色	-	-	-	-	5	少ない(白)	35	1
SI-083	3	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	43	3
SI-084	4	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	2.4+	-	-	20	少ない	418	10
SI-084	5	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	15.6±	3.1+	-	-	25	少ない	456	9
SI-084	6	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	17.5±	2.3+	-	-	10	少ない	1229	11
SI-084	7	須恵器	坏	灰色	灰色	13.3±	3.5	8.0	-	40	多い(母・白)	342	3
SI-084	8	須恵器	坏	灰色	灰色	13.2	3.6	7.6	-	90	少ない(砂・母・白)	1251	1
SI-084	9	須恵器	坏	暗褐色	暗褐色	13.8±	3.9	7.9	-	50	少ない	661	2
SI-084	10	須恵器	坏	灰色	灰色	13.8±	4.2	8.6±	-	20	少ない(母・白)	271	4
SI-084	11	須恵器	坏	灰色	灰色	-	2.2+	8.3	-	40	少ない(母)	1252	5
SI-084	12	須恵器	坏	灰色	灰色	-	1.6+	7.9±	-	25	多い(母・砂)	717	7
SI-084	13	須恵器	坏	灰色	灰色	-	2.8+	7.4±	-	25	多い(母)	80	6
SI-084	14	須恵器	坏	灰色	灰色	-	2.2+	9.5±	-	25	少ない(母)	984	8
SI-084	15	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	14.0±	3.2	7.6±	-	30	少ない	339	12
SI-084	16	土師器	坏(丸底)	にぶい橙色	にぶい橙色	13.8±	2.65+	-	-	10	少ない	281	13
SI-084	17	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	14.6±	3.3+	-	-	10	少ない	273	14
SI-084	18	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	25.2±	6.6+	-	-	20	少ない	119	33
SI-084	19	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい褐色	23.5±	8.2+	-	-	15	少ない(赤)	314	22
SI-084	20	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	24.2	19.7+	-	21.6±	50	少ない	89	18
SI-084	21	土師器	甕	赤褐色	暗褐色	22.8±	20.5+	-	22.0±	40	少ない(砂・母・砂)	305	21
SI-084	22	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	23.8±	20.4+	-	22.8±	20	少ない	716	20
SI-084	23	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	22.1	24.7+	-	20.8±	50	少ない	101	19
SI-084	24	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	-	23.4+	8.7	-	40	多い(砂・母・白)	292	17
SI-085	1	須恵器	坏蓋	黄橙色	黄橙色	19.4±	2.1+	-	-	20	少ない	535	8
SI-085	2	須恵器	坏	暗褐色	暗褐色	13.0±	4.3	7.1±	-	50	少ない	107	3
SI-085	3	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	13.2±	4.0	7.5	-	60	少ない	63	2
SI-085	4	須恵器	坏	暗褐色	暗褐色	12.4	3.5	6.6	-	90	少ない(赤)	1170	1
SI-085	5	須恵器	坏	明赤褐色	赤褐色	12.9±	3.9	7.0±	-	25	少ない(赤)	1171	6
SI-085	6	須恵器	坏	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	12.3±	4.5	7.0±	-	25	少ない	759	5
SI-085	7	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	15.4±	3.9	8.7±	-	25	少ない	54	4

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ	ミガキ	不明	不明	内面黒色処理
横ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	内外面黒色処理　漆　漆容器
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
斜位ヘラケズリ，ナデ	ナデ	-	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，ナデ	-	-	常総型
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	内外面金属付着
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	内面黒色処理　漆
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
-	-	-	ヘラケズリ	底部内面焼成前線刻
ヘラケズリ	ミガキ	-	ヘラケズリ	底部外面墨書　内面黒色処理
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
横・斜位ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
ハケ，刺突文	ハケ	-	-	
ハケ	ハケ	-	-	
沈線文，刺突文	-	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	宝珠つまみ
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	茨城県産
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	茨城県産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	市原産
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	茨城県産
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	茨城県産　底部外面焼成後線刻
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	茨城県産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	茨城県産
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	茨城県産
横・斜位ヘラケズリ	ミガキ	-	ヘラケズリ	内外面黒色処理
横ヘラケズリ	ミガキ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
横・斜位ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ，輪積痕	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
横ヘラケズリ，後ナデ，ミガキ	ヘラナデ	-	-	木葉痕　常総型
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	中原産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	中原産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	宇津志野産

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-085	8	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黒褐色	15.8±	5.1	8.5	-	60	少ない(砂)	413	11
SI-085	9	土師器	椀(ロクロ)	橙色	橙色	16.2±	6.5	6.9±	-	20	少ない	2069	25
SI-085	10	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	-	2.1+	7.6±	-	15	少ない	53	7
SI-085	11	土師器	小型甕	暗褐色	暗褐色	12.6±	12.5	5.9	-	60	少ない(砂)	710	14
SI-085	12	須恵器	甕	灰色	青灰色	33.6±	22.8+	-	30.1±	10	少ない	601	9
SI-085	13	須恵器	甑	黄橙色	黄橙色	32.6±	12.5+	-	-	10	少ない	869	10
SI-085	14	土師器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	21.2	16.2+	-	23.1±	40	少ない(砂・白)	114	12
SI-085	15	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	20.4	19.5+	-	22.8	30	多い(砂)	42	13
SI-085	16	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	-	19.0+	4.2	-	20	少ない	756	17
SI-085	17	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	-	17.4+	4.4±	-	20	少ない	569	16
SI-086	4	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	15.6±	4.4	-	-	40	少ない	11	13
SI-086	5	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	2.5+	-	-	30	少ない	739	14
SI-086	6	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	3.2+	-	-	40	少ない	256	15
SI-086	7	須恵器	坏蓋	青灰色	青灰色	11.5±	3.5+	-	-	30	少ない(砂)	422	5
SI-086	8	須恵器	坏	灰色	灰色	13.8±	4.9+	-	-	30	少ない	86	4
SI-086	9	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	14.6	3.8	9.2	-	80	少ない	1027	1
SI-086	10	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	14.6±	4.2	10.2	-	45	少ない	1750	3
SI-086	11	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	13.3±	3.8	9.8±	-	20	少ない	2011	9
SI-086	12	須恵器	高台付坏	灰黄色	灰黄色	14.0±	4.1+	9.2±	-	20	少ない	2054	7
SI-086	13	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	15.6±	3.9	12.0±	-	15	少ない	382	8
SI-086	14	須恵器	高台付坏	灰色	灰白色	14.0±	4.1+	10.4±	-	20	少ない	2281	6
SI-086	15	須恵器	坏	灰色	灰色	11.5	4.1	4.7	-	70	少ない	615	2
SI-086	16	須恵器	坏	灰褐色	褐色	16.8±	3.9+	9.1±	-	15	多い(母・白)	455	10
SI-086	17	土師器	坏(丸底)	茶褐色	茶褐色	12.0±	4.8+	-	-	25	少ない(赤)	749	20
SI-086	18	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	13.0	4.5	-	-	80	少ない	494	18
SI-086	19	土師器	坏(丸底)	暗褐色	暗褐色	12.0±	3.6+	-	-	40	少ない	1262	19
SI-086	20	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	14.1±	4.0+	-	-	25	少ない	1144	21
SI-086	21	土師器	台付甕(脚部)	黄橙色	黄橙色	-	4.2±	9.2±	-	30	少ない	431	23
SI-086	22	須恵器	高台付坏	青灰色	青灰色	-	1.0+	9.2±	-	20	少ない	68	11
SI-086	23	須恵器	長頸壺	灰色	灰色 (自然釉)	9.4±	4.3+	-	-	5	少ない	706	16
SI-086	24	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	25.8±	10.0+	-	-	10	多い(砂・赤・白)	1329	24
SI-087	1	須恵器	坏	黄橙色	黄橙色	13.5±	3.6	6.1	-	40	少ない(赤)	97	22
SI-087	2	須恵器	坏	暗褐色	暗褐色	12.6±	3.6+	7.4±	-	50	少ない(赤)	167	5
SI-087	3	須恵器	坏	赤褐色	暗褐色	12.3±	4.1	6.8±	-	40	少ない(赤)	45	21
SI-087	4	須恵器	坏	暗褐色	暗褐色	-	2.3+	6.9	-	30	多い(赤)	500	29
SI-087	5	須恵器	坏	明褐灰色	明褐灰色	13.2±	4.0	6.0	-	50	少ない(白)	128	4
SI-087	6	須恵器	坏	黄橙色	黄橙色	12.2±	4.0	6.0	-	40	少ない(赤)	1797	25
SI-087	7	須恵器	坏	にぶい褐色	にぶい褐色	14.0	4.0	6.7	-	90	多い(赤)	1483	1
SI-087	8	須恵器	坏	にぶい褐色	にぶい褐色	14.2	3.9	7.2	-	80	少ない(赤)	957	2
SI-087	9	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	13.7±	3.9	5.8	-	50	少ない	1147	3
SI-087	10	須恵器	坏	赤褐色	赤褐色	14.0±	4.5	7.4	-	50	少ない(赤)	123	6
SI-087	11	須恵器	坏	赤褐色	赤褐色	13.9±	4.6	6.7±	-	25	少ない	744	7
SI-087	12	土師器	高台付皿	黄橙色	黄橙色	13.5±	2.6	6.4	-	50	少ない	190	32
SI-087	13	土師器	高台付皿	赤褐色	赤褐色	12.7±	3.4	6.4	-	90	少ない	1850	30
SI-087	14	土師器	高台付皿	黄橙色	黄橙色	14.0±	2.7+	-	-	60	少ない	446	31
SI-087	15	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	13.1	3.4	6.9	-	80	少ない	101	23
SI-087	16	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	12.5±	3.8	7.2±	-	45	少ない(砂・赤)	202	24
SI-087	17	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	13.6±	4.3	6.6	-	40	少ない(赤)	16	26
SI-087	18	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.8±	4.1	7.0	-	40	少ない	141	27
SI-087	19	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	12.6±	4.2	6.6	-	40	少ない	1061	28
SI-087	20	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	暗褐色	14.4	4.1	7.2	-	70	少ない	199	20
SI-087	21	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.6	4.1	6.5	-	80	多い(赤・黒粒)	750	16
SI-087	22	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.5±	4.2	6.3±	-	50	少ない	272	17
SI-087	23	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.6	3.9	6.4	-	80	少ない(赤・黒粒)	748	18
SI-087	24	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	-	1.5+	6.2	-	30	少ない	484	19
SI-087	25	須恵器	甕	茶褐色	青灰色	-	0.8+	7.7±	-	5	少ない(砂)	898	8
SI-087	26	土師器	小型甕	暗褐色	暗褐色	13.7	8.5+	-	13.4±	30	少ない	24	33
SI-087	27	土師器	甕	黄橙色	暗褐色	18.2±	2.8+	-	-	5	少ない	69	36
SI-087	28	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	22.5±	6.1+	-	-	5	少ない	596	34
SI-087	29	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	21.3±	9.3+	-	-	10	少ない	732	35

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	ミガキ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	内面黒色処理
回転ナデ	回転ナデ，ミガキ	不明	手持ちヘラケズリ	底部内面焼成前線刻　黒色処理
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ナデ，ヨコナデ	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，ヘラケズリ，あて具痕，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，あて具痕，ナデ	-	-	つまみ
口縁部ヨコナデ，ハケ状工具のナデ，横・縦・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦・斜位ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ，ナデ	-	ヘラケズリ	
縦ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	東海産　宝珠つまみ
回転ナデ	回転ナデ	-	-	東海産　宝珠つまみ
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	宝珠つまみ
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	東海産　自然釉
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	東海産
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ナデ，ヨコナデ	東海産
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	東海産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	静止糸切り離し	手持ちヘラケズリ	東海産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	市原産
横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ，ナデ	-	ヘラケズリ	内外面黒色処理
横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	手持ちヘラケズリ後ナデ	
横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ後ナデ	内面黒色処理
ヘラケズリ，ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ後ナデ	赤彩
脚部:縦ヘラケズリ後ナデ	横ヘラケズリ後ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
口縁部回転ナデ	口縁部回転ナデ	-	-	自然釉
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	中原産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	中原産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	中原産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	中原産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ	回転ナデ，ミガキ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ナデ，ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，回転ナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ，ヘラ痕	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	ミガキ	不明	回転ヘラケズリ	底部外面焼成前線刻　内面黒色処理
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	体部・底部外面墨書
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	体部・底部外面墨書
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	底部外面墨書
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	底部外面墨書
-	-	-	手持ちヘラケズリ	底面焼成前線刻
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-087	30	須恵器	甕	暗褐色	黒褐色	-	8.8+	8.8±	14.8±	10	少ない	436	11
SI-087	31	須恵器	甕	橙色	橙色	-	23.8	-	24.3+	10	少ない(白)	984	9
SI-087	32	須恵器	甕	赤褐色	赤褐色	-	10.6±	15.8±	-	20	少ない(赤)	778	10
SI-087	33	須恵器	甕	暗褐色	灰色	-	6.4+	15.6±	-	5	少ない	1853	12
SI-087	34	須恵器	甑	赤褐色	暗褐色	31.4±	9.0+	-	-	5	少ない	67	14
SI-087	35	須恵器	甑	黒褐色	黒褐色	-	9.6+	12.8±	-	5	少ない	523	15
SI-087	36	須恵器	甕	赤褐色	赤褐色	-	3.0+	13.6±	-	5	少ない(赤)	763	13
SI-087	54	緑釉陶器	皿	にぶい黄色	にぶい黄色	19.3±	4.5+	8.0±	-	10	少ない	668	39
SI-088	15	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	2.1+	16.5±	-	25	少ない	105	1
SI-088	16	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	-	9.0+	10.8±	-	10	少ない	711	2
SI-088	17	土師器	坏(丸底)	にぶい橙色	にぶい橙色	17.3±	3.8+	-	-	15	少ない(赤)	93	5
SI-088	18	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	19.7±	6.4+	-	-	10	多い(赤)	289	9
SI-088	19	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	29.0±	6.4+	-	-	10	少ない	344	10
SI-088	20	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい橙色	-	21.0+	-	20.5±	40	多い(砂・赤)	103	8
SI-088	21	土師器	高台付椀	黄橙色	暗褐色	12.7±	4.9	5.7	-	60	少ない(赤)	66	3
SI-088	22	土師器	椀(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	13.1±	3.8+	-	-	20	少ない	372	4
SI-089	1	土師器	坏(ロクロ)	橙色	暗褐色	12.9±	4.4	5.0	-	60	少ない(赤)	76	1
SI-089	2	須恵器	坏	赤褐色	赤褐色	12.5±	3.8+	5.3±	-	30	少ない	95	2
SI-089	3	土師器	小型甕	赤褐色	赤褐色	13.2±	5.5+	-	-	10	少ない	138	5
SI-089	4	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	18.9±	10.6+	-	-	10	少ない(赤)	142	3
SI-089	5	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	21.6±	10.0+	-	-	10	少ない(赤)	148	4
SI-090	1	須恵器	坏蓋	灰黄色	灰黄色	10.7±	2.3+	-	-	5	少ない	33	1
SI-090	2	土師器	鉢	明褐色	明褐色	12.6±	3.8+	-	-	5	少ない(白)	28	2
SI-091	1	須恵器	坏蓋	明灰褐色	明灰褐色	11.7±	2.2+	-	-	5	少ない	2008	1
SI-091	2	須恵器	坏蓋	灰オリーブ色	にぶい黄橙色	14.4±	2.0+	-	-	5	少ない	2103	2
SI-092	1	土師器	坏	にぶい橙色	黄褐色	13.9±	4.8+	-	-	10	少ない	108	1
SI-092	2	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色	16.4±	8.6+	-	-	5	少ない	109	3
SI-092	3	土師器	高台付椀	にぶい黄褐色	黄褐色	-	1.1+	8.8±	-	5	少ない	123	2
SI-092	4	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色		1.0+	11.0±	-	15	少ない	108	4
SI-093	1	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	-	2.6+	5.7±	-	25	少ない	79	1
SI-093	2	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	20.2±	8.2+	-	-	10	少ない(赤)	51	3
SI-094	1	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.8	4.1	6.8	-	70	少ない	20	2
SI-094	2	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	19.7±	3.1+	-	-	10	少ない	94	5
SI-094	3	土師器	甑	赤褐色	赤褐色	-	2.8+	13.4±	-	5	少ない(赤)	81	6
SI-096	5	須恵器	坏	青灰色	青灰色	13.0	3.7	6.8	-	100	少ない	125	1
SI-096	6	須恵器	坏	黄橙色	黄橙色	12.4	3.9	7.2	-	80	少ない	175	13
SI-096	7	須恵器	坏	青灰色	青灰色	-	3.4+	6.9±	-	25	少ない	52	4
SI-096	8	須恵器	坏	灰色	灰色	-	1.1+	6.0±	-	15	少ない(砂)	103	9
SI-096	9	土師器	坏(ロクロ)	暗褐色	暗褐色	15.6±	3.7+	-	-	20	少ない(砂)	36	2
SI-096	10	土師器	坏(ロクロ)	暗赤褐色	黒褐色	12.3±	3.8+	6.8±	-	15	少ない(赤)	179	5
SI-096	11	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.8±	4.8+	8.3±	-	10	少ない	242	6
SI-096	12	土師器	坏(ロクロ)	灰褐色	灰褐色	-	2.0+	7.2±	-	20	少ない	116	7
SI-096	13	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	-	4.1+	6.8±	-	25	少ない	114	3
SI-096	14	土師器	坏(ロクロ)	黒褐色	暗褐色	-	2.1+	8.2±	-	10	少ない	150	8
SI-096	15	土師器	甕	暗褐色	赤褐色	20.5±	14.6+	-	22.5±	25	少ない(砂)	115	16
SI-096	16	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	20.4±	17.0+	-	22.0±	40	多い(母・白)	172	15
SI-096	17	土師器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	14.8+	4.1±	-	30	少ない(赤)	248	14
SI-096	18	須恵器	甕	灰色	灰色	19.8±	15.2+	-	21.1±	20	少ない	109	11
SI-096	19	須恵器	甕	黒褐色	黒褐色	26.1±	19.0+	-	25.8±	10	少ない	184	12
SI-096	20	須恵器	甕	灰色	灰色	-	32.7+	13.9	26.5	70	少ない	299	10
SI-097	1	須恵器	甕	橙色	褐灰色	26.5±	11.1+	-	-	5	少ない(赤・白)	1142	2
SI-098	8	須恵器	坏	灰色	灰色	13.6±	4.2	8.8±	-	25	多い(母・白)	1068	4
SI-098	9	須恵器	坏	赤褐色	赤褐色	12.6±	4.0	5.4±	-	40	少ない(砂)	2144	3
SI-098	10	須恵器	坏	灰色	灰色	13.8±	3.6	9.0±	-	25	多い(母・白)	1236	6
SI-098	11	須恵器	坏	灰色	灰色	13.2±	3.6	7.6	-	60	多い(母・白)	808	2
SI-098	12	須恵器	坏	灰色	灰色	13.6±	3.7	8.4±	-	30	多い(母・白)	374	13
SI-098	13	須恵器	坏	灰色	灰色	14.0±	4.4+	10.0±	-	20	多い(母・白)	1558	5
SI-098	14	須恵器	坏	灰色	灰色	-	3.0+	9.3	-	50	多い(母・白)	1508	1
SI-098	15	土師器	坏	赤褐色	赤褐色	15.3±	3.8	8.1±	-	40	多い(赤)	398	11
SI-098	16	土師器	坏	橙色	橙色	13.9	2.8	10.8	-	80	少ない	2205	9

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
ヘラケズリ，タタキ，横方向ナデ	ナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	
ヘラケズリ，横方向ナデ，タタキ	回転ナデ，あて具痕	-	-	
手持ちヘラケズリ，タタキ，横方向ナデ	ナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ，タタキ，ナデ	ヘラナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	ナデ，あて具痕	-	-	
手持ちヘラケズリ，タタキ，横方向ナデ	ヘラナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	
横ヘラケズリ	ナデ	-	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	ミガキ	不明	不明	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
横ヘラケズリ	ミガキ	-	手持ちヘラケズリ	内外面黒色処理
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ，ミガキ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	内面黒色処理
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ，ミガキ	回転糸切り離し	周縁部ヘラケズリ	内面黒色処理
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	中原産
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ，指圧痕	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
ヨコナデ	ヨコナデ，ミガキ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
ヨコナデ，ミガキ	ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
-	-	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	体部外面墨書
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	-	-	
横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	内面火だすき痕　宇津志野産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	底部外面朱書
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，横ヘラケズリ，ミガキ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	常総型
縦・横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
ヨコナデ，手持ちヘラケズリ，タタキ，横方向ナデ	ヨコナデ，あて具痕，ナデ	-	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	茨城県産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	茨城県産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	茨城県産
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ	-	ヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ後ミガキ	ミガキ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-098	17	土師器	坏(丸底)	にぶい橙色	にぶい橙色	15.4±	3.6	-	-	60	少ない(赤)	383	8
SI-098	18	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	13.0	3.4	-	-	100	少ない	2499	7
SI-098	19	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	14.1±	2.9+	-	-	10	少ない	2351	19
SI-098	20	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	12.3±	3.4+	-	-	30	少ない	2267	14
SI-098	21	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	14.4±	3.7	9.6	-	60	少ない(黒粒)	830	12
SI-098	22	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	15.1±	3.7+	-	-	20	少ない(砂)	459	16
SI-098	23	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	14.2±	4.1+	10.4±	-	25	少ない(赤)	623	17
SI-098	24	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	13.6±	3.3+	10.4±	-	25	少ない	820	18
SI-098	25	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	15.2±	3.4	10.8±	-	50	少ない(赤)	1084	10
SI-098	26	土師器	坏(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	2.7+	11.0±	-	25	少ない(砂)	656	15
SI-098	27	土師器	甕	橙色	橙色	-	2.9+	-	-	5	少ない	171	30
SI-098	28	土師器	甕	黄褐色	黄橙色	-	2.8+	-	-	5	少ない(砂)	1264	33
SI-098	29	土師器	甕	橙色	橙色	-	3.0+	-	-	5	少ない	1509	31
SI-098	30	土師器	甕	橙色	橙色	20.8±	15.7+	-	19.6±	5	少ない	1243	32
SI-098	31	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	21.3±	15.8+	-	19.0±	25	多い(砂・赤・白)	577	23
SI-098	32	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	23.8	23.0+	-	23.0±	70	少ない(赤)	2453	21
SI-098	33	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	25.3±	13.5+	-	22.3±	40	多い(砂・白)	1340	22
SI-099A	1	土師器	皿	黄橙色	黄橙色	-	2.1+	6.5±	-	20	少ない	103	2
SI-099A	2	土師器	小型甕	暗赤褐色	暗赤褐色	16.2±	9.4+	-	15.4±	5	少ない	185	3
SI-099A	3	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	23.5±	7.1+	-	-	10	少ない(砂)	225	4
SI-099B	3	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	12.7	4.0	5.4	-	80	少ない(白)	4	1
SI-099B	4	土師器	椀(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	13.0±	4.0	5.7	-	50	少ない(砂)	27	2
SI-099B	5	須恵器	甕	にぶい橙色	にぶい橙色	24.3±	19.1+	-	24.5±	20	少ない(赤)	1	3
SI-100	6	土師器	坏(丸底)	明赤褐色	明赤褐色	12.8	3.6	-	-	70	多い(砂)	579	9
SI-100	7	土師器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	14.4±	3.3+	10.3±	-	25	少ない	367	10
SI-100	8	土師器	坏(盤状)	浅黄橙色	浅黄橙色	17.2±	2.8+	-	-	25	少ない	280	11
SI-100	9	須恵器	坏	灰色	灰色	13.4	3.7	7.8	-	60	少ない(母)	886	3
SI-100	10	須恵器	坏	灰色	灰色	14.0±	4.2	8.4±	-	25	多い(母・白)	805	5
SI-100	11	須恵器	坏	灰色	灰色	14.0±	3.8+	8.9±	-	40	少ない(砂・白)	455	2
SI-100	12	須恵器	坏	灰白色	灰白色	-	2.6+	8.6	-	40	多い(砂・母)	289	6
SI-100	13	須恵器	坏	灰黄色	灰黄色	-	2.4+	8.7±	-	25	少ない(母)	27	7
SI-100	14	須恵器	高台付坏	暗灰色	暗灰色	14.2	4.7	8.2	-	100	少ない(母・白)	800	1
SI-100	15	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	-	1.3+	9.2+	-	10	少ない(母・白)	659	4
SI-100	16	土師器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	24.1±	6.5+	-	-	5	少ない	247	13
SI-100	17	土師器	甕	にぶい褐色	にぶい褐色	27.3±	4.5+	-	-	5	多い(母・白)	88	14
SI-101	1	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	12.6±	3.4+	5.8±	-	30	少ない	29	1
SI-101	2	土師器	高台付椀	橙色	橙色	12.9	5.0	7.2	-	80	少ない	123	2
SI-102	2	須恵器	坏	黒褐色	暗褐色	13.3±	4.0+	-	-	20	少ない	67	1
SI-102	3	須恵器	坏	黄橙色	黄橙色	14.1±	3.6+	-	-	20	少ない(赤)	2	2
SI-102	4	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	20.6	17.3+	-	21.5	60	少ない(赤)	151	4
SI-102	5	土師器	甑	暗褐色	にぶい褐色	25.1±	7.2+	-	-	10	少ない(赤)	122	8
SI-102	6	土師器	甑	にぶい橙色	にぶい橙色	25.1±	14.0+	-	-	20	少ない	151	7
SI-102	7	土師器	甕	黄橙色	黄橙色	20.8	21.5+	-	21.9	60	少ない(砂・白)	103	3
SI-102	8	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい橙色	20.3	23.1+	-	22.0±	30	少ない	151	5
SI-102	9	土師器	甕	橙色	にぶい赤褐色	-	7.0+	10.8	-	20	少ない(白)	240	6
SI-103	1	須恵器	坏	赤褐色	赤褐色	11.8±	3.8	6.2±	-	45	少ない(黒粒)	31	1
SI-103	2	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	19.0±	17.5+	-	20.8±	25	少ない	73	2
SI-104	1	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	13.0±	3.4	6.2	-	40	多い(砂・赤)	117	1
SI-105	4	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	14.2±	3.2+	7.0±	-	25	少ない(砂・赤・白)	278	1
SI-105	5	土師器	甕	橙色	にぶい黄橙色	25.2±	4.8+	-	-	5	多い(白)	279	3
SI-105	6	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	20.8±	5.0+	-	-	10	少ない	279	2
SI-105	7	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	-	7.2+	6.8±	-	10	少ない	240	4
SI-107	2	土師器	坏(丸底)	赤褐色	赤褐色	12.0±	3.0+	-	-	20	少ない	55	1
SI-108	1	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	15.3	3.3	-	-	80	少ない	120	1
SI-108	2	土師器	坏(丸底)	黄橙色	黄橙色	13.8±	3.0+	-	-	20	少ない	149	4
SI-108	3	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	14.8±	4.3+	7.4±	-	25	少ない(砂)	6	3
SI-108	4	土師器	坏	黄橙色	黄橙色	13.8±	4.3	7.6±	-	25	少ない	187	2
SI-108	5	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色	18.4±	5.9+	-	-	5	少ない(砂)	17	7
SI-108	6	土師器	甕	赤褐色	赤褐色	16.0±	6.1+	-	-	10	少ない(赤)	31	6
SI-109	1	土師器	坏蓋(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	16.5±	1.9+	-	-	10	少ない(黒粒)	3	2

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
横ヘラケズリ後ナデ	ナデ，ミガキ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	内外面黒色処理　漆
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	内外面黒色処理　漆
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ後ナデ	内面黒色処理　漆
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	内外面赤彩
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	内外面赤彩
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	内外面赤彩
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	内外面赤彩
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ，ミガキ	不明	手持ちヘラケズリ	内外面赤彩
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	内外面赤彩
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	口縁部外面焼成前線刻
ナデ	ナデ	-	-	口縁部線刻
ナデ	ナデ	-	-	口縁部線刻
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	周縁部ナデ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	-	-	口縁部内面刻書
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
口縁部ヨコナデ，タタキ後縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	-	内外面黒色処理　漆
ヨコナデ，手持ちヘラケズリ	ミガキ	-	手持ちヘラケズリ	内面黒色処理　漆
ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	火だすき　茨城県産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	無調整，ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	常総型
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	ミガキ	回転糸切り離し	無調整，ヨコナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ，指圧痕	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	把手付
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	把手付
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ，指圧痕	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
斜位ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ，ナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，不明瞭	口縁部ヨコナデ，不明瞭	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
斜位ヘラケズリ，ナデ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	雲珠つまみ
ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ	-	ヘラケズリ後ミガキ	内外面黒色処理　漆
ヘラケズリ，ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ	
ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-109	2	土師器	小型甕	灰褐色	にぶい褐色	13.5±	4.4+	-	-	5	少ない	10	3
SI-109	3	土師器	甕	橙色	橙色	-	9.5+	7.6±	-	20	少ない(赤)	6	4
SI-110	1	須恵器	坏蓋	黄灰色	黄灰色	-	1.9+	-	-	10	少ない	3	2
SI-110	2	土師器	小型甕	橙色	橙色	14.3±	10.4+	-	-	30	少ない	7	3
SI-111	1	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	15.45±	1.6+	-	-	15	少ない	4	1
SI-112	1	土師器	皿(カワラケ)	黄橙色	黄橙色	8.9±	1.8	6.6±	-	15	少ない(赤)	1	1
SI-114	1	須恵器	坏	灰白色	灰白色	10.9±	2.3+	-	-	5	少ない	1	2
SI-114	2	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	11.6±	3.95	6.8±	-	40	少ない	4	1
SI-114	3	須恵器	短頸壺	灰オリーブ色	灰オリーブ色	-	3.0+	15.6±	-	5	少ない	3	3
SI-115	1	土師器	坏(丸底)	にぶい黄橙色	橙色	-	3.7+	-	-	15	少ない	7	1
SI-115	2	土師器	甕	橙色	橙色	20.9±	5.4+	-	-	10	少ない	1	2
SI-116	2	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	16.2±	1.9+	-	-	40	少ない	4	3
SI-116	3	須恵器	高台付坏	灰黄色	灰白色	16.6±	4.0	12.3±	-	20	少ない	12	1
SI-116	4	須恵器	高台付坏	灰色	灰黄色	14.7±	3.2+	-	-	20	少ない	6	9
SI-116	5	須恵器	坏	灰白色	灰白色	-	1.8+	10.2±	-	10	多い(母・白)	2	2
SI-116	6	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	14.4±	5.0	-	-	80	少ない	22	4
SI-116	7	土師器	甕	橙色	にぶい橙色	22.4±	20.8+	-	21.2±	40	多い(砂・白)	1	6
SI-116	8	土師器	甕	橙色	橙色	23.1±	13.1+	-	20.0±	15	多い(砂・赤・白)	3	8
SI-116	9	土師器	甕	橙色	橙色	23.8±	7.6+	-	-	10	少ない(砂・白)	1	7
SI-116	10	土師器	甕	にぶい黄橙色	橙色	-	2.8+	7.2	-	20	少ない(赤)	7	5
SI-117	1	土師器	坏(ロクロ)	橙色	明赤褐色	13.1±	4.0	7.2±	-	10	少ない(赤)	6	1
SI-117	2	土師器	高台付坏	橙色	橙色	15.4±	6.0+	-	-	20	少ない(赤)	1	2
SI-118	1	須恵器	坏	橙色	橙色	12.0±	4.5	7.6	-	25	多い(砂・母・白)	8	1
SI-118	2	土師器	甕	橙色	橙色	18.4±	7.1+	-	-	5	少ない	14	2
SI-118	3	土師器	甕	橙色	橙色	21.3±	13.8+	-	-	15	少ない	5	3
SI-119	1	須恵器	坏蓋	灰黄色	灰黄色	-	1.7+	-	-	30	少ない	128	7
SI-119	2	土師器	坏(ロクロ)	褐色	明褐色	12.2	3.7	6.6	-	90	少ない(赤)	55	3
SI-119	3	須恵器	坏	暗赤褐色	褐色	13.6	3.9	7.3	-	80	少ない	112	4
SI-119	4	土師器	坏(ロクロ)	褐色	褐色	13.7±	4.4	6.6±	-	30	少ない	78	2
SI-119	5	土師器	皿(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	12.0	2.1	5.6	-	100	少ない(赤・黒粒)	70	6
SI-119	6	土師器	皿(ロクロ)	明褐色	明褐色	12.1	1.9	5.8	-	70	多い(赤・黒粒)	57	5
SI-119	7	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	-	1.2+	6.0±	-	20	少ない(母)	2	1
SI-119	8	須恵器	甕	褐色	明褐色	23.0±	25.0	13.8±	-	30	少ない	3	10
SI-119	9	須恵器	甕	明褐色	明褐色	27.5±	18.0+	-	26.6	25	少ない	1	9
SI-119	10	須恵器	甕	褐色	暗褐色	25.6±	20.0	-	25.6±	25	少ない	3	8
SI-120A	4	須恵器	坏	にぶい褐色	褐色	14.4±	4.1	7.6±	-	10	少ない	4	3
SI-120A	12	須恵器	坏	にぶい橙色	にぶい橙色	12.4±	3.5	7.0±	-	45	少ない	6	13
SI-120A	13	須恵器	坏	灰黄褐色	黒褐色	12.6±	4.4	8.5±	-	30	少ない	5	6
SI-120A	14	須恵器	坏	黒褐色	にぶい褐色	13.9±	3.9	7.1±	-	30	少ない	95	4
SI-120A	15	須恵器	坏	橙色	明赤褐色	12.8±	4.0	6.2	-	50	少ない	3	15
SI-120A	17	須恵器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	14.1±	5.0	6.9	-	50	少ない	2	5
SI-120A	18	須恵器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	3.2+	7.4	-	40	少ない	256	7
SI-120A	19	須恵器	坏	暗灰黄色	暗灰黄色	-	2.4+	8.2±	-	10	少ない	171	2
SI-120A	20	須恵器	高台付坏	にぶい黄橙色	浅黄色	-	3.0+	8.1	-	50	少ない(白)	124	1
SI-120A	21	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	12.3±	2.4	5.2±	-	25	少ない(黒粒)	5	17
SI-120A	22	土師器	坏(ロクロ)	にぶい橙色	にぶい黄橙色	14.2±	4.1	6.8±	-	20	少ない	2	9
SI-120A	23	須恵器	坏	にぶい黄橙色	黄褐色	13.7±	4.4	7.8±	-	40	少ない	150	8
SI-120A	24	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	12.4±	4.5	6.4	-	60	少ない(赤)	5	16
SI-120A	25	土師器	皿(ロクロ)	橙色	橙色	13.3±	2.4	5.2	-	40	少ない	5	18
SI-120A	26	土師器	高台付皿	橙色	橙色	13.4±	2.7	5.3±	-	30	少ない(母・赤)	164	19
SI-120A	27	灰釉陶器	椀	灰白色	灰白色	-	2.1+	6.0±	-	10	少ない	214	11
SI-120A	28	土師器	高台付坏	橙色	橙色	-	2.4+	7.8	-	50	少ない(母・赤)	63	14
SI-120A	29	須恵器	坏(底部)	黒褐色	黒褐色	-	-	-	-	5	多い(母)	5	12
SI-120A	30	須恵器	甕	暗緑灰色	暗緑灰色	-	1.6+	-	-	5	少ない	5	31
SI-120A	31	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい橙色	19.0±	5.7+	-	-	5	少ない(赤)	292	25
SI-120A	32	土師器	甕	明黄褐色	明黄褐色	20.9±	13.0+	-	23.2±	10	少ない	180	35
SI-120A	33	須恵器	甕	暗褐色	にぶい黄褐色	23.8±	10.1+	-	-	5	少ない	4	27
SI-120A	34	須恵器	甕	にぶい褐色	にぶい褐色	27.65±	12.0+	-	28.4	10	少ない	181	29
SI-120A	35	須恵器	甕	灰色	灰色	19.0±	7.2+	-	-	5	少ない	264	30
SI-120A	36	須恵器	甕	暗灰色	暗灰色	23.4±	6.0+	-	-	5	少ない	6	28

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦・横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ，回転ヘラケズリ	-	-	自然釉　宝珠つまみ
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
手持ちヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
横ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ	-	-	外面赤彩
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	茨城県産
横・斜位ヘラケズリ	ミガキ	-	-	内外面黒色処理
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦・横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	ヨコナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	茨城県産
縦ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	宝珠つまみ
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	宇津志野産
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ，タタキ，横方向ナデ	ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕，輪積痕	-	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，タタキ，ナデ	ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，ナデ	ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	火だすき
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
回転ナデ	回転ナデ，ヘラナデ	ヘラ切り離し	回転ナデ，ヨコナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ，ミガキ	不明	手持ちヘラケズリ	内面黒色処理
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	火だすき
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ナデ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ナデ，ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
-	-	ヘラ切り離し	無調整	
ヘラケズリ	ナデ	-	-	底部外面焼成前線刻
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-120A	37	須恵器	甕	明黄褐色	にぶい黄褐色	31.0±	30.0	15.8±	-	20	少ない(赤)	5	22
SI-120A	38	須恵器	甕	黒褐色	黒褐色	32.5±	16.6+	-	-	10	少ない	14	26
SI-120A	39	須恵器	甕	橙色	明赤褐色	34.8±	12.8+	-	29.0±	10	少ない	1	23
SI-120A	40	須恵器	甕	灰色	灰白色	-	5.6+	18.0±	-	5	少ない	5	32
SI-120A	41	須恵器	甕	黄褐色	にぶい黄褐色	26.8±	14.4+	-	25.6±	15	少ない	5	24
SI-120A	42	須恵器	甕	黒褐色	褐色	-	5.0+	16.4±	-	5	多い(赤)	295	33
SI-120A	43	須恵器	甕	暗赤褐色	暗赤褐色	-	4.6+	8.8±	-	5	少ない	5	34
SI-120B	1	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	16.2±	3.2	-	-	25	少ない	280	21
SI-120B	2	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	16.2±	2.7+	-	-	20	少ない(砂)	267	20
SI-121	1	土師器	坏(ロクロ)	橙色	明赤褐色	12.0±	2.9	5.3	-	60	少ない	40	4
SI-121	2	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	12.8±	3.9	6.0±	-	40	少ない	121	2
SI-121	3	土師器	坏(ロクロ)	橙色	明赤褐色	14.0	4.2	7.8	-	70	少ない	2	1
SI-121	4	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	-	1.3+	6.8±	-	25	少ない	77	3
SI-121	5	土師器	小型甕(ロクロ)	褐色	褐色	13.2	11.9+	-	14.0	70	少ない	3	8
SI-121	6	土師器	小型甕	明褐色	橙色	13.6±	9.8+	-	-	30	少ない(赤)	50	6
SI-121	7	土師器	甕	褐色	橙色	20.4±	14.9+	-	20.1±	30	少ない	6	9
SI-121	8	須恵器	甕	にぶい褐色	にぶい褐色	25.0±	5.4+	-	-	5	少ない	51	5
SI-121	9	須恵器	甕	褐色	明褐色	18.8±	15.9+	-	21.0±	30	少ない	81	7
SI-122	1	土師器	小鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	8.7	6.0	5.5	-	100	少ない(砂)	9	1
SI-122	2	土師器	甕	にぶい黄橙色	浅黄橙色	15.2±	6.0+	-	-	5	少ない	5	2
SI-122	3	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色	20.0±	26.3	5.7	20.0±	45	少ない	10	3
SI-123	1	須恵器	甕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	24.0±	5.8+	-	-	5	少ない	119	1
SI-124	1	須恵器	坏	橙色	橙色	11.5±	3.7	6.7±	-	25	少ない	2	2
SI-124	2	須恵器	坏	橙色	にぶい褐色	-	2.8+	7.2±	-	15	少ない	45	3
SI-124	3	土師器	坏(ロクロ)	にぶい橙色	にぶい橙色	13.2±	3.8	8.1±	-	30	少ない	59	1
SI-124	4	須恵器	甕	明赤褐色	明赤褐色	23.2±	8.2+	-	-	5	少ない	46	4
SI-124	5	須恵器	甕	暗灰黄色	暗灰黄色	-	5.3+	15.9±	-	10	少ない	4	5
SI-125	1	土師器	坏	橙色	橙色	10.5±	3.8	5.8±	-	20	少ない	2	2
SI-125	2	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	10.8±	3.5	6.1±	-	15	少ない	1	3
SI-125	3	須恵器	坏	オリーブ褐色	オリーブ褐色	12.6±	4.0	7.0±	-	25	少ない	1	4
SI-125	4	須恵器	坏	橙色	橙色	12.7±	4.35	7.0±	-	40	少ない	4	1
SI-125	5	土師器	甕(底部)	にぶい黄橙色	黄橙色	-	-	-	-	5	少ない	1	9
SI-125	6	須恵器	甕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	23.8±	10.5+	-	-	5	少ない	6	6
SI-125	7	須恵器	甕	橙色	橙色	19.0±	11.2+	-	-	5	少ない(黒粒)	5	8
SI-125	8	土師器	小型甕	にぶい橙色	にぶい橙色	11.7±	6.4+	-	-	5	少ない	2	7
SI-125	9	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい橙色	21.3±	20.0+	-	20.0±	25	少ない	3	5
SI-126	1	土師器	坏(ロクロ)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	11.7	4.25	7.3	-	90	少ない	4	1
SI-126	2	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	-	1.9+	10.2	-	10	少ない	6	2
SI-126	3	土師器	高坏(ロクロ)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	7.9+	14.4±	-	5	少ない	5	3
SI-126	4	土師器	甕	にぶい褐色	にぶい黄褐色	-	4.5+	14.3±	-	10	少ない	2	5
SI-126	5	須恵器	長頸壺	灰オリーブ色	灰オリーブ色	-	17.0+	8.3	-	45	少ない(黒粒・f1)	1	4
SI-127	2	土師器	坏蓋(ロクロ)	橙色	橙色	-	2.4+	-	-	30	少ない	3	9
SI-127	3	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	2.5+	-	-	70	少ない	66	41
SI-127	4	須恵器	坏蓋	灰黄色	灰黄色	13.8±	3.5	-	-	80	少ない	3	35
SI-127	5	須恵器	坏蓋	浅黄色	灰黄色	14.3	3.4	-	-	60	少ない	26	36
SI-127	6	須恵器	坏蓋	灰黄色	灰色	17.0±	2.3+	-	-	20	少ない	2	38
SI-127	7	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	18.2±	2.7+	-	-	20	少ない	57	37
SI-127	8	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	17.1±	2.5+	-	-	15	少ない	1	42
SI-127	9	須恵器	坏	灰色	灰色	12.9±	4.0	8.0±	-	45	多い(f1)	135	29
SI-127	10	須恵器	坏	にぶい褐色	にぶい橙色	12.6±	4.15	7.8	-	75	少ない	139	19
SI-127	11	須恵器	坏	灰黄褐色	灰黄褐色	11.8±	3.7	7.7±	-	30	少ない(f1)	3	26
SI-127	12	須恵器	坏	黒褐色	暗褐色	11.5±	4.0	7.6±	-	35	少ない	67	18
SI-127	13	須恵器	坏	灰色	灰色	12.1±	4.0	7.6	-	50	少ない	1	21
SI-127	14	須恵器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	12.2±	3.8	8.2±	-	35	少ない	131	22
SI-127	15	須恵器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	13.9±	3.9	9.5±	-	20	少ない	1	20
SI-127	16	須恵器	坏	暗灰色	暗灰色	-	3.5+	7.0±	-	30	少ない	4	24
SI-127	17	須恵器	坏	オリーブ黒色	オリーブ黒色	13.7±	4.3+	-	-	10	少ない	1	31
SI-127	18	須恵器	坏	にぶい褐色	灰色	-	2.9+	7.8±	-	15	少ない(f1)	112	32
SI-127	19	須恵器	坏	にぶい黄色	暗灰黄色	-	2.4+	9.1±	-	15	少ない	1	30
SI-127	20	須恵器	坏	黄灰色	黄灰色	-	2.6+	7.6±	-	15	多い(母)	146	33

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
斜位ヘラケズリ	ナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
横ヘラケズリ	ナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
斜位ヘラケズリ	回転ナデ	-	手持ちヘラケズリ	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	自然釉　宝珠つまみ
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	外面黒斑
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
口縁部ヨコナデ，回転ナデ，手持ちヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，回転ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
縦ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ後ヘラナデ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成後線刻
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ，ヘラナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
横ヘラケズリ，タタキ，横方向ナデ	ナデ	-	手持ちヘラケズリ	
縦ヘラケズリ	ヨコナデ，連続鋸状暗文	静止糸切り離し	手持ちヘラケズリ	甲斐型坏　暗文あり
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ	ナデ	-	-	底部外面墨書
回転ナデ，タタキ	回転ナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	外面黒斑
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ後ナデ，指頭痕	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	硯転用
回転ナデ	回転ナデ，ヘラナデ	不明	不明	内外面赤彩　脚に三方の方形透し
横ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	ナデ，ヨコナデ	自然釉
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	回転ナデ	円筒つまみ
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	ナデ	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	火だすき　円筒つまみ
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	火だすき　円筒つまみ
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-127	21	須恵器	坏	にぶい黄色	にぶい黄橙色	-	1.7+	8.3±	-	30	少ない	2	23
SI-127	22	須恵器	坏	黄褐色	にぶい黄橙色	-	1.9+	7.9±	-	45	少ない	79	34
SI-127	23	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	15.7±	6.4	10.3±	-	30	少ない	3	28
SI-127	24	須恵器	高台付坏	黄灰色	灰黄色	16.9±	5.4+	-	-	15	少ない	4	27
SI-127	25	須恵器	高台付坏	灰黄褐色	灰色	-	1.8+	8.3	-	40	少ない	132	1
SI-127	26	須恵器	高台付坏	灰色	灰白色	-	1.4+	10.2±	-	10	少ない	1	43
SI-127	27	須恵器	高台付坏	灰黄色	灰黄褐色	-	2.0+	8.0	-	45	少ない	130	3
SI-127	28	土師器	坏	暗褐色	暗赤褐色	11.4	4.5	7.0	-	90	少ない	150	4
SI-127	29	土師器	坏(ロクロ)	暗褐色	黒褐色	12.3	4.1	8.3	-	80	少ない	116	17
SI-127	30	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	12.5±	3.9	7.6±	-	45	少ない	3	5
SI-127	31	土師器	坏(ロクロ)	にぶい橙色	黒色	-	2.6+	7.0±	-	35	少ない	16	6
SI-127	32	土師器	坏(ロクロ)	暗灰黄褐色	黄褐色	-	1.8+	7.1±	-	25	少ない	1	25
SI-127	33	土師器	坏(ロクロ)	にぶい橙色	黒褐色	-	1.2+	8.0±	-	20	少ない	151	7
SI-127	34	土師器	坏(ロクロ)	にぶい赤褐色	明赤褐色	-	2.9+	8.2±	-	15	少ない	3	8
SI-127	35	土師器	小型甕	赤褐色	にぶい赤褐色	11.7±	5.5+	-	-	20	少ない	84	10
SI-127	36	須恵器	壺(頸部)	灰色	灰色	-	5.0+	-	-	10	少ない	45	16
SI-127	37	土師器	甕	橙色	にぶい橙色	19.5	26.2	4.6±	21.0	70	少ない	3	39
SI-127	38	土師器	甕	にぶい橙色	橙色	-	13.3+	4.5	-	30	少ない	1	40
SI-127	39	須恵器	甕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	22.8±	11.7+	-	20.6±	5	少ない	161	11
SI-127	40	須恵器	壺	にぶい黄褐色	黒褐色	20.4±	10.5+	-	-	10	少ない	3	15
SI-127	41	須恵器	甕	にぶい赤褐色	にぶい橙色	-	1.3+	15.2	-	10	少ない	1	14
SI-127	42	須恵器	甕	灰黄褐色	にぶい黄褐色	-	7.8+	9.2±	-	10	少ない	125	13
SI-127	44	須恵器	甑	黒褐色	黒褐色	-	11.5+	17.0±	-	10	少ない	30	12
SI-127	43	須恵器	甕(転用硯)	灰白色	灰白色	-	-	-	-	5	少ない	48	44
SI-128	1	土師器	甕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	18.4±	5.0+	-	-	5	少ない	9	1
SI-129	1	土師器	高坏	橙色	赤褐色	14.2	11.2+	11.7±	-	85	少ない	14	6
SI-129	2	土師器	高坏(坏部)	赤褐色	明赤褐色	14.4	5.3+	-	-	50	多い(白)	17	7
SI-129	3	土師器	高坏(脚部)	橙色	にぶい橙色	-	7.2+	-	-	40	少ない	34	11
SI-129	4	土師器	高坏(脚部)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	7.4+	10.9	-	45	多い(白)	10	8
SI-129	5	土師器	高坏(脚部)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	7.2+	-	-	40	少ない(白)	11	10
SI-129	6	土師器	高坏(脚部)	橙色	にぶい黄橙色	-	6.8+	-	-	40	少ない	5	9
SI-129	7	土師器	壺(坩)	にぶい黄橙色	にぶい橙色	9.7	14.4	3.5	-	100	少ない(赤)	15	1
SI-129	8	土師器	壺(坩)	にぶい赤褐色	赤褐色	8.8±	11.7	4.1	-	80	少ない(砂)	1	4
SI-129	9	土師器	小型甕	にぶい赤褐色	明赤褐色	11.4±	9.7	4.7	-	95	多い(白)	16	2
SI-129	10	土師器	壺(坩)	にぶい黄橙色	灰黄褐色	-	6.7+	2.3	-	70	少ない	18	5
SI-129	11	土師器	壺	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	11.2±	17.4	5.0	-	80	少ない	2	3
SI-130	1	土師器	坏(ロクロ)	暗褐色	暗褐色	12.4±	4.1	7.5±	-	40	少ない	4	4
SI-130	2	須恵器	坏	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	12.0±	4.15	7.8	-	60	少ない(白)	1	1
SI-130	3	須恵器	高台付甕	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	-	2.3+	11.5	-	5	少ない(白)	10	3
SI-130	4	須恵器	甕	暗褐色	暗褐色	20.0±	4.1+	-	-	5	少ない	8	5
SI-131	1	土師器	坏(ロクロ)	明黄褐色	浅黄色	11.9±	4.2	6.5	-	50	少ない	23	2
SI-131	2	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	12.1±	4.8	6.4±	-	60	少ない	50	3
SI-131	3	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	にぶい赤褐色	14.4±	5.1	8.3±	-	15	少ない	46	5
SI-131	4	土師器	坏(ロクロ)	にぶい褐色	にぶい褐色	-	2.0+	6.6	-	50	少ない	45	4
SI-131	5	須恵器	高台付坏	黄灰色	黄灰色	-	2.4+	10.0±	-	25	多い(白)	12	1
SI-131	6	灰釉陶器	手付き瓶	灰白色	灰白色	3.1±	10.0	7.5	-	95	少ない	5	13
SI-131	7	須恵器	甕	橙色	橙色	19.6±	10.1+	-	-	10	少ない(赤)	14	11
SI-131	8	須恵器	壺	暗緑灰色	灰色	-	-	-	-	5	少ない	18	14
SI-131	9	須恵器	甕	灰黄褐色	にぶい黄褐色	-	-	-	-	5	少ない	13	15
SI-131	10	土師器	甕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	14.6±	6.7+	-	-	10	少ない	7	7
SI-131	11	土師器	小型甕	橙色	明赤褐色	21.2±	6.1+	-	-	5	少ない	15	10
SI-131	12	土師器	甕	にぶい褐色	にぶい褐色	22.2±	6.4+	-	-	5	少ない	10	9
SI-131	13	土師器	甕	橙色	橙色	22.8±	8.0+	-	-	10	少ない	19	8
SI-131	14	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色	21.4±	17.0+	-	-	35	少ない	2	12
SI-131	15	土師器	鉢	橙色	橙色	-	10.4+	13.0±	-	35	少ない(赤)	4	6
SI-132	1	須恵器	甕	明赤褐色	明赤褐色	17.1±	7.2+	-	-	5	少ない	4	18
SI-132	2	須恵器	甕	赤褐色	赤褐色	24.0±	19.0+	-	-	10	少ない	1	16
SI-132	3	須恵器	甕	褐色	褐色	18.5	17.9+	-	18.8±	40	少ない	4	20
SI-132	4	須恵器	甕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	23.5	22.0+	-	12.2	80	少ない	129	21
SI-132	5	須恵器	甕	褐色	褐色	24.8	22.0	-	24.4	50	少ない	48	19

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ナデ，ヨコナデ	
横ヘラケズリ	ミガキ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	ミガキ	不明	手持ちヘラケズリ	内面黒色処理
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	自然釉
口縁部ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
斜位ヘラケズリ	ナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，タタキ，ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部回転ナデ，タタキ	口縁部回転ナデ	-	-	
横ヘラケズリ	ナデ	-	ナデ	
横ヘラケズリ，タタキ	ヘラナデ，あて具痕	-	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
横・斜位ヘラケズリ，タタキ	ナデ，あて具痕	-	ヘラケズリ	五孔
タタキ	青海波文，ナデ	-	-	自然釉
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
縦ヘラケズリ後ナデ	ハケ，ミガキ，脚部絞り痕，ヘラナデ	-	-	
縦・横ヘラケズリ，ナデ	ミガキ	-	-	
縦ヘラケズリ	ヘラケズリ，ヘラナデ，脚部絞り痕	-	-	穿孔１ヶ所
縦ヘラケズリ，ハケ	ヘラケズリ，ヘラナデ，脚部絞り痕	-	-	
縦ヘラケズリ，ミガキ，ハケ	ヘラケズリ，脚部絞り痕	-	-	
縦ヘラケズリ	ヘラケズリ，ヘラナデ，脚部絞り痕	-	-	
ハケ，横・斜位ヘラケズリ，ミガキ	ハケ，ヘラナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ，ナデ，ヘラケズリ後ミガキ	ナデ後ミガキ，輪積痕	-	ヘラケズリ後ナデ	
口縁部ヨコナデ，縦・横・斜位ヘラケズリ後ミガキ	ハケ，横ヘラケズリ後ナデ	-	ヘラケズリ後ナデ	
横ヘラケズリ後ミガキ	ナデ，輪積痕	-	ヘラケズリ	外面赤彩
口縁部ヨコナデ，横・縦ヘラケズリ後ミガキ，ナデ後ミガキ	ヘラナデ，ナデ後ミガキ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	底部外面焼成後線刻
口縁部ヨコナデ，回転ナデ	口縁部ヨコナデ，回転ナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ，タタキ	ヘラケズリ，あて具痕	-	-	
回転ナデ，波状文	ナデ	-	-	
タタキ	ナデ，あて具痕	-	-	自然釉
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，ヘラナデ	-	-	
ヘラケズリ，ヘラナデ	ヘラナデ，輪積痕	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-132	6	須恵器	甕	褐色	褐色	-	26.7+	14.0±	26.1±	70	少ない	53	22
SI-132	7	須恵器	甕	明赤褐色	明褐色	28.7±	18.4+	-	30.6±	20	少ない	86	17
SI-132	8	須恵器	甑	褐色	褐色	-	8.2+	15.2±	-	15	少ない(砂)	2	13
SI-132	9	土師器	甕	褐色	にぶい橙色	18.8±	8.3+	-	-	5	少ない	27	15
SI-132	10	土師器	甕	橙色	橙色	19.6±	6.5+	-	-	10	少ない	3	23
SI-132	11	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色	-	4.4+	13.6±	-	5	少ない(赤)	2	14
SI-132	12	須恵器	坏	暗灰黄色	黒褐色	13.4	4.7	6.5	-	99	少ない	85	2
SI-132	13	須恵器	坏	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	12.4±	4.5	7.8±	-	45	少ない(赤)	68	3
SI-132	14	土師器	坏(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	12.1±	3.9	6.6±	-	20	少ない	75	5
SI-132	15	土師器	坏(ロクロ)	にぶい橙色	にぶい橙色	13.1	3.7	6.8	-	90	少ない(赤・白)	44	1
SI-132	16	土師器	皿(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	12.7	2.1	6.8	-	100	多い(赤)	78	11
SI-132	17	土師器	皿(ロクロ)	橙色	橙色	13.1	2.2	7.1	-	80	少ない	1	10
SI-132	18	土師器	高台付坏	にぶい橙色	黒色	16.9±	4.1+	-	-	15	少ない	3	7
SI-132	19	土師器	高台付坏	赤色	明赤褐色	-	1.7+	7.0±	-	5	少ない(赤)	2	9
SI-132	20	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	-	1.7+	7.0±	-	20	少ない(赤)	1	6
SI-132	21	土師器	坏(ロクロ)	褐灰色	褐灰色	13.3±	4.3	7.4±	-	45	少ない	18	4
SI-132	22	土師器	鉢	明赤褐色	にぶい橙色	15.5±	13.5	10.2	-	40	少ない	3	24
SI-132	23	須恵器	風字硯	黒褐色(断面灰色)	黒褐色(断面灰色)	-	-	-	-	40	少ない	100	12
SI-133	27	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	-	1.8+	-	-	10	少ない	1	1
SI-133	28	須恵器	坏	灰色	灰色	-	2.0+	8.0	-	10	多い(母)	9	2
SI-133	29	土師器	坏(丸底)	にぶい黄橙色	黒褐色	14.5±	5.0	-	-	10	少ない	2	3
SI-134	1	土師器	坏(ロクロ)	にぶい橙色	にぶい橙色	11.9	3.9	6.0	-	90	少ない	1	1
SI-134	2	土師器	坏(ロクロ)	にぶい橙色	にぶい橙色	12.3±	3.7	6.2	-	45	少ない	2	5
SI-134	3	土師器	坏(ロクロ)	にぶい橙色	にぶい赤褐色	12.4	4.3	5.1	-	90	少ない	2	4
SI-134	4	土師器	坏(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	12.4	4.7	5.8	-	95	少ない	1	2
SI-134	5	土師器	坏(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	12.4±	5.6	5.9	-	60	少ない	29	3
SI-134	6	土師器	甕	黒褐色	暗赤褐色	9.6±	8.9	5.3	-	40	少ない	1	6
SI-134	7	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい橙色	-	8.1+	8.7	-	40	少ない	4	7
SI-134	8	須恵器	甑	にぶい褐色	にぶい褐色	24.0±	21.7	12.7±	-	35	少ない	29	8
SI-135	1	須恵器	坏	橙色	橙色	12.3±	3.4	6.0±	-	30	少ない	1	7
SI-135	2	土師器	坏(口縁部)	にぶい橙色	にぶい褐色	-	-	-	-	10	少ない	1	9
SI-135	3	土師器	坏(ロクロ)	褐色	褐色	13.2±	4.4	6.5	-	60	少ない	2	3
SI-135	4	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	12.1	4.2	6.8	-	90	少ない	1	2
SI-135	5	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	12.3±	4.6	7.0	-	40	少ない	2	5
SI-135	6	土師器	坏(ロクロ)	橙色	明赤褐色	13.5	4.4	3.2	-	95	少ない	138	1
SI-135	7	須恵器	坏	橙色	明褐色	12.7±	3.9	6.0±	-	40	少ない	59	4
SI-135	8	土師器	皿(ロクロ)	橙色	橙色	13.5±	2.2	6.0	-	60	少ない	13	6
SI-135	9	土師器	高台付坏	赤褐色	明褐色	-	1.9+	6.5	-	20	少ない	19	8
SI-135	10	須恵器	甕	橙色	にぶい黄褐色	17.0±	18.0+	-	11.0±	25	少ない	1	12
SI-135	11	須恵器	甕	にぶい黄色	にぶい黄色	21.0±	9.7+	-	-	10	少ない	12	14
SI-135	12	須恵器	壺	明赤褐色	明赤褐色	21.3	12.6+	-	-	30	少ない	45	11
SI-135	15	土師器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	19.0±	上9.0+	-	-	25	少ない	36	13
SI-135	16	土師器	甕	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	18.0±	9.9+	-	-	10	少ない	32	15
SI-135	17	土師器	甕	橙色	橙色	18.0±	6.8+	-	-	10	少ない	42	17
SI-135	18	土師器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	20.7±	6.0+	-	-	5	少ない	85	16
SI-135	13・14	須恵器	壺	暗灰黄色	灰黄色	10.0±	8.4+	-	-	10	少ない	3,36	10
SI-136	1	土師器	高坏(脚部)	暗褐色	赤褐色	-	3.1+	12.8±	-	10	少ない	3	2
SI-136	2	土師器	高坏(脚部)	明褐色	黒褐色	-	10.1+	13.9	-	50	少ない	7	3
SI-136	3	土師器	壺(坩)	にぶい黄褐色	黒褐色	8.9	8.5	2.6	-	95	多い(砂・白)	11	7
SI-136	4	土師器	壺(坩)	橙色	にぶい褐色	8.0	9.1	3.1	8.4	98	少ない	12	6
SI-136	5	土師器	壺(坩)	明赤褐色	にぶい褐色	9.0±	9.1	2.3	-	80	多い(砂)	8	8
SI-136	6	土師器	壺	にぶい褐色	にぶい橙色	11.0±	14.8	-	14.6±	70	少ない	1	5
SI-136	7	土師器	甕	赤褐色	明赤褐色	16.1	-	16.0+	18.0±	50	少ない	1	4
SI-136	8	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色	-	17.5+	6.4	-	40	少ない(砂)	18	9
SI-136	9	土師器	甕	明赤褐色	暗赤灰色	-	6.3+	5.4±	-	5	少ない(砂)	6	10
SI-137	1	土師器	高坏(坏部)	赤色	赤色	13.4	4.8+	-	-	90	少ない	25	1
SI-137	2	土師器	高坏(坏部)	明赤褐色	明赤褐色	14.1	4.1+	-	-	40	少ない	6	3
SI-137	3	土師器	高坏(脚部)	赤褐色	灰褐色	-	7.2+	-	-	30	少ない	8	2
SI-137	4	土師器	台付鉢	明赤褐色	明赤褐色	10.8	7.7+	-	12.0	80	少ない	2	4
SI-137	5	土師器	甕	明赤褐色	にぶい赤褐色	13.9±	20.0	6.0	19.4±	40	少ない	9	5

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
タタキ後ナデ，斜位ヘラケズリ	ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
横・斜位ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	ミガキ	不明	回転ヘラケズリ	
横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	不明	不明	内面黒色処理
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	ヨコナデ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	底部内面焼成前線刻
横ヘラケズリ，ナデ	ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
ヘラナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
横ヘラケズリ，ハケ	ミガキ	-	手持ちヘラケズリ	内面黒色処理
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	手持ちヘラケズリ	体部外面焼成前線刻　体部外面墨書
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	体部外面焼成前線刻　体部外面墨書
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，横方向ナデ	-	ヘラケズリ	
縦・横ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，タタキ後ナデ，横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	ヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	中原産
回転ナデ	回転ナデ	-	-	口縁内部漆付着
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	底部外面焼成前線刻
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	中原産
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ヘラケズリ	ミガキ	回転糸切り離し	無調整，ヨコナデ	
口縁部ヨコナデ，タタキ，斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，タタキ，横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・横ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，ヘラナデ	口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，胴部回転ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，回転ナデ	-	-	自然釉
縦ヘラ削後ミガキ	ヘラケズリ，ヨコナデ	-	-	外面赤彩
縦・横ヘラケズリ，ヘラナデ	縦・横ヘラケズリ，絞り痕	-	-	外面赤彩
ヨコナデ，横ヘラナデ，横ヘラケズリ，ミガキ	ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラナデ，輪積痕	-	ヘラケズリ	
ヨコナデ，縦ヘラナデ，縦・横ヘラケズリ，ミガキ	ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラナデ，輪積痕	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
ヨコナデ，横・斜位ヘラケズリ後ミガキ	ヨコナデ，ヘラケズリ，ヘラナデ，輪積痕	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
口縁部ヨコナデ，ミガキ，縦・横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
斜位ヘラケズリ後ミガキ	ミガキ，ナデ	-	ヘラケズリ，ミガキ	
横・斜位ヘラケズリ	ヘラケズリ後ミガキ	-	ヘラケズリ	
ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ，ナデ	-	-	内外面赤彩
ヨコナデ，縦ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	-	-	内外面赤彩
縦ヘラケズリ	ヘラナデ，ナデ	-	-	外面赤彩
縦・横ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ，指頭痕，ナデ	-	-	
ヨコナデ，横ヘラケズリ後ミガキ，横ヘラケズリ，ナデ	ヨコナデ，ミガキ，ナデ，輪積痕	-	ヘラケズリ	

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測
				外面	内面								
SI-138	1	土師器	椀(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	12.0±	4.0	5.9±	-	40	少ない	11	1
SI-138	2	土師器	甕	橙色	橙色	20.4±	9.2+	-	-	10	少ない	9	2
SI-138	3	土師器	小型甕	赤色	赤色	14.3±	5.0+	-	-	5	少ない	16	3
SI-138	4	土師器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	1.4+	11.6±	-	5	少ない	10	4
SI-140	1	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	11.5±	4.2	-	-	15	少ない	25	1
SI-140	2	須恵器	坏蓋	灰色	オリーブ灰色	11.7±	4.0	-	-	10	少ない(砂)	29	2
SI-140	3	土師器	甕	橙色	橙色	17.0±	13.4+	-	-	10	多い(砂)	37	3
SI-141	1	須恵器	坏	灰白色	灰白色	13.6±	3.9+	10.4±	-	10	少ない	1	1
SI-141	2	土師器	坏(丸底)	にぶい橙色	にぶい橙色	31.0±	6.4+	-	-	5	少ない	8	2
SI-141	3	土師器	壺	黒色	橙色	-	2.0+	5.1±	-	25	少ない	1	3
SI-142	1	須恵器	坏	黄灰色	黄灰色	13.8±	3.7	8.8	-	70	多い(砂・白)	1	1
SI-143	1	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	16.8	3.1	-	-	75	少ない(砂)	1	11
SI-143	2	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	15.9±	2.6+	-	-	20	少ない	2	1
SI-143	3	須恵器	高台付坏	灰色	灰色	14.3±	3.8	9.5±	-	20	少ない(砂)	2	16
SI-143	4	須恵器	坏(丸底)	灰色	灰色	15.4±	4.8+	-	-	25	少ない	2	17
SI-143	5	須恵器	高台付坏	灰色	灰白色	-	2.6+	10.1	-	50	少ない	4	12
SI-143	6	土師器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	19.0±	4.6	14.0±	-	25	少ない(赤)	1	2
SI-143	7	土師器	台付甕	にぶい赤褐色	暗灰黄色	14.5±	18.4	9.8	15.0	70	少ない	1	3
SI-143	8	土師器	甕	にぶい橙色	橙色	18.9±	10.6+	-	22.8±	10	少ない	10	4
SI-143	9	土師器	甕	にぶい褐色	褐灰色	20.3±	10.4+	-	21.4±	5	多い(砂・白・黒)	38	5
SI-143	10	土師器	甕	にぶい黄橙色	橙色	23.6±	7.0+	-	-	5	少ない(砂)	62	6
SI-143	11	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい黄橙色	22.0±	7.6+	-	-	5	少ない	27	7
SI-143	12	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい褐色	22.2±	10.5+	-	20.0±	5	多い(砂・白・母)	2	8
SI-143	13	土師器	甕	橙色	橙色	22.1±	8.8+	-	-	15	少ない	15	13
SI-143	14	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色	23.0±	11.5+	-	19.6±	10	多い(赤・白・砂・母)	73	9
SI-143	15	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい橙色	-	26.1+	-	28.0±	40	少ない	2	10
SI-143	16	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい褐色	21.5±	13.1+	-	26.9±	5	少ない(母)	37	14
SI-143	17	土師器	甕	橙色	にぶい黄橙色	-	5.4+	10.1	-	15	少ない	2	15
SI-144	1	須恵器	坏	褐灰色	灰黄褐色	16.6±	3.4+	-	-	5	多い(母)	1	1
SI-144	2	須恵器	高台付壺	黄褐色	灰黄色	-	2.5+	10.4±	-	5	少ない	33	4
SI-144	3	土師器	小型甕(ロクロ)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	4.0+	9.0±	-	10	少ない	1	3

附表5　掘立柱建物跡出土土器観察表

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
SX-1	1	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	10.6±	4.1+	-	-	15	少ない	2	2
SX-2	3	須恵器	坏	灰色	灰色	12.8±	3.3+	-	-	20	多い(母・白)	1	1
SX-5	4	土師器	皿(カワラケ)	黄橙色	黄橙色	-	1.4+	3.6±	-	20	少ない	3	1
SX-11	7	須恵器	短頸壺	灰白色	灰白色	9.3±	3.3+	-	-	5	少ない	1	1
SX-12	8	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	14.1±	4.1	8.3±	-	30	少ない	322	2
SX-13	10	土師器	坏	赤褐色	赤褐色	18.2±	4.2+	-	-	20	多い(黒粒)	1	1
SX-13	9	須恵器	坏	暗褐色	暗褐色	13.8±	4.2	5.2±	-	30	少ない (白・黒粒)	2	2
SX-13	11	土師器	甕	暗褐色	赤褐色	-	3.2+	7.2	-	10	少ない	1	4
SX-15	12	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	15.0±	3.2+	-	-	10	少ない	2	1
SX-16	13	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	-	2.4+	6.8±	-	20	少ない(母・白)	3	1
SX-21	14	土師器	坏(丸底)	にぶい橙色	にぶい橙色	12.2±	4.0+	-	-	20	少ない	6	1
SX-22	15	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	-	1.1+	6.2±	-	5	少ない	12	1
SX-26	17	須恵器	坏	灰色	灰色	-	1.0+	6.0±	-	5	少ない(砂)	5	1
SX-26	18	土師器	坏(ロクロ)	黄褐色	黄褐色	-	2.0+	6.2±	-	5	少ない	2	2
SX-26	19	土師器	甕	赤褐色	にぶい赤褐色	-	1.9+	11.8±	-	5	少ない	4	3
SX-26	20	土師器	甕	橙色	橙色	12.2±	2.9+	-	-	5	少ない	3	4
SX-27	24	土師器	坏(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	8.0+	1.8±	-	5	少ない	SX-27C-2	1
SX-27	22	土師器	坏	にぶい褐色	にぶい褐色	-	1.8+	5.6±	-	5	少ない	SX-27F	1
SX-27	23	土師器	甕	明赤褐色	明赤褐色	-	2.6+	14.0±	-	5	少ない	SX-27F-4	2
SX-27	21	土師器	坏	赤色	赤色	12.2±	3.0+	-	-	10	少ない(砂)	SX-27I-5	1
SX-30	25	須恵器	坏	灰白色	灰白色	-	2.2+	7.6±	-	5	少ない(母)	1	1
SX-31	26	須恵器	坏	灰白色	灰白色	-	1.2+	6.4±	-	15	少ない	3	1
SX-32	27	須恵器	甕	橙色	橙色	30.8±	10.0+	-	-	5	少ない	9	1
SX-32	28	須恵器	甕	灰色	灰色	-	3.3+	16.0±	-	5	少ない	5	2

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
ヘラケズリ	—	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	-	回転ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
ヨコナデ，ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	-	外面赤彩　内面黒色処理
ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	宝珠つまみ
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	自然釉
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
横方向ミガキ，ヘラケズリ	暗文	-	ヘラケズリ	内外面赤彩　放射状暗文　畿内産か
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	底部内面ヘラケズリ，ヨコナデ，ヘラナデ，シボリ	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，ナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
ヨコナデ，縦ヘラケズリ	ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，縦・斜位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
斜位ヘラケズリ	ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	自然釉
回転ナデ，横ヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
手持ちヘラケズリ，回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
口縁部回転ナデ	口縁部回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	中原産
ヨコナデ，手持ちヘラケズリ	ヨコナデ，ミガキ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
縦・横ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	SX-15とSX-18と接合
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	ヘラケズリ	内外面赤彩
回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
斜位ヘラケズリ	ナデ	-	ヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	ピットC　内面漆付着
手持ちヘラケズリ，ナデ	ナデ	-	ヘラケズリ	ピットF
横ヘラケズリ	ナデ	-	-	ピットF
横・斜位ヘラケズリ	ナデ	-	-	ピットI　内外面赤彩
手持ちヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，タタキ、横方向ナデ	口縁部ヨコナデ，あて具痕	-	-	
横ヘラケズリ	ナデ，あて具痕	-	-	

附表６　土坑出土土器観察表

遺構名	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
SK-5	1	瓦質土器	内耳鍋	にぶい橙色	黄橙色	-	4.7+	-	-	5	少ない	1	2
SK-5	2	瓦質土器	内耳鍋	灰褐色	にぶい褐色	-	4.3+	-	-	5	少ない	1	3
SK-13	1	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	11.4	3.8	5.2	-	98	少ない(砂)	1	1
SK-14	3	土師器	坏(ロクロ)	淡茶色	淡茶色	11.6	2.9	5.0	-	100	少ない	9	1
SK-14	2	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	11.3±	3.4	4.4±	-	30	少ない	12	2
SK-14	4	須恵器	壺(転用硯)	灰黄褐色	灰黄褐色	-	1.7+	11.6±	-	5	少ない	12	4
SK-14	5	須恵器	甕(転用硯)	灰色	灰色	-	-	-	-	5	少ない	8	5
SK-15	6	土師器	坏(ロクロ)	暗黄褐色	暗黄褐色	14.8±	5.4+	7.0±	-	25	少ない	4	1
SK-18	8	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.4±	3.6	6.2±	-	40	少ない(砂)	1	1
SK-20	9	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	12.5±	2.9	5.7±	-	50	少ない(砂)	1	1
SK-20	10	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	橙色	12.4±	3.4+	-	-	20	少ない	7	2
SK-21	1	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	1
SK-22	1	縄文土器	深鉢	灰褐色	にぶい黄褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	2	1
SK-28	11	土師器	坏(ロクロ)	黄橙色	黄橙色	12.1±	3.4	5.7±	-	10	少ない	4	1
SK-28	12	土師器	椀(ロクロ)	暗褐色	暗褐色	14.8±	4.8+	-	-	25	少ない	7	2
SK-36	14	須恵器	坏(丸底)	灰色	灰色	-	1.8+	2.4	-	70	少ない	1	1
SK-36	13	須恵器	坏蓋	黒灰色	灰色	9.6±	3.9	-	-	20	多い(黒)	13	2
SK-50	15	土師器	皿(ロクロ)	明褐色	明褐色	13.0	2.4	7.1	-	100	少ない(砂・赤)	1	1
SK-51	1	弥生土器	壺	灰黄褐色	灰黄褐色	-	-	-	-	5	少ない	12	3
SK-51	2	弥生土器	壺	明黄褐色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	少ない	9	4
SK-51	3	弥生土器	壺	にぶい橙色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	少ない	7	5
SK-51	4	弥生土器	壺	灰黄褐色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	少ない	2	2
SK-51	5	弥生土器	壺	赤褐色・黒褐色	黄橙色・赤褐色・暗褐色	26.6±	7.8+	-	-	5	少ない	3	1
SK-52	1	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	148	7
SK-52	2	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	黒褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	6	6
SK-52	3	縄文土器	深鉢	にぶい赤褐色	黒褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	2	5
SK-52	4	縄文土器	深鉢	明赤褐色	黒褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	3	4
SK-52	5	縄文土器	深鉢	橙色	黒褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	9	2
SK-52	6	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	12	1
SK-52	7	縄文土器	深鉢	明赤褐色	黒褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	3
SK-55	16	須恵器	甕(転用硯)	黄灰色	灰色	-	-	-	-	5	少ない	1	1
SK-56	17	須恵器	坏	灰色	橙色	14.4	3.3	6.2±	-	25	多い(砂)	8	1
SK-56	22	須恵器	甕(口縁)	暗褐色	暗褐色	26.0±	8.4+	-	-	10	少ない	2	2
SK-56	18	須恵器	坏	赤褐色	赤褐色	14.8±	5.1	7.0	-	25	多い(赤)	12	3
SK-56	19	土師器	坏(ロクロ)	茶褐色	茶褐色	-	1.9+	6.8	-	30	少ない	18	4
SK-56	20	土師器	甕	黒褐色	赤褐色	-	2.0+	7.0	-	10	少ない	11	5
SK-56	21	須恵器	壺	黒緑色	灰色	5.8±	3.7+	-	-	10	少ない	22	7
SK-60	23	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	13.2±	4.8+	-	-	15	少ない	1	1
SK-60	24	土師器	坏(ロクロ)	淡茶褐色・橙色	黒褐色	-	1.7+	7.8±	-	20	少ない	7	2
SK-60	25	須恵器	甕(転用硯)	灰オリーブ色	灰黄色	-	-	-	-	5	少ない	10	3
SK-61	1	弥生土器	壺	黄橙色	黄橙色	-	15.5+	5.45±	-	70	少ない	2	1
SK-61	2	弥生土器	甕	暗褐色	暗褐色	22.8±	16.4+	-	19.1±	20	少ない	1	2
SK-98	1	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	1
SK-98	2	縄文土器	深鉢	赤褐色	赤褐色	26.8	28.4+	-	-	60	多い(繊維)	1	1
SK-100	2	須恵器	坏蓋	にぶい黄色	浅黄色	-	1.3+	-	-	20	少ない	1	1
SK-101	26	須恵器	坏	黄褐色	黄褐色	12.5±	3.8	8.1±	-	20	少ない	1	1
SK-102	1	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	10.7	2.2	6.2	-	95	少ない	1	1
SK-103	27	須恵器	坏	黄灰色	灰黄褐色	16.5±	5.4+	-	-	10	少ない	2	1
SK-112	1	縄文土器	深鉢	灰黄褐色	にぶい黄褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	2
SK-112	2	縄文土器	深鉢	灰黄褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	1
SK-112	3	縄文土器	深鉢	灰黄褐色	暗灰黄色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	3
SK-115	1	縄文土器	深鉢	にぶい黄褐色	橙色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	8	1B
SK-115	2	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	4	1A
SK-115	3	縄文土器	深鉢	橙色	黒褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	10	2
SK-116	1	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	明褐色	-	18.2+	-	-	10	多い(砂・赤・繊維)	4	2
SK-116	2	縄文土器	深鉢	橙色	灰黄色	-	12.1+	-	-	5	多い(繊維)	3	1
SK-117	1	縄文土器	深鉢	明赤褐色	にぶい黄褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	1
SK-118	1	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	にぶい橙色	39.6±	26.4+	-	-	35	多い(繊維)	1	1

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
ヨコナデ	ナデ	-	-	
ヨコナデ	ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ，下部回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ナデ，ヨコナデ	
タタキ	ナデ	-	-	
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	静止糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	自然釉
回転ナデ，下部手持ちヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
ミガキ，ハケ	糸痕	-	-	
ミガキ，ナデ	糸痕	-	-	
ミガキ，ハケ	糸痕	-	-	
ヘラケズリ，ミガキ，ハケ	糸痕	-	-	
ＬＲ縄文，ハケ	ハケ，ナデ	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
-	あて具痕	-	-	砥石としても使用
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部回転ナデ	口縁部回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	
ヘラケズリ	ヘラナデ	-	布目	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	自然釉
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
回転ヘラナデ，ロクロ目	ミガキ	回転糸切り離し	周縁回転ヘラナデ	内面黒色処理　底部外面墨書
-	あて具痕	-	-	
ＬＲ縄文，沈線，刺突文，５つの突起，ヘラナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	-	-	
ハケ，指頭痕	ハケ	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
ヘラ状工具のナデ，貝による条痕文	貝による条痕文	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	天井部焼成前線刻
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
貝による条痕文	貝による条痕文	-	-	
貝による条痕文	貝による条痕文	-	-	
貝による条痕文	貝による条痕文	-	-	
貝による条痕文	貝による条痕文	-	-	
貝による条痕文，上部文様帯あり	貝による条痕文	-	-	

遺構No.	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
SK-120	1	縄文土器	深鉢	黄灰色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	2
SK-120	2	縄文土器	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	2	3
SK-120	3	縄文土器	深鉢	灰黄褐色	にぶい黄褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	7	1
SK-120	4	縄文土器	深鉢	黒褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	6	4
SK-122	29	土師器	坏(ロクロ)	明黄褐色	にぶい黄褐色	14.2±	3.3+	-	-	5	少ない	1	1
SK-122	28	土師器	甕(底部)	橙色	明褐色	-	-	-	-	5	少ない	1	2
SK-123	30	須恵器	甕	褐色	褐色	27.3±	2.3+	-	-	5	少ない	1	1
SK-124	31	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	-	0.8+	7.1	-	20	少ない	1	1
SK-124	32	須恵器	甕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	23.0±	7.8+	-	-	10	少ない	2	2

附表7　溝出土土器観察表

遺構No.	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
SD-9	5	陶器	壺	暗灰色	黄灰白色	-	6.3+	12.2±	-	60	少ない(赤・白・砂)	74	4
SD-9	6	土師器	甕	暗褐色	黄橙色	17.7±	7.6+	-	-	10	多い(母)	45	2
SD-9	7	土師器	坏	明赤褐色	明赤褐色	-	4.3+	5.8	-	60	少ない	47	1
SD-10	8	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	1.7+	-	-	45	少ない(砂)	4	2
SD-10	9	土師器	足高高台付坏	にぶい橙色	青黒色	-	1.5+	-	-	10	少ない	14	3
SD-10	11	土師器	高台付坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	3.2+	7.2±	-	10	少ない	14	4
SD-10	12	須恵器	甕	灰黄色	灰白色	-	3.4+	17.8±	-	5	少ない	14	5
SD-10B	10	須恵器	坏	灰黄褐色	にぶい黄橙色	-	1.3+	9.0±	-	10	多い(母)	8	1
SD-17	14	須恵器	甕(底部)	暗灰黄色	黄褐色	-	-	5.2±	-	5	少ない	2	2
SD-17	15	須恵器	坏	灰色	灰色	-	2.6+	10.1±	-	5	少ない	1	1
SD-18	16	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	-	1.8+	15.9±	-	10	少ない	2	1
SD-18	17	須恵器	甕	灰色	灰色	-	4.4+	13.2±	-	5	少ない	7	2
SD-25	-	土師器	高台付皿	明赤褐色	褐色	-	1.5+	6.0±	-	15	少ない	1	1
SD-26	18	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	14.4±	4.3+	-	-	5	少ない	1	1
SD-26	19	須恵器	坏	黒褐色	黒褐色	-	1.4+	8.0±	-	10	少ない	1	3
SD-27	20	須恵器	坏	黒色	黒色(にぶい黄褐色)	-	0.9+	6.0±	-	5	少ない	-	1
SD-27	21	須恵器	坏	灰色	灰色	-	8.6+	2.4±	-	5	少ない	1	2
SD-27	22	須恵器	長頸壺	灰色	灰白色	-	6.7+	-	-	5	少ない	1	4
SD-27	23	須恵器	甕	黒褐色	灰黄褐色	-	2.7+	-	-	5	少ない	1	3
SD-28	28	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	-	0.8+	7.0±	-	10	少ない	3	1
SD-30	24	須恵器	高台付壺	灰色	灰黄色	-	1.5+	10.1±	-	5	少ない	1	4
SD-30	25	須恵器	坏	灰色	灰色	-	1.8+	9.0±	-	10	少ない	1	2
SD-30	26	須恵器	坏	黄灰色	黄灰色	-	0.8+	9.4±	-	10	少ない	1	1
SD-30	27	須恵器	長頸壺	灰色	灰色	-	4.4+	7.6±	-	5	少ない	1	3
SD-31	29	須恵器	坏	灰色	灰白色	-	1.6+	8.6±	-	15	少ない	1	1
SD-31	30	須恵器	甕(底部)	灰色	灰色	-	-	2.5±	-	5	少ない	1	2
SD-37	31	土師器	高坏(脚部)	にぶい褐色	にぶい褐色	-	4.4+	-	-	20	少ない(砂)	1	1
SD-5D	32	陶器	仏飯椀	明緑灰色	灰白色	-	2.6+	4.3	-	50	少ない	8	1

附表8　遺構外出土土器観察表（縄文時代）

位置	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
SI-007	10	縄文土器	深鉢	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	-	-	-	5	少ない	93	13
SI-013	5	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない(繊維)	28	11
SI-015	19	縄文土器	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	少ない	25	24
SI-017	6	縄文土器	深鉢	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	-	-	-	5	少ない	1	5
SI-018	18	縄文土器	深鉢	橙色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	少ない	78	23
SI-018	21	縄文土器	深鉢	灰褐色	灰褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	72	18
SI-026	3	縄文土器	深鉢	にぶい黄褐色	灰黄褐色	-	-	-	-	5	少ない	14	4
SI-027	17	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	黄褐色	-	-	-	-	5	少ない(繊維)	1	14
SI-027	20	縄文土器	深鉢	灰色	灰色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	120	20
SI-029	2	縄文土器	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない	12	2
SI-052	23	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	橙色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	14	16
SI-052	28	縄文土器	深鉢	にぶい黄褐色	灰黄褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	37	34
SI-054	35	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	灰黄褐色	-	-	-	-	5	少ない	-	22
SI-056	12	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない	112	1
SI-082	16	縄文土器	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない	295	25

調整		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文，沈線文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
-	-	-	ヘラケズリ	
ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ，あて具痕	-	-	

調整		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	-	灰釉
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
回転ナデ・下部ヘラケズリ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	ミガキ，ナデ	不明	不明	内面黒色処理
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ナデ，ヨコナデ	
横ヘラケズリ	ヘラナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
ヘラナデ	ヘラケズリ	-	-	五孔
-	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
タタキ後ナデ	ナデ	-	手持ちヘラケズリ	自然釉
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
横ヘラケズリ	ナデ	-	-	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	-	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り離し	手持ちヘラケズリ	
-	-	-	ナデ	五孔
縦ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ，絞り痕	-	-	外面赤彩
回転ナデ	回転ナデ，回転ヘラケズリ	-	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	灰釉がかかる

調整・文様		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
撚糸，口縁端部撚糸	不明	-	-	
擦痕	不明	-	-	
撚糸	不明	-	-	S1-024-58と接合
撚糸，口縁端部撚糸	不明	-	-	
撚糸	不明	-	-	
貝による条痕文	条痕文	-	-	
撚糸，口縁端部撚糸	口縁部撚糸	-	-	
撚糸	不明	-	-	
貝殻縁痕	ミガキ	-	-	
撚糸，口縁端部撚糸	ミガキ	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
ＲＬ単節縄文	不明	-	-	
撚糸	不明	-	-	
撚糸	不明	-	-	

位置	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
S1-086	29	縄文土器	深鉢	黒褐色	灰黄褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	109	32
S1-087	8	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない	1842	10
S1-100	7	縄文土器	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	少ない(繊維)	807	6
S1-102	13	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	にぶい黄褐色	-	-	-	-	5	少ない	319	8
S1-102	14	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	少ない(繊維)	309	15
J25-14	37	縄文土器	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	2
J28-06A	24	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	26
L28-02A	32	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	29
L29-01A	30	縄文土器	深鉢	明褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	31
L29-01A	31	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	30
M25-04	38	縄文土器	深鉢	橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	多い(砂)	1	9
M25-04	42	縄文土器	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	多い(砂)	1	14
M25-04	46	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	にぶい黄褐色	-	-	-	-	5	多い(砂)	1	11
M25-05	48	縄文土器	深鉢	黒褐色	明赤褐色	-	-	-	-	5	少ない	1	12
M25-05AG	49	縄文土器	深鉢	黒褐色	褐色	-	-	-	-	5	少ない	1	7
M25-05BG	47	縄文土器	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない	1	8
M25-14	43	縄文土器	深鉢	褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	少ない	1	3
M25-14	44	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	橙色	-	-	-	-	5	少ない	1	5
M25-14	45	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	橙色	-	-	-	-	5	少ない	1	4
M25-15	39	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	明褐色	-	-	-	-	5	多い(砂)	1	10
M25-15	40	縄文土器	深鉢	灰黄褐色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	多い(砂)	1	6
M25-15	41	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	多い(砂)	1	13
M26-10	33	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	橙色	-	-	-	-	5	少ない	1	2
M26-10	34	縄文土器	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	少ない	1	1
N28-03	22	縄文土器	深鉢	にぶい橙色	灰黄褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	19
N28-16	1	縄文土器	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	少ない	1	3
N28-22A	4	縄文土器	深鉢	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	-	-	-	5	少ない	1	9
N28-22A	15	縄文土器	深鉢	にぶい褐色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	少ない	1	7
O27-18A	25	縄文土器	深鉢	灰黄褐色	にぶい黄褐色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	1	28
P25-19B	36	縄文土器	深鉢	黒褐色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない	1	1
SD-10	11	縄文土器	深鉢	にぶい赤褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	少ない	14	6
SD-6	26	縄文土器	深鉢	橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	116	27
SD-6	27	縄文土器	深鉢	橙色	にぶい黄色	-	-	-	-	5	多い(繊維)	118	17
SK-3A	9	縄文土器	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない	B-4	12

附表9　遺構外出土土器観察表（弥生時代）

位置	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
S1-044	8	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	1	-
S1-044	20	弥生土器	甕	黒褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	78	-
S1-045	3	弥生土器	壺	黄灰色	黄灰色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	129	-
S1-045	4	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	黄灰色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	22	-
S1-045	6	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	黄灰色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	134	-
S1-045	7	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	褐灰色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	115	-
S1-045	9	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	灰黄色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	145	-
S1-045	10	弥生土器	壺	灰黄褐色	褐灰色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	129	-
S1-045	18	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	褐灰色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	79	-
S1-052	24	弥生土器	甕	にぶい褐色	にぶい橙色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	53	-
S1-057	12	弥生土器	壺	にぶい褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	177	-
S1-028	22	弥生土器	甕	黄灰色	にぶい赤褐色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	2	-
S1-049	25	弥生土器	甕	橙色	浅黄色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	16	-
S1-053	5	弥生土器	壺	にぶい橙色	暗灰黄色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	66	-
S1-068	13	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	褐灰色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	4	-
S1-086	11	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	黒褐色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	944	-
S1-086	21	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	灰黄褐色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	733	-
S1-088	2	弥生土器	壺	灰黄色	灰黄色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	907	-
S1-088	15	弥生土器	壺	灰黄褐色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	-	-
S1-088	19	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	黒褐色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	727	-
S1-092	17	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	76	-
S1-093	16	弥生土器	壺	にぶい橙色	にぶい黄橙色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	126	-

調整		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
条痕文	条痕文	-	-	
撚糸，口縁端部撚糸	不明	-	-	
撚糸，口縁端部撚糸	不明	-	-	
擦痕，口縁刻み	擦痕	-	-	
擦痕，口縁刻み	擦痕	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
条痕文	条痕文	-	-	
半截竹管文	不明	-	-	
貝殻腹縁文	不明	-	-	
ＲＬ単節縄文	不明	-	-	
半截竹管文，三角形陰刻	ミガキ	-	-	
半截竹管文	ケズリ，ミガキ	-	-	
ＬＲ単節縄文	ナデ	-	-	
格子状沈線文	不明	-	-	
格子状沈線文	不明	-	-	
格子状沈線文	不明	-	-	
押引半截竹管文	不明	-	-	
押引半截竹管文	ミガキ	-	-	
貝殻腹縁文	不明	-	-	
ＬＲ単節縄文	ミガキ	-	-	
ＬＲ単節縄文	ミガキ	-	-	
条痕文，沈線文	条痕文	-	-	
撚糸，口縁端部撚糸	ミガキ	-	-	
撚糸	不明	-	-	
擦痕，口縁刻み	擦痕	-	-	
条痕文，沈線文	条痕文	-	-	
ＲＬ単節縄文	不明	-	-	
撚糸，口縁端部撚糸	不明	-	-	
条痕文，刺突文	条痕文	-	-	
条痕文，刺突文	条痕文	-	-	
撚糸，口縁端部撚糸	不明	-	-	

調整		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
ＬＲ単節縄文，沈線	不明	-	-	
ハケ，刻み	ハケ，ナデ	-	-	
縄文，沈線	不明	-	-	
ＬＲ単節縄文，沈線	不明	-	-	
縄文，沈線，刺突文	不明	-	-	
縄文，沈線	不明	-	-	
ＬＲ単節縄文，沈線	不明	-	-	
沈線，刺突文	不明	-	-	
撚糸文	不明	-	-	
ハケ	ナデ	-	-	
縄文，ハケ	ナデ	-	-	
木目刻み，ハケ	ハケ	-	-	
撚糸文	ナデ	-	-	
ＬＲ単節縄文，沈線，刺突文	ナデ	-	-	
撚糸文，沈線，ナデ	不明	-	-	
撚糸文，ミガキ	ミガキ	-	-	
木目刻み	ナデ	-	-	
縄文，沈線	ナデ	-	-	
撚糸文，結節縄文	ナデ	-	-	
ハケ，刻み	ハケ	-	-	
撚糸文	ナデ	-	-	
撚糸文	ナデ	-	-	

位置	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
SK-50	1	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	暗灰黄色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	3	-
SK-60	23	弥生土器	甕	黒褐色	にぶい褐色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	4	-
SX-15	14	弥生土器	壺	黒褐色	橙色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	6	-
O27-22A	-	弥生土器	不明	赤褐色	暗黄褐色	-	-	-	-	5	少ない(砂)	1	-

附表 10　遺構外出土土器観察表（古墳時代）

位置	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
K25-01	1	土師器	高坏(脚部)	にぶい橙色	にぶい褐色	-	6.1+	-	-	30	少ない	21	1
L27-10	2	土師器	坏(丸底)	黒褐色	黒色	13.4±	4.6	-	-	40	少ない	136	1
N27-06	7	土師器	坏	灰黄褐色	にぶい褐色	-	2.2+	7.2±	-	5	少ない	1	1
N27-16	4	土師器	坏(丸底)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	14.2±	4.0+	-	-	20	少ない	120-66	1
N27-24	3	土師器	坏(丸底)	橙色	橙色	16.6±	2.8+	-	-	10	少ない	4	1
N28-20	5	土師器	坏	黄橙色	暗褐色	14.0±	3.4+	-	-	20	少ない	099A-254	2
N28-20	6	土師器	坏	明褐色	明褐色	13.8±	3.0+	-	-	10	少ない	1	1
O26-21	10	須恵器	坏蓋	灰白色	灰白色	-	1.1+	-	-	15	少ない	1	1
O27-12	11	須恵器	坏蓋	灰色	灰色	15.2±	2.0+	-	-	20	少ない	1	1
O27-13	9	須恵器	坏	灰色	灰色	8.4±	3.3+	-	-	25	少ない	1	1
表採	8	土師器	坏	暗褐色	暗褐色	8.2±	4.0+	-	-	30	少ない		2

附表 11　遺構外出土土器観察表（奈良・平安時代）

位置	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
J25-14	12	土師器	坏(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	14.6±	4.0+	-	-	10	少ない(砂)	1	1
L26-19	26	須恵器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	1.2+	9.0±	-	20	少ない(母)	48	1
L27-16B・17A	8	土師器	高台付坏	暗褐色	暗褐色	-	1.6+	6.4±	-	20	少ない	2	1
M25-07	18	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい橙色	17.2±	8.5+	-	-	5	多い(砂・赤)	1	1
M26-19	14	土師器	高坏(脚部)	明褐色	明褐色	-	3.7+	-	-	20	少ない	1	1
M26-21	15	土師器	高坏(脚部)	橙色	橙色	-	2.8+	-	-	10	少ない	1	2
M26-21	-	須恵器	壺	明灰色	明灰色	-	4.5+	-	-	5	少ない	1	1
M26-22	3	土師器	坏(ロクロ)	橙色	にぶい黄橙色	12.0±	4.6	7.0±	-	30	少ない	1	1
M26-23	5	土師器	坏(ロクロ)	明赤褐色	明赤褐色	-	1.5+	5.0±	-	10	多い(砂)	1	1
M26-25	32	土師器	甕	褐色	明褐色	21.3±	3.3+	-	-	5	少ない	1	1
M27-05	27	須恵器	高台付壺	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	6.1+	8.4±	-	5	少ない	130-2	2
M27-05	31	須恵器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	48.1±	5.2+	-	-	5	少ない	1	1
M27-07	-	須恵器	甕	明灰黄色	明灰黄色	-	5.0+	-	-	5	少ない(砂)	1	1
M27-07	-	須恵器	甕	明褐色	明褐色	-	3.5+	-	-	5	少ない	1	2
M27-07	-	須恵器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	3.7+	-	-	5	少ない	1	3
M27-15	16	土師器	坏(ロクロ)	褐色	褐色	-	1.5+	7.4±	-	20	少ない	1	1
M27-18	23	須恵器	坏	灰黄褐色	黒褐色	13.7±	3.0+	-	-	10	少ない	2	1
M27-25	29	須恵器	坏	褐灰色	褐灰色	-	2.0+	7.3±	-	20	少ない	1	1
M28-04	38	須恵器	坏蓋	灰オリーブ色	灰色	-	3.4+	-	-	10	少ない	31	2
M28-04	39	須恵器	壺	灰色	灰色	-	5.0+	12.0±	-	5	少ない	5	4
M28-04	40	須恵器	甕	灰褐色	灰褐色	-	-	-	-	5	少ない	28	8
M28-04	41	土師器	椀(ロクロ)	にぶい橙色	黒色	-	-	-	-	5	少ない	37	9
M28-04	42	土師器	甕	にぶい赤褐色	にぶい褐色	-	4.5+	5.0±	-	5	少ない	16	5
M28-04	43	土師器	高台付椀	赤褐色	黒色	-	1.8+	5.4	-	20	少ない	2	1
M28-04	44	須恵器	坏	オリーブ黒色	オリーブ黒色	-	1.8+	6.5±	-	10	少ない	37	6
M28-04	45	土師器	坏(ロクロ)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	-	1.8+	7.4±	-	15	少ない(砂・白・赤)	18	7
M28-04	46	須恵器	坏(底部)	灰色	灰色	-	0.8+	-	-	10	少ない	37	3
N27-01	35	須恵器	甕	黒褐色	にぶい黄橙色	-	6.0+	-	-	5	少ない	1	1
N27-17	30	須恵器	高台付坏	灰色	灰黄色	-	1.3+	9.7±	-	10	少ない	1	1
N27-17	33	須恵器	甕	灰色	灰色	20.2±	3.1+	-	-	5	少ない	1	2
N27-17	34	須恵器	甕	暗灰黄色	灰色	21.3±	3.8+	-	-	5	少ない	1	3
N27-22	7	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	-	1.5+	9.0±	-	5	少ない	1	1
N27-25	19	須恵器	坏	灰色	灰色	13.2±	3.7+	7.5±	-	40	少ない	3	2
N27-25	37	須恵器	甕	にぶい黄橙色	黒褐色	-	1.1+	14.6±	-	5	少ない	1	1
N28-05	1	土師器	坏(ロクロ)	赤褐色	赤褐色	10.8±	3.9	4.8±	-	40	少ない	3	1
N28-13	2	土師器	坏(ロクロ)	茶褐色	茶褐色	12.1±	3.7	5.1±	-	60	少ない(黒粒)	004-4	2
N28-13	11	土師器	高台付坏	褐色	褐色	14.4±	5.2+	6.0±	-	25	少ない	004-12	1

調整		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
縄文，沈線	不明	-	-	
ハケ，刺突文	ハケ	-	-	
撚糸文，沈線，ナデ	ナデ	-	-	
ヘラケズリ	ナデ	-	-	

調整		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
縦ヘラケズリ	ナデ	-	脚部内面ヘラナデ，ヘラケズリ	
横ヘラケズリ，ミガキ	ミガキ	-	手持ちヘラケズリ	内外面黒色処理
ナデ，手持ちヘラケズリ	ミガキ	-	ヘラケズリ	
横ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	-	内面黒色処理
ナデ	ナデ，ミガキ	-	-	内面放射状暗文
ヘラケズリ後ナデ	ミガキ	-	-	内面黒色処理
ヘラケズリ，ナデ	ナデ	-	-	漆付着
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
ヘラケズリ，ミガキ	ナデ，ミガキ	-	-	内外面黒色処理

調整		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ，ミガキ	不明	回転ナデ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	M-25-27と接合
ヘラナデ	ナデ，ヘラナデ	-	-	
ヘラケズリ	ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	灰釉
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	灰釉　宝珠つまみ
回転ヘラケズリ，ヨコナデ	ナデ	-	回転ナデ	
ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	
回転ナデ	ミガキ	不明	不明	内面黒色処理
横ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	
回転ナデ	ミガキ	回転糸切り離し	-	内面黒色処理
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	底部外面焼成前線刻
回転ナデ，タタキ	回転ナデ，あて具痕	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
口縁部ヨコナデ，縦ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横方向ナデ，タタキ	口縁部ヨコナデ	-	-	
回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
斜位ヘラケズリ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	不明	ヨコナデ	

位置	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
N28-21	13	土師器	足高高台付坏	赤褐色	赤褐色	-	4.0+	10.6	-	40	少ない(赤)	SK-5-1	1
N29-02	25	須恵器	坏	暗灰色	暗灰色	-	1.7+	9.4±	-	10	多い(母・白)	SK-34-1	1
O26-12	28	灰釉陶器	椀	灰色	灰白色	-	1.7+	7.6±	-	5	少ない	1	1
O26-16	-	土師器	坏(ロクロ)	にぶい黄橙色	淡橙色	-	1.0+	5.4	-	25	少ない	1	1
O26-21	17	土師器	甕	にぶい橙色	にぶい橙色	18.4±	4.6+	-	-	5	少ない(赤)	1	2
O27-19	16	土師器	坏	橙色	橙色	17.5±	2.0+	14.2±	-	5	少ない	060-41	1
O27-20	24	土師器	皿(ロクロ)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	15.4±	2.1	7.0±	-	15	少ない	109-13	1
O27-23	21	須恵器	坏	灰色	灰色	13.0±	2.9+	-	-	10	少ない(白)	056-112	2
O27-23	22	須恵器	坏	灰白色	灰白色	13.4±	3.1+	-	-	10	少ない	056-13	1
O28-02	20	須恵器	高台付坏	青灰色	灰色	15.6±	3.8+	10.6±	-	20	少ない	4	1
O28-03	4	土師器	坏(ロクロ)	茶褐色	茶褐色	12.0±	3.5	5.2±	-	30	少ない	1	1
O28-11	-	土師器	坏(ロクロ)	橙色	橙色	-	0.6+	5.4±	-	10	少ない	4	66
P25-23	36	須恵器	壺	灰色	灰オリーブ色	15.2±	7.0+	-	-	5	少ない	129-7	1
表採	9	土師器	甕	暗褐色	暗褐色	-	-	-	-	5	少ない	SK-29-1	2
表採	10	土師器	坏(ロクロ)	暗褐色	暗褐色	9.8±	3.7+	-	-	10	少ない(赤)	SK-29-1	1

附表12　遺構外出土土器等観察表（中近世）

位置	番号	焼質	器形	色調		口径	器高	底径	胴径	遺存度	混入物	注記No.	実測No.
				外面	内面								
K25-11	1	カワラケ	Ⅲ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	7.1	1.8	3.9	-	55	少ない	1	1
K25-07	2	カワラケ	Ⅲ	にぶい橙色	にぶい橙色	8.5±	1.7	5.2	-	60	少ない(赤)	10	1
K25-10	3	カワラケ	Ⅲ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	-	1.6+	5.1	-	40	少ない(赤)	3	1
K25-14	10	素焼	盃	にぶい橙色	にぶい橙色	3.8	2.4	2.5	-	80	少ない	1	1
K25-20	4	陶器	Ⅲ	灰白色	灰白色	10.2±	1.8	7.0±	-	20	少ない	1	1
L25-20	5	陶器	Ⅲ	にぶい黄色	にぶい黄色	10.2±	2.3	6.1±	-	40	少ない	3	2
M25-12	6	陶器	Ⅲ	灰黄色	灰黄色	-	1.5+	8.1±	-	10	少ない	4	1
M25-12C	12	陶器	香炉	灰白色	灰白色	-	4.3+	6.6±	-	15	少ない	1	1
M25-15	11	陶器	燈明Ⅲ	灰白色	灰白色	5.6±	2.3	3.9±	-	55	少ない	7	1
M25-16	9	陶器	すり鉢	灰褐色(サビ釉)	褐灰色(サビ釉)	-	5.7+	-	-	5	少ない	1	1
M27-25	7	須恵器	火鉢	灰黄褐色	灰黄褐色	11.2±	5.8+	-	-	10	少ない	1	2
N27-02	8	陶器	灯明具	黄褐色	黄褐色	-	3.3+	-	-	10	少ない	1	1

調整		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ，ヘラナデ	-	-	
口縁部ヨコナデ，横ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ，ナデ	-	ヘラケズリ	内面放射状暗文　畿内産
回転ナデ，手持ちヘラケズリ	回転ナデ	不明	手持ちヘラケズリ	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ，ヨコナデ	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
-	回転ナデ，ミガキ	回転糸切り離し	回転ヘラケズリ	底部内面墨書
口縁部回転ナデ	口縁部回転ナデ	-	-	自然釉
ヘラケズリ	ヘラナデ	-	-	体部外面墨書
回転ナデ	回転ナデ	不明	不明	

調整		底部		備考
外面	内面	切り離し方法	下面調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り離し	無調整	
回転ナデ	回転ナデ	-	-	
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	瀬戸・美濃・志野・丸皿（大窯5期）17C前葉
回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り離し	回転ヘラケズリ	瀬戸・美濃灰釉丸皿（大窯3期古段階）16CⅢ
回転ナデ	回転ナデ	-	-	瀬戸・美濃灰釉鉄絵皿
ナデ	ナデ	-	-	瓦質香炉
回転ヘラケズリ	回転ナデ	不明	回転ヘラケズリ	灰釉燭台
回転ナデ	ナデ	-	-	瀬戸・美濃（大窯1期新段階）16C初頭
回転ナデ	回転ナデ	-	-	M-26-22と接合
回転ナデ	回転ナデ	不明	回転ナデ	

附表13　出土瓦観察表

遺構番号	番号	遺物種類	色調（外面）	色調（内面）	調整（外面）	調整（内面）	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	時期	注記番号	実測番号	備考
SI-034	-	瓦	暗灰黄色	灰黄色			6	5	2	62	(古代)	22	-	
SI-051B	7	丸瓦	暗灰黄色	灰黄褐色	縦ヘラケズリ	布目	25.3	12.2	1.9	794.7	古代	113	12	カマド
SI-066	-	瓦	にぶい橙色	にぶい橙色	縄席文		4.9	4.1	1.9	39.3	古代	106	20	
SI-085	-	瓦	灰黄色	橙色			3	3	2	14	(古代)	89	-	
SI-099A	4	丸瓦	橙色	にぶい赤褐色	縦ヘラケズリ	布目	9.5	8.3	1.7	186.0	古代	294	6	Bカマド付近
SI-099B	-	瓦	黄灰色	灰黄色	格子タタキ	布目	14.0	11.1	3.1	472.0	古代	2	4	
SI-119	11	瓦	にぶい褐色	にぶい褐色	縦ヘラケズリ	布目	16.2	9.0	2.1	446.5	古代	4	11	
SI-127	45	瓦	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	斜格子タタキ	布目、ナデ	7.0	4.7	2.4	84.5	古代	56	45	
SI-128	2	丸瓦	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	縦ヘラケズリ	布目	14.5	13.8	1.9	572.7	古代	15	2	カマド
SI-134	9	平瓦	灰黄褐色	にぶい黄橙色	格子タタキ	布目、ヘラケズリ	18.4	6.9	2.5	432.3	古代	27	9	
SD-6	-	丸瓦	灰黄色	灰白色	ヘラケズリ	布目	6	7	2	108	古代	123	-	
SD-6	-	丸瓦	にぶい黄橙色	橙色			7	4	2	56	(古代)	133	-	
SD-16	13	平瓦	黒褐色	黒褐色	格子タタキ	ヘラケズリ	6.1	6.9	2.3	121.5	古代	7	1	
SK-5	4	平瓦	褐色	淡褐色	斜格子タタキ	ナデ	7.3	8.3	2.4	131.8	古代	1	4	
SK-5	3	瓦	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	6.8	7.4	1.6	69.3	(古代)	1	3	刻印
SK-5	-	平瓦	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		布目	6	6	2	67	古代	1	-	砥石転用
SK-15	7	丸瓦	にぶい黄褐色	にぶい褐色		布目	8.4	7.2	1.8	151.5	古代	13	2	
L27-16B・17A	-	瓦	にぶい黄橙色	暗灰黄色			3	6	2	38	(古代)	1	-	
L27-16B・17A	-	瓦	橙色	橙色			3	2	2	13	(古代)	1	-	
M26-21	-	瓦	にぶい褐色	明褐色		布目	7.0	8.2	2.5	160.0	古代	1	3	
M26-21	-	瓦	橙色	橙色		布目	6.5	8.0	2.1	136.7	古代	1	4	
M28-23D	-	瓦	灰黄色	にぶい黄色		布目	2.6	2.5	1.6	10.4	古代	1	13	
N28-14	-	瓦	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	縄席文	布目	4	4	2	33	古代	4	-	
O28-07	-	丸瓦	灰褐色	にぶい褐色	縦ヘラケズリ	布目	5.5	5.7	2.4	110.6	古代	SI-072-5	1	
O28-22B	-	瓦	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	タタキ	布目	4	4	2	34	古代	1	-	砥石転用
SI-010	-	瓦	灰色	(灰色)			3	4	2	14	中近世	296	-	
SI-022	-	瓦	灰白色	灰黄色			4	7	2	56	中近世	1	-	
SI-023	-	瓦	灰色	(灰色)			2	4	0.5	5	中近世	77	-	
SI-023	-	瓦	灰色	(灰色)			2	3	1	5	中近世	78	-	
SI-032	-	瓦	黒色	オリーブ黒色			3	2	2	13	中近世	3	-	
SI-039	-	瓦	オリーブ黒色	(灰色)			4	3	2	17	中近世	71	-	
SI-087	-	瓦	灰色	(灰色)			2	1	0.4	1	中近世	341	-	
SI-087	-	瓦	暗灰色	(灰色)			2	2	0.9	4	中近世	1662	-	
SI-108	-	瓦	灰色	(灰色)			1	2	1	2	中近世	2	-	
SK-5	-	瓦	灰色	灰色			5	3	3	47	中近世	1	-	
SK-5	-	瓦	黒褐色	灰オリーブ			4	5	2	37	中近世	1	-	砥石転用
SK-24	-	瓦	灰色	黒色			9	5	2	74	中近世	1	1	砥石転用、内外面こすりあり
SK-60	-	瓦	青黒色	青黒色			3	2	2	16	中近世	10	-	
SX-13	-	瓦	オリーブ黒色	オリーブ黒色			2	2	2	7	中近世	5	-	
M27-01	-	瓦	灰色	灰色			7	6	2	77	(中近世)	1	1	
M28-10A	-	瓦	灰黄褐色	(にぶい黄褐色)			5	5	2	41	中近世	1	-	
M28-17	-	瓦	オリーブ黒色	黒色			3	4	2	15	中近世	1	-	
M28-19A	-	瓦	灰色	(灰色)			1	2	0.5	1	中近世	1	-	
M28-19D	-	瓦	暗灰色	灰白色			3	4	0.7	7	中近世	1	-	
N27-12	-	平瓦	暗灰色	オリーブ黒色			5	7	3	66	中近世	2	-	
N27-12	-	瓦	灰色	オリーブ黒色			2	3	3	8	中近世	3	-	
N27-13	-	瓦	灰色	(灰色)			2	3	1	5	中近世	1	-	
N27-18	-	瓦	灰色	(灰色)	格子タタキ		2	3	0.5	3	中近世	2	-	細かいタタキ
N27-19	-	瓦	灰色	灰色			3	3	2	12	中近世	1	-	
N27-19	-	瓦	灰色	(灰色)			3	3	1	5	中近世	—	-	
N27-24	-	瓦	灰色	灰色			3	1	2	6	中近世	1	-	
N27-24	-	瓦	オリーブ黒色	灰色			2	3	2	12	中近世	3	-	
N27-25	-	瓦	灰色	(灰色)			2	2	2	3	中近世	2	-	
N28-09	-	瓦	黒色	灰色			2	3	2	8	中近世	4	-	
N28-19	-	丸瓦	灰色	黒色			5	5	2	43	中近世	4	-	
N28-19	-	瓦	灰色	オリーブ黒色			2	3	2	7	中近世	1	-	
N28-19	-	瓦	灰色	灰色			2	1	1	3	中近世	2	-	
N28-19	-	瓦	灰色	灰白色			4	4	2	30	中近世	8	-	
O27-17	-	瓦	暗灰色	黒色			4	2	2	15	中近世	1	-	
O27-21	-	瓦	灰色	(灰色)			3	1	1	4	中近世	2	-	
O28-02	-	瓦	灰色	灰色			6	6	2	63	中近世	4	-	
O28-02	-	瓦	灰色	灰色			2	5	2	2	中近世	4	-	
SI-015	-	瓦	灰色	灰色			7	9	2	141	近世	9	-	
SI-018	-	瓦	黒色	黒色			3	5	3	31	近世	60	-	桟瓦の可能性あり
SI-078	-	瓦	灰色	灰色			4	4	2	39	(近世)	114	-	
M27-07	-	瓦	黒色	-			3	3	2	10	(近世)	1	-	

附表14　土玉・土錘観察表（遺構出土）【遺構別挿図参照】

遺構番号	挿図番号	遺物種類	最大長(mm)	最大幅(mm)	重量(g)	色調	注記番号	実測番号	備考
SI-017	2	土玉	23.3	22.3	9.0	明赤褐色	153	12	
SI-018	12	土玉	31.3	32.7	29.5	にぶい褐色	73	13	
SI-018	13	土玉	32.6	28.9	21.0	にぶい褐色	61	14	
SI-051	5	土玉	25.8	28.3	19.4	にぶい橙色	107	11	
SI-110	3	土玉	25.4	35.3	24.6	橙色	15	1	
SD-6	34	土玉	22.4	24.7	14.0	にぶい褐色	107	1	
SI-028	1	管状土錘	42.1	11.3	4.8	にぶい橙色	1	9	
SI-055	1	管状土錘	39.2	8.8	2.3	赤橙色	24	12	
SI-055	2	管状土錘	43.3	8.6	3.1	にぶい橙色	140	13	
SI-068	1	管状土錘	40.0	9.1	2.5	にぶい橙色	3	8	
SI-079	1	管状土錘	36.0	8.5	2.3	にぶい橙色	617	23	
SI-079	2	管状土錘	35.8	8.2	2.1	にぶい橙色	210	24	
SI-084	33	管状土錘	44.3	9.1	3.1	橙色	49	27	
SI-093	4	管状土錘	43.1	9.5	2.8	橙色	87	4	
SI-100	15	管状土錘	44.7	10.0	3.3	にぶい黄橙色	110	15	
SI-120A	11	管状土錘	25.0	7.2	1.2	にぶい褐色	10	36	
SX-8	5	管状土錘	27.6	8.9	1.8	にぶい橙色	11	1	
SD-2D	40	管状土錘	36.0	17.7	13.0	明赤褐色	4	1	
SD-5D	42	管状土錘	45.0	9.5	3.2	橙色	13	4	
SD-5D	44	管状土錘	53.0	32.5	33.6	にぶい橙色	15	5	
SD-5D	43	管状土錘	48.5	8.0	2.5	にぶい褐色	15	6	
SD-5D	41	管状土錘	40.5	8.5	2.1	にぶい橙色	16	7	

附表15　土玉・土錘観察表（地点別採集）【挿図第318図】

位置	挿図番号	遺物種類	最大長(mm)	最大幅(mm)	重量(g)	色調	注記番号	実測番号	備考
N25-12	-	土玉	31.8	28.2	19.1	橙色	13	33	
N28-13	-	土玉	18.6	19.8	5.1	にぶい褐色	2	33	
K25-06	41	管状土錘	39.8	23.0	8.4	明赤褐色	4	22	
K25-06	45	管状土錘	38.4	32.0	24.8	にぶい黄橙色	5	23	
K25-06	44	管状土錘	50.8	24.9	21.2	にぶい黄橙色	7	24	
K25-06	43	管状土錘	47.9	20.4	16.0	にぶい黄橙色	7	25	
K25-07	40	管状土錘	46.1	16.0	9.9	にぶい黄褐色	9	26	
K25-07	38	管状土錘	38.9	7.3	1.5	橙色	8	27	
K25-07	46	管状土錘	47.4	21.4	16.9	にぶい黄橙色	10	28	
K25-10	42	管状土錘	42.5	22.0	6.2	橙色	1	5	
K25-18	39	管状土錘	36.5	10.0	3.0	にぶい橙色	1	11	
L27-04	1	管状土錘	30.8	4.5	1.7	明赤褐色	1	1	
M25-17	-	管状土錘	40.5	25.4	7.9	橙色	1	32	
N27-14	8	管状土錘	23.1	10.3	4.1	橙色	4	16	
N27-15	7	管状土錘	32.5	8.6	1.7	橙色	2	17	
N27-15	4	管状土錘	37.7	8.2	1.9	橙色	5	18	
N27-18	6	管状土錘	53.7	11.9	5.4	橙色	3	19	
N27-18	3	管状土錘	40.4	9.0	3.1	にぶい黄橙色	3	20	
N27-21	2	管状土錘	39.5	11.3	4.3	橙色	1	21	
N27-21	5	管状土錘	31.5	9.3	2.0	橙色	1	22	

位置	挿図番号	遺物種類	最大長(mm)	最大幅(mm)	重量(g)	色調	注記番号	実測番号	備考
N28-01	11	管状土錘	44.2	9.6	3.4	にぶい褐色	1	25	
N28-02	12	管状土錘	40.8	9.7	3.0	にぶい黄褐色	1	26	
N28-02	9	管状土錘	43.9	9.3	3.5	橙色	4	27	
N28-04A	13	管状土錘	41.1	10.5	3.4	橙色	1	31	
N28-06A	14	管状土錘	37.3	9.6	2.8	橙色	1	30	
N28-10	17	管状土錘	35.0	8.9	1.7	にぶい褐色	5	32	
N28-19	16	管状土錘	39.6	8.3	2.2	にぶい橙色	5	35	
N28-19	15	管状土錘	37.5	8.9	2.8	にぶい褐色	6	36	
N28-19	10	管状土錘	35.1	9.3	2.6	橙色	7	37	
O27-24A	18	管状土錘	16.6	8.2	0.9	にぶい褐色	1	44	
O28-02A	29	管状土錘	44.2	8.7	2.9	明赤褐色	1	45	
O28-02A	25	管状土錘	41.8	9.7	3.7	にぶい褐色	1	46	
O28-02A	23	管状土錘	44.7	9.2	2.9	にぶい褐色	1	47	
O28-02A	35	管状土錘	49.4	9.2	3.7	にぶい褐色	1	48	
O28-02A	24	管状土錘	42.8	8.3	2.5	にぶい褐色	1	49	
O28-02A	31	管状土錘	46.3	9.5	3.6	にぶい赤褐色	1	50	
O28-02A	32	管状土錘	49.8	9.1	3.4	黒褐色	1	51	
O28-02A	33	管状土錘	45.9	9.7	3.8	にぶい褐色	1	52	
O28-02A	20	管状土錘	48.2	10.0	3.9	にぶい赤褐色	1	53	
O28-02A	28	管状土錘	43.8	9.9	3.3	にぶい橙色	1	54	
O28-02A	22	管状土錘	48.8	9.5	3.6	橙色	1	55	
O28-02A	27	管状土錘	45.1	8.9	3.2	にぶい橙色	1	56	
O28-02A	26	管状土錘	47.0	9.1	3.4	にぶい橙色	1	57	
O28-02A	34	管状土錘	44.2	9.8	3.4	にぶい赤褐色	1	58	
O28-02A	36	管状土錘	57.3	9.0	3.5	橙色	1	59	
O28-02A	19	管状土錘	40.7	10.5	4.0	にぶい褐色	1	60	
O28-02A	30	管状土錘	44.0	10.2	3.6	橙色	1	61	
O28-02A	21	管状土錘	41.3	9.4	3.3	にぶい黄橙色	1	62	
O28-02A	37	管状土錘	25.2	8.9	1.6	にぶい赤褐色	1	63	
M25-16	-	土器片錘	53.0	20.5	10.4	褐灰色	1	30	須恵質

附表16　その他の土製品観察表【挿図第142図】

遺構番号	挿図番号	遺物種類	最大長(mm)	最大幅(mm)	重量(g)	色調	注記番号	実測番号	備考
SI-091	17	面子	17.6	19.2	1.8	にぶい橙色	2103	1	
SI-092	18	面子	21.5	19.4	2.2	橙色	111	1	
SI-095	19	面子	26.2	19.6	3.4	にぶい黄橙色	6	1	
SI-140	20	面子	28.7	23.9	4.8	橙色	24	-	
SD-3	21	面子	19.7	23.4	2.7	橙色	1	3	
SD-6	22	面子	27.4	21.4	3.3	にぶい橙色	143	6	
N27-14	23	面子	29.1	10.1	4.1	にぶい橙色	1	14	
N27-14	24	面子	28.8	19.1	3.5	にぶい橙色	1	15	
N28-16A	25	面子	32.1	27.3	6.4	橙色	1	34	
K25-01	15	七輪の網？	42.5	20.0	11.6	橙色	1	2	
SI-054	12	土板	54.4	55.2	21.9	明赤褐色	10	11	
SI-056	5	土板	48.3	31.9	13.1	にぶい黄褐色	89	11	
SI-057	6	土板	39.7	40.3	13.4	赤褐色	188	14	
表採	2	土板	31.0	28.5	9.2	橙色	L27-16B, 17A	1	

附表17　羽口・支脚観察表

遺構番号	挿図番号	遺物種類	最大高(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	胎土	注記番号	実測番号	整理No.	備考
SI-082	17	羽口	7.2	6.9	86.8		11	15	10	
SI-082	18	羽口	6.7	6.5	114.7	細かい砂粒が多い。小礫が極まれに混入。	181	21	6	
SI-082	-	羽口	5.1	3.9	42.1		196	-	9	
SI-082	-	羽口	3.8	3.1	15.0		294	-	2244	
SI-082	-	羽口	5.3	3.9	24.4		294	-	2246	
SI-097	6	羽口	3.2	2.9	9.7	白い砂粒を含む	520	9	7	
SI-097	5	羽口	3.6	5.1	27.8		833	8	8	
SI-101	5	羽口	9.7	9.1	1229.4		154	3	11	
K25-06	-	羽口	7.4	5.1	55.4		8	-	4	
M25-02・07	-	羽口	3.1	2.2	9.6		2	1	693	
M25-02・07	-	羽口	3.3	2.7	11.7		-	-	763	
SI-014	-	支脚	14.8	10.5	1031.4		42	-	-	
SI-017	7	支脚	11.8	9.2	857.9		176	11	-	
SI-018	-	支脚	19.2	7.2	614.2		62	12	-	
SI-022	-	支脚	6.9	10.7	510.7		3	1	-	
SI-023	4	支脚	21.3	9.3	1207.7		88	-	-	
SI-045	-	支脚	22.2	9.7	1324.3		143	7	-	
SI-073	-	支脚	20.3	10.9	1093.5		24	6	-	
SI-084	2	支脚	5.4	4.9	89.0		196	26	-	
SI-084	1	支脚	22.1	12.2	2078.3		1326	24	-	
SI-084	3	支脚	9.9	7.6	353.4		607	25	-	
SI-127	1	支脚	13.9	8.0	1048.0		180	52	-	
SK-14	-	支脚	8.4	9.8	471.8		6	3	-	
SD-9	-	支脚	3.8	5.5	81.5		74	4	-	

附表18　紡錘車観察表

遺構番号	挿図番号	遺物種類	材質	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	注記番号	実測番号	備考
SI-127	52	石製紡錘車	滑石	青灰色	33.9	33.4	17.0	34.0	6	46	
SI-008	1	石製紡錘車	蛇紋岩	灰色	39.3	38.9	8.5	24.6	29	10	
SI-014	1	石製紡錘車	滑石	緑黒色	37.8	37.8	7.2	32.2	25	10	
SI-098	2	石製紡錘車	蛇紋岩？	にぶい黄色	41.6	41.8	18.4	55.4	2554	25	
SI-099B	1	石製紡錘車	安山岩	黄灰色	33.1	19.4	16.4	12.2	347	5	被熱痕
表採	2	石製紡錘車	滑石	黒色	40.0	39.5	10.0	28.1	-	87	
SI-052	1	土製紡錘車	土製品	橙色	32.5	27.3	8.2	5.1	186	11	
SI-086	1	土製紡錘車	土製品	にぶい赤褐色	42.7	2.1	6.7	21.1	636	25	
SI-098	1	土製紡錘車	土製品	にぶい褐色	32.6	16.7	23.2	12.5	1004	24	

附表19　古代石製品観察表

遺構番号	挿図番号	遺物種類	石材	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	注記番号	実測番号	備考
L25-20	1	石錘	-	灰オリーブ色	55.8	47.6	11.5	49.2	2	13	
M25-2・7	3	磨石	-	黄褐色	78.7	59.7	38.7	244.7	2	15	
N28-25A	5	石斧	-	灰黄色	44.5	45.9	16.2	44.9	1	6	被熱痕
N28	4	凹石	-	灰オリーブ色	82.3	74.1	31.1	337.6	SK-37-2	1	
SI-011A	14	台石	-	灰色	83.3	76.8	64.5	609.8	74	14	低石のような使われ方か？
SI-023	1	丸玉	-	黒色	9.6	9.7	7.5	1.0	50	16	

遺構番号	挿図番号	遺物種類	石材	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	注記番号	実測番号	備考
SI-035	5	石槌		灰色	81.0	48.0	49.0	319.3	7	4	
SI-049	1	砥石	砂岩	にぶい黄橙色	109.4	88.3	46.6	537.6	18	9	被熱痕
SI-054	8	石槌		灰黄色	57.5	55.1	26.6	102.6	-	13	
SI-055	3	白玉		灰白色	7.2	6.9	3.9	0.2	107	14	
SI-067	2	石槌	石灰岩もしくは玉髄	乳白色	65.2	67.7	44.7	393.8	7	3	
SI-086	3	円礫		オリーブ灰色	73.9	65.2	52.3	350.6	2384	27	
SI-099B	-	礫		にぶい橙色	32.7	26.4	15.1	16.2	7	7	被熱痕
SI-100	-			にぶい黄色	71.9	45.5	26.5	102.3	755	16	被熱痕,使用痕
SI-101	3	鋳型		にぶい黄橙色	92.0	85.0	58.5	379.5	153	4	赤化痕
SI-101	4	金床石		灰色	159.3	61.4	46.2	373.2	149	5	被熱痕
SD-6	2	割石		灰色	30.9	48.1	29.0	63.9	44	4	被熱痕
SK-20	36	垂飾		灰色	28.2	27.3	5.0	5.8	4	3	
L27-11B・12A	-			褐灰色	47.2	41.2	51.5	151.6	2	1	被熱痕
N28-02	-	礫		灰褐色	31.5	36.4	11.0	36.1	2	4	被熱痕
N28-19	-			にぶい褐色	61.1	50.6	31.5	108.1	6	5	被熱痕

附表20　軽石観察表

遺構番号	挿図番号	遺物種類	石材	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	注記番号	実測番号	備考
SI-045	9		軽石	灰白色	74.5	67.6	4.2	63.9	114	9	
SI-045	10		軽石	灰白色	70.6	49.2	35.7	33.8	17	10	浮子
SI-045	8		軽石	灰白色	65.8	65.7	34.5	32.2	41	11	
SI-045	7		軽石	灰白色	39.5	30.5	23.0	8.0	138	12	
SI-046	5		軽石	にぶい黄橙色	86.4	65.2	31.6	46.7	29	5	
SI-070	3		軽石	灰白色	62.8	43.3	36.5	30.6	27	6	
SI-084	25		軽石	灰黄色	87.9	44.6	29.5	32.6	1125	28	
L28-12D	-		軽石	灰白色	46.2	39.5	34.2	15.0	1	2	
SD-11	4		軽石	灰白色	64.0	55.0	35.0	25.5	6	1	製品？
SI-005	13	砥石	軽石	灰黄色	59.3	34.2	45.3	137.5	11	12	被熱痕

附表21　砥石観察表

遺構番号	挿図番号	遺物種類	石材	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	注記番号	実測番号	備考
SI-006	9	砥石		灰白色	55.7	48.2	28.9	71.1	5	12	
SI-007	20	砥石	凝灰岩？	にぶい黄橙色	65.0	38.0	15.5	58.6	90	21	
SI-017	1	砥石		灰白色	57.3	45.1	23.0	54.3	56	13	
SI-034	4	砥石		褐色	54.2	41.1	12.1	44.0	17	5	
SI-046	4	砥石		灰黄褐色	112.9	77.3	77.0	803.2	19	4	被熱痕
SI-055	4	砥石		灰白色	30.1	25.1	21.0	18.5	61	15	
SI-055	-	砥石		灰オリーブ色	30.8	32.4	17.9	23.8	152	7	
SI-066	28	砥石		灰白色	40.1	48.6	43.2	68.1	40	18	
SI-085	18	砥石		暗灰黄色	68.4	54.4	17.9	87.3	632	18	
SI-086	2	砥石		灰白色	58.2	28.2	20.3	44.9	970	26	
SI-087	53	砥石？	砂岩	にぶい黄色	103.3	47.1	21.0	172.7	371	37	
SI-087	52	砥石		灰白色	59.7	35.7	20.9	55.1	1851	38	
SI-088	14	砥石	砂岩	浅黄色	188.5	136.0	71.5	1275.3	153	14	SI-089-6から移動
SI-130	5	砥石		褐色	35.0	32.0	17.0	27.5	2	6	
SD-3	1	砥石		にぶい黄褐色	117.3	39.7	14.0	101.0	1	2	被熱痕
SD-9	3	砥石		灰黄色	63.8	58.5	53.8	258.8	74	5	被熱痕

遺構番号	挿図番号	遺物種類	石材	色調	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	注記番号	実測番号	備考
SK-15	35	砥石			56.0	32.8	18.2	38.8	3	3	被熱痕
J25-14	-	砥石		白灰色	35.9	26.5	27.4	34.0	1	34	
K25-10	-	砥石		橙色	60.0	31.2	14.5	26.4	2	7	
M27-06	1	砥石		灰黄褐色	62.5	33.0	24.0	71.2	1	1	
N25-11	-	砥石		にぶい赤褐色	36.6	28.1	13.0	17.0	1	41	
N27-19	-	砥石		灰黄色	65.5	71.5	25.1	139.4	1	3	被熱痕
O27-15D	13	砥石		にぶい黄橙色	62.6	52.7	27.3	108.4	1	7	

附表22　鉄鏃計測表【第328図参照】

単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	現存長	刃部長	逆刺深	刃部幅	厚み	棒状部長	棒状部幅	棒状部厚	突起部幅	突起部厚	茎長	茎幅	茎厚	現存重量
1	SI-010	8	106.10	23.55		6.65	3.00	82.55	4.80	4.35						14.20
2	SI-026	6	123.50	12.50		7.40	1.65	115.90	3.25～4.85	1.70～2.60	5.50		7.60			5.78
3	SI-056	95－①	30.90	22.10		6.40	2.80	8.80	3.80	3.50						1.91
4	SI-056	95－②	40.6±					40.6±	3.90	4.20						3.01
5	SI-085	97	90.50					74.70	4.45	3.40	7.30	3.40	16.00	3.30	2.90	5.09
6	SI-087	1361	92.30	23.30	1.15	5.50	3.25	57.0±	4.60	3.65	8.20		35.3±	3.50	3.80	10.28
7	SI-059	1	33.80	7.60		8.10	2.70	26.20+	6.50	2.50						3.22
8	SI-079	266	35.40	18.65		6.60	2.70	16.75	6.20	2.35						2.02
9	SI-085	75	36.90	24.5±		7.70	2.50	12.4+	5.70	1.95						2.05
10	SI-088	211－①	14.35					14.35	4.80	4.30						1.02
10	SI-088	211－②	37.60					16.80	4.60	4.40	5.70		20.80	3.80		1.95
11	SI-087	870	64.00	23.60	6.0～6.2	9.20	2.40	45.10	4.40	3.60						4.03
12	SI-087	1065	63.30					38.00	4.00	3.90	7.4±		25.30	3.6±		5.63
13	SI-086	2029	107.45	6.0±		5.50	1.03	74.70	3.30	3.00	7.40	3.10	23.20	3.10	3.05	5.86
14	SI-097	350	47.30	10.0±		5.60	3.0-	37.3±	4.80	4.50						3.64
15	SI-127	145	70.45				2.35	50.35	4.85	4.25	8.00		17.60	3.75	3.30	5.90
16	SI-079	68	30.80	7.0±		7.80	3.0-	23.8±	4.30～4.50	3.50～3.90						2.64
17	SI-098	2099	67.35					49.80	6.30	4.00	8.00	4.30	16.00	5.50	4.50	8.69
18	SI-054	68	51.10	19.30	9.50+	27.20		26.8±	7.20	3.80	7.90	4.40	5.45	5.0±		8.17
19	SI-045	1	58.55	41.20		20.20	3.0±	17.35+	5.00	3.0±						9.05
20	SI-100	196	101.55	31.40	18.4・19.0	39.70	3.00	44.50+	5.90	5.50	9.15	6.00	36.30	3.50	3.60	16.24
21	SK-28	2	66.70	35.80	8.20・8.30	23.30	4.0±	30.90+	6.55	4.50						17.38
22	SX-1	6－①	23.80	23.80		18.50+	3.00									2.49
23	SI-081	131	40.60	22.80	4.25	13.25	1.75						18.70	3.30	0.80	2.74
24	SI-018	56	33.10					33.10	4.30～5.30	4.00～4.10						3.11
25	SK-56	1	41.00					41.00	3.80～4.00	3.50						2.57
26	SD-6	167	41.10					41.10	3.80	2.60						1.49
27	SX-1	6－②	36.30					36.3+	4.40	3.90						2.12
28	N25－12	1	35.00										35.0+	4.10	3.00	3.90
29	M25－13	1	26.67					26.67+	5.15～5.40	4.10～4.64						3.19

附表23　刀子等計測表【第329・330図参照】

単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	現存長	刃部長	刃部幅	背幅（厚）	関部幅	茎長	茎元幅	茎尻幅	茎厚	現存重量
1	SI-007	65, 66, 93	118.50	61.20	6.55	2.40	9.00	57.30	8.20	1.75	2.30～3.00	7.50
2	SI-010	44	65.70	40.95	9.50	2.15	12.0±	24.75	9.75		3.2±	11.10
3	SI-010	83	126.50	78.15	7.55～11.10	2.20～3.00	14.00	47.10	9.75	4.15	1.85～3.40	11.50
4	SI-010	13	48.50	36.00	4.50～ 7.75	2.70	8.30	12.50	6.00		2.10～3.50	4.00
5	SI-010	23	82.25	82.25	8.95～ 9.75	2.40～3.10						6.60
6	SI-010	44	38.25			2.50～2.85		38.25	7.80		2.40～2.85	3.70
7	SI-010	175	79.70	79.70	7.50～ 9.70	3.40						7.00
8	SI-017	9	79.25	14.50	10.0 ～12.70	3.70	11.50	64.75	9.45	1.10	1.40～2.50	6.00
8	SI-017	99	53.85	53.85	8.40～10.00	2.60～3.35						5.80
9	SI-017	17	97.00	30.30	5.45～ 7.60	2.40	10.80	63.60	9.20	2.45	2.10～3.20	9.00
10	SI-025	18	58.50	58.50	7.10～ 8.40	7.10～8.40					3.2±	4.20
11	SI-025	18	110.50	95.50	8.40～11.20	2.50～3.60	14.00	12.40	10.65			12.00
12	SI-026	5	60.60					60.60		2.40	1.45～2.60	3.38

挿図No.	遺構名	注記No.	現存長	刃部長	刃部幅	背幅（厚）	関部幅	茎長	茎元幅	茎尻幅	茎厚	現存重量
13	SI-027	71－①	65.70	29.30	12.50	3.50	14.25	36.40	9.30		2.6～3.6	11.17
13	SI-027	71－②	40.55	40.55	8.20～10.35	2.8 ～3.3						4.59
14	SI-027	30	130.40	72.40	5.10～10.45	1.85～3.45	8.65	58.00	7.85	2.25	2.25～2.85	9.42
15	SI-039	13	58.25	7.20	8.85	3.20	8.85	51.05	7.85		2.70～3.10	6.14
16	SI-040	38	57.60	38.65	4.30～ 6.95	1.90～3.15	7.75	18.95	6.5±		2.55～2.95	3.04
17	SI-044	175	65.80					65.80		3.20	0.95～2.80	2.11
18	SI-053	27－②	20.60	20.60	6.40	1.80						0.68
19	SI-054	136	21.40	21.40	6.80	2.50						1.00
20	SI-057	39	30.50					30.50	7.80		2.00～2.40	2.19
21	SI-070	52	96.40	21.20	8.5 ～12.3	2.5 ～3.4	13.40	75.00	9.20	2.80	2.10～2.80	11.46
22	SI-079	254	32.40	32.40	7.60	2.30						1.58
23	SI-079	647	40.50	40.50	14.60	3.40						3.48
24	SI-084	1250	47.80	34.50	10.40～11.90	3.15～3.60						6.56
25	SI-084	1088	27.40	27.40	8.00～ 9.00	1.90～3.15						2.38
26	SI-084	940	56.80	56.80	4.10～10.70	3.20～3.65						8.65
27	SI-084	348	171.00	112.50	10.05～13.10	3.20～4.40	14.00	57.50	9.55±	4.70		21.16
28	SI-085	193	128.40	64.20	7.20～ 9.50	2.85	11.80	64.20	8.80	1.10	2.20～2.40	9.39
29	SI-086	1181	51.11	44.40	7.93～13.86	2.95～3.21		6.71	10.08	9.61	1.20～2.92	5.53
30	SI-086	92	80.60	12.60	9.9±	3.80	13.40	68.00	12.50	2.00	3.30～3.90	8.25
31	SI-086	1131	34.85	34.85	6.10～ 7.90	1.8 ～2.1						2.45
32	SI-087	1688	35.10	35.10	7.1 ～ 8.1	3.3 ～3.4						3.36
33	SI-087	852	114.90	84.40	10.20～12.40	3.40～3.60	12.40	30.50	7.95		2.20～2.50	14.89
34	SI-087	794	82.10	36.55	13.10	3.25	15.20	45.55	11.20		2.90～3.60	14.20
35	SI-096	258－②	27.80	27.80	8.50	2.50						1.79
36	SI-096	258－①	54.00	54.00	8.50～11.20	3.00～3.70						8.30
37	SI-096	225	54.30	49.10	8.00～ 9.00	8.00～9.00	9.90	5.20	7.70			3.68
38	SI-096	257	52.00	52.00	12.20～15.55	4.00						10.25
39	SI-097	369	15.90	15.90	6.90	2.40						1.09
40	SI-098	2420	158.30	82.00	8.50～ 9.15	3.35	12.45	77.40	8.85	3.60	2.25～3.60	18.14
41	SI-100	570	89.80	89.80	8.60～10.50	2.70～3.40						8.58
42	SI-102	128	42.90					42.90	7.80	4.00	1.50～3.10	3.23
43	SI-116	18	96.95	41.20	8.80	2.65～3.80	11.05	55.75	8.25	2.15		10.10
44	SI-119	37	116.50	57.40	10.00～12.80	2.60～3.80	15.30	59.1+	9.95	4.50	3.10～3.60	18.29
45	SI-120	119	116.10	62.30	8.7 ～10.8	2.4 ～3.5	13.40	56.10	7.95	1.80	1.30～2.50	12.12
46	SI-120	163	134.50	129.10	7.90～14.40	2.2 ～3.9	15.80	12.60	9.00			20.73
47	SI-120	72	77.80	76.50	5.6 ～10.0	2.6 ～4.0	11.95	2.00	10.70			7.77
48	SI-135	41	61.80	61.8+	4.9 ～10.5	1.4 ～3.5						5.51
49	M27-11	1	61.50	17.9+	9.40	3.3±	10.20	43.60			3.8～4.1	9.78
50	SK-15	11	46.85	46.85	6.60	2.50						3.24
51	O27-18	3－①	48.60	39.25	6.2 ～ 9.6	2.3 ～3.0	12.00	9.35	7.90		2.50	5.14
51	O27-18	3－②	19.65					19.65		5.30	1.20	0.91
52	M25-12i	6	71.40	12.50	16.10	2.60	15.45	58.90	10.60		3.10～3.20	9.83
53	SD-6	172	22.85	22.85	7.25	2.10						0.84
54	M26-16	(小刀)6	191.50	113.00	21.20	2.40～3.50	21.80	78.50	18.80	3.00	2.20～2.40	42.20
55	SI-107	(小刀)55	45.95	45.95	17.20	1.10						4.03
第337図12	N27-1	(大刀)3	99.50	48.30	35.90	3.70	33.10	49.40	20.10			27.42

附表24　鎌・穂摘み具計測表【第331図参照】　　単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	現存長	刃部長	刃部幅	背幅（厚）	柄装着部幅	目釘孔径	現存重量	備考
1	SI-070	42	163.20	157.90	20.70～32.20	3.20～3.35	35.40		70.65	
2	SI-082	333	47.60	41.00	32.40	2.60	32.85		17.66	
3	SI-120	121	84.90	69.6+	34.60～35.80	2.00～2.30	36.00		36.48	
4	M29-4	2	47.60	44.5±	34.00	2.20	33.90		17.28	
5	SI-032	1	72.30	34.40	39.40	1.00	42.50		17.19	
6	SI-079	351	17.00		36.90	1.10			3.49	
7	SI-081	908	96.15	86.90	17.90	1.35～1.55	96.15	3.5～3.6	9.62	
8	SI-057	49	36.40	34.00	17.10	0.70	36.40	4.0×4.0	2.37	
9	SI-084	1035	35.25		20.25	19.70	33.60	2.5×3.0	3.03	
10	SI-087	403	51.35	50.35	18.90	1.70	51.35	5.0×4.7	8.32	
11	SI-087	663	98.10	93.90	22.10	1.35	98.10	3.5×4.0	14.44	

挿図No.	遺構名	注記No.	現存長	刃部長	刃部幅	背幅（厚）	柄装着部幅	目釘孔径	現存重量	備考
12	SI-098	828	40.65	35.90	19.60	1.15	33.90	3.55	5.23	
13	SI-055	16	44.60	44.60	13.90	1.25	44.60		3.16	
14	M25-12i	14	25.30	21.6+	24.00	1.90			4.88	
15	SI-100	161	38.27	38.27+	20.27	1.80～2.21			5.11	

附表25　工具計測表（1）【第332図参照】

単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	名称	現存長	刃部長	刃部幅	背幅	棒状部長	棒状部幅	厚さ	突起幅	厚さ	茎長	茎幅	厚さ	現存重量
1	SI-086	654	ノミ	132.60	9.00	9.60		123.60	5.50～6.20							17.17
2	SI-086	418	ノミ	38.80	9.50	8.5±		29.30	4.00							3.20
3	SI-086	103	彫刻刀?	47.90	9.20	8.8±		38.70	4.2 ～4.4							4.87
4	SI-086	757	ノミ	60.50	5.80	5.8+		54.70	3.9 ～4.6							4.59
5	SI-017	163	ノミ	66.10	11.85	18.89		50.75	3.10～8.70							15.15
6	SI-010	7	ノミ	78.50	5.0±	11.00		54.25	8.50	4.10	8.30	-	19.25	5.60	2.60	11.70
7	SI-127	8	ﾀｶﾞﾈ	58.70	2.5±	7.10		56.2±	4.0 ～6.3	2.5 ～4.0						4.75
8	SI-055	3	ﾀｶﾞﾈ	25.10	6.1±	4.50		19.0±	6.90	4.30						2.61
9	SI-050	1	ﾀｶﾞﾈ	35.30		5.20			5.70							1.72
10	SI-086	169	小型ﾀｶﾞﾈ	25.10	4.35	4.80		20.75	2.8 ～3.5	2.1 ～2.5						0.76
11	SI-054	136	小型ﾀｶﾞﾈ	21.70					3.10	3.20						0.58
12	SI-027	61	彫刻刀	21.80	21.80	6.40	1.75									0.84
13	SI-027	85	彫刻刀	24.50			2.30									1.10
14	SI-132	6	ﾀｶﾞﾈ	75.60		5.50			5.60	3.40	6.50	5.40	11.30	4.00	3.80	9.10
15	SI-005	44－①	棒状	44.80				44.80	3.80～4.80	3.60						2.27
16	SI-082	6	工具の柄	55.40					4.7 ～5.3	3.0 ～4.3						6.40
17	SI-012	8	錐？	75.60					2.70～5.60							5.45
18	SI-081	533	錐？	28.30					3.1 ～4.1	2.2 ～3.0						0.77
19	SI-088	402	ﾀｶﾞﾈ	33.40	11.9±	7.50		21.5±	4.4 ～4.8	2.00～2.25						1.66
20	SI-084	79	工具の柄	24.20					4.80	2.60						1.62
21	SI-088	990	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ	33.00					7.30～8.90	2.80						3.92
22	SI-041	5	工具の柄	39.70				39.70	5.7 ～9.5	5.0±						5.74
23	SI-088	83	工具の柄	39.90				39.90	7.00～7.20	1.20～2.30						2.87
24	SI-088	94	工具の柄	21.40				21.40	6.50	1.30～1.80						1.41
25	SI-005	44－②	棒状	31.60				31.60	4.40～6.80	3.20						1.30
26	SI-055	139	工具の柄	37.90				37.9+	6.00	2.80						2.76
27	SI-044	190	工具の柄	20.20				20.20	4.5 ～4.6	2.0 ～3.0						0.97
28	SI-081	51	工具の柄	47.40					4.2 ～5.8	3.4 ～4.2						3.70
29	SI-082	154	工具の柄	27.50					4.3 ～5.5	1.50						0.96
30	SI-088	402－①	工具の柄	46.95				46.95	5.50	3.2 ～3.5						3.63
31	SI-088	402－④	棒状	16.10					4.00	2.10						0.77
32	SI-088	402－③	工具の柄	19.10				19.10	3.40	2.60						0.57
33	SI-017	9	錐？	66.50				66.50	3.60	3.20						2.89
34	SI-084	7	工具の柄	57.30				39.85	5.4 ～8.2	5.0±	9.99	10.0	17.45	6.60	5.50	8.99

附表26　工具計測表（2）【第333図参照】

単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	名称	現存長	刃部長	刃部幅	棒状部長	棒状部幅	厚さ	突起幅	厚さ	茎長	茎幅	厚さ	現存重量
1	SI-066	29	ノミ	160.60	31.40	28.85	90.15	10.00	6.50	13.50	6.20	32.30	8.50	7.75	59.38
2	SX-23	1	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ	124.50	36.35	12.40	88.15	5.85～ 9.70	3.10～4.40						26.05
3	SD-26	2	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ	141.05	10.75	15.55	36.65	14.00～15.80	4.30	32.00	3.90	68.80	28.20	2.30	74.85
4	SI-087	1852	刺突具	97.70		6.00	61.20	12.30	7.50	25.80	7.30				55.87
5	SI-010	22	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ	83.45	27.65	17.80	55.80	3.3 ～ 4.1							19.00
6	M25-13	8	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ？	61.80	15.70	12.70	46.10	8.0 ～ 9.8	3.4 ～3.5						8.81
7	SI-010	21	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ	41.45	41.45	1.33									4.90
8	N28-9	2－①	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ	50.00	50.00	21.00									11.89
9	SI-057	68	ノミ？	48.10				5.0 ～ 7.0	3.6 ～4.3						5.53
10	SI-087	122	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ	39.70				6.50～ 8.20	4.00～4.50						5.32
11	M25-12	1	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ	35.40				9.6 ～10.7	4.7 ～6.4						6.20
12	SI-120	149	ﾀｶﾞﾈ	53.70			53.70	5.3 ～ 5.8	3.00						4.60
13	SI-088	403	石突？	26.50				7.80	0.6 ～0.8						3.70

挿図No.	遺構名	注記	名称	現存長	刃部長	刃部幅	棒状部長	棒状部幅	厚さ	突起幅	厚さ	茎長	茎幅	厚さ	現存重
14	M27-8	2	ﾀｶﾞﾈ	74.80	7.5±	8.10	67.3±	4.9 ～ 8.5	3.6 ～5.0						10.50
15	N28-9	2－②	ﾔﾘｶﾞﾝﾅ柄	65.80			52.80	8.20	5.25	7.50	8.2±	13.00	4.30	4.70	10.75
16	SI-085	882	工具の柄	42.80				8.20	5.6±						8.77
17	SK-13	5	ノミ	159.00	4.00	12.45	155.00	8.00～ 8.20	7.80～8.60						49.55

附表 27　鉄斧計測表【第 334 図参照】　　単位＝mm, g

挿図 No.	遺構名	注記 No.	現存長	刃部幅	中央部幅	中央奥行	装着部外法	装着部内法	現存重量	備考
1	SI-075	20	72.70	37.85	32.10	11.20	36.95×21.50	27.40×13.50	91.00	

附表 28　紡錘具等計測表【第 334 図参照】　　単位＝mm, g

挿図 No.	遺構名	遺物 No.	名称	紡錘車径	厚さ	孔径	軸径	軸長	現存重量	備考
8	SI-120A	296	紡錘車	47.6×47.9	0.8～1.5	7.50			12.59	
9	SI-120A	76	紡錘車	55.5×48.5	1.7～2.9	4.6×4.9			27.15	
10	SD-14	8	軸				4.7～5.0	109.15	8.90	
11	SI-055	9	軸				3.6～4.0	36.80	2.01	
12	SI-055	2	軸				3.0～3.6	41.30	1.51	
13	SI-082	382	軸				2.8～3.0	53.50	3.18	ヤス？

附表 29　漁具等計測表【第 334 図参照】　　単位＝mm, g

挿図 No.	遺構名	注記 No.	名称	現存長	頭部長	頭部幅	棒状部幅	棒状部厚	現存重量	備考
14	SI-087	127	釣針状製品	30.80	6.50	1.70	3.50	4.80	2.40	
15	SI-057	9	ヤス	86.25	2.0±	2.45	2.70～3.60	3.20～4.10	5.08	
16	SI-069	9	ヤス	36.00	1.5±	1.50	2.90～3.60	2.25～3.70	1.68	
17	M25-15	1	針状製品	38.80			2.35	2.25	0.79	
18	SI-087	122	針状製品	23.70		1.50	2.40～2.80	2.30	0.52	
19	M25-15	1	針状製品	78.70			1.90～2.40	1.90～2.40	2.27	

附表30　釘等計測表【第335図参照】　　単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	遺物No.	名称	現存長	頭部奥行	頭部幅	頭部厚	棒状部長	棒状部幅	棒状部厚	現存重量	備考
1	SI-010	50	釘	78.65	12.85	16.40	2.41	72.25	6.2～7.2	6.8 ～7.0	19.60	
2	SI-088	343	釘	52.60	8.75	11.10	1.95	52.65	5.65～6.00	3.60～3.90	7.06	
3	SI-120	149	釘	32.30	3.50	4.85		28.80	4.20	2.80	2.00	
4	SI-120	241	釘	41.31	20.40	22.50	4.80	36.50	6.50	6.60	15.97	
5	SI-131	6	釘	62.40	5.50	8.45	4.60	57.80	5.6～6.6	3.1 ～4.8	6.12	
6	SI-099	338－1	釘	115.20	8.40	8.60			8.70	6.50	19.63	
7	SI-099	338－2	釘	103.25				103.25	7.95	6.0±	16.53	
8	M25-13	1	楔	81.80				81.80	5.0～10.9	4.0 ～6.5	23.02	
9	SI-057	121	釘？	74.90					6.0～6.6	4.1 ～4.3	7.89	
10	M25-12d	12	釘	56.70	14.30	17.70	6.20	50.50	11.40	7.70	19.37	
11	SI-088	218	鋲	21.30	6.80	7.40	3.1±	18.2±	4.60	4.30	1.24	
12	SI-120	121	鎹状	64.60	12.70			57.30	6.20	3.00	7.26	
13	SI-087	122	釘	81.10				81.10	4.50～6.20	2.80～4.30	7.85	
14	SI-087	759	棒状	58.40			4.8～5.2	4.0～ 5.4		4.27		ねじり有
15	SI-127	9	釘	54.5±				54.5±	4.0～4.8	2.5 ～3.4	4.70	
16	SI-099	321	釘	37.80				37.80	4.70	4.50	2.48	
17	M25-13	1	釘	25.0+					4.1～5.0	5.9±	3.20	
18	SK-32	1	鎹	96.90	6.20	10.40	2.85	94.05	9.50	3.20	15.78	
19	M25-12i	21	釘	22.50	8.8±	8.80	3.35	19.15	4.0～4.1	4.60	1.82	
20	M25-12h	13	釘	23.90	7.0±	7.10	2.60	20.00	3.90～4.10	4.20	1.66	
21	M25-12i	21	釘	55.60				55.60	4.20～4.10	4.70～4.40	3.48	
22	SI-093	77	釘	28.10	8.00	8.00	0.8～0.9	27.3～27.4	3.30	2.00	1.67	

挿図No.	遺構名	遺物No.	名称	現存長	頭部奥行	頭部幅	頭部厚	棒状部長	棒状部幅	棒状部厚	現存重量	備考
23	M25-12h	11	釘	48.10	7.65	8.10	4.00	44.10	3.60	3.90	2.42	
24	M25-12h	3	釘	48.20	9.00	7.4±	1.70	46.50	3.80～ 4.20	4.00	2.75	
25	SD-6	66	釘	67.10	3.10	8.20		64.00	4.00	3.60	4.80	
26	N25-11	1	釘	139.50	12.20	11.20	5.45	134.05	7.20～ 7.80	7.50～8.20	28.10	
27	M25-12j	21	釘	75.85				75.85	5.20～ 6.00	5.30～6.20	6.47	

附表31　馬具計測表【第336図参照】　　単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	名称	鏡板径	太さ	銜環径	太さ	棒状部	太さ	現存重量	備考
1	SI-086	110	素環鏡板付轡	52.80×57.60	6.1×6.7	32.55×32.80	6.70×6.50	65.20	6.90×7.30	62.71	鉄製

附表32　刀装具・鑷子・留金具等計測表【第336図参照】　　単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	形状等	現存長	(頭部) 長	(頭部) 幅	(棒状部) 幅	(棒状部) 厚	目釘孔径	現存重量	備考
2	SI-085	376	環	55.20			5.25× 4.95			8.13	
3	SI-055	48	花形飾り金具	39.50	13.50	高さ12.5		0.50～0.90	2.30	1.94	
4	SI-056	112①	環状	29.10			9.1 ～11.7	6.60		7.04	断面菱形
4	SI-056	112②	環状	28.80			9.20～ 9.60	5.70		5.10	断面菱形
5	SI-044	178	留め金具	12.00	12.00	29.70	4.10× 4.60			4.46	
6	SI-023	40	把縁金具	18.9±			21.60	1.1 ～2.0		2.70	
7	SI-132	8	把縁金具？	20.80	22.50	24.90		0.40～1.40		10.56	
8	SI-085	554	責金具	43.20		8.40	23.00	2.80～3.20		10.61	
9	SI-087	122	U字形金具	50.50		52.70	9.00	5.00		17.10	
10	SI-098	2440	鑷子（せっし）	31.80	10.10	12.30	6.70	21.70	4.50	2.40	
11	SI-098	50	吊り金具	45.00			8.9±	3.3 ～4.0		9.07	鉤状
12	SI-105	226	板状	54.20			20.2 ～21.1	1.2 ～1.9	2.05×2.55	6.97	目釘付
13	SI-105	27	板状	35.40				2.4 ～2.7		6.03	透かし有
14	SI-105	99	撥形の板状	18.40			14.60～20.30	1.30～1.50		1.97	

附表33　扁平棒状鉄製品計測表【第334図参照】　　単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	形状等	現存長	(頭部) 長	(頭部) 幅	(棒状部) 幅	(棒状部) 厚	目釘孔径	現存重量	備考
2	SI-023	51	扁平棒状	29.20			6.80～ 9.80	0.70		0.37	
3	SI-086	2343	鉄片	17.50			11.80	1.5 ～1.6		1.43	
4	SI-055	13	板状	30.60			12.70～13.40	1.00～1.40	4.0±	2.48	
5	SI-120	270	板状	75.70	6.95	8.40	17.00～19.70	2.50～2.70	5.0～5.3	23.80	
6	SI-088	64	扁平棒状	100.70			5.85～ 6.20	1.00～1.20		5.53	
7	N28-09	2	扁平棒状	66.19			8.45～ 9.30	2.00		7.20	

附表34　その他の鉄製品計測表(1)　【第337図参照】　　単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	形状等	現存長	(頭部) 長	(頭部) 幅	(棒状部) 幅	(棒状部) 厚	目釘孔径	現存重量	備考
1	SI-124	8	棒状	172.00	46.30	24.30	7.30～ 7.80	4.80	3.90～4.30	36.96	
2	M28-19	1	閂	122.51	64.28	17.80	12.90～16.90	7.0±		83.90	
3	SI-024	48	双頭の棒状	77.60	10.4±	6.0～6.2	4.00～ 4.50	2.20		4.28	
4	M25-12cdhi	4	棒状	106.10			4.9 ～ 5.8	2.8 ～3.4		3.25	簪巻き
5	SI-127	7	棒状	30.30			3.10	3.20		1.84	銅製針金付
6	SK-56	20－①	三叉状	19.50	13.80	29.20	3.1 ～ 4.6	2.2 ～4.3		3.09	
7	SK-56	20－②	棒状	24.20			4.70	4.0 ～5.4		2.29	
8	M25-12cdhi	4	蝶番	26.40			17.3 ～18.0	8.20	3.50	6.78	
9	M27-11	1－③	留め金具	26.20			15.7 ～16.2	1.5 ～1.8	2.2～2.5	2.55	
10	SX-8	4	板状	31.00			14.1 ～15.0	1.20		4.10	

挿図No.	遺構名	注記No.	形状等	現存長	(頭部) 長	(頭部) 幅	(棒状部) 幅	(棒状部) 厚	目釘孔径	現存重量	備考
11	K25-25	1	鋸？	181.70	126.40	28.20	27.10・28.20	13.40・12.65	3.7±	79.39	
13	SI-002A	147	三角形	46.20		18.40		1.35～ 1.60		4.80	
14	N25-12	13	三角形	21.40			22.7 ～30.8	2.5 ～ 4.3		3.74	

附表35　その他の鉄製品計測表(2)　【第338図参照】　　単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	形状等	現存長	幅	厚	目釘孔径	現存重量	備考
1	SI-083	68	板状	49.95	63.00		4.0×4.5	25.87	目釘孔有
2	SD-1	5	湾曲した板状	17.50	155.80	1.8 ～3.3		201.87	
3	M25-12i	20	板状	74.60	46.20	1.70～1.80	5.7×5.8	32.10	
4	SI-040	2	板状	69.00	88.80	0.5 ～3.4		35.77	
5	SD-1	1	湾曲した板状	56.05	76.40	1.80～2.35		18.17	

附表36　銅製帯金具計測表【第339図参照】　　単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	部位	外郭	高さ	厚さ	透かし	孔径	鋲脚径	鋲脚長	現存重量	備考
1	SI-066	8	巡方	31.41×32.00	4.00	1.55～1.90	17.80×5.50		2.0±	6.80	10.87	
2	SI-132	5	(裏蓋)	30.00×20.20		0.50～1.01		2.00	1.80		3.92	
3	SD-1	3	不明	23.00		0.3 ～0.7					0.60	
4	SI-127	2	蛇尾	29.33×44.01	6.24	1.66～1.78			1.5～2.0	3.80	16.72	

附表37　銅製品計測表（奈良・平安時代）【第340図参照】　　単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	名称	長さ	幅	高さ	孔径	厚さ	現存重量	備考
1	SI-039	57	花形飾金具	18.35	17.34	3.80	3.20×3.30	0.30	0.84	
2	SI-088	243	銅板	58.80	56.20		2.45×4.95	0.9 ～1.1	13.78	
3	SI-097	266	帯状飾金具	48.20			5.40～6.00	0.75～2.30	3.10	
4	M25-12e	5	銅滓	23.30	13.00			8.65	6.88	

附表38　銅製品計測表（中世以降）【第341図参照】　　単位＝mm, g

挿図No.	遺構名	注記No.	名称	現存長	頭部長	頭部幅	頭部高	棒状部長	棒状部幅	厚さ	現存重量	備考
1	L25-17	1	分銅	29.70	3.65	3.05	2.70	25.15	13.90	14.00	38.94	
2	SK-23	1	花弁状蓋金具	10.50	6.20	6.20	6.60			0.10	0.28	
3	M25-2	2	不明	46.50	8.90	5.00	6.10	37.60	4.7～ 4.8	1.4～3.0	5.37	
4	SD-24	2	キセル雁首	41.20	19.40	17.20	12.30	34.90	9.6～10.4	0.5～1.1	4.89	
5	SK-102	3	キセル雁首	57.00	16.40	16.00	11.10	51.55	6.8～10.1	0.7～1.5	9.92	
6	SK-102	2	キセル吸口	62.10	24.80	10.80	10.50	37.30	3.9～ 7.7	0.7～1.0	8.04	
7	K25-13	1	キセル雁首	56.30	16.30	15.20	8.30	51.15	5.75～ 9.30	0.3～0.6	5.15	
8	M28-13A	1	キセル雁首	51.88	10.50	10.60	6.75	50.10	10.44×10.90	1.08	6.50	
9	N28-4	1	キセル雁首	27.52	15.72	14.75	12.00	22.80	5.88× 6.45	1.00	3.10	
10	N28-10	1	キセル雁首	29.52	14.57	14.15	9.85	24.60	6.31～ 6.45	0.86	4.10	
11	M25-12g	1	キセル吸口	76.70	25.55	9.50	9.60	51.15	9.9～ 5.6	0.7～1.1	15.11	
12	M25-16	3	キセル吸口	57.70	21.60	9.20	8.60	36.10	8.9～ 3.3	0.3～0.5	4.85	
13	O27-13	183	キセル吸口	69.21					8.18～ 3.65	0.45～0.62	2.60	

写真図版

遺跡周辺航空写真

図版 2

千葉寺地区全景【西側より】

遺跡全景【西側より】

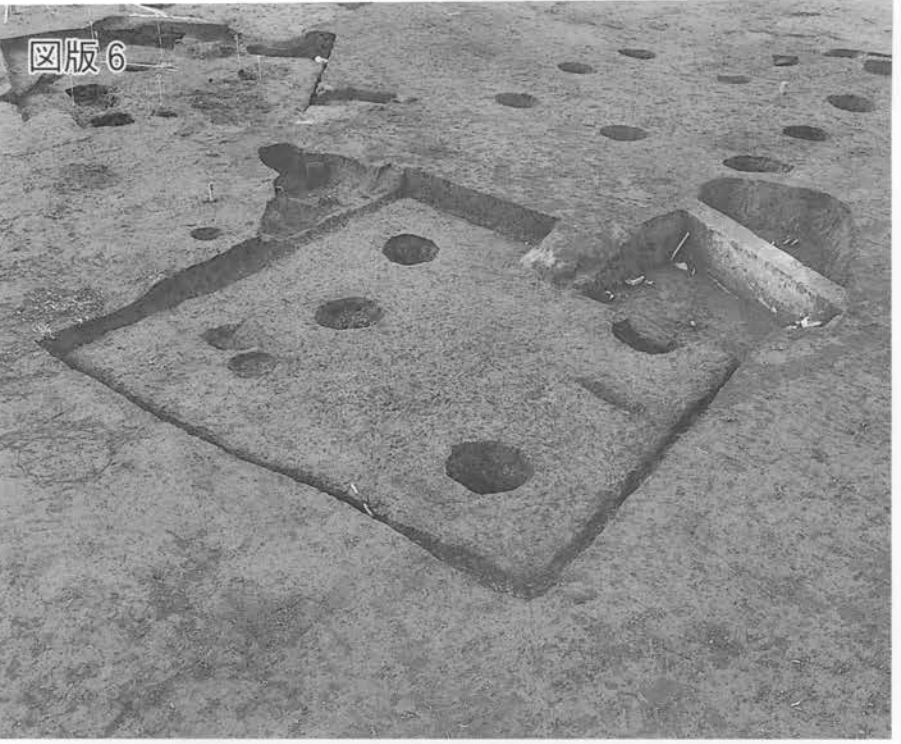
台地中央部・南部付近【南東より】

台地西部・北部付近【南西より】

N27-14 旧石器時代遺物出土状況【西より】

L26・M26 旧石器時代遺物出土状況【東より】

図版 6

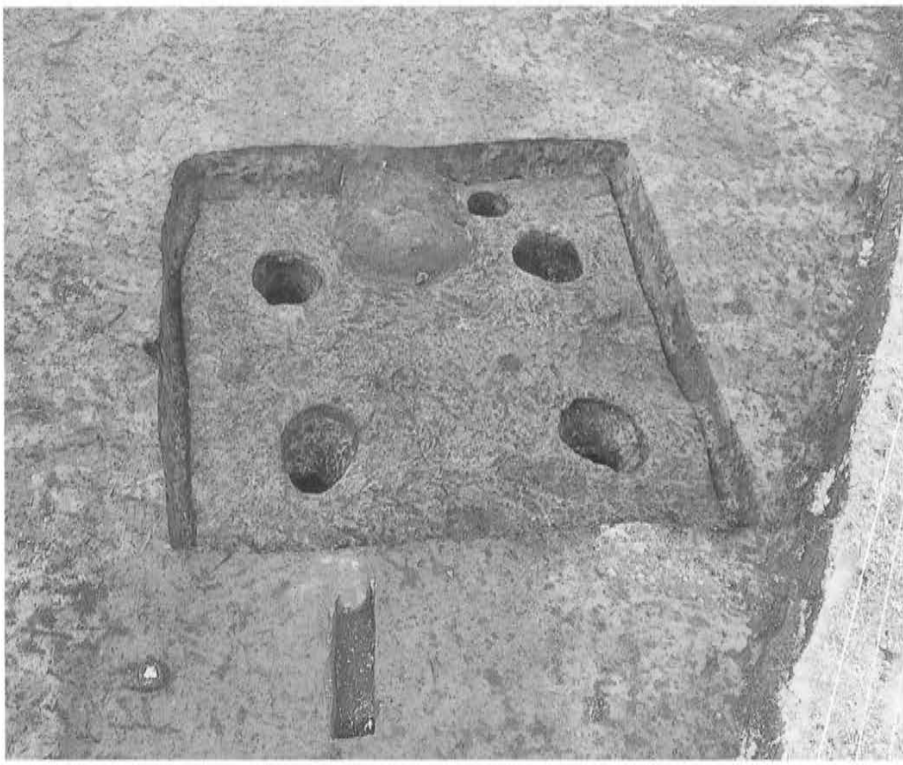


SI-001【南東より】

SI-001 カマド【南より】

SI-002A・002B・003【南より】

SI-002C【南東より】



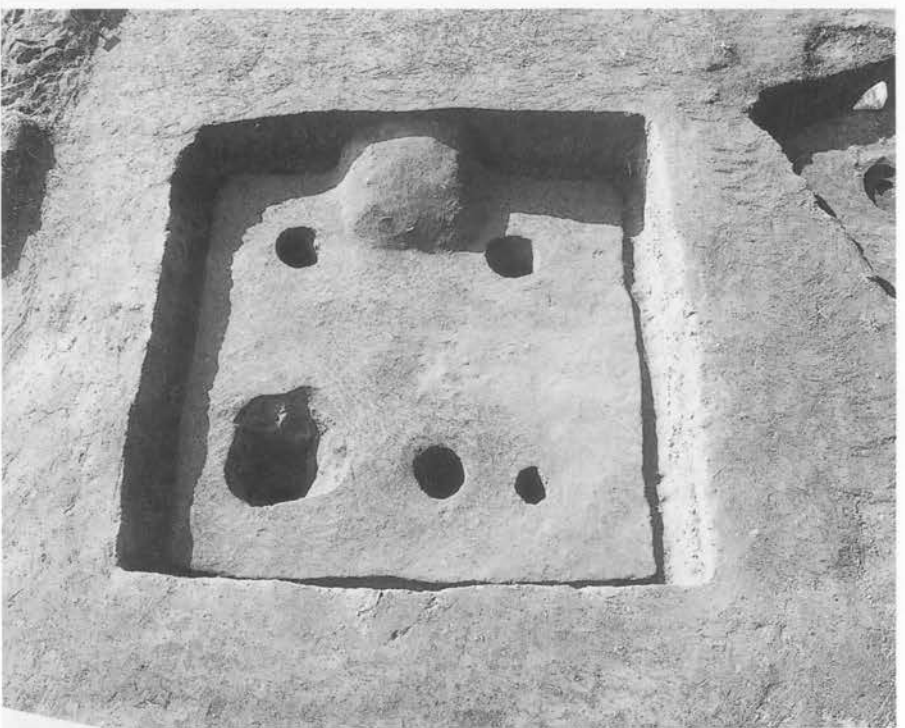
SI-004【南東より】

SI-004 カマド【南東より】

図版8

SI-004・005【南より】

SI-005 カマド【南東より】



SI-006【東より】

SI-007【南西より】

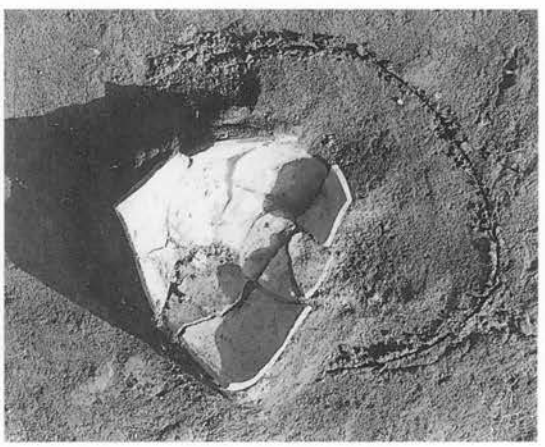
SI-007 カマド【南東より】

SI-009【南西より】

SI-009 カマド【南より】

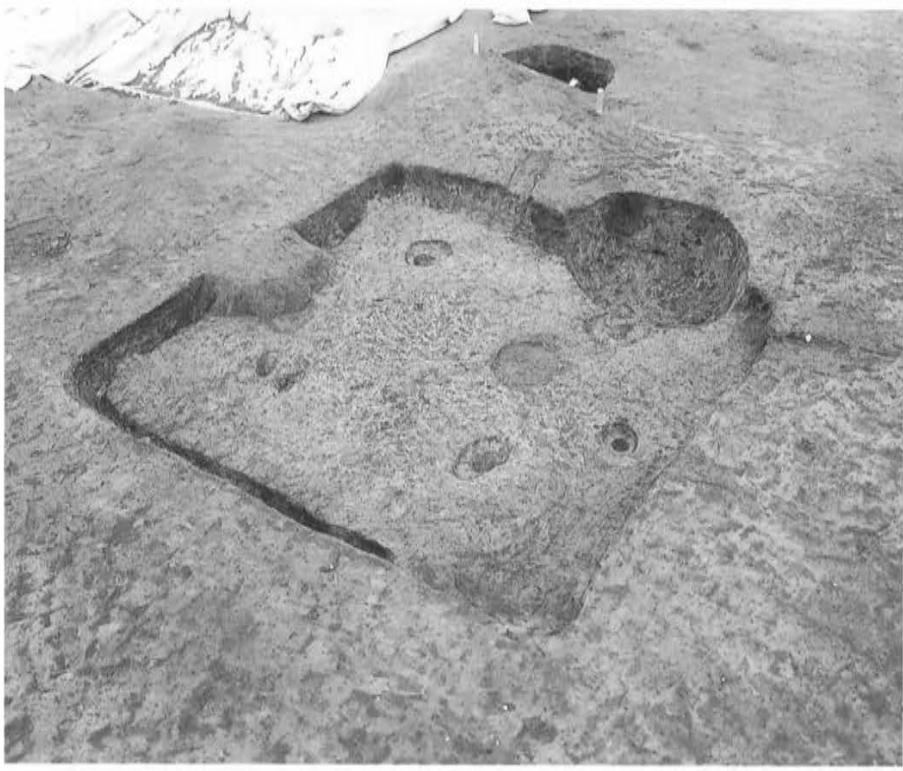
SI-010・011【南西より】

SI-012【南東より】



SI-012 甕(5)出土状況【北より】

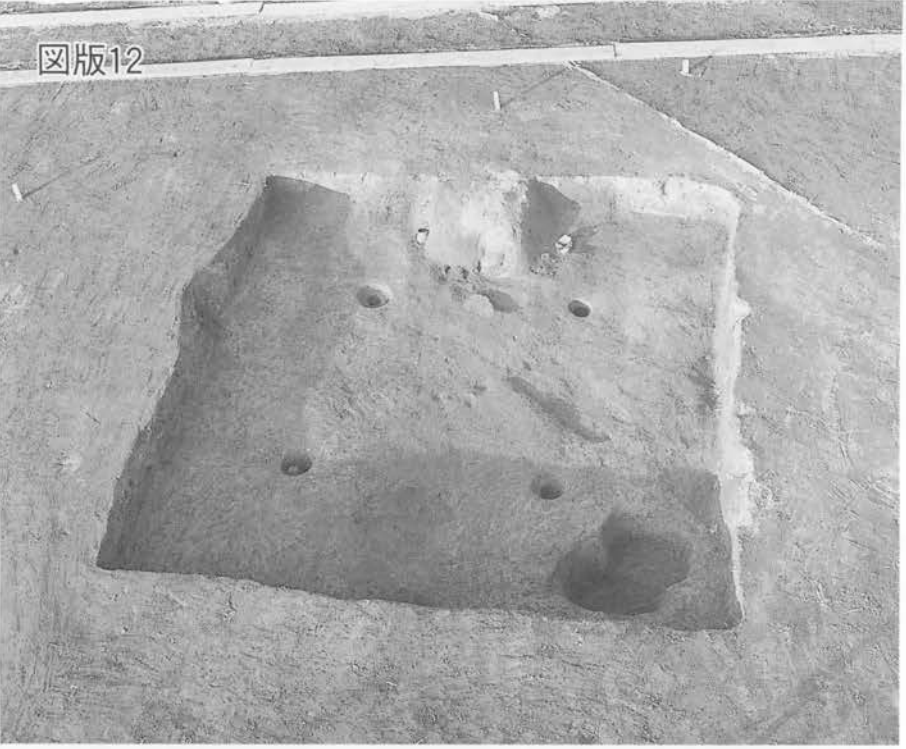
SI-012 カマド【南東より】



SI-013【南西より】

SI-013 カマド【南東より】

図版12



SI-014【南より】

SI-014 カマド【南東より】

SI-014 遺物出土状況【南より】

SI-015【北東より】

SI-015 カマド・坏(5)出土状況【東より】

SI-016【南より】

図版14

SI-017【南東より】

SI-017 カマド【東より】

SI-017 完掘状況【南東より】

SI-018【南より】

SI-018 カマド【南より】

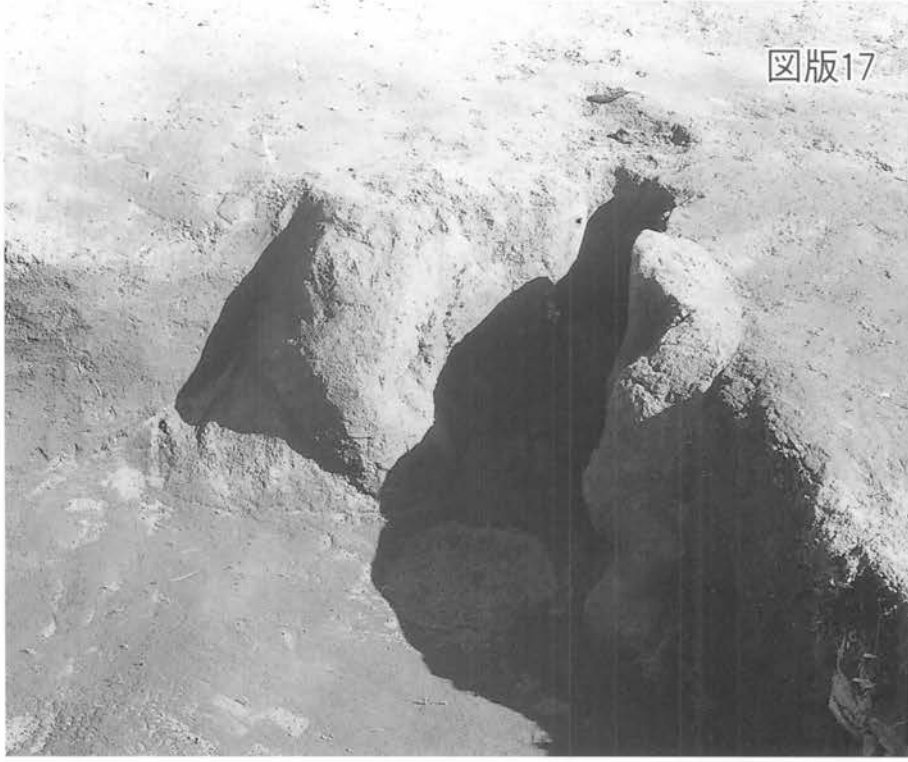
SI-019【東より】

図版16

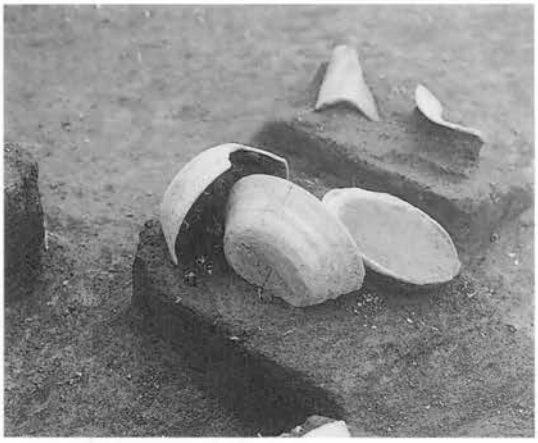
SI-023【南西より】

SI-023 カマド【南東より】

SI-024【南西より】



SI-024 カマド【南西より】

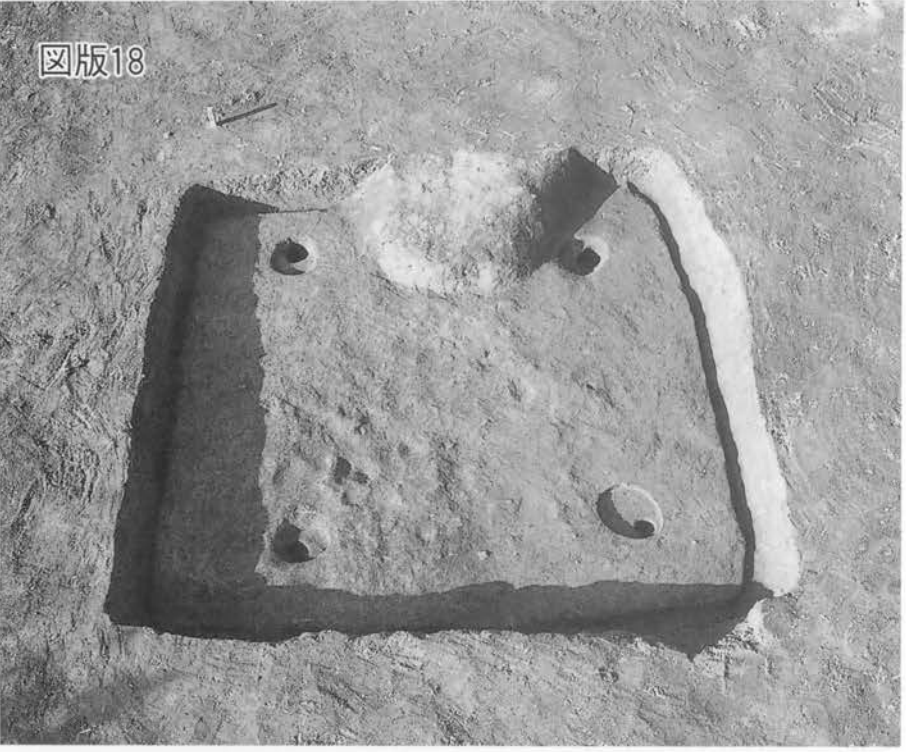


SI-025 坏(左から5・8・3)【北より】

SI-025 遺物出土状況【南東より】

SI-025 カマド煙道【南東より】

図版18

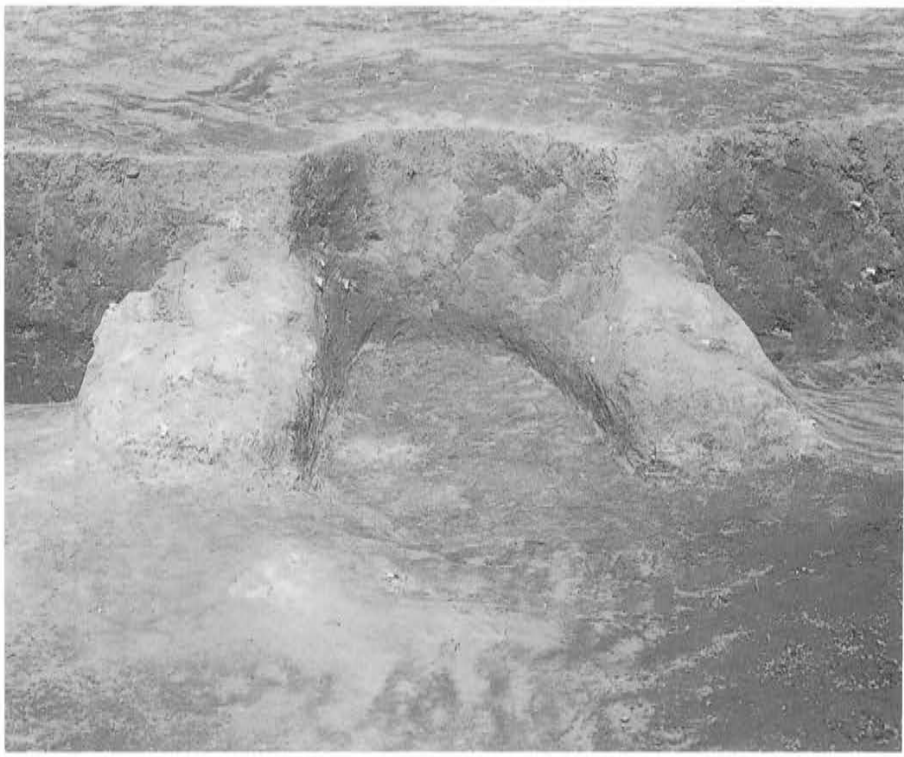


SI-026【南東より】

SI-026 カマド【南東より】

SI-027【南より】

SI-027 遺物出土状況【南東より】

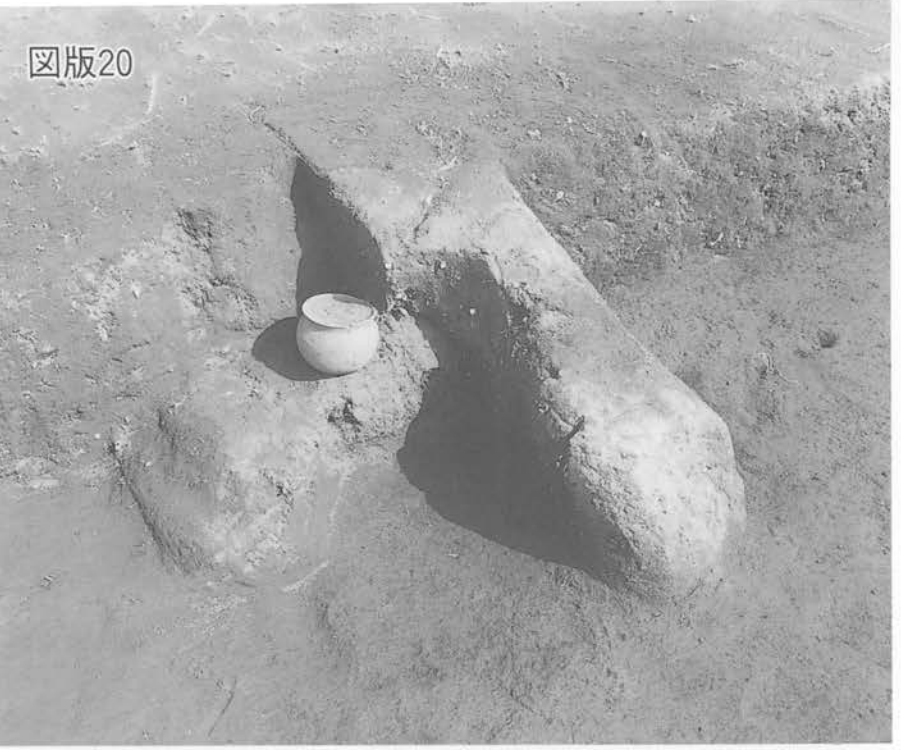


SI-027 カマド【南東より】

SI-028 カマド遺物出土状況【南東より】

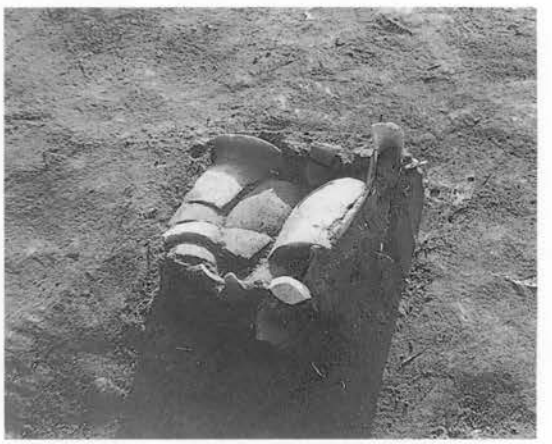
SI-028【南東より】

図版20



SI-028 カマド【南西より】

SI-029【南より】



SI-029 甕(1)出土状況【東より】

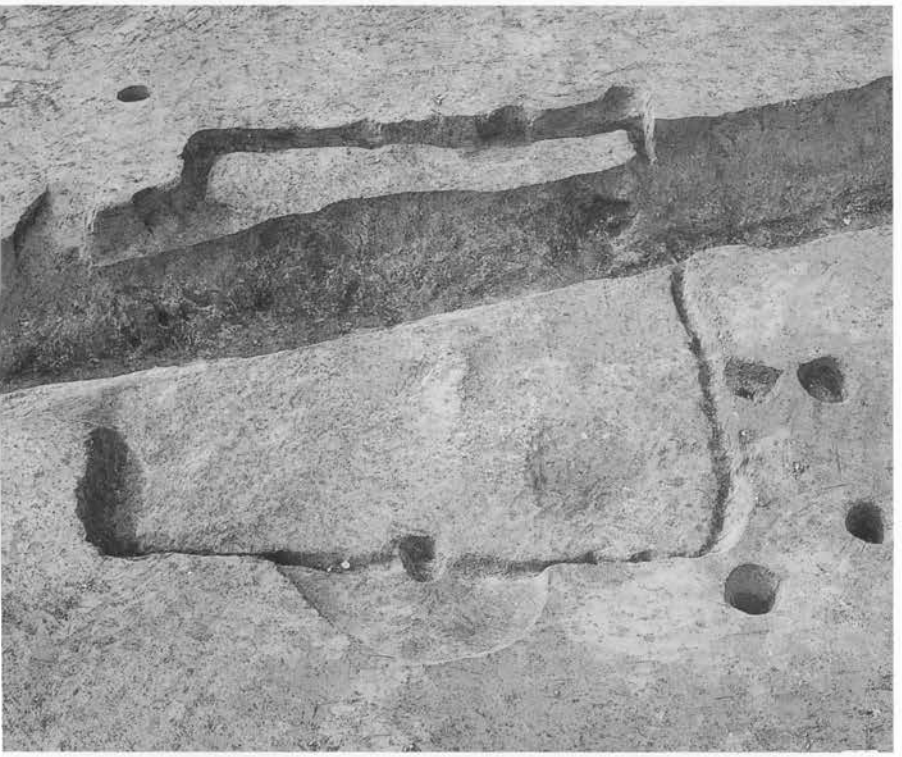
SI-029 カマド【南西より】

SI-030【北西より】

SI-030 カマド【西より】

SI-031【南より】

SI-032【南西より】



SI-034【南東より】

SI-036【北西より】

SI-039【南より】

SI-039 カマド【南西より】

SI-040【南東より】

図版24

SI-040 カマド【南東より】

SI-044【南東より】

SI-044 カマド【南東より】

SI-045 甕出土状況（前から5・6）
【南西より】

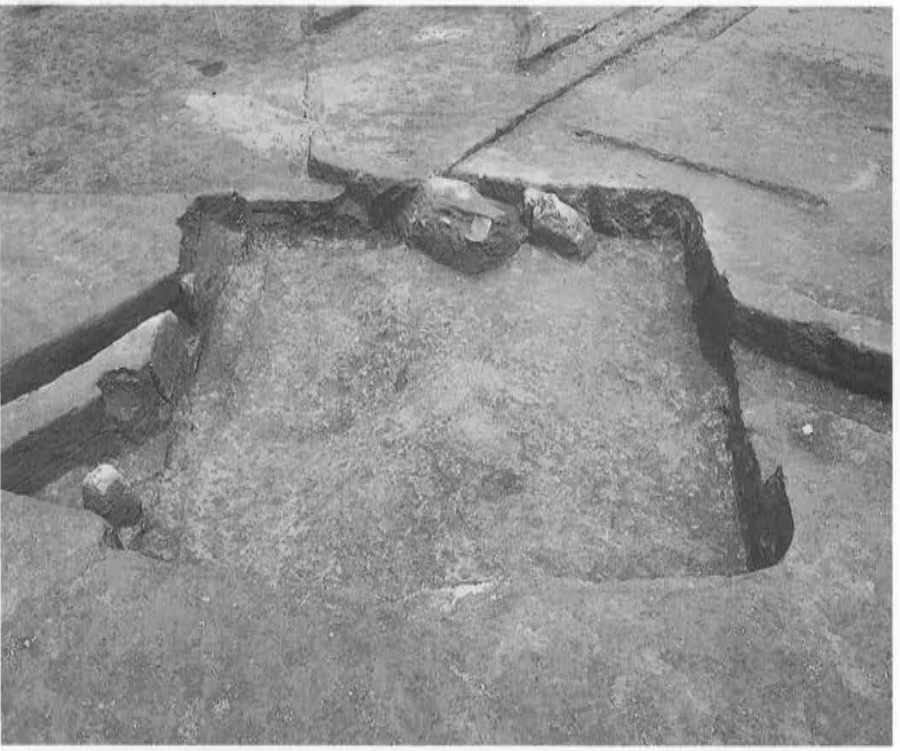
SI-045【南西より】

SI-045 カマド【南西より】

SI-046【北西より】

図版26

SI-047・048・049・050AB【南より】



SI-049 甕(4)出土状況【東より】

SI-049【南西より】

SI-049 カマド【南西より】

SI-050A【南東より】

SI-050A カマド【南東より】

SI-050B 【南東より】

図版28

SI-051 遺物出土状況【南より】

SI-051A ピット内甕(9)出土状況【南より】

SI-051A・B【南より】

SI-051B カマド遺物出土状況【南西より】

SI-051B カマド【南より】

SI-052 遺物出土状況【南東より】

SI-052【南東より】

SI-052 カマド【南より】

SI-053【南より】

SI-053 カマド【南より】

SI-053 床下完掘状況【南より】

SI-054【南東より】

SI-054 カマド【南より】

SI-055 遺物出土状況【南東より】

図版32

SI-055【南東より】

SI-055 カマド【南東より】

SI-056【南より】

SI-056 カマド【南東より】

SI-057 ピット内甕(17)出土状況【東より】

SI-057【南東より】

SI-057 カマド【南東より】

図版34

SI-058【南より】

SI-058 カマド【南東より】

SI-059【南西より】

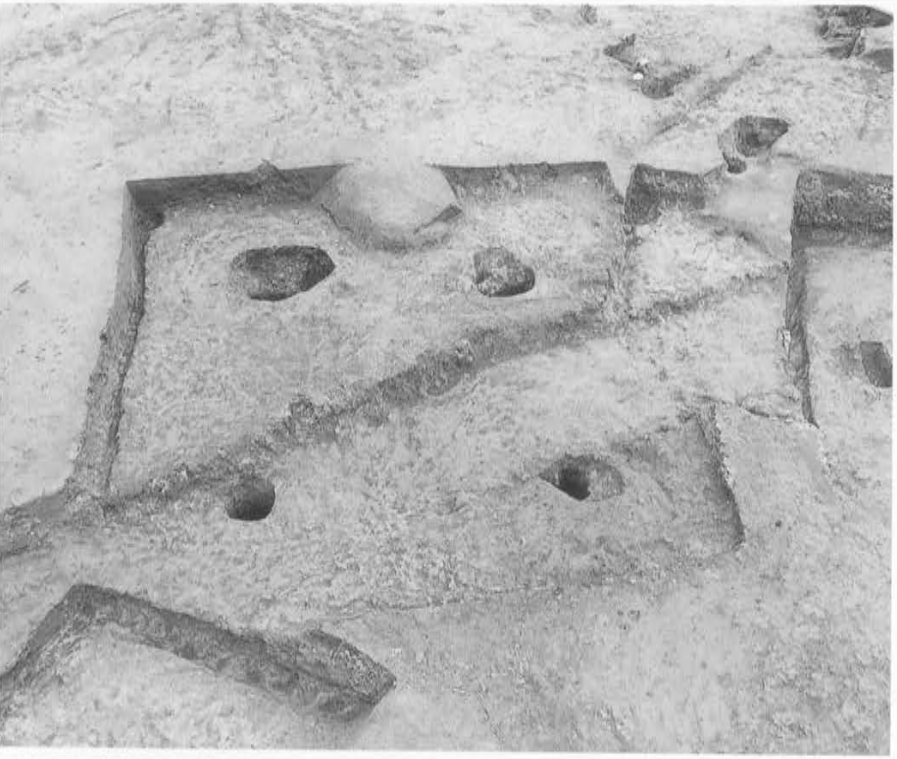
SI-059 カマド【南東より】

SI-060 遺物出土状況【南東より】

SI-060【南東より】

図版36

SI-060 カマド【東より】



SI-061・062【南東より】

SI-062 カマド【南東より】

SI-063【南より】

SI-063 カマド【南より】

SI-066 カマド遺物出土状況【東より】

SI-066 カマド【北東より】

SI-067【南東より】

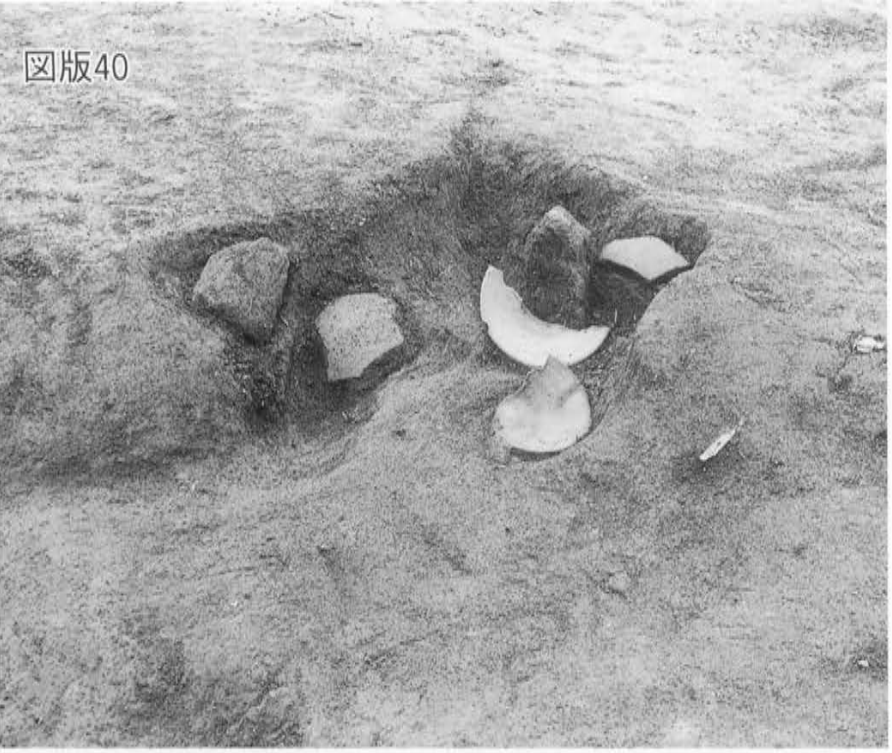
SI-067 カマド【南東より】

SI-068 ピット内甕(2)出土状況【南より】

SI-070【南東より】

SI-070 カマド【南東より】

SI-071【南東より】

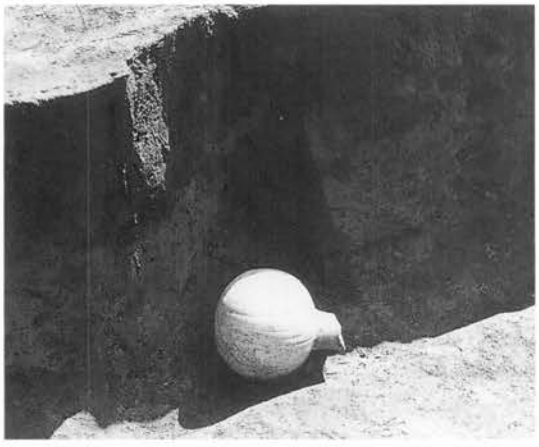


SI-073 カマド遺物出土状況【南より】

SI-075 上から坏(1)と皿(3)出土状況
【北西より】

SI-076【南より】

SI-078【南東より】

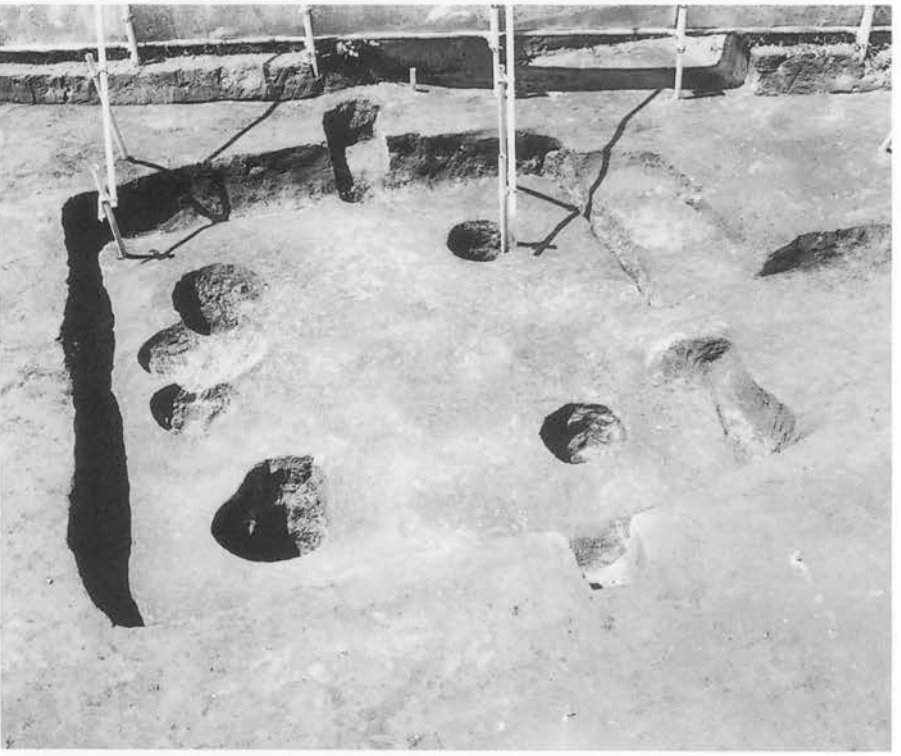


SI-079フラスコ形長頸壺(19)出土状況
【北東より】

SI-079【南より】

SI-079 カマド【南より】

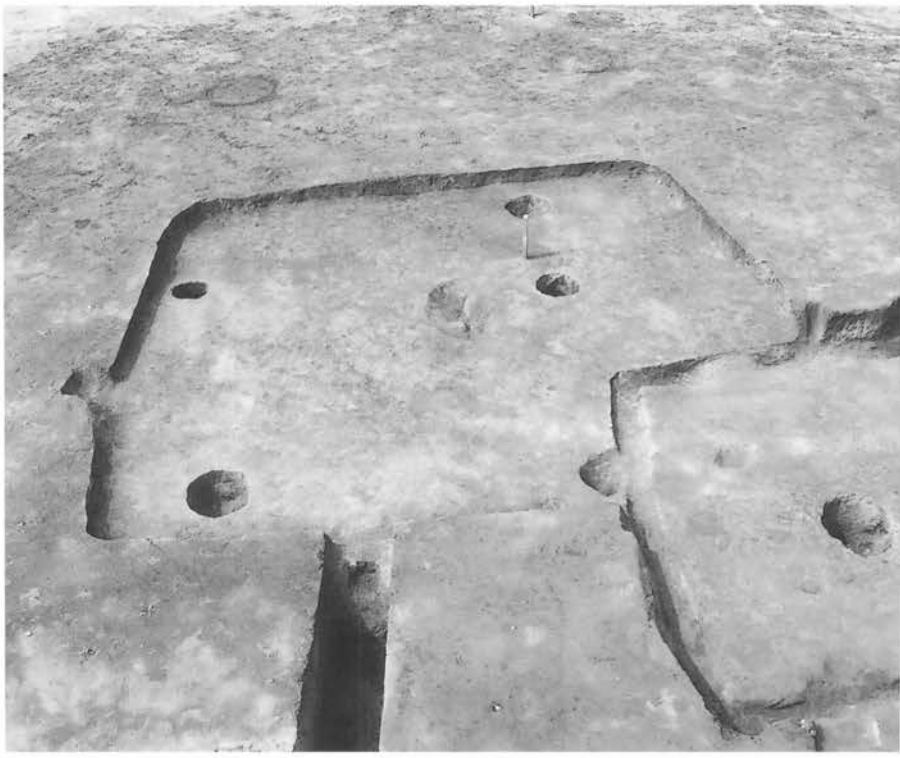
SI-080【南より】



SI-081【東より】

SI-082【南より】

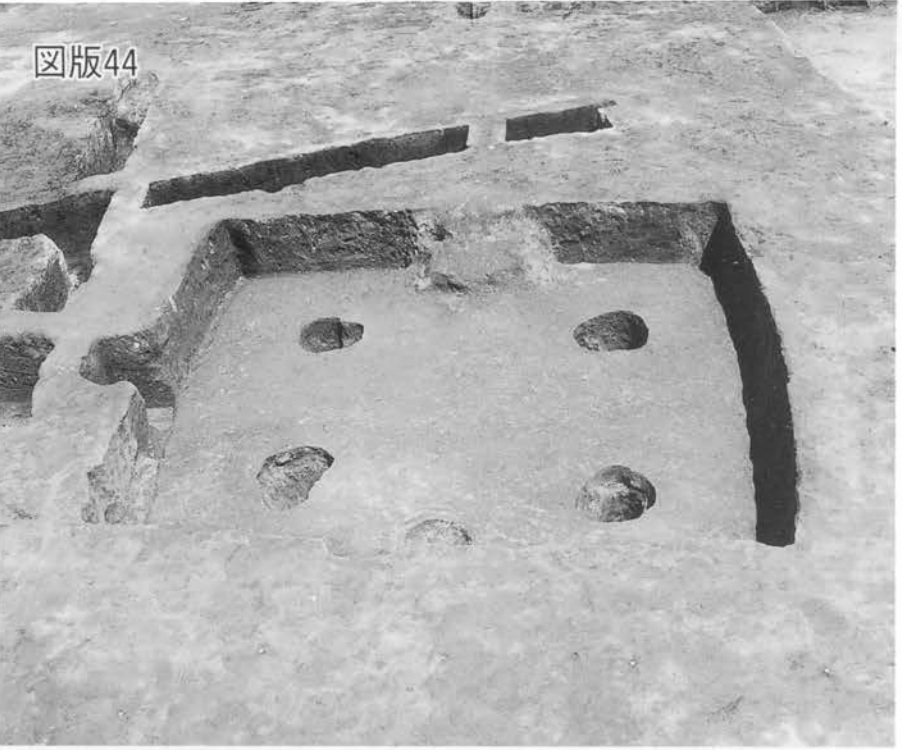
SI-082 カマド【北西より】



SI-083【南より】

SI-084【南東より】

図版44



SI-085【南より】

SI-085 カマド【南より】

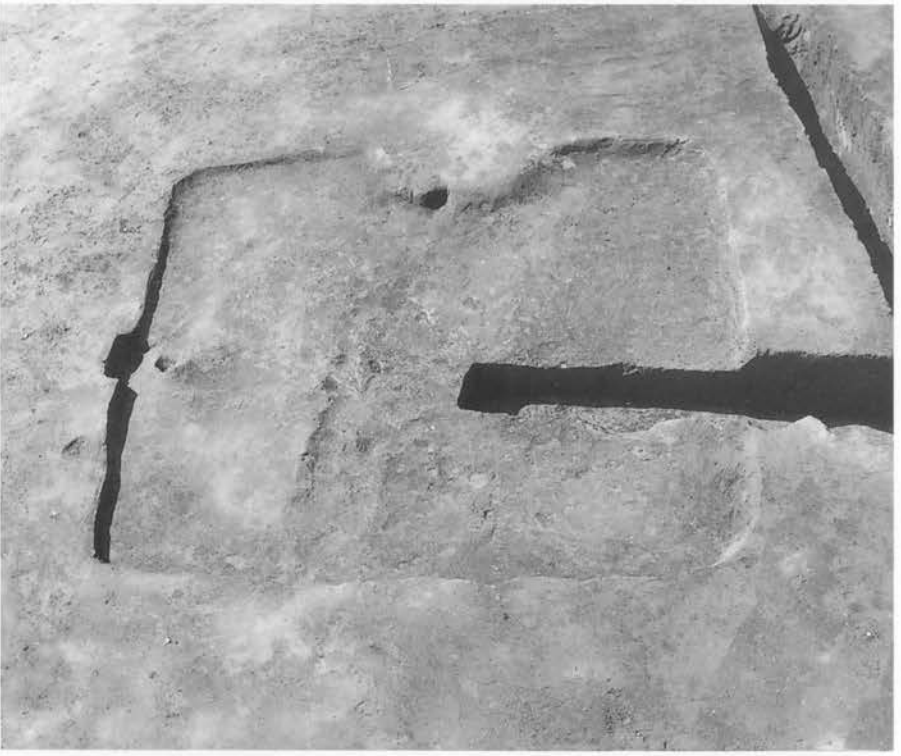
SI-086【南より】

SI-087【南より】

SI-087 カマド【南西より】

SI-088【南東より】

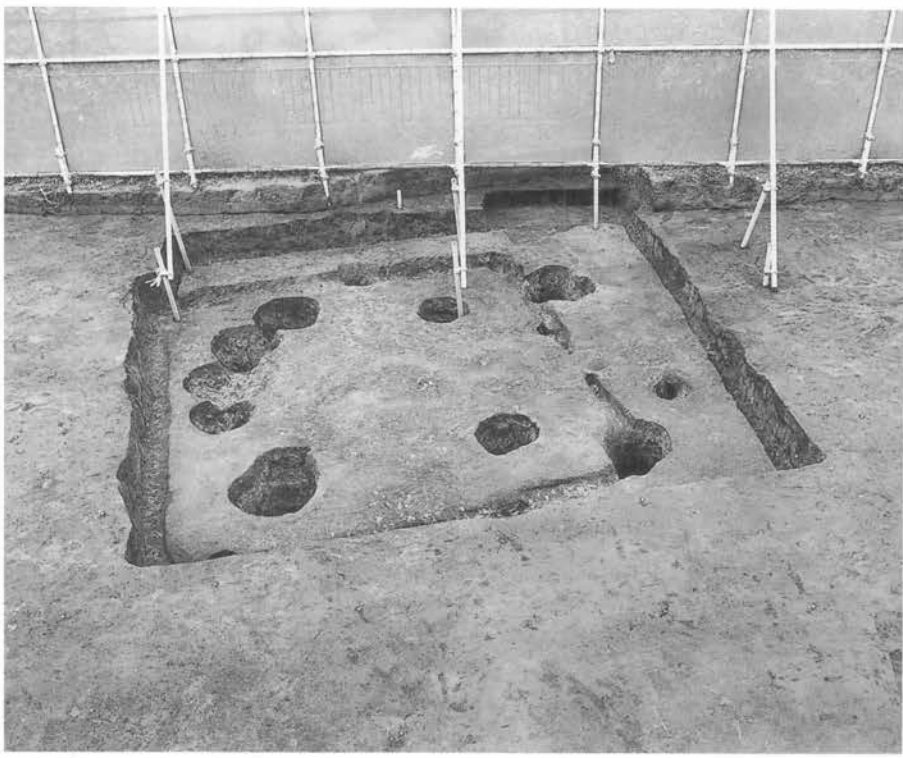
SI-088 カマド【南より】



SI-089【南東より】

SI-090【南より】

SI-090 カマド【南東より】

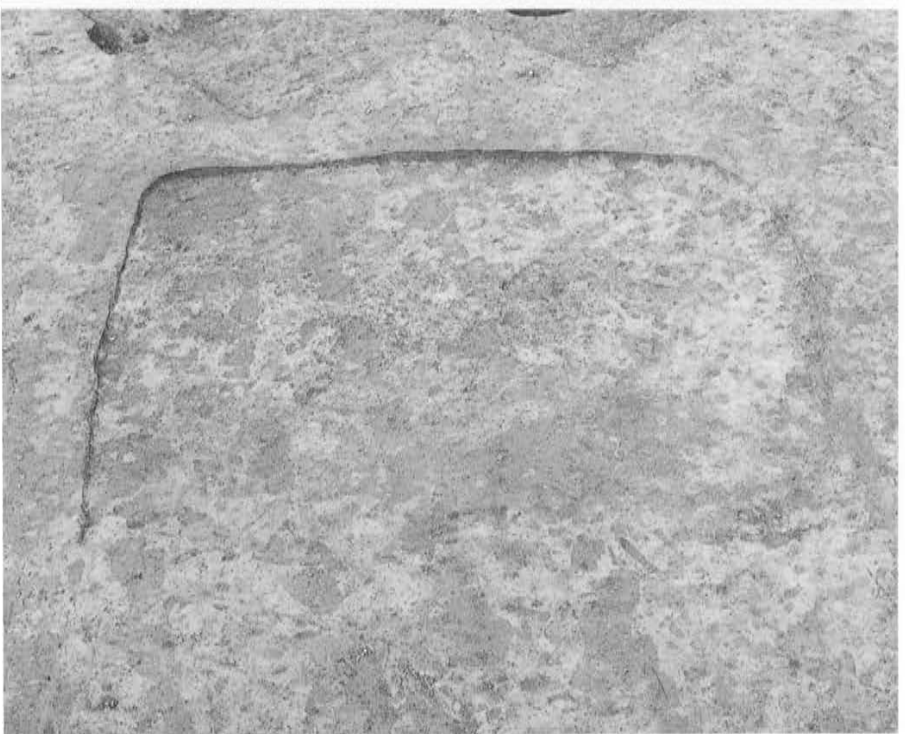


SI-091【東より】

SI-092・093【南西より】

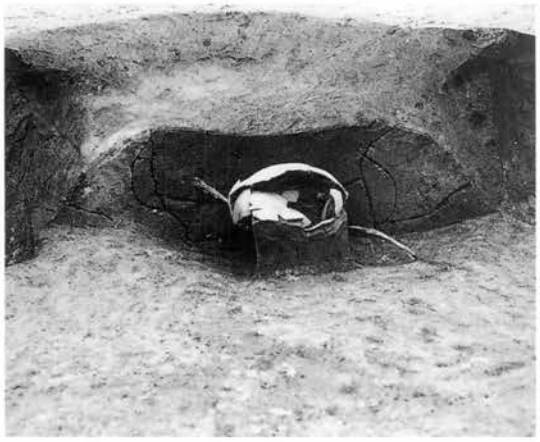
SI-094【南東より】

SI-094 カマド【南より】



SI-095【南西より】

SI-096【南西より】



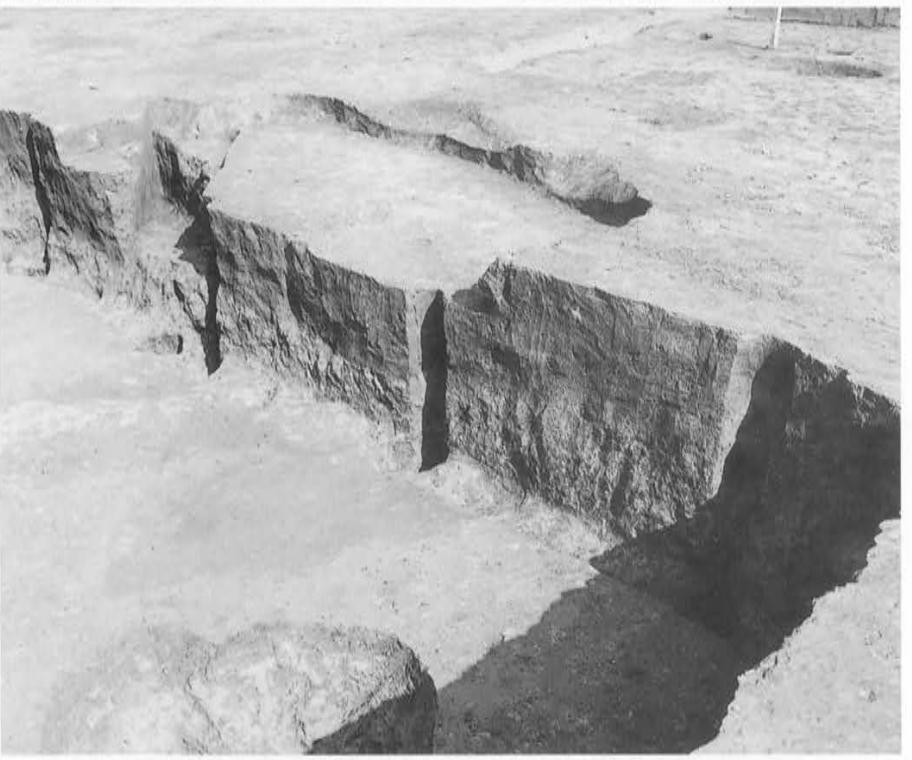
SI-096 カマド内甕(20)出土状況【南より】

SI-096 カマド【南より】

SI-097【東より】

図版50

SI-098【南東より】

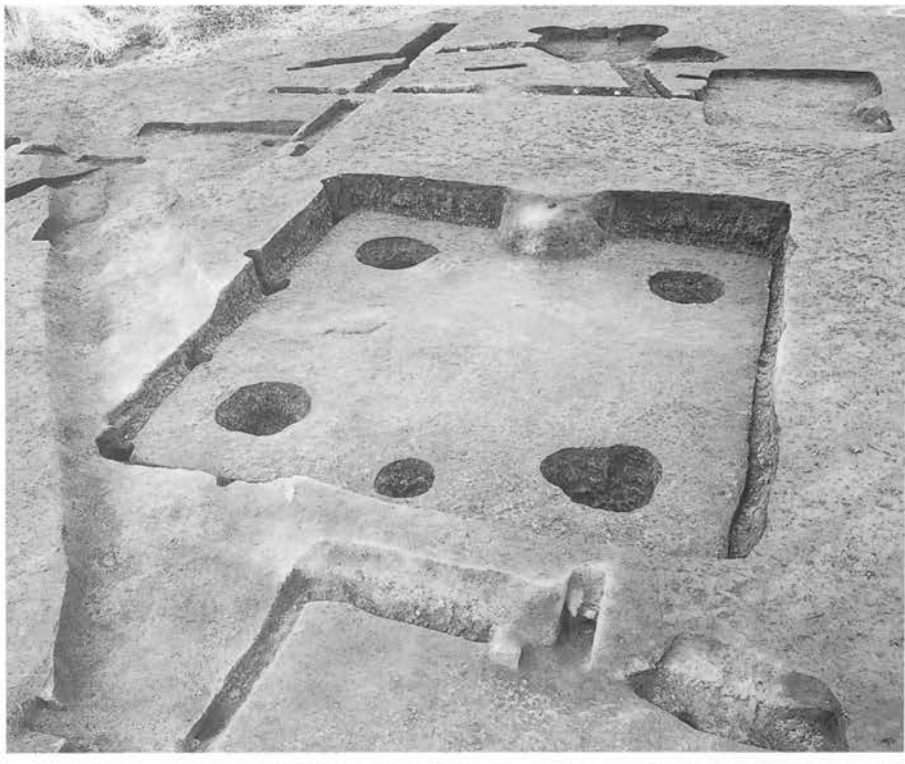


SI-098 東側の壁柱列【南より】

SI-099A【南東より】

SI-099B カマド遺物出土状況【南西より】

SI-099B【北西より】



SI-100【南東より】

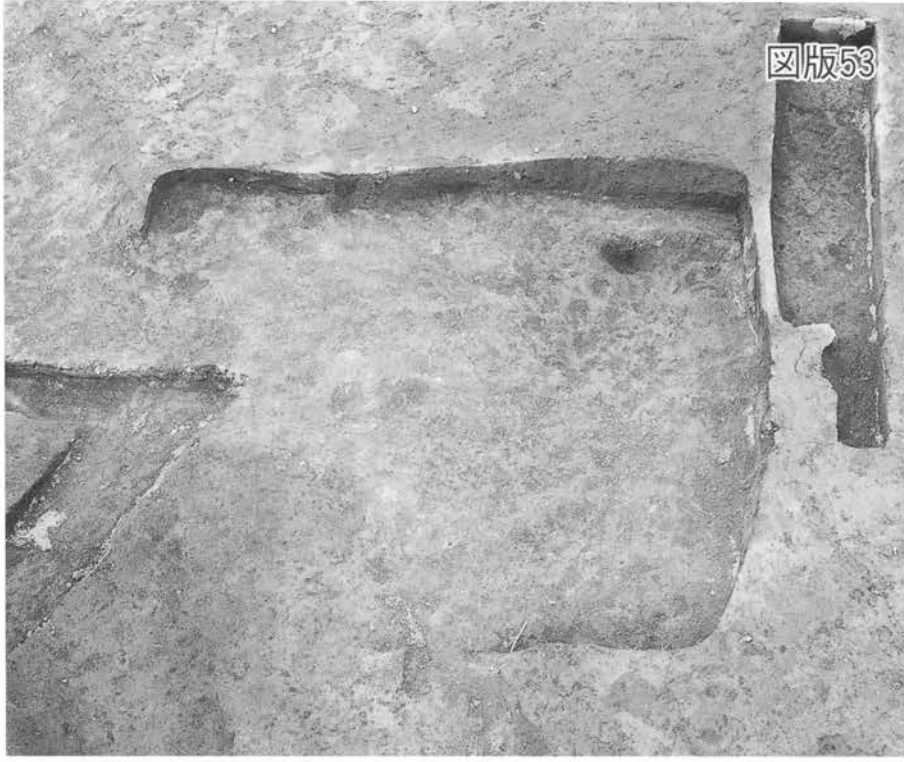
SI-101【南西より】

図版52

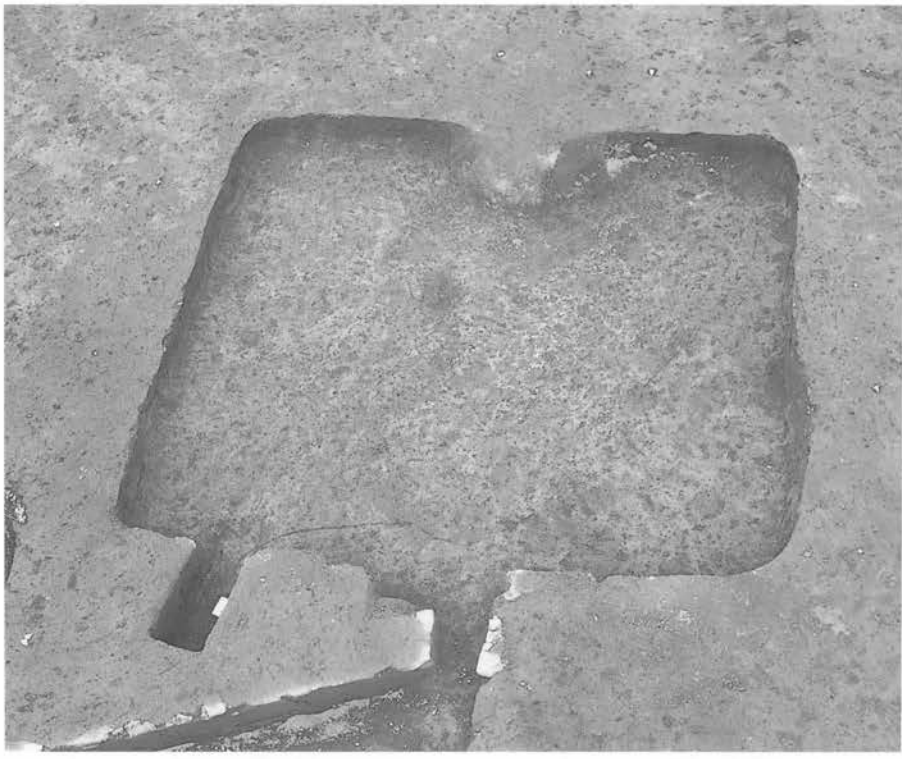
SI-101 カマド【南西より】

SI-102【南東より】

SI-102 カマド【南東より】

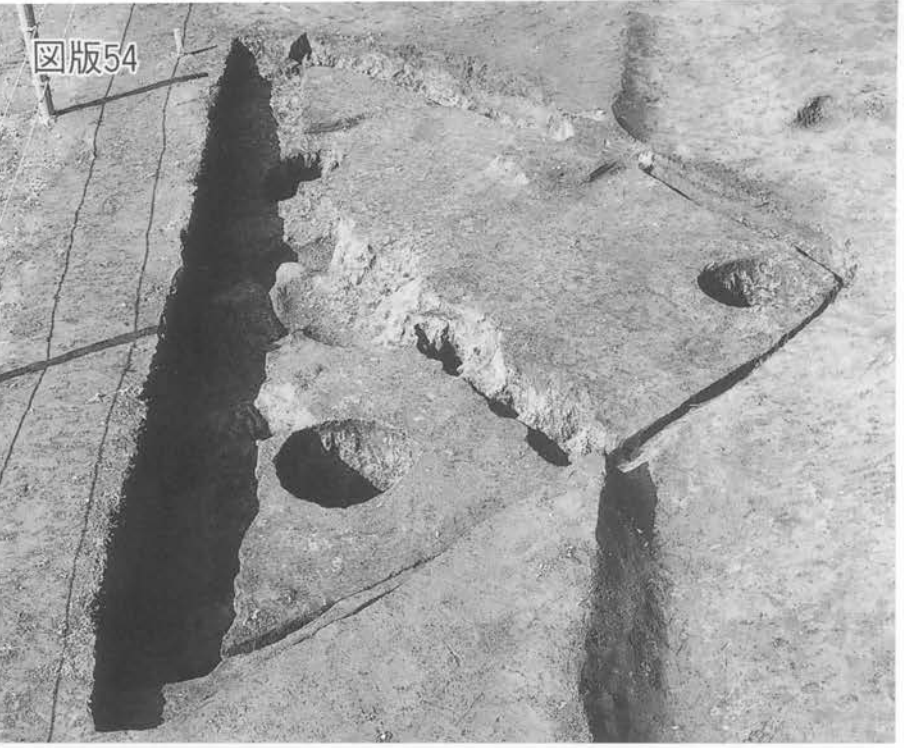


SI-103【南東より】



SI-104【南西より】

SI-105【南西より】



SI-107【東より】

SI-108【東より】

SI-109【南西より】

SI-110【東より】

SI-110 カマド【南より】

SI-111【北西より】

図版56

SI-111 カマド【北西より】

SI-113【南西より】

SI-114【北東より】

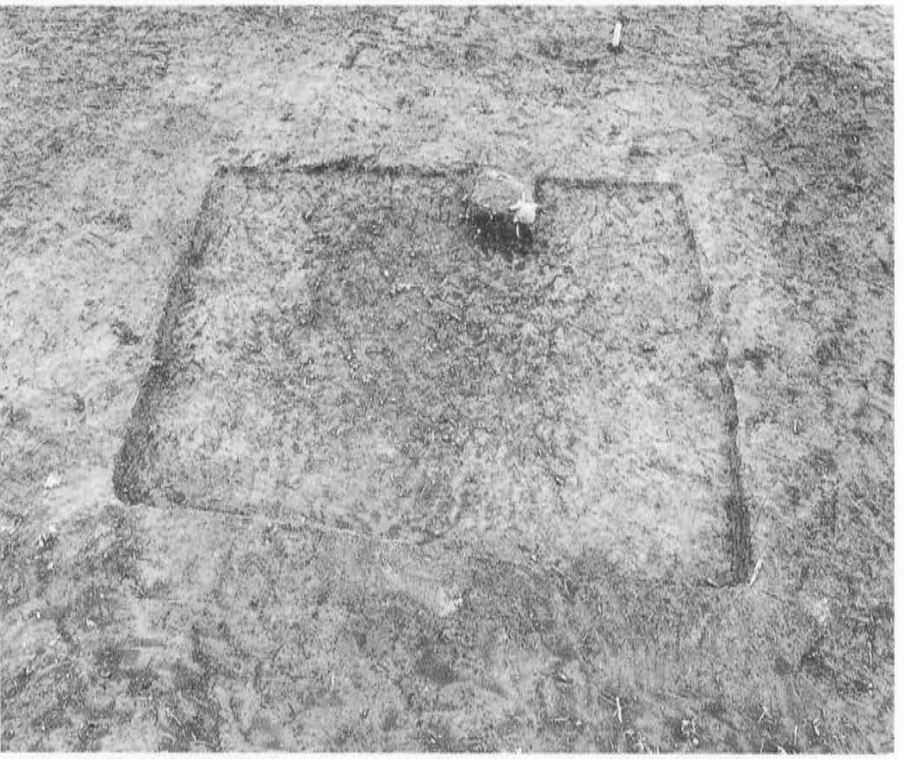
SI-115【南東より】

SI-115 カマド【南東より】

SI-116【南東より】

図版58

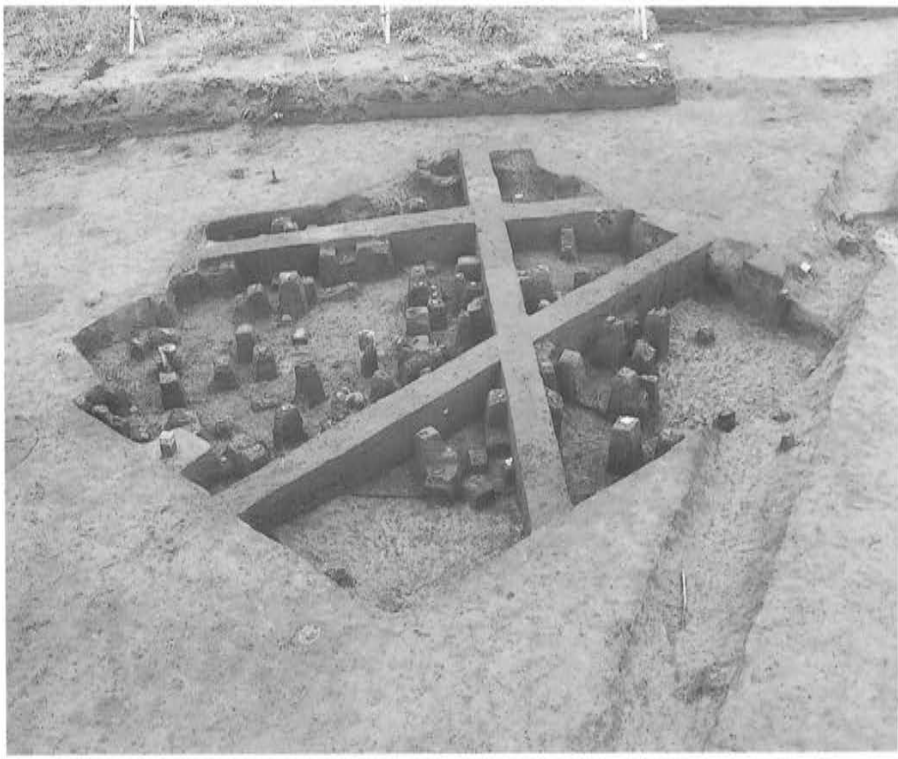
SI-116 カマド【南東より】



SI-117【南東より】

SI-119 遺物出土状況【南より】

SI-119【南より】



SI-120AB 遺物出土状況【南より】

SI-120A【南より】

SI-120B【南東より】

SI-121【南西より】

SI-121 カマド【南東より】

SI-122【西より】

SI-123【南西より】

SI-124 カマド遺物出土状況【南より】

SI-124【南より】

図版62

SI-126【南より】

SI-126 カマド【南より】

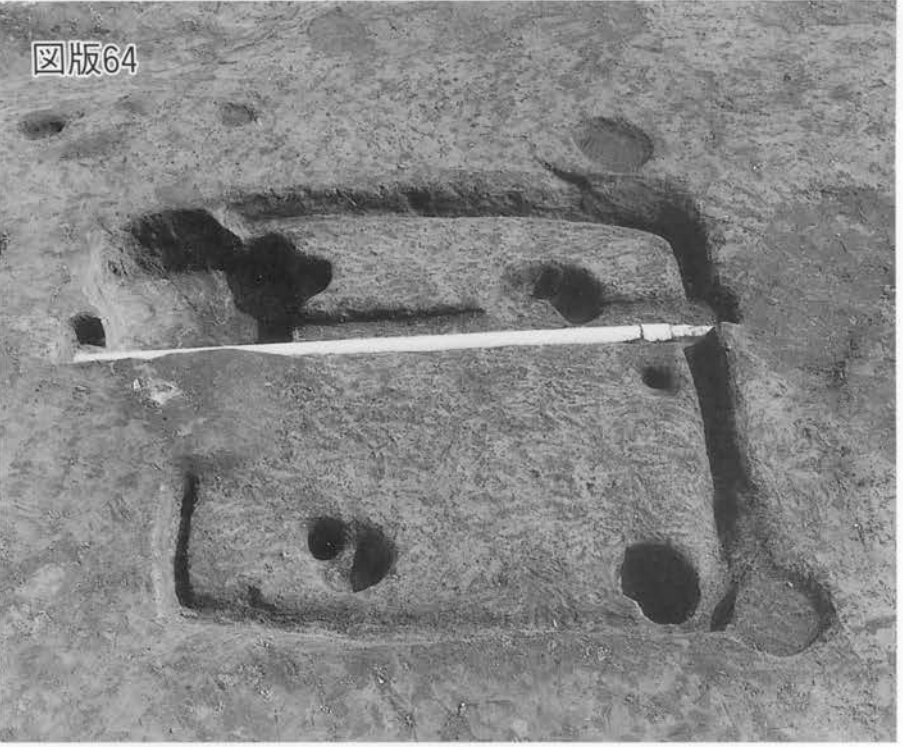
SI-127 遺物出土状況【南より】

SI-127 紡錘車(中央)と和同開珎(右下)
【北より】

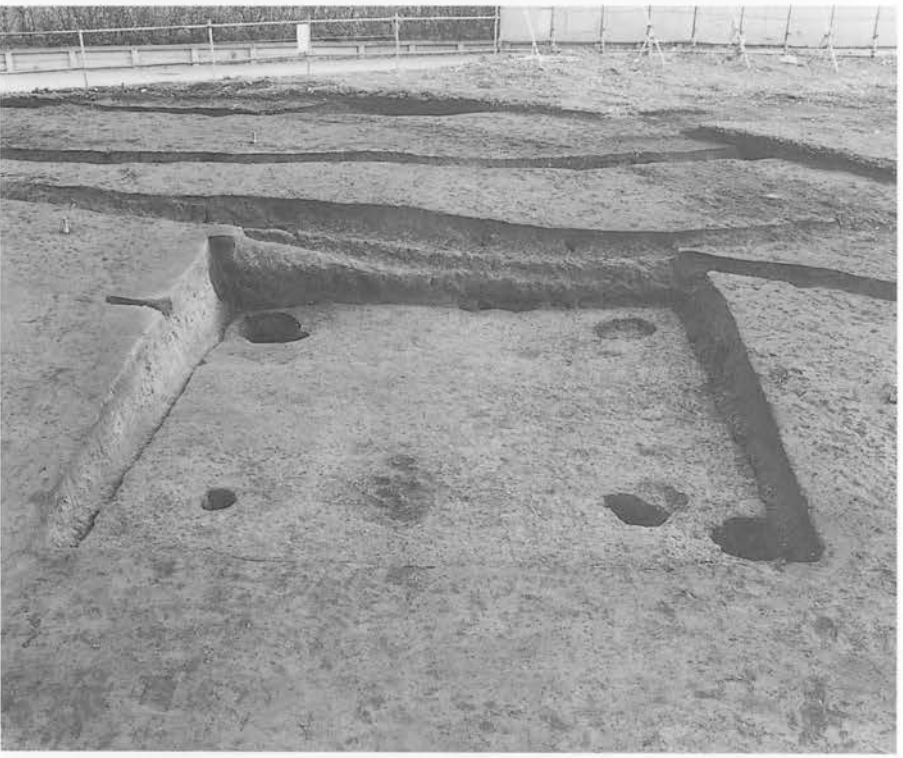
SI-127【南より】

SI-127 カマド【南より】

図版64



SI-128【西より】



SI-129【北西より】

SI-129 遺物出土状況【北西より】

SI-130【北より】

SI-131【南より】

SI-131 遺物出土状況【南より】

SI-131 カマド【南より】

SI-132(奥)・133(手前)【南より】

SI-132(右)・133(左) 遺物出土状況【東より】

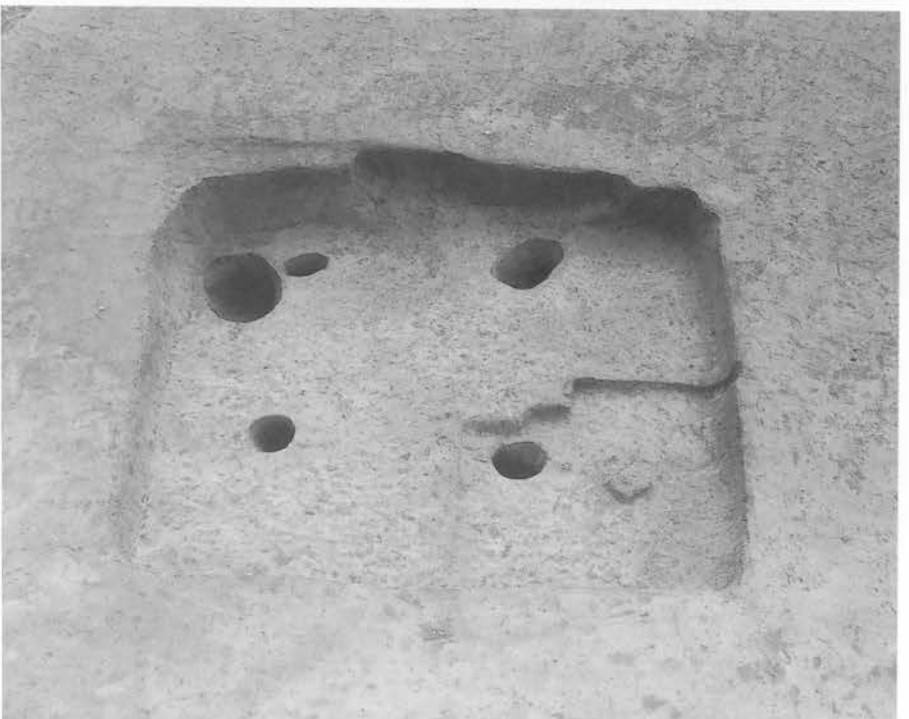
SI-132 カマド【南より】

SI-134【東より】

SI-134 カマド【南より】

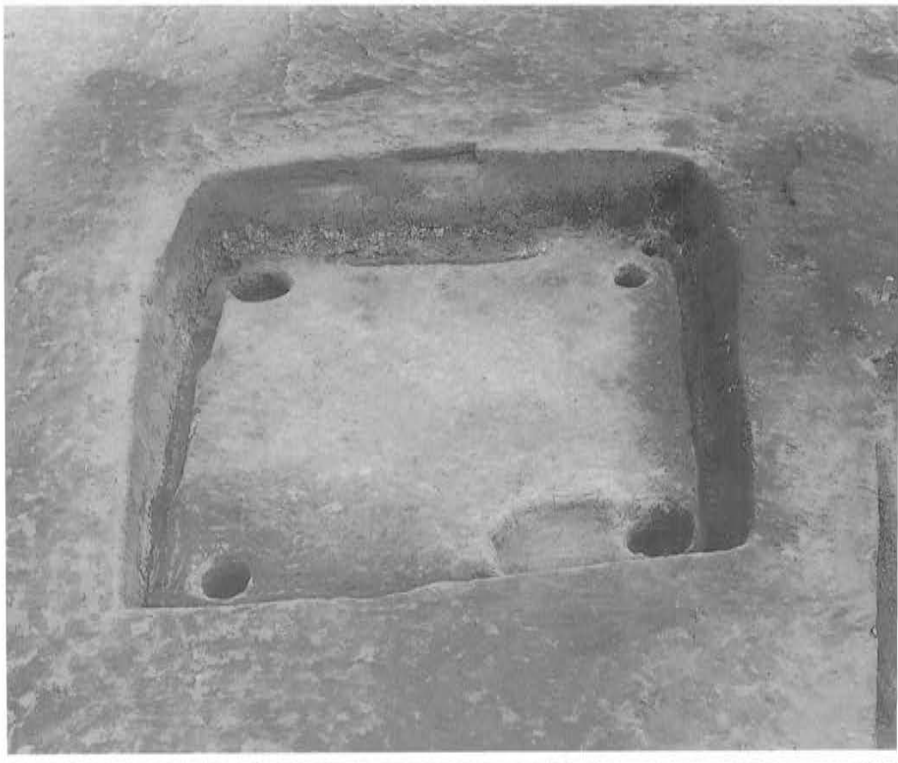
SI-135【南より】

SI-135 カマド【南より】



SI-136【北西より】

SI-136 遺物出土状況【北西より】



SI-137【西より】

SI-137 遺物出土状況【西より】

図版70

SI-138【南西より】

SI-138 カマド【南西より】

SI-140【南東より】

SI-140 カマド【南より】

SI-141【南東より】

SI-141 カマド【南東より】

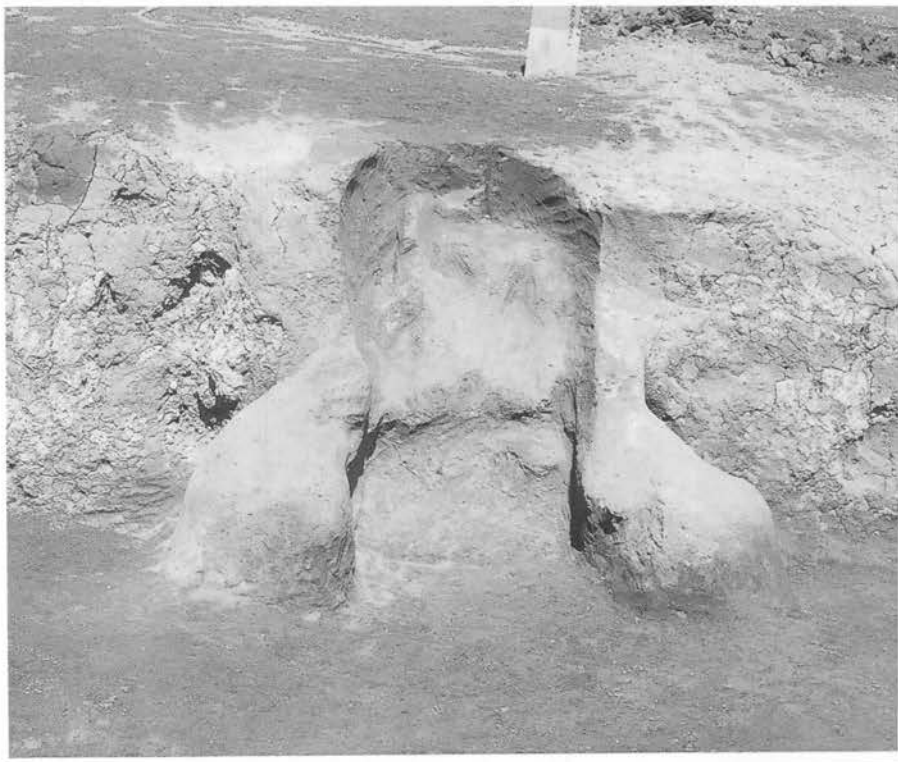
図版72

SI-142【南東より】

SI-142 カマド【南東より】

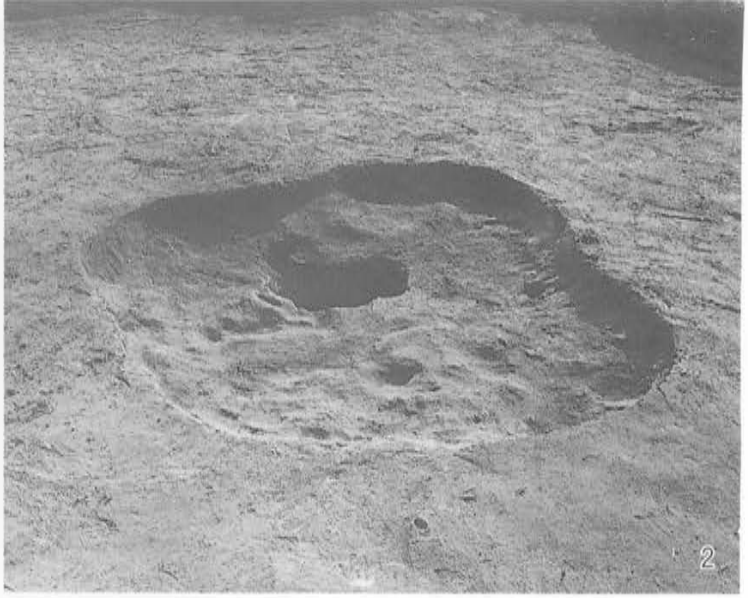
SI-143【北東より】

SI-143 遺物出土状況【南西より】



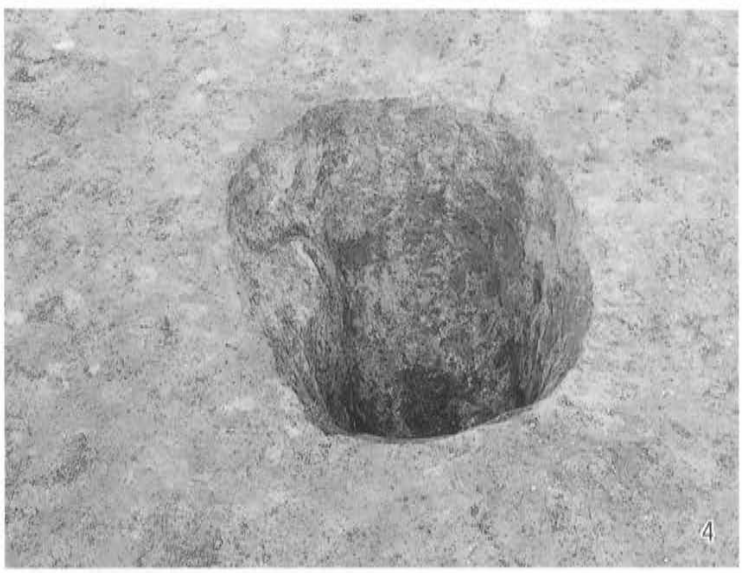
SI-143 カマド【南東より】

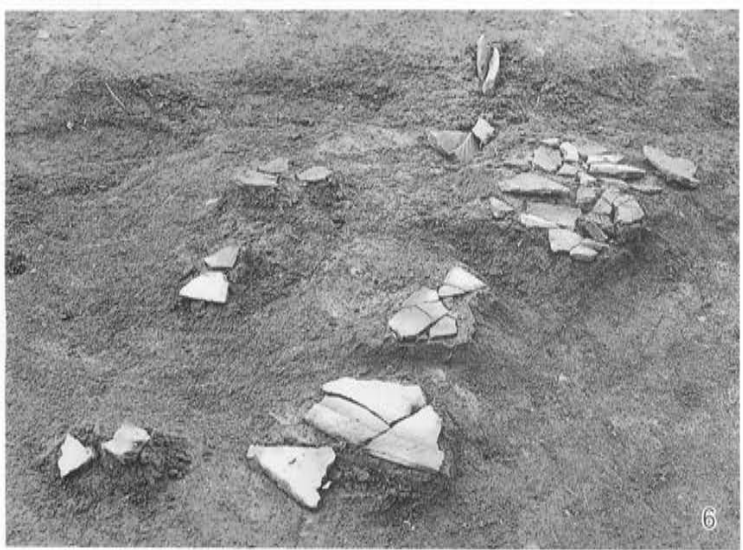
SI-144【南東より】



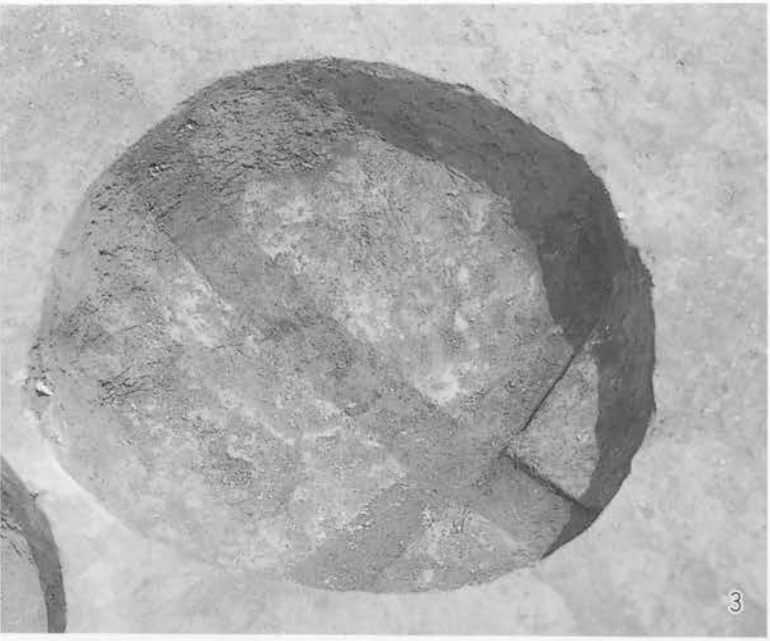
1. SK-1【南より】
2. SK-4【北より】
3. SK-13【北東より】
4. SK-14【北より】
5. SK-15【西より】
6. SK-20 遺物出土状況【南より】
7. SK-20【南東より】

1. SK-21【東より】
2. SK-22【北東より】
3. SK-28【東より】

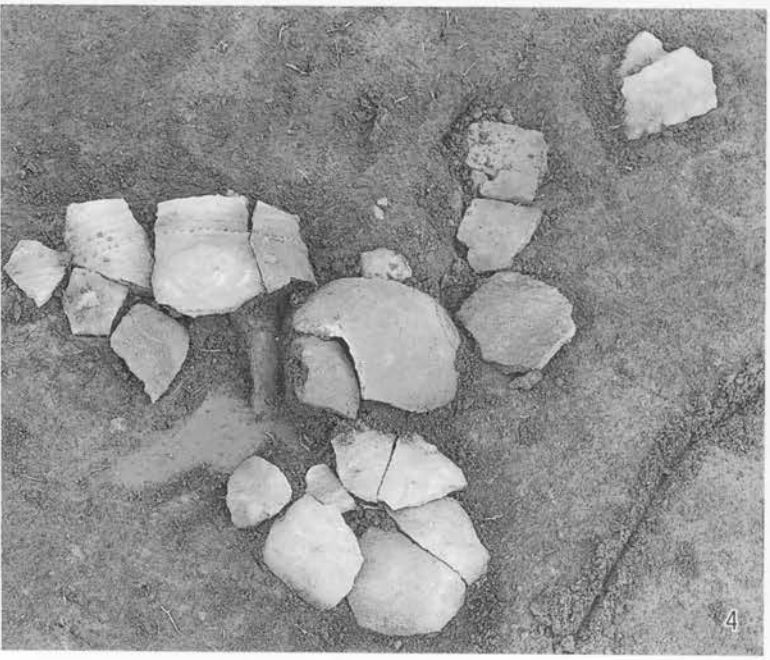


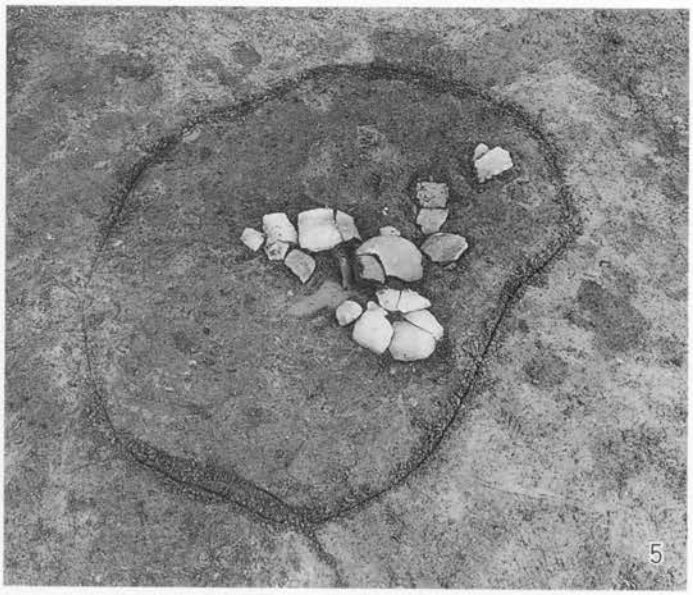


4. SK-36【東より】
5. SK-38【南東より】
6. SK-51 遺物出土状況【北西より】



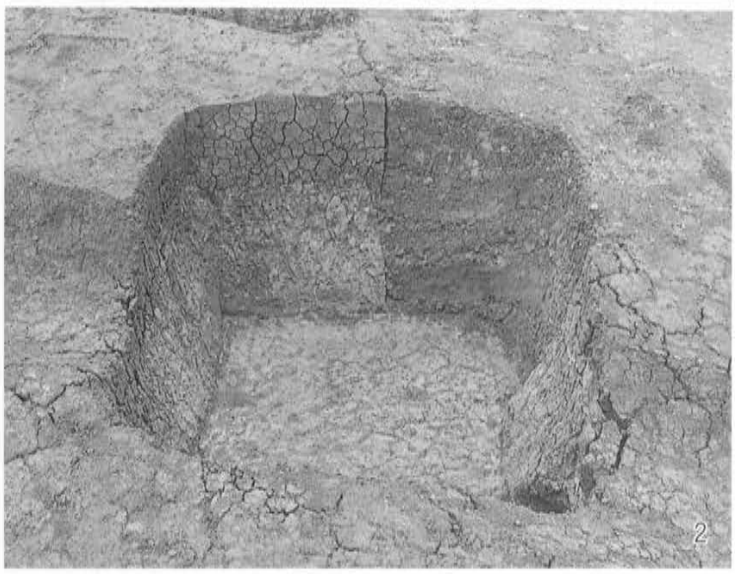
1. SK-52【南より】
2. SK-52 遺物出土状況【東より】
3. SK-60【北西より】

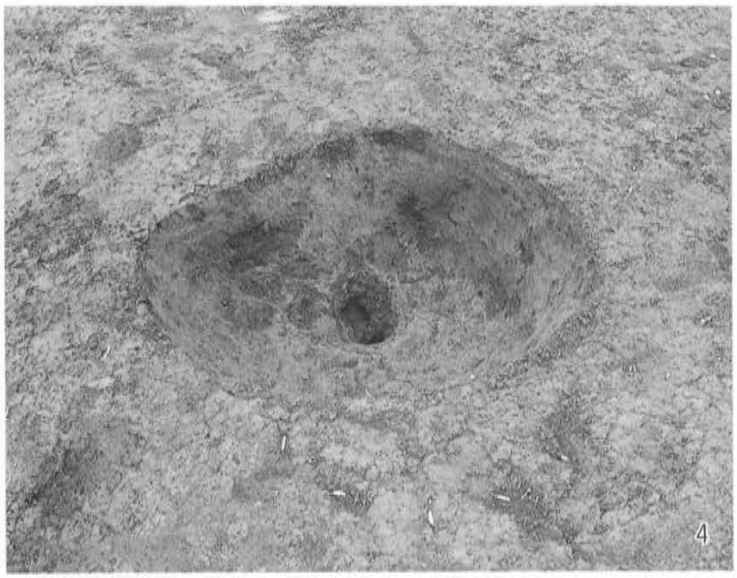


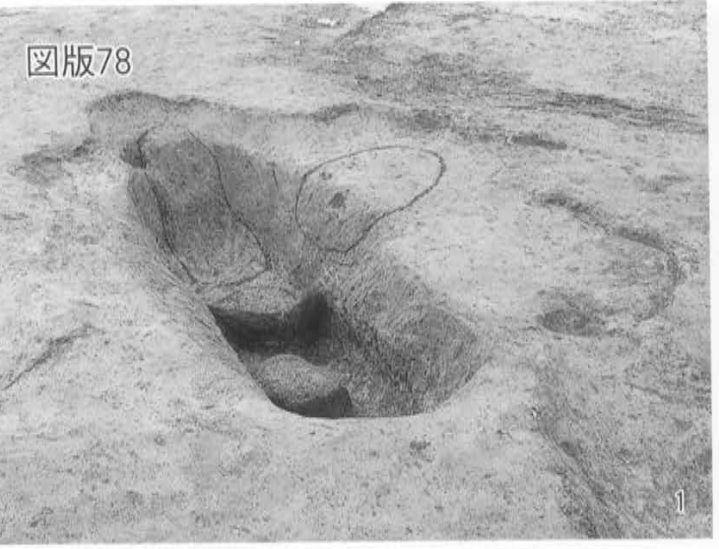


4. SK-61 遺物出土状況【北西より】
5. SK-61【北西より】
6. SK-97【北東より】

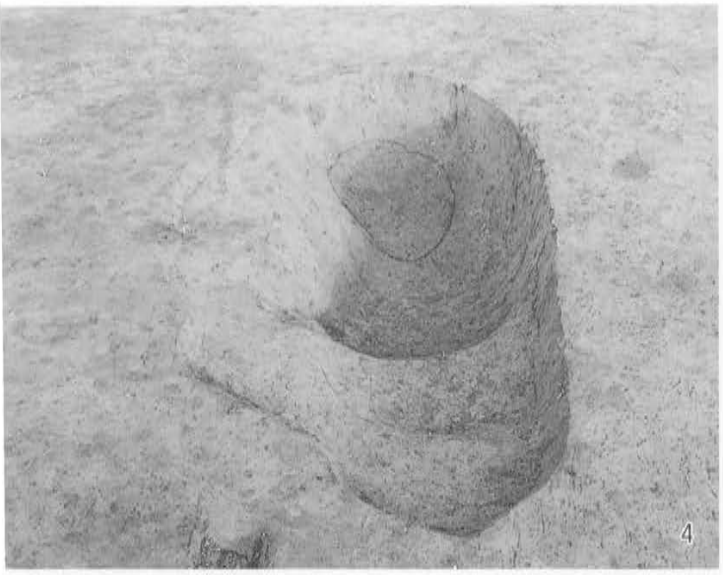
1. SK-98【南より】
2. SK-100【北東より】
3. SK-101【南東より】
4. SK-103【北西より】
5. SK-102【南より】
6. SK-112【西より】
7. SK-113【南東より】



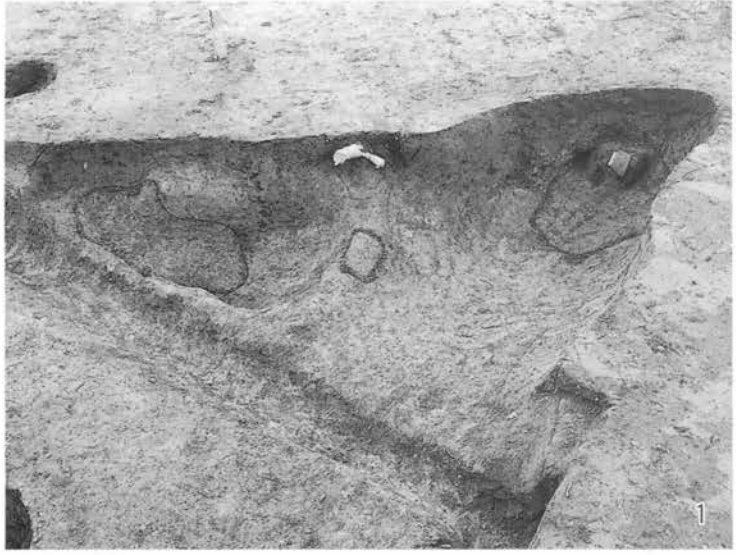


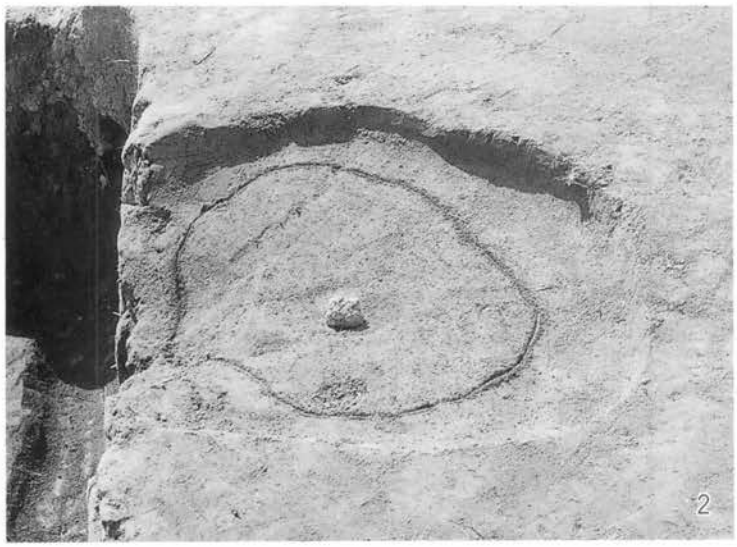


1. SK-115【東より】
2. SK-116【南西より】
3. SK-117【北東より】



4. SK-118【西より】
5. SK-118 遺物出土状況【西より】
6. SK-119【南西より】





1. SK-120【北東より】
2. SK-121【北より】

3. SK-122【南より】
4. SK-124【南より】

5. SZ-1【南より】

SD-1【東より】

SD-6【北より】

SD-9【南より】

SD-10 遺物出土状況【北より】

SD-12【南東より】

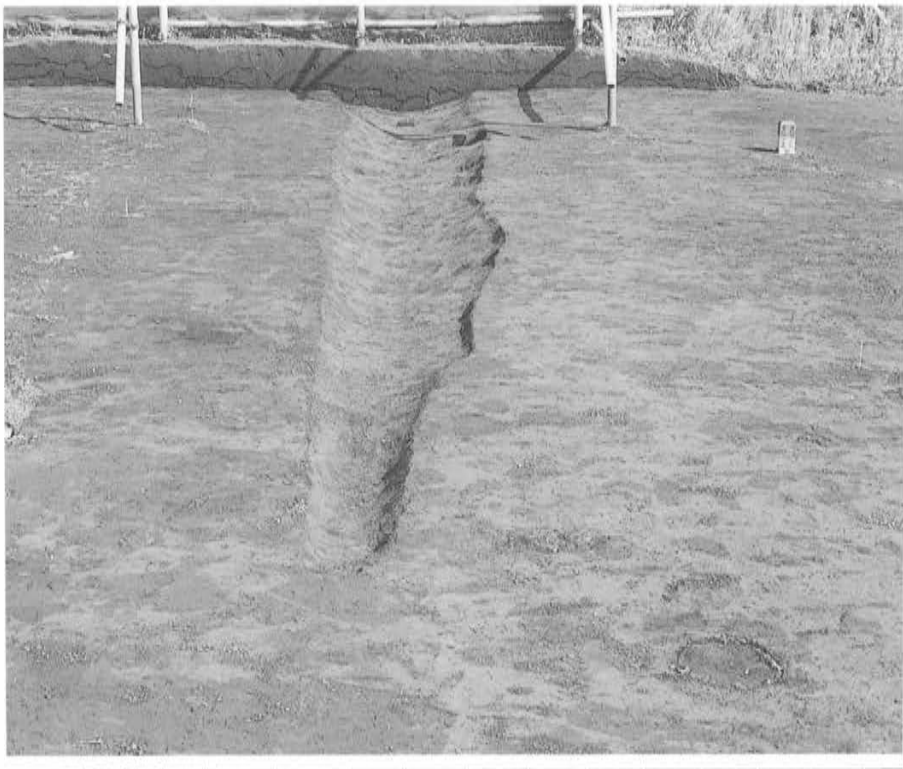
SD-13・14・15・16【北東より】

SD-17【北東より】

SD-18【北東より】

SD-19【北西より】

SD-21・22【西より】



SD-24【西より】

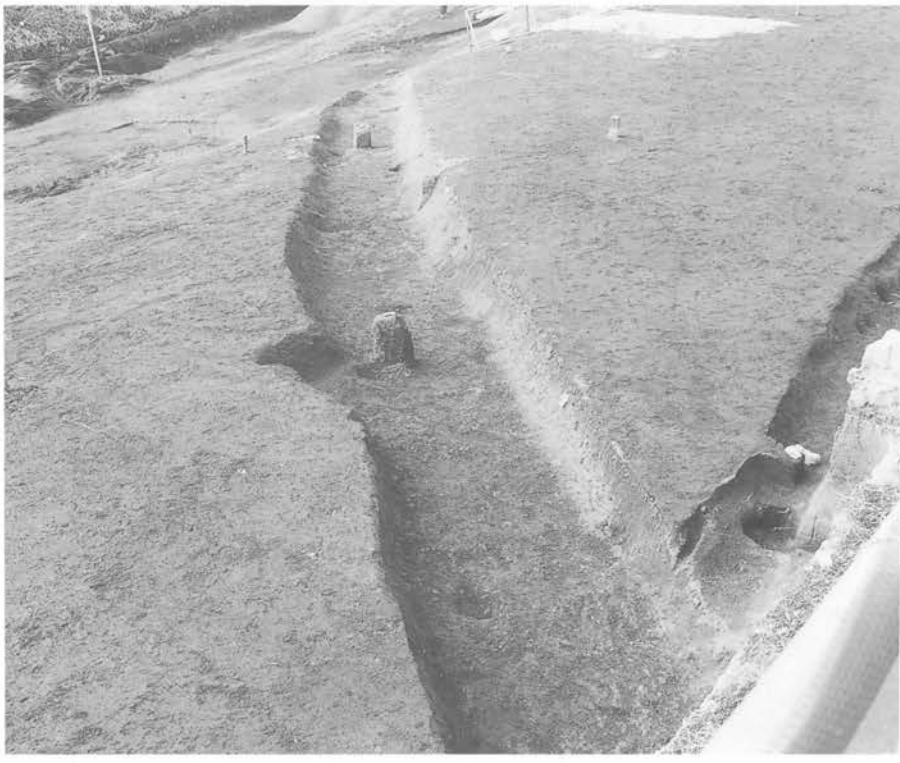
SD-26【南西より】

SD-27【東より】

SD-28【西より】

SD-29【南西より】

SD-30・31【北より】



SD-32【東より】

SD-33【北より】

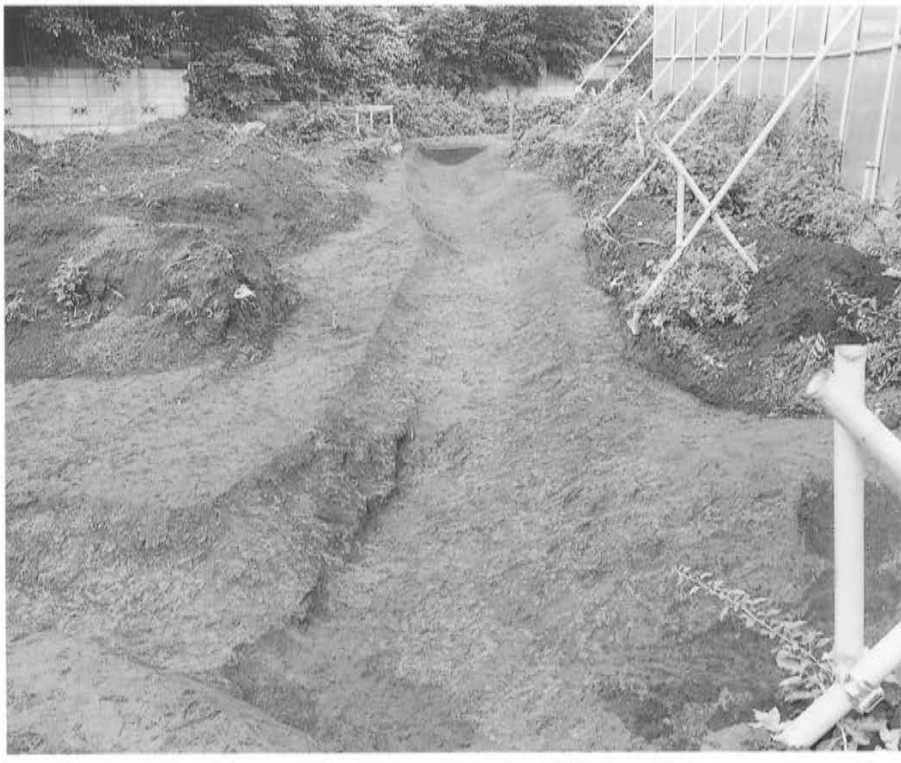
図版86

SD-34・35・36・37【南西より】

SD-36 硬化面検出状況【西より】

SD-1D・4D【北東より】

SD-1D・2D・4D【南より】



SD-3D【南西より】

SD-5D【南より】

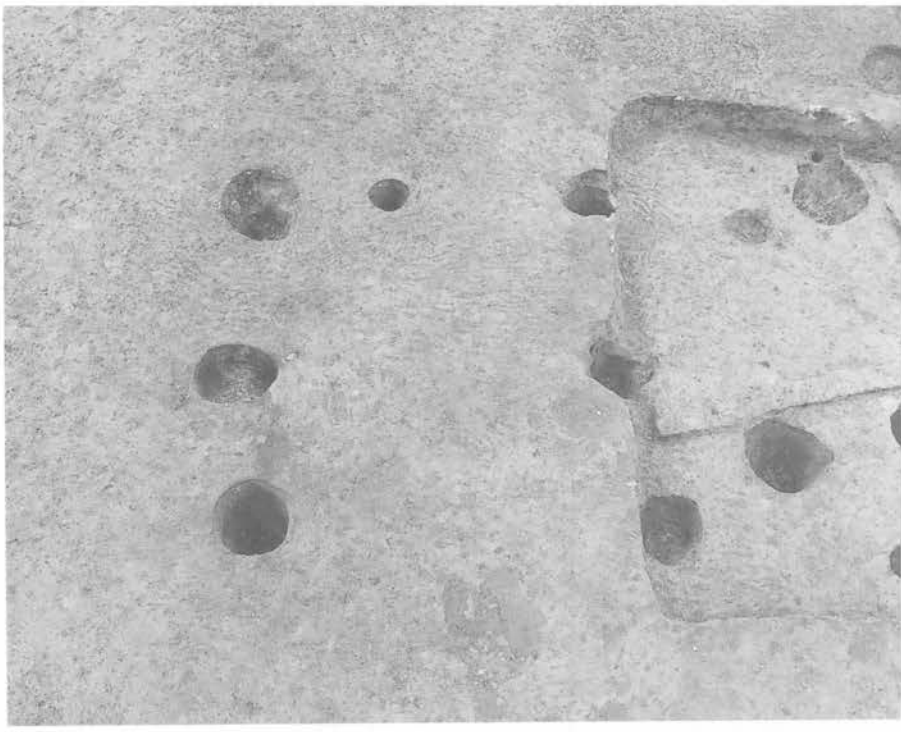
図版88

SX-1【南西より】

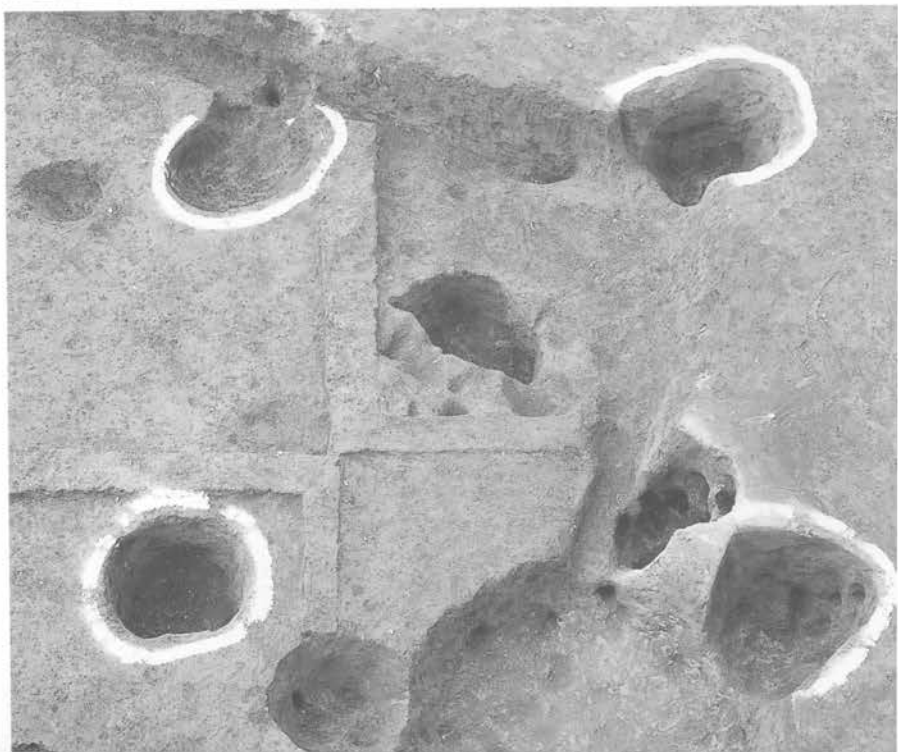
SX-2【北西より】

SX-4【南東より】

SX-5【南東より】

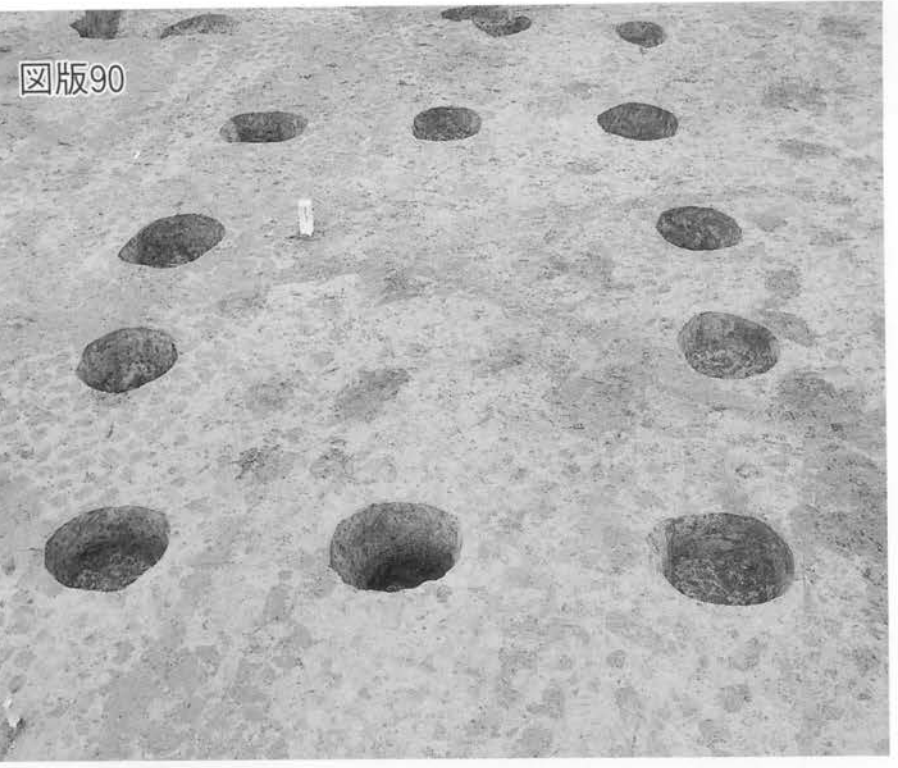


SX-6【南東より】



SX-7【南東より】

図版90



SX-8【南より】

SX-9【南東より】

SX-10【南西より】

SX-11【東より】

SX-12【南東より】

SX-19【東より】

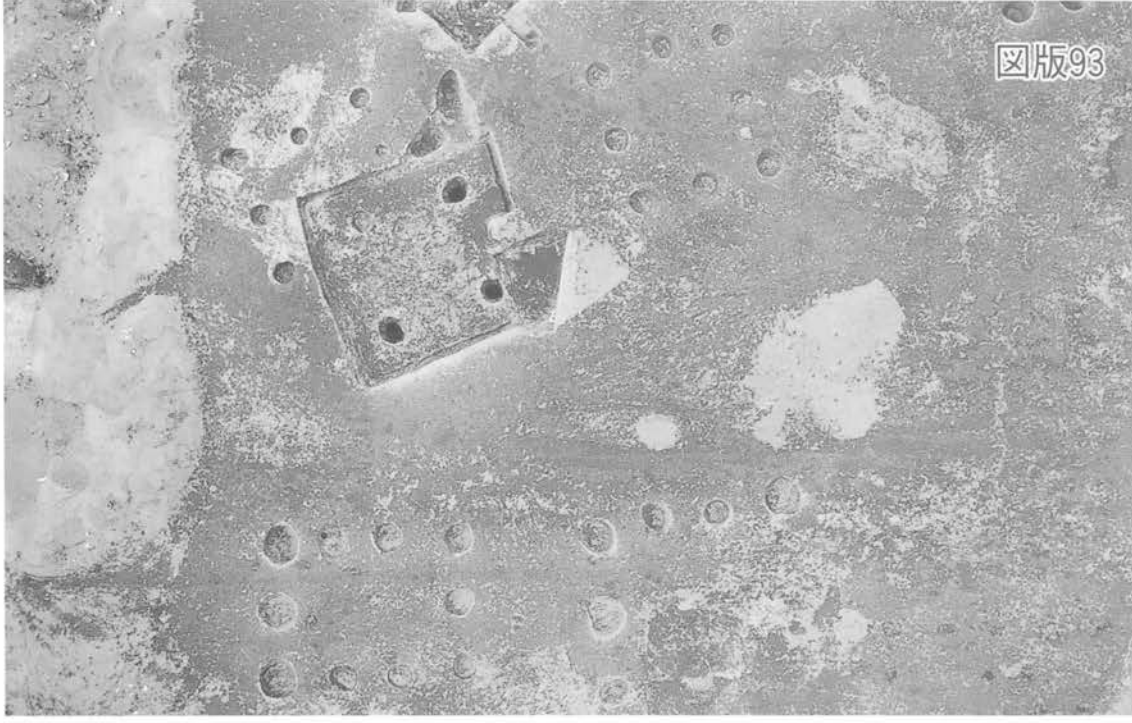
図版92

SX-13・14・15・16・17・18【東より】

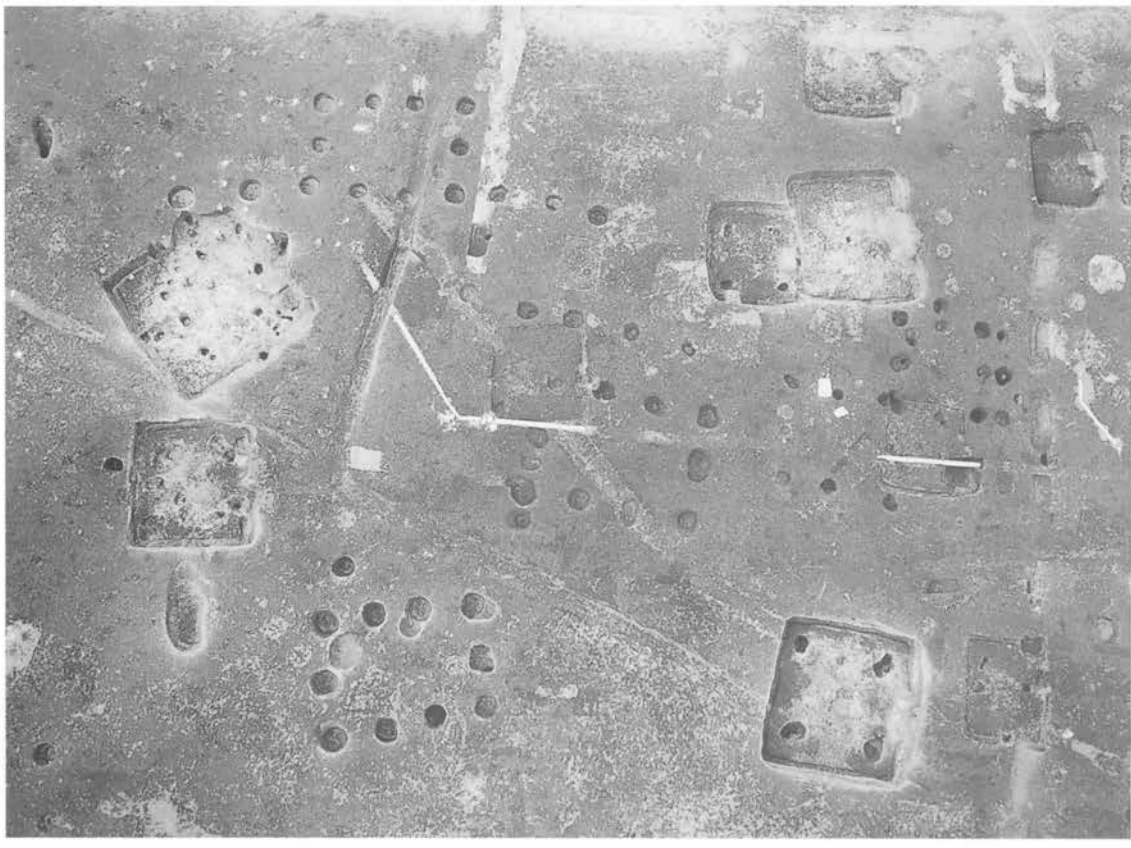
SX-21【西より】

SX-23【東より】

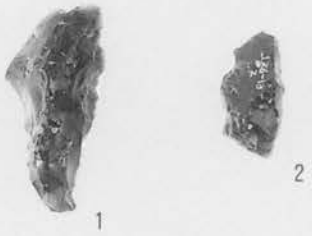
SX-3・11・21
【台地中央部西寄り】



SX-26・27・28・30・31・32
【台地西部南寄り】

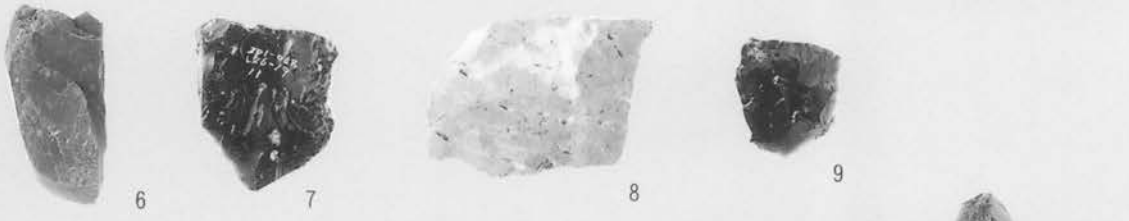


SX-24・25・29・33
【台地西部北寄り】



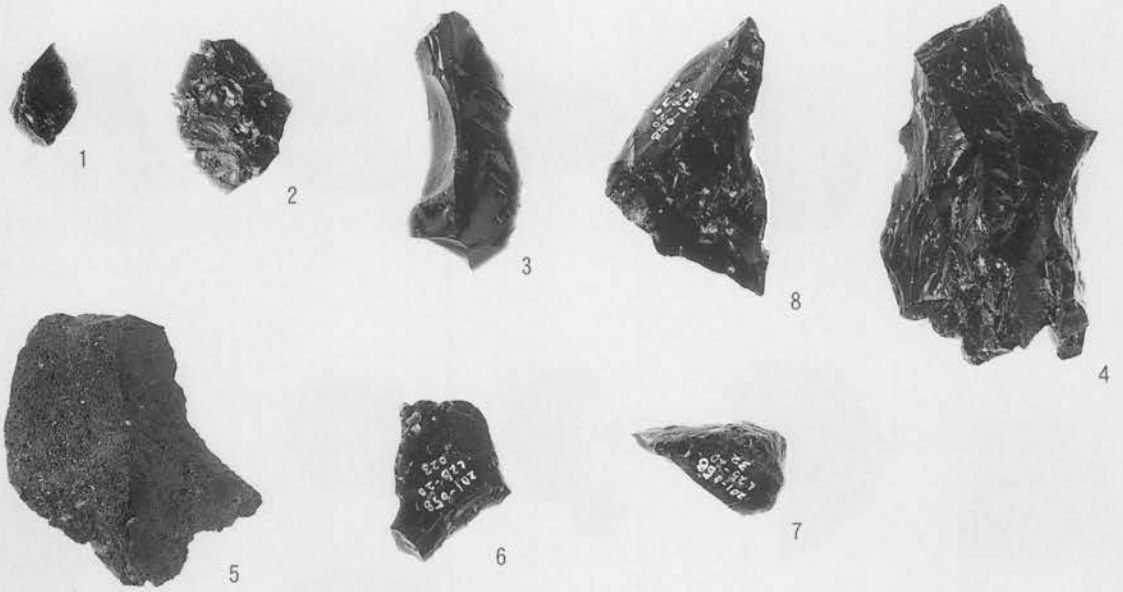
L26-a ブロック

L26-d ブロック

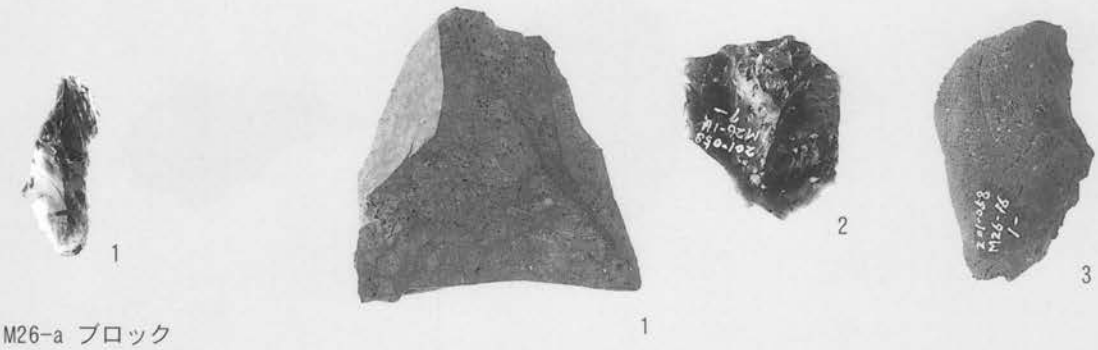


L26-b ブロック

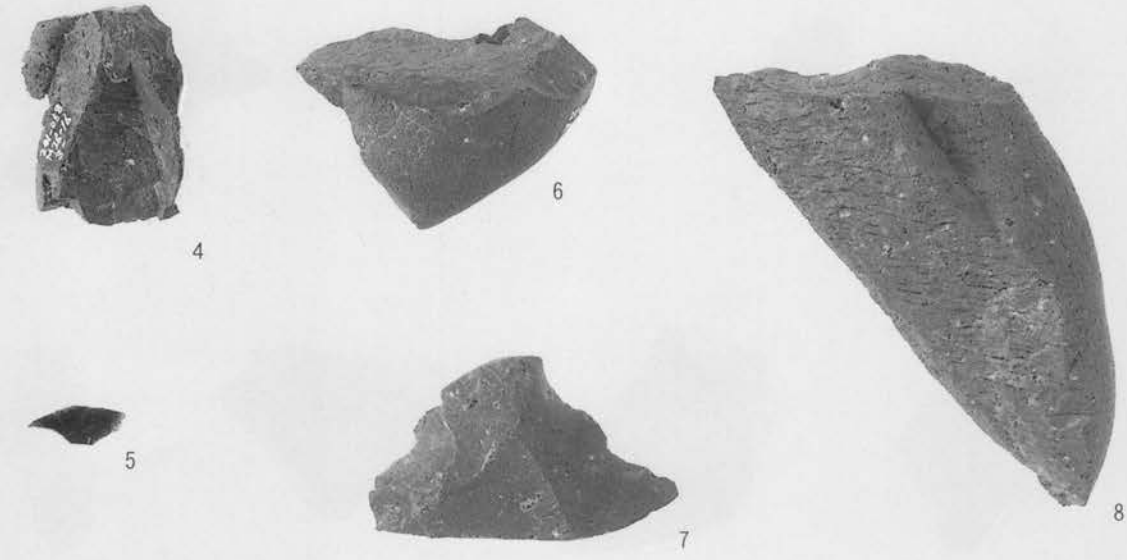
L26-c ブロック



L26-e ブロック



M26-a ブロック



M26-b ブロック

1

2

3

4

5

7

8

9

10

11

6

15

14

12

17

M26-c ブロック

M26-f ブロック

1

2

4

8

6

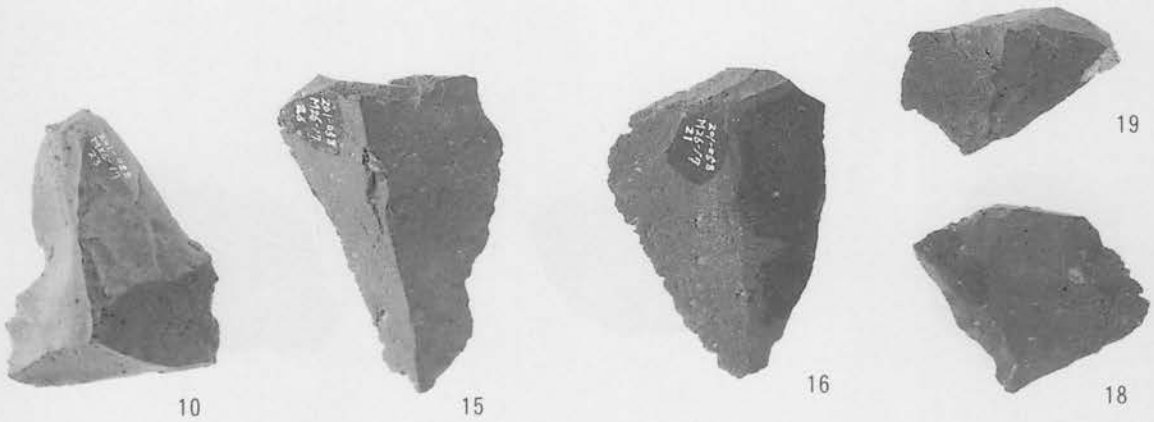
7

9

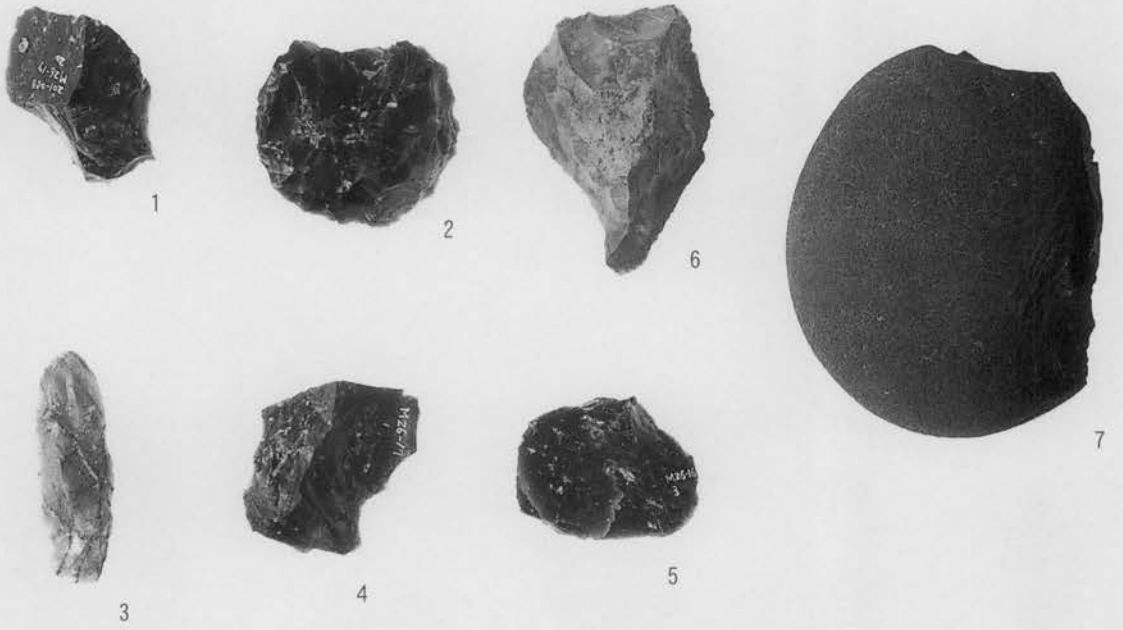
10

M26-dブロック

M26-dブロック

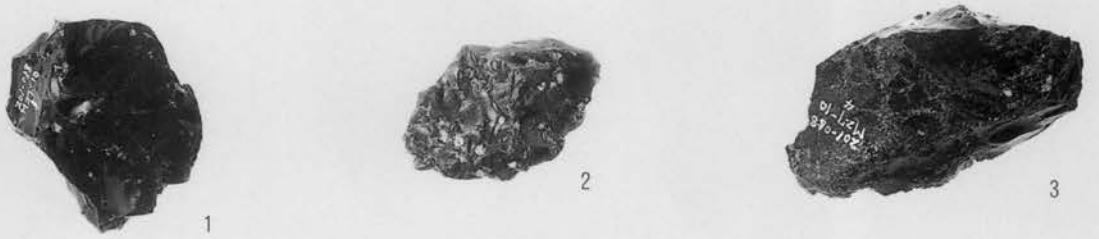


M26-f ブロック

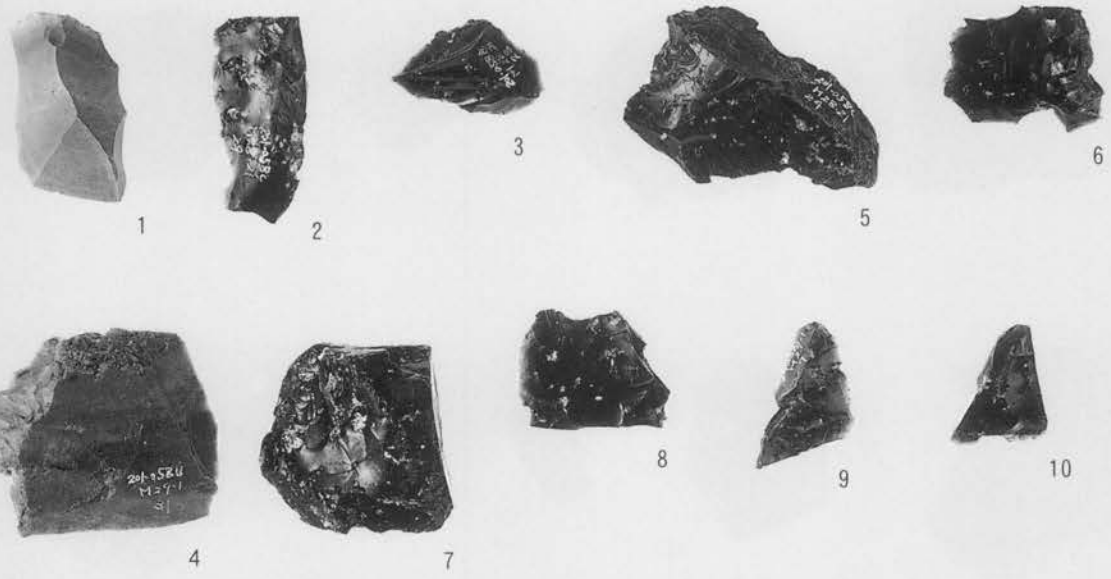


L26. M26 ブロック外

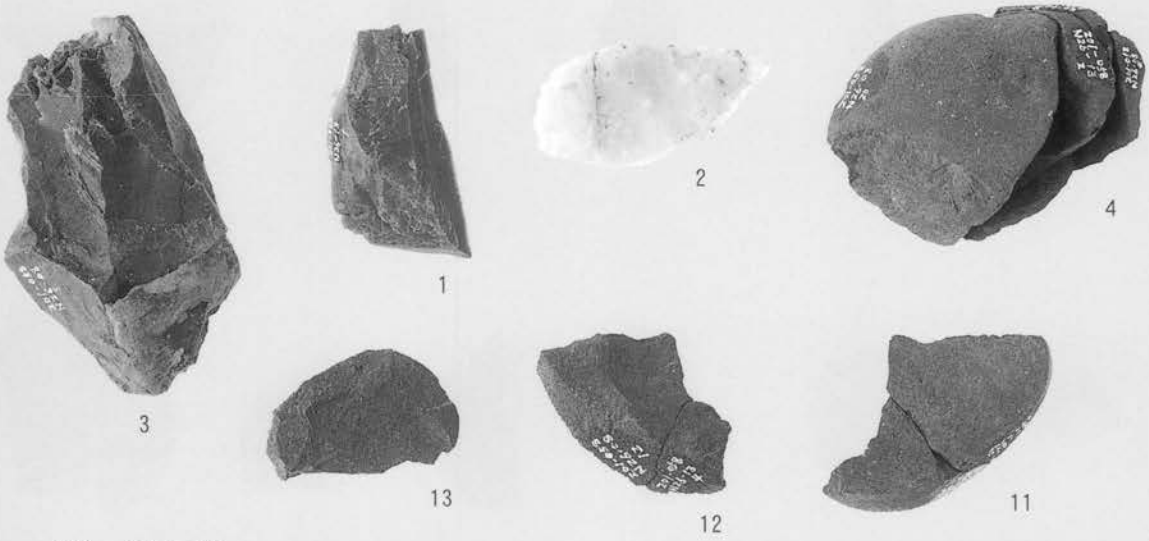
M27-a ブロック



M27-b ブロック

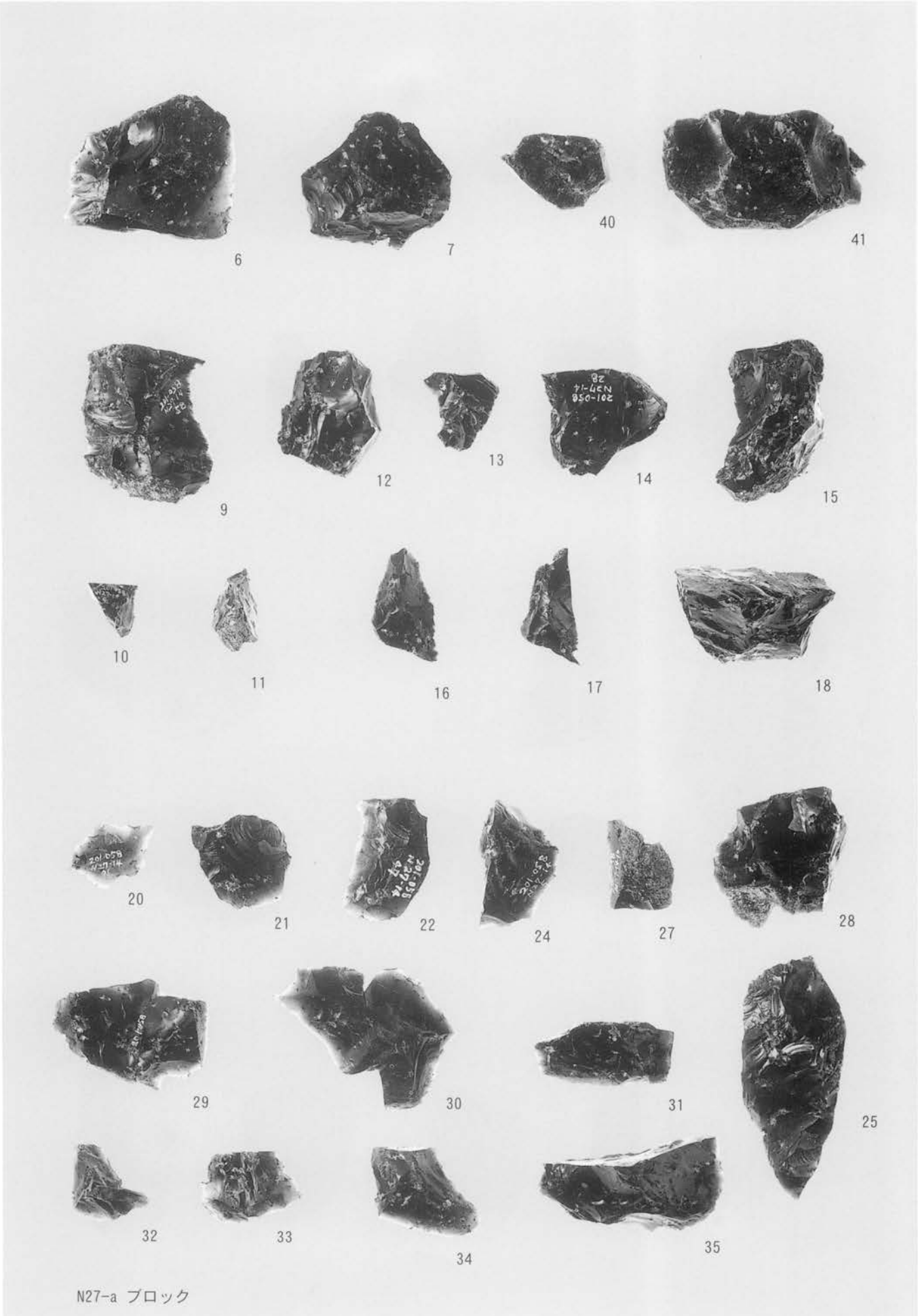


M29-a ブロック



N26-a ブロック

N27-a ブロック


6
7
40
41
9
12
13
14
15
10
11
16
17
18
20
21
22
24
27
28
29
30
31
25
32
33
34
35

N27-a ブロック

43
45
44
49
50
47
46
48
61
62
63
65
66
60
64
68
69
70
71
73
72
52
53
54
36

N27-a ブロック(3)

8

19

42

59

67

N27-a ブロック

1

2

6

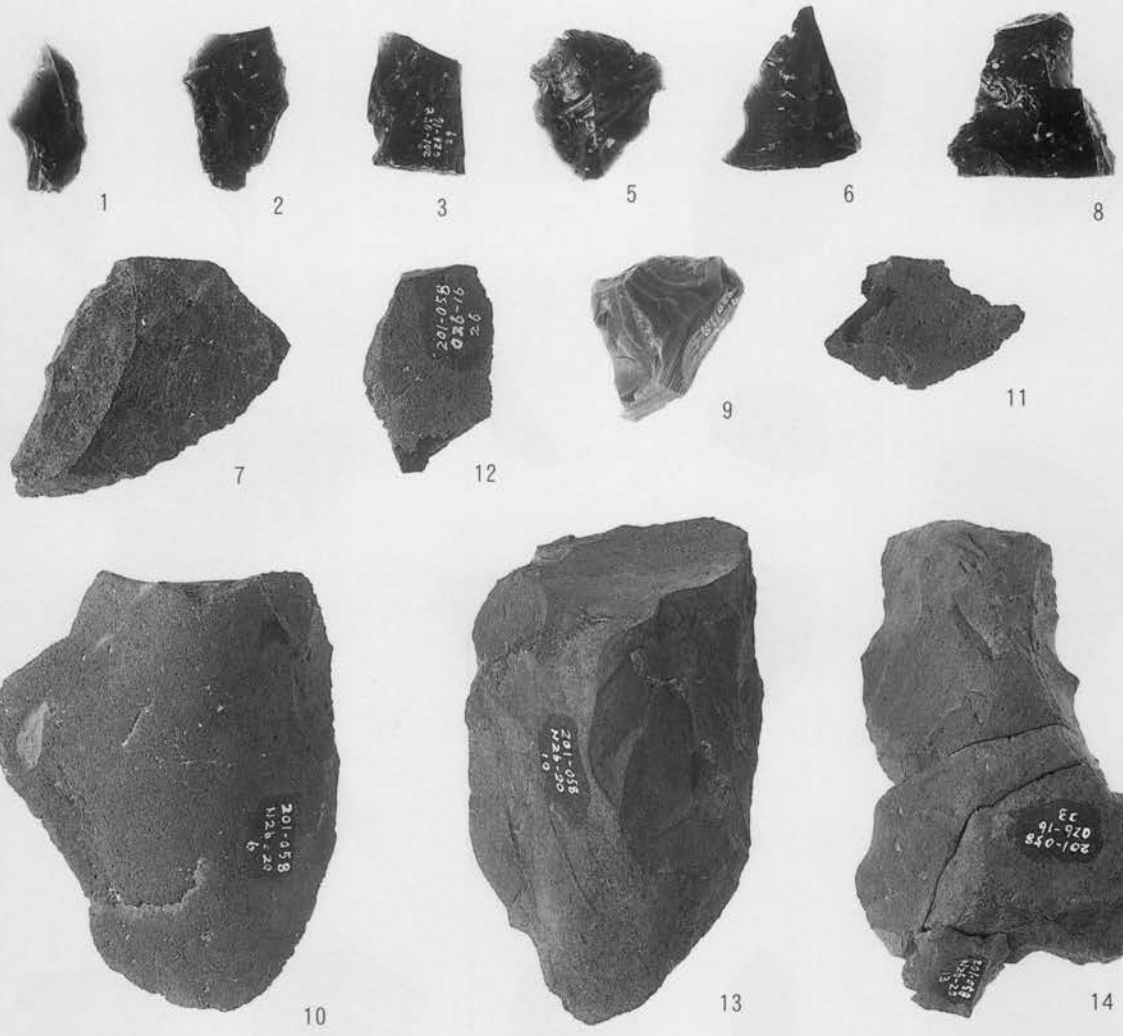
7

5

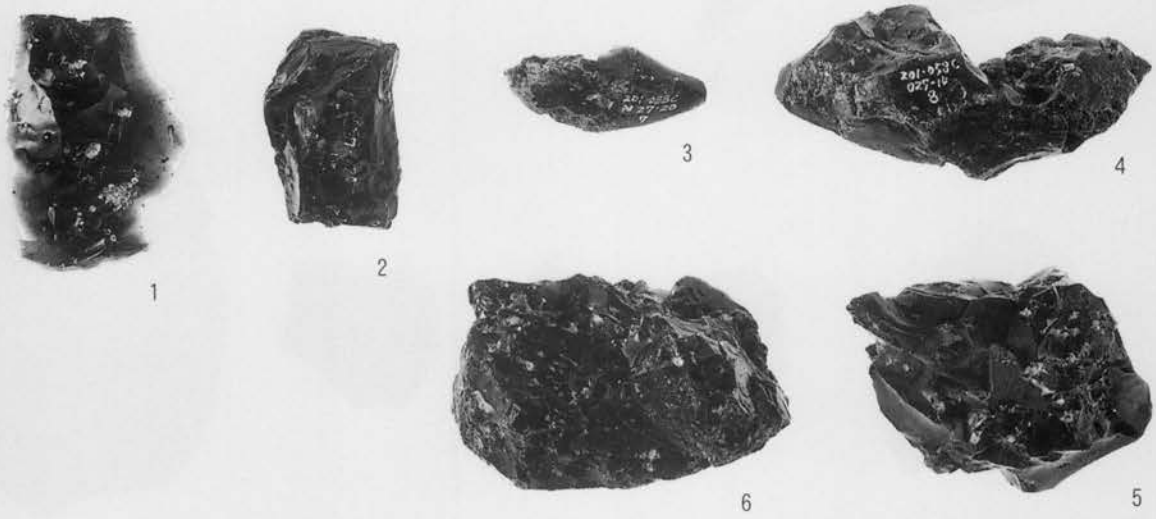
3

4

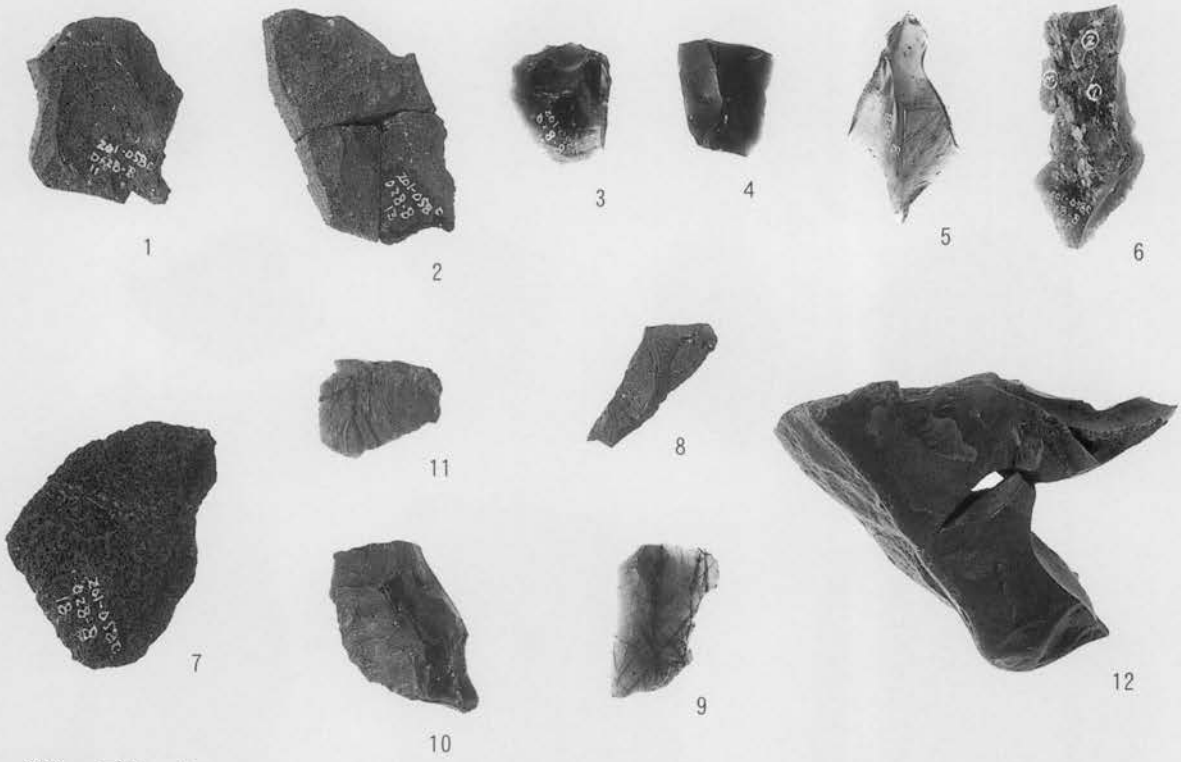
O26-a ブロック



O26-b ブロック

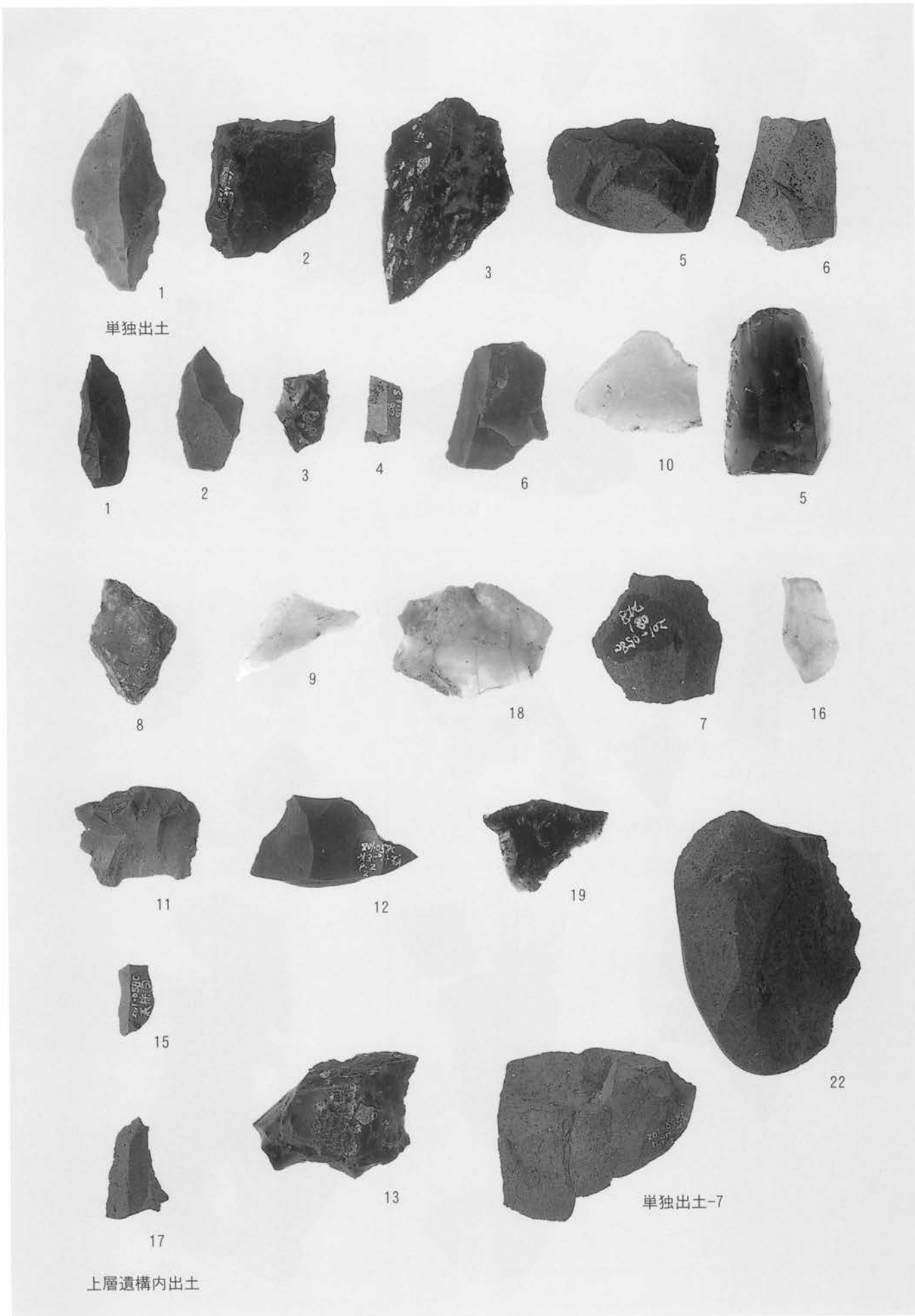


O27-a ブロック

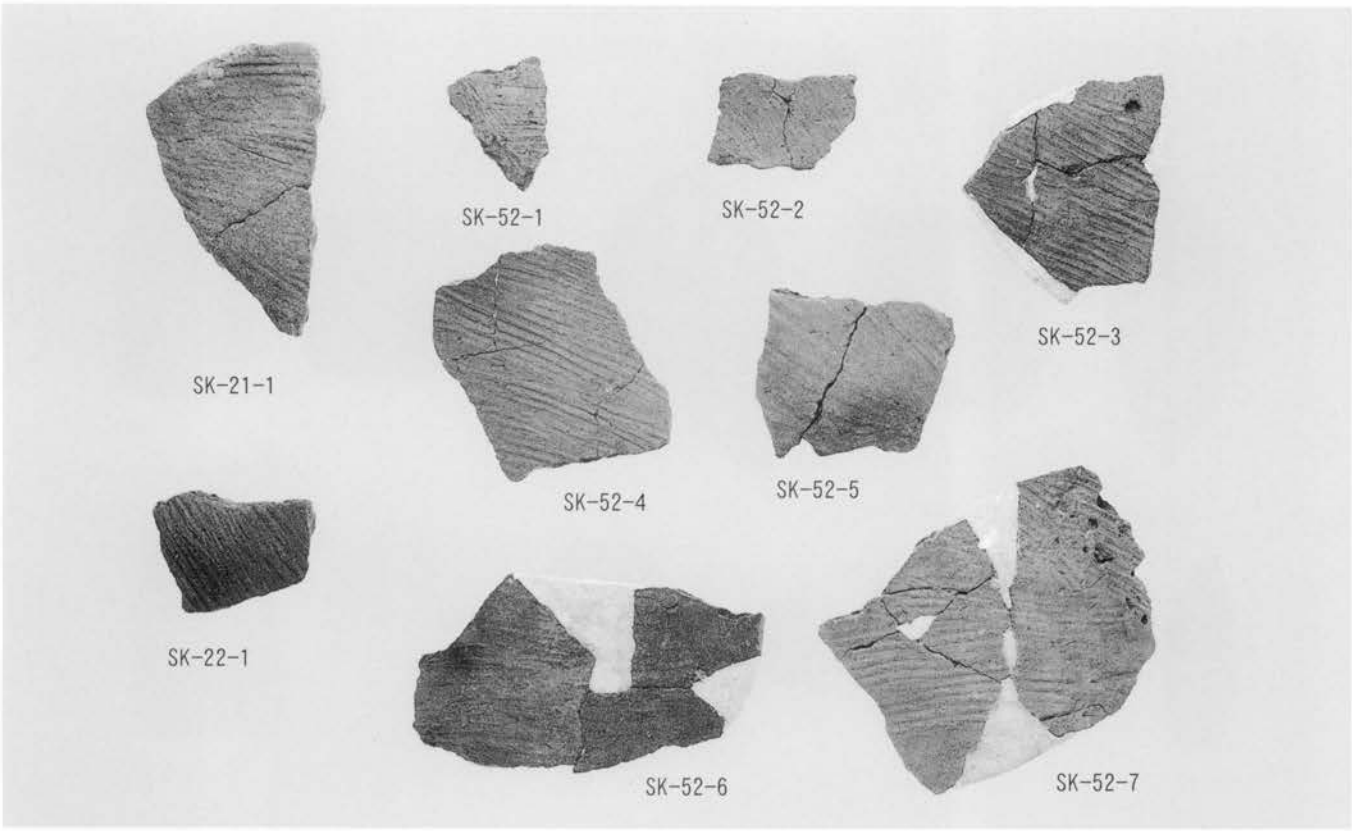


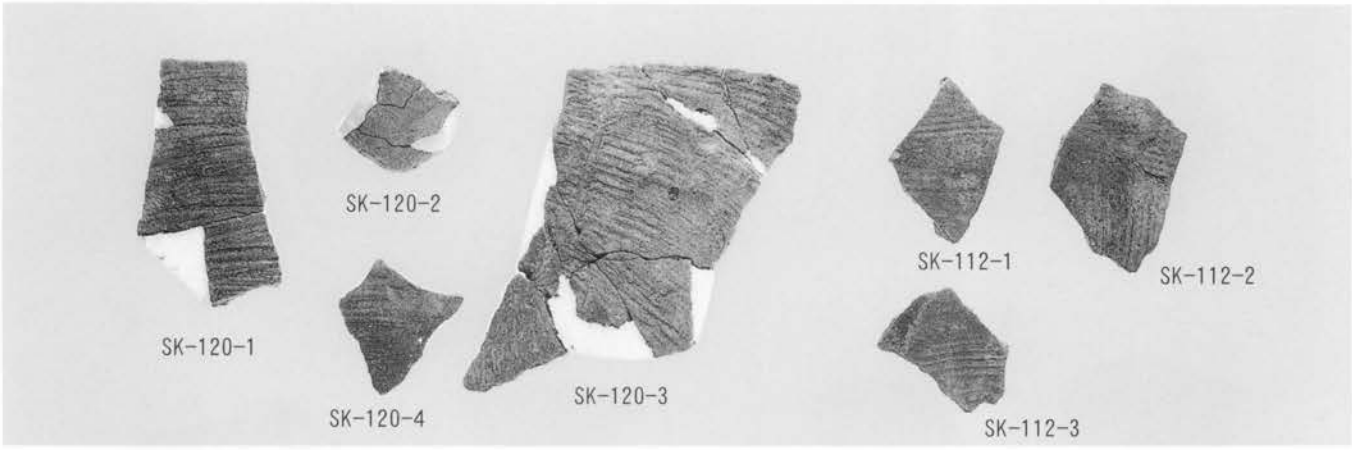
O28-a ブロック

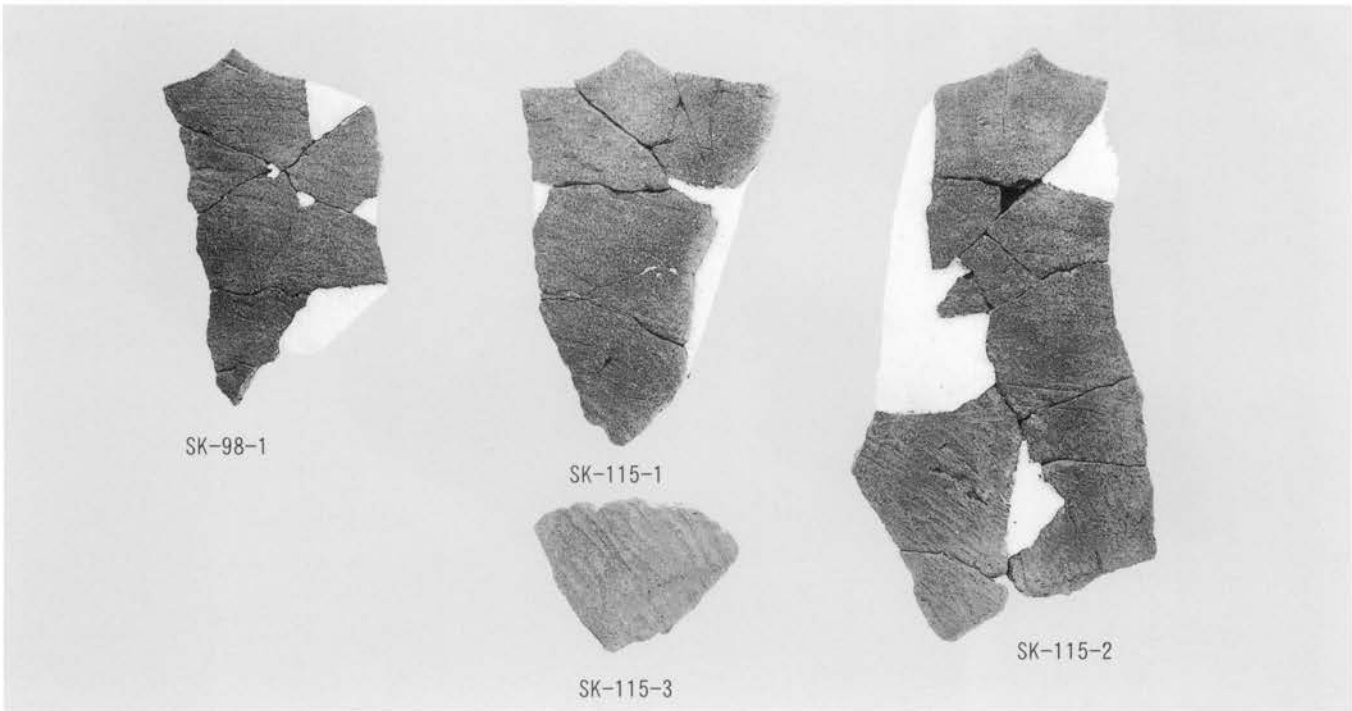
P27-a ブロック


1
2
3
5
6
単独出土
1
2
3
4
6
10
5
8
9
18
7
16
11
12
19
22
15
13
単独出土-7
17
上層遺構内出土

図版106

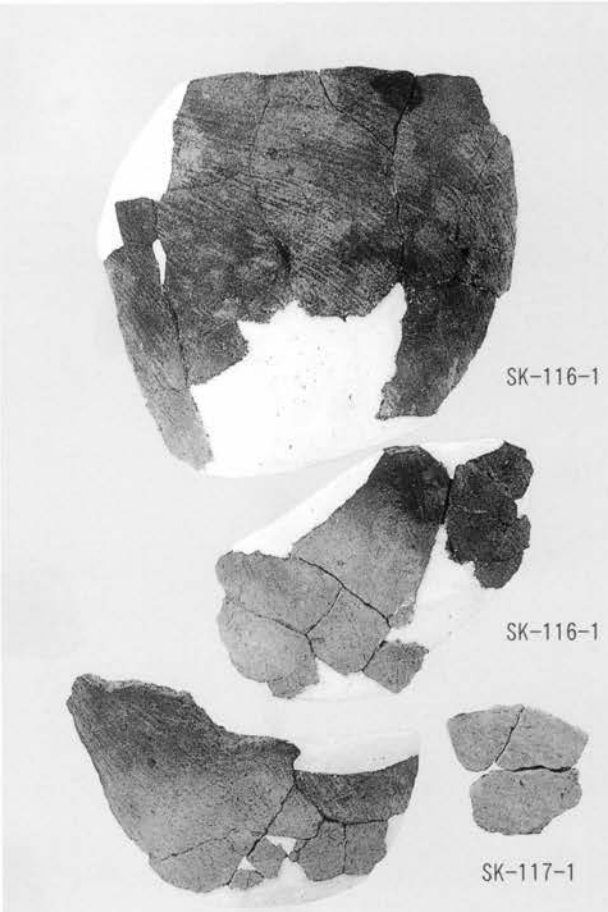






炉穴等の縄文土器（1）

SK-98-2



SK-116-1

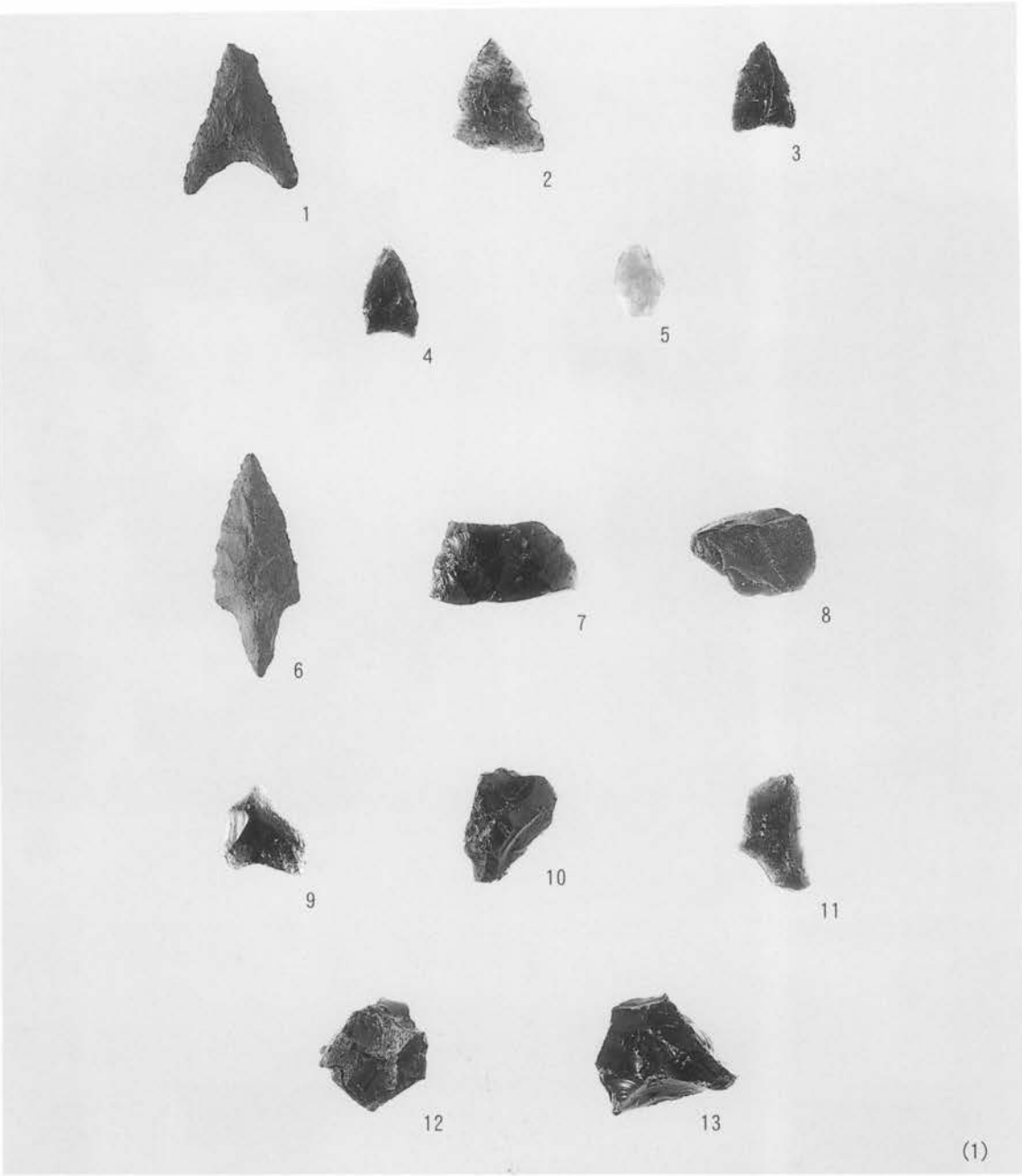
SK-116-1

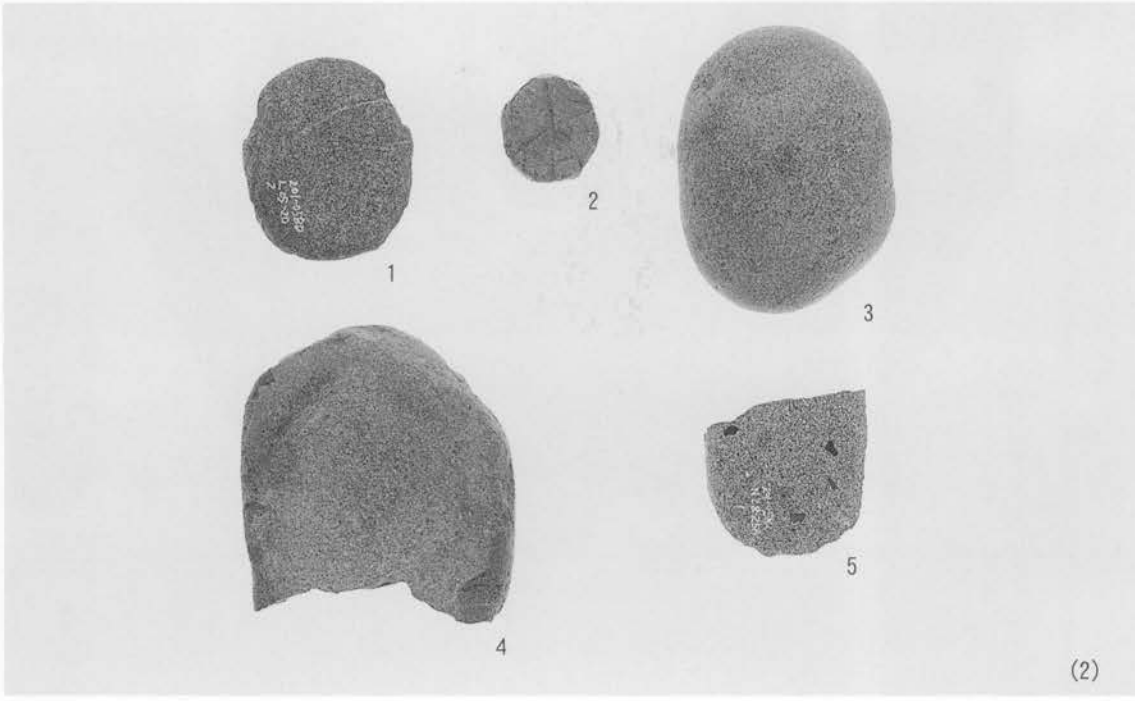
SK-117-1

SK-116-2

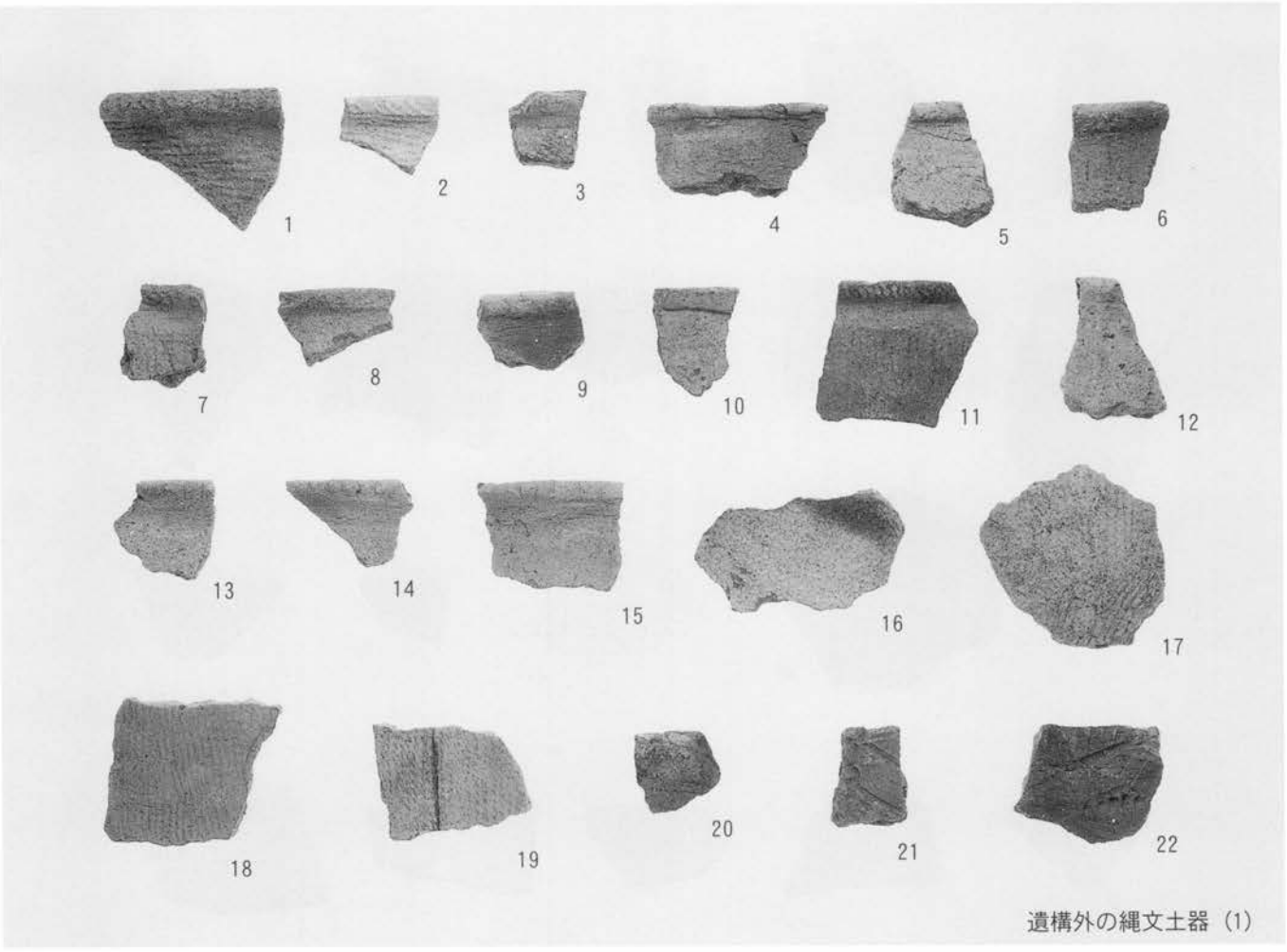
SK-118-1

炉穴等の縄文土器（2）

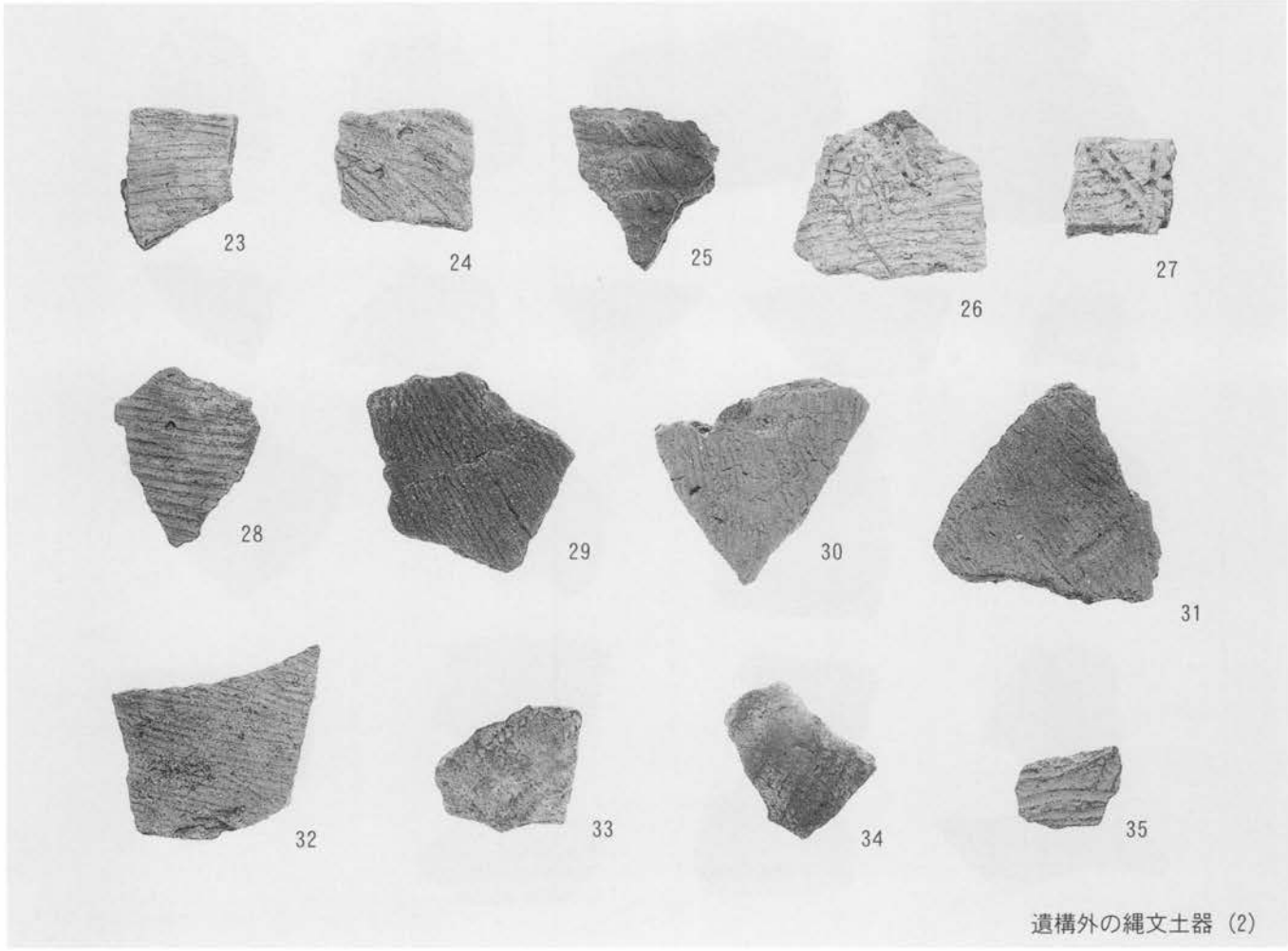




遺構外の縄文時代石器

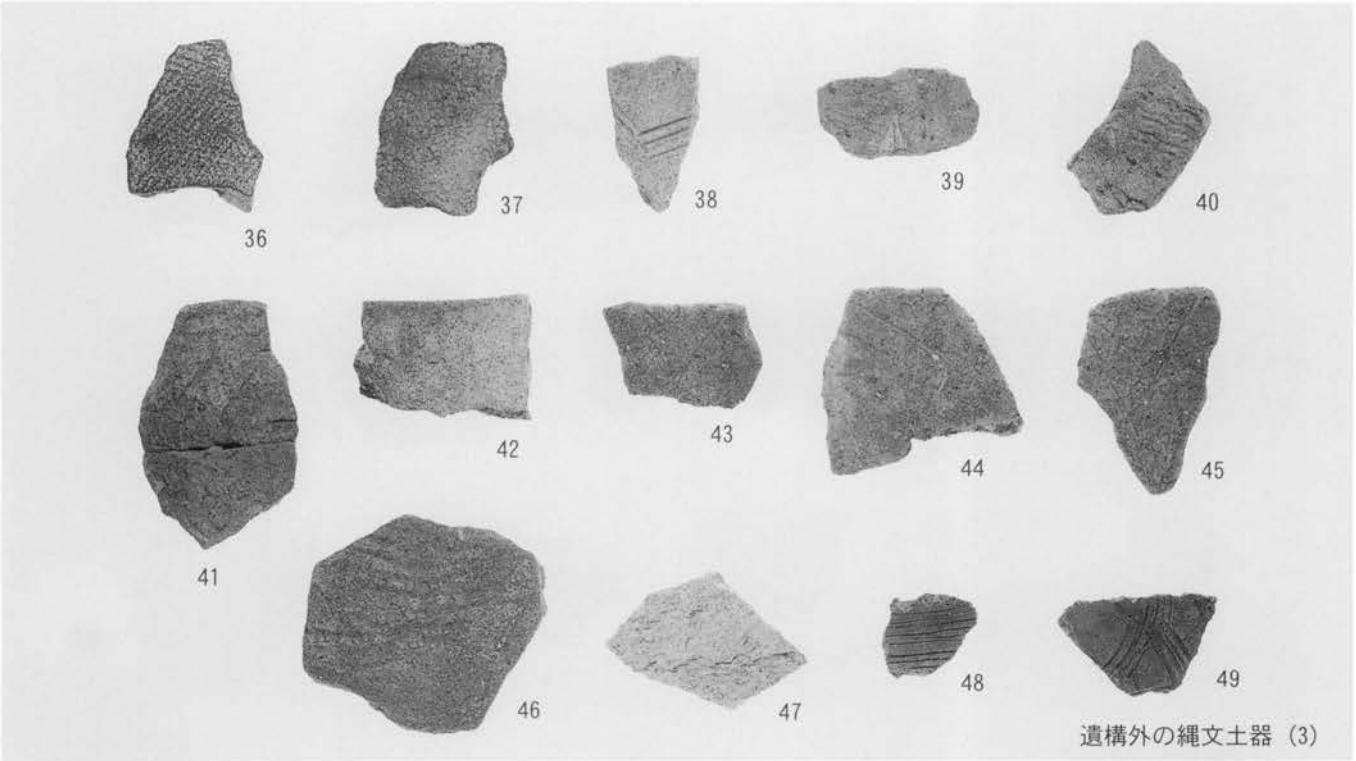


遺構外の縄文土器（1）

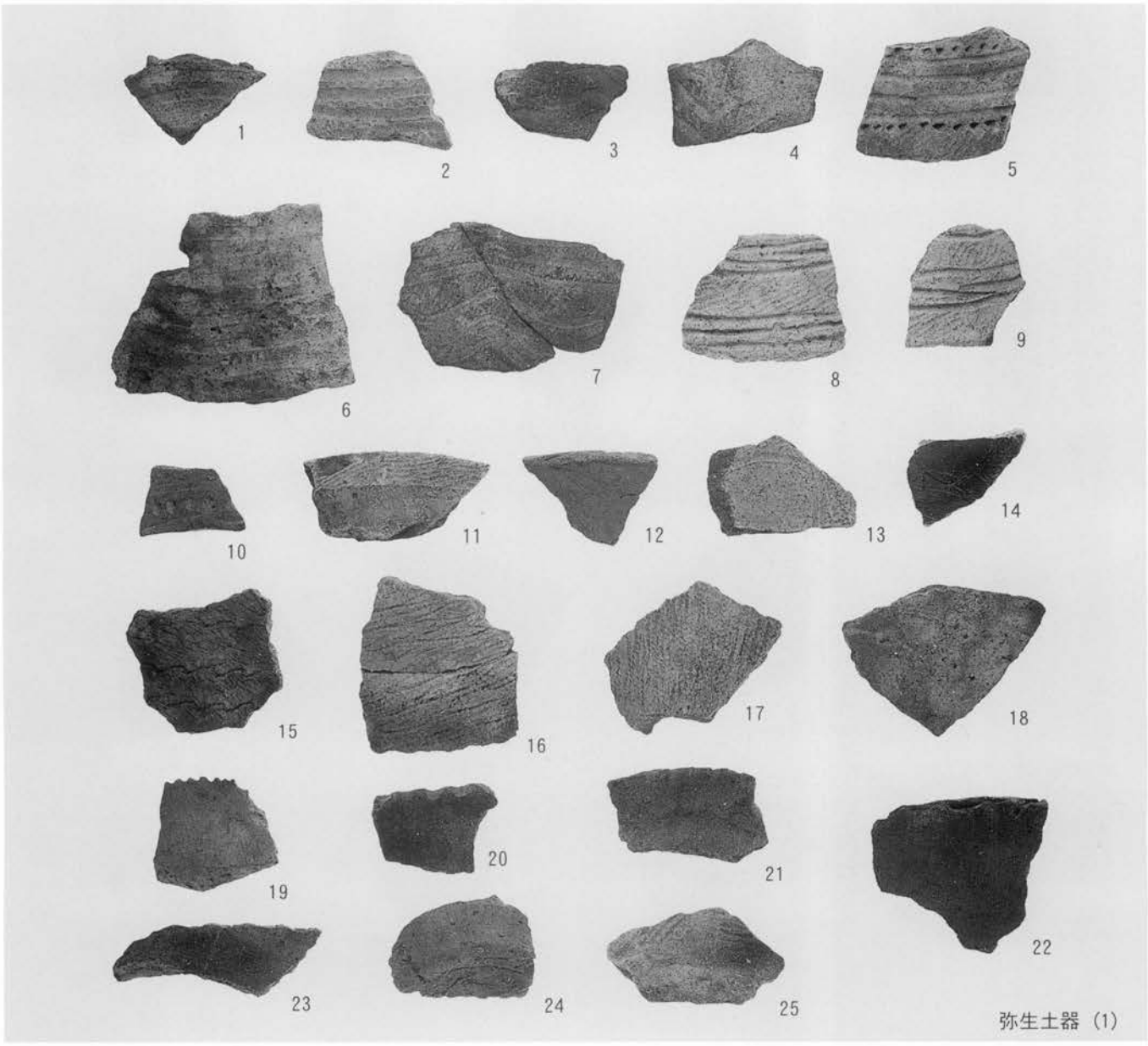


遺構外の縄文土器（2）

遺構外の縄文土器（1）・（2）

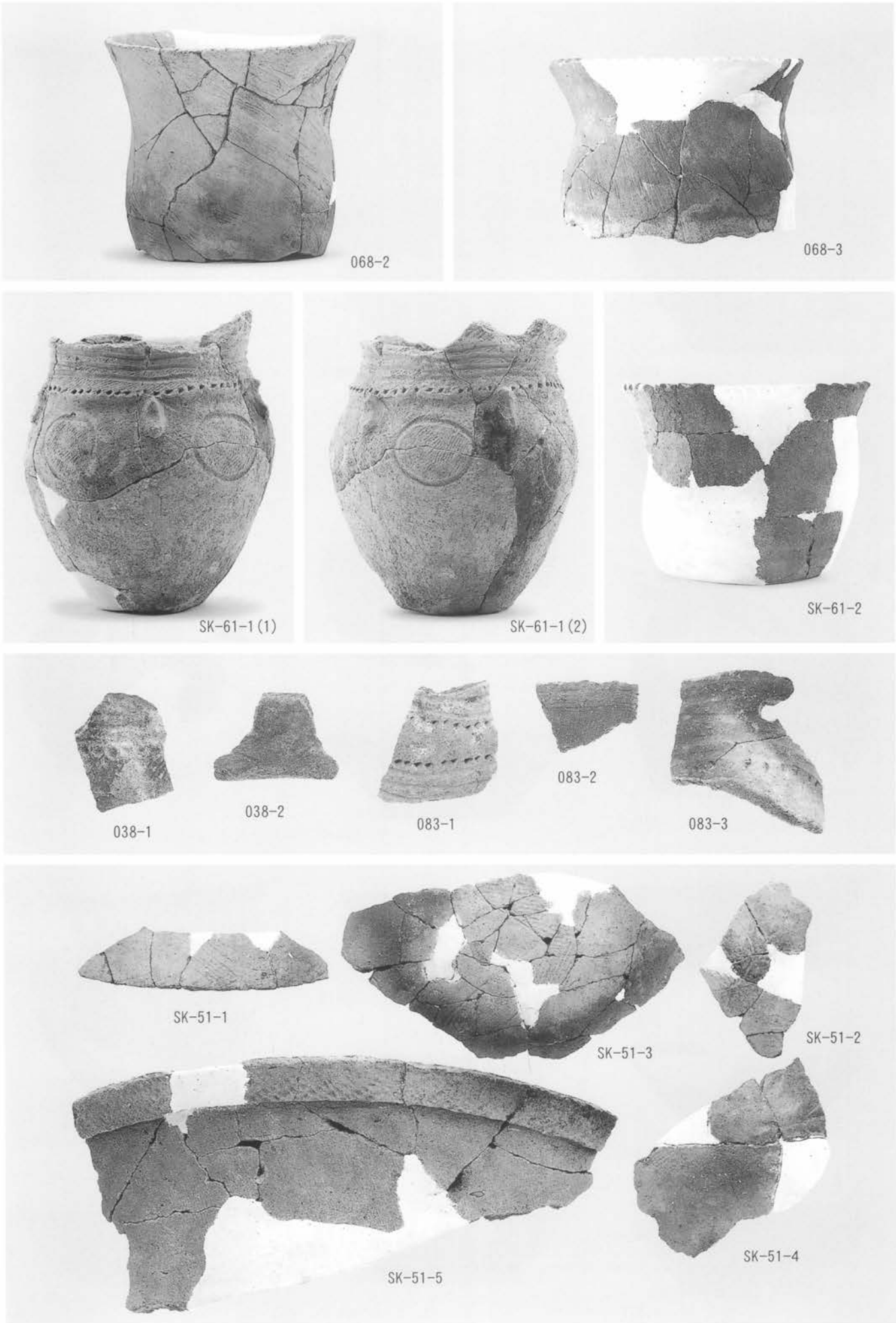


遺構外の縄文土器（3）



弥生土器（1）

遺構外の縄文土器（3）・弥生土器（1）

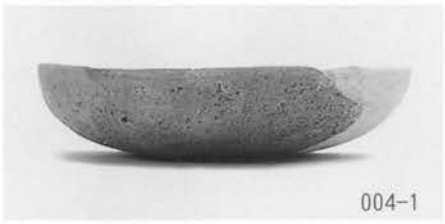

068-2
068-3
SK-61-1 (1)
SK-61-1 (2)
SK-61-2
038-1
038-2
083-1
083-2
083-3
SK-51-1
SK-51-3
SK-51-2
SK-51-5
SK-51-4

【SI-を省略】

弥生土器 (2)

001-1

001-8


004-1

005-3

008-3

008-5

008-7

001-6

006-5

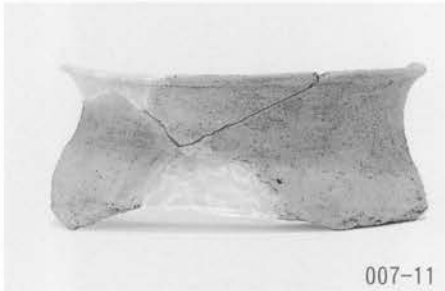
008-2

008-4

008-6

009-1

001-7


007-11

007-17

008-9

010-4

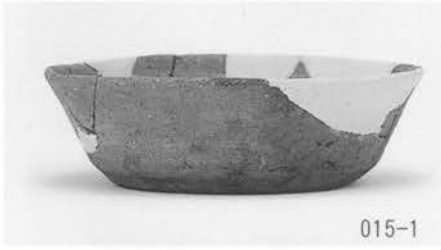
【SI-を省略】

011-4

012-2

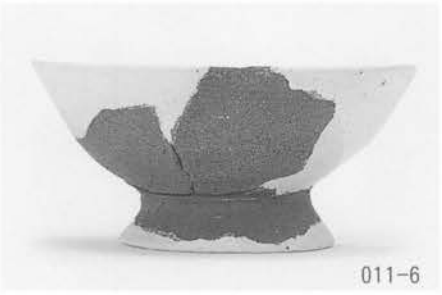
014-4

014-7


015-1

015-4

015-9


011-6

014-2

014-5

014-8

015-5

017-8

018-2

012-1

014-3

014-6

014-9

015-6

017-12

018-1

【SI-を省略】

018-3

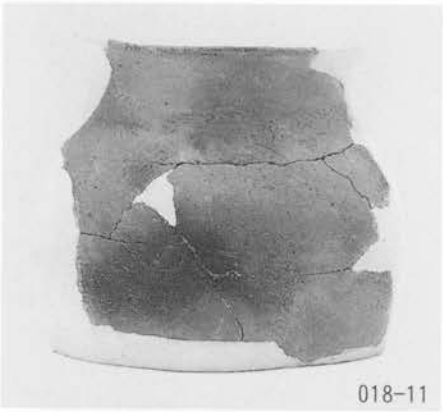
018-4

018-7

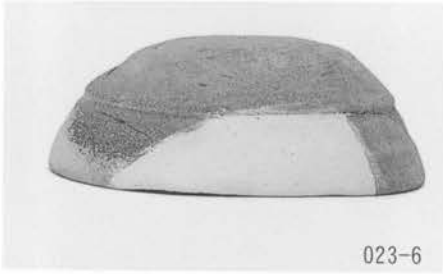
018-8

018-9

018-10


018-11

023-5


023-6

023-8

023-11

023-18

023-12

023-13

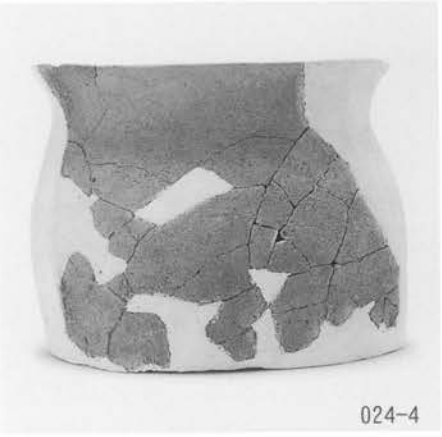
023-17

024-1

【SI-を省略】

024-2

024-3


024-4

025-7

025-4

025-5

025-3

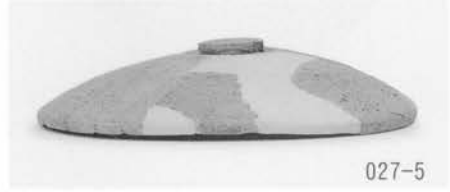
025-8

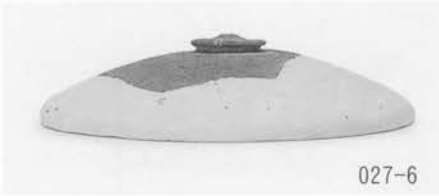
025-10

025-9

025-11

026-1


027-5


027-6

027-7

027-8

027-9

027-10

027-11

028-2

【SI-を省略】

図版116

028-3

028-4

028-5

028-6

028-7

028-9

030-1

030-2

029-1

030-3

030-4

031-1

031-4

035-3

035-4

【SI-を省略】

036-2

040-1

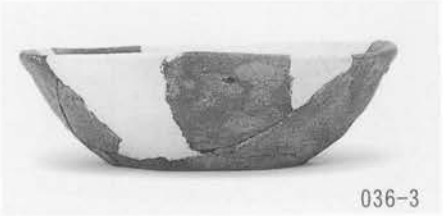
044-6

045-4

049-4

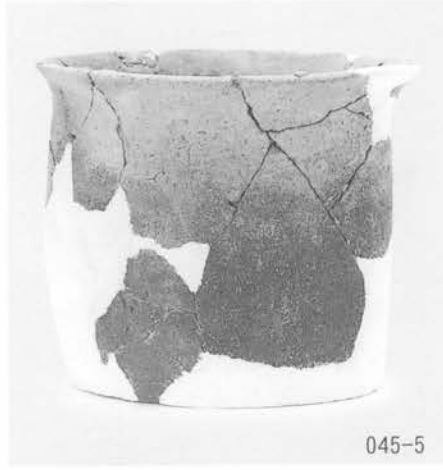
051-3

051-4


036-3

041-1

044-10


045-5

051-1

051-8

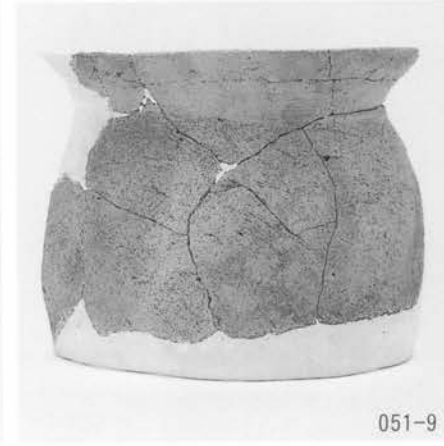
039-3

042-2

045-6

050B-1

051-2


051-9

【SI-を省略】

図版118

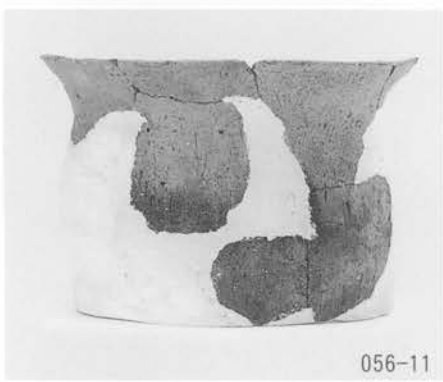
051-6

051-6

055-13

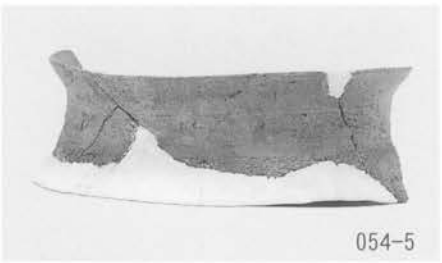
055-19

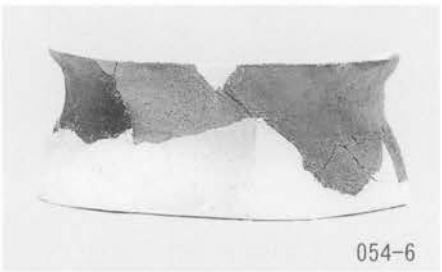
056-6


056-11

057-7

052-4


054-5


054-6

055-14

057-9

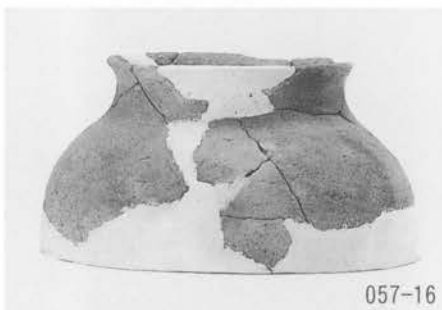
057-17

052-3

054-7

055-15

057-13


057-16

058-4

【SI-を省略】

058-5

060-2

060-4

060-6

060-5

060-7

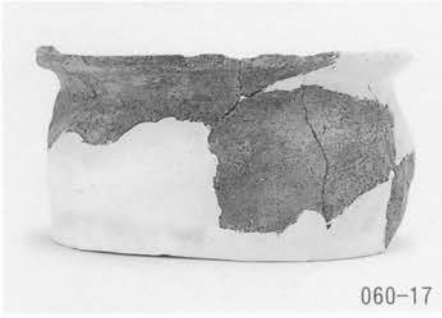
060-8

060-9

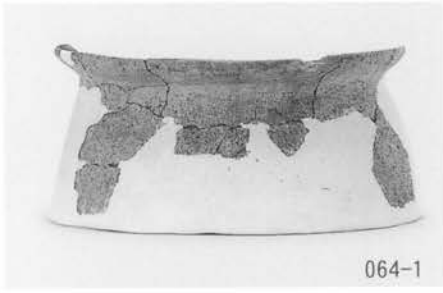
060-10

060-14

060-15


060-17

065-3


064-1

064-2

066-14

066-17

066-15

066-20

066-13

066-16

【SI-を省略】

066-22

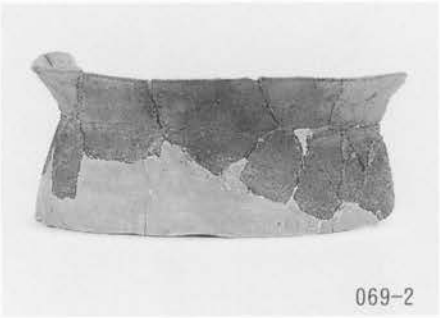
066-25

070-15

075-1

077-2

066-23


069-2

071-1

073-1

075-2

079-10

066-26

070-14

073-3

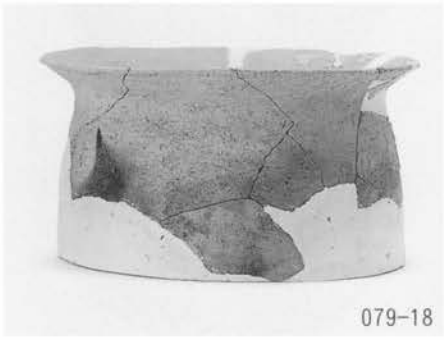
075-3

077-1

079-15

【SI-を省略】

079-17


079-18

080-2

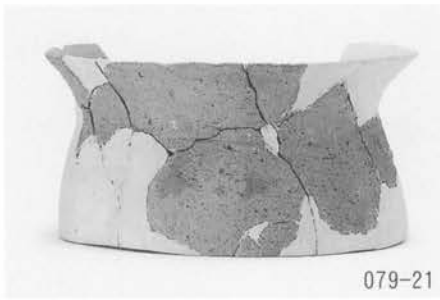
081-6

081-11

081-15

081-19

079-19(1)


079-21

080-3

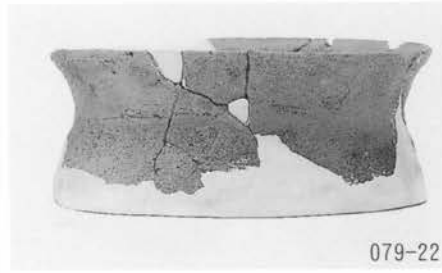
081-7

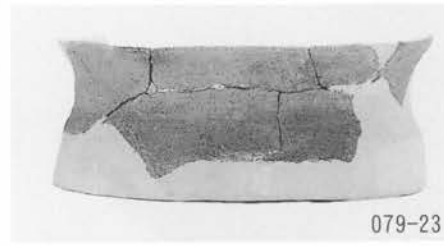
081-12

081-20

081-16

079-19(2)


079-22

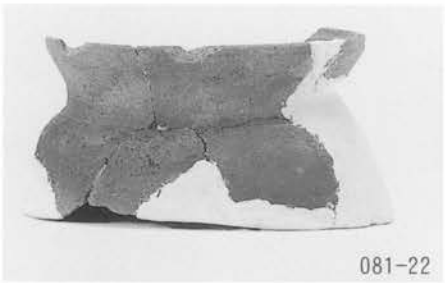

079-23

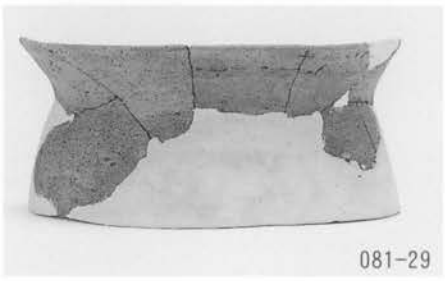
081-8

081-14

081-26

【SI-を省略】


081-22

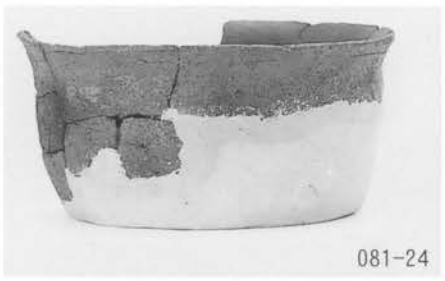

081-29

082-3

082-11

084-9

084-20


081-24

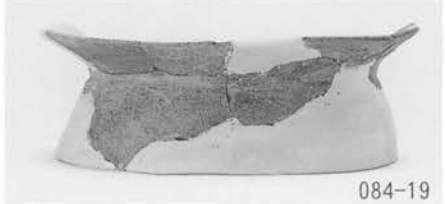
081-30

082-4

082-6

082-14

084-10


084-19

081-27

082-2

082-5

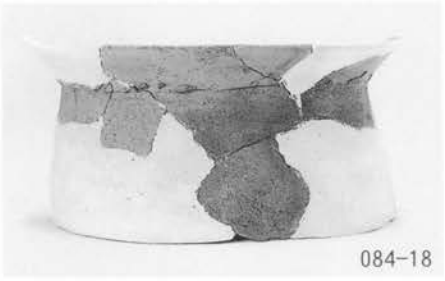
082-8

084-7

084-8

084-21

【SI-を省略】


084-18

084-22

084-23

084-24

085-4

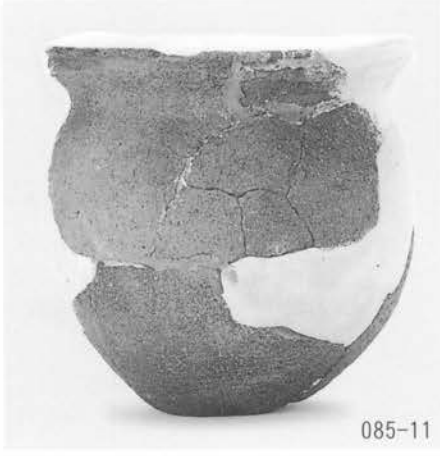
085-3

085-2

085-8

085-14

085-15


085-11

086-4

086-5

086-6

086-7

086-8

086-10

086-13

086-9

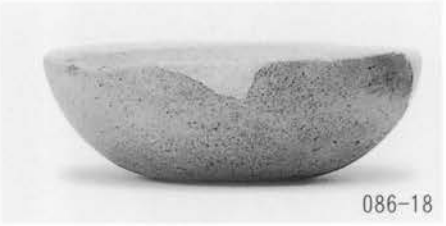
086-11

086-14

【SI-を省略】

086-15

086-17


086-18

086-19

086-20

086-21

087-1

087-2

087-3

087-5

087-6

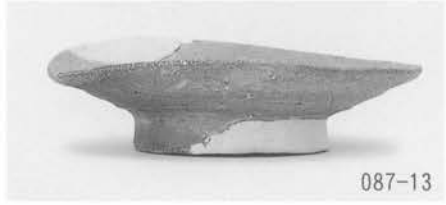
087-7

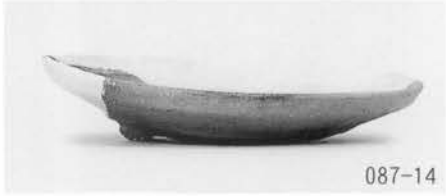
087-8

087-9

087-10

087-12


087-13


087-14

087-15

087-16

087-17

087-18

087-19

087-21

087-20

087-22

【SI-を省略】

087-23

088-15

089-1

089-2

096-5

096-16

098-11

098-13

087-26

088-21

094-1

096-6

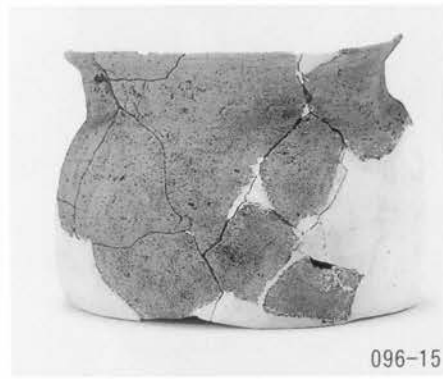
096-20

098-12

098-16

087-32

088-20


096-15

098-8

098-9

098-15

098-17

【SI-を省略】

098-18

098-19

098-20

098-21

098-22

098-23

098-24

098-25

098-32

098-33

098-31

099B-3

099B-4

100-6

100-9

100-10

100-11

100-14

102-3

101-1

101-2

102-6

102-4

【SI-を省略】

102-7

102-8

103-1

104-1

108-4

108-1

119-2

119-6

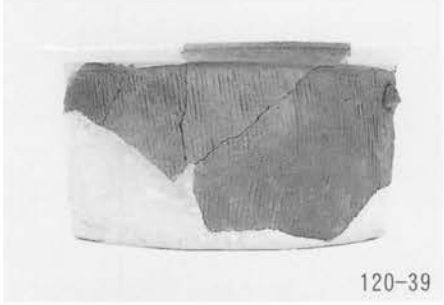
119-3

119-8

119-10

119-5

120-26


120-39

120-41

120-37

121-5

121-7

121-3

【SI-を省略】

図版128

122-1

122-3

124-1

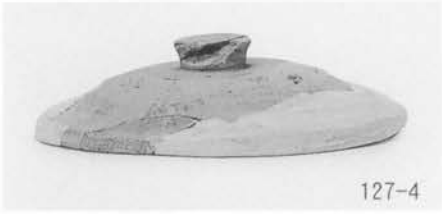
125-1

125-4

126-1

126-5

125-9


127-4

127-5

127-6

127-7

127-10

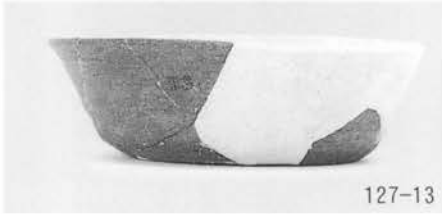
127-11

127-9

127-23

127-28

127-12


127-13

127-29

127-30

127-14

【SI-を省略】

127-37

129-1

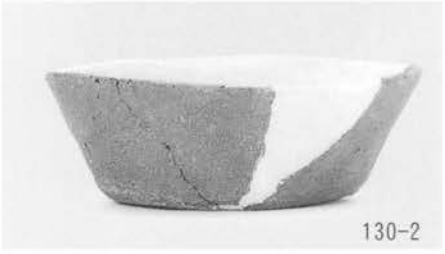
129-2

129-8

129-9

129-7

131-2


130-2

129-11

(1)
131-6

(2)
131-6

132-12

132-15

132-17

132-13

132-16

132-21

【SI-を省略】

図版130

132-3

132-4

132-5

132-6

132-22

133-29

134-1

134-2

134-3

134-4

134-5

134-6

134-8

135-4

135-3

135-12

135-5

135-1

【SI-を省略】

135-6

135-7

136-2

136-3

136-4

136-5

136-6

136-7

137-1

137-2

137-4

137-5

138-1

142-1

143-15

143-1

143-6

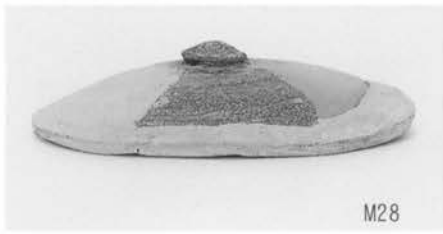
【SI-を省略】

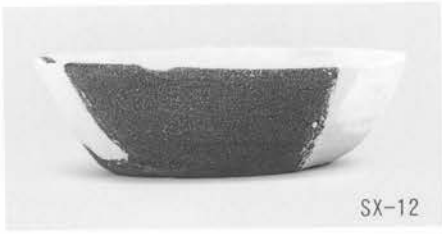
SI-143-7

SK-18

SK-56

L27


M28


SX-12

SK-13

SK-20

SK-56

N28

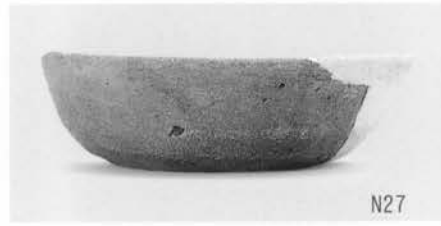
表採

SK-13

SK-14

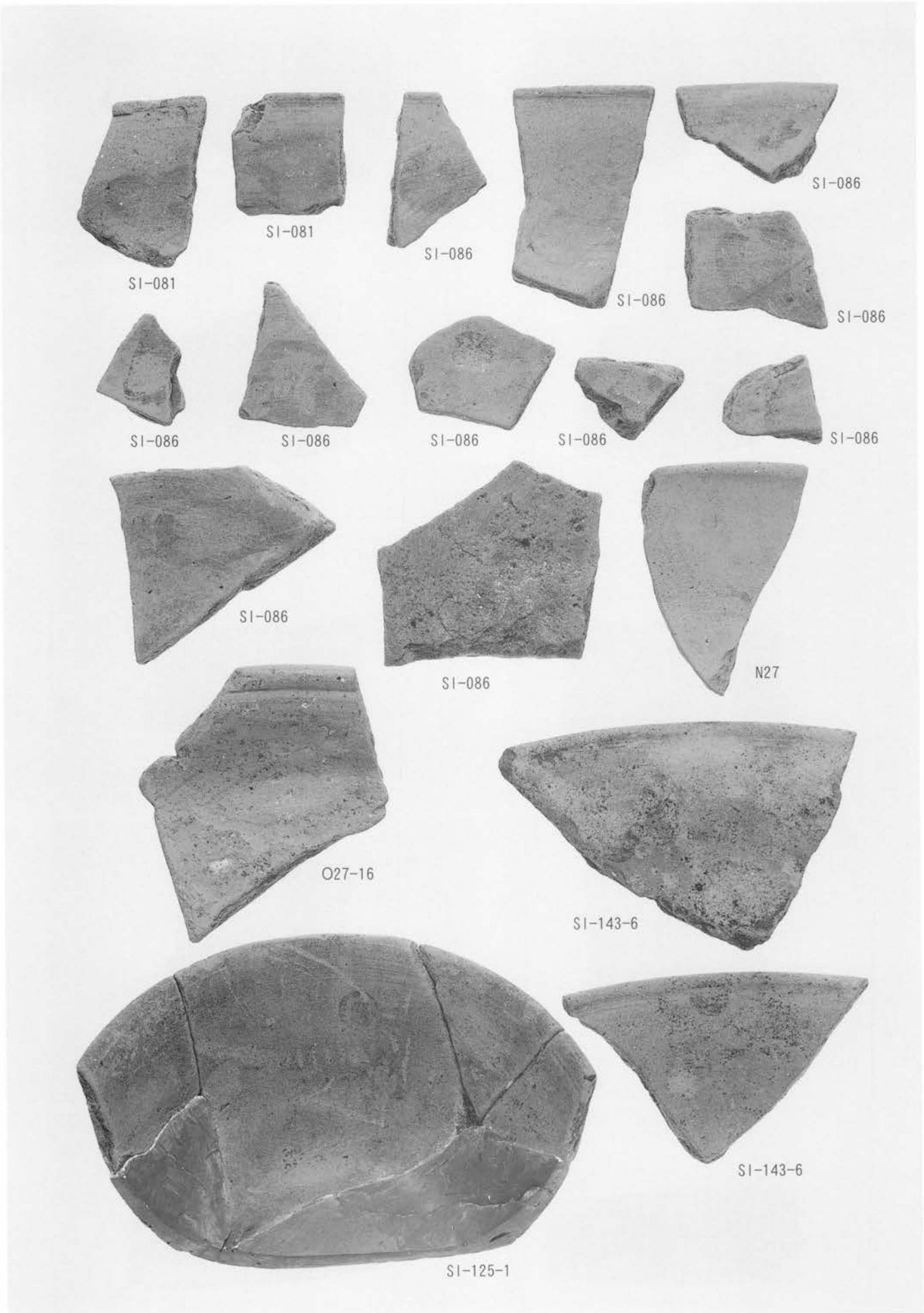
SK-28

SK-50

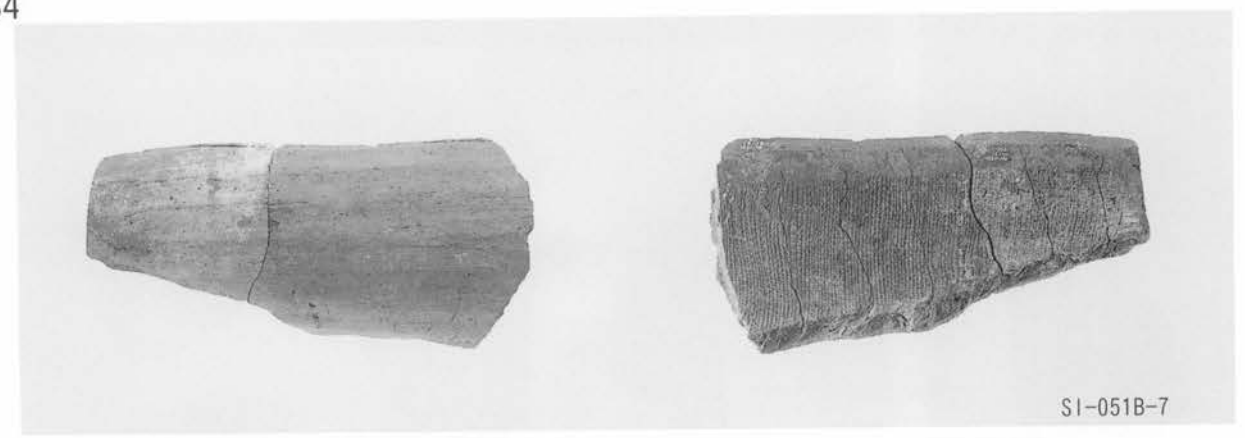

N27

N28

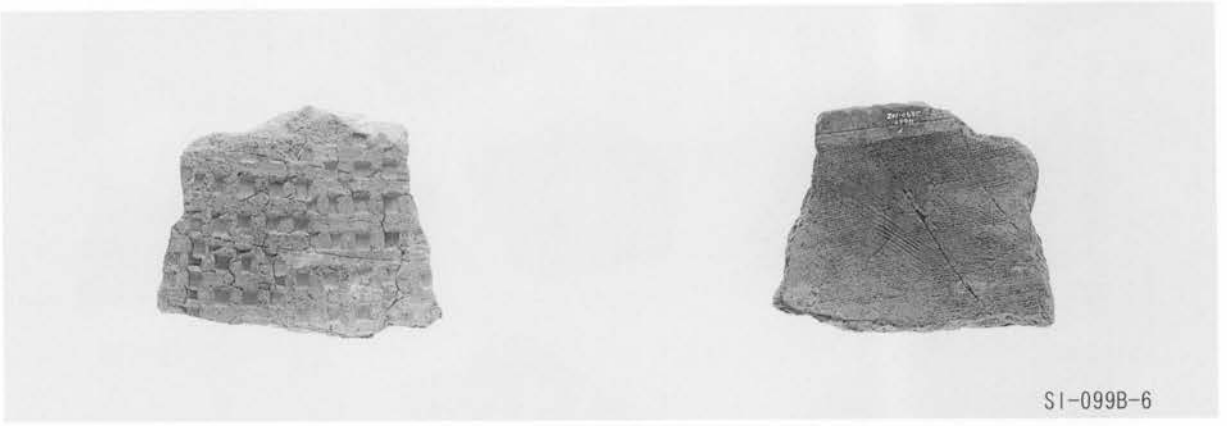
O28


SI-081
SI-081
SI-086
SI-086
SI-086
SI-086
SI-086
SI-086
SI-086
SI-086
SI-086
SI-086
SI-086
N27
O27-16
SI-143-6
SI-143-6
SI-125-1

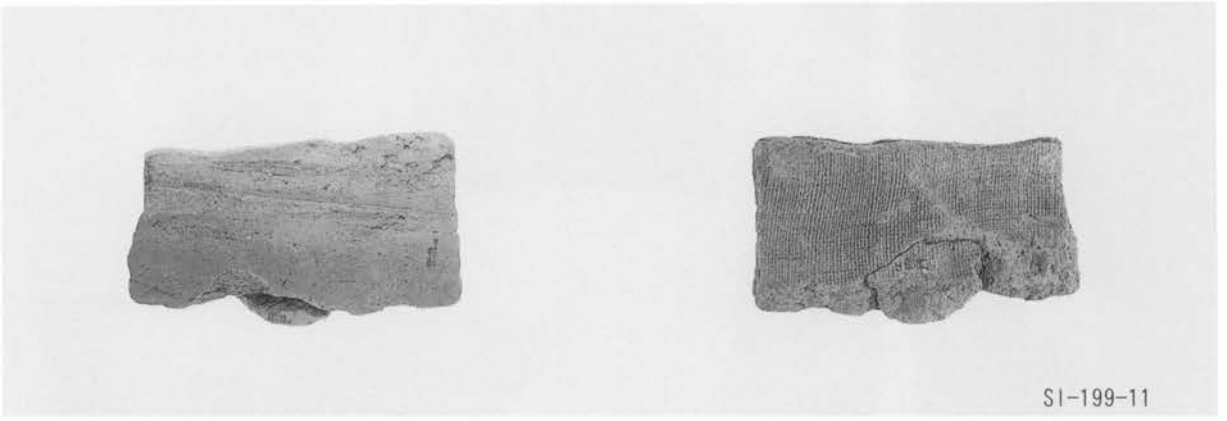
暗文土器



SI-051B-7



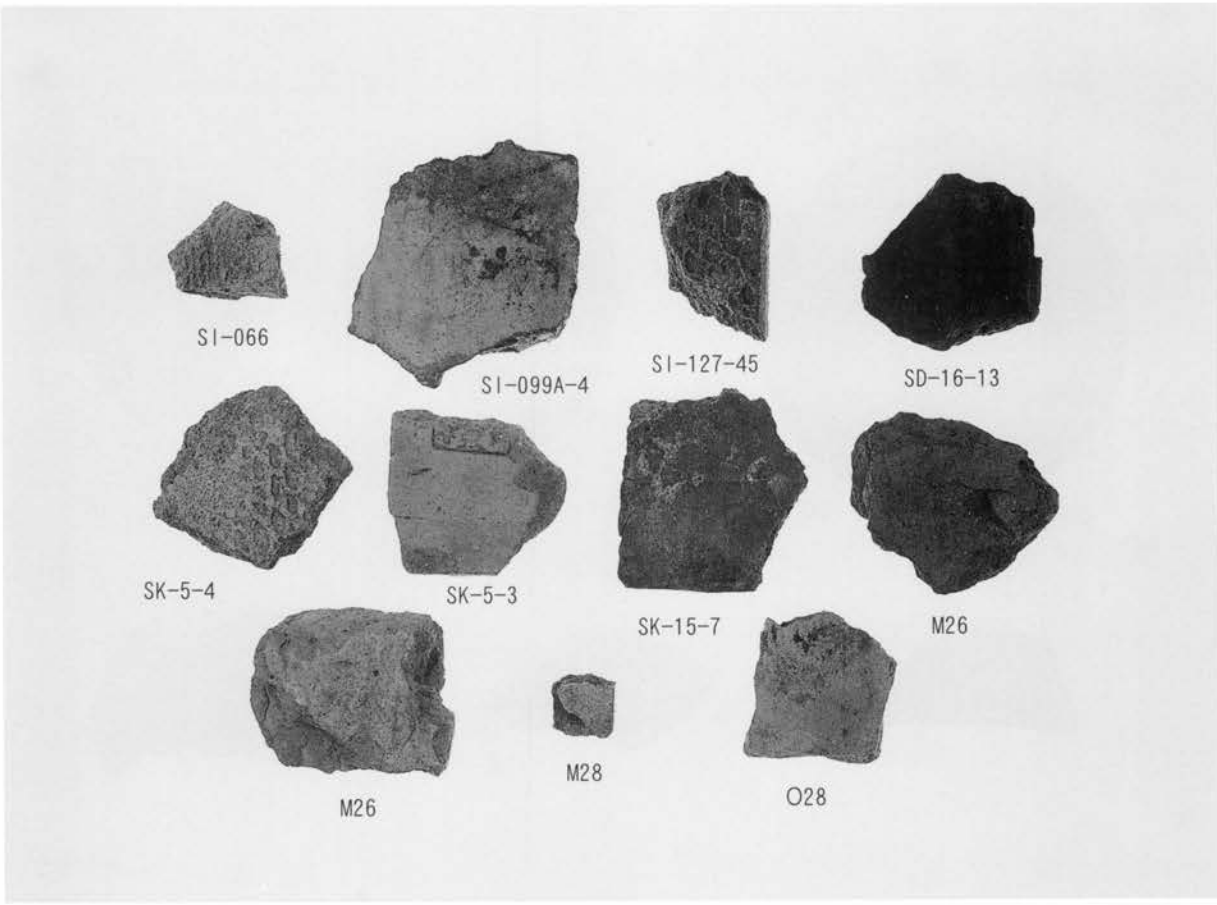
SI-099B-6

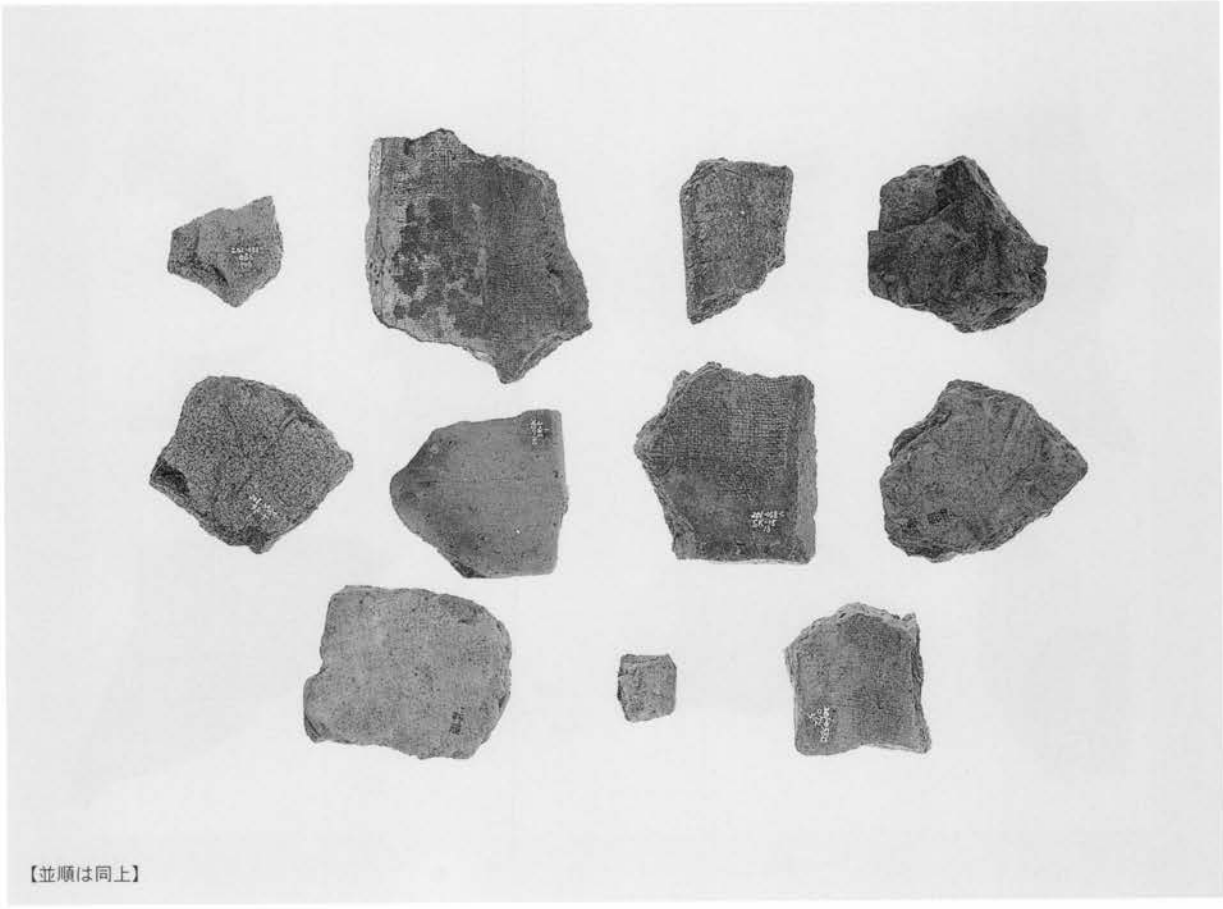


SI-199-11

SI-128-2

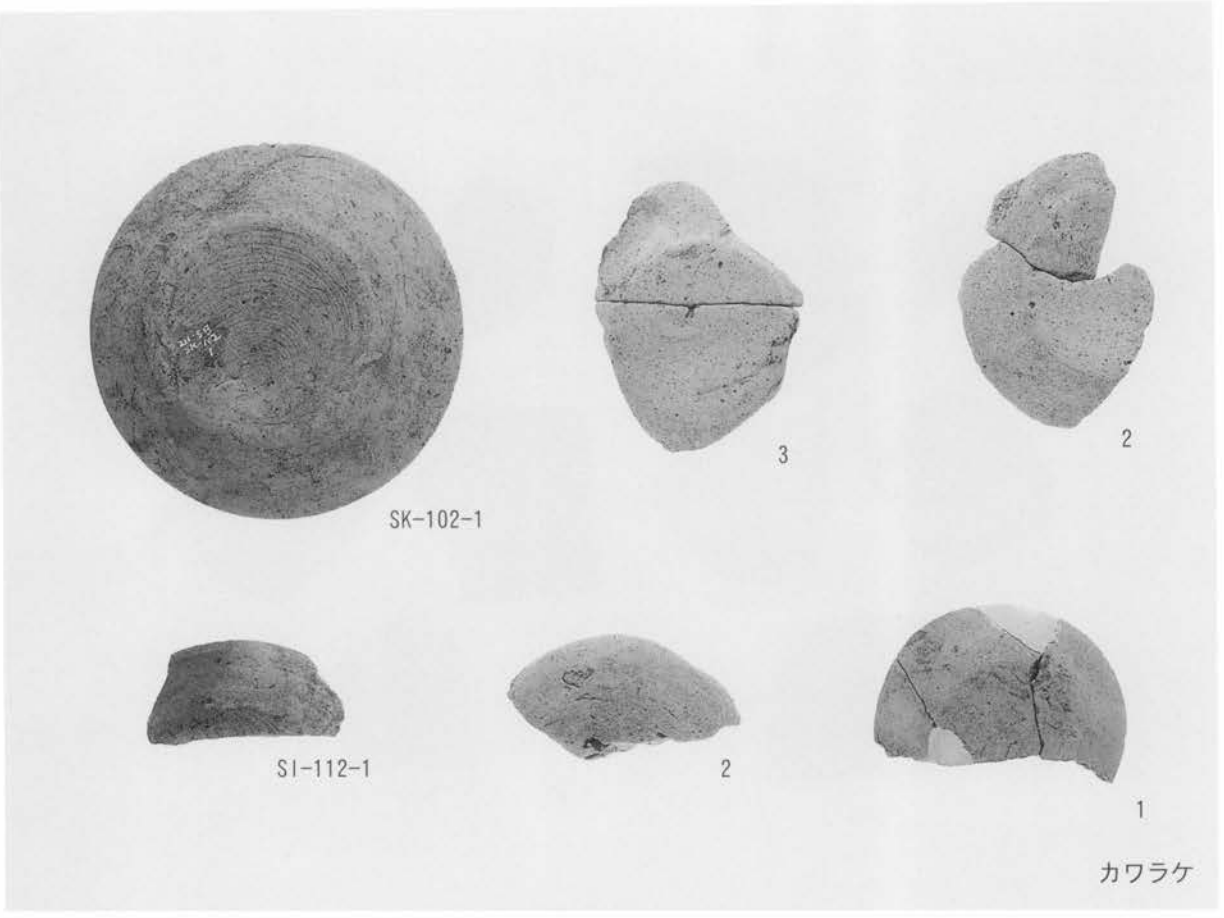
SI-134-9

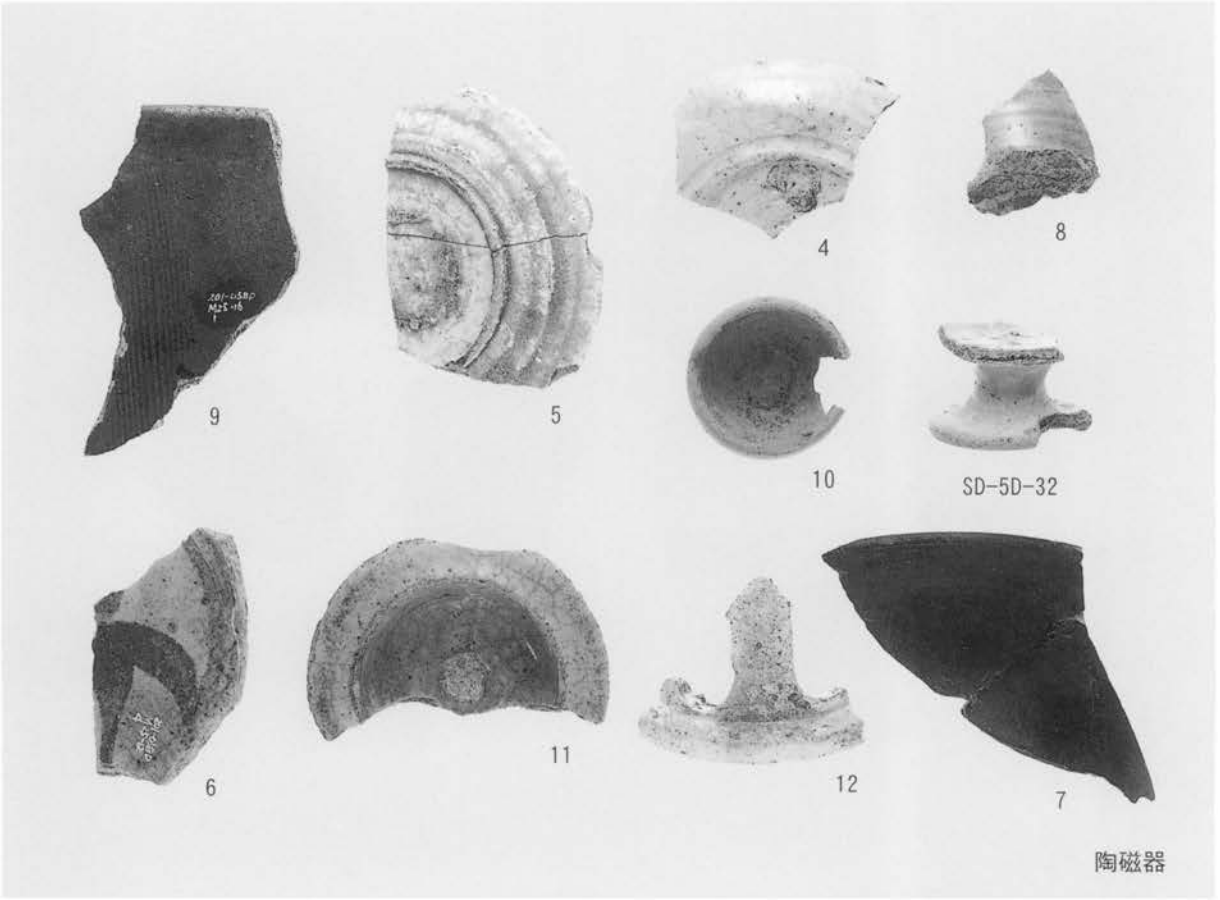

SI-066
SI-099A-4
SI-127-45
SD-16-13
SK-5-4
SK-5-3
SK-15-7
M26
M26
M28
O28



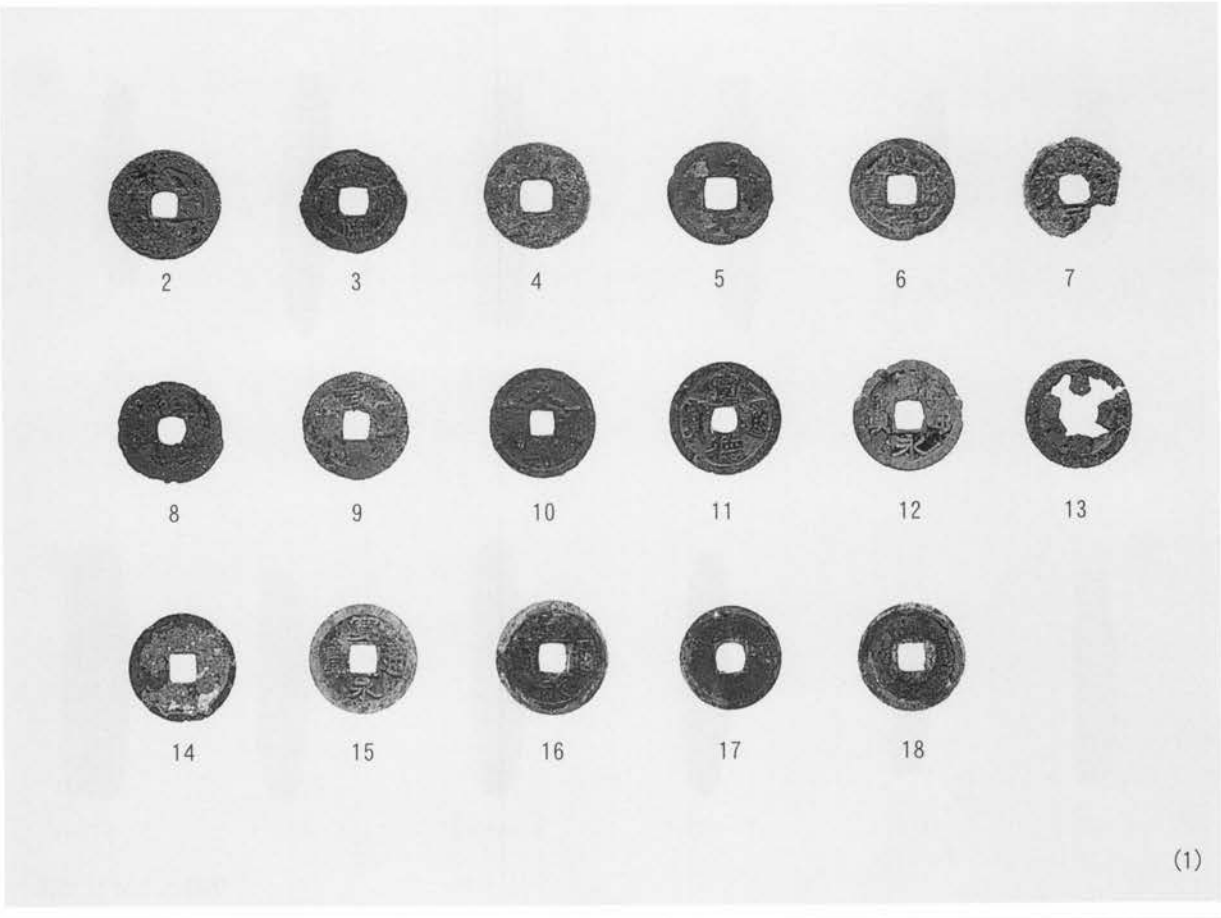
【並順は同上】

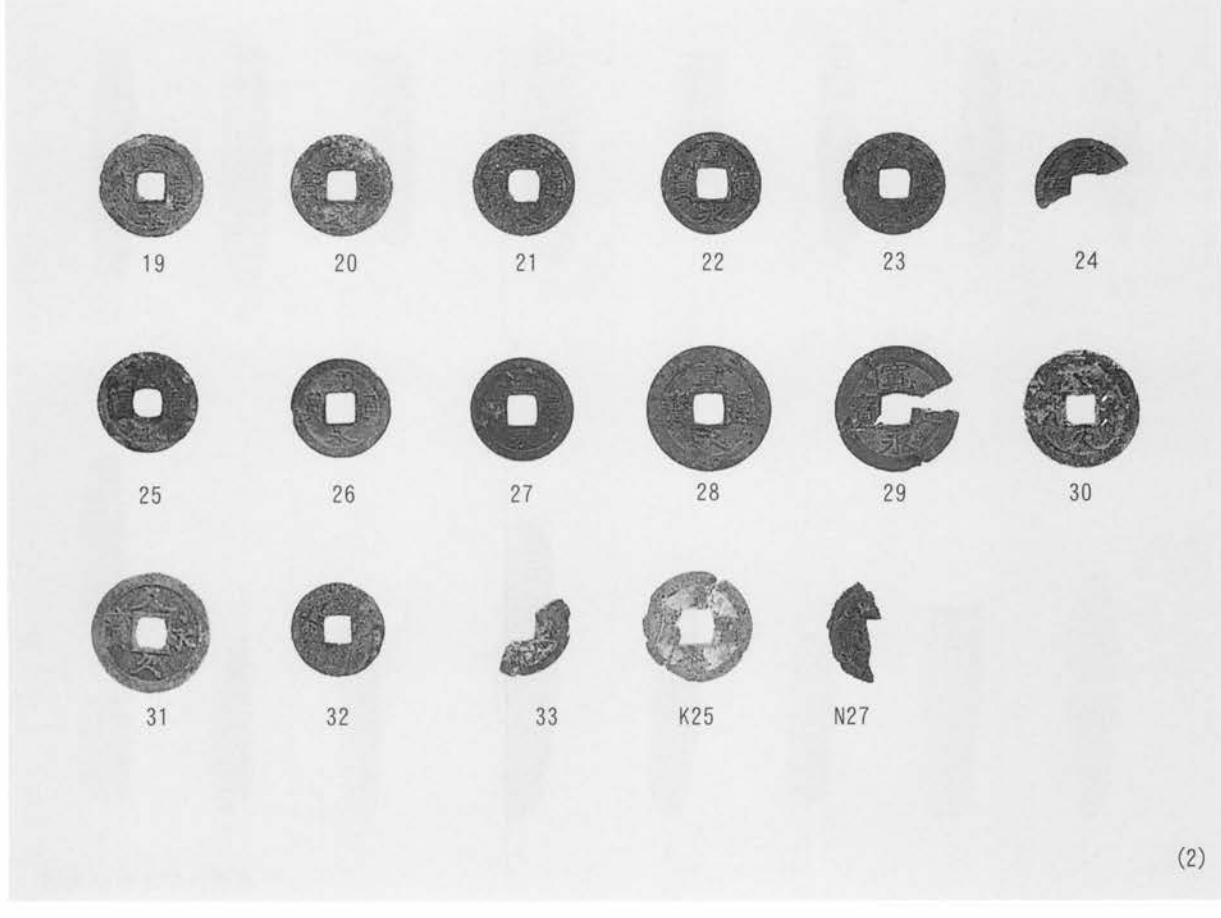
瓦（2）



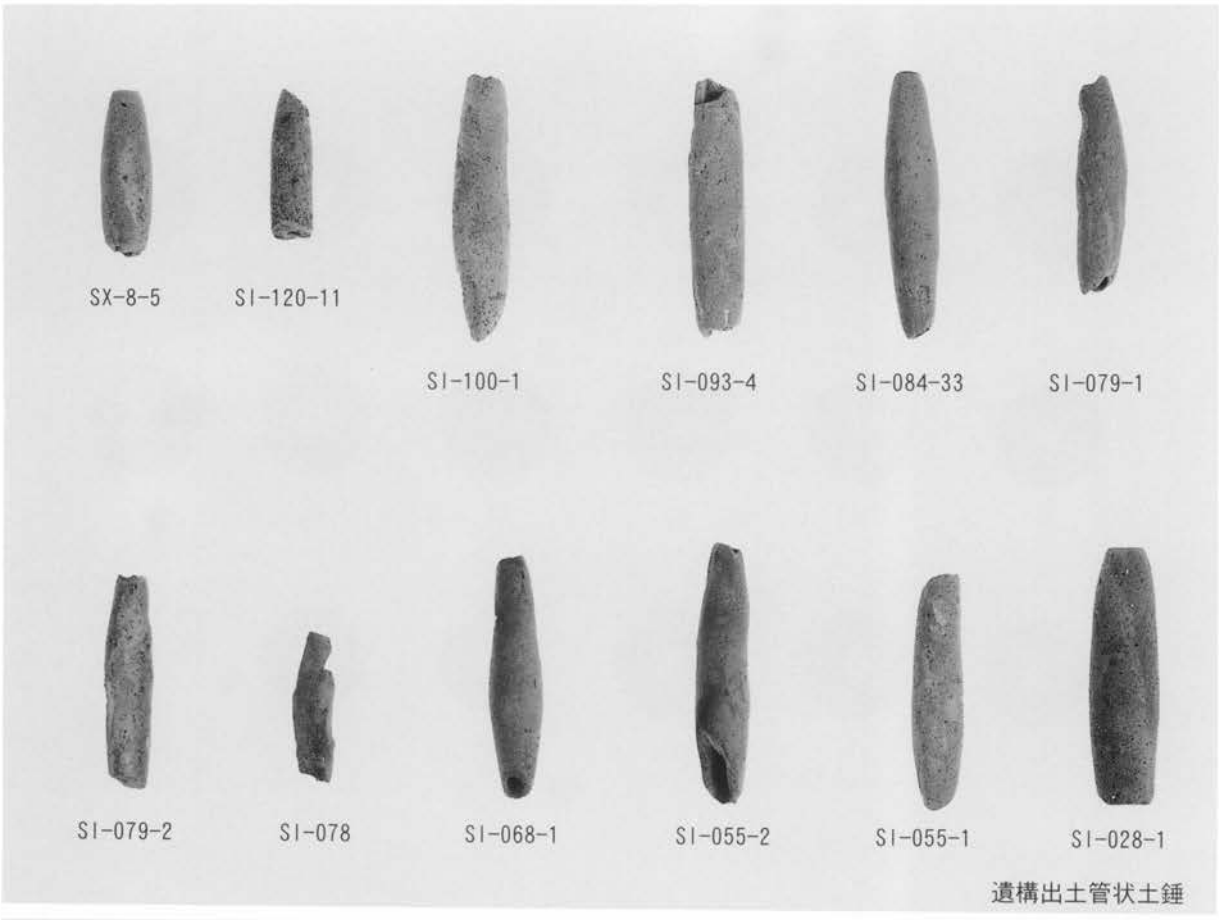


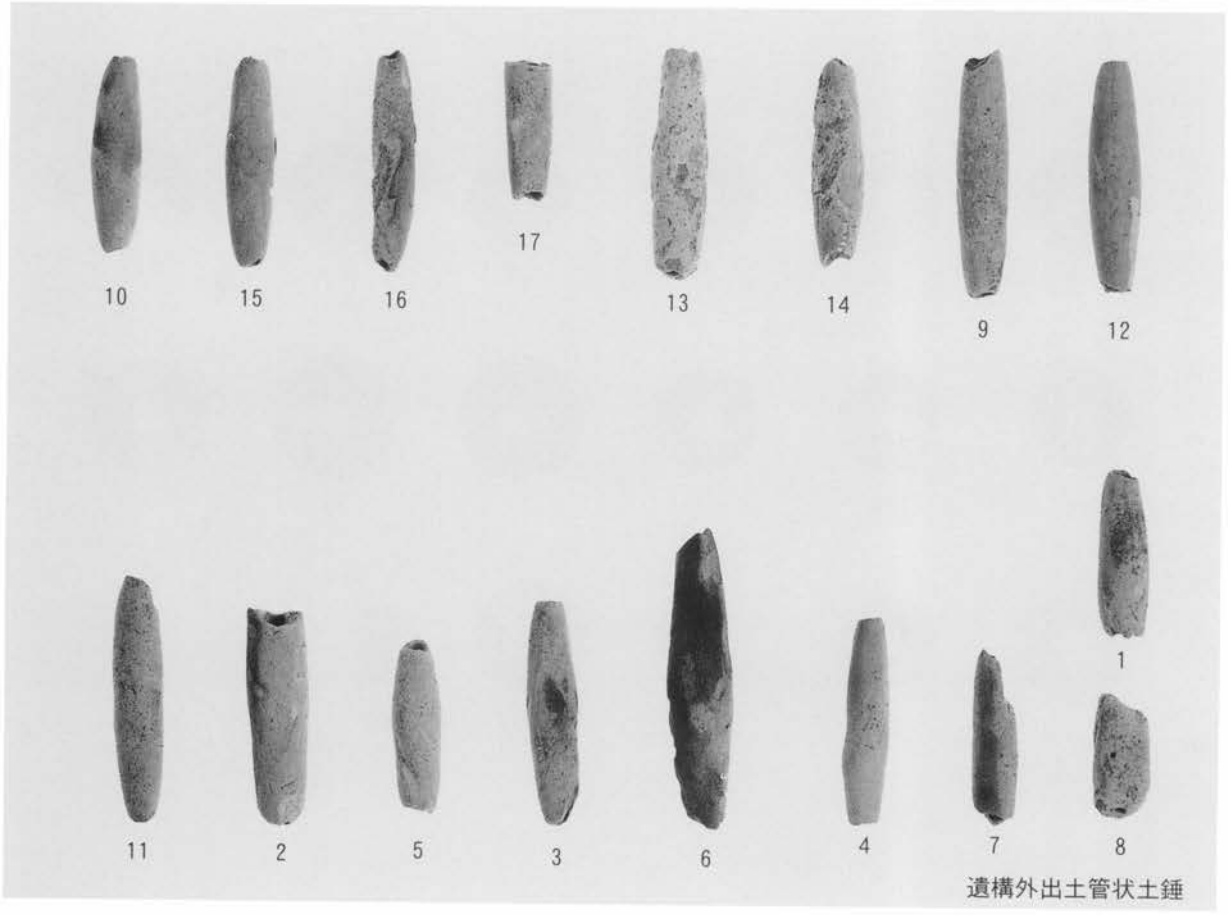
中近世遺構外等出土遺物（1）


2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
(1)

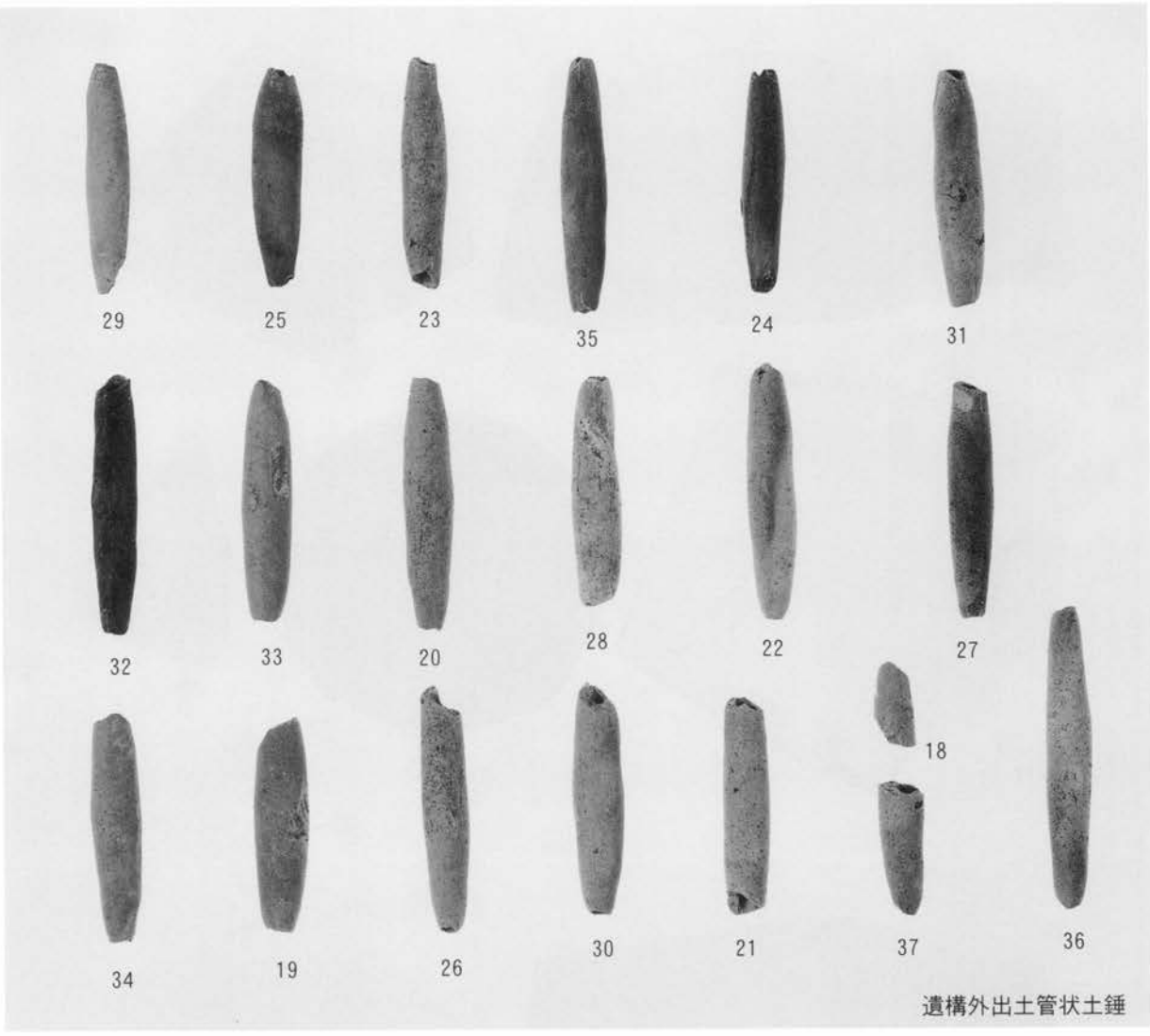

19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
K25
N27
(2)

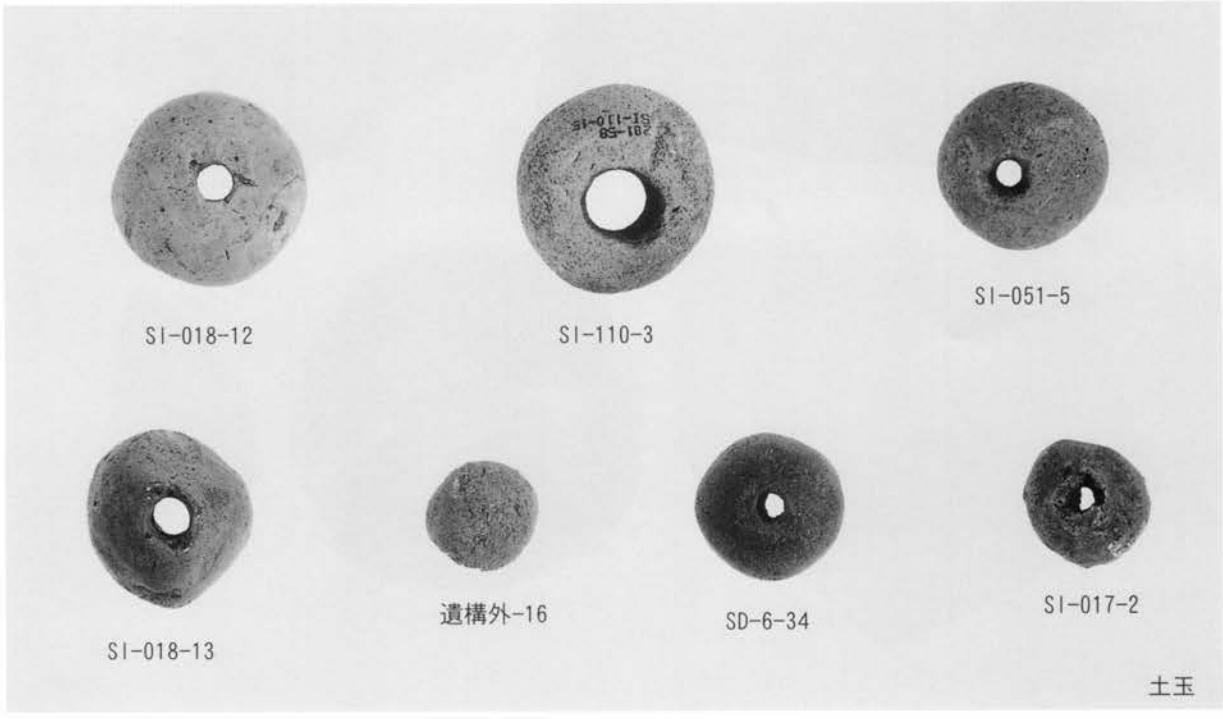
出土古銭


SX-8-5
SI-120-11
SI-100-1
SI-093-4
SI-084-33
SI-079-1
SI-079-2
SI-078
SI-068-1
SI-055-2
SI-055-1
SI-028-1
遺構出土管状土錘


10
15
16
17
13
14
9
12
11
2
5
3
6
4
7
1
8
遺構外出土管状土錘

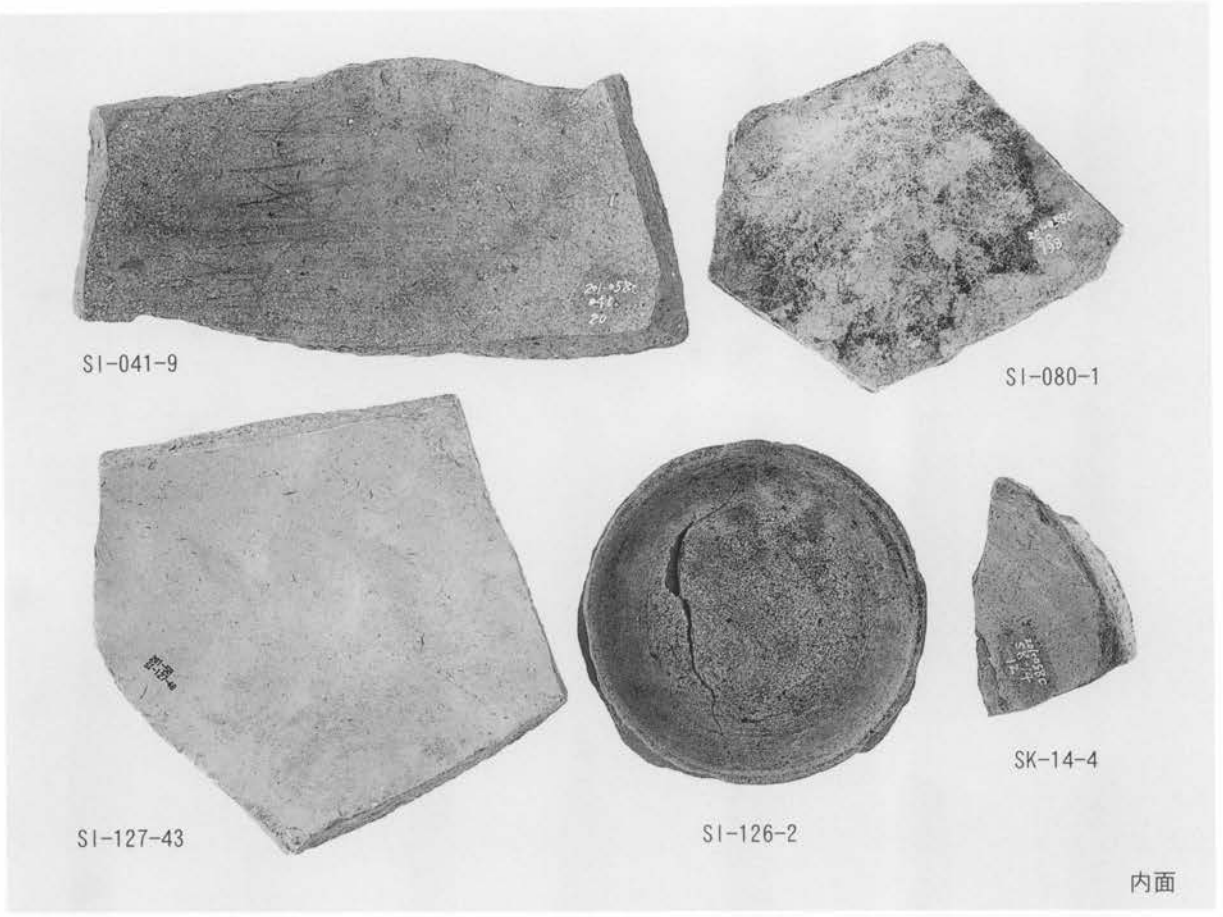
土錘（1）


29
25
23
35
24
31
32
33
20
28
22
27
34
19
26
30
21
18
37
36
遺構外出土管状土錘


SI-018-12
SI-110-3
SI-051-5
SI-018-13
遺構外-16
SD-6-34
SI-017-2
土玉

土錘（2）

図版140



転用硯

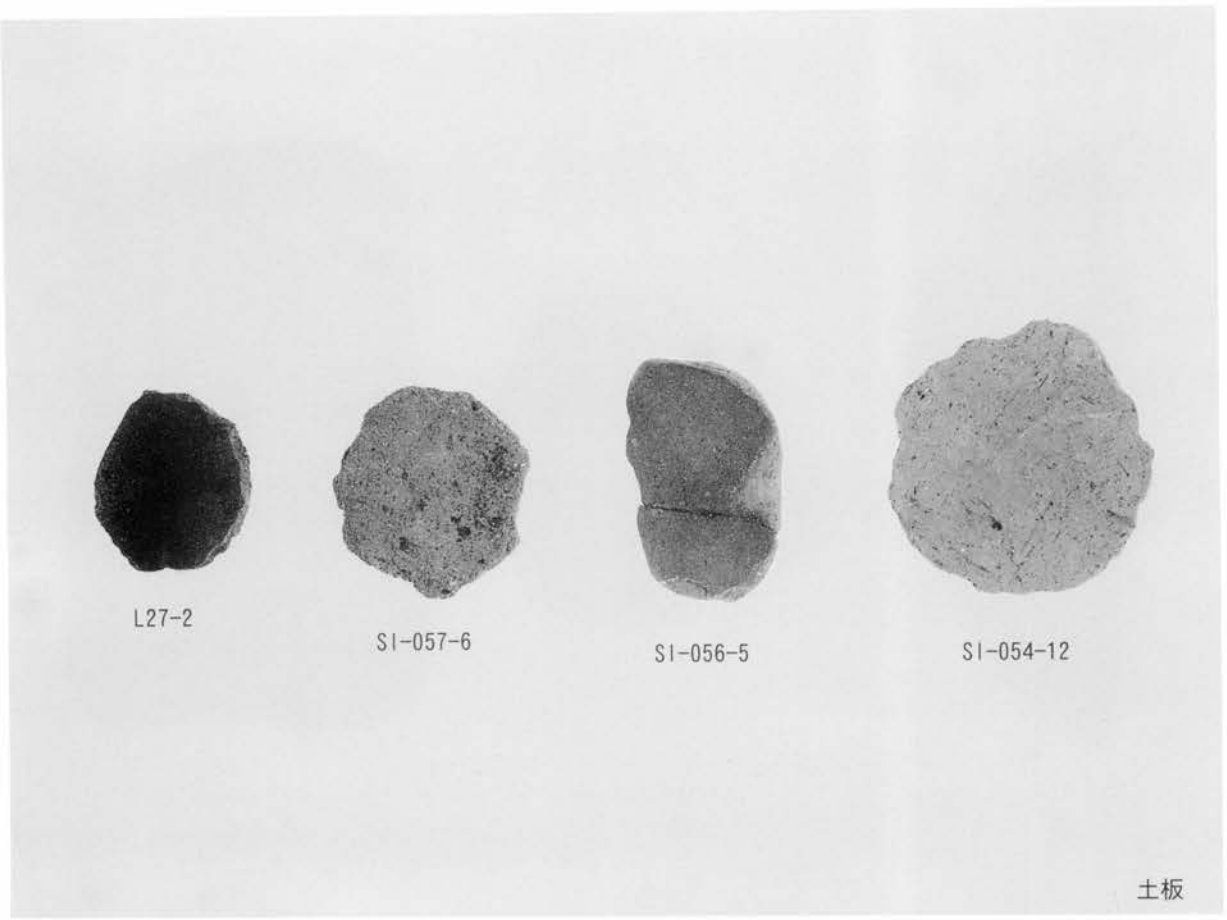
SI-101-4
石皿

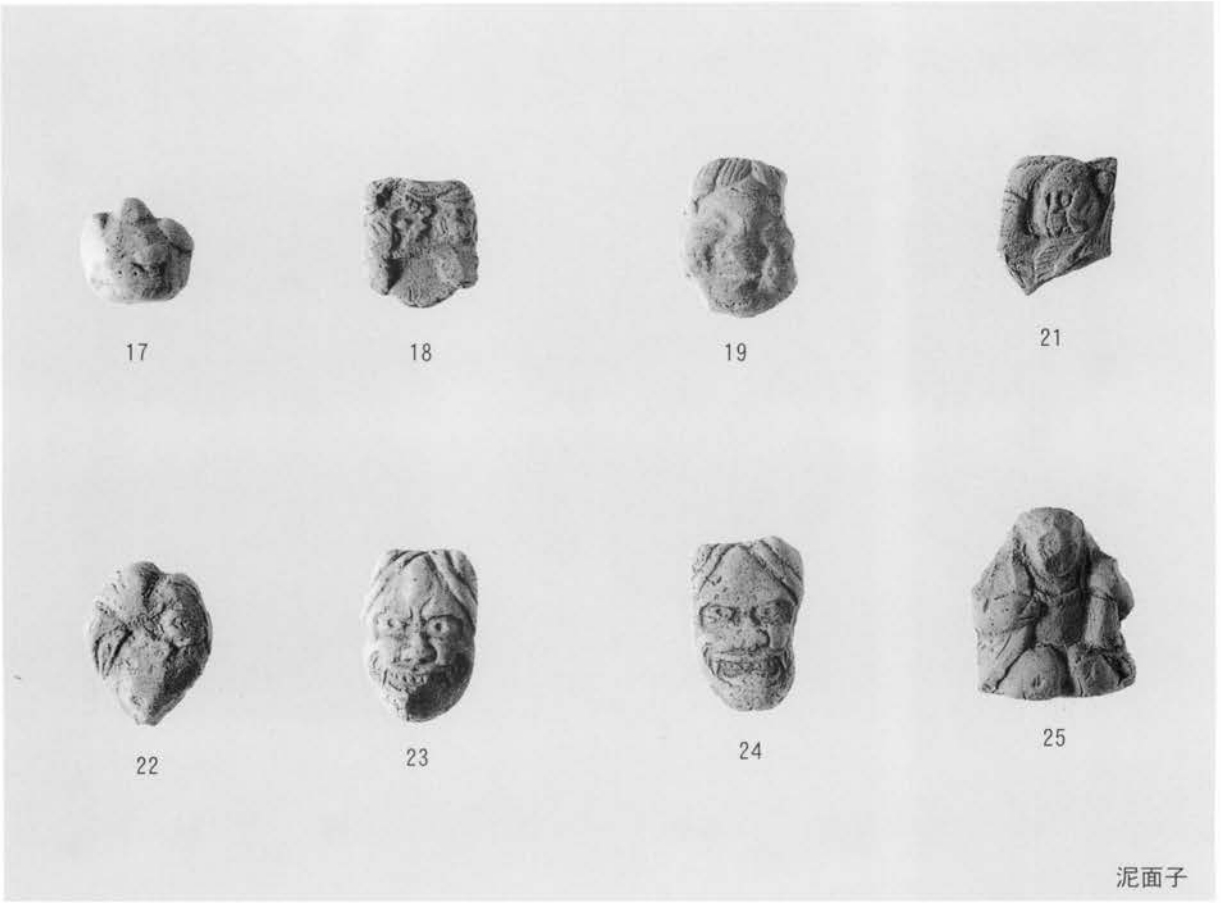
SI-101-3
鋳型

SI-101-5
羽口

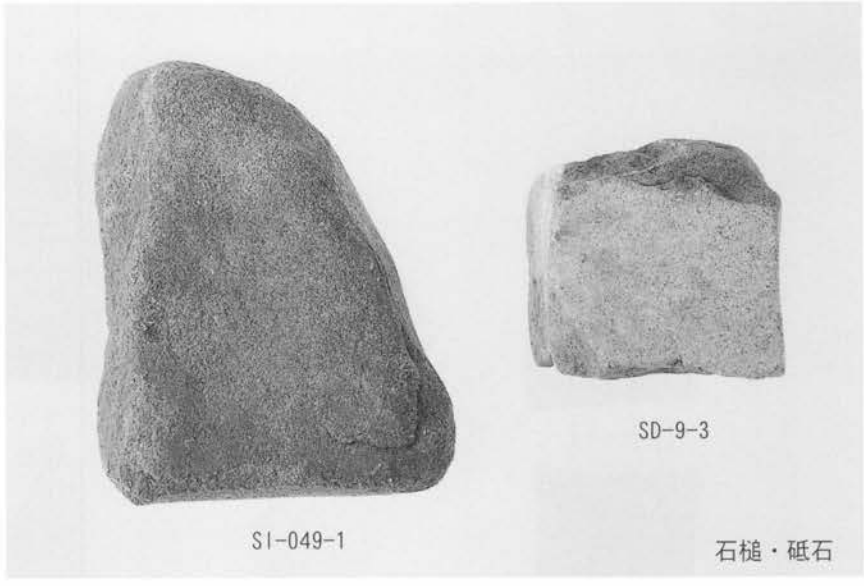
【並順は同上】

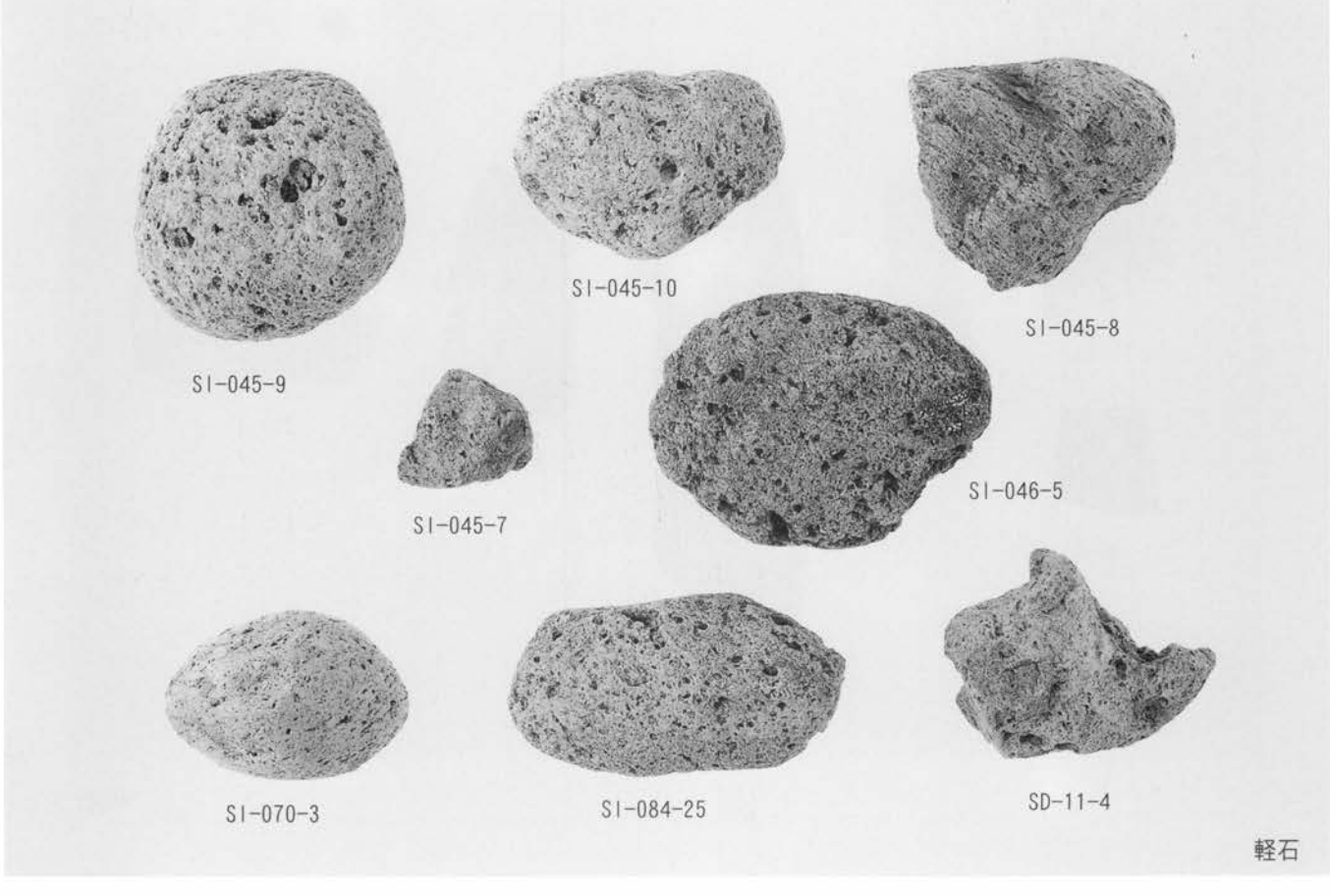
石皿・鋳型・羽口





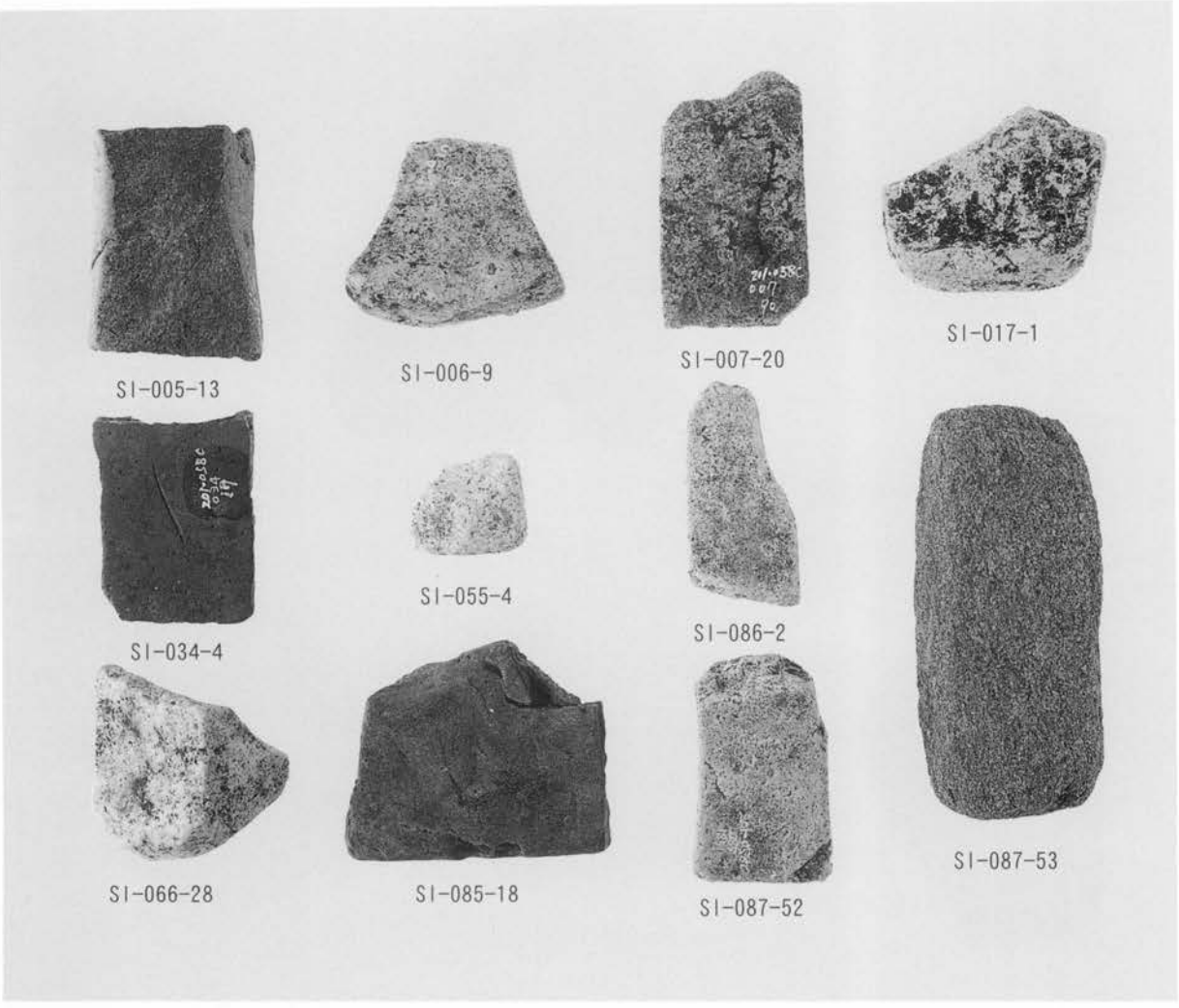
土板・中近世遺構外等出土遺物（2）

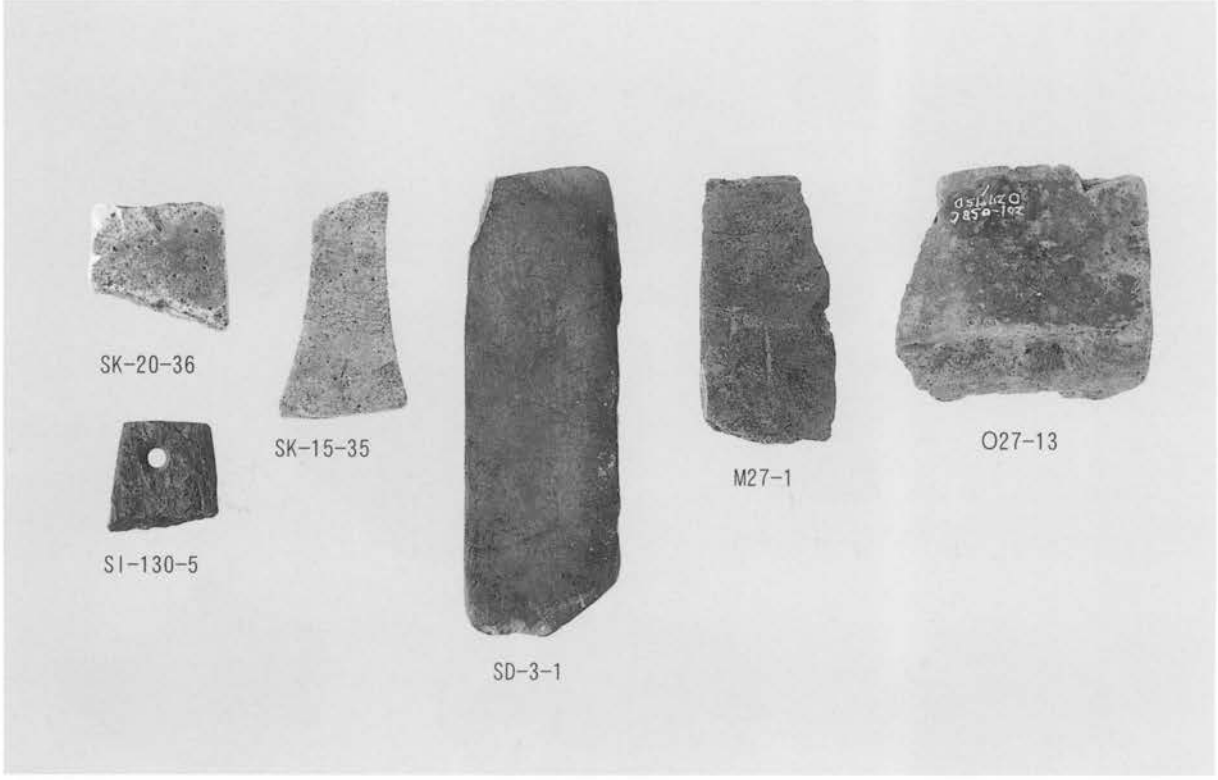




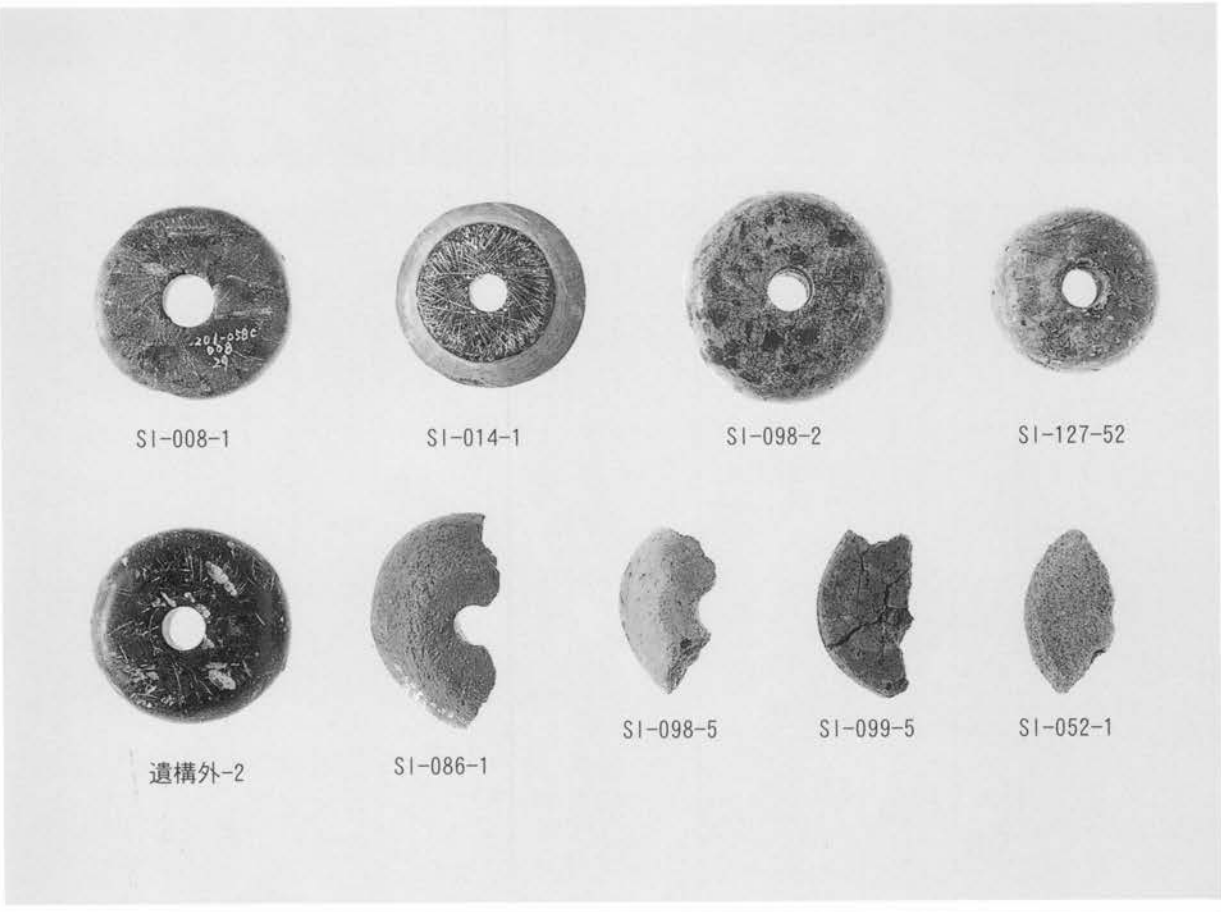
ガラス製品・石槌・砥石・軽石

図版144


SI-005-13
SI-006-9
SI-007-20
SI-017-1
SI-034-4
SI-055-4
SI-086-2
SI-087-53
SI-066-28
SI-085-18
SI-087-52


SK-20-36
SK-15-35
SD-3-1
M27-1
O27-13
SI-130-5

砥石

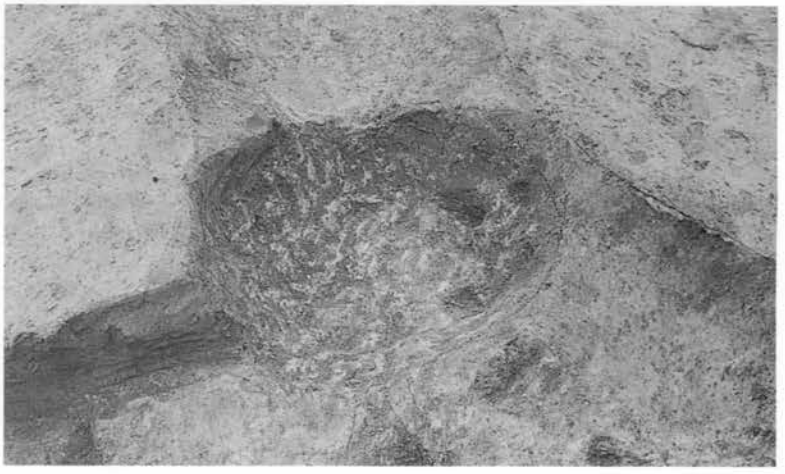

SI-008-1
SI-014-1
SI-098-2
SI-127-52
遺構外-2
SI-086-1
SI-098-5
SI-099-5
SI-052-1

【並順は同上】

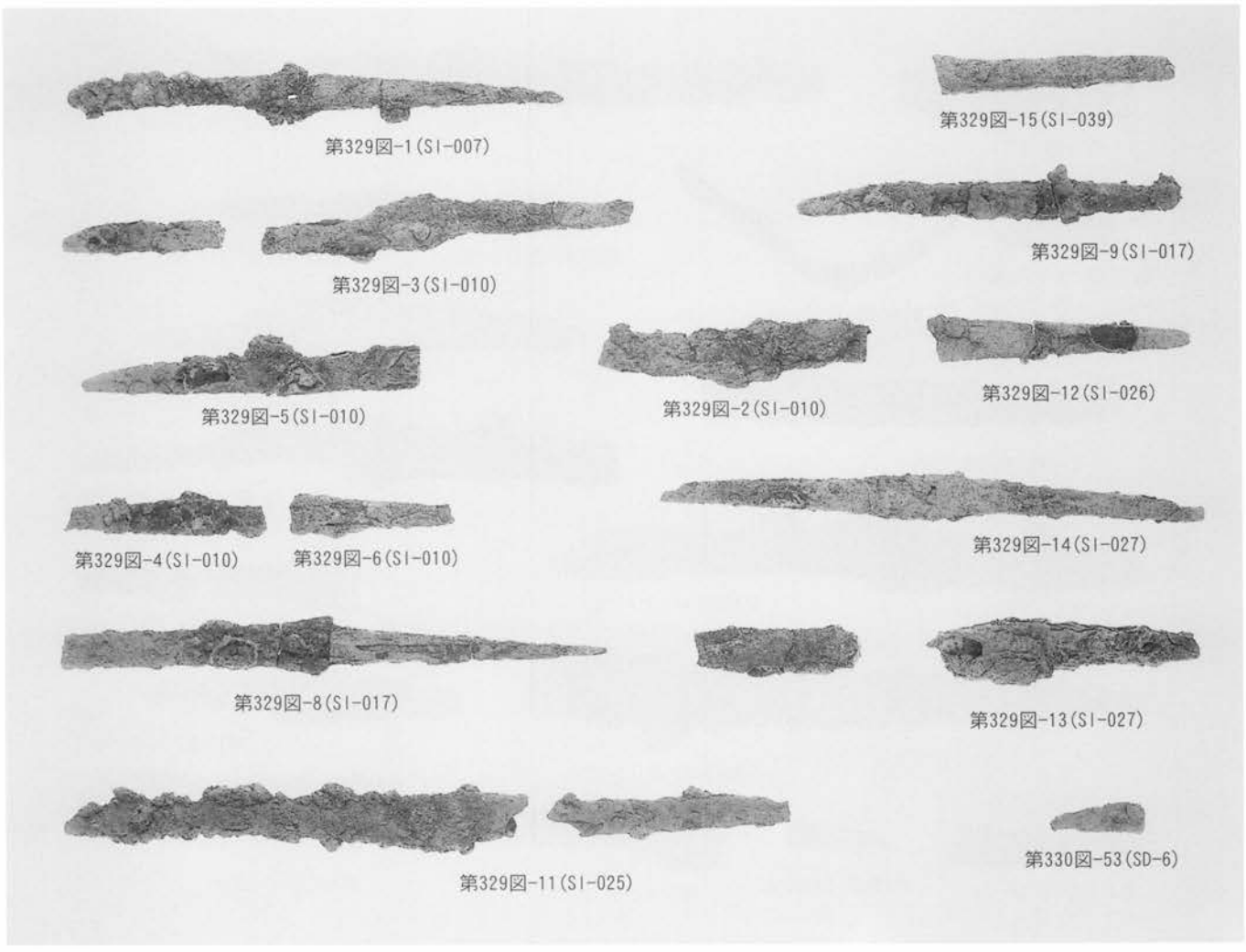
紡錘車

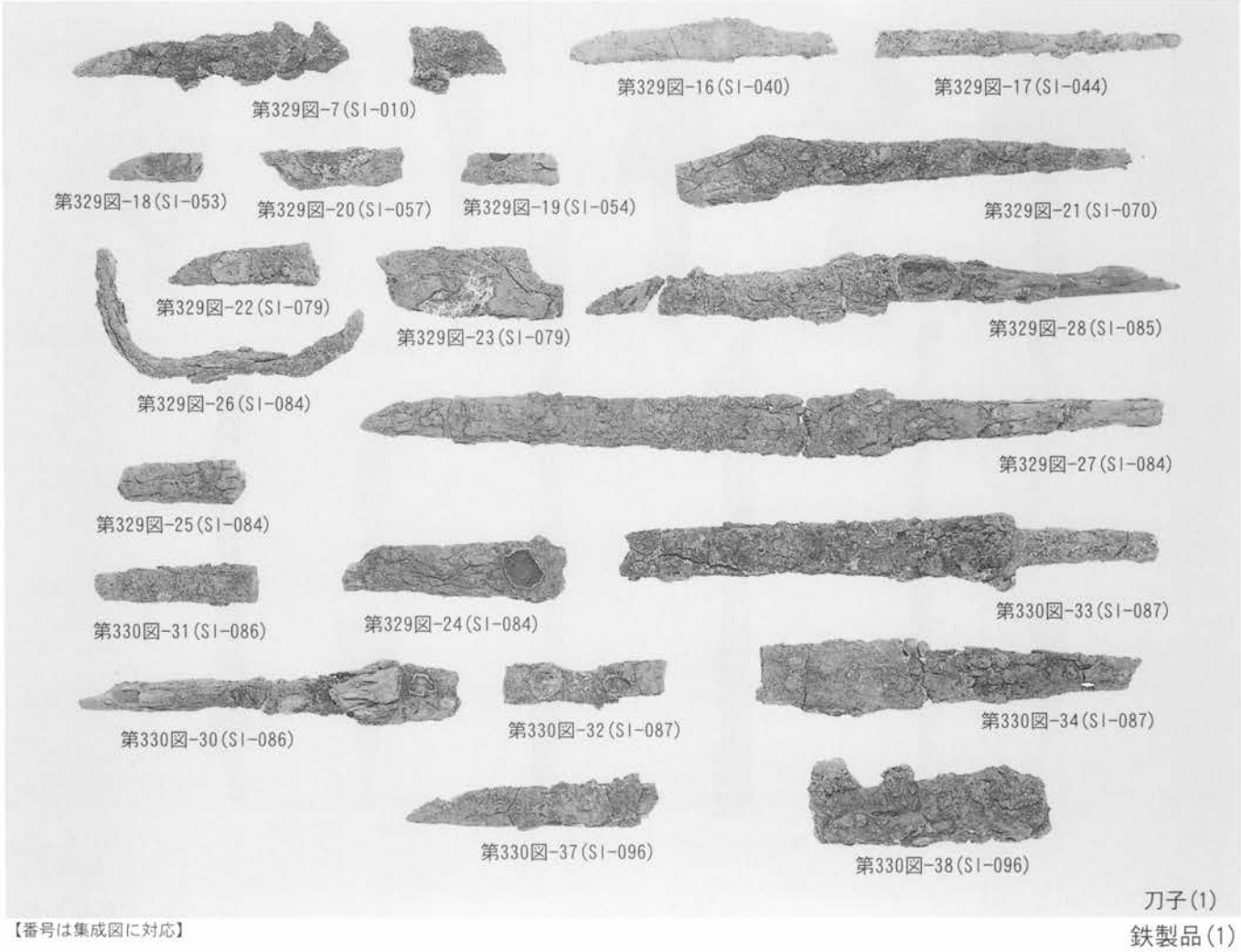
SK-102埋葬遺体

遺物出土状況



掘りかた



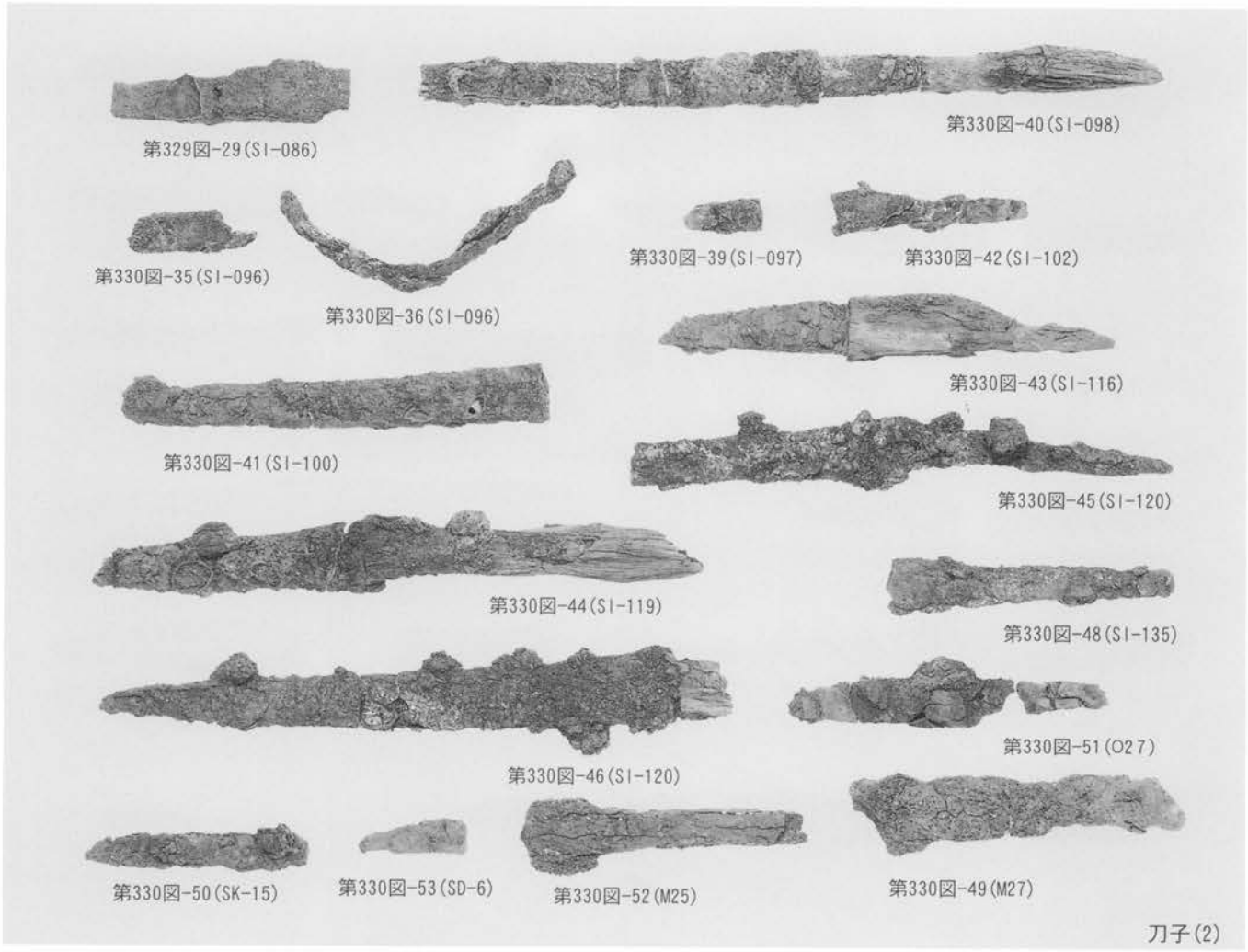


刀子(1)

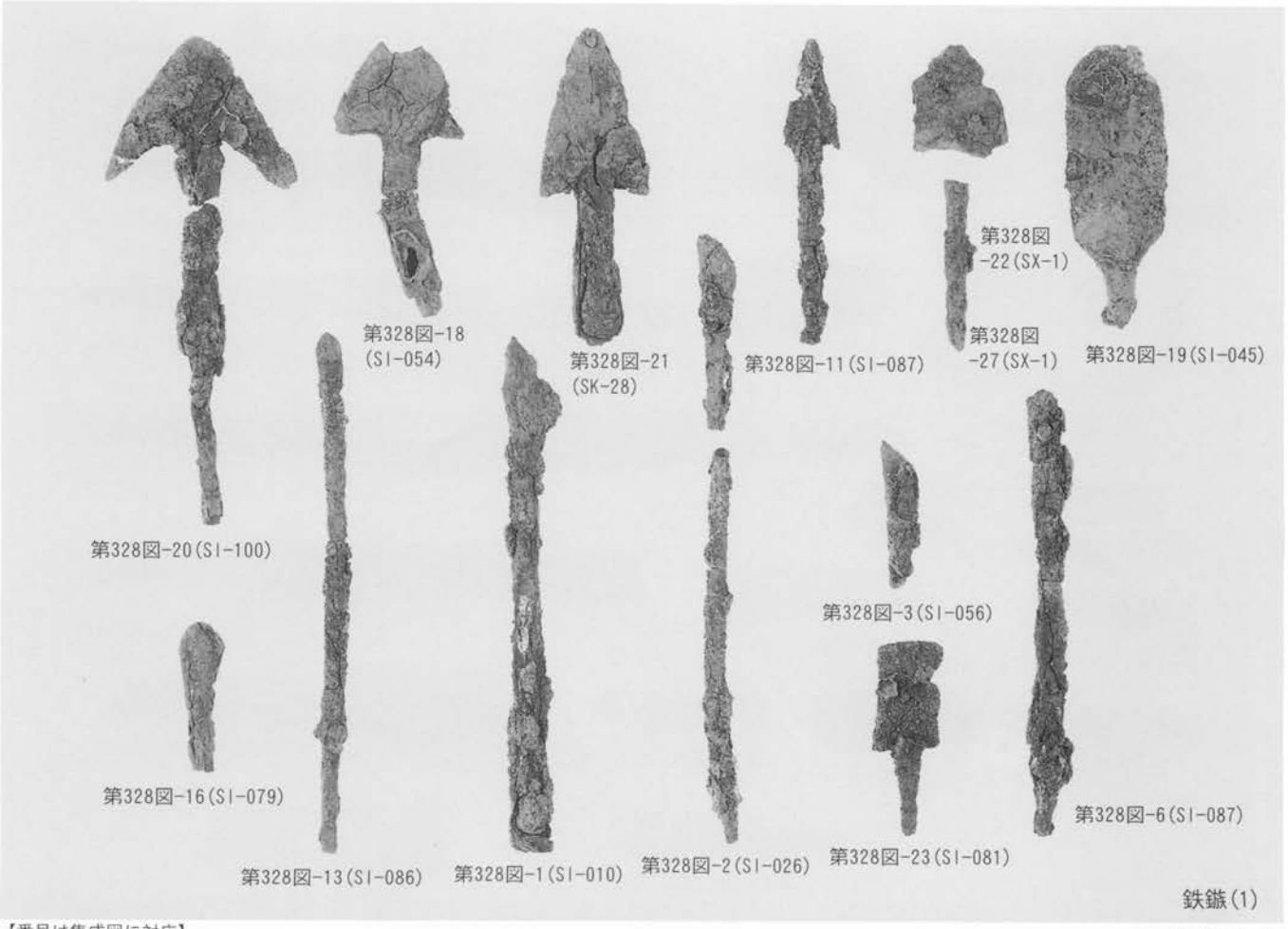
【番号は集成図に対応】

鉄製品(1)

図版148



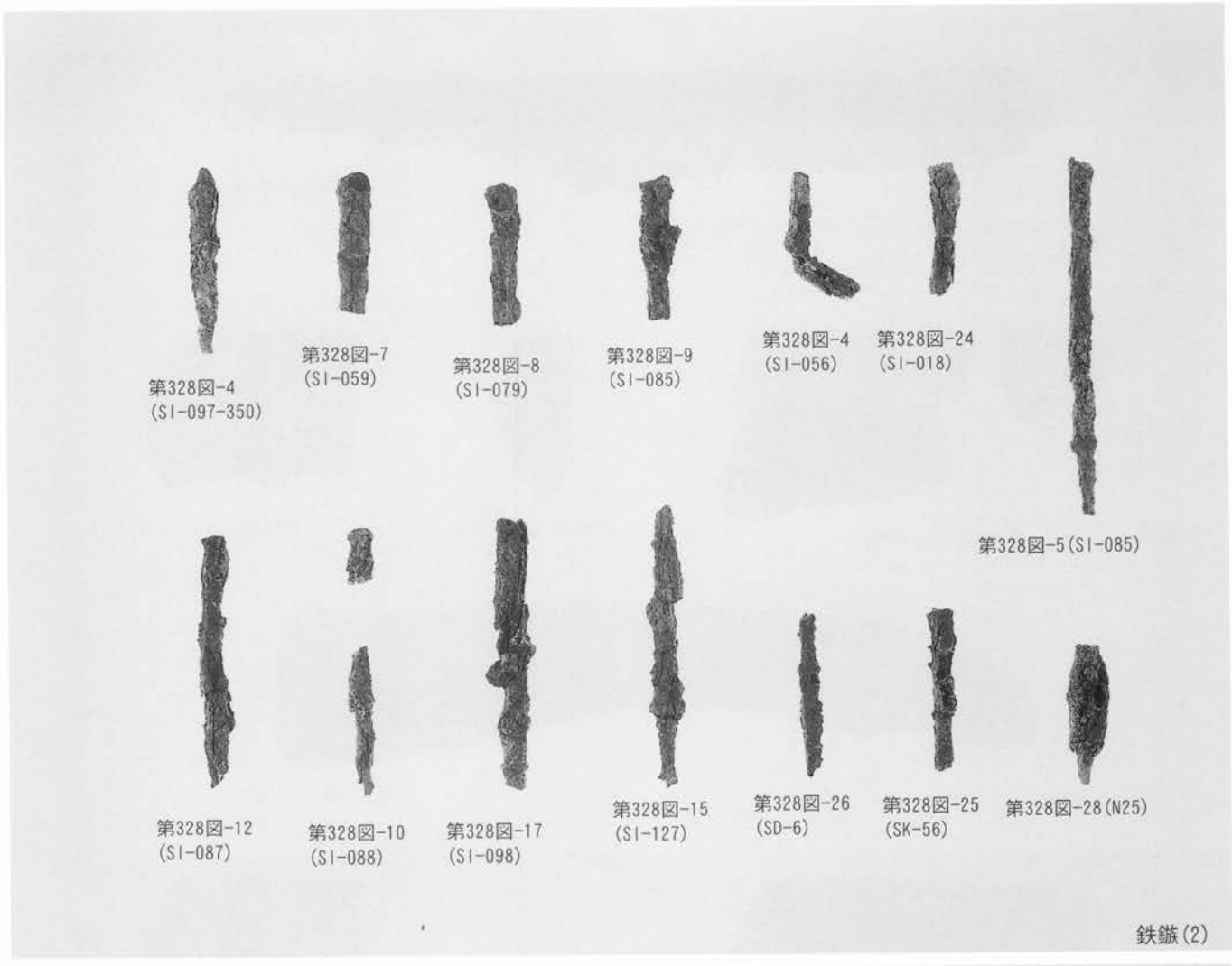
刀子(2)



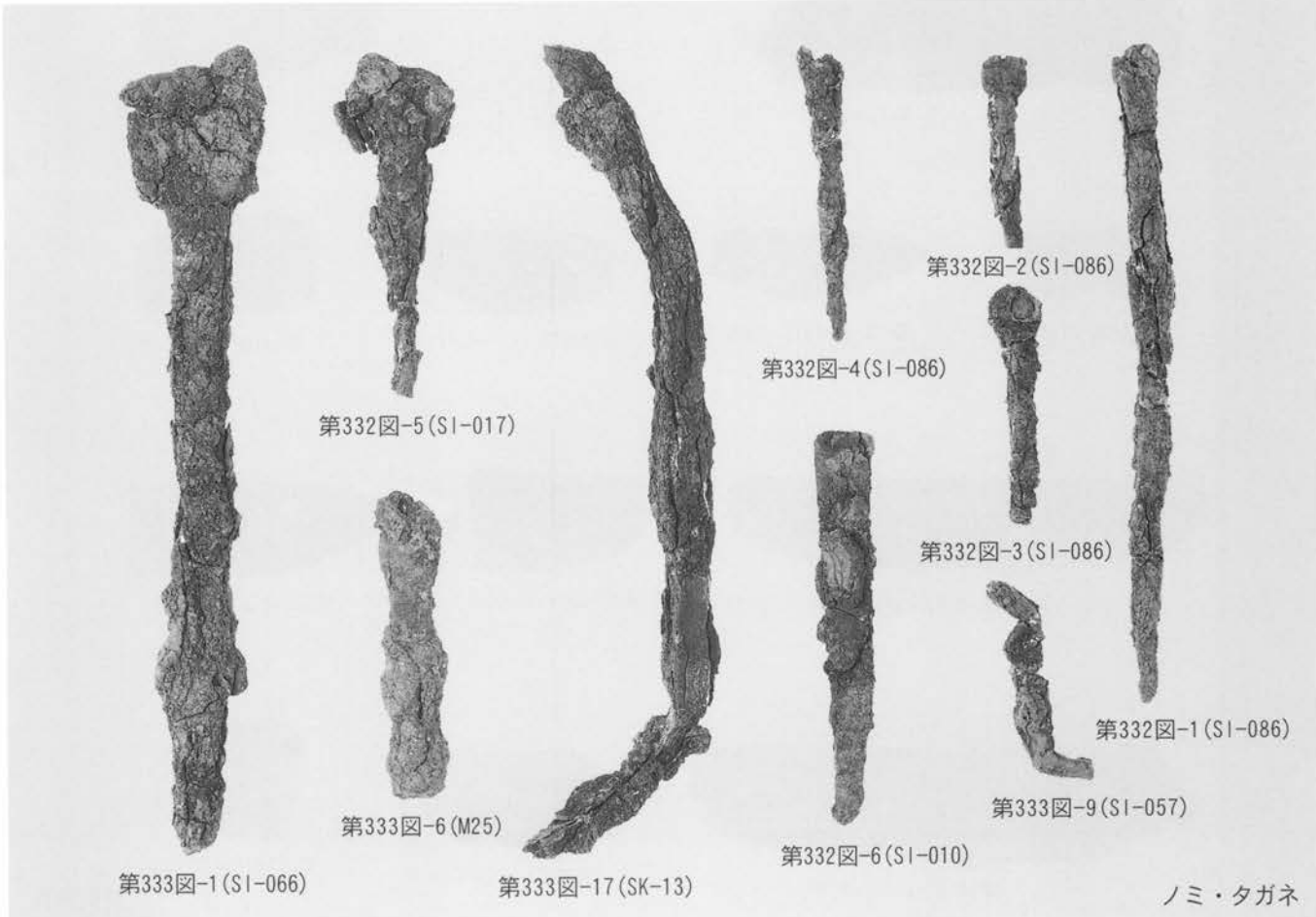
鉄鏃(1)

【番号は集成図に対応】

鉄製品(2)



鉄鏃(2)



ノミ・タガネ

【番号は集成図に対応】

鉄製品(3)

図版150

第330図-54(M26)

小刀

第331図-5(SI-032)

第331図-6(SI-079)

第331図-2(SI-082)

第331図-1(SI-070)

第331図-3(SI-120)

第331図-4(M29)

鎌

第334図-4(SI-055)

第331図-13(SI-055)

第331図-8(SI-057)

第331図-15(SI-100)

第331図-7(SI-081)

第331図-9(SI-084)

第331図-10(SI-087)

第331図-11(SI-087)

第331図-12(SI-098)

第331図-14(M25)

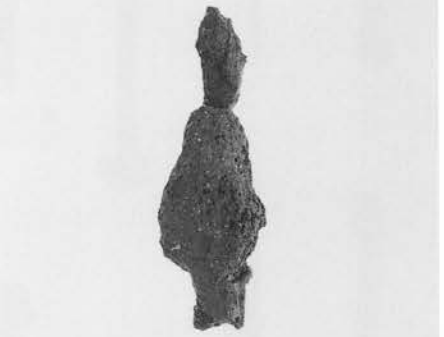
穂摘み具

【番号は集成図に対応】

鉄製品(4)

第334図-1(SI-075)

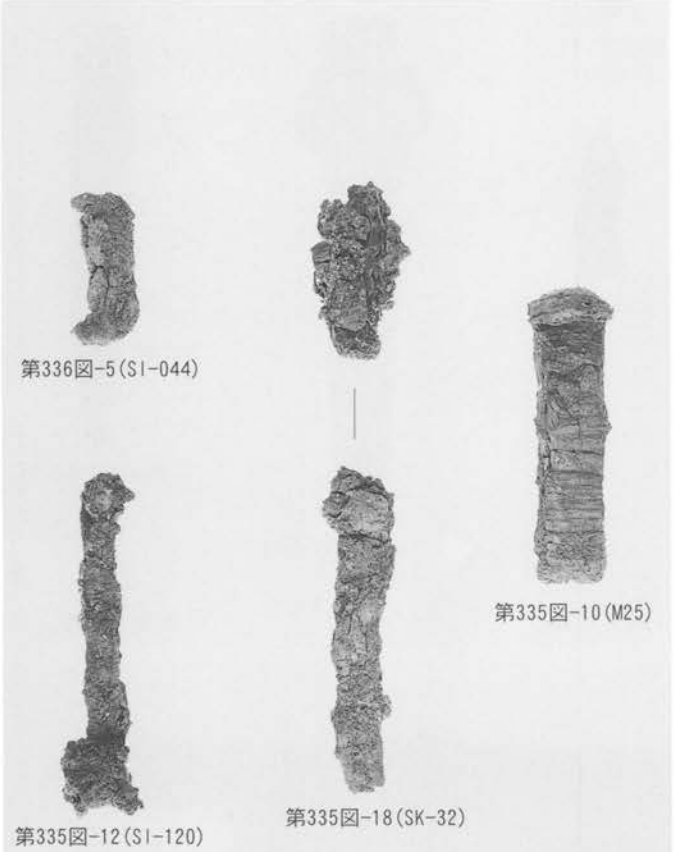
鉄斧



第337図-5(SI-127)

銅製針金付棒状鉄製品

第334図-8(SI-120A)



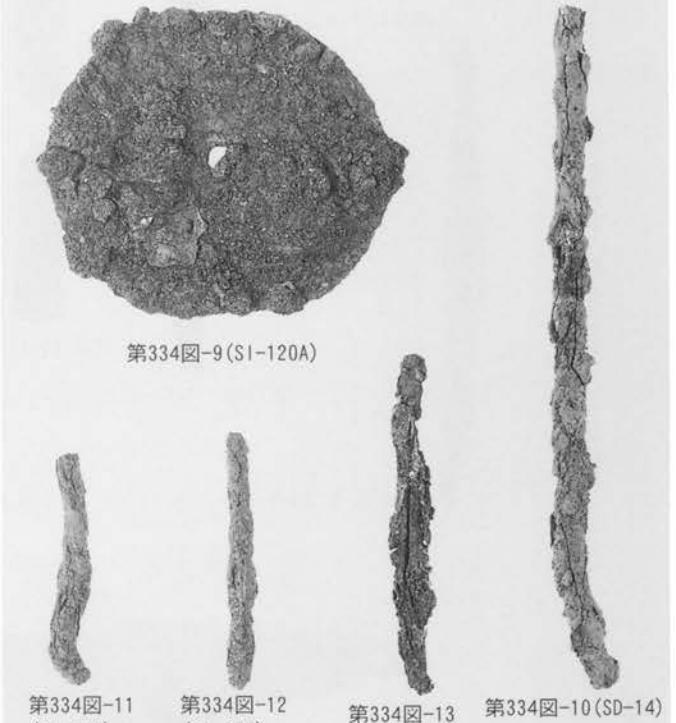
第336図-5(SI-044)

第335図-12(SI-120)

第335図-18(SK-32)

第335図-10(M25)

留金具・カスガイ



第334図-9(SI-120A)

第334図-11(SI-055)

第334図-12(SI-055)

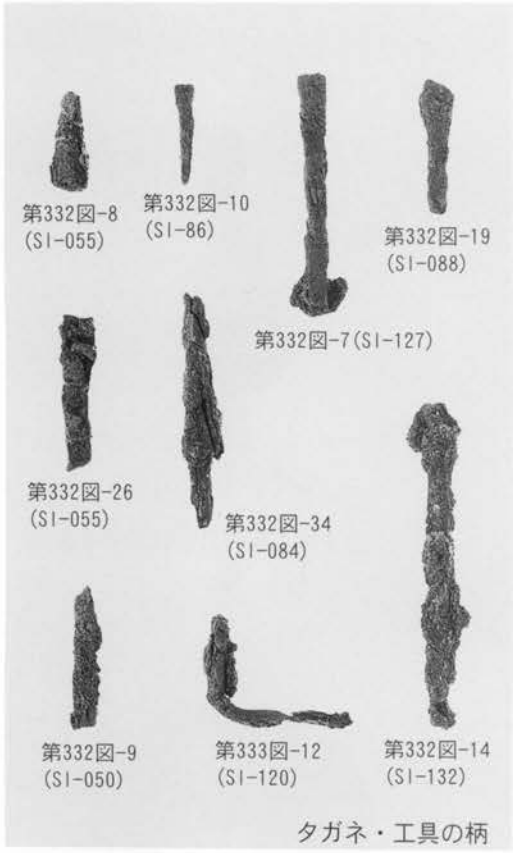
第334図-13(SI-082)

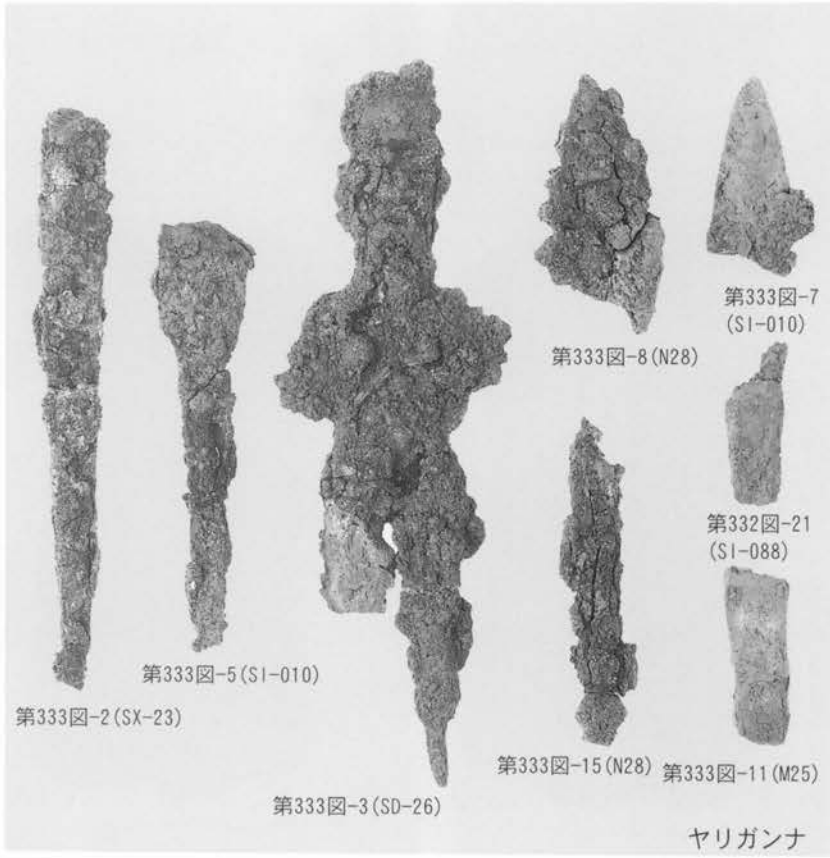
第334図-10(SD-14)

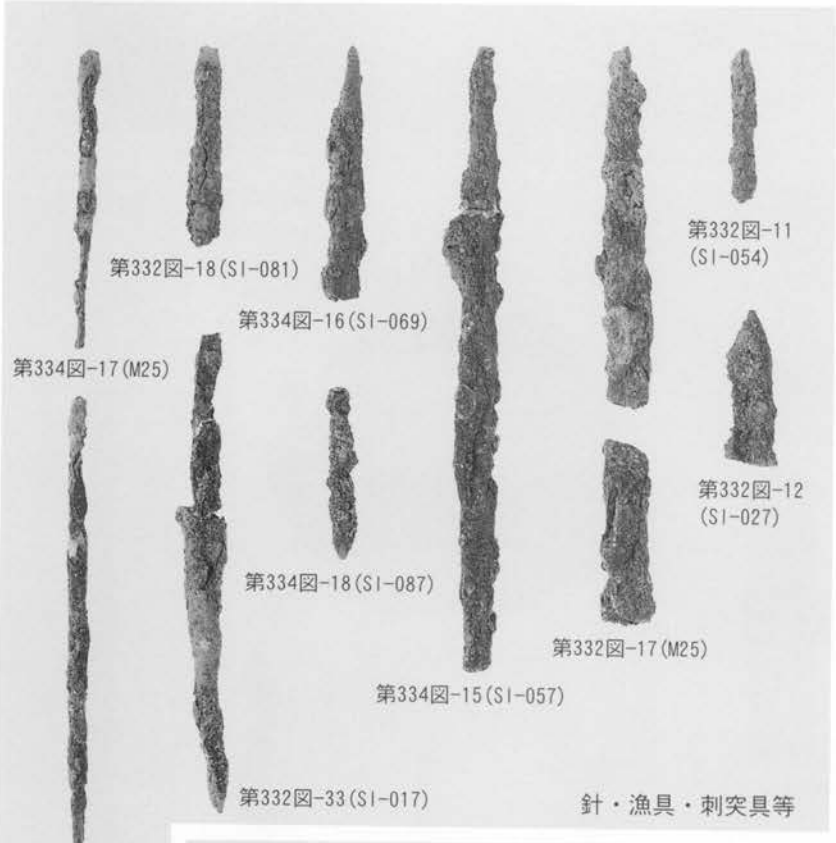
紡錘具

【番号は集成図に対応】

鉄製品(5)

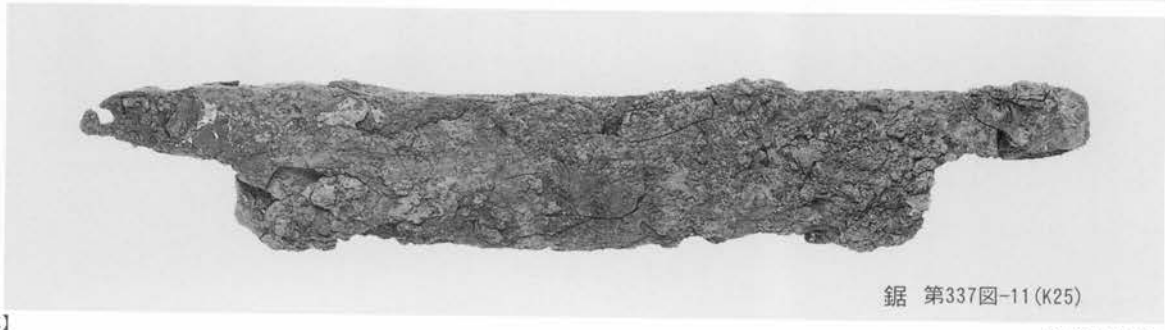

第332図-8
(SI-055)
第332図-10
(SI-86)
第332図-19
(SI-088)
第332図-7(SI-127)
第332図-26
(SI-055)
第332図-34
(SI-084)
第332図-9
(SI-050)
第333図-12
(SI-120)
第332図-14
(SI-132)
タガネ・工具の柄


第333図-2(SX-23)
第333図-5(SI-010)
第333図-3(SD-26)
第333図-8(N28)
第333図-7
(SI-010)
第332図-21
(SI-088)
第333図-15(N28)
第333図-11(M25)
ヤリガンナ

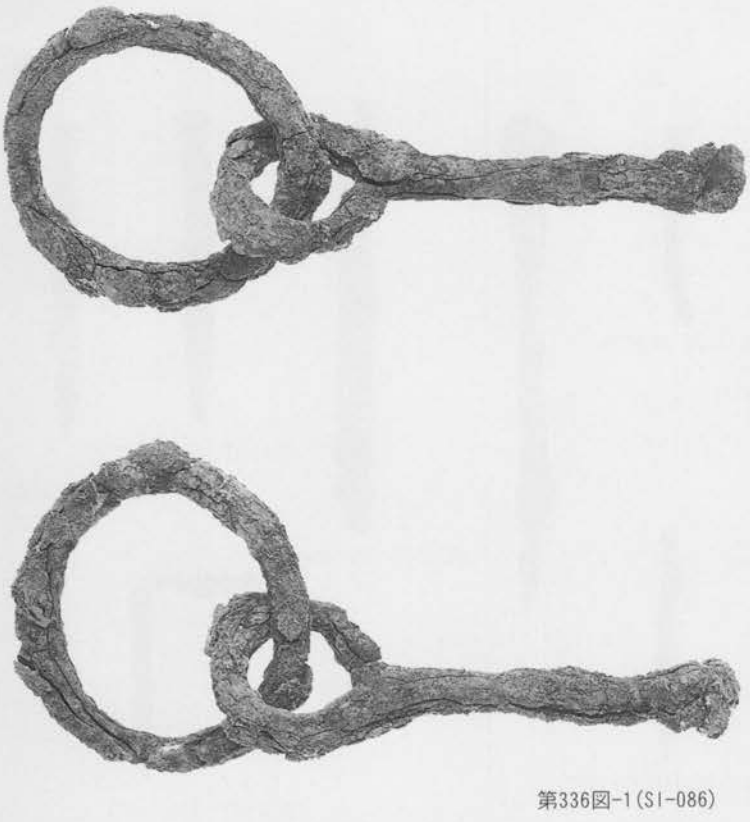

第332図-18(SI-081)
第334図-16(SI-069)
第334図-17(M25)
第332図-11
(SI-054)
第332図-12
(SI-027)
第334図-18(SI-087)
第332図-17(M25)
第334図-15(SI-057)
第332図-33(SI-017)
針・漁具・刺突具等

第333図-4(SI-087)
第335図-8(N25)
刺突具・楔

第334図-19
(M25)


鋸 第337図-11(K25)

【番号は集成図に対応】



第336図-1(SI-086)

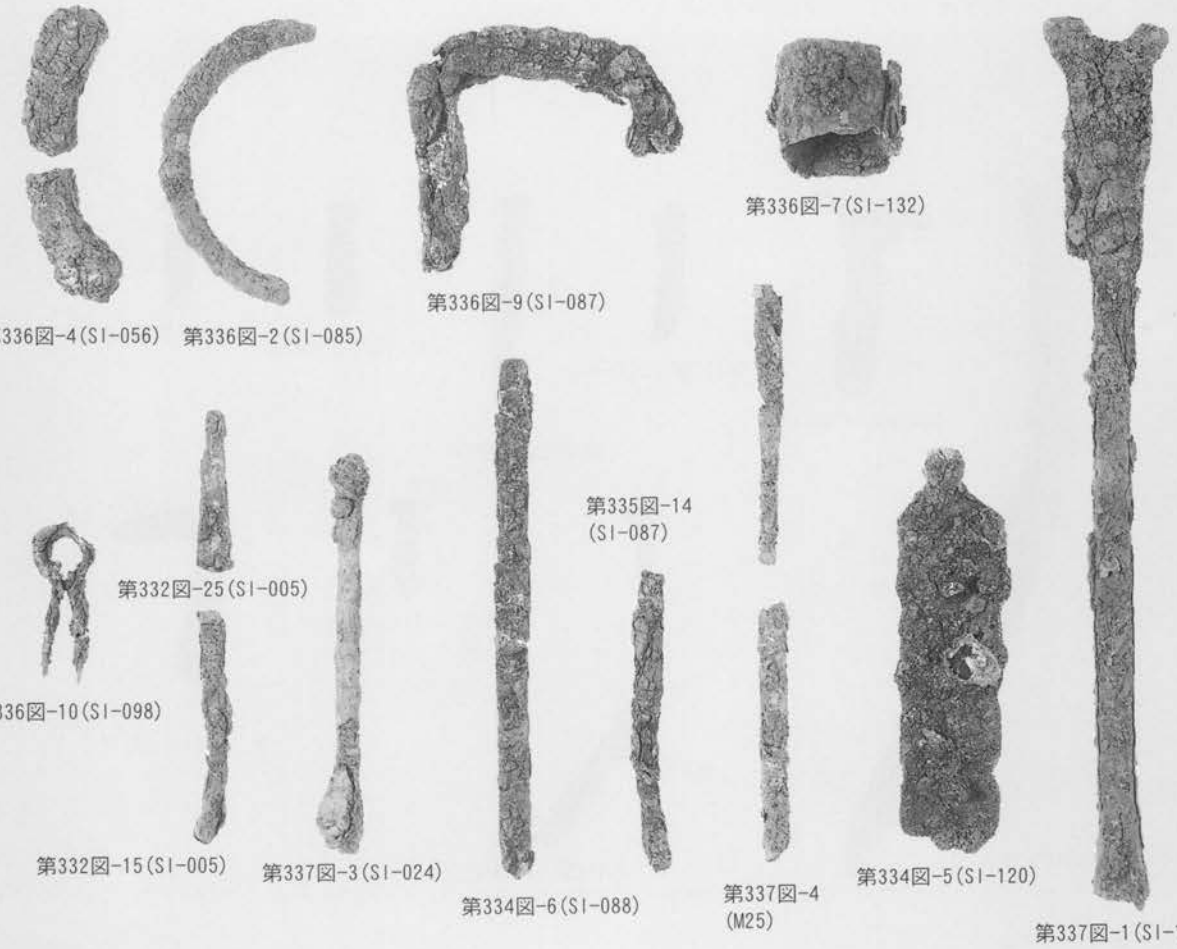
鏡板付轡

第336図-8(SI-085)

責金具

第336図-3(SI-055)

花形飾り金具



第336図-4(SI-056)　第336図-2(SI-085)　第336図-9(SI-087)　第336図-7(SI-132)

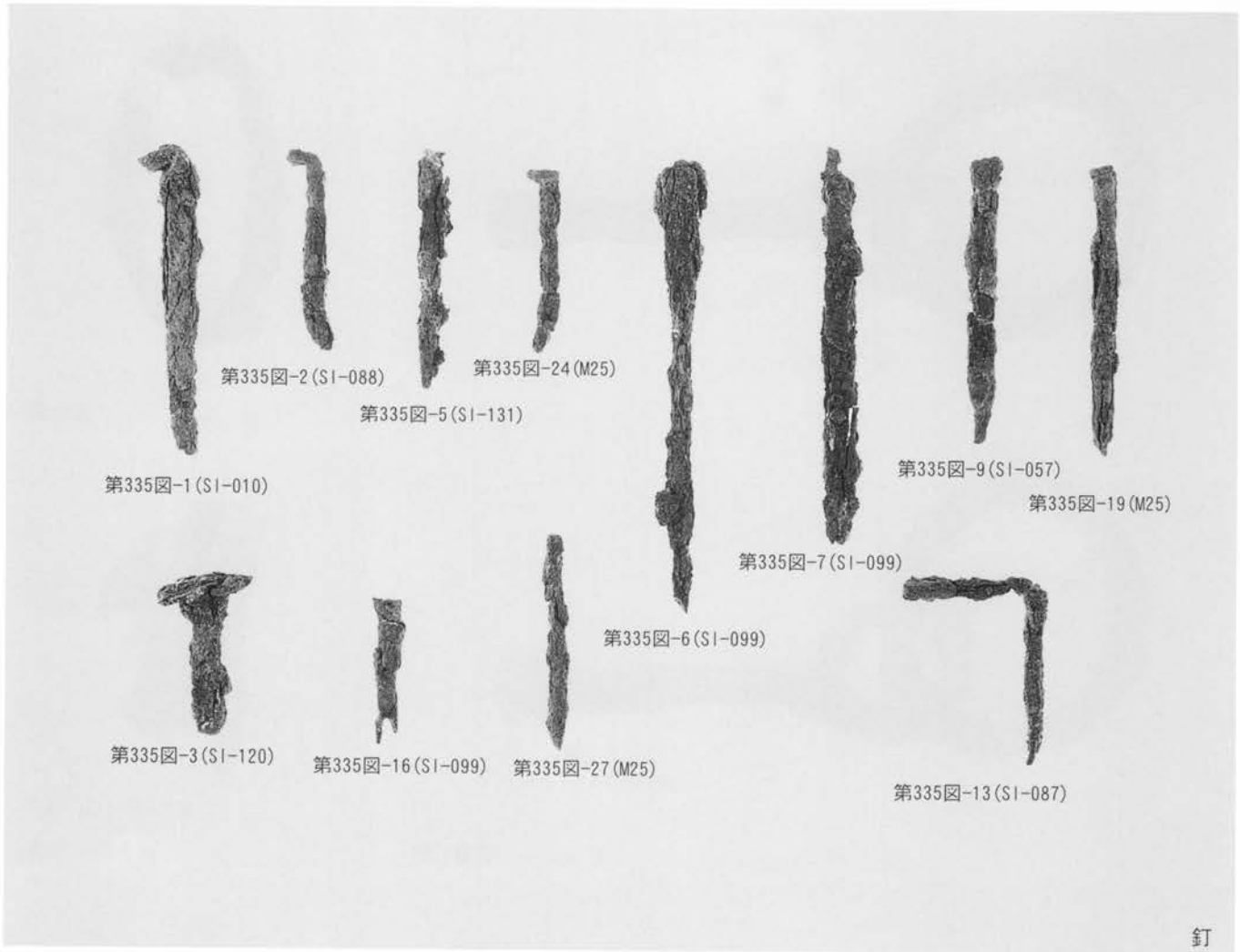
第332図-25(SI-005)　第335図-14(SI-087)

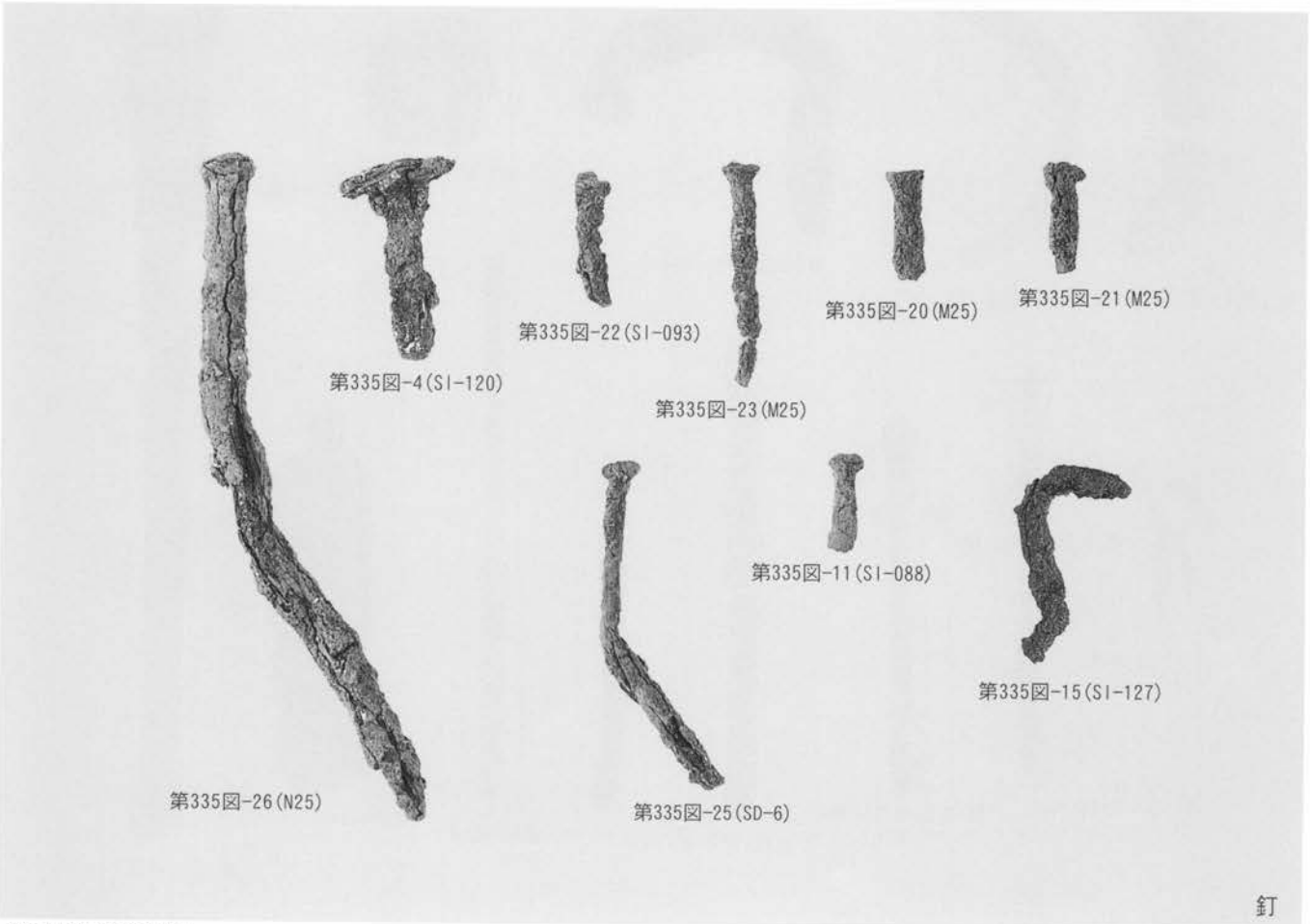
第336図-10(SI-098)　第332図-15(SI-005)　第337図-3(SI-024)　第334図-6(SI-088)　第337図-4(M25)　第334図-5(SI-120)　第337図-1(SI-124)

鑷子・その他

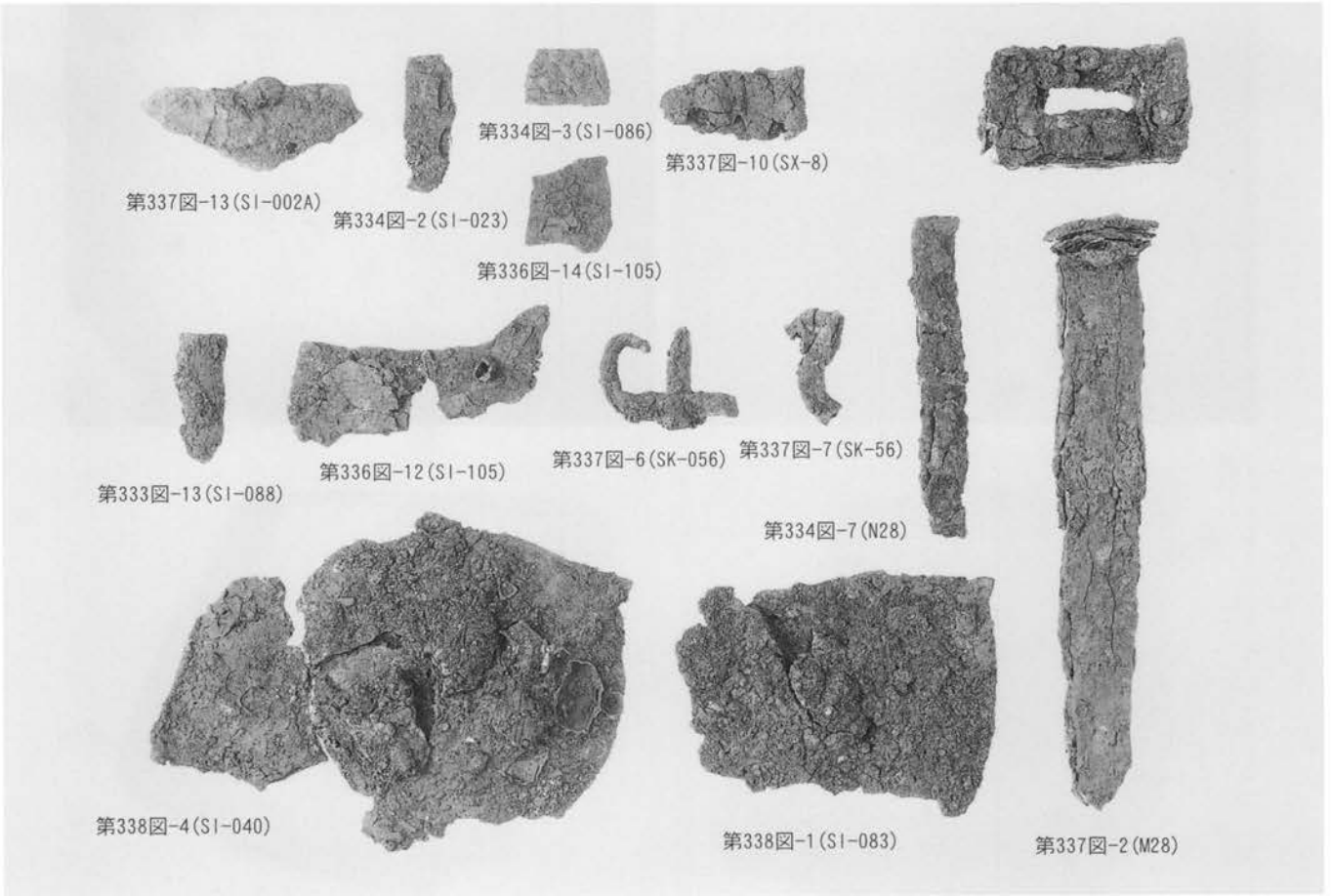
【番号は集成図に対応】

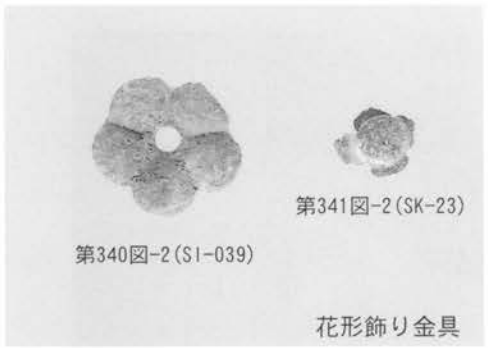
鉄製品(7)


第335図-1(SI-010)
第335図-2(SI-088)
第335図-5(SI-131)
第335図-24(M25)
第335図-6(SI-099)
第335図-7(SI-099)
第335図-9(SI-057)
第335図-19(M25)
第335図-3(SI-120)
第335図-16(SI-099)
第335図-27(M25)
第335図-13(SI-087)
釘


第335図-4(SI-120)
第335図-22(SI-093)
第335図-23(M25)
第335図-20(M25)
第335図-21(M25)
第335図-26(N25)
第335図-25(SD-6)
第335図-11(SI-088)
第335図-15(SI-127)
釘

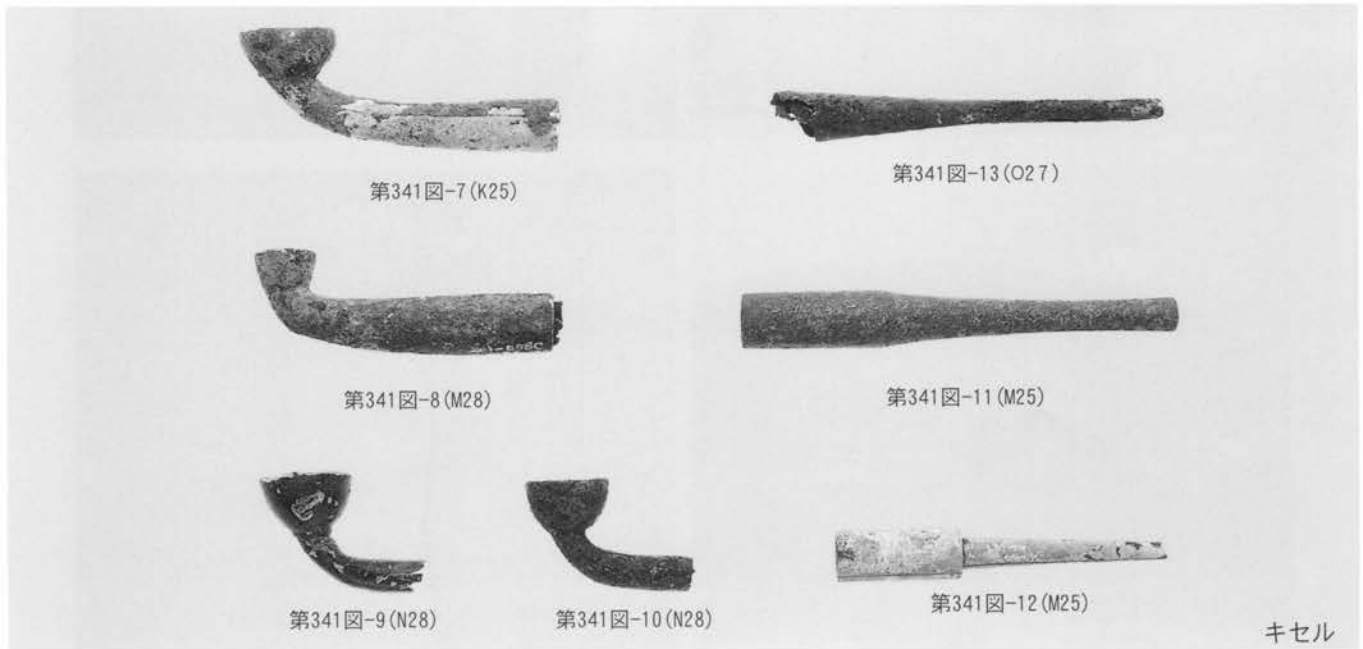
【番号は集成図に対応】


第337図-13(SI-002A)
第334図-2(SI-023)
第334図-3(SI-086)
第336図-14(SI-105)
第337図-10(SX-8)
第333図-13(SI-088)
第336図-12(SI-105)
第337図-6(SK-056)
第337図-7(SK-56)
第334図-7(N28)
第338図-4(SI-040)
第338図-1(SI-083)
第337図-2(M28)


第340図-2(SI-039)
第341図-2(SK-23)
花形飾り金具

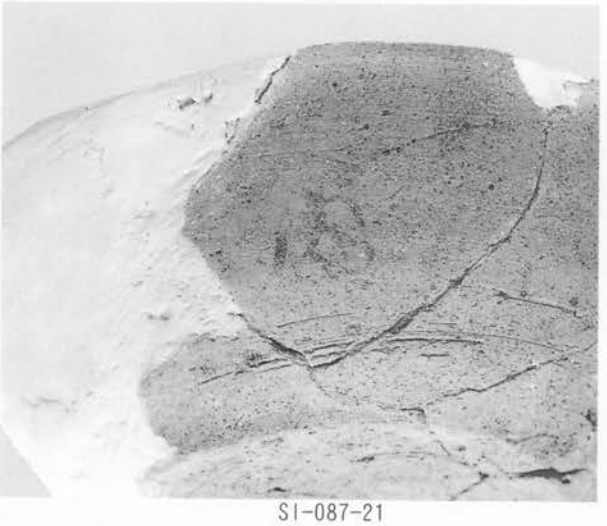
第338図-3(M25)

第341図-1(L25)
分銅


第341図-7(K25)
第341図-13(O27)
第341図-8(M28)
第341図-11(M25)
第341図-9(N28)
第341図-10(N28)
第341図-12(M25)
キセル

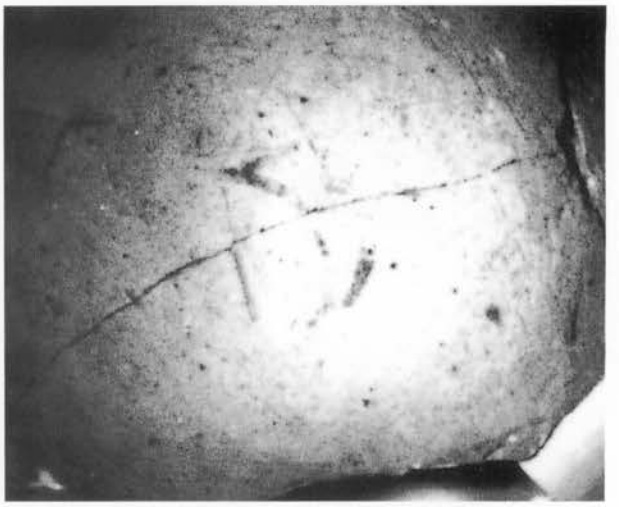
SI-017-8

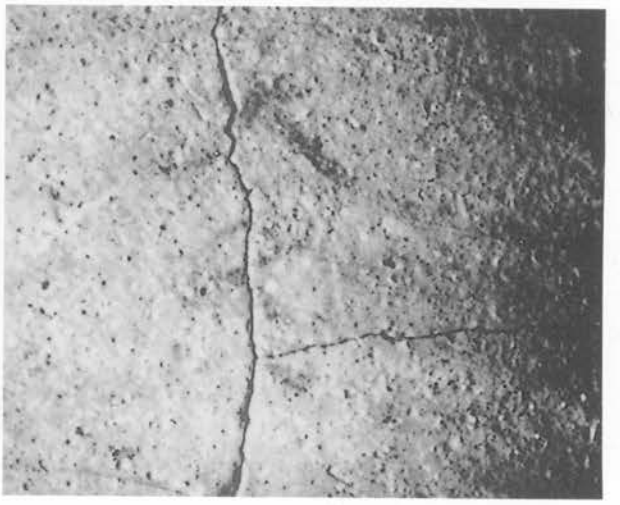
SI-082-13



SI-087-21

SI-087-22



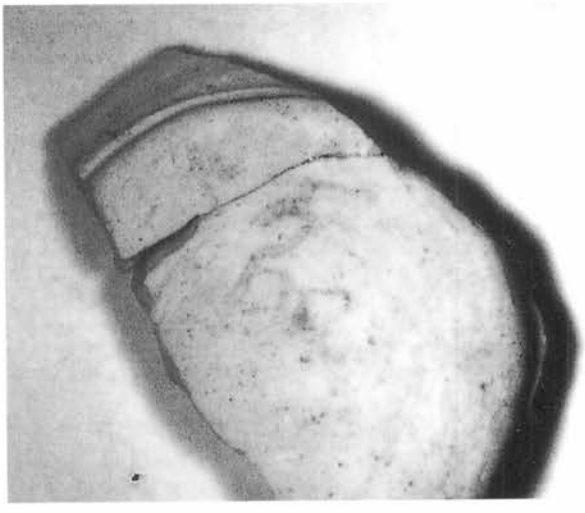


墨書(1)【右は赤外線写真】

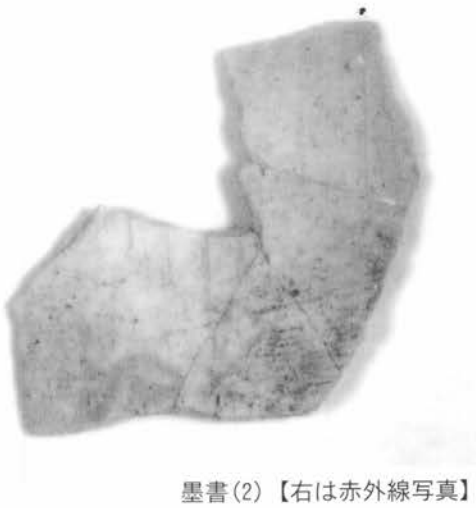
SI-134-5

SI-125-5

SK-60-24



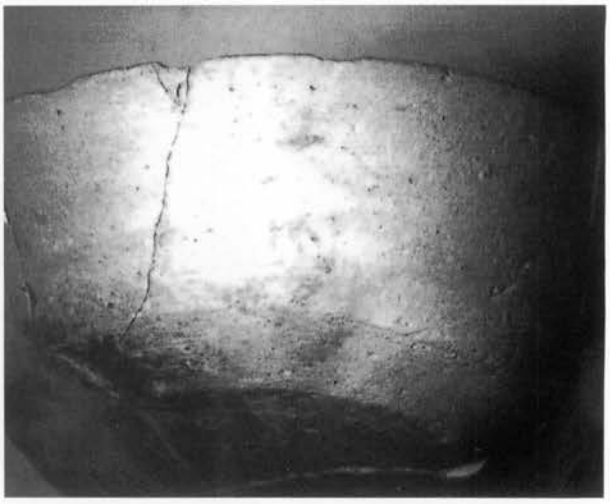
表採-9



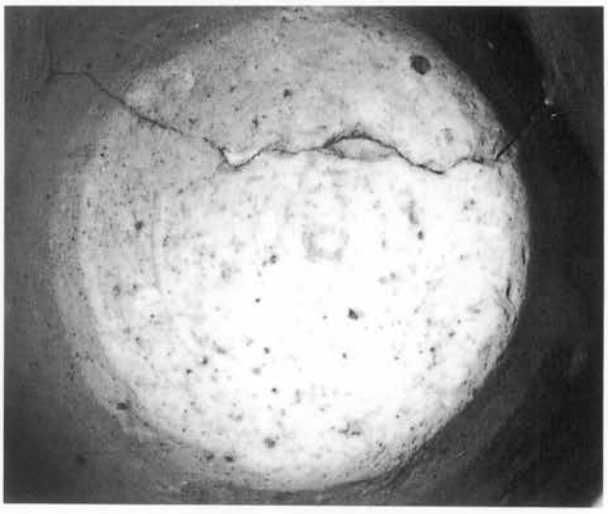
墨書(2)【右は赤外線写真】

図版158

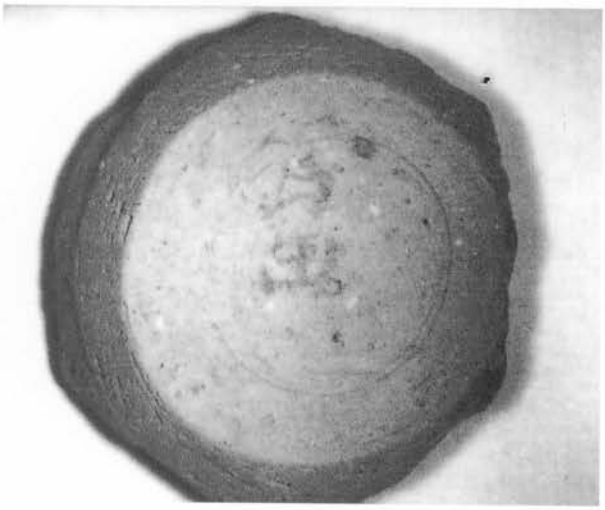
SI-094-1



SI-087-23



SI-087-24



SI-096-8

墨書(3)【右は赤外線写真】

報告書抄録

ふりがな	ちばしわしやついせき
書名	千葉市鷲谷津遺跡
副書名	都市基盤整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第422集
編著者名	白井久美子・倉内郁子・島立桂・西野雅人・四柳隆・田中裕
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2　　TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦2002年3月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		経緯度		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
わしやついせき 鷲谷津遺跡	ちばしちゅうおうく 千葉市中央区 ちばでらちょう 千葉寺町 771ほか	201	058	35度 35分 16秒	140度 8分 24秒	19871101～ 19880331 19880401～ 19881015 19890106～ 19890330 19890401～ 19890630 19900601～ 19901207 19960501～ 19970326 19970701～ 19970731 19980601～ 19980630	3500 5700 5700 14100 2280 8600 660 750	都市基盤整備公団千葉寺地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鷲谷津遺跡	散布地 集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代から奈良・平安時代	石器ブロック22か所 炉穴17基 陥穴１基 土坑１基 住居跡３軒 土壙２基 住居跡141軒 建物跡34棟	石器，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，灰釉，緑釉，鉄器，青銅製品（和同開珎，帯金具）	古墳時代末から平安時代の拠点的集落

千葉県文化財センター調査報告書第422集

千 葉 市 鷺 谷 津 遺 跡

－都市基盤整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－

平成14年３月25日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　　都市基盤整備公団千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬1-3

財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印　　刷　　株式会社　東　プ　リ
船橋市咲が丘1-11-9